
DARK・MAGIC ～闇夜の奇術師達～

夜猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DARK・MAGIC ～闇夜の奇術師達～

【Nコード】

N5619L

【作者名】

夜猫

【あらすじ】

三谷空志は高校一年生のプチ不幸体質。そのせいかよくトラブルに巻き込まれる。そんな彼はある日、なんやかんやで異世界にレツツゴ〜！そこで待っていたのは予想の斜めに行くファンタジーな魔法の世界だった！！

チートスキルを持つ主人公に魔王の孫、大食いの天然少女、ちよつとヤンデレ(?)な吸血鬼の少女、機械大好きな魔法少女、爽やかスマイルな格闘薬剤師。そんな個性的すぎる仲間がたくさんいる、彼らが送るハチャメチャでほのぼの、異世界で魔法、学園でも魔法、

剣に銃に杖にパソコンに魔物。そんな日常ヒナチジョウなお話。

そして、魔物と人間が共存できる日々は来るのか!?

最近、読者の方から指摘を受けたのでR15と残酷な描写のタグを付けました。しかし、これはあくまで念のため程度のもです。

1話・DAILY（前書き）

はじめまして夜猫です。

こつこつ小説を書くということとは初めてで至らない部分が多々あると思います。

楽しい話を書ければいいなと思います。

1話・DAILY

ボクは、よく同じ夢を見る……。
薄暗い中で誰かが話し合っている……。

話し合っているのは僕のじいちゃん知らない人……。
いつも同じ夢を見るのにその会話の内容だけがどうしてもわからない……。

ひよつとしたら、夢の中の誰かの声を僕はちゃんと聞いているのかもしれない。でも、朝になって思い出そうとしても思い出すことができない……。

それがなぜかボクはとても重要なことだと感覚的にわかっている。
両親や友達にも相談したことがある。でもやっぱり相手にされない……。

ならば、自分で見つけなくては。と決意したのがいつだったか……。

そして何の手がかりも見つからないまま数年が過ぎ去り、忘れてしまった。

あの日がやってくるまで……。

高校一年の春。

その日は、掃除当番に当たっていたためにそのほかのクラスのやつらと一緒にやるはずだったんだけど……。

「なぜに、全員サボるんだー!!!」

自分だけだったりする……。自分ひとりだけの教室にむなしく魂の叫びが炸裂する。

「ハハハハハ．．．．．もういいですよ．．．．．
．．．．．いつものことだし、自分でも損な性格していると思いま
すよ．．．．．」

実はかれこれ何回目のことか．．．。クラスにいじられキャラの
一人や二人いるのはしょうがないと思うけど、それが自分だといや
だね．．．。てか入学してすぐコレはない。
とりあえずこのごろの掃除は僕だけ、あるいは友人が手伝ってくれ
たり、くれなかつたり．．．。

「ソラ、まだい．．．掃除一人か？相変わらずすごいパシリだな
．．．俺、用事思い出したから帰るわ。じゃっ！」

「ちょっと待てい！！！」

そういった相手の襟をつかむ。

うわさをすれば何とやら、ボクの数少ない友人の河野利行^{（りゅうのとしゆき）}。通称
トシ。胡散臭い雰囲気をもし出すメガネ野郎。ぶっちゃけて簡単
に言つと、悪友の一言に尽きる。

「お前、友達がこんなに大変な思いしてるのに逃げるのか？」

するとトシはこれ異常ないほど真剣な顔で。

「ああ、そのとおりだ」

「殺す！！！」

「お前もサボればいいだけの話だろ！！！」

「なんか自分に負けた気がして嫌なんだよ!!」

「お前、バカだろ」

そういう性分なんだからしょうがないよね………たぶん。

「とにかく手伝え」

「いいけど、どこを?」

そういうえば、もうほぼ終わった……。

「ダ、ダメだ。ボクがどんどんパシリ野郎に……」

「なってるから安心しろ」

「ぐうあああああ!!!!」

ボクの心に大ダメージ!!

「とりあえず帰るぞ。三谷空志くん」

そういうえば、遅くなったけどボクの名前は三谷空志^{みたにひろし}。クウシではないヒロシである。でもみんなからは『ソラ』と呼ばれる。まあ自分もこのニックネームは気に入っているからいいけど。

後、他にしなきゃならないことは特になかったから僕は帰ることにした。

「はぁ……今日も疲れた………」

「ソラが疲れない日なんてあるのかあ？」

「……」

何も言い返すことのできない自分が悲しい……。どうせ自分はパシリですよ！！

ボクらは部活に入っていない。強いて言うなら『帰宅部』。

だから、さつさと帰る。しかし、ボクには間学園の生徒になる少し前からできた日課がある。

学校の近くにある公園で僕はあたりを見回る。

「何をきよるきよるしてんだ？」

「いや、レオがいないかと……」

実は僕にはちょっとした特技がある。

「……もう慣れてるけどなあ、何でお前は動物の霊、もとい妖怪しか視えないんだ？」

「ふっ……。うらやましいくせに」

僕は動物の幽霊、あるいは妖怪が視える。

なぜか高校に入る少し前、つまり春休みから急に視えるようにな

った。

特にキツカケはなく、トシと遊びに出かけていたらボクに視えたけどトシには視えなかつたらしい。

しかし、なぜそれでトシが信じてくれているのかというと、ボクがレオに触ると急に視えるようになったらしい。ちなみに、道行く人で検証した結果、どうもボクが幽霊に触れると万人が幽霊を視覚できるようになるようだった。

それで、レオは僕が一番はじめに見つけた猫の幽霊で、見つけた当初、とても衰弱していた。幽霊のくせに怪我をしていて、何とかしなければと思い、弁当の餌をやってみるとなぜか食べれた。

そういう世話をしているうちに僕に懐いてしまい、今に至る。

「脳の解剖をするから頭出せ」

「ちょっと待て、そのカッターは何!？」

「当たり前だろ、そのわいた脳を切り開くために必要な凶器^{クス}……」

「

「待て!!!まだボクにはやりたいことが……」

「まあ、冗談はさておき……」

「なら、カッターをしまえ」

なぜに僕は、こんなデンジャラスなやつと友達なんだ……。

「おっ、レオはっけ……!?!？」

「どうした?」

「たたたたた、たぶんレオが視えへる。」

「落ち着け。視えてるって何が？」

「今、目の前にいる少女A」

「嘘だろ！？お前意外にそんなやつ・・・あいつ結構かわいい」

たしかに・・・。

ショートカットで遠目にも美少女であるといえる。

何というか癒し系？ほんわかしてそんな空気を醸し出してる。

「しかし、あいつ・・・同じ学校だよな」

「？・・・あつ、そういわれると」

誰かは知らないけどそれは紛れも無くボクたちの通う学校、稲葉市『私立間学園』の制服を着ていた。この学校は無駄にでかい敷地、幼稚園から高校まであり、拳句に遠方者のための寮まである。そしてやたらと西洋風、というかファンタジーな感じのする学校。ここが創設者のセンスを疑う。まあ、自分はそんな学校に通っている生徒の一人だったりするけど・・・。

「どうすんだ？」

「もちろん突撃すべし！！」

「なら、行け」

「のわっ!!」

ボクはトシに蹴られて靈感少女Aの前に!!

「きゃっ」

「……ども」

ひ、引かれてる……。何か気の利いたことをいわなければ!何か、何か。

「……はうあーゆっ?」

「……」

っ、自爆したー!!なぜに英語!?ここは、トシに頼むしか……。

「っ、いねえー!!逃げたなあいつ!!」

「あ、あの……」

突然叫び声をあげる僕に「こいつの頭は大丈夫だろうか」という顔をしてくる灵感少女A。

「じゃあ、すみません。連れが逃げたので、ちょっとシメに行きます。ナンパとかじゃないんで許してください。さよなら!!」

「こー」

レオがボクについてこようとす。
ボクは、レオを連れてトシに鉄拳をくらわせるべく、捜しに行こ
うとする。

「あつ」

「?・・・どつたの?」

なんか驚いてたから反射的にたずねたら自分で気がついた。レ
オはボクが視えてるのを知ってるからいつものようにその身を摺り
寄せてきている。

たぶん、視えていないはずの人になついているように見えたから驚
いたのだろう。

レオはなぜ構ってくれないのか不思議そうにしている。同じ学校
の生徒だからもし自分が何も無い所にしゃべりかける変人というレ
ッテルが張られないという保証がない。仮にボクの予想通りにこの
娘もさつき予想したとおり靈感持ちだとしてもそのことに触れてほ
しくないかもしれない。ここは何もないフリをするのがいいかもし
れない。

レオには悪いけどここは我慢してもらっ・・・。

「にゃあー!!」

えなかったようです。僕の足に思いつきりその鋭い牙を突き立て
られて、

「ぎいやあああああーーーー!!!?」

僕は悲鳴をあげてしまった。

「というわけです」

「へえ〜。そうなんだ」

僕は近くのベンチですわって話している。

僕は洗いざらい自分のことを話した。

あの後、どうしても誤魔化しきれないと思ってどうしようかと頭を抱えて考えてると。

「そのネコちゃんが視えるの？」

と、質問をされた。

「・・・はい」

正直に答えるほか思いつかなかったので正直に答えた。
そしてレオに出会いたいきさつを話した。

「君も視えるんだよね？」

とりあえず確認するような調子で聞いてみる。

「うん。高校に入ってから急に視えるように」

「おお〜。同級生か。奇遇だねボクもそれぐらいから。な〜レオ」

「にやあ〜」

・・・癒される。

「・・・つらくないの？」

「なんで？」

「だって他の人には見え「ない。だからもしこんな事バレたら面倒なことになる。」・・・そうです」

「やっぱり、精神的につらいよねー。おおっぴらに『俺には幽霊が視える！』なんていった日にはハブられるよね。特にこんな時期は」

出る杭は打たれる。普通じゃない人はなおさら。

トシはそんなヤツじゃないからいいけど、見る人によつては気味悪がるかもしれない。あるいは浮いてしまつかもしれない。

かなり気をつけないといけないわけで精神的に結構くる。正直、つらいと思うこともある。

「でも、マイナスばかりじゃなかったね。レオに会えたし、新しい友達もできたし・・・。それに幽霊が見えるのだって立派な特技だよ。な」

「レオ」

僕の膝の上でごろごろしているレオに振る。

「友達って・・・」

「ああ、そういえば名前、言ってなかったね。間学園高等部一年、

三谷空志。青空の空に志。君は？」

「えっ、その・・・同じく一年の坂崎鈴音。・・・鈴の音です」

「じゃ、今後ともよろしく、坂崎さん」

「・・・三谷君って変」

「なんか突然!？」

大変遺憾である。

自分でも慥然とした表情になるのが分かる。

それを見た霊感少女、改め坂崎さんはくすくす笑い出した。

「普通の人はそのんこと言わないもん」

「一部、普通じゃないからね。君も」

「そういえばそうね」

ボクらはどちらからともなく笑い出した。

しかし、それは長くは続かなかった。

ソレは突然起こった。

「見...
見つけた」

突然かみ合った僕と坂崎さんの運命の歯車がさらにその運命を加速させていく。

2話・EXTRAORDINARY

『運命は扉をたたくように突然訪れる。』

どこぞのエライ人がこんなことを言っていたような気がする。

つまり、変化は突然、こちらが予期しない形でやってくることもあるということなんだろう。明日、もしかしたら僕は交通事故で死ぬかも知れない。また、ラブコメよろしく急にモテるようになるかも知れない。

「でも、これはないだろー!?!」

僕の魂の叫びがこだまする。

僕達の周りは円を描くかのように炎の壁で囲われていた。

数分前

「見いつけた。いやあ、さが「あつ、一緒に帰らない?結構暗いし、最近は何騒だからね。」・・・おま「そうだよ。つい最近私の友達も『近頃は物騒で困る』って言ってたよ。「人のはな「やっぱそうだよ。あ、そういえば家って市内?」ちよっ「うん。ここから歩いて駅の方へ30分ぐらいのそこかな。」お「おっけー。じゃあ帰ろう。こっちの方?」そ「うん、そうだよ。」「じゃ、行きますか。」

レオを腕に抱え、僕らは雑談をしつつ帰り道歩く。
やっぱり女の子一人で帰らせるのは危ない。うん。まあ、男としてか弱い女の子を送っていくのは義務だと思う。なんか僕らのすぐ近くで怪しい人がでっかい声で独り言を言っていたような気がするけど、なんか近くの電灯の上に立ってたりするような気がしないでもないけど勘違いだ。たぶん。でも、今日はいろいろあったな。家帰って早く寝よ。あ、でも宿題とかや・・・。

「ちよつとマテヤそのバカップルーーーーー!!」

「三谷君!」

「了解!」

僕はすぐさまケータイを取り出しボタンをプッシュ!坂崎さんもケータイを取り出し僕と同じ番号をコールする。

もちろんコールするのは110番

変質者を見つけたらお巡りさんに言うのが一般市民としての勤・・・。

パン!パン!

・・・おかしい。

僕の目が正常であればこのaのケータイのディスプレイ部分はどこから飛んできた炎の塊に吹っ飛ばされたような気がする。

坂崎さんのほうを見てみるとそこにも僕と同じようにdocoのケータイのディスプレイがない。

炎の飛んできたほうを見るとそこには先ほどと同じような炎

の塊をこっちに向けている変質者。つまり、これの意味することは・

「せつかくケータイ変えたのに……。」

「いや、ソレって今言うことじゃないよね。今、重要なのは友達
のアドレスとかどうしようって事かと……。」

「いい加減こっちの話を聞けー！ー！ー！」

変質者が怒声を上げる。

怒りっぱいのはよくないね。カルシウムとね、牛乳を飲め。

「変質者はやめろ！俺が怒っているのは貴様らのせいだ！ー！」

……っ！こいつ人の心が……。

「顔に出てんだよ！ー！」

……さいですか。

さて、今の状況を確認してみよう。

ケータイなし。

変質者に襲われそう。

周りに人の気配なし。

自分の危険度測定器はレッドゾーンを振り切っている。

相手はわけのわからない力を使っている。

コマンドをえらんでください

たたかう

ぼっぎよ

さくせん

はなしあう

どうにかする

マッハ
超音速でにげる

にげる

「坂崎さん逃げよう!!」

作戦を決め、坂崎さんの返事を待たずに手をつかんで逃げる。

この間わずか0.5秒。

ボクの戦闘能力はカスだけど危険回避、つまりは防御や逃げることに關しては天賦の才能があるというトシの談。

「逃がすかつ!!」
フレア・バレット
「火炎の弾丸!!」

後ろから何かが飛んでくるのを感じ取り、坂崎さんを抱きかかえるようにして右へ回避行動をとる。

そのすぐ横を先ほどの炎の塊

フレア・バレット
火炎の弾丸が通り過ぎボ

クから少し離れたところに着弾。

ゴウッ!!

・・・ナニアレ。地面から2メートルほどの火柱が上がっているように見える。

さっきから思ってたけどこれって超常現象だよな。

とにかく逃げ・・・。

「ファイア・ウォール
灼熱の炎壁!!」

ですよね。

『逃げんな』って言うぐらいですから逃げ道を断ちますよね。
また手をつかんで走り出そうとするとところをさえぎられた。

・・・炎によって。

そして冒頭へと戻る。

さて、どうしよう。ピンチだ。全力でピンチ。

相手は正体不明の方法で炎を操っているかのようにしか見えない。
そう、まるで魔法のような不思議な力を使っているとしたか・・・。

「お前の考えていることは正解だ。」

「だから、人の頭ん中を除くな！」

「俺は、今現在炎の魔法を行使している。クラスは魔術師。お前
らみたいな半人前では勝てない。そのネコさえ渡せば俺は何もしな
い。拒めば実力行使になる。」

こっちはスルーか。てか何を訳のわから・・・。

「スゴイ！三谷君、本物の魔法使いだよ！！」

「順応性ありすぎだよね！？てかボク達は全力でかなり危ない状
況なんだけど！？」

なかったらいいなあ。しかし、いやでもわかってしまった。
ボクらの目の前にいるのが魔法使い、相手が言うには『魔術師』
であるということ、さらにはレオを要求されているということに
……。
そして、レオは怯えていた。爪を立ててボクをつかんでくる。

「さっさと寄越せ。」

「いやっ!」

声を出したのはボクではなかった。

坂崎さんだった。

ボクは迷っていた。

どうやって坂崎さんを助けようか。

どうやってレオを渡さず全員無事に逃げるか。

実力行使に出られたらこちらに勝ち目はない。

そして、自分で決断するのが怖かった。

どっちを選んでも片方を失ってしまう気がしたから。

自分はものすごいヘタレだ……。

でも、坂崎さんは勇気をくれた。

「そうだね。ボクも渡したくない。」

これで、もう後戻りはできない。

「そうか、ならば少し痛い目を見てもらおう。」

フレア・プリズン
炎の監獄

「

相手が呪文を唱えたと同時に地面から五本の火柱がボクらを取り
囲むように展開。

ものすごい熱い。

「ねえ、三谷君。」

「何、坂崎さん。」

「ものすごくくやな予感がする。」

「奇遇だね。ボクも。」

「これは拷問用の魔法だからな。」

親切に教えてもらってもまったくありがたくないのはなぜだろう。

「焼け。」

突然、炎が襲い掛かってきた。

とっさに坂崎さんとレオをかばうと声が聞こえた。

「闇よすべてを喰らい尽くせ。
ダーク・イロージョン
闇の侵食」

静かな、しかし力を持った言葉だった。

顔を上げると。あいつが不敵な笑みを浮かべた姿があり、炎は消えうせていた。

「何があつたの？」

坂崎さんが困惑したような声を出す。

ソレは相手も同じだったようだ。

「お前、何者だ？」

ボクはそれ以上に戸惑っていたように思う。
そいつはボクがよく知っているやつ。

「通りすがりの正義の魔法使い、間隆介。」

眼鏡をかけていないが間違いない。

「偽名も言っちゃうと、河野利行。ドラゴンだ。」

トシだった。しかもドラゴンらしい。

「ありえねえー！ー！！！」

3話・CRISIS

さすがにソレはありえないでしょ。

まあ、トシが魔法使いなのは百歩譲って信じるとして、実際に使ったし。でも、実はドラゴンなんだZ E っって言われても……。だって、見た目人間じゃん。でも本名が間隆介ってナニ？何で偽名を使う必要があるの？ボクら中学からの友達だけど、んなこと他のやつらだって知らないと思うんだけど？

「なあ、トシ……」

「あ、ソレ偽名だから本名のほうで呼べ。リュウでいいから。な、ソラ。これで、もう嘘はつかなくていいわけだしな」

眼鏡をかけてない顔でいつものように不敵な笑みを浮かべる。
ボクの知ってるトシのものだ。

「別に俺も好きでお前を騙してたわけじゃないんだ。言い訳かもしんねえけど……。ただ、これだけは信じてくれ。全部が嘘じゃない」

「……わかったよ。ト、じゃなくてリュウ」

「お、わかってくれてな「ちょっとこっち来い」……なんだ？」

リュウがこっちへとやってくる。よし。

「貴様、あん時はよくも見捨てていきやがったなあー！！！！」

ボクの右拳が唸る！！

そして、リュウの顎を確実に捉えた！

「ごばあー！！」

ボクの怒りのこもった一撃を受けて悶絶する。

「えーと……。三谷君、この子って……」

「ボクを見捨ててった悪友。自称ドラゴン（笑）」

「（笑）じゃねえー！！！！」

「チツ」

ギャグ補正のせいですぐに復活しやがった。

「『チツ』じゃねえよ！！」

「とにかく、今は助けてよドラゴン（笑）さん」

「そうだ、今は助けるドラゴン（笑）」

「てめー フレア・バレット 火炎の弾丸 「わぎや〜！！」

突如飛来した火球の餌食になってプスプスと煙を上げてのたうちまわっているリュウ。

火球の飛んできたほうを見ると、変質者が右腕に二つの火球をまとわしている。

「てめえ、何しや」どうやら本当のようだな」人の「復活が早いのはギャグ補正のせいじゃないの!？」」だか「ドラゴン（笑）さんだから大丈夫なんじゃないの?」ちょ「あれ喰らったら普通は消し炭になってるからな。こんな直撃してもピンピンしてるぐらいに魔法耐性が強いのはそれこそドラゴンしかいない。」「へえ」

どうやら、マジでドラゴンらしい。

「と、言うわけで、俺もさすがに本気出さなきゃなあ!」

「」「」「」

「我、呼び覚ます力は 炎

我、呼び覚ます力は 風

我に集いて・・・」

「・・・なんか詠唱的なものをし始めましたが?」

「ほんとに魔法使いっぽくなってきた。」

とりあえず専門家の意見を聞こうとリュウに聞いてみる。

坂崎さんの言葉はスルー。

てか、あんたはそんなキャラだったっけ!?

「・・・ああ、あれな『真言』つつうんだけどな。簡単に

言つと最終究極奥義的な威力の最上級魔法」

必殺技なんですな。わかります。

「……さつきみたいに防げる？」

「あれは威力がパネエから無理。」

「詠唱の邪魔する。」

「おそろく、デュアルキャスト二重魔法、ドライブスベル派生魔法、クイックスベル高速詠唱習得してるから間に合わん」

よくわかんないけど無理らしい。

「え〜。じゃあどうするの?」

「リュウモ『しんごん』使って相殺すればいいんじゃない?」

「俺の魔法属性は『闇』。真言できるけど闇は扱いがSSSランクでげきむす激難。下手すりゃこの町が吹っ飛ぶ」

打つ手がない!!

「どーすんの!?!」

「……しょうがない。気が進まんがあそこへ逃げ込もう」

「いや、ここは!?!」

「大丈夫。人はいないし人払いもしておいた。最悪。公園が跡形もなく消えててでつかいクレーターができる程度だから」

どのあたりが大丈夫なのかわからないが仕方がない。

「ここはリュウを信じるしかない。

「どっちへ走ればいい？」

「魔方陣でしかいけないから」

「・・・何という魔法^{「ファンタジー」}。」

そういつてる間にも近くにあった石でボク達の地面の周りに円を描く。その中に複雑な模様を書き込み、魔方陣を作っていく。

「彼のものたちに大いなる煉獄の風を！！」

あれ？

あつちがすでに最終段階に入ってるような気がするのは僕だけでしょうか？

「ねえねえ。え〜っと・・・ドラゴン（笑）さん」

「そのネタはもうやめる！！」

「ここでもボケるか・・・。」

「もうあつち終わりそうだよ？」

「なっ！？」

「^{「ル・バースト・ウインディア」}
煉獄の炎風」

変質者の頭上に大きな炎の塊がで始め、渦を巻きだす。

本能的にソレがとてつもなくやばいものだということがわかった。

「間に合えっ!!」

必死なリュウ。

「・・・」

驚愕の表情の坂崎さん。

渦を巻いた巨大な炎の竜巻はすでにこちらへ向かっている。

本当にもう、なすすべがない。

でも、この二人だけでも何とかしたい。

何か、いい方法は・・・。

自分に力があれば・・・。

自分にも『魔法』が使えたら!!

「・・・っ、このっ!!!!」

地面に拳をたたきつけた。

「ばっ!陣をけ・・・」

突然、僕の中から何かがあふれてくるような感覚がしたかと思うと、魔方阵の円に沿って、炎の壁ができた。そのとき、炎の壁が竜巻を食い止めた。

「!?!何、これ?」

「ナイス!!最高のときに覚醒したな!」

「ちよ、なんの・・・」

「あとで説明する。それにその壁も限界だ」

確かにもうすぐ壁を壊してしまいそうだ。

「だが、できた！！」

彼の地へ我らを送れ！！

ネスト　！！」

ボクらは次の瞬間、公園から姿を消した。

耳をつんざく爆音が響く。

だが、それより早く向こうが逃げ出せたようだ。

今現在、威力を調整した『真言』の攻撃によって、公園内が火の海と化していた。

本来の威力ならば公園が消し飛んでいる。

だが、今回はついてなかった。

今回の依頼にはイレギュラーな要素がありすぎた。

これでは、割りに合わん。

それに転送用の魔方陣が爆風で吹き飛んでしまったため、追跡は難しい。

「この依頼はキャンセルするか・・・。しかし、久しぶりに使ったんで疲れた。帰って寝るか」

そういった次の瞬間に、変質者の姿も公園から消えた。

「いや、変質者やめる!!」

・・・声などはもちろんしない。

「「……………」ド」？」

ボク達は魔法でこいつの言う『安全なところ』に飛ばされた。

だが、ボクが記憶している中でこんな都市は日本どころか、世界中のどこにもない。

そこには、耳のとがった森の住人的な人やどっからどう見ても二足歩行しているトカゲ、プルプルな水色の物体、頭に角の生えたでっかい人。

まるで、

「魔物による魔物のための都市、
魔窟^{ネスト}へようこそ」

「……………ここって日本のド」？」

いやな予感がする。

「日本じゃない」

「えっ。じゃあ、外国？」

「…………まあ、そうなんのかな」

待て、それ以上先は聞きたくない!!

「じゃ、じゃあ、ド」の国?」

坂崎さああああん!!!

ソレは聞いてはいけないフラグっ!!!

「異世界」

「「・・・え?」」

地球じゃないの?

「ああ」

「人の頭の中を読むな」

「そろそろ、現実を受け止める」

「「うそだぁー!!!!!!!!!」」

異世界、しかも魔物の住処のど真ん中で人間一人の叫び声がこだまする。

4話・NEST

おーけー。
現実を見よう。

現在地・・・異世界、魔物のための魔物の都市 魔窟^{ネスト} その出入りのための大きな門の前。見た目どっかのお城のような石造りの城壁。

たくさん魔物の方々がせわしなく出入りしている。
時折、こちらを見てくるような気がしないでもない。

「これは、あれか、最近流行の異世界召喚モノ」

「たぶんあれだね、自分は何かの魔物って偽ってどうにか日々を過ごしていく系のやつも入ってるよね」

「何、言ってるんだ？」

リュウは都市の門の詰め所のようなところへと歩いていく。
右も左もわからないボクらはついていくしかない……。

「うーす」

詰め所の中にリュウが挨拶する。てか、異世界なのに日本語でいいんだ……。

そうすると門番らしき人が出てきた。
頭に角が生えてる気がするが気のせいだ。

「おつ、リュウ坊か！久しぶりだな！元気だったか！」

「おかげさまでな。あ、お前らに紹介しとくわ。このゴツイおっさんはガント。種族は鬼人^{オーガ}。見てのとおり門番をもらっている」
「どつやら角はマジもんのようだった。」

「がっはっはっは！ガントだ。よろしく。で、お前さんは？」

「あ、三谷空志です」

「坂崎鈴音です」

「ヒロシにスズネか？名前的にはこいつと血縁のあるドラゴンか？」

「まずい！」

いきなり死亡フラグか！？

リュウ、助ける！！

どつやらリュウはボクのアイコンタクトに気づいたようだ。
右手の親指を立てるところだった。

「二人とも人間だ」

.....
.....
.....
.....

「イマ、コイツナンテイッタ？」

「マジか？」

「や」

アバウトだな!?

「ソレがオレクオリティー」

さっきからボクの心の中が読まれまくってるんですけど!?

「三谷君。声に出てたよ」

さいですか……。

「てか、滞在とかわたしたち聞いてないよ」

「そ」後で説明するから。「……」

言葉をかぶせられてしまった。

「んじゃま、ようこそ人間さんたち。我らが 魔窟 へ!」

現在、ボク達はメインストリートのなところを歩いています。都市の中には以外にもボク達の住んでいた町とほぼ変わらない。魔物がその辺を闊歩しているところを除いて……。

技術レベルがよくあるファンタジー小説にあるような中世のレベルでないことに驚いた。

「……何やってんだ?」

「いや、少し説明を」

「?なんで?」

それは、大人の事情つてやつだ。

「え」。読者さんのためじゃないの?」

この娘はどうも電波を受信したようだ。

それに、それが大人の事情だと思っんですが?

そして、勝手に人の心を読むな。プライバシーの侵害だ。

「おゝい。ついたぞ」

「……………コソドコ?」

突いた先はごく普通の一般的な家屋。

二階建てである。

強いて言うなら普通の家よりまあ、でっかいかな程度の家。

「これって、ドラゴン(笑)さんの家?」

坂崎さんが冗談っぽく聞いてみる。

「いや、そのネタいい加減にやめてくれよ!?オレは間隆介だ!

!そしてここは実家!!!」

「間君ね。わかった」

「すごいゴーイングマイウェイ……。で、なん」後で。
……ハイ」

ボクらはリュウの実家に入っていた。

「お袋〜。帰ったぞ〜」

「隆介？お帰り。珍しいわね。こんな時期に急に帰ってくるなんて」

奥のほうから優しい雰囲気をかもし出している二十代後半っぽい女性が現れた。

かなり若く見えるけどおそらくリュウの母親。まあ、ドラゴンだしな……。

「いろいろあったんだよ。……親父は？」

「まだ、帰ってないわよ。で、この子達は？」

「あ、こいつらはダチの」「三谷空志です」「坂崎鈴音です」「みや〜」「こっちはレオです。」「両方人間だ。そしてネコ」

「あらあら、丁寧にどうも。隆介の母の間優子（まほろこ）です。名前で呼んでもらえればいいですよ。じゃあ、この子達が隆介の護衛対象？」

やはり、リュウの母親だったらしい。

そしてオイコラマテや。
なんだか護衛的な単語が聞こえたぞ。

「オイ、さっきのは「まあ、こんなところで立ち話もなんですし、中であがってください。」……ハイ」

人の言葉をさえぎるのが流行はやってるのか!?

リビングにて、四人がけのテーブルに座る。

ボクから見て、前にリュウ。ボクの右に坂崎さんの配置で座った。優子さんは買い物に出かけた。レオはボクのひざの上で昼寝。

「まあ、ぶつちやけるとオレは、お前の護衛をしてた」

「かなりぶつちやけ過ぎだろ」

「でも、何で三谷君の護衛をしてたの?」

そこが、自分でもわからない。

ボクには狙われる覚えがまったくない。

「お前には魔法の素質があつて、その属性がやばいらしい」

「……え?」

「あ、魔法の説明が必要か?」

「いや、ボクは魔法なんか使えないし、使ったことがないんですけど?」

残念ながらボクにはそんなビックリ特技は持ち合わせていない。

「そりゃそうだ。ジジイ　現魔王のオレの祖父、まほう間龍造まじゅうぞうの封印魔法でガチガチに封印してる。もう、こんな封印ありえねえってレベル。それをお前が生まれてすぐに施した。だから、訓練どころか覚醒もしてないやつが使えるわけがない。」

「でも、らしいって言うてたけど、それってどーゆーこと?」

「……その……ジジイな、肝心の事いわずに寝たんだ」

「……は?」

「つまり、お前の封印してから、寝たまま。」

いや、寝すぎにもほどがあるだろ!?

「フリーダムなジジイだからな……」

「自由すぎる!?!」

ホントに魔王か!?

「で、話を戻すと今日、お前は覚醒したとき火、または炎属性の魔法を使った」

「?・・・でも、封印されてて使えないんじゃない?」

「封印が外れかかってたんだよ。・・・普通なら一生使えなくなるレベルの封印を施されたのに、十数年しか持たなかったんだ。それほどお前の力が強すぎたんだ。ちょうど春休みぐらいに封印が壊れ始めた。お前がレオを見つけたぐらいだな」

そうだったのか。

・・・じゃ、あん時実はリュウモレオが視えてたのかな?

そして想像以上にボクの力はヤバいらしい。

「でもな、たかが火や炎でここまでなるのはおかしい」

「何で?」

「封印を破るにはそれなりの魔力がいる。ましてや正規の方法じゃなく、無理矢理にこじ開ける方法ならなおさらだ。・・・やっぱり、少し魔法の説明をする必要があるな」

そういつて説明された内容を簡単にすると。

- 1・・・魔法を使う人は必ず一つの属性を持つ。
 - 2・・・属性は人の数ほどあるが、火、風、水、土の四元素を使う人が多い。
 - 3・・・中には二つ以上の属性を持つ人もいる。
 - 4・・・自分の属性は訓練しだいでランクアップできる。(火 炎 といった感じで)
 - 5・・・高ランクの属性、レアな属性ほど魔力保持量が多い。
- と、言うような感じだった。

「つまり、トンでもないレア属性か、生まれながらにして超高位の属性じゃないと封印を破ることができないんだね」

「ああ、ちなみにオレは『影』からの『闇』へのランクアップ。

ドラゴンの中でもかなり珍しい属性で魔力もかなり持つてるんだが、
．．．．それでもこの封印を破るのは難しい」

それほどにまで、ありえないと．．．．．
．．．．．あれ？そういえば．．．．．。

「そういや、何でうちの家族とリュウン家が封印してくれたの？」

「ああ、それはジジイが知り合い同士だったんだ」

へえ〜。人とドラゴンなのに。

「まあ、会えばすぐに拳で語り合うような関係だがな」

「それ、最悪の関係だよな！？てか、じいちゃん何者！？」

どごぞの勇者か！？

「まあ、とにかくだ。お前の属性がばれると確実にどごぞの魔法研究機関に連行されるレベルのやばいやつだったから、もしものときのためにオレがついてたつつうことだ」

「そうだったのか．．．．．。なんか、ありがと」

取り合えず礼を言っておこう。

「それで、滞在する理由は？」

「……すっかり忘れてた。」

「それは、お前らに魔法を覚えてもらうためだ」

「……ぱーどうん？」

「今、なんと!？」

「魔法を覚える。理由は簡単。」

「一つ、覚醒したから。」

「二つ、今回の公園での襲撃のような防衛策として。」

「三つ、何かの拍子に魔法が発動して暴走したら大惨事になる。」

「以上だ」

「すっげ〜。魔法だ〜。」

「あれだよな。空飛ぶ魔法とかやってみたい。」

「でも、『お前ら』って?」

「坂崎もカウント済み。」

「何で〜?三谷君と違って魔法使えないよ〜?」

「それが、この馬鹿ソラのせいでお前も覚醒しかかっているっばいんだよな。」

「ボクのせい?」

「たぶん、お前の魔力に当てられて、だな」

「あ。だから高校に入ってから幽霊が視えるようになったんだね」

「ま、魔法の訓練は俺の親父に「ただいま」・・・ちょうどいいな。親父ー！オレも帰ったぞー！」

隆介か？とたずねつつ。二十代後半あたりの男性が入ってくる。

「親父の間颯^{はまざつた}太だ」

「こんにちは。三谷空志です」

「坂崎鈴音です」

「いらっしやい。私のことは名前で呼べばいいよ。・・・君がヒロシ君か」

丁寧な物言いの人、じゃなくてドラゴンだった。

「というわけで、魔法を教えてやってくれ」

「わかった。」

「いや、何も説明してませんよね。」

いいのか、そんな簡単に？

こうして、ボク達は魔法の勉強をすることになった。

5話・GURIMIRE

ただいま、ボク達は隆介君宅の書齋に來ています。

アレから、ボク達は町を歩いてリュウの実家に来た。でっかい家だった……。

そして魔法を覚えるための教科書として魔道書を探しに書齋に來ただけど……。

とにかくすごいです。

何がって言うと。

「部屋が本で埋め尽くされてる」

ハイ、坂崎さんの言うとおり壁、机の上はもちろん。床にまで置いてあり通路のようになって、挙句の果てには天井のほうにまで本がある。

つか、天井にあるやつフワフワ浮いてるよね!?

ここまで本で埋め尽くされていると地震が起きたときに死ぬそう
だ。

あ、コラ、レオ。悪戯すんな。

「じゃあ、君たちはここから適当に一冊の本を選んでもらえるかな?」

そういったのはリュウの父親である間^{はざま}颯^{そつた}太^たさん。

誰に対しても丁寧な物腰を崩さない人だ。

「無理です」

多^{おほ}す^{おほ}ね^{おほ}る^{おほ}よ^{おほ}ー!!

勉強の前に教科書選びで一生が終わるよ!?

「どれにしようかな?かな?」

オイ待て、坂崎さん。

君はいつ、雛見沢村の住人の少女になった?

そして、無謀だろ!?

「大丈夫。この世にあるのは必然だけよ」

そういったのはリュウの母親、優子^{ゆこ}さん。

とてもきれいで優しい人だ。ボク達をここに泊めようといってくれた。

「うおおい!?!」

てか優子さん、いつの間に!?

そして、あなたはどこそこの次元の魔女だ!?

さつきからネタが乱発されてる!?!何このカオス!?!

「いや、こん中から一冊って、絶対に一生かかりますって」

「大丈夫。とりあえず、この中を適当に歩いてみて」

何がどう大丈夫なのかまったくわからない。

「これにする」

早っ!?!?

「早いわね〜スズネちゃん」

「確かに、え〜と、題名は『アルス・ノトリア』。神秘の魔法かわかった。そつち方面で教えよう。まあ、まずは魔力の認識からだけどね」

「…………レア属性かよ。お前の周りは何気にすごいな」

「そうなの？てか、何で属性がレアっぽいってわかんのか？」

「『この書物は持ち主を選ぶ性質がある。つまりは人間で言う『禁書』だな。つまり、そいつにあった本しか選ばれない。まあ、お前もさっさと探せ。そうすればわかる」

なんか、よくわからない。

「でもさあ、どうやって、そんなのがわかんのか？」

「それは本人にしかわからん」

自分の力でやるしかないようだ。

「じゃあ、レオ！行くぞ！」

「にゃー！」

ボクはレオを引き連れて奥へに行く。

「……………迷子になりました!!」

「いや、広すぎだろここ!?!」

初めてごく普通の一般家屋で迷子になった……。でも、どうにかして戻らないとな。まだ、本見つけてないしな。どうしようっかな。

どさどさっ。

本の落ちる音。

「に、い、あ、く!?!」

レオの悲鳴。

「つて、レオ!?!」

本に埋まっているレオを発見。

どうも悪戯をして本を崩してしまったようだ。

……………何やってんだか。

ボクは本をどけて、ぐったりしてるレオを救出。

「……………ん?」

本を片付けていると一冊の本に目が行った。

題名のない何の変哲もない本だった。

なぜ、その本が気になったのかはわからない。

「ま、いつか。これにしよう」

なんとなく、この本がボクのために書かれたものであるような気がした。

「……で、ボク迷子じゃん。帰れねえー!!!」

「難さってまた一難だ……。」

「遅かったな」

「……聞かないで」

あれから数分ほど経って、奇跡的にもこの場所へたどり着けた。ちなみにレオはまだぐったりとしている。いい加減にしろなさい。

「君の本はそれかい？」

颯太さんが尋ねてくる。

ボクがうなずくと。

「これはまた……。題名がない上、封印されていますね」

「え？じゃあ、これ読めないんですか？」

「いや、この封印を解けばいいんだけど……。これは私の父

「がかけたようだから無理だね」

「・・・なんか、こう、気合注入！とか魔力装填！的なモノでどうにかありませんかね？」

「お前、アホか？」

「できるかもしれないじゃないか！無理だと思っけど。とりあえず、ふざけて

「ふん！」

「気合を入れてみた。」

「いや、だからできるわけ・・・」

「パキンッ！」

「はて、何かが割れるような音が聞こえた気が？」

「・・・！？ヒロシ君！本が！」

「え？本ですかあああああ！？」

「本が光を放っている！？どーすんの！？」

「落ち着け！」

M U R I !

なんかやばいんですが!?
しかし、光は唐突にやんだ。

「・・・何が起きたし」

「題名が出てきてるよ!？」

坂崎さんの指摘。

あ、ホントだ。何々・・・。

「『サルにでもわかる大魔道書』……………リュウ、
笑いたきゃ笑え」

「ぶわはははははは！何これ！誰が書いたんだよ！ありえねえ〜」

腹を抱えて笑っているリュウ。

すみません。皆さん。笑をこらえないでください。

口押さえてこらえないでください。

ボクが惨めになります。

とりあえず、こんな本を書いたやつを殴るために著者をチェック。

著者・魔王 間龍造

「……すみません。ボクが目がおかしいんですけど?」

「ふふっ、……どうしたの?」

笑いながら、優子さんが尋ねてくる。

「いやですね、この、著者のところが……」

「どれどれ……。『著者・魔王 間龍造』……」

間家の方々がフリーズ。

「……大丈夫ですか?」

「いやいや、大丈夫」

……颯太さん。目が笑ってないっす。

顔に魔王をどうやって殺^やろうかって出てます。

「でも、君はこんな駄本でいいのかい?」

「そうよ、こんなふざけた魔王様の本はやめたほうがいいかも」

「そうだな、こんなクソジジイの本はやめとけ」

……魔王様がひどい言われようだ。

「……ま、これでいいです。」

これも何かの巡り合わせってことで。
実際に魔法に関してはサル並だし。

「じゃあ、今日は遅いので泊まっていったね」

「では、明日から訓練です。今日はいろいろあったでしょうから休んでください」

「じゃ、お袋。メシ〜」

「ハイハイ。今日はご馳走よ」

明日からボク達の訓練が始まるらしい。

てか、ホントに今日はいろいろあつて疲れた。

リュウのご家族には悪いけど今日はここでお世話になるわ。

「すみません。よろしくお願いします」

「お願いしま〜す」

明日から、どう何のかねえ。

………そういや、学校どーすんの!?

6話・TRAINING

翌日

夕べはかなり大変だった・・・。

なぜかって？

食べ物がね・・・。

ゲテモノから、ごく普通のもの、ぶつちやけこの世界にしかないようなものを出されて食べるのにかなりの勇気を必要とした。

リュウにボク達の世界と同じものはないのかと聞いたところ、ちやんとあるらしい。

そして学校はどうするのか聞いてみると、

「大丈夫だ」

ドコが大丈夫かまったくわからない。

でも、帰る手段がわからないので言うことを聞くしかない。

「ま、ドンマイだな」

今現在、ボク達のいるところはこの家の地下にある訓練場にいる。メンバーはリュウに颯太さん、優子さん、坂崎さん、そしてボク。ちなみにレオはどっかへ散歩へ行ったらしい。

「では、訓練を始めましょう」

颯太さんの声によって訓練第一日目が始まった。

数時間後

M U R I ! そして D E K I N E ! !

「まあ、腐っても魔王の封印術ですからね・・・」

そう、現在ボクは魔王の封印術によって魔力の認識ができない。
坂崎さんもうまくいってないようだ。

「ちなみに、魔王さんの封印術ってどのレベル？」

「神がこの封印術を見たら裸足で逃げ出します」

神様を凌駕すんの！？

ドンだけすごいんだよ！？

「・・・・・・・・ハツ！？」

突然に坂崎さんが目を見開いた。

・・・悟りでも開いたのか？

「わたし、悟りを開いたよ！」

開いたらしい・・・。

「ドコの修行僧だ！？」

「いや、おそらくは魔力の認識ができたのかと・・・」

そーゆーことですか……。
てか、魔力の認識って結構適当なんですね。

「いや、そうでもないですよ。スズネさんはかなり筋がいいです。
とりあえず、使ってみましょう。隆介。案山子を。」

頭の中を勝手に読まれた。

ボクのプライバシーは何処に!?

「うい……。お袋。案山子ってどこだっけ?」

「こっちよ」

そして、準備ができた。

「どうすればいいんですか?」

「まず、魔力を手に集めるような感じで」

「うんうん」

目を閉じて手に集中する坂崎さん。
右手が光りだす。

「そして、一気にあの案山子に向かって力を解き放ってください」

「どうやってですか?」

「そうですね。ボールを投げる感じでしょうか?」

そんなんでいいのか。

ま、難しいことはおいおい教えてくんだろつ。

「ていー！」

いや、他に掛け声とかあるだろう。

なかなかツツコミどころのある掛け声をかけながら投げるモーションをとる。

光球が手から離れ、案山子に着弾。

ポンッ！

音が鳴るが何も起こらない。

「やつぱ、見本がいんじゃね？」

「そうね。じゃ、隆介。見本を見せてあげなさい」

「え〜。メンド」「ご飯抜き」しゃあー！やるぜ！」

優子さん強し。

「まず、手に集中」

リュウの手に高密度の黒い光が。

「そして、打ち出す」

モーションなしで手から黒い玉が飛び出す。

パリン！

「……彘？」

ありえないことが起こった。

案山子に当たったはずの黒い弾丸が跳ね返った。

「ぎやあああああ！！！！」

そして、お約束。

リュウに直撃。

「リュウ、そんな器用なことしなくても……」

「しとらんわ！跳ね返ったんだよ！しかも反射でもされたかのよう
うにー！」

「……颯太さん、優子さん。そんな加工みたいなのをあの案山
子にしたんですか？」

「いや、ぜんぜん」

何かを考え込む優子さん。

「……スズネちゃん」

「なんですか？」

「さつきみたいに魔力を手に集中して、手をこっちに向けて」

「……？こつですか？」

「ていつ」

かわいらしい掛け声とともにしやれにならないレベルの風の奔流が駆け抜ける。

……つて、オイ！？

「優子！？何を！？」

焦る颯太さん。

リュウもビククリして目を見開いてる。

「きゃあああああ！！」

悲鳴を上げる坂崎さん。

そして着弾。

パキンッ！！

すかさず優子さんが手を払うと、風が起こり、反射された爆風が相殺された。

そして、手を前に突き出したまま呆然とする坂崎さん。

「……何が起きた？」

驚くりュウ。

そして颯太さんが言う。

「……優子。まさかとは思つがこれは……」

「そうね。私もビックリしたけど属性は『逆』^{リバース}としか言いようがないわね」

そういつてやわらかく微笑む優子さん。

・・・って、オイ！

「あなたは何かやってんですか!？」

思わずキレてしまった。

いや、友人に危害を加えられてキレない人っているの!？

「大丈夫よ。手加減したし。最悪、一週間ほど気絶するだけだから」

「どのあたりが大丈夫!？」

ボクはこの人によく似たような人を知ってるような気がした。

「まあ、お袋はこういうやつだから。ま、おそらく、お前の好きなのやつピンチになんか都合よく魔力を認識できればいいな。とか考えてたんだろ」

「!?!?・・・友人としてはそうかもしれないけど、そこまで考えて「ないだろうな」・・・」

・・・なるほど、さすがは親子。

このリユウを数倍ほど黒くすれば優子さんができるのか・・・。

「だが、坂崎の属性のほうが今のお前よりヤバすぎる。唯一属性^{ユニークスキル}

「とでも言えばいいのか？」

「簡単に言うと、過去にこの属性を使った人たちが数人いたんだ。文献に寄ると基本がさっきのように『反射』^{リフレクション}、あるいは相殺。他にもあるようですがまだ解明されてません。一つだけ言えることは魔法に対して最強の切り札^{ジョーカー}となりえます」

要するにチートなんですね。

わかります。

そして、あれだな・・・。

キメゼリフは「その幻をブチ殺す！」的な。

てか、相殺とか完全に『幻殺し（イマンプレイカー）』だよな・・・。

「では、スズネさんは次のステップへ、ヒロシ君は引き続きここで同じことを。では、スズネさん、行きましょう。」

「・・・・・・・・」

返事がない。まるで屍のようだ。

って、ンなわけないか。

「どうしたの坂崎さああああああん!？」

倒れてました。

失神してます。

「あゝ。魔力の使いすぎね。魔力≪生命力に近いものがあるから。ま、気絶してるだけだから大丈夫よ」

「なるほど」

・・・って、優子さん。

「あなたが原因でしょうがあああああああ!?!」

「てへっ」

『てへっ』 『じゃねえええええええ!!!!』

7話・DESTROYER

side空志

ひゅんっ！

風を切る音が聞こえる。

てか、なんでこんなことになったんだ！？

「戦闘中に考え事とは余裕だな」

目の前の優子さんが人切り包丁と化した日本刀を振るってくる。
では、こうなった原因の回想をどうぞ。

ひゅんひゅんひゅんっ！！

てか、死ぬっ！

数分前

「これでは、スズネさんはもう無理でしょうね」

魔力の使いすぎによる疲労で気絶した坂崎さんを見て颯太さんが
言っ。

「では、とりあえず客間に運んでおきますか」

そういうと、颯太さんは手を坂崎さんに向ける。
すると、忽然と坂崎さんの姿が消える。おそらくはリュウが使った転移を魔方陣なしで行使したんだらう。

「では、ヒロシ君の訓練の続きといきましょう」

「でも、自分で認識は効率が悪いわね」

確かに、優子さんの言うとおり魔王の封印をかけられた状態のボクでは自分でやるのには効率が悪そうだ。

「やっぱ、どの属性かを知る機械とかがあるんですか？」

「んな都合のいいもんはない」

ばっさりリュウが切り捨てる。

じゃ、どうしると？

「と、言うわけで、ここは主人公のように自分の危機が迫って、突然に力が覚醒！という感じでやればどうかしら？」

「……そんな都合よくできんの？」

「まあ、だめもとでもやってみましょう」

「じゃ、私が相手をしましょう」

「！？待て！お袋！ここはオレが」ご飯抜き「サーセン！！」

あわてるリュウ。

しかし、優子さん強し。
優子さんの隣で、そういうことか……。とつぶやく颯太さん。
ものすごくやな予感がする。

「ま、ヒロシ君。がんばってくれ」

「……骨は拾っというてやる」

……すみません。

死ぬことが前提になってますけど？

「では、はじめましょう」

ドコからか日本刀を取り出す優子さん。

「貴様を血祭りに上げてやる……！」

「……あの、誰？」

「オレのお袋。名を聞優子」

「もはや別人だろ！？」

「さつさとはじめるぞ！！オレ様が相手して殺^やるんだから感謝しな……！」

突然、人が変わったかのように大声で叫ぶ優子さん。

「優子はね。巷では『死を呼ぶ風の戦女神』と呼ばれ恐れられてるらしい」

何、その物騒な通り名!?

「まあ、見ての通り、武器を持つと人が変わる。いわゆる戦闘狂だ」

いつの間にか安全なところへ移動した颯太さんが教えてくれる。

「ま、がんばれ、そして逝ってこい」

「絶対、字が違うよな!?!」

「こっちから行くぜ!?!」

「まだ、死にたくない!」

回想終了。

「ハイハー!」

目の前に死神がいます。

やさしさを含んだ笑顔がいま、ものすごく恐ろしいです。

「だ、誰か助「ゴチャゴチャうるせー」ぎやあああああああ
!.....!」

優子さんの攻撃を紙一重でかわし続ける。

side 隆介

「……………スゲーな。お袋相手に素人がかわしてるよ」

「確かに手加減をしてるとはいえ……………ヒロシ君は何か武術をしてたのかな？」

目の前の戦闘^{イジメ}を見て両者がつぶやく。

「ぜんぜん。ただ、あいつは無駄に防御スキルだけがレベルMAX
Xなだけ」

「……………それにしてもすごいね」

確かに、普通ならお袋の一撃をかわすとか素人には無理だが、それを目の前の人間が行っている。

だが、問題が一つある。

「あゝ。イライラする」

……………攻撃があたらないことにイライラしたお袋が手加減を忘れ、全力を出そうとすること。

「お袋ゝ。さすがに素人相手に魔法は使っなよゝ」

「誰が使っかつ！」

ソラから「助けて！」とか聞こえるような気がするが聞こえないフリをする。

自分の命のほうが大切だからな。
むしる魔法を使わないように釘を刺しただけ感謝してほしい。
ワンサイドゲーム
一歩的な戦闘は続く……。

side 空志

日本刀がボクの頬を掠る。
血が出てきたのを感じ取った。
もう、何回目だろうか……。
ボクには守る術はある。
でも、攻める術がない。
そして何より、

「避けてるだけじゃ勝てねえぞ」

獰猛な笑みを浮かべる優子さんがものすごく怖いです!!!
でも、自分も体力がなくなってきた。
もうそろそろヤバイ。

日本刀がボクに「逝け」とばかりに振り下ろされる。
回避!

そのときだった。ボクの足が滑ったのは。

「しまっ!?!」

「そこっ!?!」

背中から地面に倒れていく。
がら空きになったわき腹に容赦ない一撃が放たれる。

「死んでたまるかあああああ!?!」

ここでボクは最後の力を振り絞って覚せ……。

「ふんっ！」「あべし！？」……ギャグか？」

できませんでした。

峰打ちされたわき腹に痛みが走る。

息ができない。

のた打ち回っているボクに優子さんは、

「オラ、覚醒すんまでやつぞ。立て！！」

「ひっ！！！？？」

思わず悲鳴が漏れる。

そして、刀が振り下ろされる。

「ぎゃあああああああ！！！」

戦闘はボクが気絶するまで続いた。

気絶する瞬間に颯太さんとリュウがボクに合掌していたのは見間

違いではないと思った。

8話・IN THE DREAM

side 鈴音

「おっは〜。……………あれ？三谷君は？」

いつの間にか寝てしまったわたしは客間のベッドに寝かされてい
た。

おきてみると時刻はすでに夕方。

とりあえず、リビングに下りてみると間君と颯太さん、優子さん
がいた。

カレーの香りがしているとところから夕飯みたい。

でも、三谷君の姿が見えない。

「ちょっと、私のはしゃぎすぎちゃって……………それに付き合っ
てくれたヒロシ君は、今客間で寝てるわ。たぶん、もうすぐおきて
くると思うわ。」

「すみません。寝てしまったようです。」

うわさをすれば……………なんだっけ？

とにかく、三谷君がおきてきた。

……………類に絆創膏がはってあるけど、怪我でもしたのかな？

「……………ヒロシ君。大丈夫ですか？」

「？何がですか？」

「……………お前、あんなことがあったんだぞ！？」

？

何があつたんだろう？

「……そういえば、坂崎さんが気絶したあたりから記憶がないんだけど？」

「あれ、わたしって気絶したの？」

「ええ、魔力の使いすぎです。次は魔力操作コントロールを覚えましょう。」

そうなんだ。

がんばらなきゃ！

そういえば、

「三谷君はどうして寝てたの？」

「いや、何で寝てたのか記憶にないんだ。」

「……恐ろしさのあまりに記憶を封印したな……」

「……隆介。あれでは仕方がない。」

何かわけを知ってそうな。

「何かあつたんですか？」

間君と颯太さんに尋ねてみる。

二人は顔を見合わせると、

「世の中知らないほうがいいこともあるんだ」

・・・深いお言葉をいただきました。

「あ、ヒロシ君。明日も今日と同じメニュー、題して『主人公作戦』をしましょう」

「ぎやああああああ！！！！！！」

「三谷君！？」

突然、断末魔の悲鳴を上げる三谷君。
ホントにどうしたの！？

「お袋！！あなたは鬼か！？」

「優子！これではヒロシ君が廃人になってしまうぞ！？」

「いやだいやだいやだいやだいやだいやだ・・・」

・・・聞くと元の世界に戻れなくなる気がした。

side空志

思い出してしまった。

今、ボクがいるのは間家の客間。

夕飯のトラウマを呼び起こす事件の後である。

風呂やなんかを借り、一息ついて明日の対策を考えているところ。

まだ、ボクは死にたくないからね！！

「でも、あの優子さん相手にどうしろと？」

あんなでも、手加減をしてきていたらしい。

魔王でも裸足で逃げ出しそうなレベルだ。

勇者が倒すべきなのは魔王ではなく優子さんだと思う。

「……とりあえず、今日は寝るか。」

ちゃんと怪我を治してくれたとはいえ、疲労だけはどうにもならない。

目を閉じると、すぐに眠ってしまった。

つて、ここはドコだ？

おかしい。

ボクは間家の客間で眠ったはずだ。

地面はリノリウムのような床。

地平線が広がっていて、まるで途轍もなく大きな部屋の中にいるようだった。

「よくここへ来たな」

「あ、夢か」

なるほど。

それなら説明がつく。

たとえ、知らないおじいさんに話しかけられたとしても説明がつく。

夢だから!!

さてと、じゃあ、この夢から覚めるにはどうすればいいんだろっ?

「寝るか」

「ちよ、待たんか!?!」

夢の中で寝るとか変な感じだけど、まあ、いいでしょ。

「……無視せんといってくれ。いくら魔王でもそれは寂しい」

「ちよつと待ったあああああああ!?!」

今、この爺さんなんていった!?!

「突然なんじゃ!?!」

「あんたは魔王なのか!?!」

ボクは爺さんの言葉を無視して疑問をぶつける。

「そうじゃが?」

「なるほど」

そういうことか。

この爺さんのせいで……。

ボクは魔法が使えずに。
あの地獄のような目に……………。
つまり……………。

「優子さんの餌食になったんだあああああああ……!!!!」

「!?!? ちょ、待つ、ゴブファ!?!?」

ボクの怒りのこもった一撃は自称魔王と名乗る爺さんを打ち抜いた。

「それは、すまんかった」

少し落ち着きました。
この魔王。つまりは間龍造まねつじょうさんをフルボッコにした後に事情を説明。とてもすまなさそうな目でこちらに対して謝罪してくれた。

「もう、過ぎたことですししょうがないです」

これがオトナな対応。

「で、さっきの説明だと、ここはボクの夢の世界のようなものなんですな」

そう、ここはボクの夢の世界のようだった。

そして、さらに重要なことは、

「さよう。そしてわしはおぬしの持つておる、まあ、魔王はおぬしのためにこの魔道書を書いたようじゃが……。とにかくわしは魔道書に作られた自立型擬似思考装置のようなもの」

要するに、SFとかにある人工知能みたいなものね。

「あのふざけた魔道書はボクのために書かれたの!？」

「さよう。わしは魔王と記憶を共有しておるから確かじゃ」

そうなのか。

いや、それより重要なことがある。

「記憶を共有してるならボクの属性もわかるはずだよね」

封印までして隠したその属性がついにわかる!!!!!!
しかし、発せられたのは意外な言葉だった。

「わしにもわからん」

「……は？」

どづいづいと!？」

「魔王がその部分だけ封印プロテクトをかけておる」

なんで!？」

「じゃが、その力は強大らしい。そして力の使い方は自分で見つ

けるとも言っておる」

いや、素人にどうしろと!?

魔力の感知すらできてないんですけど!?

「封印を解く許可を得とる」

MA J I D E K A!!

それなら、明日ボクは死ななくてすむ!!

魔王の擬似人格さん最高!

「と、言うわけで封印を解いておいた」

「いつの間に!?!」

「いや、自分で作ったやつじゃし、かなりガタがきとったからな。すぐにできた」

そうなのか。

「ま、明日にでもやってみればよからうて」

「そだね。ありがとう」

「いやいや、むしろこっちがすまんかったな。封印が解けた今、そのうち本体にも会えるじゃろうて」

「封印のせいで寝込んだのか・・・」

なんだか悪いことをしたような気がする。

「ま、気にするな。魔力の回復に時間がかかるからしばらくは無
理なんじゃがの」

「そっか。じゃ、起きたらいろいろ教えてよ」

「そうじゃな。楽しみにしておるぞ」

そういうと、光を発し、その光が収まるとボクは間家の客間のベ
ッドに横になっていた。

9話・SHOPPING

side空志

「本当ですか!？」

ボクは朝の食卓で昨日の夜に起こったことをすべて話した。

「信じられないわね。あ、ご飯のお代わりいる？」

「お願いします」

坂崎さんが3杯目のご飯を所望。

いや、そんなことはどうでもよくてっ。

「その夢の後に、手に魔力を集中しようとしたんですよ」

「・・・お前、一人でそんな危険なことを・・・お袋、しようゆとって」

「ハイハイ。でも、今度から一人でやっちゃだめよ」

いや、あなたの戦闘訓練イジメが怖くてもし魔法が使えなかったらと思うと寒気がしたのもしものときのために練習をしておこうと思っ
たんです。

とは口が裂けてもいえない。

「すまない」

颯太さんは察してくれたようだ。

「で、属性は？」

「それがですね。よくわかんないんです」

そういつて、僕は右手に集中する。

右手が光りだす。

すると、風が巻き起こる。

「・・・風じゃん」

ボクもそう思った。

でも、ボクはほとんどん魔力を右手に集中する。

・・・パチ。・・・バチツ！！

突然、電気を帯びた。

すると、風が渦巻き、小さな嵐が発生。だがすぐに消える。

さらには、次の瞬間には火がまとわりはじめた。

もう、わけがわからん。

「・・・なるほど。多重属性デュアルですね」

なんぞ、それ？

「複数属性を持つヤツのことだ。お前の場合はおそらく『天空』と『火』かな？」

「なかなかレアな属性ね」

「『火』はともかく、『天空』は？」

なんかもものすごく強そう。

「『天空』は、言ってしまえば空に関係するものすべてが操れま
す」

……何、そのチート？

「本来、風系統の魔法を極めて『天空』になるんだが、お前の場
合は最初からレベルMAXになってるんだな」

「へえ〜。三谷君すごいね〜。ご飯いいですか？」

「ホントね〜。はい、どうぞ」

ま、とにかくこれであの悪夢からは逃げられ……。

「でも、昨日戦闘の訓練をして思ったんだけど……あれではダ
メね」

……。

なんだかやな予感がする。

死亡フラグ的な意味で。

リュウがボクの肩に手を置き、

「死ぬなよ……」

「強く生きるんだ」

颯太さんも同情のまなざしでボクを見る。

「と、言うわけでヒロシ君はわたしが魔法の訓練アンド稽古をつけてあげます」

「ダッ!!!」

ガシッ。

「いやだああああ!!!ボクはまだ死にたくない!!!」

「大丈夫よ。守備はかなり筋がいいから」

「それ以外は!?特にボクの精神力とか!!!」

逃げようとしたボクを優子さんは阻止する。

そしてボクは地下の訓練場へ引きずられていく。

「ぎゃああああああ!!!!!!」

そして、昨日の悪夢が再びよみがえる。

「.....」

「.....」

「.....ホントに昨日は何があったんですか?」

その質問に答えられる勇者はいなかった。

side 空志

パ ラツ シ ョ . . . 。 ボク、もう疲れたよ . . . 。

今ならリアルに逃げそうな気がする。
いくらこつちは魔法ありでもまだ使い方がわからない。
第一に魔王を超える大魔神に勝てる気がしない。

「オイ、起きろ」

戦闘モードの優子さんが日本刀を肩に担いで無茶を言う。
. . . てか、ホントに別人だ。

「. . . 無、理で . . . す。」

ボロ雑巾のような状態でボクはいう。

「はっ、軟弱モノが！」

そして優子さんは日本刀を消す。
. . . どうやって、出したり消したりしてるんだろう？

「でも、進歩してるとは思いますよ。少なくともわたしを5%ほど本気にさせました」

もう無理！！

世間一般でにそれは本気とは言わない！！

「でも、ホントに攻撃ができませんね。 . . . いったそのこと武器を見繕ってみますか？」

・・・銃とかで遠くから攻撃・・・。
これならいける!？」

「いいかもしれませんね、それ!?!?!特に銃とかあれば!?!?!」

そして優子さんはやりと笑う。

・・・急に寒気が。

「そうですね。そうすればわたしも少し本気を出してよりよい訓練ができますからね」

「墓穴掘ったあああああああ!?!?!?!」

拜啓、天国のおじい様（死んでないけど）。
近々、そちらへ会いに逝くかもしれません。

side 鈴音

いま、わたしは颯太さんに魔法の講義をもらっています。
でも、ぶっちゃけ全然わかりません。

詠唱とか範囲の指定とか出力とかわけのわからない単語が出てきて、わたしの頭はすでにオーバーヒートを起こしています。

「・・・大丈夫ですか？」

「だいじょーぶですよ」

「視点のあつてない目で言われても・・・。ちなみにそれはレオ君です」

あれ？

いつの間に入れ替わったの？

「ま、とにかくは魔道書を読みましょっ」

「でも、わけのわかんない文字で埋め尽くされていますよっ」

日本語じゃないし、英語でもないから読めないよ？

「いえ、魔道書は感じ取って読むんです」

「……それって、勘のこと？」

「近いですが違いますね。まあ、これはヒロシ君の方がうまくできたようですが」

あゝ。あれか。

本とリンクして夢の中でっってやつ。

「そうです。ま、気長にやりましょっ」

「はい」

「ぎゃあああああ！……！！」

どこか遠くから断末魔の叫びが聞こえるよゝ。
幻聴かな？

「よく考えてみると魔法を教えてから戦闘訓練をすればよかったわね。」

よく考えなくても気づいてください。

ボクはそのせいで何回、死線をさまよったことか……。そんなことはお構いなしに優子さんは続ける。

「そうね、まずは魔法の基本的な呪文を教えようかしら？ 魔道書は？」

「……向こうです」

訓練場の端を指し、痛む体に鞭打って魔道書をとってくる。

そして優子さんに渡す。

優子さんは流して読むと、

「……ずいぶん特殊な方法ね」

「そうなんですか？ 確かそこに書いてあるのは魔法陣がどつどつてやつだと思っんですけど？」

「あら、もう本は読めるのね。なら話は早いわ」

そういって、ボクに魔道書を返してくれる。

「そこに書いてある通りにやって、簡単な魔法を発動させて」

「はあ」

とりあえず、いわれたとおりには初歩の魔法を発動させてみよう。
まずは、魔方陣を頭の中に思い浮かべる。
そして、手のひらを前に突き出し、魔力を収束させる。

「魔方陣、展開！」

魔方陣を出現させる。

が、出てきた魔方陣は、

「……まずは描いて覚えましょう」

「……ハイ」

ひどい形だった。

イメージが固まらないのか、円はぐちゃぐちゃ。

文字はミミズがのたくったような字。

ぶっちゃけ、出来損ないだった。

テイク2。

チヨークを使い、地面に魔方陣を描いた。

わけのわからない文字、記号が書かれている。

自分でもこんなのよく描けたなと思う。

大きなものを描くのは大変なので直径30センチほどのミニサイズ。

「じゃ、気をとりなおして、ね」

「はい。……魔方陣、展開！」

先ほどと同じように展開。

今回は地面に書いた魔法陣が発光する。
これで準備が完了。

「カマイタチ
鎌鼬！」

後は魔法を起動させる魔法の名前を言うだけ。

実にシンプルでわかりやすいね。

詠唱もなく、かなり簡単にできる。

ただ、問題が一つ。

「覚えるまでが大変ね。」

そう、覚えるまでが大変。

使い慣れたものなら頭の中でその魔方陣をイメージして展開するとすぐさま展開できるけど、なれないうちは地面に描かないといけない。これでは相手に攻撃してくださいと言ってるも同然。さらに使う魔法の種類、難易度によってどんどん複雑になっていく。

簡単に言くと熟練の技を必要とする。

ちなみにさっきの魔法は風の刃で切り裂く魔法。その魔法で案山子が真つ二つにされている。

・・・なかなかよい切れ味で。

「でも、魔方陣は何回でも使えるみたいだから、カードにでも描いておくと便利かもね。」

なるほど、そういう方法もありか。

後でやってみよう。

「じゃ、がんばって初級魔法だけでも覚えましょう！」

「・・・ガンバリマス。」

まだまだ、練習は続く。

side 隆介

「お疲れ」

「・・・うい」

「・・・あれ？間君が三人？」

今日は早く終わったようだ。

二人の気配を感じたオレは昼寝を中断し、ねぎらいの言葉をかける。

しかし、また一段としごかれたようだな。

特に坂崎とか。

案外、魔法に関してはお袋のほうが教えるのがうまい。

お袋は実際にやらせて教えるからな。

親父は理論から叩き込むために、結構つらいものがある。

ましてや、つい先日まで魔法なんか知らないヤツがやれば知恵熱の一つや二つは軽い。

「お花畑が見える」

もうそろそろ本気でやばいな。

「武器が欲しい？」

「優子さんに命令を受けた」

坂崎をこの世に呼び戻した後にソラが言った。

なるほど、だから今日は昨日より早く終わったのか。

お袋は戦闘狂だからな。

少しでも本気を出したいがためにそうしてんだろっな。

ソラに同情する。

「ま、都市の案内がてら、武器屋にいくか。坂崎もいいな」

「わーい。お出かけ〜。レオちゃんも行く〜」

復活した坂崎がいつの間にか現れたレオに言う。

「ありがとう」

「なに、いつかは案内しようと思ってたんだ。別にいいよ」

そして、オレたちは出かける準備をする。

side 空志

メインストーリー。

ここにはいろんなお店や屋台があった。

貨幣による経済が発展しているようで、リュウの話によるとこの都市に住んでいる魔物たちはたいていの物をここで買い揃えるらしい。

「坂崎さん？」

ふと気づくと坂崎さんが服屋らしきものの前に。

そういえば、ボク達の格好はここに突然来たもんだから学校の制服のままだ。

寝巻きとかは、ボクはリュウに借りて、坂崎さんは優子さんに貸してもらってたりする。

でも、やっぱり女の子は服とか欲しいのかな？

「服、欲しいの？」

「ひゃいつ!?!」

驚く坂崎さん。

「いや、一生懸命見てたからな」と思って・・・

「・・・いや、わたしね、ずっと優子さんの借りるのとかちょっと悪いかなと思って・・・」

「あゝ。なるほど」

確かにちよつと悪いよな。

「でも、ここの貨幣なんか持ってないし・・・」

あるのは財布に日本円で二千円ほど（虎の子を含む）だけ。

「あんたらどうそしんだい？」

ボク達が悩んでいるところに耳のとがった。そしてきれいな顔立ちの女の人が現れた。

エルフだった。

すげ〜。初めて本物見たよ。

「・・・あんたら人間かい？」

一目でバレた!?

隠す気ないけど。

「あ、ハイ、そうですね?」

「じゃあ、今つわさの隆介の人間の友達!そういうば、それ学生服?」

こっちにもあるのか。

「いや、隆介が同じもんよく着てるからさあ〜。」

そういうことですか。

「・・・なるほど〜。そういうことですか。」

・・・なんですか、その怪しい笑みは?

「ちよっ、キミ。こっち来なさい。アナタも」

といって、強引に腕をつかんでボク達を店の中へ。

「じゃ、アナタはこの商品を見てて」

「はい」

そして、ボクのほうを怪しい笑みを浮かべて見る。

「あたしの名前はアリアねえ。キミい。名前は？」

「・・・三谷空志」

「ヒロシ君ね。キミのカノジョに普通の服を買ってあげようと思っただ」

「あたらずとも遠からず。特にカノジョの部分とか」

なんだろう、アネゴ肌の人かと思か？

ダメな部下に恋の指導をしてやろう!!!

見たいな感じ? (偏見)

「テレんなくて。お金は？」

「日本円で二千円ほどなら」

「おつけ。問題ナシ」

「日本円使えんの!？」

「何言ってるの? 使えるわけないじゃない。ニホンエンって何?」

かわいそうなものを見る目でボクを見ないで!

「ここはおね〜さんが一肌脱ぐわ。ちょっと条件をつけるけど」
なんかやな予感がする。
でも、間家の人達トランゴンに迷惑かけたくないしな。
どうせ、お金を稼ぐ方法とかここで一時的に働けでしょ。

「わかりました。で、どうすればいいんですか？やっぱり、ここ
でタダ働き？」

「簡単よ〜」

どこからともなく一着の服を取り出す。

ごく普通の黒の長袖シャツにジーンズのズボン。

「この服を着て欲しいの。お金は要らないわ。」

「いいんですか？」

「いいのよ。むしろさっさと着ろ」

なぜに命令口調？

とりあえず試着室で着てみる。

「着れた〜？」

「着ましたけど」

試着室のカーテンを開ける。

「うん。いいんじゃない。・・・
激流の水衝球　！！」

ドバツ！

ガスッ！

ボタン。

「いきなり何すんですか!?!」

説明しよう。

おそらく、ボクが着替えている間にアリアさんが詠唱。

アリアさん魔法を発動。ドバツ！

ボクにダメージ！

衝撃で壁にガスッ！

ボクが床に倒れる。ボタン。

ということがあった。

・・・床が水浸し。

「実験成功よ!!」

「何が!?!」

「服に魔法防御の魔力付与したの。その実験台が近くにいたから
つい。テヘッ」

「『テヘッ』じゃねえ!ボクは吹っ飛ばされています!!あと実験台って!?!」

ボクは気を失いかけた!!

「魔力耐性がゼロの実験台が欲しかったのよね。特に人間みたい

な。でも、さつきわたしは中級でも上位の水魔法を使ったけど、キミは生きてるし、水にぬれてない」

「ボクは一応魔法を使えますが？」

優子さんによると、魔法を使える人にはいくらか魔法への耐性がつくらしい。

「大丈夫！わたしたちと比べたら。ドラゴンとミジンコだから！」

「意味がわからない上に勝負になってません」

でも、確かに水がついてない。

ちよっと、体が湿っているかな〜という程度だ。

「じゃ、約束どおり服を上げるわ。キミにはそれで、カノジヨにはそれと同じ性能の別タイプの服」

「ここですらばつくれたらさすがに怒ります」

アリアさんの後についていこうとしたときに水でぬれていた床に足を取られた。

「あっ」

「きゃっ」

アリアさんを巻き込んで倒れる。

「おい、探したぞ。急にいなくなんだから」

「なんかこつちですごい音がしなかった？」

今のボクの状況は周りから見ると、ボクがアリアさんを押し倒しているように見えるんだろう。

お約束ですね。わかります。

「……坂崎というものがありながらアリアに……」

「……お取り込み中だった？」

「ちが「ふふふ、ダ・イ・タ・ン」黙れ」

誤解を解くのに一時間以上かかった。

10話・MAGIC BATTLE

side空志

「ひどい目にあつた」

「ドンマイだな。アリアはああゆうヤツだ」

「三谷君、服ありがと」

みんなの誤解を解くのにかなりの時間を必要とってしまった。

アリアさんは話を面白いくらいにいじくり回し、気づけばもう夕方だった。

「ま、その服はかなりの高性能だし詫びに何着かくれたんだしもういいだろ」

この判断は賢明だったと思うよ。

ボクは全魔力をこめて最大級の魔法をぶつ放そうとしてたからね。笑顔だったけど頬を伝う冷や汗を見逃してないね。

「でも、もう帰らないとな。武器を探さなきゃならなかったんだし」

そういえばそうだった。

すっかり忘れてた。

「どうせなら、少し遠いがオレの知り合いの鍛冶屋に行きたいな」

「知り合いの鍛冶屋とかいるんだ」

「ドワーフのな」

「ファンタジーだね」

魔物の都市にいて、ボク達が魔法を使っている時点ですでにファンタジーです。

「お袋達に言って、明日は昼から人間の町を経由して会いに行こう」

「了解」

「わかったよ」

翌日。

「死ぬかと思った・・・」

「あれで生きてるお前はすごいと思う」

「魔法を使えるようになったよ」

優子さんにボコボコにされボクはどうにか生き延び、坂崎さんは魔法を使えるようになったようだ。

レオは今日はボクのほうにいたけど、昼寝をしてやがった。

薄情者め。

「で、どこにどうやっていくの？」

「こっへ行く。」

シャドウ・パス
影抜け

突然、影が動き出し、ボク達を包み込む。視界を黒一色に染められ、一瞬で消える。すると、さっきまでリビングにいたはずなのに、ボク達はどこかの町の路地裏に立っていた。

「……………ここはドコ？あれは何？」

「坂崎、記憶喪失にでもなったのか？」

「がふつがふつ。」

「レオ！！そんなものは食うな！！」

うん、とりあえずいつもどおりカオスな雰囲気。

「で、何したの？」

「影から影に移動する魔法を使った」

便利だな。

でも、それなら最初っから目的地に行けばいいんじゃない？

「突然、目の前に転移とかはマナー違反だからな。ま、それ以前にオレの技量不足。」

なるほど。

「んじゃ、そういうわけで行くぞ」

「「お〜!」」

「見て見て〜。人がいつぱいいる〜」

「お前も人間だろ。」

「だって久しぶりに見た気がして〜」

「そういえば、学校とか本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ。親父とお袋の権力で」

「どんな権力だよ」

そんなくだらない会話をして歩くボク達。

時々立ち止まっていろんな珍しいものを物色。

レオはボク等が適当に買ったものをボクが分け与える。

レオは好き嫌いなく何でも食べるいい子だ。

ど〜おおおおおおおん!!!

「よし、あっちに行こう」

「オレ達の目的地とは反対方向だ。」

「いや、なんかヤバい音が進行方向からしたよね!？」

「大丈夫だよ。たぶん事故とかだよ」

確かに、ここは文明レベルがボク達と住んでいた世界とほぼ同じで、車っぱいのもある。

だが、ボクの前感が危険信号を発している!!

「センサーが警鐘を鳴らしているんだけど？」

「よし、向こうへ行こう」

さすがだ。

ボクの悪い予感が外れたことがないのを知ってるリュウが即座に意見を翻す。

「かわいい女の子が襲われているぞ!!」

誰だ？

こんな変なことを叫んだやつ？

「とっつ!!!!」

オイ!リュウ!

お前はなぜそっちへ行く!?

「かわいいとかジャステイス!!」

「間君が壊れた」

「とにかく行こう」

リュウには後で鉄拳制裁だ。

ボク等がリュウを追ってみるとそこには戦場が広がっていた。

「テロかつ!?!」

「映画のセットみたい」

いろんなところから煙が上がっている。

ところどころで地面がおかしなところがあり、氷付けにされているところがある。

あたりに人はいないよう。

おそらく逃げたのだろう。

「こっちだ!!」

リュウがボク等を見て声を上げる。

「何があつたの!?!」

「魔法使い同士が戦闘をしてる」

魔法使い同士だとここまでの大惨事になるのか。

……ん？

「ごめん。なんだかもものすごくやな予がつ!？」

背中に氷の弾丸が当たりました。

昨日もらったアリアさんの服のおかげで生きてます。

「あんた危ないわよ!!! てか、よく生きてたわね」

「むしろ、あんたが危険だ!!!」

後ろを見ると、二人の少女が対峙していた。

片方は魔法を放ってきたであろう少女。

見た感じだとボク達と同じぐらいの年。

一般的な日本人のような風貌、ショートカットで眼鏡をかけてる。なんか凜々しい感じ。

そして、もう片方はこの状況から考えるに襲われているかわい
い少女。

白い髪のセミロング。ボク達に背を向けているので顔はわからな
い。

「ソラ、こっちの白髪のほうをネスト魔窟に連れて行く」

「誘拐は犯罪だよ」

「間君サイテ〜」

「ちげえよ!?!」

まあ、からかうのはここまでだ。

「確かに普通の人間じゃないような感じだね。あるいは人間じゃないのかも」

「!?!?・・・わかるのか?」

「ついさつき、ね」

ここに来て気づいたことがある。

魔物と人間の感じが全然違う。

たとえ、それが人のような風貌でも。

「でも、普通はわかるんじゃないの?」

「わからん」

「わたしもわかんないよ」

ボクは普通じゃないようだ。

「とにかく助けるぞ。」

闇よ、万物を縛る縛鎖となりてここに顕現せよ。

彼の者に苦痛と戒めを。

ここに絶対的な闇の力を示せ!

チェイン・ダークネスロンド
鎖の闇輪舞　!!!」

リュウが魔法を発動させると突然闇が召還される。

それは無数の鎖となり、それらは螺旋を描くように眼鏡の少女の自由を奪う。

「な！？ちよつとあんた！！これを解きなさい！！」

魔法の鎖でぐるぐる巻きにされた眼鏡。

「ヤダ。ちなみにそれはかなり協力だから三日ぐらいしたら解けるといいな」

「何よその希望的観測を述べるようなそして物憂げな顔は！？いいわ、自分で解いてやる！！」

「がんばれ〜。さて、お前の名前は？」

リュウが白髪の少女のほうへ尋ねる。
ビクリとして恐る恐るこつちを向く。

・・・そこには十人いたら十人とも振り返るような美少女。
紅い目が特徴的だった。

「かわいいね〜。名前は？」

リュウ、貴様はナンパでもする気か？

「・・・リカ」

「なるほど〜。リカちゃんね。わたし坂崎鈴音よろしく〜」

「リカナ。じゃ、オレもよろしく。間隆介だ」

「・・・なんか言いたそうな顔してるけど・・・ボクは三谷空志」

「・・・スズネ、リュウスケ、ヒロシ？」

「そうだ。オレとこいつはリュウとソラって呼べばいいから」

自己紹介も終わったことで。

「大変申し訳ないことがゴザイマス」

「どうしたソラ？」

「人の気配がする。非友好的？」

「もうそれ、超能力だよね」

「・・・わたしを追う人はもう一人いる」

「」「マジで!?!」「」

「見つけましたよ」

いつの間にかボク達と同じぐらいの年の優男が現れた。
長い髪で中国人っぽい。

「逃げよう!?!」

「」「魔法で撃退!?!」「」

「あんたら好戦的過ぎるよ!?!?」

「逃がしません!!」

地面をけつてこつち向かってくる優男。
てか、速い!?

ちつ!これじゃ逃げるのは無理だ。
しょうがない。

「魔方陣展開!」

ボクの言葉で一つの魔法陣が展開。
そこに魔力をつぎ込む。

「ライジン
雷迅!」

ボクは天空属性の魔法を使って雷の弾丸を飛ばす。
これはボクの使える魔法の中で最速を誇る。
しかし、相手は俊敏な動きで避ける。

「ドンだけ人間離れしてるの!?!」

あわてて、次を展開しようとする。

「ソラ、もういいぞ。いい時間稼ぎになった」

「リフレクション
反射!」

ボクの魔法の射線上にいた坂崎さんが両手のひらをだし、逆属性
の魔法を使う

魔法を優男に跳ね返す。

「! ?ぐうつ! ?」

予想外の方向から来たためか避けれずに着弾。
気絶。

「わたしナイス！」

「ありがとう。外したときはどうしようかと・・・」

「ま、いいじゃねえか。とりあえずここから逃げ」お前らか! ??
「・・・遅いな」

いつの間にか警備の人たちがいました。

「魔窟に! 早く!」

「ギリギリで使える範囲から外れてる」

「ピンチ?」

考えるリュウ。

焦るボク。

危機感のない坂崎さん。

おろおろするリカ。

「・・・レオは?」

「にゃー」

レオの鳴いたほうを見る。

ナイスだ！！

「向こうの道に逃げよう！！」

明らかに動揺しているリカを近くにいたボクはその手をつかむ。リユウと坂崎さんはちゃんとこっちに気づいてるようだ。そしてボク達はレオの示してくれた裏道を走り出した。

s i d e リカ

なんで？

この人たちは何でわたしを助けてくれたの？

わたしがニンゲンみたいに見えた？

わたしは夜の存在。

この人たちのように昼の存在じゃない。

この人たちの近くにいとダメだ。

この人たちに迷惑がかかる。

わたしの正体がバレたら気味悪がる。

わたしはもう傷つきたくない。

でもそれは無理なコト。

わたしは夜を統べる者。

11話・DARKNESS OF MIND

side空志

「……コドコ?」

「知らん」

「わかんない」

「……わかりません」

順番にボク、リュウ、坂崎さん、か細い声でリカ。

「とりあえず、鍛冶屋まで行こう」

「無理だな」

「何で?」

「……わたしのせい」

「リカのせいではないがあの子のバカ魔法使いが散々暴れたからな。厳戒態勢がしかれてると思う。」

そうか……。

「でも、二人ともその場を動けないんじゃないの?」

そういえば、眼鏡はリュウが動けないようにして、優男はボクと

坂崎さんが気絶させた。

「それがな、魔法を解除されたらしい。思ったよりかなり筋がよかつたんだな」

「なるほど。優男はともかく、眼鏡が逃げた可能性が高いのか」

「ああ、おそらく優男は周りの状況からすぐに開放される。そして氷の魔法使いを探す」

「それならボク達は大丈夫じゃない？」

「その相手がいるからな。おそらく職質ぐらいはされる。すると噂とかで見つかる可能性がある。極力見つからないほうがいい。つうわけで、ここらでほとぼりが冷めるまでゆっくりしたほうがいい」

おそらくは嘘だろう。

リュウはこの娘を人の目から遠ざけるためにこつこついうことを言ってるんだろう。

この娘を守るために。

でも、何でこの娘が気になるんだろう？

「・・・そんな、いいです。わたしのことはほつといてもらえば」

「女の子が一人じゃ危ないよ。さっきのこともあるし」

「そうだ。ここは一緒に行動しよう」

なんか暗いな。

ここはペア〜と行くべき？

アイコンタクト。
おっけ〜。

「よし、行こう!」

「……行くとどいつ?」

「Go Shopping!」

「何だこの連携は?」

ボクは坂崎さんと即座に連携。

「もたもたすんなって。行こう」

ボク等は表通り目指して歩き出した。

でも、リカは呆然としてる。それと恐れのようなものが浮かんでるような気がする。

しょうがない。

「ほら、行こう。とりあえずおいしいもんとか食べに。これは強制ね」

ボクは半ば強引に連れて行こうとする。

「ねえ、行こうよ」

リュウがりカの近くへ行く。

「……でも……危ない」

「・・・大丈夫だ。おそろくすぐに行動にはでない。お前を傷つけるやつはここにはいない」

ボクにはそれが言い聞かせるように聞こえたような気がした。すると、リカはビクリと体を震わせたが、意を決したみたいだ。ボク等のほうへ一歩踏み出す。

「じゃ、行こうか」

「・・・お願いします。スズネ、リュウ、ソラ」

side 空志

「あれはどういうこと？」

ボク達は一旦表通りを探すために二手に分かれた。チーム編成は男女。レオはこつち。そういうわけでボクはたずねる。

「あれか？なんで？」

「励ますように聞こえた。しかも、いじめられっ子を」

「あたりだ。あいつは魔物だ。おそらく迫害とかかれて人間不信になってる」

やっぱりか。

さっき感じた人と魔物の違う感じはあたってたのか。

さっきの雰囲気もボク達を信じていいのかどうか迷っていたのか。

「種族に問題があるの？」

「まあ、そうだな。おそらくランクは中でも超上級。忌み嫌われる最悪の存在が人間の認識」

「そんなにヤバいの？」

「いや、そうでもないぞ。言っただろ。魔物だって平和主義のヤツがいる。あの状況から考えるとただ自分の身を守っていただけだろうから。たぶん大丈夫だろ」

「そうか。で、リカ種族は？」

「ああ、あいつはおそらく」

s i d e r i c a

「ドコだろうね？」

何だろう。

何でわたしはこの人たちについていこうとするんだろう？

「ねえ、どっちだと思っ？」

スズネが聞いてくる。

わたしは首を横に振る。

「うん。じゃ、こっちにしよう……」

「…………スズネは怖くないんですか？」

「何が？」

「わたしと一緒にだと危険です。さっきの人にまた襲われるかも知れません。最悪は命の危険を持っています」

それにわたしは……。

「なんだ、そんなこと。それなら大丈夫」

「そ、そんなこと？」

なんなの、この人は？

自分が死ぬかも知れないのに…。

「もし、襲われても間君と三谷君が助けてくれるよっ」

「ミタニ君とハザマ君？」

「あゝ。あの二人のこと。ソラの方が三谷君でリュウの方が間君」

「そうなんですか」

「でも、わかりにくい？じゃ、わたしも名前で呼んじゃおっかな
？」

すごく楽しそう。

そして、何でこんなにあの二人を信用できるんだろう？

「何でそんなに信頼できるんですか？」

「？……わたしたちが友達だから」

「そうですか」

わたしにもそんな人がいた。

でも、知られてしまった。わたしの正体を。
怖い。知られるのが。

「リカちゃんもそうだからね！あの二人もそう思ってるよ」

でも、この人なら大丈夫？

いや、そんなことは何回も感じた。
ことごとく裏切られた。

『この化け物が！！』

その言葉が脳内でリフレインする。
でも、この少女の言葉を信じたい。

「……はい」

これで最後だ。

ヒトを信じるのは。

「それに、もしわたしたちから離れようとしても魔王の孫とその
親友のあの二人ならすぐに見つけちゃうんだから」

……この人の言うことがたまにわからない。

s i d e 空志

「買い食いしよ〜」

「お前は大食いだからそんな食うな。うちのメシを3杯もおかわりして」

「一応、お小遣いをもらってるけど大切に使う」

「にゃ〜」

「いや、レオが一番食ってるから。主にボクが貰った小遣いで」

今、ボク達は表通りにいる。

あれから大変だった。

何回かわけのわからない生物に襲われたり、大量のGと遭遇したり、まさに地獄だった。

・・・Gはあれですよ。キッチンとかにいる。ボクが嫌いな生物。必殺技は空を飛ぶ。

ま、そんなことは忘れてこれからは楽しみますか。

「リュウ君、あれ何？」

「あ、あれな。つてか呼び方・・・」

「あ、リカちゃんがわかりずらそうだったし、それにわたしたち

これから長い付き合いになるでしょ？だからこれを期に下のニック
ネームで」

「なるほど。じゃ、ソラもか？」

「ボクも？」

「モチ。」

「じゃ、こっちも下で呼んだほうがいい？」

「いいね〜。じゃ、わたしのことはスズとお呼び！〜」

「……………元気ですね。スズネ」

「あ〜。スズって呼んでよ〜」

「オレは坂崎と呼ぶがな」

「え〜」

不満そうだ。

「じゃ、ボクがそう呼ぶよ。スズ」

一人くらい味方がいないとかわいそうだ。

「ありがとう！〜！ソラ君。心の友よー！〜！」

「ドコのジャ アンだよ！〜？」

「なんかいっぱい買い食いしたな」

「そうだな」

女子はアクセサリーを見に行った。

男子は興味がなかったので外で待機。

それにしてもいっぱい遊んで、いっぱい食べた。

心なしかリカも楽しそうにふつと微笑むことが何回もあった。
でも、ボクは思う。

「これでよかったのかなあ？」

「別にいいんじゃない？これをどう捕らえるかはリカしだいだ」

ま、そうか。

「ボク達が魔窟に誘って、来てくれたらいいね」

「そうだな」

「ソラ君、リュウ君。リカちゃん知らない？」

坂崎さん・・・じゃなかった、スズがアクセサリーショップから
出てきてボク達にたずねる。

「いや、知らん。ソラは？」

「同じく」

「トイレかな？」

なんだかいやな予感がする。

「どうしたんだ？」

顔に出てたのか？

リュウがボクにたずねてくる。

「……………いやな予感がする」

「いやな予感？」

「探したほうがいいかも知れないな。そういえば坂崎。お前にリカのことを話す。その上でお前も探すかどうか決めてくれ」

リュウはスズにあのことを話した。

s i d e リカ

わたしはすごく幸せだった。

こんなにもよくしてくれて、こんなにも親しくしてくれて。

「見つけたわ。あの子達に正体をバラされたくなければ近くの工事
中のビルに来なさい」

だから、わたしはみんなの前から姿を消した。
もう、わたしは失いたくない。
その一心でビルに向かった。

「待ってたわ」

「私もです」

そこにはわたしを襲った二人のニンゲン。

「じゃ、覚悟はできたのね」

わたしはうなずく。

「では、私を果たした後にこちらの方に回します」

「ま、わたし達は偶然利害が一致したに過ぎないしね」

「……わ……ない」

それは口をついて急に出てきた。

「わたしは死にたくない。」

そして、許されるのならば……。

「わたし、アタシはソラヤスズネやリュウと一緒にいたい!!」

だから、戦う。

少しでも楽しい時間を過ごすために。

それが、一時的な楽園で、偽りの関係だとしても。向こうもこちらの戦意を感じ取ったようだ。

「できれば穩便に済ませたかったんですけどね」

「そう、でも無理ね。 アース・バインド 大地の妨害」

地面が震える。すると足が地面に飲まれた。

「しまった!？」

すでに詠唱を済ませておいたのだろう。

即座に魔法が発動し、アタシの動きを封じる。

「適度をお願いしますよ」

「もちろん。」

我望むは凍てつく氷の牙。

彼の者を穿て。

アイシクル・フアング
氷結の凍牙

上級魔法。

それをこんなスピードで!?

何とかして逃げないと。

でも、どこかでこのまま死んでしまえばいいのかもしれないという自分もいる。

視界いっぱい氷でできた牙が嵐のように迫ってくる。

もう、終わりだ……。

「リフレクション
反射！」

「からの カマイタチ
鎌鼬！」

「そして ダーク・エッジ
闇の刃！！！」

ありえないことが起きた。

アタシの前に人が飛び出てきて上級魔法を跳ね返した。

しかし、相手はすぐに魔法を解除する。

しかし、大きな風の刃と無数の闇の刃が追撃をする。

轟音を立てて、わたしを襲ってきた二人のいたところを粉塵が舞う。

「いやあゝ。やっぱりヒーローは遅れてくるもんだよね」

「いや、オレ達はヒーローじゃねえな。今からすることを考える
と」

「別にいいじゃん。友達を助けただけだもんね」

「ソラ、リュウ、スズネ!？」

あの三人が奇跡のように現れた。

11話・DARKNESS OF MIND（後書き）

空 「なんか、今回はボク達かつこよくない!？」
鈴 「サイコーだね!！」
隆 「だが、たどり着いた方法がアレだ。」
作 「それは次回、ちゃんとはじめのほうで回想をします。」
鈴 「そういえば、リカちゃんのキャラが少し違ったよね？」
隆 「そういやそうだな。」
空 「作者のミスでしょ。」
作 「ふふふ、ところが違うのだ!!!！」
鈴 「そうなの!？」
作 「いや、ただ単にリカの性格をボチボチ崩壊させてただけだから。」
隆 「ひでえ。」
空 「外道。」
作 「文句は僕の近くににいる女子に言いなさい。」
鈴 「また友達をモデルにしたんだね。」
作 「今回は性格だけだ。主にコメディに持つてくために。」
空 「こんな外道の話はほつといて次回予告しよう。」
隆 「そうだな。」
鈴 「じゃ、次回!」
空 「バトル開始!!ボク達はリカを守るのか!？」
隆 「いや、4対2なら簡単に勝てる。」
作 「それをさせないのが……オレ!!!!!!!」
隆 「消えるよ。」
鈴 「そして明らかになるリカちゃんの秘密!！」
作 「実はごく普通の人間でした。」
隆 「……闇の刃^{ダーク・エッジ}」
作 「ぎゃ〜!!!」

12話・IDENTITY

side 空志

「そんなの関係ないよ」

スズが堂々という。

ま、ボクとリュウは予想してたけどね。
そんなことぐらいで見捨てるようなやつはここにはいない。
じゃ、今からすることは一つ。

「なら、決まり。探しに行こうか」

「だが、どうやって探す？」

「手掛かりが全くないんだよ」

甘いよ。

君たちはボクのスキルを忘れている。

「簡単だよ。あっち。レオもそう思うよな？」

「にゃ？」

ボクはリカがいるであろう方向を指す。

「なぜ、そっち？」

「嫌な予感があの方向からするから」

おそらくは、リカはあの二人のどちらかに連れて行かれたか何かをしたんだと思う。

それなら、ボクは首を突っ込むとやばいような気がする悪い予感
はほぼ確実に当たる最強の危機回避スキルを持つ人間だ。

で、今回リカはその中心にいる。

逆を言えば、あえて厄介事の中心に行けばリカに会える可能性が
かなり高い。

「なるほど、そういうことな」

「やっぱり、ソラ君は超能力者なんじゃないの？」

「失敬な。ごく普通の高校生だよ」

「「ごく普通の高校生はそんなことできない」」

ひどい言われようだよ！！

「とにかく、目星は付いた。さっさとその方向に行って、こいつ
の危機感地レーダーでリカを探すぞ」

ボク等は町の中を走りだした。

・・・レオ忘れた。

「で、このビルが怪しいと」

「結構近くだったね」

「ボク等が気付いた時の対策じゃない？」

「裏をかいたつもりか」にゃ〜。「レオ、オレはそんなキャラじゃない」

レオはともかく。

ボクのこのスキルの前には無駄だけどね。

ボク達は工事中のビルの中にいる。

リュウ、ボク&レオ、スズの順だ。

「しかし、本当にいるのか？」

ボク等はビルを探索しようと奥に入る。

・・・！！

「ビンゴー」

「どじゆじゆと〜？」

「・・・マジかよ」

「ここから少し行ったあの部屋あたりに人の気配が複数。」

「数は？」

「そこまではまだできない」

「・・・できるようにする予定があるんだね」

スズの言葉をスルー。
そしてボク達は部屋の中をこっそりとみる。

「わたしは死にたくない」

リカの声だ。

部屋にはリカ、眼鏡、優男。
最悪だな。

「逃げれない」

「いや、戦うつもりで来たんじゃないの!？」

「ワタシ、ヘーワシユギ」

「でも、無理だよな」

「わたし、アタシはソラやスズネやリュウと一緒にいたい!!」

リカの声が大きく響く。

「」「」「」「」

ボク等は押し黙る。

「ここはかつこよく助けないとね。おそらくは戦闘になるし。あんなの聞いたらもうやるしかないね」

「そうだな」

「リカちゃん、ホントはあんな風にしゃべるんだね」

よし、ボク等の心は決まった。

「できれば穏便に済ませたかったんですけどね」

「そう、でも無理ね。」

アース・バインド
大地の妨害」

地面が震える。するとリカの足が地面に飲まれた。

「しまった!?!」

すでに詠唱を済ませておいたのだろう。

即座に魔法が発動し、リカの動きを封じる。

「適度をお願いしますよ」

「もちろん。」

我望むは凍てつく氷の牙。

彼の者を穿て。

アイシクル・フレンジ
氷結の凍牙」

「上級魔法だ。それも展開が速すぎる」

「ちょうどいいじゃん。パパっつとやるっつ」

「わたしガンバルね〜」

そう言っつてボク達は一緒に飛び出す。

「リフレクション反射！」

「からのカマイタチ鎌鼬！」

「そしてダーク・エッジ闇の刃　！！！」

スズが上級魔法を跳ね返し、そこへボク等が示し合わせたかのよう
うに追撃。

「いやあゝ。やっぱりヒーローは遅れてくるもんだよね」

「いや、オレ達はヒーローじゃねえな。今からすることを考える
と」

「別にいいじゃん。友達を助けただけだもんね」

「ソラ、リュウ、スズネ!？」

驚くりカ。

「探したぞ。ま、こいつのふざけたスキルで見つけたけどな」

「ここはホメてよ」

「あなたたち!!!どうしてここが!？」

「すごいな。まだ生きてる」

「間違えて相殺しちゃった？」

「さっきの魔法は何ですか!？」

「優男の言葉からちゃんと反射してるね」

「とりあえず、質問に答えると、こいつのスキルの応用。そしてレア属性。以上」

「いや、絶対にわかんないよね」

「とにかく、この仕返しは必要ね」

眼鏡さんコワッ。

「そうですね。私もそう思います」

優男。目が笑ってないっす。

「なんで？」

リカがたずねてくる。

「オレ達は仲間だからな」

「それより、来る!！」

「坂崎とリカは下がれ!! ソラ!！」

「あいよ!!! レオはスズのところに!！」

「こや!！」

こいつはホントに人の言葉がよくわかる。
ボクとリュウは互いとは反対の方向に逃げる。

「逃がしません」

こっちに来たのは優男。

「ライジン
雷迅　！！」

ボクは即座に魔法陣を展開し、魔法を起動。

「無駄です」

この人速い！！

徒手空拳みたいだ。

ボクに拳を放つ。

腕を狙い、首を突こうとし、顔を殴ろうとする。

ボクはそれをすべてよける。

優子さんのおかげでこのぐらいなら確実によける。

「ちょこまかと！！」

「かすつてもないよ。てか、もっと速くしないとボクには当たらないよ」

優子さんの戦闘訓練イジメをなめるな。

あれは絶対に人がかわせるものじゃない。

・・・そういえば、ボクはかろうじて避けれてるから人じゃないのか！？

シヨックだ。

恐ろしい事実気づいてしまった・・・。

「貴方は何で百面相をしてるんですか！？というか貴方は人間ですか！？」

顔に出たようだ。

「シメン紫電　！！」

そしてムカつたので電撃をボクの周囲に流す。

「くっ！！」

とつさに地面を蹴って大きく回避する優男。

「その魔法といい。貴方もさっきは風を使ったのに何で雷まで使ってるんですか？」

「さあ、ボクもよくわかんないんだよね。」

「その貴方！！下がって！！」

声のしたほうを見る。

たしかそっちはリュウが戦ってる方向。

「やばい！！範囲攻撃に切り替えやがった！！坂崎たちのところに戻れ！！」

「よくわかんないけど分かった」

「逃が」紫電シマン！「最後まで」「同じことばっか言っつな！」「」

ボクは急いでスズ達のいる所へ。
リュウと同時に到着。

「坂崎！！相殺の魔法をオレ達を囲む壁みたいにできるか！？」

「できるよ」

「やってくれ！！」

「う、うん？」

それは万物の理」

「フローズン・カスケード
凍水の瀑布　！！」

激流が発生。

「つて、これはやばいよ！」

「チイツ！！」

闇よすべてを喰らい尽くせ！
ダーク・イロージョン
闇の侵食　！！」

リュウの十八番オハコの対魔法用の魔法。
激流をどうにか押しとどめる。

「ダメだ！！持たない！！」

「魔を寄せ付けられない壁になれ！！」
アンチ・ウォール
相殺壁　！！！！」

スズが地面に両手をつける。

すると、ボク達を囲むように光が円を描き、壁ができる。
それと同時にリュウの魔法が壊れた。

「危機一髪だな。念のために、
闇よ壁となれ」

言葉と同時にスズの壁の内側にもう一つの黒い壁ができる。

「何よコレ！？」

「魔法が効きませんね」

向こうから声が聞こえる。

「ごまあ」

リュウがある。

「この野郎！！」

女の子がそんなこと言うなよ。

「貴方たちは自分が何をしてるかわかってるんですか？」

「仲間救出大作戦だけど？」

「ふん！その子の秘密をまだよくわかってないようね」

「!?!」

リカがビクリと体を震わせる。

目を見開き、何かにおびえているようだ。

「・・・ダメ」

「大丈夫？リカ？」

ボクは心配になってたずねる。

「言わないで！」

「その子はあなた達を騙してる。とんでもない秘密を!!」

なんだと!?!

「リカが吸血鬼ヴァンパイアでしかも始祖の血族かもしれないってコト以外で
なんかすごい秘密があるの!?!」

ボクがそういつた瞬間に時間が止まった。

・・・あれ?

「お前、アホか？」

「ソラ君って天然なんだね」

「に〜」

スズに言われるともものすごくショックだ。
天然の筆頭なのに……。

「秘密ってそのこと!?!」

「むしろ、それ以外に何がある?」

「「何で知ってるの!?!」」

「ていうか、その子って始祖吸血鬼の血族なの!?!」

「貴方は本当に人間ですか!?!」

「敵からもツツコミが入るってなかなかない経験だね〜」

そんな経験はいらん!

「どうしてそれを……!?!」

「あ〜……。話すと長くなるんだよね」

「ま、オレもこいつらも普通の人間じゃないってコトだな」

「リュウ君に関してはドラゴンだしね〜」

「「「ドラゴン……?!?!」」」

「バラすなよ。別にいいけど」

「ボク等は人間だけどね」

あまりのことにビツクリするリカ。

ま、普通はそうだよね。

「ま、そういうわけでこれからもよろしく」

「オレ等の住んでる都市は魔物の都市だからそこへ行くこと」

「また、買い物に行こうよ」

「………う」

「……う？」

「うわ〜ん!!」

突然泣き出す。

「ど、どうしたの!?!」

「お、落ち着け。お、おい!」いついづときはどいつなんだ!?!」

「泣かないで」

一人だけ冷静なスズ。

男子は肝が小さい。

「あ、ありがとう。ず、ずびばせん」

「あやまらなくていいよ。」

「でも、ア、わたし、み、みんなのこ、とが信、用できなくて・・・。初めて、ホントの友達ができた」

なんだ。そんなことが。

「しょうがないよ。人それぞれ事情があるんだし」

ボクはリカの頭をなでながらいう。
レオ、にらむな。嫉妬か？

「・・・人じゃない」

「細かいことは気にすんな。こいつらはそういうやつだ」

「ア、わた「普通にしゃべりなよ」」「なんか無理してるよね」
「オレ等は仲間だろ」・・・うん！

「さて、じゃ、リカちゃんを魔窟ネストに連れてくためにいつちよやますか〜！」

「そうだな」

「そういえば、気になることがあるんだけどいい？」

ボクはあることを思いついた。

13話・MISSION

side 空志

「いいんじゃないか？」

「わたしもいいよ」

「アタシもやる！」

よし、意見もまとまった。

「ミッション開始だ！！」

スズが相殺の魔法を解除する。

「キラガクレ
霧隠！」

突如、このビルの部屋を霧が包みだす。

side 眼鏡
キラガクレ
「霧隠！」

突然、霧が発生し、部屋を包む。

これじゃ前が見えない。

「ホントに相手の属性は何なのでしょっね。ではどっしりますっ。」
隣りから協力者の優男が聞いてくる。

「どうせ、これで逃げようという魂胆なんでしょう。でも、こんなのはこうすればいい」

精神を集中する。

私は『氷』と『大地』の多重属性だ。

『氷』を応用で水も操れる。

霧とはいえ、所詮は水。操れないわけがない。

「何やってんだ？」

「!？」

声が響く。

あの『闇』を使うほうだろう。

「ひとつ言っとくとこの霧はお前じゃ操れないぞ」

「な!？」

嘘だ!

そんなのはあり得ない。

「やってみろよ。無駄だろうけどな」

「……あなた達は逃げなくていいの？」

わたしは挑発を試みる。

「お前は勘違いをしている」

「勘違い？」

「それは、私たちがものすごく怒ってることだよ！」

「だから、あんたらをここでボコボコにしとく。ボク等を追ってこないようにするためにも」

「アタシもみんなのために頑張る」

「……私は4対2でも構いませんよ」

「霧で視界が悪いのは向こうも同じ。さっきみたいに範囲攻撃をするわ」

「させるかよ！」

突然、無数の黒い刃がわたし目がけて殺到してくる。

「ちっ」

地面を操作して簡易的な壁を作る。

「あんたの相手はボクだ！」

「またですか！」

二つに分断されたらしい。

おそらく、さっきと同じだろう。

「
氷よ凍てつく風となれ！
凍える風フリザード！」

刃が飛んできた方向に魔法を放つ。

「どこを見てる。こっちだ！」

全く別の方向から正確にこちらを狙って無数の黒い刃が襲いかかる。

「どういふこと!?!?」

わたしはまた壁を展開。

でも、なぜ相手は正確なこちらの位置がわかる？

「準備できたよ」

「分かった。霧を晴らしてくれ」

わたし達の周囲の霧だけが晴れる。

わたしは相手の二人と対峙する。

こうなったらやるしかない。

わたしはこっそりとポケットに手を入れ、目当ての物を取り出す。

「これで終わりだ。
闇の刃ダーク・エッジ」

「
反射結果リフレクション・エリプス！」

無数の刃が放たれたのちにわたしをこの部屋いっぱい大きさの

ドーム状の結界が包む。

今、結界の中にはわたしと相手の魔法がいる状況でも、刃は全く関係のない方向へ飛んでいく。

しかし、結界に当たると、魔法が反射した。

やはり、そういうことか・・・。

原理は分からないけどあの娘には魔法を反射させたり、相殺することができる。

なら、できるか分からないけど本気でやるしかない。

「 起動。」

わたしのとっておきを見せてあげる！！

side 空志

「また、ちょこまかと！」

「これがボクのスキルなんだよ！！」

ボクは優男と交戦。

接近戦をしているため、霧があっても相手の位置がわかる。ちなみにこっちのほうにレオもいる。

「てか、レオ！頭から降りろ！！」

「にゃ！」

「なんで！？」

どうも、レオはボクから離れるのがイヤらしい。

「ずいぶん余裕ですね!!」

顔に中国拳法のように掌で攻撃。

ボクは顔をのけぞらし蹴りを入れる。

相手はボクの足をつかむ。

「紫電^{シデン}！」

もともと、紫電^{シデン} は地面に指向性を持たせた高圧電流を流す魔

法。だけど、ボクはそれを応用し、ボク自身の体の表面に流せる。

もちろん、こっちはノーダメ。

優子さんの攻撃から身を守りたい一心で身に付けた。

「くっ!・・・わたしはどう攻撃すればいいんですか?」

「知らないよ!!」

すると、唐突に霧が晴れた。

さっきまでここがどこか分からなかったけど、どうもさっきいた部屋からいつの間にか出てしまっていたらしい。

そして、霧が晴れたということは…。

「向こうは準備ができたよ!!」

突然、現れたりカが言う。

「よし、こっちも一気にたたみかけよう。」

「?・・・これは貴方が解除したのですか?」

お、勘がいいね。

ボクはニヤリと笑って言う。

「違うよ」

「あの霧はアタシよ」

「・・・貴方が魔法をかけたように聞こえましたが？」

「そう、思わせたかったんだ。あんたたちを油断させ、混乱させるために」

ボクはこう考えた。

魔法は、そのほとんどが射出形だ。

つまり、銃を撃つようなもの。

なら、霧があれば相手の魔法は当たらない。

でも、それはこっちにも言えることだ。

だから、ボクはリカにたずねた。

「よく、ヴァンパイア吸血鬼って変身できるとかあるよね。蝙蝠とか霧とか・

」

「ちなみに、アタシは蝙蝠、狼、霧に変身できるわ」

そして、ボクが一番聞きたかったことは・・・。

「霧霧になつた状態状態でボク等と意志の疎通ができるかどうか。それが重要だった。」

「……なるほど、それで先ほどまではあちらの方を潰してきたんですね」

「こっちは位置の把握ができるのに向こうは全くできないからね」

「……では、こちらをさっさと終わらせて向こうの応援に行きましょう」

そういうと、腰のポーチから小瓶を取り出す。

すると、それを僕たちの方へ投げる。

ものすくく、やな予感。

「リカ、ボクの後ろに！！」

「わ、分かった？」

瓶がボクと優男の真ん中で割れる。

すると、瓶の中身の液体が気化する。

「^{トッポウ}突風　！」

とっさに風を操作し、相手の方へ台風並みの風を送る。

「ホントに何の魔法使いですか！？」

「アタシも知りたい」

「いや、あれって毒ガスだよね！？なんであんなに効かないの！？」

「正解です。先ほどの神経毒です。あれを受けると体が動かなくなりです」

「ワッ！！」

「そして、私、実は樹族じゅぞくの李リー・樹シュウです。わたしに毒の類は効きません」

「・・・リカ」

「あ、どうも、三谷空志。通称ソラです。こっちはレオ。で、ジユゾク？」

自己紹介をする優男、もとい、シュウ。中国人っぽい名前だ。

「ま、マイナーな種族です。人と木の精霊との間に生まれた者のことを言います。そして、私たちは薬剤の扱いに秀でて、各地で薬剤師として働いています」

「・・・」

薬剤師コエー。

そしてツエー。

「あ、私は旅をしながらですので、ここまで戦える薬剤師はそうそういません」

「「よかった」」

もう、薬屋にびくびくしていかなきゃいけないのかと思ったじゃ

ないか。

「では、改めまして」

いつの間にか取り出した薬を飲む。
すると、こっちへ走り出す。

しかし、先ほどとは比べモノにはならないほど速い。

「ドーピング!?」

「肉体強化の薬です」

と、説明をされつつ、ボクに拳のラッシュを繰り出そうとする。
さすがによけない!!

「アタシを忘れてるよ!!」

リカがボクの前に飛び出す。

「無駄です!」

シユウは構わず、拳を突き出す!

「吸血鬼の力、思い知りなさい!」

リカは、強化された拳を全てガードした。

「なっ!?!どこにそんな力を残してたんですか!?!」

「正確には血を飲んだのよ」

「おかげで貧血ぎみです」

あれは、いま思いだしても大変だったと思う。

変身するのに力が足りないとかで吸血をすることに。

でも、人じゃないとだめ。

そこで、ボクの血をリカに吸血させた。

吸血してもリカが望まなければ吸血鬼にはならないらしい。

しかし、かなりの期間血を吸ってなかったようで、危うくボクがミイラになるとこだった。

「も〜。ごめんって言ってるでしょ。後でお礼してあげるから。

でも、たまには血もちょうだい？」

「・・・たまにだよ」

ノーと言えないボクだ。

吸血して元気が出るとキャラが変わった。

結構な元気っ娘だった。

「というわけで、リカ、後はよろしく!!!」

ボクは後ろに下がる。

鞆に手を突っ込み、チヨークと魔道書『サルでもわかる大魔道書』を取り出す。

そして、ボクはまだやったことのない上級魔法の陣を描き始めた。

「互角ですか」

「魔法が使える分、アタシが有利だよ」

「失敬な。私も使えますよ。ただ、魔術薬の作成にしか使えませ
んが。」

普通に会話してる？

リカ達の方を向いてみる。

……あれ？

なんか、目がおかしい。

拳が見えないんですけど！？

「どこのド ゴンボールだよ！？」

「アタシはベータが好き。」

「私はピツ　口でしょうか？」

「ツツコミが通じたよ！？」

はっ！そんなことより魔法陣。

「上級を出そうとしてますね。そうはさせません！！」

薬を取り出すシユウ。

そして、また飲む。

まさか、重ねがけができるのか！？

「こつちも本気で行くよ！！ヴァンパイア・スヘル吸血呪！！」

何その吸血専用の魔法みたいなのがあんの！？

「デスサイズ 血濡れの大鎌！」

どこからともなくリカの伸長を超える、まさにデスサイズ。とし
か言いようのない大鎌が出現する。
軽く数回ほど、試しぶりをしている。

「武器の召喚魔法ですか？」

「違うよ。これは魔法！！」

扱いにくそうな鎌をリカは逆袈裟に振る。
すると、衝撃波が発生。
しかも、複数。

可視できるレベルの衝撃波の刃が雪崩のようにシュウに殺到。

「これをどうよければいいんでしょうねっ！」

「よけてんじゃん！」

「結構、自身があつたのに……。」

もはや、シュウの動きはボクの目では追えない。
リアルにドゴンボールになってしまった。
リカは鎌で応戦する。

かなりヤバイ。

あと少しでこっちも終わる。

頑張ってくれ！！

心の中でそう祈りつつ魔法陣の作成を再開。

「なかなかやりますね。私があんたの薬を二本飲んで立っていられる

のは貴方が初めてです」

「ご、ご丁寧に、アリガトツ!!」

リカが力任せにシユウを飛ばし、鎌も投げる。

「吸血呪 ブラッディ・ダンス 血の舞踏！」

リカが大鎌を思い切りシユウに向けて投げつける。すると、くるくる回る鎌がシユウをホーミングした。そして、リカの手の動きに合わせて縦横無尽に動く。シユウはギリギリでどうにかよけきる。

「フィナーレ 終演！」

突然。鎌が黒い光を出し。音のない爆発を起こす。爆発がおさまると黒い光の触れた壁や床の部分がごっそりと消えていた。

「……………えげつない。」

「……………上!!」

つて、あれもよけたのかよ!?

「武器のない今。私が有利に立ってます。」

「くつ。」

徐々に押されるリカ。

だが、こつちの準備はできた！！

「リカ！」

「えい！！」

「！？」

リカは全力でシュウを吹き飛ばす。

「魔法陣展開！」

ボクの足元に描かれた魔法陣が光りだす。

「しまった！？」

「アマイカズチ
雨雷」

巨大な魔法陣がボク等の頭上に展開。

ランク・上・下。範囲系の魔法。

相手が速いなら、ボクはそれより速い魔法、または絶対によくない魔法をすればいい。

この魔法は。この二つを同時に行う上級魔法。

~~~~~！！！！！！

轟音と光が炸裂する。

ものすごい粉じんが舞う。

こんな狭い室内でやったら、さすがによけないでしょ。

「……………やったのかな？」

「耳が変了。光のことは聞いてたけど音も言っよ。」  
忘れてた。

「に」。」「

そいういや、レオはずっとボクの頭の上に乗ってたんだね。どっちかというと後頭部に抱きついてる感じ？

「確認は？」

「あ、そうだった。突風」  
トッブウ

風を発生させて煙を飛ばす。  
すると、ピクピクしてるシュウの姿。

「し、死ぬ……………」

「ちゃんと加減したと思うから大丈夫」

「あらら、あなた負けちゃったの？」

「「！？」」

「この声は！？」

「なかなか強いよね」

眼鏡の少女がボロボロのリユウとスズを引きずってやってきた。

## 14話・NEW MAGIC

side空志

「あり得ない」

二人とも、魔法使いにとっては切り札ジョーカーとなりうる最強の力を持つ。だから、ボクは二人をこの眼鏡にあてた。

「さすがにちよくとピンチだったわね。この二人、魔法使いにとってはチートよ。しかも、なぜか魔法が効きにくいし。あ、ついでに返すわ。気絶してるだけだから」

そう言つて、二人をこっちに投げる。  
どこにそんな力が!?

「おい、二人とも!?!」

「大丈夫!?!」

「み〜」

ボクとリカは二人をたたき起そうとする。  
しょうがない。リュウには後で謝ろう。

「紫電シデン (弱)」

「ぐぼふあ!?!?!」

「よし、起きた」



「……………あなた意外と鬼畜ね」

「お前、オレに追い打ちか!？」

「いや、今からあの眼鏡を叩きのめすから。相手の情報を」

「面白いわね。あなたにできるの？」

「しゃべらないで、眼鏡。スズネが言ってた。この二人なら、魔王の孫とその親友なら不可能を絶対に可能にするって」

「「親友じゃない」」

「あ、そう。でも、情報を伝える隙をあげると思ってるの？それにわたしは眼鏡じゃない。平地冬香ひらふゆいのかって名前があんの!！」

言葉と同時に膨大な数の魔法陣が展開。

「ボクと同じ魔法!？」

「あんたと同じ古代魔法じゃないわ」

「古代魔法？」

「知らないで使ってたの!？」

つい最近まで魔法とは縁のない生活だったもんで。しかも、実戦はさっきのが初めてです。

「まあ、いいわ」

魔法陣から不穏な雰囲気。

「リカ！リユウ達を安全なところに！！」

「了解！！」

「オレはいいから坂崎を！」

「ダメだ！」

「オレの情報と魔法のバックアップがいる」

「ダメ。連れていくわっ！！」

リカは無言を言わず二人を肩に担いでビルから出ていく。

「あらら、ターゲットが行っちゃった。ま、そのうち、戻ってくるでしょうけど」

「その前にあんたを片づける」

「ふしゃー！！！！」

レオは、またボクの頭の上に。  
なんか違和感がなくなってきた。  
こっちはまだ上級魔法の魔法陣が残っている。  
それを使えばいい。

「魔法陣展開！  
アマイカスチ 雨雷！」

しゅん。

あれ？

「出ない？」

「……………何をしてるの？発射<sup>ショット</sup>」

全部の魔法陣が光り輝く。  
すると、氷の槍が出現。

ボクに狙いを定めて、次々と発射される。

「ぎゃあああああ！！！！」

死ぬ気でかわす！！

てか、マジでヤバイ！！

相手に一撃を入れるか！？

「<sup>ライジン</sup>雷迅！！」

しゅん。

なんで！？

「……………あなた、魔力が切れたの？」

「そういうことかあああああ！！！！」

ボクに勝ち目はありません。

sideリカ

「おいっ！リカ！オレを降ろせ！！」

「ダメ！！」

アタシは二人を連れてビルから離れている。  
吸血鬼の力ならこれぐらいは簡単だ。  
アタシは適当な公園に二人を降ろす。

「ん〜……………あ、リュウ君？リカちゃん？おはよ〜」

「寝ぼけるな。」

「え？そういえば体のあちこちが痛い。」

「さすがアリアの服。じゃなくて、オレ達はあの眼鏡。名前は冬香に負けて、今、ソラが相手をしている」

「！？……………もどらなきゃ！！……………あれ？」

スズネが立とうとするが体に力が入らないらしい。

「二人は限界なの。だからここで待つてて」

「オレは行く」

リュウが立ちあがる。

でも、無理してるのがまるわかり。

「ここで、リュウがスズネを守らなきゃ。スズネは動けないんだから」

「……」

「……ごめんね。」

「お前は悪くない。オレの油断が招いたことだ」

「じゃ、アタシはもう行くね」

「待て、ソラに伝える。あれは数法術式。お前からあいつに丁寧に教えてやれ」

「分かった」

アタシは地面をけってビルへと戻る。

side 鈴音

「……行っちゃったね」

「ああ」

わたし達はどこからともなくつぶやく。

「リカちゃんには悪いけど、わたしが動けるようになったら。すぐにビルに行こうよ」

「いいのか？」

わたしの心はもう決まってるよ。

「みんなと一緒に帰ろう」

「……そうだな。じゃ、治癒の魔法を施してくれるやつを探して、できるだけ早く行くぞ！」

わたしは、リュウ君に肩を貸してもらいながら先を急いだ。

side 空志

「かはっ!!」

さっきの戦闘で疲労がたまったのか体がうまく動かない。レオを腕の中にかばいつつ背中を攻撃を受ける。また、衝撃がボクを貫く。

「何よその服!?!」

「はあはあ、……企業秘密だよ」

「に~~~~~!!」

レオがボクの腕から出ようともがく。おそらく、戦おうとしてるんだと思う。

「レオ、ダメだ。お前に傷を負わせたくない」

なおもレオは暴れる。

「なら、上級魔法で終わらせてあげる」

言葉と同時に巨大な魔法陣が展開。

巨大な力を感じる。

「ソラ!！」

!?

なんでこんな時に!

リカがビルに戻ってきた。

「来るな!！」

だが、リカはその言葉を無視してこっちにくる。

「ぐうっ!！」

ボクは力を振り絞ってリカの方へ行くとリカとレオをかばうように抱く。

「ソラ!？」

「これしか思いつかない!!!ボクにはもう魔力がないんだ」

うまくいけば、この服でガードしきれると思う。

だが、ボクの意識はもうもたないだろう。

「ショット発射」

ついに巨大な魔法陣が光りだす。

「ソラ！！離れて！！逃げて！！」

「できないよ」

ボクは全力で優しく、全力でいいヒト。をモッソーにしてるからね。

友達を見捨てるとかできない。

周りを見ると、魔力らしきものが氷の魔法陣に収束して、巨大な槍を形成してる。

そして、それが放たれる。

「があああああああ！！！！！！！！」

突然だった。

ボクの腕の中から咆哮がする。

レオが光りだす。

ボクとリカはその光に包まれる。

ちゅんっ！！

どごおおおおおおん！！！！！！！！

何かが発射される音と、爆音。

てか、ボクはなんか動物に乗ってるような気がする。



「……………ライオン!？」

ライオンだった。

百獣の王だった。

ボクはライオンにまたがっていた。

「何これ!？」

ボクの後ろに乗るリカも驚く。

だが、このライオンは普通じゃなかった。

なんと、翼が生えていた。

「何が起きたし!?!?てかレオはどこ!?!?レオ!?!?!」

「ガウ」

……………今、ライオンさんが返事をしたような気が?

「レオ?」

「ガウ」

「レオオオオオオオオオ!?!」

「ええええええええええ!?!」

ライオン!!レオ。

あり得ねえ!

何その方程式!?!



「どごおおおおおん！」

先ほどより小規模な爆発。

レオが口から放った破壊光線的なもので魔法を薙ぎ払う。

「……………まさか、レオがさっきの魔法も消したの？」

「ガウ」

どつやらそつらしい。

てか、強すぎる。上級魔法を一撃で消し去るとか。

「なら、これならどつー！」

膨大な数の魔法陣が展開する。

「レオ！！上にさっきの！天井を消すんだ！！」

上にレオが破壊光線。さっきとは違い、極太のやつ。

拡散破壊光線っていうのかな？

それで天井とその周囲の壁を消し去る。

浮遊感。

……………青空が広がっている。

レオはボクとリカを乗せて天井を飛ぶ。

マジで飛べるんだ。

「のわあー！！」

「きゃあー！！」

「ガウ！」

「分かった。リカ、しっかりつかまって。」

リカはボクにしがみつく。

ここで、背中に（以下略）的なことを考える余裕は今のボクにはない。

「逃がさない！」

魔法陣が一斉にこつちを向く。

そして、魔力が収束していく。たぶん弾丸だ。

……そういえば、ボクはなんで魔力の流れがわかったんだろっ？

そして、魔法の形状とそのタイミングが。

「レオ、右だ！！！」

「発射シンヨット」

氷の弾丸が放たれる。

しかし、そこにボク達はすでにいない。

「なんでわかったの！？」

「いや、魔力を見て？」

「そんなことができるわけないじゃない。」

「そうなの！！！」

ボクは生き物ですらないのかも知れない……。

「ソラって何者？」

「……後で説明するよ」

「く、こうなったら」  
闇の刃ダーク・エッジ「!!」「!!?」

突然無数の黒い刃が冬香を襲う。

この魔法は……。

「ソラ君、リカちゃん。大丈夫、ぶううううう!!?」

「ソラ! って、それは何だ! ?」

リュウ達が戻ってきた。

「……アノヤロウ。後でお仕置きだ。」

「後で説明する!! てか、相手のあの魔法は何!? 『ショット発射』  
だけでいろんな魔法をしてくるんだけど! ?」

「リカ! 説明は! ?」

「色々あって、それどころじゃなかった!!」

「こいつの魔法は「言わせない!」」「リュウ! スズとしゃがんで  
!!」「お、おう!!」

しゃがんだリュウ達の上を魔法が通過。

「レオ！」

ちゅん！

どごおお おおおん！

やっぱり、コレ強いっす。

「相手の魔法は数法術式！機械にいろんな魔法をプログラミングしてそれを発動させる！！簡単に言うとパソコン使って魔法を使うようなもんだ！！」

・・・パソコン？

ボクは魔道書にパソコン用語みたいなのが書いてあったのを思い出す。

魔法に現代科学とかありえないと思ってそこだけはスルーした。

あのときは、魔王さんがミスったのかと思ったけど・・・。

まさか、ボクの魔法にもアレと似たようなものがあるのか？

「できるかもしれない」

「何を？」

リカがたずねてくる。

「向こうと似たようなこと。」

「でも、魔力がないんじゃない？」

「・・・これを使えばいいんじゃない？」

ボクは近くの魔力の流れを指さす。

「??」

わかんないようだ。

ま、やってみればわかるでしょ!

ボクは意識を集中する。

ブンツ。

何も描かれていないまっさらな二重の円の魔法陣が展開。

「……え。どうして?」

できた。

「リュウ! 足止めをしてくれ!!」

「もうやってるよ!!」

ナイスだ。

ボクは作業を開始する。

要するに、アレはプログラムだ。

魔方陣に文字コードを打ち込み、魔法プログラム構成を作る。

そして、最後に起動ポートさせればいい。

魔法についていろいろと決めていく。

規模、大きさ、形状、その他もろもろ。

すると、魔法陣に文字が刻まれていく。

「何、これ?」

「……よし。できた。」

ボクは魔法陣をいったん消す。

「ちょ！どうして消すの!？」

「考えがある。レオ！降りて」

「ガウ！」

ボク等は静かに地面に降りる。

「大丈夫？」

「大丈夫。リュウ！」

「なんだ！」

「危ないからこっちに来い！」

「何する気だよ！」

そう言いつつもこっちにくる。

「……観念したかしら？」

「いや、魔法陣……」

ボクは、人差し指と中指を立て、額の前にもっていき、目をつむ



る。

「何をする気？あなたに魔力はないはずだけど？」

「「!？」」

驚くりユウとスズ。

こつちを見る。

ボクは大丈夫だ。

という意味を込めて笑う。

「多重展開!!!!」

さつき作った魔法陣がボクの前に大量に展開される。

しかし、いつもボクが使う魔方陣は白っぽい光だけ、今回は違  
った。なぜかはボクにもわからない。

それは、紅蓮の炎のようなきれいな紅<sup>アカ</sup>だった。

「な!？」

「これは、ボク、オリジナルだから名前がないんだ。でも、あえ  
て名づけるならこうしようかな？」  
焰<sup>ホムラドリ</sup>鳥「!!」

魔法陣から火があふれる。そして、魔法陣が消える。  
すると、代わりに炎で構成された火の鳥が現れる。

「行け」

「く!？」

冬香はとつさに自分の前に土の壁を形成。  
でも無駄だ。  
炎を纏った鳥たちは土の壁を回り込む。

「な！？<sup>ショット</sup>発射！！」

鳥たちに魔法が放たれる。  
しかし、鳥たちはまるで意思があるかのようによける。

「何よ！？この魔法！！」

それが冬香が意識を失う前にいった言葉だった。  
火加減はしたから大丈夫。  
疲れた……。

「……」

……この沈黙は何だろう。

「……どつたの？」

「何をしたの！？」「」

「ごめん。後にして、あ、それと、ここにたくさんの人が向かっている。たぶん警備かなんかの人。その二人もつれてさっさと魔窟に逃げよう。それと……」

「……それと？」「」

「ものすごく眠い」

バタツ。

ボクはその言葉と同時に眠ってしまった。

## 番外編・登場人物の紹介と行きますか！

作 「どうも、作者の夜猫です。いやあ、PV2000HIT。ホントにありがとうございます。実はアレから結構伸びました。」

隆 「……何を血迷って、こんなことをしてんだ？」

鈴 「アホだからじゃない？」

リ 「無計画だから!!！」

空 「甘い。無計画でアホで精神が破綻してるからだ!!！」

レ 「ガウ。」

作 「……。」

隆 「……作者が隅っこで泣いてるぞ。」

空 「ま、そんなのはほつといて「登場人物の紹介だ!!！」立ち直り早っ!!！」

レギュラーメンバーズ

### 三谷空志

みたにひろし

種族……人間

年齢……16歳

職業……学生。間学園にかよう一年生兼魔法使い。

趣味……レオを愛でる。

特技……危機察知スキル。

魔法属性……天空。火？

スタイル……魔方阵。中〜近距離。

元はごく普通の学生。平和が一番というのほほんとした性格で、クラスに一人はいるパシられとかイジられるなキャラ。そのためか異様に自分の危機や厄介ごとに関してはそれを完全回避する、もは

や超能力としか言いようのないスキルを持つ。鈴音と出会い、れつ  
つごう異世界！という感じで 魔窟<sup>ネスト</sup>へ。現在はリュウの家に泊  
まらせてもらっている。

隆介の母親である間優子さんに日々戦闘<sup>イジメ</sup>訓練をしてもらいフルボツ  
コされている。

隆 「ま、妥当だな。」

空 「いや、そうだけど！！！てか、魔法使いなのに接近戦しかし  
てねえ！！」

鈴 「よく考えると。わたしのせいで厄介ごとに巻き込まれたの？」

リ 「むしろ特技に最凶の運の持ち主。」

作 「じゃ、次いきましよう！！」

レオ

種族・・・子猫？

年齢・・・???

職業・・・空志のペット

趣味・・・悪戯。

特技・・・変身？

魔法属性・・・???

スタイル・・・???

空志が拾った子猫。空志になついていて、よく空志の後頭部にし  
がみついている。  
狙われたり突然ライオンに変身したりといろいろと謎に包まれた子  
猫。

空 「でも、ホントに食べるよね。」

レ 「に〜。」

隆 「・・・いつの間に猫に戻った？」

鈴 「ま、いいじゃん。」  
リ 「レオはレオだし。」  
作 「次、行ってみよう！」

はなせりゅうすけ  
間龍介

年齢・・・16歳？

種族・・・ドラゴン

職業・・・学生。間学園にかよう一年生兼魔法使い。

趣味・・・昼寝。

特技・・・魔法。

魔法属性・・・闇

スタイル・・・詠唱。オールラウンダー。

空志達と同じ学校に通う一年生。空志たちが教われる前は河野利行（りゅうのりゆき）と名乗り隆介（りゅうすけ）の祖父である市長（しまちょう）の命令で、空志を護衛していた。とても面倒くさがりだが根はいいやつ。たまに変に壊れる。

魔法に関してはかなりのエキスパート。しかし、全力を出すと暴走する恐れがあると思いつつも力をセーブしている。そのせいで冬香に負けた。

空 「最後ドンマイ。」

隆 「そこをえぐるか!？」

鈴 「わたしも負けた・・・。」

リ 「アタシたちって最強ね！」

空 「あ、うん？」

作 「じゃ、次。そして空志シネ。」

空 「何で!？」

なかにがさきすずね  
坂崎鈴音

種族・・・人間

年齢・・・16歳  
職業・・・学生。間学園にかよう一年生兼魔法使い。  
趣味・・・おしゃべり。買い物。  
特技・・・ごーいんぐまいうえい。  
魔法属性・・・逆<sup>リバーズ</sup>  
スタイル・・・詠唱。遠距離。

空志達と同じ学校に通う一年生。実は結構モテる。隠れファンの  
な人が多く、学校内に非公認ファンクラブがある。

空志とともに 魔窟<sup>ジョーカー</sup>にある隆介の家に泊めてもらっている。  
魔法使いに対しては切り札となる『逆』の属性を持つ。  
ぶっちゃけ、どこぞの学園都市の無能力者？

リ 「買い物楽しかったね！」  
鈴 「また行こうね〜。」  
隆 「特技・・・。」  
空 「・・・完璧すぎるね。」  
鈴 「どうしたの？」  
作 「ま、次ぎ次ぎ。」

リカ

種族・・・ヴァンパイア  
年齢・・・??  
職業・・・??  
趣味・・・吸血(空志の)  
特技・・・吸血(空志の)  
魔法属性・・・??  
スタイル・・・吸血呪<sup>ヴァンパイア・スベル</sup>。近距離。

空志達が人間の町に行ったときに襲われていたトコを助けた。実

は始祖の血統。そのためかほぼ弱点なし。チート。

自分が吸血鬼であるために迫害を受け、人間不信になりそうだった。しかし、争いを好まず、ただ逃げてただけだった。

空志達と一緒に 魔窟 へ行く。間家の居候がまた一人増える。

空 「何、この特技と趣味!？」

隆 「カンペキじゃないか。」

鈴 「だね〜。リカちゃん顔が赤いよ〜。」

リ 「・・・/ / / / /」

作 「次は 魔窟 の方々。空志は地獄へ逝けばいいのに・・・」

空 「だから何で!？」

〜 魔窟 の人々〜

はまそつた  
間颯太

種族・・・ドラゴン

魔法属性・・・??

スタイル・・・??。??。

隆介の父。穏やかで、誰に対しても丁寧な物腰。  
マオウ  
現市長の實の息子。

はなまゆしこ  
間優子

種族・・・ドラゴン

魔法属性・・・風

スタイル・・・??。 近距離。

隆介の母。普段はやさしいが、戦闘になると豹変する。おそろく



は本作最強の人。

市長の秘書をしてたりする。

はなまじゅうごんじゅう

間龍造

種族・・・ドラゴン

魔法属性・・・???

スタイル・・・???

隆介の祖父。平和をモットーとした 魔窟 の現市長。

普段からかなりふざけているらしい。特に『サルにでもわかる大魔道書』とかのように。

ガント・バラド

種族・・・鬼人<sup>オーガ</sup>

魔法属性・・・???

スタイル・・・近距離

魔窟 の門番。ガタイのいいおっさんで、豪快な性格。魔法より白兵戦を好む。

みんなに親しまれてる。

アリア・フォルス

種族・・・エルフ

魔法属性・・・水

スタイル・・・非戦闘員

魔窟 で服屋を営むアネゴ肌なおねーさん。

自分の作った服でいろんな人を実験台にするハタ迷惑な人。

作 「ま、こんなもんでしょ。」

？ 「俺たちを忘れるな！！」  
作 「……………メンド……………サーセン。その手の炎を消してくだ  
さい。」

？ 「ついでに私たちもお願いします。」

？ 「頼んだわよ。」

作 「……………なんでこんな目に……………」

（敵の方々）

### 変質者

種族……………たぶん人間

魔法属性……………炎

スタイル……………遠距離

空志達を公園で襲った人物。レオを狙ってたらしい。

リー・シユウ

### 李樹

種族……………樹族

魔法属性……………？

スタイル……………近距離

リカを狙った優男。魔法は薬関係しか使えず、普段から拳法によ  
うなもので対応する。

### 平地冬香

種族……………たぶん人間

魔法属性……………氷。土。

スタイル……………数法術式。遠距離。

リカを狙った眼鏡。委員長タイプな人。対魔法使いの二人に対し

て勝てる人。

冬 「適當ね。」

樹 「ま、書いてもらえただけいいじゃないですか。」

変 「だから俺の名前は!？」

作 「黙れモブ。」

空 「なんかカオス化してきたね。」

隆 「そうだな。」

鈴 「でも、そんなに登場人物とかいなかったね。」

リ 「別にいいんじゃない？」

作 「ま、コレはひとまずのってコトで。この後もレギュラーの方々のプロフィールも変わるかも知れないし。」

空 「へえ。」

作 「何はともあれ、こんな駄作を読んでくださりありがとうございます。これから毎日精進してきますのでよろしくお願いします。」

作以外 「次回も読んでね。」

作 「感想とかもよければゴフウツ!!!」

優 「調子に乗るもんじゃないぜ。ヒャーハー!!!」

颯 「こんな作者でホントに申し訳ございません。」

隆 「あんたらもうやめてくれよ!!!」

## 15話・SLEEPING

sideリカ

「まだ寝てるわね」

そう言ったのはリュウのお母さんの優子さん。

アタシは今、ネスト魔窟のリュウの家に居候をさせてもらっている。

そしてここは、ソラの泊まっている客間。ベッドにはソラが寝  
いて、そのそばにアタシとライオン状態のレオがいる。

かれこれ、アレからもう三日は寝ている。

「ソラは大丈夫なんですか？」

「心配しなくても大丈夫よ。あなた達の話だとわたしの旦那の言  
うとおり魔力の使いすぎでこうなってるだけだから。すぐに目が覚  
めるわよ」

「なら、いいんですけど」

「それにしても驚いたわ。レオちゃんが魔法生物だったなんて」

「ガウ」

残念ながらソラではないのでレオの言葉はわからない。

アタシは毎日朝から夜までソラのそばにいる。

レオもまるで何かから守るようにソラのそばで寝そべっている。

「心配？」

「そりゃ」

「そうよだね。自分の好きな人だもんね」

「あいつはいつから死亡フラグ以外を作るようになったんだろうな」

「!？」

アタシが驚いて振り向くとリュウとスズネがいた。  
つて、この人たちは何を言ってるのかしら!？」

「ななななな、何ノ事カシラ？」

「動揺を隠せてないぞ。ま、あのバカは体を張って魔法から守ろうとしたんだしな」

「顔が赤いよ。ひゅーひゅー」

「赤飯を炊いてくるわ。」

「ちよつと待って!!」

ホントにこの人たちはなんなんだろう。  
いつも明るく、いつもにぎやかで、毎日がすごく楽しい。

「ですが、もう三日ですよ」

「そうね。そろそろピンチかもしれないわ」

「僕もどうにかしなくてはいけないかと思いはじめました」

……。

何で、シユウと冬香と颯太さんがいるんだらう？

ちなみに上からシユウ、冬香、颯太さんの順。

「何でいるの？」

「地獄を終えたからよ」

「私もですね」

アタシを襲ったこの二人も、この家の居候と化している。

そして、アタシ達を襲った罰として、リュウは優子さんと颯太さんからの勉強や戦闘訓練をしてもらっている。

優子さんのときだけなぜか断末魔の悲鳴が聞こえるような気がするけど、リュウやスズネに聞いてもよくわからない。

「ま、お前らの言うとおりだな」

「ここは奥の手を使うべきだよ！..!」

「奥の手？」

……周りをみるとアタシ以外の人は何をすらかわかってるらしい。

なんだらう？

「……ソラが痛いのはダメ。」

「あゝ。コレはあんたの技量よ。」

「・・・？」

「アタシ？」

「何で？」

「お前がキスして起こすから。童話の如く」

「・・・。」

「リュウ、もっかいお願い」

「チューするんだよ。愛の力で王子様を起こそう作戦。」

「聞き間違いじゃないだろうか？」

「赤飯炊いてくるわ」

「優子。僕も手伝うよ」

「今日は豪華にいくんでしょうか？」

「赤飯好き？」

「いや、お前、今日の朝は5杯もメシ食っただろ」

「ガウ」

「あなたもかなり食べてるわよね？」





再び、部屋にはアタシとソラ。

・・・どうしよう。状況が変わっていない。

・・・そうだ!!

これはお礼なんだ!!

あの時も言ったじゃんアタシ!!

血をくれたらお礼するって!!

なら問題なし!!

アタシって天才!!

「よし」

アタシは顔をソラに近づけていく。

唇の距離が近くなっていく。

10センチ・・・5センチ・・・3センチ・・・2センチ・・・

「どつたの?こんなに顔を近づけてさ」

ピシィッ!!

アタシは彫像のように固まった。

アタシ達は唇が触れるか触れないかの距離にいる。

そして、ソラの目が開いている。

「・・・ええと、そのお・・・」

「ごまかす!!」

そう!!

熱を測ろうとでこをくっつけようとしたって!!

「あああああ、あのね、その、熱を……………」

「いや、なぜにウソをつく。目が泳いでる」

「バレた!!」

「…………正直に言っしかないのか!？」

「いや、何か方法は!!」

「そそそ、そ、その、接吻キスを…………」

「って、アタシ何を言ってるの!？」

「吸血きす? そんなにお腹が減ったの?」

「違う!!」

「いや!むしろこのままがいい!？」

「ボタン!!」

「何でお前はそこで目を覚ましてリカはごまかす!!」

「あ、リュウ。おはよう。みんなも。それで突然何を言い出す?」

「……………ヴァンパイア・スベル吸血呪」

「アタシは鎌を取り出す。」

「……………」

「とりあえず、みんな死刑です。」

「撤退!!!」

「だからやめなさいって!!!」

「いや、ウソはやめましょう。一番ノリノリでしたよね」

「リカちゃん!まずは話そう!!!」

「待てえええええ!!」

とりあえず、「コレでごまかしておこう。」

side 空志

「・・・にぎやかだね」

ボクはベッドから上半身を起こして言う。

「ガウ」

いつの間にか部屋に入ってきたレオも同意してくれる。

なんか、違和感がある。

疲れてんのかな?

「子猫には戻れないの?ひょっとして、そっちのほうが楽なんじゃない?」

「ガウ」

「できるけど念のため？」

「ガウ」

「ボクはもうあの二人は大丈夫だと思うよ。だから戻っていいよ」

「・・・」

レオはしばらく悩む。

すると、レオが光に包まれる。

光が収まると、そこには子猫のレオがいた。

「に〜」

がちや。

「逃げ足だけは速い」

「お疲れ」

リカが戻ってきた。

「・・・リカが看病してくれたの？」

「ま、まあ。その。ウン」

「そっか。ありがとう。じゃ、ついでに一つお願いしていい？」

「いいよ！吸血のお礼もあるし！」

リカが勢いごんで言う。

「別にそんなことはいいよ。じゃ、ボクはもっかい寝るからご飯の時間になったら起こして」

「わかった」

ボクはまたベッドに横になって目をつぶる。

レオがボクのそばで一緒に寝ようとするのがわかる。

そして、すぐに眠気が襲ってきて深い眠りにつく。

「ありがとう」

眠りにつく瞬間にリカの声、それと唇に暖かい感触がしたような気がする。

s i d e r i k a

「ありがとう」

そういつて、アタシは熱を共有した。ちなみに初めて。

もう、心臓がバクバク言ってる。

顔もめちやくちや熱い。

顔を手で仰いで冷やそうとする。

「吸血きすじゃなくて接吻キスだったな」

「ひゅーひゅー」

「どっせなら起きているときになさねばよかったのに」

「女は度胸よー!」

ピシイ!!

また、アタシは彫像のように固まった。

油の切れたロボットのようにギギギギと音が出そうな動きで後ろを見る。

そこにはあの4人。

「・・・見た?」

「」「」「見た」「」

「きゃー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

三度目の正直!!

今のアタシなら殺<sup>ヤ</sup>れる!!

アタシは鎌を取り出してみんなに正義の鉄槌を下した。

side 空志

「今日は赤飯ですか。何かいいことでも?」

「それはねえ。「何にもないよ!ー!ー!」」

リカが優子さんの口をふさぎながらあわてて言う。

「ま、今日はヒロシ君の復活祝いですよ。それにしても愛の力は

すばらしいですね」

「はあ、愛の力ってなんですか？」

「……………知らないんですか？ヒロシ君におきてもらうためにリカさんがむぐっ」

またリカが口をふさぐ。

「そんなことよりご飯食べよ！！」

「……………でも、今度はなんでみんなが寝込んだの？」

いま、食卓にいるのはボクとリカ、颯太さんに優子さんだ。リカによると、みんなは急に寝込んでしまったらしい。

「自業自得ね」

「学習能力がありませんね」

「乙女の純情をもてあそんだから！！」

……………よくわからなかったけど聞かないほうがいいような気がした。

これ以上聞くと自分の身が危ないと感じた。

「そっか。あ、レオ、これおいしいよ」

「み〜」

その後数日。

ボクはベッドから起きるのがまだつらいためにリカに看病をしてもらった。

そのとき、みんなはなぜかリカの手足のようになり、リカの動向一つにビクビクしていた。

・・・ホントに何があったんだろう？



## 16話・DEMON

side空志

「じゃ、説明といくか。」

ボクが目を覚ましてさらに数日。

起き上がってそこらへんを歩けるまでに回復を果たしたボクは、ボクが眠っていたときのことなどの説明をしてもらっていた。

「まずは、わたし達のことね。」

内容はこうだった。

リュウとスズは怪我を治そうと病院へ行こうとした。

そこで治癒の魔法をかけてもらおうとしたらしい。

すると、偶然にもボク達と同じように出かけていた颯太さんと優子さんに出会い、颯太さんに治癒系統の魔法をかけてもらってすぐにビルへ来たらしい。

200

「あの時は驚いたわ」

「本当に」

そして、ボクが魔法 ホムラドリ 焔鳥 を使った後のことだ。

リュウは、ボク達全員を一気に魔窟に送るのが困難だと判断し、一旦颯太さんたちのところに シャドウ・パス 影抜け を使った。そして、颯太さんたちと一緒に魔窟へと逃げ込んだ、というわけだ。

さらに、あの二人は優子さんの餌食となってしまうたらしい。敵ながら同情の念を禁じえない。

「ま、だいたいはこんなト」だ

「ちなみに、何でリカを？」

「吸血鬼ヴァンパイアの討伐依頼があったからよ」

「私は魔物が知るとても貴重な薬草を聞こうと」

「おいコラ、シユウはもっと平和にできたる」

「いえ、逃げるものですから……あ、ここに普通に売ってたので問題は解決しました」

さすが魔物の都市。

「ちなみに何でリカからそんなに離れてるの？そしてリカはなぜにこんな近くにいる？」

今の位置状況。

現在地、ボクの客間。

ベッドに座るボク。すぐ隣にリカ。てか、間が十センチもない。

一番遠い壁際。ぶっちゃけて隅っこにそのほかの4人。  
なぜかみんな正座だ。

「気にしないでいいよ」

いや、リカさん。ものすごく気になります。

「そうだ。気にするな」

「気にしたら負けだよ」

「男はそんな細かいことを気にしなくていいのよ」

「そうですね」

「・・・全員、ボクの目を見ていつてくれないか？」

「ここ数日。この4人はなぜかりカに対してひどく従順だ。下僕のようになっているとさえいえる。」

「ま、そんなことより。お前のあの魔法だ」

「あ、アレね」

ボクが使った ホムラドリ 焰鳥 のことだ。

「あんな魔法は聞いたことがない」

「え・・・そうなの？」

「当たり前だ」

「そうね」

「私も聞いたことがありません」

「アタシもない。というか、ソラの属性って何？」

「あ、そういえば忘れてた。ボクは天空と火の多重属性デュアルだよ」

「簡単に教えていいのか？」

「………なんで？」

「自分の弱点をさらすのと同じ行為なんだぞ」

へ〜。

「別にいいんじゃない。もう二人から敵意は感じないし」

「お前のそのスキルを忘れてたよ」

「なかなか超能力みたいなスキルよね。それでチート属性とか最悪ね」

「私は勝てる気がしません」

「リュウもちやつかり教えてるじゃん」

「お前のスキルは唯一ユニークだから大丈夫だ」

確かにコレを使える人はボク意外にあまりいないよね。

「で、あの魔法だけど、数法術式だけ？それを参考にさせてもらった」

ボクは、魔道書に似たようなのがあったことを説明する。

「なるほど。ジジイの本か」

「そんなにすごいのか？」

「だって、魔王様だよ」

「そこで、ボクはさらに改良を加えた」

ボクはそれだと弾幕的に負けると思ったからどうにかして魔方阵をたくさん展開できないか考えた。

そこでキーワードとなったのが周りを流れる魔力(？)と数法術式を操る際の魔力の動き。さらに機械で補助を受けるということ。たぶん、その機械がアンテナみたいな感じで、なんやかんやすると膨大な数の魔法陣を操れるんだらうとボクは考えた。

「そこで、ボクはこうしたんだ」

ボクは右手の中指と人差し指をそろえて立て、それを額の前へ。一旦目を閉じる。そして精神集中。

「魔法陣多重展開」

六つの魔法陣を展開してみる。

「ま、この指をアンテナ代わりにして、周りの魔力で魔法陣をつつくて、さらに魔法を使っただ」

「「「「「・・・」」」」」

何だこの沈黙は？

「ソラさんは人間なんですか？」

「わたしもソコ気になるわ」

「人間、のはず」

「人間、かな？」

「ソラはソラだよ！」

「ボクはまごう事なき人間だ！！てか、こんなことをやった人はいないのか！？」

「いない。魔力を見れるやつはたまにいる。だが、自分以外の魔力を操るやつなんか聞いたことがない」

・・・ボクが人間かどうか不安になってきた。

「大丈夫！アタシがいるよ！！」

「いや、何が大丈夫？」

「それも魔物での話。わたし達人間は可能性として、それこそ砂場でアリのコンタクトレンズを探したほうが遥かに簡単に見つかるわ」

「ぶつちやけますと、天文学的数字の確立となります」

「・・・何パー？」

「小数点以下何桁いくかしらね。でも、安心して、過去にいたらしいわ」

「過去って？」

「数千年ほど前でしょうか？」

「そんなもんだと思うぞ。」

どうもボクは人間どころか魔物ですらないようだ。  
生き物ですらないのかも知れない。

「ま、おぬしは規格外じゃしな。というか、まだ力の一部しか使  
つとらんのか」

。。。。。

アレ？

なんか、変な口調の人いた？

「……みんな、番号」

「一だ」

「二」

「三」

「四ね」

「五です」





・・・この人、ホントに魔王だよな？

間家の方々にボコボコにされてボロ雑巾より酷い状態で、生きてるのが不思議だけどホントに魔王だよな？いや、むしろ魔王だから生きてるのか？

「違う。ジジイはただのアホだ」

「そうね」

「そうですね」

ドンマイ。龍造さん。

ボクは魔道書のことがあるから何も言えないよ。

「アレですね。つい最近ヒロシ君が言った『もうすぐ起きる』が今日になったんですね」

「だろつな。ジジイの事だからどうせおどかさつとでも思ったんだろ」

「ホントに我が家の恥さらし」

ため息をつく間家の人々。

「でも、ホントにこの人がソラ君に封印をしたの？」

「いや、それはマジじゃ」

「ちよっと！復活が早いわよ！」

「まさに人外ですね」

「魔王さんすごい」

「まあ、ソラに関してじゃ。というか、おぬしは珍しいものを連れとるな」

そういつて、レオを見る。

「レオですか？」

「うむ。そヤツはおそらくは幻獣の類じゃろう。だが、今は魔力をセーブしとるようじゃな」

とりあえず、ボクはレオに関して知っていること、特にビルでのことを詳しく話す。

「おそらくはモノを食べることで自分の魔力を補充して、それがなくなりかけたからまたちっさくなっただんじゃろうな」

へえ〜。

「で、こいつの魔法が力の一部ってどういうことだ？」

「簡単じゃ、わしはその本を使って、仮想体アバターにじゃがソラの全封印を解くようにした。だが、おぬしの力はそんなものじゃない」

「いや、ボクは最初からレベルマックスの天空と火の多重属性ですよ。リュウに言わせると魔力も半端ないほど持ってることだし」

「…………おぬしはどつやら勘違いしとるな」

「ソラが勘違い？それはどついうことですか？」

「いや、それは自分で探せ」

「お義父さま。本音は？」

「そつちのほつが面白そつじゃ」

ダメだこの人。  
自由すぎる。

「それにわしでも説明がつかん力じゃ」

その一言に驚く間家。

「何、そんなにありえないの？」

「ジジイにわからない魔法はない」

「封印術を見れば神だつて裸足で逃げます」

そついえばそんなことを魔前にも聞いたね。

「魔法に関してはホントにエキスパートなのよ」

「魔力を見れるわ、さらには操れるわわしにはわけがわからん」

「コレのことですよね。・・・魔法陣展開」

そう言って ホムラドリ 焔鳥 の紅い魔法陣を展開。

「何回見ても規格外だな」

「ボクは人間だから・・・な・・・アレ？」

なんかまたすごく眠い。

「どうしたの？」

ボクの看病係と化してるリカがたずねてくる。

「いや、何、か、ね、むい・・・」

ばた。

ボクは睡魔に負けて眠ってしまった。

side 隆介

「どうしたの？」

リカがソラにたずねる。

「いや、何、か、ね、むい・・・」

ばた。

その言葉と同時に後ろに倒れて眠ってしまった。

「……………今日は魔力を一切使ってないよな」

オレはリカに聞いてみる。

「うん」

「外部の魔力。つまりはマナを使うと疲労が蓄積されていくのかの？」

なるほど、疲労で寝たと。マナを操作するのは酷く大変らしいな。リカはソラをきちんとベッドに寝かせる。

吸血鬼は力持ちだ。

「まあ、この話はこれ以上わしの知ることはない。どれ、都市の結界を15年もほったらかしにしたからの。調整をしないおしてくるでしょう。颯太。警備部隊にはわしが起きたことと、結界の張りなおしをすることを伝えてくれ」

「わかりました」

その言葉で、ソラの看病担当のリカ以外が部屋から出た。

side 龍造

ここは、都市の中央の建物。

簡単に言つと庁舎のようなもの。

その建物の最上階の一室にわしはいる。

「さて、と」

実は、わしは真実をしゃべったわけじゃない。ソラと呼ばれるあの子の力は赤ん坊のときに一度だけ見た。そのときに、どんな属性なのかは検討をつけた。それはありえなかった。

幼少期で力の発現が起こる人もいる。

しかし、赤ん坊のころというのは聞いたことがない。

ましてや、あの子の力は強大で、世界のバランスを崩しかねないほどの異端イレギュラーだった。

だから、わしは自分の持てる力のすべてを投じて封印を施した。

あの、老いぼれさえもわしに協力してくれた。

普段は出会えば拳で語り合うような関係のソラの祖父と。

しかし、封印は解かれてしまった。

もう、わしにはどうしようもない。

封印するには力が大きすぎる。

願わくば、自分の力に気づいても、今のような友達思いの優しい少年であって欲しいと願う。

「考えてもしょうがないの」

気持ちを切り替えて都市の結界の現状の状態を調べる。

「コレは……相当ガタがきとるな」

もう、どうやってこの結界が成り立っているのか不思議なくらい。

「一旦解いて最初からやったほうが速いの」

作業に取り掛かる。

結界の魔法を解き、一から構成を組み始める。  
しかし、数分後に異変が起きた。  
あわてた様子で庁舎の職員がやってくる。

「緊急事態です!!」

「どうしたんじゃ？今はちと忙しいんじゃが・・・」

「人間の軍勢がこちらに向かっています。おそらくは魔物の討伐部隊かと」

「こんなときにか！結界が解かれとる今は市民の安全を優先しろ!!」

「わかりました!!」

「警報を鳴らせ。レベル3じゃ」

「はっ!!」

s i d e r i c a

「また、寝ちゃった」

もっと、いろんなことを話したかったのにな。  
ま、しょうがないか。

アタシはレオと一緒に留守番中だ。

あの4人は町に出かけていった。

優子さんも夕飯の買出しに行ってしまう、家には2人と1匹だけだ。

「平和だ」

こんなのは、つい最近までありえなかった。  
しよつちゆう追われて、散々な日々を送っていた。

「これからもこんな日々が続くよね」

そのときだった。

突然、サイレンが鳴った。

「何!？」

「にゃ?」

『市民に告ぐ。人間がこちらに向かっています。レベル3を発令。  
繰り返す……』

「……どっいつとっ?」

side 隆介

オレ達はちよつと町に出かけていた。

ソラの武器を買うとか言っときながらいろいろありすぎて買えな  
かったからだ。

「でも、勝手に武器なんか決めちゃっていいの?」

「大丈夫だろ。あいつのことだから後方支援系の武器。特に銃と  
かを選ぶからな」



「さすがはソラさんの親友ですね」

「全然違うけどな」

「でも、わたし達がついてくる必要はあったの？」

「お前らのせいで買えなかったようなもんだからな。買え」

「え〜「リカに言ったらどうなるか・・・」喜んで!!」

うん。今のリカは最強だ。

「にしても、あのおっさんが里帰りしてるとは思わなかった」

「前にここを出て会いに行こうとしてた人？」

「ああ」

あの偏屈爺さんが戻ってくるとは思わなかった。  
だが、タイミングがよすぎる気がする。

「つと、ここだ、ここ」

危つく通り過ぎそうになるがすぐに気づく。

「おっさん。いるか〜？」

「その声はアホ市長の孫か？」

「そうだ」

「アホ市長って……」

ホントのことだからしょうがない。

「ちよつと武器を買いに来たんだが？」

「ちよつと待ってる」

少しすると、手に何かを持ったちっこいおっさんがやってきた。

「……えらく大所帯だな」

「まあな、このおっさんはドワーフで鍛冶をしてるログ・ラギスだ」

「……よろしくな」

「で、武器なんだが」

「コレじゃないのか？」

そういつて一つの玉を見せる。

手のひらサイズの金属でできたただの玉。

「……何よ。コレ？」

「オレにもわからん」

「……………あいつの代わりにこいつを取りに来たんじゃないのか？」

「「「「あいつ？」「「「「

「龍造のバカだよ」

「ジジイが？」

しかし、そこでサイレンが鳴る。

『市民に告ぐ。人間がこちらに向かっています。レベル3を発令。繰り返す……………』

「警報!?!」

「レベル3だと!?!おいボウズ、そいつらをシェルターに連れて行け!?!」

「わかった」

ひゅーん。ドゴーン。

「無理だな。今外に出るのは危険すぎる」

「問答無用で重火器を使ってきたか!?!」

「すみません。レベル3ってなんですか？」

シューがたずねてくる。

女子のほうもよく状況がわかってないようだ。

「簡単に言うとな、人間の魔物討伐部隊的なのがやってきたから中央のシエルターに逃げろって言うやつだ」

「「どういつのは何回もあるの?」」

「いや、普段はジジイの結界のおかげでこの場所がわからないようにしてる。もし、ここに来ても遠くに転移するようにトラップが仕掛けてある。」

「じゃ、どーしてこうなったの?」

「結界の張りなおしに偶然ここを通ったんだと思う。」

とにかく、一ついえることは、

「最悪の状況だ」

## 17話・EMERGENCY

side空志

そこは薄暗い部屋だった。

薄暗い中で誰かが話し合っている……。

話し合っているのは僕のじいちゃん知らない人……。

いつも同じ夢を見るのにその会話の内容だけがどうしてもわからない……。

でも、今回だけは違った。

「子のこの力は危険すぎる」

そう言ったのはボクの祖父、三谷隼人<sup>みたにはやと</sup>だった。

セリフの内容からすると、ボクは封印が掛けられる瞬間の夢を見てるのか？

じゃ、もう一人の人は……。

「しかし、魔法が使えんようになるかも知れないんだぞ？」

龍造さんは最後に確認を取るように言った。

「かまわん。この子を危険にさらしたくはない」

「わかった」

「だが、頼んでおいてなんだがこれほどの力だぞ、できるか？」

「正直、わしでも封印できるか自信がない。いつかは壊れてしま  
うような気がする」

「……………そうか」

「すまないな。ひよっとすると、お前を危険にさらすかもしれない」

そして、じいちゃんはボクをなでる。

「その力、『月』の力を大切な人のために、使い方を間違えないでくれ」

sideリカ

どういうこと!?

レベル3?

シエルター?

逃げる?

「どうなったの?」

「に〜?」

アタシはリユウの家にいる。

どうしていいかわからない。

それにソラを置いて行けない。

アタシの力でも男の子を連れて、ましてや意識がない人を連れて行くのは大変だ。

「ねえ、ソラ起きて!」

「みーみー」

さっきから起こそうとしているがまったく起きる気配がない。  
やっぱり、アタシが担いでいくしかないのか？  
って、レオがいるじゃん！！  
大きくなつて運んでもらおう。

ひゅー。

ドガアアアアアアン！！！！！！

「きゃあー！！」

突然の爆音。

地響きが起きる。

近くで何回も爆発音がしている。  
重火器？

「逃げなきゃー！！レオ！！」

返事がない。

「レオ？」

いつの間にかレオが消えている。

「ガアアアアアアアア！！！！！！」

レオの咆哮が玄関から聞こえる。

「どうしたのー！？」

「魔物だ！！応戦しろ！！」

もう、こんなところまで！！  
レオは時間稼ぎのために！？

「レオ！！！」

レオは大きな体からは考えられないほどの俊敏さで人間たちに襲い掛かる。

「うわあああああ！！！！」

「怯むな！！迎え撃て！！魔法だ！！」

言葉と同時に隊長らしい人の後ろから火や水、氷、雷といったさまざまな魔法が放たれる。

「があああああ！！！！」

「レオ！！！！」

たぶん、レオはアタシにソラを連れて逃げろとっている。  
でも、それはできない。  
ソラが守ってくれたこの命。  
レオにも守られてここにいる。  
そして何より……。

「見捨てていけないよ」



ヴァンパイア  
吸血鬼にはもう一つ、特殊な技がある。  
アタシの目が赤から血のような鮮血スカーレットカラー色に。

ムゲン  
マガン  
夢幻ノ魔眼

アタシはこの特殊能力を発動させる。  
これは、吸血鬼の持つ魔眼という能力。  
対象の目を見ることによって、催眠術に掛ける。

「夢二囚ワレロ!!」

「な、んだ・・・!?!」

そして、急にはたんと倒れる。  
相手は猛烈な眠気に襲われて眠っている。  
よかった。成功した。

「吸血鬼だ!! 目を見るな!!」

「ここからは通さない!!」

s i d e 空志

ここはどこだろう?  
ボクはさっきまで過去の夢を見てたはず。

「知ってしまったのか?」

声のしたほうを振り向く。

「龍造さん？」

「そうじゃ」

「ここは？てか、『月』の力って？」

「そんなことより聞きたいことがある」

「はあ」

「お前は力を手に入れてどうしたい？」

「……急にこの人は何を言い出すんだらう？」

「いや、別にどうもしません」

「コレを見てもか？」

そういうと、パソコンのウィンドウ画面のようなものが出現。ソコには映像が映し出されていた。

「都市が襲われてる！？」

「お前の力を使えば……」

「……要するに、アレだな。」

勇者モノRPGの。

「さらには」とりあえずさっさとここから出して。みんなを助けに行く「……意味がわかつてるのか？」

意味って何？

「お前は魔物の側。つまりはダークサイドにつこうとしとるんじゃないぞ？」

「あゝ。そんなこと」

「……そんなことで済ませる人間をわしはお前以外に一人しか知らんぞ」

おそらくそれはじいちゃんだ。

「血は争えないって事で」

「おぬしはアホか？」

「いや、あんたにアホと言われるほど終わってない。ボクはただ……」

この都市で出会った人たちの顔が思い浮かぶ。いや、魔物か。楽しそうなりユウやスズ、リカ、なぜかこの風景に溶け込んでる冬香とシュウ。

「自分が正しいと思う道を進むだけだから。正義とかわかんないしね」

「そうか」

そう言うと龍造さんは笑う。

「ログというドワーフのところへ行け」

「？よくわかんないけど、わかった。リュウに連れてってもらう」

「がんばるのじゃぞ」

「うい」

次に意識が戻ると、そこはボクの使う客間のベッドだった。

side 龍造

「…………おぬしに似ておるの」

「お前はアレを誰の孫とおもってるんだ？」

「そうじゃったな。隼人」

先ほどの空間で龍造と空志の祖父、三谷隼人が会話をしている。

「よかったな。あんないい子に育って」

「お前んとこの隆介もいいやつだと思っぞ」

笑いあう二人。

「じゃ、そろそろ行くわ」

「わしも結界の続きじゃ」

そして、この空間から二人の人影は消えた。

s i d e r i k a

「くっ!！」

数が多い!!!

アタシの目の前にいるのは機械仕掛けの人形。

機甲魔道人形と呼ばれる代物だ。

魔法で動くロボットのようなもので、いくつかの銃器、さらには魔法まで使える。

しかし、実はそれほど強くはない。

コレの脅威は疲れを知らないことと数にモノを言わせて特攻させること。

こっちの疲労がたまってくる。

「一気に片付ける!!！」

アタシは吸血呪を使って、  
血濡れの大鎌 を出現させる。

「  
ブラッディ・ダンス  
血の舞踏 ！」

アタシは鎌を投げて操作。

ズガガガガ、ズバツ!

これで大半の機甲魔道人形を減らした。

「  
フィナーレ  
終演!！」

鎌が黒い光を発して音のない爆発を起こす。  
黒い光に包まれたすべての機甲魔道人形が消え去る。  
コレでアタシの目の前にいたすべての機甲魔道人形を倒した。  
でも、アタシももう限界だ。

「つ、つかれた」

「が、がう」

レオも疲労でくたくたのようだ。  
アタシ達はいくらか怪我也も負った。

「なかなかやるな」

「「!？」」

ほっとしたのもつかの間。  
声のしたほうを向くと大勢の人間が。  
こんなに大勢の人と戦う力が残ってないのに!!

「くっ!」

「捕らえる」

いつの間にか後ろに回っていた人間に羽交い絞めにされる。

「しま!？」

「がああ!!!!」

「おっと、動くな。この娘の命はないぞ」

そういつてレオをけん制する。

「最初から殺すつもり癖に」

アタシは精一杯の皮肉をこめて言う。

「いや、吸血鬼など希少だ。我輩の使い魔にでもしようかと思っ  
つてな」

「いやよ。どうせならアタシの友達としたいわ。あんたみたいな  
おっさんはお断り」

「友達？魔物のお前に人間の友達がいるわけないだろ？」

基本的に使い魔の契約は魔物と人間。というような他種族間では  
か行えない。

さらに、アタシは吸血鬼、忌み嫌われる存在としての認識が高い。  
エルフのような亜人種族ではあるが魔物に分類され、結果として  
人間としか契約をすることができない。

「残念ながらいるの。ソラって言う友達がね。」

周りにいる兵士が嘲笑しだす。

「どうせ嘘だろう。もういい。半人前の身の程もわからん吸血鬼  
など殺せ。」

「なら、二人で一人前って事で」

「がつー!!」

いきなり、アタシの拘束が緩む。  
でも、この声は!?

「お前は何者だ？」

「三谷空志。そこにいる吸血鬼の子が言ってたソラって友達。ちなみに人間」

アタシの好きな人がそこにいた。

「人間で魔に属しているというのか？」

「ちょ!?!リカとレオ怪我してるじゃん!?!」

華麗にワガハイをスルーするソラ。

「コレぐらい大丈夫」

「ガウッ!」

「いいから。怪我を治す我輩の話聞け!!」ワガハイはだまっ  
とれ!!」



思わずワガハイが黙る。

「火の魔力達。リカとレオを直して」

柔らかなオレンジの光がアタシとレオの怪我をしたところを直していく。

光が収まるとあたしたちの怪我は完全に治っていた。  
なぜだか疲労も取れたような気がする。

「さて、てつけ「何これっ!?!」・・・いや、魔法?」

「卿は何者だ!?何をしたのだ!?!」

「火の魔法で怪我を治した。」

「有り得ん!!!火は破壊の魔法だ!!!」

「勉強が足りないよ。それと再生とか繁栄を持つ」

不死鳥フェニックスみたいな感じなのかな?  
いや、じゃなくて!!!

「だが、魔法名を言葉にしてないぞ!!!」

「だって、オリジナルだもん。ついさっき作った」

あまりのことに驚愕する兵士の皆さん。  
アタシはやっとわかった。

「要するに、規格外ってことか」

「そんな納得の仕方はいやだ!!」

「……………有り得ん。それほどの力を持ちながらなぜ魔につく  
!?!」

「それがボクの正しいと思う道だから」

相手は相当頭にきてるようだ。

顔がものすごく赤い。

「総員。魔法の発動準備!! 魔に与<sup>くみ</sup>する者など殺せ!!」

「ソラ! どうするの!?!」

数はざっと見ても50はいる。

間家はすでに原型をとどめてなく、隠れる場所がない。

「大丈夫。魔法陣展開」

すると、アタシ達の盾になるように白銀に輝く魔法陣が展開。

「<sup>ツキモリ</sup>月守」

「放て!!」

言葉は同時。

しかし、こちらに魔法は一つも当たらなかつた。

盾のように展開された魔法陣がすべての魔法を防ぎきった。

「な、なぜだ！？あれほどの魔法を！！全員選りすぐりの兵だぞ  
！！！」

「『月』の魔法をなめないですよ。雷の魔法使いさん」

「なぜ我輩の属性を……！！？」

普通は相手が魔法を使うまでは属性がわからない。

そして、それを見破る方法は今のところは発見されていない。

でも、ソラは魔法を見てもないのに、何もしてないのにそれをや  
つてのけた。

いや、ソラの目がいつもと違う。

まるでオッドアイのように左が白銀。右が深い蒼のような色にな  
ってる。

「ソラ？」

「後で説明する。簡単に言うと完全に覚醒したんだ」

今までは中途半端だったって事！？

それで、ホムラドリ 焰鳥 って魔法を作れたの！？

「じゃ、雷には雷と行きますか」

そういうと、足元に巨大な魔法陣を展開する。

しかし、それはソラがいつも使うものではなかった。

陣の中にさらに八つの円が描いてあり、その周りにもびっしりと  
複雑な記号や文字が描かれている。

「コレもオリジナル。あえて名前をつけるとすると・・・そだな・・・  
ヤマタノオロチ  
八岐雷大蛇 とでもしとこうか」

その言葉と同時に雷が暴れだす。

そして、ゆっくりとそれが姿を現す。

それは、八つの頭を持つ、雷で構成された大蛇だった。

「何だ、あの魔法は！！ありつたけの魔法を放て！！」

言葉と同時に恐怖に駆られて敵の兵士たちが魔法を繰り返す。

「日本神話にもある八岐大蛇だけどさ。何で恐れられていたか知ってる？たかがでつかいだけの蛇なんて村の人でいつせいにかかればどうにでもできると思わない？」

「どういふこと？」

アタシは気になって聞いてみる。

「八岐大蛇には超再生の力があつたんだ。」

魔法で蜂の巣にされる雷の大蛇。中には魔法を相殺したものもあるけど、この魔法は使い物にならないはず。

しかし、すぐに元通りの姿に戻ってしまう。

つまり、自己修復の機能がついた魔法。

使役者が望めばいつまでも攻撃したりする魔法なんだろう。

「と、言うわけで。行け」

大蛇が八つの頭で敵に頭突きや、噛み付いて攻撃をしていく。

「がああああああ！！！」

感電した兵士たちが気絶してどンドン倒れていく。  
数秒後には敵は全員倒れていた。

「ありがとう」

ソラが大蛇に声をかけると大蛇は姿を消した。

「・・・生きてる？」

「大丈夫。気絶しただけ」

「で、さっきのは何！？」

「さっきってどれ？」

「全部！！！」

「わかった。最初から説明する」

ソラが話してくれたのはこうだった。

まず、夢で過去のことを思い出したソラは別の精神空間で龍造さんに出会う。

そこで話をした後にはベッドで目が覚める。

すると、違和感に気づいたらしい。

昨日から見えるようになった魔力がはっきりと見えるようになったのだという。

それこそ、他の生物の魔力でさえ・・・。

「無意識に魔法が発動したんだと思う。とりあえず、ボクはコレを月詠ツクヨミって呼ぶことにした。この目のオッドアイ現象もその余波。ボクの属性の色が出てるんだと思う。それで、さっきは100%の力でマナを操作したんだ。それに、なぜかわからないけど使い方が最初から知ってたみたいにコレを使いこなせる」

なるほど。

アレ？でも、ソラの属性は・・・。

「天空と火じゃなかったっけ？火なら赤い目になるんじゃないの？」

「あ、それ間違い。ホントは天空と『月』だったらしい。」

『月』？

「簡単に言うと、マナの操作とか、魔力を見れるのがコレのおかげ。火は偶然出たらしい。今のボクはこんなこともできる。たぶん力を使いこなせるのもこのおかげ。たぶんだけど、『月』の魔法つてのは魔法を作り出したり、操作するのに特化した、ある意味最初っからレベルMAXな力、なのかな？」

ソラが手のひらを上に向ける。

すると、水の玉が。

「ぶひひひひとっ？」

「マナの中にある水の魔力を集めた。他にもいろいろできると思  
っよ」

「……………」

「……………どつたの？」

アタシは肩が震えていた。

「あはははははは！！！！」

なんだか心底おかしかった。

「ちょ、頭でも打つたの?!」

普通に人間の、それこそ魔物の魔法を圧倒している。

こんな力を持てば普通は自分を見失う。

でも、ソラはそうじゃない。

こんな強大な力を持ってもいつもと変わらない。

本当に優しい人だ。

「あのね、どんなに強大で、世界を覆せるような力を持っててもソラはソラなんだなって思ってる」

「……………そう?ま、とにかくリュウ達を探しに行こう」

「りょーかいつ!!」

「ガウッ」

前のようにソラがレオにまたがる。

アタシはその後ろにしがみつく。

アタシ達はレオにまたがって都市の空を翔る。



18話・LIGHT IN THE DARKNESS

side 隆介

「ドール機甲魔道人形までいんのかよ!!」

「こっとなつたら奥の手よ!!」

冬香はケータイを取り出す。

「起動!!」

しゅん。

「……あれ?」

「あゝ、それがお前のデバイス魔術機械だったのか」

そして、非常に残念なお知らせがある。

「冬香ちゃんゴメンね。わたしの魔法で使えなくしちゃったの」

「……系?」

「いや、こいつのアンチ相殺 使ってさ、魔法系のものを全部壊したんだよ。逆探されるとヤバイし」

「わたしただの役立たず!!!!」

「いや、普通に魔法を使ってくださいよ!!!!」

「つか、拳でよくやるな」

「肉体強化の薬を飲みました。でも、いつもと変わらない気が・・・」

「非常に残念なお知らせがある」

「・・・まさか？」

「そのまさかだ」

「私が持つてるのはただの水ですか！・・・！・・・さっきから拳が痛いと思ってたんですよ！！！」

これじゃ、戦力はオレだけじゃないか。

「わたしもいるよ〜！」

「魔法以外はダメだろ」

「はう！・・・！」

坂崎撃沈。

さて、どうしたものか・・・。

「ガキども、店に傷一つつけるなよ」

「むしろおっさん戦えよ！！店の武器で・・・！」

「アホウ！！商品で戦えるか！！」

チクショー！！

だが、さすがにオレだけじゃ無理だぞ！！

ちゅん！

どおおおおおおおん！！！！

……一瞬でオレの目の前の機甲魔道人形がゴミに。

「ゴメン。寝坊した」

「今度からリカに起こしてもらえ」

「……それ、いいかも！！彼氏と彼女みたい」

ソラとリカがレオとともにオレのそばに降り立つ。

リカ、変にトリップするな。小声だがオレには聞こえたぞ。ソラは気づかなかったようだ。

「リュウ。ログさんって人知らない？」

ソラがたずねてくる。

「俺だが？」

「あ、はじめまして。三谷空志です。通称ソラです」

「オレはドワーフの鍛冶師。ログ・ラギスだ。ログでいい」

挨拶を交わすおっさんとソラ。

「じゃ、ログさん。早速ですが龍造さんからの預かり物とか注文品とかないですか？」

「コレだが？」

そういつて例の金属球をソラに見せる。  
ホントに何だコレは？

「……………何ですか、コレ？」

「知らんのか？龍造のアホから聞いてないのか？」

「いや、そうじゃなくて、この魔法構成は何ですか？ボクにあつた武器を作れですか？」

おいコラ。

お前、今何つった？

見ただけで魔法構造を理解したのか！？  
そんなのできるのはジジイと親父ぐらいだ。

「リカ。どういうことだ？」

「ソラはレベルMAXになったの」

リカがわけのわからん説明をする。

「……………あのバカの言つとおり面白いことができるよつだな」

「ちょっと！ダベってないで手伝いなさい！」

「数法術式を使えばいいじゃん」

「魔術機械が壊れてて使えないの！！」

「こっちに魔術機械を投げってくる冬香やけくそだな。」

ソラはそれを受け取る。

「……………魔法陣展開」

ソラは魔法陣を展開する。

「おい、何をする気だ？」

「いや、直せそうだから直そうかと」

「いや、専門の知識が必要なんだぞ」

「見た感じ、この魔力の残滓どおりに魔法を構築すれば大丈夫だ  
と思う」

そして、ソラは意識を集中する。

「……………できた」

「いや、速すぎるだろ！！」

「冬香！直ったよ！！」

オレのツッコミを無視して冬香にケータイを投げる。  
冬香は反射で受け取る。

「何をバカなことを!!!」

「いいから使ってみて!ほら前!」

「くっ! 起動!」

冬香はしぶしぶといった感じで数法術式を使う。

「認証完了。起動シマス」

「え?」

「いや、魔法!!!」

「あ、うん。術式、1から10までを待機」

「術式ヲ待機シマス」

その言葉と同時にいくつもの魔法陣が展開。

「ショット発射!」

魔法陣から氷の槍が放たれる。  
フアランクスまさに氷の槍袞。

それは敵を一瞬で殲滅した。

「いつ見てもすごいね」

ソラがのほほんと言う。

「」「」「」

「……みなさんどうしたの？」

「」「」「お前、人間か！？」

「俺の助手になれ！！」

「ボクは全力で人間だ！！そしてログさんは何を言うし！！リカもなんか言ってる！！……リカ、目をそらさないで！！」

こいつはおそらく地球外生命体なんだろう。

そうじゃなきゃ説明がつかない。

「ま、そんなことより、ホレ、コレはお前さんのものだ」

ソラが金属球を受け取る。

「只今ヨリ、おりはるこんノ武器構築ヲ始メマス。」

「……おっさん。今、オリハルコン神金鋼ツって言わなかったか？」

「コレはオリハルコン100%の塊だが？」

「最初から最強の武器って何！？？」





「拳銃だ」

ソラが感慨深そう言う。

「コレで優子さんに離れたところから攻撃できる!」

「そこかよ!」

「何を言ってるの?」

「そうですね。それが一番重要です」

お袋の被害を受けている二人が言う。

・・・同情する。

「・・・お前ら緊張感がないな」

「オレもそう思う」

「お前も十分ない」

うるせえ。

side 空志

「で、これからどうすんだ?」

リュウがボクに聞いてくる。  
いや、決まってるでしょ。

「問題です。不良が抗争を始めました。ソッコーで終わらすにはどうしたらいい?」

「そういうことですか」

「確かにそれが一番手っ取り早いわね」

「アタシもそう思う」

「お前にはそれだけの力もあるしな」

「・・・」

一生懸命考えるスズ。

「・・・どつたの?」

「この問題難しいよ」

「・・・さいですか」

「要するにボウズが言いたいのには頭を潰すって事だろ」

「・・・なんで?」

「いや、指揮官がいなくなれば敵の指示を出す人がいなくなるからね。そうすれば敵は撤退せざるを得ない」

「そっか。ソラ君賢いね!」

「あなたが天然すぎるだけです。  
ま、それより先にすることがある。」

「でも、まずはザコ敵を殲滅しよう。その機甲魔道人形つてヤツを」

「できるのか？」

「こつすればいいんだよ。……魔法陣多重展開。焰鳥<sup>ホムラドリ</sup>。」

「以前より遥かに多い数の魔法陣を展開し、焰鳥<sup>ホムラドリ</sup>を発動させる。」

「機甲魔道人形を見つけ次第即時攻撃。行け！」

すると、クモの子を散らすようにいろんな方向へ飛んでいく。

「コレでおっけー」

「……前々から聞こうと思ってたんだが、あの魔法は何だ？」

「……なんかいまさらじゃない？」

ま、説明するけど。」

「アレは、魔法にある程度の意思を持たせた。だから、勝手に避けてくれるし、相手に追尾してくれる。ついでに言うと、簡単な魔法、てか、火を吐くぐらいならあの鳥たちにもできる。ちなみにエネルギー源はmanaだからボクのほうに魔力消費は来ない。」

……。

なんだろう。みんなの目がおかしい。

「オレより魔法がすげえとか……。オレのほう長いのに……」

「

「ふふふふ……。わたしなんてケータイなけりゃただのザコ」

「私はどうせ……」

「……。わたしだってがんばってるのに……」

「なんかゴメン。みんな戻ってきて」

「ドンマイ」

いや、何でリカは大丈夫？

「慣れちゃった」

「……さいですか」

てか、こんなことをしてる場合じゃなかった。

さっさと敵の大將を見つけてフルボッコにしなくては！！

ボクとリカはみんなを正気に戻して敵を探しに行った。

「だが、どうやって探す？」

「おそらくは敵はどこかに陣を張っているはずだ」

「そして、さらに奥で踏ん反りかえってるはずね」

「戦っている音が激しいほうに行けばいいんじゃない？」

「ボクが ツクヨミ 月詠 で力の強い人を探せばいいじゃない？」

「アタシが霧なつて偵察つてのもいいんじゃない？」

「いつそのこと分かれるか？」

ボク達は都市をかける。

ちなみにレオは小さくなってベスポジへ。

ボクの後頭部に張り付いている。

「戦力は分散しないほうがいい。他にも何かあるかもしれない」

「じゃ、参謀のソラよ、どうする？」

。。。。

何か方法か。。。。

「一番は警備の人に聞くことだけど、ボク等は避難しろって言われるだろうしな。リカ」

「何？」

「吸血鬼なんだし、コウモリを使役して情報を集めるとかできな

い？」

「そんなことはできません」

「リュウ。「情報収集系は風の分野」……優子さんは戦闘技能しか教えてくれませんでした。シユウ「私はただの薬剤師です」冬「ムリ」ス「わたしは魔法に対してしか使えないよ」……」

「しょうがない。」

「リュウ。どこか高い場所に移動しよう」

「？……わかった。」  
シャドウ・パス  
影抜け

影がボク等を包む。

一瞬だけ視界を黒で塗りつぶされる。

しかし、次の瞬間にはどこかの屋上にいた。

「  
ツクヨミ  
月詠」

ボクは早速作業に取り掛かる。

魔法の反応が一番多いところ。

そして、強い力を持つ人を探す。

たぶん、その人が敵の大将だ。

少なくともその護衛かなんかだ。

「わかったか？」

「今、探してる」

月詠<sup>ツキヨミ</sup> をしていて気づいたことがある。  
コレは魔法解析の能力や、マナや魔力の流れとかがわかる。  
他にもできるのかもしれないけど今のボクにはコレが精一杯。  
でも、この力で……。

「……見つけた」

この都市を守る。

力があるなら、せめてボクは自分が正しいと思うことに使いたい。

「わかった。ボクとスズが初めてここに来たときに通ったあの門の近く!!」

「あそこ?」

「わかったんならさっさと行くわよ!」

「ですが、相手がどれほどのカードを持っているのかわからないの  
にまずいのでは?」

「相手の魔法を解析した」

「ホントにチートだね」

「作戦だ。とりあえずは颯太さんと優子さんに合流しよう」

「どのあたりにいる?」

ボクは颯太さんたちがいるあたりを指差す。

「そこからは歩いて合流しよう」

そしてボク等は再びリュウの魔法で移動する。

「親父！お袋！」

「皆さん！？なぜここに！」

「ボクとリカは逃げ遅れたんです」

「オレ達も似たようなもんだ」

「今すぐ、逃げなさい」

優子さんは戦闘中なのにすごく穏やかだ。  
なぜに？

「真剣になると優子はまじめなんですよ」

「「「アレでふざけてると！？」」「「「

いや、今はそうじゃない。

「敵の指揮官的な人の居場所がわかりました」



「本当!？」

「ですが、力がかなりやばそうです。ボク等じゃないとまずいで  
す」

「いや、君たちは・・・」

「大丈夫だ。オレは魔王の孫で」

「ボクは・・・その孫の悪友かな？」

「わたしは幻 殺し」

「アタシは始祖吸血鬼」  
ヴァンパイア

「わたしは凄腕の数術師よ」

「私は最強の薬剤師ですね」

ボク等はそう簡単にやられない。

「ボク等は最強のチームだから大丈夫!」

「・・・あなた達は魔につこうとしてるのよ?」

「「「「今更」」」」

「ボクは自分が正しいと思う道を。」

「わたしはこの町好きだよ」

「ここは楽しいし」

「わたし達はでっかい借りがあるしね」

「そうですね」

ボク等はここで逃げ出す気はさらさらない。

「・・・どういっても無駄のようですね」

「さすがは親父。よくわかってらっしゃる」

「みんな、必ず帰ってきてね」

ボク等は力強くうなずく。

「じゃ、ここで待っていてください。おいしい夕飯を期待してます」

コレで許可はもらえた。

なら、次の段階だ。

「では、いっちょこの町の勇者になりますか!」

「むしろ魔王だな」

「いいじゃん」

「<sup>ダイクヒーロー</sup>黒の英雄もカッコいいし」

「そういえば、あなた達つてむしろ魔王と勇者よね」

「そうですね。闇と月。月はイメージ的に光ですね」

「じゃ、行こうか」

「おうよ。  
影<sup>シャドウ・パス</sup>抜け」

ボク等は敵の拠点へ向かう。

side 優子

「行っちゃったわね」

「あの子達なら大丈夫だ」

不思議だけどわたしもそう思うわ。

何ででしょうね。

「まあ、わたし達はこちらの敵を殲滅しましょう」

「颯太さん！！機<sup>ドール</sup>甲魔道人形の大群がまた来ます！！これ以上は持ちません！！数が多すぎます！！」

そういつて鬼<sup>オーガ</sup>人の警備が報告をしてくる。

「通達をお願いします。希望の光はまだ消えていません。これから、わたし達も前線に立ちます。そして魔獣化の許可をします」

「………ということとは？」

「希望がわたし達を助けてくれます。後一踏ん張りです。優子」

「わかってますよ」

わたしは刀を取り出す。

「この都市をみんなで守りきることだけを考えましょう！」

「みなさん！行きますよ！！」

わたし達の戦いも幕を開けた。

## 19話・DISAPPEARANCE

side空志

ボク達がいるのは最初に通った、そしてガントさんに出会ったところ。

ここは都市の南の門だったらしい。

「オイ！なぜリュウ坊がここにいる！？」

そして、ガントさんは今日もここにいた。

目の前では鬼人オーガにエルフ、擬人化した魔物など多くの魔物達と大勢の人たちが戦っている。

「おつす。ガントのおっさん」

「お久しぶりです」

「お久々」

「「「はじめまして」「「「

「ま、つつわけでちょっとヒーローになってくるわ」

リュウがそういって歩き出す。

「リュウ、敵はこっちだ」

「「「「……うちのほうに敵多いじゃん」

「ソラを信じなさい」

「サーセン、リカ様」

でも、確かに多い。

……よし。

「試したいことがあるから少し待って」

「「「「「？」「「「「」

ボクはみんなが不思議そうにしてるのをほっという銃を抜く。

コレは正確には魔銃というらしい。

ログさんに一通りの説明は受けた。

何でも、この銃は弾がいらす、魔力を撃ち出して使うらしい。

それと神金鋼製の武器は他にも特殊な能力がつくことがあるらしい

いけど、それは使ってみないことにはわからないらしい。

ま、とにかく、コレはボクの魔力を装填して撃つ。

「装填<sup>チャージ</sup>」

これで、撃てる。

だが断る！！

「魔法陣展開！」

銃に模様が浮かび上がる。

……なるほど、「レは面白い。

「お前、まさか？」

「・・・それは私に使った対軍団用の雷の魔法ですね」  
よく覚えてるね。

「・・・ひょっとしてトラウマ？」

「ゴメン」

「・・・いえ」

ま、そういうわけでやりますか。  
ボクは銃口を敵の中心の上に向ける。  
そして引き金を引く。

すると、黄色い光弾が駆け抜ける。

敵の中央の真上に来ると光弾がはじけ、魔法陣が展開。

「アマイカズチ  
雨雷 ！！」

~~~~~！！！！！！

光と轟音の大合奏。

光が収まると、そこには人間だけが気絶をしていた。

「ソラ、何をしやがる！」

「そうよ！！酷いじゃない！！」

「目、目が！！」

「ドコのムスカ大佐だ？」

「そういえば三人は知りませんでしたね」

「アタシも二回目だから大丈夫だった」

「……………ゴメン。見方の被害も甚大だね」

「お、おい、ソラ坊よ」

ガントさんが目を押さえてボクのいるほうへと手を伸ばす。

「……………ごめんなさい」

「いや、味方は大丈夫なのか？」

「敵だけを打ち抜きました」

「そうか、それならいい」

そういうと、すぐに周りの人たちに指示を飛ばすガントさん。

「今は忙しいから何も聞かん」

「ありがとうございます」

「やることあるんだろ。さっさと行け」

あんた、いい人だよ。

魔物だけど。

「じゃ、こつちだ!！」

ボク等は走り出す。

s i d e???

「報告です!」

「どうした?」

ここは通称、迷いの森といわれる。

ここには国の命令で魔物の討伐のためにやってきた。

最近魔物の出現頻度が高く、正直面倒だ。

そこへ、あわただしく兵士がやってくる。

落ち着きがない。

「南の門を攻めていた兵からの連絡が途絶えました」

「……………それだけか?」

そんなことでいちいち私に報告をしなくていいだろう。

私ではなく、それは軍師に伝えるべき事だ。

「いえ、それが……………」

「言いたい事があるのならさっさと見え」

「はっ、報告によると、対軍団用の範囲系魔法で一瞬で殲滅させられた模様。偶然、遠くから様子を見ていたものがそう証言しています」

「よいではないか。魔物も一緒に葬った」

「それが、我が軍の兵のみをやられています」

「……………そうか」

そうか、よほどの凄腕がいるようだな。

そこで、私の指示を仰ぎたいということか。

しかし、そいつが魔物でなければわが国の戦力としたいものだ。

「で、どのような魔物だ？」

「それが……………」

「どうした？」

「いえ、擬人化してよくわからないとの事。ですが、魔物ではないかもしれないとの事です」

「……………まさか魔物に肩入れする人間がいるとでも言うのか？」
「？」

そんなもの、三流映画や小説の中だけで十分だ。

「いえ、そんなことは有り得ないと思うのですが……………」

「……………何か根拠があるのか？」

「いえ……………しかし……………」

「ならばさっさと行け」

「……………はっ」

面倒だ。

ここは私がさっさと終わらせるか？

s i d e 空志

「あそこだ！！」

ボクは都市の外の森にいる。

敵の本陣らしきところを発見。

「どうするんだ？」

「わたし的には一気にみんなで敵の指揮官に攻めたほうがいいと思うわ」

「私も同感です」

いや、それじゃヤバイ。

ボクの解析結果が間違ってたら……………。

「いや、ここで役割をまず分けて、敵の大将とその他大勢を分断。それがベストだと思う」

「どうして？」

リカがたずねてくる。

「指揮官の属性が危険かもしれない。だから、役割を決める。そして、今回のキーはたぶんだけどスズだ」

みんながスズのほうを見る。

「ほえ？わたし〜？」

「……ものすごく不安になってきた。」

side??

突然だった。私の天幕の近くで爆音が響いたのが。

「大変です！！敵襲です！！」

「バレんように細工を施したと聞いたが？」

「わかりません。敵が何らかの方法、あるいは魔法で察知したのかと」

「ふむ」

「敵の大将はドコだ〜！！」

やたらと若い、少年のような声が聞こえた。

「あんたたちじゃアタシ達に勝てるわけないでしょ」

私は天幕の外に出る。

「私がこの軍の指揮官だ!!!」

s i d e 空志

「敵の大将ドコ!?!」

「さあ〜。ドコでしょうね」

「がう」

「がんばって探してね〜」

ちーむ・ざ・A

こちらは敵の大将の担当。

ソラ&シュウ&スズ&レオのメンバー。スズはレオにまたがって上空にいる。

残りは後方の敵の殲滅を担当してもらっている。

特に冬香の数術術式は集団戦には最適。

リュウも魔法の応用がすごいし、リカには吸血呪ヴァンパイア・スベルがある。

あいつ等なら負けない。

「むしろ、こっちがヤバイ」

「そうですね、ソラさんの言うとおりだと本当にまずいですね」

「……………そんなににこやかに、そして爽やかに言われても説得力がない」

ま、今のボク達も前の敵を倒しつつ敵の大将を探している。
シユウは微笑んで敵を気絶させる。
はたから見ると怖いな。

「私がこの軍の指揮官だ!!」

突然、前方から声が聞こえてきた。

「・・・本命自ら出てきたか」

「そのようですな」

「一気に行くよ!!」

ボクは巨大な黄色い中に八つの円が描かれた魔法陣を展開する。

「ヤマタノオロチ
八岐雷大蛇　!!」

魔法陣から巨大な八つの頭を持つ蛇が現れる。
そして、ボクは命令する。

「ボク等の道を造れ!!」

八つの頭が敵の中を突き進む。

「何だ!?!この魔法は!?!」

「魔法だ!!あの魔法を破壊しろ!!」

これまた色とりどりの魔法を放つ。

しかし、大蛇は勝手に修復され、敵を倒していく。

「……また、すごい魔法を」

「ま、これで敵の大將もやっつけますか」

そして、あらかたの敵をやっつけた。

いつの間にか目の前には一人の人間がいた。

「止まれ」

「……お前が我が軍を殲滅した少年か？」

「完全にソラさんですね」

「いや、断言しないで。で、アナタが敵の大將さんですね？」

目の前の人、おそらくは敵の大將がニヤリと口元をゆがめる。

「そうだ。私がこの軍の指揮官だ」

「じゃ、軍を引き上げてください。そうすればボク達は何もしません。もちろん魔物達も」

「信用できんな。魔物のいうことなど」

「残念ながらボクは人間です」

「……面白い。だが、私は国より魔物の討伐を命じられ、さらにコレでも一応は將軍並みの地位にあるのでな」

要するに引くことはできないということか。
上司も大変だねえ。

できれば話し合いで終わらせたかった。

「私たちはやるしかないようですね」

「そみただね。じゃ、行け」

再び大蛇が進撃を始める。

「滅せよ。槍となりて無へと帰せ。
クリア・ランス
消滅の槍」

相手の魔法が発動。

白い光の槍が大蛇を打ち抜く。

「無駄だよ。それは勝手に修復されてく」

「ホントにでたらめな魔法ですね」

うるさいよ。

しかし、相手はより一層不適な笑みを浮かべる。

「ほほう。ならば全体を消せばいい。

そ基は消滅の力。

我に仇なす者を滅せ。

虚空にのまれ溺れる。

アリス・エンフティ
虚空の深淵」

それは一瞬だった。相手の手のひらに小さな穴が開いたかと思うと、そこへ大蛇が吸い込まれ、消えてしまった。

「……シユウ」

「詠唱から確認してもおそらくはソラさんの言うとおりでしょうね」

最悪の予想の中か。

「『消滅』。あるいはそれに準ずる属性」

「よくわかったな。私はいかにも『消滅』の属性だ」

それなら、最初から全力で行く!!

「シユウ!!」

「わかっています。魔法を練る時間ぐらいは何とかしますよ」

「レオ!スズ!」

「があああああ!」

「りょーかいだよ。わたしも援護に回るね。レオちゃんガンバる」

「そっちの準備はいいのか?」

待っててくれたんだね。

ずいぶんと余裕で。

「もち、魔法陣多重展開。 ホムラドリ 焰鳥！」

ボクは出せる最大の量の膨大な数の魔法陣を出す。それら全てが炎に包まれ、炎を纏う鳥となる。

「行け！」

「 クリア・ガトリング 滅す連弾！」

相手の指から消滅の弾丸が一斉掃射される。それらは ホムラドリ 焰鳥 を打ち抜く。しかし、いくつかは避け、敵に着弾。

「何だ？その魔法は？」

「……ボク、オリジナルの魔法」

「そうか……ならばこちらの番だ

滅せ滅せ滅せ！！！！

全てを消し去り神を殺せ！！！！」

！？

この感じは、まさか！？

「ソラ君！！！」

スズも気づいたようだ。

「いきなり真言ですか!？」

「みたいだね」

さすがにヤバい。

「スズ!魔法だ!!相手の前方!!」

「アンチ相殺!」

あらかじめ詠唱しておいた魔法をスズが発動させる。すると、ボクに見えていたマナを消す。

「オール・シング・ディサベアー森羅万象の消滅!」

しゅん。

うん。相手がものすごく間抜けに見える。

「……何をした?」

「アナタの真言に使われる予定だったマナを消した。真言はマナをたくさん使うみたいだからね」

敵の大将が驚く。

ボク等はチートぞろいだよ。

コレで驚くのは早い。

でも、よかった。リバー『逆』が効いてくれて。

もし、消滅で消されたらどうしようと思った。

「……なら、魔法を早く展開する!」

「させません!！」

シュウが駆け出す。

そして拳の乱打。

「…………やるな」

そういつつ腰の剣で応戦する。

てか、よく素手に対応できるな……。

「お前は人間か？」

「それは、ソラさんの専売特許です、よっ!！」

そういつて拳を剣の腹に叩き込んで武器を破壊しよつとする。

「魔力付与エンチャント」

「くっ!？」

シュウが大きく距離をとる。

「どうしたの?」

「消滅属性の魔力付与をされました」

「……………にしては早すぎる」

「私はもともとは魔装系の魔法が得意なんでね」

「マソウ系？」

「自分の体に魔法を纏わせる魔法です。フィジカル・ブースト肉体強化に近いものがあります」

「だから、私のように剣を持つやつが多い。お前のように魔銃を使うヤツは少ない。魔法で似たようなことができるからな」

「……もしかして、ボクの武器はあってないようなもの？」

「そういえばそうですね」

ちくしょおおおおおおお！！！！！！

「装填チャージ！」

ボクは銃を構える。

そして、引き金を引く。

純粹な魔力の弾丸。

たぶん、月の魔力の弾丸だ。

「何だコレは？」

相手はいとも簡単にそれを避ける。

……あれ？

何で避けた？

消滅の魔法で壁なり何なりを作ればいい。

ボクは銃をしまつて魔法を撃つことにする。

「紫電シデン！」

「無へと帰せ。
レス・ウォール
虚無の壁。」

壁を作つて 紫電シデン を消滅させる。

「そんな攻撃では私には効かない。面倒だ。こちらから行く!!」

「ソラさん!!」

「下がつてて!!」

剣を振りかぶってくる。

ボクはいつものスキルでかわす。

ついでに銃を取り出すがボクは攻撃をする暇がない。
だが、相手は容赦なく剣でボクを引き裂こうとする。

「…………ちよこまかと…………」

「何でみんな同じ事、をつ!!」

「もらった!!」

ヤバイ!!

ボクの顔に向かつて剣が振り下ろされる。

ボクは銃についてる刃で防ごうとする。

「魔力付与が付いたままです!!」

しまった!

忘れてた!!

相手の顔の笑みが広がる。

ガキンッ!!

「なっ!?!」

ボクは相手の剣を受け止めた。

「どういうことだ!?!」

待て、考える!

そこがたぶん勝機につながる。

ボクと敵の必死の腹の探りあいと攻防が続く。

「なんだ?その武器は?」

「最初からレベルMAXなボクにふさわしい武器だよ!!」

そういつつ左の銃の銃口を相手に向け、引き金を引く。

「ふん」

相手は左手に魔装を施す。

そして、ガードする。

「チャージ装填!!」

ボクは魔法 鎌鼬カマイタチ の弾丸を撃ってみる。
相手は同じようにガードする。

「!？」

相手は突然距離を取り出す。
相手の左手を見てみると痣アザができています。

「どういこと？」

「ちっ」

相手はまた攻撃を再開してくる。

考える!!

さっきと何が違う!!

最初から考える!!

ボクが防がれた魔法は 八岐雷大蛇ヤマタノオロチ を使ってから、 焰鳥ホムラドリ、
紫電シデン。

逆に防がれなかったもの。『逆』の 相殺アンチ、月の魔力の弾丸、
銃の刃での攻撃。風の弾丸。

魔法かどうか？

違う。『逆』のときの説明が付かない。

スピード。それだと受け止めたときの説明が付かない。

.....

相手がボク達の攻撃を理解してるか？

そうか、ボクの魔法は見た目で属性がわかる。

でも、『逆』だけは失われた魔法並の珍しいもの。相手はわからなかった。

そして、銃は神金鋼製オリハルコン。もし、コレを普通の鉄とかと判断したの

なら未知の武器ってことになる。
要するに、相手は……。

「属性がわからないと消滅できない。物体に関しても同じようなことがいえる。」

「ちつ。バレたか。ま、わかった所でどうしようもないだろうがな。天空と火の魔法使いよ」

そうだ。

今のボクには相手に決定打を与えられない。
相手にもボクの属性がバレてる。

いや、『月』がバレてない。

でも、バレる可能性がある。

やるなら、一撃で決める必要がある。

真言。

最上級の究極魔法。

でも、時間がない。

その暇がない。

たぶんだけど、真言はムリかも知れない。

でも、それに近い物ができると思う。

どうすればいい!!

「シュウ!! スズ!!」

「やっと出番ですか?」

「何?」

「もし、できればリュウ達を呼んできてくれ!」

20話・NIGHT MAGIC

side 隆介

「このおおおおおおお！！！！」

「うっさいわー！！」

オレは容赦なく魔法をぶっ放す。
てか、正直メンドイ。

「リュウ〜後ドンだけいんのよ〜。

発射^{ショット}
」

氷の槍の一斉掃射。

さすが冬香だ。

「アタシ疲れた〜」

そういつて大鎌をぶんぶん振り回すリカ。

……オレ等、緊張感がないな。

ドカ！バキ！ドコン！

「……無意識にボコしたか」

そろそろ戦況の確認か？

「ここのザコはあらかた潰したように思っただがな？」

「お前ら〜。どうだ〜？」

「発射^{シヨット}。コレで終了〜」

「こっちはもう終わってる〜」

そうか、オレは周りの死屍累々としたこの惨状を見る。

機構魔道人形の残骸、人…………。

だが、全員生きてる。

重畳重畳。

「ソラたちの所に行くか？」

「そうね」

「じゃ、行こう」

「だが、オレはドコにいったか知らんけどな」

「みんな〜!!」

この声は…………坂崎か？

声のしたほうを見るとレオにまたがった坂崎がこっちに猛スピードでやってくる。

「ソラ君とシュウ君がピンチなの!!」

side 空志

「…………シュウ。薬は？」

「ここにあるのはただの水です。飲みます？」

……さいですか。

「オラオラ！」

「言葉遣いが荒くなってますよー！」

「さっきのような礼儀正しいほうがボクとしてはいいです」

ガキン！

ボクは盾になっている状態。

シユウは隙を見て魔装のかかってないところに拳を叩き込んでもらってる。

てか、正直疲れた。

「二人がかりでコレか？」

「うるさいチート」

「チート一号が何を言ってるんですか？そして、今思ったんですけど、レオ君にアレをしてもらえばよかったんじゃないですか？」

「あれ？」

「ほら、言ってたじゃないですか。光線的な」

……。

……。

……。

「ソラさん？」

「いえ、ボクには知りたい事があるんで。勝ったらボクが聞くことに答えてください」

「恐ろしいほど私にメリットがないな」

「じゃ、ソラさんが何でも一つ言うことを聞く。というのはどうでしょう？」

何恐ろしいことを言ってんだこいつは！？
それは、ボクにとって確実な死亡フラグだ！！！！

「よし、それいいな。お前、私の国に來い」

「何、とんとん拍子に話を進めるんだ！？」

ヤバい！これは非常にヤバい！！
しかも国に來いとか……。。

「絶対に負けられねえ！！！！」

「『ソラ（君）！』『ソラ（君）！』『ソラ（君）！』」

救世主だ！！

みんなが神様に見えるよ！！

「助けて！！ものすごくピンチだ！！」

人生的な意味で。

「……わりと大丈夫そうに思うんだが？」

「黙れ、アホ魔王の孫！！」

「ホントにどうしたんだ！？」

「戦闘配置！！前衛にリュウ、冬香。そのフォローにスズとレオ。リカはボクの護衛。シュウは特攻しろ！！」

「最後は私への復讐ですよね！？」

当たり前だ。

ついでに説明もしとけ。

「……皆さん。敵は……」

シュウが説明を開始する。

じゃ、こっちは後ろに下がってやりますか。

「魔法陣展開！」

ボクは何も描かれていない魔法陣を展開。

「またアレをするの？」

「いや、あいつにはボクの月しか効かないと思う。」

「とうるか……。」

「真言級の魔法で一撃じゃないと倒せない」

ボクは魔法の構築を開始する。

side 隆介

「おい、あんたの味方はオレ達が降参してくれねえか？」

「後で増援がくる手はずになっている。私さえ生き残っていれば問題は無い」

最悪だな。

シユウの説明だところちはとにかく魔法を打ちまくるしかない。

「しょうがねえ！！
闇の刃ダイク・エッジ！！」

「ショット 発射 ！！」

「がんばれ」

「私に何をしろと！？」

魔法が咲き乱れる。

side 空志

構築しろ！

月の魔法で。

魔法が出来る上がる。

「ダメだ、こんなんじゃ勝てない」

「どうするの？」

「・・・」

わからない。

そもそも、月の属性がわからない。

「どうすればいいんだよ！！」

side 隆介

「ソラはまだか！！」

「これはきついわね・・・」

「わたしは燃費が悪いのに」

「ですから、私にどうしろと！？」

てか、こいつは強い。

ホントに頼みの綱はあいつの月だけだ。

「ソラ・・・！！」

side 空志

どうすればいいんだ？

月の魔法はマナの操作ができる。

ボクはそれしか知らない。

「きゃああああ！」

「スズネ！」

「ウソ！？」

リカの目線の先には倒れているスズ。

「ちつ、ダーク・エッジ闇の刃！」

「それは見飽きた」

「がつ！？」

「リュ！？」

「余所見とは余裕だな。」

「コレでどうです！？？」

シュウが拳を振るう。

「単調すぎるな。そして、先ほどより速度が落ちている」

その言葉と同時に倒れるシュウ。

「みんな！！」

「ソラは魔法を!!」

そういつてリカが飛び出す。

「……………吸血鬼か」

ヴァンパイア

「よくご存知で。」

そして、戦闘を始める。

「……………クソ!!」

焦るな!!

冷静にだ!!

でも、うまく魔法が構築できない。
どれくらい考えたのだろう。

リカの悲鳴が聞こえた。

「きゃあああああ!!!!」

「リカ!!」

倒れるリカ。

「最後はお前だ」

みんな…………。

ボクのせい?

ボクが魔法を構築できなかったから?

「う、うわあああああ!!!」

ボクの後ろから大勢の人の気配。

「大丈夫ですか!？」

敵の増援が来たようだ。

「私の勝ちだな」

どうしよう、わけがわからない。

みんながやられた。

ボクじゃ勝てない。

「おい、悪友」

声が出た。

リュウだった。

「……リュウ、ウ？」

「ソラ君はこの都市の英雄ユウシヤになるんだよね？」

「あんたは規格外でしょ」

「ソラさんのせいではありません。」

「……ソラ。勝って」

みんなの声はものすごくか細く、聞こえてくるのが不思議なくら

いだった。

「……みんな。」

ボクはコレまでにあった魔物たち、そして龍造さんの願いが頭をよぎる。

『この都市を守ってくれ。』

「ボクは……」

「……なんだ？」

みんなを……。

都市を、守りたい。

最初から決まっていた。

なら、最後まであがく！！そして……。

「自分が正しいと思う道を突き進む！！！！」

ボクの中の魔力が突然あふれ出した。

「何だ！？この魔力量は！？」

「それは魔の法則」

ボクの言葉と同時にボクの前に小さな魔法陣が展開する。

「コレはなんだ！？」

パニックに陥る敵。

魔法を放とうとする敵がいる。

「ツキモリ月守」

ボクを取り囲むように魔法陣が展開する。
すると、敵の魔法が放たれる。しかし、魔法陣の壁に阻まれる。
ボクは魔法を再開する。

「でも、それは光」

「何だこいつは!？」

「こいつらを人質に取れ!!」

「レオ!」

「があああああ!!!!」

ボクは炎を使った治癒の魔法をかける。

「みんなを安全なところに」

ちゅん!どおおおおおおん!!!!!!

レオが咆哮覇で敵を蹴散らしながらみんなを回収。
そして逃げる。

「それは太陽の輝きのように全てを照らせはしない」

「これは……まさか真言か!?こんなのは聞いたことがない……」

「 太陽のようとはまでは言わない。
ボクは……」

「……つち。 クリアランス 消滅の槍 ！」

だが、ボクの魔法陣の盾は消滅の槍を弾く。

「 ボクは夜の闇を照らす小さな月の明かりでありたい」

魔法陣が一際大きな輝きを放つ。

「 闇夜を照らす月のような希望の光となれ！！」

魔法陣から魔力があふれ、暴れだす。

そして、魔法陣がより一層輝く。

「 ツキヨ 月夜
」

すると、周囲がまぶしい光に包まれる。

ボクはたぶんだけどわかった。

月の魔法。

それは魔法の根源を操る力なんだと思う。

だから、正確には『魔法』というのがボクの属性なんだと思う。

でも、じいちゃんや龍造さんはこの力を夜を照らす月のようであ
って欲しい。そう思ったから『月』なんて呼んでたんだと思う。

ボクはダークサイドの側に立った人間だ。

でも、ボクはコレが正しい、そう信じる。

魔法陣がはじける。

ボクの手には魔力で構成された光の剣があった。

「具現化だと！？そんな超古代魔術をこんな子供が！？」
マテリアライズ

「具現化なんてボクは知らない」

ボクは魔法のド素人だ。

ロスト・マジック
この魔法が失われた魔法だとかは関係ない。

「この都市を、みんなを守れる力ってだけで十分だ！！」

ボクは相手との距離をつめる。

手の中の光剣を振りかざす。

「ちっ！？」

剣で受け止める。

ボクの魔法のみで構成された剣は消えない。

「何だこの魔法は！？」

「敵を討て！！」

ボクの手にある剣が魔法を発動。

いくつかの月の魔法の弾丸が相手を撃ち抜く。

相手は悲鳴も上げれずに気絶した。

「ここにいる敵全てを薙ぎ払え！！」

ボクは剣を敵の集団に振りかぶる。

すると、剣が伸び鞭のように敵へ襲いかかり敵を全滅させた。

「・・・終わった」

・・・ちよつと疲れた。

「ソラー!」

上を見るとレオに回収されたはずのみんながレオの体にしがみつ
いてこつちに向かっているのが見えた。

「危ないから逃げろって言ったのに・・・」

ボクは、みんなを見たからか、気が緩んだ。

ボクはそこで意識を手放した。

21話・DAILY?

side空志

あれから一週間が過ぎた。

ボクはあの後また数日間の間を眠ってしまったようだ。

あの後、みんなから鉄拳制裁を受けた。まあ、しょうがないね。龍造さんの結界は再構築され、今もこの都市を守ってくれてる。

気絶した兵は強制的に森の外に送り出されたいらしい。あの指揮官に聞きたい事があったのに……。ま、しょうがない。

そして、もう都市は復旧した。

さすがは魔物の都市。

ドワーフの力の賜物のようだ。

「ホントにこの2週間はいろいろあったな」

「そだね」

「ホントにいろいろありすぎたな」

スズとリュウが返してくれる。

「ソラ、ホントに行くの?」

そう言うのはリカ。

説明をするのを忘れてて、つい最近話した。異世界から来たことを。

「しょうがないですよ」

「まさか、あんたたちが向こうの人だったとはね」

そういうのはシユウと冬香だ。

今日は、ボク等が向こうに帰る日だ。

間家の方々に魔法のお墨付きはもらった。

ここは、異世界間の移動用の門だ。^{ゲート}

足元に大きく、複雑な魔法陣が描かれている。

「機会があればまた会いましょう」

「また、一緒に戦闘訓練をしましょうね」

「はい、颯太さん。優子さんは結構です。レオを頼みます」

ボクはレオを颯太さんに預けた。

レオとしてはこっちのほうが環境がいいと思ったからだ。

そして、いろんな人が見送りに来てくれた。

今や、ボク達はこの町のヒーローでみんなの名前は知れ渡っている。

「お主ら、準備はよいか？」

龍造さんが声をかけてくる。

「ホントにありがとうございます」

「こっちこそ都市を守ってくれてありがとうございます」

「こっちもたくさんお世話になったからね」

「そうか。……じゃ、起動するぞ」

ボク達の足もとの魔法陣が輝く。

「これは学園の屋上に通じている。じゃ、元気だな」

「リユウは来ないの？」

「オレにもやることがあんだよ」

「そっか。ちょっと寂しいね」

「大丈夫だ。すぐに会える」

ボクもそんな気がするよ。

「じゃ、また会おう！」

ボクとスズは気づくと学園の屋上にいた。
時刻は昼時。今日は土曜の休日だ。

「……帰ろっか」

「……そうだね」

ボクとスズはそれぞれの家へと帰って行く。

〜数日後〜

「うかつだった!!」

まさかテスト期間だったとは!!

テスト自体は昨日終わった。

ボクはまさかのノー勉で挑んだ。

「ソ、ソラくん」

ボクの教室にスズが現れる。

「・・・聞かないでおく」

「そうしてくれると助かるよ」

「お〜い。今日は急遽体育館で理事長の話があるぞ」

そういったのはボクの教室の担任。

みんなはえ〜とか言いながら教室を出て体育館へと向かう。

「・・・この学校にも理事長とかいたんだ」

「そうだね。でもテストが〜」

頭を抱えるスズ。

安心しろ。ここに同士がいる。

いん・ぎ・体育館。

「理事長ってどんな人？」

「そついや、理事長は15年ほどこの学校をほったらかしにするほど適当らしいぜ」

そついったのは学生A。
所詮モブの一人。

「いや、ぶっちゃけるなよ!？」

「ドンマイ、学生A」

「ちくしょおおおおおおお!!!!!!」

でも、似たような内容をつい最近聞いたような気がする。
特に15年の部分。

「静かにしてください」

一人の先生がざわざわした体育館を静かにしようとする。
わりかし治安のいいこの学校はその一言で静かになる。

「では、理事長、間龍造からのお話です」

。。。。。

。。。。。。。

オイコラ、イマナンツツタ？

すると、壇上には、ネスト魔窟マオウの市長。
種族はドラゴンの龍造さん。

「何でいるんだよ!!」

「そのキミ。静かになさい」

「いや、無理ですよ優子さん!!」

「……あれ？」

「何で優子さんまでええええええ!!!!!!!!」

そこにはスーツを着こなす眼鏡美人な優さんがいた。

「ソ、じゃなくて、君、ちと静かにしてくれんかの？」

今、ソラって言いかけたよな!!

スズのほうをしてみる。

スズは隣のクラスで出席は前のほうだ。

そこには呆然としたスズの姿がある。

ダメだ。頼りにならない。

体育館がざわざわしだす。

「静粛に!!」

優子さんの一括で静まる体育館。

ボクは混乱してしまって、話をろくに聞いてなかった。

「どういこと!?!」

「サプライズだね」

サプライズ過ぎるよ!?!?

ボクは周りから好奇の目で見られてるし!

「よし、じゃあ一年からクラス替えの教室を見に行くぞ」

……ごめんなさい。

超展開過ぎてついていけません。

「聞いてなかったのか? 理事長の権限で急遽クラス替えすることになったんだよ。各階の掲示板に張り出してるらしい」

教えてくれるのは学生A。

この学校はかなり前に話したとおり、広大な敷地を持つ。

ボク等が普段いるのが教室だけの棟。教室棟。

三回から順に一年、二年、三年という風になっていて、クラスは10もある。ちなみに一クラス30〜40ぐらい。

「いや、もうAやめれ」

学生Aが文句をぶーたれる。

メンドイ。

じゃ、田中太郎で。

「普通すぎて珍しすぎる!?!」

田中太郎がツツコム。

「決定なのか!?!」

「スズ、おそらく龍造さんのことだ。他にも何かしかけてる」

「そうだね」

ボクとスズは真剣な表情で話し合う。

田中太郎はスルー。

「・・・」

切ない顔をしてるが無視だ。

今はそれどころじゃない。

「とりあえず、クラスを見に行こう」

ボクとスズは荷物を持って教室を出る。

「俺は?」

さらば、田中太郎。

「やっぱり同じクラスか」

「そうだね」

ボクの隣の席に陣取ったスズが言う。

ボク等は一年一組になった。

てか、いくらなんでも職権乱用だ。

教育委員会に訴えなければ。

・・・しまった。ケータイは壊れたままだった。

「おい、お前ら。着席しろ」

担任が来たようだ。

うん。ガタイのいい鬼人^{オーガ}。

・・・。

「「ガントさん!?!」」

門番のガントさんだった。

「何を言う。俺は原土元太^{はらとがんだ}だ。ソ、じゃなくて三谷」

「いや、ボロ出しかけてたたる!?!」

「そんなことより転入生だ」

「スルーを決め込むな!?!そしてすごくやな予感がするからその先はしゃべるな!?!」

「三谷、先生はお前をそんな風にした覚えはないぞ。」

「全力であんたたちのせいだよ!!」

「ま、転入生来い。後から遅れてもう一人来るからな
がらっ。」

「転入してきた間隆介だ」

黒板にガントさんもとい原土先生が間隆介と書く。

「ホントにすぐだったな!？」

「何を言うんだ?うれしくせに」

もう、黙れよ!!

そして、リュウが空いてる席に座ると、そこからは今後の予定とかが配られた。

ボクは校内で変人のレツテルが張られた。

「で、コレはどういうことだ?」

ボクは周りの生徒から質問攻めに合うリュウにたどり着くとそう聞いた。

「この学園がジジイの経営する学校だ」

なるほど、全てを理解した。

「……………そんなに魔力を垂れ流してドコに行く気だ？」

「いや、龍造さんを地獄の一丁目辺りに旅行させてあげよう」と

扉を出ようとするボクに声をかける。

邪魔をしたらリュウといえど命に保障はない。

「止める気はさらさらないがそろそろ来るぞ」

「何「ソラ！」ぐふおあ!？」

何かがボクにタツクルをかまし、床に押し倒す。

それは、日本にしては珍しく、外人のようだった。グローバル化が進んでいる。

髪は白髪。顔だちはかなりかわいい。町に出ると10人の男子が10人とも振り返るだろう。そして、目が赤い少女だ。

「って、リカ!？」

「会いたかったよ」

ボクに抱きついてそんなことを言う。

……死亡フラグな予感。

周りの男子の殺気が膨れ上がっている。

「相変わらずにぎやかな」

「それが皆さんですよ」

方や凜々しい委員チョータイプな眼鏡が似合う女子。
方や爽やかな笑顔を常に振りまく優男な男子。
冬香とシユウだった。

「なにコレ!?!」

「私達もこの学校に入ったんですよ。偶然にも全員同い年だった
ようですね」

そんなことは聞いてない!

「わたし達が来てうれしくせに」

そういつて床に転がったままのボクの頬をつつく冬香。
・・・なんで女子の殺気が膨れ上がったし?

ぴんぽんぽんぽん。

『今から呼ぶものは理事長室に来るのじゃ』

逃げよう。

『あゝ。テスト最下位の三谷空志、坂崎鈴音』

「「クロス!!!」」

「落ち着け」

『面倒じゃな。というわけでいつものメンバー来い』

「ソラー。一緒に行こう」

リカがボクを立たせ、腕を組む。

ブチイ！

そんな音が聞こえた気がした。

「「「三谷イイイイイイイイ！！！！」」」

みんなどうした！？

目が血走ってる！！

「坂崎さんだけでなくアンジェリカさんまで！！てか、アンジェリカさんはクラスではそこまで明るくなかったぞ！？」

「さらにはお姉さままで！！」

「何のことだ！？アンジェリカ誰！？」

「あ、それアタシ。最初に会ったとき、声が小さくて聞き取ってもらえなかったの。フルネームはアンジェリカ・シエルス。でも、これまでどおりリカって呼んでっ」

そうなのか。それならしょうがないよ。

リカはボク等に会うまで人間に忌み嫌われてきてきたから。

この6人以外にはあまり積極的になれないっぼいし。

じゃなくて!!

「どうしてこうなってんの!？」

「「「我らはスズネ愛好会!!」「」」

そう言っって何人かの男子が声を張り上げる。

「貴様のその狼藉、許すまじ!!」

「ドコに許されない要素があつた!？」

「我らがスズネ譲を軽々しく『スズ』と呼んでいたではないか!
!そして、最近までスズネ様の近くにお前はいなかったのに何故こ
んなに親しい関係になっている!？」

要するに妬みですね。八つ当たりですね。

スズはキョトンとしている。

じゃ、次。

ボクは次の集団に目を向ける。

「「「わたし達はお姉さま後援会!!」「」」

「次。」

「聞きなさい!!」

腐女子にはかわりたくない。

どうせ、冬香に近づくなだろう。

「おれ達はアンジェリカFCだYO!!」「」

「みんな、行こう」

「聞けよ!!」

進路に回りこまれてしまった。

・・・メンドイがしょうがない。

できればアホの集まりにはかかわりたくなかった。

ま、さっきの腐女子よりはマシ。

「君はアンジェリカさんをその毒牙にかけたじゃないか!!」

いや、わけがわからん。

「・・・ある意味そうかもな」

リュウがつぶやく。

・・・何かした？

「そして、アンジェリカさんから離れる!!」

殺気がさつきより濃密なものになる。

これはヤバい。

「離れる!!リカ、命が危ない!!」

主にボクの。

「え〜。あの時は強く抱いてくれたのに・・・」

ピシイ!!

・・・本格的にヤバい!!
みんな何かを誤解している!!

「みんな！誤解だ！！確かに抱いたけどそれはリカを守るためだ
ったわけで」

「「「キエロ!!」「」」

さらば!!

ボクはリカを振りほどいて逃げる。
こんなときのためのボクのスキルだ!!
ボクは危機回避スキルを使って逃げ回る。
・・・どれくらい位逃げたんだろう？

「そろそろ体を休めないとツライ」

周りを見ると保健室があった。
ベッドに隠れて病人のフリをしよう。

ガラッ。

「あ、ソラ君ではないですか」

「・・・なんで颯太さん」

「私はこの学校の校医です」

もういい。ツツコムのに疲れた。
ボクは近くの椅子に腰掛ける。

「かくまってください」

「あの騒ぎはキミが原因ですか」

ボクは乾いた笑い声を上げる。

「正直、生きていける気がしません」

都市の防衛戦より疲れる。

「ですが、顔に楽しそうな笑みが浮かんでいますよ」

ボクは自分の顔を触る。

確かに笑ってる。

「なんだかんだ言って、結構楽しそうですよ」

「・・・そうかも知れないですね」

「ソラ！」

リカ達が保健室に飛び込んできた。

「何でわかったの？」

「恋する乙女の手だよ」

スズがわけのわからないことを言う。

「そんなことより、呼び出したから理事長のトコ行くわよ」

「そうですね。ソラさん、行きましょう」

「行くぞ、悪友」

こんな非日常の日常もいいかもしれない。
ボクは立ち上がる。

「あ、そういえば、レオ君も連れてきました」

すると、ベッドで寝ていたのかレオが顔を出す。

「み〜」

コレで全員集合か。
ボクはレオを呼ぶ。
すると、レオはボクの後頭部に張り付く。

「じゃ、理事長室まで競争と行きますか」

「魔法は？」

「無しに決まってるだろ。もちろん薬も」

「バレましたか」

準備はオツケーだ。

「じゃ、行くよ」

みんなは走り出す構えを取る。

「位置について〜ドン！」

ボクはちよつとズルをする。

みんながボクを非難しながら追いかけてくる。

これからも日常な非日常が始まる。

「人肌が恋しくて・・・」

ウソ付け！！

リカはまだ人間不信が治ってないだろ！！

クラスのやつとどこるか先生に関しては ネスト魔窟の魔物の先生としか話せないぐらいにダメだろ！

「じゃ、おはようのキスを」

「いや、何の脈絡もない上に、いい加減吸血をキスって言うのやめよう。今回を入れて二回しか言っていないけど。それと・・・」

かぶ。ちゅ。

「話を聞、け、よ・・・」

ボクの首をがっちりホールド。

ボクに抱きついて首筋に犬歯をつきたてて血を吸う。

前は腕を差し出したらそっちで吸血してくれたのに・・・。

何でか最近はおくに抱きついて首あたりに吸血する。

コレはいろいろとまづい構図だと思う。

それにかなり密着する形になる。

それにリカは美少女だ。ボクの気が変になりそうだ。

だがしかし！！今のところは理性が勝っている。

ボクの精神力をなめるなよ！

「ん」

「・・・」

サーセン。

リカサン、ボクの胸にあなたの胸があたってます。さっきより強く抱きしめないでください。

いろいろとかなりまずいです。

「ソラく〜ん朝ごはんだよ〜」

この声は!!!

救世主降臨か!?

・・・いや、今のこの状況はダメだろ!!!

「リカ!離れて!!」

「え〜」

何だこいつは!?

今の状況がわかってないのか?

「ソラ君?入るよ〜」

「あ、ちょ!」

ガチャ。

「・・・ゴメンね。お取り込み中だったんだね」

「えへへ〜」

「ちつがあああああう!!!!!」

扉を開けたのは校内にファンクラブを持つ天然系ののほほんとした少女。

坂崎鈴音。通称スズ。『^{リバース}逆』の属性を持つ魔法使い。

「どうした？」

次にやってきたのは間隆介。通称リュウ。

ドラゴンで擬人化すると結構なイケメンになるボクの悪友。ついでに魔王の孫だ。『闇』の属性を持つ魔法を使う。

「事件のにおい!?!」

駆け込んできたのは平地冬香。眼鏡のショートカット。凛々しいお姉さまな女子。

女子にモテるらしい。ちなみに、転入一日目でリカとともにファンクラブを作らせることに成功している猛者だ。

「朝からにぎやかですね」

爽やかな笑顔で入ってきたのは李^{リー・シユウ}樹。樹族の薬剤師の優男風の男子。

こいつも転入した日に女子のハートをつかんだらしい。

「・・・」

そして、ボクは固まってしまふ。

この状況を打破するにはどうしよう。

「朝から何やってんだ？」

こんな風な状況になったのは、昨日のあれのせいだよな……。

（昨日）

「……死ぬかと思った」

「むしろ、あれで生きてけるやつはお前だけだ」

「ホントに規格外ね」

うるっさい。

「しかし、下手するとあの指揮官さんより強いかもしれませんね」

「なぜか途中で狙撃されそうになった気がする」

それはたぶんボクを狙おうとしたんだよ。

スナイパーライフル
狙撃銃構えた人がいたからね。

アサルトライフル
突撃銃を持った人が暴徒鎮圧用ゴム弾を放ってきたときはこの学

園は治外法権なのかと思った。

ボクのスキルは今日、レベルアップしたな。

「こうして、ソラ君の人外度もレベルアップだね」

「それは嫌だ!!!」

「だが結局、最下位は補習アリで張り出されるんじゃないのか？」

「「「「」」」」

「ま、そんな事はほっとしておぬし等に話がある」

復活早いな！！

前回の間家の方々にフルボッコにされたときもそう思ったけど。

「単刀直入に言うが、寮に入れ」

「無理」

そう答えるのはボク。

普通に考えて話が急すぎる。

「親に話してもないのにそんなことを言われても……」

ブルルルルルル。

……電話かな？

「もしもし。あ、三谷さんですか。この度は急なことを申し付けて誠に申し訳ない」

「何でだよ！！」

『あ、空志？そこにいたの。急だけどゴメンなさいね』

ボクが電話を奪い取ると、相手は我が母だった。

「何この超展開!？」

『でも、特別クラスに入ったんでしよう?そのクラスの子達は寮生活を義務付けられるんだからしょうがないじゃない』

・・・それってどういうこと?

『皆さんに迷惑を掛けちゃダメよ。じゃ、がんばりなさい。理事長さんにもよろしく言っときなさいね』

ガチャ、ツー。ツー。ツー。

「・・・どういうこと?」

「お前らは魔法使い。あるいは特殊なことができる。じゃから、わし監督の下でそっち系の特別授業を受けてもらう。スズネちゃんの方も連絡をしておいたから大丈夫じゃぞ。荷物はすでに寮の部屋に届けた。足りんものは各自でそろえてくれんかの?」

あまりのことにビックリする暇がない。

「コレで話は終了じゃ。ホレ、次の授業に間に合わんぞ」

ボク達は自分の教室へと戻っていった。

「ということがあったんだよな」

というわけでボク達6人は寮にいる。

この寮は龍造さんが以前住まいに使っていたようで、普通の家だ。いや、結構大きめな家だ。

部屋数が多く。まだ10はある。

それぞれ勉強机とベッドは完備。

部屋は自分で改造可。

かなりの待遇のよさでビックリした。

そして、寮の記念すべき一回目の朝にボクが添い寝をされているという事件が発生した。

「ちょっと、このおもし、じゃなくて愉快的な状況を説明しなさい

よ

「冬香、言い直す意味があったのか？」

「・・・既成事実を」

おい、お前は突然何を言う？

「そうか、それならしょうがない」

「そうだね」

「しょうがないですね」

「なぐんだ、修羅場じゃなかったのね」

「みんな！！何で納得したの!？」

「ここには常識が通じないのか!？」

「一番常識が通じないのはソラだと思う」

「・・・いい加減に抱きつくのをやめて」

ボクはリカを部屋から追い出す。

・・・制服に着替えてリビングに行こう。

「おはよう」

みんなも挨拶を返してくれる。

「じゃ、朝飯だな」

「そういえば、コレは誰が作ったの？」

「わたしだよ」

・・・大丈夫かな？

「料理はできるんだよ」。そんなこと言っただったら取り上げるよ」

「いただきます」

ボク等は朝食を開始。

メニューはご飯と味噌汁。

日本はやっぱりコレだね。

「・・・うまいな」

ボクもそう思った。

よかった。

「おいしいですよ」

「ありがとう」

ボク等は適当にしゃべりながら食事を続ける。

平和だね。うん。

「みんなで登校か」

一人での登校を常としていたボクにはちよつと新鮮だ。

といっても、この広大な学園の敷地内の寮だからものの十数分で学校に着く。

「じゃ、私達はクラスがこちらなので」

「また、昼休みに合流するわよ」

「おう」

「おっけ〜」

「わかった」

「りょーかい」

そうやってボク達は分かれる。

「そういえばリカのクラスは？」

「何を言ってる。オレ達と同じだぞ」

え？

だって昨日はリュウしか紹介されてないじゃん。

「ガントさんが後から来るって言ってた転入生はリカちゃんか〜」

そういえばそんなこと言ってたな。

・・・果てしなく死亡フラグな予感。
今現在の場所は教室イェロ近く。

ボクの頭の中で危険信号が点滅する。

「ゴメン。用を思い出したから先行ってて」

逃げるのが一番！！

「何言ってるの。ほら、行くよ」

リカがボクの腕を組むようにしてつかんで引っ張る。

ガラッ。

ギン!!

「さらば!!」

「「「三谷iiiiiiiiiiiiiiii!!!!」」」

リカの腕を振りほどいて逃げる!!

追いかけてくるのはスズとリカのFCの方々。
全員が木刀やらメリケンやらで武装している。

「貴様何を朝からイチャついてんだああああ!!!!!!」

「何でボクだけなんだ!？」

「残りの二人は勝てる気がしないからな!!」

ただの臆病者^{チキン}だった。

「だが、おれ達の同類だと思っていたお前が何故ハーレムを形成している!!」

「いや、リュウとシュウもいる!!」

「「「問答無用!!!!」」」

「話を聞けよ!!!!ってうわ!?!?ゴム弾!?!?」

飛んできた方を見ると狙撃中を構えた女子が後ろの通路の影に。
レシーバーのようなもので連絡を取っているようだ。
冬香のほうか!!

てか、どっかの過激派テロ組織よりヤバいぞ!?
ここって学校だよな!?

「止まりなさい!!」

ボクは急停止。

言われたことに従ったわけじゃない。

ボクの前方に回りこまれてたんだ。

アサルトライフル サブマシンガン
しかも突撃銃や短機関銃的なものを構えた状態で。

ボクにはあれを無視して突貫する勇氣（無謀）は持ち合わせていない。

「アナタには選択肢があります」

「・・・どんな？」

「苦しみぬいて天国へ逝くか楽に地獄へ逝くか」

「さらば!!」

ボクは窓を開けて三階から飛び降りる。
命は大切だからね!!

「突風！」

こっそりと風を起こす魔法を使ってボクの落下速度を落とす。
着地。そして、逃走。

三階からは「あいつ人間か!？」という言葉が飛び交う。
いや、二階からなら何も無しで飛び降りて無事だ。何回かやったことがある。

とりあえず、授業が始まるまで約10分。
がんばって逃げよう。

「お疲れ」

「死ぬかと思った」

「でも、魔法使つてよかったの〜?」

「あの程度なら大丈夫だ」

「やっぱバレてたか。」

「だが、相手は過激派テロ集団より強いからしょうがないよね！」

「お〜し。席つけ」

「そう言ってくるのは我らが担任、ガント・バルドさん」

「三谷、俺は原土元太だって言ってるだろ」

「サーセン」

「適当だな」

「おっさんだからしょうがない」

「間、後で職員室来い」

「だが断る!」

「門番してなくていいの?」

「……もうお前ら黙れよ」

そついうと出席を取っていく。

「よし、休みはいないな。それと三谷、坂崎、間、シエルス。お前らは午後は理事長室で特別クラスを実施すると理事長のお達しだ」

「突然ですね!」

「ジジイだからな」

「しょうがないよ」

「あの人はいい人だと思う。……特に寮のことか(ボソツ)」「
リカがなんかおかしいが今は授業に専念しよう。」

コレがボクの日常。「レ」

2話・SPECIAL CLASS (前書き)

PV15000、ユニーク2000。

本当にありがとうございます。

2話・SPECIAL CLASS

side空志

「で、特別授業って何？」

所変わって理事長室。

「魔法の練習じゃ」

。。。。

優子さんが微笑んでいる。

コレはものすごく危険なことが始まるうとしているに違いない。

ここは逃げるのが一番か？

「そこでじゃ、鈴音、リカ、冬香はわしが、隆介とシュウ、ソラには優子をつける」

ダダダッ！！

ガシッ！！

「嫌だ！！ボクはまだ死にたくない！！」

「私にもまだ作りかけの薬が！！」

「ジジイ！！コレはどういうことだ！！」

「女の子にそんな訓練をさせちゃいかんじやろ」

「本音は！？」

「かわいい女の子たちとわきあいあいとしたいのじゃ」

「クロス!!!」

ボク達男子の心が一つになった瞬間だった。

「イジメ戦闘訓練の時間よ。がんばりましょう」

「「「助けてー！ー！ー！ー！」」」

数分後、学園中に断末魔の悲鳴が響き渡り、めでたく七不思議のひとつとなった。

「ばばとらっしゅ……」

「私の目の前に花畑が」

「……」

「ここは訓練場のようなトコ。」

学園にこんな物があったとは知らなかった……。

ボク達は三人がかりで挑んだにもかかわらず優子さんからワンサイ一方的なドゲーム戦闘をされた。かすってすらいない。

「でも、成長したわね。30%ぐらい本気を出したわ」

一人ずつなら10%かい。

「ソラ君の策略で15%ほどかしら？」

ボク達の戦闘力はゴミのようだった。

でも、奇襲すら通じないとかどうすればいいの!?

「隆介は詠唱を省略しすぎ。威力が低いわ。シユウ君は薬を飲む動作が遅い。すぐ飲めるように工夫があるわ。ソラ君はまだ自分の力を出し切ってないわね。魔法のレパトリーを増やしたほうがいいわね。全体はコンビネーションはまあまあかしら？」

「ハッ」「ハッ」「ハッ」

「終わったかの？」

声のほうには龍造さん。

シユウが龍造さんとの間合いをつめる。

「ハッ! ! ! !」

「ごぼ! ! ?」

顎に掌打。

龍造さんが浮く。

「ダークネス・スピア暗黒の刺剣 ! ! ! !」

「ホムラドリ焰鳥 ! ! ! !」

すかさず魔法を放つボクとリュウ。
軽い爆発音。

すると、ボロ雑巾のような状態になる龍造さん。

「な、なぜ、じゃ・・・ガク」

「・・・一番の連携だったわよ？」

「」「当たり前です(だ)」「」

「ところでじゃが・・・」

もう復活したのか!?

ギャグ補正恐るべし!!

「そろそろGWじゃろ？」

「そういえばそうだな。」

「でじゃ、ソラにログから伝言があつてな。」

「ボクに？」

なんだろう？

「武器の金を払えということじゃ」

・・・。

「オリハルコン神金鋼つていくらぐらぶらいつ？」

「お前の銃はおそらく豪華な家を買えるレベルだな」

「龍造さん？」

「わしが払うと言ったのじゃがな・・・」

・・・。

なるほど。

「要するに弟子になれと」

「・・・そういえばそんなことを言われてましたね」

「すまん、魔道具バカでなあやつは」

「あきらめろ」

「でも、そんな簡単に ネスト魔窟 に行けるんですか？」

「オレ等の寮の一室に ゲート門がある」

「逃げ場はないんだね」

なら、しょうがない。

「じゃ、向こうに行く用意するから手伝って」

「おう」

「任せてください」

ボク達は訓練場を出て行くこととする。

ガシ。

「まだ、訓練の途中よ」

作戦失敗！？

さりげなく出て行くこととしたのに！！

「ソラ！！すまない！！」

「ソラさんのことは忘れません！！」

「おい！！」

「逃がすと思っているのかしら？」

「「ぎゃあああああ！！」」

・・・見なかったことにしよう。

「気絶しちゃったわね。じゃ、しょうがないからソラ君だけで

ボクは生きて帰れるのだろうか？

「……」

「よくがんばったわね」

ダメだった。

今のところ最強の 月夜^{ツキヨ} を使って攻撃したがダメだった。
てか、2、3回振ったら壊れるって知らなかった……。
コレがダメならどうしろと？

「でも、その具現化はまだ不安定ね」
マテリアライズ

「……不安定？」

「そう。その魔法は数回振っただけで壊れるやわな魔法じゃないわ」

優子さんの説明によると、ボクが使える最強の技 月夜^{ツキヨ} は超古代
代魔術。つまりは失われた魔法と呼ばれる類の魔法らしい。

ロスト・マジック
失われた魔法とは、使い勝手が悪すぎて廃れたものと強力だけど、
資質に左右されて限られた人にしか使えないために廃れていったもの
の二つがあるらしい。

「具現化は後者に当たるの」

へえ〜。

そして本来、具現化とは魔力を超高密度で圧縮させる魔法らしい。
それで擬似的な武器を創り出して 相手を攻撃するというのが普通。
確かに、ボクのやつはただ魔法を収束させているだけの魔法。ぶ
っちゃけ、ものすごく粗い。

本来は数回振っただけで壊れるヤワなものではないらしい。でも、コレでも結構強力だと思うけど？
何の準備もなしに魔法をバカス力撃てるし。

「完全にものできたらわたしでもどうか・・・」

「絶対ものにします」

よほど強力なようだ。

しかも優子さんに勝てるかも知れないような。

「でも、どうしてボクがこんな魔法を使えるんですかね」

「月のせいだと思うわ」

やっぱりこの属性は謎が多すぎる。

どんなことができるのか自分でも把握できてない。

「あの指揮官さんに聞けてたらな・・・」

何でボクは寝てたんだろう。

賭けに勝ったのに・・・。

「指揮官さんって？」

「いや、都市に攻めてきたときにいたじゃないですか。あの人の魔法の特性のために、いろんなことを知ってたんですよ」

「あ、司書の智也さんね。」

……。
今なんと？

「実はね、あの人、あの後責任とかで国の職を解雇クビになったらしいの」

そういえばかなり上の地位にいるとか言ってたな。

「それをお義父さまが見つけて……」

「要するに拾ってこの図書館の司書にしたんですね」

うなづく優子さん。

いや、龍造さん、あんた非常識すぎるだろ！？
敵を魔物側こっちはに引き込むとか！！

「いや、わしが魔物だと言っても『おもしろい』と言っただけじゃぞ」

「……いつも思うんですが神出鬼没ですよね」

龍造さんがいた。

「ま、とにかく大丈夫なんですね？」

「そうじゃな」

「すみません、少し聞いてきてもいいですか？」

「わかったわ」

・・・わかりました。

戻ってこないとき次のに地獄を見そうなのですぐに戻ってきます。

ボクは急いで図書館に向かう。

この図書館は独立している。

どこかの棟にあるわけではない。

見た目は普通に市とかが経営するような感じ。

でも、学園の生徒しか本を借りることができない。

ボクは図書館に入ると司書さんのいるカウンターに行く。

「・・・ホントにいたよ」

そこには都市を襲った指揮官の人。
名前は忘れた。

「こんにちは」

「ああ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「……………」

「……そろそろツツコンでくれませんか？」

「いや、世間は以外に狭いからな」

さいですか。

世界単位ですけどね。

「だが、お前は何でここに？」

「この生徒です。ちなみに名前は三谷空志。ソラでかまいません」

「そうか。私は元軍人、現司書の城崎智也きのさきともやだ。で、何だ？あの賭けのことか？」

「そうです。教えて欲しいことがあるんです。『月』の属性について」

「『月』か……………。厳密には『魔法』という名の属性か」

「何か知りませんか？」

「すまん。あまり詳しいことは知らん。私が知っている範囲でよければ話そう」

いや、それで十分です。

ボクは何もわかりませんから。

「まず、『月』の属性はパッシブで魔力の流れ、魔法や属性の解析、さらには相手の発動しようとしている魔法構造、そしてその攻撃予測といったような様なことができるらしい。だが、コレは基本的な力だそうだ」

ツクヨミ
月詠 のことか。

魔法構造までわかるのか……。
でも、コレは基本なのか。

「その先は？」

「私の知る文献ではこれ以上のことはわからなかった」

「そうですね……他には？」

「魔法特性としてだが、この属性は『創り出す』ということに特化した極めて珍しい魔法だ」

「『創り出す』？てか魔法特性？」

「知らんのか？」

「なにぶん素人なもんで。」

「……たとえば、お前の仲間には『闇』の属性がいたな？」

リュウのことか。

「『闇』は主に侵食というような効果や凶悪な攻撃魔法が多い。」

『氷』は水の派生系。そのためか空気中の水分を使って連射等の攻撃がうまくできる。『土』は硬化という具合。『火』なら破壊や再生という感じだ」

「つまり、その属性での得意分野ですね」

「そういうことだ。で、古文書によると月は先ほど言ったように『創り出す』ということに特化しているらしい」

「でも、『創り出す』って具体的には？」

「すまん。そこから先を私も知りたかったんだがとうとう知ることはできなかった」

「そうですね・・・」

「私からも一つ聞いてもいいか？」

「いいですよ」

「三谷。お前は『月』の属性なのか？」

「はい」

別に隠すことでもないし。

それにいざれわかつちやうだろうしね。

「・・・通りで負けたわけだ」

「あなたにとってのイレギュラーですからね」

「・・・だが、最後に使った具現化だが・・・」

「不安定、ですか？」

「違う。お前はそれを知っていたのか？」

・・・そうか。

確かに知らない魔法をどうして使えたんだろう？

「いえ、知りませんでした」

「・・・ひよっとすると、それが『創り出す』力なのかもしれない」

「どういふことですか？」

「あれは具現化ではなく、まったく新しい魔法だったのかもしれないということだ」

「新しい魔法？」

「それにお前の魔法展開方法のこともある」

「魔法陣のことですか？」

「ああ、普通は詠唱を行い魔法名を言うことで魔法が発動する」

そういえば詠唱は魔法構造ソースコードを決めて、どんな効果、規模等を設定するようなものってボクの魔道書に書いてあったな。

「だが、あくまでコレは一般的な魔法で、だ」

「……どゆこと？」

「数法術式、これは機械デバイスの補助で通常の精度を遥かに超える魔法を操れる。だから弾幕を張ることが可能だ。しかし、専門的な知識が必要で習得は酷く難しい。さらに完全にものにてきてなければ普通に詠唱したほうが楽という非常に才能に左右されるスタイルともいえる」

魔法の展開方法にもいろんな特徴があるんだ。

「そしてお前の魔法陣は、『召喚』に近いものがある」

「『召喚』？」

あれだよ、異世界からいろんな生き物呼んで使役するやつ。

「まあ、それで構わない。だが、異世界の魔物を使役する魔法なんてものではない。私達の言う『召喚』とは自分の中にある力を呼び出すものだ」

「サーセン。わかりません」

「しょうがない。『召喚』は魔法の中でも異色過ぎて誰も使っていないからな」

「『創り出す』力に『召喚』ですか」

謎が謎を呼んだ気がする。

ま、魔法陣は作者の龍造さんに聞けば何とかなるでしょ。

「すまんな」

「いえ、ボクは全然わからなかったので。とても助かりました」

「元敵が言うのもなんだが新しいことがわかればお前に教えよう」

・・・やっぱこの人基本的にいい人だね。

話していてそう思った。

「お願いします。じゃ、またこ「ソラ！」ぶふあ!？」

誰かにタツクルされた。

いや、わかってるけどね！

「リカ!!」

「大丈夫!?何もされてない!?この歩く生き字引に!？」

「いいえて妙だな。確かに私に知らないものなどそうそうないからな」

「納得しちゃったよ!?それと強いて言うならリカに押し倒された」

「・・・そういえばこいつはお前の彼女か？」

「いえ、「そうです。「いや、違うでしょ」

「いちゃつくなら外でやれ、ここは図書館だ」

「だから、「そうします!!」「ってコレ!!」

ボクはリカに引っ張られて外に拉致された。

「というのが智也さんから聞いた内容です」

「すごい。わし等でも知りえる者が少ないことをよく知っているの」

またまた訓練場。

帰ってくるのが遅いという理由で優子さんに殺されそうになった。
.....

「で、ボクの魔法陣の特徴をさつさと教える」

「人にものを」
セリジンラン 千刃嵐 「ぬおおおおおおお!?!」

ボクが使ったのは風系統の魔法。

鋭く、素早い多段攻撃は風の特徴。

普通ならコレをモロに受けるとミンチになる。

「……さすがに死ぬかと思っただぞい」

だが、ボクの放った相手は普通じゃないし、常識も通用しない。

「今度は拷問の魔法を組んで最初の実験台にする」

「自分の力の本質の召喚じゃ」

すぐに答える龍造さん。

だが、意味がわからない。

「簡単に言うと、個人の本質を魔法にするとその形で出てくる。たとえば、おぬしの強力な魔法は生き物が多いじゃろ？」

「確かに鳥に蛇だね」

「魔法に自分のイメージを組み込むとも言っておけばよいのか」

「……たぶんわかりました」

要するに自分のイメージを魔法に反映させる。

それが魔法陣による魔法展開の特徴なんだろう。

「じゃ、そっちの方面で魔法を『創り出す』ということをしてみればいい、と」

「そうなるのかの？」

ま、なるようにしかならないし。

2話・SPECIAL CLASS（後書き）

作 「ピンチだ!!」

隆 「今回のテストが赤点のオンパレードだったことか？」

樹 「そうだったんですか。」

冬 「バカは大変ね。」

作 「違〜う!! ストックがなくなってしまった!!」

冬 「何の？」

作 「小説のだよ!! 現在いろんなネタを搜索中だ!!」

樹 「がんばってください。」

作 「いや、手伝って!!」

隆 「一介の登場人物に頼むなよ。バカか？」

作 「・・・奥の手だな。」

樹 「奥の手、ですか？」

作 「読者の皆様!!」

冬 「読者の方に頼むなんてクズね。」

作 「・・・ガンバリマス。」

隆 「で、今回は？」

作 「GWに行っちゃおうぜ!! 魔窟 ！！」

樹 「他には？」

作 「サーセン。それしか決まっていっす。」

隆 「こんなアホでダメでクズな作者だが見捨てないでくれ。」

作 「誰か!! オラにネタを分けてくれ!!」

冬 「ドコの孫 空よ。」

3話・NISANCE PEOPLE

side空志

「準備はいいか？」

「大丈夫よ」

「私もです」

「アタシもオツケー」

「おやつは300円！」

「にゃ」

「小学校の遠足か！？」

GW初日。

ボク達（主に男子）は優子さんの戦闘訓練イジメを乗り越えた。

で、今日は魔窟ネストへ。

ホントはボクだけが行くつもりだったんだけどなんか気づいたらみんなで行くことになった。

「じゃ、魔法陣に魔力流すぞ」

ちなみにここは寮の部屋の一角。

この部屋には魔法陣と台座のようなものがぼつんとあるだけ。

リュウはその台座の前にいる。何かの操作をしてるようだ。

リュウが魔力を台座に流す。

すると、魔法陣が光りだす。

目がくらむような光があふれたかと思うとそれはすぐに収まる。気づくと、目の前には久しぶりを見る 魔窟 の南門だった。

「じゃ、ようこそ、我らが魔窟へ」

「んじゃ、ボクはログさんところに行くから」

「オレは散歩でもしてるわ」

「わたしは探検（食べ歩き）してる」

「わたしは本屋を回ってるわ」

「私は薬の材料を」

「アタシは・・・」

「ソラとデートしてる」

「いや、で「わかった」・・・ログさんところに行くんだけど？」

ボクの手を無視してみんなは思い思いの方向へ。通りにはボクとレオ、リカ、通行人の方々。

「あゝ、ボクは用事があるからその後で買い物だろうとデートだ

ろつと付き合っよ

「ホント!?!」

うおい!?!

何故に必死な形相!?!

「あ、うん、まあ」

「約束だからね!?!言うことなんでも一つ聞いてよ!」

・・・まさかの死亡フラグか!?!

いや、リカに限って・・・いや、ひよっとして血を死ぬほどくれとか!?!待て待て。リカには今朝もあげた気がするぞ!?!?てか、鍵掛けたのに部屋にいたよな。あれか?能力を使っか。いや、そうじゃなくて!?!!

「どうしたの?」

「・・・いや、何でもない」

考えてもしょうがない。

まずはログさんトコに行っよ。

「じゃ、行きますか」

「オツケー」

むにゅん。

うん、肘の辺りに何かやらかい物が………って………!!

「腕!胸!!」

「いいじゃん、減るもんじゃないし」

いえ、減ります。

主にボクの精神力が。
そして寿命が。

見てよ。周りの魔物の男性の方々の視線がヤバイ。

「ああ〜。都市の英雄ヒーローが吸血鬼の女の子とデートしてる〜」

誰だ!!こんなことを言うやつは!!

声の主を探すとそこには衣服作成バカのエルフが。

「おつす。元気してたかい、少年」

「すみません。消し炭かミンチ、どっちがいいですか?」

厄介者アリアさんの塊くわだった。

「テレんなって〜」

ちよっかいを出すことに生きがいを感じるのよ!!という空気全
快でボクに絡んでくるアリアさん。

何割か周りの目線が強さを増してる気が?

「ソラ。この女性メは?」

「・・・リカサン、その怒気を収めてください。」

ボクはアリアさんのことを簡単に説明する。
すると、リカの怒気が収まる。

「で、ヒーローくん。前の彼女は？」

「食べ歩き」

「スズネのことが」

一瞬、またリカから何か殺気のようなものを感じた気がする。

「で、さつきからヒーローって何ですか？」

「知らないの？」

アリアさんの説明はこうだった。

前回の都市攻防戦で一騎当千の働きをしたヤツがいる。
という噂が流れているらしい。

でも、リュウが面倒なことになりそうだから優子さんの活躍って
事にしたはず。

実際にあの人なら当千どころか万を越えそうだし。

で、一番の問題は。

「何でボクがそうだと思うんですか？」

「あれは優子さんが一撃でやったんですよ」

「ふふふふふ、おねーさんを甘く見ちゃいけないわ！」

・・・この人はホントになんなんだろう。

「一つ、優子さん。実は1対1なら無双だけど1対多だと結構苦戦するの」

「いや、苦戦は誰だっしてするでしょ」

「甘いわ!」

「・・・ソラ」

無理です。ゴメン。むしろ誰か止めてください。

「情報では敵を一瞬で殲滅したって事。二つ、ありえない魔法を使いまくってた。三つ、そのありえない魔法が間家周辺でも使われてたこと」

・・・この人の情報網は何!?

フツツ光にでも入ってるのか!?

「そして、キミは一時期間家に住んでる。さらに・・・」

まさか、決定的な証拠があるのか!?

「キミはものすごい不幸体質よ」

「黙れよ!!」

「でも、その通りかも」

「・・・泣いてもいいですか？」

「で、答えは？」

「ノーです」

「ウソはやめなさい。シェルターにいなかったくせに」

「言ってみただけです」

「じゃ、あってるのね」

「・・・」

「ソラ、しょうがないよ」

「・・・はあ、そうですよ」

「」「ちくしょおおおおおおお!!!!!!!!」

「あんたら誰だよ!？」

いつの間にか周りにはすごい人ばかり。いや、魔物ばかり。さっきの声は男性の方々のようだ。

「コレが主人公補正か!？」

「俺だつて!!！」

「種族は何だ!!！」

「結構好みのタイプかも・・・」

「あんた!うちでメシ食ってきな」

「おれのヨメ!!！」

場が混沌と化している。

ここは、逃げるか。

「リカ、逃げるよ」

「え、わたしは」

「黙れ諸悪の根源」

「でも、どうやって?」

こうする。

ボクは掌に魔法陣を展開。
その手を上に向ける。

「ホムランドリ 焰鳥 ! ライエン 雷燕 !」

ボクは雷と炎の鳥を放ち、空中パフォーマンスをさせる。

すると、感嘆の声を上げてその魔法に見入る通行人の方々。

「じゃ、行きますか」

ボクとリカはこっそりとその場を離れた。
ちなみに腕は組んだままだった。

「酷い目に遭いましたよ」

「そりゃ災難だったな」

ここはログさんの鍛冶屋、というか魔法道具店。
奥のほうの部屋でレオはいつものベスポジ。ボクとリカの前に口
グさんがいる。

「で、ボクはここでタダ働きをしろと」

「そういうことだ」

「でも、魔法具の作成は難しいって」

「いや、どうせ雑用でしょ」

「バカか。お前の才能でできる」

・・・あれか。

冬香の魔術機械直したときのやつ。

「ま、ものは試した。コレに俺の言うとおり魔法を組み込め」

そう言っつてわたすのは一枚のカード。

何の変哲も無い金属でできたものだ。

「ここに四 元ポケット的な魔術を組め」
プログラム

「いきなりご都合主義なアイテムかよ!？」

隣でリカは首をひねってるがとにかくやってみよう。

・・・メンドイな。

アレでいいや。空間を切り裂いてその裂け目に入れる的な。

いや、その門を召喚でいいか。

魔力の付与は冬香のときでわかってるし。

「・・・魔法陣展開」

現れたのは二重円の魔法陣。

とてもシンプル。

「インストール
魔術導入」

すると、魔法陣が端からほどけていって、カードに吸い込まれていく。

それは数分で終わり、カードを見てみると表面にはボクが出したのと同じ魔法陣が描かれていた。

「起動」

ボクがそういうと魔法陣が光り大きくなる。
とりあえずボクは財布の中にあつた有効期限切れのクーポンをカードに近づける。

すると、カードにクーポンが吸い込まれる。

そして、ボクは魔法陣の中に手を突っ込み中に入れたクーポンを取り出す。

「できたよ」

「・・・本当か？」

「・・・なんで驚いてるの？」

「やっぱり、そんな魔法具は無いよね」

「・・・」

「無いものを作らせたと？」

「ああ。少なくともコレが初めてだ」

「ソラはすごいね！」

いや、人外度がさらに上がったただけだ。

「いやあ、ミスリルとオリハルコンと鉄の混合カードでここまでできるとはな」

「・・・何気にすごい単語が出たよね」

「ちなみにコレは結構安い。子供の小遣いで買える」

説明によると鉄が97%をしめ、残りでミスリル2%、オリハルコン1%で割りと作るのも簡単らしい。魔法具職人なら最初にコレの作り方を覚えるようだ。用途はボクがやったような魔法のカード、つまりは魔術符的な魔法使い以外の人も使える道具らしい。

「要するに一般的な道具って事ですね」

「そうだな、コレができなきゃ道具職人にはなれん」

「へえ〜」

「と、言うわけで作れ」

来ると思ってたよ。

「だが断る!」

「現金にして」「ごめんなさい」・・・わかればいい」

リカが同情の視線を送ってくる。

でも、ボクみたいな素人にできるわけが無い。

「とりあえず、コレとコレと・・・それだな」

ログさんは金属の塊をいくつか持ってくる。

一つは鉄らしきもの。そして銀のような塊。鉄に似た金属等々。

「作れ」

「説明無しかよ!！」

「お前なら適当にすればできるだろ」

無理です。

ログさんの説明によると魔法でカードを作ることができるらしい。
ログさんに教えてもらいつつ必死にカードを作ろうとする。

「……才能無いな」

「いや、造形は無理でしょ」

「ソラにもできないことがあるんだね」

ボクの目の前にはログさんに渡されたときのままの金属塊。
ログさんの言うとおりに詠唱したけどできなかった。

「いつそ魔法陣でやれ」

「……さっきの詠唱と同じプログラム魔法構成を?でもどうやって……?
」

「ソラが真言使うときみたいにするばいいんじゃない?」

そうか、その手があったか。
でも、アレは真言じゃないかもしれないんだよな。
ま、別にいいか。

「じゃ、やってみますか。・・・魔法陣展開」

現れるのは丸い円だけの何も描かれていない魔法陣。

「其は造形。」

土より出でしもの達へ我は命令す。

我は土を司しもの

・・・今、気づいた。

そういえばこの人はドワーフ。

コレってまさか。

「ドワーフ専用の魔法？」

「・・・」

「・・・うっかりしてたな」

「できるわけがねえー！！！！」

テイク2。

今度はボクが一から作る。

つまり、さっきのを参考に魔法陣を人用に最適化する。

「・・・魔法陣展開。」

そこには複雑でいつもボクが展開する魔法よりもわけのわからない記号や文字、図形で構成された造形用の魔法陣がボクの体の前に。そして、金属塊を囲むように別の魔法陣が自動的に展開される。……ここからどうすればいいんだろう？

「操作方法とかあんまり考えてなかった……」

「お前アホだな」

「……ガンバ」

……なんか、こう……パソコンのウィンドウ的なもので操作できたらいいな。

ブウン！

目の前には青い光を放つウィンドウが。いろいろなことが書かれていて、作りたいもの、大きさ、材料などを設定するとできるようだ。

「……お前は間抜けか？」

「ちゃんと考えてるじゃん」

いや、勝手に機能が拡張されました。自分でもわけがわかりません。

……いや、まさかコレが『召喚』？

「……イメージの具現化？」

「どうした？」

「いや、なんでもありません」

ま、今は作業をするか。

とりあえず右手でウィンドウを操作。

形状、寸法、材料。

てか、ほぼボクの脳内イメージですべてできる。ボクが想像したことを勝手に反映してくれた。

なにこの便利ツール。

「こんなもんでいいですか？」

「とりあえずやってみろ」

設計図的なものを見せたらめんどくさがってログさんは見ようともしない。

いや、教えんでもお前はできるだろうと目が語っている。

「職務怠慢」

「請求するぞ？」

「起動！」

ボクはすぐに魔法陣を起動させる。

ウィンドウには『材料分解』の文字。そして、どの工程にいろのかを教えてくれる。

金属塊を囲む魔法陣から金属塊に帯のような物がまわり付いて金属塊がどんどん分解されていく。

金属塊が消えるとウィンドウの文字が『合金製造』の文字に変化。徐々に一つの大きな金属の塊が形を形成する。

また文字が変わる。今度は『造形』。

大きな金属塊が粘土のようにぐにやりとゆがんだかと思うとカードが十数枚ほど出来上がる。最後に『完了』の文字が出てウィンドウと魔法陣が消えた。

「よし、お前明日からここで適当に作れ。これは相当いい出来だ」

「もう決定事項なんですね」

「でも、ソラみたいに一日でできるようになる人なんてそうそういないよ」

へえ〜。

でも、コレってタダ働きのバイトになれって事だよな。

ログさんの店にすごく利益がありまくりな気がする。

「その魔法を使えば武器やその他の道具にも応用できるしな」

・・・武器か。

そういえば武器を使ってるのって今んとロボク一人だよな。

「・・・ログさん、みんなの武器も作っていいですか？」

「お前がか？みんなって言うとその彼女を含めたら5人か？」

「まあ。後、リカは彼女」です。「・・・違っただろ」

「・・・頼むから最終兵器だけは作るなよ」
リーサルウェポン

「どんな心配だよ!?!」

「ソラ」

リカが真剣な表情でボクを見る。

「犯罪者になってもアタシは見捨てないからね」

何でボクが最終兵器作ることが前提になってるんだよ!!
ボクはその後もし講義を受けると、昼時にログさんから解放された。

「じゃ、約束の番ね」

「・・・ボクにできることで」

まだまだ続きそう。

3話・NISANCE PEOPLE（後書き）

作 「よし、主人公チート化計画絶賛進行中。」
空 「もうやめろよ!!」
リ 「約束はどーしつよかな」
空 「果てしなく死亡フラグな予感!!」
作 「安心しろ。それなりに大丈夫。」
空 「え？珍しいね。」
作 「なハズ。」
空 「ボクの未来ああああああ!!」
作 「そんなことより次回予告!!」
リ 「次回はアタシ達のデート!!」
？ 「わたしが黒幕だ!!」
リ 「突然何!？」
作 「次回をお楽しみに。」

4話・DATE?

side空志

「魔物の都市にもファミレスがあるんだね」

「生活水準はソラの世界と変わらないんだよ」

「にー」

「・・・そういやレオ、お前今までどこにいた？」

「ログさんトコについたらいつの間にかどこかに消えてた気がするぞ？」

「ま、そんなことより、だ。」

「で、ボクは何をすればいいの？」

「そういえばいい忘れてたけどここはメインストリートにある食堂。結構いろんな料理があつて、おいしかった。」

「うーん」

「お客さん、カップルかい？」

「そう言ってきたのはこの食堂の店員さん。」

「種族はコボルト。あの犬みたいなやつ。」

「でも、鉢巻巻いて板前みたいな格好をしているのはまごっこことなき柴犬だ。」

「ボクの腰ぐらゐの伸長の店員が料理を運ぶのはなかなかシユールな光景だ。」

「いや、そんなんじゃないです」

「え、デートしてくれるって言ったのに」

「彼氏をつくれ」

「・・・バカ」

なんか小声で言ってるけどボクまでは届かない。
柴犬の店員はにやけた顔でボクに耳打ちする。

「こんな可愛い子をそんな風に扱うもじゃないですぞお客さん」

いや、そんな風ってどんな風？

「おいコラ！！次郎！！注文とってこいや！！」

「へい！！」

するとコボルトの店員、次郎さんは仕事に戻っていった。
・・・いったい何がしたかったんだらう？

「じゃ、行こうか」

ボクは立ち上がってレオを抱いてリカに言う。

「行くってドコに？」

何を言ってるんだこの子は？

そんなの決まってる。

「デートするんじゃないの?」

驚くりカ。

でも、次の瞬間には満面の笑みでこう答えた。

「うん!」

「でも、デートって何するの?」

「さ、さあ……」

リカは何を緊張してるんだろう?
さつきからやや表情が硬い。

「見付けたあああああ!」

諸悪アシアヤの根源アヤの音がする。

てか、後ろ襟をつかまないでください。

「……今度はなんです?」

「よくもわたしをおいて逃げたわね」

「それが一番得意なことなんで」

「……」

リカから殺気がヤバいくらいに出てきてるよ。
でも、アリアさんはそんなことでは怯まない。

「で、わたしが聞きたいのはキミは浮気してるの？」

「ソラ？」

「待って、誤解。てか、彼女がいないのに浮気とかできない」

「え〜。スズネちゃんって彼女じゃないの〜」

「違います」

このはた迷惑なおねーさんを誰かどうにかして!!

「じゃ、こつちが本命？」

「いや、「そうです」……いい加減やめてよ」

ほら、周りの男性の方からすごい殺気が。

自分が超絶美少女であることを自覚してください。

……さつき闇討ちとか聞こえたよ。

「……そういつことが」

アリアさんはニヤニヤ笑いでリカを見る。

……前にもこんなことがあった気がする。

「へーイ、そのカノジヨ」

「え、ちょ!?!」

突然リカを拉致しようとするアリアさん。
ボクがついていこうとすると。

「今からヤロウはお断りよ。乙女の重要な話があるの」

ナニソレ。

ボクから少し離れたところで内緒話をしだす乙女(?) 達。
リカは赤くなったり慌てふためいてる。

それをアリアさんはおもしろそうに見ている。
・・・なんか暇だなあ。

レオが欠伸をした。

s i d e r i c a

「で、キミはあのカレが好きなのかい？」

「え、ちょ、そつ、なっ!?!」

なんか初対面の人に突然そんなことを言われても!?!
ど、どうすればいいの!?!?
正直に話すの!?!?

「むふふふふ。その反応はドンピシャね」

「え、あ、はう・・・」

自分でもアタシの顔が赤くなってるのがわかる。
てか、何でこの人にそんなことを!?

「わたしが思うにキミのカレシ(予定)はキミの好意に気づいて
ないんだね」

「・・・ハイ」

そう。

ソラはアタシのあからさまな好意に気づいてない。
どこぞのギャルゲの主人公だ!?!としょっちゅう思う。

「ふふふふ、おねーさんに任せなさい」

「・・・なんでこんなことをしてくれるんですか?」

アリアさんは笑みを浮かべるとこう言った。

「恋する乙女は応援しろがわたしのモットーよ」

アタシは少し感動してしまった。

コレでソラが少しでもこっちに振り向けば!?!という思いでいっ
ぱいだった。

この時この人が影で邪悪な笑みを浮かべていたのにアタシは気づ
かなかった。

side空志

「ゴメン」

「いや、アリアさんに捕まったんだ。しょうがない」

それよりもリカがアリアさんに汚染されてないかが心配だ。

あの人は状況を混沌とさせるのがとても大好きなヤツだ。

だが、アリアさんはリカと話し終わるとどこかに行ってしまったようだ。

ま、たぶんコレでひとまずは安心だろう。

「じゃ、どうする？」

「デ、デートしましょう！」

「うん。で、ドコに行く？」

「アリアさんがデートにはここが・・・」

「よし、そこは却下しよう」

驚愕の表情のリカ。

・・・いや、だってあのアリアさんだよ。

絶対に何か理由があってこんなことしてるって。

「・・・ダメ？」

「うつ・・・」

上目遣いがこんなにも破壊力のある兵器だとは思わなかった。
なんか美少女が目をウルウルさせるとすごいね。ホント。

「・・・わかりました」

「じゃ、行くー!!」

ボクはリカの上目遣いに負け、結局アリアさんの教えてくれたところに行くことにした。

「つて、腕!!胸!!」

「」

sideリカ

よし、作戦はうまくいった。

それにしてもアリアさんはすごい。

ソラはおそらくそこへ行くのを拒む。だから上目遣いで攻撃しよう!そうすれば絶対に断れなくなる。

なんとという策士。

で、アタシは今、アリアさんの教えてくれた所に向かっている。

「でさ、ドコに行くの?」

「ん〜とね、今日はね湖水区で何かイベントをしてるらしいよ」

この都市はいくつかの区画に分かれている。

普段、アタシ達がいるのが中央区。

他にも山岳区、森林区、がある。

アタシ達が向かっているのは湖水区。

主に水の中に住む魔物達が生活する区画だ。

もちろん。水中で生活しない人もいたりするし、水棲の魔物の人

たちも中央区で買い物をしてたりする。リュウの話では魔道具や魔物の力でできるらしい。

「へえ〜。そういえばボクはあそこに行くのは初めてかな？」

「アタシも」

アタシ達は腕を組みながらそんな話をしていると、目的地が見えてきた。

そこには大きな湖に町が浮いていた。

イタリアのベネツィアみたいな感じ。

まさに水の都だ。

「・・・すげえ」

「・・・うん」

アタシ達は目の前の景色に圧倒された。

とてもきれいな町並みだった。

そして湖にはさまざまな魔物や妖精が泳いでたり顔を出してたりしてる。

アタシ達はしばしそこでこの景観を楽しんだ。

side???

「こちらブラック。ターゲット目の前の光景に見入っています」

『こちらウォーター、了解。引き続きターゲットを監視しろ』

「了解」

『こちらベルだよ。二人が動き出したよ』

『こちらフォレス、こちらでも確認しました』

『こちらウィンター。暇だわ』

二人はこちらにまったく気づいていない。
ま、こっちも大いに楽しませてもらいますか。

side 空志

「!？」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

なんかものすごくいやな予感を感じた。
てか、誰かに見られてる気がする。
ま、そんなことより、だ。

「イベントってコレのことかな？」

「たぶんそうだと思う」

目の前には看板。

そこには『湖水区リル鬼ごっこ大会』とあった。

「……何ぞコレ？」

「さ、さあ？」

ツッコミどころがたくさんあるがとりあえず無視しよう。

「お客さん！カップルかい！」

「いや、そ」うです「・・・」

聞いてきたのは受付の人だろうか？

擬人化していて種族はわからない。

「じゃ、このイベントに参加してけって」

なんで？

「これはカップル限定イベントなんだよ。そこにも書いてあるだ
ろ」

ボクとリカは看板をよく見る。

確かに下のほうにカップル限定？って書いてある。

「・・・やっちゃん？」

「・・・え」

「いや、どうせここまで来たならやっちゃんえばいいかなーっと思
っただけど？」

「でも、カップルじゃ・・・」

「細かいことはいいて。じゃ、参加します。あ、そういえばオはどうすれば？」

「ここに名前を書いてな！そいつはお前が連れててもいいって」

「ん〜。どうも」

side???

『おい！ジジじゃなくてメイアー！！お前はアホか！！』

「アホとは何じゃ。急に言い出すもんだからコレが精一杯だったんじゃ」

『しょうがないよ〜』

「やっぱりすじゃなくてベルはいい子じゃの」

『ま、しょうがないわね。わたしが急に頼んだことだし。』

『でも、楽しいから全然大丈夫よ。ウォーター』

『みなさん、ターゲットはどうやら参加したようです』

『あいつはアホか！？』

side空志

『さて皆さんコンニチワ！！本日はカップル限定の鬼ごっこ大会』

その言葉とともに観客席にスクリーンのような物が展開される。たぶん、アレでボク達の様子を中継するんだらう。

『準備が整いました！では女性の方から目の前の魔法陣にお入りください』

「じゃ、行ってくるね」

「了解、すぐに見つけに行くよ」

リカが魔法陣に入る。

『では、これより転移を行います。なお、場所はランダムですが湖水区の中にいます。じゃ、そー言うわけで転移！！！』

その言葉と同時にリカが転移される。

『では、男性の方もどうぞ！！』

ボクも魔法陣へ入る。司会者の転移の言葉でボクもどこかへと転移される。

気づくと、そこは湖水区のど真ん中。

『では、全員の転移が終了しました！！じゃ、レディー・・・ゴ
ー！！！！！！』

「じゃ、がんばるか」

「に〜」

「ちょこまかと……!!!!」

「……コレって反撃とかありなのかなあ？」

『無理だと思えますができるのならどうぞ……!!あ、もちろん魔法は無しです』

うん、司会者さんありがとう。

でも、何でボクの質問に答えられたのかすごく気になる。

「コレでどうだ……!!」

放たれる水の魔法。

ボクはそれをひよいと避ける。

「こいつ何者だ!?!」

「ん〜人間？」

「いや、人間にこんなことができるわけないだろ!?!」

……黙れよ。

「ボクはれっきとした人間だ!!」

「ごぼ……!?!」

「ス、スマン」

ボクは後ろからひそかに迫っていた人を利用してその人が放った魔法を避け、ボクの目の前の人に当てる。

「て、てめえ……」

ボクの目の前の人はキレて後ろの人に魔法を放つ。
ラッキー。コレってチャンスじゃん。

「……お前」

ふふふふ、味方同士で潰しあってくれ。ボクはこの場を逃げるよ。

『おおつと！！ここでナンバー13、三谷選手が策略で敵をやっつけたぞ！！』

余計なことを！！

「「……あ」「

「じゃー！ー！」

ボクは全速力でリカを探すために逃げ回った。

4話・DATE? (後書き)

空 「このノリは何？」

作 「ワタシのノリです。」

リ 「え!？」

作 「いや、仲のいい女子の友達にはふざけてこういうことをしよ
つちゅうね。」

空 「……………そう言えばボクの日常は作者がモデルなんだよね。」

リ 「……………それで行動パターンもそれに準じたと。」

作 「そのとおり!でも、一方的にボクが連れまわされるだけだ
どね。」

リ 「ありがとうございます。」

作 「くるしゅうない。」

空 「なんか二人がおかしいので次回予告。」

? 「ついに二人が急接近!？」

空 「……………何してんの?り……………」

? 「黙れ。そしてあんなことやこんなことが!？」

空 「R15になる予定はないよね？」

? 「かつ目して待て!!！」

空 「いや、作者が気分で書いてるようなヤツにかつ目する必要は
ないと思う。」

5話・CONSPIRACY?

sideリカ

「そつか、ソラは大丈夫か」

「ちょっと安心した。」

今、アタシのほうでは阿鼻叫喚の地獄絵図が展開されている。
主にアタシのせいだ。

「……し、死ぬ」

「……リア充……負けない」

「……もつと……俺を蹴つてくれ!!」

……最後のは聞かなかったことにしよう。

アタシは吸血鬼ヴァンパイアの身体能力で敵をボコボコにした。
もちろん。魔法符の札は破った。紙だったし。

「ソラはドコかな?」

「いたぞ!!」

またか、正直めんどくさい。

かるく気絶させたほうがいいのかな?

「第2分隊と第5分隊は回り込め!!」

「第3、第4は両翼に展開!!」

「第1と第6は迎え撃て!!!!」

「なにこの連携!？」

「いや、一人だけやたらと強い魔物がいるとの情報がいっただた
め、急遽そのための部隊を作成した」

・・・嫉妬の力はここまですごいの!？」

つて、もう周りを囲まれちゃってる。

コレじゃ逃げれない。

それにこの数の相手も無謀すぎる。

・・・上がある!!!

「コレで逃げ場はないし、これほどの数は相手にできまい。総員、
か「おく、リカはつけくん。じゃ、会場に戻ろうか」ちよっと待て
や!!!お前どこから来た!？」

「いや、上から?」

今回は上から飛び降りてきた。

人間なのにすごいなあと思う。

「あ、上にいた狙撃部隊の人たちは全員武装解除させたから。三
人だけだったけど」

「な、なんだと!？」

「危なかったよ。もし遅かったらリカが上に逃げた瞬間に狙い撃
ちされたからね」

ホ、ホントに危なかった。
もう、ジャンプの準備をした。

「じゃ、というわけでリカ」

「何？」

「会場まで行く」

そういつとソラは手をこっちに差し出す。
なるほど。

アタシはその手を握る。

「何イチャついてんだ!？」

「このゲームに勝つ準備!」

そういつとアタシはソラの手をつかんで上に跳躍。

「お、さすが」

「恋する乙女はすごい」

アタシ達は屋根を伝って会場へと向かう。
すると、すぐに目的地が見える。

「じゃ、こっからは一緒に歩いてく？」

「そうしたい」

「1位だといいいね」

「でも、結構いろんな人は水魔法の餌食になってたよ？」

『おおっと、ここでようやく一組のカップルが戻ってきた〜!!』

『!』

「・・・なるほど、1位みたいだね」

「じゃ、最後に走ってゴールする？」

「じゃ、ドン」

「また〜!？」

アタシ達はふざけあいながら一緒にゴールした。

side 空志

「いや、まさかボク達以外がリタイヤしてたとは思わなかった」

「嫉妬に狂った人は怖いね」

そう思うよ。

特に学校のあの武装集団とかね。

『お待たせしました!!これより1位のカップルに景品を授与したいと思います!!!では、三谷さん、シエルさんはこちらへ!』

『!』

「「「イエーイ!!!」」」

「「「リア充キエ口〜!!!」」」

・・・突っ込まないでよくよ。

ボクとリカは表彰台へと行く。

そこにはマイクを持った司会者らしき人。

『おめでとうございます。よくあの嫉妬に狂った人たちを相手にここまでこれましたね』

自分でもそう思うよ。

『ちなみにお二人の種族は?』

「アタシは吸血鬼」

『おお〜。珍しいですね。通りで強いわけです。で、三谷さんも?』

「いや、ボクは人間です」

.....。

.....。

.....。

この沈黙は何?

司会者さ〜ん顔が固まっていますよ?」

『え〜・・・マジですか?』

『おい、面倒なことを・・・』

「テヘッ」

『お主はしばらく服屋の営業を禁止するぞ』

「そんな!!」

『自業自得ですね』

『ドンマイだね』

『でも、しゃべりたくなるわよね』

sideリカ

・・・なんだかアリアさんのせいですごくいいことになってしまった。

「はあ、メンドイ事になったね」

「うん」

アタシは目でソラにどっしする?と聞いてみる。
・・・
どっししよつもないかも、か。

「すみません。さっさと景品ください。彼女が疲れてるんで」

『惚気ですか?』

「・・・ボクが疲れました」

外野はギャーギャーとわめいている。
主にリア以下略とか。

「キスしろっ!!」

「・・・彘?」

突然のフラグ発生に驚くソラ。

アタシも結構驚いてる。

ま、一回こっそりとしちやっただけ。

「っっキッスッ!キッス!」

なぜか発生するキスコール。

そのときだった、ソラが突然アタシを抱きしめた。

「ソラ!?!」

「ゴメン。ちょっと気になることがある」

気になること?

周りの観客からは黄色い声と怨嗟に満ちた声が
キスしろっ!と野次を飛ばす人もいる。

ソラはその言葉に答えるようにアタシを正面から一深い蒼と蒼銀
のオッドアイの目で(・・・・・・・・・・)見つめて
くる。

ア、アタシものすごくドキドキし・・・

ツクヨミ
月詠

を発動している?

何で!?

「・・・コレか」

そういつとアタシの肩の辺りから何かをつまむ。
というか、それは何かの魔法だった。

ソラは何かしらの魔法構成を指でつまんでいた。
おそらく、月の属性だからこそできる芸当だろう。

『・・・これはどういうこと?』

「ボク等は監視されてますね」

「」「監視!?!?!」

ここにいる人全員が驚く。もちろんアタシを含む。
でも、誰がそんなことを!?

「質問です。このイベントは今日、急に決まったんですか?」

『はい、もともとのイベントを中止してこんなのをしると市長か
』
『う』

「・・・シメる人が増えてしまった。
焰鳥ホムラドリ!!!」

ソラは突然観客席に向かってもはや十八番オハコとなっている魔法を放
つ。

数はざっと20ほどだろうか。

それらがいろんなところへ行く。

その中に慌てて会場から逃げ出そうとする人が数人。

「確かにそうかもしれないけどー!」

「そこは庇おうよ!ー!キミ!ー!」

「というわけで 八岐^{ヤス}・・・あ、れ？」

パタ。

急にソラがひざから崩れ落ちた。

「ソラ!？」

アタシは驚いてソラを抱き起こす。

「すうすう」

よかった。寝てるだけだ。

たぶん、今日はログさんのところでも結構マナを使ったからその反動で寝てしまったんだろう。

「し、死ぬかと思った」

「お前はしょうがない」

「コシって何回目？」

「自業自得です」

「でも、ラッキーだったわ」

「お主は店を一時的に閉鎖しろ」

「そんなあ！！！！！！」

「皆さん」

「！！！！！！ハイツ！！！！！！」

うん。いい返事だ。

「で、どういづつもりかしら？」

「！！！！！！さーせん！！！！！！」

「レオ」

がああああああ！！！！！！

アタシの一言でレオが大きくなる。

「咆哮覇！！」

ちゅん！

どおおおおおおおん！！！！！！

ボロ雑巾が6枚ほど完成した。

「……司会者さん」

『ハ、ハイ！な、なんででしょう！？』

ビビりまくりの司会者さん。

てか、観客の人たちも引いている。

そんな事は気にしない！！

「景品はいいです。彼氏を連れて帰ります」

『わ、わかりました。それではまた次回のイベントで！』

たぶんアタシ達が参加することは二度とないだろう。

side 空志

「・・・？」

ここはドコだろう？

確か、ボクはまた眠くなって・・・。

「あ、ソラ起きた？」

例によってリカがそばにっていた。

「ゴメン。またやっちゃったみたいだね。」

ボクはマナを使いすぎると疲労のためか寝てしまい数日間動けなくなってしまう。

おそらく、GW中はずっとこうだろう。

「あら、起きた？」

そうやって部屋に来たのは優子さん。
なるほど。

「リユウの実家か」

「ええ。ごめんなさいね。うちのアホ義父とバカ息子が・・・」

「いえ、気にしないでください。ちゃんと後でシメるので」

「あ、アタシがレオに咆哮覇してもらったからもついいと思っよ」

そっか。それならいいや。

優子さんが部屋から出て行く。

「悪いことしたね」

「？・・・何が？」

「いや、ボクは動けないからさ、デートに行けないじゃん」

ボクは冗談っぽくそういった。

すると、リカは微笑んでこう言った。

「別にいいよ」

「いや、でも今日はボクに付き合ってもらったのに・・・」

リカは考え込むしぐさをする。

「ん〜・・・じゃ、簡単なお願い一つだけいい？」

なんだろう？

寝たきりのボクにできることなんかまったく無い気がする。

「いいけど・・・ボクにできることなんかほとんど無いよっ。」

「じゃ、お言葉に甘えて・・・」

リカはボクが寝ているベッドにもぐりこむ。

・・・何をしています？

シングルだから結構狭いんですけど？

てか、密着しすぎ！！！！顔近い！！！！

「添い寝」

「じゃ無くて！！どーして！！？」

「だって安心できるんだもん」

・・・ボクは動けないし、しょうがなくないけどしょうがない。

「はあ、今日だけだよ」

「え〜」

「まさかの毎日というお願い！？」

「ダメ〜？」

クソー!!

アリアさんが吹き込んだであろう上目遣い攻撃に耐えられない!!

「……………たまたま
なら」

ボクのヒットポイントはゼロになってしまった。

なんて厄介な技を!!

でも、ダメだイヤだと言いつつボクはかなり安らかに眠ったのは
リカには内緒にしておこう。

6話・ORIENTATION

side 空志

「オリエンテーションの事を決めるぞ〜」

そうやってガントさんが教室に入ってきたことによってホームルームが始まった。

そっぴや前にそんな事言ってたね。

1年生交流のやつ？

「何度も言うが原土元太だ。原土先生、もしくは元太先生と呼べ」

「気にするなって。ガントのおっさん」

「リュウ、ちょっとお前とは語り合う必要があるな。拳で」

「でも、ガントさんはガントさんだもんね〜」

「そして、何気にこのクラスではすでにガントさんが定着してるよね」

「そっぴやガントさん」

「……田中太郎！？お前同じクラスだったのか！？」

「ホントだ！〜！いつぞやの田中太郎君！〜！」

驚くボクとスズ。

「何で俺はフルネームなんだよ！？そして今さらだろ！？」

ま、これはほっとこう。

「で、オリエンテーションでは班を・・・」

「『『『アンジェリカさん！！！！』』』」

「『『『坂崎さん！！！！』』』」

「『『『間君！！！！』』』」

それぞれ男子がリカとスズを、女子がリュウと同じ班になろうと
いつせいにフライングする。

え？

ボク？

モテ無いからしょうがない。

でも、一度でいいからモテてみたい。

「ソラ？」

隣の席のリカが怒気を含んだ声でにらんでくる。

てか、何で！？

そういえばボクはなぜかリカの隣の席にさせられた。

リュウは真ん中らへん、スズは前のほう廊下側。ボクとリカは一
番後ろの窓側。

つまりだ、リカの隣ということはリカFCに殺される可能性がと
ても高くなってしまう。そして、微妙に対人恐怖症のリカはよく
ボクの後ろへと素早く逃げる。

そしてお約束の展開。

「おい三谷、邪魔をするな」

「いや、ボクは自分の席から一步も動いてないよね？」

「お前の存在が邪魔だ」

それは酷くない!?

もっと人権を大切にしようよ!!

「お前には適用されないんだよ!!!」

「どんな憲法だよ!？」

「しょうがない。お前は人間を超越、あるいはやめてるから」

「ソラ君ドンマイ」

いつの間にかいるリュウとスズ。

どうやって自分の包囲網を抜けてきたんだ？

「そんなことよりソラ、オレ等と班組もうぜ」

「クラスまたいで冬香ちゃんとシュウ君も呼ぼうよ」

「クラスまたいでもいいの？」

「いいらしいぞ」

「へえ〜。なら、リカも大丈夫だね」

「・・・うん」

もはやボクの後ろで小動物と化しているリカはボクから離れよう
としない。

・・・って、そんなにくっついたらボクの命が危ない！！

「じゃ、ガントのおっさんに言ってくるわ」

「待て！！ボクが行く！！」

ここにいとやばいんだ！！

「おう、じゃ、頼むわ」

ボクは席を立ててガントさんのいる教卓へ。
行こうとしたが行けない。

「・・・リカサン？」

「・・・」

ボクの制服のすそをつかんで離さないリカ。

「・・・行かないで」

・・・アレだ！！

リカはここに残ると目が血走ってる男子のところにいるのが怖い
だけなんだろうけど、でもボクにとってこれは完全なる『ざ・死亡
フラグ』！！！！

「『三谷いいいいいい！！！！！！』」

まさか教室でやる気か！？

ガントさん！！！！

「死なない程度にな」

「あんたそれでも教師か！？」

「本日も始まりましたソラVSクラスメイツ、実況はワタシ、間隆介と……」

「解説は坂崎鈴音でお送りします。そしてゲストは……」

「アタシ、アンジェリカ・シエルスです。よろしくお願いします」

「いや、安全なところに退避して何をしてんの！？てか、ホントにクラスメイツだね！？」

男子のほかに女子も混じってました。

でも何で！？

「あたし達から間君を奪った恨みっ！！！！」

「ちよ、まあああああああ！！！！！！？」

「あ、おっさん。これ、班のやつ」

「おう、わかった」

「オリエンテーション当日」

「・・・生きて帰ってこれるかなあ？」

「大丈夫ですよ。班行動は夕飯を作るときとレクリエーションのときぐらいですから」

「男が何メソメソ言ってるのよ！」

「冬香、それは男女差別だ」

「お菓子は300円まで!」

「・・・スズネ・・・」

「に」

ボク達はすでに集合場所を出発してバスの中。

みんなジャージ姿でわいわい言ってる。

そして、これからの3泊4日のことかを話している。
・・・っ。

「何で冬香とシユウがいんの!? クラス違うよね!？」

「ガントさんに話したら大丈夫でした」

ボクはガントさんのほづを見る。

・・・いや、親指立てなくてもいい。

「・・・むしろ何でレオもいるのよ？」

・・・。

・・・。

・・・！！？

「何でレオいんの！？？」

「「「「今気づいたんかい！？」「」「」」

「いや、いつものところにおいて全然違和感が無くてさ」

「に〜」

「・・・ソラって天然が入ってるよね」

「いやいや、ボクが天然だったら世界中の90%の人が天然だよ」

「天然な人の特徴、自分が天然であるという自覚が無いですね」

「そうだね〜」

「天然の筆頭が言うなよ。お前は世界一の天然だぞ」

ボク達はそんなたわいも無いことをしゃべりながら、そしてボクは自分の命を心配しつつこれからのことに思いをはせた。

「到着だぜ!!」

「テンションが高いね」

スズはいつものんびりだね。

ここは海岸近くの間学園が所有する合宿所の前。

バスから開放されてさらにテンションが高くなるみんな。

そして、いろいろと話し合っている人々。

平和だね。

「みゃ〜」

「……コレって三谷君の飼い猫？」

そう言ってきたのは別のクラスの子の方。

名前は知らない。

でも、どっかで見たような気がする。

「まあ、そんなもんかな？レオって言うんだよ。レオ、挨拶しな

さ〜」

「じゃ」

「「「かわいい〜!!」「」」

いつの間にか女子に包围されてる!?

レオすげえ!?

「でも猫を連れてきてもいいの?」

「いや、気づいたらこいつのベストポジションのボクの後頭部に張り付いてた」

「三谷君って結構天然?」

「失礼な。ボクが天然なら君らのほとんどがそうだよ」

「「「え〜」「」」

「リュウ!! どういうこと!?!」

「あ〜。あいつな、結構いろんな人の相談のったり助けたりしまくるから実は隠れファンがわりといたりすることはごく一部のやつしか知らないことだ。コレを期に親睦をとか告っちゃまおうぜ!! っていうやつも結構いると思う」

なんかリカとリュウが話し合ってそこからリカがボクをにらんでるけど何でだろう?」

あ、リカがこっちに来た。

・・・リュウよ、何故合掌している?

あ、リカが男子に囲まれてる。

てか、みんな男子や女子に包围されてる。

・・・そっぴいこれから昼まで自由行動だから気になる人と一緒に行動したいって人がいっぱいいるのか。でも、みんな片っ端から断ってるな。

いや、冬香に関してはなんか必死に抜け出そうとしてる。・・・

血に飢えた女子の群れから。

「ソラー!!」

「ん？リカどうしたの？」

「え？あ、その・・・」

「・・・三谷君ってアンジェリカさんのこと好きなの？」

はい？

・・・なんでリカは顔を赤くしてこっちをガン見してるの？

「急になんで？」

「よく一緒にいるなあ」と思って」

そうか、周りから見るとそういう風に見えるんだ。

・・・そういやリカは何かとボクに構ってくれるけどボクのことをどう思ってるんだろう？

「三谷君？」

「あ、ゴメンゴメン。うん・・・友人以上には好きかな？」

「・・・好き」

おい、リカ!?

顔がこれ以上に無いほど赤いけど大丈夫!?

「友人以上・・・」

「何でこっちは暗くなった？」

この温度差はなんだろう？

そしてさつきから酷く視線を感じる。

主に殺気がこもったヤツ。

「ソラー！！早くみんなのところに行こう！！」

「え？あ、うん。・・・って、腕！！胸！！！！」

いつものごとく腕を組んでボクは引つ張られていった。

でも、今日のリカはいつも以上にご機嫌だ。

何でだろう？

『第1回！カレー作り対決じゃ〜！！！！』

「「「イエー————！！！！！！！！」」」

「いや、最初で最後だよな」

『何を言うか！わしの権限でふやげぼらー！？』

『皆さん。アホ理事長は放っておいて早速料理してください』

拡声器を使って話しているのは理事長こと龍造さんと優子さん。もちろん、校医の颯太さんもいる。

「じゃ、作れ」

「……いや、何であんたもいんだよ。ソラからこっちについては聞いたが」

なぜか智也さんもいた。

あなたは図書館司書ですよね？

「できたよ」

「「「「「はやっ!?!」「」「」「」

スズ、ボク達何もしてないよ。

「料理は得意だもんね」

胸を張って言うスズ。

でも、胸が……。

「ソラ君？」

「何でもありません」

触らぬ神にたたりなし。

「ですが超越してますね」

「ま、スズの料理はおいしいからいいじゃん」

「・・・ソラは料理できる女の子のほうが好き？」

「？・・・まあ、そうかな？」

「がんばる」

「乙女はすごいわね」

「よそえ」

「お前はいちいち上からものを言うなよ!!」

「」「おい!」「」

「・・・スズネFCか？」

「何か御用ですか？」

「何で坂崎さんの料理を食ったことがあるんだ!？」

「・・・オレ等一緒の寮で坂崎は料理担当なんだよな」

「そうそう、わたしは家計の管理」

「私は力仕事ですね」

「そういえばボクは家事全般？」

「アタシはソラの手伝い」

「オレは寮の管理だな」

何気にこの面子だから寮で過ごせてきたのか。

「な、なんだ、と!?!」

「羨ましすぎる!!」

「コレが主人公補正・・・!?!」

「作りすぎたからみんなにもあげるね」

そう言いつつ他の人たちにも配膳するスズ。

一部の男子は涙を流しながらカレーにがつついてる。

「で、何で智也さんがいるの?」

リカは智也さんに敵意のこもった目でにらみつけている。

だが、智也さんはそれを無視している。

「気分だ」

最悪ですね!?!?

気分で上から目線でカレーを食おうとしてたんですか!?!?

何でもこうもボクの周りには常識が通用しない人が多いの!?!?

「おぬしが不幸体質じゃからな」

「ジジイ、いつの間に・・・」

「あら、おいしいわ。鈴音ちゃんすごいわね」

「本当ですね。おいしいですよ」

「えへへ。どうも」

「いつの間にオールスター勢ぞろい!？」

「そんなことより、ソラ。あ〜ん」

「ならば...」

「」「三谷iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」「」

今日の食卓はとてにぎやかだった。

side 隆介

「おい、リカ?」

「何?」

オレはリカに思ったことをズバツと聞いてみる。

「やたらと機嫌がいいがなんかあったのか?」

「え〜。何でもないよ〜」

・・・顔がにやけてるぞ？

これはソラ絡みで相当いいことがあったな。

「そういえばソラさんが女子に包囲されてからリカさんが連れてきたあたりから機嫌がいいですね」

「やっぱりソラ君関係だね」

「リカ、白状しなさいよ」

「わしも気にふべら!？」

「ここはわたし達オトナは退散しましょう」

「そうだな」

そういうと大人達 + 龍造^{トウゾウ}は離れていく。

「えへへ。あのね実は、ソラに好きって言われちゃった？」

「「「「ウソオ!!!!!!?」「「「「」

あいつはリカに告ったつてことか!?

いや、リカによる何らかのフィルターがかかっている可能性がある。
る。

「・・・スマンが詳しく頼む」

オレ達はことの詳細を詳しく聞いてみることに。

・・・なるほど、そういうことか。

「驚いたわ」

「そうですね」

「それなら納得できるね」

「……どういこと？」

大変残念なお知らせだな。
残酷だがしょうがない。

「ソラはな、おそらくお前を異性として好きなやつとは認識していない」

「……え？」

「たぶん、ソラ君の認識は友達以上恋人未満だよな」

「ホントにどごそのギャルゲの主人公何だか」

「ま、気を落とさないことです」

「ま、ソラにとってそんな異性はここにいるメンバーぐらいだからな。十分に周りのヤツよりかはアドバンテージがある」

「……絶対に振り向かせてやる」

「あゝ。疲れた」

タイミングよく帰ってきたな。

「ソラ!！」

「ハイ!？」

「絶対あきらめないから!！そしてがんばるから!！」

「え、あ、うん?」

ソラはオレに近づく。

「どうしたの?それとさっきの意味は?」

「それはお前が見つける。そしてリカのためにもな」

ソラはわけのわからないという顔をしている。

オレ達は張り切るリカと困惑顔のソラを見て困ったもんだとでも言っように顔を見合わせた。

6話・ORIENTATION（後書き）

隆 「ソラがコレって事は作者もそうなのか？」
作 「そうだといいなあって思ったよ。ウン。」
鈴 「実際に相談とかは？」
作 「何回もある。ヘルプがかかったら即出勤。」
樹 「で、モテないわけですね。」
作 「そうなんだよ！！何で！？」
冬 「あんたはモテ無いこと間違いないわ。」
作 「・・・次回予告だ！！！！！」
鈴 「逃げた。」
作 「ついに事件発生！！」
隆 「ヤケクソだな。」
作 「そしてあのキャラが巻き込まれる！！」
樹 「名前を考えるのが面倒になったんですね。」
作 「そして新キャラ登場！！」
冬 「取ってつけたかのような内容ね。」
作 「次回もよろしく願います！」

7話・RECREATION

side 空志

二日目。

今日もいい天気だ。

「今日は何をするんだっけ？」

「レクリエーションですね」

「たしかスタンプラリーだったか？」

へへ。

要するにチームで回ってがんばれと。

「みんな」

「お、あそこか」

スズがボク達を呼んでいる。

ボク達はそこへ向かう。

そこで挨拶を交わし、今日のことについて話し合う。

『スタンプラリーじゃー!』

「「「イエーーーーーイ!!!!!!!!!!」」」

「……………テンション高え〜」

『ルールは簡単じゃ。どっかそこから辺にあるスタンプを探してさつき配った台紙に押していくのじゃ。制限時間は夕方4時まで、景品は……………』

「景品がでるんだね」

「すごいね〜」

ボク等がのんきにそんなことを言っていると龍造さんが景品を発表。

『あゝ特別クラスの面々の写真じゃ』

そこからの行動は速かった。

ボク達以外の一年全員は瞬間移動レポートでもしたかのように消えて、遙かかあなたを見るとそこにはもうもうと土煙が舞っている。そして、ボク達はというと。

「ジジイイイイイイイイ!!!!!!!!!!」

「「「アホ理事長!!!!!!!!!!」」」

「ちよ、ま、どばふあ!?!」

ドカ!バキ!ガガガガガ!ドカン!ズドン!!

ボク以外の全員が龍造さんを肉薄する。

いや、文字通りの意味で。

ありえない音が鳴ってるけど残念ながらマジです。
え？何でボクはしないのかって？

別にボクの写真を欲しがらんかいないでしょ。

「オイ！！野郎ども！！！」

「「「おう！！！！」」」

「・・・何この一体感？」

「オレ等が一番にゴールして景品をいただくぞ！！！」

「「「^{オス}押忍！！！！」」」

「・・・この雰囲気だと確実に道場破りしそうなんだけど？」

猛スピードで走り出したみんなにボクはついていく。

・・・死人が出ないようにと祈りながら。

「ドコだ！？」

「こつちには無いぞ！！！」

「コレか！？」

「……タダの石じゃねえか！」

現在、海岸沿いの岩場。

ここはなんとも殺気に満ち溢れていた。

「チツ。こうなつたらまほ……」

「最低だな。魔王の孫がここまで堕ちたのか」

「……なら、お前も必死こいて探せよ!!」

「別にボクの写真もらつてもうれしい人はいないでしょ」

「いますよ（若干一名ですが）」

「そうね。いるわね（若干一名だけど）」

「……ポツ」 その若干一名

「冗談でもうれしいよ」

「……冗談じゃないんだけどね」（若干一名）」

なんかボクの知らないところで会話が成立してるような気がする。
ま、みんなの写真は出回ると大変なことになりそうだしね、主に
血の雨が振るとか血で血を洗う戦争的な意味で。穩便に、そして何
より自分の平穩のためにがんばるか。

……。。。

ん？

「レオどうしたの?」

「に」

レオは口になんかくわえてる。

よく見ると、それはプラスチックでできたスタンプ。

テッテテーン。

スタンプを見つけた。これで次のスタンプを探しに行こう。(ゼルダ風)

「「「「「それだ!!!」「」「」「」

ボクは台紙にスタンプをぽんと押す。

一個目ゲット。

よしじゃ、次はっと。

「破壊するぞ!」

「・・・いや、次探そうよ」

「いえ、ここは破壊すべきです」

・・・シュウ、キミはそんなキャラだっけ?

「ここはガッンと行くべし!」

「そうね。ゴミくずにしたほうがいいわ」

「アタシもそう思う」

「では・・・ハッ！」

・・・マジでやりやがった。

でも、意味無いんだよな・・・。

コレ、相当な結界が張ってあるんだよ。たぶん龍造さんのヤツ。特性は衝撃二倍返し。つまり、強い攻撃をするほど自分にその痛みが帰ってくる。

これはシュウが攻撃したからわかったことだけど。

ボクは逆に痛みで悶絶するシュウに親切に教える。

「・・・わかってたのなら教えてくださいよ」

「いや、バカは痛い目を見るって事を教えたほうがいいかな」と思って。それに僕がわかったのは結界が張ってあるって事だけだし」

ツクヨミ
月詠

すればわかったかも知れないけど。

たぶん他のにも同じことがしてあると思うし、やっぱり自分らが1位になるしかないよね。

「参謀のソラー!!」

「リュウ総帥閣下、情報がないから無理」

「「「「「「「「「「「」

「よし、次行くよ」

「みゃ〜」

みんなは肩を落としてゾンビのようにボクとレオについてきた。

side???

「何だよアレは!？」

森の中を走る。

俺たちは普通にスタンプラリーをしてたはずだ。
何で追われてるんだ？

「それをよこせ!!」

おそらく、台紙のことだろう。

何人かの男子生徒が追いかけてくる。

オレのほかのメンバーは途中ではぐれた。
全員無事だといいいんだが。

ゴウツ!!

そのとき、ものすごい勢いで直径1メートルほどの水塊が俺の横
を通り過ぎて言った。

「ヒッ!？」

声にならない悲鳴が上がる。

「ひゃはははは。おいしい、後少しだったぜ?」

「次は俺にさせるよ」

「いや、俺だって」

恐ろしい。まるで魔法のような事を繰り出す。そして、俺は疲労のためか足元の注意を怠り、木の根につまづいてしまった。

「うわぁ!？」

「・・・なんだ。鬼ごっこは終わりか？」

「なら、さっさと終わらそうぜ」

そういうと、一人の男子生徒が一枚のカードを俺にかざす。すると、俺の体に雷を浴びたような衝撃。悲鳴を上げるまもなく、俺の意識は闇に落ちた。

side空志

「レオはすごいね」

「ああ、レオのおかげでラスト一個だ」

アレからだいぶ時間がたってボク達は次々にスタンプを見つけて台紙に押していく。って、言ってもほぼレオが見つけてきたやつをボク等が押してっただけなんだけどね。

「最後は・・・森にあるのか？」

「探していないのはそこだけですしね」

「でも、ヒントが無いのは辛いわね」

「鬼畜げ〜」

「・・・スズネってオタクなの？」

「突っ込んじゃいけない領域なんだよ。たぶん」

ボク等の前には森。

ここにあってはいいな。

そしたら、みんなハッピー。ボクにも平穏な日々。

どごおおおおおおおん！！！！

「ツラツラ月詠！！！」

「オイ！？」

リュウが驚くがそれどころじゃない！！

さっきの爆発に魔法の残滓が感じられた。

こんなところで魔法使いが戦闘したら生徒がヤバイ！

ボクは魔法の解析、ならびに発生場所を調べる。

「戦闘隊形だ！！前衛ボク、リュウ！後衛に女子！！シユウは奇襲！！合図で敵を殲滅しろ！！」

「どっぴいっことー！？」

「そうよ！！説明しなさいよ」

「さっきの爆発は魔法。雷の属性」

「本当ですか!?!」

「だから周りに被害が出る前にたたく!!レオ!!」

ボクはレオに合図し大きくさせる。

そして、森の中を駆け出す。

side???

「何だよ。こいつもだ。どうせなら最後にここを探せよ」

「つか、この力があれば俺等って最強じゃね?」

「きゃはははは!!そうだよな!!!!」

森の一角に間学園の男子生徒の下卑た笑い声が響く。

「田中君!?!」

そこに一人の女子生徒が現れ、倒れている男子生徒を見て驚愕の声を上げる。

おそらくは心配して駆けつけてきたのだろうと思う。

「……に、げ……る」

「何だ?コイツまだ生きてるぜ?」

「しぶといヤツだな！」

そういつと田中と呼ばれた生徒に蹴りを放つ。

「やめて!!！」

「うつせえな・・・お前もコイツと同じ目にあいてえのか？」

男子生徒たちが女子に近づぐ。

「い・・・いや・・・」

「いまさら遅えつつうの」

カードを取り出す男子。

本能的にそれが危険なものだと感じ、女子は下がる。

「や、や・・・め・・・ろ」

息も絶え絶えに田中が声を振り絞る。

「黙れつつてんだろうが!!！」

カードを田中に向ける。

「助けて!!！」

「こんなトコに誰も助けにこねえよ!!！」残念ながら来ます!!！」
「ゴパア!?!」

ドサツ。

いきなり後ろから後頭部に蹴りを受けたために今まさに田中に向けて何かしようとしてた男子は昏倒する。

その蹴りを放った男子は片目が深い蒼、もう片方が蒼銀というオッドアイの少年だった。

「さて、一人。って、お前は田中太郎か!？」

「……み……た、に？」

「あゝ田中太郎君だゝ」

「田中か」

「誰？」

「アタシ達のクラスメイト」

そこにはこの学園のトップアイドル（若干一名を除く）が勢ぞろい。

李樹君^{リー・シュウ}だけがない。

「ぐるるるるる」

「って、ライオン!？」

「……あゝ後で説明するよ」

三谷と田中君に呼ばれた生徒があたしに言う。

・・・でも、この人たちの雰囲気がいつもと違う。
田中君を襲った人に似ている気がするけど、根本的なところが違
う気がする。

「さて、悪い子はいねが？」

「いや、ドコのなまはげだよ！？」

・・・ホントに大丈夫なのか心配になってきた。

side 空志

「で、魔法使いは？」

リュウが聞いてくる。

相手はさっき倒したのを抜いて6人。

でも、残念なお知らせがある。

後ろに庇った女子生徒がなんかうるさいけど無視だ。

「いない」

「「「「・・・は？」「「「「

「正確には 月詠^{ツクヨミ} ではあいつらが放ってることになってる。で
も、あいつらには魔法力は皆無」

「べびいびいとよ！？」

「わからない。でも、カードが関係あると思う」

ボクは相手の握るカードをさすたぶん魔術符だろう。

「お前らさつきからゴチャゴチャ何言ってるんだ？魔法とか脳みそイカれてんのか？」

「確かに魔法のことを知らんようだな」

「じゃ、わたしが魔法使えば一発じゃない？」

「そうだね。とりあえず相手を気絶。魔法は使わない方向で」

「え〜何だよ」

「アホか？周りにバレないようにだよ」

「だって少なくとも一人にはわかつちやうじゃない」

そう言っつて後ろの女子をさす冬香。

「それはしょうがない。巻き込まれただけなんだし。じゃ、行くよ……」

「へいへい！！」

ボクとリュウは前に飛び出す！

「俺等になうわけねえだろ！！」

そういうとカードを前に突き出す男子。

解析！！

「アクア・プラスター 激流の水衝球　！？」

「ウソだろ！？」

皆さん覚えているだろうか？

これは初めてアリアさんにあつたときにかまされた水属性中級魔法。

でも、限りなく上級に近い強力な魔法。

「リュウ、バツク！！」

そうリュウに指示しつつボクは前に突き進む。

「バカが！！」

相手は魔法を放つ！

ボクだったからタイミングがわかったけど普通の人だったら確実に一撃もらってる。

というわけで、余裕でかわしました。

「な！？」

「次の動作が遅い！！」

「がつ！？」

「リュウ、ナイス」

後ろに回りこんで一撃を決めたリュウに声をかける。

「そういや、こういつの久しぶりか？ソラ」

「できれば永遠にこないで欲しかった・・・」

「ソラだと!？」

「いや、あの連携!？」

「・・・まさか相方は!？」

「つか、あいつらはまさか・・・!？」

「」「」「黒騎士と白騎士か!？」」「」「」

「「黙れよ!？」」

「忘れてた!?!コレ言うとげふう!？」

瞬殺!!

その口を縫つといてやろうか!？」

「へく。あの二人がそうだったんだ」

「・・・なんですかそれ？」

「」「言つな!?!」「」

「その二人に依頼すると必ず成功させるという何でも屋のような

二人のチームです」

そうだったのは後ろの女子。

……。

「……穴、無いね」

「……ああ、そうだな。」

「何でも、探し物から荒事までありとあらゆることに失敗したことが無いという伝説の中学生二人のことだったんです。それで、通り名が策略、守備に特化した白騎士のソラさん。凶悪な攻撃に特化した黒騎士の……誰でしたっけ？「リュウさんですね」……そうなんですか？……って、さっきの誰！？……とにかくその二人で構成された何でも屋です」

「……ぶっちゃけちゃうとね〜今とそんなに変わらないよ〜」

「そうね。特にソラとか」

「……一番の敵はリュウ？」

「リカ！？お前は何を言ってるんだ！？」

「……穴、無いなあ〜」

「だが、俺たちにはこの力がある！！伝説はここで終わんだよ！！」

なんか微妙にかっこよさげな事言ってる〜。

「でもよお、すでに二人・・・」

「偶然だ！！そうに決まってる！！！」

「・・・そつだよな！！ビビッて損したぜ！！！」

「・・・元気だね」

「・・・そつだな」

「「じゃ、シユウ、後がんばって」

「誰にげぼら！？」

「・・・黒歴史を言われたぐらいでへこまないてくださいよ」

「お前！？いつの間に！？」

「さつきですが？」

「ちっ・・・一気に殺^ヤるぞ！！！」

ヒョン！ドカ！ドス！バシ！ボカ！

「終わりましたよ」

「・・・速いな。さすが」

周りにはシユウにボコられて気絶した男子生徒A、B、C、D、

Eとボク等が気絶させたF、G、H。
みつしよん・こんぷりーと。

「まだだあああああああ！！！！」

帰ろうとしたところを後ろからリカが羽交い絞めにされる。

・・・つて、ヤバい！！！！

「お前！早くリカを離せ！！！」

「そうだよ！！！」

「危ないわ！！！」

「死ぬぞ！！！」

「お願いだから！！！」

「ハッ！！形勢逆で「リカ！！気絶させるだけだから！！」・・・
・ソラが言うなら。」・・・は？」

バキ！

「俺は・・・ただ姐アネさんの写真が欲しかっただけなのに・・・ガ
ク。」

うん、ドンマイ。冬香のファンクラブの人よ。

本日最大の犠牲者が出てしまった。

何度も言うがリカは軽く対人恐怖症だ。

そのためかわからないけど、前に冬香がふざけて後ろから抱きつ

いたことがある。

そのとき、リカは思わずヴァンパイア・スベル吸血呪を發動させようとしたことがある。そのときはとつさにボクが後ろから抱き着いておとなしくさせるといふ作戦（スズ発案）で事なきを得た。

以来、リカに後ろから抱きつくことは禁止となった。

・・・そーいや、ボクのは何で大丈夫だったんだ？

「・・・アンジェリカさんつよ・・・ガク。」

「田中君！！！！」

・・・忘れてた。

7話・RECREATION（後書き）

作 「暇なんで主人公たちに黒歴史を作ってみました。」
隆 「作者ああああああああ！！！！！！」
空 「死ねええええええええええ！！！！！！」
作 「あべしっ！？」
隆 「作者が星になったところでまじめにいこう。」
空 「そうだね。」
太郎 「じゃ、次回予告だ！！」
隆 「……お前はモブじゃなかったのか？」
太 「ついにレギュラーだぜ！！」
空 「次回！ボクはがんばってごまかします。」
隆 「オレ達はお前に押し付けて逃げるがな！！」
太 「無視か！？」
空 「じゃ、次回もよろしくお願いします。」
隆 「そういうことだ。」
太 「……俺、何でここにいの？」
空 「作者の気分じゃね？」
隆 「だろうな。」
太 「ちくしよおおおおおお！！！！！！！！」

8話・HIDING(前書き)

次あたりから投稿の間隔がとてもあいてしまうと思います。

できるだけがんばりますが、先に謝罪をしておきます。

でも、ムズいんですよ。家で隠れてするのは！！

サーセン。

でも、9月は確実に今と同じようなペースでやっていきます。

どうか僕を見捨てないください。(心からのお願い)

8話・HIDING

side空志

「説明してもらおうか」

「・・・」

「ここは合宿所の医務室。

そこにはミイラ男なそしてなんかよく出るモブ、田中太郎。そして初登場の名も無き女子。」

「あたしは多湖茜たしかねです。そしてあたしは一組の委員長です」

「へえ〜。知らなかった」

「お前はバカか？」

「まあ、ソラ君だしね〜」

「・・・」

「・・・いい加減、ソラの後ろに隠れるのやめたら??」

「いいじゃないですか。バカップ・・・すみません」

ボクはシュウをにらんでおく。
アイコンタクト。

「どっつするよ??」

「腹減った」

チツ。

リュウとのアイコンタクトに失敗した。
次！

「お菓子は・・・」

聞いたボクがバカだったよ。

「おもしろそうだからあんたが何とかしなさい」

そう来ると思ったよ。

「薬を盛りましょう。記憶が・・・」

クラスメイトをモルモット実験台にするなよ!?

「・・・!？」

「プロポーズ!？」

「何を受信したんだよ!？」

「いい加減にしてくれないか？」

・・・イラついてるな。

でも、ここは惚けとくべきだよな。

「何ノコトカナ？」

「あからさまな惚け方をしてくれてありがとう」

「・・・みんな。ボクにチツ使えねえやつって感じの目で見るな！
！あんたら何もしてないだろ！！リカだけだよ。ドンマイ的な目は
なら、お前やれよ！！リュウ！！」

「スマン、急に腹が・・・」

「ウソ付けよ！！」

「大丈夫ですか！」

「すぐに颯太さん呼びに行こう！」

「そうね！！」

ダダダダッ！！！！

残されるのはボク、リカ、田中太郎、委員長多湖さん。・・・メ
ンドイからインチョーでいいや。

でも、あいつらすぐ逃げるの上手。人生的な修羅場からね。

「・・・わかった。こっちの質問に答えろ」

「・・・ハイ」

「さっきの目は？」

「ノーコメント」

「さっきの男子のアレは？」

「未知の力」

「・・・多湖が見たライオンは？」

「レオと見間違えたんじゃない？」

「ふざけないで！！」

そう叫んだのはインチョー。

ボク等は驚いてインチョーのほうを見る。

「あたし達はすごく怖いことに巻き込まれたの！でも、貴方達は当たり前のようにそこに向かっていった！！何で！？これからあんなことが起こるかも知れないってビクビクしながら過ごさなきゃいけないの！？」

「・・・なら、あなたにこの事実を受け止める勇氣はあるの？」

ボクはあまりの冷たい声に驚いた。

それはリカの発したものだっただ。

「コレを知れば元の生活から遠くなるかもしれない。それでもいいの？」

「!?!?」

「……どういうことだ？アンジェリカさん、君は何者なんだ？」

「……」

「……田中、ボク等は全員それなりに訳ありなんだ。それに、リカの言うとおり、ホントに普通の日常に戻れないかもしれない。むしろ、コレを聞いたら今よりビクビクして過ごさなきゃいけないかもしれないよ？」

ボクはあえて 月詠^{ツクヨミ} を発動させて脅す。

空気を読んでレオも大きくなって威嚇。二人は驚きに目を開く。レオはもちろん、ボクのオッドアイも普通じゃないことぐらいわかるだろう。

……さて、二人がどう出るか。

「……三谷、お前はそんなヤツじゃないだろ？」

「わかんないよ。さっきの男子みたいに口封じのために田中を消すかもよ。特にボク達はすごい秘密を抱えてる。それも学園の絶対には知られてはいけない秘密。だから可能性はゼロじゃない」

「……」

考え込んでるようだ。

ま、言葉にボク等もさっきの男子みたいな力を使えるって遠まわしに言ってるしね。

「……信じるよ」

「「え？」」

その言葉は田中ではなく、インチョーから言われた。

「信じるよ」

「何で？」

「……朝の騒ぎ」

「……アタシの争奪戦？」

「そう」

「どういうことだ？」

「……さあ？」

「だって、そのときに三谷君は逃げてるだけって聞いてるよ」

ああ。だから大丈夫と。

「でも、そのときはただ単に面倒な「ウソね」……」

「……何でそう思うの？」

どうでもいいけど、リカって人前だとホントに陰キャラになるね。

「……実は、あたしソラ君に助けてもらったことがあるんだよ」

……サーセン。記憶にありません。

てか、助けた人の数は両手両足の指の数じゃ足りません。
リカ、なんかさつきフラグゲッターとか聞こえたけど気のせいだ
よね？

「だって、そのときの三谷君は優しかった」

「・・・何気にお前ってたらしか？」

「黙れ田中太郎！！」

「・・・やつぱお前は大丈夫だよ」

いや、何を根拠に？

「なら、逆に言う。口封じするなら今すぐ俺を殺せ」

「サーセン。あなたのチェックメイトです」

「決断早っ！？」

「・・・あたしも予想外」

「ソラ、もちよつとがんばれないの？」

無理。

もうネタが尽きてしまった。

「はあ、じゃ、ネタバラシ」

「緊張感ねえな！？さっきのシリアスはどこいった！？」

「しりあす？ナニソレ？おいしいの？」

「……」

インチヨーはあきれて何もいえないようだ。

「ま、さっきのライオンはコレ、レオね。もう小さくなっていいよ」

すると、レオは一瞬で小さくなる。

「みゃ〜」

「で、ボクは魔法使い。ちなみに、ホムラドリ 焔鳥 ！！」

魔法陣を展開して医務室の扉を攻撃。

そして、扉だけを破壊。

どろどろどろ。

「あそこにいるバカ四人衆も一応魔法使い。あ、シユウは薬好きの格闘バカで冬香は数字ヲタでリュウは魔王の孫、スズは……うん」

「何でわたしだけ！？」

「……しょうがないスズネだもの」

「……リカはドコで『み』を『知』ったんだ？」

「で、アンジェリカは？」

「……来るよね。普通。」

「どうしようっかな。」

リカにアイコンタクト。

「……!？」

「告白!？」

「ちゃんとボクのメッセージを受信して!？てか、何でそっち方向!？」

「……I am a vampire to tell the truth。」

「言ったのは偉い。でも何で英語!？」

「……どっいう意味だ？特にtellの部分」

「田中!!お前はバカか!？」

「……難しい英文ね。truthってどんな意味だっけ？」

「……わたしもわかんないよ」

「ここにもバカがいたよ!!」

よく高校に入れたね!？」

「実を言うと、わたしは吸血鬼ヴァンパイアです」

「何故直訳の日本語！？普通に言えばいいじゃん！」

「」「」「あゝ！」「」

もうやめろよ！！

「……そうだったのか」

「だからアンジェリカさんは三谷君の後ろに隠れるのね。それでフラゲゲッター」

「そうだコイツは筋金入りのフラゲゲッターだ。一番多いのが死亡フラグ」

……つ、疲れた。

今何時？

もう、おなか減った。

腕時計を見してみる。

「19時20分……」

……あれ？

「夕飯って何時だっけ？」

「17時30分から19時00分までだ。」

「ご飯遅れた!？」

「安心しろ。」

リュウ!!

さすがだ。ボク等のために何か策を……。

「オレ達4人はちゃんと食ったから」

「……紫電シマン!!!」

久しぶりに出ました。

「な!?鳥じゃないだぎゃあああああああ!!!!!!」

「……甘いよ。そしていつからお前は名古屋の人になった？」

「……本当なんだな。魔法って」

「まあね」

「あたしは?魔法って使える？」

「……そういえばこっちの人でも使える人とかいるのかな？」

ボクの目なら一発でわかるしやってみよう。

いや、リュウに聞いてから。

「属性見ていいの？」

「別にいいんじゃない？」

アバウトだな。

ま、オツケーみたいだし『視て』みますか。

「インチョーは・・・水？でも魔力が少ない。コレじゃ魔法の行使は無理」

「・・・一度でいいから使ってみたかった」

「俺は!？」

「ちなみに田中は魔法の素質ゼロ。来世からやり直せ」

「チクシヨオオオオオオオオオオオ!!!」

・・・そういえば、アレ使えんじゃない？

ボクは魔法陣を展開。

ログさんがふざけて作れって言った例のやつ。

そこに手を突っ込む。

「ちょ!？」

「何ですか!？」

「きゃ〜!？」

「何よコレ!？」

「え?ありえないの?」

「・・・?」

リカ以外がパニクる。

そういえばリカ以外知らないんだっけ?

ボクはそこから手を抜くと、そこには数枚の金属カード。

「さつきのはログさんがふざけてソラに作らせたたドラ もんの
四 元ポケット的な魔法」

「・・・それで相当、金を儲けれるぞ!？」

「へえ〜。あ、コレあげるよ」

別に興味ないからいいや。

ボクはそのカードをインチョーに渡す。

「え?」

「いや、これは水属性系の魔術符つてやつで、コレに魔力を通すと魔法が使える。ちなみに、ボクが無理やり作らされたヤツ」

丁寧に一個一個どんな魔法かを教える。

ま、護身用程度の魔法だしね。マジな魔法使いに襲われたらどうにもならない。

それにインチョーなら悪用しないでしょ。

「へえ〜。使ってみていい!？」

「リユウになら」

「オイ!なん」 水霊ミズチ 「!」「ごうおば!？」

「お〜。成功、成功。ボクの属性じゃないから不安だったんだよね〜。ま、擬似的に使えるけど。」

「何だよアレ!？」

先ほどの魔法について説明しよう。

さっきのは空気中の水分が収束して使用者の近くに水の精霊っぽい小さな小人を作り出す。容姿はまるで妖精のよう。

そして、例によって、ある程度の自我を持たせてある。犬ぐらいの？

それが アクア・ブラスター 激流の水衝撃 並みの魔法を放ったらビックリするよね。

『きゅっっ』

「「「「かわいい!!!」「「「「

女子が水霊に群がる。

・・・でも、なんか名前がついてたほうがいいよな。

「よし、特別に名前を考えてくれたらボクがそういう風に設定するよ」

「できるの?」

「いや、他には洗濯のやつとか飲み水の魔法とか一応、攻撃系の魔法二つ、あとはポケットの魔法」

「……つい最近 ホスト 魔窟 で生活系魔術符が流行はやってるのはお前が原因だな？」

「そうみたい。ログさんがすげえな！って言ってた」

「……いいな。魔法」

がんばれ田中。

いざとなったらインチョーに守ってもらえ。

「俺、最低だな！！」

「……そういえば」

「スルーか！？」

黙れ。田中。

「どうした？」

「いやさ、あの中で魔法の素質があったのってボクが最初に飛び膝蹴りをかましたヤツだけなんだよね」

「は？どういうことだ？」

「……魔力無しで魔術符を使ってたということですか？」

ボクはうなずく。

魔術符は魔法使いじゃなくても使える。

それは向こうでの話。

向こうのほとんどの人は必ず魔力を持っている。

それを行使できなくても使えるのが魔術符というツールだ。

つまり、まったく魔力を待たない人には使えないという代物。

ボクはつい最近このことをログさんに聞いた。

なんか嫌な予感がする。

「三谷？」

「ソラ。ソラでいい」

「・・・ソラ、ヤバいのか？」

「そうかもね。だから、もしものときは・・・」

ボクはわいわいしてる女子に気づかれないようにさりげなくビームのようなものを渡す。

「コレで何とかして。これは太郎にとって最強の武器だ」

田中太郎はうなずく。

「ね、これさ、わたしたちにも作って！」

「ゴメン。みんなの属性に合わせたのはまだ作ってないんだ。てか、作れる自信が無い」

「「「え〜」「」」」

・・・ボクは今進めているみんなの計画を早急に仕上げる必要があると感じた。

ま、後は仕上げだけだし。

8話・HIDING(後書き)

作 「さーせん。回線の調子が悪くて投稿できませんでした。」
空 「それでやっとできたと。」
作 「そういうことです。」
茜 「でも、ついにあたしもレギュラーデビューー!!」
作 「いや、準主役で。」
太 「俺は!？」
作 「準モブで。」
太 「いや、どんなモブだよ!？」
作 「さあ？」
隆 「おい、次回予告はいいのか？」
空 「忙しそうだし勝手にやっっちゃえばいいんじゃない？」
リ 「メモによると、『ドキッ ソラの尾行第作戦!』ってなってる。」
空 「へえ〜。」
隆 「リアクション薄いな。」
リ 「でも、どういうことかなこれは？アタシに隠れて何をしているのかな？」
空 「……いや、それ言っちゃオシマイぎゃあああああ
あ!」
隆 「次回もよろしく頼む。」

9話・FOLLOWING

side???

「使えんやつらだ」

そうやって言うと、黒い人影は苛立たしげにパソコンのようなもののディスプレイをたたく。

「アレは一番完成に近いものなのに・・・」

そうやって近くの専門書の積まれた机の上を見る。
そこには多くの魔法関係の品がある。

「・・・もっとデータが必要だな」

そういうと机に向かって何かを作り始めた。

side空志

「帰った〜!!」

「ただいま〜」

「おかえり〜」

みんなは思い思いの言葉で帰宅を宣言。
さて、ボクもログさんトコに行くか。

「じゃ、ログさんトコに行ってくるよ」

「じゃ、俺も一回ついでっていいか？」

「あたしも」

「・・・あれ？」

なんかいつもと違う声か？

「って、何でいるの!？」

そこには田中とインチョーがいた。

「「なんとなく?」「」

「うわー、適当な答えをありがとう。でも、今日は大切な用だからダメ」

そういうと、ボクは魔法陣の部屋に行き、すぐに転移した。

side 隆介

「行っちゃった」

「・・・そんなに行きたいか？」

オレは二人のクラスメイトに聞いてみる。

「まあ、気になる」

「それにアレは何か隠してる!?!」

「浮気!?!」

リカ、何故すぐにそっち方面に行く?
ま、いつものことだ。ほっとこう。

「確かに気になるね」

「事件ね」

「……すごく楽しそうですね」

「じゃ、尾行大作戦開始!!」

……大丈夫か?

side 空志

「!?!」

「どうした?」

「いや、なんか寒気? すぐく見られてる気が……」

「……ドンマイだな」

「コー」

「いや、否定してくださいよ!?!」

side 隆介

「……で、ソラはあそこだが？」

オレはログのおっさんの魔道具店を示す。
ソラは直接店内に転移したようだ。

「……まさか想い人にプレゼントを〜!？」

「……アタシだといいな……」

「……チッ」

「しょうがないわよ、田中、リカはソラにゾッコンだから」

「……古くない？」

「リュウさん、コレには意味があるのでしょうか？」

「無いほづに今日のメシを賭ける」

「……いや、これは何かあるでしょ!」

……。
……。
……。

バツ!!

「何でアリアがここにいんだよ!？」

「わたしはおもしろいことに引き寄せられるのよ」

胸を張って言うな。

お前が関わるとロクなことにならないことは学習済みだ。

「誰だ？」

「お〜！？新しい子？服屋のアリアよ！..」

「.....」

「厄介事の塊だ。かまわん。やれ」

「.....エリア!..」

現れる水の小人。

放たれる水。

そして道には水が滴る貞子のようなエルフ。

よし、悪は滅した。

ガチャ。

バババツ！

オレ達は一気に物陰に隠れる。

「うわ！？何この水！？雨でも降ったのかな？」

「に〜」

「あ、そうだね。行くところか」

ソラは手ぶらでどこかに行くことと歩みを進める。

「どっしする？」

「ここは情報！」

「そうね」

女子は何か言いつつ魔道具店に。
オレ等もそれについて行く。

「ログさーん！」

「……ガキどもか」

がっかりな顔をするおっさん。
それに付き合っオレ等もがっかりだ。

「なんか用か？」

「ここで三谷君は何してたの!？」

「ミタニ? お前誰だ？」

「あ、ソラ君のことだよ。この子は茜ちゃん」

「……そうか。てか、あいつは教えてないのか？」

「………教える?」「………」

「そうか……なら、直接聞け。あいつは教えると思っぞ」

そういうとおっさんは奥の工房に消えていった。

これは答えてくれる雰囲気じゃないな。

「じゃ、聞きにいつてみよ〜!!」

「その前にどうやって探すんだ?」

オレ達はソラの居場所を知らない。

それに、あいつは携帯が壊れたままだ。

あつたとしてもここでは使えない。

だが、坂崎と冬香は余裕の笑み。

「大丈夫よ」

冬香が自信満々に言う。

何でだよ。

「こつちには超正確なソラ専用のレーダーがあるじゃない」

「……あ〜」

オレとシュウはすぐにわかった。

そして、リカを見る。

「……え?」「……」

訳がわかってない一組の三人が疑問の声を上げる。

side 空志

「・・・レオ」

「に？」

「ホントに誰かに見られてる気がする」

「・・・」

「頼むから返事してよ！」

side 隆介

「・・・すごいね」

「いや、もはや超能力だろ!？」

「しょうがない。リカにはコレが標準装備なんだ」

「そうですね」

「恋する乙女は最強なんだよ」

「ソラがあそこに入ったわ」

そこは山岳区。ここは武器屋などが多いエリアだ。

理由はここらで採れる魔法金属マナメタルが豊富で、かつ、メインの次に人通りの多い道路があるからだ。

ソラはその店の一つに入ってしまった。

「あれは……ログのおっさんと仲のいい武器屋か？」

「そうなの？」

「ああ、何回かオレも武器を頼んだ」

「へえ〜。ちなみに武器は？」

「双剣」

「両利きなんですか？」

「いや、カッコよさそうだったから」

「理由が酷いわね」

「若気の至りだ」

「……もうちょっと近づかない？」

「バレねえ？」

「大丈夫」

オレ達はそろそろと武器屋の戸の前で聞き耳を立てる。

「……見事なもんだね」

「いや、うれしいです」

「世辞じゃないよ。ここまででは魔法を使ったってそうはいかない。君にはかなり才能があるんだよ。まさに業物だ」

「……武器を作ったのか？」

「どんな！？」

「鎌かな？」

「……プレゼントなんですか？」

「……もうちょっとで見えそう！」

「待て、それはフラグう！？」

ボタン！

オープン・ザ・ドア！

中にはソラと、日本の妖怪、牛頭の魔物がいた。

「……何してんの？」

「……ソラ君の友達かい？」

「……で、気になったからついてきたと」

ボクは事の主犯、インチョーからすべてを聞いた。

「ごめんなさい」

「別に謝るほどの事じゃないからいいけど」

「……ソラ！」

なんかリカがやたらと真剣な顔だ。

「誰にプレゼントを!？」

「アレ!?ボク、リカに言わなかったっけ?少なくともGWのときと言った気が?」

「……………え?」「……………」

「ソラ君、いつそのことで渡しちゃえば?」

そういうのは牛の頭を持つ日本の妖怪の魔物。牛頭の大地煉さんだいぢれん……そうだね。

ちようど全部できたしね。

「じゃ、お願いします」

「あいよ〜」

煉さんは近くの棚から布にくるまれたものをいろいろと出す。

そして、カウンターにそれを置く。
ボクはその一つを手にとって言う。

「じゃ、リュウ、出来立てホヤホヤ」

ボクはリュウに包みの一つを渡す。

「・・・なんだ？」

「開けりゃわかる。ほい、シュウ、リカ」

ボクはみんなに次々と渡していく。

・・・回ったかな？

「じゃ、どーぞ開けて」

みんなが包みを開ける。

そして驚きに目が開かれる。

さつきまでタダの棒っばいのが開けると変形したからかな？

「・・・お前、どうして？」

「ありゃ？リュウは双剣使って煉さんから聞いたからそれにし
ただけど？」

リュウの手には漆黒の刀身を持つ二つの剣。

シュウには緑の光沢を放つ手甲。

ガントレット

リカには柄が赤い大鎌。

スズには自分の身長ほどもある杖。

冬香には僕オリジナルの球体型のデバイス魔術機械。

「ゴメン。ボクが勝手に武器を決めちゃったけど」

「……コレ、どうやって作ったのよ？」

「ログさんの友人の数術術式に詳しい人を訪ねたんだ。死ぬ気でプログラムを作ったよ」

「……この木」

「……あるんだね、ユグドラシル世界大樹」

「あるんですか!？」

「まあな」

「それより、スズの魔法増幅作用をこの杖にさせるための魔法文字を刻むのが大変だった」

「アタシの鎌にそっくり」

「うん。記憶を頼りにね」

「これは？」

「だって、格闘するのに一番いいのはコレだって煉さんが進めてくれたんだ」

「君は本当に優秀だよ」

「使い方は？」

「気合で」

「・・・わかったわ」

「じゃ、君たちの主に尽くして」

そうすると、武器が一斉に消えた。

「どこいったの!？」

「消えた!？」

「大丈夫。武器の名前を呼べば来るよ。名前は各自で決めといて。それで、名前を呼ぶとこんな風になる。『ナハト』! 『ナイト』!」

ボクの両手に銃が現れる。ついでに腰にはベルトとホルスター。左がナハト、右がナイト。

「三谷君は拳銃なんだ」

「でも、刃がついてるな」

「まあね」

初めて見る田中とインチョーが言う。
ボクは銃を消す。

「あの武器たちには自己進化の魔法構成が組んである。どう進化
プログラム

するのはボクにもわからない。でも、みんななら大丈夫って信じてるから」

「ソラ!」

「うお!?!抱きつくな!」

「ぶぶぶぶ」

「ハハハハハ、ソラはシネ」

「黙れインチョー!

田中は怖いよ!」?

「君の彼女かい?」

「「そうです」「言わせるよ!」?」

「ま、ありがとっな」

「私もです」

「アリガト」

「ありがと」

「暇なときは僕のところにも武器を作りに来て欲しいね」

「……考えときます。じゃ、今日は旅行帰りなんでもう帰ります」

「ああ、またね」

「オレ等も帰るぞ」

ボクの作った武器たちがみんなを守ってくれますように。
ボクはそう願いながらみんなと帰路をともにした。

9話・FOLLOWING（後書き）

作 「お久しぶりです。」

隆 「ホントだな。」

空 「で、ちなみにストックは？」

作 「かなりあるね〜。ただ、アップする暇が無い。」

リ 「ドンマイ。」

鈴 「そこはがんばってよ〜。」

作 「ま、それより次回！」

空 「・・・またなんかあるんだね。」

リ 「がんばって。」

隆 「なんか事件ばっかだな。」

鈴 「でも、最初は平和だよ〜。」

空 「いや、ボクが平和じゃないから！」

作 「じゃ、次回もよろしくお願いします。」

10話・ASSAULT!?

s i d e???

「できた」

これで準備はいい。

今回は前のデータを検証し、さらに完成度が高くなった。前の邪魔が入ってもそれなりに戦えるだろう。

「いや、その前に肩慣らしをさせておくか?」

そう言っつてパソコンのような機械のディスプレイを見る。

そこには、友人たちと楽しそうにしゃべる一組の委員長、多湖茜となんかレギュラーっぽい位置に昇格した田中太郎が映っていた。

s i d e 空志

「疲れた〜。今日のご飯は?」

「サンドイッチだよ〜」

「はい! ソラ」

リカがボクにサンドイッチを渡してくれる。

今は昼休み。

ボク等は寮が一緒だからって理由でスズが作ってくれた弁当を食べる。

いや、スズさまさまだよ。

つい最近レオも学校についてくるようになって、レオも弁当を

食べてる。

いいのかなあ？

「にしてもうめえな！」

「ホントね〜。」

「・・・何でいんの？」

インチョーと田中だった。

「細かいことは気にするな。それに誰のおかげでお前の殲滅部隊を撒けたと思ってるんだ？」

「『ソラのチートスキル』」

「ちげえよ！！この俺！アンジェリカさんのファンクラブに加入してる俺が偽情報を蒔いたんだよ！！」

「『うわあ〜』」

これはドン引きだよ。

自分でリカのFCに入ってるって・・・無いわ〜。

「ちがっ！？俺は三谷のために！！！」

「田中、見苦しい言い訳はやめなさい」

「そっだぞ」

冬香とリュウの口撃。

「……聞かなかったことにする」

リカがそう言つとボクの後ろに避難。

レオも田中を威嚇する。

ドンマイ。

君はリカの対人恐怖症の範囲外にいけそうだったのにな。

「……終わった」

「そうだね」

「いや、トドメさしちゃダメでしょ。ほら、インチョーのせいだ

田中が……」

口に出してはいえない状態に。

読者の皆様さんのご想像におまかせします。

「そういえば、噂、知ってる？」

「リカ&ソラ・カップル疑惑のことか？ちなみに一番有力とされてるのは力による脅しらしいな」

「ちょ、リュウ、その話、詳しく聞かせてもらおうか？」

「そんな当たり前のことじゃなくて」

「当たり前なの!？」

「おそらく、聞いたことが無いのはソラさんだけです」

周りを見る。

・・・うん、みんな知ってる目だね。

「・・・へこんでるところ悪いけど話すよ?」

「・・・ハイ」

「実はね、この学校の生徒が何人が怪我をしてるの」

「・・・そののドコが変なんだ?」

「・・・アレですか?無差別に人を襲つと最近有名な。通り魔」

「そう、それ。でも被害者には共通してる事があったの」

「何?」

「被害者が言うには犯人はありえないことをしたって。内容は魔法みたいなこと」

「へえ」

「ふん」

「おい、食いすぎだぞ」

「フッフ、早いもの勝ちなのだあ〜!!」

「何で!? 魔法使いかもしれないのよ!？」

いや、だってねえ。

「参謀のソラよ説明してやれ」

「うい、大総統閣下」

「・・・前と呼称が変わってるよね」

リカのつぶやきはスルー。

気にしたら負けだって。

「ボク等にはどうしようもない。第一、情報が少なすぎる。それに、魔法で一般人を襲うメリットが無い。むしろ、殺したほうが後腐れしない。そうすると愉快犯の可能性が出る。でも、それだと余計に足取りをつかみにくい。だから、もし、その人をやっつけようとしたら、偶然ボク達を狙ってもらうのを待つしかない」

「ま、そういうことだ」

「・・・よく考えたらそうね」

インチョーは正義感が強いけど、自分にできることはちゃんとわかっている。

エライエライ。

「ま、そんなわけだし昼食食べて特別授業に行こう」

今日も死ぬかと思った。

でも、男子の中で魔法抜きなら最強の戦闘力のあるシュウを捕らえた アマイカズチ 雨雷 を避けるとかどんなんだらう？

「お袋に常識は通用しないぞ」

「魔法抜きでも私を遥かに凌駕しますからね。それこそミジン」とドラゴンが戦うレベルです」

「うわゝ勝負になってないうえに例えがわかりにくい」

「・・・ソラたちはホントに何をしてるの？」

「わたしも気になる〜」

「リカ、スズネ、知らないほうがいいこともあるのよ」

そんな事をしゃべっていると寮に到着。

思い思いの言葉で帰宅を宣言すると、一旦自分の部屋に戻る。

リュウは夕飯まで寝ようとして、シュウは薬でも作ってるんだらう。

スズはすぐに夕飯の支度に取り掛かって、冬香は機械に囲まれてなんかしてる。

リカは……。

「ソラ〜暇〜」

「……鍵閉めたのに入ってこないでよ」

ボクの所によく来る。そしてべたべたとひつつく。

ボクは君の彼氏でもないのにこんなことをしないでよ。みんなに見つかるといういろとまずいから。特に明日の学校でのボクの命とか。

それに、魔法の実験がしたいんだけどな〜。

「ねえ〜。誰か卵と鶏肉買って来て〜」

スズかな？

台所の方から声が聞こえてきた。

どうも材料が足りないようだ。

「昼寝中！」

「手が離せません」

「……」

なるほど、ボクに行けと。

ボクはため息をつくと台所にいるであろうスズに声をかける。

「ボクが行ってくるよ」

「アタシも〜」

当たり前のようについてくるリカ。

「お願いね」

そう言っつてボクとリカは寮を出て、買い物に出かける。

「っつて、腕！！胸！！」

「ダメ？」

「いや、ダメじゃないけどー！いや、ダメなのか？」

「みゃ」

いつものやり取りをしつつ、そして周りから殺気のこともった視線
受けつついつもボク等が行くスーパーへ。

夕飯の買い物をする主婦の方々が多い。

ボク等が店に入ろうとしたとき、後ろから声をかけられた。

「お、三谷か」

「ん？・・・田中か」

なんか、ホントによく出るね。
モブなのに。

「うるさい。で、どうしたんだ？」

「いや、食材が足りないみたいでさ。その買出し」

「へえ〜。デートかと思った」

「……こんなところにデート誘って最低だな」

「……確かに」

「ねえ、材料」

「あ、そうだ。スズが待ってるからボク行くよ」

「ああ、またな」

「うい、またあしっ!? 月守ツキモリ!!!」

ボクは魔法の盾を展開。同時に 月詠ツクヨミ を発動。
それと同時に火の魔法が着弾。

轟音が響き、周りの人がこちらを向く。

「お前、どういっつもりだ!?!」

ボクは目の前にいる同い年ぐらいの少年に怒鳴るようにして聞く。
そいつは、黒を貴重とした服装。フードを深くかぶっていて、顔
はわからない。そして、手にはカード。

魔術符だ。

「……俺様はそいつを消せと命令されたただけだけど?」

おもしろくもなさそうにそいつは答える。

「でも、あんたみたいなのがそばにしていると聞いてないんだけど？」

そいつはため息をつくとかカードをこちらに向ける。

すると、そのカードから炎の槍が放たれる。

だが、展開したままのボクの盾に阻まれて周りへ被害は出ない。

だが、さっきと違って多くの人が注目している。

小さなきっかけだった。

誰かが悲鳴を上げた。

それが連鎖した。

たちまちパニックに陥る人々、周りは怒号などであふれる。

「やめる！！お前魔法使いじゃないな！！！」

「・・・そうだけど？」

「ソラ？それってどういうこと？」

「前と同じって事か！！！」

「いや、前より強化されてる」

「そんな事はどうでもいい。俺様達は力を手に入れた。選ばれたんだ。コレをくれたやつはお前を殺し、そしてお前らを殺せば俺様達に刃向かえるヤツはいないといった」

・・・つまり、敵は複数。

カードを作った黒幕がいる。

田中、そしてボクとリカ、リュウ、スズ、シュウ、冬香を狙ってるって事か。

いや、ここにいるメンバーはカードのことを知ってる。すると・・・
ヤバイ！！

「インチョー、多湖茜も狙ってるのか!？」

「・・・決まってるだろ。別のヤツが狙ってる」

最悪だ!!

早くインチョーのほうに行かないと!!

「・・・行かせると思ってるのか?」

今度はカードから炎の弾丸による弾幕。

ボクは盾に魔力をこめる。

コレじゃダメだ。防戦一方だ。

「リカ!!」

「うん」

リカはその言葉で姿を消す。

霧になって移動を開始したんだろう。

すると、リカは相手の後ろにいた。

右ストレート。吸血鬼の力は半端じゃない。

だが、相手には届かなかった。

まるで、結界に守られているかのように空間の途中でリカの拳は止まっていた。

リカはすぐさま距離をとって大きく跳躍、ボクの横に着地。

「ソラ?」

「わかんない。リカが殴る瞬間に結界みたいなモノが展開した」

前のヤツとは比べ物にならないぐらいに改良されている。物理攻撃だけじゃなく、魔法もガードされるかもしれない。コレじゃ、インチヨーがホントに危ない。

でも、田中をほうつては行けない。

・・・ケータイは壊れたまんまで。明日、絶対にケータイを買いに行こう。

「『ナハト』!!」

ボクの左手に刃のついた銃が現れる。

ボクはそこにありつただけの魔力をこめる。

魔法使いなら魔力を見れなくても、ある程度の魔力を感知することが出来る。

ボクは空に向かって銃を撃つ。

眩いばかりに輝く光弾が夕焼け空を白く染める。

「ま、コレでみんな気づくでしょ。」

「応援を呼んだところで変わらない。」

「いや、みんなが来るころには君は倒れてるね」

「理由はアタシ達の本気力でボコボコにされる」

「・・・いや、多湖が心配だ。三谷。お前は多湖のトコに行け」

「・・・リカ、いざとなったら田中は見捨てていいから」

「うおい!？」

「わかった」

「理解しないで!！」

「レオ!!--ここでリカの援護」

でっかくなるレオ。

でも、今回はボクは自分の足で行く。

ま、駅のほうにインチョーらしき魔力の人がいるってわかってるしね。

「じゃ、そういうわけで」

ボクは走り出す。

「逃がすか!！」

再び放たれる弾幕。

だが、それはボクじゃなく、リカ達に放たれる。

おそらく、ボクに盾を出させてみんなを守らせようという考えだろっ。

「『クレセント』!！」

リカの手到大鎌が現れる。

それを振り回してすべての炎の弾丸を切り裂く。

いや、どこぞの五衛門だよ。

「・・・すげえ」

田中は感嘆の声を上げ、相手は驚きに目を開く。

「ま、ボク等をなめすぎ」

ボクはインチョーがいるであろう方向を指して駆け抜ける。

side 茜

「?」

あたしは立ち止まった。

ただなんとなく、学園近くのスーパーの方からいやな雰囲気があった。

そのときだった。突然、空に光が弾けた。でも、この感じは知ってる。

魔力。

魔法に素人なあたしでもわかるほどの魔力。

これは何かが起こってる。

「コンニチワ。アンタが多湖茜？」

あたしは後ろを振り向いた。

そこには同じ年ぐらいの女性。そして男性が二人。合計三人の人がいた。

でも、あたしは答えない。その三人は例のカードを持っていたからだ。

「姐御。間違いないですぜ」

「写真どおりだ」

二人の男性も答える。

「どうやら狙われていたらしい。」

「エリアー!!」

『きゅ!』

現れる水の小人。

さらに、手に三谷君からもらったカード、魔術符を握る。

「……アンタもこっちの人間かい？」

「全然。これは友達にもらったの」

「……例の魔法使いのチームの一人からでしょうかね？」

「大方そうだろ」

「ま、そんなのはカンケー無いけどね。大体、そのちびっこいやつはオモチャかい？」

「違う!!!」

「この子は、あたしにとって、パートナー最高の相棒だ。笑うことは許さない。」

「いや〜。結構真剣に作ったボクの人工精霊をバカにされるのを実際に聞くとむかつくね。特にあんた等みたいなチンピラに」

「なんだと！？貴様姐さんを侮辱するか！？」

「姐御に謝れ！！」

「黙れ手下その1、その2」

「・・・すごくタイミングよく出てくるね」

「うん。タイミングを見計らったからね」

あたしの隣にはオツドアイの同級生。三谷君がいた。
フラグゲッター（死亡）でよく知られる。

「そんな知られ方はいやだ！」

「無視をするな！！」

「ストリーム・ランス
螺旋の水槍　！！！！」

相手は火、インチョーは回転する水の水の槍で攻撃・・・って、あれ？

「・・・ボクが渡したのってただの水の水の槍だと思ったんだけど？」

「あ、コレと組み合わせしてみたの」

そう言ってみせるのは水の水の槍のカードと洗濯のカード。

「洗濯！？てか、まさかの合成！？」

これは予想外だ。

まさかこんな使い方をするとは。

いや、ボクもつい最近合成を考えただけどリユウにさすがにお前でもそれは無理だつて言われたから保留にしていた。

・・・じゃ、ボクも試してみようかな、召喚を。

魔法も半端ないやつにしないと効きそうに無いし。どうせならコイツ等で実験しておこう。

「魔法陣展開！」

手にはおなじみ、赤色の魔法陣。

よし、これをベースにしよう。

さて、どんなチートができるかな？

ま、ボクのイメージを反映するなら形は決まってる気がする。

「ヤバい気がする！！あんだ達！！やるよ！！」

「「おう！！」」

火、土、風の巨大な塊が出現。

「エリア！！三谷君を守って！！」

『きゅ』

エリアの周りに巨大な水塊がいくつも出現。

・・・とてつもなくかわいらしい外見に似合わず凶悪なことをしようとしてらっしやる。レベルとしては中級の上位魔法。

エリアが敵のチンピラをさす。
すると、水塊は敵に殺到する。
だが、相手も先ほどの魔法で水塊を迎撃する。

「しゅーりょー」

ボクの手元の魔法陣が輝く。
すると、手の魔法陣が消え、代わりに足元は鳥を意匠化したよう
なものが描かれている魔法陣が展開する。

やっぱりね。

たぶん、予想できた。

「召喚！！ 朱雀スザク ！！」

ボクは魔法陣の特性を無意識に最大に使ったようだ。
さて、召喚の魔法は吉と出るのか凶と出るのか！

11話・RESUSCITATION

s i d e 空志

「スザク朱雀　！！」

魔法陣から炎があふれる。

しかし、それすぐに収まる。

変わりに、ボクの頭上に大きな火を纏う鳥が……。

「アレ！？いない？」

いなかった。

……不発？

つんつん。

足元で誰かにつつつかれる。

足元を見てみると、そこには赤い色のスズメのような鳥。ただし、膨大な魔力を感じる。

「お前かい！？確かに朱い雀だね！！」

「……失敗？」

「……わかりません。」

足元には首をかしげてかわいらしいしぐさをするスズメ。

でも、コイツは他の魔法と確実に違う。

まず、実体がある。今までは炎で構成されていたり、雷で構成され

てたりした。つまり、幽霊に近い存在だ。でも、コイツには、実体がある。ちゃんと触れるし、攻撃されたら傷つくだろう。そして、おそらく自我がある。理由は単純。勝手にそこらが無意味にひよこひよこ歩いてるから。ただの魔法ならこんなことをする必要は無い。

「・・・エリアと同じなのかなあ？」

だとすると、自己進化のプログラムが組まれている。

つまり、ボクが達しているレベルが雀クなんだろう。

・・・なんか地味に落ち込むよ。

「ハハハハハ！そんなので戦おうってかい!？」

「ですよね〜」

肩にスズメが乗る。

いや、愛玩にしか向かないね。

「な、朱雀、君さ、アレをどうにかできない？」

スズメはボクの手を握ると相手を見る。

そして明後日の方向を見る。

ダメなんですね。

「ビビッて損したぜ！姐御！」

「本当だ。見掛け倒しもいいとこだ」

「ボクもそう思います」

「自分で言っちゃったらダメだよね」

「ま、そろそろ遊びは終わろうか」

リーダー格の姐御さんが土の弾丸を形成すると、手下二人は土の弾丸に魔力付与。

「ヤバい！インチョーボクの後ろに！！」

「え？うん！？」

「ツキモリ月守 ！！」

ボクが盾を形成すると相手は合成魔法を放つのは同時。風の力で高速で放たれた土の弾丸をかるうじて盾で防ぐ。だが、土の弾丸が盾に着弾すると、大爆発を起こす。ボクの盾は破壊され、インチョーもろとも吹き飛ばされる。

「くう！？」

「きゃあああああああ！？」

ボクとインチョーは地面に打ち付けられる。

「さすがにこれは無理だったようだね」

「これはあつしらの最強の攻撃ですからね」

「無論だ」

痛みで意識が飛びそうだ。

インチョーはピクリとも動かない。

ひよっとすると頭を打ったのかもしれない。

「じゃ、コレでトドメだよ」

さっきと同じ魔法。

防ぐための魔力をうまく練れない。

どうすりゃいいんだよ！！

あたりが夜の帳に包まれる。そこには相手の必殺の魔法。

ボクは、思わず目をつぶった。

side太郎

「ハッ！」

アンジェリカさんが大鎌を振るう。

すると、相手の魔法が次々に切り裂かれていく。

まるで、切り裂かれた火が花びらのように舞う。

だが、攻撃はしない。いや、できない。ただ、相手の攻撃を防ぐだけ。

「・・・どうした？さっきより動きが鈍っているぞ？」

そう、原因は俺だ。

俺に何の力も無いから。

ただ、魔法について少し知ってるだけ。それだけの人間。

俺はレオという三谷のペットに守られている。

レオは口から光線のようなものを出して攻撃をしているが相手には届いてない。

「・・・そいつは何もしねえのか？」

「一般人。だから、逃がしてあげて」

「ハイソウデスカ。とても言うと思ってるのか？」

放たれる炎の弾幕。

アンジェリカさんにも疲労が現れている。

足手まといになっている。

ちっぽけでいい。俺にも何かできれば！！

「俺にもできることは！？」

「ダメ！！貴方が危ない！！」

「ガウ！！」

「・・・余裕だな」

言葉と同時に弾丸を放つ。

それがアンジェリカさんをついに捕らえた。

「しまっ！？」

「リフレクション
反射！！」

声が聞こえた。

すると突然、アンジェリカさんに当たる瞬間に魔法が反射した。

俺は驚いて声のした方向を向く。

「すごいね〜。コレ、魔法精度も上がってるよ〜」

そこには自分の背丈を越える魔法の杖を構えた天然系魔法使い、坂崎さんがいた。

「た、助かった・・・」

「遅れてごめんね〜。他のトコにもカードを使う人がいたんだよ。じゃ、わたしががんばっちゃうね〜」

「・・・何人来ようと同じ」

「そうだ！！相手には攻撃どころか魔法すら効かない！！」

俺は坂崎さんに情報を伝える。

だが、二人は余裕の表情で敵の言葉を聞き流す。

「いえ、ゲームオーバーね」

「というわけで アンチ・サーベル 逆刺突剣 ！！」

何をしてるんだ！？

相手に魔法は通じないはず！！

俺がそう思ってた、敵も同じだろう。

だが、純白の光の刺突剣は相手の障壁をいともたやすく突き破り、あまつさえカードに達した。だが、それだけだった。

「・・・何をした？」

「どういこと!!」

アンジェリカさんが間合いをつめる!!

そんなことをしても障壁が!

ギンツ!!

アンジェリカさんの大鎌は地面をえぐりつつ、相手の首の皮一枚のところまで止まった。

「っ!? バカな!？」

「魔法はもう撃てない。あんたの負けよ」

「何で!? 何で!? 何で!？」

俺にもわけがわからない。

ついさっきまでこちらの攻撃は一切届かなかったのに……。

「それがわたしの魔法だよ」

「『逆』^{リバース}の属性。魔法に対しては最強の属性」

……なんというチート。

それで杖か……後衛に徹しろという意味ですね。

「俺様は!! 選ばれたんだ!! なのに何で!?! どうして!?!」

フードが落ちる。そこには髪を振り乱して血を吐くような叫びを上げる敵の姿。

・・・。

・・・アレ？

「つて、女あ！？」

「女で悪いか！？」

・・・サーセン。

「・・・ま、ちょっと気絶しててね。」

バシッ！ドサ。

アンジェリカさんが手刀で敵を気絶させる。

「じゃ、ソラ君のほうに合流しようか」

「そだね」

・・・何？この女子最強伝説。

side空志

・・・何も起きない。

ピギヤアアアアアアアアアアア！！！！

甲高い生物の鳴き声。

ボクが前を見ると、そこには朱金に輝く羽毛を持ったオオトウ鳳。その鳥がボクを守るようにボク達の前にいる。

『お父様、気付きになられましたか?』

「誰がお父様だよ!?!」

ボクは声の方向を向く。

そこには、透き通る肌を持つきれいな女性。

・・・別に表現は間違っていない。

実際に透けてる。

だって、水の精霊っぽい人だったんだもん。

『貴方です。わが父』

「・・・いや、残念ながら君のような娘は知らない」

『なっ!?!?』

ショックに目を開く水の精霊。

いや、ホントに誰!?!?そんな風に見捨てられた子犬のような目で
見られても!?!

「うゝん・・・?」

お、インチョーの目が覚めたようだ。

『マスター、大丈夫ですか?』

水の精霊がインチョーに言う。

・・・マスター?

「……まさかエリア？」

『もちろんそうに決まっております。こんな美人が私以外にいるのですか？』

「いや、自分で言うな」

「……ホントにエリア？」

驚きの表情でインチョーが確認をとる。

『はい』

……何が起きたんだ？

エリアがなぜか急成長した。

……ひょっとして、この鳥は……。

「朱雀？」

ピギャアアアアアアアアアアア！

「……さいですか」

「どづいづいと？」

ボクにもわからない。

「そいつはなんだい！？」

ごめん、わかんない。

『「命令を」』

ピギヤアアアア!!

・・・よし、いつちよやりますか。

「インチョー、ボクの援護。エリア、朱雀は攻撃。ボクは魔法を
練る」

そういつとエリアと朱雀は敵に攻撃を開始。

エリアは以前とは比べモノにならないほどの量の水塊を操り、敵
を攻撃。

敵には何らかの障壁があるために魔法は届かない。だが、敵はこ
の勢いに押されてへっぴり腰になってる。

朱雀は炎を纏って敵に突進をかましている。

・・・リアル・ゴッドバーダアタック的なやつだね。

さて、改良版 月夜^{ツキヨ} を放ちますか!!

何も描かれていない魔法陣を展開。

「 其は魔に属す法則!!」

それは黒の夜のごとき魔法。

それは太陽の光のように全てをてらせない。

しかし、黒の夜を照らす一筋の光のよう!!」

「そいつを殺せええええええええええ!!!!!!」

ボクに魔法が放たれる。

「 スクリュー・バレット
螺旋の水弾 !!」

よかった。

マジでどうしようかと思った。

『お父様』

「いや、お父様止めれ」

『おそらく、お父様は力を極限にまでセーブしています。今回、偶然そのリミッターが外れたためにわたしや朱雀にその影響が現れました』

「……ボクは君をそんな風に育てた覚えはない！！」

『それをお忘れなきよう。では、リカ様や田中様と合流を。まだ敵勢力は町中でお父様の仲間を探して戦闘を行っています』

……最後までスルーされた。

ま、今はとにかくエリアの言うとおりみんなと合流しよう。

「……夢みたいだね」

「残念ながら現実。……また課題を見つけちゃったし」

ボクが本気を出すすとすごいらしいことが判明した。

でも、その本気の出し方がわかんないけどね！！

「そんなことより、リカの方に田中もいる。すぐにそっちへ行く。インチョーはどうする？ボクとしては家に帰ってほしいな」

「行く。エリアもいるしね!!」

『そうです』

ですよ〜。

ボクはため息をつくるとインチョー達とともにリカのいる方向へ走った。

s i d e r i c a

突然だけどアタシの魔法、^{ヴァンパイア・スベル}吸血呪は三つしかない。

^{イ・ダンス}少なくとも今使えるものは攻撃系、^{デスサイス}血濡れの大鎌、^{ブラッテ}血の

舞踏。

そして、最後に特殊系、^{ムゲン}夢幻ノ魔眼。

普通の攻撃がダメ。

なら、これを使うしかない。

でも、前回に使用したとき、実はぶつつけ本番でした。ソラを守りたい一心でホントに頑張った。

簡単に言っと、ひよっとしたら失敗するかも!?

と、いうわけで、本来は吸血呪に詠唱は必要ないけど、今回はします。

「 我、闇に潜むもの。

我、血を求めさすらうもの。

我、不死なるもの

我、絶対的な古の種族。

我が魅了^{まぼこ}の眼に囚われる!!

^{ムゲン}夢幻ノ魔眼 ^{マガン}!!」

アタシはその目で敵をにらみつける。

しゅん。

・・・失敗？

今回は強制的に眠らせるようにした。

「あれ？アンジェリカさん目が「見ちゃダメ！！」え？何で、で、す・・・」

アタシは叫ぶが時既に遅し。

バタ。

「田中くううううううううん！？」

成功してるようだ。

ならどうして？

障壁のせい？

実は、現在、たくさん敵と交戦中。

どうしてもスズネの魔法が間に合わない。

というわけでアタシもコレならと思っ
てやってみただけ・・・
「
覧の通り。」

ファイナル
・・・最終手段は

デスサイス
血濡れの大鎌

ブラッディ・ダンス
血の舞踏

でも、これは確実に人を殺す。

アタシは人が怖い。でも、殺したくなんかはない。

どうすればいいの！？

「リカちゃん！！」

「!？」

いつの間にか相手が魔法を放ってる。
アタシはそれを避ける。でも、避けてばかりじゃ勝てない。

「エリアー!!」

「朱雀!!レオ!!」

唐突にアタシの目の前で水と火とレオの放った咆哮覇が敵を攻撃。
相手にはこれは効かない。
でも、目くらましになり、相手の攻撃が止まる。

「準備完了!! 逆刺突剣 アンチ・サーベル !!」

スズネが相手を無力化。

「ライジン 雷迅 !!」

そして、ソラの雷の弾丸の魔法が相手に当たる。
すると、相手はスタンガンを受けたかのように気絶する。

「ソラ君。あり・・・」

「どうし・・・」

スズネがビックリしてる。アタシはそれを不思議に思いつつ魔法
が飛んできた方向を見る。アタシもビックリした。

『・・・お父様。お二方が固まっておりますが?』

アタシは大鎌を構える。

「……リカサン？何をしよう？」

「と、とりあえず落ち着こう！」

「そ、そう！」

『……リカ様、貴方はお父様に対して勘違いを……』

ダツ！！

アタシはソラに突撃する。

おそらく、普通の人間なら今のアタシのスピードにはついてこれない。

なぜかというと、あまりの速さで人間の目では視覚できないレベルだったから。

「つ、ツキモリ月守　！！なんで！？」

でも、ソラはアタシの必殺の一撃を止めた。

「ソラを殺してアタシも死ぬ！！」

「いや、理由になってないよ！！」

「……リカちゃんはヤンデレ属性だったんだね」

「……みたいね」

12話・A N Y W A Y

side 空志

「ごめんなさい」

「いや、わかってくれたらいいよ。」

「さすがフラグゲッター（死亡）」

この二人は後で新魔法の実験台になってもらおう。

……でも、大変だった。

普段は優しいリカが何であそこまで逆上したんだろう？

「でも、ホントにごめんなさい」

『いいじゃないですか。お父様がそういうのですから』

「いや、何割かエリアのせいだよね。でも、何で『お父様』って言葉に反応してたの？」

「「「「「「「「」」」」」」」」

……なんか、リカは顔を赤くしてるし、残りの二人はかわいそうなものを見る目でボクを見てる。

「……どひいひいよ？」

『「「「「「「「「」」」」」」』

何で!?

エリアと朱雀とレオにもかわいそうなものを見る目で見られたんですけど!?!?

『ギャルゲの主人公のような父は放っておきましょう』

「そうだね〜」

「そうね」

「がっ」

・・・何、その評価?

そして朱雀までうなずいてるよ。
新手的イジメ?

「でも、この状況どうするの〜?」

そう、そこは確かに問題だ。

まず、不特定多数の一般人に魔法を魔法を見られてしまったという
こと。

そして、周りがその余波で被害を受けてる。

コレでごまかす方法があったらすごいと思う。

・・・いや、よく考えると常識の通用しないあの方々なら大丈夫な気がする。

「龍造さん達には連絡したの?」

「やったよ〜。わたし達は事態の早急な鎮静化に努めろってさ〜」

坂崎の魔法はその全てが強制的に問答無用で魔法を消し去る。
逆に、俺の魔法は相手の魔法を侵食してからオレが消すようにしてある。

つまり、オレの魔法 ダーク・イロージョン 闇の侵食 は相手の魔法のコントロールを奪ってから消す。そういう魔術構成になっている。

何が言いたいかと言うとだ、乗っ取る時間がいくらか必要になる。特に、今回は物理、魔法障壁がある。その二つを侵食するには時間がかかる。

その間にオレの魔法がはじかれる可能性がたぶんにある。

「と、言うことだ」

「要するに、鈴音さんを待った方が確実だと」

「そういうことね」

「というわけで到着」

「……迷子だったんだね」

「……」

ま、何はともあれ全員合流したな。

なぜか田中はレオの背中で寝てるがな。

「じゃ、坂崎。早速してくれ」

「いや、今回はボクの方が早いよ」

そういうとソラはホルスターに収めた拳銃を抜き相手に向ける。

そして引き金を引く。

四つの発砲音とともに、四つの銀の閃光が走る。

それは障壁をもつとせすカードに着弾。その余波で相手をも気絶させた。

「・・・また人外度が上昇したな」

「いや、そこは何をしたんだ！！とか聞いてよ」

「いえ、ソラさんですし」

「そうね。それは今更よ」

「ま、一応聞いてやる。言え」

ソラはぶつぶつと文句を言いつつオレ達に説明。

月夜^{ツキヨ} を完全にさせて、敵がまだいるとわかったからもう一回してできるだけ弾丸を作ったとかドンだけチートだよ。それにエリアが大きくなってるし召喚魔法をいつの間にか習得してるぞ？

「いや、なんかさ今日はボクの力が強くなってるらしいよ」

『はい。お父様に作られ、数日ですが力の強い日と弱い日があります。おそらく、今日がたまたま強い日だったんでしょう。ですが、それもセーブをなさってる節があります』

「って、言っても普段が強すぎるからよくわかんないわよ」

ま、そうだな。

「で、ソラ。敵は後どのぐらいいる？」

「いや、さっきので終わり。ここに来るまでに寄り道して倒してきた」

オレ等の応援に先に来いよ。

結構ヤバかったんだぞ？

「いや、リユウ達なら大丈夫でしょ」

「理不尽だが、まあいい」

オレはケータイを取り出す。

かける相手は理事長。クソジジイ

「ジジイ、オレだ」

『オレオレ詐欺は勘弁してくれんかの？』

「後で拷問にかけるぞ？」

『なんじゃ？隆介？』

最初っからそうしろよ。

「そっちの準備はできたのか？」

『できとるぞ。お主等のほつはどつじやべ。』

「鎮圧完了」

『じゃ、早速発動させるぞ』

その言葉と同時にこの町をジジイの結界が包む。すると、建物等の壊れた部分が勝手に修復されていく。

「……………何コレ!?」「……………」

「…………ジジイの結界魔法。まずは人の記憶を改竄^{かいざん}、そして何も違和感を覚えさせないように指定の時間まで巻き戻す魔法。ぶつちやけ、ジジイにはホントに常識が通用しない。これはまさに『魔法^{キセキ}』だ」

オレがそういつとちょうど終わったようだ。

そこには、世界が凍結してしまったように静止する人々がいた。

「ま、実際に時間は止まってるがな」

「アタシ達は何で動けるの?」

「ジジイがそういう風に魔法を発動させたんだ。……そろそろ時が動くぞ」

オレがそういつた瞬間に氷った世界が元に戻った。時は夕方。

ちようどソラとリカが買い物に行った時間だ。

「じゃ、材料買って帰るぞ」

「そうだね。茜ちゃんと田中君も来る?」

「いいの？じゃ、親に聞いてみるね」

「田中〜。起きろ〜。紫電^{シズデン}（弱）〜」

「ぐわばぎゅー!？」

「あ、起きた。もう終わったからね」

「いや、起こし方がひでえだろ!？」

「アタシの目をみるから・・・」

「・・・魔眼を見たのはバカね」

「知らなかったんだからしょうがないですよ」

「じゃ、そういうことでうちで夕飯食べようってね」

「マジで!?!いいの!？」

「いいよ〜」

ボク等は買い物物を済ませるべくスーパーに向かう。

side 空志

「今日はホントにスマンかったの〜」

「いや、今日は龍造さんのせいじゃないからしょうがないですよ」

「だな。今日はジジイのせいじゃない」

「……言葉に棘があるの」

「リカちゃん料理上手になったね」

「花嫁修業」

「……何であのバカは気づかないのかしら？」

「三谷君だから？」

「「ああ」」

「……なんか俺、強くなりたいたいんだけど？お前はさ、格闘してんじゃん。俺にも教えてくれないか？」

「難しいですね。私のは我流ですから。死ぬ覚悟がおありでしたら間優子さんに鍛えてもらつたのをお薦めします」

「あら、死ぬ覚悟は必要ないわよ」

「……優子、ウソはやめなさい」

龍造さん宅。

ここには間家一行と、ボク等がいる。

今日は急遽メニューを変更してカレー。

そして、よくがんばったね的な宴会をなぜか開いてる。

大きなちゃぶ台にみんなで座っている。

「・・・にしてもこっちでこんな大規模な戦闘は久しぶりだよな？」

「そうじゃな。ま、今はそんなことは忘れてメシでも食っておれ。隆介、酒飲むか？」

「てか、こんなことはよくあるんですか？」

ボクは気になったので聞いてみる。

「そうじゃな。よく、バカな連中がこっちの世界で魔法を使うことはそれなりにあるの」

「で、だ。今回のオレ達のようにそれを取り締まるヤツもいる」

「私たちもその類の方に含まれます。特に、一番多く引き受けているのが魔物が大暴れしていうるといった内容のことです。ほとんどは話し合いで何とかします」

「言わば、わたし達はボランティアで警察紛いな事をしてるのよ」

へえ〜。

やっぱ、こっちで悪さする人もいるんだな〜。

それで、ここの人たちはゲームとかによくあるギルドのようなことをしてるんだね。

「じゃが、ここは魔物がよく出る危険地帯という噂を広めてあつての、それなりに被害は少ないんじゃないぞ。むしろ、ここで何かするのはよほどのバカか極悪人に限られる」

そうなんだ。

「……今回、ここを選んだのがよほどのバカだといいですね」

「……どうしてとじゃ？」

「え？だって、黒幕がまだ捕まってないでしょ？」

しゅん。

「……どうしたの？」

間家の皆様が固まっているんだけど？

「ソラ君。あの中に黒幕はいないってどうしてわかるんですか？
まだ、事情聴取すらしてないんですよ」

「いや、当たり前でしょ。だって、今回は全員魔力がゼロですもん」

「本当なの！？」

「いや、だって、今回も魔力ゼロの人が魔術符で魔法をバカスカ撃つてたんですよ？それに、敵がぼろっと漏らした情報では黒幕は一人、一般人にカードをバラ撒いてるようです。それと、あくまで予想だけこれは結構前からやられてたね。通り魔の事件もコレが原因。力を持った人たちの暴走。コレじゃ通り魔を捕まえられるわけが無い。複数いたんだから」

「……なんということじゃー！」

「なぜお前はそれを先に言わなかった!!」

「いや、情報がそれだけしかない。後は、ボク等が気絶させた人たちの情報だけが頼りなんだ。それに、通り魔に関しては完全にボクの憶測だし」

みんなはボク達と離れたところでワイワイしてる。
ここだけが空気が明らかに違う。

・・・龍造さんが結界とかでなんかしたのかな？

「・・・颯太、^{ネスト}魔窟の自警団に連絡し、早急に隠密部隊でこの町で怪しい人物の捜索をすんのじゃ。わしは理事長室で待機しておる。優子さんはわしを手伝ってくれんかの？」

「「「わかりました」」」

そういうと、龍造さんは明るい声でみんなに声をかける。

「すまんの。急用ができた。悪いが今日はここらで抜けさせてもらおうぞ」

「「「「はい」」」」

「鍵とかどうすればいいですか？」

「大丈夫じゃ。今日はここに泊まっていきなさい。幸い、明日は学校が休みじゃ。わしから二人の親御さんに伝えておこう」

そういうと龍造さん達は部屋から出て行った。

残るのはボク達だけ。

「よし、リュウ。ボク等もなんか食べよう」

「そうだな」

「ね〜ね〜。王様ゲームしてみようよ〜。わたしやってみたかったんだ〜」

「なんか、方向性がいろいろとダメだよね」

「別にいいじゃねえか」

「そうそう!〜!」

適当なノリのリュウと元気に同意を示すリカ。

・・・リカはそんなにしたいのか？

「俺も俺も」

「なんか楽しそうね」

「・・・学生がそんなことしちゃダメだと思っ」

「もう無理ですよ」

「ボクもそう思ったト」。これはおとなしく従っしかないね」

ま、従わなくても結局はこうなると思うけど。

「じゃ、やるっ！」

とても平和な時間が過ぎていく。

s i d e???

「なぜだ!？」

今回は前回は遙かに上回る出来だったんだぞ!？

少なくとも、普通の人間の少女と少年ぐらいは瞬殺できるようなモノだったはずだ!!

ガキの魔法使いも簡単に殺れるモノだ。

・・・あの魔法使いのガキどもにはイレギュラーが多すぎるとい
うことか？

それしか考えられない。

「いいだろう。おもしろい」

ならば、イレギュラーを潰すまで。

13話・ESCAPE

side空志

「学校か」

「いや、お前は唐突に何を嘆いてんだ？」

「学校は楽しいよ」

ボクの席の近くに来ているリュウとスズが言う。

「いや、なんとなく？」

「にや〜」

.....。

.....。

.....。

「レオ!?!」

「.....また、今頃気づいたんだね」

そう呆れて突っ込んでくるのは隣の席のリカ。

ちなみに、今は学校の1限目の休み時間。

いや、だってさ、既に違和感がなくなってるんだよ？

通りで先生がボクの頭の上を見て何してんだこいつ？みたいな顔で見てくると思ったよ。

「そういえば何で先生に注意されなかったの？」

「ピィー……ガガガガ!!!!!!」

突然のハウリングに驚くクラスみんな。

『わしが説明……ま、待つんじゃ、優、ブチッ』

……うん、気にしないでおう。

どうせ理事長室では血の雨が降ってるだろうしね。

それに、さっきの放送ですべてわかったよ。

「……龍造さんのせいなんだね」

「……名答だ」

「ちなみにどんなことしてるのか聞いてもいいのかな？」

「簡単だ。特別クラスの生徒にはわしが責任を持つ。だとかだつたよつな気がする」

「要するに、アタシ達には校則が適用されないのね……」

いろいろと優遇しすぎだよね。

他の生徒とかそれこそ生徒会とかからブーイングが来ないの？

それ以前に先生たちが黙ってないでしょ。

「……ここから先は聞かんほうがいいぞ」

うん。そうするよ。

「なんか雰囲気が変わるようになってるしね。それにボクのセンサーが警鐘を鳴らしてるよ。」

「でも、まだ黒幕は見つかってないんだよね。」

「その話か」

「・・・でも、魔力の無い人が使える魔術符なんてあるの？」

「今さ、解析中なんだけどボクはド素人だからさ。ログさんに教えてもらいつつやらないと魔道具に関しては全然わからないんだ」

魔法は基本がわかってるからどうにかなってるんだよね。

それにボク自身がよく使うし。

「でもさ。もし、ここであんな物が使われたら大変だよな」

「どごおおおおおおおおん！」

「ジリリリリリリリリリリ！！！」

『教室棟2階で火事が発生しました。生徒は速やかに先生の指示にしたがい、運動場へ避難してください。繰り返しです。・・・』

「「「「・・・」」」」

「・・・アレだね。とてもあからさまな一撃をどうも。ボク等はスズをジト目で見える。」

「「「「・・・てへっ」」」」

「後でみんなになんか奢れ」

「え〜。わたしのせいじゃないよ〜！」

文句を言うスズを無視して避難する準備をしているインチョーに言う。

「じゃ、ボク等は理事長室に行くから。気をつけて」

「・・・わかった」

そういうとボク等は理事長室に向かう。
とりあえず、歩いてく。

「にしても、ホントにこつも頻繁によくやるよな〜」

「そうだね〜」

「いい加減にしてくれないとアタシとソラの時間が・・・」

「いや、ほぼ一緒だよな。これ以上増やす意味が全力でわからない
い」

理事長室に到着。

ボク等はノックもなしに部屋に入る。

「お、来たか。というわけで襲撃じゃ」

「また、性懲りもなく・・・」

「敵さんも大変ですね」

先に来ていた冬香とシユウがぼやく。
ま、気持ちはわかるよ。無駄に面倒な相手だしね。

「ですが、前回のようにおそらくこちらの攻撃はソラさんと鈴音さんしか効きませんよ」

「大丈夫。考えてある。スズにボク等の武器に魔力付与エンチャントしてもらえばいいんだよ。でも、冬香だけは無理だけどね。ま、冬香には後方で敵の視界を潰してもらえばいいでしょ」

なるほど、とみんながつぶやく。

ボクはスズに頼んで作業をしてもらう。

ボクは 月夜ツキヨ で弾丸をたくさん作る。

・・・でも、なぜかわかんないんだけど、前のときみたいな精製度がいいヤツが作れないんだよね。たぶん、コレを敵に撃つてもカードが壊れる程度。敵を気絶させるまでではない。

「・・・できたよ」

「おし、じゃ、行きますか。で、ドコにいるんですか？」

「教室棟の二階。2年7組周辺じゃ。周りへは近寄らせんように魔窟ネスト出身の先生に固めてもらっておる」

「りょーかい」

ボク等はどこぞのヒーローよろしく、現場にダッシュする。

side太郎

「多湖。あいつらがいない。どうせそっち絡みなんだから？」

「そうそう。だから先生の言い訳がすごく大変だったの」

そうやって悪戯をして、成功した子供のような笑顔を見せる。
ここは運動場。

全校生徒がここに集まっている。ここから教室棟は見えない。
ま、あいつらのことだから大丈夫だろ。

だが、それは突然起こった。

何の前触れもなく地面が俺の足を拘束した。

「なっ!？」

「何コレッ!？」

多湖も足を拘束されているようだ。周りを見てみると同じように
パニックを起こしかけている生徒が大勢いる。

いや、数人ほど普通に立ってしゃべっているやつらがいる。

「コレでいいの?」

「頼まれたことはやった。コレで力が手に入った!!」

数人の生徒が歓喜の声を上げる。

何でこっちにいるんだ!？例のやつらは校内にいるはずだろ!？

「・・・まさか陽動?」

「そういうことかよ!」

「お前たちか!こんなことをしたのは!」

そういうのは我らがクラスの担任ガントさん。

「田中、何度も言うが「いや、そんなことよりさっさとあいつらを止めるよ」……」

「ちなみにあたし達が事情を知ってるのは聞いてますよね?」

そういうとガントさんはため息をついて相手に言う。

「早くコイツを何とかしろ。そうしたら罰を軽くするぞ?退学処分を反省文を書かせる程度に」

「ハア?何言ってるの?ワタシ達に勝てるわけないじゃん」

そういうと笑う数人の生徒たち。

……なんか本当にご愁傷様。

「……しょうがない」

そういうと、ガントさんは足の拘束を力づくで引っぺがし、ありえない速さで近くの敵の生徒の首筋に手刀を叩き込む。そうすると悲鳴すら上げれずに気絶した。

「な、何で!?!」

「俺はな。鬼人^{オーガ}って種族でな。魔法力は低いが力だけならどの魔

物にも負けない自信がある」

「ハア！？訳がわかんなんですけど！？」

「別に俺の知ったことじゃねえな」

そういうと足に力をこめる。

「待て！！コイツがどうなってもいいのか？」

敵の一人がカードを一般の生徒に突きつける。

「普通、そう来るわな。投了だ」

「『おい！！』」

まさかの1組全員のツッコミだった。

「アンタそれでも漢か！？」

「見損なつたぞ！」

「ガント先生のバカ！！」

「そんな人だったの！？」

「いや、鬼人オーガだろ？」

「・・・俺は自分が普通の人間じゃないぞ宣言したつもりだったんだがな？」

「「「むしろ普通の人間だったの!?!?!」」」

「お前ら全員後で語り合おう。拳で」

「お前ら黙れ!?!」

敵にまで突っ込まれてしまった。

「……敵の注意をそらせないかな?」

「……なんか考えがあるのか?」

多湖に小声で話しかけられた俺は多湖と小声で会話をする。

「なら、いい考えがあるよ」

そう言ったのはクラス的女子。

俺は話したことが無いな。

「じゃ、お願いできる?」

「おっけ」

そういうとその女子は自分の後ろにいるヤツと少し話す。すると今度はそいつが自分の後ろのヤツに話す。

伝言で誰かになんかさせる気か?

多湖は敵と似たようなカード。つまりは三谷からもらった魔術符を手に握っている。

「そういえばエリアを呼べば解決するんじゃないか？」

「それは無理。相手に気づかれるかもしれないから気をそらしてもらうの。それに魔法は効かないからエリアに三谷君達を呼んできてもらう」

そういうことが。

それであいつ等々にボコボコにしてもらうと。

「準備できたよ。たぶん、もうそろそろだね」

そういうさっきの女子。

・・・いったい何をしたんだ？

「あゝ！？林の方で1組の三谷がアンジェリカさんとキスしてる
）！！！！！！」

「『なんだと！？』」

全校生徒がそっちのほうを見た。

いや、インパクトがありすぎだろ！？（リカのファンクラブに入ってるバカ）

「ナイスでしょ」

「ありがとう。そして三谷君・・・強く生きてね」

ここは体育館。敵はボク等を分断して倒すつもりだったようだ。それでボクとリュウはここに誘導された。ま、わかってたけどね。素人相手に負けるほどボク等は弱くないのにね。それに今回は既に対策したし。

「もういないのかな？」

「そうじゃね？」

あたりには気絶してたれている人々。死屍累々とした惨状になってる。てか、よくこんなに人を集めれたね。

「じゃ、みんなと合流しよっか」

「そうだな」

ボクとリュウは体育館を出る。そうすると、そこには一人の人。

「・・・」

「・・・避難が遅れたんですか？運動場はあっちです」

「現実を見る」

「みゃ」

「ですよ〜」。

敵さんだよね。

レオにまで突っ込まれたよ。

しかもボクは今現在絶賛 月詠^{ツクヨミ} 中だからわかるんだよね。

敵が魔法使いって事が。

「で、黒幕さんかな？」

「・・・そうだ」

「・・・自分が何をしたのかわかってるのか？」

「もちろん」

「・・・そつか。じゃ、おとなしく投降してくれない？龍造さんならとても寛大に何とかしてくれると思うんだけど？」

「フォレス・ソーン
樹木の棘」

返事の変わりに魔法が放たれた。

属性は『木』。地面から木の棘がボク等を襲う。

ボクとリュウはそれを避ける。

だが、敵は次にありえないことをしてきた。

「フレア・アロー
火炎の矢」

「ウソオ!？」

「・・・多重属性^{デュアル}じゃねえの？」

「ボクは相手の属性だつてわかるんだよ!!敵は間違いなく『木』」

の属性オンリー!!」

「……今回は間違ってるんだろ、お前が」

「アイス・インパクト
大地の衝撃」

「「!?!」」

その言葉と同時に体育館が大きく揺れる。

大地属性の魔法。局地的な地震を発生させる魔法だ。

「さすがに三つはないでしょ!!」

「いや、お前がそうだから……。月と天空の癖に火を使ってるしな」

「いや、ボクは月のおかげで何とかなってると思ってるんだけど
ライエン
!? 雷燕 !!」

こっちからも反撃してみる。

「メタル・ウォール
鋼鉄の壁」

敵の目の前に鋼鉄の壁が発生。
属性は『金』。

「ちよ〜!?!」

「……さすがにアレは有り得んわ」

「で、カラクリは？」

「わからん」

「アクア・ランス
激流の槍」

放たれる水の槍。

てか、ホントにありえない!!

「ソラ、何とかしろ」

「いや、魔法の専門家だろ!?!素人に頼むな!!」

「だが、ぶつちゃけ、オレより魔法の技能はすごいぞ?」

いや、ボクは細かいことがまだそんなにできないし、リュウは普通にそこらへんの魔法使いより強いと思うけど?

そうやって敵と攻防を続けているとみんなが体育館に走ってきた。

「たいへん!!」

「こつちもなんだけど!?!」

そう言ってくるのはスズ。

後ろにはリカとシユウと冬香もいる。

「全校生徒が人質に取られたわ!!」

「マジで!?!」

「本当です。そちらの方に聞けばわかると思います」

「・・・その通り」

ヤバい！！

ここはチームを分けるか！！

「ボク、冬香、リカはここに残って、残りは生徒の救出、レオも
！..」

レオはボクの後頭部から飛び降りる。すると、みんなの前を走る。
・・・子猫の癖に速いな。

「おい！」

それにリュウたちが続く。

よし、準備完了。

「で、相手の属性は？」

「サーセン。わかりません」

「「ウン！？」」

マジです。ハイ。

「じゃ、ドコにアンタの存在価値があるの！？」

「そこまで言っつか！？」

「・・・ずいぶんと余裕だな」

「いや、そつちだつてボクの仲間を見の・・・デカいのが来る！」

ボクは二人の前に立つ。

おそらく、敵がやるうとしてるのは範囲系の・・・結界に近い？
とにかく防ぐ！！

魔法の軸となつてるのであろう五箇所にもボクは弾丸を叩き込む。
しかし、相手の魔法は止まらない。

「!?!?・・・まさか、これって物にしか効かないの!?!?」

「・・・勝ちだ」

そう敵が言うのと正五角形の魔法陣が光って現れる。それはぼく等の周りを囲む。

てか、ものすごくピンチじゃん!!!

「ハッ！」

そんな声とともに魔法陣の光が弱くなる。

声のほうを見るとリカ。近くの地面、ちょうどボクが狙った辺りに切ったような跡がある。リカは続けて目にも留まらぬ速さで他の箇所も切りつける。そうすると、魔法陣が輝きを失った。

「リカ、サイコー」

「ホント、ナイスよ」

「えへへ」

ボクは銃を敵に向ける。

「降参してくれませよね？」

「・・・そういうことか」

「「「？」」」

なんかよくわからないけど一人で納得し始めた？

「何いつてんのよ、アンタ？」

「・・・おそらく、お前たちはほとんどが人間じゃないんだろう？人間には不可能な魔法に、人間をはるかに上回る魔力、あるいは力。特にお前とお前だ。それなら全てに説明がつく」

そう言つて、ボクとリカを指す敵さん。

「ソラは人間！」

「・・・俺は禁句を言ったのか？」

・・・かなりボクはショックを受けた。

「だが、そいつは人間ということは、おそらく人間以外、俺の予想では魔物があるんだろう？特に、その女は吸血鬼ヴァンパイア、じゃないのか？」

「「「!?!?」「」」

「……凶星のようだな。よりによって、ここは魔物の巣窟で、魔物にすら嫌われている吸血鬼がいる」

「……いや……」

「リカ？」

なんだかりカの様子がおかしい。
でも、相手はお構い無しで話を続ける。

「そのため、吸血鬼は自分たちの種族のみで構成された集落で過ごしていて、普通ならそこから吸血鬼は出てこれない。……掟という例外を除いて」

「ダメ！」

「落ち着いて！お前も黙れ！！」
雷燕ライエン「！」

ボクは敵の口を塞ごうと魔法を放つが敵も木の魔法で防御。

「吸血鬼はその集落での掟を重んじる、おそらくこいつは掟により追放されたはぐれ吸血鬼だ。人間と関わってはいけないという掟を破ったな……。まったく、バカバカしい」

そういうと、相手は火の魔法で炎の槍を生成し、ボク等を攻撃する。そこを冬香は弾幕で相殺する。

「バケモノが人間と仲良くなれるわけが無い」

その言葉が引き金だった。
リカが叫びだした。

わたしは敵に対処しつつソラに声をかける。

「アンタがリカをどうにかしなさい!!」

「わかってる!!」

さて、わたしは敵を倒す。そして、王子様にはお姫様を救ってもらおうかしらね。

s i d e リカ

アタシは吸血鬼だ。

闇の象徴。

でも、アタシは何もしていない。

ただ、生きるために人の血を吸った。

何人も、何人も。

それだけだ。

別に殺したりとかはしていない。

アタシは友達が欲しかった。

だから、人里に下りた。そこで仲良くしてくれる人に出会った。

毎日、日が暮れるまで遊んだ。

でも、ある日、アタシが吸血鬼であることがばれた。

「バケモノ!! 騙してたの!？」

違う!! そう答えたかった。

でも、できなかつた。どこかでわかってたんだと思う。アタシは、ウソをついていた。

・・・人間じゃなかった。

アタシはすぐにその里を離れた。
吸血鬼の掟を破ったことがバレたら大変なことになる。

いや、バレるだろう。その前に自分から出て行こう。そう思った。
その後、吸血鬼専門の殺し屋が来た。

アタシは怖くなって必死に逃げた。

そして、町を転々とした。

そこで、明るく笑う人間達を見た。

アタシは、ダメだと思いつつ、また仲良くなりたいと思ってしま
った。

ただ、友達が欲しかった。

そして、また、友達となれた。

でも、またバレた。

「バケモノ!!!」

みんなそう言う。

何回も。

アタシはついに人を信じられなくなった。

でも、心のどこかでは欲しかった・・・トモダチが。

コレを最後にしようと思いつき、何回も罵られ、殺さ
れかけた。

・・・本当にコレを最後にしよう。

ある町で三人の子達に出会った。

楽しく会話して、買い物をして、いろいろ食べて・・・。

最高の時間だった。

「そいつの秘密を知ってるの!!!」

バレた。

アタシはそう思った。

まただ。アタシは人を傷つけることしかできない。

もう、いつそのことここで死んでしまおうとも思った。

「リカが吸血鬼ヴァンパイアでしかも始祖の血族かもしれないってコト以外で
なんかすごい秘密があるの!？」

アタシはこの言葉を聞いて驚いた。

そして、アタシは仲間になった。

一人の少年はアタシを身を挺してまで守ろうとしてくれた。そして、好きになった。

初めての友達だった。そして、好きな人。

毎日が楽しくなると思った。

でも、もし……。

「……………カ……………」

イヤだ!!

もう、イヤ!!

やっと……居場所ができたのに……また、無くしたくない……。

side空志

「イヤアアアアアアアアアア!!」

「リカ!落ち着いて!!リカ!!」

ボクは暴れるリカを必死になだめようとする。
でも、吸血鬼の力で暴れるため、ボクは振り回されている。

「早くなんとかしなさい！この際方法は何でもいい！」

「たとえば！？できれば傷つきたくなあああああ！？げふ！
？」

「ここはアンタが王子様よろしく何とかしなさい！」

無茶苦茶な注文をありがとう。

そんなことをしたら、ボクは逃げる方法が思いつかないよ。全校
生徒からの嫉妬攻撃からね。

でも、ここは背に腹を変えられないか？
どうすればいいんだ！？

「・・・最終手段よ」

「いい方法があるの！？」

「あるわ。わたしの後に続いて言って」

「わかった」

「ボクは・・・」

「ボクは」

「リカのことを・・・」

「リカのことを」

「愛している!?!」

「愛している!?!」

「……ちょっと待てや!こら!

「アンタ人に何を言わせてるの!?!」

「……ソラ?」

「……うそ。」

マジで正気に戻ったよ。なんで?

ボクは言ったとおりでしょという顔でムカつく笑みを浮かべる冬香から意識をリカにシフトチェンジ。

s i d e リカ

「そうだよ。落ち着いて」

アタシに優しい声をかけるソラ。

手をソラに包まれている。この手を放したくない。

『バケモノが人間と仲良くなれるわけが無い』

さっきの言葉が頭の中でリフレインする。

「もうイヤ!?!みんなと離れたくない!?!お願い!?!ウソつかないから!?!何でもするから!?!」

「大丈夫。みんなリカの味方だよ」

「・・・違う。世界はアタシの敵・・・。アタシは闇の象徴だから。絶対的な悪だから、バケモノだから・・・イヤ、イヤアアアアアアアアアア！！！！」

フラッシュバックする過去の光景。

もう、こんなこと思い出したくない！！

人間が怖い！！

そんなアタシを優しく抱きとめる誰か。

「大丈夫だから！！世界中が敵に回ってもボク等が・・・ボクが守るから。だから、大丈夫。リカは一人じゃないよ」

「う、うわあああああああ！！！！」

アタシは泣いた。

どのくらい泣いたのだろうか。

いつの間にかアタシは気を失った。

s i d e 冬香

ストリーム・マシンガン

「・・・水流の連弾！！」

「ショット発射！！」

金属の槍の次は水かい！！

ホントにこの人の属性がわからないわ。

・・・今は時間を稼いで王子様にお姫様の目を覚ましてもらわな

いとね。

そしたら、こっちの相手をしてもらえるし。

でも、ホントに大丈夫かしら？

わたしには、リカのものらしき魔力が今にも暴れだそうとしているのが感じられる。

だが、そう思った瞬間にその魔力が鎮まる。

「やっとか。ソラ！さっさとコイツ・・・！？」

また、強大な魔力を感じる。さっきのリカの魔力なんか比じゃない。

その発生源がソラだった。

「何だ！！この魔力は！？」

「・・・冬香。リカを連れてみんなのところに行け」

「ハア！？ちょっと、アンタ何言って「早く行け」・・・」

その声はやたらと静かだった。

でも、この言葉に逆らうとヤバい雰囲気がある。

わたしはソラの近くのリカを背負い、みんなのところへ急いだ。

この、尋常じゃないソラのことを伝えるために。

side??

「・・・いいのか？お前一人だぞ？」

俺は目の前のヤツに聞く。

だが、これは虚勢だ。

相手がこんな魔力を持つてるなんてまったく知らない。
いや、ここまで出したのが今日が初めてだ。

「関係ない。」

そういつとヤツは俺を見据える。

「……あいつは、リカはやっと、ボク等、五人以外の人と話せるようになったんだ」

ヤツは言う。

そう言いつつ、魔法陣を展開している。

それは、見たことが無い、黄色と緑の魔法陣。

それが右手の銃に吸い込まれるようにして消えると、銃には似たような紋様が現れた。

「でも、お前があいつを傷つけた。また、人を信じられなくするところだった!!」

魔法陣が光を増す。

「ボクは、お前を許さない!!」

「それがどうした？バケモノは所詮バケモノだ!!」

俺は魔法を展開させる。

さっきできなかった魔法だ。

足元には正五角形の魔法陣。

「……やれよ。そんなチンケな魔法、ボクが壊してやる」

「やってみろ！！五行魔法 五ペンタクル・ブロー芒星の一撃 ！！！」

五箇所から光が迸る。

それは相手の周りを囲み、結界で逃げられないようにする。

そして、純粹な五つの魔力の奔流がヤツを襲う。

勝った！！

俺はそう思った。

「・・・核コアを解析。 雷ライセンシクウボウ閃疾空砲 ！」

ヤツは見当違いのところを銃で撃った。

ありえなかつた。

ヤツは魔法をたつた一撃の魔法で俺の最強の、それこそ真言クラ
スの魔法をたかだか上級で打ち破った。

俺の魔法が強制的に破壊され、魔法が途切れた。

「・・・この程度か？コレなら 月ツキヨ夜 を出すまでもない」

「お前はなんなんだ！？」

俺には恐ろしかった。

目の前のヤツが。

オッドアイの、そして、蛇ヘビのような縦の瞳孔マツメを持つヤツが。

ここは魔物の巣窟。バケモノの住処。そして、目の前にいるやつ
はおそらく人間。

だが、俺はヤツこそが真のバケモノだと思った。

「・・・メンドイ」

「まあまあ、よかったじゃないですか。全生徒の無事を確認してください」

「みんな大丈夫？」

「」「坂崎さんに看護してもらいたいです!!!!」

ま、アホはほつとこう。

敵は瞬殺できた。

全校生徒への被害はゼロ。

説明しゅーりょー。

「でも、さっきやたら強い魔力を体育館から感じたよ?」

そういうのは多湖。

どうせ、誰かがでかい魔法を使ったんだろうとオレは思うぞ。

だが、そのときだった。普通では考えられないような魔力を感じた。

「・・・さすがにこれは・・・なんだろうな?」

「リユーーーーーウ!!!!!!」

オレが声したの方向を向くとそこには冬香と冬香に背負われたりカ。

「どうしたんですか!?!」

「リカちゃん怪我したの!?!」

「違うけど違わないわね」

オレ達は冬香から事情を聞く。

それを聞いて、オレは血の気が引いた。

「お前ら!! すぐに行くぞ!!」

「どうしたの!?!」

「・・・危険なんですか?」

「そうだな」

できればそんなことになる前について欲しい。

「敵がソラに殺されるかもしれない」

side 空志
フウカシャリン
「風火車輪」

ボクのスピードが飛躍的に上昇する。

ボクはそのまま銃についてる刃で切りつけようとする。

「なッ!?!」

敵はそれをかろうじて避ける。

「何だその魔法は!?!」

ボクが使ったのは風と火の魔法の組み合わせ。
この魔法は簡単に言うくと足に帯のような魔法陣を展開し、ブーストダッシュをするというもの。何回でも使える。
ボクは再度ダッシュをする。

「ファイアー・ウォール
火の壁　!?!」

敵は魔法でガードする。
ボクは次の魔法を解析。
そして魔法陣を展開。

「ライセンシックウホウ
雷閃疾空砲　!」

「ガイア・シールド
大地の巨壁　!」

ボクより先に敵の魔法が展開。
そりゃそうだ。ボクは展開が遅いのをわざと選んだんだ。
ボクの魔法が発動。すると、風を纏う雷の巨大な砲弾が高速で敵の壁に着弾。

その壁を貫通し、敵に当たる。

「があああああああ!?!?!?!」

「・・・」

ボクは敵を冷めた目で見る。
そして、魔法陣を展開させる。

「…………や、やめる……」

「…………」

ボクは魔法を放つために声を出そうとする。

「ソラー!!」

そこで声が聞こえた。

誰だ？

そこにはリカを除いたみんながいた。

「……何？」

「何？つじやねえよ!!やめる!!」

「そうだよ!!」

「ソラさん、やめてください」

「殺しちゃだめよ」

「……こんなやつ、死んで当然だ。」

ライジン
雷迅
「

「ヒッ!?!」

「アンチ・サーベル
逆刺突剣　!!」

ボクの魔法が当たる寸前に魔法が相殺される。
スズが消したのか。

・・・なんだかすごくやな予感がする。
あたりに異常なほど魔力が満ちている。
この感じは・・・ソラだ。

「ソラは!？」

「・・・・・・・・それが・・・・・・・・」

アタシは走り出した。

本能が告げている。

後ろから何か声を掛けられるがそれを無視する。
目的地にはすぐに着いた。

体育館。でも、すでに原形をとどめていない。

そこにアタシは飛び込んだ。

「ソラ!！」

そこにはおそらく暴走状態であろうソラがいた。

side 隆介

『暴走』

それは簡単に言うと普段は適度に閉まっている魔力の栓が何かのきっかけによつて壊れてしまうこと。そして、際限なく自分の魔力を放出し続ける。普段と違い、そいつのリミッターが外れた状態で魔法を使うため魔法が桁違いの威力になる。もちろん、魔力は無限じゃない。暴走が続くとそいつの魔力が切れ、命にも危険が出てくる。

そのために一番良い方法は、とにかく相手を気絶、あるいは正気に戻すこと。

だが、コレは時によってはとても難しい。特に怒りに我を忘れたときなんかだ。

今回のソラのケースを考えてみる。

まず、魔力に関しては問題が無い。ソラにとっては、だ。オレ達にとつては最悪としかいいようが無い。ソラは魔力じゃなくて外部^マ魔力を暴走させている。原理はわからない。だが、ソラの命は保障されている。その反面、コイツは誰かが止めない限り辺り構わず破壊する兵器のようなものだ。それも核兵器に匹敵するレベル。

さらに、コイツがブチギレた時に一番危険なのがある程度の理性を保っていること。

つまりは冷静な判断をしつつキレる。そのため、周りの状況判断から何からすべて普段どおりの動き。だが、守りと攻撃の割合が9対1から4対6になる。

つまり、状況はこうなる。

「・・・正直、オレ達はいいつをなめてたようだな」

「・・・そうですね」

「・・・もう無理。魔力がない」

「・・・精神的に無理よ」

敵はいつの間にか逃げたのかもういない。

立っているのはオレだけ。後は息も絶え絶えに地面に膝をついたりしている。

ソラは強かった。

てか、チートだった。

こっちの攻撃は全てスキルで避けられる、あるいは障壁でガード。だが、向こうの攻撃は新魔法ばかり使ってきて、とっさの防御

が間に合わない。

それにこの魔力量だ。勝てるわけがない。
今ならお袋を一方的にやれるだろうと思う。

それに、目がいつもと違った。オッドアイに加え、蛇のような縦の瞳孔だった。

・・・いつたい、ソラに何が起こってるんだ？

「・・・終わりか？」

「いや、無理だな。まだお前を止めてない」

だが、正直もう体にダメージが蓄積しすぎてオレ以外にまともに戦えるやつがない。

オレも限界が近い。

・・・奇跡でも起きねえかなあ。

「ソラ!!」

・・・奇跡か!?

いや、さすがに無理だろ。

「・・・
ライセンシクウホウ
雷閃疾空砲」

「リカ!!よける!!そしてお前はまだ戦うな!!逃げろ!!」

「・・・ッ」

リカはかがんでソラの魔法をやり過ぎすとそのままソラとの間合いを詰める。

「無理だ!! やめろ!!」

リカはオレの言葉を一切無視し、ソラに飛びついた。ソラが地面に頭を打つ。

・・・え?

なんでできたんだ?

「落ち着いて!! アタシ達は敵じゃない!! ソラの味方だから!!」

「・・・リカ?」

え〜。

何このベタな展開。

・・・そーいや、ソラは敵の攻撃は自分から受けにいかない限り傷を負ったことすらないよな。でも、それ以外。つまり、敵意のない攻撃に対してはほぼ皆無。

さて、今回を振り返ってみよう。

オレ等にも最初は敵意とかはそんなになかった。と、思う。

だが、あまりにヤバい魔法を使うから、そのうち全員殺す気で掛っていった。

リカ、敵意ゼロ。むしろ敵意を持たたらすごい。それで押し倒す。正気に戻ったのはおそらく初めてこっちの攻撃(?)が通ったから。

・・・そういうことか・・・。

「ボクは?何を?」

「やっと、起きたか」

「リュウ？なん・・・」

「どうした？」

ソラはあたりを見回す。

・・・そうか！！ヤバイ！！

オレはソラの肩をつかむ。

「ソラ！！これは「ボクのせいだね」・・・ッ」

遅かったか！？

こいつはあたりの魔法の痕跡を見て自分が発したものだを確認をとったみたいだな。

「違う！！しょうがなかったんだ」

「・・・ゴメン。一人にしてくれない？
風門フウモン」

ソラはオレ達の返事も聞かずに転移らしき魔法を使った。

だが、周囲にいるはずのオレとリカだけがそこに残された。

オレ達は呆然とするしかなかった。

15話・INFORMATION

side 龍造

「ジジイイイイイイイイイイ！！！」

「何じゃ？」

初のわし視点じゃ。うれしいの。

メタな発言はここまでにしとこうかの。優子さんが睨んできとるしの。

突然、いつもの面々がここに突撃してきた。

いや、ソラがない。そして、リカが呆然としている。

「大変なの〜！」

「・・・鈴音ちゃんが言うとお大変そうじゃなくなるの」

「黙りなさいクソ理事長」

「何故わしが罵倒されにやならん!？」

「そうです。黙ってくださいアホ理事長。一大事です」

「だから何じゃ？」

「つか、ソラのバカはここにこなかったのか!？」

「隆介、とにかく落ち着きなさい」

優子さんは優しく諭すように言う。
だが、隆介はそれを聞き入れなかった。

「落ち着いてられるか！ソラがどっかに行っちまったんだよ！！」

そして、わしは隆介達からこのことの顛末を聞いた。

最悪じゃ。

こっちはボロボロ。敵には逃げられ。ソラもどこかに消え、行方不明。

「……探したのか？」

「探したに決まってるだろ！！リカもわかんねえし、オレ等もいるんなどころを探しまくったんだよ！！」

血を吐くような怒声を上げる隆介。

他の子たちも何かをこらえるように押し黙り、下を向いていた。

「……わかった。すぐにソラを探すように魔窟のやつらをお主らは疲れたじゃろ？少し休め」

「そんなことできない！ソラは！！アタシのせいだ……！！」

そういつとリカちゃんは理事長室を飛び出して言った。

「あ！リカちゃん！！」

それにつられるように隆介以外の子達も走り去って行った。

「……隆介」

「おそらく、ジジイ達はオレ等に少しでも休んで欲しいだろう。だがな、それは無理だ。少なくとも、オレ等の気がすむまでやらせてくれ」

そういつと隆介は他の子達と同じように理事長室から走り去って行った。

「いいんですか？」

「……好きにさせておこう。今はそれしかできん」

side 空志

「……ここか」

ボクはとあるところに来ていた。

ボクの目の前には大きな建物。

ボクは目には飛行用のゴーグルをつけ、目を見られないようにしている。

今のボクは明らかに異常だ。

少なくとも、原因がわかるまではみんなの所に帰れない。

「……本当によかったのか？」

「いい」

ボクは智也さんにそう言う。

何が？とは言わない。

「……………じゃ、いざというときはボクを殺して」

そして、ボクは目の前の建物に入って行った。

side 隆介

アレから1週間が過ぎた。

ソラは、あの日から寮に帰ってきていない。

オレ等はあの後も必死に探したがどこにもいなかった。

そして今、オレは学校にいる。

「……………三谷は今日も休みか？」

そういうのはクラスの男子。

手に持った突撃銃はアサルトライフルおそらく朝の恒例行事のために持ってきたの
だろう。

だが、学校の欠席よりある意味ヤバい事がある。

ソラにゾッコンなりカがとても暗くなってること。

窓側の席のその一角だけ誰も寄り付かない。

……………ん？ついに男子が行ったか？勇者だな。

「アンジェリカさん！！」

「……………」

ぼつっとしているリカ。

とても勇気を振り絞ってます的雰囲気な男子。

……………あれだな。告白コウろつとしてんだな。

「好きです！！」

・・・ベタだな。そして人前で堂々と言うな。だが、クラスのヤツは誰一人としてそいつに見向きもしない。

既に結果が見えてるからだ。これは今に始まったことじゃない。三谷がいない。アンジェリカさんといい感じできんじゃね!？という浅はかな考えの男子が何人も来ている。そして・・・。

「ムリ」

バツサリと切り捨てられる。目も向けられずに、すると、男子が何で!？とか言う。

「何で!？」

「・・・」

そして、再びぼうつとするリカ、そんな態度だから男子が怒る。

「あんなヤツのどこがいいんだ!？三谷なんかただの学校サボリじゃないか!！」

「総員退避!！」

「」「了解!！」」「」

オレの一言にクラス全員のヤツが教室の外に。教室には男子とリカ。

「・・・なんだ?」

ガタ。

それはやたらと大きく響いた。

リカが席を立った音だった。

リカがゆらりと立ち上がる。

「リュウ君。一応聞くけど止めなくていいの？」

坂崎が聞いてくる。だが、オレの答えは決まってる。

「オレには無理だ」

ドカ！バキ！ガコン！ドス！バタ……………。

終わったようだ。

教室に入ると、そこには出てった時と同じように席に座って窓の外をぼうつと見てるリカ。その近くに大きなボロ雑巾。もとい、リカに告白^{コウ}した男子。

ソラの悪口を言つと必ずこの惨状になる。

……学校で死人が出ないためにも早くソラに戻ってきて欲しいと切に願った。

「おゝし、席につけ。出席をとるぞ〜」

ガントのおっさんがいつものようにやってきてショート・ホーム・ルームSHR。が始まる。

「……………今日も三谷だけか……。じゃ、お前らは次の授業の用意して待ってるよ」

そう言つとさっさと教室から出て行く。そして、クラスが喧騒に

包まれる。

いつもと変わらない。だが、オレ等の中では確実に変わってしまった日常だ。

レオはソラの部屋にずっと引きこもり、リカはずっと虚ろのまま。他のやつらも心配している。スズは毎回必ずソラのメシを作り、冬香はソラの魔力を魔法機器等デバイスで感知しようと躍起になり、シユウは暇があれば周りのヤツにソラのことを聞いて回る。

だが、ソラは見つからず、手がかりすら無かった。

「間君。大丈夫？」

「……リカを何とかしてくれたら少しは大丈夫になるかもしれない」

オレに声をかけたのは委員長が多湖だ。
オレの隣の席だしな。

「……三谷君は見つからないの？」

「ああ。手がかりすらない」

ソラは病欠ってことになっている。

だが、こいつと田中は事情を知る数少ない人間ってことでソラが行方不明ということもわかっている。

「……あたしも何かわかったらすぐに言うから」

「恩に着る」

そして、いつものように授業が始まる。

午後、いつもの魔法の訓練。

だが、理事長室にはオレとジジイだけだ。

他のやつらはこのところ来ていない。

つか、それどころじゃない。

「ジジイ、まだ見つからないのか？」

「わしにもさっぱりじゃ。今のところ、おそろくはこの町の外におると考えて搜索網を広げとるんじゃが……」

「見つかってないのか……」

魔物達で構成された搜索隊や保安部隊はぶっちゃけ、すごく強く優秀だ。

人間と比べるまでもなく。

だが、ソラはそれをいとも簡単にかいくぐっている。

だが、あいつのことだ。何か裏があるとか魔法で何とかしているに違いない。

「……わかった。何かわかったら教えてくれ」

オレはそこで理事長室を後にした。

「三谷は？」

そこにいたのは田中と多湖だった。
珍しい組み合わせだな。

「わからん。お前らこそどうした？こんなところだ」

「あたしたちも心配で……」

「まあ……な」

「そうか」

「お困りですかにや」

突然だった。

オレ達に声をかけてきたやつがいた。

そいつは女子で、小柄、ツインテール、お子様体形。どことなくとても元気なウサギをほうふつとさせる人物だった。

「……お前らの知り合いか？」

「俺は知らな……い？」

なんか田中が途中で何かに気づいて記憶を探ろうとしている。

「あたし達のクラスメイトだよ。名前は宇佐野美末^{うさのみみ}。ほら、アレ。訓練のとき……」

「あゝあん時の女子か」

「よくわからんがまあいい。で、宇佐野、お前はオレ達になんか

用か？」

「うん、用があるのは間君。そして三谷君に関して。わたしのじよーほーによると三谷君はただの欠席じゃないということになるよ。」

「・・・で？」

オレは内心の動揺を表に出さないようにして普通に聞いた。

だが、ただの高校生が何故、こっちの裏事情を知っている？

オレは相手が只者じゃないことを感じ取り、警戒を強める。

それに気づいてないのか、それとも気付いているが無視をしているのか目の前の女子は軽いノリで俺に話を続ける。

「わたしの予想では学園が何らかの事情により、三谷君を病欠扱いにしてるってこと。そして、君たち五人は三谷君を探してるような行動をとってることからおそらく三谷君は何らかの事件に巻き込まれて行方がわからなくなっている。」

「いや、ホントに何が言いたい？」

オレは相手の意図が掴めない。そこで二人にアイコンタクトを取って見た。

「こいつはなんなんだ？」

「俺は知らない」

「彼女ね、情報屋なの」

「情報屋？」

「とにかく、情報に関して彼女の右に出るものはいないの噂ではこの学園の理事長のへそくりの場所も知ってるのか」

本当にこいつは何者だ？

「ふっふ」。わたしは情報屋だよ。証拠に委員長のスリーサイズは上から「キヤー！！！！」

そういつと多湖は草野を隅に引っ張ってくと何かを話し始める。
お、戻ってきた。

「・・・ホントだった」

「わたしの情報に間違いはないのだ」

「で、情報屋さんがオレになんだ？」

「この学園で本当に起こっていること、それを教えて」

こいつは勘がよすぎる。どうやってかはわからないが自力でこの学園の秘密に限りなく近いところにいる。

「隆介。そのお譲ちゃんに教えてやりなさい」

「ジジイ!？」

いつの間にかオレの後ろにはジジイがいた。

「ここまで知ったんじゃ。こちらで保護したほうがよいの。それに、話の内容はソラに関してじゃ。こちらの欲しい情報、つまりはソラの居場所を知っていると見ておるが？」

「さすが理事長さん。もちろん、三谷君に通じそうなものを一つだけ持つてる」

「本当か!？」

オレはその言葉に驚いた。だが、教えることがことなだけにオレはどうしたらいい？

「でも、そんな簡単に教えちゃってもいいんですか？」

「俺等のときはかなり三谷に渋られたんだけど？」

多湖と田中も苦言を呈す。

「今回はしょうがないじゃろ。……今から言うことはトッピングクレットじゃ。他のものに話すと……」

「話すと？」

「わしの権限で成績がオール1という留年直行コースじゃ」

こいつ鬼だ!!

オレ達4人はそう思った。

全員顔が青くなっている。

「「「絶対にはりません!!」「「「「」

オレ達も思わず敬礼して誓ってしまった。

「そうか、じゃ、話すとするか。隆介。他のみんなも呼んできなさい」

そして、オレがみんなを呼ぶ間にジジイは宇佐野にすべてを話した。

学園のこと、魔法や魔物、オレ達の秘密をだ。

それを話し終えたころにちょうど全員がやってきた。だが、レオはいない。まだ部屋に引きこもってるんだらう。

軽く自己紹介とこうなった経緯を全員に教え、本題に。

「で、お前の言うソラに通じるであろう情報は？」

「一週間前、三谷君と同じ時期から休んでる人がいます」

「それがどうした？」

「図書館司書、城崎智也」

「「「「「あいつか!!!」「」「」」」」

「最初はわたしはその二人で駆け落ちでもしたのかと「人間辞書
クロス」ヒツ!？」

「リカちゃん、今は抑えて」

「・・・こほん。でも、さっきの話を聞いてわかった。何か別の
目的のために三谷君は城崎さんと一緒にいる可能性が高い」

「・・・何でアホ理事長はあいつが休んだの知らなかったのかしらっ。」

「それはじゃな」図書館と学園は独立してるの。だから知らなかった」・・・」

「もし、それが本当ならソラさんは？」

「・・・ここからはわたしの予想、三谷君は自分の属性に一番詳しい人を連れてどこかに行った。だから、こつちの世界じゃなくて向こうの世界にいるんじゃないの？」

「そういうことが」

確かにあいつならそれぐらいしそつだ。
なら、次に探すところは決まった。

「アリアんとそこに行くぞ」

「何で〜？」

「あいつの魔窟内の情報網はフツツ光並だ。ひよつとすると、ソラ

見かけたとか言う情報があるかも知れん。ジジイ！」

「わかった。すぐに送る。わしのほうも捜索隊を向こうのほうを探すように言っておく」

「ありがとうよ」

突然だがここでこの世界について説明しよう。
この世界は多くの国によって統治されている。
この国名前はエナード。四つの地に分かれ、四人の王が統治する変則的な国だ。

一つが南に『大地の王国』、ガース。

一つが北に『風の都』、ストリオ。

さらに東に『水の園』、トラテイス。

そして西に『炎の帝国』、バグニール。

そして、魔窟はこの国の中央付近から南にある『迷いの森』と呼ばれる大きな森に位置している。

そして、炎の帝国は、最近ここを攻めてきたところだ。

つまり、おそらくは智也の出身地。

「そうか、わかった。オレ等は準備をしてそこに行く」

『どうせ止めても無理なんじゃろ?』

「もちろんだ」

オレはケータイを切る。

そして全員に向き直って言う。

「今から各自準備をしろ。炎の帝国に行く」

「・・・そこにソラさんがいるんですね?」

「そうだ」

「なら、さっさと準備していくわよ」

「久しぶりの人間の町だね」

「ソラ・・・待ってて」

「・・・授業は？」

「あゝ。オレ等は大丈夫なのか？」

「・・・それにあたし達は戦力にならないよ？」

「お前らは向こうに着いたらオレ等の言い訳を頼む。・・・転移だ」

すると、アリアの店からオレ達は寮にいた。

全員、すぐさま自分の部屋に駆け込むと準備を始める。

「ボウズども！いるか！！」

しばらくすると、リビングのほうから声が聞こえた。

「ログのおっさんか！？」

「おう」

オレは準備を手早く済ませるとリビングに行く。

そこには椅子に座ったログのおっさんがいた。

「何だ？オレ等はこれから忙しいんだが？」

「これをやる」

ログのおっさんはオレに六つのピアスを渡す。

耳に穴を開けなくてもつけられるタイプで、ひとつひとつの模様が違う。

竜を模したものに蝙蝠を模したものの、葉っぱや、雪の結晶、鈴、そして、月。

「……これはおっさんが作ったのか？」

「俺がこんなもんを作るわけが無いだろう？しかも個人のために作ったようなものをな」

……ソラか。

あの野郎。自分の分をつけるのを忘れてやがる。

「これはな、あいつに言わせると通信用の魔道具らしい。全員に渡そうとしたんだろうが完成したのに俺の工房に忘れていきやがったんだよ」

「……そうか」

オレはピアスを見つめる。

「……あいつはな、俺の弟子だ。絶対に連れ帰って来い。こっちは商売あがったりなんだよ」

「言われなくとも」

オレはそういつと竜の模様のピアスを耳につける。

「準備完了！レオも連れてきた！」

「みゃ！」

「わたしも」

「わたしもよ」

「私も大丈夫です」

オレは全員にピアスを配り、みんなはピアスをはめる。

「よし、目指すは『炎の帝国』、バグニールだ！！」

オレ達はソラを探すための一歩を踏んだ。

16話・MIXED FEELINGS

side 智也

「これも違う」

「……いい加減にしたらどうだ？」

「まだ、あと少し。」

「こんな調子で一週間。

ずっと自分の属性を調べ続けている。

この地は俺の出身地バグニール、通称『炎の帝国』で知られている。

この地は活火山が多く、年に数回山が噴火する。しかし、鉱石等がよく取れ、上質な武器等が作られる。ここが帝国と呼ばれるゆえんだ。

そして、ここはそのバグニールの図書館。

俺はここで月の属性の古文書を偶然見つけた。

だが、なぜか見つかっていない。

「……おそらく、借りられたんだろう」

「……なら、首都に行く」

「ここがないから首都にあるとは限らんぞ？」

「いい。首都の図書館は本が読めるの？」

「俺の地位はそれなりに上だったからな。おそらくはお前を俺の

弟子とか偽れば大丈夫だろう」

「なら、行こう」

そのときだった。

突然大きな声が響いたのが。

「いた〜!!!」

「!?!?!?…何でここが?」

「…俺が休んだのがバレたな。どうする?」

「ソラ君!逃がさないよ!」

坂崎鈴音、といっただろうか?

ショートカットの髪にどことなく天然な空気をかもし出している。

「逃げる。魔法陣展開」

そう言うと三谷は魔法陣を展開する。

これはポケットの魔法か…。

そこから金属のカードを一枚取り出す。魔法符だ。

「起動」

そう言うと魔法符が起動。

三谷の手からカードが飛び出すと地面で大きくなって人が一人乗れるボードのようになる。

三谷がそこに乗るとボードが浮いた。

ホバリングボード
浮遊盤か。だが、これは初めて見る。

「智也さん」

「……俺は男に掴まる趣味はないんだがな」

そう言いつつ俺は三谷の後に乗る。

「行きます」

その言葉とともにロケットスタートをする。

「こ、これは軍用モデルよりも速いぞ！」

「ボクがスピードのみを追求して作ったから」

本棚と本棚の間を疾走していく。

「来たわね！」

「そうですね」

まるで待ち構えていたかのように少女と少年がいた。
平地冬香と李樹^{リー・シユウ}。

「大地よ、彼の者を捕まえろ！」

ガイア・ハンド
大地の御手！」

地面から轟音とともに土でできた巨大な手が俺達を捕まえようと迫ってくる。

「掴まってて」

そう三谷が言うと、ずっとつけていた銃を土に向ける。

「核を解析。装填」

そして引き金を引く。

すると、ただの魔力の弾丸のみで土の手を破壊。土煙が舞う。

「どこまでチート化したの!？」

「ま、私がいますがね!！」

煙の中から李リが出てくる。だが、そこには俺達はいない。

「それぐらい、ボクも読んでたよ」

「な!？」

李リが下からこちらを見上げて驚く。

そうだろう、本来、浮遊盤ホバリングボードは地面すれすれで滑空する乗り物だ。だが、これは空を飛んでいた。

「これは飛翔盤フライングボードだよ」

そう言うと入り口に向かって再び空を駆け抜ける。そして、外に出た瞬間だった。

「待ってたぜ。鎖チェイン・ダークネスの闇輪舞スロンド!！」

突然、魔法が放たれる。三谷は知っていたのか上空へ逃げようとするがボードの一部が捕まって動けなくなってしまう。

「……リユウとリカにレオか」

「ソラ……」

「みゃあ〜」

「どうする?」

俺はボードから降りつつそう聞いた。

三谷もボードから降り、ボードをカードに戻して自分のポケットに入れる。

「……智也さんの転移で例のところに逃げる」

「俺は行ったことが無いからな。無理だ」

「……」

「イエイ!」

「ちゃんと捕まえなさいよ!」

「いえ、私たちに言う資格はないと思うのですが?」

全員がそろってしまったようだ。

「オレ達から逃げるんなら全員気絶でもさせないと無理だぜ?」

「あきらめろ。お前の負けだ」

「……嫌だ」

三谷はゴーグルで顔が隠れてわかりづらいが悲痛な顔でそう言った。

そして、銃を構える。

「……俺も最善を尽くそう」

俺も剣を構える。

「……全員、構える」

「でも〜!!」

「アタシがソラをする。できればアタシだけで」

「大丈夫なの!?!」

「そうですね!ソラさんですよ!?!」

「……オレ達は智也だ。やるぞ!?!」

その言葉とともに全員でかかってきた。

ボクの目の前にはリカが立っている。

何でこうなつたんだろう？

ボクはみんなを傷つけたくなかっただけなのに……。でも、今はみんなを傷つける立場にいる。

「ねえ、ソラ。もう、帰ろ」

無理だ。それだけはやけない。

「みやあ〜」

「来るな！」

ボクは銃の片方をレオに突きつけ、さらには銃にライセンシククウホウ雷閃疾空砲を展開し、背後にも膨大な数のホムラドリ焰鳥とライエン雷燕の魔法陣を展開し、けん制する。

「レオ。下がってて。・・・アタシにさせて」

リカがボクにゆっくりと歩いてくる。

「来るな!!」

ボクはもう一つをリカに向ける。すると、リカの足が止まる。

「ソラ・・・」

「ボクには目的がある。それを達成するまでは帰らない」

そして、みんなを傷つけないから。

それはボクの完全な自己満足だ。ボクは身体的にはみんなに傷を負わせていない。でも、精神的にとっても傷つけている。

わかっている。でも、ボクはみんなのもとに行けない。いや、行かない。

「・・・」

「来るなッ！！！」

ボクはこちらに無言で歩いてくるリカに二つの銃口を突きつけ、背後の魔法陣をさらに展開させる。

「何で？」

リカがそうつぶやく。

「何でソラは一人で溜め込むの？」

傷つけないから。

「うるさい」

「アレはしょうがなかったんだよ」

しょうがない。

ボクはみんなを殺しかけたんだ。

「黙れ」

「……ありがとう」

間隆介。闇の魔法使い。

魔王の孫にしてボクの……悪友。

「ここからはオレだ。リカは向こうの相手をしる」

そう言っつてリュウは智也さんをさす。

だが、リカは首を縦に振らなかった。

「イヤ、アタシもこっちで「あいつ相手に戦えるのか?」……」

リカは口を閉ざす。

「……心理状況が無理だ。オレがあいつを殴つて目を覚まさせる。お前は……オレの後方支援をしる」

「……わかった」

そついうとリカは後に下がった。

ボクとリュウが対峙する。

「……そついうやオレとお前が殴り合いをするのは初めてだな」

そつ言いつつ、双剣を出現させる。リュウはなぜか両方共を左に吊っている。理由はボクにはよくわからない。

「そつだね」

ボクは右の銃を仕舞い、魔法をいつでも発動させれるようにする。

「オレはお前をぶっ飛ばす」

「……」

ボクは何も言わない。

そして、ボク等はまるで示し合わせたように戦い始めた。

side 隆介

「ハア!!」

オレが剣をソラにたたきつける。

ソラは紙一重でかわす。

だが、コレはヤツの精一杯じゃない。むしろ逆だ。

最低限の動きでかわしている。

さらに、間合いに入りこもうとしてくる。ソラの銃には銃身の下側に銃口から引き金までを刃が覆っており、接近戦もできる。そうすれば、オレのほうがリーチが長いがそれよりうちに入られたらソラが圧倒的に優位にたつ。そこでオレは後に思いつきバックステップをする。

「フウカシヤリン
風火車輪 !!」

「……ッ!」

ソラが高速で突っ込んでくる。

オレはとっさに二つの剣をクロスさせてガード。

オレとソラのつばぜり合い。

「ダイクネス・スピア暗黒の刺剣　！！」

オレは魔法を発動させる。

これは対象に影から無数の闇の針を出現させて串刺しにする魔法だが、ソラはわかっていたかのように高速で動いて回避する。これは死角からの攻撃だ。普通は避けれない。

「・・・ツクヨミ月詠　か」

「そっちの魔法は当たらないよ」

最悪だな。

「レオ！」

後から声が聞こえると同時に獣の咆哮。

光がオレの横を通り過ぎる。

咆哮霸か。

「ツキモリ月守　」

だが、強固な魔法陣の盾によって、防がれる。

「・・・できればほっというて欲しい」

ソラがそう言う。

「できないよー！！」

「できねーよ」

オレとリカが同時に言う。
こいつは忘れてる。

「仲間が苦しんでるのにほっとけるか!!」

だから、本気で行く!!

オレがそう決意したときだった。

突然だった。オレの武器が光りだした。

side 空志

何だ？

突然、リュウの武器が光りだした。

だが、すぐに光が収まる。

リュウの武器が少しだけ短くなり、剣の腹に文字や記号が描かれていた。

「・・・まさか、武器の進化!？」

「いや、違うな。最適化だ」

リュウがそう言う。

「見せてやるよ。オレの奥の手をな!!」

リュウが剣を構える。すると、魔力が剣に行き、魔力で刃を作り出した。

そうとしか言えない。リュウの魔力が刃を覆ったかと思うと、そこから魔力が少し伸び、光る前の長さにまでなった。

「なに・・・それ!？」

「オレの奥の手」

どうやら、魔力は可視できるレベルほど濃密なものらしい。
リカの言葉でわかった。

そして、さらにリュウが構えを取る。

そして、ボクに向かって離れたところから剣をふってきた。
すると、二つの黒い斬撃がボクに放たれた。

「な!？」

ボクには相手の魔法がわかる。発動のタイミングや攻撃範囲、形状、その他もろもろ。だが、リュウは魔法を使っているにも関わらず、ボクにはその攻撃がわからなかった。
わかったのは魔法が放たれた後だった。

「ツキモリ 月守 ！！」

ボクはガードをする。

「まだまだだ!！」

そういうとリュウはさらに魔法を放つ。

今度は地面から双剣に纏わせている闇の魔力を伸ばし、それを鞭のようにしならせてボクに攻撃してくる。

リカも驚いているようだ。

「何だコレは!？」

「・・・オレはな、詠唱が面倒でな考えたんだ」

「・・・は？」

ボクとリカは思わず間抜けな声を出してしまう。

「だからな、詠唱をしない魔法を作った」

「そんな！？魔法は威力や範囲、形状を詠唱や魔法陣で決めるはずだろ！？」

「だからな、オレは詠唱の変わりになるもの考えた。それがコレだ！！」

構えを取る。

すると、魔法が発動、リュウの体を魔力が包み、リュウはそのまま突貫。

ボクはとつさに銃の刃でガード。

核を解析してそれを打ち抜けば発動は止まる。

「核を解析・・・！？」

核がなかった。

いや、あったけど、核がリュウ自身になっていた。

つまり、リュウを殺さない限り、魔法は止まらない。

「そこでオレは、構えを詠唱の代わりにした」

「なッ！？」

「魔法剣。それがオレの本気だ！」
ガチ

リュウがさらに魔法を発動させる。

「魔法剣 影討ち」

そう言うとリュウの姿が消えた。

ボクは背後に違和感を感じ、右に飛ぼうとした。

「終わりだ」

リュウがボクの背後から心臓を狙って剣を構えていた。
ボクの完全な敗北だった。

sideリカ

リュウが唐突に変な魔法を使い出した。
魔法剣とか言ってたけど……。

リュウがソラの前から消える。

だが、次の瞬間にはソラの背後にいた。

「終わりだ」

ソラは膝をついた。敗北を認めた。

でも、ソラは今にも壊れそうな表情をしている。

「……決着がついたな」

いつの間にかあの歩く辞典とみんながこっちを見ていた。

でも、みんなは今のソラの状態を見て何も言えない。

「おい、行くぞ」

「……」

呆然としているソラ。

どうすればわからないといった顔で、焦点の定まっていない目でリュウを見ている。

「いい加減にしる!!」

リュウがソラの襟首をつかんで無理やり立たせる。

「もういいだろ!？」

「……」

何も言わない。まるで、どこかに魂だけを置き忘れてしまったかのようにだった。

「心配したんだぞ!？全員、必死にお前を探してたんだぞ!!」

「……傷つけたくなかった」

ソラがぼそりとつぶやく。

「ボクはみんなを傷つけたくなかったんだ!!」

「だから!アレはしょうがないつつってんだろ!!」

「しょうがなくない！！下手してたら殺してた！！ボクのこの力で！！守ると決めた力で！！龍造さんと誓った魔法で！！」

血を吐くような、悲鳴のような声を上げるソラ。

「……………ッ」

奥歯をかみ締めるリュウ。

何を言えいいのかという顔だ。

アタシ達は今わかった。

ソラは、みんなが大切だからこそ行方をくらました。

だからこそ、魔法を使ってみんなに攻撃してワルモノを演じようとした。

アタシ達を守るために。

……………。

ケータイのバイブ音。

「何だよ！！」

リュウのものだったようだ。

リュウは乱暴にケータイを開いて通話しだした。

「あ？……………ここにいる……………なんだと！？だが、今のこいつは無理だ……………今すぐにオレ達が行く……………監視は置いていく」

リュウはそう言うとパタンと折りたたみ式のケータイを閉じる。

そして、アタシ達のほうを向いて言う。

「町と学校に敵襲だ」

「本当ですか!？」

「何でこんなときに・・・最低ね」

「敵はしかもおそらくこっちの人間だ」

「・・・ついに本腰を入れてきたか」

「・・・ソラ君はどうするの?」

「今のこいつは使い物にならん。だから、逃げないように監視をおく。一応、魔窟に連れて行け」

「アタシがする」

「・・・わかった」

リュウは行くぞと言って、転移をする。

そして、視界が黒に包まれる。

視界がはれると、アタシとソラは広い道にぽつんといた。ここは

魔窟のメインストリートだろう。それもリュウの家の前。

みんなは直接向こうに戻ったのかいない。

アタシは無気力なソラをつれて中に入っていた。

s i d e r i k a

ソラは何を言っても全然反応してくれなかった。

アタシはソラの隣に座ってソラに話しかけている。

「ソラ君はどうしたの？」

そう尋ねるのはアタシの隣に座った優子さんだ。

あまりのソラの変わりように驚いた表情をしている。

「……アタシ達が止めたから」

「どういふこと？」

「ソラは……ソラはアタシ達を守るために離れたの。でも、ソラもアタシ達から離れたくないのに行方をくらまして……。アタシ達がそうとも知らずに無理やり連れ戻したから……。だから、もう、どうすればいいのかわからないんだと思う。アタシ達、ソラを探さないほうがよかったのかな？」

優子さんはアタシの話の聞くと、ゆっくりとこう言った。

「私にはわからないわ。でもね、コレだけはいえる。みんなは、ただ、ソラ君のためにそうした。ソラ君もみんなのためにそうした」

「……まるで、三銃士みたいですね」

一人はみんなのために、みんなは一人のために。
三銃士の有名なセリフだ。

「でも、それが仲間、でしょ？」

優子さんはそこで話を切り上げ、立ち上がる。

「さて、リカちゃんはソラ君のために何ができるのでしょうか？」
そういつと、優子さんはリビングから出て行った。

レオも優子さんについていった。
ここに残されたのはアタシとソラだけ。

「・・・ねえ、ソラ。ソラは、いつもみんなを守ってるよね？」

ソラは答えない。でも、アタシもあきらめない。アタシの声を、
そして、みんなの気持ちをここでソラに伝える。それが今のアタシ
にできるコト。

アタシは話しかけ続ける。

「一人で、いつもみんなを守ってる。たぶん、みんなのために。
でもね・・・」

自然とアタシの目から涙がこぼれる。

「ソラが一人で抱え込んで辛いと、アタシ達もつらいよ・・・」

そのときだった。

ソラが、やっとこっちを向いてくれた。

「ボクのことほつといてくれ」

出てきた言葉は残酷だった。
でも、アタシは諦めない。

side 空志

「・・・何で？」

リカが尋ねてくる。

「・・・」

傷つけたくない。でも、そんなことを言えば絶対に近寄ってくるのは目に見えていた。でも、だからといって、ボクには相手を傷つけるような言葉が思いつかなかった。
だから、ボクは黙るしかなかった。

「傷つけたくないから？」

「・・・」

ボクは答えない。いや、答えられない。

「だから、さっきのところ・・・自分の属性のことを調べてたの？アタシ達を傷つけないために」

「・・・」

「だから、アタシ達に何も言わずに「黙れ!!」」

ボクは叫んだ。

「怖いんだよ！みんなを傷つけるのが！だからボクは一人だけでこの力を調べようと思った！ボクはあの時暴走した！あんな惨事になった！下手したらみんなが死んでた！ボクのせいではない！」

「・・・ソラの・・・バカ！！！」

リカが抱きついてくる。
そして押し倒される。

「何で！？何でそんな風に考えるの！！心配したんだよ！！みんなも！！別にしようがないよ！！暴走なんて誰にも予想ができないんだもん！！！」

ボクはリカを思い切り押し、逆に押し倒す。

「この力は謎だらけなんだ！！あれからこの目が解除できない！！ボクにも把握できていない！！だから！！ボクはまたみんなを巻き込みたくなかったんだよ！！みんなには笑って欲しかったんだよ！！ボクは傷つくのは構わない！！でも！！みんなだけは嫌だ！！この力はみんなを守るためにつて！！あの時誓ったんだ！！！」

ボクはそう叫ぶと、リカから体をどかしてここから出て行こうとした。

でも、できなかった。

リカがボクを優しく抱いてたから。まるで、子供をあやす母親のように。

「・・・離せ」

「何でソラは自分のことを考えないの？」

そんなつもりはない。ボクはそう思った。

「いつもそう。ソラは時々、自分の事なんかお構いなしで誰かを助ける。そんなソラが好き。でも！！アタシ達は巻き込まれてなんかいない！！それにあれはしょうがなかったの！！ソラが優しかったから・・・だから怒って、偶然そうなっちゃっただけ」

リカの抱きしめる力が強くなる。

「アタシ達だってソラには笑って欲しい！暴走が怖いならアタシ達が止める。傷つけたならその重みをアタシ達も背負う。絶対にソラを一人にしない。少なくともアタシはそばにいる。だから、約束を守ってよ」

どこかで聞いたことのあるような言葉を言うリカ。
ボクは何故かその言葉が自然と自分の中に染み渡っていくのを感じた。

「・・・約束？」

「アタシを一人にしないで」

「・・・何だよ。怖くないの？」

わからなかった。

何で、ボクはみんなを傷つけたのに。

「ソラは優しい英雄なんだよ。アタシ達が一番よく知ってる」

何だよソレ……。

いったい、いつの話なんだよ。ホントに。

なんか視界がぼやけてきた。

「う、ううううう……。あ……」

ボクはもう、みんなには怖がられているのかと思った。

あんな力を目の当たりにして、みんなに怖がられるのが嫌なだけだった。

だから、ボクはみんなから離れた。

それに言い訳が欲しかっただけなんだと今気づいた。

ボクは落ち着くと、最初に言わなきゃいけないことを言った。

「……ゴメン」

「……後でみんなに怒られよう」

「そうだね」

そういつと、見つめあうボク達。

「……」

「……」

……。

.....。

.....今考えるとこの状況はまずくね？
まず、ボクがリカを押し倒していること。

次に、周りには誰もいない。

さらに、若い男女が二人きり。

距離がなんと20センチあるかないか！！

顔が全力で近いです。

って、目を閉じないで！！

なんか確実にそういう雰囲気になってるよ！！

レオ！！

.....。

って、いなかったあああああああ！！！！！！

援軍は！？

てか、このまま雰囲気になってもいいの！？

確かにリカは美人だけど！！

それこそ、十人いれば十五人ぐらい振り返るかもってレベルで！

「.....ソラ」

「!？」

その言葉で、なぜかボクは引力に引かれるようにリカの顔にボクの顔が近づいていく。

ボクはリカとの距離をつめていく。

.....10センチ.....5センチ.....3セ。

バタアアアアアアアアン！！！！

「うちのバカ孫はここかあああああああああ……!!??」

突然、間家のリビングに誰かが突撃してきた。

「によわあああああああ!!?!?!?」

「~~~~~!!?!?!?」

ボクとリカはお互いに一気に離れる。

「今、ボク（アタシ）は何をしよう?」

あ、危ねえ!!

危うく……うん、まあ、あれだよ。

リカは何で残念そうな顔なんだろう?

「……すまん。ワシは出て行く」

「いや、全力で勘違いだから、じいちゃん」

「じいちゃん?」

「そう、この人がソラ君の祖父」

いつの間にか現れた優子さんが説明。

「ワシが三谷隼人^{みたにはやて}。空志、通称ソラの祖父」

魔神。

「……ここはどうも異次元のようだ。」

「……ソラ、訓練お疲れ」

「……ありがとう。これからも必死にがんばるよ」

死なないようにね。

「で、何でじいちゃんが？」

「決まってるだろ」

そう言つとじいちゃんはボクのほつを向いてこう言つた。

「その譲ちゃんとソラの息子を」
雷燕ライエン！「ぎゃあああああ

あああああ！？」

このクソジジイは何を言い出すんだ！？

「リカもなんか言つてよ！」

「子供は……二人がいいかな？」

うおい！？

顔を赤らめて何を言い出すの！？

「隼人さん。そろそろ本題に」

「わかった。わかっただからその日本刀を仕舞ってくれ」

やっと、まじめな話か。

「簡単に言うと、かなりまずい状況だ」

「何が？」

「お前は知らんのか！？向こうの間学園とその周辺が襲撃されるんだぞ！？」

「……起動！」

ボクはフライングボード飛翔盤のカードを取り出して展開。

足元のボードに飛び乗ろうとする。
でも、優子さんに阻止される。

「行かせてください！！！」

「まずは話を最期まで聞きなさい」

ボクは優子さんをどうこうできないのでおとなしくボードを仕舞う。

「……何がまずい状況なんですか？」

「有り得んのじゃ。こちらの攻撃が効かずに、向こうの攻撃だけがこっちに来る。そしてな、全員が多くの属性の魔法を使ってくる。最低でも自然元素系の四つをな」

「「え！？」「」

驚いたのはボクとリカだ。
だってありえない。

属性は基本的に一人一つ。たまに二つとかがいる程度だ。

自然元素系、つまりは火、水、風、土をすべて持っているのはそれこそいても一人いるかないかのレベルのはずだ。それが何人もいるのはありえない。

いや、思いつくことが一つだけある。もし、ここ最近の事件の黒幕が絡んでるのだとしたら……。

「……例のカード」

「それしか考えられん」

「カードはどこに？」

「?……ログのヤツが解析中じゃ。一枚わしが持つとるがの」

そついうと籠造さんは例のカードを取り出す。

それをボクはひったくるようにとる。

「ボクが解析します。今すぐに。核コアの解析……」

アナライズ・コア
核の解析。

これはボクが暴走状態になってからできるようになった。

簡単に言うと、コレは対象の魔法の魔法構成プログラムを視る。おそらくは

月詠ツクヨミが強化されたんだろうと思う。魔法は発動すると、プログ

ラミングされたとおりに動く。あるいはそういう効果を発揮させる。

核とは、そのプログラミングされたことが書いてある命令書のようなものだ。では、その核が破壊されたらどうなるのだろうか？ 答え

は簡単だ。魔法の核がなくなるということはその魔法自体がなくなつたことになる。だから、核を壊せば魔法は消える。そして、核を視ればどんな魔法だったかわかる。

「・・・解析完了」

ボクは核をつかむとそれを紙のように広げた。

「「なんじゃそりゃあああああああ!?!?!」」

「「さすがソラ(君)」」

「・・・ボクは人間です」

よくわかんないけどみんなにも見えるらしい。
ボクは魔法構成プログラムを視てみる。

「・・・やっぱりか」

「「どういづ」ト?」

リカが尋ねてくる。

「止めないとダメだ」

「そんなのはきまっとるじゃろ」

「違う! コレを使ってる人たちに使用をやめさせるんだ!」

「「どういづことだ?」」

ボクは最初にここに来てスズが倒れたときのことを思い出す。
魔力は生命力に近いものがある。

「コレは、生命力を削って魔法を使用可能にする魔道具だ」

「……「な!?!?!」」

「だからわからないけど無理やり他の属性も使えるようにプロ
グラムされている」

生命力には属性が無い。たぶんそうということだろう。
だから、カードで何とかできる。

今回の目的はこのカードの実験。実用段階まで持っていけるかど
うかだったんだろう。

だから、危険地帯だということになっているこの町での実験が効
果的だとふんだんだろう。

でも、コレを使い続けるのはまずい。

「最悪、死者が出る。その前にカードを破壊しないと!」

・・・あれ?

なんかみんなが笑ってるよ?

「ソラ、おぬしはそれが一番お前らしい」

「ワシからしてみたらお前は昔のワシより勇者らしい」

「ソラ君。あなたは大丈夫。誰も傷つけてない。今も敵ですら助
けようとしているのよ」

上から龍造さん。じいちゃん、優子さんの順でボクに声をかけてくれる。

「ソラ」

「みゃ〜」

「ソラはソラが正しいと思う道を進めばいいんだよ。そうすればみんなが笑顔になれるから」

「・・・ボクはそんなにすごい人じゃないよ」

それは自分が一番よくわかってる。
でも・・・。

「でも、少なくとも近くにいる人ぐらいは助けたい」

「それでいいんだよ。少なくともアタシ達は笑顔になれる」

そっか。

「よし、それなら行こうか。今回、レオは体力温存で。リカはボクとこいつに二人乗り」

「みゃ」

「りよーかい!」

ボクはまたボードを展開。

そして、レオはボクの後頭部。ボクはボードに乗り、その後により力を乗せ、ボクに掴まらせる。

「知つとるか？盤ボードは免許があるんじゃないぞ？」

龍造さんがにやけた顔で言う。

ボクは顔に不適な笑みを浮かべて言う。

「無免許運転は高校生の特権だよ。じゃ、フウモン風門」

風が巻き起こる。風が収まると、そこはボク等の町の上空。

「じゃ、今回も黒い勇者アンチヒーローといきますか」

「でも、ソラがしようとしてるのは、たぶん勇者ヒーローだよ？」

「ま、とにかく行くよ。しっかりと掴まって」

ボクは一気にボードをトップスピードにもって行き、空を駆け抜ける。

18話・DOG FIGHT

side 隆介

数刻ほど前に戻る。

オレの視界が晴れる。

そこはオレ達がよく知る場所。間学園のグラウンドだった。

周りを見ると、そこは惨状だった。

あちこちから火の手が上がり、学校もいろいろなところが壊れてる。

だが、悲鳴なんかは聞こえない。

おそらく、魔窟の魔物達がこの町の住人たちを既に避難させたんだらう。

どごおおおおおおおん!!!!!!

突然校舎から爆発音が響く。

オレは反射的に音のしたほうを向いた。三階の一部の壁が吹き飛び、そこにいたのは多湖と田中だった。

剣や斧といった近接武器を構えた軍服を着る何人かの人間に囲まれている。おそらくは敵だらう。

「オイ!! あいつら避難してねえぞ!？」

「ちょ!?! どうしよう!?!？」

「・・・わたしがこっちに注意向けるからシュウ。三人を保護して」

「わかりました」

「俺も行くぞ」

「じゃ、数宝珠！・・・発射ショット！！」

冬香は魔法機械デバイス、数宝珠を出すと、すぐさま氷の槍の弾幕で攻撃すると、敵は突然の攻撃にうろたえる。

その隙に、シユウと智也はかなりの距離があるにも関わらず、さらには跳躍して三階に到達。三人を引っ付かんで戻ってくる。

・・・こいつら人間じゃねえ。

「俺だけ何で引きずられてんの?!」

「・・・気分だ」

智也に連れてこられた田中が文句を言う。

「シユウ君ありがとう。おかげで助かったよ。でも、お姫様抱っこは恥ずかしい」

「では、次回から気をつけます」

シユウは紳士のように多湖を地面に降ろす。

「で、何でお前らは避難してない?」

「あたしがエリアとみんなを守りながら体育館に避難してたんだけど、そうしたらさっきの状況になっちゃって・・・」

「そうか・・・だが、無理はするな。ちなみに魔法はどうだった

んだ？」

「やっぱり今回も効かないよ」

「俺も隙をみて殴ってみたんだができなかった。つか、一回魔法に当たりかけて死ぬかと思った……」

「……アンタ、よく生きてたわね」

「まあ、ここはわたしの出番だね！みんな武器出して！」

オレ達は坂崎に言われたとおり、武器を出す。

そこに坂崎は魔力付与エンチャントを施す。

これで敵に攻撃が通るようになった。

「……俺はここを守る」

「よし、んじゃ、オレ達は町の敵をボコって来る。ま、その前にこいつらだけだな」

その言葉と同時にオレ達の周りに円を書くように多くの敵が現れる。

その数ざつと50か？

オレ達は背中を合わせて敵に身構える。

「シユウ、オレとお前は前衛だな」

「もちろんです。ですが、リカさんとソラさんがいないのは辛いですね……」

「でも、今のあいつじゃ無理よ」

「お前バカだな」

「なんですって〜!？」

「ソラ君は絶対に来るよ」

「てか、あいつは見つかったのか!？」

「でも、何でいないの？」

「何、ちよつとした休憩だ」

「・・・いい加減にしろ。来るぞ」

とか言つが自分から智也は敵に突っ込んでいくと、敵の障壁を切り刻む。

「な!？」

「遅い。滅クリアだ」

すると、敵の装備を全部消滅させる。

敵はインナーのみになる。そこを智也は剣の柄で首をたたいて気絶させる。

「・・・いつみてもすげえな」

「・・・あいつには負けるがな」

智也はすぐに敵との距離をとってオレ達のところに来る。

「何故だ!？」

「俺たちには攻撃が通じないんじゃないのか!？」

「……ふん。そんなものに頼るからお前らはダメなんだ。この俺がそれを教えてやる。『消滅の賢者』として」

敵に動揺が走る。

『消滅の賢者』。智也の通り名。炎の帝国最強を誇る魔導師。消滅属性を持つ彼の畏怖の名。

向こうの世界で知らないやつはいない。

「全員でありつたけの魔法をヤツに放て!!」

「……確かにいくら俺でも全部はどうにもできない。だが、お前等は勘違いしている。俺より先に倒さなければならぬのがある」

「準備できたよ」

「……マイペースですね」

「まあ、それが鈴音だしね」

「ま、とにかくやれ。オレ等のほうがヤバいってコトを教えてやれ」

「おっけ」。

リフレクション・エリア
「反射結界!」

オレ達を囲むように半球状の結界が展開される。
そして、雨のように膨大な数の魔法がこちらに放たれる。
だが、それらはすべて正確に放ったやつの下に跳ね返されていく。

「今だ！解除しろ！」

その言葉と同時にオレとシュウが敵に突っ込む。
オレは双剣で障壁を攻撃すると敵を気絶させる。

「何だ！？こいつらは!?!」

「お前が知る必要はないな」

「がッ!?!」

「すみません。後で薬を処方しておきます」

・・・お前はいつもそれだよな？

だが、こいつはそこらへんの兵士より確実に強い。

何人かがシュウの死角から魔法を放つがシュウはまるで目で見て
いるかのように逆が魔力付与された手甲リバース エンチャントでガードする。ガントレット

そして、中国拳法のような動きで敵を倒す。
つえくな。

だが、他のやつらも負けてない。

「発射！」ショット

「エリア!?!」

水と氷の弾幕で冬香と多湖が敵の視界を潰す。
田中はまあ・・・アレだ。応援。

「アンチ・ディメンション
相殺空間　　」！」

坂崎が結界のようなものを張る。
すると、敵の障壁は消えたようだ。

「こつちも負けてられないな。・・・魔法剣　斬黒　　」！」
ざんこく

オレは坂崎が障壁を無力化したヤツに黒い斬撃を飛ばして気絶させる。

ダーク・エッジ
闇の刃　と違い、切れ味や威力、さらには斬撃の数をコントロ
ールできるのがこの魔法剣の特徴だ。

「死にたいやつからかかってこいー!!」

s i d e 空志

「・・・くちゅ」

「あゝ。寒いよね。ボクはゴーグルにちょっとした細工をして
寒くないようにしたからな・・・」

町の上空。

そこからボクは今の戦況を見ていた。
魔物の魔力が200ほど。そして、人間の魔力が300。
・・・勝てる気がしないんですけど？

「いや、ガントさんがいたら一騎当千かな？」

「……でも、黒幕の人はあの人を倒せば終わるんじゃない？」

「それがさ、見つからないんだよね」

ボクが視た限り、あの人の魔力はなかった。

「だから、ボクはまずこの戦況をひっくり返す」

「でも、相手に攻撃は通じないんだよ？」

そう。そこが問題。

でも、ボクは解析してわかったことがある。

「うん。大丈夫。アレはそこまで万能じゃなかった。あの障壁は上級魔法までの威力にしか耐えられない。つまり、真言を使えば確実に潰せる」

「……それって、一人数人しか倒せないじゃん」

「でも、ボクならそれができる。真言は外部の魔力、つまりはマナをかなり使う。そして、ボクはマナを操れる」

月の属性のおかげで。

みんなを傷つけてしまったこの力で。

今度こそみんなを守る。

「でも、ツキヨ月夜 マテリアライズは具現化の魔法でしょ？」

ツキヨ月夜 は強い。それこそモノにできれば優子さんもヤバいと認

めるほどに。でも、それは1対1にしか向いていない。

「うん。だから 月夜^{ツキヨ} は使わない」

「え!?!?!?!じゃ、真言で一気にできないよ!?!?!」

「……ボクの属性を忘れたの?」

「え?月じゃないの?」

「じゃ、見せてあげるよ。

其は……に属す法則!」

ボクは詠唱を始める。

side 隆介

「……まだいんのかよ!」

「……さすがに多いですね」

敵で誰かが応援を要請したのかここには続々と人間が集まってきた。
ている。

コレじゃキリが無い。

「きゃあああああああ!?!?!」

突然聞こえる甲高い悲鳴。

この声の咆哮にあるもの、それは……。

「リュウ！アンタも根性見せなさい！発射シヨット！」

「エリアー！がんばって！」

『きゅ！』

そして、オレ達は懸命に戦う。
だが、沸いて出てくる敵兵にオレ達は徐々に押され始める。

「ハアツ・・・ハア・・・」

「リュウ君！大丈夫！？」

「・・・大丈夫だ」

魔力は特に問題はない。

さすがのオレも精神的にまいってる。倒しても倒しても来る敵に
だが、それは全員同じだ。

そして、オレが敵に突っ込もうとしたときだった。
上からありえない魔力を感じた。

全員が思わず上を見る。そこには、空を覆う超巨大な空色に輝く
魔法陣が展開されていた。

「なにあれ！？」

「まったく。ホントに遅おせえよ」

「普通に考えて真言ね。演出が派手ね」

「まあ、来てくれたからおっけだよ」

オレは敵との距離をとる。
すると、空の魔法陣が一際輝き、魔法が発動する。
空がぐにやりと歪む。それがもとに戻った瞬間に、空色の無数の
槍が雨のように敵に降り注ぐ。

それが敵に着弾すると、敵に小規模な嵐が発生し、雷や風が障壁
を打ち破って意識を刈り取った。

コレが天空の魔法か？

オレは周りを確認すると、とりあえず左の腰にある剣帯に武器を
収める。

たぶん敵はいない。

「コール、リカ・・・リカ。聞こえるか？」

オレはピアスでリカに連絡を取ろうとする。

『聞こえる』

やっぱりこっちに来ていたか。

「サンキユ。助かった」

『それはソラに言って。ソラはみんなにあんなこととして落ち込ん
でるから』

「そうだな。・・・ま、あれはしょうがなかったんだ。誰も気に
してねえよ」

『そうだよね』

「じゃ、ソラにこっちに来るように言え。ピアスを渡す」

『わかっ……え！？リュウ！すぐに真言で迎撃して！』

突然リカが切羽詰まった声で言う。

「は？何を言って……」

「きゃああ！？」

「茜ちゃん！？」

「発射！」
シュツ

冬香が魔法で敵の視界を潰す。その隙に敵に捕まりそうになっていた多湖をオレは背後に庇う。

いつの間にかオレ等の後ろに全身を黒い服で身を包んだ敵兵がいた。

だが、オレは気配を感じ取れなかったぞ！？

「……」

無言でナイフを両手に構えるとシュウや智也並みの速度でオレ達に襲い掛かってくる。

そうか、隠密系の伏兵か！

さすがにオレはシュウほどのスピードを持ち合わせていない。

コレはヤバイ！

「魔法剣 黒針！」

オレが魔法を発動させ、影から出てきた闇の針が敵を串刺しにし
ようとする。

だが、それも障壁でガードされる。

「チートだろ！？坂崎！」

「……無理！速すぎて当てられない！」

やべえ。万事休すか？

「リュウ！真言だ！」

声が聞こえた。

オレはその言葉を聞いた瞬間に魔法を紡ぐために相手を力の限り
吹き飛ばし、オレ自身も下がることで距離をとる。

そして、急いで詠唱を行う。

「我、喚ぶは絶対なる闇の力。

その力は全てを飲み込む。

汝に畏怖と恐れを。

闇の暴力に屈せ。

今ここにその力を示せ。

エンデ・オブ・ブラック
終焉の黒　！！」

魔法が発動。

オレの背後に闇の壁が出現する。

それはまるで生きているかのように蠢く。それが敵に覆いかぶさる。そして、数秒ほどで闇が消える。そこには、泡を吹いて倒れる敵がいるだけだった。

この魔法は、敵が魔法を放つてもその魔法を飲み込みさらには相手の魔力を浸食し、無理やり魔力を使わせる。すると、生命力をギリギリ残した状態でも虫の息という状態の人間を作れる。そして、魔力が無理やり使われていくのがわかるため、恐慌状態に陥るやつが多く、精神的にもヤバくなる。

てか、オレはこの魔法の加減ができねえから嫌だったんだ。以前、敵にコレを使ったときは、くらったヤツらは精神的におかしくなつて廃人の一歩手前まで逝つた。・・・字が違う？いや、あつてるぞ。リアルに逝きかけたからな。

・・・良いカウンセラーを探してくれ。

「つか、二人とも遅えんだよ」

「・・・さーせん」

そこにはボードに乗るソラとリカがいた。

side空志

またまた時は数刻ほど戻る。

「其は天に属す法則！」

ボクは掌を上に向けて言う。

「え！？ソラは天空の真言もできるの？」

「いや、今回が初めて」

ボクは一旦詠唱を中断してリカに答える。

「……詠唱を途中でやめちゃったら最初からだよ？」

「え？そんなの？前に 月夜ツキヨ したときはマナを固定させたら中断しても発動できたよ？それにほら。魔法陣も消えてない」

リカが驚きの顔になる。

「……そうか、だから前の魔窟襲撃のときに「ありえねえ！！」って叫んでた人がたくさんいたんだね。」

「……さすがソラ」

「……」

とりあえず続けよう。

「それは風と雷の嵐の魔法。」

嵐の力をもって全てをなぎ倒せ。

災厄を、穢れを流せ。

この手に空を！！

レックウショウハ
裂空衝破 ！！」

ボクの上に超巨大な魔法陣が展開される。

ま、今回はそういう風に魔力を注ぎ込んだからね。

そして、空がぐにやりと歪む。それがもとに戻った瞬間に、空色の無数の槍が雨のように敵だけに降り注ぐ。

……たぶんね。

ここからはよくわからないけど、敵の魔力反応から考えるにほんどは気絶したみたい。

「・・・以外に地味な真言だった」

「アレのどこが地味なの!？」

「え?だって、ただの天空属性の槍でしょ?」

「アタシががんばって見てみたけど、着弾の瞬間に小規模な嵐みたいなのが敵をやっつけてたよ!？」

「・・・想像以上にえぐい魔法だったのかもしれない。
でも、さすが吸血鬼^{ヴァンパイア}。視力もいいんだね。」

リカが何か言おうとした瞬間にその口が止まる。

「聞こえる」

「・・・あれ？」

それってそういえばボクが作ったピアスだよな？

「何で持ってるの?」

リカは手で待っててというしぐさをすると、ピアスの会話に集中する。

「・・・ま、次はみんなに合流するか。
ちよつと怖いけど。」

ボクはとりあえずリュウの魔力を探す。
それはすぐに見つかった。

学校のグラウンド。そこには他にもスズと冬香、インチョーがい

るようだ。

でも、ボクはそこで違和感に気づいた。

みんなの死角に知らない魔力がある。これは人間の魔力だ。

そして、魔法を使おうとしている？

敵か！！

「リカ！リュウに真言使うように言って！背後に敵がいる！！」

「え！？リュウ！すぐに真言で迎撃して！」

ボクはリカのその言葉を聞いた瞬間に学校に向かってトップスピ
ードで移動。

なんかレオとリカの悲鳴が聞こえるような気がするけど気にしな
い。

すると、すぐにグラウンドが見えてきた。

リュウは真っ黒い敵に苦戦してるようだ。

「リュウ！真言だ！」

リュウは相手との距離をとると、すぐに詠唱を始めた。

「我、喚ぶは絶対なる闇の力。

その力は全てを飲み込む。

汝に畏怖と恐れを。

闇の暴力に屈せ。

今ここにその力を示せ。

エンデ・オブ・ブラック

終焉の黒　！！」

魔法が発動。

ボクはその魔法を無意識に解析すると、えげつないことがわかっ

た。

敵に同情するよ。

そして、リュウは疲れた顔を見ると、ボク等の方を向いてこう言った。

「つか、二人とも遅えんだよ」

「……さーせん」

ボクとリカはボードから降りて謝る。

レオも地面に飛び降りる。

そして、ボクは今までつけたままだったゴーグルを外し首にかけてみんなを見る。

「……バカソラ」

「ハイッ！」

ボクは冬香に話しかけられる。

なんかもものすごい恐怖を感じる。

「後で、文句をたっぷり言うから覚悟しときなさい」

「三谷君……よかった、無事で」

「ソラ……ふんっ！」

バシッ！

リュウに思いつきり殴られた。

「オレはこれで十分だ。だが、オレ等を助けてくれてありがとう。そしてお前の忘れもんだ」

そう言うとりユウはボクに月の模様が描かれたピアスを投げる。

ボクはそれをキャッチする。

掌にあるピアスとみんなを見る。

「大丈夫だ。お前はオレ等を傷つけてなんかない」

ボクは思わず涙が出そうになった。

でも、なんとなく泣くところを見られたくなってこらえ、ピアスを右耳にはめる。

「みんな、ゴメン。そして、ありがとう」

「ううゝ。よがっだよゝ」

「ちよ！？スズ！？」

今まで静かだと思っていたら泣いてたようだった。

ボクはどうしようと思って、とりあえず慰めようと頭をなでてみる。

「うん。ホントにゴメン。もう、ボク一人で抱え込まないから・

・みんなにも頼るから。だから、泣かないですよ。ボクは笑顔の方が好きだよ」

「・・・うん」

まだ、涙でスズの顔が濡れていたが、そう答えた表情は笑顔だった。

ボクやみんなが思わず笑顔になる。

「・・・ソラ？」

そして、後ろから地獄の底から聞こえるようなドスの利いた声で全員の顔が引きつった笑顔に早変わり。

「・・・リカサン？ドウシタンシヨウカ？」

リカだった。

てか、いつの間に鎌を構えたの？

って、スズに向かって突撃態勢をなんで取るの!？

「ふふふふふふふふ・・・・・・・・・鈴音は信じてたのに・・・」

「りりりりりり、リカちゃん!ち、違つよ!これは、その!？」

「問答無用!!」

「いや、ダメだろ!？ツキモリ 月守 !!!」

「キヤアアアアアアアア!？」

ガキンッ!

ボクはとっさにスズの盾になる。

てか、前の時みたいにすごい力ですね!？

「やっぱり、ソラも・・・ふふふふふふふふ・・・」
・ソラを殺してアタシも死ぬ!!」

いや、なんか全力でものすごい勘違いをしているよ!?
つて、スズ!なんで君はそんな安全地帯にいるのかな!?

「・・・・・・・・・・・・・・・・ソラ君なら大丈夫」

「リュウ!!冬香!!インチョー!!助けて!!」

そう言うと三人はやたらといい笑顔で親指を立てて同じことを言
った。

「「「お前のことは忘れない!!」」」

ちよおおおおおおお!!?

ビシィ!!

「ぎゃあああああああ!!?また盾にヒビが入ったあああああ
ああああ!!?」

「はははははははははははははははははははははははははははははは
は!!!!!!!!あの世で幸せに暮らそ!ソラ!!」

無理だから!

あの世とか逝く時点で幸せじゃないから!!
ボクの悲鳴とリカの哄笑が夕暮れの学校に響く・・・。

19話・STRONGEST MOB

side 隆介

「ぜえーぜえー・・・」

「・・・ごめんなさい」

リカのヤンデレが発動してから何とかことを収めた。

ソラがリカの言うことを何でも聞くといい死亡フラグで。

今は冷静になってるが、オレの見間違いないじゃなければリカの目が狩人の目になってる気がする。

ま、そんなことはオレの精神衛生上考えない方がいいだろう。

んなことより重大なことがある。

「やつはどこにいるんだ？」

やつとはもちろん黒幕のことだ。

とりあえず、魔力探査なら右に出るやつがないソラに聞いてみる。

「・・・わかりません」

「ハア！？じゃ、どこにあなたの存在価値があるのよ！！」

「冬香また言ったね！？ボクはなんでそんなに罵倒されなきゃいけないの！？」

・・・なぜか不毛な言い合いに発展した。

「もしもし、間隆介だ。誰だ？」

『・・・ワタシよ』

・・・誰だ？

「名前を言え。ワタシでわかるか。詐欺ならお断りだ」

『・・・宇佐野美未』

「・・・うそをつけ。宇佐野はそんなキャラじゃない」

あいつはもつとバカっぽい雰囲気だ。こんなクールというか寡黙なやつじゃない。

『・・・間君は実はドラゴン』

「なるほど。わかった。で、ホントは誰だ」

『・・・最終手段・・・みんなにわたしの声が聞こえるようにして』

オレは怪しいと思いながら、みんなに言う。

「お前ら、宇佐野らしき人物から電話だ」

「なんで宇佐野さんらしき人なの？」

「・・・聞けばわかる。宇佐野、出来たぞ？」

ソラが宇佐野って誰？とか言ってるがリカあたりが説明するだろう。

『……宇佐野です』

「……嘘だ！」「……」

女子四人が雛見沢の少女のようなりアクションをとる。

「……そんなにキャラが違うの？」

「まあ、そうだな」

『……証拠、坂崎さん、平地さん、アンジェリカさん、委員長
の体重は「……きゃあああああああ！」「……」』

女子が目にもとまらぬ速さでオレのケータイをひったくると、オレ等からかなり離れる。そして、何かを話す。

お、戻ってきた。

……涙を流してるのは気にしないでおう。

「……この人は本物です」「……」

「……そうか」

オレは微妙な顔で宇佐野に聞く。

「どうしてオレのケータイの番号を知っている？」

『……ハッキングした』

犯罪はやめろ。

「まあ、この際はいいい。で、用件は何だ？」

『・・・黒幕らしき人を見つけた』

「本当!？」

『・・・あなたが三谷君ね。はじめまして』

「いや、クラスメイトだよな。会ったことはあるよね」

「それよりその黒幕はどこ!？」

『・・・はい。場所は』

突然オレは魔力を感じる。それもかなりの数だ。

「後方に魔力・・・人でも魔物でもない・・・魔道具!？」

ソラのその言葉と同時にいろいろな鎧をまとった奴等が現れる。まだこんな戦力をかくしもつていやがったか!？
だが、こいつらは機甲^{ドール}魔道人形なんかじゃないぞ!？

「ドールじゃ・・・ない?・・・核^{コア}を解析・・・完了」

「ソラ、これは何よ?」

「よくわかんないけど・・・
ホムラドリ 焰鳥!」

ソラが近くの一体を攻撃し腕に着弾。
だが、一瞬で腕が再生。

「だから、何かを媒介にしてそれをヒト型にしてる。頭の核を破壊すればたぶん消える」

そう言うとソラは銃で敵の頭を撃つ。すると、撃たれたやつは消え、代わりに例のカードが残った。

よくわかった。だが、問題がある。

「……お前が解説してる間にヤベえぐらい増えたんだが？」

無駄に広いグラウンドを埋め尽くさん勢いで敵がどんどん出現している。

「……学校中にいるね。……てか、シユウ達が危ない!? なんだあそこから動かないの!？」

「シユウ君達は体育館に避難した人達を守てるの〜!！」

「あ、そうだった!」

「そして、向こうは対抗策を知らないわけね」

「レオ! でつかくなれ!」

ソラが指示するとレオは白い翼の生えたライオンの姿になる。
そして、ソラもボードを展開する。

「レオ、四人も乗せれる？」

「・・・がう」

「三人が限界？」

無理か。

しょうがない。オレが シャドウ・パス 影抜け を使うか。

「オレは魔法で先に行く。お前らは敵を潰しつつ体育館に来てくれ」

「了解！」「」「」

オレはすぐに シャドウ・パス 影抜け で体育館の影に移。
すぐそこで戦闘が行われていた。

「シユウ！智也！」

「リュウさん！？これは何ですか！？」

「よくわからん！だが、頭をぶっ飛ばせばそいつらはカードにな
って攻撃ができなくなる！」

「・・・そうか。 クリア・ショット 消滅の散弾 ！！」

智也がすぐさま魔法で敵の頭に向かって消滅属性の散弾を放つ。
すると、敵はカードになって、地面にぼとりと落ちる。

「私には向いていないので智也さんのサポートをしておきます。・

「私も攻撃魔法が使えたらよかったです」

まあ、シユウは魔法は使えるが魔法薬関係しかできない。樹族は全員がその特徴を持っている。だから、シユウのように格闘術まで使い旅するヤツはほとんどいない。

そして、格闘術では効率が悪いからしょうがない。

「お前はそれで十分だ。いつもは最前線で戦ってるから今回はちよつとした休憩だとも思ってる」

「そう言ってくれると幸いです」

そして、オレも魔法で敵を潰そうとしたときだった。

窓ガラスの割れる音がし、そのあと体育館の中から悲鳴が上がった。

オレは体育館の方を見る。

中がかなり騒がしい。これは中のヤツ等がパニックを起こしている？

「……上だ!」

智也の声でオレは上を見る。

「何だと!?!?! 飛行形のヤツまでいたのかよ!」

上にいたモノ、それは、とてつもなく大きなカラスのような鳥だった。それが体育館の上空に何羽もいる。

一見すると魔物のようだがそれはあり得ない。あれからは生命を感じられない。……おそらくは目の前のカードを媒介にしたドールのようなものの鳥のバージョンだろう。

「リュウさん！中の一般人をお願いします！中には田中さんもいます！」

「わかった！」

オレはすぐに体育館に飛び込む。

中に入ると、一羽の大きなカラスが一般人に襲いかかるうとして
いる。

それに対峙するように、モップを構えた田中がいる。

「絶対的な闇の力を持って彼の者を裁け！！」

ダークネス・ジャッジ
断罪の闇　！！」

オレの影から闇の鎖が放たれ、カラスを拘束する。

そして、今度はカラスの足元の影から断頭台キロチンに使われるような刃
が出現し、カラスの首を、羽を、足をと、どんどん切り刻んでいく。
そして、カラスが消え、例のカードが残る。

「田中！大丈夫だったか！？」

「・・・ちびるかと思った」

「そんだけ言えたら上等だ」

周りのヤツ等はオレがしたことについていけないようだ。
だが、そんなことを気にしている場合じゃない。

「間！後ろだ！」

「分かつてる！ 闇の刃 ！！」

無数の黒い刃が窓を突き破ってきた新たなカラスを切り刻む。

「今度はこつちだ！」

「ダイク・エッジ 闇の刃 ！！」

そうやってオレは敵を潰していく。
だが、オレは空に注意を払いすぎ、陸の方を忘れていた。

「イヤアアアアアアアアア！」

「！？あんな奴もいたのか！？」

「シユウと智也の討ち残しか！？」

いつの間にか鎧姿のヤツが中に入ってきてる。
・・・裏に回られたか！？

「ダイク 闇の・・・ツチ！」

オレは後ろからの気配に反応し、左腰の双剣を抜刀。
敵の攻撃を受け止める。

「まさか、こいつら連携をとっている！？」

たいていの機甲ドール魔道人形は連携を行える。だが、その代わりに2メートルほどの巨人のような大きさにまでしないと容量の問題でそれができなくなる。

だが、目の前にあるのは普通の人サイズ。しかも正体は小さな力
ードだ。普通ならあり得ない。

「ツ……!!」

田中がモップを片手に今にも襲われそうな生徒に向かって駆け出
す。

「やめろ！お前には無理だ！！クソツ！邪魔だ！！魔法剣！ 斬
黒！」

オレは魔法剣でカラスを真つ二つにする。
しかし、死角からまたカラスが襲ってくる。

「この野郎!!」

オレと田中は同じ言葉を叫ぶ。
敵の鎧は剣を振り上げる。

オレは間に合わない！？と思いつつもカラスを吹き飛ばし、魔
法を発動させようとする。だが、ここからでは着弾の前に田中が切
られる。

「ちくしょおおおおおおお!!」

田中が叫ぶ。それは力がないために出たものだろうか？
剣が振り下ろされる。

まるで、オレはスローモーションで行われているように感じるそ
れを、ただ、見ていることしかできなかった。

ガアアン!!

まるで、金属がぶつかったような音がする。
そして、敵の剣がくるくると回って遠くに飛んでいく。

「なんだよ、あれは!？」

そこには、無数の白銀の盾に守られる田中の姿があった。

s i d e 太郎

俺には力がない。

だから、俺は体育館の中で、一般人を落ち着かせることに勤めていた。

「イヤアアアアアアアアア!？」

突然叫び声が響く。

そこを見ると、鎧姿の奴が今にも生徒の誰かに襲いかかろうとしてたところだった。

「!?!? あんな奴もいたのか!？」

「シユウと智也の討ち残しか!？」

よくわからない。けど、敵のようだ。

「闇の……ツチ!」

間は後ろから来る敵に反応し、左腰の双剣を抜刀。
敵の攻撃を受け止める。

「まさか、こいつら連携をとっている!？」

あり得ないことが起こってるようだ。

間はカラスに精一杯だ。

だが、鎧の方はゆっくりとした動きだが確実に生徒に近づいてる。

「ツ・・・!!！」

俺は、体育館のモップを武器の代わりに今にも襲われそうな生徒に向かって駆け出す。

「やめろ！お前には無理だ！！クソツ！邪魔だ！！魔法剣！斬
黒！」

俺の死角で間が悪態をつきながら戦っている。

そして、俺は敵の鎧と生徒たちの間に立ち、モップを構える。

「この野郎!!！」

俺と間は偶然にも同じ言葉を同じタイミングで叫ぶ。

敵の鎧は剣を振り上げる。

俺はモップをがむしゃらに打ち込む。だが、敵は全くひるまない。

そして、敵は剣を頂上で止める。

最後に振り下ろし、俺を斬ろうとしているんだろう。

モップなんかで鉄の剣を受け止められるわけがない。俺の負け、

そして、死ぬ。

「ちくしょおおおおおおお!!!!！」

力が欲しい。そう思った。
剣が振り下ろされる。

だが、そこで異変が起こった。
まるで、時が止まったように周りが静止した。

「何だ!？」

『力が欲しいのか?』

俺は声のしたほうを向く。

そこには、小さな男の子がいた。小学生くらいだろうか？

「お前は誰だ?ここは？」

『力が欲しいのかと俺は聞いている』

有無を言わさない口調で言う。見た目に反して威厳の籠った声で
言ってくる。

「……欲しい」

とりあえず、正直に言ってみる。

『なら力をやる。その代わりに、俺に身を委ねろ』

ニタリと悪魔のような笑みを浮かべて言う。

……絶対アレだな。ここでハイとか言ったらダメな雰囲気だ。

「……嫌に決まってるだろ」

だぞ！？イヤ、サーセン！！すぐにやるから！！こめかみをグリグリするのはやめて！！」

泣いて謝るガキ。

なぜか罪悪感はいいてこない。

『う、うう・・・俺は幻想武器、銘はミスト。お前に力をやる。宝玉を出せ』

「宝玉？何だそれ？」

『お前のポケットに入ってる玉だ』

・・・三谷がくれたヤツか？

俺はビー玉を取り出す。

すると、ビー玉が光る。光が収まると、ビー玉はそこにはなかった。

『契約は完了した。使い方はその雑魚と戦いながら教える』

「・・・涙目で言われても威厳が無いぞ？」

『黙れ！何で俺がこんな目に・・・』

そう言うのと、ガキ・・・いや、ミスト？まあ、そいつが消える。すると、時間が動き出す。

って、今にも剣が振り下ろされそうだぞ！？

『左手を前に突き出せ！』

「え！？おっ！？」

俺は左手を前に出す。

それと同時に剣が振り下ろされる。

ガアアン！

剣が俺の目の前に展開した無数の盾によって弾かれる。

『コレが俺の力だ。魔力が少ない一般人専用の対魔法使い用の宝具だ』

頭の中に声が響くと、盾が消える。

「お前か！？」

『言っただろう。お前じゃない、俺の銘はミストだ。・・・まあいい。雑魚をブツ飛ばす。両手の平を前に出せ』

「こっつか？」

俺は言われたとおりに両手を前に出す。

すると、掌から今度は十数本の剣が出てくる。

そして、切っ先を下にして俺の周りを浮かんでいる。

「田中！頭を狙え！！」

「ミスト、聞こえたか？頭らしいぞ？」

『ふんっ！こんな雑魚、俺が一人で潰してやる！手を上に向けろ、

・・・そして、そのまま敵の多いところに投げる！サークルブレード！』

俺が右手を上に向けると、突然、剣が俺の掌に柄を向けて円状に広がる。それが、俺の手を中心に回り始め、俺は次の指示に従い、投げるモーシヨンを行う。

すると、剣は円の状態を保ったまま敵に攻撃。縦横無尽に駆け抜ける。

『この野郎！！お前等のせいだ！！』

「八つ当たりだろ！？」

『ええい！面倒だ！！』

その言葉とともに剣が消え、代わりにビー玉のような物が展開する。

『両手を前に向けろ！お前等、全員死ねや！！マジックキャノン！！』

ビー玉からビー玉に線のような物がつながり、魔法陣のようになる。

そこから超極太の光線が発射される。

ドゴオオオオオオオオオオン！！！！！！

轟音とともに後続の敵を体育館の壁と一緒に消し去った。後には体育館の壁にでかい穴が残る。

「アレは何ですか!?!」

そこにシユウと城崎さんがやってくる。

「・・・!?!」

城崎さんがなぜか俺に剣で攻撃をしてくる。
つて、オイ!?!

「ミスト!盾だ!?!」

『・・・宿主に死なれたら俺も困るな。俺の自由がなくなる』

そういうと、先ほどの盾が展開し、城崎さんの剣を阻む。

「何で!?!」

「そいつを使うな!!それは「アーティファクト魔導宝具、幻想武器『ミスト』」。
大丈夫だよ。それは田中の精神をおかしくできない」・・・どうい
うことだ?」

城崎さんが剣を引いて声のほうを向く。

そこには、この武器をくれた本人がいた。

そして、その後によく見知った人やライオンも来る。

「ソラさん!!それに皆さんも無事でしたか!」

「面倒だったわ」

「ホントに大変だったね。エリア、ありがとう」

『きゅ!』

「お疲れ様」

「がう」

「アタシも何もしてないけどね」

「ゴメン。遅れた」

三谷達がいた。

『何故お前が知っている?』

「オイ!?お前、何でここにいるんだよ?!」

俺の目の前にミニチュアの人形のようなミストがいた。

『自分の姿を投影してるだけだ。声は魔力を使ってる。お前の掌からな』

そういえば俺は掌を前に向けたままだった。

俺は掌を上に向ける。すると、ミストは俺の掌の上に浮いている。てか、今気づいた。なんか俺の掌に魔法陣みたいなのが出てる。・
・刺青みたいだ。

「まあ、最初に見つけたのはボクだし。煉さんと一緒に武器の素材を探してる途中で偶然見つけたんだ。ボクは魔力を視れるっていう特殊体質で、煉さんにあの宝玉の魔法構成を煉さんに教えたら、

君について教えてくれたんだ。もう、ホントに驚いてたよ。あの人。いや、牛頭か？」

『……てめえか？』

なんだかミストがプルプル震えている。

『てめえのせいで俺の自由が無くなったのかあああああああああ
あ！！！！！？？？？』

「いや、人の体乗っ取って自由を謳歌する君に言われたくないよ」

おい！？今、無視できない単語があつたぞ！？

「三谷！それはどういうことだ！？」

「あ、そいつね、煉さんによると、どうも人の体をパクって好き
勝手するらしい」

「うおおおおおい！？俺にそんなもん渡すなよ！！」

「いや、田中は大丈夫だから。田中はたぶん、魔法が効きにくい
体質だ」

「……魔法無力化キャンセラー体質か。なるほど、それなら大丈夫だ」

「ねえ、それ何？」

「やたらと魔法が効きにくい体質のことだ。特徴として、一般人
にのみ現れる体質だ。いや、この体質のせいで魔法を使えないと言

った方があつてるか」

間が解説してくれる。

「でも、なんでソラさんはそれがわかつたんですか？」

「いや、普通に前のオリエンテーションの時、中級の上位魔法を田中はくらつたのに生きてた。それどころか意識も少しあつた」

「・・・何が言いたいのよ？」

平地さんがイライラした声で言う。

「田中には魔力が無いんだ。だから、魔法抵抗力もほぼ皆無のはず。なのに何で中級魔法、それも上位のものをくらつて生きてるの？」

「ギャグ補正？」

「・・・インチョー、アレのどこにギャグがあつたんだよ」

「そういうことか、普通、そんな魔法を一般人がくれば死ぬからな」

「・・・あのときの俺ってやばかつたのか!？」

『むしろそのとき死んどけ』

「黙れクソガキ」

「ま、これからよろしく。戦友としてね」

三谷が、いや、ソラが俺に右手を差し出す。
俺はその右手をつかんで握手して言う。

「俺のほうからもコレからよろしく、ソラ」

20話・ORIENTAL MAGIC

side空志

「・・・いた・・・あなたが三谷君ね」

突然、後ろから声をかけられた。

そこには、間学園の制服を着た、見た感じ小学生の女の子がいた。パソコンで何かしながらボクに声をかけたのか、目はパソコンに向いている。

「・・・でも、何で小学部のほうの体育館にいないんだろう？
てか、なんで高等部の制服？」

「お、タイミングがいいな、宇佐野」

「・・・え？」

「この見た目小学生の女の子が宇佐野さん！？自力でボク等の秘密に近づいた情報屋！？ウソだ〜」

「・・・三谷空志。10月21日生まれのてんびん座。血液型はO型。家族構成は父、母、妹、祖父の五人家族。彼女いない暦〓自分の年齢。学校の成績は「なるほど！信じるよ！」・・・フツ」

全て正解。・・・なんか鼻で笑われたけど気にしない。

確かにみんなに聞いたとおりすごい情報収集能力だ。

「お前な、別に成績が最低なのは全員が知ってることだぞ？しかも坂崎と同じでビリだ」

そういえば龍造さんにやられたな。
・・・後で鉄拳制裁だ。

「で、あの話の続きを教えてください」

「・・・これ」

そう言うとボク等にパソコンの画面を見せる。
そこにはこの町の商店街とかコンビニの中が移された映像があった。

「この町の監視カメラの映像」

「・・・ハッキングですか？」

「それ以外に何があるのよ」

「・・・乙女の特特殊能力」

「いや！？そんな特殊能力ないよ！」

「・・・案外あるかもよ」

「いや、どこにー!？」

「まず、ソラ君の危機回避スキルとか」

「・・・なるほど」。

「アンジェリカさんの三谷君リーダーとか？」

「なにそれ？ボクははじ「ソラ！それよりこっち！」あ、うん
なんかリカに強引にパソコンに視線を戻させられた。
ま、確かにこっちの方が重要だしね。」

「……この映像」

そこにはボク等が対峙したときと同じ格好の五属性の魔法使いが映っていた。

どこかを歩いて移動してるみたい。

「……コレが位置」

宇佐野さんがパソコンを操作すると、今度は地図が現れる。この町の地図だ。

そして、地図には赤い点が一つ点滅している。

「要するにここにいると」

宇佐野さんはパソコンをたたみつつうなづく。

「以上がワタシの調べた情報だよ」

「……この人誰？」

さっきまで無表情というか超クールというか……そんな感じだったよね？

「お前、パソコンを前にすると人が変わるのか？」

「え？ワタシ普通だよ？」

首をかしげて疑問符を浮かべる宇佐野さん。

「……もう、コレは筋金入りの変人ね」

冬香の言葉にみんなはうなずく。

ま、敵のおおよその場所はわかった。

「じゃ、敵と直接対決と行きますか」

side???

……実験は成功だ。

だが、一部のヤツがコレに対抗している。
おそらくはあのオッドアイの少年だろう。

……不安要素は俺がじきじきに潰すか？

だが、ヤツはバケモノだ。どうすればいい？

そのとき、俺は周辺に張った結界に異変を感じた。

侵入者だ。

なんとなくだがやつらの気がする。

ついさつき多くの兵を倒したにも関わらず、もうここまで突き止めたか。

なら、迎え撃つまで。今回は用心に用心を重ねた。

不足の事態にも何とか対応できるだろう。

俺は魔法を展開させておく。

side空志

「で、ここが居場所なわけだ」

「みや」

「ここは市の体育館。」

「・・・戦いやすそうな場所を選んだもんだね。」

「そうらしいな」

リュウが答える。

ちなみにここにいるのはいつもの六人とレオ。

インチョーと田中、智也さんは体育館の警備に勤めてもらっている。

「それにしてもやけに静かね」

そういうのは冬香。

確かに冬香の言うとおりに静かだ。

「うーん・・・なんだか畏みたいだね。こっつ、そこから入んからバ〜ってさっきのカードの敵さんが出てきそっ?」

そう、スズが言った瞬間に体育館の入り口から近くの木陰からとにかくいるんなところからさっきの敵が出てきた。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

ボク等はとりあえずスズを睨んでおく。
レオも心なしにジト目だ。

「・・・テへっ」

「後で全員になんかおごれ。つか、前の分も忘れてたな」

リュウの言葉にふえ〜んとウソ泣きをするスズを無視して敵を見る。

「……無駄に数が多いな。」

「……冬香。何とかならない?」

「……どうかしら?」

冬香は適当に答える。

でも、ボクは知っている。

「……冬香、その作成者はボクだ。さっさと本気でこいつらを蹴散らして」

みんなは不思議そうな顔をしている。

冬香はその言葉を聞いて不適な笑みを浮かべる。

「いいの?全員の出番なくなるわよ」

「いいよ。それぐらい。それに敵は冬香をそんなにマークしてないだろうしね。ほとんど意味無いからね。あのカード持った敵には」

「それもそうね。魔法が聞かないし。じゃ、わたしの本当の力を見せてあげるわ。めったに見れないんだから感謝しなさい!数宝珠、起動!」

冬香は初めて数宝珠を起動させた。

いや、今までも起動はしてた。でもそれは待機状態ウェイトで、だ。完全稼動フルは今回が初めて。

みんなも驚いている。

そこにはパソコン。魔力で構成された大きなキーボードとウィンドウのような物が六つ展開され、それぞれにいろいるなことが書かれている。素人のボクにはわからない。そして、冬香はキーボードを目にも留まらない速さでたたいている。

さて、冬香は何をするのかな？

「コード 巨人ギガント！大地と氷結の巨人を展開せよ！」

パソコンの画面から0と1が並ぶ帯が幾本も地面や空中に伸びる。

「開始！」スタート

その言葉と同時に魔力が大暴れする。

帯がある地面が次第に持ち上がる。そこから土でできたずんぐりした巨大な人形が何体も現れる。

だが、それだけに終わらない。空中に伸びた帯からも水が集まり、人の形を成す。そして、それが一気に氷る。それは氷でできたクリスタルを繋いでできたような人形。

「どうよ。わたしの 大地の巨兵ガイア・ゴレム と 氷結晶の人形クリスタ・ドール は？」

みんなは口をあんぐりあけて驚いている。

「・・・冬香。そんなことができたの？」

「スゴい！」

「……一人で戦争ができるんじゃないですか？」

「もはや数の暴力だね」

「なんでオレと戦ったときはコレをしなかったんだ？」

「ケータイじゃ容量キャパが足りなかったのよ。かといってでかいの持ってくるのは逃げる敵にとっては好都合だしね」

そついうと冬香はキーボードを操作。

一斉に土と氷の人形たちが敵の人形を潰しにかかる。

……ここで戦争が起こってるみたいだね。

「さ、ここはこいつらに任せて先に行くわよ」

「……了解」

そして、中にボク等は入っていった。

先頭はボク。敵の魔力を視てその方向へ向かう。

中は電気がついてなくて暗かった。

でも、別に見えないわけじゃない。

……でも、不意打ちとかされたら嫌だなあ。

ボクはいくつかの魔法陣を展開。

「ホムラドリ
焰鳥」

炎の鳥が出現する。そして、身にまとう炎が周りを照らす。

そして、ボク等の周りをパタパタと飛び回る。

「ソラの魔法って便利だね。でも、コレって攻撃用の魔法じゃ

ないの？」

「うん．．．別にそういうわけじゃないんだけどね。コレはあくまで意思を持った魔法。攻撃以外にも防御や偵察、警戒なんかもできる」

「ほ。で、今は警戒させてるっつーわけか」

「さすがですね。他の動物タイプもそうなんですか？」

「まあ、そう。でも、魔法によって違うけどね」

ホムラドリ
焰鳥 はバランス型。

ライエン
雷燕 はスピード型。

ヤマタノオロチ
八岐雷大蛇 は戦術系攻撃型。

まあ、実は後二つほど考えてあるんだけど．．．それは機会のあるときに。

「でも、何だかわたし達よゆうだね。」

「いや、罾があるのがわかりきってるだけだからみんな開きなおってるんだよ。」

そして、ボク等はある扉の前に立つ。

扉の上にはプレートがあり、そこには『アリーナ』と書かれていた。

ボクはみんなを見る。

みんなは首を縦に来る。

よし。ラスボスとご対面だ。

「この扉を壊して」

ボクの言葉に炎の鳥たちが反応し一匹が扉をぶち破る。

扉の向こうは電気がつけられていた。そして、ボクが暴走したときに対峙したあの人がいた。

今回も黒のフード付きのローブを着ている。

「よくここがわかったな」

「御託はいい。オレ達が言うことは唯、一つ。投降しろ」

「無理だな。俺にはこの研究成果を持って帰らなくてはいけない」

「こんな似非魔法エセを？ 冗談。生命力を魔法力に変換して使用なんて使用者のリスクが高すぎる。それは、もはや邪法だね」

「……なんだと!?!」

「……そういえばリカはあん時あそこにいたから知ってたけどみんなは必死に戦ってたから知らないのか？」

「何故それを知っている!?!」

ばらしていいよね？

ボクはみんなに目で聞く。

「……いいんじゃない?」「」「」「」

「適当な返事をありがとう。ボクは月の属性の魔法使い。三谷空志」

「・・・そうか、最近噂に聞く・・・まさかお前のようなガキだったとは」

・・・なんかボクのこと知ってるっばいよ？

「まあ、アンタが何を知ってるのかわからんがこいつはチートだ。オレ等もな。だからさっさと投降しろ」

「噂なんぞ尾ひれがいくらでもつく。お前等なんか俺が潰してくれる」

その言葉と同時に相手の魔力が解放される。
ボク等も構える。

「シユウ、リカが前衛。リュウはそのサポート。スズ、冬香は後衛。ボクはとりあえず後衛二人のガード。全員、全力で勝て！」

「「「「「了解！」「」「」「」

その言葉と同時にシユウとリカが相手に高速で近づく。

「魔法剣 闇刃やみば、鞭刃べんじん！」

リュウは魔法剣を使う。

まず、短くなった剣に魔力の刃が纏いつき、それが鞭のように伸びて敵を攻撃する。

それに合わせてシユウが手甲ガントレットをはめた手で敵を掌打。リカは大鎌で敵を斬り裂こうとする。

「結！」

一言叫んだだけだった。

だが、相手はそれだけで半球状の結界を張った。

いや、周りに魔術符が舞っている。

「さすがに六対一は卑怯だろう？俺も手ごまをそろえる。」

そう言つと相手はまた、懐から五枚の魔術符を取り出す。

「我が喚びかけに応えろ！」

朱雀！玄武！白虎！青龍！麒麟！」

そういつと、魔術符を投げる。

カードが眩い光を放つ。そして、そこには赤い鳥、黒い亀、白い虎、青い龍、角の生えた馬がいた。

「コレで六対六だ」

「……そういつことか。お前、陰陽師だな？」

リュウが言う。

ボクも気づいた。

陰陽道。その中には五行と呼ばれるものがある。

木、火、土、金、水。この五つのことだ。

五行はこの順番どおり循環していると考えられている。

木から火へ、火から土へ、土から金へ、金から水へ、水から木へという具合に生成されている。つまり、敵の前回の魔法は、コレを利用したものだったわけだ。

「じゃ、どうするの？向こうも六人になっちゃったよ」

「……こうする。冬香！」

「行くわよ！」

その言葉にリカとシュウが離れる。

「ライエン 雷燕！ ホムラドリ 焰鳥！行け！」

「ファランクス コード 槍衾 氷の槍を精製！開始！発射！」

ボクと冬香も容赦はしない。

ボクは鳥達が。そして、冬香は氷の槍の弾幕。それが敵を攻撃。だが、敵は傷一つつかない。

……さて、どうしたもんか。

「終わりか？ならばこっちから行く！お前たち、行け！」

「冬香！数の暴力で行こう！」

ボクはそう言いつつ、いくつかの魔法陣を展開。

「何よそれ！？コード ギガント 巨人！大地と氷結の巨人を展開せよ！
フリート 開始！」

「ヤマタノオロチ 八岐雷大蛇！」

ボクと冬香が魔法を発動させると、氷と土の人形、八つの頭を持つ雷の大蛇が出現した。

「行け！」

もはや大戦争。

・・・いや、数ってすごいね。

「・・・オレ達の出番ねえんじゃねえの？」

「ソラ〜。がんばって〜」

「魔法薬の準備でもしておきます」

「お菓子食べていい〜？」

・・・。

お前らは緊張感持てよ。

「でも、残念なお知らせよ。敵の方が強い」

「・・・マジで？」

「わたしの方がすでに何体かやられたわ。全体の16%ね。」

やっぱり、やらないとダメか？

「・・・みんな時間を稼いで。」

「ちなみに何をするつもりだ？」

「目には目を召喚には召喚を、だよ」

ボクは魔法陣を展開する。

・・・不安だから他のも実験がてらやっておこう。

そして、ボクの目の前に三つの魔法陣を展開させる。一つはすでに完成していて、魔法陣には鳥を意匠化したものが描かれているよし、残り二つの構築開始！

「何だ！？その魔力は！？白虎！奴を殺れ！」

その言葉と同時に白虎がボクに突進してくる。

つて、速ッ！？

レオより速いかも！？

「させません！」

シユウがボクと白虎の間に入ってガードしてくれる。

助かったよ。

ボクは続けて構築。

「お前ら！全員行け！」

「一人一体！全員でソラをガードだ！」

「了解！」

リカが青龍に、そして、リュウは朱雀に、冬香は玄武に攻撃。スズは攻撃力がないからボクのそばで待機。

・・・あれ？なんか一体麒麟がこっちに向かってきてますが？一人足りない！？

「召喚！ 朱雀スザク！ 雷狐ライコ！ 風狸フウリ！」

いつにもましてヤバいほどの魔力が大暴れする。
みんなもそれを感じたのか思わずこっちを見てる。
今回はいける！ボクはそう思った。
そして、魔力がおさまる。

「・・・あれ？」

おかしい。

朱雀、鳳バージョンがいない。

そして、足元をまたもやつつかれる。

視線をどんどん降ろしていくと、そこには赤いスズメと、黄色の子キツネ。薄緑色の子タヌキがいた。

「またかよ!？」

「「「失敗したんかいつ!？」「「「「

「・・・さすがに焦ったぞ」

・・・敵にもあきれられた。

でも、なんでこうなるの!？」

こいつら愛玩にしか向かないよ!

でも、なんだか癒される気が・・・。

「って、マジでどうすんの!？」

次回に続く!

「終わるの!?!」

21話・MOON LIGHT

side空志

「……マジでどうしよう?。」

ボクは足元にすり寄ってくる小動物達を撫でながら言う。

「……お前は何がしたかったん、だつと!。」

リュウが敵の鳥の攻撃をさばきつつ聞く。

「いや、前、朱雀は途中で普通になつたんだ。だから大丈夫かなあ〜って思っただけだよ。雷燕ライエン!。」

ボクは全体に攻撃しつつ、かつ、動物たちを愛でながら応える。

「ソラ。あの時は何故か力が強かつたんでしょ?何か力が強くなる条件があるんじゃない?。」

大鎌でリカは亀を切り刻もうとしている。

「う〜ん。前の条件……何だろう?。」

射ト「「「言うのは普段と違うことをとにかくあげればいいのかよ、発シヨ射!。」」

「ですと……街中、夜、茜さんたちがいた、買い物途中……ぐらいでしょ?。」

「後、強いて言うなら目のコントロールが効かない」

……。

よし、結論が出た。

「……………全部関係ない……………」

「お前たち余裕だな！……爆！」

魔術符がこちらに放たれ、言葉と同時に爆発する。
でも、みんなはそれぞれのやり方でガードする。

「…………やはりやるしかないか……………」

そうつぶやいたのが聞こえた気がした。

その言葉を聞いてか、敵の召喚獣 いや、陰陽師だから式神
か がボク等を囲んだ。ちょうど、正五角形になるように。

「これは雰囲気的にヤバイわよ！鈴音！さつさとコレを解除しな
さい！」

「 逆の理を今ここに示せ」

冬香が言った時にはすでに詠唱をしていたようだ。

普段のフワフワした雰囲気からは考えられないほどの真剣な表情。
だが、ボクは視てしまった。

「これ、詠唱しなくてもできる！？」

「何だと！？」

「五行相成！」

五属性の魔力がボク等の周りを円を描くように流れる。

魔力が循環し、エネルギーが膨れ上がる。

ボクは構成を視てヤバいと感じ、ボクも魔術府を四枚取り出し、ボク等を囲むように投げる。

「ゲツカイ月界！」

ボクの言葉で立方体の月の結界が張られたのと向こうの魔力が襲いかかってきたのは同時だった。敵の魔力は突然ボク等に牙をむき、ボク等に向かって殺到する。

「おい、ソラ！大丈夫なのか！？」

「核爆弾を止める方が楽かも・・・」

正直、見た目は地味だが、ボクにかかる魔力の破壊エネルギーがハンパない。一瞬でも気を抜くと結界が壊れそうな気がする。実際、周りは破壊の際に散ったアリーナのフロアの木くずや、周りの壁等を破壊している。

核を潰せば終わる。けど、そんな余裕はない。

「この魔法はまだ終わらないの！？」

「無駄だよ。これはマナも使ってる。何時間までできると思うよ。さすがは日本の魔術。気の流れてヤツだね」

「鈴音さん！あなたの方は！？」

「できた！
アンチ・エリア
相殺結界　！」

ボクの結界の内側にスズの結界が張られる。
それと同時にボクの結界と敵の魔法が強制的に破壊された。

「甘い！」

敵がボク等についでくる。

だが、かなり速い！

これはシユウに匹敵する！？

スズの魔法は魔法にしか効かない！

「それは魔法にしか効かないんだろう！！」

バレてる！？

こいつ、強い！

「私が行きます！」

そう言うとシユウは素早く薬を飲む。

おそらく、肉体強化の薬だろう。

シユウの動きが格段に速くなる。

「ふん！」

「ハッ！」

二人の拳が激突する。

いや、敵は手に何らかの魔術を施している。でも、ボクはよくわ

からない。でも、一つだけわかる、敵の拳の威力がどんどん上がってる。

「シユウ！そいつなんか魔法を手に使ってる！」

「・・・五行拳ですか？」

「よくわかったな」

「これでも格闘専門なので！」

激しい拳のぶつかり合い。

ボク等はそれに見入ってしまった。

「だから、甘い。やれ！」

式神達がボク等に攻撃をしてくる。

完全にボク等は不意を突かれた。

マズい！

みんながそう思った。

でも、行動に移せない。

「ソラ！リカ！お前らだけでも回避しろ！」

無理だ。

今回はさすがに・・・。

いくらボクでも零距离に近い攻撃は避けられない。

相手の朱雀が炎を巻き起こし、青龍が木を生やして攻撃、玄武が

水を操り、白虎はこちらに突撃しようとし、麒麟は地面を割って攻撃しようとする。

避けれない。

みんなもそう思っただろう。

この状況で助かるのは少し離れたところで戦ってるシユウだけ。みんなはそう思った。

バチバチッ！

ゴウッ！

ボンッ！

突然、雷と風と炎が巻き起こった。それによって敵が吹っ飛ばされる。

「何が起きた!?!」

「ソラ・・・か!?!」

リュウがなんか驚いてる。

でも、ボクは残念ながら魔法を使ってない。

「違う!ボクじゃない!」

「でも、雷に風に炎だ・・・よく!?!」

「アンタ以外にあり・・・得ないわよ!?!」

・・・なんでみんなはボクを見て驚いてるの?

「ソラ!?!その子たちは!?!」

「少なくとも今はそうだろ。ひょっとすると月の光を浴びていることが条件なのかもしれない」

「でも、こついつときって普通は満月だよな」

「こいつは中途半端なのよ」

「でも、ソラすごい…」

「ま、とにかくだ。オレ達にも勝機が出てきた。シュウ！」

「何ですかッ!?!」

「お前はそいつの相手をしている!こっちはオレ達が片づける!」

「むしろこの方を倒しておきます!」

「小癩な!」

激しい殴り合いを続けるシュウ。

今回は薬の重ねがけはつらそうだ。

「でも、シュウなら大丈夫。じゃ、ボク等はこつちに集中しよう」

ボクは敵の式神に向き直る。

そして、素早く誰がどの式神をやればいいのか考える。

「ボクは玄武。リュウとリカは白虎。冬香は麒麟。スズと朱雀、
雷狐は青龍。レオと風狸は敵の朱雀だ」

「よし、リカ。頼むぞ」

「リュウも足引つ張らないですよ！」

「わたしは一人なわけ？楽できないじゃない！」

「スーちゃん、ライちゃんがんばろうね〜！」

雷弧と朱雀は何だかあだ名をつけられて首をかしげている。

レオと風狸はなんか上下関係ができたのかレオの態度がでかい。

「ま、全員行くぞ！」

ボク等は戦闘を開始した。

sideリカ

アタシとリュウは目の前にいるこの無駄にでかい白虎の相手だ。

この虎はやたらとスピードが速い。

だから、ソラはこの中でシュウの次に高速戦闘ができるアタシと、その援護ができる技量を持つリュウをチョイスしたのかな？

「じゃ、ソラの考えはお前のことだからわかってるよな？」

「アタシを誰だと思ってるの？ソラのカノジョ（予定）なんだから！」

その言葉と同時にアタシが白虎に突撃する。

アタシと白虎はほぼ同じスピード・・・いや、向こうの方がホントに少しだけ速い。

でも、この差は大きい。
だから、アタシはそれをカバーする。

「吸血呪 デスサイス 血濡れの大鎌 ！」

これは前にも言ったけど武具の召喚魔法じゃない。あくまで無数の衝撃波を飛ばす魔法。でも、使いやすいように魔法で自分にあつた武器を魔力で生成する。具現化マテリアライズに近いけどこれも違う。あれは本当にすごすぎる。まさにソラにぴったりの魔法だと思う。でも、ソラはあの魔法の真骨頂を知らないみたい。

っと、そんなことより目の前に集中集中。

アタシは鎌を袈裟斬りに振り、さらに返す。すると、ソラが作ってくれた大鎌、『クレセント』から衝撃波が発生し、敵を切り刻もうとする。

だが、敵は持ち前のスピードでかるうじて避ける。

「だが、甘い。オレを忘れている」

リュウが敵の影から、ぬっと現れる。

ソラに対してとどめになったあの魔法剣だと思う。

そして、リュウは敵に魔力の刃を展開した双剣で斬りつける。

だが、それも俊敏な動きで回避された。

「チツ・・・いくらなんでも速すぎる！」

「でも、リュウの攻撃は完全には回避できてないよ」

リュウは敵の胴体部分に斬りつけることに成功している。

斬りつけたところからは魔力のようなものが白い粒子となって空気に霧散して言ってる。でも、それも少しすると傷口がふさがり

元通りになった。

「あれってダメージ受けてるの？」

「……わからん。あいつみたいに核を破壊できたらいいんだがな」

「……なら、吸血呪ブラッディ・ダンス 血の舞踏！」

アタシは鎌を白虎に投げる。

もちろん、それは簡単に避けられる。

「魔法剣 影打ち」

いつの間にかリュウはまた敵の背後に。
そして、さらに続ける。

「魔法剣 影縫い！」

リュウは剣を敵の影に突き刺す。

どという原理かわからないけど敵は動けなくなったみたい。
これなら確実に当てれる！

アタシが鎌を操作し、ブーメランのように鎌が白虎に戻ってくる。

「離れて！フィナーレ 終演！」

リュウが魔法剣を解除。それと同時に思い切りバックステップを踏む。

アタシはそれに合わせて発動させる。

音のない爆発。黒い光が破裂する。

そこにはまたも尋常じゃない速さで左後ろ脚を持ってかれただけの白虎がいた。

それもすぐに再生してしまう。

・・・そう言えばクレセントって壊れないの？
すると、クレセントが手元に突然出現した。

「・・・ホントに速い。リカ、オレが拘束系の魔法を使う。それまで時間を稼げ」

「おっけー！」

アタシは白虎に突撃！

白虎もアタシに攻撃をしてくる。

強靱な爪で攻撃され、鎌がひらめく。

ここまで苦戦したのはシュウ以来かな？

・・・でも、そう言えばソラの血をこの頃飲んでなかったな。
後でもらおう。

「・・・お前の考えが手に取るようにわかるんだが・・・余裕だな」

「できたの？」

「決まってるだろ、そいつを空中に吹っ飛ばせ」

「おっけー！」

アタシは足で思いつきり白虎の腹のあたりを蹴り上げる。
ほんの少しだけ浮き上がる。やっぱり重すぎる！

「ライちゃん！スーちゃん！頑張つて〜！」

わたしは雷弧ことライちゃんと朱雀ことスーちゃんと青い龍さんと戦ってます。

つて、言つてもライちゃんとスーちゃんが主に戦ってるんだけど。

わたしはみんなと違って普通の女の子だからね

お〜！

ライちゃんは雷で戦うんだ！

すごい！ソラ君みたい！（ボクが召喚したからね）

スーちゃんも空中で青い龍さんと一生懸命戦っている。

でも、やつぱり任せきりはダメだよ。

よくわからないけど新しいのを使ってみよう！

あれ？なんでライちゃんはこつちを見てるの？なんか元気なさそうだけど大丈夫？

（・・・この子は大丈夫なのか！？） 雷狐の心の声

「ま、いつか〜。頑張ろうね！」

わたしに悪意を持つ魔を祓え！

それは鋭く、剣のように斬り裂く！

幾千の刃によって、災いを討ち消せ。

アンチ・サウザンドブレード
逆刃千本短刀 ！」

わたしの杖、『ゆぐどらしる』に魔力が収束していくのがわかる。わたしはみんなの魔法と違って早口で読むと失敗しちゃう。

だから、国語の朗読みたいにハッキリ大きく口をあけてしっかり発音しないとうまく発動してくれない。

大変だよ〜。

でも、結構長い詠唱を頑張った！偉い！わたし！

「へえ〜こんな魔法だったんだ〜」

そこにはわたしの魔力で形作られたナイフみたいなものがあつた！
これはすごい！

そして、ナイフが敵に向くと、一斉に飛び出していく。

それに気づいた青い龍さんは空に逃げる。

でも、ナイフは青い龍さんを勝手に追って行って、そのままナイフが刺さる。

ボシユ！ボシユ！ボシユボシユボシユボシユ！

そんな音を立てながらナイフが刺さる。

それに苦悶の声を上げる。

「スーちゃん！ライちゃん！今だよ！」

わたしがそう言うと炎と雷が奔る。

それに青い龍さんは直撃。

ギヤアアアアアアアアアア！！！！！！

そんな叫びをあげると青い龍さんは消えちゃった。

さっきの叫び声はまだ聞こえるような気がする。

わたしの肩にスーちゃんが降りてくる。

「……やっぱり、戦いはイヤだね」

「「……」」

つんつん。

ペロ。

スーちゃんはわたしを優しくつつき、ライちゃんがわたしの手をなめてきた。

ちよつとくすぐつたい。

「?・・・慰めてくれるの?ありがとう」

side 空志

「さて、ボクはでっかいカメさんと行きますか!」

ボクは腰の二丁の拳銃で早速撃つ。

純粋な魔力が銃から何発も放たれる。

ダンドンダンドンダンドン!!

チュンチュンチュンチュンチュン!!

跳弾か・・・やっぱり堅い。

でも、ここまでは予想通り。

だから、ここはボクが一番早くやつつけられる。

「魔法陣展開!」

ボクの右の銃、『ナハト』に黄色の紋様のようなものが出てくる。皆さんご存じ。あれですよ。

ボクは玄武の上空あたりに銃口を向けて撃つ。

銃口から黄色の弾丸が飛び出し、玄武の真上ではじける。そこには超巨大な黄色の魔法陣。

「アマイカスチ
雨雷！」

~~~~~!!!!!!

いつも思っけどホントにこれはすごい。

そこには悲鳴もあげれずにピクピクしている玄武。

でも、すぐに光の粒子になって消える。

じゃ、不安なスズの方に行くかな？

いや、結構大丈夫そうだしレオの方かな？

・・・どうしよう？

sideレオ（三人称）

そこには三匹の獣がいた。

一つは赤色の鳥、敵の朱雀。

一つは翼の生えた白い獅子、レオ。

一つは緑の大きな狸、風狸。

後者の二体が朱雀を睨み、威嚇をしている。

先にレオが動く。

まるで地面を走るかのように空を駆け上がり、俊敏な動きで敵に飛び掛る。

だが、朱雀もその大きな翼でレオを吹き飛ばそうとする。

ブワッ！！

風狸を中心に風が巻き起こり、竜巻のようになる。

その竜巻が朱雀に向かう。

気流が安定しないところで空中戦をするのは無理だ。

そこで、レオも朱雀も地面に降り立つ。

レオは地面を風のように走る。

だが、朱雀は炎の壁で進路を阻む。

「があああああああああ！！！！」

ちゅん！どおおおおおおおおおん！！！！

咆哮覇。

レオが使える遠距離攻撃。その破壊力はすさまじく、炎の壁は振り払われる。

だが、既に敵はそこにいなかった。

ゴウツ！

風が後方で巻き起こる。

レオはすぐに振り向く。

そこには、朱雀が空中から風狸に攻撃を仕掛けていたところだった。

だが、朱雀は風狸を甘く見ていた。

風狸は風を操り、自分も空中に打って出た。そして、風の刃を飛ばして攻撃する。

朱雀はおどろき、目の前のことにとらわれすぎた。

レオが朱雀の後ろを取った。

朱雀はそれに気づくが時既に遅し。

ちゅん！どおおおおおおおおおん！！！！

咆哮覇が直撃。

あまりの威力に朱雀の胸あたりが消え去る。

そして、爆発。

そこには何も残っていなかった。

side 冬香

「・・・かつたるいわ」

「ブルルルルツ・・・！」

どうも向こうもわたしと同じ意見のようね。

わたしの目の前には朱雀達をまとめる神獣と呼ばれる土をつかさどる馬のようなもの。麒麟を相手にしている。

何で神獣相手に一人なの！？

正直メンドイ。

わたしが頭の中でソラに対して文句をぶーたれてると向こうは痺れを切らしたのか攻撃してきた。

地面を前足でダンツと踏みつける。

すると、地面が盛り上がり、わたしに襲い掛かってきた。

甘すぎる。

「コード コキョウトス 氷地獄 !凍らせ、地獄を見せる!開放!ファイト」

ギンツ!!

周りが音を立てて凍る。

周りの温度が急激に下がり、吐く息が白くなっている。

わたしはキーボードに指を滑らせ、次のプログラムを展開させる。すると、地面から槍のようにとがった氷の塊が出てくる。

そこからわたしと同じぐらいの大きさの氷でできた人形が何体も出てくる。

キーボードをたたく。

人形が輪を描くように麒麟を囲む。

麒麟はこの魔法に何かを感じたのかわたしに攻撃しようとまた地面に干渉する。

でも、こっちも大地の魔法使いよ！

別のディスプレイを見て、敵の魔法に干渉する。<sup>ハック</sup>そして、発動を無効化させる。単純なものなら簡単に消せる。時間がそれなりにかかるけど。

ま、後は最期の仕上げね。

キーボードの上を指が踊るように動く。そして、『<sup>エンターキー</sup>起動鍵盤』を押す。

魔術が発動。先ほどよりも温度が急激に下がる。

人形たちの一部が一斉に魔法を放ったからだ。

それは麒麟を一瞬で氷付けにした。

さらに残りの人形達が氷で大きな槌を作り出し、それを氷付けの麒麟に思い切りたたきつける。すると、麒麟の氷は麒麟もろとも砕け散った。

「こんなもんかしらね。・・・あゝ久々に使ったから指が痛いわ」

## 22話・EVERYONE(前書き)

最終話兼エピローグです！

これで学園編も終わりです。

って、言っても次回も舞台は学園なんですけどね。

では、本編をどうぞ！！

## 22話・EVERYONE

side 樹

五行拳、それはいくつかの型からなる中国拳法の一つ。有名なものはコレでしょうか？

木行崩拳ぼっけん・・・掌打

火行炮拳ほうけん・・・アツパー

土行横拳おっけん・・・フック

金行劈拳へきけん・・・手刀

水行鑽拳さんけん・・・突き

確かこうだったと思います。

これは組み合わせに重点を置いたものであると私は勝手に認識しています。

ですが、魔法として使う・・・まるでリュウさんの魔法剣みたいですね。いくなれば魔法格闘術、でしょうか？

「ですが、私もそれなりに場数は踏んでます！」

ガントレット  
手甲、『鉄狼』ティエランで敵の攻撃をガード。

そして、そのまま腕を折る動作に移る。

だが、相手は蹴りを放つ。

私は肉体強化の薬を飲んでいますが。それなのに何故か普通の人間であるはずのこの人はそれについてこれている。

・・・やはり、この拳法に何かあるんでしょうか？

「・・・ツチ」

いきなり舌打ちをしたかと思うと、私を思い切り吹き飛ばし、距



離を開けました。

どうしたのでしょうか？

また、懐から四枚の魔術符を取り出しています。

これはまずいですね。魔法ですか。

「させません！」

すぐに腰にあるポーチから薬を取り出し飲む。  
重ねがけ完了です。

ドンッ！

普通でも残像を出せるほどのスピードです。

コレなら間に合っはず！

ですが、相手は四枚のカードを既に展開させ終わったようです。

「だが、遅い！」

「くっ！」

危険を感じ一気に後ろへ飛びます。

「四聖十字！」

魔法が発動。

私にめがけて四つの魔力が襲い掛かってきます。  
ですが、今の私なら余裕でかわせる速さです。  
私は唯一の逃げ道である上空にジャンプ。

「かかったな！」

「なっ!?!」

四つの魔力が私に向かって追いかけてきました。

さすがに空中では身動きが取れない。ピンチですかっ!?!

「核<sup>コア</sup>の解析完了!」

ダンダンダンダンッ!

四つの魔力の弾丸が敵の魔法を強制的に終了させたようですね。

「すみません。助かりました」

「ま、ボクはすぐに亀をやっつけれたしね。一番大変そうなのは冬香だと思ったけどもうすぐケリが付きそうだし。てか、やたらと寒く感じる」

「そう言われるとそうですね」

「余裕だなッ!!!」

さつきからボクとシュウは適当にくつつちゃべってるけど実際にはボクがシュウの援護をして、シュウは怒涛の拳ラッシュを繰り出してる。

「ソラさん。この方の魔法は何とかなりませんか?」

「無理かな?ボクはあそこの図書館で魔法に関することを結構調べたけど、この人はあくまで陰陽道のアレンジして作ったタイプっ

ばい。四聖獣と神獣を使ってたから風水系重視かな」

「……厄介な属性だな。それで炎の魔導師を潰したのか？」

「……そっいえば貴方はどこの国の方ですか？」

名のある魔導師の方でしょうか？

「言いつと思うのか？」

「なら、ボクからも聞くよ。それはアンタの独断？それとも国が認めたの？」

「……どうだろうな」

「なら、ボクの想像を言う。まず、兵士の錬度がとてつもなく低い。それもまるで戦いなんかしたことのない一般人のように。シユウ。あんなに錬度の低い国ってあるの？」

「ありえませんか。つまり、コレは一般人を利用して秘密裏に行われている可能性が高いんですね？」

私はソラさんの近くに帰って言います。

「ま、あくまで予想だけど。でも、もしそうなら……」

ですが、それは確信に近いでしょう。

そして、ソラさんは相手を見据えて言う。

「ボク等はアンタを絶対に許さない」

その言葉でいろいろな場所から攻撃が敵に向かいました。  
衝撃波に黒い斬撃、風に雷、炎、氷、光線、地面から土の槍。

「結！」

それだけで敵は結界を展開し、攻撃を全てガードしました。

「ツチ・・・あの詠唱速度が面倒だな」

「わたしが アンチ・ディメンジョン 相殺空間 をすればいいんじゃない？」

「それだと敵がエリア外に出たら普通に使えるからあまり意味が無いのよ」

「うん・・・ソラが血をくれたらアタシが何とかできるかも」

「いや、普通に狙われて終了だよな？」

「また六対一か・・・コレはあまり使いたくなかったんだがな」

そういうと今度は十二枚の魔術符を取り出す。

「ヤバい！スズ！ アンチ 相殺 できる！？」

「ほえ？」

「無理か！」

「どうしたんですか？」

私の疑問に答えてくれたのは敵でした。

「 十二天将陣 ！」

side 空志

ピンチだ。

まさかそんなものまで持つてるとは思わなかった。

十二天将。安部清明あへのせいめいが使っていたといわれる占術の一つ。

またボク等の周りを今度は十二の頂点を持つ星型の結界で囲まれる。

これでボク等は逃げる事ができなくなった。

「 コレはホントにヤバい！」

ボクは何とかしようとする。

ボクが何とかしなきゃ。

ボクが……。

ドカ！バシ！ゲシ！ゴン！ドス！ドン！バチ！ゴウ！ボン！サク！

「 な、何でボクがフルボッコにされるの！？」

自分の召喚獣にもやられたよ！てか、レオ！爪でサクッとかないよ！血が止まらない！！

「 お前、さっき自分が何とかするとかどうせ考えてただろう？」

「 いや、そうだけど？」

「ソラ、アタシ達もいるんだよ。・・・じゅるり」

・・・よだれで口が汚れてるよ？

「ソラさん。今回必要なのは貴方が勝つ方法じゃありませんよ」

「ホントにバカね。アンタがするのはわたし達が勝つ方法よ」

ボクが勝つ方法とみんなが勝つ方法。

「だから、ソラ君はもつとみんなを頼らなきゃ」

「そう言えばそれが原因でボクはあんなだったんだね」

そうだね。

みんなが勝つ方法か。

ボクがそう思った瞬間、何故か前よりも魔力がはつきりと見えるようになった。

まあ、今はいい。

今からはみんなで勝つ！

「ボクが魔法を解析する。アレは時間がかかりそうだからみんな、それまでボクを守って。それが済み次第ボクの言葉に従って」

「「「「「了解！」「」「」「」

核の解析！

魔力の流れを視る。

さすがにこれほどのものだ。発動には時間がかかる。解析にも。

なら、時間を稼ぐ！

・・・コレは攻撃されても周りのマナで修復されていったりするみたいだ。

でも、ボクみたいに完全にマナを操れる人はいない。

「スズは詠唱。いつでも魔法を撃てるようにして」

「わかったよ。でも、アンチ相殺か アンチ・サーベル逆刺突剣 しかできないよ？」

「それで十分。リュウ、そこを攻撃」

「あれか？」

リュウは黒い斬撃でボクが指差したあたりを攻撃。すると、マナが薄かったそこは魔力を叩き込まれて不安定になる。

「何だ！？・・・つく！！」

相手は精神を集中させ、その部分を手動で直す。だが、相手は手探り、こっちははつきりと目で見える。

「シユウ、リベンジしとく？冬香、あのあたりを弾幕。その後数秒だけ穴が開くと思う」

「もちろんですよ！」

「アタシも行く！」

「なら、行くわよ！ー！」

氷の弾幕。そして、結界が歪み、穴が開く。そこにシユウとリカは飛び込む。

二人が出ると結界が自己修復され、穴がふさがった。

「じゃ、適当にボコしといて」

そして、二人は敵に突撃。

「ツチ！出てきやがったか！」

激しい拳の応酬、そして、鎌による攻撃。

だが、二人を相手にしても敵はそれに対応する。

「・・・何かの魔法？」

「ソラ君、そんなことより解析は？」

おっと、そうだった。

核はどこだ？

ボクは引き続き魔力の流れから核を探そうとする。

でも、二人が敵の邪魔をしてくれてるおかげか魔力があまり流れていない。

それでも、やるしかない。

「ソラ、まだか？」

「もう少しでわかると思う」

あと少し。



それで終わる。

解析・・・・・・・・解析・・・・・・・・解析・・・・・・・・解析・・・・・・・・解析  
・・・・・・・・完了！

「スズ！そこに アンチ・サーベル 逆刺突剣！」

「わかったよ。 アンチ・サーベル 逆刺突剣！」

実はスズの魔法は一部しか無効化できない。つまり、こういう結界の破壊はできない。そして、結界は一部じゃなくて全部破壊しないと壊れない。でも、ボクが核、あるいは魔力が集中してるところを教えて破壊すれば結界は勝手に自壊していく。まるで柱をなくして家のように。

今回は、核が結界の外のカードになっていた。だから、ボクは結界の頂上、つまりは魔力が集中しているところを指した。

パリン！

ガラスが割れるような音を響かせて結界が壊れた。

そして、ボクはカード全部に弾丸をぶち当てて、魔法を破壊。これで完全に魔法が停止した。

「つく！？」

「リュウ！カードを打ち落として！冬香！拘束だ！」

「コード コキユートス 氷地獄！凍れ！」

「魔法剣 鞭刃！」

冬香が氷で相手の足を凍らせ、動きを制限する。  
そして、リュウは相手が出したカードのみを黒い鞭のような刃で切り裂く。

「シユウ！リカ！トドメ！」

「りょーかい！」

「もちろんです！」

ガガガッ！！

二人は微妙にタイミングをずらして攻撃。  
相手はそれに対応できなくなってきた。そして、武器を持つリカに注意が持っていられる。

「隙ありますよ」

どん！

シユウが放ったのは掌打。

五行拳・木行崩拳。

「かは！？な、何故貴様が！？」

「私も曲がりなりに格闘士です。ある程度の武術は師匠せんせいに叩き込まれています。いつもは我流ですからコレは珍しいですよ」

「……がはっ！？」



「ダメ！それは死亡フラグ！！ソラ！死んじゃダメ！起きて！！」

「親父イイイイイイイイ！！！！マジで頼む！！」

「ホントにアンタは世界一のバカよ！！！！」

「何か薬は！？・・・何でこんなものしかないんですか！？」

「ソラくううううううううん！！！！？？？」

ボクはみんなの叫び声をBGMに深い眠りについた。

（一週間後）

「何でこうなるの！？」

「お前がアホだからに決まってるだろ」

ボクにとっては二週間ぶりの学校。

アレから大変だったらしい。ボクは過労で倒れて、リュウが颯太さん呼び治療を施してくれたおかげで何とかなっただけ。ボクが倒れてからの一週間もいろいろあったけどそれはまたの機会。

ちなみにみんなからは五割り増しで家出のこととあわせて怒られた。

でも、颯太さんの属性って『治療』だったんだ・・・。通りで校医をしてるわけだ。

で、今日はなんと中間テスト！実はこの学校は二期制だったんだ

ね!

てか、またこのパターン!?前のは何!?

「新入生の実力テストに決まってるだろ」

「・・・さいですか」

「アタシもソラの看護でできてないよ〜!」

「リカちゃんドンマイ」

「いや、お前も普通に勉強してたはずなのにヤバいからな?ここは to say truth だぞ。何が on say ch olisse ! とか書いてんだよ。なんて読むんだよ!??」

「・・・え?『オン、セイ、チヨリツス?』」

「何が『チヨリツス!』だ!?舐めてんのか!?意味がわかんねえよ!!お前は木下優 菜か!??」

リュウはボク等に最後の悪あがきに付き合ってもらって、勉強を教えてもらっている。

てか、できる気がしねえ〜。

「おい、最後のテストだ。さっさと席につけ〜」

「・・・え?」

「お!三谷いたのか?残念だったな。今日は英語で終了だ。簡単に言つとテスト最終日だ」



「言うと思つてたよ!！」

「よし、三谷空志。カンニングで零点、つと」

「はあ!？何を・・・つて、何でみんなはもう既に準備ができてるの!？・・・あ、ちよつと待つて!！別にコレはそういうわけじゃないくてええええええええええええ!！！!！！!」

テスト最終日なのに何故かにぎやかな一年一組の教室。  
ま、コレがボクの日常か・・・。

「よし、お前は外にいる」

「ちよつ!？冗談じゃないの!？」

「・・・お前、いい加減にしろよ」

いや、誰かボクに平和な日常を返してください。

「ソラ君は最初からこんな日常だよ」

「・・・ソラ、ドンマイ」

はあ、とりあえず、今回は英語だけでもがんばってやるつ。  
少しでもみんなと楽しく、にぎやかな日々を過ごさせるように。

「では、試験はじめ!！」

クラスの全員がしゃべるのをやめ、シャープペンで問題の回答を書く音のみが聞こえる。

まるで、それは明日に向かって駆けていくような音だと思った。



## 22話・EVERYONE（後書き）

作 「ついに二章終了！」

隆 「……最後のほうが微妙だよな。」

空 「そうだね。とくに体育館でボクが宇佐野さんと初めて会ったあたりから。」

作 「ぶっちゃけると、僕もそう思った。」

隆 「バカかお前は！？」

作 「魔窟の戦いを書いているほうが楽しかった。」

空 「うわあ。それ言っちゃおう？」

作 「ま、過ぎたことはしょうがない！」

空 「……それを世間一般では現実逃避って言うね。」

隆 「こいつはバカの塊だからな。」

作 「とにかく次回予告だ！！」

隆 「つか、人物紹介じゃねえの？」

作 「イエス！そして、特別編も書いてみた！パロディ的な意味で！！」

空 「ダメだ！危険な臭いがする！！」

隆 「……ちなみにどんなだ？」

作 「それは……ふふっふ」

隆 「……作者がトリップしたが見捨てないでやってくれ。」

空 「何はともあれ、これからもよろしく願います。では、また次回！！」

登場人物紹介そのに!!! (前書き)

PV10万オーバー!!!

ユニーク1万オーバー!!!

この作品を読んただきありがとうございます。

また、感想、コメントでアドバイスや指摘してくださった方々もありがとうございます。これからも誠心誠意、執筆に取り組んでいきます!!!

それと、ご意見や要望、間違いの指摘も募集中です。

つたない部分があり、大変読みずらいかも知れませんがこれからもよろしく願います

## 登場人物紹介そのに!!

作 「そろそろ登場人物がいろいろ出てきたし、主役キャラもパワ  
ーアップしたZEって言う人が多いからその紹介&更新をしよう  
！」

隆 「……………また突然だな。」

空 「いや、キリがいつちやいいけど。」

リ 「ま、作者だしね。」

鈴 「実はサボリたかったんだよ。」

冬 「……………ホントにこの作者は適当ね。」

樹 「しょうがないですよ。」

作 「とにかく、まずはあんたら六人、主要キャラから！今回はR  
PG風にしてみたZE！」

### ミタニロク 三谷空志

種族……………人間

職業……………学生&魔法双銃士

ステータス(上限999)

LV26

HP(体力) . . . 2500 / 2500

MP(魔法力) . . . <sup>マナ</sup>外部魔力を使用するので特に魔力の意味はない

ATK(攻撃力) . . . 150

DEF(防御力) . . . 500

MEN(精神力) . . . 600

MAG(魔撃力) . . . 800

REG(魔防力) . . . 300

SPE(敏捷性) . . . 400

EVA(回避率) . . . 測定不能

LUK(幸運値) . . . (低すぎて) 測定不能

### パッシブスキル

月の加護LV2 . . . 属性『月』を得る。<sup>マナ</sup>外部魔力を操る。MP消費を半分にする。

創造の力LV2 . . . 新しい魔法を覚えやすくなる

天空の加護LV1 . . . 属性『天空』を得る。敏捷性+10%

魔法陣展開LV2 . . . 新しい魔法が覚えにくくなる。魔法展開速度+20%

ログの弟子LV1 . . . 魔法具を作れるようになる。魔道具使用の際、効果補正+10%

フラグゲッター(笑) LV5 . . . 最凶の運。幸運値-120%  
危機察知LV5 . . . 超能力的なナニカ。回避率+120%

### アクティブスキル

<sup>カマイタチ</sup>

鎌鼬 . . . 風の刃で攻撃

<sup>ライジン</sup>

雷迅 . . . 雷の弾丸で攻撃

<sup>シデン</sup>

紫電 . . . 雷を地面に流して攻撃

<sup>トツブウ</sup>

突風 . . . 風を発生させる

<sup>アマイカスチ</sup>

雷雨 . . . 雷を落として広範囲を攻撃

千刃嵐センジンラン . . . 竜巻状の風の刃で敵を切り刻む  
 雷閃疾空砲ライセンシツクウホウ . . . 雷を内包する風の弾丸で攻撃  
 風火車輪フウカシャリン . . . 足に魔法陣を展開し、ブーストダッシュする  
 風門フウモン . . . 風属性の転移魔法。一人につき一つ魔法陣を展開する必要がある

焰鳥ホムフラドリ . . . 無数の炎の鳥が敵を攻撃  
 雷燕ライエン . . . 無数の雷のツバメが敵を攻撃  
 八岐雷大蛇ヤマタノオロチ . . . 雷の大蛇で敵を攻撃  
 裂空衝破レックウシヨウハ . . . 空色の槍で攻撃。着弾した瞬間に嵐でトドメを

さす

朱雀スザク . . . 炎の鳳、朱雀を召喚する  
 月詠ツクヨミ . . . 相手の属性や魔力、マナが視えるようになる  
 月守ツキモリ . . . マナの盾を展開する  
 月界ツキカイ . . . 魔術符を使って結界を展開する。  
 月夜ツキヨ . . . 月の真言、具現化マテリアライズを発動する。魔力に直接攻撃できる

魔道具作成 . . . 魔道具を作る

元はごく普通の学生。平和が一番というのほほんとした性格で、クラスに一人はいるパシられとかイジられるなキャラ。そのためか異様に自分の危機や厄介ごとに関してはそのれを完全回避する、もはや超能力としか言いようのないスキルを持つ。

最近、リカのアタックによりリカのファンクラブの方々にリンチされそうになっている。悩みはリカのヤンデレ。

## レオ

種族・・・有翼獅子

職業・・・ソラの相棒&マスコット

ステータス(上限999)

LV5 (LV30)

HP(体力)・・・500/500(3000/3000)

MP(魔法力)・・・70(2200/2200)

ATK(攻撃力)・・・50(400)

DEF(防御力)・・・30(370)

MEN(精神力)・・・100(500)

MAG(魔撃力)・・・0(700)

REG(魔防力)・・・0(300)

SPE(敏捷性)・・・200(600)

EVA(回避率)・・・90(450)

LUK(幸運値)・・・100(100)

## パッシブスキル

実はらいおんLV2・・・子猫からライオンに変身できる。全能力値が( )のものになる。また、ライオンの時、スキル咆哮覇を使える。

ソラの相棒LV4・・・ソラに懐く。ソラがいるとき全能力値+20%

## アクティブスキル

イタズラ・・・子猫のときのみ。いろいろなものに興味を示す。

咆哮覇・・・ライオンの時のみ。全てをなぎ払う光線で敵を攻撃。

ハザマリユウスケ

## 間隆介

種族・・・ドラゴン

職業・・・学生&双剣魔法戦士

ステータス(上限999)

LV53

HP(体力)・・・5000/5000

MP(魔法力)・・・6000/6000

ATK(攻撃力)・・・400

DEF(防御力)・・・300

MEN(精神力)・・・300

MAG(魔撃力)・・・500

REG(魔防力)・・・800

SPE(敏捷性)・・・500

EVA(回避率)・・・350

LUK(幸運値)・・・400

パッシブスキル

闇の加護LV4・・・属性『闇』を得る。攻撃力+50%新しい魔法が覚えにくい

竜の血族LV5・・・全属性の魔法抵抗+30%

魔王の孫LV5・・・魔王を見かけると問答無用でボコる。魔王戦うとき全能力値+30%

丸投げLV5・・・三谷空志がいるとき、全能力値+5%、空志の

幸運値-20%

魔法剣LV2・・・特殊詠唱法、『魔法剣』を習得。攻撃力+20

%魔撃力+30%

## アクティブスキル

- 闇の刃ダーク・エッジ . . . 黒い闇の刃で攻撃
- 闇の侵食ダーク・イロージョン . . . 闇で相手の魔法を侵食して無効化する
- 影抜けシャドウ・パス . . . 闇属性の転移魔法。影から影に移動
- 鎖の闇輪舞チェイン・ダークネスロンド . . . 対象の足元の影から鎖を出し、それで敵を拘束する
- 暗黒の刺剣ダークネス・スピア . . . 敵の足元の影から闇の細剣を出し敵を串刺しにする

## にする

- 終焉の黒エンデ・オブ・ブラック . . . 闇の真言。闇を召喚し、敵の魔力に干渉して魔力を喰らい尽くす。

## 魔法剣

闇刃やみば

- . . . 自分の剣に魔力の刃を展開する

## 魔法剣

斬黒ざんこく

- . . . 闇の刃の応用。剣から魔力の斬撃を放つ

## 魔法剣

黒針くろはり

- . . . 地面に剣を突き刺し、相手の影から闇の針で

## 串刺しにする

## 魔法剣

鞭刃べんじん

- . . . 魔力の刃を鞭のようにして敵を攻撃

## 魔法剣

闇矢あんし

- . . . 自分の体に魔力を纏わせ、弾丸のごとく突撃

## する

## 魔法剣

影討ちかげうち

- . . . 影抜けシャドウ・パスの応用。相手の死角に転移して

## 攻撃

空志達と同じ学校に通う一年生。空志たちが教われる前は河野利行くわのとしゆきと名乗り隆介の祖父である市長マヨウの命令で、空志を護衛していた。とても面倒くさがりだが根はいいやつ。たまに変に壊れる。魔法に関してはかなりのエキスパート。しかし、全力を出すと暴走する恐れがあると思いつも力をセーブしている。また、詠唱がメンドイという理由で魔法剣なるものを作り出すという結構ふざけたことをする。



サカザキスズネ  
坂崎鈴音

種族・・・人間

職業・・・学生&魔法使い

ステータス(上限999)

LV18

HP(体力)・・・500/500

MP(魔法力)・・・3000/3000

ATK(攻撃力)・・・100

DEF(防御力)・・・50

MEN(精神力)・・・400

MAG(魔撃力)・・・0

REG(魔防力)・・・800

SPE(敏捷性)・・・200

EVA(回避率)・・・100

LUK(幸運値)・・・500

パッシブスキル

逆の加護LV1・・・属性『逆』を得る。魔法防御+10%

家事スキルLV5・・・主婦の必須スキル。全員のHP回復力+30%

大食いLV5・・・たくさん食べる。とにかく食べる。HP回復+40%

ごいーんぐまいっえい！LV5・・・天然。ステータス異常無効。  
ソラの精神的疲労+10%

## アクティブスキル

- リフレクション  
反射・・・自分に放たれた魔法を跳ね返す
- アンチ  
相殺・・・自分に放たれた魔法を無効化する
- アンチ・ウォール  
相殺壁・・・魔法を相殺する壁を展開
- リフレクション・エリア  
反射結界・・・魔法を反射する半球状の結界を張る
- アンチ・サーベル  
逆刺突剣・・・敵の魔法を無効化する

料理・・・みんなに美味しい料理を作る

ソラ達と同じ学校に通う一年生。実は結構モテる。隠れファン的な人が多く、学校内に非公認ファンクラブがある。本人は気づいていない。

実は家事が結構得意。料理は自分がたくさん食べるために覚えたためか調理速度がとてつもなく速い。かなりの天然もあわせもっている。

魔法使いに対しては切り札となる『逆』の属性を持つ。  
ぶっちゃけ、どこぞの学園都市の無能力者？

アンジェリカ・シエルス

種族・・・ヴァンパイア吸血鬼

職業・・・学生&鎌使い

ステータス（上限999）

LV44

HP（体力）・・・8000/8000

|           |             |
|-----------|-------------|
| MP (魔法力)  | 2000 / 2000 |
| ATK (攻撃力) | 700         |
| DEF (防御力) | 550         |
| MEN (精神力) | 350         |
| MAG (魔撃力) | 300         |
| REG (魔防力) | 900         |
| SPE (敏捷性) | 700         |
| EVA (回避率) | 400         |
| LUK (幸運値) | 350         |

パッシブスキル

吸血鬼の力LV4・・・『ヴァンパイア・スベル吸血呪』を得る。全能力値+35%  
 始祖の血統LV3・・・吸血鬼の弱点がほぼ無くなる。ステータス異常無効

恋する乙女LV5・・・最強の力(笑)。ソラといるとき全能力+50%いないと-80%  
 ヤンデレ(笑)LV5・・・全能力値が測定不能になり、周りの人は恐怖で体が動かなくなる。ソラの幸運値-100%

アクティブスキル

吸血呪 デスサイス 血濡れの大鎌・・・大鎌を召喚し衝撃波を飛ばす  
 吸血呪 ブラッディ・ダンス 血の舞踏・・・大鎌を投げ操作して敵を攻撃  
フィナーレ 終演・・・大鎌の魔力を爆発させ、敵を消し去る。  
ムゲン 吸血呪 夢幻ノ魔眼 マガン・・・目で睨み敵をステータス異常にする

アタック・・・ソラに突撃！

実は始祖の血統。そのためかほぼ弱点なし。チート。薄めの赤い目に長い白髪が特徴的な女の子。

自分が吸血鬼であるために迫害を受け、人間不信になりそうだった。しかし、争いを好まずただ逃げてただけだった。ソラ達が人間の町に行ったときに襲われていたトコを助け、現在は人間不信が治りつつある。ソラが町で助けたときフラグを立てソラにゾッコン。趣味はソラを吸血。ソラと添い寝。ソラと腕を組む等々。

平地冬香  
ヒラチトウカ

種族・・・人間

職業・・・学生&数法術士

ステータス（上限999）

LV34

HP（体力）・・・700/700

MP（魔法力）・・・2500/2500

ATK（攻撃力）・・・200

DEF（防御力）・・・150

MEN（精神力）・・・600

MAG（魔撃力）・・・750

REG（魔防力）・・・700

SPE（敏捷性）・・・100

EVA（回避率）・・・120

LUK（幸運値）・・・300

パッシブスキル

氷の加護LV4・・・属性『氷』を得る。魔法展開速度+10%

大地の加護LV4・・・属性『大地』を得る。防御力+20%

数法術LV5・・・デバイス魔術機器を装備しているとき魔撃力+20%  
数字ヲタLV5・・・数字が大好き。精神力+30%  
事件!?LV5・・・事件発生に敏感になる。ソラの幸運値-30%

### アクティブスキル

アイス・ランス氷の槍・・・氷の槍で攻撃  
アイス・バインド大地の妨害・・・対象の足を地面に飲み込んで自由を奪う  
ブリザード凍てつく風・・・凍えるように冷たい風で敵を氷らせる  
アイシクル・ファンゲ氷結の凍牙・・・氷の牙を雪崩のように殺到させて攻撃  
フロースン・カスケード凍水の瀑布・・・冷たい冷水の激流で敵を攻撃  
フレランクスコード 槍袂・・・魔法の槍の弾幕  
ギガントコード 巨人・・・自立稼動する魔法の巨人で攻撃  
コキョトスコード 氷地獄・・・戦場を氷原に変え、敵を氷付けにする  
シヨット発射・・・数法術を発動させる起動言語キワード

もともとはリカを狙ってやってきた敵。なぜか魔窟につれていて妙になじんでしまった。

何気に多重属性持ちで数法術をマスターしている凄腕の魔法使い。  
シヨートカットの眼鏡で見た目は凛々しい委員長のような雰囲気を持つが、ざつくばらんで適当。「事件のにおい!？」とっては修羅場を見に行く野次馬根性の持ち主。

リー・シユウ  
李樹

種族・・・樹族

職業・・・学生&薬剤師&格闘士

ステータス(上限999)

LV72

HP(体力)・・・100000/100000

MP(魔法力)・・・3000/3000

ATK(攻撃力)・・・9000

DEF(防御力)・・・9000

MEN(精神力)・・・2500

MAG(魔撃力)・・・0

REG(魔防力)・・・3000

SPE(敏捷性)・・・9000

EVA(回避率)・・・8500

LUK(幸運値)・・・6000

パッシブスキル

樹族の知識LV5・・・『木』の属性を得る。しかし、魔法を覚えられない

薬剤師LV3・・・薬を作れる。薬を使用すると効果+50%

格闘士LV4・・・己の拳で道を拓く。攻撃力、防御力+70%

丁寧な物言いLV5・・・唯一の常識人?精神力+10%

ノリよさLV5・・・リュウ達といるときソラに厄介事を押し付ける。回避率+10%ソラの幸運値-30%

アクティブスキル

魔法薬作成・・・魔法薬を作る

冬香と同じで元敵。なぜか魔窟になじんで仲間になった。髪が長めのため、後ろで結んでいる。爽やかスマイルな好青年風の男子。

樹族という木の精霊と人の間に生まれた珍しい種族で、魔法薬の



作 「ぎゃあああああああ!?!」

隆 「ま、あいつらはほっとしておこづ。」

鈴 「もう、今回はここで次回予告になってるよ。」

冬 「そうなの?じゃ、次回予告よ。」

樹 「え〜つと……次回もコレの続きですね。」

隆 「準主役のキャラか?」

鈴 「じゃ、龍造さんとか優子さんとか颯太さん?」

冬 「そうみたいよ。じゃ、また次回。」



## 登場人物紹介そのさん！！

作 「と、言うわけで今回は『登場人物紹介そのさん！！』。」

龍造 「今回はわし等か？」

颯太 「そのようですね。」

優子 「どんな風に紹介してくれるのかしら？」

作 「……さりげなく、僕に死亡フラグが立ちましたよ!？」

茜 「あれ？あたし達も紹介してくれるらしいよ？」

太郎 「ホントか!？ついに俺のモブ返上か！」

美未 「やった〜ほとんど出てないのに紹介してくれるって〜」

ガント 「俺もいいのか？だが、作者、俺は少なくとも今は原土元  
太だ。」

智也 「……俺もか？」

作 「ま、今回は主役みたいなステータスはなしにするだけだね。  
若干一名ほどステータスが測定不能だらけになる人がいるからね。  
優子さんとか優子さんとか優子さんとか……ま、紹介と行き  
ましよう!〜!とりあえず、学生から。」

タコアカネ  
多胡茜

種族・・・人間  
職業・・・学生&魔術<sup>カード</sup>符使い  
特技・・・多くの人と仲良くなる  
属性・・・水  
称号・・・アンタがいいんちよ

間学園、一年一組の生徒で委員長。

一年生の合宿オリエンテーションのときに魔法を使う生徒と遭遇し、そこをソラ達に助けられて、学園の秘密等々を知る。

正義感が強く、さらにはカリスマもそれなりにあり。でも、結構バカ。やっぱり、世の中そうそう完璧超人はいない。

魔法はソラの作った魔術<sup>カード</sup>符の補助を受けて行使。人工精霊の『エリア』はよきパートナー。

タナカタロウ  
田中太郎

種族・・・人間  
職業・・・学生  
特技・・・特になし  
属性・・・なし  
称号・・・モブの中のモブ！

間学園一年一組の生徒。以前、ソラと同じクラスだった。

モブなのになぜか準主役みたいな扱いになってるモブ。  
茜と同じく、魔法で襲われたところをソラ達に助けられてこっち  
の世界に踏み込んだ。

リカのファンクラブに入ってるバカ。そのためリカとの距離が離  
れた。ドンマイ。

魔法が効きにくい特殊体質、『キャンセラー魔法無効化体質』で、『アーティファクト魔導宝具、  
幻想武器『ミスト』』を使用する。

ウサノミミ  
宇佐野美未

種族・・・人間

職業・・・学生&情報屋

特技・・・情報収集

属性・・・なし

称号・・・情報屋さん!!

間学園一年一組の生徒。そして、学園一の情報屋。

普段の言動がものすごくバカ丸出したが、自力で学園の秘密にた  
どり着くなど実はとても賢い。「ワタシに知らないことはないのだ  
」とふざけているがその言葉にウソがないほど多くのことを知  
っている。敵に回すと一番怖いタイプの人。

パソコンを使用していると、普段のバカキャラはなりを潜め、も  
のすごいクールな性格、というかむしろ別人のようになる。

ハラドガント  
原土元太

種族・・・鬼人<sup>オーガ</sup>

職業・・・英語教師&門番？

特技・・・鉄拳制裁

属性・・・なし

称号・・・鬼の英語教師

間学園一年一組の担任。英語教師。本名はガント・バラド。

<sup>オーガ</sup>鬼人と呼ばれる種族で、魔法力がほぼないが、腕力だけなら魔物中で最強クラスを誇る。ソラ達は最初、門番をしている時に会った生徒に結構親しまれている。だが、最近、ちゃんと名前（日本名）を言ってくれないのが悩み。

ハザマリユウソウ  
間龍造

種族・・・ドラゴン

職業・・・魔王&市長&理事長

特技・・・バカ騒ぎ

属性・・・よくわかっているが結界魔法が得意？

称号・・・魔王（笑）

リュウの祖父で魔王と書いて魔窟の市長と読み、さらには間学園の理事長を務める。

基本的にアホ、ものすごくバカ、マジで間抜け。

結界魔法を得意とし、それは神をも超えるレベル？らしい。

いつもバカなことをしては身内の間家の方々にボコられている。

ハサマユウコ  
間優子

種族・・・ドラゴン

職業・・・理事長補佐

特技・・・人格チェンジ

属性・・・風

称号・・・世界最凶の大魔神

リュウの母親で理事長の補佐。

普段はとても優しく、穏やかな人、じゃなくてドラゴン。

だが、自分のマイ武器である日本刀を持つと人格が極端に変わり、ソラ達男子は訓練という名のイジメにさらされる。

真剣になると真面目になるらしいがふざけてた方がむしろ怖い。

勇者が倒すべきは魔王、間龍造ではなく、大魔神、間優子だと思う。

ハサマソウタ  
間颯太

種族・・・ドラゴン

職業・・・校医

特技・・・特になし

属性・・・治癒

称号・・・異世界の名医

リュウの父親で間学園専属の校医。

誰にでも丁寧な物腰のひ……ドラゴン。

珍しい治癒の属性を持つ。

間龍造の実の息子だが魔窟の魔王になる気はあまりないようだ。

てか、あんなに魔王じゃ、ね……。

### 城崎智也キノサキトモヤ

種族……人間

職業……図書館司書

特技……うんちく

属性……消滅

称号……歩く生き字引

元は魔窟に襲撃をかけてきた炎の帝国、バグニールの将軍。

龍造が解雇クビにされたところを拾ったらしい。

普段からぶっきらぼうな物言い、いつも不機嫌そう。しかし、かなり珍しい『消滅』属性の持ち主で、その特性上、いろいろなことを知っている。

得意な魔法が自分の武器などに魔法を纏わせる魔装系。

アリア・フォルス

種族……エルフ

職業・・・服屋  
特技・・・トラブルメーカー  
属性・・・水  
称号・・・厄介事の塊

魔窟で服屋を営むエルフのおねーさん。

面白そうなのに目がなく、いつもそこら辺を散歩して事件や修羅場を探している。

人をいじることに人生をかけてる感じ。・・・そこまですな  
くてもいいと思う。

また、自分の作った服を実験するために他人をモルモット実験台にする  
つもなくハタ迷惑な人。

ログ・ラギス

種族・・・ドワーフ

職業・・・魔道具職人&魔道具屋

特技・・・魔道具作成

属性・・・大地

称号・・・魔道具バカ

魔窟で魔道具店を経営する仏頂面なドワーフのおっさん。

とにかく魔道具を作ることが大好き。

魔道具に関しては見境がなく、ソラが目の前で冬香のデハイス魔術機器を  
修理したのを見て強引に自分の弟子にした。

ダイチレン  
大地煉

種族・・・牛頭

職業・・・武器職人&武器屋

特技・・・材料採掘

属性・・・炎

称号・・・ログさんの知り合い

魔窟の山岳区で武器屋を経営する牛頭のお兄さん。  
のんびりとした感じなので、ログさんと交流を持つ。  
ソラがみんなの武器を作るときにいろいろと手伝ってくれた。

ミタニハヤト  
三谷隼人

種族・・・人間

職業・・・元勇者

特技・・・龍造をボコる！！

属性・・・？

称号・・・俺が勇者だ！！

ソラの祖父で魔窟の魔王の討伐依頼を受けた元勇者。  
まだまだ、謎が多い人物。だが、龍造とは拳で語り合うレベルの  
仲のよさ。



作 「こんなもんかな？」

龍 「……………わしのこれはなんじゃ？」

隼 「お前はそれぐらいがちょうどいい。」

龍 「なんじゃと？」

隼 「やるのか？」

優 「二人ともこんなとこまで来てやめてください。恥ずかしい。」

龍&隼 「「ぎゃあああああああ……!!??」」「

作 「やっぱり最終兵器は強いね！」

颯 「実際、強すぎます。父さん達がすでに口では言えない状況に……………」

作 「R指定的な意味で？」

颯 「ま、ありていに言つとそうですね。」

作 「……………じゃ、あんなものはほつとして次回予告だ!!」

颯 「今回も短いですね。」

作 「もうちよつと長くなると思ったんだけどね。」

颯 「そうですか……。で、次回はどうするつもりなんですか？」

作 「パロディに挑戦!!」

颯 「……………いろいろとダメな気がするんですが？」

作 「何をパロディるかはお楽しみって事で！」

颯 「変える気はないんですね。」

作 「まあね!!!!」

颯 「……………なんでこの人が作者何だろう？」

作 「ま、次回もお楽しみに。」

EX・もしもこいつらが灰かぶりの物語をしたら!?(前書き)

初のパロディです!

後悔していませんでも、反省はしてません!

できれば感想のほうをよろしくお願いします。

EX・もしもこいつらが灰かぶりの物語をしたら!?

ここはとあるお屋敷。

ここには、シンデレラというとても綺麗な女性がいました。

町に行けば十人の男が十五人振りかえるほどのビツクリな容姿です。

ですが、シンデレラの母親は幼いころに無くなり、父親が再婚した継母やその連れ子の姉たちにいじめられるという日々を送っていました。

……え? 何で父親がそのことを再婚相手に言わないかって? 相手の権力が強すぎるんですよ。……たぶん。

「シンデレラ! 掃除はすんだの!」

「……冬香、アタシの名前は「空気を読みなさい!」……すみません。」

「で、どうなの!」

「まだ、3秒ほど前に言われたばかりだからやってすらいらないよ?」

「空気を「シンデレラ!」わたしの衣装は?」……。

「え? 鈴音? 衣装って何?」

「うん。わかんない。なんかよくわからないけどこう言えて言われた。」

「ふうん。」

「だから空気を」「シンデレラ！アタシの部屋は掃除したの！？」  
「何なのよー！！！」

「……茜、冬香がどこかに走って行っちゃったけどいいの？」

「……いいんじゃない？」

「で、部屋の掃除って？」

「言えっって言われた。」

「二人とも大変だね。」

ある日、掃除をしていたシンデレラ。  
そこに継母と姉たちがやってきました。

「シンデレラ！」

「……。」

「シンデレラ！」

「……………」

「リカ！」

「ん？冬香？どうしたの？」

「……………疲れたわ。」

「じゃ、寝てきたら？」

「アンタのせいなんだけど！？」

「アタシ何かした？」

「まあ、いいわ。シンデレラ。今日はお城で舞踏会があるの。だから、あなたはここで留守番をしてなさい。」

「わかった。じゃ、いつてらっしや〜い。」

「……………わかってるの？」

そして、継母達はお城に行きました。

時刻は夜。

今頃お城では舞踏会が開かれ、継母達はダンスを踊っているところでしょ。う。

シンドレラはお城のほうを見て舞踏会とはどんなものだろうと・・・。

「……………ソラとデートしたいな。」

……………特に思っていないませんでした。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン!!」

「……………不審者?」

違います!いや、あってるけど違います!

こんなネタを言いながら人の家に現れる人は100%不審者ですが今回だけは違います!!

「……………で、何で美未がこんなところにいるの?」

「ふっふっふっふ。ワタシは魔法使いなのだ。」

「……………。」

ちよ!?

電話で110番をプッシュしちゃダメ!!

「で、何か用?」

「時に君!舞踏会に行きたくないかね!?」

「別にいい。」

「そんな即答しちゃダメ！もつとここは空気読んでよー！」  
「アンタもな。自称魔法使い。」

「というわけでこのワタシがかわいそうなシンデレラの願いを叶えてあげようー！」

「……………別にいいんだけど？」

「……………お城には三谷君もいるよ？」

「すぐに行きたいー！」

「よろしいーじゃ、コレに着替えて。」

魔法使いが取り出したのは黒いボディースーツ。  
インカムのようなもの。その他もろもろの装備。

「……………何でコレを着るの？」

「今からミッションを伝える！」

いつの間にか軍服を着ている魔法使い。

「ミッションは簡単だ！お城に潜入しパーティー会場に紛れ込む。そして、王子さ……………三谷君とダンスを踊ってくる！以上だ！侵入経路はコレ！よく読んでおけ！」

そこにはお城の見取り図。

赤い線で侵入経路が書かれてあり、細かいことが書かれている。



「では、行くぞ、スーク!!」

「.....」

ここはお城の裏門。

そこには二人の兵士がいた。

「はあ、何で俺はこんなことをしてんだ？」

「ま、がんばりましょう。田中さん。」

門番である。

こんな日もガンバってます。お疲れ様です。

「いえいえ。」

突然、二人の兵士は首筋に衝撃を感じ、次の瞬間には意識を手放した。

そして、変わりにそこにはさっきまでいなかった人物がいた。

「できたよ。」

『わかった。では、中に入れ。』

シンデレラだった。てか、シンデレラ強っ!?

ちなみに話し相手は魔法使いである。  
そして、なんやかんやして衣裳部屋のようなところに到着。

「着いたよ？」

『では、そこで適当にドレスに着替える。簡単に言つと盗む<sup>バック</sup>。あ、バックバックの中にあるガラス製の靴も履いてね。』

「わかった。」

（着替え中）

「終わったよ。」

『では、コレにてミッションはクリア！後は王子を……三谷君と踊ればおっけ』

「わかった。じゃ、行ってくる。」

『あ、それと十二時までには帰ってきてね。』

「何で？」

『そうしないと逃走経路が無くなる。とにかく、十二時になったら帰ってきてね。』

「よくわからないけど、わかった。」

『じゃ、がんばってね』

シンデレラは舞踏会の開かれている会場に向かった。

会場。

ここにはドレスで着飾った人たちがたくさんいた。そして、中央にはイケメンな人がいました。

「メンドイ。」

「リュ、じゃ無くて王子様。そんなこと言ってるから誰も踊りに誘ってくれないんだよ。」

そこにはぐうたらな王子とその従者でした。

「別に踊りたくねえし。」

「…………ハア、後で優子さんに言っよ?。」

「マジで踊りたい!さあ、そこのお嬢さん!オレと踊りませんか!??」

「ほえ?わたし?いいよ。」

そこには両腕に抱えきれないほどの量の料理を抱えた姉？（鈴）がいた。

「「「ちよい待てや!」「」」

近くにいた継母と姉？（茜）、従者が突っ込む。

「シンデレラだよアンタの相手は!」

「そうよ!アンタバカなの!」

「空気を読みなさい!」

「「アンタもだよ!」「」

そこにシンデレラが通りかかる。

「あ、ソラ!」

「あ、シンデレラ。いいところiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

従者はシンデレラにタックルされた。  
てか、押し倒されました。

「ソラ!踊ろ!」

「「「三谷iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」「」」

「「「でも!」」」



「シンデレラ、時間よ。さっさと帰りなさい。」

「え〜。さつきから冬香は命令ばっかじゃん！アタシはソラと踊りたかったのに！..」

「.....一日ソラを自由にしていいわ。」

「帰ります！ソッコで帰ります！..」

「って、ガラスの靴！！片方だけ落としていきなさい！！..」

だが、既にシンデレラの姿はない。

「.....ピンチね。」

舞踏会の翌日。

「あ.....眠い。」

「いや、そろそろシンデレラを探しに行くつよ。」

「.....どうでもいいことかも知れんが、ソラ。その格好はどうした？ボロボロだぞ？」

「まあ.....うん、いろいろあったんだよ。そんなことよりさっさとガラスの靴を持ってシンデレラを探しに行くよ。」

「あ？靴なんかねえぞ。」

「いや、何を言ってるの。片方だけのガラスの靴があるでしょ。」

「いや、マジでない。」

「……マジ？」

「マジ。」

「コレからどつすんの！？」

「……ガラスの靴を持つてるやつを探せばいいんじゃない？」

「……それしかないね。ま、とにかく行くっ。」

「ハア………かつたりー。」

城下。

シンデレラの家。

「王子様が来るそうよ。」

「ふん。」

「二人とも！ちゃんとやってよ！」

「…………お腹すいた。」

「…………ソラとデート行きたい。」

「…………おかーさま、この二人をシメ上げてもよろしくて?」

「わたしも手伝うわ。」

「すみませんでしたー!」

「でも、平地さん。靴がここにあるのにとっするの?」

「ここではお母様と呼びなさい。とにかく、こっそりソラにでも渡せば何とかなるわよ。」

「なるほど。それであのシーンに持って行って、ハッピーエンド。」

「そういってね。」

何だか策略めいたハッピーエンドですね。

「で、ここにきたわけだ。」

王子様御一行はシンデレラの住む家の近くに到着。



「でも、ホントにガラスの靴無しでどうすんの?」

そこへ継母がささーっとさりげなくソラにガラスの靴の片方を渡す。

「ナイスだ!ありがとう!」

「後でなんかおごんなさい。」

「了解。」

「では、ここにこの靴のサイズとあう人はいませんか?」

「はいはい!わたしそれ履いてみたい!」

まずは姉?(鈴)が挑戦。

どうやらサイズは合わないようですね。

「では、次の方は?」

そして、継母と姉?(茜)も履いてみるがサイズは合わない。

「他にはいませんか?」

そこに鼻歌を歌いながら買い物帰りのシンデレラが通りかかる。つて、何で面白い物してんの!?こんなあつたっけ!?  
そして、シンデレラは何かに気づき、ふとこちらを見る。

「ソラだ〜!」

「あ、シンデレラ。この靴をおおおおおおおお！？」

またまた従者はシンデレラにタックルをかまされ、押し倒されま  
した。

殺気が上昇。

「シ、シンデレラ。とりあえず、靴を……。」

「履けばいいの？」

「そうそう。」

「わかった。」

そして、シンデレラが靴を履く。なんと、それはシンデレラのため  
に作られたかのようにぴったりとサイズが合った。

「……………」

「……………リュウ、セリフ。」

「あ、ああ……………お前があのとときの者であったか。オレ  
はお前を探していた。よければオレと一緒に城に来てくれないか  
。」

「最低ね。棒読みよ。じゃ、シンデレラ空気を読みなさい。」

「……………ちも無理。」

「リカ!? 何で!?!」

「だって、ソラがいい。」

「」「三谷iiiiiiiiiiiiiiii!?!?!?!?!」

「もういやあああああああ!?!?!?!?!」

そこにはテロ集団のような人々が従者を追いかけていました。

「……何でソラを王子様役にしなかったの?」

「普通にキャラじゃねえからじゃねえの?」

「お腹減った。」

「三谷君も大変だね。」

「ソラ〜。待って〜。デート行い〜!」

「」「殺す!?!?!」

「助けて〜!?!?!」

そんなこんなでシンデレラは毎日楽しくにぎやかに過ごしました  
とや。

めでたしめでたし。

「めでたくないよ!?!?!」



EX・もしもこいつらが灰かぶりの物語をしたら!?(後書き)

隆 「おい、なんかやっちゃったな。」

作 「後悔している、でも反省はしていない!!」

空 「ダメだこの人。」

作 「でも、個人的にはナイスキャスティングだと思ったんだけど？」

冬 「それはわたし達にはわからないわ。」

鈴 「いっぱいおいしい物が食べれたから満足だよ。」

樹 「私と田中さんはとてもチヨイ役でしたね。」

作 「ま、今回はガチで感想が欲しいです。」

隆 「いつになく作者がマジだ!？」

空 「ホントだね!？」

作 「いや、初めての試みだったし……これで終わろうかどうか悩む。」

鈴 「要するに自信がないんだね。」

作 「ゴフア!？」

冬 「……シユウ、作者が吐血したわ。」

樹 「どうぞ。薬です。」

作 「……地球をも砕く一撃だった。」

空 「ドンだけすごいんだよ!？」

作 「とにかく!軽い気持ちでいいので感想をお願いします。というわけで次回予告!!」

隆 「あ……次も学園だな。」

作 「そう!でも、一応章は変えるけどね。さて、次はいつたいどうなる!？」

冬 「ものすごくトラブル臭がするわね。」

樹 「そうですね。主にソラさんの。」

空 「それは決定事項!？」

鈴 作 「ソラ君だからしょうがないよ。」  
「ま、次回もよろしくお願いします。」

## 1話・SCREAM

sideリカ

時刻はちょうど深夜。

アタシは基本的に夜遅くまで起きてる。

理由？吸血鬼ヴァンパイアだから！！・・・ってわけじゃない。

ただ、ソラの部屋に侵入・・・もとい、お邪魔させてもらって、寝顔を拝ませてもらったために！！そのために起きている。

さて、今日も鍵を閉めてるけどここはアタシの能力で霧になってササーっで行こう！

「あ、ああああ・・・うあああああああ！！！！？？？」

突然、誰かの悲鳴のような叫びが聞こえる。

それは、アタシの前の部屋から聞こえてきた。

「ッ!？」

アタシはまずソラの部屋に入ると、鍵を開ける。そして、別の部屋の前に来ると扉をたたく。

ダンダンダン！

「シュウ!!！」

「どっぞ、あいています」

寝起きのはずなのにいつもと変わらない口調で言う。

アタシが部屋に入ると、シュウは薬ビンをアタシに渡す。

「とりあえず、コレを飲ませてください」

「わかった！！ありがとう！！」

そういつと、アタシはすぐに走っていく。

ソラのところへ。

ソラの元へたどり着くとすぐに薬を飲ませようとする。

「ソラ、飲んで」

「みゃあ……」

レオも心配そうに鳴いている。

「あ、ああ……ぐ、め、ん」

「わかったから、今はコレを飲んで」

「いや……だ、みんな！……傷！……ッ！？」

焦点のあつてない目で虚空を見るソラ。

「……しょうがないですね。リカさん。ソラさんに無理やりでも飲ませてください」

ついてきてくれたのかシュウが扉のところ立っていた。

「……うん」



アタシはシユウが渡してくれた急須のようなものでソラに薬をゆつくりと飲ませる。

全部飲ませると、数分ほどでソラは次第に落ち着き、安らかな寝息を立て始めた。

さっきのは精神安定剤の魔法薬。

それを使わなきゃダメなぐらいにソラは精神的にまいってる。

「……………どうだ？」

「リュウさんですか」

いつの間にかリュウもいた。

「もう、大丈夫。アタシが見てる。だから二人は休んで」

「……………そうか」

アタシがそういうと二人は部屋に戻っていった。

……………ホントに何でこんなことになったんだろう？

ただ、ソラはアタシ達を傷つけないと思っただけなのに。

……………もう、今日で一週間。ソラがこんな風になってしまったか

ら。

（一週間ほど前）

「親父！…ここだ！早くしろよ！…！」

「大丈夫！僕がなんとかする」

いきなりソラが倒れた。顔色も青白く、だいぶ悪い。

ソラは一週間ほど、つまり、行方不明の間、飲まず食わず、さらには寝ないという人間の限界を超えたことをしてみたい。

リュウの報告を受けてリュウの父である颯太さんが来た。

颯太さんはアタシに抱きかかえられた状態のソラに魔法を使いました。

「チェックアップ  
診察」

「大丈夫・・・？」

「大丈夫だ。親父は数少ない『治癒』の属性。そこらのヤツより  
確実だ」

「本当でしょうね！」

みんなも不安を隠せないようだ。

「・・・過度の疲労、ですね。ソラ君はおそらく何も口せず、さらには寝ていない。そこで、敵と戦った・・・最悪ですね」

「ソラは！？どうなるの!？」

「・・・魔法を使いましょう。セラヒ  
癒」

ソラが柔らかな優しい光に包まれる。

颯太さんも精神を集中させて治癒に専念している。

「……コレでひとまず大丈夫」

颯太さんがそういうと光が収まる。

そこには幾分顔色がよくなったように見えるソラ。

「……よかった」

アタシは心のそこから安心した。

「ですが、コレは応急措置です。シュウ君」

「はい」

「薬を頼みます……」

颯太さんはシュウに薬の調合を頼んでいるみたい。

でも、ホントによかった。

そして、アタシ達は寮へと帰った。

そして、二日後、ソラは目を覚ます。

そこでみんなはソラにバカバカ言いながらやっと全員がそろったことに安堵した。

夜が来るまで。

「……ふふふふ」

「リカ、お前何をしてるんだ？」

「はう！？」

アタシはソラの部屋の前にいて、いつものように布団にもぐりこもつとしていた。

そこをリュウに見つかってしまった。

「てか、どうせいつものことだろうがな」

「・・・」

事実だから言い返せない。

でも！しょうがないよね！！だって・・・その・・・好きな人と  
一つ屋根の下で暮らしてるんだよ！！

「いや、ダメだろ」

「・・・」

事実だから言い返せない。

「お願い！！今日だ」それにオレはいわばこの寮の寮長だぞ？そ  
んなものを無視できるわけが無い」・・・」

「ごもつとも。」

そして、アタシがまた口を開こうとしたけどできなかつた。

・・・ソラの悲鳴で。

ソラ！！

アタシは霧になるとソラの部屋に入る。  
そこには、目を開いた状態で叫びを上げながらベッドの上で暴れるソラがいた。

レオは突然のことに戸惑っているみたい。

「リカ！！すぐにここを開ける！！」

アタシはいわれたとおりすぐに部屋のドアを開ける。  
そこには寝ぼけ眼の鈴音と冬香もいた。

「何よ〜うつさいわよ」

「……ZZZ」

「坂崎はそんな立ったまま器用に寝るな！つか、寝るなら来<sup>く</sup>な  
！！シユウを呼んでこい！！」

「は？何でよ？」

「……！？冬香ちゃん！！ソラ君が！！」

「え……！？わかつたわ！！」

二人はソラの様子を見るとすぐにシユウのところに行く。

「あ………ああ………うああああ………。いや、だ……  
・傷……ない」

うめき声を上げるソラ。

アタシはいてもたってもいられなくなってソラの手を両手で握る。ソラはその手を痛いぐらいに握ってくる。

「ソラ！しっかりして！！」

「ソラさんは大丈夫ですか！？」

「シュウー！ソラが！！」

「コレを。精神安定剤です。魔法薬で副作用などはありません」  
それと一緒にガラスの急須のようなものを渡してくれる。  
アタシはそれを受け取るとソラにゆっくりと飲ませる。  
すると、次第に静かになり、落ち着く。  
そして、規則正しい寝息が聞こえた。

「……コレはどういうことなのよ？」

「急にこんなことになってて眠気がとんじやったよ」

「わからん。オレとリカがここで言い合いしてたら突然中からソラの悲鳴が聞こえてきた」

「……さっき、ソラが言った単語。

『いやだ』、『傷』、『ない』。

絶対にそつだ。それしか考えられない。

「ソラはまだあのことを気にしてるんだと思つ」

「……精神的なものですか」

それしか考えられない。

「では、またいつこのようになるのかわかりません。とりあえず、今夜は皆さん交代でソラさんをみましよう」

「アタシだけで大丈夫。もともと夜行性だし」

アタシは吸血鬼だから大丈夫。

「そうですか？・・・では、何かあれば呼んでください」

そして、みんなは眠りにつき、アタシは朝までソラを見ていた。

朝になると、そこにはいつものソラがいて、まるで夜のことなんかなかったみたいに思った。

でも、それは毎晩一回は必ず起こっていた。

s i d e 空志

・・・朝か。

ボクは自分に当たる日の光で目が覚めた。

今日もいい天気だ。

六月になってもまだまだ梅雨の気配は感じない。

さて、起きますか。

でも、その前にやることがある。

「・・・何でまたボクの布団に入ってるんだ!？」

ボクは赤い目で白い髪の吸血少女に突っ込んだ。

もちろんリカのことだ。レオは床で体を丸めて寝てる。

・・・でも、よく見るとリカの目って薄い赤だね。  
いや、それはどうでもいい!!  
とりあえず、ここはリカにやってもらうべきことが・・・。

「ううん。あ、ソラ？おはよ」

「じゃねえええええええええええ!!!!反省してよ!!!!」

いい加減にして欲しい!

二週間ぐらいずっとこの調子だ!

いや、ボクも健全な男子だよ!?

ホントにコレはいろいろと倫理とか道徳とか校則とかボクの命あたりでもものすごくまずいよ!?

「反省はしてない。でも、後悔もしてない」

「それって最悪だよね!」

「でも、今更だよね」

「・・・とにかくダメ。着替えるから出てって」

「え〜」よ。よし、じゃ、外に行つて「・・・ケチ」

そういうとリカは部屋から出て行った。その後ろにレオもついていく。

はあ、制服に着替えよう。

今日も放課後は補習だ。



side 隆介

「……」

「もうすぐゴハンだから新聞はダメだよ。子供がマネしちゃうよ?」

「……どこに子供がいるん……お前か」

「リュウ君はゴハン抜「ハハハハハ。冗談二決マツテルダロ?」  
……ま、今日は勘弁してあげるよ」

そういうと坂崎は食卓に朝メシを並べていく。  
……いつもみたいにくまそうだな。

「おはよ」

「リカか……ソラはどうだ?」

「やっぱり自分が夜にうなされていること知らないみたい」

「……そうか。親父もどうしようもないらしいしな」

そして、ソラがきた。

「おはよ……ん?みんなそんな難しい顔してどうしたの?」

「いや、なんでもない。ソラ、他のヤツらも呼んで来てくれ」

「別にいいけど?」

そういつとソラはシュウと冬香を呼びに行った。  
オレ達はしばらく無言になる。

「……コレばかりはオレ達にはどうしようもねえのか？」

「ソラ君に言っても絶対にそんなことはないっていつもね」

「……」

オレ達は無力だと思った。

side空志

「……」

なんだろう。最近、みんなが暗い気がする。レオまでもこのころはリカのほうと一緒にいる。

理由はわからない。

でも、ボク以外は全員知ってるようだ。

……なんだろう？

「ソラさん？こんなところで何をしてるんですか？」

あ。考え事をしてたらしいの間にかシュウの部屋の前にいた。  
シュウは部屋から出てくるところだった。

「いや、ちょっと考え事を。それと、朝ごはんだって」

「そうですね。わざわざありがとうございます」

「いや、それぐらい。あ、冬香も起こすから先に行つてて」

そういつとボクは冬香の部屋に。  
扉の前に立つとボクはノックする。

トントン。

「冬香〜。朝ごはんだよ〜。起きないとみんなに食べられるよ〜」

……。

返事が無い。まるでタダの屍のようだ。

ここは必殺技だ。

「今から冬香の部屋に入って寝顔の写真を撮って、それを冬香のファンクラブに売るよ?」

ドタン、バタン!

……ガチャ。

「おはよう。今日もいい天気だね」

出てきたのは髪の毛ボサボサの普段のような凜々しさがかけらもない少女。

「……いつかアンタを殺すわ」

「夜遅くまで機械をいじってるのが悪い。じゃ、早く降りてきてね」

そういつとボクはリビングに行く。

そこには冬香を除くみんなが六人がけのテーブルの席についていた。

ボクも自分の席につく。

どこかって？ボクは一番隅で隣はリカ。目の前にリュウ。そして斜め前にはシュウで、そのシュウの隣がスズ、スズは一番台所に近い位置だ。そして、残った席に冬香。

「……おはよう」

「お前、その朝なんか消える的な雰囲気の挨拶はどうにかならないのか？」

「しょうがないじゃない。そう思ってるんだから」

「……アタシより吸血鬼らしいよ？」

「じゃ、みんなもそろったし……イタダキマス！」

「……いただきます」「……」

そういうとボク等はゴハンを食べ始めた。

「つて、もう、お前はお代わりかよ！？太るぞ」

「大丈夫だよー！」

「……うん。いつもと同じだ。」

じゃ、何でボクは違和感を感じたんだろう？

「……ソラ？どうかした？」

「いや、何でもないよ」

「ふうん。じゃ、ソラ。あ〜ん」

「何だこのギャルゲ的展開!？」

「・・・食べてくれないの？」

「・・・ちくしょう!!」

アリアさんが上目遣いなんてものを教えるから!!  
見てよ!リユウたちがお前、サイテーって目で見てくるよ!!

「・・・ゴメン」

「そんな・・・」

リカがもはや涙目だ。

てかやめて!!

みんなそんな目で見ないで!!

ボクはこの重圧に絶えるほどの精神力は残念ながらもっていない。  
おとなしく口をあける。

とたんにリカの顔が明るくなる。

・・・全員ニヤニヤするな。  
後で全員シバく!!

「はい!」

口に食べ物を入れられる。

カシヤ！

・・・嫌な予感だね。

ボクは音のしたほうを向くと、そこにはケータイを構えた冬香の姿。

「後で宇佐野さんに売るわ」

「殺す気か！？」

「ええ、そうよ？」

即答された！？

「まさかマジですとは思わなかった」

「どの口で言うー！？」

「ですがコレではホントにタダのバカカップルですよ」

「ひゅーひゅー。見せ付けてくれますね」

「・・・リカ。何とかして」

「え？・・・ありがとう？」

「どこに礼を言うところがあったの！？」

ギヤーギヤー騒ぐいつものおりの朝。

でも、何かがおかしい。  
ボクはそう思った。





「おるわい。」

「あれ？颯太さん？珍しいですね」

「まあね。今日は父さんに呼ばれて……ソラ君はもう大丈夫かい？」

「はい。それに一週間も前のことですよ？」

「……そうだね」

ソラはそう言うが周りのリュウ達は暗い顔をしておる。  
……どつやら変わりが無いようじゃな。  
颯太も気づいておるじゃろう。

「じゃ、今日もいつものように訓練に励むのじゃぞ？」

「ジジイ、それはオレ達に死ねということか？」

「……がんばるのじゃ」

「無理ですね」

「さあ、つべこべ言わずに今日も訓練イシメよ」

「」「嫌だ！」「」

ダダダッ！！！

ガシガシ、ドス！

「何でオレはいつも踏まれるんだよ!!」

「問答無用よ。行くわよ」

「ボクはまだ死にたくない!!」

「私もです!!」

ズルズルと訓練場に引きずられていく三人。  
ま、がんばるのじゃぞ。

わしは女の子達としゃべっとる。

「アホ理事長（ジジイ）!!」

聞こえんの

わしは男子が消えると残りのメンバーに向き直った。

「……でじゃ、ソラの様子はどうかの?」

「最悪よ」

「うん……昨日も夜中に叫んでたよ」

「アタシがシュウに薬を貰ってソラに飲ませました」

「……颯太」

「……無理です。コレはソラ君の問題です」

「「「「「」」」」」」

「わし等は無力じゃな。あの子は誰よりもわし等のために動いてくれておるのに……」

それには誰も答えられなかった。

side 空志

「……今日はコレで終了よ」

「「「「よっしやあああああああ……!……!……!」」」」

やった!

やっと終わったよ。

今日も生きられたことにボク等は肩を叩き合う。

「じゃ、今日はHRホームルームね。教室に戻りなさい」

ボク等は教室へ向かう。

「あ、リュウ君たちだ」

「ん?お前等も終わったところか?」

「そうよ。今日はHRみたいね」

「……でも、なんかあったっけ?」

「さあ?アタシはソラと一緒にならそれでいい」

「よしリカ、よく聞くんた。それを人前でいつちゃだめだ。あまりに危険すぎる。主にボクの命とか命とか命とか」

「じゃ、私たちはこちらですので。また後ほど」

「ソラ〜そんなにリカと惚気のうけてるとリカのファンクラブに殺されるわよ〜」

「ならそんなに楽しそうに言っな」

そついうとボク等は分かれる。

「でも、いつも思うんだけど、ソラ君たちって何をしてるかり力ちゃんは知ってる〜?」

「わからないけど・・・知らないほうがいいと思う」

「・・・片鱗に触れちゃったんだね」

「そういえばアレだよな。リカはリュウの家で勇者（笑）VS魔王（アホ）のへんな戦いのときに優子さんの手腕を見たんだったけ?」

「・・・隼人の爺さんが来たのか?」

「うん。まあね。てか、リュウは知ってたの?」

「決まってるだろ」

「へ〜勇者さんもやっぱりいたんだね。どんな人?」

「ボクのじいちゃん」

「え？・・・すごい！じゃ、今まで勇者の孫と魔王の孫が一緒に親友してたんだね！！」

「「親友じゃない」」

そんなくだらない会話をしていると教室に到着。休み時間で教室の中はにぎやかだ。

ガラガラ。

「今日はもう、終わったの？」

その声をかけてくれたのはインチョー。セミロングの女子。

「が〜！！うっさい！！黙れミスト！！」

あそこで頭抱えてるおかしい人間はモブの田中太郎。おそらくミストとまたケンカでもしてるんだろう。

「ね〜ミタニっち。面白い情報を見つけたのだ〜」

ミタニっちって・・・。

ボクの目の前には見た目小学生の長い髪のツインテールの宇佐野さんだ。情報屋

でも、情報ってなんだろう？

「・・・ちなみに？」

「これ」

ボイスレコーダーを取り出す宇佐野さん。

・・・非常に死亡フラグな予感。

「・・・要求はな「えい！」ちよ!？」

ボクは交渉すらできずに再生のボタンを押された。

『今日はHRみたいね』

冬香の声。

『・・・でも、なんかあつたつけ？』

ボクだ。

・・・って、じゃあ次は!!

ガシイ!

「やめろ!! 離せ!!」

「まあまあ、いいじゃねえか」

「よくないよ!!」



「……って、なんでみんなはもう座ってるの!?!さっきまでのあれは!?!」

「ケジメが大事なんだよ。そんなだから死亡フラグばっかり立てんだよ」

「ドンマイ、ソラ君」

「ソラ〜早く〜」

はあ。

ボクはため息をつきつつ席に着く。

「よし、全員席に着いたな?今日は役職を決める」

……は?

「決まってるんじゃないの?」

「お前な、一回クラスを変えてるんだよ。だからもう一回決めなおさなきゃいかんだろ?」

「え?でも、インチョー……多胡さんはクラス委員長だよな?」

「あ、あたしね、委員長は前のクラスだったの。このクラスの全員そのノリで言ってるだけだよ」

「ご丁寧にインチョー自身が言ってくれた。」



「……でも、なんで今更？」

「忘れてたんだ。がはははははは！……！」

「「「おい！？」「」」

何この教師！？

全力でダメだ！！

「それで理事長補佐に文句を言われたんだって」

だろうね。

優子さん怒らすと怖いからね。

「と、言うわけで決めてくれ。多胡」

「……確実にこのノリはあたしが委員長になるパターンですね」

そう言いつつ黒板の前に立つインチョー。

「じゃ、委員長を他薦、自薦どっちでもいいから出して」

「「「委員長」「」」

クラスの全員でハモる。

てか、インチョー以外に思い浮かばない。

「ですよ〜。じゃ、ガントさん。あたしが委員長です」

「おう。じゃ、これに必要な役職が書いてあるからな。それと俺

の名前は原土元太だ」

そう言うとガントさんは一枚の紙をインチョーに渡す。  
インチョーは黒板に綺麗な字で役職とその人数を書いていく。  
何々……。

生徒会代理（二人）、図書委員（二人）、環境委員（二人）、保険委員（二人）、が各男女一人。行事委員（四人）、情報委員（一人）、風紀委員補佐（四人）、清掃委員（残りの人）。

「あ。じゃ、決めまゝす。挙手！」

「「アンジェリカさんが保険委員がいいと思います！」」

「「坂崎さんが保険委員がいいと思います！」」

二つの派閥が相手にガンを飛ばす。  
……二つのファンクラブが激突？  
てか、こいつらって下心の塊だよな。

「で、坂崎さん、アンジェリカさんはどうなの？」

「ソラがやるなら」

「ボクを基準にしないでよ」

「だが、お前が止めないとリカが暴走したとき大変なことになるぞ？」

「……そうだね。分かった」

いろいろと心当たりが多すぎる。  
ま、今回はガンの飛ばしあいにも夢中でこっちの会話に気付かれなくてよかった。

「わたしは回復魔法が使えないよ？」

「坂崎さん、魔法を使える必要はないと思うよ？」

スズの隣の女子が優しく教える。

でも甘いよ。スズは素でボケたんだ。

一応あんな天然でも魔法使いだからね。

ほら、その証拠に……。

「え……でも、颯太さんは回復魔法が使えるよ？」

確かに颯太さんは治癒属性だよ。

でも、それは一般人には通用しないよ。

「多胡、このド天然はとりあえずスルーしろ。むしろこんなやつに保健委員をさせたら人が増える」

「……そうだね、他には？」

「あのさ、質問なんだけどさ、後半のヤツってどんなの？」

ボクはインチョーに聞いてみる。

ボクの中学には風紀委員なんてなかったしね。

「え〜っと。じゃあ、この際全部説明するね……まず、生徒会代理、生徒会の下で働く特殊部隊」

・・・今なんて!?

「何で特殊なことをするの!?!」

「図書委員、10万3千冊の魔ど」どこの禁書 録!?!」の管理  
だつて」

スルーされた!しかもネタだ!!

ここは学園都市か!?

いや、そういえばここは魔物も働く職場か!

「環境委員、間学園密林化計画実行」

何をやる気だ!?!?

ここをジャングルにでもするのか!?!?

「保険委員、清掃委員の怪我の治療、および支援物資の調達」

何で清掃委員が怪我するの!?!?

そしてここは戦地か!?!?

実はこの学園では戦争がよく起こるんだな!?!?

「行事委員、策士。ついでに学校行事の企画、立案」

間違つてる!

策士がメインじゃないはずだ!

学校行事がメインのはずだ!!!

「情報委員、簡単に言うとスパイ」

・・・確実にとある人物のための委員だよね？

「風紀委員補佐、風紀委員の下で馬車馬のごとく働く」

人権が無視されてるのは気のせい？

「清掃委員、教室が危機にさらされた時、速やかに駆けつけ、武力で対抗する。簡単に言っていると教室の治安維持」

兵士だな！！

てか、危機にさらされることがあるの！？治安維持部隊！？  
清掃って消すって意味か！？

「リュウ！！これはどういうことだよ！？」

「・・・いや、普通じゃね？」

お前は脳に重大な障害がある！！

「どこが！？ちよっとみんな！！」

ボクはクラスの全員にふっってみる。

「「別に普通」「」

「うそだあああああああ！！！！」

どうもボクが異常らしい。

「ま、冗談はここまでにして」

「冗談！？クラスがらみのドツキリ！？」

「「「その通り！！」「」」

みんなが『大成功！！』と書かれた手持ちの看板をどこからともなく出している。

「何でボクなんだよ！？」

「きつとソラ君だからだよ」

「理不尽だ！！」

「ほら、三谷君。決めるから座って」

「そうだ。早く帰れないじゃねえか」

「だからはじめをつけて欲しいよね」

「アレだから三谷は・・・」

「何でボクはクラスから罵倒されなきゃいけないの！？」

「・・・面倒だから三谷君とアンジェリカさんは保険委員で」

「それなら回復魔法もできるし力が強いから大丈夫だね」

「もう、そのネタはいいよ！」

「よし！ソラと一緒」

なんだかんだで委員会を決めるだけなのにとてものにぎやかなHR  
になった。

### 3話・PORTION

side空志

「ただいま」

ボクは補習があつたからみんなより遅い帰宅。  
でも、変だな。誰も返事してくれない。

冬香やリュウはともかく他のメンバーは返してくれるのに……

ボクは玄関で靴を脱ぐとスリッパに履き替え、リビングに行ってみる。

「おゝいスズ？リュウ？リカ？」

しゅん……。

誰もいない。

……部屋かな？

ボクはみんなの部屋がある二階に行く。

「……………ん？」

シュウの部屋から光が漏れてる。  
いるのかな？

トントントントン。

「シュウ？いるの？」



「ソラさんですか？どうぞ、あいてますよ」

ボクは中に入る。

にしてもシユウの部屋はいつ来ても面白い。

だって、大きな実験机に試験管とかいろんな実験器具とかがいっぱい、壁のほうにある大きな棚にはよくわからない薬品に植物とか何回見ても飽きない。

シユウはボクに背を向け、実験机の前で何かをしているようだ。

「すみません、気づきませんでした。それで、どうしたんですか？」

「いや、みんながいなくてさ」

「女性の方々は買い物に行ったそうです。あ、レオさんもです」

「リュウは？」

「龍造さんに話があると言っていましたね」  
なるほど、だからか。

「で、今日はいったい何をしてるの？」

「今日は実験ですね。そこにあるのが実験中の魔法薬です」

そう言って机にある試験管に入った綺麗な薄い赤の薬を示す。  
ボクはなんとは無しに 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を発動させて解析。

「……あれ？構成がよくわからない」

「そうなんですか？困りましたね・・・実は、私も薬の分量を間違えてしまって未知の薬ができてしまったんですよ」

・・・危険な臭いがする。

「元は何の薬のつもり？」

「精神安定剤です」

「ふん。何でそれがあるの？」

「いえ。私は暇さえあれば薬を作りますので・・・コレとって意味はないですよ。そこに胃腸薬や頭痛薬もありますしね。それに、備えあれば憂いなし、です」

「ふん。そんなもん？」

「そんなもんです」

ボクはその薬を持ってみる。

「飲んではいけませんよ」

「いや、飲まないよ。明らかに危険な雰囲気だし」

「たっだいまー！！」

「帰ったわよ」

「・・・あ！ソラ〜！！！」

「帰ってきたようですね。ソラさん。私はそろそろ片付けるのでこのコルク栓をその試験管にお願いします」

そういつとシュウはボクにコルク栓を渡す。

「おっけ。わかった。」

ボクはコルク栓を受け取り、試験管に蓋をしようとした。

「ソラ〜！！！」

「ちよっ！？まつ！！！」

ドス！バチャ！

「ソラさん！リカさん！大丈夫ですか？」

・・・非常にヤバイ。

何がヤバイって？

ボクとリカに薬がかかつちやっただよ！！

ボクはリカに異常が無いか調べて見る。

「え？何が？」

・・・特に ツクヨミ 月詠 の反応はない。

「この薬大丈夫？やっぱり解析できない」

「わかりません。元が精神安定剤なので・・・」

「ソラ？アタシのせい？ゴメン」

ドクン。

・・・アレ？

何この感じ？

s i d e リカ

「・・・ソラ？」

「え、あ、うん。何？」

何だかソラの様子がおかしい。

「ソラさん、どうかしましたか？」

「いや、なんか・・・何ていうんだらう？」

・・・どうしたんだらう？

さっき言ってた薬が関係あるのかな？

「シユウ、薬って？」

「いえ、精神安定剤が未知の薬になってしまったんです。それを片づける際にリカさんが・・・」

「ごめんなさい！！じゃ、ソラはアタシが抱きついたときに薬を

飲んじゃったの？」

「・・・その可能性が高いですね」

「・・・てか、ホントにどうなの？でも、よく考えると何で薬が分量間違えただけで未知の薬になるの？」

「これは魔法薬です。調合を失敗すればとんでもない変化を起します」

「ボクの死亡フラグだよね!？」

「ですが、そんなに対した症状はないですね」

「いや、遅効性の毒だったらどうすんの!？」

「その点は大丈夫です。魔法薬で調合を失敗しても元々作ろうとした薬に酷似しているはずです」

「・・・アタシが思うにそれはかなり危険だと思うんだけど？」

だって、元が精神安定剤。

もし、麻薬っぽいものになっちゃったらどうするの？

「・・・ドンマイです」

「投げ出すなよ!!」

「ソラ、アタシは見捨てないから大丈夫だよ」

アタシはいつものようにソラの腕に抱きつく。

「リリリリリリリリリリリ、リカ！？何で腕に！？？」

・・・あれ？

ソラってこんな初心つひな反応だったっけ？  
それに今に始まったことじゃないよね？

「シュウ、アタシ達っていつもこんな感じだよね？」

「そうですね。大体そんな感じですよ」

「ちよつと！離れて！！なんか、変だ！？？」

ソラの顔がハンパなく赤い。

それはもう、血のように・・・じゅるり。  
・・・ツハ！？イカン、イカン。

「ソラ！？顔が赤いけど大丈夫！？？」

アタシは手をソラのおでこに当てる。

・・・わかんない。

今、この瞬間もどんどん赤くなってる。

アタシは自分の欲ほ・・・ソラのために額同士をくっつけあう。  
顔がとても近い？

「~~~~~！！！？？」

バタ。

そして、ついにソラが声にならない悲鳴を上げて倒れてしまった。  
顔を赤くした状態で。

「……リカさん。コレではまるで……」

……もう、ここまで来るとお約束だよな。

「うん。実はさ、コレって……」

「「ホレ薬……」」

「で、ソラが倒れたと」

ここはリビング。

アタシとシユウはみんながそろつとソラのことを話した。

……レオはご主人様のことなのに床で丸くなって寝てる。

「さすがはソラ君。お約束だね」

「……ホントにこいつはある意味主人公体質ね。トラブル的な意味で」

「でも、三谷君は大丈夫なの？」

「大丈夫だろ？だって三谷だぞ」

『バチがあたったんだよ。俺をこんな目に合わせたからな！』

「コレは面白い」

「ま、飲んだと言ってもごく少量ですので大丈夫かと。それにホレ薬といつてもラブコメ小説のような過激なものでもないですし大丈夫だと思います」

「その前に何で茜達までいるの？」

「とりあえず疑問をぶつけてみる。」

「だって、既に6時だよ？」

「もう、帰らないとダメなんじゃない？」

「あたしは別に大丈夫。親には遅くなるって伝えたから」

「俺は普通に男子だからそんなに心配されてないからな」

「ワタシはこの女子寮の寮生だよ」

「そうなんだ・・・。」

「ま、今はソラをどうするかな。」

「で、それってどんなの？」



「あ、御二方の服に染み付いたものを念のために試験管に戻しておきました」

そういうと薄めの赤い液体をテーブルに置く。

「・・・どうやって服についたのを戻したの？」

「企業秘密です。それに、もし振りかけただけで効果が出るものと危険ですからね。一応ですよ」

「・・・とりあえず田中、アンタ飲みなさい」

「何で俺なんですか、平地さん!？」

「ギャグほ・・・もとい、魔力無効化体質があるからだぜい」

「普通にお前がこの中で一番ザコいからな。もし不足の事態があっても対処できる」

「チクシヨオオオオオオオオオ!!!」

そのとき、足音が聞こえてきた。

「何でボクは自分の部屋で寝てたの?てか、何でみんなが?」  
ソラだった。

「ソラとリカを近づけるな!!」

「『了解!』」

そういつとすぐにみんなはアタシとソラの距離を開ける。  
ソラは何故か田中に羽交い絞めにされてる。

「……どうしたの？」

「え〜。ソラさん。あの薬ですが、ひよっとするとホレ薬の類かも知れません」

「……え？でも、ボクは誰にもモテないよ？」

「……そこは間違ってるんだけどね〜」

「と、言いますか、今回はおそらく飲んだ人が最初に見た人に恋愛感情を抱くというものだと思います」

「……でも、それだとボクが最初に見たのはリカ。でも、ボクはリカを見ても何も起きないよ？」

「……グスツ。泣いてないもん」

「三谷君サイテー！」

「リカ、泣かないの。全部あの鈍感クソバカ間抜けアホギャルゲ主人公体質のソラが悪いのよ」

「何でボクは罵倒されてるの!？」

「察せバカ野郎。いっそのこと俺のために死ね」

「・・・ちよつとリカさん、ソラさん、いいですか？」

アタシは微妙に心が折れそうな精神状態だったけどシユウのほうを向く。

「リカさん。ソラさんにいつものようにアタックしてください」

「・・・ボクの見解は？」

「全面的に認めません」

横暴だ!!とかソラがいつてる。

シユウはアタシに向かってどうぞ、遠慮なくって視線で促している。

とりあえずずっとソラの腕に抱きついてみる。

「!?!?ちよつ!?!?リカ!?!?」

またまた一気に顔が赤くなる。

シユウはすかさず腕を取り、脈を取る。

「・・・尋常ではないほどに脈拍が安定してません」

「そっなの?」

アタシはソラの胸に耳を当ててみる。

なんかソラが言ってるけどそれは聞こえなかったことにする。

別にソラに正面から抱きつきたいわけじゃ・・・すみません。自分の欲望に負けました。

・・・確かにコレは異常だ。

ソラは基本的にアタシが抱きついててももう慣れてるからこんなにならないはず。

「ねーねーソラ君の顔がトマトより赤くなってるけど大丈夫なの？」

「まあ、死にはしませんから。それにコレではつきりしました。ソラさんは、リカさんに触れると飲んだ薬が反応しますね」

「なるほど。おい、リカ、一旦離れる」

アタシはしぶしぶソラから一旦はなれる。

「・・・」

「・・・ソラ？」

「・・・ハ！？ボクはいったい何を？」

「ベタなボケね」

アタシもそう思った。

でも、アタシに触れるとそうなっちゃうのか・・・コレはチャンス！？

「・・・お前の思考が手に取るようにわかるんだが？」

「ホントだね」

「とりあえずソラさんを襲ってはダメです」

「エ？ソクナコト思ッテナイヨ」

「アンジェリカさんはわかりやすいNEー！」

「じゃ、坂崎頼むぞ」

「おっけ〜。 アンチ・サーベル 逆刺突剣 ！」

あ〜！？

ソラの魔法薬が無効化された！！

・・・チャンスだったのに。

「・・・なんともないけど、元に戻ったの？」

「ていー！」

ま、どうせ元に戻ってもいつもこうだし・・・別にいいか。

「~~~~~！！！？？」

バタ。

「~~~~~え？」

sideシユウ

「~~~~~どっしりますっ？」

「~~~~~厄介なことになった」

そうですね。まさか鈴音さんの逆が効かないのは驚きました。

「ねえ、どうするの？」

「……ここはこのバカに起きてもらって自分にかかっている魔法を解析するのが確実だと思うわ」

「でも、ソラは自分の魔法は解析できないって言った気がする」

「……三谷君なら大丈夫」

「チートだしな」

「っで、どう起こす？」

「起こせばいいのだ！」

そういつと宇佐野さんはソラさんの耳に口を近づけてなにやら耳うちをしています。

ガバ！

「それだけはー！」

「……おい、お前何をした？」

「ちょこっただけ天使の囁きを」

「……何故でしょう？」

私にはこの方が悪魔のように見えてしょうがないのですが？

「まあ、いい。オレの精神衛生上聞かないでおく。ソラ」

「何？」

「お前の薬が解除されてない」

「マジですか!？」

「つーわけで自分に 月詠<sup>ツクヨミ</sup> をしろ」

「んゝ・・・できるのかな？」

そういつとソラさんは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を使い、目がオッドアイに。

「・・・わからん。誰かがみ持ってない？」

「あ、三谷君これ」

多湖さんがソラさんに手鏡を渡しました。

それで自分を見ていますね。

「・・・わからない。てか、鏡越しにできるのかな？誰か魔力を出して」

「じゃ、オレがやる」

そういつとリュウさんから魔力を感じます。

ソラさんは鏡越しにリュウさんを見ます。

「一応見れる。・・・ということは、ボクに魔法はかかっていない?」

「でも、確実に今のアンタはなんか変よ?」

「それに薬を飲む前はそんなんじゃないよ?」

「俺も魔法には素人だけどそれが怪しいと思う」

「・・・シュウ、誰かに魔法薬を飲ませて。回復薬とか」

「わかりました」

私は自分のポケットから回復薬を取り出します。

「・・・その構成もわからない。シュウっぽい魔力は感知できるけど」

「では、コレを・・・リカさんに」

「何で!?!」

「問答無用だ。」

シャドウ・バインド  
影の拘束

「な!?!リュウ!!ソラからの口移しなら飲む!!」

「今のこの状態でできるかバカ」

「ナイスです。リュウさん!」



私はすぐに薬をリカさんに飲ませました。

「・・・よかった。なんともない」

「で、どうですか？ソラさん」

「・・・やつぱりそうだ。魔法薬は飲んだ後、その人の魔力に最適化されて、飲んだ人の魔力に同調してわからなくなる。たぶん、自分の魔力の一部になってるんだと思う」

「なるほど。鈴音さんができるのは魔法の破壊。ですが魔術師の魔力の破壊はできない。少なくとも今のレベルではできませんね」

「・・・暗にできるかもって思ってるんだね」

「当たり前です。チートさに関してはソラさん、鈴音さん、それで私達の順ですよ？」

「やった〜！わたし二位だ〜！」

「坂崎さん、ホメられてないと思う」

「そうなの!？」

「まあ、とにかく、だ。リカはできるだけ、つかソラに近寄るな。吸血もソラのは我慢しろ」

「そんな!？」

リカさんが驚愕していますね。



ラがそのうち心臓が・・・みたいなことになりかねないわ」

「そうですね。他にも症状があるかも知れませんし・・・できるだけだけリカさんは接触を避けてください」

「でも〜!」

この世に絶望したかのような顔ですね。  
・・・ここは最終手段ですね。

「ソラさん」

「ん?何?」

ソラさんは何か考えてたようです。  
ま、コレはソラさんの助けが無いとダメですし。

「次の言葉を復唱してください」

「・・・嫌だ」

相変わらず勘だけはいいですね。

ソラさんには未来予知でもできるんでしょうか?

「宇佐野、ソラがリカとちゅくしたってウソの情報を全力で流せ」

「わかったよ〜」

「ゴメン!なんか今、ものすごくシユウウの言葉をリピートしたい気分!」

さすがです。

カンペキの連携ですね。

「リカ・・・」

「リカ」

「この試練を・・・」

「この試練を」

「二人で乗り越え・・・」

「二人で乗り越え？」

「互いの気持ちを確かめあおう!!」

「互いの気持ちを確かめあおう!!って、ちょっと待てい!!!  
気持ちって何!? コレじゃボクはプロポーズしてるみたいだよ!？」

「わかった! アタシがんばる!」

「なんか話が全力でこじれてるよ!？」

「ネタができた! アンジェリカさん、ファミリーネームがシエル  
スからついに三谷へ!!!」

「ケッコン!？」

「違う！リカ！落ち着け！何でリカは人間嫌いなのにこういう話は好きなの！？」

「バカだ」「」「」「」

「何が！？」

「では、できるだけ早くこの薬で解呪薬を作ります。それまでは皆さんでソラさんのサポートを」

「それはオレ等だな」

「じゃ、リカちゃんがんばろう！」

「うん！」

「……三谷。むしろ地獄に落とす」

「三谷君、強く生きてね」

では、いろいろと決まったことですし、私は薬でも作ってきましょ。

#### 4話・CALM BEFORE THE STORM?

side 空志

「はあ、ボクはどうなるんだろう・・・」

インチョー達が帰ってからボクはなんとなく寮の屋根の上に座って月を見ていた。

・・・月、ボクの属性。

今考えるとこの二ヶ月だけでいろいろなことに巻き込まれた。

まずは突然襲われて、そこをリュウに助けてもらって魔窟<sup>ネスト</sup>に行った。

そして、優子さんや颯太さん、アリアさんにガントさんに会ってそれで向こうの人間の町に行くところまでリカが冬香達に襲われてそれを助けて、何故か魔窟に来たら二人とも妙になじんで、そして智也さんとその国に魔窟を襲撃されて。

五月はオリエンテーションでインチョーに田中に宇佐野さんにボク等のことがバレて、また、魔法合戦して、ボクはこのときに暴走してみんなを傷つけた。

そして、今度はコレだ。ホレ薬事件。

「何だかホントにいろいろなことがあったよな」

「ソラ?こんなトコでどうしたの?」

「ん?リカ?・・・あれ?いない?」

声の方向を向くとそこには何もいない。

・・・いや、よく見るとコウモリがいる?

「あ、ゴメン、すぐに解くから」

そういうとコウモリがいたところに突然リカが現れた。

・・・そういえばコウモリにも変化できるって言ってたね。後は狼だっけ？

「いや、なんとなく月を」

「・・・ソラの属性だもんね」

・・・いつもよりボクとリカの距離が遠い。  
なんだろう？

リカはいつもボクの側にいたからだろうか？  
何だか・・・違和感？そんなものを感じる。

「どうしたの？」

「いや、んゝ・・・なんなんだろう？リカがいつも近くにいたから寂しいのかも。離れて気づく何とかがってヤツだね」

ボクはおどけて言ってみる。

「そう？」

そういうと少しの間を空けてリカがボクの近くに座って月を見る。

・・・なんか美少女が月を見てると絵になるなあ。

って、そういえばボクはホレ薬でリカに擬似的な恋愛感情を抱いているとか言ってたけどよくわかんないな。

「・・・リカ、ゴメンね」

「え？急に何で？」

「いや、だってさ……本当の気持ちじゃないのにリカに恋愛感情を持つちゃってさ……そういうのってイヤじゃない？」

「うん。そうかも。どうせなら本当に好きになって欲しい。心から」

何だかりカの顔が恋する乙女みたいだな。

これはアレか？

リカにもやっばいるのかな？

「……誰か好きな人がいるの？」

「ブフア！？」

……どうもドンピシャらしいね。

「……女の子がはしたない」

「……だって……まあ、いるよ」

「へへ。それって吸血鬼ヴァンパイア？」

「違うよ。それに聞いたたらソラは驚くよ」

「……ボクが驚く種族か……人間？」

「……何で一発で当てちゃうかな？」



「マジで！？リカが！？人間恐怖症なのに！？」

「……泣きたくなってきたよ」

「よくわからないけど、ちなみに何でその人間が好きになったの？」

「うん。最初は怖かったけど……やっぱり秘密！恥ずかしい！」

「まあ、そうだよな」

「……でもさ、その人としてつもなく鈍感なんだよね」

「こんな美少女に言い寄られて！？誰だそいつ！！」

「……コレがソラだもんね」

「何で落ち込んだの？」

「何でもない！ソラは好きな人がいるの？」

「今度はリカから攻めてきた。」

「……」

「いるよ。すぐ近くに」

「え……ホント？」

「うん。それは……」

「言っちゃうの!? 鈴音!? 冬香!? 茜!? まさかの美未!？」

「君だ!」

「……絶対それっておどけてるよね」

「まあ、少なくとも友人以上には好きだよ」

「そして、恋人未満。で、結局はいるの?」

「うん……わかんない。たぶんいない」

「……そっか」

どこことなく悲しそうな、それでいて安堵したような表情をするリカ。

ボクはなんとなくリカに聞いてみた。

「リカさ、好きな人がいるとは言ってたけど、告白とかしないの?」

「ん……でも、どうせならアタシに振り向かせて告白してもらいたいね」

「やっぱり女子はそういうのがいいの?」

「それは人それぞれだよ。アタシはそうなったほうがうれしいなっただけ」

「へ」

「……乙女心は複雑なんだ。」

「ソラは？」

「ボク？いや、いないのに考えてもなあ……強いて言うなら……  
こつちからしたいかな？」

「ホント！？ちなみに何で！」

「……元気になったり落ち込んだり今日は大変だね」

「そんなことより！」

「ハイハイ。……ボクはさ、正直あんまり人を好きになるってのがよくわからないんだよね。だからさ、ボクが最初に誰かを好きになることがあればそれは初恋になるのかな？だから、自分に人を好きになることを教えてくれてありがとうって意味もこめてボクから言いたいかな？……って、カツコつけすぎだね自分で言ってる耻ずかしくなってきた」

夜でよかった。

今のボクはものすごく顔が赤いだろうし。

「ソラの顔すごく赤いよ」

「……リカが吸血鬼なのを忘れてた」

夜目が利くんだね。

さすがは夜の魔物。

「じゃ、アタシはもう寝るね。ソラも早く寝なよ！」

「うん。なんかつき合わせて悪いね」

そういうとリカは屋根のふちに手をかけてひょいと窓から中に入っていた。

屋根にはボク一人。

「・・・ねえ、カミサマ。もしいるならボクの願いを一つだけ叶えて欲しい」

でも、ボクは基本的にカミサマは信じない。

だって、カミサマはいつも理不尽だから。

カミサマは残酷だから。

でも、叶うなら叶えて欲しい。

「ボクはどうでもいいから、みんなが笑顔でいて欲しい・・・じいちゃんが昔ボクに言ったように」

『勇者だから魔王をやっつけるの？』

『違うぞ。勇者はな、みんなを笑顔にするんだ。』

でも、誰もそれに応えてくれない。

ただ、ボクの目の前には真っ暗な空と、白銀に輝く月があるだけだった。

（翌朝）

「はあ、学校だ」

「……なんでそんなに憂鬱なんだ？」

「いつものアレだよ」

ボクは廊下の一角を指す。

そこには女子が。ただし、スナイパーライフル狙撃銃構えてトランシーバーに何か言ってるけど。

「でも、今日は大丈夫でしょ」

その根拠は？

「……アタシがソラに抱きつけないから……ツチ」

「……舌打ちが聞こえたのは気のせいだよね」

リカはそんなにボクを窮地に立たせたいのだろうか？

「むしろお前の考えてることの逆だと思っぞ？」

「逆？」

「・・・どういうことだろう？  
まったくわからない。  
で、教室の前。」

「・・・非常に開けたくないのですが？」

だって、殺気がひしひしと伝わって来るんだよ？

「お前が開ける」

「・・・」

次に来るのはリカをけしかける。  
だが、今日はリカがボクに触れられない！！

「嫌だ」

「宇佐野に情ほ」

スパアアアアアアアアン！

その手があつたよ！

ボクは迷わずにドアを開けた。

そして、ボクの目の前には暴徒鎮圧用ゴム弾が装填された銃たちの銃口。

ボクはすぐにホールドアップ。

「撃たないで！！」

「「「無理」「」」

「ちよおおおおおおお！！？！？」

「いや！ちよつと待て！今日はアンジェリカさんとイチヤついでないぞ！！」

「「「なんだと！？」」」

・・・助かった？

クラスのみんな（他クラスのリカFCやスズ親衛隊含む）がなかなか言ってる。

「確かに・・・ついに破局か？」

「ありえる。大体、このアホ面に惚れる要素がどこにある？」

「オイ！リカ！！落ち着け！！」

「ここで落ち着かなきゃソラ君が大変なことになるよ！！」

・・・何だか修羅場が展開されそうなのは気のせい？  
そこでタイミングよくチャイムが鳴った。

「おゝし、座れゝ。出席とるぞゝ」

「あ、ボク初めて普通に席に座れる・・・」

「・・・三谷、涙流して感動してるところ悪いがさっさと席につ

け  
」

・・・違う！

「これは心の汗なんだ！！」

「わかったから座れ」

「・・・うい  
」

ボクは初めて普通に教室から逃げることなく席につけたことに感動しつつ席についた。

「伊藤  
」

「ハイ  
」

「伊藤  
」

「はい  
」

「伊藤  
」

「へい  
」

「伊藤  
」

「は  
い  
」

「伊と「伊藤多ッ!？」」冗談に決まってるだろう。」



ガントさんがそういうと、またもやクラスのみんなが例の看板を持っていた。

・・・連携がすごすぎる。

s i d e 樹

「ね、李君<sup>リ</sup>っていつも何をしてるの？」

・・・弱りました。

私に話しかけてきたのは私のクラスの女子の方達ですね。今は休憩時間です。

ですが、ここで正直に薬を・・・とか言えば大変なことになります。世間的に。

とりあえずごまかしましょう。

「いえ、化学の予習を」

「え、ウソだ。だって、そんなの習ってないよ？」

そういうのはショートカットの女子ですね。

・・・なかなか鋭いですね。

どうしましょう？

「そんなことよりさあ、シュウ君は今週末ヒマ？」

そう聞いてくるのは見た目ギャルな方です。

うまい具合に話題がそれました！

ナイスです！

ちなみに今日は木曜です。

「そうですね。私は少し用事があります」

「え〜。どんな？」

そういうのは別のギャルっぽい方です。

もちろん、週末はソラさんの解呪薬作成です。

できるだけ早くしないと私がリカさんに鉄拳制裁をされますからね。

できればそんな事態にしたくないです。私はソラさんではないのですし。

「へぶし！・・・誰か噂でもしたのかな？」

「・・・」

「・・・噂をすればなんとやらですか」

ついでにイライラした雰囲気も感じた気がしましたが気のせいです。そうに決まっています。精神衛生上深く考えないほうがいいです。

「ねえ、聞いているの？」

「こちらもイライラしてますね。

ですが、どうしましょう？」

「アンタ達、シユウが困ってるじゃない」

「何よ？アンタには関係ないでしょ？」

「関係？アンタよりかはまだあるわよ。シユウ、週末はわたしに

付き合ってくれらるんでしょ？」

「・・・そうですね」

「・・・つち」

そういつと私に構っていた女子の方は去っていきました。そして、私は助けてくれた冬香さんに礼を言います。

「助かりました。ありがとうございます。冬香さん」

「はあ・・・アンタもうまいこと回避しなさいよ」

そういつと私の席の近くにどかっと座る冬香さん。

「いえ、女性を傷つけるのはダメですし・・・」

「アンタ、フェミニスト？」

「いえ、そうでもありませんよ？確かに女性と戦うときは無意識にいくらか手加減するというのは師匠せんせいから言われましたが」

「それを世間一般ではフェミニストって言うのよ・・・で、できたの？」

何かは言わなくてもわかります。

「まだ、無理ですね」

本当に面倒です。

。ソラさんに解析してもらえればすぐにできたと思うんですが・・・

「ソラの解析は？」

「この構成がわからないようです。私が一から魔法薬のいろはを教えればわかるかも知れませんが」

「・・・この際、教えちゃえば？」

「それでは私の存在意義がなくなってしまいますよ」

私はこのメンバーの前衛の格闘士兼薬剤師ですよ？

「大丈夫よ。アンタをまねできるのは早々ないわ」

「いえ、私と似たようなことをする人がいますよ。語尾に『ですう』と言う人です」

「そうなの？あんな感じ？」

「どっぴうことですか？」

「ちょっと耳をすませなさい」

「はあ・・・？」

「・・・！！」

遠くから誰かの声が聞こえますね。

・・・そういえば何故この声以外の声がしないんでしょう？  
いえ、もう一つよく知る声がします。

「ちょ・・・まっ・・・！」

おそらくはソラさんでしょう。

・・・何だか慌ててるようですね。

「待つですう！！！」

「何でボクは急に襲われなきゃいけないの！！！」

「シユウを誑たぶらかしたクソ野郎だからですう！！！」

「意味がわかんないよ！！！」

ギョーン！！

ドコオ！！

・・・ものすごいスピードでソラさんが逃げて、その後に少女が  
現れ、ありえない音を立てて廊下のリノリウムの床がへこみました  
ね。

「すみません。用事ができました」

「・・・シユウ、今はアンタの爽やかな笑顔が逆に怖いわよ。そ  
れにクラスの人が引いてるわよ」

失礼ですね。

確かに少し怒っています但しそれほどではありません。

ですが、タイミングがよかったですね。  
おそらく、あの方もいるでしょう。  
私は全力でソラさんたちの向かった方向に走りました。

「おい！？李ってあんなに速かったのか！？」

「後で部活に勧誘だ！！」

「あいつはわが野球部に！！」

「ちげーよ！サッカーだよ！！」

「「「やるのか！？」「」」

「・・・私もピンチかも知れませんね。」

side空志

時間は休み時間開始直後。

「・・・トイレにでも行ってこようかな？」

「・・・」

「・・・気のせいだ。」

リカがめつつつつつちや不機嫌な顔でいるけど気のせいだ。  
ボクはトイレに向かうべく教室を出る。

「・・・」

「・・・」

「……」

「……リカサン？」

「……」

返事が無い。まるで屍のようだ。

ま、冗談はここまでにしてよう。

早くトイレに行って用を済ませよう。

「……へぶし！……誰か噂でもしたのかな？」

そんな風に現実を逃げてみても後ろのオーラは残念ながら消えなかった。

「……どうしよう？」

「ソラというヤツはここにいるのですか？！？？」

「……逃げよう。」

よくわからないけど中華な雰囲気服を着たくすんだ金色の髪でショートカットのボサ髪の女の子がボクを探してる。

てか、あの感じは人間じゃない。

「……魔物か？」

「そこの君！！ソラという人間は知らない！！」

その女の子は近くの男子生徒にボクのことを聞こうとする。

「はあ？ソラですか？」

男子生徒Aよ。気づくなよ！

てか、ボクのこのあだ名は一部でしか使われないから大丈夫だと思っ  
思う。

「……ア！そういうえばアンジェリカさんを誑かしているヤツが  
三谷って言うんですが、アンジェリカさんにソラと呼ばれていた気  
が！」

ちくしょう！

死亡フラグその一だ！！

「三谷？じゃ、三谷はどこですか！！！」

「……ソラ、呼ばれてるよ？」

「リカ。ここは何も言うな。ボクは平穩な日々を送るんだ」

「……それよりも、白い髪の薄めの赤い目の女の子を探したほ  
うがいいですよ？」

「なぜですか？」

ダメだ！！

絶対に言うな！！

てか、ここからさりげなく逃げよう！！



「ちなみにあちらにその女の子がいるですう」

「じゃ、その近くに三谷がいるはずですよ」

逃げようー!!

マジで!

「・・・  
風フウカシヤリン火車輪

ボクはこっそりと魔法陣を展開して逃げようとする。

「三谷、お前どうしたんだ?魔法なんか展開して」

ナイスタイミングだね。

主にボクの死亡フラグ的な意味で。

「田中アアアアアアアアアア!!!お前はボクを殺す気か!?!」

「お前がソラなのですかですう!!!!」

バレた!?!?

「人違いです」

「じゃ、何で魔法っぽいのを足に使ってるのですう!」

「さらば!!!」

ボクはブーストダッシュ!

コレならばシュウ以外は追いつけまい!!

「待つですう!!」

ドン!

そんな爆音みたいな音がボクの後ろから聞こえた。

「なあ!?! シュウ並みの速度!?!」

「逃がさないですう!!」

「微妙に可愛い語尾なのにボクには恐怖しか感じられない!! てか、頭の横からなんか出てない!?! 紫電シデン!!」

バチバチバチ!

廊下の床に電気が奔る!

だが、相手は壁を走るといふ非常識なことで回避。

「ちょ!?! マジでシュウの女の子版!?! 待ってよ話し合おう!!」

「待つですう!!」

どうも話を聞くつもりはないようだ。

「何でボクは急に襲われなきゃいけないの!!」

「シュウを誑かしたクソ野郎だからですう!!」

「意味がわかんないよ!!」



・・・よく見るとこの女の子とよく似てる気が？

「ソラさん。すみません。彼女は何かを勘違いしてるようですね」

「俺からも言う。ホントにすみません」

「いや・・・で、この子誰？君も」

「すみません、紹介が遅れました。俺は獣人族<sup>ビースティアン</sup>、タイプは狐の劉<sup>ル</sup>小狼<sup>シヤオラン</sup>、その女は俺の双子の姉の香桜<sup>シャンホウ</sup>です」

・・・何だかにぎやかになりそうだね。

## 5話・MARMOT

side 樹

「……で、急遽ここに集合と。そういうわけか、シユウ？」

「本当にすみません」

「まあ、おぬしはそんなに迷惑をかけるようなやつではないしの。それに今回ばかりは仕方が無い」

皆さんにご迷惑をおかけしました……。

ここは理事長室です。

今回だけは授業どころではないので全員サボりました。  
優子さんはどこでしょう？

「まあ、シユウ君のせいじゃないよ」

「そうだ、コレはうちのバカ姉のせいだ」

「コレを解くですう!!」

縄でぐるぐる巻きにされた私の友人が叫びます。

「ダメです。解けばソラさんを襲うでしょう?」

「もちろんですう!!」

「何でボクが襲われてるの?」

「・・・貴方、死ぬ？」

「リカ、とりあえず落ち着きなさい。この子がビビってるわ」

「ビ、ビビってなんかいないですう！」

はあ・・・。

疲れました。

「とりあえず紹介します。私と同じ格闘術を学んだ双子の弟の劉リウ小狼シャオラン、そして姉の桜香シャンホウです」

「何で姉の私が最後なんですう！？」

「シャンがバカだからだ」

「シャオ！弟の癖に生意気ですう！」

「シャン！いい加減にしてください！それで、貴方は何をどう誤解したんですか？」

「してないですう！だってシュウの手紙に書いてあったですう！」

ソラさんに襲い掛かるようなことを？

・・・別に書いてませんが？

「・・・ちなみに？」

「そのソラとか言うやつをベタ褒めしてたですう！」

「・・・おい、お前、なんて書いたんだ？」

「寝めるといふよりソラさんはチートですと書いてただけです」

「要するにソラの力の説明が一番大変だからそれを説明したらこの子が怒ったの？」

「貴方にシユウは渡しませんですう！」

「・・・何だかこの子はダメな方向にいろいろと考えがいつてる気がしますね。」

「・・・この子はシユウにベタ惚れなの？てか、ソラはシユウをとったりしないと思う」

「な！？べ、別にそんなんじゃないですう！！！」

「まあ、否定はできませんね」

「・・・ボクは初めてツンデレを見たよ」

「こんな姉ですまない」

「「「「「君も大変だね」「」」」」」

「とにかく！ソラさんとやら！シユウとイチャイチャしないですう！！！！」

「「「「「してない」です」から」





「……いえ、コレはシャンの得意分野です。シャン。私は女性が好きです。少なくともアブノーマルな趣味はありません。というわけでコレは貴方の誤解です」

「……ゴメンですう」

「では、縄を解きます。こちらの方を治療してください」

「わかったですう」

そういつとシャンはリカさんの近くに座る。

そして、目を閉じると精神を集中する。

「……ん？魔法なのか、な？」

「ソラさん？いつの間に発動させたんですか？」

そこにはオッドアイのソラさん。

月詠<sup>ツクヨミ</sup>が発動されてますね。

「いや、このごろ魔法を感知すると勝手に起動するんだよね」

「……アンタはまたチート化したのね」

「ねえねえ、シユウ君。シャンちゃんは何をしてるの？」

「彼女は気功士<sup>モンク</sup>といわれまして、『気』というのを操作。ま、言ってしまうえば魔力なんですけど、それを他人に分け与えて治療することが出来るんです」

「え？魔力つて人にあげれないの？」

「坂崎、お前の生命力を相手に渡すんだぞ？そんなことは普通で  
きない。だが、それが可能なのがこいつの魔法系統。相手の魔力と  
同調して魔力を流し込んで自然治癒を高めるというものだ」

「でも、颯太さんのは？それによくわかんない」

「月詠ツキヨミ 使えばわかるんだけど、アレはあくまで外傷のみ。こ  
たちは内側。つまりは疲労とかだね」

「一応親父はコレと似たようなことができるがどついう仕組みか  
はわからん。それに親父曰く、本職には負けるらしい」

「外の怪我が疲れの違い？」

「そついうことです」

「俺には適正がなくてできませんでした。とつうか、格闘術もで  
きて、薬剤師や治癒ヒールができる人が少なすぎるんです」

「ですが、彼女は自分の気进行操作することで自分の身体能力も上  
げてます。」

「……だからシユウみたいなのができたんだね」

「終わったですう」

「……うん……ソラ！さっきのホント!？」

「起きて早速それ！？つて、触ったら!？」

リカさんは思わずソラさんに詰め寄って手を握ってしまいました。そして、ソラさんの顔が真っ赤に。

「り、リカ・・・離れて・・・つて、ムリ」

「きゃっ?」

そういつとソラさんはまるでリカさんを押し倒すようにして倒れます。そしてリカさんはここぞとばかりにぎゅっと抱きつく。

・・・熱々ですね。

「・・・この二人は恋人同士ですう?」

「いえ、付き合っではないんですが・・・いや、限りなくそれに近いですね。まあ、今は訳あってソラさんはホレ薬を飲んでしまっ  
て・・・ですが症状が悪化してきましたね」

「このソラとやらはトラブルメーカーなんですか?」

「むしろ巻き込まれ體質よ」

「・・・しゅ、しゅう、コレ、ムリ。昨日、ガマン、限界」

そういつとまたソラさんは気絶してしまいました。

・・・さっきの話から推測すると、どうもリカさんが触れたとたんに理性がいろいろと大変なことになるそうですね。

「・・・っち」

「女の子が舌打ちしちゃダメだよ」

「おい、お前のせいでソラが倒れたぞ？」

「いつそのこと押し倒してその先もしてくれれば規制事実が・・・」

「

黒いですね。

「シュウ！私にもその薬くださいですう！」

「ダメです」

「何でですう！？」

絶対に私に使おうとしてますよね？

「アレは偶然できてしまったものです。解呪薬を作るのに必要ですので余分などありません」

まあ、うそですけど。

泣いてますが無視します。

どうせウソ泣きですし。

「ですが、何故気絶するんでしょう？」

「どづいづことだ？」

「いえ・・・さっきの話から推測すると、ソラさんは昨日も理性

を保ったままでしたが、昨日からもいろいろと戦っていたようですね・・・薬の効果と」

「なんと言うか変じゃないか？ソラの解析が正しけりや魔法薬は飲むとそいつの魔力と同調して抵抗なんかできないはずだ。つか自分の魔力を抵抗する意味が無い」

そうです。だから、ソラさんが抵抗したのはおかしいんです。  
・・・確かめるべきでしょうか？

「・・・実験しましょう。ほんの少しだけ薬を投与します。ちょうどいい被験体がありますから」

「それ誰？」

「シヤンに決まってるじゃないですか」

「え？私はいいですう！」

ダッ！

甘いですね。

ここにいるのはチートな方々ですよ。

それに既にアイコンタクトは済ませてあります。

「チェイン・タークネスロード  
鎖の闇輪舞」

「うにゃあですう！？」

「ありがとうございます」

「……シユウ、アンタなんでこの子にはそんなに鬼畜なの？」

「トラブルそのもの迷惑の塊だからです。せい！」

「ガボ!？」

とりあえず、私はシヤンの目を手で覆い隠します。

おそらく、コレは最初に見た人に恋愛感情を抱くはずです。

……この人ですね。

「ん?どうしたんじゃ？」

「先日の恨みです!！」

私はシヤンの顔を龍造さんに向けます。

そして、シヤンは龍造さんを凝視。

「……」

「……シユウ。何をしたのじゃ？」

「いえ、少し薬の実験台に……」

「きゃあああああ!!!そこのおじ様!愛してますっ!!!」

「ぐうお!?鎖が外れる!？」

なるほど、本来はこうなるはずだったんですか……。  
なら、考えられる可能性はなんでしょう?

・・・まあ、今はなんともいえません。

「ぬおおおおおおお!? 発動じゃ!!!」

龍造さんは得意の結界魔法でさらにリュウさんの拘束魔法とともにシヤンの自由を奪います。

「シユウ! 何をするんじゃ!?!」

「日ごろの恨みに決まってるだろ、アホジジイ」

・・・とりあえず、コレで解呪薬の実験台モルモットの用意もできました。やはり、一刻も早く薬を完成させる必要がありますね。

まあ、リカさんならむしろこうなったほうが喜ぶ気がしないでもないですが・・・。

「シユウ、アンタ今、ものすごく黒いことを考えてない?」

「いえ、ただ運よく実験台が用意できたと思ってるだけですよ」

「ねえねえ、シヤオ君はお姉さんが実験台にされてもいいの?」

「俺はいいです。特に問題はありません」

「・・・お前等何気に鬼畜だな」

「「だってシヤンですから(だからな)」「」

まあ、とにかくです。コレでいろいろと実験ができます。ですが、わからないことがまた出てきました。

「なぜ、ソラさんは中途半端にしか効いてないんでしょう?」

「こいつがチートだからじゃね?」

「……今回はそういうことにおきましよう」

「アンタ、それでも医療に関わる人間?」

「でも、それ以外に説明がつかないよね」

「……考えてもしょうがないですね。シャン。貴方はソラさんのほうもお願いします」

「ええ〜やだ〜ですう。というか無理ですう。おじ様あ〜」

「……そういえば拘束されたままでしたね。薬がいろいろと効いてますし。」

「さつさとしろ。バカ姉」

「バカって言うなですう!バカって言ったほうがバカなんですう、このバカ!」

「ソラはアタシが看病するの、バカ!!!」

「……不毛ね」

「この方たちは放っておきましょう……それに、シャンの拘束を解くと大変なことになるので、この状態で私の部屋に移してく



れませんか？今日はシャオも寮に泊めます。大丈夫ですか？」

「俺達は問題ない。だが、いいのか？」

「大丈夫じゃ！というわけですぐに送るのじゃ！」

龍造さんは結界に入ったままシャンをおそらく私の部屋に転移。何度見ても思っんですが、結界でどんな魔法をしてるんでしょう？

「すみません。ありがとうございます」

「では、リカさん。ソラさんを頼みます。私達は授業に戻りましよう。」

「わかった！！・・・フフフフ」

・・・ソラさんがいろんな意味で危ない気がします。ですが、ここで別の人が運ぶとなると確実に惨劇につながります。しょうがないです。

・・・それに、リカさんはちゃんとわかっているんでしょうか？

「おい、まだ午前中で授業中だ。さっさと教室に戻って授業を受けるぞ」

「はい」

「わかりました」

「アタシはソラを保健室に連れてく。それでついでに・・・」

「・・・いや、ダメだからな？つか、オレもついていく」

「え〜わたしはサボりたいんだけど？」

「・・・優子さんかの？冬香ちゃんはお前と拳で語り合いたいそうじゃが？」

龍造さんはケータイを取り出すと優子さんに地獄への片道切符の手配をしていますね。

「授業に行くわよ！」

そう言うと冬香さんは誰よりも早く理事長室を飛び出していきます。

「シユウ。俺はどうする？」

「龍造さん。シャオはどうします？」

「・・・おぬしのクラスでも見学させればよいじゃろう」

「いや、さすがにそこまでは・・・姉が迷惑をかけたのに・・・」

「大丈夫ですよ。ここにはそれ以上に迷惑をかける魔王がいますから」

「酷いいわれようじゃな」

龍造さんはそう言いつつ私のクラスの担任にこの内線電話で連絡を取るうとしています。

私はそういう魔王様を無視して、シャオを自分のクラスに連れて行きました。

「ホントにいいのか？」

「大丈夫です。ここは魔王が支配する学園ですよ？」

「……どのあたりが大丈夫なんだ？」

まあ、わからないのも仕方ありません。

そのうち、嫌でもわかります。

クラスで転入生よろしく質問攻めにあってしまうのは確実ですね。

## 6話・AFTER SCHOOL

side空志

「……ん？」

保健室の天井。そして、ボクはベッドに横になっている。ボクはいつの間にか寝てたらしい。

「つて、リカのせいじゃん」

いつも思うんだけど何でボクに飛びつくんだらう？

確か、気になる人はいるんだよね？

……ま、考えてもしょうがないか。

「颯太さん？いますか？」

「起きましたか？」

颯太さんがシャツとカーテンを引いて現れる。

今日も校医つぼく白衣を着てる。

「また、例の薬の？」

「まあ、リカに何故か飛びつかれてしまって……」

「……ちなみにソラ君は何か言ったんじゃないのかい？」

「え？……特にコレと言っては……まあ、ボクがホモになりかけたのでそれを回避するのにリカを使いましたが」

「・・・それが原因だよ」

何故かよくわからないけどボクは颯太さんに呆れられている？

・・・何で？

ボクはなんとなく話を逸らす。

「今の時間は？」

「そうだね・・・もうすぐ午後の一コマ目が終わるかな？」

・・・死ねる。

この学校は大体一日で6コマある。

簡単に言つと一コマ一時間ぐらいの授業だ。

で、午後ということはボクは昼ごはん抜きで訓練のほうに行かないといけない。

「・・・今日は早退したいです」

「優子に殺されるから僕はやめたほうがいいと思つよ」

「ですよね」

どうも、ボクは死地に赴く必要があるようだ。

「と、言いたいところだけど、実は、優子は出張に行つて学園にいないんだ」

え？

じゃ、今日はどうなつてんの？

「だから、今日はみんなで訓練してると思うよ。父さん相手に」

「よし、全力で行きます。死んでも行きます。むしろ逝かせます」

「一気に元気になったね。でも、今日は帰宅したほうがいい。いろいろと大変だったしね」

・・・確かに。

よくわからないけどシユウの友達の狐耳のボサ髪の双子の姉に何故か殺されかけて、さらにはリカに触れられて薬のせいでまた倒れたんだしね。

てか、何でボクは倒れるんだろう？

いろいろと薬のせいなのかりカに触れたとたん、無性にリカの近くにいたくなる。

まあ、ボクは魔法薬の専門家じゃないし、考えてもしょうがない。

「じゃ、ボクはその言葉に甘えて今日は寮で寝ています」

「わかった。お大事に」

ボクは保健室から出て、カバンを取りに一旦教室に向かう。

教室の前に来るとちょうど授業終了のチャイムが鳴り、ボクは普通に教室に入る。

中には、クラスみんなが何でお前がここに？って顔でボクを見てる。

「三谷君どうしたの？」

「いやさ、ちょっとしたトラブルでついさっきまで保健室で寝て

た。だから、カバンを取りに来た」

ボクに声をかけてきたのはインチョー。

ボクがしょっちゅうトラブルに巻き込まれてるからか、それとも  
どんなトラブルか予想ができたか深くは聞いてこなかった。

「ハア・・・でも、カバンはアンジェリカさんが持って行っちゃ  
ったよ？」

「リカが？・・・じゃ、理事長室に行ってくる・・・って、メン  
ドイしリュウにメールして」

ボクはそう言うのとケータイ（やっとつい最近買った）でメール。  
・・・よし、コレでおっけ。

「じゃ、今日はボクは早退だから」

「具合が悪いのか？」

いつの間にか現れた田中。

ミストは今日は外に出ていない。

「いや、颯太さんが今日は大事をとって休めって」

「保険委員なのにそんなんじゃダメだよ」

「あれってマジだったの！？」

ボクはてっきり冗談かと思っていたよ！

そんなくだらない話をしてからボクは寮に帰った。

「でも、なんだったんだ？あの双子？」

「俺はシャンの暴走を止めようとしただけです」

「・・・そうなんだ。まあ、がんばれ」

「でも、本当にすみません」

「・・・ボクはそろそろ突っ込んだほうがいいのかな？」

ボクの隣にはさも、当たり前のようにシユウの友達・・・シャオ君だっけ？

まあ、とにかくいた。

「そういうえば自己紹介はしてなかったね。ボクは三谷空志。でも、みんなはソラって呼んでるから君もそれでいいよ」

「わかりました。俺のこともシャオでいいです。ソラさん」

「・・・できれば『さん』はやめて欲しいな。なんかいや」

「ですがシユウは『さん』ですが？」

「まあ、シユウは・・・しょうがないよ。アレじゃないとシユウって感じがしないし。別に年がそんなに離れてるわけでもなさそうだしね」

「俺はちなみに15ですがシユウの1つ下です」



「じゃ、先輩命令でボクの名前に『さん』をつけるのを禁止する」

「……強情ですね」

「いや、こうでもしないとボクはあのメンバーの中で生きていけないんだよ」

そんな話をしていると、ボク達は寮に到着した。

そういえばシャオ君はどうしてボクと一緒にここに来たんだろう？

「そういえば、何でボクとここに？」

「今日はそちらにお邪魔させてもらいます」

「……なるほど」

今、ボクの脳裏にはふざけた語尾で鬼のような強さで追いかけてくるシャオ君の姉の顔しか思い浮かべることができない。

「いや、シャンはシュウの部屋に閉じ込めて、かつ、拘束してあるので大丈夫です」

「いや、ボクは大丈夫だけど君のお姉さまが大丈夫じゃないと思うんだけど？」

「いえ、シュウは薬の作成のためにモ……実験台を得るためにシャンを生……犠牲にして、今、シャンは貴方と同じ症状です」

「うん。君とシュウはあの子に関しては外道だね」

こいつらは敵に回すといろいろと恐ろしいね。  
全力で敵に回しちゃダメだ。  
ボクは鍵を取り出すと中に入る。

「じゃ、入って。誰もいないけどね」

「お邪魔します」

この子は姉と違ってホントに礼儀正しいな。

ボクの周りは奇人や変人、果ては人外までいるからこういう子は  
ホントに貴重だ。

……って、そういえばこの子は獣人<sup>ビースティアン</sup>か。

「まあ、部屋はリュウが来てからじゃないとわからないから……  
リビングにでもいたらいいよ。出かけたくなったら。この鍵を使っ  
て」

ボクはとりあえず、自分の鍵をシャオ君に渡す。

「すみません」

「いや、それぐらいいいよ。じゃ、ボクは着替えてくるから」

ボクは自分の部屋で適当なものに着替える。

そこで、ケータイがブルブルと震える。電話みたいだ。  
リュウかな？でも、まだ訓練中だよな？

ボクはとりあえずケータイに出る。

「もしもし？」

『俺だ。さつさとこつち来い』

「ただいま、あなたがおかけになった電話はこの世界中どこを探しても見つかりません。ピーとなった後、速やかに通話を終了しこの番号には二度とかけてこないでください」

『お前のツケを払わせるぞ?』

「ログさん?なんか用?」

ログさんだった。

今日はこれから寝ようと思っていたのに……。  
てか、今日は夕方<sup>バイト</sup>働きの日じゃないよね?

『急用だ。話はこつちでする』

そういうとログさんは一方的に電話を切った。

……メンドイ。

それでも、ボクはカバンの魔術符を持つと、寮の門<sup>ゲート</sup>に向かう。

あ、シャオ君にも言わなくちゃ。

「シャオ君?」

「何ですか?」

リビングのソファに姿勢よく座っていたシャオ君にボクは魔窟<sup>ネスト</sup>に行かなきゃ行けないことを言う。

まあ、要するに出かけるって言ったただけだけど。

「どこに行くつもりなんですか?」

「向こうの、魔物の都市。シユウから話くらいは聞いてない？」  
シャオ君はうなずく。

「ですが、急に何をしに行くんですか？」

「いやあ、まあ、バイトという名のタダ働きに」

「はあ……？」

何だかよくわからない様子で。

まあ、普通はそうだよな。

……よし。

「じゃ、シャオ君もついてくる？」

「いいんですか？」

「特に問題ないよ」

ボクはそう言うとシャオ君を門<sup>ゲート</sup>まで引きずっていく。

そして、大きな魔法陣の描かれた部屋に着くと、ボクは中央の台座に魔力を流し込む。

すると、景色が一瞬で魔窟の南門に。

「じゃ、ようこそ我らが魔窟へ……こんなんでいいのかな？」

「……それ、何ですか？」

「いや、ここに来ると、みんな言っからさ」

ボクはそう言っくとログさんの店に向かった。

「……で、今日は何？」

「急な発注だ。期限は一週間で今回は武器の作成だ」

「え。メンドイ。で、数は？」

「ちょっと待ってる……コレだ」

そういうとログさんはボクにメモを渡してくる。

そこには武器について書かれていた。

……どうもオーダーメイドらしい。

「……煉さんに回そうよ」

煉さんはログさんの友人で、牛頭ウシコウ。この種族は地獄で拷問ガウかなんかをしてるやつだと思っただけど、この人は普通にとても優しい。そして、武器屋を営んでいて、それなりに評判はいいらしい。

「向こうも別口で忙しい」

「……二ヶ月続いでるの戦闘？」

「そういうことだ。向こうは主に修理に専念している。で、ここは魔法道具店。ぶっちゃけ、俺は武器も作れるからこっちに来た」

「うわあゝ。ログさん何でもありだね」

「お前のようなバカ弟子に言われたくない」

「ボクはアンタみたいなクソ師匠に弟子入りしたつもりはない。むしろ、煉さんの方がいいと思う」

ボクとログさんの間で火花が散る。

「……すみません。ソラさんはいったい何者なんですか？」

「ごく普通の魔法使い兼学生」

「違う、お前はただのチートだ。で、俺はデザインを考える。さつさと山岳区に行って魔法金属マナメタルとって来い。武器なんぞここではあまり作らんから、多めに採って来い」

「へいへい。風門」  
ふうもん

ボクは魔法で転移。

目の前には山岳区の採掘場。

何故かよくわからないけど、ここでは魔法金属が腐るほどあるらしい。

まあ、一応どここのだれだれが何のためについて、採掘場近くの小屋に言いに行かなきゃいけないんだけどね。

ボクは、カバンの魔術符から採掘用の魔法道具を取り出すと、その小屋に向かった。

side小狼

「……すみません。あの人は何者なんですか？」

俺は、目の前にいるログさんと呼ばれていたドワーフにたずねてみる。

「……というか、お前は誰だ？」

「俺は劉ル・シャオラン小狼です。李リー・シユウ樹と縁のある人間です」

「あの、格闘薬剤師か……」

「まあ……そうです」

間違っではないからよしとしよう。

だが、俺には気になっていることがある。

あの、ソラさんにしても、シユウにしても。

「で、ソラさんはいったい何者なんですか？」

「俺の弟子でチート、そして大馬鹿野郎だ」

「よくわかりません」

「だが、コレが一番しつくり来る」

目の前のドワーフは小さいくもがっしりとした背中で机に広げた大きな紙に向かって何かを書いている。

「……ソラさんという人はすごい人なんですか？」

「全然だ。龍造んトコの孫に言わせりゃアレはただの死亡フラグ製造機だとも言うだろうがな」

「では、何故シユウはここにとどまっているんですか？」

俺が一番気になっていたのがここだ。

シユウは、基本的にひとところにあまりとどまらない。

「……どういうことだ？」

「シユウはですね、本職は薬剤師なんです。格闘術はあくまで護身のために使えるだけです。そして、シユウは薬を貧困層の人のためにただ配って各地を回っているんです。だから、本来ならこんなところで立ち止まってる人じゃないんですよ」

「……まあ、よくわからんが、とにかく、あの薬剤師は基本的に根無し草なんだな？だが、ここに来てからここを離れないのが不思議なんだな？」

「そうです」

「なら、あのバカがいるからじゃねえのか？」

「……ソラさんですか？」

「まあ、あいつはバカだがな……なんかいると安心すんだよ」



わけがわからない。  
そんな理由だけで？

「それは暗い闇の中でも照らしてくれる小さな光かもな。まるであいつの属性みたいだな……」

「わからないです」

「ああ、俺もわからん」

その時、一瞬だけ風が巻き起こる。

「ただいま」

「おう、採れたか？」

「うん。ボクを誰だと思ってるの？」

そう言いつつソラさんは魔術符から金属をドバドバ出している。  
……というか、あんな魔術符ははじめてみた。俺も欲しい。

「ただのバカだ。……おい！コレ傷ついてるぞ！？何回傷をつけるなと言えは……」

「ボクは一ヶ月前にはじめたばっかの素人だよ！？しかも採掘はつい最近だ！そんな器用なことがたった数回でできるわけが無い！でも、選定は完璧でしょ！？」

「確かにコレはどれも一級品だが、お前だからこんなのは楽勝だろ！まあ、いい。今回は武器だが俺が作る。魔法はお前がしろ。い

いな？」

「へいへい。どうい魔法をしろと？」

そこからは俺にはよくわからない言葉で話を続けていく。  
でも、ソラさんを見てもやっぱりわからない。

・・・何でシユウは？

「あ、そういえばログさん。最近さ、新しいカバンの魔術符を考えた」

「作れ」

「早！？説明すらしてない！」

「魔術符に関してはお前はすでに俺が教えることはない。好きにしろ」

「教えられてすらいないけどね」

そういうとソラさんは先ほどの魔術符から何の魔法も魔力付与エンチャントされていない魔術符を取り出す。

それを机に置くと、何も書かれていない魔法陣を展開する。

「プログラミング  
構築開始」

そういうと魔法陣が光り、そこに文字や記号がどんどん書かれていく。

それが魔法陣いっぱいになると、光が収まる。

「インストール  
魔術導入」

そういうと今度は魔法陣が端からほどけて行って糸のようになる。その糸は魔術符に吸い込まれていく。全ての魔法陣が魔術符に取り込まれると、魔術符には先ほどの魔法陣が描かれていた。

「できたよ〜」

「で、今回は何だ？」

「名づけてポケットの魔術符」

そういうとソラさんはそばにあった紙を適当に手に取る。

「起動。登録コード『紙』」

そう言うのと、魔法陣が輝きだす。そこに手に持った紙を放り投げる。

「これで準備おっけ」

「前と変わらんぞ？」

「全然違うよ。来い『紙』！」

そう言いながら手を前に向けると、そこに突然魔法陣が出現しすぐに消える、その代わりにそこから先ほどの紙が現れる。

「戻れ『紙』」

そう言つと今度は紙が光つたかと思つと、ふつと消えてしまった。  
・・・すごい。ここの魔道具の技術は群を抜いている。

「すごいですね。こんなものは見た事がありません。それ以前にカバンの魔術符も初めて見ました」

俺は正直な感想を言う。

「だろうね。コレはボクが初めて成功させたんだよね？」

「そうだな。それで今回はその改良か・・・欠点はなんだ？」

え？それってどういう？

「うん。前よりもいろんな機能をつけたから容量キャパがカバンと比べると小さい。でも、それぐらいかな？それに、コレはカードよりも腕輪とかにしたほうがいいかも・・・」

「そうか。なら、今度作つといてやる」

「どうも」

「つて！？ちよつと！それはどういうことですか！？」

「ん？いや、カバンの方はただ空間を「じゃなくて！！あなたがコレを最初に作ったんですか！？」うん？まあ、そうだけど？」

・・・おかしい。

確か、魔道具職人はそれこそ魔法と製作スキルを極める必要があるため、こつこつ作品を作るには何年もの月日が必要なはず。

そして、ソラさんはさっきの話からすると、つい最近ログさんに弟子入りした。

「違うよ。無理やり強引に強制的に脅されていやいや弟子にされたんだ」

細かいことは言いとして……。

さっきまではログさんが作ったカバンの魔術符をソラさんが作っているのかと思っていた。それを改良して今回ポケットの魔術符ができたんだと思っていた。

「……ソラさんは何の魔物ですか？」

「ボクは全力で人間だ!!」

「……」

「本当だ。こいつは人間かどうか疑いたくなることが一分間に60回ほどあるが種族は人間だ」

「ちょ!?!一秒間に一回ボクは人間かどうか疑われていたの!?!」

「……ありえない。ソラさんは十六ですよね?魔法はおるか、魔道具職人のスキルまで覚えられるようには思えない」

「しょうがない。だからこいつはチートなんだよ。それに一つ言うところについてはわけありで魔法を覚えたのは……四月の半ばだな」

……もはや何に驚けばいいのかわからない。

「ボクの属性は『月』って言うのはシュウから聞いた？」

「・・・まあ、一応」

よくわからなかったのですが・・・。

「そのせいでボクは最初からレベルMAXになってるんだよ。それに最大の特徴は、この目」

そうだ・・・何で気づかなかったんだらう？

この人の目は普通のものとは一線を画している。

蒼っぽい銀に限りなく深い蒼のオッドアイ。

・・・シュウがここにいる理由はこの人、いや、この人の持つ力か？

「ま、ボクは魔力が『見える』ってこと。もちろん、君の魔力も視えてる。属性は『火』って所かな？」

「なるほど。こいつは狐の獣人族ビースティアンだな？つまりは狐火きつねびか？」

「な、何で？」

「コレがボクのパワー。・・・でも、この力でボクは一回だけみんなを傷つけたことがあるんだ」

ソラさんは急に自分の罪を告白して、苦しそうな表情になる。  
・・・何があつたんだ？

「いい加減にしろ。アレは事故だ」

「……でも、ボクがもつとこの力を「後悔は後でいつでもできる。だからお前はバカなんだ。お前の仲間を頼れ。今回のことは強いて言うなら一人で何とかしようとしたお前の責任だ。それを次に活かせ、ソラ」……」

何があつたんだろう？

だが、コレは俺のような部外者が聞いていい話じゃないと思い、俺は何も聞かなかった。

この空間をなんともいえない雰囲気支配する。

「ソラ〜！！」

「げぶう！？」

「……またか」

……一瞬で吹き飛んだ。

状況としてはソラさんに白髪の少女がタックルして、ソラさんは押し倒されている。

でも、ログさんの反応をみるといつものことらしい。

「何で帰つたの！？」

「いや、颯太さんに今日は帰ってもいいって言われたから……」

「一緒に帰れないよ！」

「いや、ほぼというか今日以外は常に一緒だよ。それに君には一応好きな人がいるとボクは聞いているし、こんなことをするのはどうか……って、リカサン？その拳は？」

「ソ・ラ・の・・・バカアアアアアアアアアア!!!」

「ぎゃああああああああ!!!??」

ビンタされただけのはずなのにソラさんは窓を突き破って外に吹っ飛ばされた。

・・・この人がシュウの言っていたリカさんとやらか。やたらと怪力な魔物の少女。

「・・・ソラさんにコレを言ったほうがいいのでしょうか?」

リカさんのソラさんに対する気持ちとか。

「いや、面白いからやめろ」

・・・そうですか。

表のほうはがやがやとうるさいが、そこから「またか」とか「さすがだな」とか「この野郎いつか殺す」とか聞こえる。おそらく、日常的な光景なんだろう。

「まあ、あいつがここに残るのがそんなに不思議なら本人に聞け。あいつはちゃんと教えると思うぞ?」

やはり、詰まるところ、それが一番いい手段なんだろう。

俺は自分のやったことに気づいてリカさんがソラさんのところに走っていくのを見ながらそう思った。



## 7話・THE REASON HERE

side 空志

「はあ、今日も疲れた」

「お前はいつもだろ？」

「ソラ君が疲れない日はないよね〜モグモグ」

「・・・アンタ、そんだけ食べて太らないの？」

「鈴音だから大丈夫なんだと思う」

「何か別の法則が働いてるんですね？」

「女の子にはうらやましいですっ」

「お前はつい最近太「黙るですう！」「甘い」

うん。今日はなかなかにぎやかだね。

「レオ、ゴハンだよ」

「・・・」

「リュウ、このごろレオがボクを無視する・・・コレが反抗期？」

「アホか？」

「レオ、コレを食べなさい」

リカが適当にゴハンを渡すとレオはそれをがつつく。  
・・・この野郎、ストか？

「レオが反抗期だ・・・」

「ソラ、泣かない・・・」

バシッ！ドカツ！ガシッ！

うん。みんなナイスコンビネーションだよ。

リカがボクの頭をなでようとしたところ止めたんだから。

「でも、何でボクは床にたたきつけられるかな？」

説明しよう。

ボクはリュウに椅子の足をけられて後ろに転倒。  
床に頭をぶつける。

シユウがリカの手をつかむ。  
説明終了。

「まあ、お前だからな」

「理由になつてない！！」

まあ、そんな感じで夕飯をみんな食べていく。  
実になぎやかだなあと何回も思いつつ食べていた。  
そこでボクはふっと思いついた。

「そういえば、あの後・・・ボクが倒れてからどうなったの？」  
そういうと今回は冬香が事細かにボクにいろいろ説明してくれた。  
とりあえず、わかったことは・・・。

「シユウは黒かったんだね」

「突っ込むところが間違ってるわ」

「まあ、シヤンは今は落ち着いてますが、龍造さんを見つけると薬が発動します」

なるほど。

龍造さん、ザマア。

で、わからないのがボクの変な抵抗力。

「何で？」

「魔法解析できるアンタがわからないならわたし達にもわかんないわよ」

「・・・じゃ、シユウに薬の作り方を教えてくれた人に聞くってのは？」

「私の両親ですね。ですが、以前の私同様そこらへんを旅してるので捕まえるのは難しいです」

「うん。八方塞？」

「まあ、連絡も取れるかどうかわかりませんが、一応しておきま

しょう。では、ご馳走様でした」

そういつとシユウは自分の分の食器を洗つとリビングを出て行つた。

たぶん、自分の部屋に向かったのかな？

「じゃ、俺も。ご馳走になりました」

「いいよ。コレくらい」

そういつとシャオ君も立ち上がってリビングを出て行った。

「……リュウ、どうしても邪魔をするの？」

「確実にお前は自分の欲望のままにしようとしてるよな？」

「ここで既成事実を！！」

「ここでやるな！オレのメシが大変なことになる！！」

……こっちでは何だかよくわからない戦いが始まるうとしていた。

side 樹

私が部屋に戻ると、程なくしてドアをノックする音が聞こえました。

まあ、そろそろ来るだろうと思ってはいましたが。

「どござ、あいてますよ」

「失礼する」

やっぱりシャオですね。

「聞きたいことは私がここにいる理由ですか？」

「……よくわかったな」

「まあ、それなりに長い付き合いですしね」

「で、何でお前のようなヤツがここにどまつてるんだ？」

「……質問に質問で返すようで悪いのですが、何故そんなことを？」

「いや、ただお前が師匠の元を出てくときに俺達が出て行かないで欲しいと頼んだときとこのときの違いが知りたくて……」

そういえばソラさんには話してませんでしたね。

私たちは同じ師の元で格闘技を習い、私はある程度の力がついたら判断すると、兼ねてから両親のように世界を旅して薬を配ろうと思っていました。

そして、そのときはこの双子に目に涙をためながらも泣くのをこらえて私に出て行かないで欲しいといってくれ、私も自分の決意が揺らぎそうだったのを思い出します。

ですが、私は旅を一旦やめ、ここにどまつている。やはり、それなりに理由があると思ってるんでしょうね。

……一応、あるんですかね？

「そうですね。・・・ソラさん達に会う前の話をしましょう」

「ソラさんに会う前？」

「はい。まず、私は薬の作成にどうしても魔物に聞かないとわからないようなものがありました。少し、急を要したのでかなり急いで情報を集め、一人の魔物・・・吸血鬼の少女がいると私がそのときに行った町の周辺で聞きました」

実は、リカさんの種族のことは何も書いてません。

シャオは静かに私の話を聴いています。

私は話を続けます。

「吸血鬼ですからそれなりに話も通じると思っ、薬草の所在を聞こうとしたのですが、あいにく逃げられてしまいました」

「・・・何故だ？吸血鬼は好戦的な気性を持つと聞いているぞ？」

「いえ、それは間違いですよ。それはあくまで自衛のためです。その少女は争いごとが嫌いだったようで・・・さらに後でわかったことですが、どうも人間恐怖症だったようです」

「・・・よくそんなのがわかったな」

「まあ、シャオも見ていればわかります。・・・何はともあれ私は躍起になって追いかけて、薬草を聞きだそうとしました。そして、とある町で冬香さんに出会いました」

「あの眼鏡の数術師か？」

「はい。その町で彼女は私の追ってる吸血鬼の少女の討伐依頼を遂行しようとしていたようです」

「それで？」

「そこでとある人たちに邪魔をされて一度失敗しました」

まあ、ソラさんたちですね。

あのととき、ソラさんの魔法と鈴音さんの魔法で意識を刈り取られて警察の方々のお世話になりました。そのときは私の種族と属性の関係上、ただ巻き込まれたと判断されて事情聴取だけでしたすみませんが。

「ちょっとだけ警察にお世話になった後に、冬香さんが私にコンタクトをとり、利害が一致したために一時的に組みました」

「聞けば、あの冬香さんとやらは本当にすごいんだろ？なら、楽勝じゃないのか？」

「いえ、何故か、まあ戦闘慣れしていたのか探し出すのに苦労しました・・・見つけたときはほとんど奇跡に近いとさえ思いました。そして、近くにその吸血鬼を助けた人がいましたので吸血鬼だけを呼びました」

「そんなことができたのか？」

「言ったでしょう？その吸血鬼は争いごとを好まない、と。そして、自分を助けてくれた人を巻き込みたくなかったんですよ」

「・・・おかしな吸血鬼もいたんだな」

「・・・そして、おびき出すことに成功しました」

あの時、私は吸血鬼に関して何も感じなかった。

アレは魔物の中でも最強で、最悪、闇の象徴だと私も心から信じ  
ていました。

だから、殺すことに何の疑問も抱かなかった。

ですが、私にはあのときの言葉がまだハッキリと思い出せます。

『わたしは死にたくない』

『わたし、アタシはソラヤスズネやリュウと一緒にいたい!!』

ですが、私はそこをあえてスルーします。

「私たちは全力で吸血鬼の排除に当たりました。そして、また、  
出てきたんです」

「・・・タイミングがよすぎる」

「そうですね。ある意味主人公体質ですから。そして、また私た  
ちの前に立ったんです。非常識な魔法を放たれて、チートなスキル  
で対応されて、本当に大変でした」

「・・・そいつらに教えなかったのか？」



「もちろん。教えました。ですが、その方たちはほとんど最初から知ってたんです。しかも、私たちより詳しく、その吸血鬼が始祖の血統だということまで」

「ッ！？バカか！？そいつらは！？」

「きつとそうなんですよ」

「だが、シユウなら勝つただろ」

それは昔からよく知るからいえることです。ですが、甘いですね。ソラさんは私より強いです。心が……。

本人はそうは思っていないようですが。

「いえ、ボコボコにされました」

「な！？」

「アレは心的外傷メンタルものです。思い出ただけで体がしびれそうです」

「たかが電気の属性にやられたのか！？」

「それで済めばよかったですかね……。まあ、とにかく、冬香さんも本当に覚醒したその方にやられました」

「どういうことだ！？」

「私と戦ったときは完全に力をモノにできてなかったんです。も

つと言つと、そのとき敵の方は魔力ゼロだったそうです。それにあのチート防御スキルもありましたし」

ホントに今思い出しても笑うしかありません。

シヤオも驚きのあまり、口をぽかんと開けたままです。

「まあ、私と冬香さんは敵に情けをかけられて生きてます。そして、<sup>ネスト</sup>魔窟に連れて行かれました。ちなみに薬草はそこで見つかり、すぐに作った後郵便で届けました」

「魔窟？・・・まさか!？」

「そうです。これは一カ月前のことです。私達とソラさんたちが始めてあつた日のことです」

「信じられない・・・」

「・・・リカさんのこと、言ってもいいのでしょうか？みなさん?」

私はドアに向かって言う。

先ほどから人の気配がしてましたからね。

「ははははは、バレてたか」

「今回はソラが初参加だ。いつもお前はされる側だったな」

「やっぱりシュウ君はムリだね」

「でも、その話懐かしいわね」





「おはよう。双子君達」

「「ぎゃああああああああ!!??」」

「人の顔を見て叫ぶとは失礼な」

「ソラ君がやったんだよね？」

「・・・こいつもいろいろと危険だからね」

「お、お前！何者だよ!!」

シャオの口調が乱れてますね。  
相当錯乱しています。

「ボクは三谷空志。簡単に言うと、魔物の側に属す人間で『月』と『天空』の多重属性魔法使い」

「ついでにこいつは勇者、三谷隼人の孫、オレは魔王で理事長、間龍造の孫、間隆介。『闇』属性の自称、魔法双剣士」

「わたしは『逆』<sup>リバーズ</sup>属性で、魔物側の魔法使い、坂崎鈴音だよ」

「アタシは始祖の血統を持つとされてる吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>、アンジェリカ・シエルス」

「わたしは元敵にして『氷』と『大地』の多重属性を持つ数法術師、平地冬香よ」

「最後にわたしですね。格闘士兼薬剤師、リー・シユウ李樹です」

「何でこんなにいる人材がこんなにいるんですう!？」

「そこらのギルドパーティよりヤバいぞ!？」

「・・・いい感じに錯乱してますね」

「まあ、ボク等は非常識の塊だからね」

「お前が言うな。非常識の塊筆頭が」

「リュウ君も十分筆頭だと思うよ」

「でも、よく考えると、ホントにすごいね」

「確かに周りがチートすぎて気付かなかっただけど、このチームって最強よね？」

「というか!貴方達ですね!つい最近巷で噂になってるやたらと強い魔物!」

「噂?」

「どういふことでしょう?」

「シユウ達は二回ほど人間から襲撃を二回ほど受けてますね!？」

「「「「「「「「「「「「」

「やっぱり！・・・貴方達は噂になってるんですよ」

シャオが話してくれたのはこういう内容でした。

まず、とある魔物の集落を襲おうとした炎の帝国の指揮官だった『消滅の賢者』が六人の・・・最終的には一人の子供にボコボコされて帰ってきた。

こちらの世界で勝手に暴走した魔術師をこれまた同じだろう六人の少年少女にボコボコにされて帰ってきた。

・・・真実ですね。

帰ってきた兵が言うには二人はやたらと格闘術に通じていて、片方は自分より大きな鎌を振り回していた少女、見た目が吸血鬼のようだったのと、美少女だったため通り名が『吸血姫』キョウケツキ。リカさんですね。まごうことなくリカさんですね。

もう一人は薬や格闘術で反則な強さで敵を蹂躪した人間っぽい種族。通り名が『格闘薬剤師』バトルメディスン。

・・・世間一般でも私はそういう扱いなんです。

そして二人の魔法使い、方や数法術式で敵を数の暴力で殲滅する眼鏡の少女。『方程式の賢者』マトリクス・セイジ。

冬香さんですか・・・。

二つの双剣から闇の魔法を繰り出す全身黒ずくめの魔法使いの少年。『双黒の魔剣士』デュアルブレイド。

魔王っぽい響きです。リウウさんですね。

そして、未知の魔法を使う二人の魔法使い。片方はどんな魔法だろうと打ち消し、反射し、絶対的な力を持つ、しかし見た目天然そうな少女。『魔法壊し』アンチ・ウィザード。

鈴音さんですね。これまた物騒な・・・。

そして、最後・・・見たこともない魔法を使い、さらには古代魔術までをも使用する蒼と銀の瞳を持つオッドアイの少年。『奇術師』マジシャン。

確実にソラさんですね。

そして、私達にまとめてつけられた通り名が……。

「『闇夜の奇術師団』だそうですね。」

「……何この中二病」

「いや、これは指名手配されてるぞ？名前がわかんねえから適当にそれっぽい通り名で、その特徴に近いヤツを見つけたら捕まえるっつーてんだよ。簡単に言つと、有名人になつちまつたんだよ」

「え？わたし達有名になつちやつたの〜！？」

「ええ。負の方向でね」

「ええ〜！？何で〜？」

「アタシ達は襲ってきた人間を全員ぶっ飛ばしてるの。だから、人間からしたら、アタシ達は完璧に『悪』なの」

「むう〜。そう言えばわたし達は魔物側ダイクサイドだもんね〜」

「女性がぶっ飛ばすなどそんな言葉は使つてはいけません」

「でも、確実にいろいろとダメですう。周りは敵だらけだと考えた方が妥当ですう」

「そうだ。今回はこのバカ姉の言つとおりだ」

「「「「「で？」「」「」「」



「……は？」

この双子は勘違いをしてるようですね。

「オレ達がそんな簡単にやられるとでも思ってるのか？」

「アンタ等の目は節穴よ」

「貴方達は世界を敵に回してるようなものですよ!？」

「アタシは生まれた時から世界の敵」

「うーん……わたし達ってホントは悪いことしてないのにね」

「なんかさ、今、言われてすつきりした。ボク等はすでに世界を敵に回してる?……上等だよ。ボク等は自分が正しいと信じる路<sup>みち</sup>を全力でまっすぐ突き進むだけだから。それが世界を敵に回しても」

「そうですね。今更ですね。まあ、こんなふざけて、さらにはぶっ飛んだ日常で、退屈せず、私が必要とされているようなのでここにいる。それが私がここにいる答えです」

「まあ、安心しろ。シユウはすでにオレ達の仲間だ。勝手に抜け出そうとすれば残り五人でお前に首輪をつけてでもつれ帰る」

「それはかわいいそうだよ」

「なら、わたしが氷漬けにするわ」

「アタシは殴っても止めるよ」

「まあ、そういうことです。簡単には帰してくれませんよ」

双子はぼけーっと私達を見えています。

「……シユウはいい仲間を見つけたですう」

以外にも、最初にそんなことを言ったのはシャンでした。  
いい仲間かどうかはたまに微妙に思うときがありますが……。

「いいいのか？お前はあわよくばシユウを連れ戻そうとしてたじやないか」

……なるほど、そういう下心が。

「いいですう。……シユウ、たまにはこっちに帰ってきて欲しいですう」

「ええ、もちろん」

話がいい感じにまとまりました。  
これでハッピーエンドですね。

「でも、師匠が雑用係が減ったと怒っていたですう」

「すみません。しばらくは帰れそうにありません」

「やっぱり連れ帰るですう！」

「秘儀！龍造さんの写真です！」

「うわ〜い!!おじ様〜?」

よかったです、こんなこともあるつかと用意していて。

「いや、これがホントの効果!?!」

「そっくだよ〜。ソラ。ちょこ〜とこっちに来ない?」

「無、ちょ!?!さわあああああああ!?!?!」

「あ〜。やつちゃったね〜」

「ソラがまた気絶したわ」

「よし、リカ。お前は罰として全員の食器を片づける。今回はリカ以外でソラを看<sup>み</sup>る」

「な・・・この鬼畜うううううううううううう!!!!!!!!!!」

結局はなんだかんだでにぎやかですね。  
というか、苦情は来ないのでしょうか?

## 8話・PARTY

side 龍造

「……面倒じゃ」

ぶつちやけ、わしは行きたくない。

何が面白くて会議なんぞにいかにかいかなのじゃ？

「何を隆介みたいなことを……」

「何でわしがこんなことをせにやならんのじゃ？」

「お義父様が魔窟ネストの魔王だからです」

十五年もほつたらかしたんじゃぞ？

向こうのヤツらはわしが死んどると考えとるんじゃないのかのう？

「いえ、一応颯太さんが変わりに出席している説明してましたので」

……勝手に心を読むでない。

というか、颯太は後で今月の給料は減俸じゃな。

「シバきますよ？」

「……冗談じゃ」

まあ、既に逃げられんしの……。

わしの目の前には大きな建物、というか、明らかに魔王城としか

言いようのない城がある。

「久しぶりじゃな。・・・各国の魔王は？」

「私たちが最後です」

そうか、ならさっさと行くかの。  
魔王デモンバレーの会合にの・・・。

side 空志

「昨日も大変な目にあつた・・・」

翌日、いつものように校舎でシユウ達と別れた後。  
教室までの道のりを適当に話して歩く。

「まあ、いつものことだ。」

「ソラ君ドンマイ。」

「・・・」

で、何故にリカサンは頬を風船のように膨らませて不機嫌なんですか？

ボクは目でリュウに聞いてみる。

「さあな」

そうか・・・わからないのか。  
それならしょうがない。

ボクは教室に着くと、扉を開ける。  
そして、目の前にはおびただしい数の銃。  
それらの銃口は全てボクに向けられている。

「……どいて」

「コトツチ！」「」

コレが最近のパターンだ。

まあ、リカがボクになんかしない限り大丈夫だということがわかった。

でも、「殺せない」とか言わないで欲しい。

そして、クラスのみんなは適当に話をしだす。ボク等も席にとりあえずつく。

「そーいや聞いたか？」

「ああ、どうやら転校生というか留学生っぽいのが来たらしいな」

……あの双子が。

てか、龍造さんの権限で交換留学生かなんかの扱いにでもしたのかな？

「そいつらは李の知り合いらしいぞ」

「だが、三谷とも関係があつて、昨日三谷はその双子の片割れに殺されかけたらしい」

すげー。

何でそんなに正確な情報がわかるの？

「フツ・・・三谷っち甘いよ」

「突然現れて何を言い出すの？」

なんか突然キザなセリフとともに宇佐野さんが現れた。

「あれしきの情報、ワタシにかかればチヨチヨのチヨイなのだよ」

「ものすごい全力で死語だよな」

その言葉を見殺してウサギのステッカーが貼られた電子手帳を操作する宇佐野さん。

「・・・あの双子の年齢は十四の一つ下。・・・瓜二つだけ二卵性双生児で姉が香桜シャンホウ、弟が小狼シャオラン。でも、精神年齢的には弟のほうが年上」

何でそんなことを知ってるんだろう？

てか、いきなりクール宇佐野さんにならないでよ。しかも、機械をいじるところなるんだね。

「・・・後、昨日そっちの寮に泊まった際に、また騒動があったみたいだけど本当？」

「ホントにすごい情報網だね！？ボクのプライベートが心配になってきた」

「・・・今回の新作魔術符が欲しい。・・・ポケットの魔術符とか言うヤツ。」

「うおーい！？マジで！？そんなことまで！？」

「昨日作ったばっかだよ！？  
何で知ってんの！？」

「……ツフ」

「その含み笑がものすごく怖い」

ボクがそんな風に言葉を返しているときに宇佐野さんは電子手帳を自分のポケットに仕舞う。

「まあ、冗談はここまでにして」

「……アレが冗談？」

「で、本題はコレなのだ！」

バツとボクの目の前に一枚の紙を突きつける。  
なんか書いてあるっぽい。

ボクはそれを手にとって読んでみる。

「……寮祭？」

「そう、寮生だけのお祭りのことなのだ」

「でも、何でボク？こっちの寮はリュウが寮長みたいなもんだよ  
？」



「だって寝てた。それにワタシは三谷っち二号になる気はないのだよ」

宇佐野さんが指で示しながら言う。

ボクは宇佐野さんの指の方向を見ると、そこには寝てるにも関わらずに女子に囲まれてハーレムを形成しているボクの悪友が。

……うらやましいヤツめ。

「……ソラ？」

「ん？な……に？」

リカに声をかけられてボクがそっちのほうを向くと、やたらとすごい量の魔力と怒気を垂れ流しているリカの姿があった。

「あれ？……三谷っち、目が？」

「……助けて」

でも、宇佐野さんはどっちかというと冬香に近い人間。

宇佐野さんは状況を理解したのか、ニヤリと笑うと。

「そういえば、三谷っちは女子になんか頼まれてたよね」

え？そんなこと？

別にアレは猫がいなくなったから探……。

バキッ！！

「……リカサン？何故にシャーペンをへし折ったのでしょうか？」



「ザ・死亡フラグ!？」

「ソラ、あの世で一緒に楽しく暮らそう?。」

「いや、だからあの世に逝く時点で幸せじゃないぎゃあああああああああ!?!?!?!?!?。」

side 隆介

「つたく、眠いのソラはせつせと死亡フラグ立てやがって。いや、立ててもいいがこっちを巻き込むな」

「まあ、いつものことだよな」

「……それが日常化してるのがおかしいと思うのはあたしだけ?。」

「まあ、ドンマイだな」

「そういう割りに田中っちの顔が満面の笑みを浮かべてるNE!」

教室からはドカ!とかバキとかグシャ!とか出たはいけない音が出ている気がするが、まあ……大丈夫だ。たぶん。

時折悲鳴が聞こえてるしな。死んではない。まあ、虫の息かもしれないがな。

「あ、間クン、三谷っちにも話したけどコレ」

そついうと宇佐野はオレに紙を見せて寮祭のことを説明する。まあ、実は知ってたんだがメンドイから言っただけだった。

「ね〜ね〜。りょーさいって何〜?」

「簡単に言うと、寮生でお祭りみたいなことをすんだよ」

「つて、言ってもただのお遊びだけだね〜」

「へ〜。それっていつなの〜?」

「放課後」

「じゃ、わたし達は大変だね〜」

「何がだ?」

「だって、魔法の練習の後でしょ〜?」

「そっぴやまだ言ってなかつたな。ジジイとお袋は学校にいない。だから今日の午後は普通に授業を受けるだとか。昼に言っつもりだつたんだがな」

その時は冬香にシユウもいるからな。

「じゃ、今日はお祭りに出れるね〜! やった〜!」

「でも、三谷君は別に死ぬような思いをする午後が無いのに無駄に今、死ぬような思いに遭ってるんだよね?」

「」「」「」「」

多湖の言葉に何もオレ達は反応できない。

「ソラ〜？」

「し……ぬ……」

教室からやたらとエロいリカの声と、今にも死にそうなソラの声が聞こえる。

「……死ぬなよ」

心のそこからそう思った。

side 空志

「……ここは？」

ボクはいつの間にか寝ていたようだ。  
てか、ここってつい最近よくお世話になるあそこだよ？  
ボクが上半身を起こすと、シャツと音を立てて颯太さんがカーテンを引いた。

「……やっぱり保健室ですか」

「まあ……ちなみに君が一番よく利用してるよ」  
今度からできるだけ気をつけます。  
無理かも知れないけど……。

「今、何時ですか？」

「ちょうどお昼休みですね」

・・・リカはボクに相当な恨みがあるらしい。

「まあ、それなら屋上に行けばみんながいると思つんで行きます」

ボクは床にあつた上履きを履いて保健室を出て行くこととする。

「そういえば、今日の訓練はないことは聞いているのかい？」

「え？そうなんですか？」

「ええ、まあ。おそらく、屋上で隆介が説明するでしょう」

「じゃ、早く行かないと」

ボクはダッシュで屋上に向かうべく保健室の扉を開ける。  
でも、何故か目の前には数々の銃口が。

「・・・みんな、錯乱でもしたの？」

「この野郎！アンジェリカさんに保健室につれて行ってもらった  
だろうが！？」

「万死に値する！！」

「よつて死刑！！」

「最悪な裁判だよね！？」

どつきも、今日は厄日らしい。

「お、来たかって、またなんでそんなに息が上がってるんだ？」

「いや、ちょっと運動を。・・・テロとリアル鬼ごっこするって  
いうヤツ」

「要するにいつものヤツだね。ハイ、コレがソラ君の分だよ」

「ありがとう」

「・・・」

何でリカはさつきから不機嫌なんだろう？

・・・アレか？やっぱボクに恨みでもあるのかな？

「ねえ、冬香」

「あによっ？」

冬香は紅茶を飲みながらボクに言う。

「いや、リカってボクに恨みでもあるのかな？」

「・・・それっていつぞやの休み時間の話？」

リュウが話したのかな？

いや、アレだけの修羅場だから耳に入らないほうがおかしいか？

「たぶんそれ」

冬香は少し考えるしぐさを見ると、すぐに答えてくれた。

「ある意味そうかもしれないわね」

「マジか・・・」

ちよつとシヨックだ。

「おそらくソラさんが考えていることとは違いますよっ」

「え？違うの？」

じゃ、どじいじいことっ？

「それより、話すことがある。いいか？」

リュウはそういつとボク等に今日の訓練のことを言った。

「今日は、ジジイにお袋は急用で今日は学校にいねえ。つーわけで、今日は普通に授業に出るとさ」

そういつとリュウは昼食を再開。

なんかすげー適当に終わった・・・。



「ん？・・・そういえばよく考えると、ボクはいつも死ぬような  
思いをする優子さんの訓練イジメを受けなくていいのに今日は何故かり力  
に死ぬような目に遭わされたってコト？」

ボクの言葉にみんなは目をつつーっと逸らす。

・・・。

「リカ？」

「・・・ソラが悪い」

リカは何故か頬を赤らめてそっぽ向く。

「・・・何故に？」

「・・・その通りだと思っ」「」「」

「・・・理不尽だ」

「まあ、そんなわけだから、今日は寮祭に参加しとけ。双子もな。  
・・・つかどこだ？」

「ああ、あの二人ならどこかに行きました」

「アバウトね」

「まあ、後でシユウ君が伝えれば問題ないよ」

「で、実際には寮祭で何をするの？」

「お呼びですか」

「「「「「「」」」」」」

何でこうも宇佐野さんは神出鬼没なんだろう？

「実は、キャラが濃いくせに影が薄いからって作者さんが・・・」

「キサマ、ここでメタ発言か!？」

「ここでワタシの名を天下に轟かせるのだZE!!」

ダメだ、こいつは何とかしないと・・・。

「で、何で出てきたの？」

「寮祭について教えようってワタシの優しさサ!!」

「・・・では、教えていただけます？」

「モチ!まず、寮祭とは・・・チームを組んで競技をします!」

「へえ〜。で?」

「フツ・・・冬香っち。コレは君が好きな話だよ」

「だから何よ?」

「なんと!優勝すると景品〇「金一封!」」

「わたし、やるわー!!」

ガシィっと手を握りあう成金ども。

でも、寮祭ってそんな豪華なものなの？

「おい。理事長はオレのジジイだぞ？」

「……なるほど」

それなら全てに納得できる。

ホントはしちゃだめなんだろうけどね。

まあ、今は寮祭だね。

「で、ボク等は寮祭に出るはいいけど、何をするの？」

「さあ？ジジイがオレ等にピッタリなヤツを選んだとか言ってる  
ゴメン。急に腹痛で頭が痛い」……ベタな仮病はやめる。それに、  
今回はやらねえとかなり大変なことになる」

「……聞きたくないのですがちなみに？」

「特別ゲストでアリアが来るらしい」

「ゴメンね〜。わたし急にお腹が痛くなったから外科病院に行っ  
てくるね〜」

「……鈴音、それは内科に行かないと治らない」

「ああ、それにな、もし来なかったらあいつはヤバイ。主に社会的な意味で」

確かにヤバそうだ。

アレはもはや天才だけどそれ以上に天災だからね。  
ボクには最悪な印象しかない。

「確かに社会的にマズい。でも、ボクは普通に参加しても死亡フラグな気がするのは何でだろう？」

「……ソラだから？」

「……ボクはリカに嫌われるようなことをしたの？」

リカは何故かフルフルと顔を赤くして否定。  
相当怒ってる……。

「三谷っちが考えてることと確実に逆だとワタシは思うのだよ  
トスン君」

「ですね〜。ホームズさん。わたしもそう思うよ〜」

……このアホ丸出しのバカ二人は放っておこう。  
まあ、今日は寮祭を楽しみますか。

## 9話・LET・S PLAY

side空志

「で、ここですか?」

「らしいな」

ここは間学園の高等部の体育館。

ここの中、高の寮生が集合して、いろいろと遊ぶらしい。

でも、ぶつちやけボクは寮でいろいろと実験したい事があったの  
に……。

ここは適当に負けて寮に帰ろうかな?

「手加減して負けたらアンタを殺すわ」

「全力でがんばります!!」

うん。何事も手を抜くのはダメだね。

やっぱりこういうことは全力でやらないと。

「……」

「……リカサン?何でしょうか?」

「……」

リカは何故かずっと不機嫌なままだ。

ボクは周りの人にアイコンタクトをとって見たけど何だかよくわ  
からない。

たぶん、ボクがなんか原因なんだろうっていうのは雰囲気でわかるんだけどね。

「何かおいしい物が出るのかな？」

「鈴音さん。その滝のようなよだれを拭いてください」

「ほえ？」

「アンタはどうして太らないの？」

「うん・・・体質？」

「・・・アンタは女の敵よ！！」

まあ、いつものカオスな雰囲気でボク等は体育館に。

既に、体育館の中はたくさんの人であふれていて、この寮祭の実行委員らしき人が声を張り上げて整列を呼びかけている。

「何だかすごくにぎやかだね」

「・・・俺達がこんなところにもいいんですか？」

「ね〜ね〜、シャオ〜。景品て何なの？」

「お前はもう少し遠慮しろ」

「まあ、ジジイに出ろって言われたんなら大丈夫だ」

「お？お前等も来たのか？」

低いお腹に響くような声で現れたのはみんな大好きガントさん。

「……俺の名前は元太だ。もしくは原土先生と呼べ」

「で、何でガントさんがここに？」

「……俺が寮の管理を任されている」

「大変だね」

「まあ、さっさと並べ。コレじゃ收拾がつかん。……お前等はそこだ」

そういつとガントさんは隅のほうを指す。

「んじゃ、オレ達は既に集まってるしそこでおとなしくしてる」

そして、ボク等は言われたところに座る。

「……何でシユウ達は正座なの？」

「「癖で(ですう)」「」」

まあ、いいや。始まるまでのんびりしていよう。

……なんだろう？

視線を感じる。

いや、コレってむしろ殺気！？

ボクは周りをさっさと見回してみる。

「おい、あいつ等何だ？」

「知らねえのか？あれが例の一年だ。」

「マジかよ！？・・・だが、あそこの不良っぽいヤツと長髪のヤツがいるのはさておいとくとして、あのごく平凡でモテなさそうな男子がなぜあそこにいるんだ？」

・・・それって確実にボクのことだよな？  
しかも不良はリュウで長髪はシュウだし。

「確かに・・・あれほどのレベルの中で何故にあいつだけ・・・」

「ちょ！？リカちゃん！？」

「やめなさい！ここで暴れるのは！..！」

「ソラの悪口言った・・・」

・・・そろそろ逃げないとここが阿鼻叫喚の地獄絵図に早変わりしそうだ。

「へい！れでいーす、えんど、じえんとるめーん！大変長らくお待たせしました！！寮祭をおっばじめるぞ！ノヤロウ！..！」

「「「「おお~~~~~」」」」

何とか修羅場は回避したようだ。

でも、この声、どこかで聞いたことがあるような・・・？  
ボクは前を見る。



そこには耳がとがった金髪の綺麗な女の人が・・・。

「アリアさんかい!?」

「何だい少年!!わたしは特別ゲストのアリアさんです!」

「地声かよ!?声でかい!?!」

「・・・一つ言っとくとお前はまた死亡フラグをいくつか立てたぞ?」

は?

いくらなんでもそんなわけが・・・。

「おい。またヤツの関係者だぞ?」

「・・・つち。何であいつの周りには美人が集まるんだよ」

「そろそろ死んでもらうべきだな」

「明日あたりに闇討ちを・・・」

うおい!?

みんな騙されちゃいけない!!

アレは人の皮をかぶった・・・いや、エルフの皮をかぶった全世界の厄介ごとが詰まったパンドラの匣はこだぞ!?希望とかは一切ない!!

「ある、偉人はこう言ってるんですよ?・・・『美人は何をしても許される』」

「ダメだ！そんな法則は！！」

その被害に巻き込まれるほうの身にもなつて！！  
そんなボク等はお構い無しにアリアさんはいろいろと齋祭についての説明をしてるようだ。

ボクは何故かものすごくここから逃げ出したい衝動に駆られてい

る。

いや、十割がたアリアさんのせいなんだけど・・・。

「・・・お腹が「お袋にシバかれても責任はとれん」・・・」

ヤバイな・・・逃げ場が無いか？

いや、アリアさんだつて一応はオトナなんだし、しかもここはま  
してや魔法でドンパチしあつような世界じゃないからちゃんと・・・

。 「というわけでヤローども！戦争を始める！」

「「「イエエー—————！！！！」」」

アンタの常識とか良心を信じたボクがバカだったよ。

「で、ボク等は何故かバスケットに登録されてた、と」

「まあ、別にいいんじゃないね？」

「戦争とか言ってたけど大丈夫・・・だといいいよね」

「十中八九無理でしょうね」

「あの人は面白くなければ自分から何か仕掛ける人種ね」

「・・・何で皆さんはそんなに落ち込んでるんですか？」

「そんなにあのキレーなおねえさんが嫌ですか？」

「『嫌だ』」

「みんな酷い・・・」

「・・・ホントにアンタも神出鬼没だよね。」

「で、今回はどんな厄介ごとを持ち込んできたの？」

「失礼な！わたしは一市長（魔王）に留守の間を頼まれただけ！」

「・・・もつとマシな人はいなかったの？」

「リカ、人型の魔物が魔窟にはそんなにいないんだよ。ログのおっさんとかは面倒だとか言ってるやらねえしな」

「それで、こうなったわけね・・・」

「まあ、がんばりなさい！」

そう言ってボクの背中をバシバシ叩いていくとその場を去っていった。

……何がしたかったんだろう？

『バスケットをはじめます。出場する人はコートに出てください。』

「ボク等って何試合目？」

「最初」

「いきなりですか？」

「五人はどうやって決める？」

「アタシ、バスケットはしたことが無い」

「じゃ、リカは後。ソラと入れ替わり」

「何で!？」

「ソラと接触した瞬間にソラは倒れて、あるいは周りの嫉妬に狂ったヤツに殺されるからだ」

……確かに。

もし、前みたいに抱きついたら大変なことになるしね。マジでありがとう。リュウ。

「わたしは食べる専門だからいいよ」

「……坂崎は応援。冬香？」

「別にいいわよ」

「私もできると思います」

「俺でよければ……」

「わたしもやるですっ！」

「じゃ、メンバーはまず、ソラ、シユウ、冬香、双子。これでやってみよう。確か女子は得点二倍だったからな」

「女子補正か……」

まあ、適当にやっておこう。

ボク達はコートに立つ。

……何でだろう？向こうのチームの皆さんは妙に殺気立ってますが？

「……確実に俺達でなく、ソラさんだけですな」

「何で!？」

「あれじゃない？逃げれない今のうちにボコボコにしてやるって言っ……」

「ファールか!？やつらの狙いはファールだな!？」

「なら、作戦は簡単だ。ソラが囷。他で一気に攻める。以上だ」

そういつとリュウはベンチに戻っていく。

「って、うおい!?!」

「わかりました」

「わかったですう!」

そういつとシュウはバスケットコートの中にある円に入る。

そこには敵チームの背の高い男子とシュウが中にいる。すると、審判の人が……って、アリアさんかい!?! まあ、ボールを上に向けてる。

って、もう始まるの!?!

「ソラ! 逝け!」

「字が違う!」

シュウは相手のほうが身長が高いにも関わらずボールをボクのほうへはじく。

ボクはそれをとる。

「うおおおおおおおおお!」

「死ねええええええええええ!」

「マジかよ!?!」

ボクはしょうが無いので全力でダッシュ。それと同時にボクの耳には他の音が聞こえなくなる。目の前にいるのは敵、そしてゴール

のみ。

ドリブルをして目の前の二人の敵の間を抜ける。驚いているけど今、ボクはそれどころじゃない。ボールのコントロールで精一杯だ。

また、そこに敵がディフェンスをしに来る。

ボクはスピードに緩急をつけてまた、敵を抜く。

そして、目の前にはゴール。

ボクはそのまま走りながらシュート　レイアップを決める。ボールはゴールに入り、ストーンと地面に落ちた。

「・・・少しなまつたかな？」

side 隆介

よし、ソラはへまをせず点を入れたか。

敵はいきなりの速攻に呆然としている。

ソラを甘くみすぎたな。

「・・・カツコイイ／／／／」

「・・・ねえねえ。ソラ君は魔法を使ったの？」

「アホか？こんなところで使うか？」

まあ、リカはほつとこう。

つか、ソラは魔法以外は平凡な人間っつー認識らしいな。

「あいつはな、一応中学時にバスケットしてたんだよ」

「へえ」

「まあ、あいつは速攻、セーフティ・・・とにかく、走ることに  
関しては結構なレベル。だがな、問題がある。」

そういうと、笛が鳴る。

・・・ソラがファールを貰ったらしい。

そして、フリースローラインに立つと、構える。

「あいつ、シュートがへたくそなんだよ」

二本のうち、一本も入らずに敵にボールが奪われる。

「・・・さすがソラ君。ちゃんとオチもあつたんだね」

side 空志

「・・・遺言は？」

「死にたくないです」

「何でフリースローを二本とも外すのよ!」

「まあまあ、いいじゃないですか。私達のミスで敵に渡ったボ  
ールのディフェンスで疲れてたんですよ」

ゴメン、シュウ。

違うんだ。ボクは純粹にシュートだけが下手なんだ。

攻撃手段はレイアップとゴール下のシュートだけなんだよ。  
ぶっちゃけ、ボクは走るだけの選手なんだ。





得点は30対25。

ボク等が微妙に勝ってる。

まあ、このぐらいの点差だったらいつ、覆されるかわからない。

「ソラ君バスケットしてたんだね」

「うん。まあね。・・・スズは何でポテチを？」

「持ってきたんだ」。えへへ」

・・・まあ、コレがスズだししょうがない。

ボクは目の前の試合に集中する。

リュウが指示を飛ばして的確にパスをする。そして、隙があればシュートを狙っている。

さすがだね。

でも、リカは人と接触するのが嫌なのか少し距離を置いている。

まあ、アレはしょうがない。

それに双子とリュウも十分に動けるしね。

「やっぱ。リュウはリーダーというかカリスマ的な物がある気がする」

「でも、アレは肝心なトコでポ力をやらかすタイプよ」

「・・・否定はできないかなあ？」

「まあ、リュウ君たまに壊れるもんね」

そして、ボクはこの一進一退の攻防を繰り返す試合を見ていた。

「シュウ！」

「……マズい！リュウ！ディフェンスだ！カットされる！」

ボクが言った瞬間にリュウの死角にいた相手にボールをカットされた。

そして、そのまま速攻にもっていかれ、敵に点が入る。

得点は……40対41。

……まあ、入れ返せばいい。次はボク等だ。

でも、ここでも最悪なことが起きた。

パスミスだ。

双子がやらかした。シャンちゃんのほうがシャオ君に無理なパスを飛ばした。

シャオ君はくらいついたけどどうにも手が届かなかったらしい。  
……相手のボールか。

「……冬香。時間は？」

「残り一分と少し。……かなりきついわよ」

「……リュウ！ここからはあたれ！」

「それしかねえだろ！」

あたる。ディフェンスは大抵、攻められたらそれにあわせて自分が動く。でも、こちらから守るために相手の持つボールを自分から取りにいたりすることを『あたる』という。つまり、攻撃は最大の防御みたいな感じかな？

相手はボールを適当に持っていたらそれだけで勝っちゃうからね。

時間に余裕のないボク等にはコレしかかつ方法が無い。

「全員、ボールを取りに行け！！ファールはできるだけ気をつけろ！」

「無茶な注文ですう！！」

「・・・アタシよくわからない」

「リカさんは普通にしてください」

そして、最後になるであろう攻防が始まる。

相手からのスローイン。

ボールがパスされ、キープされる。

・・・普通はそうだよな。

バスケットには24秒以上ボールを持ち続けると相手にボールのボールになるという特殊なルールがあったりするけど、リング・・・ゴールのふちに当てるとそれがリセットされ、また24秒から数える。つまり、コレをうまく使えば一分間ボールを保持し続けてボク等に勝つことができる。

「斉藤！！・・・！？」

パスが放たれる。

そこにリュウはボールをカットしようとする。

でも、ギリギリ届かなかった。

「ツチ！！誰かオレのディフェンスをしろ！！」

「俺が行きます！！」

そして、ディフェンスを変わりつつ相手にプレッシャーを与えていく。

・・・後、40秒。

「・・・シュートだ！みんなスクリーンアウト！」

「そんなこと言われてわかるヤツは素人にはそんないねえよ！」

とか言いつつリュウは相手動きをを背中で抑えて邪魔をする。

・・・やっぱ他のみんなはわからないか。

シュウの近くにいた敵がリングに当たって弾んだボールをつかむ。

「がんばって〜」

「金一封よ！？もっとがんばりなさいよ！」

「・・・動機が最低だ」

向こうがパス。

そこで、シャンちゃんが動いた。

ボールをカットするつもりだろう。

「届くか!？」

届かない。

でも、ボールにかすったようだ。

ボールが変な方向に飛ぶ。

その先にはリカ。

「リカ!とつて!!」

「え!?!」

リカはボールを両手でキャッチ。  
時間は!?!

「15秒!?!リカ!走れ!!」

「ど、どうやって!?!」

ダメだ!

リカはバスケットに慣れてないのかボール運びがよくわかってないらしい。

「リカ!アンタはソラのマネすればいいのよ!!」

「いや!?!レイアップはできれば確実に点が入るけど、素人がやるのは結構むずいよ!?!」

「・・・がんばる」

そんな風に聞こえた気がする。

リカはドリブルをしながら全力で走る。

リカは偶然にもトップ、つまりは一番敵側のゴールに近いところにいた。

そして、敵はリカの後ろに一人もいない。

かなりのチャンス!

でも、リカが点を入れられなかったらボク等の負けだ。

「リカちゃん！」

「行きなさい！！！」

「がんばれ！」

ボク等は一生懸命応援する。

そして、リカがゴールに迫る。  
後、4秒！

「行けえ！！リカ！！！」

「あと一息です！！！」

「「アンジェリカさん！がんばってください（ですう）！！！」

3秒。

リカが地面を強く蹴る。

そして、ジャンプ。

2秒。

リカはリングの高さまで飛んで・・・え？

ガコン！

1秒。

あたりが一瞬の静寂に包まれる。

0秒。

けたたましいブザーの音が響く。

得点は？

呆然としている得点係の人に代わってアリアさんが得点板の点数をめくる。

44対41。女子補正の得点二倍でボク等の勝ち。

・・・でも、さ。

「「「ありえねえ!?!?!?!」」」

「え?あれってルール違反なの!?!」

違うよ!?!?

全員で突っ込んだのは君がダנקを決めたことだよ!?!?

「だって、ソラのマネを・・・」

「ボクはできないよ!?!?ていうか、ダנקができる人は男子ではおるか、女子なんかほとんどいないよね!?!?」

「・・・まあ、勝ったことだし、よしとしましょう」

まあ、ボク等は勝った。

・・・よく考えると、「コレって一回戦目だよね?」



9話・LET'S PLAY（後書き）

空 「……………ねえ、この作品はスポーツ系じゃなかったはずだよね？」

隆 「……………そのはずだ。」

作 「いやあ、やつちまったZ E」

空 「まあ、最後は何故かものすごく微妙な結末になったけどね。」

作 「そうそう。それで僕は気づいた。」

隆 「ちなみに聞くのがだ？」

作 「僕にはスポ魂は書けない！」

隆 「いや、既にこの作品の時点でかけてねえよ!？」

作 「……………え!？」

空 「何その今気づきました的なりアクション!？」

作 「いや、だつって……………」

空 「……………こんなバカな作者ですみません。」

隆 「こんなのは相手にするだけ無駄だ。さつさと次回予告するぞ。」

作 「……………主導権が。」

空 「次回……………またなんか事件？」

隆 「……………これはいつたい何がしたいんだ？」

作 「それはわたしの気分だ!!」

空 「……………」

隆 「……………まあ、こんな作者だが次回も頼む。」

## 10話・GYM JACKING!?

side空志

「いや、まさか Dank とは……」

「確かにな」

「だって……アレが一番確實そうだったんだもん」

「まあ、いいじゃないですか」

「そうよ！わたし達は金一封を手にするわよ！」

「冬香ちゃん、目がお金のマークになってるよ？」

「すごいですう！人間はそんなことができるですう！？」

「……俺が思うにこの人だけだと思っ」

まあ、何はともあれ一回戦は勝った。

てか、向こうもやたら強いと思ってたら寮生バスケット部で組んだチームだったらしい。

……そりゃ強いはずだよ。

そして、リカは熱烈な勧誘ラブコールを受けたと。

そこでまたボクの死亡フラグが立った。

何で立ったのかはご想像にお任せします。

「で、ボク等は残念なことに次の試合も出てバスケットをがんばらなくちゃいけないと」

「・・・ソラはバスケットがキライなの？」

「ううん。ただ、冬香に無理矢理させられるのが嫌なだけ」

ボクはリカに小声で伝える。

ボクは普通に楽しみたいだけなのにね。

「三谷つちすごいね〜。『シュートの入らないプレイヤー』とは聞いてはいたけどあそこまで入らないといっそのことさすがしいっ  
っ  
」

「・・・けなしに来たの？」

「ホメに来たんだよ」

「いや、ウソでしょ」

「で、お前は何のようだ？」

「特にないZEE!!」

・・・ホントにワケのわからない不思議というか不可思議な女子だ。

まあ、キャラが濃いのに何故か影が薄くなってる一人だし。レオも空気になりがちだね。ちなみにレオは寮で留守番。

「でも、寮祭って言うっても負けちゃうとヒマなんだよね〜」

「なるほど、宇佐野は初戦敗退か？」

「うん。まあ、ワタシがホンキになれば弱みを握ってやればそれだけで勝てるんだけどね」

「……絶対にこの人ならしますね」

「シユウの周りは何でこんなに変な人が多いのですう？」

「よくわかってるな。シャンも自分が変であることを認めたら」

「シャオ!!」

双子は元気だね。

何だか残像を出しながら拳で語り合ってる。

「まあ、なんにしても（ボクが襲われることを除いて）平和だね」

「おい。お前がそんなことを言ったら即、フラグだぞ？」

「どんな？」

「そんなの決まってるわよ。事件フラグよ。それも物騒な」

「でも、さすがに……」

突然、ボクの視界の魔力がはつきり見えるようになった。  
これは？

「れ？ソラ君なんで 月詠ツクヨミ してるの〜？」

「いや、誰かが魔法を発動させようとしてる？」

ボクは魔法を発動しようとしてる魔力の流れをたどってみる。  
そこにいたのはボクが見た限りじゃごく普通の一般生徒。ジャージを着てる。

・・・いや、ジャージのズボンのポケットから魔力があふれてる。  
それに、この感じは・・・。

「・・・まさか!？」

その時、魔法が発動。

ボク等の方に向かって放たれた。

「「な!？」」

「きゃ!？」

「何よこれ!？」

「え？」

「「これは何(ですう)!？」」

「やっぱりあのカードか!!!」

属性は『金』。

体育館のフロアリングの床の下の鉄骨を操作してボク等の周りにいる人もまとめて手足を拘束される。





「答えなんか関係えねえな」

「おい！？そんなもので殴ったら死ぬぞ！？お前、犯罪者になるつもりか！？」

「・・・それで脅してるつもり？」

「リカちゃん！」

「相手を刺激してはダメです！！」

「アンタは黙りなさい！」

ヤバい。

これじゃ誰かが傷つく。

それに、こんなに一般人が多いんじゃ魔法は使えない。  
ボクはアイコンタクトをとる。

「リュウ！なんかいい方法は！？」

「オレのケータイ！それでジジイを呼ぶ！」

「でも、無理じゃん！」

「ワタシがとってあげるよ」

リュウの近くにいた宇佐野さんが言う。

「できる！？」



「後でなんか奢って〜。・・・右のポケット？」

そういうと宇佐野さんはリュウのポケットに手を伸ばす。  
・・・なら、ボク等は時間稼ぎか。

「まあ、落ち着いてさ」

「ウゼエ。オマエ、何様だ？」

そういうとボクに棍棒をたたきつける。

周りの女子が悲鳴を上げ、男子は息をのむ。  
ヤバいな。頭がふらふらする。

てか、血が出てる気がする。

「ソラ!？」

「ソラ君!？」

「ソラさん!？」

「・・・大丈夫」

ボクはリカ達にに笑って答える。  
冬香は目を見開いて驚いている。  
・・・結構レアだね。

「それがウゼエんだよ！」

また、ボクに棍棒が振るわれる。

・・・ボクの危機回避スキルじゃなかったら死んでるよ！？ボクは本能というかそんな感じの何かで力を流してた。そんなことを考えているのがわかってるかのようになんかまた棍棒を振るおつとする。

「・・・やめて！ソラを傷つけないで！何でもするから！」

そこでピタッと相手の動きが止まる。

そして、ボクから視線を外し、リカに向く。

「何でも？じゃあ、俺のモノになれよ」

「・・・・・・っ・・・わかった」

「じゃあ、ここでやるか？」

「は？」

ボクは意味がわからなかった。

次の瞬間、リカのところだけが盛り上がる。

そして、リカは鉄の十字架みたいなものに磔にされる形で吊るされる。

「ちょ！？何これ！？」

「オマエは俺のモノになんだろ？だったら、何をしようがいいよなあ！！！」

ボクは、目の前の現実が信じられなかった。  
どうなってんだ？

みんなのあわてた声が遠くに聞こえる。  
でも、何故か二人の声はボクによく届いた。

「え？・・・イヤ！？やめて！！」

「オマエの好きな三谷の前でやられるんだぞ？いいだろう！？」

「イヤ！！ヤメテ！！助けて！！！！」

ブチッ。

ボクの中で何かが切れた。

「魔法陣展開、センジンラン千刃嵐」

「おい！？」

誰かがボクにやめるように言った。  
でも、無理だ。

ボクの魔法でボクを拘束していた変形した鉄骨を切断する。

「ソラ！」

「な！？オマ！？」「リカを放せ」・・・何だよお前もこつち側の人間かよ」

相手はそういうとだらしない下卑た笑い顔でボクに親しげに声をかける。

「なら、オマエと俺なら「御託はいい。三度は言わない。リカを

放せ」・・・俺に勝てんのか？お前の力は風だろ？俺の金属に勝てるわけねえだろ！！」

そういうと棍棒をボクに振りかぶる。  
ボクは、それを見ながら言葉を紡ぐ。

「みんな、ボクは暴走してないと思う。でも、こいつだけは許せない。だから、全力で潰す」

「死ねよ！」

棍棒をボクに思い切り振り下ろす。

ボクは、すでに魔法陣の展開は済んでいる。後は魔法名を言うだけ。

「<sup>グレン</sup>紅蓮」

魔法陣がボクの掌の上で輝く。

そこから業火があふれ、剣のように伸び金属の棍棒とぶつかる。

そして、業火は金属の棍棒を溶かし、焼き切る。

鈍い音と共に切断された鉄棍が床に落ちる。

「な、んだと！？」

「・・・終わり？」

「！？・・・まだだ！！」

そういうとさっきより大きな音を立てて、地面が揺れる。

礫にされたり力がボクと相手の前に・・・。そして、ボクの周り

には金属で構成された槍が穂先をボクに向けている。

「・・・人質か」

「お前はこれで手も出せないだろ！お前は死ね！リカの前でな！」

「ソラ！ダメ！！逃げて！！」

「お前がその名前を呼ぶな。・・・大丈夫だよ。ボクが助ける。だから、ボクを信じて」

ボクはリカに諭すように言う。

リカはイヤイヤするように首を振る。

「大丈夫だよ。そだね・・・じゃ、明日は休日だしだいぶ前に約束したデートにでも行こうか？魔窟にだけど・・・」

ボクはリカにやわらかく微笑んで言う。

すでに、ボクの脳内では準備が終了段階に入ってる。

「オマエ、俺を無視して何を言ってんだよおおおおおおお  
！！！！」

そう言うのとボクに向かって槍が一斉に放たれる。

sideリカ

「ソラアアアアアアアアア！！！！?????」

ソラに膨大な数の槍が放たれた。  
ソラは串刺しにされたらう。  
ソラが見えないほどにまで槍が埋め尽くされている。

「・・・は、ハッ！！よ、余裕、こいてチヨーシに乗ってたから  
だぜー！！」

「貴様アアアアアアアアアア！！！！」

いきなり、誰かが獣のような叫び声をあげた。  
それは、リュウだった。

「ソラ、君？」

「嘘よ！あいつはチートなのよ！？」

「ソラ、さんが？」

「・・・」

みんな、茫然としている。

ウソ。あり得ない。まだ、告白すらしてないんだよ？何で？アタシの大切な人は消えるの？デートしてくれるんじゃないの？アタシがあの時信じなかったから？

「ウソ、だよな？・・・ソラ！！・・・何で？・・・デートしてくれるんじゃないの！！！！？」

「いや、そう言えば明日、ログさんとこも行かなきゃって思ってた  
ちよっと考えてしまった」

「そんな！？デートは！？・・・へ？」

アタシがそう言った瞬間だった。

いきなりソラが串刺しにされた槍の塊が爆発したかのように四方にはじける。

そこには、頭から血を流しているけど、さっきの攻撃からは無傷のソラがさっきと同じように立っていた。

ううん、ちよつと違う。手には波刃の刃紋の綺麗な、そして触れただけで切れてしまいそうなほど鋭利な刃を持つ刀を持っていた。

「月の真言 月夜<sup>ツキヨ</sup>。バージョン刀、銘は月閃<sup>ゲッセン</sup>」

「な、何で・・・！？」

「リカ、というわけで信じてくれる？」

そして、いつもと変わらない笑顔で、いつもと変わらない表情でアタシに声をかけてくれるソラがそこにいた。アタシは、いつの間にか首を縦に振っていた。

「じゃ、本人の了解も得たことだし・・・お前を斬る」

「はあ！？そ、そんな刀で俺に傷をつけれるとでも思ってるのかよ！・・・！」

そう言つと今度は金属の槌を生成。それでソラをたたきつづぶそうとする。

ソラは、刀を適当に上に振る。

それだけで槌は真つ二つに割れた。

「はあ！？何だよ！？それ！？」

「……具現化。マテリアライズ まあ、言っても、わからないよね」

ソラはそう言つと一歩踏み出す。

「待て！！こ、こつちには人質が！！」

ソラはゆつくりと、でも、確実に一歩ずつ距離を詰めてくる。  
そして、刀を居合の形のように構える。

「オマエ！？人質ごと斬る気か！？」

「いや。この魔法は便利だね。魔力を直接攻撃できるんだ。さらには本人の意思で普通にも斬れる。・・・そして、魔力⇨生命力⇨という方程式がある。つまり、魔力をたたけば生命力にも攻撃できる。そうすれば、大抵の人は倒せる。まあ、やりすぎれば死ぬ。でも、安心しろ。今回は気絶させる程度だから」

「だ、だからってオマエは！？」

「いや、ボクは……」

そう言つとソラはアタシと一緒にこのゲス野郎を斬る。  
つて、ちよつとお！？

「……お前だけを倒す」

そう言終わると、ゲス野郎は白目を剥いて、口から泡を吹きなが



ら気絶した。

確かにアタシには何ともない。

「……リカ！大丈夫！？」

ソラはそう言うとアタシの拘束を斬る。

そして、刀を放り投げるとそのままアタシに抱きつく。

「ゴメン。……でも、よかった……」

ソラは、泣いていた。

アタシはソラの背中に手を回す。

「大丈夫だよ。アタシは……ソラがついてるしね」

そして、アタシ達はどちらからともなく少し距離を離してお互いを見つめあう。

ああ、なんだかこの感覚久しぶりだなあ……。

「あ……お楽しみのところ悪いんだがさっさとオレ達の拘束も解いてくれ」

「こんな大勢の前でも堂々とするね」

「まあ、さすがだね」

「……」

「いや、お楽し「うん。わかったよ！じゃ、解いてあげる」……  
リカサン？何故に鎌を？」

「オレにはソラのような死亡フラグ職人になった覚えはないんだがな？」

「ハハハハハハハ、リュウ、死ネ」

やめて、アタシの至福の一時、そして、ソラとの甘い時間を邪魔した罪は重い！！

とりあえず、手足と胴体さよならの刑に……。

「リカサン！？それはダメ！後で何でも言うこと聞「わかった」早っ！？」

やっぱり仲間を殺すのはダメだよ

じゃ、ソラには……きや？

「そおい！アリアさん、登・場！！！後のことは」  
雷燕ライエン！！！！

「！」「ぎやあああああああ！！！！？」

「今までどこにいたの？場合によっては十分の九殺しにする」

「そ、そらくん。それはほぼ死んでる……ガク」  
「……」  
八岐ヤス「応援呼んでました！城崎さんだよ！！」……  
なるほど」

ソラは足元に展開させた八つの円が描かれた黄色の魔法陣を消す。そこにあの生き字引が来る。

「……面倒だ」

「帰れ」

「いや、なんでリカはもう少し智也さんと仲良「イヤ」・・・さいですか」

だって、ソラを傷つけたんだよ!?

無理!

「・・・記憶のほうは俺の魔法の応用で何とかする。とりあえず、お前等は寮に帰れ」

そういうと生き字引は魔法で体育館にいる全員の拘束を解く。  
・・・認めたくないけど魔法はすごい。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったよ」

「ホントだよ。ソラ君が死んだかと思ったんだよ」

鈴音はそう言って頬を膨らませてる。

冬香は心配して損したって顔、リュウは何でオレはあそこで・・・  
みたいなことを言ってる。シユウは、何だか難しい顔で考えてる。

「いや、だって頭の中だけで詠唱するのはすごい集中力が必要で、  
ホントにギリギリだったんだよ?」

「つか、また明日・・・じゃなくて、明後日当たりに質問大会だ。  
お前がどこまでチート化したかのな」

「何で!?!?」

「何故か刀を使ってわよね？」

「……そう言えば手紙によるとソラさんは魔法銃が武器ですよ  
ね？」

「それに具現化<sup>マテリアライズ</sup>なんて失われた魔法を何故使えるんですう！？」

「……リカ！助けて！！」

「ええ〜。アタシは明日の予定を考えるのに忙しいよ〜」

そう言っアタシはソラの腕に飛びつく。

「ちょ！？腕！！胸！！」

「いいじゃ〜ん。減るもんじゃないし〜」

「いや、減る！ボクの精神的な何かが！！」

ふっふ〜

なら、もつとやる！！

アタシはあたふたするソラを楽しみながら、そして、明日のことを考えながらみんなと寮に帰った。

## 11話・EVERYONE

side空志

いん・ざ・寮。

ボクは今、寮の自室にいる。

あの後、ボク等はスズの作ってくれたご飯を食べて、思い思いに過ごしている。

で、一つだけボクは気になることがある。

「何でリカがいるの？」

ボクは勉強椅子に座って本を読みつつ言う。

普段はベッドに寝転んで読むんだけど、リカに占拠されてる。

「え？ソラが『お前を離さない』って、言ってくれたから？」

「いや、ボクは一言もそんなことを言っていないよ？てか、薬の効果が続いてるんだから離れてたほうがいいでしょ」

「……ふん。まだ、気づいてないんだ」

そういつとリカはボクに抱きついてきた。

……って!?

「ちよおおおおおおお!!?!?!?!早く離れて!!薬が……効いてこない?」

何で?

ボクは自分に抱きついたままのリカを見る。

「……やっぱり効果が続いてるときに既成事実を……」

「既成事実？」

「こつちの話！……まあ、ソラにくつつけるしいっか」

「……はあ？」

まあ、よくわからないけど薬の効果が切れたらしい。

てか、確実にあの日常に戻るよね……毎朝追いかけられる日常に。

「……」

「？……どうしたの？」

「ん？なんでもないよ？」

まあ、リカが嬉しそうだしいいか。

……いつの間にかもう、こんな時間か。今日はいろいろあったしもう、寝ようかな？

「リカ、もう寝るからどいて」

「わかった。一緒に寝よ」

……。

ボクの耳がおかしいってコトはないね。

「どの辺がわかってるの?」

「全部!」

「いや!? 普通は男女と一緒に寝るのはありえないよね!?!」

「・・・別に普通じゃないからいいよ」

「開き直ったよこの子!?!」

「・・・それに、アタシは犯されそうになっただよ?」

「・・・」

ボクは何も言えなかった。

リカは不安なんだろう。でも、さすがにそれは・・・。

「つて、よく考えたらリカは人間恐怖症じゃん!」

「・・・ツチ」

「舌打ちしたよね!?!」

「実力行使!?!」

「ちよ!?!?」

そういえば今の状況はまだ、リカに抱きつかれたままの状態。よって、吸血鬼の力にただの人間のボクが勝てるわけが無い。つまり、ことうなる。

「添い寝？」

「……リカのFCファンクラフにバレたら殺される……」

「バレなきゃいいんだよ」

無茶なこと言うねこの子。

でも、こうなった以上リカを力づくではほどけない。

ボクはため息をつく、寝る準備に入る。

まあ、布団を被るだけだけ。

「……でも、ホントに怖かったんだよ」

「……」

ボクは何も言えなくなって目の前にいるリカの頭をなでる。

「んふふ……オヤスミ」

「はいはい。お休み」

ボクは投げやりに言つと目を閉じた。

すると、すぐに睡魔が襲ってきて、ボクを眠りに誘つ。

……「」はどじろっつ？



真っ暗なところだ。

・・・たぶんボクは精神空間かどこかにいるのかな？  
・・・ん？

誰か後ろにいる？

ボクは何かの気配を感じて後ろを向く。

「あ、みんな」

そこにはみんながいた。

リュウにスズ、リカ、冬香、シユウ。

そして、ボクはみんなのほうに行く。

すると、突然みんなが血を噴き出して倒れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

いきなりなのに脳がついていかない。

ナンデ？

リカの声。

オレ達八仲間ダロ？

リュウ。

痛いヨ。

スズ。

死ニタクナイ。



「・・・嫌だ・・・うそだ・・・ボクは・・・みんなを傷つけたくないのに・・・!!!!」

声にならない悲鳴が聞こえる。

・・・コレはボクの声だ。

ナンデ殺シタノ？

憎イカラ？

「違う」

怖イカラ？

壊レルカラ？

「違う!!」

壊レル前ニ壊スタメ？

「違うっつてんだろおおおおおお!!!!!!!!」

「ソラ!？」

リカが驚きの声を上げる。

・・・レオもリカの足元で何だか心配そうに鳴いている。

「ッ!?ゴホ!エハア!?!?!?!リカ?!?!?!ボクは?ここは?!!?!?!ボクの部屋?」

ボクはのどに違和感を感じ、ボクはむせ返る。

どうも、ボクは夢を見ていたようだ。それも最悪の悪夢を。

「リカ！怪我とかない！？大丈夫！？ボクは何もしてない！？」

ボクはさっきのことが脳裏にフラッシュバックし、リカの肩をつかんで尋問するように聞いた。

「ソラ！？何を言ってるの？」

「・・・よかった」

「どうしたの？」

「うん・・・怖い夢を見たんだ」

「・・・話してくれる？」

「・・・怒らないで最後まで聞いて。これは、前のアレのせいだと思う。今回の寮祭のアレでかな？」

リカがハッと息を呑んだ気がした。

そして、何故か気まずいというか知られなくなかったみたいになる。

「・・・まさか、ボクはうなされてたの？それにコレが初めてじゃない？」

「・・・」

リカは沈黙で肯定した。

そうか・・・みんな知ってたんだね。

そして、みんなはボクに要らない負担をかけないように黙ってくれたんだね……。

「……やっぱ、ボクは弱いね。……心が」

「ソラ……」

「みんなに話すよ。リビングにみんなを呼んで。……いや、ドアで盗み聞きしてるね」

「バレたか」

そう言っに入ってきたのはリュウ。

その後ろにみんなも続く。

「……なんで双子ちゃんもいるの？姉に関しては簀巻きだし」

「深くは突っ込まないでください」

……わかった。

「……ボクはいつからうなされてたの？」

「アンタが倒れてから起きたその夜からよ」

だいぶ前だね。

「最近はあまり起こらなかつたんですけどね……。おそらくは寮祭のことでぶり返したんだと思います」

なるほど。やっぱりか……。

「さつき、リカがなんかボクに飲ませてたような気がしたんだけど?」

「……精神安定剤です」

「なるほど。それでボクはホレ薬を……。自業自得だったわけだ」

「違うよ。ソラ君は悪くないよ……」

「……俺達は出ていったほうが?」

「いや、聞いてもらおう。君らもボク等の仲間だしね」

ボクは、自分の口である陰陽師がぶれの魔法使いとのコトを話した。

それを双子は静かに聞いてくれた。

「……まあ、そんなことがあったんだ」

「でも、それはしょうがないですう。暴走は……。それに、ソラさんはリカさんの為にそうなってしまったんですう」

「……かもね。でも、傷つけたことには変わりが無い。もちろん、みんなに言われたことはよくわかる、と自分では思ってるつもりだよ」

わかってはいるつもりだ。

でも、心のどこかでボクはまだ、気にしている。  
だから、夜にうなされてたりするんだろう。

「なんか、ホントにゴメン」

「でも、今回は暴走しなかったよ」

「ああ、下手すると前より酷いことになってたかも知れないあの状況で魔法を暴走させなかつたんだ。お前は確実に成長してる。その魔法を少しずつだがモノにしてんだよ」

「ソラさん、貴方はもつと肩を抜いて気楽にすればいいんです」

「でも……」

「ウザい。じゃあ聞くけど、アンタはわたし達をボコボコにしたかったワケ？」

「そんなこと……!」

「なら大丈夫よ。なんか文句ある？」

でも、ボクは……。

「ソラ、アタシ達も強くなるから。だから、一人で抱え込まないで。……約束したでしょ？」

「……うん」

『世界中が敵に回っても、ボクは君を守るよ』

『絶対にソラを一人にしない。少なくともアタシがそばにいる』

約束ヤクソクというよりも誓約に近い、僕とリカが交わした絶対の約束チカイ。  
その言葉がボクの頭の中でリピートされる。

「……そうだね、ボク等はまだ子供で、しかも世界を敵に回しかけてるんだもんね。……みんなで強くなるう。大切なものを守れるくらいに……」

「当たり前だ、バカ」

「よし、わたしも明日から訓練がんばろう！」

「明日は休みよ」

「……そうだった！」

「私もですね。世界一の薬剤師を目指しますよ」

「……レオ、ゴメンね。こんなバカな相棒でさ……」

「こゃ〜」

レオはボクに身を摺り寄せる。

……こいつは優しいから、ボクがうなされている時に何もでき



ない自分にいらだつてたんだろ。それで、自分から離れていったんだと思う。

ボクは久しぶりにレオを優しく両手で抱く。

ボクの相棒は世界でお前だけだよ。

「じゃ〜・・・アタシもソラと強くなるのかな！」

「・・・そこでボクに抱きつく理由がわからない。てか、レオは逃げたね」

「・・・みゃ？」

「はあ、お前等ホントに飽きねえな」

「シユウ〜、わたしにこっ、ぎゅ〜としてくれたら嬉しいですよ／＼／＼／」

「何ですか？自分から極めて欲しいというお願いですか？貴方はいつから変態に？」

「にぎやあああああああああですう！！！！？？ホ、ホントに極めなあああああああですう！！！！？」

「・・・俺はシャンが姉だと認めたくなくなってきた。」

「こつも毎日見るとわたしも彼氏が欲しくなってくるわ〜」

「だね〜。わたしも一度でいいからモテてみたいな〜」

「いや、それ以上モテる必要はない」

「はえ？・・・まさか！？リュウ君はわたしを！？」

「お前みたいな貧乳はキヨーミねえ」

「・・・明日のリュウ君のゴハン抜き」

「スマン。貧乳はステータスだと思う」

「一週間だね」

「何故だ！？」

「リュウ、お前はアホか？」

「・・・ソラはおつき方がいいの？」

「リカサン、あなたは突然何を言い出すのでしょうか！？」

そして、深夜にもかかわらずカオスな空気を作ってドンチャン騒ぎをするボク等は何だか憑き物が落ちたような顔で笑いあっていた。

## 12話・DARK CLOUDS

side空志

・・・朝か。

窓からは少し湿った空気が入ってくる。

もうすぐ梅雨に入るのかな？

ボクはとりあえず起きようとする。

まあ、できなかつたけど。

ここで突然ですがクイズです。ボクは何故起きることができなかつたでしょう？

その一、でつかいレオがボクに乗っかっていた。

その二、実は金縛りにあつたんだ！！

その三、どこその吸血少女がボクを抱き枕にしていた。

さあ、どれ！？

てか、絶対にわかるよね。答えは三です。

「・・・つて、良く見るとまだ五時か」

え？驚くところが違う？

いや、こうもしょっちゅう添い寝されるといい加減に慣れてきてしまった。

いや、だめなんだろうけどさ！？

ボクは起きれない。そして、リ力は気持ちよく寝ているっぽいからまあ・・・このままにしておこう。

ボクはなんととはなしに目の前の顔を眺めてみる。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

.....

「.....暇だ」

目が覚めちゃって二度寝はできそうにない。

ボクはリカに八つ当たりしておくことにする。

「魔法陣展開」

そこにはカバンの魔法陣。

ボクはそこからとあるものを取り出す。

「.....ふふふふ」

s i d e r i c a

.....ん？

アタシは顔に違和感を感じた。

そして、目を開ける。

目の前にはもう既に起きていたソラがいる。

.....は！？コレはまさか！？

「寝顔が見られちゃった！？」

よだれとかしてなかったかな！？

いびきとかしてないよね！？

「.....ブ！？」

「何でそこで笑うの？変な顔してなかった？」



・・・でも、よかった。ソラが元に戻って、こんな風にイタズラをするまでに回復してくれて・・・。  
アタシはソラに見えないように顔をほころばせた。

「でも、アタシだけって言うのはズルイよね？」

「・・・ソナコトナイヨ」

「問答無用！！」

「ちょ！？マジで！？ボクじゃ防げないよ！？」

そんな風にわーぎゃー言ってた。

そして、それは突然だった。

「できました！！」

バダーーーーーン！！！！！！

扉を開けたとは思えないような爆発音を響かせてシュウが勢い良くソラの部屋に入ってきた。

・・・というわけで今の状況を確認してみよう！

ソラはベッドの上。

アタシはソラにのしかかって水性ペンを構えている。

シュウはソラの部屋の扉のところでフリーズ。

・・・これってマズくね？

「どうしたんだ？」

「朝から騒がしいよ」

既に起きていたのかリュウと鈴音も来た。

「……すみません。二人が既にそういう関係だったとは露知らず……あ、どうぞ、続けてください」

そして、そのまま出て行くようにする。

「待つて！？違う！！いや、違わないかも知れないけど誤解です

！..」

「むしろ誤解でもいい！」

「……朝っぱらから何をしてんだよ」

今日もこの寮だけ朝からとてもにぎやかだった。

side 隆介

「で、それであんな状況になったと？」

「「……ごめんなさい」「

「信用できるか!？」」

今はリビングだ。

オレが起きると何故かソラの部屋がやたらとにぎやかだった。

そこでソラの部屋に行ってみるとそこにはリカに襲われかけているソラの姿が。

……いろいろとR指定になりそうなんでそこは察してくれると

ありがたい。

まあ、こいつらの話によると、ソラがリカにイタズラをしてそれに対してリカは同じように水性ペンで仕返ししようとしたようだ。

「……お前等はガキか？」

「まあまあ、いつものコトだよ」

いつもこんなじゃオレはイカンと思うのだが？

「でも、夜もどうせリカは添い寝して、それで早めに起きたソラがちよこ〜っとイタズラしただけでしょ？」

「……リカさんの顔色から見てほぼ完璧ですね」

「？……何で顔が赤いと完璧ですう？」

「そこはアレだろ？リカさんはソラさ「鈴音！ゴハンまだ!？」  
今更だと思つのは俺だけですか？」

シャオ、それは全員が思ってることだ。

「……何でみんな頷きあってるの？」

この超絶鈍感野郎を除いてだがな。

……まあ、今はおいておこう。

「で、徹夜してやっとできたのか？」

「はい。うれしさのあまり、時間も確認せずにソラさんの部屋に



突撃しました。シヤンを実験台にしたかいはありました」

「……シユウが怖いですう」

「シヤン、何でシユウから離れないんだ？」

「好きだからですう！！」

「……お前の姉はストレートだな」

「まあ、そんなことはほっといてソラさん。飲んでください」

「ソラの薬は効果が切れてるよ？」

「……は？」「」「」「」

リカの言葉にみんながボクを見る。

いや、ボクも昨日の夜、リカに言われて気がついたんだけど？

「まあ、ホントだよ。それに朝のことが説明できないでしょ？」

「……おゝ！？そういわれるとそうだね！！」

「でも、昨日は効いてたんでしょ？」

「うん。何かがきっかけで効果がなくなったのかな？」

「……いえ、ソラさんの解析結果では魔法薬の魔法はその人に最適化されるがために無効や、解除ができないということなんです。なので、おそらく解呪薬も効果を消すのではなく、その魔法薬の効果

を上書きして中和するというものです」

「そうなんだ。始めて知った」

「まあ、魔法薬なんて起源は適当に薬草を混ぜて魔法をかけたらできたというものですし」

おい。それはイカンだろう。

それでも魔法薬剤師か？

まあ、樹族は本能的に薬の作り方を知っている。

ガチで魔法薬を勉強、または研究している人間の学校とかならそういうことはちゃんとわかったかも知れんがな。

最初からできるがために原理を知らない。とでも言うところか？

「まあ、そんなことはどうでもいい。しかし、本当にできたのか？」

「はい。シャン、コレを」

そついうとシユウは写真を一枚、双子の姉に見せる。

「はいですか？・・・消えるですう！！」

姉はそついうと拳を繰り出す。

すると、写真はどついう原理か紙つぶきになる。

「何を見せた？」

「龍造さんの盗撮写真です」

「……何で写真がこんなになってんだ？」

「ソラさんを見てわかるとおり、意識はちゃんとしてるんです……なるほど。」

要するに、姉のほうはジジイに向かって好き好き言ってた黒歴史をちゃんと覚えてるってコトか。

「一応できたのですが……ホントに効いてないんですか？」

「シユウは疑り深い……えい！」

そういうとりカは今だ隣で一緒に正座をしているソラに抱きつく。

「……うん。来ると思ったよ」

「今日は騒がねえのか？」

「もう、無駄だってわかったんだよ」

こいつもいろいろと苦労してんな。

まあ、ソラに変化が無い。

ということはリカが言ったとおりなんだろう。

「……だが、何で急に切れた？」

「まあ、あれじゃないですか？ソラさんがチートということでは？」

「いつもなんでそれで片付けようとするの！？それにみんなも納

得しないで！！頷かないでよ！！」

「まあ、冗談はここまでにしておきましょう。実はそれなりに心当たりはあります」

「なんだよ。あんのかよ」

「……どうせなら最初から最後までチートを貫きなさい」

「主張すらしてないんだけど!？」

「で、それって何なの？」

確かに気にはなるな。

こいつのおかげでオレ達はいらん苦勞を強いられたしな。

「……ですが、コレは予想、といいますが想像に近いので……  
確実にわかったらすぐに報告しますよ」

「「え」」

「……お前がそんなことを言うなんて珍しいな。」

「確かに、シュウは隠し事なんかしない人ですからね。それが大事なことでない限りですが」

「……それってシュウは大事なことを隠してるんですう？」

「いや、今回はそんな重要なことはねえだろ。ただ単に本当に推測の域を出てないだけなんだろう」

「本人を前に堂々と言いますね」

そう言いつつお前は苦笑してるじゃねえか。  
だがな、オレも一つだけ考えてることがあんだよ。

「シユウ、オレはお前と同じコトを考えてるかもしれんぞ？」

「なら、わかるでしょう？私は言う気はありませんよ？特にお二方には」

そういうとシユウはいつものように顔に爽やかな笑みではなく、  
どことなく不敵な笑みを浮かべて言う。

・・・やっぱ、お前もオレと同じ考えか？

「・・・なんかシユウ君とリュウ君だけで話が通じ合ってるよ？」

「・・・まさか、あんたらこそそっちの気があるんじゃないでし  
ょうね？」

「んなわけない」「」

「うう~~~~~~~~リュウさんとやら！わたしのシユウから離れる  
ですう！~!~!」

「シヤン、いい加減にしるよ」

「リカ！~!いい加減に離れて！」

「いいじゃん、アタシとソラの仲だし」



「とりあえず、死刑です。」

「氷漬けにするわ」

「ちょ！？待つのじゃ！？」

朝食時の朝にジジイの絶叫が響き渡る。

・・・こいつらなんか勘違いしてるよな？

side空志

「・・・魔王の会合？」

「そうじゃ、それはな、各国の魔王が集合して話し合う会議なんじゃ。それをわしらはパーティと呼んどる。じゃが、わしはエリアがソラが暴走しとると聞いて急いで戻ろうとしたんじゃが・・・帰してくれなんだ。今もこっそりと抜け出してきたんじゃ」

「今頃会場では騒ぎになってるわ」

「これでも魔窟ネストの魔王、二つ名は『結界の魔王』で知る人ぞ知るヤツだからな」

「でも、魔王っていっぱいいるんだね」

「当たり前じゃ。一人だけじゃと他にまで手が回らんじゃろ？人間の国と一緒にじゃ」

「で、龍造さんはその会議に出席していたために昨日からいなか

「ったんですね？」

「それで、わたし達は勘違いしたってことよね？」

「そうじゃ」

「「「すみませんでした」「」」

「まあ、よい。しかし本当に心配したんじゃぞ？昨日の夜の時点ですでにアリアから聞いてはおったんじゃが……」

「抜け出そうとしたところを他の魔王に拘束されたのよ」

「そうそう、例えば僕とかね」

「そうなんだ。なんか悪いことしたな……」

「……ん？」

「「「「誰？」「」」「」」

そこには二十代後半らしい健康的に日焼けした男の人がいた。

「……何故にお主がいるんじゃ？」

「いや、『結界』のところの可愛がってる人間の子供を見ておきたくてね。隆介も久しぶりだね」

「……紹介する。こいつは隣の国、霧の谷の魔王、ライネル・ミステイアW・ミステイア。……通称は『閃光の魔王』だ」





「で、あんたみたいな魔王がこんな世界に何の用よ？」

「……え？ただ単に君達を見に来ただけだけど？」

「龍造さん、私達のことを話したんですか？」

「……少しじゃがな。それに、わしは魔物と人間の共存を一応の最終目標にしよう。じゃから、お主らのように魔物や人間なんか関係ないという存在を他の魔王に見せつけ共存できることを示したかったのじゃ」

「それに、君らでしょ？『闇夜の奇術師団』って。」

「……中二成分がマックスだね」

「有名になっちゃったんだっけ？」

「負の方向で、ですけどね」

「なかなかキャラが濃いね。一人はホントに吸血鬼だし」

「アンタに言われたくないと思ったわたしは正常よね？」

「うん。冬香は普通。で、吸血鬼のアタシがこんなところでのうのうと暮らしてたら悪い？」

「……リカ、できればボクを盾にして言わないでほしいんだけど。」

「そこは・・・ソラがオトコの甲斐性を見せてくれたらアタシの好感度も上昇するよ〜って言ってみたいりみなかったり」

「・・・これ死亡フラグ？」

「「「違つと思つ）ですう）」

「まあ、巷で噂の人間はおそらくこの双子を除くオレ達だ」

「龍造さん。なかなか面白い子たちだね〜」

「ぬかせ。まあ、お主らには話がもう一つある。お主らで冒険者ギルドかなんかに入らんか？」

「・・・何そのRPG？」

「いや、簡単に言うとも屋になれつてことだ。だが、今回の事件の数々はオレ等は何も関係がない。特に魔窟の襲撃なんか最早ボランティアで街一つを救ったようなもんだ。でだ、ジジイは前から言つてたんだが。オレ達を何でも屋として雇い、報酬を何とかして渡したいとさ。ただの一般人が急に報酬だとか言われてポンと大金を渡しちまうと周りからの反発がすごいらしい」

「ああ〜なんとなくわかる気がする」

そりゃ、いきなりのぼつと出に・・・しかもボク等みたいな子供にそれはね〜。周りの嫉妬とかすごいだろうね。主にボクの体験談から。

「でも、ボク等はそんなの気にしな」龍造さん。ギャラはいくら

よっ?」「・・・冬香?」

「ここには金の亡者がいたことを忘れていたよ。すでに冬香の目はドルマークに変わっている。」

「ソラ、わしはお主らを何回も危険な目に遭わせた。じゃからな、少して礼がしたいだけなんじゃよ」

「・・・まあ、龍造さんがそこまで言うなら」

「ですが、ホントにいいんですか?」

「いいんじゃないよ。それに、向こうの身分証明の代わりにもなるし。わしの権限を使えば何とでもなる」

「・・・職権乱用じゃないの?」

「大丈夫じゃ。それにソラは盤ボードの免許ぐらいとっておけ」

「え〜」

「リカちゃんと二人乗りできんぞ?」

「いや、別に「ソラ!!全力で受けよう!!」「・・・鎌出すのやめてくれたらすぐにする」

「まあ、そんなわけでこれじゃ」

そう言うと龍造さんは一枚の紙を取り出す。

そこには名前を書けらしい欄と戦闘職業とかを書くようだ。

「じゃ、リーダーはリュウで」

「おい。オレはそんなメンド」  
「ご飯」  
「謹んで受けさせてもらいます」

さすがだ。

ボクはスズに親指を立てておく。

「あ、わたしは既に別のところに入ってるから補欠扱いにしといて。」

「そう？わかった」

そして、適当になんかいろいろと書いていった。  
ちなみにボクは何故か『魔道具技師』になった。  
・・・戦闘職じゃないのは気にしないでおこう。

「で、このチーム名は？」

「・・・メンドイ。『闇夜の奇術師団』でいいんじゃない？」

「お主らは自分から敵を招き寄せるつもりか？」

「」「」「」「」「」「」「」「」

ボク等はどうしたもんかなって考えてた。

「・・・いつそのこと、逆の意味で『夜明け』<sup>サンライズ</sup>でいいんじゃない？」

「「「「よし、それで「「「「

「「「 適當（）ですう（）「「「「

まあ、なんだかんだでボク等は龍造さん直属の部下的な立場の人間になった。

side 龍造

「龍造さん？」

「なんじゃ？」

わしはギルド申請の登録用紙を持って向こうの適當なギルド協会に持っていきこうとしたりとったときじゃった。後ろからヤツ、ライネルが声をかけてきた。

「本当のことは言わなくてよかったので？」

「・・・あ奴等はまだ子供じゃ」

「・・・そうですか。でも、正直信じられませんよ。隼人並の力を持った人間で隼人以外にこっちのことを考える人間んがいるなんて」

「そうじゃな。じゃから、アサルト襲撃派の方のヤツに狙われそうになつとるんじゃろつが」

「・・・これからはあの子たちは魔物と人間、両方に狙われますよ」

「じゃからそのこれじゃ」

「まあ、龍造さんの名前で雇ったんなら他の魔物に襲われたんなら問答無用で優子さんや颯太さんを投入してその都市を滅ぼすどころか消滅できますからね。……それに何より、貴方に喧嘩を売ろうって時点ですでに常軌を逸している」

「やめい。それじゃとわしが化け物みたいに思われるじゃろつが」

「……はあ、よく言いますよ」

「何を言うんじゃ？わしは『結界の魔王』じゃぞ？守ることにのみ特化した魔法を使うのがわしじゃ」

「そういうことになっておきますよ」

そう言つとその魔王は姿を消した。

「お主がわしの心配をするなんぞ千年はやいんじゃぞ？」

わしは一人ごちると、転移をした。

### 13話・PEACEFUL LUNCH

side空志

なんやかんやで月曜日。

いつものようにボクは昼休みになるとクラスの連中から逃げきって屋上にいた。

「……フラフラする……」

「……ごめんなさい。」

「いくら久しぶりにソラの血を吸うからとはいえ……こいつ軽くミイラになってんぞ？」

ボクは薬の効果が切れた。

ということでもリカはその分を取り返すかのごとくボクの部屋に侵入してきた。それもこの休日毎日……。コレ、なんてエロゲ？的展開になっていたりしたんだよ。ホントに朝起きると目の前に必ずリカがいて驚いた。

それに血を吸われたし……。

「ちなみに毎回聞くけどボク「イヤ」……さいですか」

ボク以外はダメなのか聞いてみようと思ったたら即断られた。

何でボクの血しか飲まないんだらう？

……なんか理由があるのかな？

「ちなみに何でボクの血しか飲まないの？」



「（いろいろな意味で）おいしいから！」

「・・・確かに（いろいろな意味で）そうだろうな」

「何でリュウがそんなのわかるの？」

「わたしも（いろいろな意味は）わかるわよ」

「私もです」

「わたしも」

「何で!？」

よく思っけどなんかボクの知らないところで会話が進んでいたりするのは気のせいかな？

まあ、でも、一つだけ確実に言える。

「・・・でも、なんやかんやで平和だね。幸せだ」

「じゃ、その幸せを分けて欲しいな」

そういうとり力はまたボクにべたべたと引っ付いてきた。

・・・ハア。

こーゆーコトは好きな人にしなさいって言うてるのに何でわからないかな？

「・・・オイ、あれってお前の知り合いか？」

「ん？誰が？」

リュウはボクに指で示す。  
その先をたどると、インカムを装備してアンチマテリアルライフル対物狙撃銃を構えた男子生徒がいた。

「・・・あれってさ、ボクの見間違いだよね？」

あんなので撃たれたら口では言えないようなスプラッタな光景がここに展開されるよ？

「おお〜すつごくおつきい銃だね〜」

ボクのかすかな希望はスズによって根元からヘシ折られた。  
いや！まだ、アレがどこぞのファンクラブかは・・・。

「いたぞ！！！！！！何故急にお前はいちゃつきだした！！」

「さらば！！」

ボクはフェンスを越えると下の適当な教室に逃げた。

「追え！！つか、あいつは人間か！？」

ボクは人間だ！！

そして、またまた逃走劇を開始した。

side 樹

「あ〜！？ソラ！！」

そういつとりカさんは屋上から人間離れた動きで逃げ出したソラさんを追うために屋上を飛び出していきました。

それに続くように他の男子生徒の皆さんも屋上から姿を消し、さつきまで騒々しかった屋上は一気に静かになります。

「いつも大変ね」

「薬の効果が切れたと思ったたらコレだもんね」

「まあ、それがフラグゲッターの異名を持つあいっだからな」

「もはやアレは一種の才能ですね」

そんな話をしていると屋上の扉が開く音が聞こえました。

私はソラさんかと思いきやそちらのほうを向きます。

「すみません。遅くなりました」

「ゴハンですう」

「別にいいよ。はい。コレが二人の分だよ」

「どうも」

「で、中等部はどうだ？」

そういえば説明してませんでした。今日からシャオ達が帰るまでは中等部で勉強を受けてもらうことになったようです。

「はい。楽しませてもらってます。俺達は六月いっぱいまでは」

「ここにいるつもりなんですけど・・・」

「ジジイも別にいいつつってんだから大丈夫だ」

「わたしも楽しかったです。それと、男子の子に何だか放課後に体育館裏に来るように言われたです。・・・決闘です？」

いえ、おそらくそれは違うと思います。

シヤンはやることなすことハチャメチャですが、それなりに整った顔立ちですからね。

ちなみにシヤオはどちらかという中性的ですね。

「・・・俺は・・・大勢の女子に襲われかけた」

「どこですう！？シヤオを殺ろうとしたのは！？」

「・・・」

何故か聞かないほうがいのような気がします。

まあ、何はともあれ馴染んでるようでよかったです。

「そういえば、シユウ君。何でソラ君には薬が中途半端にしか効かなかったの？」

「おい。それは確証がねえって前に言ってただろ？」

「でも、わたしも気になるわ」

・・・そう言えば私はそういう風に説明したのでしたっけ？

「あ、すみません。実は確証は既に得ています」

「「「「「え？」「」」」」」

「いえ、シャン。コレをそれにかけるとおいしいですよ」

「え？急にどうしたんです？」

そういつとシャンは私が渡したものを自分の昼食に少しだけふりかけます。

「どうです？」

「もぐもぐ・・・おいしいですう。」

「それはよかったです。実はですね、あのホレ薬は刷り込みを行った人に恋愛感情を持っていると効かないんですよ。それに、シャンに渡したものは実はコレです」

そういつと私は薄い赤い色の水溶液を皆さんに見せます。

「「「「「え〜!?!」「」」」」」

「ちゃんと本物です。何なら解呪薬もあるので誰か試します？」

そういつと皆さんは一斉に首を横に振ります。

「まあ、シャンは皆さん知ってる通り私にベタ惚れです」

「・・・恥ずかしいですう／＼／＼／」

「既に周知の事実を恥ずかしくがっても俺は意味が無いと思う」

「シャオはいちいちうるさいですう!!」

「そこで、私はこのことから考えると、答えは一つしかありません」

「・・・ソラ君もリカちゃんのが好き？」

「いや、だが一部とは言え確実に効いていた」

「要するに、こういうこと？ソラはリカに対して恋愛感情に近いけどそこまでは行かないものを抱いていた？」

「それしか考えられませんね」

「・・・自分の気持ちにまで気づかんとは」

「ホントにどこまで鈍感なんだか・・・」

「鈍感を競うコンテストがあれば確実に優勝できるね」

「リカさんがかわいそうです・・・」

「・・・俺はソラさんをフォローできないです」

そこで、またもや扉の開く音。

「死ぬかと思った」

「・・・アタシとソラの幸せな一時を邪魔して・・・」

「なにそれ？・・・まあ、リカが言ってくれたおかげで何とかな  
ったんだけどさ」

そこに噂の二人がやってきました。

「ま、そういうわけで面白そうなのでコレは二人には秘密です」

「・・・それである時は適当に誤魔化したな？」

「はい」

「ん？双子ちゃん達も来たの？」

「はいですう。ソラさんは死んでください」

「何で！？ボクなんかした？」

「・・・俺は何も言えないです」

「ソラ君さいてー」

「アンタは一回ぐらい死ななきゃダメね」

「むしろさっきのテロ集団に殺されていい」

「シュー！何でボクはみんなに罵倒されなきゃいけないの！？」

・・・自業自得といいますが・・・ねえ？

まあ、かわいそうなんで少しくらいはヒントをあげましょうか？

「ホレ薬はどういう薬なんでしょうか？それがわかれば皆さんの言葉の意味もわかります」

「・・・？」

「リカちゃん。がんばってね」

「むしろこんなヤツは見限ったほうがいいと思っわ」

「わたしもリカさんを応援するですう！！！」

「え？ちよつと！？みんなどうしたの？」

「まあ、いろいろあつたんだよ。オレも何かあれば・・・特にソラをシバいて欲しかったら手伝っぞ？」

「だから何で!？」

六月ですが晴れた空の屋上に私達のにぎやかな声が響き渡ります。平和ですね。

私はここで精一杯皆さんの仲間です。

師匠、またいつかそちらに行きます。

そんなことを考えながら私はいつものこのにぎやかな光景を見ていました。



# 1話・LONELY VAMPIRE

side 隆介

「……ねえ、間君」

「無理だ。オレには」

「でも……こんなこと頼めるのは間君しか……じゃ、あたしが」

「慣れてないと死ぬほど痛いんだぞ？」

「……何とかする」

「いくら多湖でも無理だろ」

「で、でも……」

「……じゃあねえ。オレがやる」

「間君……ありがとう!!愛してるよ!!」

はあ、オレはため息をつく。  
そして……。

「リカ、オレの血を飲め」

窓際で机に突っ伏してる白髪で薄い赤い目の美少女に言う。

「……………いやあ……………リュウがよく知ってるくせに」

「……………スマン。やっぱオレには無理だつて」

「……………田中君はイヤだし、シユウ君も厳密には人間じゃないからダメ。平地さんは痛がつてやらせてくれない。……………八方ふさがりだね。やっぱあたしの血を飲んでよ」

「……………でも、痛いかもよ？」

「それがどうした！！ばつちこい！！」

今は放課後。

リカはこのところソラの血を飲めなくて既にダウン寸前。

吸血するにも冬香にしようとしたところ、人間恐怖症のリカは緊張のためにかミスって冬香に激痛を与えたようだ。それに、オレとシユウは人間じゃねえから吸血はできない。

できるけど栄養にはならないらしい。

まあ、田中は知つての通り……………そこで、多湖が勇気を振り絞つて吸血させようとしてるわけだ。

……………あ？

何でソラがいない？それに坂崎の名前が出てない？

あいつらは今、この学校にいなえんだな。コレが。

あの二人は向こうの魔法学校に短期留学している。

まあ、そんなことになつたのは三日ほど前のことだ。

（数日前）

「今日も生き延びれた・・・」

「お前のチート性能が上がったにも関わらずお袋にポコポコにされるっつーのはどういうことだよ」

「・・・私達が足手まといなんでしょうか？」

「いえ、ただ単にわたしが強いだけです」

「「「「・・・」」」」

納得できるな。

さすがはお袋だ。

オレは本当にこの人の息子なんだろうか？

「終わったかの？」

「あ、龍造さん。・・・てか、みんなも？」

そこにいたのはオレのジジイ。

後ろから女子もついてくる。

・・・珍しいな。

「なんか用か？」

「まあの。して、優子さん。男子はどうじゃ？」

「私と比べると本当に弱いです」

「・・・比べる対象が違う気がするんじゃないか？」

ああ、ジジイ。その通りだ。

オレ達は今日も死線を何回もさまよったぞ？

「まあ、よい。実はの少し困ったことになったのじゃ」

「困ったこと、ですか？」

「そうじゃ。コレを見てくれんかの？」

そういつとジジイは一枚の紙をオレ達に見せる。  
オレ達はそれを輪になって囲んで見る。

「……コレは向こうの魔法学校のパンフよね？」

「そうだな」

「で、コレがどうしたの？」

「……リカ、近い」

「気にしない気にしない」

「まあ、なんじゃ、魔法使い教育のために各地の魔法学校で他からたまに短期留学せんか？というのがあるんじゃ」

「どこにボク等に関係するところがあるの？」

「十五年前まではここには魔法使いがおったんじゃ。もちろん。魔物が多いがな」

「……まさかとは思いが、向こうが勘違いしてこっちの魔法使いを何人か寄せつけてきたのか？ここには魔法使いはオレ達だけだぞ？」

「てか、ここの学校にも魔法使いがいたの？」

「ああ、ジジイは人間の間でも凄腕の魔法使いとして知られていてな。もちろん、魔王だってコトは伏せてあるが。もっぱら来るのは亜人種どまりだ。人間はいなかった」

「まあ、それで、わしが十五年間の間、何も連絡を寄せさんかったから怒つとるようじゃ」

「……それって、ボクの封印のせいだよな」

「いや、しょうがないだろ？」

「で、要するに、向こうはこっちの魔法使いを何人がよこせつけて言ってきたわけね」

「断ればいいんじゃないの？」

「それがの、わしがいろいろと世話になった人で……しかもわしが魔王と知っておるしの。あやつのが性格を考えるとわしの素性をバラすと脅してくるのが目に見えておる」

「……魔王を脅すとか……」

「まあ、そんなわけで行って欲しいんじゃない」

「・・・メンドイ」

「隆介、後で訓練よ？」

「ジジイ、オレが行く」

「お、そうじゃ、今回は人間のみじゃそうじゃ」

「残念だ」

「・・・なら、その笑顔を引つ込めなさい」

オレは内心でガッツポーズをしつつ話を適当に聞く。

「・・・じゃ、ボクが行くよ。それに十五年も連絡が取れなかったのはボクのせいだしね」

「じゃ、アタシも行く」

「いや、お前は魔物だから。それにソラもやめとけ」

「わしはまだ最後まで話とらんのじゃが？」

「まだ、何かあるんですか？」

「今回はスマンがわしが勝手に決めた。ソラと鈴音ちゃんが行って欲しい」

「何で!?!」

「…………リカ、アンタは少し落ち着きなさい」

「いや、アタシも行く〜!!」

「理由は簡単じゃ。この二人は魔法使いになって日が浅い。というかとヨっこじゃ」

「…………確かに」

「…………お前等素直だな」

「いや、事実だし」

「わたしも使える魔法が全然だからね〜」

まあ、ジジイの言うことはわかる。

こいつらは両方ともかなりチート、というかバランスブレイカーだ。

だが、それだけだ。

ありえない魔法を使いまくるが別に最強じゃない。

事実、このメンバーの中で最強はシュウカリカだとオレは思っている。

「まあ、妥当だろうな」

「私も別にそれほど行きたいと思いませんのでいいです」

「わたしも問題ないわ」

「行ってきたい~~~~!!!!」

若干一名ほどどうしても行きたいらしい。

「スマンの。じゃが、いらん混乱防止のためじゃ。わかってくれんかの?」

「……無理!」

こいつはソラが絡むと本当に積極的だな。

普段の教室で小動物みたいにソラの影に隠れてるリカが嘘じゃねえかと思うぐらいに。

「……最終手段じゃな」

そういつとジジイはリカとこそこそ話し合う。

ところどころで秘蔵だの盗撮だの聞こえる。

……宇佐野の力だな。

そして、なんらかの協定が結ばれたのかリカとジジイがガシッと握手する。

「……ガマンする」

「そうじゃ、それに、ソラもリカちゃんと距離をとってしばらくしてから会えば前よりも深い絆で結ばれるじゃろっ」

「うん!」

「……何だかボクがよくわからない取引材料にされてるのは気のせい?」



「気のせいだろ?」

そして、この日は解散になった。

「で、わずか数日でこの有様」

「……………痛かった」

「……………ゴメン」

まあ、前よりいくらか顔色はよくなってるから大丈夫だろう。  
逆に多湖がヤバそうだがな。

「……………ソラはいつ帰ってくるのかな」

「あ?……………あいつらは夏休みの数日前に帰ってくるらしいぞ?」

オレは何気なくそんな返事をした。  
だが、リカは石像のように固まる。

そして、油の切れたロボットのようになりぎぎとこっちを向く。

「……………それ、本当?」

「あ、ああ、そうだが?」

「……………そう」

そういつとリカは教室を出て行く。

・・・ちなみに今は六月の下旬。

梅雨に入って少し経ってる。

まあ、ソラは控えめに見ても一ヶ月ほど帰らない。だから、ジジイはよくリカを説得できたなとオレは思っていたんだが・・・。

「・・・理事長室で血の雨が降ってそうな気がするのはあたしだけ？」

「奇遇だな。オレもだ」

そして、校舎のどこかから老人の断末魔の悲鳴が聞こえた。

side 空志

「とーちやくっ!!」

「無駄にハイテンションだね」

ボクとスズはローブのようなこの学校の制服を着ていた。

そして、でっかい門を持つ・・・てか、見た目が既にお城な建物の前に立っている。

ここがボク等の短期留学際の『エレオール魔法学院』。

「・・・無駄に何でお城？」

「お姫様な気分になれそうだね」

まあいい。

ボクは龍造さんに教えてもらったとおり、門の横の詰め所に行

く。

「すみませ〜ん。 間学園から短期留学に来たもので〜す」

ボクは書類を出しつつ詰め所の奥に向かって言う。

すると、大柄な人がのっしのっしとやってきボクの手から書類を受け取ってざっと読む。

「・・・確認した。ここにサインを」

「はい。ほら。スズも！」

「え？ゴメン。お花に気をとられてて聞いてなかった〜」

「・・・既に頭の中がお花畑だと思っのはボクだけ？」

「・・・武器は？」

「はい？武器ですか？」

「・・・持つてるのなら申請しろ」

「あ、はい。スズは・・・『ユグドラシル』だっけ？」

「うん、そだよ〜コレ」

そういうとスズはあらかじめ背中に背負った自分の身長ほどもある杖を見せる。

警備員さんはおもむろに杖に触る。

「登録完了だ」

「じゃ、コレ、『ナイト』に『ナハト』です。」

ボクは自分の拳銃を見せる。

そして、登録完了。

「……これで完了だ。係りのものが来るまで中に入って待つて  
いる」

「「どうも」」

ボクとスズは中に入っていった。

「あ、そういえば何であの人は魔法で姿を変えてたのかな？」

「え？あの人、魔法使ってたの？」

「うん。まあ。でも、龍造さんに『月』は極力使っちゃダメって  
言われてるしな」

「でも、魔法陣と魔道具がオツケーならソラ君は大丈夫だよ」

「まあ、そうだね。いろいろと初めてなことばっかだし、がんば  
りますか」

ボクとスズが話していると事務の人が来て、ボク等は学校の中を歩  
いていった。

side??

「・・・アレが龍造君の生徒ね」

先ほどの警備員がそういうときいきなり姿が変化した。  
初級の魔法、変身の魔法だ。

「てか、いい加減にしてください。仕事してください」

突然誰もいないはずの空間から人の声が発せられる。

「いいじゃない。コレがささやかなわたしの楽しみなんだから」

そういうと変身が完全に解けた。

そこには若い女性。

黒い髪を腰まで伸ばした綺麗な人だ。

「はぁ・・・で、今回はどんなです？」

「面白そうな子ね。二人で漫才できるんじゃない？」

「・・・ここは魔法学園ですよ？聞いたのは魔法に決まってるで  
しょ」

声が呆れている。

そんな声を無視して女性が話す。

「でも、武器は一級品なんてものじゃなかったわ。下手したら近  
い将来、アーティファクト魔導宝具って呼ばれるわ」

「・・・なら、魔法は相当なのでは？」

「それはそれ、これはこれ。武器が優れていてもそれを扱う人が優れてなきゃ意味が無い。案外二人ともいいトコのボンボンで、あれも権力にモノを言わせて買ったものかもよ?」

「まあ、どつちにせよすぐわかることです。ですが、龍造さんからはランクAかSが妥当って言われてるんでしょう?」

「わかんないよ。あのおじいちゃんも、せうりく耄碌してるかもしれないし」

「・・・ホントにあなたは読めませんね。じゃ、そろそろ測定室に着くんで着てくださいよ学園長」

そういうと声は途絶えた。

そして、そこには黒髪の女性のみになる。

サリナ・G・エレオノール。

それが彼女の名前でここの最高責任者だ。

## 2話・DARK MOOD

side空志

ボク等はアレから事務の人に窓のない真っ白で中央になんかの机の装置が置いてあるだけの殺風景な部屋に来ていた。

「・・・確かメン・イン・ブラックにこんな部屋があつた気が？」

「まもなく学園長がみえます。しばらくお待ちください」

「ご丁寧にも〜」

この人は事務の園田椿さん<sup>そのだつばき</sup>。

ボク等の短期留学の担当をしてくれらしい。  
ショートカットでスーツを着たいかにもできる人って感じの女人。

まあ・・・うん。そんな感じの人なんだけどね・・・。  
その時、扉がノックされた。

「私が開けまふにや!？」

盛大にすつころんだ。

何も無いところで。

・・・いわゆるドジっ娘ってやつ？

「大丈夫ですか？」

「うう〜・・・大丈夫です」

「……鼻血が出てますよ?。」

「お〜お〜、さすがは椿っちゃん。ドジだね〜」

「……学園長」

「が、学園長!? すみません!。」

「いいよいいよ〜」

そんなことを言いながら長い黒髪の女の人と、その半歩後ろに仏頂面の男の人が部屋に入ってきた。

「はじめまして。私がこの学園長、サリナよ。こっちの堅物が下僕のカル」

「違います。学園長補佐のカルネル・C・ランバートです」

「あ、どうも。ボクは三谷空志」

「坂崎鈴音です」

「コレからよろしく。で、龍造君から聞いてる?。この学校の」と?。」

「はい」

「なんだっけ?。」

「……すみません。こんな子で」



ボクは龍造さんから渡された紙をスズに見せる。

「え〜つと・・・完全実力主義？ランク？どういうこと〜？」

「すみません」

「いいのよ。ここは実力主義。学年でS〜Dまでのランクがあるの。Sに行くほど成績優秀者が行くシステム。逆にDまで行くとただのへボって言われるの」

「言い方があるでしょ」

あんまりな物言いにカルネル先生？が突っ込む。

・・・この人も龍造さんと同じベクトルの人だな。

「でも、ほんとじゃない。ま、そのために魔法力の測定をします」

「魔法力の測定？」

おかしい。確か魔法属性を知ることができる都合のいい道具とかはこの世に存在してないはずなんだけど・・・。

「いやいや、魔法力、魔力だよ。属性は言ってくれないとさすがにわからないし」

「ああ、ボク等の早とちりですか」

「でも、どうやって測るの〜？」

「その机の水晶のようなものに触るだけでできます。それに触った後で数値が出てきます。ちなみに平均は5000ほどです」

「へ〜」

実際にどのぐらいすごいのかよくわからないので返事が適当になっってしまう。

まあ、やるしかないか。

「じゃ、わたしからするよ〜」

スズが机の上の水晶に触る。すると、水晶が少し光ったかと思うと、空中に数字が表示される。

数値は………24886。

なるほど、さすがはレア属性なだけあって平均の五倍もいくか。

「『五倍!?!』」

「……なんかまずかった〜?」

「ん〜……『逆』<sup>リバース</sup>だから問題ないんじゃない?」

「『逆』!?!?」

「わたしの属性は『逆』だよ。よくわかんないけどすごいらしいよ〜」

「ふふふふ……龍造君も面白い子をよこしてきたね」

「……この学校で教えられる人はいるんでしょうか?」

「すみません、担当を替えてくれませんか？」

「……でも、ソラ君のほうがすごいよね。だって『つ』じゃ、ボクもいいですか？」あ、がんばって」

「……うっかりぼろっともらしかけてるじゃん。

危ない危ない。

ボクは水晶に触れる。

「……なんか期待のまなざしで見られてる気がするけど……気のせいだよな。」

そして、スズと同じように光り、文字が浮かぶ。

数値は「……1298。」

「『低!?!』」

「五分の一か少ないね」

「え〜?何で?だってソラ君は『天空』だからね。スズよりは低い!?!」

「本当に『天空』なの?龍造君からもそついう風に届いてはいるけど……」

「あまりにも低すぎる」

「虚偽の疑いですか？」

「じや、じや、じや」

ボクは手に魔力をこめる。

すると、風が巻き起こり、さらにはパチパチと電気がほとばしる。

「……確かに。でも、ならいつたい？」

「まあ、考えてもしょうがないわ。それに龍造君のことだから、何か隠してるのよ」

鋭いつすね。

まさにボクは『月』を隠してます。

何で隠さなきゃいけないのかよくわからないけど。

まあ、使うときは連絡しろって言うてるからたぶん使えるけど。

「まあ、いいわ。鈴音ちゃんはランクS。空志君はランクAに入ってる。龍造君補正ね。でも、実力がなければすぐにDに落とすわ」

うん。それはイヤだな。

龍造さんはボクのせいで怒られてるんだし……。

まあ、やるしかない。

「わかりました」

「何で！？ソラ君むぐう！？」

「……さつきからこの子どうしたの？君のほうが強いって？」

「いや、スズは魔法使うのにすごい時間がかかるんですよ。それでボクがその時間稼ぎをしてるからじゃないですか？」

「そうかい？じゃ、クラスに案内するよ」

そういうとボクとスズはカルネル先生に連れられてその部屋から出て行った。

s i d e サリナ

「・・・おかしいわね」

「何がですか？」

「あの男の子のほうよ。龍造君がただの人間の子を送ってくるとは思えない」

「・・・何か分けありなのでは？」

「・・・かもね。まあ、わたしの予想が正しければ実力はそのうちすぐにわかるわ」

s i d e 空志

「ここが君の教室だ。で、こちらが担任のレイ・アストリウム先生だ」

「よろしく。レイだ」

長身の男性教師がボクに挨拶をしてくれる。  
雰囲気フレンドリーだ。

「三谷空志です。よろしくお願いします」

「坂崎君はこっちだ」

「え？あ、ソラ君！また後でね〜！！」

そういつとさっさと行ってしまったカルネル先生についてスズが別の教室に行く。

「じゃ、君のクラスはこっち」

そういつとボクを教室に連れて行ってくれる。

「で、数値がそんなに酷かったのかい？」

「近年まれに見る低さじゃないですか？1000ぐらいでした」

「それは・・・低いね。最低でも3000はあるからね」

・・・ボクは最低以下なんですな。

ボクは地味にシヨックを受けつつ先生の後についていく。

「ここだよ。少し待ってくれ」

「はい」

そういつと先生は中に入っていく。

「よ〜し、静まれ〜。短期留学生が来たぞ〜」

「レイっち！それは女子だよな〜！！」

「イケメンですか!？」

「お前等で判断しろ。入ってこい」

ボクはガラツと引き戸を開けて中に入る。

・・・地味に全員落胆しないで欲しい。

ボクはイケメンじゃないよ!!

「「「うおおおおおおお!!???」」」

・・・スズのところか？

そこからすごい雄たけびが聞こえる。

「紹介して」

「あ、三谷空志です。短い間ですけどよろしくお願いします」

パチパチとまばらな拍手でボクを歓迎してくれる皆さん。  
うれしすぎて涙が出る。

・・・悲しいんじゃないヨ？

「・・・じゃあ、席はそこだ」

そう言って、隅のほうの席を指す。

ボクはそこに歩いて行って座る。

「じゃ、今日もがんばれよ」

そういうと先生は教室を出て行った。

・・・でも、魔法学園か・・・どんなことをするのかな？

「ねえねえ。三谷君？」

「うん？はい？なんででしょう？」

ボクに話しかけてきたのは女子の子。  
名前はもちろんわかりません。

「君つてどこの学校出身？てか、噂では向こうの世界とか言っただけど本当？」

「まあ、そうだよ。学校は間学園つて所」

「間学園？・・・誰か知ってる？」

「俺知らネ」

「わたしも」

何だかいつの間にかボクの周りには人が集まっていた。  
コレが転校生の最初のイベント、質問攻めか！？

「そーいや、お前の属性と魔法力は？」

「あ、ボクは『天空』の属性だよ」

「お？結構すげーの持ってるんじゃない？」

いや、ボクが隠してるもう一つのほうがすごいよ。



「魔力は1000ぐらいだったかな？」

「「「「「」」」」」」

「あれ？ボクなんかまずいこと言った？」

「おい。お前等いつまで経ってる気だ？席につけ」

その言葉にみんなはそろそろと自分の席につく。

でも、何だかこつちをチラチラ見てる。

・・・てか、雰囲気さっきと違う。これは・・・敵意？

「まずは詠唱の基本からだ」

・・・ごめんなさい。ボクは魔法陣しか知らないっす。

side 鈴音

「カレシは！？」

「家どこ！？」

「前の学校は！？」

「付き合ってください！！」

「スズたんって呼んでいい！？はあはあ」

「え？ちよつと！？何？」

す、すごい。

コレが転校恒例行事の質問攻めか。すごいね。

「属性は!？」

「え? 『逆』<sup>リバー</sup>だよ!？」

「……なにそれ?」「」

「え〜つと……魔法を消す魔法?」

「「「???」」「」

あ、どうしよう!?

みんなわかってないみたいだよ。

……そういえば魔法力で先生達が驚いてたからそれを言え  
ばいいのかな?

「魔法力っていうのが20000とかだった!」

「「「……」」「」

え? ダメだった!?

どうすればいいの!?

むう〜何でソラ君はSじゃないの〜。

確実にここの先生が束になっても……それは無理かも知れない  
けどとにかく何とかしてくれよう……。

「「「マジで!?!」」「」

「ひう！？ゴ、ゴメンなさい！？」

「すつげえ！？そんな数値生徒会長ぐらいしかいねえよ！？」

「属性がよくわからないけど次の魔法実技でわかるしね」

ん？んん？

よくわからないけど助かった？

「これからよろしくね」

「あ、うん」

わたしの出だしは順調だったよ。

side 空志

「・・・いつそ殺してくれ」

「ソラ君、大丈夫？」

「無理だよ。ボクは魔法陣専門なんだよ？てか、それを正直に言っても『は？何だそれ？』みたいな感じでスルーされた。もう、ボクが楽しみなのはちよつと癪だけど魔道工学ぐらいしかないよ」

「・・・お疲れ様」

ボクはスズと一緒に中庭で昼食中。

いつの間に作ったのかスズはいつもの通り弁当を持ってきてた。

しかもボクの方も。

いやあゝスズ、サマサマだよ。

でも、気になることが一つだけある。

「・・・ねえ、何だか視線が怖いよ」

「気づいてた？というか、それは主にボクに向かっている。・・・  
何でだろう？」

さつきから視線がヤバい。

・・・みんな目からビームでも出そうとしてるのかな？

「おい。お前」

声の方向を向くと、そこにはボクの知らない男子生徒がいた。

「?・・・ボクですか？」

「そうだ。何故、AがSと一緒にいる？」

「「?」?」?」?」

ボクとスズは意味がわからなくて首をかしげる。

・・・そういえばランクによってこの制服のローブの紋章の色が違つとか言ってたっけ？

確か・・・Sが白。Aが青。Bが黄。Cが赤。Dが黒、だったかな？

で、ボク等の目の前の人は白。つまりはSか。  
でも、何でダメなんだ？

「……お前等、留学生か？」

「あ、はい。そうです」

「……なら、今回は許してやる。Aの落ちこぼれがSに話しかけるな」

「むう〜ソラ君は落ち」わかりました。今後気をつけます。「ちよつと!?ソラ君!？」

ボクはスズの言葉をさえぎると、そういった。そして、ボクの言葉に満足したのか去っていった。

「ねえ!?何であんなこと言ったの〜!？」

「……さつきではつきりした。たぶん、ここはランクです。こゝい格差があるんだ。下のランクに行けば行くほどさげすまれて、上に行けばちやほやされる」

「え?……じゃあ……」

「……寮以外では話さないほうがいいね。ボク等のためにも」

「……うん」

「まあ、次の授業をがんばろう」

ボクは明るい声を出して、スズと分かれた。

次は……なんだっけ?

まあ、とにかくがんばろう。

### 3話・DUEL

side空志

この学校に来てから数日後。

「・・・無理、死ぬる」

ボクは現実という怪物に殺されかけていた。

「三谷く生きてるか？」

「全力で死んでます」

「元気そうで何よりだ」

「レイ先生！ボクの詠唱方式は魔法陣です！！詠唱とか真言以外  
でしたことが無い！！」

「・・・大丈夫かい？真言は君みたいな学生が出せる代物じゃな  
いんだよ」

「・・・そうなの！？」

ボクの周りはバンバン真言使いまくってるからボクぐらいの年齢  
でもできるんだくって思ってたよ！

てか、そんな哀れみの視線で見ないで！！

「それと、学園長からのお知らせだ。このままだとDに落とすっ  
てさ」

「……」

それだけはダメだ。

龍造さんの顔に泥を塗るわけにはいかない。

「……ガンバリマス」

「……何でそこまでAにこだわる？」

「龍造さんの顔に泥を塗るわけにはいかない。それに、ボクのせいで十五年間も眠ってたんだ」

「何を言ってるんだい？」

「独り言です」

「そうかい？……でも、そろそろ危ないよ？」

「危ない？……ボクはそんなにDに落ちる可能性が高いんですか？」

「いや、この学校には特殊なシステムがあつて」「三谷と言つヤツはいるか！？」……ついに来ちゃったか」

「どういうことですか？あ、ボクが三谷ですけど？」

そこには金髪の青年がいた。

……ボクのクラスの子ではないはず。

「え〜っと……はじめまして？」

「ああ、だが、そんなことはいい。お前、俺と決闘しろ」

「謹んで辞退させていただきます」

「……いや、申し込まれた時点で回避できないから」

先生が突っ込む。

「ええ〜。ボクは平和主義なんですけど〜？」

「……コレが特殊なシステムだ。決闘をして勝つと、クラスを入れかえることができるんだ。ちなみにランクが高いほうが勝てば相手のランクが一ランク下がる」

「へえ〜」

「……お前、俺が決闘を申し込んだのは誰か分かってるのか？」

「……そういえばボクか!？」

「……まあいい。とにかく、お前は俺とけ「ソラ〜!!」「え  
?ウゲフウ!?!」「……」

説明しよう。

てか、必要ないよね

「会いたかったよ〜!!」

「みゃ〜」



「・・・なんでリカがここに？てか、レオもかい!？」

「ソラに会いに」

「じゃ」

「帰りなさい」

「いや〜」

「・・・おい。お前シバくぞ？」

「いや、コレは不可抗力じゃない？」

「何故だ!？お前の周りには美少女が集まる!？」

「・・・なんかゴメン」

「死んで詫びろ!!放課後だ!!先生!!いいですね？」

「・・・はあ、許可します。では、時間は放課後、競技場にて」

先生がそういうと金髪の方は教室を出て行った。

「・・・ねえ。あれってソラの新しい友達？」

「いや、全然違う。というか、いい加減に離れなさい」

「無理〜。お腹が減って力が出ない〜」

「……どのア パンマンだよ」

「……そろそろ授業を始めたんだけどいいか？」

「すみません」

「みゃ〜」

昼休み。

ボクは中庭のベンチで購買で買った惣菜パンを食べている。

「で、何でリカがここに？」

「え？ソラに会いに来ただけだよ？」

「……レオ？」

「みゃ〜」

「……どうやらマジらしい。

はあ、吸血鬼ってバレたら大変なことになるよ!？」

「だって、そのときはソラが守ってくれるでしょ?」

「まあ、最善の努力はするけどな〜」

ボクはいいつつパンを食べ終わったので袋を綺麗にたたんでポケットに入れる。

でも、決闘か。

メンドイな〜。

「でも、そんなのソラなら一ひねりだよ」

「いやあ〜、それがさ、この学校、魔法陣は扱ってなくてさ。詠唱で何とかしなきゃいけないんだよね」

「ふ〜ん。・・・あ、そういえば龍造さんから伝言を預かってきたよ〜」

「・・・それが一番重要だと思つのはボクの気のせいかな？」

「うん。気のせい」

そんな無茶なことを言いつつリカはボクに一枚の紙を見せる。そこには短くこう書かれていた。

『お主がやりたいようにやればいい』

「はあ、龍造さんも言ってくれるよ」

それで一番悩んでるのに・・・。

そして、ボクは立ち上がると教室に向かって歩き出す。

「あ、待って〜」

リカはレオとボクの後ろについてくる。  
・・・なんかいつもと変わらなくなってきたるな。

「・・・ついに来てしまった」

「大丈夫大丈夫。ソラなら一ひねりだよ」

「そだね」

「・・・ボクはさ、決闘の前に闇討ちされそうな気がする」

「何で？」

周りがボクに殺気を向けてるんだよ。

こんな美少女二人も引き連れてお前何様だ的なオーラをかもし出してるんだよ？

ホントに生きた心地がしない。

「・・・ハア」

ボクはため息をつく。

そして、競技場に着く。

「じゃ、ボクはこっちだから。二人は応援しててね」

「いいよ〜」

「じゃ、ソラ。がんばってね〜」

そういうと二人はボクとわかれてアリーナ席に向かっていった。

・・・さて、ボクはアリーナに向かいますか。

数分ほど歩くと、競技場に出た。

・・・地味にギャラリーがすごいですけど？

まあ、ボクは既にいた金髪の人の近くに行く。

「よく逃げなかったな」

「え？そういうのはできないんじゃない？」

「いや、ここはこういうセリフを言う場面かなと・・・」

・・・なかなかにお茶目な人だった。

「はぁ・・・すみません。ルールとかよくわからないんですけど？」

「ルールは簡単だ。俺達は魔法で戦う。武器も可だ。どちらかが降参するか、気絶するまで続ける。ランクは勝ったほうと入れ替え、あるいは負けたほうを降格させることができる」

「どうも。じゃ、ボクは武器を。『ナハト』、『ナイト』」

そういうとボクの手には銃が現れ、腰にはホルスターが取り付けられる。

「私物か？」

「はい」

「・・・ブルジョワが」

「違うよ！？ボクはとある腹黒魔道具馬鹿の人に脅されてタダ働きしてるんだよ！？これの料金で！」

「黙れ！俺も武器を使う！！」

そう言うのと背中に挿した両手剣を手にする。  
・・・学校のヤツだね。

「じゃ、決闘を始めます。所属と名前を」

審判役のレイ先生が言う。

「ランクS、ロイ・ガリユーク」

ランクSの人だったんだ。

「ランクA三谷空志。よろしくお願いします」

「では、はじめ！！」

その言葉と同時にボクは一気に間合いを詰め、ボクは銃を撃つ。  
相手・・・ロイはそれに難なく対応。

「大地よ、我を守れ！！」

ガイア・シールド  
大地の盾」

まさかあの至近距離で防ぐとは……。拘束で移動からの強襲しかないかな？

「 其は風に属す法則。

風よボクの力となれ。

それは猛り狂う迅き風の如く。

フェザー・ステップ  
風の舞」

風でボクのスピードが上がる。

ボクは縦横無尽に駆け巡り、隙があれば銃を撃つ。

「俺はそんな攻撃ではやられんぞ？

我、大地に眠る力を呼び覚ます。

土は金へと変貌し、新たな力を与えん」

何だ？この魔法？

初めて見るタイプだ。

今、ボクは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を発動してない。

龍造さんとの約束だからね。

「 大地と金よ彼の者にその力を

汝の剣をもって知らしめたまえ！！

ガイア・ソードキロチン  
大地の剣の断罪 ！！！！」

そういつとロイは剣を地面に突き刺す。

すると、ボクの立っていた地面が隆起し、いくつもの手がボクを捕まえる。

「しまった!？」

「……俺の勝ちだ。坂崎さんやあの白髪の少女の前でお前の惨めな姿をさらしてやるっ」

その言葉と同時に地面から生えた手がいつの間にかマジモんの剣をボクに向けている。

「おい!？アンタ最初からそれが目的だろ!？」

「なんとも言え!!俺はいいところを見せて坂崎さんにかっこいいところを魅せる!!まあ、降参するならそれでいいが」

……まあ、動機はどうあれマジでピンチ。

ここから詠唱しても間に合わない。

……終わりか？

「ソラ君!!がんばれ!!」

「ソラ!!前にも言うこと一つだけ聞くって言ったよね!!」

……ありすぎて覚えてないよ。

まあ、たぶんそうだろうね。

てか、何でやたらと二人の声がよく聞こえるんだろう？



「だから、このお願いを聞いて！！ソラの全力で勝って！！」

「・・・ゴメン。ボクさ、さっきので負けられなくなっちゃった」

「この状況でどう勝つつもりだ？」

「いや、簡単だよ。・・・全力で勝つ。

月詠ツクヨミ　！！」

ボクの目がマナを捕らえる。

うん。やっぱごうじゃなきゃね。

「魔法陣展開・・・千刃嵐センジンラン　！！」

ボクは魔法陣を展開すると、魔法を発動。

すぐさま魔法陣から刃を持つ嵐がボクの拘束していた土の手を切り刻む。

「な！？無詠唱であれほどの魔法を！？」

「ん・・・事後承諾だけどいいよね」

ボクはとりあえず相手を無視してケータイを取り出す。

そして、アドレス帳から龍造さんを選ぶ。

すると、すぐにつながった。

『なんじゃ？ソラか？』

「あ、龍造さん。ゴメン。リカに頼まれてさ……全力で魔法を使わないといけないんだ」

『そうか。わかった。まあ、適度にボコしときなさい』

「うん。ありがとう」

ボクは電話を切る。

「ゴメン。待たせたね。じゃあ、ここからは……」

ボクは後ろに黄色と赤色の魔法陣を大量に展開する。

「ボクの全力で君を倒す」

sideサリナ

「……龍造君はナメてるのかな？」

わたしは競技場にいた。

もちろん。決闘を見るためだ。

留学生の三谷君の相手はランクSのロイ・ガリユーク。

彼は大地と金属の属性の多重属性持ちデュアル。

さらにはガリユーク家は名門の魔法使いだ。さらには剣にも長けている。

ここらでは最強の家門だ。

しかも、彼は神童とまで言われる人物。

あんな至近距離の弾丸なんて普通なら防げない。

でも、彼はそれをやってのけた。

「……でも、三谷君もそれなりに場慣れしてるか？」

じやなきや銃の癖に相手に突撃なんてできないし戦法をああも変えて戦うなんて早々できない。

でも、相手の魔法で三谷君はすぐに捕まえられた。

……確か、アレはロイ君の使う中でもかなりの上位に入る魔法。

「勝負ありか……」

まあ、がんばったほうだ。

でも、ランクは下げられるだろうけど。

わたしはそこを立ち去ろうとした。

そのときだった。声が聞こえたのは。

「だから、このお願いを聞いて！！ソラの全力で勝って！！」

お願い？全力？

何のこと？それにソラって……三谷君のこと？

そのときだった。急に競技場の魔力が膨れ上がった。

「何コレ！？」

わたしは慌てて競技場を見る。

そこには、ついさっきまでロイ君の魔法で拘束されていたはずの三谷君が立っていた。

「何で？」

周りを見ても生徒はざわざわして、何が起こったのかよくわ

かかってないらしい。

そして、三谷君はケータイを取り出す。

少しだけ話すと、すぐにポケットに仕舞う。

そして、彼の後ろに膨大な数の魔法陣が展開された。

「な！？あの子の魔法力であんなことができるはずが！？それに・  
・数法術式？」

急にわたしのケータイが震える。

こんなときにー！！

「誰！？こんなときにー！！」

『わしじゃ。そろそろ説明がいるかと思つての』

「・・・龍造君？」

『いかにもそつじやが？』

「なにあれ？」

『アレが三谷空志、ソラの本気じゃ』

「・・・何で？あの子の魔法力がどれだけ知ってるの？」

『ちゃんとソラから聞いたぞ？10000ぐらいじゃったか？』

「なら、アレはありえないことぐらいわかるでしょー！？」

『いや、ソラの魔法はそんな数値は関係ないからの』

「関係ない？」

すると、そこで急に猛獣の咆哮が聞こえた。  
何事かと思つて競技場を見ると、そこには一匹の白い翼を持つ獅子がいた。

「魔獣!？」

『あ、大丈夫じゃ。それはレオと言つてな、ソラの相棒<sup>パートナー</sup>じゃ。それにレオはむしろ幻獣の類じゃぞ?』

「何でそんな物が!？」

『ソラじゃからな。まあ、さきの話の続きじゃが……ソラの属性は知つとるか?』

「『天空』でしょ?あの子自身がそう言つてたわ。」

『すまん。諸事情であの子にはウソをついてもらったのじゃ。お主が信用できる者以外に話さんのなら教える』

「……龍造君、わたしを誰だと思つてるの?」

『そうじゃな。生徒を売る人間じゃないからの、お主は……あの子の属性は『月』。マナを見ることができ、また、操作もできる。相手の魔法属性すらあの子にかかれればすぐにバレる』

「そんなふざけた魔法属性が……」

そこで、また魔力が膨れ上がる。  
いったい何が起こってるの!?  
競技場をまたも見る。

そこには、魔法陣を展開した三谷君。  
でも、さつきとは確実に違うレベルの魔法……。

「まさか、真言?」

『お?するの?なら、その目を開いてよく見といたほうがいいぞ。今から見るのは一生に一度どころか前世を十回やり直しても見れるか怪しいものじゃぞ?』

そんなことを言われたからじゃないけどわたしはその魔法を凝視した。

少しだけ蒼みがかった銀色の魔法陣に文字や記号が描かれていく。そして、それをロイ君は邪魔しようとするが、白いライオンに守られているために攻撃が通らない。

そして、ついに魔法が完成した。

その魔法陣を中心に魔力の大嵐が発生する。

三谷君はその魔法陣に手をつ突っ込むと、一気に引き抜く。

そこには波刃の綺麗な日本刀があった。

三谷君が何かを言ったのかライオンは後ろに下がる。

そして、ロイ君はチャンスとばかりに魔法を連発する。

だが、三谷君はそれをどうやったのか超加速することで回避。

一気に相手との間合いを詰める。

ロイ君は土の盾でガードするが、三谷君が日本刀を一閃して盾を切り裂く。

そのままロイ君に日本刀で斬る。

わたしはあつと思っただが時は遅い。

既に刀はロイ君を斬った。だが、不思議なことに血は一滴も流れ

ていない。

「具マテリアライズ、具現化!?!」

『そうじゃ。どづじゃ?信じる気になったかの?』

「……イヤでも信じるしかないでしょ」

『そうか。よかったわい。それじゃあ、ソラのことはくれぐれも秘密でな』

そういうとケータイの通話が終了する。

「……っふ。まったく、本当に面白い子を送ってきたわね」

#### 4話・A SERIOUS INFERIORITY

sideロイ

俺はこんな魔法力の低い相手だが坂崎さんにいいトコを魅せるためにかなり上位の魔法を使った。

これは俺が独自に考え出した金属と大地の魔法。

相手をいくつもの大きな土の手で捕まえ、さらに他のバカみたいにデカイ剣でトドメをさす、という魔法だ。コレを食らったやつは確実に負ける。

というか、この魔法を出して俺は負けたことが無い。

だから、俺は目の前の光景がありえないと思った。

あの、リカと呼ばれていた白髪の少女がソラに何か言っただけでヤツが言った。

「・・・ゴメン。ボクさ、さっきで負けられなくなっちゃった」

何を言ってるんだ？

今のこの状況をこいつはわかっているのか？

「この状況でどう勝つつもりだ？」

「いや、簡単だよ。・・・全力で勝つ。月詠ツクヨミ！！」

そうだった瞬間、ヤツの雰囲気が一瞬で変わった。

別に何も変わった様子はない。

だが、何かが変わったのが感覚的にわかる。

「魔法陣展開・・・センジンラン千刃嵐！！！！」



三谷は突然何の詠唱もなしに魔法を発動させた。それは風の刃の嵐で全ての土の手を切り裂いた。どう控えめに見ても中級の上位魔法。それを無詠唱で発動できるなんて俺達のような学生ではありえない。

「な！？無詠唱であれほどの魔法を！？」

「んっ……事後承諾だけどいいよね」

ヤツは俺を無視してケータイを取り出す。

そして、どこかに電話する。二言三言話すとケータイを閉じ、またこちらを見る。

「ゴメン。待たせたね。じゃあ、ここからは……」

ヤツの後ろに黄色と赤色の魔法陣が大量に展開される。

「ボクの全力で君を倒す」

「な、何でお前がそんな魔法を！？」

「うっん……ボクの属性のせいかな？」

「『天空』にそんな特殊性質があるなんて聞いたことが無い！！」

「残念。ボクは『天空』だけじゃないんだ。君と同じように多重属性持ち。まあ、こっぴつ属性だよ。……焰鳥！雷燕！」

そついうと魔法陣から火や雷があふれ、そこから火と雷の鳥が出現する。

「まあ、かるく行け！」

そういうと周りの鳥達が俺に殺到する。

「くっ!？」

大地よ我を守れ!

ガイア・シールド  
大地の盾　!!!」

「無駄だよ」

ヤツの言葉を聞いたかのように魔法の鳥が壁を回避して左右から挟み撃ちにする。

「バカな!？こんな高等魔法を!？」

俺はとっさにバックステップで後ろに思い切りジャンプすると、一瞬の後にそこに魔法の鳥が攻撃してくる。だが、何羽かはこっちに向かってくる。

「何だその魔法は!？」

大地の力もって彼の者を貫け!!

アイス・スピア  
大地の槍　!!!」

そういうと地面から無数の槍が勢いよく出てくる。その槍で敵の魔法を串刺しにしてついに攻撃が止まる。

「っはぁ・・・何だその魔法?数法術式か?」

「いや、違う違う。それは冬香の専売特許だから。・・・あくそ  
ういえば前に古代魔法がどうのこうの言われた気がする」

「・・・ツチ。今度はこっちから行く!」

「まあ、ボクも全力でやるって言ったからね。残念だけどこの魔  
法でケリをつける」

そういつと三谷は手を前にかざすと、目を閉じて集中する。  
バカめ!!

精神集中のためとはいえそんなことをすれば一瞬で敵にやられる!  
このようにな!!

「金の力を今ここに!」

汝、鋼鉄の弾丸によって撃ち抜かれん!!

アイアン・シューティング  
鉄の弾丸!!!

先ほどの土の手に握られた剣がぐにやりと歪み、俺の前に鉄の弾  
丸となって出現する。

「撃て!!!」

そういつと弾丸は高速で三谷に飛んでいく。

あいつは今、魔法の構築で無防備だ。

だが、そんな希望もあっさりと打ち砕かれた。

獣の咆哮によって。

ちゅん!どおおおおおおおおおおん!!!

一体の翼の生えた白いライオンの放った光線によって俺の魔法が



この魔法は金属の腕を精製し、地面のいたるところから出す。そして、コレの大きな特徴は自分で魔法を操作できること。普通はそんな複雑なものは数法術式でも使わない限り無理だが、俺はごく普通の詠唱でそれを可能にした。だが、数法術式はいちいちコードの組み換え等が必要だが、コレは自分の腕を操るがごとく操作が可能だ。

「其は魔に属す法則！！」

それは黒の夜のごとき魔法。

それは太陽の光のように全てをてらせない。

しかし、それは夜を照らす一筋の光！！

月夜ツキヨ！！

向こうも魔法が完成したようだ。

だが、出てきたのは一振りの刀だけだった。

「バージョン刀、銘は月閃ゲッセン」

「・・・ハッ！最強というわりにはただの武器召喚じゃないか！」

「・・・説明は君の体に直接叩き込んで教える。そっちからどうぞ。その魔法はどうも君が操作するらしいし」

「！？」

何でそれを！？

こいつは初見で見破ったのか？

ありえない。そんなことはプロの魔導師でもできない。

ヤバイ。

俺の本能がそう告げる。

「ッ！？・・・やれ！！」

そういつと鋼鉄の腕が三谷に殴りかかる。  
そこにライオンがさっきの光線を吐く。  
それで腕が一本だけ消し飛ぶ。

「な！？」

「レオ。いいよ。疲れたでしょ？後ろに下がって」

「がう」

そういつとレオと呼ばれた魔獣は後ろに下がる。

「お前はバカか？そいつに任せときゃ勝てただろうが」

「いや、ボクとこのお姫様の命令でさ。まあ、ホントならここまでの魔法はめったに使わないんだよ。ストックがもったいないし」

「はあ？」

「いや、まあ、こつちの話。そつちが来ないならこつちから行くよ」

そういつと三谷はまたも超加速で俺に近づく、俺は腕を操作して三谷に殴りかかる。

だが、三谷はそれを刀で切り裂いた。

どう見ても刀身が一メートルほどの刀で直径5メートルはある腕をだ。

それだけでもありえないのに、魔法はそのまま霧散して消えてしまった。

「な!？」

「………なかなかメンドイ魔法だね。それぞれに核コアがある……まあ、君のトコの核を潰せばいいんだろうけどね。」

何を言ってる!？

何をした!？

ワケがわからない。

そして、動揺したのか俺は三谷の接近を許してしまった。

「!？」

大地よ、我を守れ!!

ガイア・シールド  
大地の盾 !!」

地面から土が隆起し、壁を形成。

だが、三谷はそれをも切り裂くと、そのまま俺に向かって剣をふった。

「たかが魔法力が高いってだけで調子に乗るな!!」

「ガアツ!？」

何だ!？この痛みは!？

斬られた痛みじゃない!？

体の内側を削られるような痛みが発生する。

そして、俺は意識を手放した。

side 空志

ボクは気絶したのを確認すると、刀を消した。

・・・少し大人気なかったかな？

まあ、いいでしょ。・・・たぶん。

「で、ボクの勝ちでいいですか？って、センサー？どこですか？」

「ここだ〜」

声が遠くから聞こえてくる。

ボクが聞こえたほうを向くと、そこには柱の陰に隠れたレイ先生。

「いや、そんなところじゃ審判のい「ソラ〜！」ぐふあ!？」

今回は横じゃなくて上から降ってきた。

・・・観客席から直で飛び降りたな。

ボクはリカに抱きつかれたまま立ち上がる。

「・・・こんな大勢の前で何してんの？」

「ソラの勝利を祝福する抱擁<sup>ハグ</sup>〜」

「だ〜か〜ら〜!!それは自分の好きな人にしなさい!!」

「ま〜ま〜。やっぱりソラ君一方的だったね〜。でも、真言まで使ったよかったの？」

「・・・いいんじゃない？」



「ソラをバカにしたからだよ。べ〜！」

・・・容赦ないね。

そこで、ボクはギャラリィが騒がしいことに気づく。

・・・ところどころ不正だ！とかズルした！とか聞こえてくるんですけど？

「あ〜・・・先生？なんかこの試合に不満を持つてる方々が多いようですが？」

「・・・三谷君。君は自分が何をしたのかわかってるのかい？」

「ロイ何とかって言う人を全力でボコボコにしました」

「・・・ハッ！？そっいえばその人はランクSの主席の人だよ。」

「

・・・え？

「じゃあ、この人がこの学年で一番強いのか？ソラに負けたけど」

「らしいね〜」

「・・・ボク最強？」

「そういうことだね」

「先生！」

そこに見知らぬ女子生徒らしき人が現れる。

・・・ボクは見覚えが無いな。

「これは絶対に何か不正があったんです！！無効試合です！！」

そういうと場外からもそうだそうだ！！とか野次が飛んでくる。  
・・・まあ、ボクが使ったのはマイナーのマイナーだし知らない人が多いからしょうがないのかな？

「・・・ソラ、この人ぶちのめしていい？」

「いや、ダメ。絶対。この人が死ぬ」

「あゝこの人もランクSだよ。わたし見覚えがそこはかとなくあるよ」

「・・・でも、ランクSでも下っ端だね。属性はただの『水』だし。少し魔力が多いだけ」

「な！？先生！！絶対におかしいです！！この人は初対面のわたしの属性を知ってます！絶対にあらかじめロイのことを調べてたんですよ！」

今度は卑怯者とか聞こえる。

・・・よく考えると確かに卑怯かもしれない。

「でも、そういう個人情報はやんと秘匿している。・・・三谷君、君は本当に何者だい？」

「ただの魔法使いです」

「違うよ〜チートだよ〜」

「ソラはアタシの………てへ」

リカはとりあえず無視しておこう。  
トリップするのはよくあることだ。

「坂崎さん!!あなたランクSの癖にAの肩を持つの!?!」

「え〜だって、ソラ君がわたしより強いのは事実だよ〜?」

「ああ〜!!先生!!わたしもこの三谷という生徒と決闘します  
!?!」

今度はやれやれ〜とか言ってる。

……いい加減にうっとうしくなってきた。

「ソラ、こっぴつうのってイライラする」

「わたしもキライ〜」

「奇遇だね。じゃあ、次に考えてることも一緒かな?」

「「たぶんね」「」

「おっけ。先生。こっぴつうてください。『文句のあるヤツはボク  
が全責任を持って全力でぶちのめす』って」

ボクはわざと大きな声で聞こえよがしに言う。  
いい加減、口だけのヤツはうっとうしいと思ってたところだし。

そして、案の定その言葉に激昂した血の気の多い生徒さんが下に下りてくる。

「え〜わたしは〜？」

「ソラ。アタシもソラをバカにした人許せない」

「あくだってコレはボクに売られたケンカだし。それに、二人もこっち側に立つたらそれこそイジメでしかない」

「・・・シバく！！」

青筋を浮かべてランクSの女子生徒さんがキレてる。  
もつと牛乳を飲みなさい。

「はあく・・・たかがランクが上だからって調子に乗るな。でも、さすがにかわいそうだからハンデをやる。さっきの魔法は使わない。  
『天空』だけ」

「」「調子に乗るなああああああ！！！！！！」

そういつとボクに向かっていろいろな魔法が放たれる。

「ん〜コレは壮観だね〜」

「・・・何でここにいるの？」

「逃げる暇がなかった」

「え〜。じゃ、しょうがない。来い、フラインクボード浮遊盤」

そして、ボクは三人乗りすると、高速で空中に躍り出る。

「ちょー!?ぎゃあああああああ!!!????」

「・・・先生を忘れた」

「大丈夫だよ。・・・たぶん」

「でも、天空でどう勝つの?」

「こっつ勝つ。」

それは風と雷の嵐の魔法。

嵐の力をもって全てをなぎ倒せ。

災厄を、穢れを流せ。

この手に空を!!!

レックウテンシヨウハ  
裂空天衝破 !!!

真言二回目。

まあ、今回は結構間近で見たけど。

・・・こんなにすごい魔法だったんだね。

「・・・死人が出てないといいな」

「さすがに……………だうだろね……………」

「ソラなら大丈夫……………たぶん」

ボクは死屍累々とした競技場を見てため息をついた。

……………これどうしよう?

てか少しやりすぎた。

〜数日後〜

「」「三谷様と呼ばせてください!」「」

「あゝ・・・何コレ?」

ボクの目の前には何故かたくさん生徒がいた。

「なんかね〜三谷君は下のほうのランクのヒーローになってるっ  
ぽいよ〜」

「・・・何故に?」

「ソラが『ランクが上だから調子に乗るな!!』っていったから  
じゃないの?」

・・・そーいえばそんなことを言った気がする。

アレから数日が経った。

リカは何故か帰らずに、ボク等と同じように留学生と化していた。  
あ、そういえばボクとスズは同じクラス、つまりは同じランクに  
なった。

ランクD。

一番下のランクだ。ちなみにリカも。

アレで変わるらしいけどボクは辞退。

だって・・・ランクSを全員ぶちのめしちゃったからね。

報復がものすごく怖い。

そして、ボクは見事に魔法工学以外ではカスだったので下に落とされた。

スズも『あ、わたしも行くよ』とか言っただけで本当に降りてきた。どうもランクSの空気があわなかったようだ。

で、ボクとスズは本日付でランクDにクラスチェンジ。

なんかすがすがしい。

龍造さんにも一応は言っただけ、「お主らしいの」とか言っただけ。他のメンバーはボクにアホだバカだ言っただけ。

「でもさ、ボクはそんな風に『様』をつけられるような人間じゃないし……」

「いや、君のおかげでわかったんだ。君は自分がなんて呼ばれたのか知ってるかい？」

一人の男子生徒がボクに尋ねる。

緑色の髪とか初めて見た。さすがは異世界。

「あ……そういえばなんか言っただけがする。えと……  
・ランクAの皮を被ったザク？」

「……何そのピンポイントなボケ？」

「そうだよそこはシャ　でしょ？」

「むしろ強くなってる!？」

「……雑魚の間違いじゃない？それでその噂を流したの誰？ちよっと語り合ってくる」

「拳を固めて行くな。絶対にフルボッコにする気でしょ？」

「……まあ、いいです。それで、自分たちはランクを理由に逃げてたことに気づいたんです」

まじめな話になってきた？

「ランクが低いからSに何かされても文句を言えない。やられても勝てない。そう思ってたんですけど……」

「ん〜……アレ？なんかボクみたいな詠唱の知識がカスでも別のことには秀でている。それを伸ばせばSにも勝てる？」

「いや、そこまでは言いませんけど……」

「勝てるよ」

「え？」

「君の属性は風？」

「え？何で？」

「ボクの特技だよ」

「カンニングの疑いをかけられたけどね」

「……まあ、過ぎたことだよ。ボクも風を使うんだけどさ。風にもいろいろ種類があるよね。吹き抜ける風とか渦巻く風、鋭い風、



ボクがぱつと思ひ浮かぶのはコレだけどさ、他にもあるよね？」

「あ、はい」

「ここからは受け売りになるんだけどさ。負ける風を吹かせるよ  
り、勝てる風を巻き起こせばいいって」

「勝てる、風？」

「うん。ボクもよくわかんないけどね。まあ、ゲイル・ヴァルキユリア『風の戦女神』の  
異名を持つ人に教えてもらったんだ」

「「「「「うそお！？」」「」」」」

「だって、ソラ君の親友のお母さんだもんね」

「親友じゃない。悪友です」

「でも、アタシ達の周りには微妙に有名な人がいるよね。生き字  
引とか」

「「「「「智也さんねクリア・セイジ『消滅の賢者』だっけ？」」」」」

「「「「「「」」」」」」

クラスの方々は既に言葉を失っている。

まあ、しょうがないよね。

「「「「「まあ、とにかくさ、みんなでがんばって強くなってSの  
やつ等にぎゃふんと言わせよう！」」」」」

「ソラ、それ死語」

「『ぎゃふん』なんていまどき使わないよ」

「うるさいなあ〜！」

「……ありがとうございます。俺もがんばってSのやつらに目にモノ見せてやります！」

「うん。でもさ、敬語とかやめてよ。ボク等は同じ年でクラスメイトだよ?」

「……それもそうだ。俺はこのクラス代表の風葉・シルファリオン。カザハでいい」

「ボクは三谷空志。みんなはソラって呼ぶ」

「わかった。よろしく。ソラ」

「こっちこそ。短い間だけどよろしく」

そついうとボクとカザハは握手をする。  
そこでクラスDの生徒が歓声を上げる。

「え?何で!?!」

「なあ!!!俺にも魔法を教えてください!」

「あたしも!!!」

「俺、魔道具作るの得意なんだぜ！」

「アンジェリカさんは格闘系がすごいよね？どうすればわたしも強くなれる？」

「三谷君に料理を作ってるのをよく見かけたけど坂崎さんって料理好きなの？わたしもよくするんだよ？」

「え？ちよつと？」

「わく！？ま、みんな待って！？」

ボク等の留学生生活はまだまだ始まったばかりだし・・・今日もがんばって魔法を勉強して、ランクDでSを打倒でも目指すのは楽しそうだね。

ボクはこれからのことに思いをはせながらこのクラス一人ひとりに対応していった。

sideサリナ

「はあ、実力主義が聞いて呆れるわ。わたしが三谷君の実力を見きてなかった」

「まあ、アレはイレギュラーすぎですよ。『月』の属性ですか？そんなふざけた属性があるんですね」

「・・・胃に穴が開きそうです。担当を変わってください」

学園長室でわたしとカルと椿っちゃんが話し合っていた。

「でも、この成績はランクDです。実力があろうと全てにおいて優れていなければ意味がありません」

「カタイわよくカル。でも、龍造君も面白すぎるものをよこしてきたわね」

わたしはハアとため息をつく。

「……まだ、嵐は始まったばかりよ」

「……そうですね」

「……わたしには無理です」

学園長室にはなんともいえない空気が漂っていた。

## 5話・REVOLT OF INFERIORITY

side空志

「はあくこつちの方がまったりしてていいね。」

「ホントだね。」

「……………まったりしすぎてどっちがソラでどっちが鈴音のセリフかわかんない。」

ボクは一番上のセリフです。

まあ、なんやかんやで結局は最下層ランクに落ちちゃったボク等です。

そして、今は中庭の静かなところで食事中。

「……………ホントにコレがランクS全員を振り返りにした伝説の人間か？」

「あ、おはよう今日もいい天気だね。」

「……………今何時だと思ってる？昼だぞ？」

ボクに突っ込みをくれるのはDの代表。カザハ。

親切にボク等が困ったことがあるといろいろと手を貸してくれる。

「……………ホントに俺はこんなヤツに負けたのか？」

そこにいるのは……………ダレダツケ？

「おい！？お前、自分の対戦相手の名前ぐらい覚えておけよ！？」

「あゝ！ロイ……………」

「そつだ。俺はロイ」「ガンリユウジマ？」「そつそつ、ガンリユウつて、違つわ！ガリユークだ！！」

「まあまあ、そんなにカツカしなさんな。ほれ、牛乳。」

「カルシウムは足りてる！！……………つて、よく見たら賞味期限切れてるじゃねえか！？」

「……………何で貴方が？」

そついったのはカザハ。

「ん？おい、三谷。なんか問題あつたか？」

「……………特に無いと思つよ？」

「ならいい。」

そついつとボク等と一緒にゴハンを食べる。

「今日もおいしいね。」

「ありがと。リカちゃんも手伝ってくれたんだよ。」

「お？そつなの？おいしいよ。」

「……………もうっ。ケツコンして欲しいだなんて／＼／＼／  
……………ボクの記憶が正しければそんなことは一言も言っ  
てないんだけど？」

「じゃ、なくて！何でSの貴方がいるんですかっ！……って話  
ですよ……！」

「あ……………カザハ。だったか？」

「そうですね？」

「別に同級生なんだし敬語じゃなくていいだろ？」

「……………は？」

「いや、俺もSだ何だ言われて天狗になってたことに気づいたん  
だよ。こいつのおかげでな。」

そついうとボクをさす。

「でも、ボクがやったのってロイをボコボコにしたことだよね？」

「そだね。」

「それもソラが一方的に。」

「まあ、それはしょうがない。とにかくだ。今までのこと、すま  
ない。」

そういうとロイはカザハに頭を下げる。  
カザハはよくわかってないのかフリーズしてる。

「まあ、いまだに下のランクを見下す傾向にあるためこんなところでは話せないがな。」

「…………まあ、確かにここは人があまり来ませんからね。」

ここを教えてくれたのはカザハだ。  
人があまり来ないからすごく静かでいい。

「許してもらえないかもしれないがな。コレだけは言っておきたかったんだ。」

「いえ、俺に才能が無いのは事実です。それに、貴方はむしろ優しいほうでしたよ?」

「だから、敬語はいい。俺のこともロイと呼べばいい。俺もカザハと呼ぶ。」

「わかり…………いや、わかった。よろしく。ロイ。」

「こつちこそ、だ。カザハ。」

そういうと二人は握手した。

「ちなみにロイは自分からボクに負けたって理由でAにいったヤツだしね。」

「何でお前が!??」



「この前学園長を脅……話し合っていくつかの情報を聞き出した。」

「……ソラ？今、脅してっていいそうじゃなかった？」

「何のことかな？」

ボクは明後日の方向を向きながらボクの膝で昼寝をしてるレオをなでる。

「……いや、少し考えてることがあるんだよ。そのために学園長のトコに行っているいろいろ聞いてきた。」

「考えてること？」

「うん。それでさ、カザハ。」

「ん？何だ？」

「上のランクのヤツに目にモノ見せてやりたいと思わない？」

そういつとカザハ以外が悪魔のような笑みを浮かべる。

「……………はい？」

当の本人は困惑するだけ。

まあ、ノーって言われてもやるけどね!!

「と、いうわけでランク戦争をしようZE!!」

「それは美末のキャラだからとっちゃダメだよ。」

ここはランクDの教室。

生徒数は50人ほど。学年内で一番多い人数だ。その50人の生徒が首をかしげている。

「え〜っと。三谷君？それ何？」

そう聞くのは女子生徒Aさん。

まあ、そうだろうね。

疑問に思うだろうね。

まあ、それより重要なことがある。

「だから、ボクのはソラで……………リカサン？何故に鎌を  
？」

「……………気にしない。」

気になっちゃうよ!？」

まあ、雰囲気やバいのであえて気にしない方向で。

「簡単に言うと、クラス単位での決闘だよ。でも、ランクの入れ替えはないけど。ちょっとした特典があるよ。」

「……. . . . . なのあつたの?」

「俺もそんなの初めて聞いた。」

「だろうね。明日発表される予定のヤツだからね。」

「「「「「「「「「「「は?」「」「」

「いや、学園長と少しお話して、そういう制度を作ら、もとい、提案したんだ。そしたら以外にも通った。」

「「「「「「「「「「「ソラ、俺の耳が以上じゃなけりゃ、お前が学園長を脅したように聞こえるんだが?」

「いやいや、ただ、実力主義とか言っというてボクの技量をガン無視した人って笑えますよねって話したらうれし泣きしながらで判子押してくれた。」

周りからこいつひでえとか聞こえるけどそんなものは無視だ!!

「まあ、実は絶対に言うなって言われてるけどね?」

「おい!?! いいのか?」

「大丈夫大丈夫。ボクはすっかりしゃべっちゃったただだから。」

「……」

みんながボクに呆れた顔で見てる。

「まあ、とにかくだ。下克上作戦だよ!!」

「で、実際にはランク戦争って何をするんだ？」

「ルールは簡単。まずはどっかのランクに宣戦布告。バトル。以上。」

「……わかるかつ!」

なかなかはこのクラスってノリいいんだよね。

まあ、今はおいておこう。

ルールはこんな感じ。

基本的にはクラス全員参加。イヤなら別にいい。強制はしない。

各クラスでこの戦争の代表を決める。要するに指揮官の立場の人

だ。その人を倒したほうが勝ち。

スポーツマンシップに則る。

準備期間を設け、その間は授業免除。その代わり、戦争の準備をすること。

「まあ、大まかなのはこんなもんかな？」

そういうとクラスがざわざわする。

「じゃ、がんばろう。Cだしがんばれば何とかなるかな？」

「でも。あたし達一番下だしな。」

「あ、言うの忘れてたけどボク等はSに攻める予定だから。」

「」「」「……え？」「」

ん？言い方が悪かったかな？

「Sに物申しに行こう！」

「」「無理じゃボケえ！！」「」

そこかしこからコレだからエリートはとかできるヤツと違って俺には！！とか聞こえてくる。

「まあ、そういうと思って今回は特別ゲストを呼んでいます。」

「え？ソラ君？そんなの初耳だよ？」

「うん。内緒にしてたからね。というわけでどうぞ。」

そういうと教室の扉がガラッと開く。

そこには、ハンサムな顔なのにしかめっ面でハンサム度をいくらか下げてる男の人。

「紹介するよ。この人が城崎智也さん。『クリア・セイジ消滅の賢者』の異名を持つ炎の帝国バグニールの元軍人さん。」

「……………城崎だ。」

「「……………ありえねえ!?」「」

sideサリナ

「……………」

「死んでないで仕事してください。」

「イヤよ。今日はあの三谷君に脅されて作った制度を明日までに発表するために職員に納得できるような説明を書いてたんだから!」

「……………ランク戦争ですか……………何をやる気なんでしょうか?」

「下克上に決まってるじゃない。」

「……………生徒会のほうはなんと?」

「それがね、結構乗り気なのよ。」

確かに、一人の戦いよりチームのほうが多くの戦略を練れる。そして、見栄えもそれなりにする。

それに、言ってしまうえば、コレはそれなりにこの学園の目玉にも

なりうる。

他にはない実戦的な魔法の訓練システムとして。

「ですが、大丈夫なんですか？魔法が下手に当たれば大怪我どころか死人が出ますよ？」

「……………それがね、三谷君は既に考えてたのよ。」

そういうと私は三谷君に渡されたロープをカルに見せる。

「……………何ですか、これは？」

「ここにアンタの魔法を全力でぶつけなさい。」

「は？そんなことをすれば机が大変なことになりますよ？……………  
・むしろそれが狙いですか？」

「違うわよ！！あゝ！！自分でやる！

穢れなき光。」

「な！？」

私が使っているのは上級の中位魔法。

カルが驚くのは無理もないわ。

「 聖なる光をもって彼の者を裁け。

セイクリッドフレア・ライト  
浄火の光」

突然、目のくらむような光が発生する。その光は対象を光の炎で焼き焦がす。

本来なら。だが、そこには端が少しこげた程度のローブがある程度だ。

「……………何ですか？コレ？」

「特殊な加工、というより魔法が施された服だそうよ。コレの着用を義務付ければ問題ないだろうって。ちゃんと注文してるから大丈夫とか言ってたわ。」

「……………彼は一体何者ですか？」

「魔王、龍造君の生徒。」

「……………魔窟ネストの魔法技術テクノロジーですか。」

「ええ。でも、コレができたのはつい最近らしいわ。それに相手はむしろ張り切ってるって言ってたしいんじゃない？」

まあ、龍造君は自分の都市の技術をあーだこーだ言わないから。それにこのことは龍造君にも通してあるっばかったしね。

「極めつけは『消滅クリア・セージの賢者』をつれてきたことね。競技場の使用許可を取りに来るついでに。」

「……………ついで、ですか？」

「ついでよ。」

あの超絶魔導師をついで扱いとありえないわ。ホントに。



「…………嵐が始まるですか……………」

「そうね。」

私達はなんとはなしに競技場のほうを見た。

side空志

「まあ、信じてもらえないかもしれないけどボクは一度だけ智也さんに勝ってます。」

「「「ふうん。」」」

あれ？

なんかみんなのリアクション薄くない？

「いや、お前ならそれもアリかな〜って。」

「…………カザハ、それはボクが人間やめてるように聞こえるんだけど？」

「「「むしろやめてなかったの？」」」

「……………」

「ソラ君、元気だしなよ〜。いつものコトだって〜。」

「ソラが人間やめてもアタシは見捨てないから！」

「うん。トドメをありがとう。」

「……………で、俺は何をすればいい？」

「ボクは智也さんに勝ちましたよね？」

「……………ああ、そうだな。完敗だ。」

クラスのみんながマジかよとか言ってる。

「じゃ、ボクは今から戦ったら智也さんに勝てますか？」

「……………無理だな。」

「ボクもそう思います。」

「……………何で？」

みんなは疑問の声を上げるけど、ボクはそれを無視して銃を構える。

「……………そういうことでいいんだな？」

「そういうことで。  
フウカンシャリン  
風火車輪　！！」

そういうとボクはいきなり智也さんとバトル！

みんなは突然のことについていけてないのか呆然としている。

「……………甘い。」

そういうと智也さんは剣をボクに振る。  
ボクはそれを片方の銃の刃で受けると、もう片方で智也さんを打つ。

「滅クリア」

そういうとボクの弾丸は消滅させられる。

ボクはすぐに距離をとると、智也さんの唯一の弱点である月の魔法をこめた弾丸を放つ。

「……面倒だ。」

そういうと智也さんはブーストした状態のボクと同等のスピードでボクとの間合いを詰める。

「ライエン雷燕　！！」

ボクは目潰しに雷の鳥たちを放つ。

でも、既に魔法を使っていたのか智也さんに当たる直前で雷の鳥たちは消えさせる。

「滅せ滅せ滅せ！」

全てを消し去り神を殺せ！！」

「え！？真言はないよ！？

其は魔に属す法則！！」

ボクと智也さんは真言の準備に入る。

てか、ボクは消滅の魔法を封じるのはコレしかない！

「オール・シング・ディサペアー  
森羅万象の消滅　！！」

「<sup>ツキヨ</sup>月夜　！！」

ボクと智也さんの魔法が同時に発動。

ボクは迫ってくる魔法を『視る』。

真言だろつとなんだろつと、魔法には核<sup>コア</sup>がある。  
いくら消滅の魔法でもそれは同じ。

「みつけた！！」

ボクは核を刀でぶった切る。

すると、真言は強制的に破壊され、霧散する。

「だが、チエックメイトだ。」

「ですよね。」

ボクは真言を止めるのに精一杯で智也さんに後ろを取られた。  
というより、コレが狙いだったんだろつ。

ボクの背中には智也さんの剣が突きつけられていた。

「と、言うわけ。」

ボクはみんなにそういう。

智也さんは剣を引いてくれる。

「だが、今回はたまたま負けただけじゃねえの？」

「いや、ボクが後、何百回やるつが無理。」

「……………こいつのそれは確かに強い。……………だが、それだけだ。」

「「「???」」」

「智也さん。もっとわかりやすく。」

「……………こいつの力は強いがそれを扱うほうが完全に扱い切れてない。」

「あ、あれで!?!」

クラスのヤツが驚く。

まあ、しょうがないわな。

「うくん……………ボクの属性は、『天空』って言ったよね?」

クラスのみんながうなずく。

「実は、もう一つ『月』の属性って言うのがあるんだ。」

「何だそれ?」

「……………マナの視認。操作を可能とする特殊属性だ。だが、これは一部でしかなく、古代の文献をあさらないと出てこないどころかその文献にもほんの少ししか書かれていないという謎の多い属性だ。」

「まあ、自分でいろいろやってはいるんだけど、ボクは使いこな

せていないんだ。」

「つまりだ。こいつは真剣は持っているが武術を学んだことないド素人と同じだ。要するにただの雑魚だ。初見では倒すことは難しいかも知れんが冷静に対処すれば勝てる。俺のようにな。」

「そういうこと。要するにだよ。ボクが言いたいことは決してボクは最強なわけじゃない。ただ、ほんの少しだけ強いただけ。だから無理だなんて思わないで。」

「そだよ。わたしなんか相手が攻撃した魔法を跳ね返すことしかできないんだよ。」

「……十分チートだ。」

「そだよ。アタシのほうで鎌をブンブン振り回すしかできないんだよ。」

「いや、その怪力が既に凶器どころか核兵器だから。」

「まあ、ソラは俺達に一度負けたからって次も勝てないわけじゃないといたいんだな？」

カザハが聞いてくる。

「まあ、そうかな？それに、このクラスは少し面白い特徴があるしね。絶対勝てるよ。」

そういうと、クラスのみんなは自信がなさそうな顔をしながらもボクの話真剣に聞いてくれる。

「……………わかった。お前を信じる。おい！みんな！俺達は最底辺の人間の集まりだ！」

「自分のことなのに酷い言いようだね。」

「お前は少し黙ってる。……………だが、こいつは俺達でもやればできると言ってくれた！！こいつの言葉に俺達は答えるべきじゃないか！？」

「……………」

「そして何より、俺はあのエリート気取りのやつらにムカついてる！！！」

「……………確かに！！！！」

「え？そこでみんな言う？」

「俺達もやればできるって所を見せ付けてやるっぜ！！！」

「……………おつ！！！！」

ボクの言葉は華麗にスルーされた。

「じゃあ！！派手に暴れるぞ！！！」

「……………おつしゃああああああ……………！！！！」

まあ、ボク等の戦いが始まった。





## 6話・START OF RIOT

sideロイ

今日は何かの話が学園長からあるらしく、全校生徒が体育館に集められた。

なんなんだろうな。

だが、何故か俺達の学年のDから殺気をそこはかたなく感じる。

・・・まさかあいつ絡みじゃねえよな？

俺は体育館に設置されたパイプ椅子に座りながら考える。

「あゝ・・・オホン。学園長のサリナよ。今日は新しいシステムの説明をするわ。」

新しいシステム？

その言葉に全校生徒が少しだけ騒がしくなる。

だが、学園長はそれを無視して話し続ける。

「今回は決闘のシステムのクラス版。『戦争』の説明よ。」

戦争？

クラス？

・・・何だか嫌な予感しかしない。

「簡単に言うと、クラス対クラスで戦ってもらうわ。むしろそれだけよ。詳しい説明は今から配る紙に書いてあるわ。」

そついうと目の前に突然、紙が現れる。

そこには細かいルールが書かれていた。

「じゃ、何か質問はある？」

「ここにある特典ってなんですか？」

あ、俺も聞こうと思った。

勝ったほうには特典とかあるのに内容が書いてないんだもんな。

「あ？それ？簡単よ。」

そついつと何故か学園長はためる。

「負けたほうは勝ったほうにクラス全員分の高級料理をおごるの  
よ。」

「「乗った！」「」

マジかよ！？

こんなの高ランクのクラスが一斉にDを狙うぞ！？

こんなのおいし過ぎるぞ！？

そんなときだった。一人の人間が立ち上がった。

全校生徒が一気に静まり返る。

「?・・・質問かしら?」

「いえ、少し違います。俺はランクD代表、カザハ風葉・シルファリオ  
ンです。」

カザハ?

どうしたんだ?

「・・・何かしら?」

そういう学園長を無視して、カザハは自分のところからSのほう  
へ行く。それもSの代表のところへだ。

・・・まさか!?

俺はソラのヤツを探す。

すると、そこにはにやけた笑みを浮かべるヤツがいた。  
・・・こいつだ。確実にこいつが仕組んだ。

「ランクS代表に話がある。」

「・・・Dがなんのようだ?」

展開が読めるだけにはらはらする。

・・・暴力沙汰になるなと俺は祈る。

「俺たちDはアンタ等Sに戦争を申し込む!!」

「・・・やっちまったな。」

俺は天を仰いだ。

side 風葉

「俺たちDはアンタ等Sに戦争を申し込む!!」

言っただけいい。

だが、俺の内心はヤバい。

足が震えそうさ。

つか、睨んでる!?

怖え!!???

これはマジヤバい!!

「Dごときが俺達に戦争だと?笑わせる。」

ヤツの言葉にくすくす笑う声が追従する。

ああ、昔の俺もそう思っただろうさ。

「……答えを聞いている。」

「……お前、少し調子に乗ってるのか?」

そういうと相手はさっきまでの小バカにした笑みを引っ込めて立ち上がる。

……死ぬ!?俺死ぬ!?

ソラはできるだけ高圧的な態度で言えって言ったが俺は大丈夫なのか!?

「……。」

「……ならいい。答えてやる。お前等みたいな雑魚に構ってる暇はない。消えろ。」

そういつと相手はさっさと座ってしまった。  
俺は帰ろうとすると、そこでおかしなことが発生した。

「逃げるのか？ エラソーなそぶりして俺達に負けるのが怖いのか？」  
「？」

「ああ！？ んだと貴様！？」

俺の声だ。

だが、俺は何も言っていないぞ！？

俺がテンパつてると向こうは魔法をつむぐ。  
つて、ありえねえ！？

「ちょ！？ それは！！」

「消えろ！！」

至近距離で魔法が放たれる。

俺は思わず目をつぶって身を硬くする。  
つか、死を覚悟した。

「マシチ相殺　！！」

いつまで経つても魔法の衝撃が来ない。

俺は恐る恐る目を開けると、目の前には驚きの表情のS代表。  
・・・何が起きた？

「こんなところで魔法は危ないよ。」

「わたしに掛ければ魔法はだいじょぶだよ。」

「……見苦しい。」

俺が声のした方向を向くと、そこには体育館の舞台に腰掛けたあの三人がいた。

「……坂崎さん。アンタは元はSだろ？何でこんな低俗なやつらのところに行ったんです？」

「え〜つと……だって、Sは息が詰まるんだもん。」

「……アンタもだ。三谷。あれほどの実力があいながら何故Sに来なかった？」

「いや、ボクは魔法工学以外はカスの人間だし。それに、自分からランクAの皮被ったザクって呼ばれたところ行くのイヤだし。」

「……何でザク？雑魚の間違いじゃなかったの？」

「まあとにかく、ボクが聞きたいのの一つ。……ランクSエリートの方々はDに勝てる自信が無いから逃げるの？」

「はあ？……お前も少し強いからって調子に乗るな！！」

そういうとヤツは無詠唱で魔法を放つ。

いくらなんでもこんな至近距離では無理だ！！

「あ〜ソラ君。間に合わないから適当に何とかしてね。」

「ん。」

そうとうとソラの目がいきなり変わった。

青味がかつた銀と、とても深い黒のような蒼。

そして、銃を引き抜いて早打ちした。

すると、魔法がロイヤ『クリア・セイジ消滅の賢者』の真言を消したときのよう  
に消えた。

「な！？何だその目は！？」

「あれ？何で目のこと知ってんの？」

「……ソラ。ツラヨミ月詠 してる。」

「いや、カラコン……するの忘れた！？」

「……バカだ。」

よくわからんが俺は思ったまますを口にする。

それが聞こえたわけではないだろうがソラは咳払いをすると話す。

「で、勝てないから逃げるの？」

「……そんなに負けたいのならいいだろう。その戦争つけてや  
る……！」

そう言い放つ。

「それにDなんか三谷や坂崎以外はただの雑魚だ！」

「あ、ボクでないよ。」

「「・・・は？」」

俺とSの代表の声が重なる。  
つて、おい!?

「俺はそんなこと聞いてねえぞ!?!」

「いや、ボクさ。盤ボードの免許を取って来いって命令を龍造さんから受けちゃって出れないんだよね。」

そうやってハッハッハと笑うソラ。

「おい!?!こっちの戦力はお前に掛かってるんだぞ!?!」

「いやいや。スズが出るから大丈夫じゃない?」

「ほえ?」

・・・すまん。俺には大丈夫に見えない。

「ボクは裏方ががんばるから!」

ぐつと親指を立てて言う。

・・・。

そこで、俺とDの全員は立ち上がる。

「・・・・・・・・じゃ、ボクは講習あるから。」



「「「その前に地獄に逝ってこい！！！！！！！！！！」」」

「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

俺達がソラに魔法を放ったのは決して間違いじゃない。  
そして、体育館での集会は解散となった。

side 空志

「……………死ぬかと思った。」

「むしろ生きてたのか？」

「「「ツチ！！！！」」」

「イジメだ！！クラスでイジメが！！！！」

「で、何でこうなった？」

ここはボク等のクラス。

席をどけて、床に車座になって座り、みんなで話し合っている。

「まあ、正直言つとアレは方便。ボクが出たら真言となえたらそれで終了させる自信がある。」

「だったら！！何で出ない！！」

「意味が無いんだよ。それじゃ。」

ボクはこの学校では唯一真言が使える人間らしい。

簡単に言つと、とにかくこのレベルだと外道なまでに強い。

「だからダメなんだ。Dはボクがいたから勝てただって認識される。」

「「「「」」」」

みんな、わかったようだ。

そう。ボクが出た時点でDのみんなで勝つてもボクがいたからって認識されるだろう。

「それだとSに目に物見せてやれない。」

つまりはそういふこと。

ボク等は勝つことが目的なんじゃない。

この戦争に勝つのはあくまで結果であつて、目的じゃない。

「「「「でも、どうするの？わたし達じゃ」」」」

「いや、勝てる。」

「「「「その自信はどこから来る？」」」」

「いや、ボクはさ。一時期Aにいたからわかつただけだよ。Aは本当に魔法しか秀でてないんだよ。」

「「「「それがどうした？普通じゃねえか。」」」」

「うん。ここにとってはそうなんだろうね。でも、付け入る隙があるとするればそこだ。」

「「「・・・？」」」

まあ、おいおい説明していくか。  
ボクはいろいろと説明を始めた。

sideランクS

「おい。ヤツは本当に出ないらしいぞ？」

「・・・本当だったのか・・・。」

「ああ、魔法の練習や作戦会議に出る程度らしい。」

「なら、注意すべきは坂崎か？」

「でしようね。」

「でも、坂崎さんが言ってたけど、坂崎さんの魔法はものすごく燃費が悪いんですって。」

ランクSの教室ではいろいろな情報が飛び交っている。

内容は空志と鈴音のことについてだ。

リカは最初から数には入っていない。

「なら、余裕だ。向こうの指揮官はカザハとか言うDの代表らしい。」

指揮官は事前に申請し、両方のクラスにそれが誰なのか伝えられる。

「Dが一番強かろうが私達の敵ではない。」

「まあ、戦争は今週のお金曜日か？とにかく、後二、三日でDが俺たちSに勝つのはありえない。」

そう、魔法ならDの魔法力は平均2000ほど。それに対してS9000〜10000。

ということは、希少属性であればあるほど魔力は多くなる。

『月』は唯一の例外。むしろ外部魔力マナを操作できるということで魔力は限りなく無限に近い。その代わり使いすぎると倒れてしまうが。

要するに、Sに所属する人間はかなり強力な属性持ちが多い。

ごく普通の属性しか持たないDは彼らからしてみれば本当にただの雑魚ではない。

彼らは今後の内容を決めると、早々に散ってしまった。

side 空志

「オイ。お前も何考えてるんだ？」

現在は昼休み。

ボク等はいつものメンバーで昼食中だ。

「ん？・・・ただの下克上だけど？」

「・・・・・・・・聞いた俺がバカだった。」

「まあまあ〜そんなことよりご飯食べよ〜。」

「……………ソラ。血。」

ボクはリカの手を引っつかむとみんなの死角になりそんな茂みに突撃する。

そして、リカには小声でお説教。

「リカ！みんなの前で血とか言っちゃダメ！！」

「でも〜お腹すいた〜。」

まあ、確かにこのごろはリカに吸血させてないしね……………  
しょうがないかな？

「わかったよ……………手早く済ませて。」

「やった〜！ソラ〜愛してるよ〜。」

そういうとリカはボクに抱きつくとき首筋に噛み付く。  
痛みは特にならない。

ただ、血が吸われてるな〜って感じがするだけ。  
でも、リュウのメールにはリカの吸血は相当痛いのか？  
とか来てたけど……………何でだろう？

「ソラ君〜？」

「あ、ごめん。リカがお腹減ったって言ってさ。ただ今吸血中。」

「やっぱりか〜。ロイ君とカザ八君には適当に言っておいたよ〜。」

「

お？スズにしてはなんか気が利いてる。  
いつもは天然を発揮して何かすばらしいことをやるのに。

「リカちゃんがソラ君とちゅーしたくなつたからって言ったよ。」  
「よ。」

「ゴメン。どこが適当なのか、そして、ごまかせてない気がするのは気のせい？」

「え？でも、昼間から大胆だなんて二人とも言ってたよ。」

「確実に誤解だ！！いや、ある意味間違っていないかも知れないけどね！？」

まあ、見ようによってはリカがボクの首筋にキスしてるように見えるだろう。

「……今は、さっさと終わらせて向こうに戻らないと。ボクはリカに適当に切り上げようと言おうとしたときだった。」

「おい。ソラとアンジェリカさんはいつ戻って来るんだ？」

「そんなに熱いキスでもしてんのか？」

「冗談交じりに二人がこっちに来てしまった。」

「「「「「」」」」」」

「「「「邪魔して悪かったな。」

「スマン。まさか本当だとは思わなかった。」

そういうと二人は来た道に戻る。

「違う！いや、違わないかもしれないけど誤解だ！！！」

「ぶは〜、ご馳走様〜・・・って、ソラ？どうしたの？」

血を一生懸命吸ってた吸血鬼の少女はまったく気づいてなかった。

「ねえねえ！！ソラ！！アタシ達恋人みたいだつてさ！！」

「・・・どこに喜ぶ要素が？てか、誰だ！！こんな噂を流したやつは！！！」

「まあ〜間学園でも似たようなの流れてたから特に問題はないよ〜。」

「そうだぞ。ちなみにアレは俺がぼろっと漏らした。」

「カザハ！！殺す！！ 紫電<sup>シデン</sup>！！！」

カザハはそれを読んでいたのかひよいと避ける。  
・・・無駄に勘のいいやつめ。

「で、本当にいいのか？」

「もちろん。それに、ボクの力は一通り説明したでしょ？ボクだからこそ大丈夫なんだよ。」

ここは競技場。

魔法の練習のために許可を貰って午後の時間を丸々貸してもらった。

そして、ボクの目の前にはDの方々。

全員、アリアさん作の魔法抵抗がついてる服を着ている。

まあ、ボクも着てるけど。

まあ、今からやろうとしてることは簡単。ボクがみんなの魔法の実験台、および魔法の観察をしてアドバイス。それだけ。

核コアを視て魔法を破壊できるボクだからこそできる荒技。裏技とも言う。

まあ、ボクもちよこつと気になることもあるし。

「わかった。じゃあ、まずは俺だ。・・・行くぞ!!」

「いいよ。」

ボクは魔法陣を。

そして、カザハは詠唱を始めてボク等はSに勝つために魔法の練習を始めた。



## 7話・TACTICS

sideジグ

「はあ、ホントにあいつらは何のつもりなんですかね。代表？」

俺はSの代表、ジグ・フロルド。

そして、俺に話しかけてきたのがSの副代表、グラン・スリザン。俺達はSでもかなり力のあるほうの人間だ。

「・・・まあ、所詮、身の程がわからんバカどもだと言うことだろ？」

俺と・・・いや、S全体の認識は同じ。俺たちSがDのような雑魚に負けるわけが無い。魔法力は比べ物にならない。ただ、危険因子としてあの元S代表のロイ・ガリユークを倒した三谷空志だけが、体育館でDの代表がこちらに宣戦布告したときに自分が出ないと言っている。つまり、残る不安要素は坂崎鈴音、『<sup>リバー</sup>逆』の属性もちのあの女子だけだ。

「・・・あの、坂崎の魔法には驚いたな。」

「ですよね。まさか、魔法を無効化する魔法なんてのがあるとは思いませんでした。」

ヒヒヒとグランは笑う。

だが、こちらには他にも情報がある。

「ですが、女子が何人かその魔法の行使には膨大な魔法力が必要とし、俺たちを遥かに上回る量を持っていても数発が限度。」

「つまり、こちらは適当に魔法を撃ち続けて、坂崎を消耗させておけば勝手に向こうはつぶれる。まあ、言ってしまうえば俺達は坂崎さえ潰せば勝てる。」

だから、俺達が考えた作戦はこうだ。

俺達のクラスは40人。

それを5チームに分けて、坂崎を見つけた、あるいはDの代表を見つけたやつは上空に魔法を放って知らせる。

そこに俺達は集中攻撃を仕掛けて一気に叩く。

まあ、力押しだが、Dにはコレで十分だ。

だが、万が一に奇襲等を仕掛けられる、いや、むしろされないことがおかしいと俺は考えている。

力の弱いDには俺達に奇襲で混乱してるときに叩くしかない。

まあ、それはそれで魔力の感知に長けたヤツをちゃんと各チームに一人以上用意してるから大丈夫だ。

「とにかく、だ。こんな茶番はさっさと終わらせよう。」

「そして、やつ等には俺たちとの格の違いを見せてやりましょう。」

そう、Sはただ、代表を潰すだけではない。

二度と俺達にたてつかないように徹底的に潰す。

目指すは圧倒的な勝利。ただ、そののみだ。

side 空志

「まあ、向こうはボク等が奇襲をしようとしてると考えてるね。実際それが一番有効だし。」

「なら、奇襲はしないのか？」

「……いや、それは無理だろ？」

「なら、奇襲で、奇策を使う！」

「……………それ、どんなだよ？」

「さあ？」

「アバウトな意見をありがとう。」

ここは作戦本部。

というかDの教室。

50人ほどの生徒があーでもない、こーでもないと言戦を練っている。

「まあ、準備は既に最終段階。でも、Sはやっぱり強い。」

「確かに……俺達の小細工が通用しねえかもな。」

「……………でも、ここまでがんばったんだよ？」

「今更あきらめるなんてイヤよ!？」

「アホか?ここまで来て負けるとかないから。」

「……………何か情報は？」

「ああ。ここに美末ちゃんがいたらね。」

「……………アタシはそれだけでこの戦いが終結しちゃうような気がするよ？」

「うん。ボクもそう思う。」

「……………誰だ？その美末って？そんなに強いのか？」

「……………ある意味ではね。」

「……………お前が言うんだから相当だな。」

うん。情報を剣に、あるいは盾にして敵をやっつけるからね。

むしろ、ここに今いれば彼女だけで戦争は勝てると思う。

で、ボクのケータイが震える。

……………こんなときに誰だ？

そして、ボクはディスプレイを見てみる。

『美末ちゃんだよ』

「……………」

……………おかしい。宇佐野さんはボクのケータイ番号を知らないはず。ましてやボクも宇佐野さんのケータイを登録した覚えはない。なのに何でこんなモノが表示されるの？

「あれ？ソラ君ケータイに出なくて言いの？」

「うん。大丈夫。」

「でも、美未からだったら向こうであることないこと噂を流して大変なことに……。」

ボクはすぐさま通話ボタンを押した。

『やつほ〜！みんなのトモダチ美未ちゃんだよ〜。このまま電話に出てくれなかったら三谷うちとリカちゃんが付き合って……ふふっふ〜な噂を流すところだったよ〜』

セーフッ！！！！

マジでやばかった!?

まあ、あえて『ふふっふ〜』の内容は聞かないけどね！

「……で、何で知ってるの?」

『ワタシに知らない情報はない!!』

何この情報魔!?

断言しちゃったよ!?

「……まあ、いい。いや、よくないけど。なんか用?」

『三谷うちの留学先で楽しいことしてるって聞いたからその情報を。』

「なるほど。売れと?」

『いえ〜す。』

「……まあ、それぐらいならいいけど。」

ボクはこうなったいきさつを話す。

まあ、ところどころカットしたけど。でも、そのカットが宇佐野さん相手に通用するのかすごく怪しい。

『なるほど……ういゝ、じゃ、ありがとね!』

「いえいえ。」

ボクはケータイから耳を離すと電源ボタンを押して通話を終了しようとする。

『すとーつぶ!』

「ん?何?」

『お礼に情報をあげるよ。』

「いや、別に欲しい情報とか……。」

『……そう?じゃ、貸して「コト」でいいや。』

「……ホント?」

『マジマジ。いいよ。おね〜さんが何でも一つだけ聞くよ。・  
・情報ならだけどね。』

まあ、いいか。後々役に立つかもしれない。

そして、ボクは電話を切る。

「……………ねえ、兵法の基本は情報だよな?」

ボクはなんとなくさっきの会話で気になったことを言う。

「ん?急にどうした?」

「いや、一人ささ詳しくてかつ、ボク等の味方になってくれそうな人がいるんだよね。」

「……………奇遇だな。俺にも一人いる。」

ボクとカザハは立ち上がる。

「あれ?代表に三谷?どこに行くんだ?」

「ちよつと世間話に。」

ボクとカザハは教室を出て行く。

「で、俺のところに来たと?」

「うん。」

「と、言うわけですが打つたろうつ手を全て考えて教えてくれ。」

「……これはルール違反じゃないのか？」

「いやいや、ちゃんとルールどおりだよ。準備期間は魔法訓練し  
かしちゃいけないなんて書いてないだろ？」

「……お前、まさか最初からそれを？」

「まあ、俺達は既に魔法だがそれとは違うものもやってる。」

「は？」

「とにかく、さっさと言うー！」

「……別にいいけどな。まあヤツ……ジグがとりそんな行動  
とかは……」

ボク等はそれを聞く。

まあ、いくつかはこっちが思ったとおりのことも含まれてた。

「おし！まあ、こんなもんでしょ。」

「さすがだな。」

「まあ、コレでも元Sだからな。」

そついうとボクはロイの肩をバシんと叩く。

「まあ、コレでボク等が勝ったらなんかおこるよ。」

「ホントか？なら、せひとも勝ってくれ。」



「もちろんだ。」

ボク等はまた、二、三言葉を交わすとロイと分かれた。

「じゃ、準備は万端か？」

「うん。後は・・・今から作戦開始だ。」

ついにボク等の戦争が始まった。

sideジグ

「おい！？聞いたか？」

「？・・・何がだ？」

そこにSの生徒が来る。

名前は・・・忘れた。

「俺さ、元S代表とDの代表達が密会してるのを見たんだ！」

「・・・で？」

「ああ、まあ、そのときは俺達を取りうる行動を考えていったんだが全部はずれた。」

「なるほど。じゃあ、あいつらは作戦ミスで負けか。」

まあ、裏でロイとあいつらがつながってたのは最近知った。だが、

元Sに興味はない。あんな落ちこぼれはむしろ俺達の恥だ。

「で、そのときに聞いたんだが、あいつらは俺たちの裏をかい  
て坂崎を戦闘に一気に戦争を終了させるらしい。」

「なんだと！？それは本当か！？」

「ああ、俺が聞いた！間違いないえ！！」

それはいい。

なら、こちらは……。

「こっちが奇襲すればいい、か。」

「そういうことですね。さすが代表！」

ふん。

当たり前だ。俺がDの雑魚なんかに負けるわけが無い。

「Sの全員に作戦変更を伝える。奇襲で一網打尽にする。」

「へい！」

そういうとそいつはすぐに全員に連絡を取るためか教室を飛び出  
していった。

つぶ。コレである俺に生意気を言ったDの代表に目にモノを見せ  
てやれる。

俺は明後日に迫った戦争。

既に俺の脳内ではDをボコボコにして完封勝利をしている俺の未  
来予想図……いや、未来が描かれていた。

sideサリナ

「……ついに明後日ね。」

「はい。」

ここは学園長室。

いつものように私とカルの二人がこの部屋にいた。

「……どっちが勝つと思う？」

「Sに決まっています。……と言いたい所ですがね。」

「そう？あの子は不参加よ？」

「それでもです。」

確かに、それは私も思う。

あの、三谷君のことだ。何かすごいことをたくらんでるに違いない。

「いや、劣等感の塊のDをSと戦わせようとしてる時点でそうか。」

「ですね。Sもよくわかってないですね。一年はとりあえず魔法力の順で入れてるだけなんですからね。」

「ええ。だから、コレは私にとってもいい案であるとは思った。というか、三谷君はそれをちゃんと見破ってたようだけどね。」

こんな風にあからさまにランクを気にしてるのは一年だけだとい  
うことだ。

「それに、コレは目玉になりうるわ。デメリットは経費が掛かる  
こと。でも、生徒をそれだけ入れれば問題はない。」

「まあ、今回はデモンストレーションです。後で変更を加えれば  
いい。」

でも、そうは言っけど私もそれなりに楽しみなのよね。

SやDと言っているが、一年はそれで通じる。

当たり前だ。魔法は高校に入らないと実戦での使用はできない。  
経験の浅い子達は力押しで勝てる。それだけだ。

まあ、例外で三谷君や坂崎さんのような子もいるけど。

「さて、悪名高い『闇夜の奇術師団』はどうするのかな？」

私は一人学園長室で微笑んでいた。

### side 風葉

「よし！ついにこの日が来た！」

ここは競技場。

ここにはSとDの生徒がいた。

両者共にピリピリした雰囲気を出している。

だが、Sにはめんどくさそうにしてるヤツもいる。

『レディース、エーン・・・ジェントルメーソーン！！さて、ここに  
第一回ランク対抗戦争が始まります！！あ、ちなみに解説はこのボ

ク、ランクDの三谷空志です。魔法を解析できるって理由で学園長に無理矢理にさせられました。』

『実況はアタシー！ソラの彼女のアンジェリカ・シエルスです！！』

『いや、違うから。』

『まあ、この夫婦漫才は放っておこう。つか、普通は司会が先だよな？司会のレイ・アストリウムだ。』

「「「お前かよ！？」」」

俺達は全力で司会席に座るソラに突っ込んだ。

『まあ、今日はなんかメディアの人も来るらしいよ。』

『・・・三谷。お前のクラスの突っ込みは無視か？』

『いやいや、レイ先生、司会してくださいよ。』

『・・・お前のほうが司会っぽいのは気のせいか？』

『うう。じゃ、説明しちゃうよ？いい？』

『あ、じゃリカよろしく。』

『おい。俺は？』

『まっ、説明すると魔法で戦争しようZE！みたいな？』

『うん。おおむね合ってるけどよくわからないよね?』

「……こいつら司会する気あるのか？」

まあ、いい。

俺達は学校が支給してくれた服に腕輪。そして、武器を持って競技場の端に立っている。

「……そういや、代表？」

「ん?てか、俺のことはカザハでいっていつも言ってるだろ?副代表?」

「……杏奈<sup>あんな</sup>。わかったわ、カザハ。」

よし。

こいつはDの副代表。七瀬杏奈<sup>ななせあんな</sup>。

「で、何だ?」

「え〜っと……こんな狭いところでやるのかな〜って。」

「……あ〜。」

確かにここは1対1を目的に作られているところ。  
二クラスも入れればこの大人数では戦えない。

『いい質問だね。そこは俺が説明しよう。』

『あ、空気のレイ先生が復活した。』

『……まあ、説明するよりやったほうが早い。学園長？  
お願いできますか？』

『準備はいいわ。……起動。』

そういつと俺達が光に包まれる。

あまりのまぶしさに俺達は目を腕で覆い。光が収まるのを待つ。

そして、光が収まると目の前には木、木、木。

どうやら森に転移されたようだ。

『はい。ここで戦ってもらいます。』

声のしたほうを向くと、そこにはパソコンウィンドウのような画面が宙に浮いている。

よくあるスポーツなんかの観戦に使われる魔法だ。

そこには実況席が映し出されていた。

『まあ、こつちでも戦争を映し出してるから。がんばってね。』

『ちなみにここもソラが学園長を脅して土地を購入させたらしいよ。』

……何してんだお前？

『失礼な！？ボクは宇佐野さんに頼んで弱味を握っただけだよ。』

いや、世間一般ではそれを脅迫というんだ。

『まあ、今から始まるわけだけど諸注意だよ。』

そついうと別のウィンドウが現れ、そこには文字が並ぶ。

『ここにも書いてある通り反則行為を見つけ次第、その選手は失格。気絶した生徒に追撃加えるのもダメ。それと、フェアにいくために戦争が始まったら声は届かないから。これは下手な発言で相手に情報が漏れないようにする配慮だからね。そこんとこよろしく。』

そついうと文字のウィンドウが消え、今度は『3』と書かれたウィンドウと戦況と書かれたウィンドウが展開。

『じゃ、Sの指揮官はS副代表のグラン・スリザン君。』

そついうとグランと呼ばれている生徒の写真が腕輪に展開なるほど。コレで確認できるのか。

『Dの指揮官は代表の風葉・シルファリオン君。』

Sのほうにも俺の顔写真が展開されているんだろつ。

『じゃ、両者ががんばってください。合図をお願いします。』

『わかったわ。じゃ、カウント・・・開始!!』

すると、声が聞こえなくなる。かわりに、カウントの数字が変わる。

「よし、全員勝つぞ!!」

「「「「お〜!〜!〜!」」」」



カウントが<sup>ゼロ</sup>0になる。  
俺達は早速作戦に移った。

## 8話・UPSET

sideジグ

「オイ。来たか？」

「ああ。」

その先には複数の人影がいた。先頭は………坂崎だ。

「やはりな。裏をかいて俺達を動揺させたところをやるつもりだろうが知ってれば何の意味もない。」

俺はわざと数人に魔力を垂れ流しさせ、ここにいることを向こうに教えた。

いくらカスでもコレぐらいならわかるだろう。

そして、俺達はDの連中らしき魔力を感じ、進路に回った。

「でも、コレはルール違反じゃねえのか？」

「バカか？コレは向こうがうつかり漏らしたただけだ。」

別に俺達にはやましいところなんてない。

ただ、相手にツキがなかったただけだ。

「射程内に入った。」

「よし。チームAからCは詠唱しろ。俺の合図と同時にDは詠唱を済ませておくだけにしろ。」

そして、全員が詠唱をする。

Dの連中は安全の確認をしながらなのか慎重にこちらに向かってくる。

そして、全員の詠唱が終わる。

「撃てー!!」

その言葉にさまざまな魔法が放たれる。

そして、Dの連中がいたところには土煙がもつもつと舞う。手ごたえがあつたのか多くのやつらが緊張を解く。

「…………ハッ！ちよろい、ちよろい。」

「ああ、やっと茶番が終わつたか。」

「はあ、だから身の程を知れと。」

「おーコレはすごいね。」

だが、俺達の余裕はその一言に潰された。

俺が驚いて振り返ると、そこには誰もいなかった。

いや、少しはなれたところに坂崎が誰かに担がれている。だが、

それだけだ。坂崎とそいつ以外誰もいない。

「おい！？Dの連中がいないぞ！？」

「はあ！？」

「ちょっと！？どついうこと！？」

「どついうことよ。」

俺はまた別のほうから聞こえた声に反応する。

だが、そこには誰もいない。

いや、Sの生徒しかいない。

「……気づかないの？」

その言葉でSの生徒の一人がぐにやりと歪む。

そこには、黒の紋章エンブレムを付けた生徒、つまりはDの生徒……がいた。

そいつは中性的な顔をしていて、女子といわれれば女子。男子といわれれば男子というような容姿をした生徒だった。

「な！？」

「いつからいた！？」

「……ずいぶん余裕だね。」

そついうとそいつは手を振る。

すると、何人かの生徒が突然、うめき声を上げる。

「魔法か！？だが詠唱が・・・。」

「僕の役目はここまです。じゃ。」

そういうとヤツはいきなり消えた。

何だ！？三谷以外にも未知の魔法を使うヤツがいたのか！？

「人形よ！！踊れ！！！」

今度は無数の人形が俺達の周りに現れた。

「何だよコレ！？」

「落ち着け！魔法を放て！！そして一旦撤退しろ！！」

そして、俺は指揮をしつつ魔法を放ち撤退という屈辱を味わった。

side 空志

「お～やってるね～。」

ここは実況席。

この学生のみんなのためにボクは解説中。

いや、まだ始まったばかりだから特にないんだけどね。

「ね～ね～。ソラ～。あの人・・・忍しのだっせいけ？どんな魔法を使っ  
たの？」

「いや、魔法は使ってない。」

「え？三谷君、それはどういうことだい？」

「まあ、無知なレイ先生のために教えますけど……。」

「……。」

「フルネームは影崎忍<sup>かげさきしのぶ</sup>。まあ、あの子は言っちゃえば家系が暗殺<sup>アサ</sup>者<sup>シン</sup>なんだ。」

「……何でこの学校にそんな子が？」

「いや、別にあの子自信が暗殺者なワケじゃない。ただ、その訓練の端をかじっただけって本人が言ってた。あ、ちなみに忍君は男子です。」

「じゃ、アレはその訓練の賜物？」

「うん。まあ、あの変身は魔法を使ってるけど。でも、服の構造まで変えられる人はいないみたいだね。」

「……何でそんな子がDに？」

「いや、どうもボクみたいに詠唱が極端にダメ。魔法も暗殺系のものしかできないって偏りすぎててDに落とされたらしい。」

「「……。」」

まあ、何気に不憫な子だね。

「まあ、Dが次の作戦に移行しますよ。」

sideジグ

「何故だ!？」

何故、こちらの作戦がばれた？

向こうはこちらのさらに裏をかいただと？

「・・・いや、まさか。」

先ほどの光景が頭によぎる。  
変身の魔法。

それでSのクラスのヤツに扮し、俺に偽の情報を流した？

「バカな!？ありえない!!」

だが、それしか考えられない。

なら、俺達は既に敵の術中にはまっている。

「おい。どうする?」

いや、よく考えればやつらはそれほど強くない。

ただ、先ほどは急な事態に対応できなかつただけだ。

「チームAからDは別行動をとれ。そして、敵を見つけ次第攻撃  
だ。」

「で、でも、さっきので何人が倒れちゃったよ?」

「あれは偶然だ。だが、次にきても冷静に対処すれば勝てないわ

「けが無い。」

「そういつと周りのやつらが気を取り直したのかそうだなといいな  
がらしきりにうなずいてる。」

「……敵は急に来るものですよ。」

その言葉と同時に無数のマネキン人形のような物が周囲から現れ  
る。

「!?!?さっきのか!?!」

「ええ。貴方達がDのクラスの方々だと勘違いした私の僕しもへです。」

「声は聞こえる。」

「だが、姿が見えない。」

そんなことを考えてると、人形が一齐に襲い掛かってきた。

「チツ!!!人形師か!?!」

「!?!?名答。」



人形師。これは人形と呼ばれる魔道具を操作して敵に攻撃をする方法だ。

しかし、コレには繊細な魔力コントロールを必要とし、大人でも3、4体が限度だといわれている。  
だが、目の前には何体もの人形。  
規格外すぎる。

「私はリオネ・マーティス。以後、お見知りおきを。」

「な！？嘘だろ！？」

「どうした？どういうことだ？」

俺はヤツの名を聞いて驚いた生徒に聞いてみる。

「いや、マーティスは人形師の家系なんだ。それで、ヤツはマーティス家から来たお嬢様で周りから期待されていた。だが、魔力量がかなり低くてDに行った。それで俺等は所詮いいとこの家のヤツかと言ってたんだが……。」

「……こんな実力を隠していたと。」

「元々、我々の家系は魔力が先天的に少ないんです。代わりに自分の魔力の操作に優れていたため、祖先は人形を作り、それを私達は使っているだけです。」

……だが、いくらなんでもこんなに超級の魔法使いはもういないはずだ。

俺はそう考えると近くにいたヤツに声をかける。

「おい。俺が上級の魔法を使う。俺を少しの間だけ守ってくれ。」  
「わかった！」

そういつと俺の周りに何人かの生徒が壁になる。

「力よ……。」

side 空志

「お？なんかジグつちが詠唱を始めたね。」

「……『つち』って……。」

「まあ、ちょうど通りかかったロイに彼の属性の説明を貰いましょう。」

「……おい。お前が解析するから問題ないとか聞いてたんだが？」

「いや、ボクはすでにわかってる。属性は重力系。でも、コレって空間系の魔法だね？空間系の魔法のほうが君より強いように思えるのに何で次席だったのかなあ〜って思ったからさ。」

「いや、お前は『重力』と勘違いをしてる。アレは『加重』だ。」

え？そうなの？

でも、ボクの解析結果だともはやアレは重力だと思っただけ？

「アレは相手、魔法、物体に重さをつける力だ。」

「……要するに、空間の重さじゃなくて、固体に重さを与える魔法？」

「ああ。そういうことだ。お前の言う『重力』の下位属性でもあるがな。」

「へえ……。」

「でも、ロイと……あの人と比べたらあの人の属性のほうが強そうだよ？」

「ジグね。でも、ボクもそう思うよ。」

「まあ、普通、魔法の行使には何らかの制約があることは知ってるな？」

「え？そんなの？」

「……生き字引だと消滅させるには消滅対象について詳しく知ってること。ソラの月はアタシと添い寝するっていうのがあるよね？」

「ちょっと、待とうか。観客席からものすごい殺気が来てるから。ボクは自分の属性を使いすぎると確かにぶっ倒れるよ？」

「アタシの腕に。」

「……少し黙ってよ。リカはボクが殺されてもいいの？」

「ソラを殺した人間を死ぬよりつらい目に合わせた後にアタシもソラの後を追う。」

「ロイ!?この子とボクの会話がかみ合っていないよ!？」

「アホか、お前等は?.....まあ、それが制約だ。自然系四属性は制約というか、周りの環境によって変わる。火系統は近くに火があるとその分魔法の展開が速くなるとかだな。それで、ヤツの場合は一回の魔法につきどんなに大きかろうが小さかろうが魔法対象にできるのは5つだけ。少なくとも普段の魔法の実技を見てる限りはそうだった。そして、目に見えるものだけだ。風の魔法はヤツにとっての弱点なんだよ。」

「へへ。でも、今のジグさんとやらには面白いことが発生してる。」

「え?何?？」

「属性の進化。」

「な!?バカな!?アレは十年以上かけても起きるかどうかの現象だぞ!？」

「え?.....そうなの?ボクの知り合いには『影』から『闇』に進化した人がいるけど?」

まあ、正確には竜<sup>ドラゴン</sup>だけだ。

その言葉を聞いてロイはかなり驚いた顔をしてる。

「.....お前の周りはチートだな。」



「お。すごいね。属性は『重圧』。ここ風にランクをつける  
と魔法精度はA。展開速度はC。威力はSオーバー。まあ、ロイと  
ジグさんが真正面からぶつかったら・・・ロイの最強魔法がアレで  
全部なら向こうが上級出したらソッコーでロイが負ける。」

「・・・・・・・・マジか？」

「ソラの言うことはホント。彼が完全に『重力』になったらソラ  
でもてこずる。・・・でも、ソラが絶対に勝つけどね。」

「ちょ！？だから抱きつくな！！・・・まあ、とにかくだよ。コ  
レでSも持ち直す。ボクは基本的に魔法の実験台と戦争の相談事を  
たまに聞いてた程度だからDが次に何をしようとしてるのかわから  
ない。」

「画面にはSに補足されたDの面々が逃げ惑っている姿がある。

「・・・お前、自分のクラスなのに何もしなかったのか？」

「？・・・いや、ちゃんとしたよ。魔法の実験台。」

「いや、お前直々に訓練すれば確実に強くなれたらどう？」

「いや、それだとボクがいたからDは勝てたって認識になるでし  
よ。」

「だから、ボクは基本的にDのみんなに魔法の技術を教えるとかは  
してない。」

「そして、ロイはとても重要なことを忘れてる。」

「……それに、ボクは詠唱の授業の点数はなんとゼロだったりする!!」

「「「……おい!?!」」」

「え?まさかの全校生徒の突っ込み!?!」

「アレだけ変な魔法を連発して詠唱の点がかすだと!?!」

「……酷いわれようだが事実だから仕方が無い。

でも、隣からジャキッと音がする。

横を向くとそこには白い髪に薄い赤目の阿修羅様が……。

「ダメ!?何で鎌出すの!?!」

「ソラをバカにしたやつらを殺す!」

「……まあ、こいつのチートは今に始まったことじゃないしな。」

「なんか言ってるけどボクはリカを止めるのにものすごく必死だった。」

side 風葉

「あ……やられたよ。Sの代表がガチで魔法使った。」

俺の近くにいる女子生徒が言う。

彼女はアスカ・ホークレス。

Dの魔銃狙撃手だ。

彼女曰く特殊属性、『サイト照準』の持ち主らしい。

何故、『らしい』と言うのかはこの属性は彼女自身にもよくわからないらしい。

このの先生にもよくわからない属性で、魔法力はそんなにないためにDに來た生徒だ。

この属性はいわゆる魔法で千里眼的なものをするようだ。

彼女のおかげですぐに敵の位置を把握し、奇襲をかけることに成功した。

そして、彼女はその属性で俺に戦況を逐一報告してくれていた。

「……被害は？」

「次の魔法銃士部隊ガンナーの攻撃がバレちゃった。それで反撃にあつてる。」

……ぴんち。

「カザハ。どうするのですか？」

「……どうする？」

「……馬鹿ですか？」

このお嬢様言葉はリオネ。金髪の波打つ髪を腰まで伸ばした見た目からお嬢様なヤツだ。

人形を使って俺たちが坂崎を先頭にD全員で行軍してるように見せてくれたのもこいつだ。

「ここは普通に撤退でしょう？Sと正面からぶつかってもわたくし達Dには勝ち目がありませんわ。」



「……ごもつともです。」

「はははははは。まあまあ、リオちゃんもそんなツンケンすんなつて。カザハも指揮とか初めてなんだしさ。」

「わかってますわ！それにわたくしを『リオちゃん』などと呼ぶのはやめていただきたいのですが!？」

「え〜……。だって、リオちゃんはリオちゃんだろ〜？リオちゃんもオレツチのことをいつもみたいに「黙りなさい!!」メキョツ!?!？」

「……リオちゃん。戦力減らしてどーすんの？」

「アスカさん!? 貴女まで!？」

「……ついさつきリオネのパンチによって沈められたのは器マキナー術士のレクト・ニルメイカ。リオネの幼馴染でこいつがリオネの人形のメンテを全て任されているらしい。ちなみに彼女の護衛。……こんなヤツに護衛が勤まるのか？」

「……ツフ……。いい突きだったぜリオ、ちゃん……。ガク。」

「……1秒以内に起きないと人形でシバきますわよ?。」

「短ツ!?!しかもお嬢様が『シバく』とか言っちゃダメだ〜。オレツチがダンナ様たちに殺される。」

「おい。夫婦漫才はそこまですておけ。」

「夫婦じゃありませんわ！」

「え〜。即答されると地味にショックを受ける。」

俺はこの二人を無視して近くにいるヤツに連絡を取るように指示を出そうと周りを見る。

「・・・よし、だいひょー。副代表に頼んで撤退してもらったよ〜。」

「お？ありがとう。」

俺はアスカにさういう。

だが、彼女は少し顔を曇らせていた。

「どうした？」

「・・・坂崎ちゃんが逃げ遅れたっぽい。」

「なっ!?!？」

「・・・それはマズいですわね。」

「実質、オレツチ達の中で戦闘慣れしてるのは坂崎だけだしな〜。それにあの娘の魔法もかなり強力だしな〜。」

そうだ。こいつ等の言うとおり。坂崎は俺達の主戦力だ。

だが、この状況で助けになんか行けば確実にかなりの人数がやられる。

「……………どうする？」

「どうすればいい!？」

「バカ代表。」

「……………ここでバカ言うか？副代表？」

そこにはいつの間にか副代表、杏奈がいた。

「杏奈よ。あ・ん・な。わたしはフレンドリーな副代表を目指してるんだから名前で呼びなさい。」

「……………俺をバカ呼ばわりする時点でフレンドリーなのか？」

「友情がなせる技よ。」

そんな技はいらない。

「とにかく、カザハは好きなようにやればいい。どうせ最初から無謀なことをしてるんだから今更無謀な命令をされても全員従うよ。」

そして、俺の周りにはいつの間にかSの生徒から逃げてきたDのやつ等がいた。

「点呼……………全員無事帰還。あ、坂崎さんだけいない。」

「……………そのあからさまな独り言は？」

「さあ？何のことかしら？」

しびしびしく言う杏奈。

「どうするよ？どうせなら全員で勝ちたいよな？坂崎さんがいないけど。」

「そうだな。・・・坂崎さんがいないが。」

「あたしも同じね。坂崎さんがいないけど・・・。」

全員が『坂崎さんがいないけど』で俺をチラ見する。  
・・・最初から言えよ。

「はあ、お前らがそんなバカだとは思わなかった。」

「は？俺達はDでバカの集まりだよな？」

「」「」「」

こいつら開き直りやがった・・・。

「わかった。なら、全員で地獄に行くぞ？役割は決めた通りだ。隊列を組んで行くぞ！！」

「」「」「」  
「おっ！！」「」「」

## 9話・NEVER GIVE UP!

side 鈴音

「抵抗するな!」

「いや〜。だって怖いもん!」

どうも! 鈴音です。

いつの間にかみんなとはぐれて逃げ遅れちゃった。

う〜ん。今回はソラ君とかリュウ君達もいないんだよね〜。

………ぴんち?

わたしは リフレクション・エリア 反射結界 で魔法で跳ね返している。

でも、コレは魔法以外は通るんだよね〜。

今は気づかれてないけどそのうちばれちゃうだろうし……どうしよう?

「いたぞ!!! 坂崎だ!!!」

そしてわらわらとSの人たちが来ちゃった。

「本格的にピンチかも〜。」

「コレだけの人数を相手に勝てるのか?」

「お〜前の代表さん? こんにちは〜。」

「……アホか?」

え? 何で?

わたし何か変なことしたかな？

「・・・ホントにこいつが『逆』<sup>リバース</sup>持ちの魔法使いか？」

「むう。失礼な。わたしは本当に『逆』だよ。使えるのが五個ぐらいしかないけど・・・。」

「・・・いま、自分の手札を見せたよな？」

「え？わたしトランプなんか持ってないよ？」

「・・・え〜っと、わたし達に自分のできることを教えちゃったよねって言うことなただけど？」

「あ、ご丁寧にありがとうございます。」

わたしは親切に教えてくれた女子生徒の子に言う。  
そうか。うっかり教えちゃったのか。

「聞かなかったことにして欲しいな。」

「・・・疲れてきた。」

「大丈夫？無理はよくないよ？」

「「「アンタのせいだよ！」「」」

え？わたし何かしたっけ？

・・・ハッ！？まさかわたしにはそんな特殊能力が！？試してみよう！

「……。」

「……。」

「……。」

「……何をしてるんだ？」

「わたしの特殊能力でみんなを疲れさせよう……。」

「もう、掛かってるよ！」

「おゝスゴイ！？わたしにもこんな特殊能力が！？」

「違う！いや、ある意味あってるけど違う！！！」

え〜。

「坂崎！大丈夫か！？」

声のしたほうを見るとそこにはカザハ君たちがいた。  
その後ろからもDのみんなが来た。

「え？みんな？……あ、危ないよ！？」

「お前のほうが危ないよ！？敵に包囲されてるのに。」

「むう……確かに。盲点だったよ〜。」

「どのあたりが盲点なんだよ!?!」

カザハ君は頭を抱えながらわたしに言う。  
頭が痛いなら無理しちゃうダメだよ。

「まあ、いい。やれ!?!」

「了解!?!  
クライディ・ペール  
雲の面紗!?!」

そういうとわたしの結界の中以外が真っ白になる。

みんな位置どころか敵の位置でさえわからなくなっちゃったよ?

「な!?!逃げる気か!?!」

「「「もちろん!?!」」」

「チキンな返答なのになんで堂々と答える!?!魔法でこの霧を払え!?!」

「違う!?!コレは雲!?!」

「クモ?俺、あれ嫌いなんだよ」

「字が違う!?!?」

「みんな余裕だね。」

「坂崎!?!」

そういうとカザハ君が雲を抜けてわたしのところまで来た。



「おどろちゃってわたしの位置がわかったの？」

「ついさっき目の前で話してたよな!？」

「あゝ。そうだったね〜！」

そして、急に雲が晴れた。  
うっん、上にいつちやった。

「な!？早い!？」

「よし！全員で攻撃しろ!！」

そして、SとDの正面衝突。  
いろいろな魔法が飛び交う。

「俺達は逃げることを考える!！Sと正面からやっても勝てない  
!！」

「わたくし達が何とかしますわ!！」

「マジで?・・・まあ、いいか。リオちゃん。がんばろっね〜。」

「  
そういうと二人の男子と女子が前に出る。リオネちゃんとレクト君だ〜。」

そして、レクト君は小さな人形さんをいくつか地面に置く。

すると、その人形は大きくなってわたしたちと同じくらいの大き  
さになる。

「人形だ！！魔法で蹴散らせ！！」

「先ほどの量産品とは違ってこれは自分専用カスタムですわ！！」

リオネちゃんがさういって人形さんたちは一斉に腕から剣を出して踊りかかったり、腕を銃に変えて魔法弾を撃つたりいろんな攻撃をしてる。

「すごい……。」

「オレッチもがんばるか。」

レクト君のほうもいつの間にか後ろからロケットランチャーみたいなのを構えてる。

「ファイア発射！！」

さういって魔法の砲弾が雨あられのように敵に降り注ぐ。  
Sのみんなは自分の防御に手一杯になる。

「……隙だらけです。」

「な！？」

忍君がいつの間にかSの生徒さんの一人の後ろに立っていて、攻撃を仕掛けていた。

「……よし、大部分は逃げた！！お前等も逃げろ！！」

「まずは代表！！貴方がお逃げなさい！！」

「だが！？」

「……ここにSの指揮官はいません。すぐに逃げてください。」

「うおい！？……忍か……だが、俺の勘じゃ無理だ。」

「……何故？」

「……俺を囿に逃げる。坂崎。お前もだ。」

「え？何で？」

「いつの間にか囲まれてる。クラスのほとんどは逃げれたが俺達は包囲されてる。」

そういうと、カザハ君の言っとおり魔力の反応がかすかに周りからしてきた。

「……ホントだ。」

「な？……俺を囿にして逃げる。俺もすぐに追う。」

「……ねえ、それって死亡フラグだよ？」

「いや、コレは後で実は生きてたんだフラグだろ？」

「……完全に囲まれました。」

「え〜マジで〜？リオちゃん、どうする？」

「・・・どういたしましょう？」

「ここはわたしが！」

「いや、坂崎は魔法以外はダメだ。だから、俺達の後ろにいる。」

「・・・いつもそつだ。」

わたしは後ろ。

みんなに守られていないと相手の攻撃も防げない。

「・・・でも、わたしも何か・・・。」

「・・・無理はするな。お前は私が期をみてここから連れ出す。」

代表と一緒に。」

「・・・。」

わたしは・・・みんなの中で一番弱い。

「よし！全員でやるぞ！！！」

「がんばるよ〜。」

ソラ君たちはそんなことないって言うてくれると思う。

「チツ！・・・相手の魔法が強力すぎる。」

でも、わたしはいつもみんなの後ろから見てるだけ。

みんなを見守ることしかできないのが齒がゆい。

「耐える！いつかは逃げれる隙ができる！」

確かに、わたしはシュウ君と違って体術なんてできない。

リカちゃんと違って力もない。

ソラ君、リュウ君、冬香ちゃんと違って魔法を応用できない。

何もない。

「やばい……。何かいい方法は！？」

颯太さんはわたしにこの力はみんなを魔法から守る絶対の盾の力だっ  
て言ってくれた。でも、それは魔法に対してだけのモノ。

「だから、わたしはこの留学に真っ先に来ようと思ったんだよ……」

強くなるために。

うつん。守れるように……。

わたしは、本当の意味での絶対の盾が……欲しい。

わたしはわたしの杖、『ユグドラシル世界樹の杖』をぎゅっと握る。

そして、変化は起きた……。

side 空志

「いやぁ……。みんなバカだね。」

「……元も子もないことを言うなよ。しかもお前のクラスだろ？」

「ね〜ね〜ソラ。レイ先生が向こうですわねってりけどいいの?」

うん。全力で問題ないね。

でも、ボクならあそこでスズを巻き込むレベルの範囲系のやばい魔法を放つ。

そうすれば何人かの敵を葬り去れるからね。

それに、スズはそれくらいじゃ死なない。

「だが、コレじゃ負けるぞ。」

「そうだね。」

「・・・ドライだな。」

「いや、ボクは信じてるよ。Dのみんなは強い。Sも強いけどそれとは違う強さを持つてる。まあ、要するに特殊技能ってことだけ。」

そして、画面にはリオネさんやレクト君、忍君達の戦闘が展開される。

カザハは指揮している。

「カザハは魔法を練る暇が無いみたいだね。」

「だろうな。これほどの猛攻で余裕をかましてられるのはお前ぐらいだ。」

「ソラは最強だもんね!」

「いや、ボクは強くないよ。そこに出てるスズのほうがよっぽど

強い。でも、スズはボク等の後方支援のみでいつもボク等のために戦えてない。自分は一番弱いつて悩んでるからね。」

今も……。

スズは唇をかみ締めて目の前の戦闘を見てる。

でも、スズは自分が思ってるより強いよ。

いつも少しでも早く詠唱を終わらせられるようにここに来てからクイックスベル高速詠唱とか詠唱破棄スベルカットの練習とかをしてたのを知ってるよ。

そこまでしてるんだから、カミサマだってきつとなんかくれるよ。もし、何もくれないんならボクはカミサマを殴りに行くてくる。

「……鈴音は強い。アタシも知ってる。鈴音がいるからみんなが明るいし、魔法で何かされそうになっても守ってくれる。」

「うん。」

「……お前等、ホントにすごいな。」

「まあね。いろいろとやってきたからね。」

そして、それは唐突に起こった。

画面が急に光る。

ボクは何事かと思つて画面を見ると、そこにはスズを中心に……。

「いや、コレは……杖だ!！」

「杖?……あのバカみたいに長い杖か?」

「うん。」

「アレは『ユグドラシル』。鈴音の武器。」

「……ものすごく大仰な名前だな。世界樹でも使ってるのか？」

「いえす。」

「……何故かそんなに驚いてない俺はもはや異常か？」

「説明すると、アレはボクが作ったちよつと特殊な武器なんだ。」

「……おい。今、無視できない単語が聞こえたぞ？」

「アタシもソラに作ってもらった。」

「ちよつと待ってくれる!？」

「あ、学園長にマキ先生。どうしたんですか？」

「なにじゃない!？」

「……ソラ、この人、誰？」

「……鎌を仕舞ってください。こっちのマキ先生はフルネームを木下真希先生きのしたまき。魔法工学、つまりはボクが唯一かなりの好成绩を残してる授業の先生だよ。」

「アレはどう見ても魔導宝具級の武器よ!？それを貴方が作ったの!？」



そういうのは作業服に安全ゴーグルという今からでも何かの作業をできそうな女の先生、つまりはマキ先生がいた。

「まあ、そうですね。」

ボクはとりあえず説明を続ける。

「はあ、まあ。ボクは最初にこの二丁拳銃をログ・ラギスというドワーフから貰いました。」

ボクは自分の銃を見せる。

「そして、コレは神金鋼オリハルコンでできてる銃です。知つてのとおり、神金鋼製の武器は所有者によっていろいろな特殊な効果がつくらしいです。そして、ボクはこの目で解析すると、この武器には自己進化プログラムの魔術構成プログラムがされていたんです。そして、ボクは武器の作り方をいろんな人に聞いて、この魔術構成を全ての武器につけました。」

「・・・要するに、コレは坂崎君の武器の進化だと?」

「かも知れませんが。一度だけ、ボクは自分が作った武器が持ち主に最適化されるのを見たことがあります。」

そのときの光に似てる。

ボクはこのことをログさんたちと進化エボルトと呼んでいる。

どうすればリュウみたいに武器の形状までが変化するほどの急激な進化を遂げられるのか煉さんや龍造さんと話したけどわからなかった。

でも、今はわかる気がする。

「・・・心の底から強く思うとあんなふうに急成長するんだ。」

そして、光が収まる。

そこには柄の部分に複雑な紋様が描かれ、先端部分には白い宝石のような物がくっついてる杖があった。

前回のただの棒みたいなのが杖とは大違いだ。

さて、一体どうなる？

ボクはこの先の読めない戦いに目を戻した。

side風葉

「坂、崎？それは？」

「え？・・・わたしも何が何だか・・・。」

「何だ？さっきのは？」

！？

そうだ！！今はそんなことより急な事態に対応できてないから逃げる！

「今だ！！逃げるぞ！！  
疾風ゲイル・ダッシュの疾走　！！！」

そして、俺は風の魔法で自身のスピードを上げて走る。

後ろからは坂崎を抱えた忍と人形に抱きかかえられて逃げてくるリオネ、レクトがついてくる。

「・・・代表。後ろから高速で敵が。」

「やっぱ腐ってもSだな。・・・坂崎！お前の魔法でやつ等だけ

魔法の……いや、意味が無い。すぐに再展開されて追いつかれる。

」

どつする？

「いたぞ！！待て！！」

「つきなみなセリフですけど待てといわれて待つ人はいませんわ  
「！」

「リオちゃんの言うとおりでね。」

「レクト！！近いですわ！」

「……私がいりますか？」

「いや、いくら忍でもS数人じゃ分が悪い。」

「……。」

坂崎はさつきから何かぶつぶつと言っている。  
おそらくは詠唱中なんだろう。

「サンダー・レイピア  
雷の細剣　！！」

後ろから雷系の魔法が放たれる。  
ヤバイ！？

「アンチ  
相殺　！」

坂崎はタイミングよく魔法を消す。

「ナイスだ！」

「掛かった！！やれ！！」

「レイジング・メテオ  
劫火の隕石　！！」

「な！？」

風と土と火の三属性の混合魔法だと！？  
いつの間に！？  
そんなものくらったらひとたまりもないぞ！？

「坂崎！！」

「……無理です。坂崎殿は先ほど魔法を使ったので詠唱に時間がかかります。」

だが、それでも坂崎は必死に詠唱をする。  
やられた。

相手はわざと魔法を放ったのか。

「……ここまでか……っ！！」

「……イヤだよ。」

「？……坂崎ちゃん？」

レクトが坂崎を少し意外そうな顔で見ている。

「負けれないよ！わたしは何もしてない！みんなはもつとが  
んばってるのに……。」

「そんなことはありませんわ。」

そっだ。

俺達は坂崎のおかげでここまでできたと思ってる。  
坂崎がいなければあんな作戦も思いつかなかった。

「でも、わたしのチカラじゃ守れてない……もつと、みんなを  
守れるようにここに来たのに……！！ソラ君に全部背負わせない  
ように……強くなるために！！！」

坂崎がそう言う。

……こいつらは本当に俺達とおなじ学生なのか？  
いつも子供みたいなことを言ったりしてる超ド級の天然女子と同  
一人物だとは思えない。

「つて、本当にまずいですわ。」

リオネは上を向いてそういう。

俺達は釣られてそっちを見る。

そこにはとてつもなく大きな炎を纏った大きな岩が俺達に向かっ  
て突き進んでいた。

「おい！？あの魔法を止める！！お前達も巻き添えを食うぞ！？」

「関係ない。こっちはお前を倒せばそれで勝ちだ。」

最悪だー!!

こいつら手段を選ばねえ!?

「・・・させない。ううん。そんなことさせたくない!!」

坂崎がそう叫ぶが無情にも戦術系の大規模魔法は俺達に容赦なく迫る。

そして、俺は衝撃に備えて体を硬くする。

「きゃあああああああ!?!?!?!」

「リオネ!」

「代表!!坂崎殿!!」

リオネとレクトの声が聞こえる。

そして、俺の上に誰かが乗る感触と誰かが隣にいる気配。

バカヤロウ!何で忍が庇う!

「「「「「・・・」」」」」

・・・いつまで経っても何も起きない。

「おい。忍。重い。」

「重いよ。」

「す、すみません。」

「リオちゃん!?大丈夫!?!」

「はい……って、レクト！？怪我してますわ！？」

「ん？……コレぐらい大丈夫。」

「……何故だ？」

俺は全員が無事なのを確かめる。  
だが、それはSの連中も同じだ。  
疑問の声を上げたSの生徒を俺達は見る。

「……何故、Dのゴミがああ魔法を消せたんだ？」

「は？何を言ってる……。」

「何故だ！？アレは対軍団用の上級の上位戦術魔法だ！！そんな魔法を消すなどその坂崎の『逆』か『消滅』以外にありえない！！お前等は坂崎以外の人間を隠しているのか！？」

「だから何を……。」

「……まあ、いい。そいつもまとめて消し飛ばす！！」

そういつと目の前の男子生徒は近くにいたやつ等に目配せをする。

「風よ！！切り裂け！！」

ストーム・ブレイド  
風神の三迅　！！」

「風の混合魔法！？」

誰も反応ができない。

それはそうだろう。ワケのわからないことが連続して起こってる。その急な展開に全員がついていけなかった。

「ダメ!!」

だが、敵の魔法はまたもや消えた。

目の前に突然出現した無数の透明な六角形の盾によって。

「何だ！？坂崎か!？」

「あ、れ？え？わかんない。……あ!？」

坂崎はそう答えるが突然ハツとした顔になって声を出す。

「何だ？心当たりがあるのか!？」

「……武器の、進化？」

「はあ？何ですのそれは？」

「いや、そこでオレッチを見ても……武器の進化って何?？」



「これは、ソラ君が作った特別な武器なの。貰ったときにこの武器は進化するって・・・リュウ君のときもこんな風に急に武器の形状が変わったの。それで、能力みたいなのもついてた。」

「・・・要するに、これは坂崎殿の武器の進化後の能力？」

「・・・たぶん？」

「チツ・・・なら、坂崎の魔法は物理攻撃には何の耐性もないはずだ!!！」

「な!？」

「何でそれを!？」

「俺が坂崎を倒せば主席の座につけるからな!!！」

そういつと腰の練習用の剣を構ええると俺達・・・いや、坂崎に盾を無視して突っ込む。

ガン!

「だあ!？」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

こっちに突っ込んできたアホな男子生徒以外のヤツが無言で盾にぶつかったこいつを見る。

心なしが視線が冷たいのは気のせいだ。

「…………たぶん。」

「おい。お前等のこの野心まみれのアホは何をしてるんだ？」

俺はとりあえずこいつと一緒にいたSの生徒に聞いてみる。

「…………私はわかりません。」

「俺も同じく。」

「…………そうですの。」

「じゃ、オレッチ達はもう行くよ。」

「…………失礼。」

「じゃあ、そのアホを頼む。」

「バイバイ。」

そして、俺達はそこを去ろうとする。

「……つて、ちょっと待て！！」

「チツ！さりげなく逃げようとしたんだがな！」

すぐに臨戦体系をとる。

向こうは二人。こっちは五人のアウトナンバーだ。よっぽどのことがなければ勝て…………。

「  
風と火よ、彼の者を焼き払え！！  
フレア・ストーム  
炎の大嵐　！！」

炎を纏った巨大な竜巻が迫ってくる。

「無理だ！！勝てねえ！？」

「うん。・・・わかった！！こうだ！！」

坂崎が杖を一振り。

すると、盾が移動して俺達の前に来る。

盾に当たったところから魔法は消え、魔法を防ぎきった。

「な！？坂崎さんの魔法は詠唱が長い上に魔力消費がハンパないはずじゃ！？」

「みんな！魔法を使って！わたしがその間はみんなを守る！」

坂崎が俺達に向かって放たれる魔法を盾でガードする。

「へっ。坂崎ちゃんカツコイイ。」

「コレでは坂崎さんにだけおいしいところを持っていかれてしまいますわ。レクト！」

そついうと二人は人形を展開。

「・・・では。」

そついうと忍は消える。

「……いや、マジで。」

「後ろ！」

ガキイ！

金属のぶつかる音。

忍の快刀と男子生徒の長剣が交差する。

「……やはり何回もすればバレますね。」

「いや。俺はわからなかった！！」

「貴女の相手はわたくしですわ！」

「オレッチもな。」

「ひ、卑怯よ！正々堂々と1対1で……。」

「「とう！！」」

「ちよ！？」

風よ守れ！

ウインド・メール

風の鎧　！！！！

「甘いですわ！！レクトの人形を舐めないでくださるかしら？」

「わーい。リオちゃんが褒めてくれた。」

「貴方も戦いなさい！！」

「え〜。」

だが、二人はなかなかのコンビネーションで敵を攻撃。リオネは人形に搭載された装備で攻撃。レクトは相手が隙を見せるその瞬間に自分の武器……。

「つて、アンチマテリアルスナイパー対物狙撃銃かよ!?!」

「魔法弾のね。」

どこに持ってた!?!

そんな馬鹿デカいのをポケットに入れられるわけが無い!?!

「つてえー!?!」

「死ぬ!?!わたし死ぬ!?!」

「はははは!?!もつと踊りなさい!?!殺戮の踊りを!?!」

もはやコレではどっちがさつきまでやられかけていたのかよくわからない。

つか、完全に俺達のイジメだ。

「まあ、やめる気はないがな!?! ウインディ・リーフ・スラサー木の葉を纏う竜巻!?!」

「上級の中位魔法!?!」

コレが俺の属性。『風』と木の派生系属性『葉』だ。デュアル俺の親も安易な名前をつける。下位属性とはいえ多重属性持ちだ

からってな。

風が巻き起こり、数本の竜巻が発生。それは周りの木の葉を巻き込み、さらには巻き込んだ葉までもが刃のような鋭さを魔法によって付与される。

それを敵に放つ。だが、Sはそんなぐらいで仕留められるほど雑魚じゃないことは自分もよくわかってる。

案の定、敵は高速移動系の魔法で逃げよつとする。

「フェザー・ステップ  
風の舞　！！」

「アクセル・ワールド  
加速する世界　。」

忍はここで敵の二人に向かって一定範囲内を高速移動をさせる魔法をかける。

ここで属性『速』について説明しよう。

これは簡単に言うと補助に分類される魔法で、『速』の属性が無いヤツでも訓練しだいで使える。だが、ここで注意が必要だ。『速』の魔法はあくまで対象のスピードを上げるだけだ。

別に動体視力が上がったり身体強化がされたりするわけじゃない。だから、その魔法を使ったまま激突なんかすればもちろん大怪我をする。

つまり、こついうことだ。

「なあ！？が！？」

「きゃ、っ！？」

二人は急なスピードの変化についていけずに周りに生えている木の一本にそれぞれ激突して意識を失う。

「・・・俺達の勝ちだ。」

## 10話・THE SERIOUS HONORS

side空志

「・・・なんというチート」

「いや、お前が言うか？」

ボクは画面での戦闘を見てそういうけどロイに突っ込まれた。

「でも、アレを解析してもものすごく楽しいことがわかった」

「鈴音の武器？」

「うん。アレさ、一定以上の魔力を注ぎ込むことであの六角形の盾みたいなのを展開する。もちろん、『逆』の属性は付与されてる。今は相殺<sup>アンチ</sup> だけど 反射<sup>リフレクション</sup> もできると思う」

「・・・もはやバランスブレイカーだろ」

「うん。それにまだある。さっきのアホな生徒がアレにぶつかったよね？」

「ああ？それがどうした？」

「・・・何で鈴音が魔法以外の攻撃をガードできたの？」

「は？それってどういうことだ？」

「本当に珍しい属性だから知らなくてもしょうがないんだけど、



スズは魔法以外の攻撃をガードできない。それに魔法も魔力から発生したものでなら大丈夫だけど、『金』の属性みたいにとっかさこら辺から持ってきて変化させたとかは無理。簡単に言っと物質そのものはダメ。魔法から作られたならオツケ。そういうこと。・・・まあ、簡単に言っと、スズは最強の盾の魔法を手に入れた」

「・・・おい。Sに勝ち目はないんじゃないか？」

「・・・でも、鈴音はソラみたいに解析できないから自分の武器を使いこなせてないと思う」

「ボクもそう思う。それに、言っちゃうけどスズの魔力はもう残り少ない。あの盾を展開するだけで精一杯だと思う。でも、それも長くはもたない」

「・・・つまり、坂崎という最強の盾をどこで使うか、か？」

「そだね。それに目撃者も気絶させられた。これからどうなるんだろうね〜」

被害的にはDもSも同じ。

でも、周りを見るとDがS相手にここまでやってることに驚いてる。

「コレで、ソラの考えどおり少しは格差がなくなるかな？」

「まあ、だろうね。結構五分と五分の戦いだし」

ボクとリカはマイクに拾われないような声で言う。

「でも、一番はDのみんなに勝って欲しいね」

side 風葉

「全員無事か？」

『うん。気絶はしてないけど戦うのは無理な人がたくさん』

「そうか」

俺は風の伝達系の魔法でアスカに連絡を取っている。  
既に魔法で全員の位置は把握してるらしい。

「今から合流しよう。お前に集まるように全員に連絡だ。動けそ  
うにないヤツ等はそこで待機でいい」

『りょーかい』

アスカがどのあたりにいるのかを聞くと、俺達はすぐに走る。  
坂崎は補助系の魔法は使えないからリオネに頼んで人形で運んで  
もらってる。

つか、人形速いな・・・人形についていくのが精一杯だ。

「オレッチ特性だからな！」

「・・・レクト殿は違法改造してないか不安です」

「・・・そんなことはしてないよ〜」

「おい、その間は何だ？」

「そろそろ目標地点に着きますわ」

「みんなわたしだけ楽しんでゴメンね」

「いや、お前の属性上しよすが無いだろう」

そして、アスカに言われたポイントに到着。  
そこには既に何人かのやつらがいた。

「あ、だいひょー。よく生き残りましたね」

「人を死ぬのが当たり前みたいに言うな」

「いやあ、でも、Sの代表サンにかなりケンカを吹っかけたバカ  
ですから」

・・・そういえばアレはなんだったんだ？

俺はあのと看、無理だと判断して自分のところに戻るうとしたと  
ころだった。

だが、何故か俺の方向から俺の声であんな挑発的なことを言った。

「それが、アレは俺じゃない」

「え？アレはバカザハが言ったんじゃないの？」

「・・・いい加減にバカ言うのはやめろよ。副代表」

「でも、バカザハが言ってないなら誰が？」

「アスカ、お前は何でそんなにノリがいい!？」

「……」

「……坂崎ちゃん？」

「何故、貴女は明後日の方向を向いてらっしゃるのかしら?」

「え?そんなことないよ」

俺達の目を見ずにそんなことを言う坂崎。

「……なるほど。ソラがやったんだな」

「……アハハ……」

どうやったかはわからないが……。そうか、あいつのせいで俺は命の危機に……。

なら、意地でも勝ってあいつに正義の鉄槌を下さなくては俺の気がおさまらない。

「よし、ソラを殺るぞ」

「でも、その前にオレツチ達はSをぶっ飛ばさなくちゃね」

「……それで、俺は作戦を考えた。坂崎のその力はここぞって時に使う。情報どおりならそうしたほうがいい」

「わかったよ」

しばらくして、Dでまだ戦えるやつらが集まる。  
俺は考えた作戦を全員に言う。

sideジグ

「……Dの魔法でやられただど!？」

「……そうとしか考えられない。しかも、坂崎ではありえない。  
彼女は攻撃系の魔法はほぼ皆無らしい。」

「……それも向こうが流したウソの情報だという可能性は？」

「留学してから一回目の魔法実技の訓練の授業のときにそう言っ  
たのを女子が確認してる」

「……要するに、よほどの策士でもない限りありえないか。ある  
いは、最初からこんなことをしようと考えてない限り。」

それに彼女は策士のタイプでは無いと俺達は認識してる。  
むしろすっかり情報を漏らす系のやつだ。

「……誰がそんな強大な魔法を?だが、普通に考えて不意をつ  
かれた可能性は?」

「普通に追いかけていったところを不意打ちできるか?相手は敗  
走中だぞ?」

そう。相手はただ適当に魔法を放つとそのまま逃げただけ。つま  
りはヒット&アウェイ。そして、見た限りじゃあの時はDなやつら  
が全員いた。

たとえ、数人どこかで待機してたとして、さらにそのポイントに

誘導されて待ち伏せをくらったとしてもDのやつらが放つ魔力に気づけないほどのザコじゃなかったはずだ。

「……隠し玉があると考えたほうがいいか？」

「ですね。……そういえば副代表は？」

「そういえばどこだ？」

「あいつにはできるだけ前に出ないように伝えたが……。」

「俺はここですけど」

その言葉と共に木の陰からいきなりグランが出てきた。

「……心臓に悪い。」

「……どこにいた？」

「いや、木の上でちよいとばかりし昼寝を。……まだで？」

「……」

俺は自然と慥然とした顔になる。

その顔を見ると、グランはニヤニヤした薄笑いを浮かべる。

「へえ〜。……俺は適当に後ろにいりゃ勝てるといわれてたんですがね？」

「……」

「まあ、俺が出ればすぐに終わる。それでいいんで？」

・・・認めたくはない。

Dのようなカスの集まりみたいな連中に遅れをとるなど・・・。  
だが、それは今のこの状況をもってそれを如実に表している。

「・・・ああ。こちらの最大戦力でやつらを潰す」

side空志

「両方とも何か考えてるね」

ボクは目の前に映し出されている映像を見て言う。

そこにはDとSがそれぞれ一生懸命話し合ってる姿。

「そうだな。SはDにかなりコケにされてるからな。ここからは  
本気で、小細工なんか通用しないだろうな」

「・・・Dに勝ち目はない？」

「さあ？ボクにはわからない」

「一つだけ言えることがあるとすれば・・・それは・・・」

「あの、二人の代表に全てがかかっているかな？」

ボクは二つのクラスの代表を見る。

方や、最下層ランクの代表。

もう片方は実質、この学年最強の生徒。

「まあ、ボクがSならDが集まるところに全力で魔法をぶち

込む」

「確かにシンプルだが有効だな。例え相手が銃を持っててもこっちはミサイルをぶち込めばそれで勝てるからな。それにDとSはそれぐらいの差がある」

「でも、Dは全員がやられないようにチームを分けたりしないの？」

「いや、ここではそれはまずい。下手に戦力を分散させれば実力でSにフルボッコにされる。だから、Sを確実にねじ伏せられるような策が無いとそんなことはしない」

そして、それはDが一番よくわかっていることだろう。

自分たちが弱いということを知ってるからこそ、考える。

自分達のもてる力全てを使って。それは人形を使い、自分達作った銃器であったり、道具であったり……。

「まあ、勝敗が決するのはかなりすぐそこまで迫ってるよ」

sideジグ

「まず、やつらの厄介なところは俺たちが魔法だけなのに対して向こうはさまざまな装備を隠し持つてることだ」

俺がそういうと全員がうなずく。

向こうは俺達の詠唱にのみ気をつけていればいいがこっちはそうはいかない。

向こうはこの準備期間の間にいるような兵装を作っていたのだろう。そうでなければあんなに大量の人形で俺達に奇襲させたところ



を襲うなんてできなかったらう。

この中には魔装系の魔法を使うヤツも一応はいるがそんなものは一人か二人だ。

それにこちらはあの忍者みみたいな男子生徒に情報操作もされていた。

Dのヤツ等は俺達に勝つために出せる全ての力を出して勝とうとしている。逆に俺達は虫けらを潰すつもりで適当に魔法を出していただけた。

「・・・癩しこだが、俺達がこのまま戦えば確実に負ける」

「は！？相手はDだぞ？」

「俺達はそのDに遅れを取っている。俺たちが全力でやればこんな戦いは既に終わっている」

「・・・ですが、現状は違う。と、言うことで」

ランドがヒヒヒと笑いながら言う。

「ここからは全員が持てる力を全て出してやれ。そういうことで」  
「？」

「ああ」

「Dに本気でやれだ！？」

「でも、実際、拮抗どころかこっちの方が負けてるかもしれない」

「・・・何人かは正面から戦ったにも関わらず負けてるらしいし」

「んなもんまぐれに決まってるだろ？」

Sのやつら全員が騒ぎ出す。

中にはDなんてザコには本気を出す必要なんてない。今までは運がよかつただけだ。でも、下手すれば負ける。など、いろんな声が聞こえる。

「・・・アンタ等、何か間違がってねえかい？」

「」「」「？」「」

「俺達のやることはこの戦争に勝つことだ。Dに勝つことじゃない。Dに勝つのはあくまで結果だ」

「でも・・・」

「なら、このまま負けてDより劣っているなんてレッテルを貼られるのか？」

「」「」「！？」」「」

「俺たちが負けるわけ・・・！！」

「今のこの状況がそうだ。現実を見る」

「・・・」

やっと全員が現状を認識したのか全員が黙りこくる。

そして、俺は全体を見回すと口を開く。

「ここからは本気で行け。コレは命令だ」

俺は無無を言わさない口調でそう言う。

俺たちが全員完全に舐めきって戦ったとはいえ、ここまでDがやるとは思わなかった。・・・それだけあの三谷空志と言つヤツを信頼してるのか、あるいはあいつの思いに報いるつと考えているのか・・・。

「なににせよ、ここからは俺達のターンだ」

side 風葉

「おそらく、向こうは確実に本気で掛かってくる」

「ようやくですわね」

「・・・オレツチそろそろ疲れた」

「でも、大丈夫なの〜?」

「ああ、俺達の目的はこの戦争に勝つことじゃない。ただ、Sの連中に俺たちだってできるつーコトを見せるだけだからな。勝つことはそのついでに過ぎない」

おそらく、Sは俺達に勝つことが前提だろう。

だが、俺たちだって自分たちがザコなコトぐらいよく知ってる。今度からはこっちの小細工は通用しない。

そして・・・。

「あ、だいひょー。Sが進軍を始めたよ。しかもこっちに」

「誰かの魔力を感知されたか・・・」

「・・・まさかわたし？」

「いや、俺かも・・・」

全員が自分のせいじゃないかといいい始める。

「いや、普通に考えて向こうの感知能力が優れてるんだらう？」

「・・・さすがS。勝てる気がしない。」

「まあ、俺は勝ってソラのクソ野郎にパイルバンカーでもしねえと気がすまねえ」

俺はあいつのせいで命の危機にさらされてる。

「レクト。装備は？」

「あ・・・まあ、ポチポチ？でも、みんな逃げるときにかなりいろんな道具使ってもう、残り少ない。でも、ダミーはまだある」

俺達はSと少しでも互角に持ち込むために魔道具を大量に持ち込んだ。

そして、ダミーと呼ばれるものは魔力を発散する魔道具で、コレを人形につけて魔力を持たない人形を俺達だと勘違いさせた。

「よし。じゃ、一旦別れる。かなり危険だから少しでも危険を感

じたら逃げる。各自ダメーを持ってどっかに適当にばら撒け少なくとも混乱ぐらいはさせられる・・・といいな」

「・・・バカザハ。最後が希望になってるけど？」

「・・・解散！集合ポイントはアスカの独断で！！」

俺は杏奈の呟きを無視してみんなに指示を出す。

「ほいさ〜。後で連絡するよ〜。魔法じゃなくて魔道具で。誰かに気づかれると事だからね〜」

アスカは敵の方向を示す。俺達は反対の方向に走り出した。

sideジグ

「・・・？・・・代表、魔力があちこちにあります」

「は？・・・確かに・・・」

・・・おかしい。何で敵は急に分散した？  
俺達と1対1で勝負する気か？

「いや、それは考えられませんぜ？」

「・・・そうだな」

Dの連中はこっちが本気になったことに気づいてるだろう。

どういふ魔道具を使ったかはわからないが向こうはこっちの動きをかなり正確に把握してる。内部にスパイがいる可能性も考えたが・

・それはないように思う。こちらの動きが割れているが何故か作戦等が割れていない。おそらくは何らかの手段で動きだけを捉えることができている。

「・・・な！？今度は後ろ！？」

俺たちが祈祷方向からも急に魔力が発生。

・・・なんだ？

「・・・チームに分かれる。A、Bはここで待機。C、Dはここから一番近い魔力のところに行く。ついて来い」

そういうと俺達は魔力が一番近そうなところに行く。それはほんの数分ほどでつくような場所だった。ここなら大声を出せば待機組みにも聞こえるだろう。

だが、そこには誰もいなかった。

「・・・どついうことだ？」

「代表！！これ！！」

すると、そこで生徒の一人が缶ジュースの缶のような円筒形のものを見つける。

何だ？

「これはダミーです！」

「「「・・・？」「」」

ダミー？

初耳だ。

「……あ、そういえば魔法工学やってないと知らない」

「で、何だそれは？」

「簡単に言うところの中に溜め込んだ魔力を周りに発散する魔道具です」

「……そうなのか？」

そんなもの、何に使う？

「主に蓄魔器<sup>コンデンサー</sup>として使われます。が、うまくすれば今回のように、ただ魔力を垂れ流すだけの装置にもなります。だから、俺達は魔力を待たないはずの人形から魔力を感じ取ってアレをDの連中と勘違いしたんですね」

「……！……俺達は一杯食わされたのか？」

「こっちがダミーに惑わされてる間になんかをする気でしょうね」

「……確かにコレだけ魔力が発生してれば向こうの位置がわからない。  
ない。」

だが、向こうはその限りでない可能性がある。

「すぐに戻るぞ！！」

口々に返事をするが俺はそれを無視して来た道に戻る。

そして、急いで戻った先には雑談をして少しだけざわざわとして

いるさのやつらがいた。

「？・・・代表？そんなに急いでどうしたんですか？」

俺は先ほどのことを話す。

すると、全員の顔色が変わる。

「・・・何かたくらんでる？」

「それが妥当」

「早急に魔力感知に長けているヤツ等はDの魔力を探せ！他の手段も使えるものは使え！！」

そういつと俺達は魔法や知覚でDの居所を探り始めた。



## 11話・HARD GAME

side 風葉

「……だいひょく。向こうは本気で掛かってきました。」

「やつとか。……つか、お前のそれってもはや千里眼だよな？」

「いやいや。アレは対象がどんなところにも見れるけど、わたしの『照準』サイトは目の前のところしかムリ。簡単に言うと、千里眼は後ろのものも見れるけど、わたしは目の前にあるものオンリー。」

まあ、その代わり距離もわかって狙撃ステイクには向いてるけどね〜と言いながらSがいるであろう方向を見る。

「まあ、そのうちここもバレるだろう。」

「どうしますの？」

「……オレッチは楽しい。」

「くたばりなさいませ。」

「……丁寧なのか言葉遣いが悪いのかよくわからない。」

「とりあえず、半分のヤツ等は自分の装備のチェックだ。全員の準備ができ次第さっきの説明どおり攻める。そうだな……まずは銃器系の武器のヤツ等からだ。」

とりあえず俺は夫婦漫才を始めた二人を完全に無視して全員に指

示を出す。

そして、各々が地面に座って、魔法工学の得意なやつを中心に武器のチェックを行う。魔法銃系は魔法回路にほんの少しの異常があれば何かしらの不具合が生じる。

具体的には暴発に爆発、引き金を引いても魔法弾が射出されないとかだ。魔法を使つて制御してるためか、かなりデリケートな代物だ。ソラの武器には刃がついていて接近戦も想定されたような形状だがマシンナリー機術士にしてみれば誰がこんなアホな武器を作ったと聞きたくなるようなものだ。だが、どういうわけかヤツの武器は一度も整備をしてるところを見たことが無い。・・・実はしてるのかもしれないが。

「・・・本当にワケがわからん。」

「それがソラ君だよ。」

坂崎が突然おれに言う。

「・・・心でも読んだのか？」

「・・・お前はその武器を見なくてもいいのか？」

「これはソラ君にしかできないよ。」

そついうと坂崎は自分の杖

『ユグドラシル世界樹の杖』を見せる。

「・・・ホントにお前等は何者だ？」

「うん・・・まあ、少しいろいろなしゅらばをくぐつて来た『まほーつかい』だよ。」

坂崎は満面の笑みでそういう。

修羅場って何だ？

「……まあ、適当にはぐらかされたってコトは聞かないほうがいいんだろう。」

「そうか。」

「そだよ。」

俺はなんとなく今だ漫才を続ける二人を見る。

「そんなですから貴方は女性の方にモテないのではなくて!?!」

「うーん……別にオレツチにはリオちゃんいるからいいや。」

「!?!? つな!?!? ……そ!?!? ……いい加減になさい!?!」

「えぐふあふ千ぎやkj!?!」

そついうとリオネは自らの拳でレクトを地に沈めた。

「……リオちゃん、味方の戦力減らしてどーするの?」

「アスカさん!?! 貴女もいい加減にしてくれませんか!?!」

「そうだよーリオちゃんって呼んでいいのはオレツチだけなんだし。」

「……無駄に回復が早いですわ。」

「……………なんというか……緊張感ないな……」

俺は自分の武器を取り出してみる。

俺が使うのはナイフだ。

それもたくさんの。あちこちに隠し持ったたくさんのナイフを地面に出していくと十数本で構成された小さな山ができた。

用途としては主に投げる。それと相手に切りかかる。以上。

「すっごいたくさんだね。」

「ああ。俺は風系統の魔法使いだからな。自然とスピード重視の戦い方になる。それに俺の家系は狩人でこういうヤツの扱いがそれなりにできる。」

「へえ。」

俺は周りを見る。

「……ほとんどのヤツ等は整備を終えたようだ。」

俺は残りのヤツ等もチェックするようにいうと自分の整備をさっさと済ませる。

「……よし。武器以外も特に問題はない。」

そう確認すると俺は今だバカ騒ぎをしてるバカトリオに魔法を放つ。……いや、アスカはダメだ。……しょうがない。

「おい。いい加減にしろ。つか、お前等は人形とかいいのか？」

「ですから……はい？何か問題がありますの？」

「いや、オレッチの見たところ特に何も無いよ。リオちゃんの切り札も完璧。」

「……こいつらまだ隠しだまを持つてるのか？」

「ならいい。準備できたか？」

「おっけ。」

「こっちも。」

「あと少し。」

ちらほらと報告の音が聞こえる。

「……アスカ。向こうは？」

「ん〜……ダミーを破壊してるっぽいね。たぶん誰もわたしたちの位置を確認できなかったんだね。」

「それですまはダミー潰しからはじめたか……好都合だ。」

向こうが魔力を消耗してくれるのならそれ程うれしい事はない。

まあ、それでも確実に俺たちより強い。こっちが全力を出しても相手はその魔法を数発は撃てる余裕があるだろう。

「勝手に消耗してつぶれてくれるのが一番いいんだけどね。」

「……杏奈、お前今までどこにいた？」

「こいつは俺達が合流してすぐにどこかに消えた。」

まあ、敵はここから遥か遠くだから問題ないとは思ったが……。

「ん？わたしはちょっとトモダチに頼んできた。」

「……？まあ、いい。お前も武器を何とかしろ。」

こいつの言うことはたまによくわからなくなる。

まあ、大丈夫だったんだから問題はないか？

「ん……わたしの鈴だから整備とかないし……。」

……お前の武器は俺と同じでナイフじゃないのか？つか、鈴ってそのナイフの柄尻についてるヤツか？

こいつは魔法力はあるが何故か魔法を行使できないという珍しい人間だ。

それでDに落とされた。俺達も大体のクラスメイトの属性は知っているがこいつだけはよくわからない。わかっているのは武器はナイフ。魔法使えない。運動神経が中の上。要するに何でここに入った？と疑いたくなる人間だ。

他のやつら……リオネは人形師だし、レクトはその護衛兼機術士<sup>スナイパー</sup>。アス力は魔法こそあまり使えるものが無いが狙撃手としての技量はかなりのものだ。忍も覚える魔法が極端だがおそらくDで最強だろう。

……何で俺が代表してるのかわからなくなってきた。

「簡単ね。バカザハ以外の人の人間性が崩壊してるからね。」

「……あ……。」

何だか納得できた気がする。そして、そこにはお前も含まれるな。俺がこの中でまだまともな存在だったのか……。

「だいひょー。そろそろダミーが残り少なくなってきたからこっちの居場所がばれるかも。」

「・・・わかった。全員武器と魔法を使えるようにしろ。」

そついうと全員俺の指示に従って武器を構える。

あるいは呪文の詠唱を始める。

俺はそんなDの前で何か言わなくちゃいけない気がした。

「・・・みんな、すまないな。こんな無謀なことにつき合わせて。」

「「「「「」」」」」

全員何も言わない。

だが、俺は言葉を続ける。

「確かにソラの野郎に煽られてやった部分もある。・・・だが、俺はあいつに煽られなくてもいつかはこんな無茶なことをしていたと思う。正直、ランクがDってだけでこんな扱いを受けるのがイヤだったからな。」

俺は自分の心情を語っていく。

周りが静か過ぎて耳が痛くなるような錯覚を覚えるほどだ。

「だが、俺一人じゃここまでではできなかつた。・・・だがから。」

こんな俺に付き合ってくれてありがとう。

そう言おうとした。

「それは全部終わってから言うことだよ。」

「この人は・・・何を勝手に終わらせようとしていやがるのでしようか？」

「・・・リオちゃん。言葉遣い。」

「やっぱり、代表バカだな!!」

「まあ、Dだし？」

「・・・しょうがない。」

「俺たちバカの集まり。」

「アンタが一番バカだけど。」

「・・・否定できねえ。」

口々にみんながそういう。

そして、俺は肩をぽんぽんと叩かれる。  
振り返るとそこには杏奈。

「アンタ以外にもそんなのここには山のようにいたの。そんなの今更。」

そして、その可愛らしい顔で不適な笑みを浮かべて彼女は言う。



「コレが終わったら打ち上げよ！！もちろん、祝賀会の！！」

「「「おう！！」」」

そういう顔は全員笑っていた。

自分たちは負けの色が濃いにも関わらずだ。

ここからするのは正面衝突以外にすることが無い。

だが、俺達は笑っていた。理由なんてないんだと思う。ただ、この瞬間を大切にしたいと思ってるだけだろう。

俺も、自然と笑みが浮かんだ。

「あ、さっきの雄たけびで場所がバレたっばい。」

「「「・・・うそお！？」」」

「あ、今度は進軍スピードが上がった。」

「おい！？全員戦闘準備！！迎え撃て！！」

「「「了解！！」」」

「・・・なんて言うか・・・バカだね。」

ボクは大きな声を上げてしまったがために見つかったDの方々に  
対してそう言う。

・・・ホントにバカだ。

「・・・そんなストレートに言うなよ。」

「でも、アタシもそう思う。」

ボクは解説席でそういう。もちろん声は会場に届いています。

「でも、ボクさ、地味に副代表の杏奈さんの魔法がよくわかんないんだよね。」

「え？そうなの？」

「うん。まあ、あえて言うなら・・・『友好』？」

「・・・なんだそのジャ　ブ的な属性は？」

「さあ？てか、こっちもジャ　プあるんだね。ボクはリーント  
かよく読む。」

「どうでもいいから仕事しろよ。」

「いやあ、魔法が出てないからいいじゃん。」

「・・・その魔法すら俺にほとんど説明させてただろう？」

「まあ、ボチボチ戦闘開始、かな？」

ボクはロイの言葉を華麗にスルー。

「でも、DがSと正面から当たって勝てるの？」

「いや、さすがにムリでしょ。」

ボクはリカの疑問を一刀両断する。

「……だからお前のクラスのヤツなのにドライだな。」

「ま、それだけの差があるんだよ。ボクも自分の内包魔力で  
雷<sup>カスチ</sup> 使って魔法を使うとゼロになる。」  
雨<sup>アマイ</sup>

「そうなのか？それ程スゴイ魔法か？」

「いや、普通にただの上級下位の広範囲系雷属性魔法。」

「……お前の内包魔力、カスだな。」

「うん。だからあまり使わない。ボクが使うのはマナ。そゆこと。」

ひよっとすると、それが『月』の属性の制約なのかもしれない。

もし、何らかの方法で一定範囲内の魔力をなくすとかの方法があればボクはほんの少ししかない自分の魔力で何とかしなくちゃいけない。

それに、マナの使いすぎでもボクは何故か寝て、その後は揺する

うが何をしようがまったく起きないらしい。

まあ、それを補って余りあるメリットがあるけどね。

「ま、ボクのことより目の前の試合だよ。」

「あ、Sの人間がDの人間見つけた。」

「・・・やっぱり魔法の質が違うね。」

ボク等は目の前で展開される集団魔法戦闘を見てそういう。簡単に言うと魔法では確実にこっちが劣ってる。

・・・後の要素はDが何をしようとしてるか、かな？

sideジグ

ついにDの連中を見つけた。

双方は互いを認識した途端に魔法を放つ。

こっちは移動したために詠唱をしてる時間はなかった。

そして、向こうはやはりというかこっちの動きがわかっていたかのように魔法の準備や武器を構えていつでも戦えるような状況だった。

だが、そんなものは些細なものではない。

そして、俺はヤツを見つけた。

俺はヤツに近づくと剣を振り下ろす。

「おわ！？・・・コレはSの、代表さん・・・元気です、かつ！」

ヤツ 風葉とか言うDの代表はギリギリで俺に気づいて二振り  
のナイフで俺の剣、バタードソードを受け止める。不意打ちが効か

なかったため、俺は距離をとる。

普通なら間合いが長いほうが有利だがヤツはそれにもかかわらず簡単に受け止めた。おそらく、ナイフの扱いに相当長けているのだろう。

「そういうDの代表も鬼ごっこはやめたのか？」

「ああ。今度は俺達が鬼だ!!」

そういつとヤツは手に持ったナイフを投擲してきた。

「ひれ伏せ!!」

グラビ  
加重　!!」

俺は魔法で目の前の一時的にナイフへ重さを与え、地面に落とす。ナイフが落ちたところでドンと鈍い音が響いて少しだけ土煙が舞う。

「な!?!?!重力操作系か!?!」

「まあ、な!!」

俺は今度は剣をヤツに振り下ろす。そこに魔力をこめて剣に重さを与える。

ヤツはそれを察知したのか今度は魔法で自分の機動力を上げ、一気に後ろに飛ぶ。

一瞬前までヤツがいたところが爆音のような音と共に土煙を巻き上げ、地面を割る。

「おい!?!さすがにそれは死ぬぞ!?!」

「……。」

さすがにコレは俺も予想外だ。

いつもはこんな威力じゃないんだがな。

それにさつきも下級だが魔法の展開がいつもより速く感じる。

……何故だ？

まあ、そんなことより今はヤツを叩くことだな。

「力よ、彼の者にその重圧を！！」

ブレスチャー  
重圧　！！」

そういうと俺はヤツの上の空気に質量を加える。

こうすると、相手は自分の体が重くなったように感じ、大抵はこれで動きを鈍らせると勝てる。普通なら、だ。

だが、向こうには坂崎がいる。おそらく、ヤツはDの指揮官の近くで致命的な魔法をガードするためにどこかに隠れているだろう。

「アンチ・シエル  
相殺殻　！！」

俺の魔法は思ったとおり、坂崎の六角形の盾のような魔法で無効化される。

だが、コレが俺の狙いだ。

「ランド！！今だ！！」

俺の言葉に後ろから表れたランドの凶刃がDの代表を切り裂こうとする……。

12話・OUR EVERY EFFORT DUNCE

side空志

ついにDとSが交戦した。

リオネは何故か哄笑をあげながらレクトと一緒に屍を築いてる。魔力の感じから死んではない・・・はず。

「てか、人形って人型以外にもあるんだね。」

「いや、普通の人間には使えないからな。」

「え？そうなの？」

「ああ。人形の操作は簡単に言つと意識すること動く。たとえば、俺達は右手を上げようと思えばこつする。」

そついうと右手をロイは上げる。

まあ、要するに中学校の理科だね。脳がどうたらこつたら言つやツ。

「だが、人形遣いはその過程を自分じゃなく、別の媒介、つまりは人形で行う。」

「・・・要するに、ボクが今、考えたこと、したい動作を自分の代わりに人形にさせるんだね？」

「そついうことだ。だから、かなり特殊な訓練をつむ必要がある。」

「

「でも、人型以外はムリって意味がよくわからない。」

ボクは疑問をロイに聞くけどリカが先に気づいた。

「……あ、自分がしたい動きを人形にさせる。つまり、人の形をして方が動かしやすい。それで、どんなにスゴイ人形遣いでも2、3体しか動かせないのは自分は一人しかいないから？」

「……まあ、そういうことだろうな。」

要するにこうかな？

まず、人形遣いは、自分がしたい動作を別の人形にさせる魔法。

それなら、自分は人間なんだから、人間の形をしていたほうがいいのは道理。てか、ボクは鳥になったことが無いから今から鳥のような体になっても急にはできない。たぶん、そういうことだろう。

そして、人形が数体しか使役できないのは同じ理由。

ボクは三人も四人もいるわけじゃない。それに、自分がやりたい動きは基本的に一つだけだからそんなに動かせない。

まあ、よくわかんないけどわかったことが一つだけある。

「リオネはチートだったんだね。」

「だからお前が言うな……と、言いたいが……。」

ボクとロイは画面を見る。

そこには、大暴れしてるドラゴンのような人形が写っていた。

「……あれって人形の一族なら全員できるの？」

「……さあ？」





こんな風に全力で人形を振るえる機会はそうそうないですわ。ですが、しょうがないですわ。

わたくし達に与えられた内容は敵の霍乱<sup>かくらん</sup>。

特に、両代表を切り離してからはそちらに近づけないようにとのコト。

「まあまあ。・・・どうせなら他のもいつとく？」

そういうとレクトはいつも腰に下げているポーチのようなカバンからいくつかの人形を取り出します。

コレがわたくし達の使う人形。普段はこのようにフィギアのような形ですが、わたくしが魔力を流して使用するときには大きくなります。

「整備は完了してますの？」

「もちろん。じゃ、『レローネ』戻す？」

まあ、この際ですし。

「頼みますわ。では・・・コレにしますわ。」

わたくしはオオカミの人形を五つほど取り出します。

そして、それを地面に置く并使用するために魔力を流します。

すると、オオカミの人形は3メートルほどの大きさまでになります。

「では、お行きなさい!!」

そういつと狼達は音も無く森の中を駆け抜けていきました。

「珍しいね。リオちゃんが『フェーン』を選ぶとか。いつもは『派手に行きますわ!!』とか言つて『レローネ』とか『リザット』を選ぶのに。」

「いえ。最近、人形の数をそれほど動かしてなかったの。」

要するにサボタージュですわ。

「……集団戦法もがんばろうよ。」

「『フェーン』は結構、操作が大変ですわっ……ぶつかりそうでしたわ。」

狼型人形『フェーン』は高い機動力、そして連携攻撃を重視したタイプの人形。

そのため、コントロールが地味に難しい。

高速で動く人形を何体も動かさなくてはなりませんからね。ですが、この疾走感もいとこの頃思いましたわ。

そのうち盗んだ盤ボードで走り出したくなりそうな気がしますわ。

「普通に犯罪だから。それに盤じゃなくてバイクだし。」

「レクトはいつからわたくしに口答えができるようになったのかしらっ。」

「……すみません。だから『フェーン』をこっちに寄こさないで!」

「謝って済むのなら警さ・・・あ。」

・・・やってしまいましたわ。

「・・・リオちゃん？どうしたの？」

「・・・数人が『フェーン』と自動制御中の人形達の包囲網を潜り抜けましたわ。」

sideアスカ

「あ・・・敵数人がこっちに接近。やっぱ二人で前線維持はムリでシヨ。」

「まあ、バカザハの考えだしね。」

なら、しょうがない。

まあ、そのために撃ち漏らしをこっちで適当にさばいとくんだけどね。」

「でも、地味に数が多い。たぶん・・・4、5人。しかも全員こっちに。」

「・・・こっちは？」

わたしは黙って自分をさしてから杏奈をさす。

そう、ここには残念なことに二人しかいない。

理由としては撃ち漏らしなんてあの二人なら一人二人だろうし、それにここは一番どうでもいい場所。代表達からはかなり離れたところにあるから誰も狙わないだろうと思って少なくともしたんだけど・・・

。

「裏目に出たわけだ」

「ドンマイ」

わたしは杏奈の肩をバシバシ叩く。

「いやいやいや!? アンタの立案だよね!?!」

「・・・そんな過去のことは忘れた」

「ニヒルに言っても誤魔化されないよ!?!」

「まあ、そんなわけで敵は後、数分でここに到達」

「ちよつと!?!」

杏奈が慌てる。

でも、慌てない慌てない。

わたしは背負っていたギターのケースのような袋から銃身の長い魔法の銃、所詮は魔法式の狙撃銃スナイパーライフルを取り出して構える。

この銃には遠くの敵を狙うためのスコープがついていない。  
理由は簡単。

「我、全てを射抜く目を持って汝を倒す。

ホークサイト  
鷹の目の照準」

わたしの目が遠くを見つめる。

そこには人形の目を掻い潜ってきたSの生徒が数人。わたしはそ

の一人に狙いをつける。

今のわたしには相手との距離、銃の向ける方向がわかる。

そして、引き金を引く。

魔法弾の特徴は発射音が出にくいこと。

その変わり、魔力を弾丸にするため一日に撃てる数が少なく、狙撃銃は弾丸が安定しないと途中で霧散してしまうとメリットの割りにデメリットが結構ある。

でも、そんなものはわたしにとっては些細なもの。

そして、敵一人の後頭部に魔力の弾丸が当たって気絶させる。

何が起きたのかわかってないところにもう一発。

いつの間にかパニックに陥っている敵に容赦なく弾丸を撃ち込む。でも、さすがに三回目は当たらなかった。

敵は落ち着いたのか今度はジグザグに動いてこっちに向かってきた。

「あちゃ〜。もうムリ。五人中二人はやつつけたよ」

「へ〜さすが」

感心した顔で杏奈が言う。

でも、後、三人もいるんですケド？

「ん〜・・・こりゃ、わたしもガチでやらないとね」

そういうと杏奈は一振りのナイフを取り出す。

柄尻に鈴が付いてるヤツ。

そして、それを振る。

シャン・・・シャン・・・シャン・・・。

心地よい涼しげな音が響く。  
すると、変化が起きた。

「……ありがとう。じゃ、行って!」

side 空志

「おい!? あれは!?!」

「おお〜。これは面白い。『友好』、ね」

ボクは目の前の光景に結構驚いている。

スクリーンには杏奈さんの近くをいろいろな動物が走り歩いている。  
リスに鳥に猫、狼、イタチ、狐。

そして、杏奈さんが二言三言言葉を交わすと動物たちは蜘蛛の子を散らすように散っていった。

ここに来てからいろいろと知ったことがあるけど……。

「まさかの人間以外の動物と心を通わせる属性だね」

「……でも、動物がみんな言うことを聞くの?」

「違うよ。アレはどっちかって言うと相手の言うことを理解する魔法だね。逆にこっちのことも理解させることができる。さすがはフレンドリーな副代表を目指してるだけはある」

そして、動物たちは敵のところに行くといろいろと妨害を始めた。  
木の実を落とすとか噛み付くとか……狼とか狐は怖い。

またまたSの方々はパニック。

そして、そこを狙ってアスカがまた狙撃。

戦闘はすぐに終了し、動物たちは杏奈さんとアスカのところに戻っていった。

「この組み合わせは凶悪だね」

「・・・かなりワンサイドゲームだったぞ？」

sideアスカ

「杏奈すごい！こんなことができたんだ！？」

わたしは近くに寄ってきたリスの頭をなでつつそういう。

「うん。全員、わたしのトモダチ。さっき適当に歩き回って協力してくれるって子を探してたの」

そう言いつつ杏奈はポケットから動物用の餌を取り出しては周りの動物たちに配っている。

何だか絵になるね。

「でも、何でこんなにスゴイ特技を持ってるのにDなの？」

これは普通にBぐらいは確実だ。

ましてやこんなに動物を使役するのとかすごすぎる。

「ん・・・わたしはランクに興味ないし。まあ、ここに入ったのは競争率高いところなら何かすごい魔法の文献とかあるかなって思ったただけだから」

・・・なんかカッコイイ！？



「姐御と呼ばせてください!!」

「……取り合えず普通にトモダチで」

まあ、ボケはここまでにして。

わたしはこのことをクラスの全員に伝えて、引き続き警戒するように指示を出しておいた。

sideジグ

「ランド!!今だ!!」

完璧な不意打ち。

Dの代表はまったく気づいてない。

だが、意外な人物がここで声を上げた。

「カザ八君!!後ろ!!」

「え?おっ?」

そして、ヤツは坂崎に言われたとおりに後ろに後ろにナイフを切りつける。

そして、そこには影から急に飛び出てきたランドがモロにナイフの一撃を腹にくらった。

「がつ!?!」

腹を押さえてうずくまるランド。

だが、何故坂崎は気づいた？

「風葉殿！？大丈夫か！？」

姿は見えないが声が聞こえる。

「……まだ護衛のやつがいたのか……………」

「……何故、気づいた？」

そういつと坂崎は近くの木陰から出てきた。

「え？だって、この子、リュウ君と同じ『闇』の属性でしょ？リュウ君がよく影から影を移動して後ろから攻撃するときね、びみよ〜に影が……………」

坂崎はワケのわからんジェスチャーを交えながら説明する。

「でも、リュウ君よりわかりやすかったよ。」

「な、ぜだ？俺は『影』の属性だ。俺はこれでも学年一の影の魔法使いだぞ！？」

そう。俺もこいつが奇襲をかけて失敗したところを見たことが無い。

だが、坂崎は些細な変化を察知してそれを伝えた。

「……………」こいつはただのアホの天然だと思っていたが……相当に危険なヤツだ。少なくともかなり戦闘慣れしてる。

こいつから潰すべきか？

いや、代表を狙って一気にかたをつけるか？

俺が一瞬の迷いを見せたそのとき、Dの代表が動いた。

だが、それはそのほうじゃなく、ランドのほうだった。  
ランドはさっきのダメージから立ち直っていないのかそこから動かない。

「チッ！」

その力もって重圧の盾となれ！

ヘヴィー・ウォール  
重力の障壁　！！」

ランドの周りを細い線が円を描くようにボコツとへこむ。

異変を察知したDの代表は無理矢理にバックステップを踏んで思い切り後ろに跳ぶ。

「・・・コレって触れたらヤバイ系か？」

「ああ。当たった瞬間にその部分が地面に叩きつけられるようにして落ちる。・・・たまにコレにモロに突っ込んで腕の骨を折ったやつもいる」

「死ぬ！？この防御魔法、エグ過ぎだろ！？むしろ攻撃魔法！！」

「まあな。そして、お前等は俺を倒さない限りこの壁を破壊することはできない！！」

そういつと俺は再び剣を敵に叩きつける。

重力の魔力が掛かった剣は、ヤツに避けられて地面をえぐるだけに終わる。

「何だよ、そのふざけた威力は！？」

ヤツは両手に持ったナイフを俺に投げつけると更に懐から一本の

ナイフを全て微妙に異なるタイミングで投擲。

「それは、魔法の前では何の意味もない!!!」

剣に掛かっている魔力を発散させ、一時的に俺の周囲を重力で重くする。

すると、ナイフは地面にほとほと落ちていく。

「風よ!!!集いて彼の者にその力を見せ付けろ!!!」

シャイロ・エア  
渦巻く風 !!!」

風が渦を巻きながら一本の槍のように俺に迫ってくる。

俺はその魔法を避け、剣で攻撃する。

ヤツは避け、魔法を放つ。

そんな単調な動き、だが、気を抜けば一撃でやられてしまう。  
決戦はまだまだ始まったばかりだ。

side 空志

「・・・地味。つまんない」

「いや、そんなストレートに言っちゃダメでしょ」

「・・・お前もそう思ってるんだな？」

ロイがボクに白し視線を投げってくるけどボクは全力でスルー。

まあ、リカが言うとおり目の前のスクリーンに映し出されてる代表VS代表の頂上決戦はものすごく地味だ。カザハはナイフを投げ、あるいは魔法で攻撃。ジグは適当に叩き落す。そして、魔法。カザハも魔法orナイフ・・・って感じで見飽きてきた。

「まあ、そういう余裕が向こうにはないんだけどね。」

「どういうことだ？」

「うん。まず、S代表のジグはかなり消耗してる。」

「は？どこかだよ？」

「目の前ではごく普通に戦ってる二人の姿。」

「あの、防御魔法は、常に魔力の供給をしなきゃいけない型。つまり、少しづつだけと確実に消耗してるよ。たぶん、他にもあったんだろうけどカザハの急な動きに展開が速いほうを選んだんだろうね。」

ボクは ツクヨミ 月詠 の解析結果をそのまま言う。

そして、今の状況はカザハは特に何の制約もない。あるとすれば負ければその瞬間にDの負けが確定する。

でも、それは向こうも同じ。ジグがやられればランドは怪我をしていて武器がダメ。魔法なら何とかなるかもしれないけど彼の周囲にはDの生徒が何人かいる。

いつの間にかみんなはカザハとジグだけを戦線から離して暴れさせていたらしい。

「でも、普通に考えてこんな持久戦でもカザハが不利だ・・・みんなは何を考えてるんだ？」

ボクは目の前での戦いを見ながら言う。

リカとロイもただ、首を傾げるだけだった。

side風葉

「はっ！」

「うおおおおお！！！」

二つの声が響き、そのたびに周りで木や地面からすさまじい轟音を響かせる。

「フロウ・エア吹き抜ける風　！！！」

「グラビ・ブレット重圧の弾丸　！！！」

二つの魔法が激突。一瞬だけ拮抗したかと思うと空間を歪ませる重力の弾丸が風を貫いて俺に迫ってくる。

俺はずっと発動させたままのフェザー・ステップ風の舞で高速移動して避ける。

この魔法は完全に避けられないかすっただけで体勢を著しく崩される。

その隙に魔法が付与されたあの大剣で叩き斬られたらそれだけで俺達の敗北が決まる。

向こうはどうも重力操作系の属性だが、射出系統の魔法しかできないらしい。いや、空間系の魔法を放つ暇が無いんだろう。

もしもここで空間系の魔法で術者以外の重力を増加なんてされたら俺は確実に負ける。

だから、俺はそんな暇を与えない。

こっちは向こうが対処できないような攻撃をやり続ければいい。

俺はナイフを何本も投擲する。

だが、それは簡単に避けられる。

「そんな攻撃が当たるか!!」

だろうな!!

「エア・スティング風による斬撃　!!」

ジグの周囲の風が吹き荒れる。

その風は小さな竜巻のようになり、空を切るだけのはずのナイフは軌道を変更してジグに再び襲い掛かる。

全方位のナイフ+魔法の攻撃なら何とかできるはず!!

「!?!?!はっ!!」

一瞬だけ驚いた表情をするとヤツは剣に纏わせた魔力を周囲に広げ、ナイフを地面に叩きつけた。

風のほうもやんでしまった。

だが、ジグのほうも何かに耐えるように歯を食いしばっている。

「.....ぐっ.....重い.....」

「.....何っーヤツだ」

こいつは自分に重力が掛かるにもかかわらず剣に込めた重力の魔法を自分の周囲に展開して俺の魔法を回避しやがった!!

「.....は!.....お前の魔法は俺には効かない」

「.....かもしねえ。」

それはそつだ。

俺は自然元素操作系の魔法使い。

ジグは空間操作系の魔法使い。

どっちが強い魔法使いなんかなんて比べるまでもない。

『風』の属性は『火』『水』『土』の中でも地味に強い。

簡単に言くと攻撃が見えないからだ。

不可視の攻撃は強いに決まってる。

だが、空間はそれを遥かに超えている。

見えない上にこの世界の法則に近いものを操っている。

こっちはただの自然現象を操る程度。

法則なんかには勝てるわけが無い。

「でもな・・・俺は負けたくないんだよ。ここで負けたらあいつを殴れない。それに・・・」

『ランクが低いからSに何かされても文句を言えない。やられても勝てない。そう思ってたんですけど・・・』

『ん〜・・・アレ？なんかボクみたいな詠唱の知識がカスでも別のことに秀でている。それを伸ばせばSにも勝てる？』

『いや、そこまでは言いませんけど・・・』

「・・・『勝てるよ』あいつはそう言ってくれた」

だから、俺達はそれに応えなきゃいけない。

いや、応えたい！



「だから、それを現実にする！！」

「・・・なら、俺の全力でお前を潰す！！俺の前にひれ伏させてやる！！」

それは絶対の力を操る術<sup>すべ</sup>！！」

向こうは突然攻撃をやめて詠唱を始めた。

おそらく、本当に上級の魔法で俺達をボコボコにする気なんだろう。

「その勝負に乗ってやる！！」

風よ吹け！！」

あいつは俺に始めてあったときにこうも言ってくれた。

『風にもいろんな種類があるよね。吹き抜ける風とか渦巻く風、鋭い風、ボクがぱっと思いつくのはコレだけさ、他にもあるよね？』

『ここからは受け売りになるんだけどさ。負ける風を吹かせるより、勝てる風を巻き起こせばいいって』

『勝てる、風？』

『うん。ボクもよくわかんないけどね。まあ、『風の戦女神』の異名を持つ人に教えてもらったんだ』

『風の戦女神』。

風の魔法を使う最強の前衛系の魔法使い。

その手に持つ刀で無双の力を発揮する最強の剣士。

一人でどこその国を滅ぼしたとか魔物軍勢に相手に一人で立ち向かって無傷で帰ってくるとかさざまな逸話を持つ。

そんな人と何故知り合いなのかは知らないがソラはその教えを俺に教えてくれた。

俺にもコレの意味はよくわからない。

でも、なんとなく何をすればいいのかはわかる気がする。

「それは何者にも犯すことのできぬ領域!!」

「それは吹き荒れる風……」

風にはいろいろある。

「優しい風、舞う風、轟く風、猛り狂う風……」

「汝、その力の前に立ちはだかるもの!!」

そして、俺が今必要な風は……。

「愚かなる者にその報いをつけさせたまえ!!」

「我、望む風は『絆の風』!!」

全員で勝つための嵐のような風!!

「グラビ・サイス 重圧の鎌　！！」

「ピアッシング・エア 貫き穿つ風　！！」

魔法が同時に放たれる。

向こうは重力という不可視の大鎌で切り裂こうとし、こっちは相手の魔法を貫こうと風の刃が周りをも抉りつつ突き進もうとする。

そして、拮抗。だが、次の瞬間には俺の魔法が押され始める。

「はっ！！俺の魔法に勝てるわけが無いだろう！！俺の属性は『加重』！！お前のような汎用魔法じゃなくて空間系の中でもかなりのレア属性だ！！坂崎は近くににいるのに何もしない。おそらくは魔力切れだろう！？」

「んなことわかってんだよ！俺のほうはごく普通の『風』だ！！俺は確かに弱い！！絶対に勝てないだろう！！……だがな……」

俺は更に手に持った最後のナイフに魔力を込めて地面に突き刺す。

「俺達ならどうだ！！！？？」

その言葉と同時に周りに散らばった俺のナイフが呼応するかのように光りだす。

そして、ナイフの柄から魔力の線ラインが伸びて一つの魔法陣を作り出す。

「な！？いつの間に！？お前はナイフを適当に投げただけのはずだ！！」

「……私を忘れてます」

「!？」

忍が俺の横から気配も無く突然現れる。

「俺は確かに適当にナイフを投げただけだ。だが、それを忍に頼んでお前を困むように、俺ん家でよく使う魔法陣を描くように配置してもらったんだよ!!」

「な!？だが、コレのひとつひとつにそれなりの魔力が必要なはずだ!!お前の魔法力でそんなことができるわけが無い!!」

そう、何かを媒介にして任意のタイミングで魔法陣を展開させるにはその媒介にそれなりの魔力がある。

俺がばら撒いたのはざっと見て百本近い数十のナイフ。もちろん、俺がこのナイフ全てに魔力を込めてたら今の魔法を放つ分の魔力なんて無い。

「……本来、魔法陣は数人で戦術系の魔法を放つものだ。ソラが使うのは確実に例外中の例外」

「何が言いたい!？」

「俺は、Dの全員に頼んで魔力を込めてもらったんだ。」

「!？」

「確かに一人ひとりなら消費が激しい。だが、全員で負担することによって極微量の魔力で込めた」

それなら全員に何の影響も無い。

「簡単に言うと、お前の負けだ！！・・・デライブマジック派生魔法起動！！」

俺は魔法陣を起動させる。

すると、魔法陣が輝きを強くする。

デライブマジック派生魔法。これは俗にコンボの魔法とも言われる。

類似した魔法を詠唱の中にとりどころどころ組み込んで時間差で多段攻撃を行う技術。ホントにスゴイヤツは最高で20ほど。

だが、俺たち学生ではそんなにできない。いいトコ5つほど。

そこで、俺達は二段階にとどめて今の上級下位魔法を一気に真言級の魔法にまで持つてくことにした。

「ミリオン・エア万の風の如く！！」

急に風の動きが変わる。

シャレにならない暴風が周りの木をなぎ倒しつつその猛威を發揮する。

「く・・・だが、大きくなろうとこっちが負けるわけが無い！！」

「・・・貴殿の魔法の制約は複数の物体に重力をかけられない、ですね？」

「！？」

「・・・私は貴殿のクラスに潜入してたんですよ？それを知らないいとも思ってたのですか？」

そう。コレが俺達の全力。

忍には本当に助かっている。こいつがいなきゃこっちはすぐに負けてた。

俺は更に魔力を込める。

「うおおおおおおおおおお！！！！」

そして、周りの木が音を立てて地面から抜けて空を飛ぶ。近くの石や岩が宙を舞う。

俺はこの魔法の制御に死ぬほど膨大な魔力を使っている。

俺達をふっ飛ばさないように。そして、それをジグに向かって落下するようにする。

「な！？」

「いくつかならできるらしいがこんだけありゃムリだろ！！」

そして、地響き。

俺はついに魔力で維持することが難しくなってきたために魔法を解除する。

そこには倒木の山。

だが、死んではないはずだ。

微かだが魔力を感じ取れる。

「っへ・・・俺の勝ちだ・・・」

「まだだぜい！」

急に後ろのほうから声が聞こえた。

そこには敵指揮官のランド・スリザンがいた。

だが、敵はまだダメージから回復してないのか足元がおぼつかない

い。

「ヒヒヒ・・・代表がやられたところで俺が倒されなきゃ、まだこの戦いは続いてるんですぜ！！まあ、今のアンタは魔力がほぼゼロどころか使いすぎで倒れる寸前。」

そういつと影がうごめきだす。

おそらく、魔法で逃げようとしてるんだろう。

「ああ、よく知ってる。お前が逃げればそれで俺達のクラスが負ける。そんな状況でお前を逃がすとも思ったのか？」

「アンチ・シエル  
相殺殻　！！」

すると、ランドの周囲に六角形の盾が展開される。

「アンチ・エリア  
相殺結界　！！」

そして、その盾を媒介に魔法を無効化する結界が張られる。  
「コレでランドは逃げれない。」

「ふっふっふ。わたしも忘れてるよ。」

「・・・そして王手詰みです」

いつの間にか結界の中にいた忍によってモロに首筋へ手刀が放たれる。

うっとうめいたかと思うと体が力なく地面に横たわる。

そして、入れ違いにブザーのような音が響く。

『戦闘終了!!各自武器を収め、戦闘を中止!!・・・ランド・スリザンが戦闘不能に陥ったため、この戦争はDの勝ちとする!!』

「「「「・・・つしゃあああああああ!!」」」」

一瞬の沈黙、そして大きな歓声が聞こえる。

「・・・夢みたいだな」

「でも、コレはほんとだよ」

「・・・代表、大丈夫ですか？」

「まあ、な」

そして、ここにDの全員が集まってくる。

俺はもみくちやにされながらも笑って、Dの全員とバカ騒ぎした。

『ま、そんなわけでこっちに戻すよ』

そういうと俺達の周りが光り輝く。

俺達が次に見たのは歓声に包まれる競技場だった。



### 13話・WE LATER

side空志

「……………マジで？」

「おつしゃあああああああ！！！！」

「いえ〜い！」

ボクは雄たけびを上げてリカとハイタッチする。

周りの生徒も最初、何が起きたのか理解できてないけど徐々に理解し始めたようだ。

急に競技場にいる全員が歓声を上げる。

そして、競技場に二つのクラスが光と共に転移された。

転移してきたDのみんなはいまだに歓声をあげ、逆に敗れたSは茫然自失。

でも、それはすぐに破られた。

「こんなの卑怯だ！！」

その言葉に競技場がしんと静まり返る。

みんなの注意がその声を発した生徒、Sの生徒に向く。

「向こうはS相当の実力、いや、それを遥かに上回る三谷がいたんだぞ！？どうせ向こうは三谷が何か特別な訓練なんかしてDの戦闘能力の底上げしたに違いねえ！！」

その言葉にそういえばそうかもとか周りざわめき始める。

ある程度予想はしてたけど……。

「・・・シバく」

「いやいやいや!? ダメ! 絶対!! 全力で!!」

ボクはキレたり力を必死に押しとどめる。

だが、競技場のほうでも一触即発の空気になっていた。

「負け惜しみ!? 自分たちが負けたからって言いがかりをつけな  
いで!! それに三谷君はわたし達の魔法の実験台にはなってくれた  
けどそれ以上のことはしてない!!」

「だが、それを誰が証明できる!?!」

「そ、それは・・・」

「なんだかんだでお前等は三谷がいなくて何にもできないんだろ  
!? それに最後のほうで魔法陣の魔法が使われたらしいな!?!」

「・・・ああ。俺がした。アレは俺の家で使う設置型の魔法陣。  
主にエモノを捕獲するときを使う罾系トラップの魔法を改変して作った」

「ハッ! んなもん、正直に三谷に教えてもらったって言えばよ!!」

「違う!!」

「・・・レクト! 人形を!!」

「いやいやいや!? みんな落ち着いて!!」

やばい・・・ホントに殺気立ってる。

先生たちは急いで事態の收拾に取り掛かろうとする。

「いい加減にしろ!!」

そんなときだった。

意外な人物によってその場は静まり返って、みんなの動作が止まった。

「だ、いひょう?」

Sの代表、ジグ・フロルドだった。

ボロボロの体を上半身を起こして周りの人間を一喝していた。

「・・・風葉・シルファリオン、だったか?」

「ああ。そうだ」

二人は毅然と互いを見る。

「俺達の完敗だ」

「な!?代表!!こいつらは!!」

「こいつらはできること全てをやった。俺達はこいつらを舐めすぎて負けた。それだけだ」

「・・・だが、ひよつとすると、そっちが言うように俺達はソラに特別な訓練を受けてたかもしれないぞ?あいつは確かに詠唱が力スだがふざけすぎた魔法を使う」

そういつとジグはボクのほうを向く。

「だが、アレは紛れも無くお前の魔法だろ？」

「・・・いや、アレは俺達の魔法だ」

「そうだったな・・・俺も少しばかり魔力が高ただけで調子に乗ってたようだ。ロイさんのように・・・」

「はっはっは。耳が痛い・・・」

ボクは本当のことだと思ったから何もフォローしない。  
実際そうだしね！！

「散々貶してすまなかった。この通りだ」

そういつと頭を下げるジグ。

Dのみんなはその光景に目を見開いて驚いている。  
いや、ここにいる全員が驚いている。

「で、でも・・・！」

「ハア・・・いい加減に気づいたらどうだ？アレは三谷が放った魔法じゃない。俺達はDの魔法でやられたんだ」

「ッ・・・！」

「だが、俺達がルールが細かく決められていないことを理由にいろいろな手を考えたのも事実だぞ？」

「そんなものは些事だ。確かに数人特殊な武器を使っていたが、ただそれだけだ。武器ごときで勝敗は決まらない。これは俺達の慢心、そして、お前達、全員の力がぶつかった結果だ……だ  
が」

そついうとジグは体を起こしてポロポロの体でカザハの前に行く。そして、齒をむき出しにして獰猛な笑みを浮かべる。

「俺は……いや、俺達は負けず嫌いでな……今度はこつちから戦争を申し込みに行くかも知れん」

「死刑宣告！？絶対に勝てねえよ！？」

Dはある意味宣戦布告とも取れるジグの言葉にムリだ！！死ぬ！！とか悲鳴を上げ、逆にSはそうだ！！今度こそ！！みたいなコトを言ってる。

「おい、また戦争しそつだぞ？」

「いや、コレは違つでしょ」

ボクは目の前で繰り広げられる舌戦、というかただのケンカの売り合いを見て言う。

「雨降つて地、固まる？」

「まあ、そんなトコだろうね」

ボクはどこか楽しそつに言い合う二つのクラスを微笑を浮かべな

がら見ていた。

side 風葉

↳ 数日後

「・・・お前、バカだな」

「・・・何かごめんなさい」

「な〜な〜、俺さ〜これ作ってみたいんだけどどここんとこの機構がわからないんだよな」

「ん？オレツチに見せてみ・・・ああ・・・コレはこうすんだ〜」

「いや、そこはこうしたほうがいいと思う少なくともログさんはこうしてた」

「ソラ、お腹すいた」

「・・・やりますね」

「・・・そつちこそ・・・王手だせい？」

「お菓子焼いたよ〜」

「クッキーですか？」

「どうしたらこんなに速く作れるの？」

「う〜ん・・・気合？」

「クマ五郎、ジョン、タマ、ぼち……コレ上げる」

「……鳥にその名前は無いと思っ」

「って、何でここにSの連中がいる!？」

「」「」「自習中だから?」「」

いや、待て、いろいろとおかしすぎる。

今日は週があけての初日。つまりは月曜。金曜の戦争から三日経った。

ここで確認しよう。俺達は先週まで関わる事が無いもの同士だったはずだ。

それが何で俺達に魔法を教えたりくれたり逆に魔法工学聞きに来たり、将棋さしたり、坂崎のクッキー食いに来てんだ?

「いや、Dもなかなかにやると思ってな。……そこはこうしたほうが無駄が無い。発動時間<sup>ラグ</sup>も少なくなる」

「おゝなるほど。」

「何で詠唱の魔法構成を教えながら答えてんだよ!？つか、ソラ!！お前は教えてもらうか魔導工学教えるかどっちかにしろ!！」

「まあまあ。そんなに怒りなさんな」

「……王手です」

「おい!？忍とランドは何で将棋してる!？」

「・・・ランド殿と私は戦闘スタイルが似ている」

「そうそう。んで、まあ、拳で語り合う関係い？」

「・・・好敵手です」

「まあ、そんなにツンケンしないでいいじゃん。お、コレうま！  
」？

「・・・アスカ、お前はマツタリしすぎだろ？」

何故かものすごく仲良くなってしまった。

いや、別に悪いことじゃない。むしろかなりいいだろう。

それに、俺達はSに勝ったことで一目置かれるようになった。更には俺達に触発されて下位ランクのクラスが下克上したりしようという空気が地味に広まりつつある。

俺達は初めてにもかかわらずSを倒したってコトで先輩たちからいろいろとアドバイスをお願いされたりと時の人になりつつある。

「まあ、ここも中々に面白いことをしてるな。俺達はひたすら魔法の練習だがお前たちはそれ以外のことに力も注いでるんだな」

そう言いつつレクトがなんかの設計図を描いてるところを見たり、リオネが暇をもてあましたのか筆記用具で簡易的な人形を作って操ったり、変な名前を付けられた動物達と戯れる杏奈を見て言う。  
だが、こいつらは別に勉強熱心だからやってるわけじゃない。  
むしろ勉強がイヤだから自分の趣味に走りまくってるだけだ。わ  
き目もふらず・・・。



「それは買いかぶりだ」

「そうか？だが、俺はこの空気が結構好きだぞ？」

周りを見ると、そこにはぐーたらなDの生徒共。

「……………コレのどこがいい？」

「Sは結構ピリピリしてるからな。こう、のんびりした空気であ  
だが、やる時にはやる。そんなのがいいんだろっな」

「なるほど。……………そして、お前はどこから湧いてきた？」

俺は突然出現したロイにそういう。

「別にいいじゃねえか」

「あ、ロイ君だ。クッキー食べる？」

「イタダキマス！！」

ロイは坂崎のクッキーに突撃していった。

……………ホントに何しに来た？

「……………つか、ホントにこんなところで得られるものがある  
のか？」

「あるぞ」

即答かよ。

だが、何がある？

「・・・わからん。ハイ！その女子！！ボクにこの詠唱を教えて！！」

「はい？いいですけど・・・？」

「ソラが浮気したあああああああ！！」

「突然何！？キレる十代！？ちよおおおおおおお！！？」  
月ツキ  
守モリ！！！！

「やはり紅茶はダーズリンに「リオちゃん、オレツチ暇」・・・  
いい加減にそう呼ばないで下さる！？」

「おお〜今日も夫婦漫才絶好調だね〜」

「プリンも作ったよ〜」

絶対無い。  
ありえない。

「目を覚ませ。ここはアホの集まりだ」

「バカザハも含めて」

「黙れ！！」

俺は杏奈に魔法を放つ。  
だが、向こうも避ける。

「わたしに魔法を当てようなんて10分早い!!」

「短っ!?!もはや差がねえよ!?!」

「どっちが勝つと思う?」

「」「副代表の杏奈」「」

「この野郎・・・お前等もやる!!」

「さて、始めましたクラスVSカザハのデスマッチ。解説はボク、三谷空志と・・・」

「ソラの未来のお嫁さんのアンジェリカ・シエルスと・・・」

「料理長の坂崎鈴音でやるよ」

「では、わたくしは代表のほうに入りますわ!!レクト!!」

「え〜オレッチも?」

「おおっと!?!ここでいきなりリオネ&レクトの夫婦が乱入だ!」

「夫婦ではありませんわ!?!」

「・・・じゃ、バッテリー夫婦で」

「根本的などころを変えてくださる!?!」

「わたしの後ろに立つな!!」

「アスカちゃんの後ろには誰もいないよ?」

「ううん。一度でいいから言ってみただけ」

既にこのDの教室は混沌と化していた。

何故か俺と杏奈の戦いがクラスで勃発。

Sの生徒は珍しそうにこのアホな光景を見ている。

ま、実際アホだしな。

「お前のようにクラスのヤツ全員から慕われるように俺はなりたくない・・・」

俺の耳にそんな声が聞こえた気がした。

「バカザハ!!下克上というものを教えてあげる!!」

「いい加減に俺をバカバカ言うのはやめろ!!」

いつもと変わらないDの教室。

ただ、そこにSの生徒がいるだけ。

俺達はただ、やればできるってことを証明したかっただけだ。

「よし。俺も参戦する!!」

「おお!?ここでジグ選手が乱入!!杏奈チームに入ったぞ!？」

「敵かよ!？」

「グラビ重　！！」

「勝てるわけがねえ！？」

「ぎゃあああああああ！！！？？」

「ここでカザチームが大打撃だ！！！」

ソラがいなけりや俺達はこんな風にふざけていなかっただろう。まあ、あいつなら別にそんなことは無いとか言いそうだけどな。だが、あいつのおかげでいろいろなことが変わった。

「なら、こっちは最終兵器を投入する！！ソラ！！」

「・・・え？ボク？」

「昨日、またシエルスが首筋にキ「サー・イエツサー！！」よし

「おい！？卑怯だぞ！？」

「ボクは命が惜しい！！ホムラドリ焰鳥　！！ライエン雷燕　！！」

「負けるか！！グラビ重圧　！！」

「その魔法を叩ツ斬る！！ツキヨ月夜　！！」

「・・・それは卑怯すぎる！？」「」

だが、別にSをやったからそこらへんを威張り腐って歩いてない。すげえことができるからって周りをバカにしていない。



そして、いつものような授業を受ける。

だが、前みたいはどこか投げやりに授業を受けてる感じはない。むしろ、積極的にやっている。

先生は少し驚いた表情をするがそのまま進めていく。

「今日もいい日だな」

変わらない・・・だが、ほんの少しだけ変わったこの日々がこれから始まって、俺達にいろいろなものを与えてくれる予感がした。

## 14話・GOOD NIGHT

時刻は深夜……。

エレオール魔法学院の空には三日月が輝き、周りはとても静かだ。そして、その屋根に複数の黒い影が見える。

影は声も出さずにうなづきあうと、音も立てずに屋根を走る。

だが、その足が止まる。

目の前に突然少年が現れたためだ。足元には白い子猫が寝そべっている。

「こんばんわ。こんな夜に歩いてたら深夜徘徊で寮母さんに怒られるよ。この人、地味に強いんだよね……」

髪の毛が少しツンツンで首からゴーグルをかけた平凡な顔立ちの少年。

影達は無言で片手半剣を取り出す。

自分たちは完全に気配を消していた。

だが、それにもかかわらずこの少年は異変に気づいた。

普通に考えて危険な存在であることは間違いない。

「で、何しに来たの？」

そういつた瞬間に少年の背後に魔法陣がいくつも展開される。

影達は何のリアクションも取らないが内心では驚いた。

こんな子供がこんな魔法を使うのはありえない。例え、ここが魔法学園だとしても……。

更に警戒する影達。

そして……。



「ソラ〜!!」

「あぎゃぶ!?!」

「「「「「「」」」」」」」

一人の少女によって雰囲気がぶち壊された。  
その少女は少年に飛びつくとそのまま押し倒した。  
その隙に影達は一瞬で踵を返して逃げた。

「あ、ちょ!?!待って!!」

古今東西、待てといわれて素直に待つ人間はいない。

side 空志

「・・・逃げられた」

「ん?どうしたの?」

「いや、別にいいんだけどさ」

ボクはもはや日課になりつつある、天体観測的なコトをしていた。  
まあ、コレにもちゃんと理由があるんだけどね。  
まあ、そんなときにボクは見知らぬ魔力を発見。  
偶然にもこっちを通ってくるみたいだったからボクはそのまま待ち伏せていた。

黒装束のいかにも暗殺者っぽい服装の人だったからボクはすぐに  
臨戦体系になったけどリカがボクの背中から押し倒した瞬間に逃げ  
た。そして、レオは危険を察知して逃げる。

ボクはリカが引つ付いたまま体を起こして胡坐をかく。  
そして、リカはいつものようにボクの隣にちょこんと腰掛け、レオを抱く。

「で、何で魔法陣なんか展開してたの？」

レオをなでつつそう聞いてくる。レオは眠いのか目がショボショボして静かだ。

「いや、怪しい人がいたからさ。適当にボコしてサリナさんに突き出さなきゃと思ってさ」

「ふん」

リカは興味もなさそうに言う。  
・・・少しは心配とかして欲しい。

「ソラなら大丈夫！」

「まあ、そうなんだけどね」

確かにボクならそこらへんの人ならフルボッコだ。

ちなみにボクが本気を出して勝てるのはこの学園にはいないと思う。

それこそ教職員の方々もボクが全力なら勝てない。

というか、前に実技の授業で一回だけボクが先生と手合わせしたらボクが一方的に勝った。

それ以来、ボクは実技での魔法陣の使用を禁止されて、今じゃただのザコ。

ちなみにリカは魔法ができない・・・いや、使えないから見学。

吸血呪なんて使ったら大変なことになるからね。

「でもさ、ソラって何でいつも月を見てるの？」

「え？・・・そういえば言っていなかったっけ？」

確かあのホレ薬事件の寮祭の翌日に・・・  
ないや。

「・・・今度みんながいるときにまとめて話すよ」

「え〜。なんか意味深・・・」

いや、別にそんな大した理由・・・かな？

どうせみんなに説明するって前に言ったんだしそのときでいいや。

「で、何か用があってボクのところに来たんじゃないの？」

「ううん。特に無いよ？」

・・・さいですか。

そうだろうと思ったよ。

いつものことだからボクは屋根に寝転がる。

「ボク、今日はここで寝るから」

「風邪引くよ？」

「そうならないようにボクはコレを持ってきたんだよ」

ボクは首にかけたゴーグルを示す。

このゴーグルにはボクが浮遊盤フライングボードを使うときのために上空でも寒くならないよう、身につけている人の周りの空気を適温に保つようにする術式と気圧を一定に保つ術式、高速移動したときに風をモロに受けないようにする術式が組んである。

だから、ボクは浮遊盤フライングボードでどんな上空にいても大丈夫だし、高速で移動しても体感温度が下がらない。

とにかく、これを身につけてれば回りは適温に保たれるから別に問題は無い・・・はず。

「へーそんな効果があったんだ」

「まあね。コレもログさんところで作った」

主に魔法を。

ボクには残念ながらそれしかできない。  
後、せいぜい魔術符カードを作るぐらい。

「まあ、そんなわけで寝るよ。オヤスミ」

そういうとボクは仰向けに寝転がる。

レオはリカから抜け出してボクの腰の辺りで丸くなる。  
ボクは目を閉じてそのまま寝る準備をする。

「じゃ、アタシもここで寝ようかな？」

「ちよつと待ちなさい」

目が覚めた。

ありえないぐらいに。

「何故に？」

「ソラがここで寝るから」

「……」

ダメだこの娘何かしないと……。

出会って今日までいろいろと人が怖いからって理由で甘やかしてきたけど、もうダメだ！今日こそはガツンと……。

「すぴー」

「寝てるし！？」

しかもがつちりとボクの腕をホールドして。

何だか腕に（以下略）。

攻撃力どころか力の強さがカスのボクには吸血鬼ヴァンパイアの力を振り切れるわけが無い。むしろそんなことができたらボクは吸血鬼ヴァンパイア以上に危険な存在になる。つまり、ボクが完全に人外で更にはデンジヤラスなこと間違い無しってことになって……。

まあ、簡単に言くと、もう無理です。逃げられません。何かごめんなさい。

「……はあ」

ボクはカバンの魔法陣を展開する。

そこに入ってた。というか入れてた毛布を取り出すとリ力にかける。

ホントはボクが使おうと思ってただけだね。

「んじゃ、オヤスミ」

ボク等の真上では三日月が輝いていた。

～翌日～

ボク等はいつものようにDの教室に入る。

「おはよ～」

「おはよづー」

「おは～」

「ういっす」

「グッモーニンー!!」

「?好!?!」

「Ciao!」

「Bonjoo!」

「Hoi!」

「Wit!」

「？」

「何この教室!？」

いつからここはこんなにグローバル化したの!？  
てか、最後に行くほどワケわかんないだけ!？

「最初が日本語、次に英語、中国語、イタリア、フランス、スペイン、ポーランドにギリシャよ」

いつの間にか杏奈がボク等の前にいた。

「あ、杏奈ちゃんおはよ」

「・・・おはよ」

スズにリカの順。

いまだにリカはボクの後ろに隠れて小動物と化している。

「何でそんなこと知ってるの？」

最初のほうはボクでも知ってるけど・・・。

「コレぐらいフレンドリーな副代表を目指すわたしにとっては朝飯前」

「フレンドリーな副代表さん。ボクに詠唱を教えて欲しいな」

「あでいおす!?!」

フレンドリーな副代表さんは詠唱が苦手なようだ。

ボクはとりあえず適当な席につく。リカは当たり前とばかりにボクの隣に座って、スズもボクの近くに座る。

ここの学校は決まった席とかは無い。

だから、みんなが好きな席に座る。

「おつす。おい、知ってるか？」

「何を？」

ボクが座るのを待っていたのかカザハもボクの近くの席に座る。

「いやな、昨日、侵入者がいたらしいんだって俺の部屋のヤツが言ってた」

ちなみにここは全寮制。

たまたま起きてたカザハのルームメイトが見てたようだ。

「へ〜。ここのセキュリティ、ダメじゃん。」

ボクのところにもいたしね。

・・・後で理事長室に殴り込みに行つて龍造さんに頼むように言つとこうかな？

「いや、全然だ。むしろ、理事長が言うには知り合いの結界の魔法使いにやつてもらつてるらしい。それに二ヶ月ほど前に結界を張りなおしたらしい。理事長の話だと確か・・・神も逃げ出すレベルとか言つてたな、うん」

「お〜すごいね！龍造さんみたいな人がいたんだね！！」



「むしろ龍造さんだと思う」

なら、話が変わってくる。

龍造さんの結界を破れるほどの人がそうそういるわけが無い。つまり、ボクが見たあの人達のことを言ってるのかな？

「だが、先生か誰かが気づいて追っ払ったらしいがな。それも見てたらしい」

「いや、それボクだと思う」

確定した。

それ、ボク見た人です。

「・・・お前かよ」

ボクは昨日の夜のことを話した。  
もちろん。リカの『ひゃっふう〜』って所は抜かして。

「・・・三谷殿が逃がしたのであれば相手は相当の<sup>てだれ</sup>手練」

「うおお！？忍！？いきなり出てこないでよ！？」

ついさっきまで気配は愚か魔力さえ感知できなかつただけど？  
ホントにこの子はただ単に暗殺者の家系ってだけなのか疑いたくなる。

「そういえば忍君ってそーゆー家系だったっけ？」

「・・・はい。ですが私などまだまだ若輩の身」

「いや、普通に忍のほうレベル高いと思う。魔力感知ができなかったし」

「・・・恐縮です」

いや、お世辞じゃないよ？

まあ、忍は謙虚だしね・・・。

「でも、三谷が遅れを取るほど相手がそこらへんにごろごろいるの？」

「いやいや、三谷のコトだから何か変な邪魔が入ったんじゃない？」

「・・・そうですね。三谷さんは近年まれに見る不幸体質ですから。よく言えば『主人公体質』ですわ」

「バカザハが変わりに気づいて逆にボコされとけばよかったと思う。」

今度はアス力達がボク等の輪に入ってきた。

ちなみにここにいるメンバーがカザハとよくしゃべる人間らしい。カザハに紹介してもらってボク等は結構仲がいい。

「だが、気になるのは何でここに侵入したか、だな」

「うむ。まあ、検討はつくが」

「どうせ、ここの研究成果ですぜ」

「・・・何で当たり前のように君たちがいるの？」

「「気分」「」」

何故かロイにジグ、ランドの三人がいた。

ここはDの教室だよな？

「まあ、それが打倒だろう。ここは先生達も魔法を研究している。おそらくは何かの研究成果を狙ったんだろう」

「へへ。魔法の研究とかもしてるんだ」

「そのとおりで。地味にここにしかない魔法道具なんてのはゴマ  
ンとあるんでさあ。例えばその自分のランクを示す紋章<sup>エンブレム</sup>」

そういうとランドはボクの胸にある黒の紋章<sup>エンブレム</sup>を指す。

「ああ、何かコレが生徒手帳みたいなもんでしょ？コレで図書室の利用から財布の代わりまで何でもできるって言う便利アイテム」

でも、これの魔術符バージョンが魔窟<sup>ネスト</sup>では普通に出回ってるんだけどなあ？

ボクは持ってないけど。確かそれはログさんが魔術符に限界まで魔法を詰め込んだらどうなるかの的な実験をしたらしい。それがヒックとして魔窟では『十得魔術符』って呼ばれてる。

「だが、それはここにしかない技術だ。それに、噂ではもうすぐバージョンアップして、つい最近人気のカバンの魔術符の最新バー

ジョンが試験的に導入されるらしい」

「・・・あれ？それってソラ君が「すごいね！？そんなことができるんだ！？」」

なるほど、サリナさんは魔窟の技術を取り入れまくってるらしい。それなら納得だ。

おそらく、ログさんはボクがいない間に何にするのがいいか考えて後はボクが魔術インストール導入する段階にしてるんだろっね。

「つまりだ。ここにある技術を盗んだら簡単に億万長者になれる可能性もある」

「・・・なるほど」

多少の危険を冒してもするだけの価値があるってことか。

「だがな。ここにはもうひとつだけある」

ロイが言った。

「・・・まだあるの？」

「ああ。こここの地下には遺跡がある」

「・・・イセキ？・・・わかった！あれだよ！つい最近ニユースでプロ野球選手の」

「それは移籍。漢字が違う」

「・・・遺跡ってあれ？」

「あれ以外にここに遺跡はない」

「・・・いや、さすがに無いだろう？」

「何で？」

ボクとスズとリカは話について行けずにおいてけぼりだ。

レオは早くもボクの足元で昼寝を開始してる。こいつ聞く気がない。

「ここには遺跡がある。もともとここは遺跡があったのを理事長が学校にしたらしい」

「それで、後になってこの地下にも続いていることが分かった。

それで今では許可をとれば先生の同伴で地下にもぐって訓練できるようにした」

「でも、何で遺跡なんか狙うの？」

「・・・古文書」

リカがぼそりと言う。

「ああ、遺跡には古代の魔法がある。ひょっとするとそれを狙ったのかもしれない」

「ふん。でも、それって普通に考えて、そういうのはこの学校が全部回収してるんじゃないの？」

「たぶんな。だが、とりこぼしがあるかもしれない。それに古文書は大抵のモノが禁忌<sup>タブー</sup>レベルのモノが多い。別に狙ってもおかしくない」

「「禁忌<sup>タブー</sup>？」」

疑問の声を上げたのはボクとスズ。  
なんかヤバいって言うのはわかるんだけど……。

「……知らないのか？」

ボクとスズは正直に首を縦に振る。

「禁忌<sup>タブー</sup>は簡単に言うところの世界で言う核兵器みたいな魔法だ。使えば国を滅ぼすところかお前らの住んでる日本という国の北海道とか言う地方を一人の魔法使いで消滅させることができるって言われている。……確か最近噂の『闇夜の奇術師団』とか言う六人組で……未知の魔法を使う奴も禁忌<sup>タブー</sup>並みの魔法を使うらしいな」

「え？ソラくむぐ……」

リカがスズの口をふさぐ。  
ナイスだ。

「マジで？」

ボクは核兵器を持つてるの！？  
後でサリナさんが龍造さんに聞かないと！？

「ああ、らしいぞ。それにこここの遺跡には開かずの扉的なモノがあるらしいしな。この情報を知ってればここを狙う奴等がいるんじゃないか？」

・・・これはひょっとするとかかなりまずいのか？

「じゃあ、できるだけ早くサリナさんに言わなきゃいけないんだ」

「だな」

その時、ちょうど先生が入ってきた。

「おい。済まんが急に授業変更だ。一限目は魔法実技。全員競技場に集合だ」

その言葉にみんなが悲鳴を上げたり歓声を上げる。

カザ八達も腰を上げるとまずは体操服に着替えるために更衣室に向かう。

「ま、今日もがんばりますか」

## 15話・REQUEST

side空志

「昨夜、怪しい人影が出た？」

「はい」

「……ここには龍造君の結界が張ってあるんだよ？」

「……ソラを信用できないの？」

「リカちゃん！？ダメだよこんなところで鎌出しちゃ！？」

「ここは理事長室。」

ボクの目の前にいるのはサリナさんとカルネル先生だ。

「それにカザハの話だと彼のルームメイトも見てるらしいです」

「……椿ちゃん、何故に客を危険に？」

サリナさんはこっち側に立つ事務担当でボク等の世話をしてくれてる椿さんに言う。

「申し訳ございません」

「いや、ボクもたまたま起きてたからわかっただけです。寝てたらかんなかったと思います」

「まあ、三谷君が逃がすくらいだしね。相当な人だったんでしょ



う

「・・・何かすみません。  
ただ単にボクの不幸体質が発動しただけなのに・・・。」

「まあ、警戒しとくわ。カル、他の先生に伝えといてそれと事務  
になくなった物品が無いかもチェック」

「わかりました」

そういつと内線電話でカルネル先生が話し出す。

「でも、何でそんな夜中まで起きてたの？」

「いや、ボクの属性の関係上、そろそろ『月』のストックが切れ  
かかってたんで」

「?・・・まあ、いいわ。ちょっと頼みがあるんだけどいい？」

「はあ？」

「・・・何故か死亡フラグな予感。  
いやだなあ。」

「頼みは護衛よ戦争のときに使ったあの場所まで」

どうもあのとときに派手に暴れまわったから地盤がおかしらしい。  
実はあそこの森はこの学園から5キロほどのところにある。事が  
起こる前に何とかしようということみたいだね。

「まあ、ここは平和だし何にもないと思うんだけどね。術者がそのときだけどうしても無防備になるからガードがいるのよ」

「でも、先生達がそうゆうのはやるんじゃないですか？」

「戦闘に慣れた先生が今は出払ってるのよ」

実はこの学園の半分の先生は戦闘がまったくできないらしい。

まあ、普通はそうだよ。本来、ここの職員は教える人だし。

たぶん、実技の担当の先生でこっちに割ける人がいないんだね。

それに昨夜の侵入者の件もあるからできるだけここのオトナを減らしたくないだろう。

でも、ボクなら先生並どころか凌駕してるし護衛に最適。

サリナさんはこっちの事情も知ってるからボク等に頼んでるんだろっね。

「……どうする？」

「ソラがやるならついてく」

「わたしもどっちでもいいよ」

「じゃ、特に断る理由も無いんでやります」

「助かるわ。じゃ、明日の授業は公欠にして、一限目が始まるころに校門に来て」

「そんなに時間がかかるんですか？」

「君の得意な魔法陣は本来こんなに時間がかかる方式なの」

へ。魔法陣で地盤を直すのか。

「あ、そうそう。不安なら別に他の生徒を連れてってもいいわ」

「「「はい」「」」

そこでチャイムが鳴った。

ボク達は理事長室から出ると教室に向かった。

「まあ、そんなことがあったんだ。と、言うわけで誰か手伝って」

ボクは理事長室でのことを教室にいるみんなに話した。

「俺はその日に再試がある」

「わたくしも補講ですわ」

「オレッチは居残り」

「再試！」

「補講と再試よ」

「……私は明日の小テストの勉強を」

「碌なのがいねえ!？」

全員バカだった。

ロイ達も「明日はそんな暇は無い!!」とか言っただけなんかに魔導書片手に忙しそうだった。

今回はもしもの事があるから戦力はたくさんあるほうがいいと思っただけだな。

まあ、無いものねだつてもしょうがないしね。おとなしく諦めよう。

「あ、あああああ、あの!」

何か急にボクの後ろに人がいた。

前髪をコレでもかかってぐらいに伸ばしているショートカットの女子。

・・・前、見えるのかな？

「・・・何か用？」

「え、と・・・その・・・あ・・・」

「・・・この子誰？」

「俺達と同じクラスしじゅうかの四条奏なで。まあ、見てわかるように極端に自信が無くていつもおどおどしてる。戦争のときはさすがに応援組みに入ってたな」

なるほど。

でも、そんな子がボクに何のよう？

「……………あう……………」

「……………」

どうしよう。会話が続かない。

でも、四条さんが意を決したようで前髪で隠れて見えない目をボク等に向けると言った。

「あ、あたしもついていっていいりえすか!？」

……………噛んだ。

四条さんは顔を赤くしてち、ちが!？とかテンパってる。

「はあ……………四条さん?深呼吸〜」

「え?は、はい!ひっひっぷ〜」

「違う!?!何でそうなるの!?!」

「……………落ち着きました」

何とか法って呼吸で落ち着く人をはじめて見た。

まあ、そんなことはいい。

「で、何で急に?」

「あ……………り、理由は言えません。でも、行かなきゃダメなんです!」

目は見えないけど何か決意した感じでボク等に言う。

そんな彼女の姿が珍しいのかカザ八たちはポカンとしてる。

「・・・でも、下手したら危険」

「そだよ？できるだけがんばるけど怪我しちゃうかもよ？」

「か、覚悟してます」

「・・・ソラが決めて」

「まあ、正直戦力は欲しい。って言ってもただ単に死角が無いようにしただけだから実質戦うのはボク等三人だし・・・大丈夫じゃない？」

「な！？そんな簡単なのか！？」

いきなりカザ八達が立ち上がった言う。

・・・何でそんな問いただすみたいにするの？

「オレツチ達は三谷がやるんならどうせ厄介ごとで実はウラがあると思ってたんだよね」

「・・・待つて、カザ八達は厄介ごとに巻き込まれたくないから拒否ったの？」

「「「「「もちろん」」」」」

「こいつら鬼だ！」

「なら、俺達もやってやるよ。明日は堂々と学校を休める」

「明日はハイキングですわ」

「今からお菓子買いに行こう！」

「あそこの動物たちに何かおいしいものを持ってかなきゃ」

そういうとみんなは明日の支度をするためにどこかに行く。  
ボクは半ば呆然としてその場にポカンとした表情で座っていた。

「……ドンマイだね」

「そ、そんなに落ち込まないでください……」

「いつものことだよ」

「……あのさ、人間不信になりそうなんだけど？」

ものすごくむなしかった。

side 奏

(よかった)

偶然にもあそこに行ける。

最初に聞いたときは驚いたけど……でも、あの三谷君なら大丈夫。  
夫。

噂では例えどこかの国の軍隊がやってきても指先一つで一瞬のうち  
ちに倒せるんだもんね。

この人たちを騙すみたいで悪いけど……でも、しょうがない……

・と思う。

「大丈夫。ちゃんとあたしが何とかするから・・・」

あたしは誰にもとも無くつぶやく。

でも、あたしはわかってる。ちゃんと伝わってるから・・・。

side空志

『お掛けになつた番号は・・・』

ボクは通話の終了ボタンを押すとケータイを机に置く。

念のために龍造さんに明日のことを伝えようと思ったけど忙しいのか龍造さんはケータイに出てくれない。

他のみんなもそうだ。

・・・前のギルド関係かな？まあ、しょうがない。

ボクは明日いりそうな物をカバンの魔術符に入れておく。

その時、ケータイがブルブルと震える。

ボクはすぐにケータイをとると通話ボタンを押す。

「龍造さん？今まで何かしてたの？」

『俺だ』

ブチッ。

さて、明日の用意っと。

一応、飲料水生成魔術符とか持ってたのかな？のど渴いたらすぐに使えるし。

またまたケータイが震える。



しょうがないので出る。

「で、何のよう？今はホントに無理。ボクは時間の壁を越えられないからね」

『違うわバカ弟子』

ログさんだった。

何で今、来るかな？

『龍造から伝言だ』

「先にそれを言ってよ」

『お前が切ったんだろ？！』

「ログさんの普段の無茶振りかと思っただよ」

『・・・まあ、いい。ヤツはガキ共とどこかに出かけてる。どうも別の魔王領で不穏な動きがあるらしい。お前のほうも気をつけるようにらしいぞ？』

やっぱり忙しかったんだね。

「わかった。わざわざありがとう」

『おう。それとポケットの魔術符の媒介だが、そっちにそろそろつくはずだ。適当に作ってテストしといてくれ』

「おい。だから何でここまで来て」

『ツーツーッ……』

……一方的に切られた。

ケータイを仕舞うとタイミングよくノックの音が聞こえる。

「どつぞ〜」

「ソラ？<sup>ネスト</sup>魔窟から届け物だつて」

リカが小さな小包をボクに渡してくる。

ボクはとりあえず受け取って包装を綺麗に取ってたたむ。

中の箱からは例によって月、鈴、龍、雪の結晶、葉っぱ、コウモリの意匠が施された腕輪が入っていた。

要するにボク等がテスターになれてコトらしい。

ボクはため息を一つつくとかバンの魔術符の中から魔導書『サルでもわかる大魔導書』を取り出す。ここにメモしてあるポケットの魔法陣のページを開く。メンドイから今回はここから使おう。

ボクはそのページに手を置くと魔力を込める。

「魔法陣、展開」

すると、いつものように魔法陣が空中に現れる。

ボクは続けてコマンド。

「<sup>インストール</sup>魔術導入」

すると、魔法陣が端から解けて腕輪にインストールされていく。

コレを繰り返すとボクはコウモリの腕輪をリカに渡す。

「はい。新作のポケットの魔、じゃなくて腕輪。使い方はこれ見て」

ボクはカバンの魔術符からメモを取り出すとリカに渡す。

「へ〜・・・今回は腕輪なんだ」

「まあね。魔術符だといちいち出さなきゃ使えないからね」

ボクはカバンの魔術符から中のもを取り出す。

盤ポードに補助用魔術符、普段よく使うものだけをポケットに移し変える。

でも、盤ポードでかなりの要領を使ってしまった。でも、まだまだ入る。

「まあ、こんなもんでしょ」

「ね〜ね〜。一回やってよ。実演」

「別にいいよ？来い、盤ポード」

そう言うとボクの目の前に盤ポードが出現。ボクが戻れと言うと今度は消失した。

「おお〜スゴイ！さすがソラ！」

「……………所構わず抱きつくのはやめて」

ボクは何とかリカを引き剥がす。

「まあ、ある程度ならコレは大丈夫だから。よく使うのをこっち

に移し変えとくといいたいと思うよ」

「ん。じゃ、そうする」

そういつとリカは自分の魔術符カバンを取り出すと中身を床にぶちまけ  
。。。

「そういうのは男子の目の前でしちゃダメだ!!」

やっぱり女子だからカリカは荷物が多い。櫛とか女の子が使いそ  
うなアイテムがある。

一瞬、視界の隅に入った旅行カバンから白い例のブツが見えた気  
がするけどアレは気のせいだ。大丈夫だ。問題ない。

「え？別にいいじゃん。減るもんじゃないし。それにソラもして  
たじゃん」

「ボクの精神的な何かが確実に減ってる。それにボクはリカみた  
いに中身を全部さらけ出してない!!」

「あたしは気にしないよ？」

「気にして!？」

「あ、カバンからパンツはみ出た」

「ぶっ!?!だからボクの目の前でそんなこと言わないで!?!」

「見る?」

「いい加減にやめなさい!!」

ボクはこのままではリカが暴走して大変なことになると思ってた。力の魔術符に旅行カバンを突っ込むためにリカの手の魔術符をひったくる。

リカはボクの手の魔術符を取り返そうとする。

「てか何で!?!」

「ここで色仕掛けでもしないとソラは気づかないもん!!...」  
あ

「!?!」

そこでリカがバランスを崩してボクのほうに倒れる。  
ボクは反射的にリカを衝撃から守るために自分が下になる。

「ふう...大丈夫、夫?」

「う、うん」

...まあ、アレですよ。

互いの顔が近いっす。

そこでボクは突然だけど暴走してリカにいろいろ言われたときのことを思い出す。

確かあの時、ボクはリカとの距離がやばくてじいちゃんが来なかったら...。っ

ボクはそのことを思い出して顔の温度が上昇するのがわかる。

リカのほうもトマトみたいに赤くなってる。

でも、何故か動けな...。

「ゴハンだよ〜!!」

「みゃ〜」

スズとレオがゴハンを教えに来てくれた。

「……あ」

ボクとリカの状況は言わずもがな。

リカがボクを押し倒してるように見える。

「……ゴメンね〜お邪魔だったね〜」

スズとレオはそそくさと退散していった。

「待って!!誤解だあああああああ!!!!!!」

「……ソラのバカ」

ボクはスズとレオの誤解を解くべく部屋を飛び出した。

リカが何か言ってた気がするけどボクにはそれを聞く余裕なんて  
まったく無かった。



「じゃ、よろしく頼むよ。でも、危ないときは逃げるんだよ」

「ソラがいるから大丈夫！」

「……だから所構わず抱きつかないで」

「イチヤイチヤするのはいいけどちゃんと仕事してね」

ボクがイチヤイチヤしてませんと言おうとしたら視界が歪む。視界が元に戻るとそこはあの森だった。

「じゃ、指示されたポイントはこっちだ」

そういうとレイ先生はボク等の前に立って進む。

別にレイ先生も魔法使いだから何かが出てきても対処できるからね。ボク等の任務は魔法使用中のレイ先生のガードだから、のんびりとしてようかな？

「今日もいい天気ですわ」

「オレッチ、早く目的地について昼寝がしたい」

「ねね、鈴音ちゃん。このお菓子わたしのお勧め」

「……お！？これは！？」

「忍、あの毒々しい色のきのこは何だ？」

「……\*\*\*\*\*です」



「……スマン。もう一回いいか？」

「……\*\*\*\*\*です」

「何だよその聞き取りにくい名前は!？」

「……ちなみに猛毒です」

「じゃ、あれは何だ？」

「……知りません」

「あれは？」

「……\*\*\*\*\*です。ちなみに神経毒です」

「ね〜ね〜着いたら一緒に散歩しよ！」

「……緊張感の欠片も無い。

ボクは一人 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を発動して周りの魔力感知にいそしむ。

「……あれ？」

「どうかしたのかい？」

レイ先生が尋ねてくる。

「いえ、マナがおかしい？」

ホントに目を凝らさないとわからないけど魔力の流れが異常だ。

ボクがこの目でマナを見るとすごく綺麗な金に近い色がさらさらと流れていつてる。

でも、今、目の前ではどこと無くその魔力の流れが滞っているよ  
うな気がする。

「・・・わかるんですか？」

そういう風に声をかけてきたのは四条さんだった。

「どっぴいっこと？」

「い、いえ。ひ、独り言です！」

そういうと四条さんは顔をうつむいてしまう。

ボクとレイ先生は首をかしげる。

「あゝ！？カザハが杏奈に突き落とされた！？」

ボクが四条さんに尋ねてみようと思ったなら空気をぶち壊された。

「ちょ！？カザハ君は大丈夫なのかい！？」

「・・・事故！ただ、わたしは・・・動物達にカザハにイタズラ  
して遊ばないか・・・」

「結局は杏奈が犯人だよね」

「まあ、代表なら大丈夫ですわ」

「うおおおおおおおおおお！！し、死ぬかと思った！？」

「・・・さすが風葉殿」

「言ったとおりでしょう?」

「ソラ?浮気?」

「いや、浮気以前に彼女とかそんな人がいないし」

「ソラのバカアアアアアアアアアアアア!?!?!?!」

「え?何で、ちょ!?!?ごぼは!?!?」

こんな緊張感の無い空気のままボク等はどんどん森の奥に進んでいった。

「ここだよ」

道中はボクがリカに殺されかけた以外で特に何も無い。

平和なはずの道中で何でボクは命の危機にさらされたんだろう?ま、それはいい。ぶっちゃけいつものことだし。

それで、ここは最後にカザハとジグが魔法をぶつけ合ったところ。どうも、カザハとジグの魔法で地盤にかなりのダメージがいつてるらしい。

ボクはよくわかんないけど。

むしろ、さっきから目にするマナのほうが気になる。

「じゃ、準備を始める。配置についてくれ」

「はい！」

そういうとレイ先生と一緒に来た先輩たちはレイ先生を中心に円を描くように並ぶ。

これは……。

「魔法陣？」

「ああ。元々、魔法陣はこういう風に多人数でするために考え出された方法だ」

カザハがボクの隣に来てわざわざ教えてくれた。

「確かに魔法史なんかでは大昔の人は魔法陣による詠唱を使っていたらしいが、魔法陣は一つ一つ覚えなきゃいかんだろ？」

「うん。でも、詠唱でも同じことが言えるんじゃないの？」

「いや、実を言うと詠唱は別にコレと決まってないんだ。だから自分なりのニュアンスで魔法を構築してもほぼ同じ魔法ができる。だが、魔法陣は魔法文字<sup>コード</sup>一つを間違っただけ、あるいは別の魔法文字<sup>コード</sup>で代用とかしても発動しない」

「へ〜。で、面倒な魔法陣形式は時代と共に無くなっていったと」

「ま、そういうことだな」

こんな風にして護衛になるのかな？ってボクは思った。  
でも、幸いにもボクの目で見ててもマナがおかしい以外に特に危険は無いはず。

ま、ボクの視界の中で、だけど。

「……母なる大地よ、我らの願いを聞き給え……」  
たま

でも、コレが集団での魔法陣の使用か……。今回はみんな土系統の属性だけどカザハが前にやったように別に全員が同じである必要は無い。

ここでの親みたいなのがレイ先生で他の人たちが子。

まあ、今回は繊細な作業をするために全員が集中して魔法陣の維持と詠唱をしている。

「確かにこんなところを襲われたらひとたまりも無いね」

「……ソラが言う現実になるよ？」

「いやいや、いくらボクでもそんな「じゅ、十時の方向に、な、何かいます!!」……え〜」

やめて!？

みんなしてお前のせいで……みたいな顔しないで!？

「アスカ、本当か？」

「イエス！魔獣っぽいよ。動きがかなり速くて当てる自身が無い……それに距離がざっと一キロって普通は気づかないよ?」

「あ、そ、それは……その……」

「そんなことより戦闘準備ですわ!!」

「いや、オレッツチ達は無理だよ」

「何故ですか?」

「人形忘れた」

「バカですよ!?!いいえ、バカなんですわ!!」

「・・・ゴメン。動物たちが怖がっていて無理」

「なら、主戦力は俺にソラか?」

「アタシは?」

「リカはスズのサポート・・・いや、前衛でいいのかな?レオ、起きて」

「にゃ?」

「わたしは大丈夫だよ」

ボクは既に銃をホルスターに吊ってある。

レオは大きくなって、リカとスズも武器を呼んで構える。

カザハもナイフを取り出して詠唱の準備をする。

「よし。ボクとリカが前衛。カザハはレイ先生たちを守ってて。スズとレオはいつもどおりで」

カザハだけ地味に遠まわしな戦力外通告。

カザハは眉をひそめるとボクにつっかかるように言う。

「おい？俺も少しは戦えるぞ？」

「いや、普通にこの中で一番弱いから」

「……だが、アンジェリカよりは強いと」

メキヤア！

「言うわけないな。スマン。調子に乗った」

何があつたかは各自のご想像にお任せします。  
ボク等の目にも魔力を捉えるようになって来た。  
でも、何故か目がチリチリする。  
……疲れてるのかな？

「アスカちゃん、距離は？」

「後……600……  
」

カウントごとに魔力と音が響く。

「……300……  
……200……  
……100……」

「今だ！！レオ！！」

ボクは銃を、レオは咆哮覇を放つ。  
すると攻撃されて怒ったのか咆哮があがる。

レオの咆哮覇で木々がなぎ倒され、視界を粉塵で埋め尽くす。

「<sup>トゥフウ</sup>突風　！！」

ボクの魔法で粉塵を払う。

そこには異形の生物がいた。

熊のような体躯に不釣り合いなほど大きい腕で左右で大きさが違う。  
目がギョロギョロとせわしなく動き、口からはよだれと言っかな  
んと言っか・・・口では表現しづらい粘液的なモノがたれる。

ま、一言で言っくと・・・。

「・・・グロい」

「わたしもそう思うよ」

「・・・そういえばソラたちは魔獣は初めて？」

まあ、そだね。

てか、魔物と魔獣ってどう違うの？

「魔獣は魔力によって汚染された生命体。基本的に凶暴な性格で  
暴れまわる。でも、魔物は過去に魔力によって汚染されながらも一  
つの種族として確立したもって言われているの。ちなみに魔獣はあ  
んな風に不恰好なヤツほど弱くて、整ってくると強くなる」

放射能でやられた的な感じ？



「へえ〜。じゃ、魔物つて元は魔獣だったかもしれないんだ？」

「うん。でも、それは本当にごく一部。狼人間とかがそうらしい」  
「よ」

「そうなんだ〜」

あ、そういえばボク等余裕でしゃべってるけど戦ってます。  
地味にこの子タフで攻撃してもへこたれないんだよ。

「……ですが、コレはおかしい？この程度なら既にやられてい  
るはず」

「……確かに。このぐらいならどんなに高く見積もってもクラ  
ンク。わたし達学生でも冷静に対処すれば簡単に倒せる」

「……いや、そんなわけ無いでしょ。三人がかかりでコレだよ  
」？」

ボクは目の前の魔獣に目を移す。  
そこにはほとんど無傷の姿。

「……ちなみにそのランクつてどのへん？」

「オレッチ達のランクと同じ。」

「ちなみにSとやろうと思っただらどうなる？」

「学生では三谷以外に倒せる人間はいないと思う」

要するにこの魔獣は異常すぎるってコト？  
なら、少しがんばろう！！

「リカ！少し本気で行くから危ないときは守って！」

「わかった！」

久しぶりにヤツを使おう。

この頃は出す機会が無かったし。

ボクは銃をホルスターに収める。

「魔法陣、展開！」

ボクが地面に両手を地面に叩きつけると前に魔法陣の中に八つの  
円が描かれ、複雑な紋様が特徴的なあの魔法陣。

「ヤマタノオロチ  
八岐雷大蛇 ！」

戦術系の八つの頭を持つ雷の大蛇が魔法陣から出てくる。

「す、すごい、です……」

「……もう、おどろかねえぞ」

「すげ〜！かっこいい！」

「ホントに非常識ですわ」

「……さすがは三谷殿」

何か言われてるけど気にしない！

「リカ下がって！行け！」

ボクがそういうとリカはボクの隣にまでバックステップ。その代わりに雷の大蛇は八つの頭で魔獣に噛み付く。みんなは今まで見たことが無いリカの身体能力に驚いてるけどボクが身体強化系に特化してるからって前に説明したから特に何も言わない。

魔獣は断末魔の叫びを上げる。魔獣はその左右で違う大きさの腕をふるって大蛇を倒そうとするけど、ボクのこの魔法は大きさに頼ったものじゃない。全体を一気に破壊しない限り再生し続けるエグさにある。

首を一本落とされるけど落とされた首が消えると変わりに一瞬で新しく首が再生して再び噛み付く。

「三谷君が敵じゃなくてよかったわ」

「うん。わたしもそう思う。絶対にわたしの狙撃じゃ勝てない」

「いや、さすがに狙撃されたら無理だと・・・」

ボクの脳裏に間学園でのテロ集団に追いかけられる日々が再生される。

・・・ひよつとすると大丈夫かも・・・。。  
そんなことを思った瞬間だった。

いきなり魔獣が再び大気を振るわせる咆哮を放つ。  
すると、魔獣を中心に黒い魔力が周りに衝撃波として放たれる。

「ッ！？あああああああああ！！！！！！！！！！」

「ソラ!?」

「ソラ君!?」

「がう!?」

いきなりボクの目に激痛が走る。

何だ!?

おかしい!こんなことは今までに無かった!!

そして、魔獣は黒い魔力を放ったまま腕を大蛇に振るう。

すると、ボクの魔法が破壊された。あの再生能力を持つ

八岐雷

大蛇<sup>オロチ</sup>を、だ。

「あ、ありえない!?!」

「何で!?!」

ボクとスズは驚く。リカとレオはとっさに前に飛び出して鎌と爪で魔獣に切りかかる。

すると、魔獣はさっきまでとは違う威力で腕を振るう。

「ツ!?!?・・・吸<sup>ヴァ</sup>ダメだ!?!」でも!?!」

「おい、何で驚いてんだ?確かにアレはお前の切り札なんだろうが・・・」

「あ、あの、魔法は<sup>ホムラドリ</sup>焰鳥、<sup>ライエン</sup>雷燕と同じで魔法自身に人工

知能(AI)をつけた魔法。でも、この二つと違って対象を倒すか

ボクが発動を停止させるまで魔法を破壊されても再生する<sup>プログラム</sup>魔術構成

を組んである」

ボクは痛む目を気合で無視して再び ヤマタノオロチ 八岐雷大蛇 を発動させる。でも、魔獣はそうすれば消えることがわかってるみたいに腕を振るう。また、ボクの魔法が破壊される。

「ま、まさか核を！？」

それ以外にありえない。

魔獣はそんなことができるのか！？

なら、本気で行くしかない！！

「スズ！！足止めして！！」

其は、魔に属す法則」

「そこまで！？」

ボクは真言を発動させるためにスズは アンチ・シエル 相殺殻 で足止め。心なしがボクの目の痛みが引いた気がする。

「ツキヨ 月夜 ！！」

ボクは魔法陣に手を突っ込むとそこから一振りの刀を取り出す。  
『ゲッセン 月閃』。ボクはその刀を手に魔獣を見る。  
でも、そこでまた、痛みがぶり返す。

「ぐッ……」

ボクは痛みを耐えて相手の核を見つけようとするけど痛みで集中できない。

というか ツクヨミ 月詠 の発動が解けそうだ。

「・・・ああッ!？」

そこでボクの 月詠<sup>ツクヨミ</sup> が解けた。  
それと同時に真言も解除されてしまった。

「・・・はあ、はあ・・・マジかい・・・」

月詠<sup>ツクヨミ</sup> が切れると真言も強制的に解除されるのか!?  
こんなの初めて知った。

「ソラ!？大丈夫!？」

真言が霧散したのに驚いたのかりカが大きな声で焦ったように、  
目の前の敵の攻撃を流しつつボクに聞いてくる。

「大丈夫・・・」

でも、やばい。

ボクは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> ができないから相手に通じるような強力な魔法の  
ほとんどが使えない。

リカは吸血呪を使えばどうかわからないけどみんなの前では使え  
ない。  
<sup>ヴァンパイア・スベル</sup>

スズは攻撃のすべを持たない。

他のみんなの魔法では決定打にならない。

「リカ!ボクはもう一度だけ真言使う!！」

「大丈夫なの!？でも、何でアタシに聞くの!？」

「コレはリカにしかできない！君だけが頼りなんだ！」

「え？そんな・・・／／／／」

・・・何か勘違いしてるような気がするけど今は説明する暇が無い。

「ツクヨミ  
月詠」

ボクはボソツとつぶやくように言う。  
すると、魔力の流れが再びはつきりとわかるようになる。  
それと同時に目の痛みが激しくなる。

「其は、魔、に属す、法則・・・」

途切れ途切れになりながらも真言をつむぐ。  
でも、そこでも不運は続いた。  
今度は敵の口に光が収束し始めた。

「ま、まさか咆哮覇！？」

魔獣の咆哮が響くと同時にレオの放つ咆哮覇の黒バージョンが放たれた。

ボクに向かって。

さすがに死ぬかも・・・。

「いや、普通なら死ぬからな？ ダーク・イロージョン  
闇の侵食」

ボクの目の前にいきなり黒い壁が出現する。

それが黒の咆哮覇を喰らい尽くそうとするけどアレの威力はハン

パ無い。

既に一部突き破りそうなところがある。

「少し調子に乗りすぎですよ？」

魔獣の死角から飛来した影が魔獣の横っ面を蹴飛ばす。

すると、魔獣は不意打ちに頭を地面に打ち付ける。

それと同時に咆哮覇がボクからそれる。

「アンタもらしくないわね」

魔獣の周囲が寒くなったと思うと一気に魔獣が氷漬けにされる。

でも、それにも関わらず魔獣はギョロギョロ目を動かしてボク等を襲おうとしている。

ボクは既に最終段階に入った魔法を発動させる。

「ツキヨ月夜　！！」

魔法陣から魔力があふれる。

でも、そこから現れたのは刀でも弾丸でもない。

とても大きな鎌。

銘をつけるなら……『ツキガリ月狩』。

「リカ！！コレで叩き斬って！！魔法で！！」

「！？……わかった！」

ボクは魔獣を見ないようにしてリカに鎌を投げる。

リカは器用に鎌を受け取るとそれを思いつき振り下ろす。



「  
ヴァンパイア・スベスサイス  
吸血呪 血濡れの大鎌 ！！」

すると大量の斬撃の衝撃波が魔獣を埋め尽くすほどまでに放たれる。

核コアがわからないなら全体を攻撃すれば一発ぐらいは当たる。

魔獣が断末魔の悲鳴を上げる。

すると、さっきまで猛威を振るっていた魔獣は静かになる。

ボクは恐る恐る魔獣を見ると魔獣からは魔力が消えていた。

何とかやつつけたみたいだ。

「・・・で、何でここにいるの？」

「おいおい。命の恩人にそれはねえだろ？」

「てか、アンタがピンチになるって珍しいこともあるもんね」

近くの木陰から腰に短めの双剣を左の腰にさしたイケメンの魔法双剣士と眼鏡が似合うお姉さまな数法術士。

「まあ、ソラさんの疑問も最もだと思いますよ？」

魔獣の近くから長髪の爽やかスマイルの格闘薬剤師。

「おー！？リュウ君にシュウ君に冬香ちゃん！こんなところで会うなんて奇遇だね」

何故か巷で噂の『闇夜の奇術師団』の全員が集まった。

## 17話・POWER OF SATAN

side空志

「三谷さん？この方たちは？」

そう聞いたのはリオネ。

まあ、最もな疑問だと思う。

ボク等はすでに戦闘形態を解いていて、みんなから質問攻めに合ってる。レオは小さくなってボクのところにいる。

そして、今はレイ先生たちが魔法を中断して休憩に入ってる。

「こっちは間学園の生徒の間隆介、リー・シユウ李樹、平地冬香。ボク等の仲間だよ」

「オレが一応こいつらのチーム、『サンライズ夜明け』のリーダーだ。使うのは魔法剣で属性は『闇』だ」

「私のことはシユウと呼んで下さい。このチームの薬剤師兼格闘士です」

「わたしが「金の亡者」で数法術士の平地冬香……って、アンタ何言ってるの!？」

ボクは冬香の突っ込みをスルーして続ける。

「ついでにボクは魔道具技師」

「アタシはソラのカレ「鎌使いね」……」

「料理担当だよ」

・・・何でそんなのがあるの？  
もはや生産職だよ？

ボクはリユウ達にカザ八達を紹介した。

「でも、学生ギルドに登録してるのか？」

「いや、オレ達はワケありで、一般ギルドだ。」

「おお〜すげ〜!？」

みんながみんな思い思いに雑談してる。  
てか、ボクの疑問はどうなった？

「結局なんでここにいるの？」

「ああ、今回は依頼だ」

「依頼？」

「そうそう。僕の依頼だよ」

いつからいたのかにへらっと緊張感の無い笑みを浮かべる魔王がいた。

「って、何でライネルさんが!？」

「久しぶりだね」

『閃光の魔王』の異名を持つライネルさんがいた。

「でも、置いてくなんて酷いじゃないかい？」

「アンタは死んでも死なないでしょ？」

「それに魔獣の殲滅を優先したのは貴方ですよ？」

「ま、確かにそうじゃの」

・・・ボクはもう、驚かないぞ。

例えばボクの隣に神出鬼没が売りの龍造さんがいたとしてもボクは驚かない！！

「何でいるの!？」

無理だった・・・。

「リカちゃんと鈴音ちゃんが恋しくての」

「アタシはソラのものだから無理!!」

「何言ってるのこの子!？」

「あ、あの、この人達は？」

四条さんが勇敢にもこの空気を打破しようとする声を出す。

「この人達はバカー一号さんと二号さんで十分だよ」

「は、はい。よ、よろしくお願ひします。一号さん、二号さん」

・・・この子には冗談が通じないようだ。  
今度から気をつけよう。

ボクは龍造さんたちに再度聞く。

「で、何でここに?」

「ピクニックじゃ」

「シバくぞコラ?」

「キャラが崩壊しとるぞ?」

「関係ない。ちょっと向こうで拳で語り合ひましょう」

「・・・つぶ。まだまだ若いもんには負けるわしではない!」

そういつとボクと龍造さんは立ち上がってみんなに聞こえないところまで来る。

「ネスト魔窟関係ですか?」

「いや、魔王のほづじゃ」

龍造さんはボクに最近のことを話す。

「要するに、別の魔王領で不穏な動きがあるからそれを探りに?」

「うむ。さっきの魔獣もこの魔王領で造られたものらしい。じ

やから、異常に強かったんじゃ。お主が苦戦するぐらいにの」

「でも、魔物ってあんな危険なものなんですか？ボクなんか魔法がかき消されましたよ。しかも 八岐雷大蛇 ヤマタノオロチ が」

「・・・本当か？そんな魔獣はおりはせん。・・・おそらく特殊な古文書で魔獣に組み込んだんじゃろう。そういえば目は大丈夫か？」

「あ、はい。でも、何で目のことを？」

ボクは目の子とは一言も龍造さんには言っていない。

「呪力を見たんじゃからな。アレは一種の毒みたいなものじゃしの」

「呪力？」

「簡単に言うとマナを汚染させた魔力じゃ。あの魔獣は過剰な量の呪力に当てられて強化させられたもののようにゃ。簡単に言うと呪力は魔力の澱みが生んだ有害なエネルギーじゃ。魔物の中には呪力を好んで使うものもある。ちなみに魔物ぐらいの魔力があれば簡単に呪力を人工的に発生させることができるぞ？」

「要するに魔物なら誰でも呪力を使えるんですか？」

あの、鬼人 オーガ のガントさんは魔力が魔物の中で一番低いらしい。けど、それだけでも普通にこの学校で言うAぐらいはある。

「そうじゃ。それに呪力を使う魔法、俗に邪法と呼ばれるんじゃ

がコレも桁違いに強力なんじゃ。どこの魔王かわからんのじゃがさ  
っきのようなものをそこらへんに捨てられると被害が深刻じゃ。早  
急に対処する必要があるのじゃ」

なるほど………ん？

何でまだ終わってないよ的な言い方なの？

「おお、言うの忘れとったのじゃがさっきのがこの森の中に大量  
に出没しとるぞ」

「何でそんな大切なことを忘れるの!？」

「まあ、この周囲にはわし直々に結界を張っておいたから大丈夫  
じゃろう。おぬしらは目的を果たしたら帰るのじゃ。後はわし等が  
適当に潰しておく」

なるほど。それなら安心だ。

それにボクは今回だけは足手まといになりそうだしね。

「おっけーです」

「うむ。みんなのところに戻るかの」

そういつとボクとお龍造さんはみんなのところに戻った。  
すると、そこには何やら激論中の方々。

「……なにコレ？」

「あ!?!おいソラ!さっきアンジェリカが吸血呪ヴァンパイア・スベルとか言ってたが  
ありゃ何だ!?!」

「ヴァンパイア・スベル吸血呪は固有魔法です・・・吸血鬼の」

・・・ツチ。

何で気づくかな？

要するにリカの正体がばれそうだと？

リカを見るとみんなから離れたところでもかなりうるたえてるよう  
だ。

「アレはボクの魔法だよ」

「「「・・・は？」」」

「ボクの得意技は魔法陣の魔法の構築。それで前に魔物の凶鑑で  
吸血鬼はそんな魔法ができるって言うのを見たことがあったから。  
それに偶然にもリカは鎌を使うからボク達は前からコレを練習して  
たんだよ。いやあ、ぶっつけ本番だったけど成功してよかったよ。」

みんなは目を点にしている。

でも、数々の非常識を展開してるボクだから次第にみんながなる  
ほどとかいいはじめた。

ボクもよく自分の口からこうもでまかせを出せるもんだと思っ  
たよ。

「それに吸血鬼は太陽の下じゃ灰になる。リカは太陽に当たって  
も灰になんかなくてないでしょ？」

「・・・それもそうですわ。それこそ始祖の血統でもない限りあ  
りえせんもの」



残念ながらその血統です。

リカには弱点らしいところが無いんだよ。

みんなの目から妙に殺気だった気配が消える。

「でも、リカが例え吸血鬼でもボク等の仲間に変わりは無いと思  
うんだけどね」

「確かにそうね。別にコレだけ長いことして何も被害ないし」

「まあ、紛らわしいことやったボクがダメなんだけど。まあ、リ  
カもゴメンね」

リカはいまだに隅で縮こまっている。

ボクはリカのところに行くと思をなでる。

「大丈夫。ボクは絶対にリカの味方だから」

「……………うん」

よし、誤魔化し完了。

リュウ達がアイコンタクトでよくも口からあんな堂々とでまかせ  
を……とかしてくるけどそんなものは幻想だ！！

「まあ、誤解が解けてよかったよ」

「だが、その人がお前のところの学園長なんだろう？」

「いかにも。わしがこの子達の学校の学園長の間龍造じゃ。この  
隆介の祖父じゃ」

「不本意ながらな」

そしてリカはボクにいつも以上に引っ付いてきてみんなは異文化交流をしている。

……でも、ボクなんか忘れてる気がするんだよね。

「あ、またさっきの魔獣が!!」

また!?!てか四条さん見つけるの速ッ!?

龍造さんやライネルさんも気づいて無かったよ?

「……ホントだ。ここから北東に1.3キロ先の方向にいるよ」

「……ソラの周りには珍しい属性の子がおるんじゃないな」

「確かに。龍造さんの言うとおり一キロ以上先を感知するのは普通の子じゃできませんよ? 僕自身できないし」

「まあ、わしの結界があるから大丈夫じゃ。それこそソラに核解<sup>コア・アナ</sup>析<sup>ライズ</sup>されん限りわの」

!?

そっだ!!ボクはすっかり忘れてた!

「向こうもボクの <sup>ヤマタノオロチ</sup>八岐雷大蛇 解析して破壊してきた!?!」

「はあ!?!お前のアレをか!?!」

リュウが驚きに声を上げる。

「……！？い、いろんな方向から魔獣が！？」

「え！？うわ！？なにコレ！？」

アスカと四条さんがかなり焦ってる。

ボクは目を使うと痛みで大変なことになるからできない。でも、殺気みたいなものは感じられるようになって来た。

「……みなさん。コレはまずいです囲まれました」

「全員わたし達の周りに集まって！」

「……メンドイ」

リュウ達はいつものように武器を構えると学園の生徒を背中に周囲に注意を向ける。

「お、おい。あの三谷でも無理なんだぞ！？お前等も俺達と同じ学生なのに大丈夫なのか！？」

そういったのはここに同行した先輩。

まあ、学生であんなことできるのは確かにボクが初めてだろうね。

「お前な、確かに俺達はそのソラより強くは無いかも知れん・

・魔法剣 黒刃 !そして、魔法剣 斬黒 !」

そういうとリュウは剣を抜刀すると剣の刃に闇の魔力の刃を展開してそのまま斬るモーションを行う。

その先にいた魔獣はリュウの放った魔法の斬撃で吹き飛ばされていた。

「だが、そこまで弱くない」

リュウはどんどん構えを取る。

すると双つの剣から様々な魔法が放たれる。

「コード ファランクス  
槍衾」

冬香は数法術で氷の槍の弾幕を張って敵をこっちに近づけない。  
更にはまだ何かのコードを展開しようとしている。

「コード ギガンテス  
巨人」

すると空气中に水が集まったかと思うと瞬時に凍る。

それはクリスタルのような形をとると氷の人形になってそれを無  
数に生み出す。

冬香の無敵艦隊久しぶりに見たな。

「・・・おい。お前の学友はチートか？」

「いや、むしろ全員まだ全力じゃない。それに注目すべきはシユ  
ウだよ。・・・できないけど」

「?・・・オレッチにもわかるように言ってくれ」

「耳を澄まして」

かすかに風を切る音が聞こえる。

その音がするたびに魔獣が一体ずつ地面に倒れていく。

魔獣は自分が何をされたのかわかってないと思う。

「……！？……三谷殿？あのシユウという御仁じゆんが超高速で動いてるように見えますが？」

「うん。シユウは魔法こそ使えないけど薬と格闘はピカイチ。たぶんボク等の中で一番強い」

「いえいえ、私はまだまだですよ」

いきなりボクの後ろから出てきてよく言つよ。  
ボクとリカとスズ以外は超驚いてるよ？

「では、ソラさん。万が一にも怪我をした方にはコレを」

そういうとボクに薬ビンをいくつか渡す。  
それぞれに何の薬か書いてあるから大丈夫だ。

「わかった。ボクは何もできないけどがんばれ」

「普段はいつも人一倍がんばってますからいいですよ」

そういうとシユウはふつと消える。

またその拳一つで戦いにいったんだろうね。

「三谷君たちは何者？一人は無詠唱で剣から魔法出すし、あの年で数法术を完璧に使いこなすし、異常な戦闘力をもつ人がいるし・

」

「まあ、そんな集まりだよ」

ボクは杏奈の疑問を適当に返して言う。

「……来おったかッ!!」

龍造さんがいきなりボク等の周囲に結界を展開。

すると、少し遅れて炎の魔法が結界にぶち当たって轟音を響かせる。

「まさかの本命？」

炎の魔法でここまでの威力はおかしい。

「最悪じゃな。ライネル、お主がこやつらを守れ」

「へいへい」

そういうと龍造さんは結界の一部を解除して外に出る。

「誰じゃ！出てこんか!!」

「ガハハハハハハハハハハ!!まさか『結界の』か!？」

すると龍造さんの目の前に身長が二メートルはあるつかという大男が現れた。

何故かスキンヘッドで上半身裸だ。

「……やる事が一つしか思い浮かばない。

「今すぐ警察に通報しよう」

「おい!?!いきなりそれは無いだろう!?!」

「……『豪炎』か……。おい。ライネル。わしメンドイからおぬしやれ」

「え……。ここは龍造さんが適当にぶちつとやっといってくださいよ」

「あ、あの……。あのおじいさんは大丈夫ですか？あ、あの人強そうですね？」

四条さんが心配そうに言う。方や、力が強そうな大男。もう片方はひょうひょうとした雰囲気を持つおじいちゃん。

確かに心配だ。コレは確実にアホの頂上決戦的なものになりそうな気がする。

「ああ、大丈夫。あの人僕より遥かに強いから」

「は、はあ……。でも……」

「大丈夫。龍造さんはそんなぐらいで死なないからむしろ死ぬところが想像できない」

「わしだってさすがに寂しいと死んでしまっくんじゃぞ？」

「うおい！？オレサマを無視するな！」

いきなりスキンヘッドがブチギレル。

「で、おぬしはもっと南のほうじゃと思ったがの？」

「領地拡大のためにここに来たんだよ！！バカだな！！『結界』  
！！！」

「……おぬし、先日の会議でできるだけ侵略はせんように決ま  
ったのを知つとるか？」

「はあ？オレサマは寝てたから知らん！！」

「……ライネル「イヤです」……」

魔王にはまともな人がいないようだ。

全員が奇人変人とか……大変そうだね。

「おい、さつきからお前んトコの理事長はなに言ってるんだ？」

「……まあ……うん……いろいろあるんだよ」

ボクはあいまいな笑みで答える。

「まあ、予想はついておる。おぬしのことじゃ執事あたりに無理  
難題を押し付けてコレをしとるんじゃないやろう？おぬしのところの行政  
は部下が血の涙を流してやっととるらしいの？」

「は、はあ？お、オレサマがなんみみっちいことするかって！！」

「……目を見て話さんか」

どうもこの人はかなりの外道のようだった。  
しかもものすごいバカ。



「ライネルさん。何で『豪炎』なの？」

「豪快な炎の魔王って意味だよ」

「何か強そうだね〜！」

「・・・アホさ加減がにじみ出てる」

ボクもそう思うよ。

「そんなことよりだ！！魔王の中でも最強を誇るお前に勝てばオレサマが一番つつーコトだよな！！！」

そういうと向こうのスキンヘッド魔王は腕に炎を纏わせるとそのまま突撃してくる。

魔装系っばいね。

「喰らえ！！ ヒート・ナックル 燃える拳 ！！！」

「・・・おぬし、アホじゃな」

龍造さんは何もしない。

ただ立ってるだけ。

周りの生徒やレイ先生は叫んでるがボク等はいたって冷静だった。ボク等も戦う龍造さんを見るのは初めてだけど、どこかで龍造さんなら大丈夫だと思ってたんだと思う。

相手の拳は龍造さんの周りに展開された結界によって阻まれる。

「ハッ！！そうじゃねえとつまんねえよな！！ バーン・ベネトレイト 爆炎の槍 ！！！」

そういつと手を貫手にしてまた龍造さんに飛び掛る。

一点集中の攻撃だったのか結界が壊れる。

龍造さんはすると腕を振るう。

そこにはいつの間にか透明な丸棒が握られていた。

向こうはそれに気づくとのけぞって回避。

そのままバック転して距離をとる。

「……そうじゃな……いい機会じゃしの……ソラ？」

「はい？」

ボクは急に龍造さんに名前を呼ばれて返事をするけど声が変わる。

龍造さんはそれには構わずにそのまま続ける。

「おぬしはわしの秘術を操れる可能性を持つておる」

「秘術？」

「……まさか龍造さん、アレをするの？ たかが『豪炎』に？」

「ちょうどいいじゃろう？ 何のためにわしがここにソラを入れるようにしたか知らんのか？」

「あ……二人とも何言ってるの？」

ボクは話についていけない。

「まあ、それは聞くより見たほうがいい」

「では、やるぞ？久しぶりじゃからの・・・」

龍造さんは武器を右手に持つと左手を前に突き出す。すると、何も描かれていない魔法陣が出現。

「・・・ソラと一緒に魔法陣の構築？」

「わしもの、真言は詠唱せんとできん。もちろん、詠唱中は精神集中のために動くこともできん。じゃが・・・」

そう言つと、龍造さんは魔法陣を展開したまま敵に棍棒を叩きつける。

その時、ボクはあり得ないと思つて、思わず ツクヨミ 月詠 をして確認してみたけど・・・やっぱりそうだ。

「何で魔法陣で真言を構築してるのに動く・・・てか、戦えるの！？」

「え？どういふこと？」

「アレが『結界の魔王』、龍造さんの秘術・・・というか特殊詠唱法。同時並行処理詠唱つて言つてた」  
パラル・ライン・スベル

ボクは右を見ながら左を見るなんて芸当はできない。でも、龍造さんは明らかにそれに近いレベルのことをしようとしている。

「いや、実は龍造さんは詠唱を除いて最大五つまでの詠唱を組める。今回はその応用で、真言を組みながら戦っている。もし、龍造さんが本気なら、五つ以上の詠唱を展開しつつ、さらにはそれを合

成して戦える。でも、五つはあくまで僕が見た最大数だ。ひよつとすると、それ以上の詠唱ラインを組めるかもしれない」

龍造さんは魔法を展開したままで戦っている。

コレがこの詠唱法の強みなんだろう。

複数を同時に進行。こんなことができれば詠唱のタイムラグなんてあつてないようなものになる。

ボクは完全に魔法のタイムラグが真言以外は無い人間だ。でも、ボクがコレを取得すれば戦いながら詠唱することができる。その間にボクは誰かに守ってもらわなくていい。むしろ先頭に立って戦うことすらできる。今の龍造さんのように。

「ッ!? なら、オレサマの切り札を喰らえ!!  
陽炎拳かげろっけん !!」

「遅いの・・・  
絶界ゼツカイ」

すると、龍造さんの魔法が発動。

龍造さんが丸棒を突き出す。

スキンヘッドの魔王はヤバイって顔をしながら大きく右に跳び出す。

すると、丸棒の先、5メートル程の空間が歪む。

次の瞬間にはその歪みに巻き込まれた木々や地面がまるで最初から無かったかのように消え去った。

「・・・どうじゃ? わしのこの魔法は一定範囲内のありとあらゆるものを問答無用で消す。消滅属性のような制約はないぞ? それに手加減されてわしに傷一つ付けられんとはな最後の絶界ゼツカイも本来はわしを中心に発動させる術じゃぞ?」

あまりの衝撃的過ぎることにこの光景を見ていた全員が何もいえ

ない。

魔法の制約とかそんなものは関係なかった。確実にボクの『月』を越えるまでに魔法の常識を覆してる。

「ひ、非常識すぎる・・・」

「・・・おぬしが言うか？わしはの、結界で封印できんかったのはソラだけなんじゃぞ？」

・・・よく考えるとボクは地味にすごいことをしたのかも知れなかった。

でも、龍造さんに気を取られて、ボク達は気づかなかった。

四条さんの後ろにいつの間にか魔獣がいたことに・・・。  
ボクが気づいたの目の痛みだった。

「危ない！！ 月守ツキモリ！！」

四条さんは幸いにもボクのすぐ近くにいた。ボクは魔獣と四条さんの間に入るとつさに魔法の盾を展開。

ギインと金属同士がぶつかるような音が響く。

そして、ボクは忘れていた。まだ、月詠ツクヨミをしてたことを。更にはその目で魔獣を直接見てしまった。

「ぐ、ああああああ！！？？」

目に激痛が走る。

魔獣の呪力を見たせいだ。

魔獣はその隙を逃さずに盾ごとボクを吹き飛ばす。

ボクは死ぬような思いで 月詠ツクヨミを解除しようとする。

でも、気づいたときにはボクは既に魔獣に間合いを詰められてい

た。解除する暇どころか回避する暇さえない。

龍造さんもかなり焦っている。ライネルさんはスキンヘッドの魔王に何か言ってる。

ヤバイ!?

「アンチ・シエル  
相殺殻　!!!」

「　我、汝と共にあり!

其は吹き荒れる暴風の風!

わが意に応え、風を加護をもたせ!

汝、名をシルフ!!!」

ボクの前に盾が展開されて、更に魔獣の後ろから誰かが詠唱をする。・・・いや、ちよつと違う?

そして、その人は魔獣を指さしている。

「かせ　やいば  
風の刃　!!!」

風で構成された無数の鋭い刃が魔獣に切りかかる。

断末魔の悲鳴を上げる魔獣。

すると、急にボクの目から痛みが引く。

そして、魔獣を見ると呪力が消えていた。  
変わりに魔法が放たれた方向を見るとその射線上には四条さん。  
しかも、傍らには何だか半透明の小さな丸い物体がふよふよと浮  
いている。

「だ、大丈夫ですか！？・・・あ、あたしがボーっとしてたばかりにつー！！」

「ソラ君大丈夫！？」

「みやあ〜」

ボクのところのスズ、四条さんが駆け寄ってくる。ついでにレオも。

ボクは大丈夫って言おうとした。  
でも、二度あることって三度あるんだね・・・。  
ボクの足元からなにやら不穏な音が響く。

「「「・・・え？」「」」

いきなり地面が崩れた。

「・・・今更ながらにここに来た目的を思い出す。  
地盤が緩んでるからその対策。  
たぶん、この辺は龍造さんの魔法でかなりやばくなってたんだろ  
う。」

そして、ボク等4人というトドメ。

「神様、見事なフラグです。この野郎！！！」

「ソラ！！！？？」

「え！？きゃあああああああああ！！！？？」

「~~~~~！！！？？」

「ソラ！？」

リカの驚きの声が聞こえたような気がする。

そしてボクとスズ、四条さんは地面に飲み込まれてしまった。



18話・CHECK CURRENT

side空志

………何だかボクの体がやらかいものに包まれてる。

目を開けても真っ暗で何もわからない。

とりえあえずボクは地面に手を着いて起き上がろうとする。

「っうん……」

「……」

そういえばボクはここに落ちる前にスズは魔法で何とか防御しているのが見えたからレオをスズの方に向かわせて……というか、全力でぶん投げて、ボクはパニックに陥ってる四条さんを瓦礫から守るようにして抱きかかえた気がする。

だから！！これはそんなじゃない！！

事故なんだ！！

そこで四条さんが目を覚ます。

「……ご、ご機嫌麗しゅう……」

四条さんはきよんとすると自分の体を見る。  
すると、彼女の胸にはボクの手が！？

「……ね」

「違う！？これは事故だよ！？」



「おい！ソラがどうした？」

「・・・リュウ？」

リカは視点が合っていない目でオレを見る。  
何となくだが理解できた。

「ソラに何があった！？つか、どこだ！？」

「！？・・・ソラ！」

そういうとリカは立ち上がって目を閉じる。  
ヤバい！？こいつ何かに変身しようとしてる！？

「魔法剣 影縫い ！！！」

オレはすぐさま魔法でリカの影に剣を突き立てて拘束する。

「・・・邪魔しないで」

普通の姿からは想像ができないくらい冷たい声でオレに言う。  
周りにいるこっちの学生もかなりビビってる

「おちつけ！おい！！ソラはどうなった！？」

「さ、さっきその地面が崩れて・・・それに・・・」

マジかよー！？

なら、こいつは地面に生き埋めか！？

「・・・いや、大丈夫かもしれない」

そういったのは引率の先生か？

さっきソラがレイ先生とか言ってたな。

「この地下は遺跡がある。ひよつとするとその中にもいるかもしれない」

「本当！？入り口はどこ！？」

リカがこつちを向いてレイ先生につかみかからんばかりの勢いで聞く。

「ああ。学園の中にある。だから、サリナ理事長に許可を貰って他の先生たちに協力してもらって・・・」

「そんなの待てない！！今回は戦闘ができる先生がいないからアタシ達に頼まれたんだよ！？なら、アタシだけで行く！！」

そういうとリカは力づくでオレの魔法の拘束を解いた。

「うおい！？コレは他の魔法と違って鎖とかで縛らないから解くとかは術者以外にはできないんだぞ！？」

「少し落ち着いてください！！」

シユウはそこで話を聞いてたのかりカの首に手刀を叩き込もうとする。

しかも今のシユウは既に薬ドールベینگの使用 중이다。

リカでも対応が難しくなるレベルの攻撃を放つ。

「遅いッ!!」

「な!?!がッ!?!」

リカはシュウに向かってシュウ以上のスピードで回し蹴りを放った。

「何でソラが関わるとそんなに強くなるのよ!?!コード  
氷地獄コキョウトク  
!?!」

冬香もガチで魔法を使う。

一気に周囲の温度が下がり、周りが凍りつく。

ハチャメチャな魔法の応酬に周りのオレ達をよく知らないヤツ等は驚愕の表情を浮かべる。

「つて、おい!?!アンジェリカさんは仲間じゃないのか!?!」

「そ、そうよ!?!さすがにそんなコトしたら死ぬよ!?!」

「仲間だからこそだよ!?!一人で行かせれるか!?!それに、今のあいつはジジイでも止めるのは無理だ!?!」

「はあ!?!何をワケのわからないことを……」

「邪魔を……するなッ!?!」

リカから魔力があふれる。

オレはソラみたいに魔力を見れるわけじゃないがあまりの密度にオレでも可視できる。

「・・・あれは・・・アンジェリカ殿ですか？」

「真正正銘、アンジェリカ・シエルス、よ！！少しコレで頭を冷やさない！！」

ビキビキと音を立ててリカのいる方向が凍っていく。  
だが、たどり着くのが遅かった。

ヴァンパイア・スキャンジ ミスト  
「吸血呪 変化・霧」

そういうとリカの体がブワツと黒い霧になる。

そのまま黒い霧は地面が崩れあたりの割れ目から地面にもぐっていった。

「畜生が・・・」

オレ達はコレをさせないためにあいつを気絶させてでも止めようとしたんだぞ？

「お、おい。さっきのはどういうことだ？」

「・・・ジジイ。隠すのは無理だ」

「ぜえー・・・はあー・・・そうじゃな」

「・・・」

ジジイは今までライネルのヤツと一緒に『豪炎の魔王』をボコしてたらしい。

息が切れるまでボコしてたから既に豪炎のヤツはボロ雑巾にな  
って痙攣してる。

「あれはどういうことだい!？」

「……私達は一部を除いて人間ではありません」

「そう。わたし達の中で人間はソラに鈴音、それとわたし。残り  
は魔物よ」

「そして、オレ達は巷で噂の『闇夜の奇術師団』だ」

全員の目が驚愕に見開いた。

side 空志

「……………ごめんなさい」

「もう慣れたよ……」

「助けてくれたのに……ごめんなさい」

「さすがソラ君だね」

「みゃ〜」

ボクは暗くてよくわからなかったから ホムラドリ 焔鳥 を使って周囲の索  
敵と照明に使っている。どうもここは見た感じ遺跡っぽい。

「で、何でリカがここに?というかどうやって?」

ボクはいやな予感がしつつ聞く。  
そういうとリカは言いづらそうに伝える。

「・・・魔法を使った」

・・・やっぱりか。

ボクは上を見る。

そこからは光が見えない。あるのはただの土の天井。  
やってくるなら霧にでもならないと無理だ。

ボクは指をほぐすとリカに思いつきりデコピンした。  
ぱちんという音が響く。

「痛ッー!？」

「約束したのに破った罰」

「でもでも、ソラが〜」

「冷静にここにリカ一人で来るより捜索隊組んで来てくれたらそ  
ちのほうがうれしい。それにリカはもっとボク以外の人にも慣れ  
た方がいい」

「・・・」

リカは涙目になってる。

ボクはそんなリカの頭をなでる。

「まあ、助けに来てくれてうれしかったよ」



「そ、そら〜」

「ちょ！？鼻水！？それに顔近い！？」

「なるほど、こつやってソラ君はリカちゃんを骨抜きにしてくんだね〜」

スズがよくワケのわからないことを言ってるけど、今はそれどころじゃない！

ボクはティッシュを取り出すとリカに渡す。

リカにそれで鼻をかませるとボクは自分の胸元も拭く。

「あ、あの・・・」

・・・忘れてた。

ここには四条さんがいたよ。

「・・・何でございましょう？お嬢様？」

「え？・・・お嬢様、じゃ、ない・・・。アンジェリカさん・・・  
フィジカルブースト  
身体強化 以外使えないって言ってた」

「どうする！？バレそうだよ！？」

「え？今日のお弁当はサンドイッチだよ〜？」

何でスズのときはいつもアイコンタクトが食べ物方面に！？  
ボクは次の展開を予想しつつリカにアイコンタクト。

「・・・・・・・・・・／／／／／」

「うん。わかった／＼／＼」

「何が!？」

絶対にわかってない。

何か子供は二人がいいかになって変なところにトリップしてるし!？

「あ、あの・・・」

「・・・気のせいじゃない？」

「・・・キ、キス以上の関係で、ですか？」

「そっち!？」

それは根も葉もないうわさだよ!？

「や、やっぱりウソでした」

あ。

コレじゃボクは別のことを隠そうとしてたんだよ!?!っとなる。  
カマをかけられた・・・。

「・・・いい。言う」

「リカちゃん？」

「・・・いいの?」

「少なくともソラは味方でしょ？」

「まあ、そだけどさ……。でも、ボクとしてはもちよっと人間嫌いが治って欲しいかなって……」

「あ、あの、ほ、本当にさっきから何のは、話を？」

「いや、いろいろと事情とか「アタシは吸血鬼ヴァンパイアなの」うわ～。すっげー思い切りがいいですね!？」

思い切りがいいけどすぐにボクの後ろに隠れたら意味が無いと思うよ？

ボク等は四条さんの顔色をうかがう。

すると、そこには驚いた顔の四条さん。

でも、ピクリとも動かないところを見るとフリーズしてるようだった。

「おーい。大丈夫？」

「奏ちゃん大丈夫？」

「……」

リカはボクの後ろで縮こまっている。

ボクは手を四条さんの前で左右に振るけど気づかない。

「……どうする??」

「何とかなるよ～」

「……っは!？」

「お?元に戻った？」

「へ?さ、さっきの、ほ、ほんどですか？」

「「うん」

「……」

「え、でも、吸血鬼ヴァンパイアは日光が……」

「始祖の血統らしいよ？」

「……じゃ、じゃあ、何で人の血を」

「ボクが何故かりかに血をあげてます。で、カザハがよく言っていたのはリカが吸血してるときの」

「……で、でも、あの魔法は三谷さんと……」

「ゴメン。あれさ、嘘なんだよね。ボクの真言にはあれ以上のことはできない。それにいらぬ混乱を生むでしょ?リカは確かに吸血鬼ヴァンパイアだけど……つらい過去があったんだよ」

「で、でも、何で三谷さん以外にも知ってるんですか!?!た、例えば……間学園の理事長さんとか!」

「みんな知ってるよ〜」

「まあ、最初から話したほうがいいね」

ボクはこの四月から自分の周りに起きたことを全部話した。  
四条さんは信じられないといった顔だけどね……。

「まあ、しょうがないよね……」

「……で、でも、それなら説明の行くところが、い、いくつかあります」

「確かに。いくら魔法が高校課程で実践的に行われるって言ってもボクとスズは知らなさ過ぎるしね。特にこの世界の常識とかもある程度は知ってるつもりだけどまだまだ知らないことだらけだしね」

「え？ そうなの？」

自覚の無い通り名が『魔法壊し』アンチ・ウィザードは放っておこう。

「で、でも、それなら三谷さんはオッドアイのはず？ で、ですよ  
ね？」

既にさっきボク以外のメンバーのスタイルを見てたからね。

リュウが魔法剣使って冬香が数法術、シュウが薬と併用して格闘

術。

そして、スズは既に学校のほうで見てるし、リカは自分から吸血ヴァンパ鬼イブって言った。

なら、後に残されたのはボクだけだ。

未知の魔法を使うオッドアイの『奇術師』マジシャン。

ボクは今まではめていたカラーコンタクトレンズを外す。

「……?」

でも、そこから出てきたのはカラーコンタクトレンズと同じ日本人の茶色の目。

「ツクヨミ月詠」

「!?!」

ボクがそう言った瞬間に目がオッドアイになったのがわかったのだろう。

「コレがボクがマナ、あるいは魔力を見るときに使う特殊魔法。龍造さんはコレがばれないようにカラコンをつけるように言ってたんだよ……って、ぐぼああああ!?!」

「ソラ!?!」

「ソラ君!?!」

ボクはまたまた目に激痛を感じた。

周りを見てみると近くに腕っぽいのが……さっきの魔獣の一体のものかな?

てか、グロい。

「ま、マジでい、いた……い……ま、マナの……そう、さ……」

ボクはこの呪力を何とかできないかとマナの操作を試みる。でも、うんともすんとも言わない。

「ね、ねえ……じゅ、呪力ってどうやったらできるんだっけ？」

「え？呪力ですか！？」

何故かものすごく驚く四条さん。

……そういえば 月詠ツクヨミ していると四条さんの周りに何か浮いてるのが見える？

まあ、今はそんな事はいい！！速く教えて！？

「ま、魔力が魔法の使用によって乱れると発生するモノです。だから、呪力は一般的には、み、乱れた魔力の流れを正せばいいとされていて……」

なら、この呪力を消すには、今、この腕にまとわりついてる呪力をひきはがす、そして、本来あるべき姿にしてマナに還元？

いや、わかんない。

「……………なせば成る！！！」

「結局は気合なんだね」

ボクは秘儀。魔力の手掴みを発動。

地味に手がしびれるような感じがするけど気にしないでおう。

「……………え？……み、三谷さん！？そ、そんなことしちゃダメです！？」

「へ？何が？」

「あ！?・・・その・・・」

四条さんは何か言いたそうだけどボクは自分の目が本格的にヤバそうだからそのまま続行。

魔獣の腕の呪力をひきはがすと呪力はボクの手の中にボールのようになつて収束した。

「ソラ?それ何?」

「あ、見えるの?これが呪力らしいよ」

「呪力?」

「呪力!」

わからないスズのために説明。

こんな現象が起きたことがわからない四条さんにボクは説明した。

「よくわからないけど魔力を加工するとなるんじゃない?」

「そ、そうなんですか?」

「・・・でも、これどうしよう」

こんな風になったら周りに何も被害を及ぼさなくなった。ただの黒いボールというか・・・。

「名付けるなら『呪玉』?」

へんま

まあ、後で龍造さんに相談してみよう。



さて、今度はこっちなかな？

「で、四条さん。さっきから気になってたんだけど、その周りの丸っこいの何？」

「！？・・・み、見えるんですか？」

「うん、たぶん。なんか周りに幾つか浮いてるね」

「・・・・・・・・精霊術」

そう言ったのはり力。

「精霊術？」

「・・・・・・・・精霊にお願いして自分の代わりに魔法を行使してもらう方法。ソラのマナ操作の魔法に近い」

「へ〜。じゃ、普通に強いんじゃない？何で戦争に出なかったの？」

ボクが聞くけど四条さんは何故か唇をわなわなとさせ、おびえてる。

「か、奏ちゃん？」

「・・・・・・・・精霊術はその人に魔力がなくても精霊を知覚できて、精霊と心を通わせればできる。それに魔法の構築も精霊に任せるの。だから、魔法使いからは精霊使いは卑怯者呼ばわりされて差別されてる」

「なッ!？」

「!？」

知らなかった。

たかが魔法の展開系統が違っただけで・・・そんなことが。

・・・つまり、そう言うことか？

「・・・精霊術は遺伝？」

「ううん。突発的なもの。中には家族からも見放される子供もいる」

「そんな・・・そんなのひどいよ・・・」

「何がわかるんです・・・」

そう言ったのは四条さんだった。

いつものおどおどとした雰囲気からは想像ができないほど冷酷に・・・そして、暗い。

「ただ、精霊が見えるだけで!!卑怯者呼びわりされて!!わたしには魔力がほんの少ししかなくてッ!!それでもがんばった!!でも、周りはわたしが精霊術が使えるってわかると途端に卑怯者呼びわりした!!」

すごく、辛そうな表情で四条さんが言う。

・・・ボクはダメなヤツだ。

知らなかったとはいえ四条さんが知られなくなかったことをこの

目で暴いてしまった。

「わたしはツ……！ただ……精霊さんとお話ができるだけなのに……」

「……」

リカとスズの二人はまるで自分達がやったことを悔いるような表情だ。

ボクもそうだと思う。

でも、ボクは他の人と違って気付いたことがある。……この目で。

「……四条さん。君も呪力を感知できるんだよね？」

「!?!?…な、何で？」

「ボクは『奇術師』だよ？これはちょっとした手品。ボクが魔獣にやられそうになったとき、四条さんはとっさに精霊術で助けてくれたよね？」

「え？あれがそうなの？」

「たぶんだけど。普通の魔法とは違う特徴があったんだ」

「……特徴？」

「うん。たぶん、呪力を消せる」

「「本当!?!?」」

「たぶん。ボクが見たときに四条さんの魔法のときだけ一撃で沈めた。そして、呪力が消されたのをこの目で見てる。そして、ここに来なきゃいけない理由って精霊に頼まれたんじゃないの？呪力を消すのを手伝ってほしいって」

「……そうです。精霊さん達は自分だけでは魔法を使えないの……そこで、精霊術を使える人が媒介になって精霊さんと一緒に使う」

「で、遠くの魔獣がわかったのも精霊に教えてもらったんだよね？」

「……はい」

なら、話は簡単だ。

「ありがとう」

「……え？何で……」

「いや、普通に考えてよ。四条さんがいなかったらボク等は魔獣にやられてたかもしれないんだよ？」

「あ……ソラ君全然だったもんね」

「ソラは普段はがんばってるからいいの!!」

「でも、リカは本気でできなかつたし……あれ以上は万全な態勢じゃなかつたら確実に誰かが死んでた」

主にボクとかボクとかボクとか……。  
何故かあの瞬間で狙われてたのはボクだけってミラクルが起きてるし。

「それに最後はボクはホントに死にそうだった」

「で、でも……。精霊術は魔法使いの敵……」

「なら、アタシは世界の敵」

「!?!」

「アタシはソラ達に会って、本当によかったと思ってる。こんな・  
・災厄でしかないアタシをソラは、みんなは、魔窟ネストの魔物達は受け入れてくれた。アタシは自分が吸血鬼ヴァンパイアなのが嫌。でも……。ソラ達に会えたことだけは、この血に感謝してる」

「それって本人を目の前にして言うことじゃないよね?」

「でも……」

「でもさ、ボクが見た限りじゃそれほど癖が強い魔法もないと思うんだけどね。精霊術は自分の代わりに行使してくれる精霊の技量とか仲の良さでいろいろと変わってくる。しかも、精霊の気分によるところがかなり大きい。これってさ、精霊の気分が乗らなかつたら魔法すら使えないってことだよな?」

「何ていうか大変そうだね」

「いや、実際にものすごく大変だともうよ？この魔法構成なら普通に詠唱使った方が安定してる。精霊術は詠唱よりもがんばらないとダメだよ」

少なくとも解析結果では。

てか、この目ってホントにいろいろわかるな。

「そんな風に努力とかしてもバカにするとか何？その人だれ？今からシバき上げに行こう！」

「「お〜!!」」

「え？ちよつと!？」

「ま、そんなわけでボク等はこのことを絶対に誰にも話さない。むしろ応援するよがんばれ」

「え……」

ボクが言った途端に四条さんの目から涙があふれてきた。

「つて!?!何で!?!何で!?!ボクなんかダメだった!?!」

「ち、ちが……そ、そんな風に言われたことなくて……」

「……辛かったよね……」

以外にも、リカが四条さんの頭を撫でた。

あのリカが!!

人間恐怖症のリカが!!

ボク以外が触ると過剰に反応するリカが!!

「じゃ、写メ!!」

「か、カメラどこ!？」

「何で!？」

「これは永久保存だよ!!リカが自分からとか!!」

スズもボクの隣でうんうん言ってる。

「あ、ありがとうございます」

「いや、むしろこっちがありがとう」

「・・・三谷さん、いえ、空志さん!!」

「・・・どうしたの?」

「師匠と呼ばせてください!!」

「何故に!？」

「ダメ!ソラはアタシの!!」

「だあー!?!だから抱きつくな!!」

「そんな風に言われたことがなくて・・・とてもうれしくて・・・  
それに魔法の使い方まで精霊を見れるから・・・」

「あゝ・・・確かにボクなら何とかできそう」

「じゃ、これからお願いします、師匠!」

「だからやめて!」

何故かボクに弟子ができました。

認めないけどね!?



## 19話・EXPLORATION

side空志

「あ、あの、アンジェリカさんは師匠と契約を結んでるわけではないんですよね？」

「うん。てか、ホントにやめて。ソラでいい。何回も言うけど、リカはただ単にみんなと仲良くしたかっただけ。リカ自信が言ってたでしょ？それで、ボク等がリカの最初の友達ってことになるのかな？」

「うん。アタシの秘密を知っても、って意味なら」

「でも、アンジェリカさんも師匠以外の人の血を飲もうとは思わないんですか？」

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理！」

「吸血鬼ヴァンパイアなのにソラ君の血が飲めなくてもいいの〜？」

「いいの〜！」

「いや、よくないでしょ？龍造さんがリカが全然ボク以外の人の血を飲めないもんだからこっちに送ったって聞いたけど？」

「……モノは言いようだね〜」

「どういうこと？それに何でリカは顔が赤くなるし」

今、ボク等はいろいろと暴露大会をしたにも関わらず結構仲良く遺跡っぽいところをさまよっていた。

動かないほうがいいんだろうけど、四条さんの話によるとここは学校の地下遺跡の可能性があるらしい。学校から結構離れたここにまで及んでいるならこの遺跡はかなり広大だ。なら、食料が尽きる前に出ないと確実にヤバイ。どんなにがんばっても三日ぐらいしか持たない。まあ、リカはガマンすれば一週間ぐらいは大丈夫だけど・・・。

とにかく、少しでも早く見つけてもらおうとボク等は学校のほうに向かって進んでいる。

ちなみに ホムラドリ 焔鳥 で周りを照らしてる。

コレ、攻撃よりこうやって使うほうが便利なんだよね。

「でもさ、学校ってこっちでいいの？」

「え？わ、わたし知りませんよ？」

「・・・スズ？リカ？」

話をふるとリカとスズはいい笑顔で親指を立てる。

・・・わからないんだね。

「・・・よし、確認しなかったボクも悪い。精霊はなんていつてるの？」

「そ、それが・・・精霊さんにもよくわからないらしいです」

・・・コレって遭難？

既に危険度がレッドゾーンを振り切ってるよね？

だが、こっちには秘密兵器がある！

「よし、レオ。いつも見たく何か発見してきて」

「にゃ」

そういつとボクの足元にいたレオはトテトテと近くをふらふら歩く。

すると、何か見つけたのか地面を引っかく。

さすが。地味にこの子はいろいろなものを見つける。今回もコレで何とか……。

カチッ

「……何故だろう。ものすごく嫌な予感がする」

「……」

すると、後ろからゴロゴロという音がする。

ボク等は恐る恐る後ろを向くとそこにはインディ・ジョーンズもビックリなぐらいベタな大きな球状の岩がこっちに転がってくる。

「……ぎゃあああああああ……!?」

「レ、レオ!!でかくなって!!」

そういうとレオは大きくなる。

そして、ボクの意をくんですぐに咆哮霸をしてくれる。でも、岩に当たると咆哮霸が霧散してしまった。

「……え〜!?!」

ボクはすかさず 月詠<sup>ツクヨミ</sup>。  
解析するとどうも特殊な魔法がかけられているみたい。  
たぶん、ボクの真言ならやれる。  
でも、そんな暇は無い！  
まあ、結論を言っちゃおうと・・・。

「逃げろ！！レオに二人！！こっちに一人！！来い！！盤<sup>ボード</sup>！！」

そういつとボク等は全力で逃げ出した。

レオは大きな体躯に似合わず翼を使わなくても機敏な動きができる。もちろん、翼を使ったほうが格段に速い。

ボクの盤は<sup>ボード</sup>ログさんの下で造った新型で違法か・・・もとい、メ  
ンテしてあるから大丈夫！！・・・だといいな。

「し、師匠は、速い！！！」

「何で奏がソラのところにいるの！？」

「リカちゃん！？今はそんな場合じゃないよ！？」

「四条さん！？くつつきすぎ！！」

「死にたくない！！！」

（数十分後）

「し、死ぬかと思った・・・」

「い、生きてるってすばらしいことなんですね……」

「こ、怖かった」

「……ソラのところに乗れなかった」

何とか岩をまいた。

今、ボク等は遺跡の広場みたいなところにいる。

でも、レオでも間違うことがあるんだね。

ちなみにレオは疲れ果ててボクの制服のフードに入ってる。

……地味に首が絞まるけどしょうがない。ある意味こいつが一番がんばったから。

「でも、レオが疲れてるのは結構まずいかな？」

「うん。もしも次にあんな畏トラップがあつたら全員で逃げられない」

「……しょうがない」

ボクは三つの魔法陣を展開する。

それぞれ、赤に黄色に緑だ。

「ボクの呼びかけに応える……」

朱雀スザク、風狸フウリ、雷狐ライコ！

そういうと赤い鳳に、大型犬ほどの大きさがある緑の狸に黄色い狐。

今回は最初から大きなサイズか。

でも、ストックが後、一回か二回だな……。

「何ていうか師匠って何でもありですね・・・」

「・・・ゴメン、ソラ。カバーできない」

「わ〜！スーちゃんにライちゃんにフーちゃんだ〜」

スズはそういうとボクの召喚獣達に突撃してる。

何故か召喚獣とスズは仲がいい。

「久しぶり。いきなり呼び出して悪いんだけど、緊急事態なんだ」

召喚獣たちに簡単に現状を説明する。

「ま、そんなわけでボクはいいから女子を守ってあげて」

そういうと召喚獣は心得たとばかりにうなずいたりしてる。

この子供はいざというときはそれなりに戦えるし、まあ、大丈夫かな？

「・・・でも、偵察は必要だね」

残念ながらボクの魔法にはそんなモノが無い。

ホムラドリ 焔鳥 デコイ は偵察って言うより囮だし・・・。

精霊は何故かよくわからないらしいし。

ボクが持つてる魔道具には今、役に立ちそうなものは無い。

・・・今度、サバイバル用の魔術符を作っておこう。方位磁針とか方位磁針とか。

「じゃ、これからどうするっ？」

「ソラに着いてく」

「ソラ君に任せるよ〜」

「し、師匠の行くところなら・・・」

ダメだこいつら・・・。

てか、ここは調べてみたけど特に何も無い。  
たぶん、安全。

さつきみたいな目にあいたくないしな〜・・・。

「よし。ここなら別に危険はなさそうだし・・・ここで救助を待  
とう」

「わかった」

「わ、わかりました」

「じゃ、ゴハンにしよう。お弁当セット!」

そういうとスズはポケットの魔術符から大きな重箱のような弁当箱と地面に敷くシート、その他もろもろ・・・。ボク等は見慣れたスズの弁当セットだ。いつもコレで間学園の屋上で昼ごはんを食べる。

ボクとリカは適当に座る。四条さんも少しためらった後にボク等と同じように座る。

「みんなで食べよう。いただきます〜す」

「「「「いただきます」」」」

そして昼食。

スズのゴハンはいつもと同じでおいしいね。  
まあ、周りが暗くて遺跡なのが残念だね。

「でもさ、今回は量が多くない？」

「もぐもぐ……うん。みんなで食べようと思ったからだよ」

「……ソラ、コレ、アタシも手伝った」

「ん？これ？……おいしいよ」

「……／＼／＼／」

「お、おいしいです……」

「ありがとうね」

そして、和やかな時間が過ぎていった。

ボク等はある程度食べると弁当箱を片付けて適当に雑談をしていた。

「でさ、リュウがドラゴンとか信じられなかった」

「だよね」。それにわたしとソラ君の出会いってレオちゃんなんだよね」

「みや」



「へ〜。ソラはそれまでごく普通の生活だったんだ」

「・・・でも、中学で不良数十人を相手にするのって向こうでは普通なんですか？」

「いや、全力で違うから。リュウがトラブルを連れてきてボクが巻き込まれてるんだよ」

「絶対嘘だ〜。だって、わたしはソラ君のせいで魔法戦闘に巻き込まれたんだよ〜？」

「・・・ソラを襲ったのはどこの誰？」

「・・・リカ、とりあえず鎌を仕舞おう・・・でも、遅いな・・・龍造さんたちならもう見つけてもおかしくないのに・・・」

「そっくだよね〜」

「アタシはソラがいればいい」

「だから、ボク以外の人にも慣れようよ？」

「・・・ソラが言うなら」

「あ、あの、あの人はそんなに優秀なんですか？」

そう聞いてきたのは四条さんだった。

「うん。だって、魔王の孫に凄腕の数術士、格闘術と薬のエキスパート。それがダメでも向こうのほうにいる仲間にも頼めばすぐ

に何とかなると思う」「

宇佐野さんは三秒以内にボク等が遭難したところを見つけれられるような気がする。

インチョーはエリアの力を借りれば何とかできるだろうし……。足手まといは田中だけか。

「でも、わたしが思うにソラ君とリュウ君の魔王と勇者の孫、親友コンビのほづがすごいと思うけどな」

「いや、あれは悪友だよ」

「……やっぱりリュウが一番の敵？」

「いや、仲間だから。さっきのどこに敵になる要素があったの？」

「……ライバル恋敵？」

「……なんだろう？よくわからないけどすくく否定しなきゃいけない気がする」

「ちょ、ちょっと待ってください!？」

「ん?どじしたの?」

四条さんは質問が多いね。

まあ、しょうがない。

「さっき、勇者の孫って……」

「ああ、ボクのじいちゃんは大谷隼人。龍造さんと唯一タイムン  
はれる人」

「……なるほど、だから師匠はそんななんなんですね？」

「……どうもボクはいろんな人からチート扱いをされる運命にあ  
るみたい。

酷い……。

「その人もそう思わない？」

「「「「？」「「「」

ボクは召喚獣たちに目で合図する。  
すると、すぐに臨戦体系をとってくれる。

「ソラ？何を言ってるの？」

ボクはあの後、念のためにカラコンをはめなおしてるからリカ達  
にはボクが 月詠ツクヨミ をしててもわからない。

「ボクの目は欺けないよ？それこそ魔力無効化キャンセラー体質並みに魔力が  
無いと」

そういうと隠れても無駄だと思ったのか急にボク等に向かって音  
も無く走ってくる。

ボク等に反撃の暇を与えずに何かしようとしてるんだらうけど……  
。。。

「ボクはアンタより速い人の相手をしてるからね」

ボクは左の銃を素早く抜いて銃を放つ。

相手も中々の反射神経のようで魔法の弾丸を避ける。

でも、ボクの銃に紋様が浮かんでることにまで注意が向いてない。

「甘いよ。      ライエン 雷燕      ！！」

ボクの銃弾が弾けたかと思うと敵の後ろに魔法陣が展開され、そのまま雷のツバメになって敵の背後から不意打ちを食らわせる。

敵は何が起きたのかわからないまま気を失っただらうね。

ボクは立ち上がると敵の近くに行く。

「さて、やっぱりこれって、昨日の・・・」

うん。たぶん間違いない。

こんな黒装束を二日連続で見るわけ無い。

そこまで思考をめぐらせると、奇妙なことが起きた。

黒装束の人から黒い霧みたいなのがあふれたかと思うと急に姿が消えた。

「・・・どういこと？」

「ねえ、ソラ。さっきのって昨日学校に忍び込んだ・・・？」

「たぶん」

ボクは ソクヨミ 月詠 をしたままで黒装束の消えた地面をしてみる。

「さ、さっきの人は!？」

「死んではないない。でも、何かの魔法で消えた」

「ソラ君の 月詠<sup>ツクヨミ</sup> で解析したら？」

「魔力が微量過ぎて無理」

ボクはそう言つと立ち上がる。

「……ひよつとすると何か厄介なことに巻き込まれてるのかな？」

今回の黒装束の侵入といい、魔獣に呪力。まあ、後の二つはあの  
変体魔王さん<sup>スキンヘッドのバカ</sup>なんだろうけどさ。

まあ、今は何はともあれ、助けを待ったほうがいい。

「……いや、よく考えるとピアス使えばいいじゃん!？」

「「……あ」

「?」

ボク等は通信用の魔道具のピアスを持つてる。

校則でピアスはダメなんだけど、ボク等は普段からカバンの魔術符に入れてる。

確か、ボクは腕輪に入れ替えたはずだから……。

「来い、ピアス!」

そういつとボクの手にピアスが現れる。

それを左の耳につけるとボクは通話機能を使う。

「コール、リュウ」

この言葉でリュウにつながる、はずなんだけど……。

「……でない」

「……こつちもダメだよ」

「アタシも」

「???」

……このあの古典的でベタな罫トリックには詳細は解析できなかったけど特殊な魔法で何か魔法の抵抗が無効化するコーティングがされてたっばい。

となると、この遺跡全体に似たようなコーティングがされているのかな？

でも、そんな魔力、魔法の反応はボクの目では解析できない。

「……何がどうなってるんだろう？」

「ソラに解析できないんならコレって相当なものだよな？」

「いや、ただ単にボクがまだまだこの力を使いこなせていないだけだから……」

「でも、今までは大抵のことはできたよね？」

「そうなんだよね。やっぱ、この力に頼りすぎたかな？」

「せ、精霊さんに聞いて見ると、ここは魔法妨害ジャミングされてるみたい  
です」

「……魔力妨害、ね」

ボクはここに来てから学んだことを思い出す。

魔法妨害はボクの使う具現化マテリアライズと同じ失われた魔法ロスト・マジックの一種だ。結界を張るみたいに一定範囲内に特殊な術式を組み込むことによって、ある程度の魔法の発動を阻害させることができるらしい。

で、今回は建物に対する攻撃系魔法の妨害らしい。そして、ついでに外部との交信も阻害。

「そして、極め付けにはここまで変な人に狙われるとか……ボク等って何か他人に狙われるようなこと……」

ボクは魔窟で智也さん達を全員返り討ちにしたことと、エセ陰陽師をぶっ飛ばしたことを思い出す。しかも、ボク等は魔物の間ではかなり有名ならしい。

……狙われる理由ありまくり!?

「結構あるね……」

「……ま、今はそんなことより、ピアスが使えれば問題が全部解決する。それに、魔法妨害もこんな大きな建物全体にしてるんだから、魔窟ジャミングみたいに結界の制御室みたいなところがあると思う」

もしも魔法妨害ジャミングの術式が壊れたときにはそこで龍造さんみたいに構築しなおせばいいだけだしね。

「じゃ、そこに行って魔法妨害を解除するの？」

「そういこと」

「で、でで、でも、あ、危なくないですか？」

「まあ、ソラ君なら大丈夫だよ」

「まあ、念のために朱雀たちもいるし。朱雀は確かに他の二体に比べると小さいけど、四条さんぐらいなら余裕で運べる。それに、何があってもボク等が全力で守るから大丈夫だよ」

「は、はい・・・ありがとうございます」

そういって何故か微妙に四条さんは顔を赤らめる。

それと同時に何故かリカから背筋が凍りそうなほどの殺気。

・・・何で？

「と、とにかく、行こう」

ボク等は再び遺跡の探索を開始した。



## 20話・RPG ROLL OUT

side空志

「何で!?!」

今現在、ボク等は何故かあの広間みたいなところから出て数分のところで罾トラップに引っかかった。

ちなみに今回は人形オートマターだ。

周りにある甲冑がホラーよろしくいきなり動き出してボク等はビツクリした。

で、その甲冑が幅、20メートルほどの通路を埋め尽くしてる。まさに百鬼夜行。

「……無理無理無理無理……」

「何でリカがビビってるの!?!」

「だ、だって、お化けだよ!?!怖いじゃん!?!」

「いや、君は西洋の妖怪筆頭だよね!?!」

妖怪が妖怪に怖がるというシュールな光景が出来上がった。

他の女子は、というと……。

「中にいる人、ずっとこの中に入ってるのかな?」

「あ、あの、この中には人はいないと思いますけど……」

「おゝ!?!さすが魔法だね!」

「た、確かに、珍しい魔法です」

ものすごく余裕だった。

召喚獣たちはがんばって甲冑の相手をしてくれる。

ボクは魔法陣を多重展開して、ホムラドリ 焰鳥 と ライエン 雷燕 を放つ。

でも、甲冑にはあまりダメージが無いみたい。

まあ、この魔法は対人用に殺傷性が実は低かったりする。

ボクはそこで銃を取り出す。

「ライセンシックウホウ  
雷閃疾空砲 ！！」

そういうとボクの魔法銃に紋様が浮かび上がる。

その状態でボクが引き金を引くと、雷を内包した弾丸が甲冑の大群をにぶち当たってまとめて何体かを吹き飛ばす。

ボクはそのままどんどん魔法銃で撃っていく。

「・・・し、師匠の魔法って他にはどんなモノが？」

「ん？ん？・・・後はごく普通の魔法ばっかだよ」

「ふ、普通の基準がわたしと師匠達で違う気がするんですけど・・・」

「ソラ〜こ、怖いよ〜！！！！」

「いや、できれば離れて。ホントに。全力で。てかき、コレって、大抵は魔法で動いてるって言うのがお決まりなんだしき、スズの魔法でさくつと・・・」

「え〜ソラ君がんばってよ〜。わたしの魔法は燃費が悪いんだよ〜?」

ボク等はそんな無駄口を叩きつつ甲冑を倒した。

「・・・はあ、ひとまずは終了?」

「ソラ〜もう、怖くて今日から一人で寝れない〜」

「いつも理由も無く寝てるくせに!」?

「・・・え?や、やっぱり、し、師匠達はそ、そんな・・・」

「違うよ!」?

「うん。そういう予定だから」

「てか、リカは好きな人がいるんじゃない?」

ボクはそういつつ周りを見る。

今回は魔法の痕跡が見れた。

どうも、コレはリオネが使う人形術の応用らしい。

どこかで魔法の制御をして、人形を動かす。

・・・じゃ、この魔法の制御先が魔法妨害の制御室につながってるかも。

ボクは 月詠 ツクヨミ で、今度は魔法線 パス を見る。

「・・・よし。こつち」

「え?何で?」

「この甲冑を解析したら人形術の応用だってことがわかった。だから、この制御先に向かえばいい」

「おおくさすがソラ君」

そついうとボク等は通路を歩き始めた。

カチツ

「」「」「」「」

「」「」「めんなさい！」

四条さんが歩いたあたりの地面の床石の一つがぼこってへこんでる。

そして、背後で何か大きなモノが落ちてくる音がする。

ボク等は恐る恐る後ろを見てみると、そこには今度は通路の天井までの高さがある、全長5メートルほどの大きなゴーレムがいた。

『……シンニユウシヤ。ハツケン……ハイジヨ』

「ライエン 雷燕 ー！」

ボクと召喚獣達が一斉に攻撃。

それだけでチリも残さずに消えた。

……以外に余裕だった。

『……ハソン……タイハ……シュウフク……』

急に砕け散った岩が一点に集まる。  
すると、また、さっきと同じようなゴーレムが出現。

「マジで!?!」

『・・・シンニユウシャ・・・キケン・・・オウエン、ヨウセイ』

ゴーレムがそういうところごとろごとろという音が聞こえる。

後ろから大きな丸岩が三つほど転がって来たかと思うと、最初にいたゴーレムの後ろで止まり、それらはまたまたゴーレムに変形した。

『『『シンニユウシャ、ハイジヨ』』』

「侵入者じゃない!!」

ボクは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> して核を探そうと思ったけど、こんなに数がいたんじゃ無理がある。それにリカはさっきからお化け怖いってボクの後ろで縮こまつてる。

「逃げる!! 来い! 盤!!」<sup>ボート</sup>

「え? きゃっ」

ボクはリカを抱き上げる・・・所詮はお姫様抱っこというヤツです。だって、後ろに乗せられないぐらいにリカが地味にパニックってたから・・・。

で、ボクはそのまま盤<sup>ボート</sup>で爆走。

後ろのほうから召喚獣達が二人を連れてくるのを気配で感じ取る。でも、そうやって逃げたはいいけど、今度は前からも数体のゴー

レムがやってきた。

「まずい……」

あれじゃ挟み撃ちにあう……。

「ソラー!!」

リカが指をさす。

その先には狭いけど通路らしきものがあった。

「ナイス!こつち!!」

そういうとボク等は急カーブして狭い通路に入っていった。

ここなら大きいゴーレムは入ってこれない。事実、入り口のほうで立ち往生してる。

「よかった。リカ、ナイス」

ボクは盤<sup>ボード</sup>で先に進みつつリカに言う。

「うん!!」

「で、いつまでしてるの?」

「そ、そうですね!そんな……お、お姫……」

スズはニヤニヤして、四条さんは顔を少し赤らめて言う。

「……あ」



そして、今度はガチャガチャと音がする。  
もう、何か慣れてきた気がする……。  
この、狭い通路の前と後から今度は甲冑がやってきた。

「何でこうなるの!？」

↳数時間後↳

「し、死ぬ……マジで」

「だよね……」

「さ、さすがに天井が落ちてきたときはどうしようかと思いまし  
た……」

「お化け怖いよ……」

もう、狙われてるよ。確実に。

ここに入ったことでセキュリティが働いて、ボク等はどうも排除  
対象になってるらしい。

「てか、ここにはそんな貴重なものがあるの?」

「い、いえ……ああ、あたしが聞いた話では、それほどのもの  
は無かったと……」

「なら、このセキュリティはありえない」



「そうだね。ボク等じゃなかったら大抵の人はすでに大怪我を負ってる」

なんだってこんなにすばらしいぐらいに守りが堅いの？  
それに、さっきから気になることがある。

「ボク等は何回も襲われてるのに、何故か魔力線バスから一ミリも離れてない」

まるでコレじゃあ、ボク等を制御室的なところに誘導しようとしてるみたいだ。

・・・よし。実験しよう。

「今から、あえて、魔力線バスから離れる」

「え？何で？」

「誘導されてるかもしれない。だから、あえてまったく関係の無い方向に向かって、確認してみる」

そういうと、ボクは目の前の道を進む。

少し進むと、うまい具合に三叉路に出た。

魔力線バスは一番右の通路に続いている。

ボクは一番左の通路に進んでみる。

「・・・さて、鬼が出るか蛇が出るか」

「わたしへビは嫌いなんだよね」

「わ、わたしは鬼のほうが・・・」

「でも、鬼人<sup>オーガ</sup>でガントさんって人がいるけど、普通に優しいよ？」

「・・・何でそんなにゴーイングマイウェイなの？」

ほんの少し、進んだだけ。それでおなじみのゴーレムさん御一行が出現した。

「さっきのところまで戻ろう！！」

そういつとボク等はダツシユで来た道に戻る。

そして、三叉路に着く。でも、敵はまだまだ追ってくる気満々だ。

「ソラ！どうするの！？」

「真ん中に！」

そういつとボク等は真ん中に飛び込む。

その瞬間に頭上からゴーレムが出現。

「今度は右の通路だ！」

「も〜疲れたよ〜」

「がんばれ！！」

後からの攻撃を召喚獣達に任せて、ボク等は死に物狂いで右の通路に飛び込んだ。

すると、右の通路は前方からは何も来ない。その代わり、後から

はさつきであったゴースト達が迫ってくる。

「コレで、はっきりした！やっぱり、ボク等は誘導されてる！  
」

「で、でも、何ですか！？」

「わかんない！！考えられるのは罠<sup>トラップ</sup>だけど、制御室につながるであろう方向にトラップしかける意味がわからない！もちろん。制御室方面を占拠されないようにそこらへんは厳重な警戒をしていると思う。でも、ボクなら誘導するにしても普通は制御室を制圧されないように遠ざけると思う！！」

「・・・でも、ただの魔法がそんなコトできるの？」

「それがおかしい点その二！まるで誰かがボク等を誘導してるみたいだね」

「ここはいろいろとおかしすぎる。

まるでボク等が来ることを知ってて、更には何故か重要な区画に誘導しようとしている。

・・・ま、考えてもしょうがない。ホントはやりたくなかったけど、やるしかないよね。

「よし、今からRPGの大前提をぶっ壊そう」

「「「「？」」」」」

ボクは走りながら言う。

みんなはよくわかってないみたいだけど。

「問題です。勇者系のRPGでできないことは？」

「……人を殴る？」

「確かにできないけど違う。今回はダンジョン的なところで」

「……シヨートカット？」

「そう。それ」

RPGでたまに鍵が無くてこの扉、蹴破りたい！！って思ったことが何回もある。

「で、ですが、師匠？シヨートカットできるところなんか……」

「無ければ造る！！……と、言うわけでリカ。地面を叩き割って」

「「ああ」」

「え？い、いくらアンジェリカさんでもそれは……」

「リカちゃんなら大丈夫だよ」

「で、どこをすればいい？」

「……そこ。地味に下から微量だけどマナが出てる」

「わかった！」

そういつとリカは踵落しの要領で腰にひねりを入れて、思い切り地面に強烈な蹴りを入れる。ものすごい轟音が響いたかと思うと、床の岩が崩れる音が響く。

「・・・う、うそ」

「リカちゃんさいごー！」

「さすが」

「えへへ」

そういつとボク等はさらに地下にもぐっていった。

さつきよりも狭い通路。でも、ここにはさつきと違って通路中の天井や床に青白い光のラインが流れていた。まるで、魔力の線できた回路みたいだ。

「おお〜？何だか通路が光ってるよ？」

「魔力線の修理用通路かな？この青い光ってる線にさつきの甲冑パスから罫トラップ、監視系のものまでたくさんある」

「通風孔みたいなもの？」

「じゃ、じゃあ、この先に制御室が？」

「たぶんね」

ボク等はそこでまた歩き出した。

さつきと違って、全然罫トラップの類が無い。  
いや、ホントは遺跡を壊すとかしたくなかったんだけど、コレならもっと早くしておけばよかったかもしれない。

「ま、ここからはそんなに危険なことは無いと思う。その代わりに、終着駅が危険かもだけど・・・」

「うん。わかった」

「がんばろっ」

「え、ええ・・・」

ボク等と四条さんの間の空気がまったく違う。

「な、何で師匠達はそんな・・・よ、余裕なんですか？」

「「慣れ？」」

嫌なもんだね。

この三ヶ月でボクの基準がいろいろとおかしくなってる気がする。  
じいちゃんは勇者だし、リュウは龍ドラゴンだし、急に公園で襲われるし・・・  
しかも真言で殺されそうになるんだよ！？  
・・・たぶん、ボクには何かが憑いてるんだろうね。

（数分後）

あれからボク等は何者にも襲われること無く魔力線の回路でいっばいの通路を歩いてきた。まあ、畏の可能性があるから静かに……。

「ほ、本当ですか？」

「ホントだよ〜わたし達以外に魔法使いはいないよ〜」

「そ、そういえば、アンジェリカさんは師匠が好きなんです？」

「……奏……要注意人物……ソラは渡さない!!」

「え!? そんな!? で、弟子がし、師匠に教えを請うのはあ、当たり前です!」

「……なるほど、コレで増幅して……」

かなりにぎやかだった。

ボクは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> で周りの回路の解析で忙しかった。

リカと四条さんが何か言い合ってるけど、ボクは特に気にしなかった。むしろ、リカがこんなに仲良くしゃべる人は珍しい。

うん。いいことだ。

「つと、そろそろ終着駅かな？」

ボクがそういうと周りの女子の方々はしゃべるのをやめる。

目の前には行き止まり。いや、あるけど、まるで窓のような通風孔がぽつんとあるだけだ。

近づいてみて中を見るとその中にも回路であふれていた。

「ま、ここまでが限界かな？これ以上壊して、ここのシステム壊すのも悪いし・・・リカ、その辺よろしく」

「わかった」

再び轟音。

あいた穴から下を見ると、今度は地味に高い。

ま、コレぐらいなら優子さんに落とされなれてるから大丈夫だけ  
ど。

あの人空中コンボはえげつない・・・。

「じゃ、二人は召喚獣達に下してもらって」

そういうとボクは穴から飛び降りる。

「どいて〜!?!」

「え?どふあ!?!」

「・・・あはは」

リカも飛び降りたようだった。

てか、お約束すぎる。ボクの上に来るとか・・・。

スズたちもすぐに召喚獣に乗って降りてきた。

「だ、大丈夫ですか?」

「うん。いつものことだから大丈夫だよ」

「いや、それ、スズが言うことじゃないから。リカもどいて」



リカがボクの上からどくと、ボクも立ち上がって服についたほりを払う。

「で、コレが制御室的なところ？」

「さあ？」

「でも、何だかすっごく大きいよ」

「す、すみません・・・わかりません」

ボク等がいるのは結構大きめな広場になってる。

そして、目の前にはとても大きな石造りの扉があった。

何だか、制御室っぽくない・・・ここに伝説の何かがあるって言うことならすごくよくわかる。

まあ、いいか。入ればわかる。

「でも、こつこつって他とは違う敵が出てくるんだよね」

「・・・フラグを立てないで!？」

『合言葉ヲ言ッテクダサイ・・・』

「・・・これって、間違えたらダメ？」

「た、たぶん」

『ひんと・・・』

「「「「言ってくれるんだ!?!」「「「「

「このセキュリティ、ダメだ!?!」  
まさかのヒントとか!?!」

『猫二?』

「「「簡単すぎる!?!」「「「

「え? わかんないよ?」

「・・・四条さん、言っであげてよ」

「は、はい。答えは『キャットフード』です」

「アウトオオオオオオオオ!」

「「え!?!」「

バカだ!?!」

この二人バカだ!?!」

そう思った途端、周りからクイズで不正解したときのような音が響く。

『答工八』小判』デシタ』

「「すっごい親切!?!」「

「「「あゝ」

『合言葉ノ認証不可。部外者トミナシ、排除シマス』

・・・理不尽だ。

たかがクイズに間違っただけで・・・。

いや、こつちがバカなだけなんだけどさ・・・。

『がーでいあん守護岩石騎士、起動』

そういうと今度は大きな音が響く。すると、後の通路が閉まり退路をなくす。

更にはボク等が通ってきた通風孔さえ修復されてしまった。これで完全に逃げれない。

いや・・・。

「一瞬で壊したところ直すとか古代魔法スゴイ」

「ホントだね」

「アタシもそう思う」

「って、い、今、わ、あたし達死にそうですよ!？」

今度は広場の中央が割れると、そこから今までは違う、全長10メートルはある巨大なゴーレム。今までの適当なつくりのものは違い、形が整ってる。しかも装飾が騎士っぽい雰囲気醸し出してる。

雰囲気的にここのダンジョンのラスボス？

「・・・ま、嘆いてもしょうがない。朱雀、風狸、雷狐は四条さんとスズを守って。ボクとリカがアレを叩く」

『戦闘形態、そどまん剣士・・・殲滅』

そういとボク等に向かつて敵が襲い掛かってきた。

## 21話・BOSS？

side空志

「じゃ、手始めに……ホムフ下じ 焰鳥　！！」

ボクは魔法陣を多重展開する。

そうすると、数十羽の炎の鳥がガーディアン守護岩石騎士に殺到する。でも、動きがまったく鈍らない。どうも効果は薄いらしい。

「はあ！！」

リカが鎌で斬りつけるがあまりの強度に鎌がはじかれる。

「コレ硬い！」

「リカは全力でやればいい。今回は隠す必要は無いし……セン 千刃嵐　！！」

ボクは銃で魔法陣を遠隔展開させると、魔法を発動させる。竜巻が発生し、風の刃で敵を切り刻む。

『だめじ 損傷、軽……戦闘ヲ続行』

そういうと今度は敵が背中に背負った巨大な棍棒のような剣を振り下ろす。

「フウカシャリン 風火車輪　！！」

ボクは魔法で、リカは吸血鬼の力をフルに使って回避。

「……吸血呪 血濡れの大鎌 ！！」

複数の斬撃の衝撃波が攻撃。

でも、それでも相手の岩の体の表面に傷がついた程度だ。

「お待たせ〜 逆刃千本短刀 ！」

スズの魔法で千本もの魔力で構成された魔法破壊の短刀ナイフが守護岩ガード石騎士イアンの体にぶすぶすと突き刺さる。

やっぱり、魔法を無効化するスズの魔法はなんともできなかったみたいだ。

「……損傷だめーじ、大……魔法攻撃、属性「逆」りばーすト判断……優先順位ヲ変更……戦闘形態、剣士ヨリ、銃士ニ移行しふと」

そういうと向こうは手に持った剣を地面に捨てる。

剣が地面につくと同時に地面がかなり揺れる。

……ドンだけのものを持ってたんだ！？

てか、さっきの話だとかなりヤバイ！

向こうは親切にも宣言どおり、右掌をこっちに向けてる。手首がガクツと外れると、そこからは何かの射出口が顔を出していた。その先には……スズたちだ。

「えねるぎー充填……射出十秒前……」

「あ、あれって、ま、まずくないですか！？」

「ソラ君！！詠唱が間に合わないよ！？」

「詠唱しといて！！来い！魔術符！」

ボクは手の中に数枚の魔術符カードが現れると、そのままスズたちのもとに投げる。

空気を読んで召喚獣達がボクの魔術符をキャッチして地面に刺してくれる。

「ゲツカイ月界　！！」

『・・・巷・・・零・・・発射』

その瞬間、轟音と共に視界が真っ白になる。

ボクは ツクヨミ月詠 をしててわかった。これ、全部魔力だ！

超高密度の魔力の砲撃をしてる！？

コレじゃ ゲツカイ月界 が持たない！

「リカアアアアアアアアアア！！」

ボクは轟音が響いてて届くかわかんないけど無我夢中で叫ぶ。

「フィナーレ終演　！！」

そんな声が聞こえた気がした。

そして、真っ白な光は唐突に消えた。

そこには、右肩の辺りが消失してしまってる守護岩ガーディアン石騎士がいた。

「はあ・・・はあ・・・」

「リカ・・・マジ最高！！」

「お礼は後でいいよ」

「あ、ありがとう」

「も、もう、ダメだと思いました・・・」

「スズ！結界張つとして！それなら何とかなるでしょ」

「うん。一番頑丈なのにしとくね」

よし、コレで何も心配することはない。

でも、驚いた。まさか『逆』<sup>リバース</sup>がわかるなんて・・・。

昔はそれほど珍しい属性でもなかったって事か・・・。

『致命的な損傷<sup>だめーじ</sup>・・・結界展開確認・・・優先順位ヲ変更・・・  
引続き銃士<sup>がんす</sup>デ戦闘』

そういつと今度は左手を伸ばして、指先をボク等に向ける。  
・・・いやな、予感がする。

『魔力砲連弾』

「ありえない!？」

「ちょ!?!?きゃあ!?!？」

いきなり左手からマシンガンみたいに魔弾を掃射された。  
ボクとリカは必死に避ける。  
相手は土・・・なら!!



「魔法陣展開、紅蓮グレン！！」

ボクが使うホムラドリ 焰鳥 以外の炎属性魔法。  
何故かよくわからないんだけど、使える属性。  
魔法陣を掌に展開して、剣のように伸ばす。

「たあああああああああ！！！！」

ボクは フウカシヤリン 風火車輪 の超加速で接近。

そのまま炎の剣を相手の左腕に叩きつける。  
あまりの熱に赤くなるけどそれだけ。

「なら、これなら！？」

ボクは前にやったみたいにマナの中から水の魔力だけを取り出す。  
すると、ボクの掌には直径三十センチほどの水球ができる。  
それを熱したところにぶつける。

あてた瞬間に白い湯気がもうもうと上がる。

「ソラ！」

「え？ちよ、うわ！？」

ボクはいきなりリカに腕をつかまれるともものすごい力で引っ張られる。

たぶん、相撲さんに引っ張られたらこんな感じなんだろうな……。

それと入れ違いにボクのさっきまでいたところに岩でできた腕が通過してく。

「な、何で!?!」

『・・・修復完了』

「・・・そういって。リカ、ありがとう」

「いいよ。でも、どうする?」

「左腕は?」

「左腕?」

左腕の湯気は既に晴れている。

そこを見ると、ひび割れた腕があった。

よし。化学は通じるみたい。

「熱膨張。急に温度が変化したからそれについていけなくなると  
ああなる」

「ああ。じゃ、ソラがアレをやれば解決?」

「そうだね。それに、ケレン紅蓮は本来、ああ使う魔法じゃないし」

ボクは銃に魔法陣を展開する。

そこには赤い紋様が描かれていった。

ボクは引き金を引くと、その魔法陣を遠隔展開する。

「ケレン紅蓮　!!!」

そういった瞬間、敵の地面から極太の炎の柱が上がる。

紅蓮<sup>ケレン</sup> はどこぞの禁書目録に出てくる魔法使いよろしく炎の剣を生み出す魔法じゃない。あれは無理矢理にボクがああ使ってるだけ。本来は、広範囲の戦術系魔法。要するに、<sup>アマイカスチ</sup>雨雷の炎バージヨン。

で、後は水。

ボクの属性は『天空』。これは、風と雷を操る魔法じゃない。天候操作の魔法属性だつまり、ボクには擬似的に水も使える。

「でも、ぶつつけ本番なんだよね！魔法陣展開、<sup>プロセッシング</sup>魔法を構成……  
水鷗<sup>ミスカモメ</sup>！」

ボクの周りに青い魔法陣が展開。そして、水で構成された鳥が出現する。

「行け！！」

そういうと俊敏な動きで敵に殺到。

そしてそのまま体当たり。そのたびにもつもつと湯気が上がり、敵を覆い隠す。

「……よし、<sup>トップウ</sup>突風！！」

ボクは魔法で湯気を払う。

そこには全身ひび割れで、動きがぎこちなくなってる<sup>ガーディア</sup>守護岩石騎士<sup>シ</sup>。

「じゃ、リカよろしく」

「おっけ……<sup>ヴァンパイア・スベサスサイス</sup>吸血呪血濡れの大鎌！！」

リカが鎌を振るう。そこから無数の衝撃波が放たれ、もろくなつた敵をいとも簡単に切り裂いた。  
全身を切り裂かれたために立っていられなくなったのか、地響きを立てて倒れた。

「……終わった？」

「……たぶん？……少なくとも、魔力は感知できない」

「いいの？」

「よ、よかった」

「でも、最後の砦があんな弱くていいの？」

「……そうだね」

そう、これは弱い。

だって、修復能力に関しても他のゴーレムのほうが優れている。さらに、別にそのゴーレムをここに展開してやられたほうがボク等は確実にやばかった。

たしかに、あの右の砲弾は死ぬかと思っただけど、結界が張られたとたんにボク等に優先順位を変更。つまり、『逆』を超えられないことを理解していた。

「……でも、何も無いんじゃないの？」

「そ、そうですよ？」

「……いや、案外コレには隠し玉があるかも……それに、こ

このほかの罫のスペックを考えると、怪しい」

「……ソラ、来る」

リカがそういつた瞬間にいきなりブザーが鳴り出し、周囲の地形が変更された。

『……緊急事態、対象ノ殲滅ハ困難……最終コード、特攻形態ニ移行……戦闘場変更……』

ボク等のいる広間の地面や壁から、いきなり柱がよきによき出てくる。

更には天井まで上がってる!?

何このカラクリ屋敷!?

「どうなってんの!?!」

「……ツ!?! 守護岩石騎士から魔力!?!」

「アンチ・エリア相殺結果　!」

スズは解除した結界を素早く張る。

そして、ボクとリカは再び構える。

『……変更完了……がーでいあん守護岩石騎士、しふと移行』

そういうと、今度は守護岩石騎士が爆発した。

「あれ?ミスった?」

「・・・ソラ、現実見ようよ」

「だってさ、二段変身とかは仮ライダー、カトとかだけで十分じゃん！」

爆発して、燃える瓦礫からボク等と同じぐらいの大きさの人影が現れる。

両手には手の変わりに剣が生え、更には足の脛にも刃がついてる。

『最終形態・・・移行完了・・・流星騎士』

めてお・ないと

その言葉を受けてか目の前の守護岩石騎士、流星騎士が構える。

メテオ・ナイト

『・・・戦闘開始』

その瞬間、シュウもかくやと言うレベルのスピードでこっちにダツシュしてきた。

「!?!」

「ソラ!」

またまたボクはリカに首根っこをつかまされると、近くにあった柱の上に飛び乗る。

下のほうで轟音が響く。それと同時に断末魔の悲鳴。

スズ達が騒いでる声が聞こえるから、召喚獣達が瞬殺されたんだろっ・・・。

「ゴメン・・・リカ、ありがとう」

「そんなこと・・・別にいいよ」

ボクはリカに礼を言いつつ、敵の位置を確認する。  
すると、そこには足にローラーのようなものを展開して壁走りし  
てるモノが。

「なにあれ！？あの人変態！？」

「・・・無機物に変態も何も無いと思う」

ある程度の高さまで来ると、敵はこっちに跳躍。

「ヴァンパイア・スベ歩スサイス  
吸血呪 血濡れの大鎌 ！」

「ライセンシックウホウ  
雷閃疾空砲 ！！」

さすがに空中では無理でしょ！！

ボクとリカはここぞとばかりに集中砲火を食らわせる。

でも、敵は左手を上に向けると左の剣が射出。その剣にはワイヤ  
ーのようなものがついているのか左手から剣の間に細いものが光っ  
てるそのまま天井に突き刺さると敵の体が重力を無視して体が上に  
行く。

もちろん、ボク等の攻撃は全部外れ。

「・・・まさか、ワイヤーで自分の体を持ち上げた？」

「・・・たぶん」

なんつー高性能！？  
ハイスベック

さっきのが弱すぎる！

向こうが天井につくと、そのまま天井をけってボク等のほうに飛び膝蹴りの形で突っ込んでくる。

さすがに重力とかそのスピードで来られたら対処ができない。

「ふん!!」

リカが前に出る。

すると、敵は脛の刃をリカの鎌に叩きつける。そのまま両手の剣でリカに切りつけようとする。

「させるか!」

ボクは魔法銃で発砲。

でも、敵はありえないことに魔法の弾丸を手の剣ではじき返した。

「五 衛門か!？」

「うゝ・・・ええい!!」

リカが吸血鬼の臂力で敵を吹き飛ばす。

ボクはそれにあわせて攻撃するけど、またもや手の剣を射出して回避した。

「・・・何でもありだし強い」

「うん・・・どうするの?」

「・・・シュウに勝ったときは、狭い室内で アマイカズチ 雨雷 して勝った。でも、今回はそれは無理。ここは広すぎる」



「コレだけ広がったら逃げられる可能性が高すぎる。」

「……ソラが核を一番早い魔法で打ち抜くのは？」

「相手に気づかれないようにって言うのが無理だと思う。核は胸のところにあるっていうのはわかってる」

「……八方塞？」

「だね……とりあえず、相手の足場になりそうな上のほうの柱を崩そう……ライセンシックウホウ雷閃疾空砲　！！」

雷を内包する風の弾丸が近くの柱にぶち当たる。

ばらばらと瓦礫が崩れ落ちるかと思うと、次の瞬間にはビデオの巻き戻しを見るようにして柱が修復された。

「……無理」

「……来た！？」

今度はしたから強襲。

リカは鎌を思い切り振り下ろす。

敵は簡単に避けたけど、リカは構わずそのまま柱に鎌を叩きつける。

すると、柱が崩れる。

「なるほど！」

ボクはリカの考えてるだろうコトを実行。

フウカシャリン風火車輪　で接近すると、敵を崩れた柱のところに蹴り込む。

そうしたら、修復に巻き込まれてお前なんか生き埋めに……。

「……あれ？」

今度はなんと修復しなかった。

敵はまたまた剣の射出で移動。

「……リカが考えたアレでダメならどうしろと!？」

「え?別に何も考えてなかった……」

……まぐれかい。

しかも、気がつくと柱はまた修復された。

「……ホントにこれはまずい。敵はあれだけじゃなくてこの空間そのものだ」

「……うん」

ボクとリカはいつになく真剣な表情で言う。

ホントにこれは不利とか言うレベルの騒ぎじゃない。

さっきまでとはレベルが違いすぎる。

「でも、ソラなら何とかしてくれるでしょ?」

「……無理かも」

とか言いつつも考える。

相手が対応できなくなる攻撃をしまくって何とかする。

それぐらいしか思いつかない。

でも、相手は機械みたいなもんだ。できるかどうかわからない。

「……いや、相手はAIなんだから……それしかないか」

「さすが！じゃ、どうするの！？」

「……効率が悪いけど、敵に攻撃しまくって。できれば向こうが対応できなくなるくらいに。所詮はAI。何かしらの行動パターンがあるはず」

「わかった……敵は？」

「……向こうに隠れてる」

ボクは一つの柱をさす。

そこから魔力の反応がする。

「まず、相手は奇襲中心。それとシユウを超えるようなスピード。もちろん薬使ってる状態。武器は両手の剣。でも、他にもあるかもしれない」

「うん。じゃ、行ってくる」

そういつとり力は霧になってこっちから奇襲を仕掛けた。

ボクも魔法陣を限界まで展開。

今回は数でいこう。

「ホムラドリ 焰鳥、ライエン 雷燕、ミスカモメ 水鷗」

そういつた途端にボクの周囲の魔法陣が光る。そこには同じみの

魔法たち。

魔法の鳥達はボクの指示を受けて四方から敵に突撃してく。リカももはや防御の概念を捨てたかのように猛攻を仕掛ける。ボクは魔法を繰り出しつつ、その戦闘を観察する。

「……できるか!!」

無理だった。

いや、ボクは格ゲーのプロじゃないし……。

「でも、敵にもダメージいつてるらしいよ!」

リカの言葉に敵を見ると、そこにはさっきと違ってところどころ傷がついていた。

とても速い分、どうしても装甲がもろいのかな?

「じゃ、このまま押し切る!!」

其は魔に属す法則!!」

魔法陣を展開して敵に致命的なダメージを与える。なら、防御不能のこの魔法なら勝てるはず。それを、リカに使わせる。

相手にほんの少しでもかすれば少なくともかなり大変なことになるはず。

「ツキヨ 月夜 ツキカ!!」

バージョン大鎌『月狩』……と、言うわけでリカ!!」

ボクは真言で造った白銀に輝く大鎌を思い切り投げる。

煉さんが見たら卒倒するだろうけど今はそんな場合じゃない!

リカはまるで後に目がついてるみたいは何事も無く鎌を空中で受け取る。

「ヴァンパイア・スベサスサイス  
吸血呪 血濡れの大鎌 ！！」

そして、鎌を振り下ろすとそこから衝撃波が放たれる。

どという原理かわからないけど、『月狩ツキガリ』から放った魔法でも直接魔力に攻撃することができるといいたい。まあ、物量作戦に更にはり力の魔法も喰らえばさすがに向こうも無理だったらしい。

リカの攻撃はそのまま直撃。

「異常事態！魔力回路二異常！流星騎士めてお・ないと、操作不能・・・  
停止だうん・・・」

けたたましいサイレンのような音共に今度こそ敵の動きが止まる。

月詠ツクヨミにも魔力の反応は無い。

でも、さっきみたいなのがあるからなあ・・・。

「・・・大丈夫だよな？」

「・・・たぶん？」

「ソラ君、リカちゃん大丈夫？」

「し、師匠！」

結界を解いちゃったのか、スズと四条さんの二人がこっちに来る。

「す、すごいです。あんな息ピッタリで・・・」

「……何故がよく一緒にいるからね」

「もう！……／＼／＼／」

リカが何故か照れる。

てか、さっきのところに照れる要素なんてあったっけ？

「でも、リュウ君とソラ君のときもすごいよ」

「……後でリュウをシバく」

「いやいやいや！？ダメだから!?!」

「……?」

まあ、何はともあれ障害は消えた。

コレで中に入ってボクがちよいちよいと魔力を見ていじれば万事オツケ。

「よし、中に入ろう。リカ、その鎌で切り刻んじゃって」

「ん……セイツ!」

リカが『ツキガリ月狩』をふるって扉を切り刻む。

ちようどいい感じの大きさの穴が開いて、ボク等はそこから中に侵にゆ……お邪魔させてもらった。

「え?」

「何で!?!」

そして、中には案の定というか・・・いたるところに石盤みたいなのがあって、空中にはパソコンのウィンドウのようなモノがたくさん浮いている。それぞれにこの遺跡の中の映像や罫トラップの操作をするためのものっぽいがある。

でも、ボク等が驚いたのはそこじゃない。

「ひ、人ですか？」

「こんなところに住んでる人がいるんだね」

「ん？・・・おう、ようやく来おった」

ボク等の目の前には金髪の長い髪を後で結んだ目付きが明らかに狩人っぽい雰囲気を持つ人がいた。

「だ、誰ですか？」

ぼけ〜つとしてるスズ以外の人間が構える。

こんな遺跡に人がいるとか怪しすぎる。

「うむ。教えるのはやぶさかではないが・・・一つだけ汝らに言わせてくれ」

何だか真剣な表情で言う。

ボク等は息をするのも忘れてじっと相手の言葉を聞く。

「・・・汝ら、アホじゃろ？」

「「・・・返す言葉もございません」

「そつだよ、勉強しなきゃダメだよ」

「そ、そつです。い、いくらDでバカだからって……」

「」「」「あんだ等のことだよ……」「」「」



## 22話・ENDING?

side空志

「……で、ホントに貴女は？」

ボクは目の前の人に聞く。

もちろん、手には銃を握って、その銃には ライセンシックウホウ 雷閃疾空砲 の紋様が描かれてる。

「お、すまんの。いや、どうしても合言葉パスコードのセキュリティを解除できなくてな。変わりに内容を書き換えてよほどのアホでもない限り大丈夫なものにしたんじゃが……」

うん。確かにここには想像を絶するアホが二人ほどいたんだよ。さすがにそれじゃしょうがない……。

「じゃ無くてっ！……だから、何でこんな遺跡に貴女がいるんですか！？しかもさっきの口ぶりだとここに住んでるように聞こえるんですけど！？しかもボク等をここに呼んだ的な感じになってるし……？」

「いや、ここがわらわの寢床じゃ。それに呼んだんじゃ」

「……ちよっと集合」

ボクは目の前の金髪のお姉さんをほっといて、みんなを呼ぶ。

「……呼びよせ」

「……迷い込んで頭打っておかしくなったんだと思う」

「そうなの〜!?!?」

「そ、それは……お、お気の毒です」

「違うからの」

いや、それは信用できない。

お酒飲んで酔っ払った人が『酔っ払ってない!』って言うぐらい信用できない。

「まあ、よい。説明すればイヤでもわかるからの。まあ、その前に修復しておくかの」

そういうとお姉さんは一つの石盤に近づくと、掌を押し当てる。

それと同時に、ボク等の入ってきた方向から音が響く。

そっちを見ると、そこにはまたまた勝手に修復されてく扉が。

数秒後には何事も無かったかのように、それも一回も切り刻まれたことが無いかのような扉があった。

「……こ、古代の技術テクノロジーはす、すごいです」

「うむ。こんなもんじゃろう。紹介が遅れたな。わらわはルーミアじゃちなみにここで遺跡の管理をしておる精霊じゃ」

「あ、どうも、ボクは三谷空志。通称ソラです」

「わたしは坂崎鈴音だよ〜!気軽にスズで!」

「・・・アンジェリカ・シエルス」

「し、四条か、奏です」

「まあ、ボク等は見えての通り、地盤沈下に巻き込まれてここに来たんですけど、外に連絡が取れなくて困ってるんですよ」

「ん？そうなのか？それはすまなかった。・・・ほれ。コレなら外に通じるぞ」

そういうとルーミアさんはボクに受話器のようなものを渡してくれる。

ボクはお礼を言って数字のボタンを押す。

確か、リュウの番号は・・・よし、おつけ。

そして、受話器を耳に押し当てる。

そして、ワンコールでつながる。

『誰だ！？こんなときに！？』

「あ、リュウ？オレオレ」

『オレオレ詐欺はいらん！！』

「ま、冗談はそこまでにして・・・」

ツーツーツー・・・。

「あいつ切りやがった」

「さっきのはソラが悪いよね？」

「……空志よ。汝は何がしたい？」

「いやあ、ここまでツツコミし続けて疲れたから……で、ルミアさん。種族は？」

「精霊じゃ」

「」「」「」「」

……。

よし、専門家に聞いてみよう。

「……四条さん。精霊ってみんなこんな感じ？」

「い、いえ……。こ、こんな精霊さんは……神霊レベル……」

「ちなみに神霊って？」

「……精霊の始祖。各属性の神霊から精霊が生まれるって言われてる」

なるほど。よくわかった。

「何でそんな精霊がここに!？」

「ん?なんじゃ?汝らは知らずに入ったのか？」

「だから、巻き込まれたんだよ!ここは学校の地下の遺跡なの!

「？」

「騒がしいと思ったらいつの間にかつえに学校ができとったのか・  
」

「いい加減に質問に答えて!？」

「面倒じゃな。汝、それでも三魔源素か？」  
スリーシンボル

「・・・なにそれ？」

「アタシも知らない」

「す、すみません」

「わたしは」で、それなんですか?」「ぶう〜!何で〜!?!?」

いや、魔法知識レベルがボクとスズはほぼ同じじゃん。  
聞くまでも無い。

「で、誰がその三魔何ちゃら?」  
スリー

「だから、汝じゃ」

そういうと、ルーミアさんはボクのほうを指差す。  
ボクはとりあえず、後を向いてみる。

・・・おかしい。誰もいない。

「いや、汝じゃ、三谷空志」

「・・・ボク？」

「汝、『月』じゃろ？」

「!？」

何でそれを!？

「じゃが、まだまだ使いこなせておらんのそれに魔眼が第二段階までしか進んどらんのだ」

「ストーカーツ!？」

「ソラは渡さない!！」

「・・・汝、面白いの始祖の血統の吸血鬼ヴァンパイアに好かれるとはの」

「な、何でそれを!？」

ボクはリカを背中に隠す。

何だか後からリカの息遣いがすごく荒いけど今はそれどころじゃない。

怖いかもしれないけど、少し我慢してて。

「安心せい。別にとって食いはせん。それにしても、中々の面子メンツじゃの。一人は『逆』リバース、もう一人は精霊魔導師」

「「ええ!？」」

「何でそこまでわかるの!??まるで 月詠ツクヨミ したみたいじゃん!

「？」

「おお。おぬしは 月詠ツクヨミ と呼んでおるのか？・・・わらわがしとるのはそれじゃ」

「はい！？『月』の属性じゃないと魔力、マナの視認はできないはずじゃ・・・まさか、古代魔術はそんな魔法まであるの！？」

「違つぞ？わらわは精霊、ルーミア。属性は汝と同じ『月』じゃ」

『月』の神霊ってこと？

「ま、ようこそ。わらわの城、月の精霊殿へ」

（数分後）

「落ち着いたかの？」

「・・・大体は・・・」

「す、すみませんすみませんすみませんすみません・・・」

「ハアハア・・・むふふ・・・」

「り、リカちゃん・・・さすがにそれは・・・」

あまりの超展開にボク等はフリーズしてたのか、途中の記憶がお

かしい。

どうも、ここは月の精霊殿って言うところで、月の神霊を奉つてあるところらしい。大昔、ここには多くの人が住んでいたみたいだけど、時代とともに寂れていったらしい。

「じゃ、さっきの三魔スリーなんちゃらは？」

「こつちに来るんじゃ」

そういつとルーミアさんはボク等をどこかに連れて行く。

ボク等についてく以外に選択肢が無いのでおとなしくついていく。それに悪い人ではなさそうだし大丈夫……だといいな……。

「……こつじゃ」

とある一角に着くと、ルーミアさんは中に入っていく。

ボク等もそれに続いていくと、その部屋にはとても大きな石盤が壁に埋め込まれていた。

石盤にはいくつもの円が放射状に並んでいた。その中央には三つの円があった。

「太陽に……星に……月のマーク？」

「そうじゃ。まあ、俗に言う三眼じゃな。これは全部属性を示すマークが描かれておる」

「へえ〜。じゃ、『逆リバース』もあるんですか〜？」

「うむ。ほれ、あそつじゃ」



そう言って指さした先には中央からそれほど遠くない位置……  
というか、一つ外の円だった。周りには6個ぐらいあるのかな？

「へえ〜あれが？なんかリサイクルマークみたいなヤツ」

「うむ。ま、ちと話がそれだが三魔源素スリーシンボルについてじゃ。まず、この属性は他とは違う魔法属性のことじゃ」

「他と違っ？」

「あ〜ソラ君、魔力見たりできるもんね〜」

「そういうことじゃ。ちなみに、この三つにはそれがデフォルト  
でできる」

「み、三つですか？」

「あの石盤の中央にあるじゃろ？太陽の『陽』に『星』、そして、  
汝の『月』じゃ」

なるほど。ボク以外にも魔力を見れる人がいるんだ。  
……と、いうことは……。

「これでみんなにチートって言われなくて済む！」

「いや、十分チートじゃからの？」

ボクはごく普通の人間だよ？

別になりたくてチートになっただけじゃないのに……。

「まあ、よい。この属性は魔法属性の原初の属性と言われている」

「……マジで？」

「ソラすごい！」

ところ構わず抱きつくな。

ボクはリカを引き剥がしながら聞く。

「じゃあ、『月』とか『陽』とかからスズの『逆』とかか生まれ  
たの？」

「そう言うことらしい。この三つにはそれぞれ意味がある。例え  
ば、『陽』であれば強大な力。『星』であれば強大な魔力じゃ」

「ふうん。なるほど。要するに、『陽』は力、『星』は魔を司る  
と……じゃ、『月』は？」

「よくぞ聞いてくれた！」

びしっとボク等を指さす。

そんな振りはいらないからさっさと行って。

「わらわも司る『月』それはの。知を司るのじゃ！」

「……へえ〜」

「なんじゃ、リアクションが薄いの」

「いや、なんとなくそうかなくて思ってたから。それに、ボク自身、ツクミ月詠でいろいろと魔法とか解析してるし」

「……ま、それが『月』の固有魔法ユークスキルじゃからの。まあ、ぶつちやけると、この三つの中で一番ザコじゃ」

身も蓋も無いよこの人。

てか、ぶつちやけすぎでしょ？

「じゃが、お主は珍しく『天空』も持ち合わせておるようじゃの」

「まあ……」

「ソラは強いんだよ！」

「だから抱きつかないで」

「あ、アンジェリカさん！し、師匠が困ってます！」

「……しゅらば〜？」

「じゃが、気になることがある」

「はい？」

いきなりさつきまでのふざけた表情から一転、ルーミアさんは真剣な表情になる。

「汝、真言を……しかも具現化マテリアライズを使ったの？」

「あ、はい？そうですけど？」

「・・・『月』はの、全ての魔法を、そして、幻術の類を見切る目を持つ代わりにの、魔力が総じて低い傾向にあるんじゃないかとえ、<sup>デュアル</sup>多重属性でもの」

「いや、普通にマナを使ったただけですけど？」

「な！？汝、知って・・・おるわけないの」

何かバカにされた。

つて、リカ！？鎌出しちゃダメ！

「ソラをバカにした・・・」

「で！何で驚いたんですか！？」

ボクは強引に話題をふった。

「うむ。汝、おそらくは暴走したことがあるの？」

「「「！？」」「」」

「え、ええ！？そ、そうなんですか？」

「・・・それがどうしたの？」

「そうだよー！！ソラ君はしたくて暴走したわけじゃ・・・！！」

「・・・ボクは暴走したことがあります」

女子三人は驚いた表情になるけどボクはそれに構わず続ける。

「……それが、何か関係あるんですか？」

「……まず、汝の言うところの ツクヨミ 月詠 には数段階の状態ある。まず、マナを見れること、コレが第一段階じゃ」

それが何も訓練無しの状態なんだろう。

「で、次の段階が相手の魔力、および属性、魔法の解析じゃ」

確かに、ボクがコレをできるようになるには少し時間がかかった。………ちょうど、暴走したときを境に核の解析コア・アナライズができるようになった。

「じゃがの、第二段階ではマナの操作などできん」

「……あれ？でも、ソラは第一段階の時点でアタシの目の前でやったよね？」

「うん。魔法を勉強し始めて1、2週間ぐらいかな？」

「……よほどいい師に恵まれたの」

「……いや、毎日が訓練イシメですよ？」

ボクの脳裏に哄笑を上げながらボクやリュウ、シユウを蹂躪する優子さんのビジョンが……。

あ、やば……体の震えが止まらない。

「……ソラが怖がっているからもうその話はやめて」

「……すまんの」

「だ、だだだ、大丈夫デスヨ？」

「し、師匠が壊れた……!？」

「ねえねえ優子さんとどんな訓練してるの？」

「と、とにかく、何かおかしいんですか？」

ボクはこれ以上の訓練の話題は精神衛生上に著しく危険が伴うと判断して話題を戻す。

「まあ……普通、マナの操作ができるようになるのは早くて第三段階以降じゃ。それにじゃ、マナの扱いは難しいためにマナの操作ができずに一生を終えるものも昔には大勢いた」

「……昔の人が魔法下手っていうのは？」

「これほどの魔法技術テクノロジーを持つとるんじゃぞ？」

ですよね〜。

また、みんなの目がこのチートがっ！的な感じになってるよ……。

「で、じゃ。特に、汝は暴走したことがある。そういう者は昔にも大勢いた。それで、マナの操作ができたものは暴走時に自分の魔

力ではなく、周囲のマナを暴走させる傾向が強くてな・・・そやつらは極端にマナの操作を怖がったんじゃない」

「・・・よ、要するに、魔法が使えなくなったということですか？」

「うむ。精霊魔法と同じで『月』の属性はマナを操作できるようになるとほぼ無限じゃ。暴走すれば誰にも止められん・・・その点、汝は運がよかった」

「・・・わかる気がします。ボクが暴走したとき、ボクには暴走状態のリスクの魔力の枯渇による命の危険が無かった。・・・でも、ボクのマナの操作でみんなを・・・」

殺しかけた。

あんな思いはいやだった。

だから、みんなの前から逃げ出して、この力の対処法を見つけようとした。そして、いざというときはボクより強い智也さんに頼んで殺してもらおうと思った。

「し、師匠？」

「・・・」

「まあ、それが理由で大半の者が自ら使用を禁じたことが多かった。じゃが、それは必要なことじゃったんじゃない・・・」

「何で！？あれが！？ボクは仲間を殺しかけたんだよ！？」

「・・・え？」

「違う！！でも、あれが必要なことだとも思わない！」

「そうだよ！ソラ君はものすごく傷ついたんだよ！！」

「……確かにそうかもしれん。じゃが、一定以上の魔力を放出しなければ 月詠<sup>ツクヨミ</sup> は第二段階に進まなかったじゃろう」

「一定以上の魔力の放出？」

「汝の言う魔力解析のための魔眼スキル、 月詠<sup>ツクヨミ</sup> は汝が 月詠<sup>ツクヨミ</sup> をした状態で魔力、あるいはマナを使うことによって成長する」

「……ホントですか！？」

確かに、ボクが 月詠<sup>ツクヨミ</sup> をできるようになったのは冬香達に襲われて魔法をバンバン使ったりとかしたときだ。そして、強化したのも暴走で必要以上にマナを使ったから。

「……でも、それとこれは関係ない……」

「汝は自分の力が怖いか？」

「……ものすごく怖い。大切な人を傷つけそうで……」

「……」

「なら、大丈夫じゃ。ただ、汝は力に呑まれなければいい。その力を、自分のために……汝なら大切な人のために使えばいい」



ルーミアさんは、まるで母親のようにボクに言う。

「……はい」

「でじゃ、本題に入ろう」

「……まだ入ってなかったの!？」

「あれは前フリじゃ」

「な、長いです」

「汝はおそらく、これから狙われる」

「……はい?」

「汝の力はいわば根源の力。そして、つい最近、魔物の動きが一部活発になっておる。わらわも魔王のことはよく知っておるつもりじゃ。ただ、つい最近になってよからぬことを企てとるものがある。……汝等を襲った魔獣じゃ」

「え?でも、あれは龍造さんが言ってた変態の『スキンヘッド豪炎の魔王』とか言うのに灸をすえたから大丈夫なんじゃないの?」

「違う。あのようなアホ丸だしなやつにあんなことができると思っ  
うておるのか?」

「いや、確かにそうだけど……」

「で、でも、何で貴女がわ、わかるんですか?」

「わらわは月の神霊じゃぞ？外部のことは精霊に聞いておる。それに、わらわは何とかして偶然にもここにきおった汝をここに呼ぼうとしたんじゃが・・・運がよかった」

「で、誰なの？ソラを狙うのは？」

「それは・・・」

そのとき、まるで狙ったかのようにブザーのような音が響く。

警告の音かな？

ルーミアさんは腕を動かす。すると、ルーミアさんの体の前に映像が映し出されてるウィンドウが出現。

「・・・ちなみに聞く。こやつは汝らの知り合いか？」

そういうとボク等にウィンドウを見せる。

そこには、全身黒づくめでコートに身を包んだ怪しい格好の青年がいた。

・・・どこと無く、あの黒装束の人に雰囲気似ている。

「知らない」

「わたしも」

「あ、あたしもです」

「・・・むしろ敵だと思っ」

「やはりの・・・」

そういつとルーミアさんは今度は空中に魔力で構成されたキーボードを展開し、それを操作する。すると、目の前のウィンドウにボク等が苦戦を強いられた守護岩石騎士<sup>ガーディアン</sup>が三体ほど出る。

「え、えげつないです……」

「こんなに出す必要があるの？」

「うん……でも、こっちは大丈夫だよ」

「……すみません。ボクはこの魔法属性を解析できないんですけど？」

「……奇遇じゃな。わらわもじゃ」

「「え？」」

次の瞬間、青年が守護岩石騎士<sup>ガーディアン</sup>達に右手をかざすと、ウィンドウの画面が白に染まる。

光がなくなったとき、そこにはボロボロの守護岩石騎士<sup>ガーディアン</sup>の姿があるだけだった

「……おそらく、こやつが魔獣の関係者じゃ」

「何で？」

「こやつからかすかに呪力を感じる」

ルーミアさんはさらにキーボードを操作すると、今度は流星騎士<sup>ネテオ・ナイト</sup>

を五体ほど展開し始めた。

そして、更には元々いた守護岩石騎士も爆発してその中からも流星騎士<sup>メテオ・ナイト</sup>も現れる。これで合計八体もの流星騎士<sup>メテオ・ナイト</sup>が出現した。

「……おそらく、コレも時間稼ぎにしかならん。逃げるぞ」

そういうと、ルーミアさんは走り出す。

ボク等もそれにあわててついていく。

何故だろう……ものすごく嫌なことが起こりそうな気がする……。

## 23話・EX BOSS!?

side空志

「走りながらでよいから聞け。」

遺跡の通路を進みながらルーミアさんがボク等に言う。

「精霊達の情報によるとどこぞの魔王が何かを企んどるらしい。それについて最近わかったことじゃが、汝以外にも<sup>スリーシンボル</sup>三魔源素を持つ者が一人ずつおるらしい」

「……こんなトンでも属性の人が後二人もいるんだね……」

「今、突っ込むとこ違う!？」

「……続けるぞ?それで、やつはどこから仕入れたのかわからんが汝達を捕まえようとしとるらしい」

「……でも、こんなコトしたら龍造さんが黙ってないよ?」

「龍造とやらがどんな者かは知らんがあやつは俗に言う魔王の派閥の『<sup>アサルト</sup>強襲派』じゃろう」

「……そういえばなんか言ってた気がする」

ライネルさんが<sup>ピース</sup>平和派とか何とか……。

要するに、龍造さん達、<sup>ピース</sup>平和派が魔物と人間の共存を望む派閥なら、<sup>アサルト</sup>強襲派は魔物による人間社会への侵攻派ってトコかな?ドクエの魔王的な。

「じゃ、何でボク・・・というか、ボクの力を狙うの？」

「さあ・・・大方、汝を味方につけて世界制服でも目論んどるんじゃろっ」

「・・・なんていうか考えが浅い」

何でこういう魔王さんには世界征服してやるぜ！ヒャーハーツ！  
！って人が多いんだろっ？もう少し面白いこととして欲しい。

「まあ、本当の理由は向こうに聞かんとならんじゃろっがの・・・  
こじこじや」

そっついとルーミアさんは足を止める。

でも、特に何も無いけど・・・？

右を見ても壁。左を見ても壁。前は通路で後はボク等が来た通路。

「こじこじのは隠し通路と相場が決まっておるじゃろっ？」

「なんかぶつちやけたね」

ルーミアさんはボク等の声を無視して指をさつと振る。

すると、壁の一部がボコッとへこみ、瞬く間に壁の一部に新しい通路ができた。

「行くぞ！」

またまたボク等は走り出した。

ボク等が入った途端に、壁は元通りになった。たぶん、向こうか

ら見れば、ただの壁にしか見えないだろう。

「あ、あたし達はど、どこに行くんですか？」

「とりあえず、この遺跡の外じゃ。汝らの通う学び舎に着けばあやつも下手に出てこれんじやろうて」

「・・・それが、普通の人なら、ねっ！ソラ！！後！！」

ボクは後に向かって銃を撃つ。

撃った瞬間にボク等の来た方向から突然轟音が響く。  
ボクの放った魔法の弾丸はそのまま敵に着弾する。

「・・・さすが吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>。てか、コレってボク等やばくない？」

「わーい！ソラとアタシのコンビ最強！！」

・・・。。。

よし、無視しよう。

「ルーミアさん！さすがにまずいっしょ!？」

「・・・全力で逃げるんじゃ!!」

そういつた瞬間に何かの魔法が飛んできた。

「<sup>フレア・バレット</sup> 火炎の弾丸・・・炎か!？」

「なら、<sup>ミスカモメ</sup> 水鷗!」

ボクは魔法陣を展開して、水の狼を向かわせる。

こいつらは、地面を走ってるように見えるけど実は微妙に浮いてたりする。

そして、この魔法は狼達の牙や爪がウォーターカッターのようになってる。

炎でコレならさすがに防げないはず！！

でも、ボクの予想はあっさりと覆された。

風の魔法で切り裂かれたために。

「何で！？さっきまで炎だったじゃん！？」

「多重属性なんじゃないの〜？」  
デュアル

「面倒な！ 水鷗！ 雷燕！ 焰鳥！」  
ミスカモメ      ライエン      ホムラドリ

ボクは更に魔法を展開！

コレならどうだ！！狭い通路での弾幕！！

「……えげつないです」

「……じゃが、嫌な予感しかせんのか」

後のほうで小規模な爆発が起きる。

手ごたえはある。

でも、魔力の反応は消えていない……。

「……ッ！」

リカは突然、鎌を出して走る。

鎌を振るうと、そこにはさっき映像で見た黒ずくめの青年がいた。



その青年は左手を出すと、そのまま鎌をつかんだ。

「片手真剣白刃取り!?!どこぞのチートなドラゴンスレイヤーだよ!?!」

「……ネタがよくわかんないよ」

「傾の剣でアチ・マック・フィールドはホントにえげつな  
いとボクは思う」

あれは面白いと思う。

ファンタジー好きな人は読むべし。

「きゃっ」

リカが小さく悲鳴を上げる。

ボクがそつちを向くと、リカがこつちに吹っ飛ばされるところだった。

てか、コレって……。

「ぐぼ!?!」

「ソラ!?!大丈夫!?!」

ボクにぶつかりました。

なんとというお約束……。

「……お前等のうち、誰が三魔源素だ?」  
スリーシンボル

「い、言いません!?!」

「誰が言うか!」

「というか、ここにはおらん」

「変態!」

「そっだよ!!誰がソラ君がそっだなんて言うと思ってるの!」

「……………あれ?」

「…………『ソラ君』?…………そうか、お前か?」

そっというとボクをさす。

「何でわかつちやったの!?!」

「…………オイ!?!」

ダメだ!?!全部自分でバラしといて何言うか!?!

この娘アホの子すぎる!?!

ボクは君の将来がものすごく心配だ!

「…………お前、『結界の魔王』、龍造達と一緒にいたな?」

「…………なるほど。貴方もどこの魔王さんで?できれば強襲派アサルト

じゃなかったらうれしいね」

「残念だな。俺は強襲派アサルトだ」

「……てか、魔王さんが一人でこんなトコまで散歩ですか？」

ボクはそう言いつつ 月詠<sup>ツクヨミ</sup> で相手の魔法属性を解析しようとする。

でも、どういいうわけか全然解析できない。

「そんなところだ。今回は少し遺跡の発掘にな」

「知つとるか？ 汝の行動は一般的には墓荒しと言っんじやぞ？」

「ふん……で、どうだ？ 俺の属性は解析できたのか？」

「……」

ボクとルーミアさんは押し黙る。

やっぱりと言うか……ボク等の属性を知った上でここに来たのか？

それにあの余裕。ボク等が解析できないことを知ってるかのよう  
な……。

「知っておるのなら早々に立ち去ったほうがよいぞ？ わらわとこの子の魔力はほぼ無限じゃ。全力を出せば汝を生き埋めにしてわらわ達だけ安全に逃げることもできるんじやぞ？」

「魔力があろうと使い手が未熟な者では脅威にならない。そして、たかが神霊にこの『森羅の魔王』、フェイクが負けるとでも？」

やばい……。

本能的にそう感じた。

神霊は四条さんの話が正しければ、最高峰の精霊。しかも、ルー

ミアさんを見てわかるように他の精霊と違って、自分自身で魔法を使える。

四条さんのような人間を媒介にしなくても……。

「……コレが、本当の魔王……」

「確かに、あの<sup>スキンヘッド</sup>変態とは大違い」

「……ふんつ。『豪炎』か？あんなザコと一緒にするな！！」

そういつとフェイクと名乗った魔王らしき人がボク等に手をかざす。

そこから光の奔流がボク等に向かって放たれる。

「<sup>ムーン・シルド</sup>月の盾！！」

「<sup>ツキモリ</sup>月守！！<sup>ゲツカイ</sup>月界！！」

シヤレにならないレベルの攻撃魔法がボクとルーミアさんが張った防御魔法にぶち当たる。一番外側の<sup>ゲツカイ</sup>月界が崩れ、<sup>ツキモリ</sup>月守が壊れる。そして、何とかルーミアさんの魔法で押しとどめることに成功した。

「む、無詠唱ですか！？」

「魔王クラスならそれが普通……」

「龍造さんも無詠唱で結界を張るよ〜」

そう言いながら、戦闘に慣れた女子二人は武器を構える。

「・・・そこそこやるようだな」

そういうとフェイクはボク等に指をさす。

指先に光が収束して・・・それがボク等に放たれる。

「レオ！」

ボクの言葉にレオが咆哮覇を放つ。

大気を震わせるような咆哮と共に白い光線が放たれる。

「・・・さすがは幻獣の力だ・・・」

そういうとノーモーションで自分の周囲に障壁を展開していつの間にか後に回っていたリカの奇襲も防いだ。

リカは失敗したことに気づくと、こっちに跳躍する。

「・・・隙が無い」

「・・・ルーミアさん。どこか広いところに出ましよう」

「考えがあるのか？」

「もちろん。そんなわけで戦いやすいところに・・・」

「わかった」

「じゃ、ホームラドリ 焰鳥！ ライエン 雷燕！ ミスカモメ 水鷗！」

ボクはまたまた弾幕を展開して相手の視界をさえぎる。

そして、再び通路を走り出した。

「1111じゃー！」

ボク等は逃げつつ攻撃をしながら走った。

そして、ついた先は少し大きめの広間のようなところに通路がある。

何かここで舞踏会的なものができそう。

ま、そんなことよりフェイクって人だね。

ボク等は武器を構える。

「鬼ごっこは終わりか？」

「そうだね。こつからは鬼さん交代だ！！スズはいつものように部御して！！」

「わかったよ。」

アンチ・シエル  
相殺殻 ！」

スズの杖から六角形の盾のようなモノが展開する。

それを自分と四条さんの周囲に展開させる。

これで大抵の魔法攻撃はスズ達に効かない。

「センジンラン  
千刃嵐 ！」

「デスサイス  
吸血呪 血濡れの大鎌 ！」

「ルナティック・インパクト  
月光の衝撃！」

風の刃の嵐に斬撃の衝撃波、そして光の奔流がフェイクに殺到する。

敵にぶち当たるが相手は何事も無かったかのように立っている。そんなことはさっきの攻撃で既にわかってる。

「効いてないよ!?!」

ボクは魔法陣を遠隔展開しながら言う。

「いい!とにかく派手な攻撃を続けて! グレン 紅蓮!!!」

「わかった!」

そういうと、リカは自分の鎌から衝撃波を飛ばしまくる。

「・・・本当に大丈夫なのか!?!」

そう言いつつルーミアさんも攻撃する。

「ぬるいな・・・」

そういうとフェイクは今度は黒い閃光をボク等に放つ。

「えい!」

スズはタイミングよくボク等の前に六角形の盾を移動させて防御。さすがに『リバース逆』の盾を突き破ることはできなかったようだ。

「……なるほど……『逆』<sup>リバーズ</sup>か……ちょうどいい。お前もついでに……」

「へ、変質者がいるよ〜!?!」

「ゆ、誘拐です!」

「……何故だろう。この二人がものすごく余裕そうなんだけど?」

まあ、そんなことはいい。

……それにしても、あのフェイクって人の魔法がおかしすぎる。別に無詠唱なのは気にしない。だって、龍造さんが魔法使うときに呪文はおろか、魔法名すら言っていないし。『豪炎』の人は言うだけど気にしない。変態<sup>スキンヘッド</sup>だし。

「汝はスキンヘッドに恨みでもあるのか?」

いや、心を読まないでください。

それに、スキンヘッドで上半身裸のおっさんなんか変質者以外の何者でもない。

ま、変態よりもこっち。

「……どうした?その力はその程度の物か?」

「そうだよ。だから、ボクとかスズを誘拐するのはやめたほうがいいと思うよ!」

銃に <sup>ライセンシクウボウ</sup>雷閃疾空砲 の魔法陣を展開してボクが作り出した中で最も殺傷能力の高い弾丸を放つ。でも、何もしてないように見えるの



に障壁でガードされる。

なんと技術。

そして、本当に怖いのが……。

「……さっきのは闇の魔法……」

「そうじゃな。さきの魔法からヤツは最低でも『炎』に『風』、  
『闇』、そして、『光』も使っておる」

「甘いぞ。俺はまだ力を二割も出してないぞ！」

そういうと今度はフェイクの前方の空中に水が収束。

その水はボク等に瀑布となって殺到する。

そこをスズがガードしてくれたおかげでボク等は大事にいたらなかった。

「むう……ソラ君以上のチートもいるんだね」

「コレを無効化するスズも十二分にチートだから、ね!!」

ボクは相変わらず火力を重視した魔法を連発。

真言も考えたけどあれは隙がでかすぎて無理。

できたら確実につぶしに掛かってた。

「……そろそろお遊びは終わろうか。俺も他にやることがある  
からな」

「それは大変ですね!どーぞお帰りください!」

「お前等をさくつとやってからな」

その瞬間、急にフェイクから尋常じゃない魔力があふれ出した。  
こんな・・・ボクは視たことも無い!?

「こ、これ、ソラが暴走したときレベルの・・・」

「ボクが暴走したとき!？」

じゃあ、相当じゃん!?

しかも、相手はかなり余裕そうだよ!?

「あ・・・ああ・・・」

ダメだ。

四条さんはこんな異常な魔力量に触れたことが無いからか恐慌状態に陥ってる。

でも、ボクも体が震えている。

・・・ものすごく怖い。

「・・・ッ!このッ・・・  
ホムラドリ 焔鳥 !!!」

「・・・ふむ・・・この魔力量でも動くか。なかなかだ」

そういうとフェイクの周囲に直径1メートルほどの半透明の球体  
がいくつか展開。

指をさすと、その動きに合わせて球体がボク等に向かって放たれ  
る。

そして、ボクが先に放っていた ホムラドリ 焔鳥 に当たると ホムラドリ 焔鳥 を消  
し去ってこっちに向かってきた。球体はスズの盾が無効化してくれ  
たけど、でもコレって・・・!?

「まさか『消滅』!?!」

「いかにも!」

そういうと手に魔力で構成された剣を展開する。

魔装の一種だろう。前に智也さんが似たようなことをしてるのを見たことがある。

「あれはまずい!?!」

其は魔に属す法則!?!」

「遅い」

そういうとフェイクは姿が掻き消えるほどのスピードで急接近。

そのまま手に握った消滅の剣を横なぎに払おうとする。

「危ない!」

ホントにスズさまさまだよ。

ボクを狙った剣戟は六角形の盾に阻まれる。

「面倒だ。まずはお前だ」

そういうと今度はスズに消滅の弾丸を連続して放つ。

スズは必死になって盾を操作するけど次第に盾が敵の攻撃に追いつかなくなってる。

やばい……後、少しだけ!そうすればボクの詠唱が終わる!

「我、汝と共にあり！」

其は猛り狂う煉獄の炎！

我が意に応え、炎の加護をもたらせ！

汝、名をサラマンダー！！

ほのおじゅう  
炎の剣　！」

四条さんが早口で詠唱を始め、魔法を発動させる。

すると、炎で構成された剣が空中にいくつも出現し、敵に飛んでいく。

今まで震えていた四条さんにはまったく注意を払っていなかったのか少し慌てる。

手に持った剣を精霊魔法の対処にまわす。

そして、四条さんはさらに魔法を発動させた。

「炎の波　！」

詠唱無しで魔法名を言った途端、炎の波がフェイクに殺到する。

「なっ！？精霊魔法か！」

「何で！？さっきは詠唱してなかったよね！？」

「それが精霊魔法の強みじゃ！一度精霊の加護を受ければ精霊に指示を出すだけで魔法を発動してくれる！じゃが、気分でコロコロ威力が変わるのが欠点じゃ。今回は運がよい。最悪なときは魔法すら発動せんからの」

なんて博打だよ……。

「ま、そのおかげで完成したけど！  
月夜ツキヨ　！」

ボクは魔法陣の中に手を突っ込むと、そこから一振りの刀を取り出す。

バージョン刀、銘は『月閃』<sup>ゲッセン</sup>。

ボクはその刀を持ってフェイクに切りかかる。

「魔法使いが接近戦か？それは無謀だな」

「いや、ボクは中衛系職業の魔法使いなんでね！」

相手がボクに合わせて剣でガードしようとする。

ボクはそのまま渾身の力で剣を叩き切らんばかりに切りかかる。

ま、実際斬ろうとしてるんだけどね！

ボクは刀で剣を両断する。相手は驚きの表情を見せるとボクを殴り飛ばそうとする。

ボクは刀を媒介に 月界<sup>ゲッカイ</sup> を球状に展開してガード。

でも、あまりの力に吹き飛ばされ、壁に 月界<sup>ゲッカイ</sup> を張ったままの状態でめり込む。

「……具現化か」<sup>マテリアライズ</sup>

「う、う名答」

ボクは 月界<sup>ゲッカイ</sup> を解除して刀を構える。

ボクの攻撃はガード不可の最強攻撃だ。でも、フェイクが一撃でやられるほどのダメージを与えられるかわからない。

前に具現化を調べたときには、この魔法はどれだけの魔力量を入れたかによって変わるって言うのをバグニールの図書館で見つけた。

ボクの魔力はほぼ無限だけど、込めることに関してはずぶの素人で実はそんなに威力が高くない。というか、マナのコントロールが

まだそんなにうまくない。一度だけ優子さん相手に切りかかってみたら、『少し痛いですね』とか言ってフルボッコにされた。

で、フェイクは普通に考えて最低で優子さん並。決定打が撃てるように思えない……。

「アタシを忘れてる」

そういうとフェイクの背後に突然リカが現れる。

そして、鎌から衝撃波を放って攻撃する。相手はそれを障壁でいとも簡単に防ぐけどボクはそれに合わせて攻撃。相手を障壁ごと引き伏せる。そして、リカの衝撃波もまとめて受ける。

フェイクの周りが煙に包まれてボク等は一旦下がる。

「大丈夫？」

「ありがとう。さすがにコレなら……」

「くくくくく……」

「「ですよね」」

声が聞こえたと思ったたら煙が掻き消える。

そこには相変わらず無傷な魔王様。

「おい。本当に汝の作戦で大丈夫なのか？」

「まあ、ボクはコレしか思いつきません引き続き派手な攻撃をお願いします」

「あ、あたしも……!」

「無理はしなくていい」

ボク達は油断なくさらに構える。

「面白い、面白いぞ!!……その力!!……古いにしえの力!……  
それこそ俺にふさわしい」

いきなり何かを言い始めた。

厨二が入ってるよ……。

「とりあえず、お前をやるか……!!」

そういうとまたも姿が掻き消えるほどのスピードで移動。

唯一、その動きを捉えたリカがボク等を庇うけど吹き飛ばされる。  
そして、そのまま動かなくなる。

「リカ!?!」

「汝!?!」

「リカちゃん!?!」

「アンジェリカさん!?!」

「まずは一人!」

そして、今度はルーミアさんを肉薄。

一気に近づくと光弾を掌から放ち零距离射撃。

ルーミアさんも吹き飛ばされて動かなくなる。魔力の感じから気

絶したらしい。

ボクはなりふり構わずに刀を思い切り横に振る。でも、相手はすぐさま距離をとる。

「炎の剣！」

四条さんはすぐに魔法を放つけど相手は避ける。違いすぎる！さっきのはホントにお遊びだったのか！？

「レオ！スズ！時間を稼いで！！」

其は天に属す法則！！」

「わかったよ」

レオが咆哮覇を放って攻撃。でも、その咆哮覇ですら障壁で止める。でも、レオはそのまま閃光を吐き出し続ける。

「アンチ・サーベル 逆刺突剣！！」

魔法を無効化する白い光の剣が敵の障壁を消す。すると、障壁が消えフェイクは閃光をモロに受ける。

「レックウショウハ 裂空衝破！！」

続けざまにボクは真言を発動させ、天空属性の槍を大量に相手に放つ。

フェイクの周囲で風が吹き荒れ、局地的な大嵐が発生して轟音が響く。

あまりの勢いに自分も吹き飛ばされそうになる。



「……いくらなんでもここまですれば……」

「ここまですればなんだ？」

そして、何事もなかったかのように現れるチート。

……さすが。

そして次の瞬間、ボクへと急接近。そのまま拳を振るう。

ボクの腹にその拳が叩き込まれる。そのままの勢いでボクは壁に叩きつけられた。

「がはッ!？」

「ソラ君!！」

「し、師匠!！」

二人はボクに駆け寄ろうとする。

「く、来るな……!！」

あまりの衝撃に意識が飛びそうだ……。

ホントに何とか意識を保っていられるのは……。

「あの程度でこの俺を倒せるとでも思ったのか？」

「……ゆ、優子さん……以、上の……チートに勝てる……  
なんてお、思っていないよ……でも……」

ボクはそこでフェイクの後の通路をさす。

「魔王二人なら大丈夫でしょ・・・」

その言葉と同時にボクの前に一人の青年が急に現れる。

『閃光』の異名を持つ魔王、ライネル・W・ミステリア。

「空志君。大丈夫かい？」

そして、ライネルさんはボク達の盾になるように立つ。

「・・・どこをやつかは知らんがいい度胸じゃの」

我らが『結界の魔王』、龍造さん。

「大丈夫か!？」

「さっきから派手にしてましたね」

「・・・そいつがやったの？」

「四条!!!大丈夫か!？」

「わたくしたちが来たからにはもう安心ですわ!」

「オレッチ達人形持ってないけどね」

「な!?!何故ですの!?!」

「忘れちった」

「今回はわたしはトモダチがないから無理ね」

そして、リュウ達どころかカザ八達もいた。

「りゅ、龍造さん達だ〜!!!」

「だ、代表達!?!」

「・・・まさか」

「そのまさかだよ。・・・ボクが魔王に勝てるわけが無い。だから、できるだけ派手な魔法で音を出してここの位置を知らせた。でも、こんなに広い遺跡だから心配だったけどね・・・」

ボクは朦朧とした意識で答えた。

さすがに、真言級の大魔法なら遺跡のどこにいても気づくかなってボクは思ったただけだ。

ま、ものすごい賭けだったのは認める。それに、搜索隊の編成がまだかもしれないって可能性があったけど、今回はこれしか考えつかなかった。

「・・・リカさんもこちらの女性も大丈夫です」

シユウは何か薬を飲ませる。

すると、リカとルーミアさんはうめき声を上げて目を覚ます。

「あ、れ?・・・みんな?・・・カザ八達も?」

「・・・吸血鬼ヴァンパイアのシエルス殿と三谷殿達がここまでボロボロ・・・  
相手は相当ですね」

「だな。それはオレも思った。この黒ずくめはオレ達とジジイ達  
でやる。お前等はソラ達をみてる」

ボクは、リュウのその言葉を最後に気を失ってしまった。

## 24話・A NEW DAWN?

side空志

「・・・知らない天井だ」

「起きて早々下らんボケをするなよ」

ボクはベッドに寝てるらしい。周りはカーテンで仕切られている。で、横を見るとそこには女子にモテるイケメンのリユウがいた。

「・・・で、どこどこ?」

「まあ、確かにここではお前には縁のない部屋の予定だったからな。ここはエレオノールの保健室だ。あの黒づくめの野郎を追っ払った後、すぐにお前とリカ、それとルーミアとか言うやつをここに放り込んだ」

・・・あ、思い出した。

確か、ボクはピアスが使えないからできるだけ派手な魔法を使っ  
て、リユウ達に居場所を知らせようとしたんだっけ?

で、その時・・・。

「・・・おい!? リカにルーミアさん。それにスズと四条さんは  
無事なのか!？」

ボクはリユウの襟首をつかんで聞く。

「うおい!? 落ち着けバカ!!!」

闇よ、万物を縛る縛鎖となりてここに顕現せよ。

その瞬間、ボクはベッドごと闇の鎖で拘束された。  
……地味に詠唱を省略したし！

「全員無事だ。なんならここにリカを呼ぶか？」

「……身の危険を感じるからいい」

「賢明な判断ですね」

シャツとカーテンを引く音と共に爽やかな笑みを浮かべる長髪の男子、シユウが現れた。

手には飲み薬を持っている。

「アレから大変だったんですよ。リカさんが起きてから……」

「何が？」

「いえ、ソラさんがまたまた目を覚まさないものですから……。また一人で貫徹して看病してましたよ？」

なんかものすごく申し訳ない……。

「……今回はマジで死ぬかと思った。お前がまたフラグを作ったせいでな」

「フラグ？……別にボクは死亡フラグを作ったつもりないんだけど？」

「別のフラグですよ」

「？」

意味がわからない。

この二人は何を言ってるんだ？

そして、急にドタバタと足音が聞こえる。

「……さすがだな。ソラ」

「そうですね」

そこで、保健室の扉がスパーンと音を立てて開く。

そこには白髪の吸血少女、リカがいた。

「ソラ!!」

「リカ？大丈夫だった？」

「……う……」

う？

何が言いたいんだろう？

てか、明らかにボクが起きてるのをわかって来たよっつな？

「うわあああああああん!!!」

「ちょ!?!?何で泣きながらボクに飛びつくの!?!?って、あだだだ  
だだ!?!?し、死ぬ……」

ボクはアイコンタクトでリュウとシユウに助けを求める。

「無理だ」

「そうですね。何しろ、今回は五日間寝込んでましたから」

「……え？」

てつきりボクは一日かかって思った。

「よかった……。ソラの目が覚めないかも思った……」

「ま、この頃お前は真言とか月の魔法を必要以上に使ってたからな。その影響もあつたんだろうが……」

「……心配かけてゴメン」

「ううん。でも、ホントによかった……」

「じゃ、オレ達がどうやったかを話したほうがいいか？」

「あ、お願い」

「わかった。ま、お前の予想通りリカは……」

リュウは説明を始めた。

ボクは文字通りベッドに縛られてリカに抱きつかれてる状態だけ  
ど……。



side 隆介

くリカと別れてから」

「つーわけだ。オレ達はお前等で言うところの『闇夜の奇術師団』だ。人間でありながら魔物に与する人間がいる」

オレはカザハとか言うやつたちに説明をした。

これまでにあった魔窟ネストの襲撃の事件に、学園の事件。

ジジイのことに魔王、魔窟ネストの魔物達のこと。

「・・・そうか・・・わかった」

「じゃ、行くとしますか!」

背中に狙撃銃スナイパーライフルつぽいものを背負った女子が気楽に言う。

「もちろんですわ」

「結局はこうなったね」

「ま、フレンドリーな副代表としちゃ行かなきゃ」

「四条殿も気になります」

「すみません。聞いてましたか?」

「お前等は『闇夜の奇術師団』で、そっちのリユウとやらはドラゴン。シユウは樹族、アンジェリカさんは吸血鬼ヴァンパイアで、ソラ、坂崎、平地さんは人間。ちなみにそこにいる二人は魔王で、人間との共存を掲げて魔物を統治、だろ?」

「そうね。あつてるわ。・・・わたし達が言いたいのは、あんた達も魔物側こっちに来るつもり？」

それが周りに広まったら大変なことになる。

こいつらは魔物に加担する人間として後ろ指をさされ続ける。

「何を言ってる？俺達はクラスメイトを助けるだけだ」

「アンジェリカさんはDの生徒の一人。困ったら代表や副代表のわたしが助けるのが普通でしょ？」

「アンタ達・・・バカね」

「・・・Dなので」

「・・・ジジイ！話はついたか？」

「頼むぞ・・・。サリナに話はついた。地下遺跡に行くぞ」

ジジイがケータイから耳を離すとオレ達に言った。

そして、オレ達は学園のほうに走り出した。

「・・・ツチ・・・ダメだ。通じない」

「・・・ケータイもダメですね」

ここは遺跡の内部。

オレ達は搜索隊の編成とかガン無視でここに突撃。

オレ達以外の人間がいると思う存分に力を振るえないからな。

「あゝ……さすがにこんなところじゃ『サイト照準』の属性持ちのわ  
たしでも無理」

「ここはわたくし達の出番ですわ。レクト！」

「ゴメン。人形忘れちった。てへ」

「なつ!?!?……くおんの大馬鹿者!?!」

「ぎゃ!?!?」

「……何故、君達が？」

何故かソラ達といたDの連中とやらがいた。

ライネルが利くのも無理は無いと思う。

今回の搜索隊は、ここの学園ギルドと呼ばれる生徒達による何でも屋のようなもので有志を募ってBランク以上の生徒たちに依頼という形で出されている。依頼以外では入れないように規制もされるはずだ。

要するに、Dのヤツが受けられるはずが無い。

「ま、そこはこのわたしが動物たちに頼んで混乱させてもらってる隙に……」

「……忍び込んだのね。どっしする?」

「……しょうがないの。正直、こやつらを適当にのしてもサリナのところ突き出したいがこの中では転移も使えんらしい。連れて行くぞ」

確かに、今はあいつらが心配だ。

かなりの深部にいるかもしれない。それに、こういった遺跡は罠がゴマンとある。あいつ等なら大丈夫だろうが万が一ということもある。

……正直こいつらは足手まといだがしょうがない。戻る手間が惜しい。

「それでは、探すとするかの」

オレ達は遺跡の探索を始めた。

#### side空志

「で、途中で轟音と尋常じゃない魔力を感知して駆けつけてみればお前等がボロ雑巾みたいになってそこにいた」

「いや、自称魔王に勝てるわけないじゃん」

「あ？……あいつ、自分が魔王だって言ったのか？」

リュウが怪訝そうな顔をする。

「言ってたよね？」

「すー……すー……」

・・・吸血鬼なのに寝てるよ。

「確かに言ってた。確か・・・『森羅の魔王』、フェイクとか言ってた」

「『森羅』？フェイク？・・・オレは聞いたことが無いな」

「リュウは他の魔王とも面識があるの？」

「まあな」

「さすがは魔王のお孫さんですね」

「・・・ツハ！？」

「うおっ！？リカ？どうしたの？」

いきなりリカが飛び起きる。

そこで誰かの足音が聞こえ、保健室の扉を開ける音が響く。  
そこには四条さんがいた。

「・・・」

「・・・あ、四条さん、おはよう」

「・・・し、ししよーっ！・・・！」

「ダメーッ！・・・！」

ボクに飛びつこうとした四条さんをリカがガード。

・・・何これ？

「アンジェリカさん！？し、師弟のか、感動の再会を邪魔しないでください！！！」

「ダメ！ソラはアタシのなんだから！！！」

「・・・リュウ、何これ？」

「いや、お前が寝てる間ずっとこれで・・・大変だったぞ」

「ソラさん、いつの間にこんなフラグを？」

「いや、どんなフラグ？」

二人はこれだからお前は・・・的な雰囲気のため息をつく。  
・・・何かした？

「こうなったら力づくで！！！」

「の、望むところです！！！」

そういうと二人はどこかに走り去っていった。

「・・・大丈夫なの？」

「たぶんな。いつもああ言って闘技場でやってる。今のトコ全部引き分けた」

・・・えく・・・。

四条さんが？

すげ〜……。

そんな事を思っていたらどこか遠くで腹に響くような音がした。たぶん、二人が戦ってるんだろうと思う。

「……じゃあ、ボクが気絶した後、フェイクって自称『魔王』はどうしたの？」

リュウはボクが気絶してからのことを話してくれた。

side 隆介

「……三谷殿が気絶しました」

「マジで！？怪我は！？」

「……打撲です。ひよっとすると骨に……」

「……クロス……」

「リカさん。貴女も怪我人です。おとなしくしてください」

「だってソラが〜！！」

ソラの近くでじたばたしてるのをシュウに止められてるリカは「際放っておこう。」

で、今のオレ達の目的は目の前の黒ずくめの青年をぶっ飛ばすこと。

「冬香。いいか？」

「あんた誰に物言ってるの？凄腕数法術士のわたしに！」

「へいへい。んじゃ、一発「待つんじゃ」……んだよ？」

オレが魔法剣を放とうとしたときにジジイが止める。

「……あやつ、相当強い」

「んなもん、ソラ的狀況を見りゃわかる。あいつがここまでボロボロ。向こうは無傷。例え守りながらやってたにしても異常だ」

「隆介君。ひよつとすると、空志君は最初から自分じゃ分が悪いことを悟ったのかもしれない」

「どういうことだ？」

「おかしいと思わんか？ソラ君はそんなに派手な魔法を使う性質タチではないんじゃぞ？今回に限っては遺跡中に響くような派手な物ばかりじゃ」

「そして、君たちが持つてる通信用の魔道具が一切使えなかった」

「……つまり、ピンチになってもオレ達に連絡する手段が無い。」

「じゃ、わざと大規模魔法で轟音出して魔力を垂れ流してここの位置を知らせたのか？」

「ソラ君は気絶する前にそう言ってたよ」



なるほど。坂崎が言うならそうなんだろう。

こいつは見た感じだとその女子生徒を守ることに専念してたらしいな。

「・・・ふん。たかだか数年しか生きてないガキにしては小細工を・・・それに、『結界』の関係者か」

そういったのは目の前の黒ずくめ。

ジジイを見て『結界』と判断したっつーことは魔物か？

それも別領地の魔王かその幹部級の。

「わしの記憶が正しければおぬしは知らんの。名前はなんじゃ？」

「・・・まあ、ここではフェイクと名乗っておく」

「偽名か・・・龍造さん、さくつとやっちやいましょうか？」

「そうじゃな。わしメンドイからやれ」

「ここに来てそれ！？あんたバカなの！？」

「クソジジイがつ！！別にオレ達でもよかつたじゃねえか！？」

オレと冬香がわめいてるとライネルが走る。そして、両手の手甲に爪のようなものをつけた武器で切りかかる。

そのスピードはシュウにも匹敵する。

「・・・その程度か？お前は新参の魔王か？」

だが、相手はそのスピードに余裕で対応する。

いつの間にか魔力で構成した剣の様な物を持っている。

「龍造さんは知ってるのに何で僕は知らないかな？僕は『閃光の魔王』。霧の谷ミスティアの統治を任されてる平和派だ」

「……なるほど、お前は『幻影の魔王』の縁者か」

「オイ、ジジイ。何でヴァネルのおっさん知ってるのにライネルは知らねえんだ？」

『幻影の魔王』。ヴァネル・W・ミスティア。

放浪癖のあるはた迷惑な霧の谷ミスティアの魔王。

確かにヴァネルのおっさんも魔王をしてたが、それはもう何年も前の話だ。

ライネルを知らない魔王というのがおかしすぎる。

「ま、僕にはそんなことはどうでもいいけどね。僕はあんたを漬すだけだ」

ライネルは牙のような八重歯を除かせて獰猛な笑みを浮かべる。  
普段のちゃらけた雰囲気からは想像ができない。

「その程度でか？これならまだ『幻影』のほうが数百倍は強い。  
お前は雑魚だ」

「……僕が何で『閃光』って呼ばれてると思ってるんだい！！」

そういつた瞬間、ライネルの姿が掻き消えた。

いきなりの消失にフェイクとか言うヤツは前のめりになる。

そこを狙ってライネルが敵の背後から忽然と現れる。

「甘い！」

相手もそれに気づいたようで振り向きざまに剣を一閃。

だが、ライネルの姿はそこにはなかった。

そして、フェイクは何かにはねられたみたいに吹き飛ばされる。

「甘いのはどっちだろうね」

そこにはいつの間にもいたのかライネルが立っていた。

「……つぶ。雑魚にしてはやる……なっ!!！」

フェイクはまるで何事もなかったかのように立ち上がり、先ほど以上の速さでライネルに接近する。

「瞬迅光爪撃　!!！」

ライネルが言った瞬間、ライネルの手にはめられている爪の武器が目にも留まらない速さで動き、無数の光の斬撃がフェイクに殺到する。

フェイクはまたも壁にめり込む結果になった。

「僕は『光』と『速』の多重属性持ちでね。その、光のごとき速さをもって『閃光』の二つ名を付けられたんだよ」

「……なんつーかキザだな」

「……じゃが、若いもんはまだまだ元気じゃの」

ジジイが言うと。  
壁から瓦礫の落ちる音が広間に響く。

「この程度で俺を倒したつもりか？笑わせる」

「・・・ただの魔物じゃないみたいですよ、龍造さん？」

「そうじゃの。・・・おぬし、何者じゃ？」

ジジイの声に緊張が混じる。

「・・・ヤツは、それほどの相手なのか？」

「・・・うむ」

「・・・だが、さすがに俺も魔王二人が相手じゃ分が悪いな・・・

「  
フェイクはそういいながら自分についた埃を払う。  
そして、底冷えするような不敵な笑みを浮かべる。」

「全力で殺す」

その瞬間、ヤツの周囲で魔力が暴れだした。  
ソラの暴走の時を遙かに越える・・・尋常じゃない魔力。

「な!？」

「  
消える」

その瞬間、黒い閃光がオレ達に向かって奔る。

オレ達はもはや本能的に危機を感じ取った。

気絶したままのソラを忍とか言うヤツが担いで横に飛び、シユウが坂崎達を引っつかむ。

残りはジジイやライネルが女子を無理矢理に移動させ、男子は自分たちで回避した。

そして壁に黒い閃光がぶち当たると、そこには綺麗な円を描いて壁が消失していた。

「!?!」

「消滅ではないの……」

「な、何なのあれ?!?!」

「……女性陣が気絶しています」

「……ツチ……久しぶりにやったからな……加減を忘れたか?……ん?」

フェイクは何かぶつぶつぶやくと自分で消し飛ばした壁のあたりを見ている。

そして、そこに悠々と歩いていった。

足を止め、そこにしゃがんで黒いボールの様な物を拾う。

「……なんだ?あれは?」

「……どこかで見た気が?」

「な、何故、これが!?!?!?……そうか……そういうことか……」



おかしいの」

「みなさん、怪我もしてますし地上へ行きませんか？」

シユウの言葉でオレ達は学校へ戻った。

side 空志

「つっーのが今回の一部始終だ」

「・・・うん」

「どうしたんだ？」

何故だろう、ものすごく嫌な予感がする・・・。

「ソラは渡さないんだからあー!!」

「し、師匠はリカさんだけのものではあ、ありません!!」

・・・決して、今、遠くから、聞こえる、女子二人の叫びじゃない。  
ただ・・・。

「リュウ、ボクの荷物は？」

「あ？面倒だからお前の魔術符カバンに・・・」

ボクはすぐにリュウの拘束を核コアを破壊して解除する。  
そして、魔術符の中身をぶちまける。

「お、おい？何してんだ？」

「・・・ねえ、ボクは黒いボールみたいなのを持ってなかった？」

「？」

「・・・そうか、ならいいんだ」

ボクは荷物を片付けるとベッドに横になる。

やっぱりだ・・・。

フェイクって人、ボクが『呪玉』って命名した呪力の塊を持っていった。

・・・何のために？

「・・・ねえ、呪力とか魔獣はあの『豪炎の魔王』という人がしたの？」

「何でお前がそれを？・・・確かに、あのクソ魔王は呪力とか魔獣は関係がなかったらしい。どうも、ヤツは強いヤツを探してたらまたまたやたらと強い魔獣の気配を感じてあそこにいたらしい」

・・・なら、話がいろいろと違ってくる。

「・・・今回の黒幕はフェイク」

「フェイク？・・・確かにヤツは強かったが・・・おい？どうしたんだ？」

何だか、これから大変なことになりそうな気がする。



ボクはリュウの心配する声が聞こえないくらいに頭の中がフエイ  
クと今後の危険でいっぱいになった・・・。

## 25話・SEE YOU AGAIN!

side空志

「それは本当か？」

「はい。ボクの持ち物からなくなってるんで……。でも、本当に『森羅の魔王』なんて呼称の魔王がいないんですか？」

「うむ。そんな者はおらん」

「確かに僕も聞いたことが無い」

ボクは魔王である龍造さんとライネルさんに呪玉やフェイクのことを話した。

そして、黒装束のことも。

たぶん、これはフェイクの関係だ。

「……じゃが、本当にあやつは何者なんじゃ？」

「ま、それがわかれば苦労はしませんって」

「ま、そんなことよりおぬし達が無事でよかった。もう、留学もそろそろ終わりじゃろ？ここでのお友達と仲良くしてきなさい」

「……はい」

ボクは、考えても仕方ないと判断した。

ま、龍造さんたちが何とかしてくれるでしょ。

side 龍造

「……すまんの。ライネル、実は『森羅の魔王』には心当たりがある」

「はい？じゃ、何でソラ君にそんなことを？」

「ありえんのじゃよ。『森羅の魔王』の名はゼロ。派閥は強襲派アサルトでわしより強いヤツじゃ」

その言葉にライネルは驚いた表情になる。

ま、そうじゃろつな。

「でも、魔王会議デモン・パーティーには欠番なんてありませんし、僕は聞いたこともないですよ？」

「そうじゃな。お主が知らんのも無理はない。やつは300年ほど前にあつた平和派ピースと強襲派アサルトの戦争で……当時ナンバー2のわしが殺した」

そのころ、こやつはただの子供じゃつたから知らないのも無理はないじゃろつ。

「……じゃ、ヤツは偽者？それに名前もフェイクでしょう？」

「……そうじゃ、じゃからありえん」

地獄から蘇りでもせんかぎりの。

じゃが、ヤツが未知の魔法を使うのも事実。

今回フェイクと名乗ったあやつもおかしな魔法ばかり使いよつた。

邪法かとも思ったが、呪力の痕跡がまったく検地されておらん。

「……三魔源素スリーシンボルに死んだはずの『森羅の魔王』……何も無ければいいのじゃがの……」

「……」

side 空志

「戻ったよ……って、何してんの？」

ボクがDの教室に入ると、そこにはカオスな惨状になっていた。……確か、今は魔法理論の時間のはず。

何で、先生が教室の隅っこのの字を書いていじけてるの？

「あ、ソラ〜!!」

「あ、ちょっと!!し、師匠に抱きつかないでください!!」

ボクは素早く魔術符カードをばら撒く。

「……ゲツカイ  
月界」

「「ふぎゃ!?!」」

見事にボクにタックルを敢行しようとした女子二人を撃沈させた。ボクはとりあえず何故か教壇に立っている冬香に話を聞いてみる。

「どうして、先生がそこで近寄りがたいオーラを？そして、冬香は何故に教壇に？」

「え？わたしが天才だからよ？」

・・・うん。

確かに冬香は数法術の天才だ。  
ちなみに数字バカだ。

「・・・オチが読めてきたから言うけど、その先生より冬香の方がすごかったの？」

「今日は数法術の理論だったのよ」

「何やってんの！？あんたバカ！？バカなんだな！？バカだろ！  
？いや、『イエイ』じゃないよ！？ちよつと！そこに何故かいる  
シユウとリュウ！何で止めなかったの！？」

「あ？オレ昼寝してた」

「すみません。止めようとする数法陣を展開されました」

「まあ、実際にその教師がやった数法術よりはるかにデキがよ  
かったからな。問題ねえんじゃないかね？」

ありまくりだよな！？

これって授業妨害だよな！？

てか、生徒が授業ジャックするとか初めて見たよ！

「つか、遅れてきたお前が言うな」

「いや、ボクは龍造さんたちに大事な話が・・・」

そこでチャイムが鳴った。  
そして、みんなが席を立つ。

「ありがとうございます。平地先生」

「「「ありがとうございます」」」

「おい！？カザハ！？何言ってるの！？」

「いや、正直、俺さ、初めて数法術の理論とかわかった」

「ちくしょー！！」

涙と共に先生（男）は走り去っていった。

・・・何はともあれ、冬香達もこの生活をエンジョイしてるぽかった。

「・・・そうか、職員室でたまにものすごく暗いオーラ出してた先生がいたのはリュウ達のせいだったんだね」

「失礼だな・・・オレは実技のときに少しばかり張り切りすぎて先生を半殺しにしかけただけだ」

ダメだ。こいつ何とかしないと・・・。

「……シユウは何もしてないよね？」

「はっはっは。もちろんそうに決まってるじゃないですか」

「……目を見て話そうか」

「シユウ君ね、薬学のときに樹族の知識フル活用で先生を泣かしてたよ」

「……できすぎるってのも考え物だね。」

「つか、お前等すごすぎだろ。軽くそこらへんの大人凌駕するとか」

「……間殿、ぜひ、後ほど手合わせを……」

「ですが、本当に貴方方は何者なんですか？」

「ま、三谷の友達だしな。全員規格外なんだろうな」

「さ、さすが師匠……！」

「……四条ちゃん、それって褒めてないよね？……その卵焼き頂き……！」

「類は友を呼ぶ……わたしのほうがいいトモダチいっぱいよ」

「ソラ、この人危ない……」

「てか、いつの間にか大所帯だね……」

「みや」

Dのバカ連中もいた。  
ちなみに今は昼休み。中庭で昼食中。

「いやあ、いつも坂崎のメシはうまいね！」

「えへへ〜ありがとうね〜」

「俺、もう死んでもいい。」

「・・・貴方はバカですか？それでも元、主席ですか？」

「その間さんとやらが『闇』の属性ってのは本当ですかい？」

「何でいるの!？」

ロイに、ジグ、グランがいた。

「昼飯だからだが？」

なんだろう、ジグは真面目にボケる。

今もきよとんとした表情だ。

・・・なんか疲れた。

「だが、本当に強いな」

「だよな、ソラと、間達、どっちが強いんだ？」



「「さあ？」」

そう答えたのはボクとリュウ。

そういえば、ボク等は本気で戦ったことってあったっけ？

・・・優子イジメさんとの戦闘訓練はボク等男子は普通に一蓮托生だし・・・。

やば、体が震えてきた。恐怖で。

「・・・いきなり三谷殿達男性陣が振るえだしましたが？」

なるほど、ボク等は同じことを考えたらしい。

「深くは聞かないで・・・」

「私もそうして頂けると・・・」

「オレもだ」

「・・・で、でも、もちろん師匠が強いですよね!？」

「何を言うか!？」『闇』属性使う間が強いに決まってる!!」

「・・・ソラをバカにするの!？」

「何で急に修羅場に!？」

何かいろいろとやばくなってきたんだけど!？」

「・・・で、何でこうなったの？」

「龍造さんのせいだよ」

「ソラ！ガンバルー！！」

「お前等がどれだけ成長したか見てやる」

「戦力的には確実にこっちの方が強いわよ」

「まあ、みなさん。怪我をしない程度にがんばりましょう」

「ここは闘技場。」

いま、この観客席には大勢の生徒に先生達。

アリーナにはボク等六人がいた。レオはいない。

でも、リュウに冬香、シュウはボク等の反対側に立っている。

そう、まるで対峙するかのよう。

『というわけで説明じゃ！本日をもって、その三谷空志、坂崎鈴音、アンジェリカ・シエルスは短期留学を終え、わしの学校に戻る。そこで！おぬしらがどっちが強いか気になるとの要望を受けたのでそれを実際に検証しようということじゃ！』

迷惑だ・・・。

病み上がりにも全力で魔法を使えと？

「まあ、別にいいけどさ・・・」

『解説はちなみにこのわらわ、ルーミアじゃ』

「何でいるの!?! さっさと遺跡に帰って!?!」

『わらわの居住スペースがなくなったんじゃ。今はここに厄介になつておる』

『そんなことはどうでもいい。というか面倒じゃからはじめる』

「おい!?! このフリーダム過ぎる人誰かどうにかして!?!」

『制限時間は今より三十分・・・はじめるのじゃ!?!』

「魔法剣 黒刃、斬黒!?!」

「いきなり!?!」

リュウが問答無用で魔法剣を放ってきた。  
無詠唱の魔法に観客席の生徒や先生が驚く。

「アンチ・シェル  
相殺殻!?!」

スズが六角形の魔法の盾ですぐに無効化。  
今までとの段違いの展開速度にリュウ達が驚く。

「今度はこつち!?!」

そういつとリカが飛び出す。  
それに反応したのはシュウだった。

「私が相手です！」

シュウは右の拳をリカに繰り出す。

リカは鎌の柄でガードすると、力任せにシュウを吹き飛ばす。

「やはり、これが必要ですね」

そうとうとシュウはビンに入った液体の薬を取り出す。

それを一息に飲むとビンを丁寧に仕舞う。そして、先ほどとは比較にならないほどのスピードで攻撃を開始する。

急激な変化にリカはついていけないのか立ったままになる。

「隙あります」

シュウの拳がリカに入る。

そう思った瞬間、六角形の盾のようなものでガードされた。

「これは鈴音さんの！？」

「物理攻撃をガードできるようになったってわけね！！」

冬香がいくつもの数法陣を展開して氷の槍の弾幕を放つ。

「ホムラドリ 焰鳥！」

ボクはそれら全てに炎の鳥で迎撃する。

心なしかいつもより多くの魔法陣を展開してる気がする。

「なるほど、成長したようだな」

「まあ、ね。じゃ、遊びはここまでにしようか。リカはシュウを抑えて！！ボクがリュウと冬香をやる！」

「あ、冬香ちゃんはわたしが何とかするよ」

「なら、お言葉に甘えて！！フウカシャリン風火車輪！！」

ボクはリュウに超加速で接近。  
そして、シデン紫電を発動させて銃に纏わせる。  
そのまま銃の刃で切りつける。

「甘いな！これは魔法だから感電しねえ！」

「そつちこそ甘い！」

ボクは魔力を操作して シデン紫電を派生させる。

シデン紫電の電気の一部を球状に変化させそれをリュウにぶつけようとする。

リュウは少し驚いた表情をするといきなり姿が消失する。

そして、ボクは後に振り向いて ツキモリ月守を発動。  
そこにリュウの刃が当たる。

「……デライブ・スベル派生魔法か？お前、魔力のコントロールはずば抜けてるよな」

ホムラドリ「よくわかったね。あれは、言うなら デンライキユウ電雷球 って所かな。  
焰鳥！」

ツキモリ月守を回り込んでリュウに炎の鳥達が殺到する。  
だが、やはり簡単に避けられる。

ボクはそのまま鳥達をリカヤスズの援護に回らせる。

「あんたも成長したわね!!」

「ふっふ。これでわたしはみんなの盾になれるよ!」

「期待してるわ、っとコード 氷地獄 コキユートス !!」

冬香の魔法が発動して冬香を中心にアリーナが凍り付いていく。スズはすぐに盾を移動させ、それを媒介に アンチ・エリア 相殺結果 を展開。スズの魔法は物理防御もできるようになった。ということは、根っからの後衛職の冬香はそんなに力が無い。 チェックメイト 王手詰みだ。

「うわっ!?! 寒っ!?! そんなコトされたらわたし何もできないじゃない!?!」

「えへへ。わたしの勝ち」

「・・・なんかムカつくわね」

「坂崎も強くなったな」

「たぶん、一番強くなったね。で、どうする? 冬香を助ける?」

「んなコトやったらお前に瞬殺されるから、なっ!」

リュウが剣を振るうと黒い斬撃がボクに放たれる。

ボクはそれを魔法弾を撃って相殺。

でも、さっきからボク等は自分達が知っている魔法しか使っていない。これじゃジリ貧だ。

「なら、新魔法だ！ ミスカモメ 水鷗 ！」

ボクは何体もの水の鳥を出現させる。  
それらはリュウに向かって殺到。

「所詮は ホムラドリ 焰鳥 系統の魔法だろ！魔法剣 鞭刃 ！」

リュウの剣の魔力刃が伸び、鞭のようにしなる。  
それで スイロウ 水狼 達を一刀で切る捨てる。

「掛かった！！ グレン 紅蓮 ！」

ボクはこつそりとリュウの足元に放つて遠隔展開させた魔法陣を  
起動。

業火の柱が数メートルにわたって伸び、魔法陣の範囲を焼き尽くす。

「おい！？さっきのはさすがに死ぬぞ！？つか、あの魔法ってあんなだったか！？」

「リュウなら大丈夫！！・・・たぶん」

「うおい！？・・・なら、オレもやる！！」

絶対的な闇の力を持って彼の者を裁け。  
ダイクネス・ジャッジ 断罪の闇 ！」

リュウの影からボクに闇の鎖が放たれる。

フウカシャリン 風火車輪 の機動力でそのまま逃げる。

でも、向こうは更にえげつないことをしてきた。

「 闇よ、万物を縛る縛鎖となつてここに顕現せよ。  
チエイン・ダークネスロンド  
鎖の闇輪舞 」

今度はボクの影、更にはそのほかの周囲の影からも鎖が召喚される。

「 ちよ！？死ぬ！？特に ダークネス・ジャッジ 断罪の闇 ！ 」

「 我、喚ぶは絶対なる闇の力。  
その力は全てを飲み込む。  
汝に畏怖と恐れを。  
闇の暴力に屈せ。  
今ここにその力を示せ。」

エンデ・オブ・ブラック  
終焉の黒 」

「 ばねえー！？マジ死ぬ！？ 」

side 隆介

さすがにやりすぎたか？  
ソラが何か叫んでるが大丈夫だろう。  
あいつは死んでも死なない。

「 リカさん、強くなりましたね！！ 」

ヴァンパイア・スベル  
「 吸血呪、使えなかったから 」

・・・オレの目が正しければ二人の姿が視認できない。  
また、こいつらは超人同士の戦いを演じているようだ。



「邪魔をしねえ程度にやるか・・・っと、その前に冬香か」

「敵前逃亡とは余裕だね！」

「ダイク・イロージョン  
侵食する闇　！！」

オレは本能に任せ魔法を喰らい尽くす闇を召喚。  
そこに、雷を内包した風の弾丸がぶち当たる。

これは、ソラの貫通力に優れた魔法か！

オレは魔法が持たないと判断してすぐに横に逃げる。  
それと同時に魔法が破壊された。

「・・・たく、アレでまだ生きてるのか？」

「殺す気があったの!？」

ソラのほうを向くと、そこには大きな水で構成された亀がいた。

「・・・ヤマタノオロチ  
八岐雷大蛇　の亀バージョンか？」

「ご名答。これは防御に特化させた魔法、レイキ  
水霊亀　いや、さすがに死ぬかと思った」

いや、大丈夫だ。

まあ、死ぬより酷い目にあうがな。

だが、あの魔法でどうやって回避したんだ？

・・・ヤマタノオロチ  
八岐雷大蛇　の自動修復も似たようなもんだし気にしないでおくか。

「おい。これじゃ埒があかねえ・・・次できめねえか？」

「オレは鞘に双剣を仕舞う。」

そうすると、ソラも精神集中のために目を閉じ、人差し指と中指を立て、自分の顔の前に持つてくる。

「・・・今のボク、最強の技で行く」

「おう。オレは・・・魔法剣の真言だな」

そういうと、オレ達は同時に詠唱を開始した。

side 樹

「いやあ、強くなりましたね！」

私は拳をリカさんに叩き込みます。

それは簡単に防がれています・・・。

「がんばった」

「ヴァンパイア・スベル吸血呪を使われたら負けそうですね」

今はかるうじて私が優勢な状況。

ヴァンパイア・スベルですが、吸血呪無しでここまでとは・・・最初に出会ったところから進歩しています。

さすがです。

「ですが、勝負がつきませんね・・・」

「確かに！」

リカさんが鎌を振り下ろしてきたところを私は左手でつかみ、右の拳を突き出そうとします。

ですが、リカさんは体をひねって蹴りを入れてきました。とつさのことに私は思い切り後ろにバックステップを踏みます。

「おいしい・・・」

「さすがです。では少し本気を・・・!?!」

いきなり魔力の高まりを感じました。

それは、リカさんも同じようです。

私達を感じ取った方向を向くと、そこには腰の鞘に双剣を仕舞い、居合いの構えを取って詠唱しているリュウさんと、真言を唱える体勢のときのソラさんがいました。

「ね、ね〜!?!さすがにあれはまずくないの〜!?!」

「あのバカ達は・・・!?!ここら辺吹き飛ばすつもり!?!」

「あの二人を沈めましょう!?!」

「あれ?字が違う?」

「今は気にしちゃダメだよ」

「スズ!あんたこれ解除しなさい!」

私とリカさんはすぐにお二人の下へ行きます。

「・・・魔法剣 断龍漆こ どぶは!？」

「ギリギリセーフです」

間一髪、リュウさんの魔法を止めることに成功しました。

「おい!? 何すんだよ!？」

「いえ、リュウさん。貴方、先ほどの魔法を使えば確実にここの周囲が更地になっていましたよ?」

向こうでもリカさんがソラさんに正座させて何か言ってますね。結構珍しい光景です。

「あ、ああ・・・すまん」

「はあ・・・。これはあくまで練習試合なんですから」

「コード 槍衾ファランクス！」

「・・・おい」

「もう、解決しました!! だから撃たないで・・・無理ですね」

とぼつちりを受けるのも嫌ですし・・・逃げましょう。

「おい!? 助け」 発射ショット 「!」 ぎゃあああああああ!？」

ソラさんのほうはリカさんが助けたようですね。

おそらくはリカさんが後で何かを要求するでしょうが。

「ま、文字通り頭を冷やしてください」

そういうわけで今回は引き分けになりました。

side 空志

「いやあ、長かった。それにここでも面倒なことに巻き込まれたし……。ボクに何か憑いてるのかな？」

「アタシアタシ！」

……確かに憑いてるね。

でも、元気に主張することじゃないと思う。

「でも、よかったよ。これでわたしも少し強くなれたよ」

「お前の詠唱も少しはマシになっただろ？」

「ま、わたしから見たらカスだけどね」

「でも、強くなりましたね」

「準備はできたかの？」

「「「「「はい「「「「「」

今日はボク等が帰る日。

てか、ここの終業式と同時に留学が終了したんだけどね。

と、言うわけで明日から夏休み。

ボク等は大勢の生徒と一緒に校門の前にいた。

ライネルさんはあの変態魔王を引つつかんでどこかに行った。

「明日から夏休みか……。平和だといいな」

ホントに。切実に。真剣に。真面目にそう思う。

「……例の……。準備……」

「大丈夫じゃ……。死にた……」

リカと龍造さんが何か話してるけどなんだろう？

……。何故か嫌な予感がするからボクは二人に聞こうとした。

「お〜い」

「いたいた」

声が出たほうを向くと、そこにはDのみんながいた。  
なんだろう？

「お前のおかげでいろいろと助かった！ありがとうな！」

「また遊びに来てね！」

「さよならは言いませんわ」

「あれ？泣いぶぎゃ〜!?!」

「・・・お元気で」

ボクはスズとリカに目配せをする。

「・・・また会おう！」

「・・・また！」

ボク等はここの生徒達に見送られながら帰路に着いた。  
ボク等は見えなくなるまで手を振った。

「おい。他に言わなくてよかったのか？」

「別にいいよ。また、会いに行くから」

「わたしもまだまだ知りたいたいことがあるしね」

「勉強できないあんたが言っただから相当ね」

「アタシはソラが行くところについて行くよ」

「ですが、先ほどの中に四条さんがいませんでしたね」

そうなの？全然知らなかった。

ま、そのうち会えるでしょ。

「何はともあれ、おぬし達にとってこれがよい刺激になればいい  
の」

「でも、今回は四月からいろいろあったしね・・・しばらくは休

憩したい」

「そういやお前、今回もいろいろと無茶したんだよね？」

「あれよね？学級間の戦争とか。ちょっと教えなさいよ」

「いいですね。私も是非」

ボク等はここでの思い出を振り返りながらリュウ達に学園生活を話した。

また、ここでの仲間達に会えると信じて。

「それまで、バイバイ・・・」

ボクの声は初夏の空に吸い込まれるように消えていった。  
これから、夏が始まる・・・。



25話・SEE YOU AGAIN！（後書き）

作 「そんなわけで第四章が終了しました！」

空 「何か久しぶりにここに来た」

作 「まあ、そーゆーわけです。ついに物語が本格的に動き出しました」

空 「やっと!?これってどういう小説だったの!？」

作 「最初のほうは生 会の一存的な感じにしようかな〜と」

空 「葵せ なさんとフアンの人に謝れ!!お前がやると穢れる!

作 「そこまで言う!？」

空 「当たり前でしょ。ま、そんなことより次回は？」

作 「・・・この野郎。・・・次回から新章!題して『夏休み編』」

空 「まんまで面白くない」

作 「夏と言えば海！」

空 「今、現実には冬だけだ」

作 「きゃつきゃうふふふな夏休みだぜ！」

空 「・・・まあ、今回は平和」

作 「にするとでも思ったか!？それは神が許しても僕が許さない」

空 「少しでも常識を求めた僕が馬鹿だった」

作 「つーわけで一話目から飛ばして行くぜ!!」

空 「・・・作者がフィーバーしすぎてるので今回はここまでで

作 「ふはははははははは!!この僕にひざまずくがいい!!」

空 「・・・次回もよろしく 雷燕ライオン!!」

作 「ふはぎやあああああああ!!??」

エレオノール魔法学園出席簿（前書き）

エレオノール学園に出てくる人達の人物紹介です

## エレオノール魔法学園出席簿

### Dクラス

氏名・風葉<sup>カザハ</sup>・シルファリオン

役職・Dクラス代表

属性・『風』『葉』

得意科目・特になし

苦手科目・特になし

主要武器・ナイフ

備考・猟師の家系。Dクラスにおいての唯一の普通な男子。

氏名・寺井杏奈<sup>てらいあんな</sup>

役職・Dクラス副代表

属性・『友好』

得意科目・生物

苦手科目・魔法史

主要武器・鈴？

備考・フレンドリーな副代表を目指す少女。非情に珍しい動物と対話を可能とする属性を持つ。

氏名・リオネ・マーティス

役職・お嬢

属性・『同調』

得意科目・魔法実技

苦手科目・魔導工学

主要武器・レクト特性の人形

備考・『人形遣い』のマーティス家のお嬢様。魔力は少ないが複数  
の人形を操ると言うふざけたことができる。

氏名・レクト・ニルメイカ

役職・リオちゃんのダンナ

属性・『雷』

得意科目・魔導工学

苦手科目・魔法理論学

主要武器・いろいろ（よく銃器火器を使用）

備考・リオネの護衛兼專屬器術師。<sup>マキナー</sup>ついでに幼馴染。若干お調子者。

氏名・影崎忍<sup>かげさきしのぶ</sup>

役職・忍者

属性・いろいろと謎が多いため不明

得意科目・格闘術、薬学

苦手科目・特になし

主要武器・暗器全般

備考・暗殺者<sup>アサシン</sup>の家系の少年。魔法系統が極端に偏っているためにD  
に落とされた。

氏名・アスカ・ホークレス

役職・狙撃手<sup>スナイパー</sup>

属性・『照準』<sup>サイト</sup>

得意科目・数学

苦手科目・魔法理論学

主要武器・魔法狙撃銃<sup>スナイパーライフル</sup>

備考・特殊属性『照準』<sup>サイト</sup>の持ち主。この魔法により射程距離が12

OOMになる。狙撃手としてはうらやましい限りである。

氏名・四条奏

役職・天然二号さん

属性・『精霊』

得意科目・魔法理論学

苦手科目・たくさん

主要武器・精霊との対話

備考・数少ない精霊魔導師。よくボーっとしているが、精霊との対話にいそしんでいるためのものと考えられる。・・・たぶん。

## Aクラス

氏名・ロイ・ガリユーク

役職・元Sクラス代表

属性・『地』『金』

得意科目・魔法実技

苦手科目・なし

主要武器・剣

備考・元Sクラスの代表。鈴音にいいところを見せようとして空志に返り討ちにされた哀れな少年。

## Sクラス

氏名・ジグ・フロルド

役職・Sクラス代表

属性・『重圧』

得意科目・魔法理論学

苦手科目・なし

主要武器・大剣

備考・ロイの後釜。エリート意識の塊のような存在。だが、文字通りDクラスの方々と拳で語り合うことで改心した。

氏名・グラン・スリザン

役職・Sクラス副代表

属性・『影』

得意科目・魔装術学

苦手科目・なし

主要武器・短刀タガ

備考・第一学年のナンバーツー。戦闘よりもどちらかと言つと謀報のほうが得意な少年。

## 教師

氏名・サリナ・G・エレオノール

役職・学園長

属性・『光』

担当教科・魔法実技

主要武器・フリーダム精神

備考・エレオノール魔法学園の学園長。どういわけか魔王である龍造さんと知り合い。この人もかなりフリーダム。

氏名・カルネル・C・ランバート

役職・学園長補佐

属性・『土』

担当教科・魔法理論学

主要武器・スケジュール帳

備考・サリナ学園長の右腕（と言う名の下僕）で苦勞人。将来は絶対にハゲるともっばらの噂（発信源は某自由な学園長）。

氏名・園田椿そのだつばき

役職・事務

属性・ドジっ娘

担当教科・なし

主要武器・ドジ

備考・見た目はかなりできそうな感じのキャリアウーマンな女性。ただしその実態はものすごいドジっ娘。

氏名・レイ・アストリウム

役職・Aクラス担任

属性・『土』

担当教科・錬金学

主要武器・杖

備考・Aクラス担当の先生。フレンドリーな人で学校でも人気のあ  
る教師。

氏名・木下真希きのしたまき

役職・先生

属性・『氷』

担当教科・魔導工学

主要武器・なし

備考・いつも作業着、安全メガネ装備の女性の先生。機械いじりが  
できれば後は何もいらないと豪語してゐる。



# 1話・SUMMER DAYS

side空志

暑い……。

ボクはあまりの暑さに目が覚めた。

……既に夏休み。

って、言っても初日だけ。

てか、クーラーつけて寝たのに……タイマーセットしたけど何

でこんなに暑かしいんだ？

……何故か体が重い気がするけど気にしないでおう。

「んう……あ、おはよ」

「って、できるか！何で！？こっつてボクの家だよね!？」

例のごとく何故かここに吸血鬼ヴァンパイアの少女がいた。

そして、階段を上る音が聞こえ、二階にあるボクの部屋で止まる。

「兄貴？起きてるの？入るよ？」

「ちょ!？待っ!？」

扉が開く音とともに一人の少女が現れる。

三谷海美みたにうみ。一つ下の我が妹です。

そして、我が妹はボクとリカを交互に見る。

「……ゴメン。兄貴とリカさんがそんな関係だったなんて知らなくて……じゃ、ごゆっくり」

扉を閉めると、おかしさん!!と叫びながら一階へ。

「って、違う!話を聞いてくれ!」

ボクは寝ぼけた頭で昨日のことを思い出しながら海美を追いかけた。

「昨日」

「はあ、やっと我が家に着いた」

「みゃ」

ボクは自分の家の前にいた。  
寮で生活してたから懐かしく感じる。

インターホンを鳴らして帰宅を知らせる。すると、すぐにボクの  
母さん、三谷奈美みたになみが登場。

「あ、お帰り。元気だった」

「うん。元気。ただいま」

「はじめまして。お義母様」

そしてボクは中に入っていく。

.....

あれ?

ボクが後を向くと何故かリカが。

「あらあら、日本語がお上手ね」

「何で！？何でリカがここに！？」

「リカちゃんって言うの？可愛い名前ね。ささ、中に」

「ちよつと待って、何でナチュラルに家に招いてるの？」

「おかーさん？・・・あ、この人がホームステイの人？」

「ほーむすてい？」

「あら？空志には説明してなかったっけ？ここにいるリカさんは夏の間、我が家にホームステイすることになったのよ？」

ボクはリカの首根っこを引っつかむと部屋の隅に行く。

「どっぴいっこと！？」

ボクは母さんたちに聞こえないよう小さな声で聞く。

「うん。アタシさ、家に帰れないから龍造さんに相談したらこうすればいいって」

「・・・ゴメン」

そうだった。

リカは帰れないんだっけ？

掟がどうか言ってた気がする。

「ううん。気にしないで（ふっふっふ。作戦どーり！！これでこの夏にソラと・・・きゃ？・・・それであんなことかこんなこと・・・）」

リカは慈愛に満ちた笑顔で言う。

でも、何故か黒く見える。それに笑顔が妙に怖い。

「でも、何でうち？他の女子のところに行かないの？」

「血がソラしか吸えない」

なるほど。

「とりあえず、スズか冬香の所に行って慣れてきなさい」

「いやあゝ。むりいゝ」

そんなこんなで結局はうちに泊まることになった。

ボクは何とかリカとの誤解を解消することに成功した。  
3時間ぐらい掛かったけどね！

「せっかく今日は赤飯にしようと思ったのに・・・」

「やっと兄貴にも春が来たと思ったのに・・・」



「そのうち戻るわよ」

「ソラ？大丈夫？」

「・・・うん。大丈夫。たぶん。だいたいな」

軽く心をズタボロにされながらも何とか立ち直る。

何で夏休み初日からボクはこんな目に遭わなきゃいけないんだろ  
う？

ホントに神様を恨む。

そして、インターホンになる。母さんが玄関に向かっていった。  
でも、こんな時間に誰だろう？

って、もう昼か。3時間ほど誤解を解くのに時間を費やしたのを  
忘れて・・・。

「アンジェリカはここかあああああああ！！！！！！」

玄関から大声が聞こえる。

すると、居間に黒いマントを羽織った金髪に眼が赤色な外人の頭  
のおかしいおっさんがいた。

「・・・急いでたわりにちゃんと靴は玄関で脱いだんですね」

「で、リカさん。お知り合いですか？」

「パ、パパ!？」

「「……ぱぱあ!？」」

「おお!？我が愛娘よ!！」

リカのパパは腕を広げてリカを抱きしめようとする。

「いやあ!？」

「げぶう!？」

そしてものすごい勢いで壁に激突。

「……ホントにリカのパパ？」

「……………」  
・残念 فقط

なんと、リカの父親がこの家にやってきた。

ボクは無理矢理海美と母さんを追い出すとリカ親子に居間の椅子を勧めてとりあえず話してみる。

「ゴメン。アタシのパパ」

「どうも。アンジェリカのパパです」

「……とりあえず、名前は？」

「アンジェリカのパパです」

「……………お名前「アンジェリカ・ダディでも」もういいです！」

「パパ！！いい加減にして！！」

リカの右拳がアンジェリカ・パパの後頭部に直撃。  
アンジェリカ・パパは血の海に沈んだ。

「アタシのパパでラディエ・シエルスです。見ての通り親バカで……………」

なるほど。

ボクは同情の視線をリカに送る。

「でも、何でラディエさんが？確か吸血鬼ヴァンパイアの掟で……………」

「お？卿は吸血鬼ヴァンパイアのを知ってるのか？」

いきなりラディエさんがむくりと起き上がり、ボクに鋭い視線を向ける。

「はい。もちろん、リカが吸血鬼ヴァンパイアで貴方もそうだってことは」







「パパは黙ってて！パパなんか大キ「本題に入ろう」」

「変わり身速っ!?!」

「アンジェリカにキライとか言われたらパパ立ち直れない!」

「黙れ親バカ」

「うるさい・・・まあ、そんなことはいい。で、だ。卿は何が目的だ?」

「はい?何がですか?」

「力か?」

「はい?」

「吸血鬼ヴァンパイアは夜の化け物の代名詞。災厄だぞ?」

「いや、困ってたからですけど?」

「・・・卿は我を馬鹿にしてるのか!?!」

ラディエさんからものすごい量の魔力が発生する。

感情によって魔力のコントロールが一時的に狂ってる。

「いや!?落ち着いてください!ボクは間龍造って言う魔王の知り合いです!」

「誰だ！？それは！それが我に何の関係がある！！」

「魔王って所に突っ込んで！？」

「パパ！ソラが言ったのは本当なの！！」

「マジで！？」

リカの鶴の一声によってラディエさんから魔力の乱れが無くなる。  
てか、ホントにリカ強い。

「いや人間は皆、欲の塊だ！力が目的で無いならお前はアンジェ  
リカにあんなことやこんなことをツ！？」

「何でそうなるの！？」

「むしろして欲しいのに！！」

「貴様ツ！リカを誑かしよって！！」

「いえ、むしろお宅の娘さんの暴走を止めて欲しいぐらいです。

ボクがそのおかげでどれほど生命の危機にさらされていることか・

「・

ボクはここ最近起きた事件の全てを話した。

どうにかラディエさんは話を聞いてくれ、理解してもらったよう  
だった。

「そうか。いや、愛娘が世話になった」

「いえ。で、どうしてここに?」

「アンジェリカを連れ戻すためだが?」

「いや、確か吸血鬼は掟が……」

「あ、あれ?そんな人間にあっただけで追放とかそんなの無いから」

「ラディエさんは手をひらひらさせてバカじゃねーの?って顔でボクに言う。」

「……リカ?」

「え?でも、パパが……」

「ああ……あれね。アンジェリカに変な虫がつかないように人間に会わないように教育した。だって、美少女だし?」

「……焰鳥」  
ホムラドリ

「あぢやあああああああ!!???」

既に末期症状に突入してる親バカだった。  
たかが嘘でリカの人生をいろいろと狂わせたらしい。

「リカ。どうする?」

「……まず、三枚におろす」

リカは鎌を持ってラディエさんに迫る。  
ボクも銃をラディエさんの額に向ける。  
何故だろう？ものすごく躊躇い無く引き金を引ける気がする。

「むっ？アンジェリカ、その鎌は デスサイス 血濡れの大鎌 ではないな？」

「え？うん。ソラに作ってもらった」

何故かりカは頬を赤らめながら言う。  
・・・何で？

「・・・おい、貴様」

「はい？ボクですか？」

「我と戦え！！貴様に娘はやらん！！」

「・・・何でそうなるの！？」

ボクの叫びが夏の空に響いた。

1話・SUMMER DAYS（後書き）

作 「新章突入!!」

ラデイエ 「我は可愛い愛娘、アンジェリカのパパだ!!」

作 「と、言うわけで最初から全力でギャグをお送りします」

ラ 「ねえねえ。うちの娘かわいいと思わんか!？」

作 「はいはい」

ラ 「何だ貴様？娘が気に入らんのか!？」

作 「うぜー!？何この人!？」

ラ 「貴様に天誅を！」

作 「人の話し聞けよ!？」

? 「いい加減になさったほうがよくて」

ラ 「ごばあ!？」

作 「何であなたが!？」

? 「いえ、この人が迷惑をかけてると聞いたので。次回の予告を  
してはどうでしょう?」

作 「あ、はい。・・・次回！リカパパVSソラ！いったいどっち  
が勝つ!？」

? 「・・・それだけですの?」

作 「・・・そして、勝負を決するとき、現れる!!」

? 「はい!!」

作 「・・・次回もよろ」

## 2話・BATTLE

side空志

「お前、馬鹿だろ」

「うるさい。ボクも何でこうなったか知りたい」

「でも、初日からすごいね」

「さすがフラグゲッター（笑）」

『ハッ。せいぜい死んで来い』

「てか、久しぶりだな」

「リカっちパパもすごい親バカだね」

「ここは近所の空き地。

どこから聞きつけたのかリュウにスズ、インチョーに田中&ミス  
ト、宇佐野さんがいた。

「よく逃げなかったな！」

「いや、逃げるも何も一緒に来たじゃないですか」

「空気を読め！」

「……木箱の上に立ってガキ大将よろしくなんかやってるあんた  
が言いますか？」



てか、この人ホントに馬鹿だな。

「パパ！約束覚えてる！？」

「もちろん。我が人間如きに負けるはずが無いがな！」

「あ？約束つてリカのヤツ、何を言ったんだ？」

「うん。ソラが勝つたら結婚を認めてくれて、ソラの家で過ごしていい。学校にもいても大丈夫。でも、パパが勝つたらアタシの家に連れてかれちゃう」

「……三谷死ね」

「何で結婚！？初耳ですが！？」

「大丈夫だよ！ソラならあんな親父一ひねりだよ！」

どこに突っ込めばいいのかわからない！  
だから、やたらとラディエさんが殺気立ってるんですね！

「わかったか！お前に我が娘はやらん！！」

「結婚とかいいですから！それにボクまだ十五です！できないし！……でも、リカがまだここにいたいのに無理矢理連れてくつて言うならボクは全力で勝ちます」

「貴様！アンジェリカと結婚したくないだと！？万死に値する！」

「ボクはなんて言えばいいんですか!？」

ラディエさんがリカよりもサイズが大きい漆黒の鎌を取り出す。  
・・・リカと同じで鎌使いか。

ボクは銃を構える。

「リュウ、人払い的なことって済んでるの？」

「ああ。ジジイに頼んで魔術符に簡易的な人払いの結界の魔術構<sup>ラム</sup>成を組んだやつを発動させた。魔法に関わりのあるやつ以外はここには来れねえ」

「あれ〜?でも、ワタシ普通にいるけど？」

「お前が来てから展開したからな。お前がここから離れたら来れなくなる」

「なら、おっけ。準備ができました」

「よかるう。ハンデをやる。お前の攻撃を一回受けてやるう。せいぜいがんばるがいい」

マジで!?

ボクはホルスターに銃を収める。

「じゃ、お言葉に甘えて。

其は魔に属す法則!」

最初から全力で行く!!

必殺技はとつとくとか馬鹿だと思つ。

「月夜ツキヨ！」

「な！？具現化だと！？」  
マテリアライズ

ボクの手元に現れた一振りの刀を見て慌てるラディエさん。  
さすがに吸血鬼ヴァンパイアなだけあって古代の魔法も知っていたらしい。

「フウカシャリン  
風火車輪」

ボクの足首辺りに帯のような魔法陣が展開。  
これで一時的にボクは超加速できる。

「ちょ！？そんなの聞いてな「問答無用！」ぎゃああああああ  
あああ！！？？」

ボクがブーストダッシュでラディエさんに接近し、刀で斬りつけ  
る。

ラディエさんとはつさに刀を回避する。

「あぶ！？それは無いわ〜」

「ラディエさん。一回受けてくれるんじゃない？」

「・・・ふつ。人間の癖にやるな。卿の名は？」

「いや、三谷空志ですが？てか、さっきのハンデは？」

「三谷空志か。卿の名、しかと覚えよう。我も本気で行く！」

「おい。ハンデ・・・」

「行くぞ!」

ダメだこりゃ。

なら、こつちにも考えがある。

「リュウ!レオは!?!」

「ん?あいつはとりあえずオレン家で預かってるが?」

「すぐここに連れてきて!」

「逃げるな!」

ボクはラディエさんの攻撃を何とか避ける。

リカよりもキレのある動きでやられて正直まずい。

「おう。  
シャドウ・パス  
影抜け」

リュウの影がうごめく。

そして、影から白い子猫が吐き出される。

「みゃ?」

「レオ!手伝って!」

「みゃ?にゃ〜」

「ハッ!まさに猫の手も借りたいか!?!」

「ボクが借りるのはライオンの爪だけど」

レオが光に包まれる。

そこからは白い羽の生えたライオンがいた。

「うそお!？」

「レオ!咆哮覇!」

レオが咆哮をあげる。

白い光線がラディエさんに向かう。

今度はラディエさんが霧になって回避。

「ちょ!？それは卑怯じゃない!？」

「・・・ボクの攻撃を一発受けるとか言って避けた吸血鬼のおっ  
さんがいた気が?」

「え?そんなハンサムな吸血鬼がいるの?」

「で、その吸血鬼の娘さん。その人どう思います?」

「最低。この世から消えればいいと思う」

「ガハア!？」

ラディエさんは口から吐血して倒れた。

何でかこっちの方がダメージが大きそうだ。

特に精神的ダメージが。









「てか、何で魔導<sup>アーティファクト</sup>宝具持ってるの!？」

「うん……一番始祖の血が濃いから？王族っぽい者だからかなあ？」

「じゃ、リカってガチでお姫様!？」

ピース!・・・じゃないよ!？」

今、ボクの命はかなり危機にさらされているんですが!？  
相手は素でドゴンボール的な移動をできる人ですよ!？」

ごく普通の運動神経しかないボクには無理だ!

少なくとも体が追いつかない!

今も魔法を乱射して、<sup>フカシャリン</sup>風火車輪の推進力で何とか一定距離を保ってるだけだし!!

「そこだあああああああ!!!!」

「<sup>ミスカモメ</sup>水鷗!」

一瞬の隙を突いてラディエさんがボクの懐にもぐりこむ。

ボクは死ぬ気で無数の水の鳥をラディエさんに放つ。

ラディエさんはそれを無視して、というかボクの魔法に真っ向から突っ込んでくるといふざけたことをしました。

「ちよ!?!いくら水系の魔法は衝撃に重点置いてるからって真っ向から来る!？」

「アンジェリカの仇いいいいいいいい!!!!」

「意味わかんないけど、おつ！ 紫電シデン！」

ボクは 紫電シデン を優子さんに触れられたくないって理由で自分の体の表面に流せるように特訓した。でも、これは本来は地面に指向性を持たせた電気を相手にぶつける魔法。

そして、ラディエさんはボクがさつきはなつた 水鷗ミスカモメ をモロに受けてる。

つまり、びしょぬれ。水は電気を通す。

「あばばばばばばば！！？？」

ラディエさんは感電した。

初めてボクは自分の力でラディエさんにダメージを与えた気がする……。

「ま、まだだ……」

体のところどころから煙とか静電気を放ちながらラディエさんが立ち上がる。

さすがは吸血鬼ヴァンパイア。タフだ。

「……吸血呪ヴァンパイア・スベスサイス 血濡れの大鎌 ！」

ラディエさんが鎌を一振り。

すると、数十の斬撃の衝撃波がボクに放たれる。

風火車輪フウカシャリン の推進力で上に跳んで避ける。

そこで、ありえないことが起きた。

衝撃波がボクを追尾してきた。

「うそお！？」

「これがパパの底力！」

絶対違う！

そう思いながらボクは再び フウカシヤリン 風火車輪 の力で空中を移動。

「チツ！・・・空中でも移動できるのか。・・・だが、次で最期だ！」

「え？字が違いますよね！？」

「・・・喰らえ！ヴァンパイア・スベル吸血呪ソウ「何をしてるのかしら？」くぼお！？」

・・・ラディエさんが地に沈んだ。

いや、文字通り。ぱっと見、犬家の一族的な感じで頭から地面にダイブしてる。

というか地面から生えてる。

ボクはそれを起こした女性をしてみる。

見た目、白髪に黒い目。とても綺麗な顔立ち。

「ママ！？」

「え？アンジェリカさんのお母さん！？すっごい綺麗！？」

「あらあら、ありがとう」

うん。大体オチはわかった。

すごく優雅な笑み的なものを浮かべてるけど後ろのラディエさんだったものでかなり減殺されてます。

「アンジェリカの母のシルヴィエです」

「うちのバカ亭主がすみません。ほら、あなたも」

「さーせん」

ラディエさんがシルヴィエさんに叱られているがどうも反省はしてないらしく、そっぽ向いてボク等に適当に謝る。

「もう一度埋まりたいのかしら？」

「すみませんでした!!」

シルヴィエさんがすごんだ瞬間に土下座。

・・・ドンだけ奥さんに弱いんですか？

「本当にすみません。でも、アンジェリカもダメよ。こんなクソバカパパの言うこと真に受けちゃ」

「ごめんなぞ」

「あゝ・・・ラディエさんが泣いていますよ？」

インチョーがあまりに不憫なラディエさんを見ていう。

「いつものことです」

「……そうなんですか」

「ですが、娘を保護してくれてありがとうございます。吸血鬼ヴァンパイアですから、いつ襲われるか心配で……」

「いや、ボクよりもリュウに。魔窟で保護するように提案したのはリュウですから」

「だが、守りきったのはお前だ。それに気にすんな。オレは魔物だしな」

「そうですか……。では、アンジェリカ。帰りますよ」

「いや。ソラという」

リカはボクの後に隠れてしまった。

「あら？人見知りなこの子が人間の男の子と？」

「か、関係ないでしょ！そ、それに血が飲めるから……！」

リカは微妙に顔を赤らめて言う。

それを見てシルヴィエさんは何かを察したのか、微笑んで言う。

「そんなにこの子の血がおいしかったの？じゃ、わたしにも一口……」

そう言うとシルヴィエさんはボクの許可も取らずに腕に噛み付く



「あ、そうそう。アンジェリカ」

「え〜？何〜？」

頬が緩んだままでリカがシルヴィエさんの言葉を聞く。

「そろそろ離さないと貴女の最愛の人が死んじゃうわよ？」

「え？・・・ソラ!？」

ボクはリカの腕の中で気絶した。

「・・・ボクの・・・部屋？」

ボクが目覚めると、そこは自分の部屋だった。

起き上がってみると一階のほうから話し声が聞こえる。

ボクは部屋を出て居間に行くと、そこには謝り倒してるシルヴィエさんとリカ、そして何故か痙攣しているラディエさんがいた。

「あ？起きました？すみませんうちの娘が・・・」

「いえいえ、こちらこそ。こんなバカ息子で・・・」

ボクは主婦で会話しだした二人に話を聞くのは無理だと判断してリカと海美に話を聞くことにする。

「ボクが気絶してから何が起きたの？」

「何か、リカさんのご両親が迷惑かけてごめんなさいって言いきたのと……。ホームステイお願いしますって……。でも、いまだきステイ先に男の子がいるってだけで自分の国からここまで来るって……。リカさんも大変だね」

「うん……。まあ……。でも、ママのおかげでパパの説得ができたの！」

……。暴力という名の説得か。

あの人、上品そうに見えてラディエさんにはものすごいからね。たぶん、隅っこで痙攣してるのも説得のせいだろうね。

「では、娘の事、お願いします」

「いえいえ、娘がもう一人できたようでうれしいですよ」

「は！？娘は「いい加減になさって」「じぼあ！？」」

この人、学習しないね……。

「でも、リカはいいの？家に帰れるんだよ？」

「うん……。今はまだいいよ。アタシにはやりたいことがあるし」

「やりたいこと？」



「うん。ソラ達と一緒に世界を見て、それでいろいろと知りたい。それに……ここにいるほうが楽しいから」

「そう……。なら、いいんだけどさ」

「うん……。これからもよろしくね」

「では、私達はこれで失礼します。それと……ソラさんでした？」

「あ、はい。それでオツケーです」

「リカのこと、頼みましたよ。よからぬ人はたくさんいますから」

「はい」

そういうと、シルヴィエさんは帰っていった。

……ラディエさんを引きずって。

ボク等はそれを玄関で見送った。

「じゃ、もうすぐ夕飯ね」

「……はい？」

「空志が起きたのが十時ぐらいよ？それでいろいろあって昼ごはんも食べなかったし……。体に悪いわよ」

そういつと母さんと海美は家の中に入っていった。

「初日を変なことではいっぱい使った!？」

何故か初日からハード。

これがボクの夏休みのデフォルトになりそうでもものすごく怖い。

「ま、そのときはアタシも手伝う」

「いや、そもそもがそんなこと起きてほしくない」

「でも、一回でいいからアタシ海に行ってみたい……。地元は山で海って見たこと無かったの」

そうか、ヴァンパイア吸血鬼はどっかの山に暮らしてるのか。

それで基本的に鎖国に近いことしてるからそこから出ないんだ。

「ま、後のことはおいおい決めていこう。まだまだ夏はこれからだし」

ボクはそういうと家の中に入っていった。

ま、今日は夏の予定を考えるのと、たぶん来るであろう家族からの学校生活についての質問でもして残りを過ごそうかな？

## 2話・BATTLE(後書き)

作 「とうとうわけでこういうオチでした」

ラ 「認めんぞ！我は」

シルヴィエ 「いい加減になさって」

ラ 「ごばあ！？」

作 「とうとうわけで前回の後書きで出てきたのはこの人でした」

シ 「うちの主人がすみません」

作 「まあまあ。気にしないで」

シ 「そうですか？」

作 「そうそう。じゃ、次回予告！ソラ達には依頼が！？」

シ 「・・・あらあら。楽しそうね」

作 「・・・読みながら言わないでください」

シ 「私もう・・・」

作 「次回もよろしく！！ネタバレ！？」

シ 「いいじゃないですか。少しぐらい」

### 3話・BEGINNING

side 冬香

とある部屋の一室、ここにはわたしと一人の青年がいた。

この青年の名前はラズ・フィール。

わたしの所属するギルドのリーダーだ。

「で、何？わたしも暇じゃないのよ？」

「何を言っただやがんだ？ただ紙に何か書いてるだけじゃねえか。

・あれか？新しいコードでも考えたのか？」

「違うわよ。これ、高校の宿題」

「は？・・・お前ならそんなもん数秒で・・・」

「これ、読書感想文なの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・相変わらず文型はカスなんだな・・・」

「黙りなさい。数学はもう終わったわよ!!」

「英語は？」

「.....」

「そんなことはどうでもいい。お前がいないおかげで、今の俺達は金欠だ」

「は？ちゃんと使っていいお金のメモは渡したでしょ？」

「まあ・・・その・・・なんだ・・・豪遊すぎた」

「・・・馬鹿ね。で、いくら？」

「・・・ん」

そういうとラズは一枚の紙を渡す。

「・・・何よこれ！？赤字じゃない！？」

「すまん。立て続けに二件の依頼が失敗してるからな。収入が少なかったんだ」

「もっと早くにいいなさいよ！このクソリーダー！！」

「うるさい。・・・それで、だ。金が無い」

「ふって沸いてきたら苦労はしないわ」

「背に腹は変えられん。というわけで今回はギルドの大会に出る。そこで賞金を貰ってついでに知名度を上げる」

「・・・あんたバカ？知名度はどうでもいいわ。さっさと金を作ってきなさい。そうしないと全員餓え死ぬわよ？」

ま、こいつの実力なら簡単に優勝できるだろう。

この男はかなり強い。こいつを倒せるのはわたしの中にもあいつらぐらいしかない。

いや、ひょっとするとこいつのほうが強いかもしれない。

「何を言ってるんだ？お前も出るんだよ」

「は？何だよ？約束が違うわ」

わたしは表舞台に出なくてもいいはずだ。  
それにこいつはそれを許さなかった。

「拒否権が無いことはお前が一番よくわかっているはずだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかったわよ」

最悪だ。

何でこんなところにわたしはいるんだろう・・・。

side 空志

「暑い・・・溶ける・・・焼け死ぬ・・・」

「何で兄貴はこつも夏に弱いかね」

「ソラは夏が嫌いなの？」

「そうなんですよ。もうホントに」

夏なんか世界中から消えてしまえばいいと思う。

別に寒いのは重ね着すれば何とかなるじゃん。

でも、夏はそうはいかない。てか、やったら変態の仲間入りができる。ボクはそんな事はしたくないしするつもりもない。

「でも、何でクーラーが壊れるの!？」

「ま、確かに暑いね」

今、我が家のクーラーは壊れてる。

だから扇風機で何とかこの暑さをしのぐとしていたんだけど・  
・

「でも、何でアイスとかジュース飲まないの？」

「無理。ボクはアイスとかジュースとか冷たいものを連続して取るとお腹壊す」

デリケートなんだよ。

だから、ついさっきボクはジュース飲んだばっかだからここでアイストかジュースに出したら確実に死ぬる。

「・・・ザ」

「うるさい」

「でも、アタシも暑いと思う」

ボクは何となくテレビを付けてみる。

ちょうど、チャンネルがニュース番組になっていた。

『今年は三十度と例年より暑くなっています。これからにかけて・  
』

ボクは続きを聞かずにテレビを消した。  
ちなみに、リカのパパ襲来事件から一週間がたって既に八月の初め。

これから暑くなる？

「いつそのこと魔法で!!」

「ダメだよ!?ここには海美がいるから!」

ボク等は小声で話してたからか海美には聞こえなかったようだ。  
でも、マジで使いたい。

だって、ボクは『天空』属性。つまり、天候操作!ここらを少し涼しくすれば!!

「ダメ!ソラ!?何だか目が逝っちゃってるよ!？」

「え?ボクはいたって冷静だよ?大丈夫大丈夫。天候操作で少しここら辺に雪を降らせるだけだから」

「絶対ダメだよ!？」

「・・・何しとるんだ？」

そこにいたのは三谷隼人。つまりはボクのじいちゃんがいた。

そういえば言っただけで、我が家の家族構成は祖父に父、母、娘、ボクの五大家族。でも、父さんは単身赴任で実質今は四人だ。あ、リカがいるから今は五人か。

「いや、あまりに暑いから少し魔法で・・・」



「アホか。少し落ち着かんか」

「あ、おじいちゃん。お帰り〜」

「おう」

じいちゃんはそういつと台所に行つて冷蔵庫から麦茶を出す。コップを四つ取り出すと麦茶を注いで、ボク等に渡してくる。

「ほれ」

「あ、ありがとう」

「いただきます」

「……ま、大丈夫だよね」

ボク等ありがたくコップを受け取るとお茶を飲む。  
あゝ……。冷たい。生き返る……。

「そうじゃ……。空志、あのアホが呼んどったぞ？」

「アホ？……龍造さん？」

「ああ。何でも学校に来いだと。いつものメンバーでだなるほど。」

何か魔法関係かな？  
でも、なんだろう？

「わかった。じゃ、リカ、行こう」

「あ、うん」

ボクはこのクソ暑い中に行くのか〜と思いつつ簡単に用意を済ませると学校に向かった。

「お〜い！ソラ君！リカちゃん！」

「あ、鈴音。久しぶり〜」

「お久〜」

ボク等はスズと学校の最寄り駅で出会った。

「夏休みどう〜？」

「暑さで死にそう。たぶん、ここら辺で水溜りがあったらたぶんそれはボクだね。溶けた・・・」

「え！？ソラ君溶けるの！？」

この天然少女はマジボケした。

溶けちゃダメだよ〜とか言うのが面白かったのでボクはそのまま否定せずに学校に向かった。

学校に着くと、部活をしているのか中からボールをバットで打つ音

や掛け声が聞こえる。

ボク等は取り留めのない話をしながら理事長室に向かう。

「「「こんにちは」」」

「おう」

「来たの」

「こんにちは」

理事長室の中には既にリュウと龍造さん、そして優子さんがいた。そして、何故かレオも龍造さんの机の上で幸せそうにお腹を出して昼寝してる。

ボク等は理事長室のソファに適当に座る。

「冬香にシユウは？」

「ああ・・・冬香は用事でダメ。シユウは生きてるかどうか・・・」

「・・・ゴメン。アタシ、耳が遠くなったかも」

「おゝ奇遇だねゝわたしもゝ」

リュウは無言でケータイを取り出すとシユウに電話する。それをボク等に渡す。

「・・・もしもし？」

『リュウさんですか?』

「あれ? シャオ君?」

『あ、ソラさんですか? お久しぶりです』

「でも、これってシュウ君の番号だよ〜?」

「……うん。間違いない」

『あ……ま、よく聞いてみてください』

ボクはシャオ君の言葉に首をかしげながら耳を澄ましてみる。

『……し……ダ……ぎゃあああああああ!?!?』

『まだまだあああああああ!?!?!』

「何これ!?! さっきの悲鳴ってシュウだよ〜!?!?」

『それが……里帰りしてから師匠に毎日しごかれています』

『師しよ……っ!……む……』

『薬ばっか作ってっから鈍<sup>ナマ</sup>ってんだよお!?!?!』

「……確認するけどさ、さっきのって女の人の声だよ〜?」

「ボクもそう思った」

『俺達の師匠は女性です。ですがそれ以上にあれはもはや鬼神です』

『シャオ!』

『ちよ!? 師匠!? 待つてぎゃあああああああ!?!』

新たな犠牲者が出たようだ。

何故だろう。夏でさっきまで暑い暑い言っただのに今は背筋が寒く感じる。

『あゝ……どちらさん?』

「あ、シユウとシャオ君、シャンちゃんの友達です」

『あゝ……シユウが言ってた……リュウかソラのどっちかか?』

「ボクはソラです」

『そうかそうか。で、何かウチの不肖の弟子に用か?』

「あゝ……まあ」

『スマンな。今は稽古中だ。また今度な』

そういうとシユウ達の師匠さんは一方的に電話を切ってしまった。ボクはリュウに電話を返すと言っ。

「……生きて新学期に会えるといいね」

「・・・そうだな」

「ま、そんなことよりじゃ。おぬし等に話がある」

そういつと龍造さんは話を切り出す。

てか、シユウの安否は『そんなこと』で片付けるんですね・・・。

「ちよつとな、手伝って欲しいことがあるのじゃ」

「手伝って欲しいこと？」

「今回は他の領地の魔王からの依頼よ」

そついいながら優子さんは向こうの世界の地図をボク等の前の机に広げる。

そして、優子さんは一転を指差す。

そこは魔窟からかなり離れたところにある・・・海だった。

「・・・いやいやいや。こつ、海のと真ん中ですよ？」

「当たり前だ。今回は人魚やケルピーといった水棲系の魔物だからな」

「ホント!? 一回、海に行ってみたかったの!」

「水着が要るね」

「確かにいるが・・・観光じゃないぞ？」

「話を進めてもよいかの？」

龍造さんが脱線した話を戻す。

「今回はできれば人数をそろえて欲しいとのことじゃ。それ以外はよく聞いておらん。どうも向こうで話すようじゃな」

「なるほど」

「まあ、お前の家族には既に話はつけてある」

「ボクは家でのんびり・・・退路が!？」

どうやらボクに拒否権はないようだった。

女子二人はうゝみ!うゝみ!とか言ってきたいきやいしてる。

「ま、そんなわけでレオ。お前の主人のところに戻ってけ」

そういつとリュウは龍造さんの机の上のレオの首根っこをつかむとボクに寄こす。

レオはまだ寝ぼけているのか視線が定まっていない。

「今回は四人だけだが行くぞ。出発はあさつてだ」

こうしてボク等は海のと真ん中に行くことになった。

「二日後」

「で、準備はいいか？」

「まあね」

「みや」

「おっけーだよ」

「大丈夫」

またまた理事長室。

その中央にボク等はいた。

ここから龍造さんが目的地まで転移させてくれるらしい。

「では、はじめるぞ？」

「おう」

そついうと視界が一瞬だけぐにやりと曲がる。

景色が元に戻ると、そこは神殿を思わせるような造りのところだった。

ここはこの魔王の領地の転移門らしかった。

魔窟みたいに近くに受付みたいところがある。

リュウは受付に行くと、中の人に言う。・・・中の方はごく普通の人間型だね。

「魔窟の間龍造から依頼を聞いてきたものだ。こここの魔王に会いたい」



「ん？・・・お前みたいなガキがか？」

「オレは一応、間龍造の孫なんだがな？」

「身分を証明するものは？」

「ほれ」

そういうとリュウは何か書類を見せる。

その人は書類を読み終えると、何だかしぶしぶといった感じでどこかに連絡を入れるとボク等に道を教えてくれた。

「・・・なんか感じわる」

「まあ、見た目確かに未成年の集団だしね」

「リュウ君、でも、ここってどこなの？」

「あ？ここは海の底だ。魔法で特殊な結界を展開して水棲の魔物意外も住めるようになってる」

確かに周りを見てみると周りが水族館のようになっていて、すぐ外が海であることがわかる。

てか、これってそこの水族館よりすごい。

「ここの魔王は女性で人魚だ。つつても、擬人化して普通に二足歩行だな。まあ、人魚は大抵頭に珊瑚の髪飾りのものしてるからすぐにわかると思うぞ」

リュウにいろいろとレクチャーを受けていると魔王城に到着。

槍を構えた兵隊さん達に頭を下げつつ入城。  
中も神殿っぽい造り。

・・・この魔王は神殿がすきなのかな？

「お待ちしておりました」

「!？」

いきなり何の気配も無く気難しい顔をした執事服の老紳士が現れた。

・・・はじめてみたよ、執事さん。

「失礼ですが、お名前は？」

「・・・セバスチャンです」

「うわ〜・・・」

「すみません。冗談です」

「冗談かい!？」

中々に茶目つ気のある人だった。

てか、冗談ならそのしかめっ面をやめてください。

「わたしは執事長のシャニア・ランパスと申します」

「間隆介だ」

「あ、三谷空志です」

「みや」「こいつはレオです」「

「アンジェリカ・シエルス」

「坂崎鈴音です」

「お話は伺っております。どうぞ、こちらへ」

そういつとシャニアさんはボク等の前に立って歩いていく。

ボク等はそれについていくと、程なくして大きな扉の部屋に着いた。

上のプレートに執政室と書かれている。

「主はここで話を伺いますとのことですよ」

そう言ってシャニアさんは扉を開けてボク等に入るように促す。

「むふふふふ……。あの子可愛い……。持ち帰りたい……。」

シャニアさんは何事もなかったかのように扉をすつと閉めた。

「失礼しました」

「……。さっきのは？」

「見間違いじゃなければ双眼鏡で何か見てたような気がする」

「すみません少々お待ちください」

そういつとシヤニアさんは部屋にさつと入っていく。

「あら？セバスチャン？・・・何？今いいとこ・・・ちょっと！  
？待つ！？きゃあああああああああ！！？？」

悲鳴の後に沈黙が降りる。

そして、扉が内側から開く。

「大変失礼いたしました。どうぞ」

中に入ると何故かぐったりとした人が。

見た目がすごく若い、水色の長髪の18ぐらいの人がいた。

「相変わらずだな」

「・・・あれえ？リュウちゃん？久しぶり」

ぐったりした人がいきなり元気になった。

「こいつはここの、サフマリン・テンプル『海底神殿』の魔王。ロリコン派閥は平和。ななみまい七海舞だ」

「ちょ！？ロリコン違う！わたしはただ小さくて可愛い女の子が  
好きなだけ！」

世間一般ではそれをロリコンというのでは？  
てか、ホントに魔王にはまともな人がいない。

アホにチャラけた人、放浪癖にスキンヘッド・・・ダメだ。

「つい最近まではこんな小さくて可愛かったのにね。いつも舞おねえちゃ〜ん」って来たのに・・・」

「黙れ変態。勝手に過去を捏造するな」

「ぶ〜・・・。で、リュウちゃんはその子達と依頼を？」

「ああ」

「・・・ホントに強いのか？」

「それは保障する。つか、今回はそんな荒事か？」

「まー・・・荒事っちゃ、荒事？」

「曖昧だな」

「・・・でも、腕に自信が無かったら別のところに頼む。じゃ、セバスチャン」

「私はシャニアです」

「いいじゃん。執事と言えばセバスチャン！」

「偏見です。全世界のセバスチャン様にお謝りください」

「はいはい・・・。じゃ、シャニア。この子達の腕を見てあげて」

「かしこまりました」

「って、ちょっと待ってください！何勝手にぼんぼん話し進めてるんですか!？」

「一定以上の腕が欲しいの」

「・・・一定以上の腕って？わたしの腕細いけど大丈夫かな？」

「腕違う!？」

「ま、ここで適当にやって」

「室内ですよ!？」

「大丈夫大丈夫。貴方人間でしょ？その程度じゃ無理無理」

「・・・ソラを馬鹿にした」

「だ・か・ら！鎌出さないで！」

「では、参ります」

そういうとシャニアさんは魔法をつむぐ。

ボクはとっさに ツクヨミ 月詠 を発動。

「スズ！シャニアさんの前を囲むように!」

「わかったよ」 アンチ・シエル 相殺殻 「!」

「ウォーター・ウィップ  
水の鞭」

スズが一瞬だけ早く魔法を展開。それに続くようにしてシャニアさんが水の魔法を発動させる。でも、スズの魔法によってすぐに無効化されてしまった。

「・・・へえ〜。面白いじゃない。どうやったの？シャニアはほとんど詠唱しなくても魔法発動できるのに」

「これがボクの属性です」

「ふ〜ん。そっちの女の子は？」

リカを示して聞いてくる。

ボク等がどうしようか考えたとき、以外にも最初にアクションを起こしたのはリカだった。

「アタシは吸血鬼ヴァンパイア」

「・・・マジ？・・・ホントに面白い」

「で、合格か？」

「ま、いいでしょう。でも、数が少ないわ」

「・・・おい。そろそろ頼みつてのを聞かせろよ」

ハアとため息をつく。

そして、ボク等を見据えて言う。

「はいはい。貴方たちに頼むことは……この大会で優勝して欲しいの」

そう言うとボク等に一枚のチラシを見せた。

「……マリネシア祭？……何これ？」



### 3話・BEGINNING（後書き）

作 「とうわけで寒い冬なのに季節が夏の話を書いている作者です」

空 「ちよ！？魔王にはまともな人いないの！？」

作 「もち！」

空 「いやいやいや！？もちって！？」

作 「そんな細かいことは気にしないで次回予告だ！」

空 「細かくは無いと思うんだけど！？」

作 「次回、ソラ達は大会に出場！」

空 「マジでスルーした！？」

作 「そしてフラグの嵐！！」

空 「それ言っちゃうの！？」

作 「次回もよろしく」

空 「……そろそろマジで精神的にやばい」

## 4話・OMEN

S i d e 空志

「何これ？」

「にゃ」

「オレに聞くなよ」

「お祭り〜？」

「さあ？」

「ここ近くの島でお祭りがあるの。で、貴方達に頼みたいのはここで開かれる大会に出場して優勝して欲しいの」

舞さんがチラシの一部をさす。

そこには闘技大会！猛者よ集え！とか書いてある。

「ここは水棲系がほとんどだから陸地じゃ勝てないの。で、貴方達を呼んだってわけ」

「・・・少しはがんばれよ。で、何でこれに優勝しなきゃなんねえんだ？」

「これ。優勝賞品が『ファイア・ドロップ海の涙』って言う指輪なんだけど、これって、こここの魔王継承の時に使うものなのよね」

「でも、何でこここの優勝賞品になってるの〜？」

「いやあ〜。この島に息抜きに行ったときにちょっと可愛い子がいてさ。その隙に掏られちゃった」

「おし。帰るぞ」

「……わかった」「」

「みゃ」

ボク等はとりあえず扉に向かう。

てか、レオはボクのフードの中に入ってるから別に返事はいいんじゃない？

「待つて！！マジで！！ちゃんとお礼はするから！！」

舞さんはプライドも何もかもを捨ててリュウの足にすがりつく。  
リュウはハアとため息をつく。舞さんを見る。

「……わかった。で？」

「ありがとう！！……チーム人数はベンチを含めて六人以上、十五人以下ってなってるのよ。戦闘参加人数はサイコロで決められて、出目より少ない数であること。試合は三セットでサイコロの出目以下であればどこに何人振ってもいいわ。ちなみに出れるのはその試合で一回のみよ」

「なるほど。たしかにオレ達は四人だからな」

休憩がないのは大変だ。

確かにあと三人ぐらいは欲しいかな？

「……しょうがない。あいつら呼ぶぞ」

そう言つとリュウはケータイで連絡を始めた。

↳数十分後↳

「へ〜ここが魔窟以外の？」

「わ〜！？綺麗！！」

「魚がすぐそこを泳いでるですう！？」

「……涎拭けよ」

「ほ〜ほ〜……。報酬はこれぐらいで」

「ツチ……足元見やがって」

上から田中、インチョー、双子に宇佐野さん。  
これで全員で九人。

「シユウは？」

「師匠がシバいてましたのでここに来るのは早くて大会の最終日です」

「・・・何があつたの？」

「とりあえず話を聞け」

そう言つとリュウはみんなに簡単に説明。

「ま、そんなわけで手伝つてくれ」

「わかつた」

「いいよ〜」

「わかつたですう」

「俺でよければ・・・」

「相手の情報は任せて」

「本当に面白い子達ね〜。で、使えるの？」

「大丈夫だ。双子は格闘家でそつちの姉が気功士モンクだ。で、その地味な男子が魔道宝具アーティファクト使い、そつちの女子が魔術符使い兼人工精霊使い、このチビが情報魔だ」

「・・・最後の一人、完全に関係ないわよね？」

「む。そこのおね〜さん！ワタシに知らない情報はないんだけど  
!?!?」

「ふん。例えば？」

「おねーさんがつい最近彼氏に「信じるわ！」「ふっふ」

何だろう。続きが気になるけど聞いたら殺されそうだし。  
何もしないでおう。

「ま、これで支援も戦闘も大丈夫だ。じゃ、そこに送れ」

「はいはい。転移！」

ボク等にとっては本日二回目の転移。

そこはどこかの砂浜だった。

でも、わりと近くから賑やかな音楽や喧騒が聞こえる。

たぶん、近くに目的の場所があるんだろう。

「……よし。金も前払いでせしめたしな。大会は明日からだか  
らな……。よし、ひとまずここで解散しよう個人で適当に回って  
ていいぞ。オレは登録してくる集合はここだ」

そういうとリュウはすたすたと歩いていった。

「あ、ワタシもついてくよ！情報ゲットのために！」

「じゃ、アンジェリカさん！！」「はいはい。田中はあたしと行き  
ましようね」「ちょ！？邪魔をするな！？」

インチョーがリカにウィンクしながら田中を引きずっていった。

「じゃ、わたしは食べ歩きしてくるよ」

「あ、レオ！スズについて行ってあげて！」

「みゃ〜」

「ん？レオちゃんも〜？わかったよ〜」

スズは胸にレオを抱くと人ごみの中に行った。

「じゃ、私達も行くですう！」

「わかったから引っ張るな」

双子もどこかにれつつ〜。

最後まで残ったのはボクとリカ。

「どっか行く？」

「うん！」

そういうとリカはいつものごとく腕に抱きついてボクを引っ張って行った。

「にしても、スゴイ人だな〜」

「ホントだね〜」

ボク等は特に目的も無くふらふらとあっちに行ったりこっちに行ったりしてる。

でも、ことう人が多いと迷子になりそうだ。

「リカ、迷子にならないように・・・っていない!？」

こんな人だらけのところでリカが一人になったら何をするかかわからない!？」

ボクは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を発動させるとリカの魔力を探す。

リカは一人だけ吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>の魔力だからすぐに見つかるはず!

「・・・いた!」

案の定、すぐに見つかった。

ボクは人ごみを掻き分けてリカの元に行く。

「へ〜い!その美しいアナタ!この僕とお茶でもどうだい?」

「・・・」

「シャイな君も可愛いよ!」

「・・・」

・・・。

手に薔薇<sup>ロゼット</sup>を持った金髪の頭のいかれた<sup>ナルシー</sup>な人がいた。

どうも、リカはその人にナンパされてるみたいだった。

「リカ!」



「ソラ！」

リカはボクに気づくとすぐに顔をほころばせてボクのところに来た。

そして、目の前の金髪から隠れるようにボクの後で縮こまる。

「ちよつと君！ボクと彼女の愛の語らいを邪魔しないでくれるか？」

「・・・キザ男は黙れ」

リカの情け容赦ない一言に金髪は撃沈した。

「・・・つぶ。君はそんなこの僕！ルクス・ギルフォードよりその冴えないダサ男くんのほうがぎゃあああああああああ！！？」

今度はリカの情け容赦ない鉄拳によって血の海に沈んだ。

「ソラを馬鹿にするのは許さない」

「・・・手加減しようね」

「あゝ！？いたゝ！？」

ボク等の後から女の子の声が聞こえた。  
振り向くと、そこには少し暗いイメージな黒髪でお下げの女子がいた。





「いま、この屋台では制限時間付きのラーメンの大食い大会をしてるんだがな、あの二人の譲ちゃんかものすごい勢いで食ってるんだ」

スズが大食いなのは知ってたけど……。

いくらなんでもこれは……。

軽く二十は超えてるよね？

で、もう一人の少女。

小柄な体躯に似合わずスズと同じぐらいの量を食べてる。

大きな目が印象的だ。

「そこまで！」

審判的な人がストップをかける。

そして、器が数えられていく。

「……結果、ライニーさん26杯。鈴音さん25杯で、ライニーさんの勝利！」

そついうと歓声が起こる。

スズは立ち上がると

ライニーと呼ばれた少女のところに行く。

「いい勝負だったよ〜」

「そつちもだよ〜」

二人ががちりと握手をすると割れんばかりの拍手が巻き起こる。

……何してるんだらうこの人たち。

ボクとリカはこのノリについていけずにこの場を後にした。

「・・・なんだったんだろう」

「・・・わかんない」

地味に精神的な疲労を感じつつボクは通りを歩く。  
そのときだった。

ボクは何かわからないけどはじかれたようにある場所を向いた。

「ソラ?どうしたの?」

「え?いや・・・あれ?」

なんだろう?

さっき、ボクは何かにもものすごく反応した気がする。  
ボクは自分の勘の向かうままに歩いてみる。

「・・・ダメだ。わからない」

「どうしたの?」

「いや、なんか・・・急に感じたんだ。よくわからないけど」

「?」

ま、言ってもわからないよね。

ボクはまた適当に歩き出そうとする。

「あ、あの・・・」

声のしたほうを向くと、そこには占い師っぽい雰囲気の人が出た。てか、水晶に手をかざしてる時点で占い師か。

「はい？」

「占いどうですか？」

「ん〜・・・結果が見えてるからいいです」

「何で!？」

ボクはおそらく大凶でしょうから。

あ、涙が・・・。

「・・・すみません」

「いいです。慣れました。慣れなくなっただけ・・・」

「じゃ、アタシする〜!」

そういうとリカが占い師さんの前の椅子に座った。

「では、何を占いますか？」

「恋占いで・・・」

・・・?

何でボクをチラ見するの？

占い師さんは何かを察したのか口元をほころばせると占い始めた。

「・・・わかりました」

「そういうと水晶を仕舞う。  
・・・って、あれ？」

「水晶は使わないんですか？」

「あ、これはただのガラスです」

「何の意味が!？」

「いえ、仲間にこれがあったほうが占い師っぽいからと・・・」

「詐欺か!？詐欺だな!？」

「ち、違います!これでもよく当たると有名なんですよ!」

「ホントかよ。」

「リカは半信半疑だ。」

「こほん・・・では、はじめます」

すると、占い師さんは掌をリカに向ける。  
数秒ほどやると手を戻す。

「わかりました」

「あれだけ!？」

「はい。・・・アナタには素敵な仲間が六人ですか?いえ、もう

少しいますね。その中に好きな人がいますね」

「え？そうなの？」

「え！？あ！？・・・／／／／／」

そうなんだ知らなかった。

誰だろう？

しかもほぼ合ってるし。

本当に占い師だ！？

「あなたの好きな人もあなたのことを憎からず思っています。ですが、少々強引過ぎますね。ですが、それがあなたのよいところでもあります。あなたらしさをもって接していればいつか必ず振り向いてくれます」

「ホント！？やったあ〜！！」

「あ！？ちょー！？リカ！？お金！！」

「いいですよ。サービスです」

「え？でも・・・」

「~~~~~」

上機嫌のリカに引っぱられてボクはそのまま別の通りへ行ってしまった。

・・・今度会ったらちゃんとお礼を言おう。



「ごめんなさい。浮かれすぎました」

「まあ、うん。でもよかったじゃん」

「うん！」

またまた散策中。

あてども無く適当に歩く。

そうするうちに噴水の広場に出る。そこで今度はインチョーと田中に会った。

「お？デート楽しんでる？」

「俺は多湖なんかよりア「何かって何！？なんかって！？」お前、狙っただろ！？」

「そうか、太郎は茜が好きなんだ」

「違います！わたくしめはアンジェリカ様ただお一人です！！」

「・・・キモい」

「ほぐら。言わんこつちやない」

田中はリカの言葉で心に深すぎる傷を負った。

ドンマイ。

そのとき、近くで歓声が上がった。

そっちのほうを向くと、どうも大道芸をしてるようだった。

魔法を使って様々なパフォーマンスを見せたり、魔法無しでジャグリングをしたりとこっちの世界とは少し違ったことをしている。

「へ〜魔法で・・・面白いね」

「アレすごいね！炎の魔法で花火みたいにしてる！」

「でも、ソラの魔法の方がアタシは好きだな」

「でも、ああいうのはエリアが得意だと思おうよ？」

「エリアが？」

インチョーの持つ魔術符カードに宿る人工精霊。

エリアは水のコントロールが得意だからそれこそこの大道芸みたいな技はすぐにできると思う。

ボクの魔法は指示を出さなきゃ動かないから大道芸としては次の行動が分かって面白くないと思う。

「ほう・・・。では、そこのお嬢さん。やってみるかい？」

「はい？」

いきなりボク等の後ろにピエロがいた。

だぶだぶの服。白い顔に涙の書かれているあのメイクもちゃんとしてある。

ボク等の話を聞いてたのだろうか？

「え？そんな!？」

「なんと！飛び入りで少女が参加だ!!！」

ピエロの人に半ば強引にインチョーが拉致された。  
ボクは合掌してインチョーを見送る。

「では、どうぞ」

「え？」

そこで拍手。

インチョーは逃げられないと思ったのか魔術符を取り出してエリアを呼びだす。

「あれ？エリア少しだけ大きくなった？」

「え？本当？」

「エリア、お願い!!！」

エリアはこくんとうなずくと水を操作する時みたいに両手を広げる。

でも、何も起きない。

あれ？おかしいな・・・。

「ソラ！後ろ!!！」

「え？」

後ろを見てみる。

そこには噴水があつたはず。

でも、ボクも驚いた。

だって、噴水の水が盛り上がりつつたんだよ!?

それに周囲の人も気付いて驚きの声を上げる。

そして、噴水から日本でよくある蛇のような水の龍が出てきた。

水の龍はこつちを見ると、噴水から空中に飛び出てインチョーの方に行く。

インチョーも驚きで固まったままだ。

そのインチョーに向かつていき、水の龍はインチョーの周囲をぐるぐると回り始める。

龍はその動きを唐突にやめ口あける。そこから霧状の水を上に向かつて吐き出す。すると、虹ができた。

「エリアがやったの?」

「こくんとつなずくエリア。」

誇らしげにインチョーの隣で胸を張っている姿がほほえましい。

「ありがとう」

『ますた、うれしい?』

「しゃべれるようになったの!?!」

つなずくエリア。

「いやはや・・・素晴らしい」

そう言っつてボクの隣に先ほどのピエロさんがいた。

「あの人工精霊はすごい。もちろん、そのマスターも」

「ま、あれは初期の作品でリミッターもへったくれもありませんから」

「ほう……あれを作ったのは君か……いい仕事をしてるね」

「それ以前にあの二人の相性が最高なんですよ」

ボクは割れんばかりの拍手を受けてるインチョーとエリアを見て言った。

そして、インチョーはこっちに戻ってきた。

「は、恥ずかしかった」

『ますた、だいじょうぶ？』

「……うん。あの、さっきは生意気なこと言っつて済みませんでした」

「いや、素晴らしかったよわたしはこの大道芸人一座のピエロだ」

「……本名は？」

「ピエロだ」

「……そうですか」

「時に君！我が一座に！」「すみません」・・・そうか

ピエロさんは悲しそうに去って行った。

何ていうかさっきからキャラ濃い人が多いな。

「おい！！ソラ！！」

ボクは呼ばれた方を向くと、そこには血相を変えて走ってくるリユウと宇佐野さんがいた。

「何？どうしたの？」

「大変なことがわかった！！」

「冬香っちがこの大会に出てる！！」

「え？冬香が？」

何故かはわからない。

ものすごく嫌な予感だけがした。

#### 4話・OMEN（後書き）

作 「と、言うわけで『前兆』でした」

リ 「むふふ」

作 「ま、今回、自分の中では伏線の話ってことではがんばりました」

リ 「ソラが……ふっふっ」

作 「……そろそろ帰ってきて欲しいです。これじゃボケれない  
！」

リ 「ソラがアタシのことすぎ」

作 「……次回予告します。次回、ソラ達の前に冬香が？いった  
いなんで？」

リ 「あわよくば……きゃはっ」

作 「……そして、不安がつの中、大会が始まる！」

リ 「……やっぱ、子供は男の子と女の子の二人？」

作 「……この、色ボケ吸血鬼ヴァンパイアはおいといて、次回もよろしくお  
願います」

リ 「よし、アタシはやれる！いける！！」

作 「何が！？いい加減にして！？」

## 5話・OPENER

side 冬香

周りはものすごい喧騒に包まれている。

ま、お祭りしてるんだし当然か。

特に何の予定もすることも無いわたしは適当にその辺を歩いていった。

周りには幸せそうな家族や旅行者であふれてる。

その中で、とある姉弟（姉妹）を見つけた。

その姉弟を見てると何故か苦しくなった。

これ以上は耐えられなくて走り出した。

誰もいないところへ。

何で、わたしは……。

最近楽しかった。

でも、夏になってまた……。

誰か……助けて……。

side 空志

『レディース・エンド・ジェントルメン！！ついに始まりました、マリネシア祭イチョイイベント！！闘技大会の始まりだ！！』

司会の声に観客たちが沸く。

『まずは簡単にルール説明だ！！……何？知ってるって？そう言いなさんな。これが俺の仕事。これやしないと上司にどやされた拳句に給料が減っちゃう』

観客席から苦笑が漏れる。



『あら？すべった？・・・ま、気を取り直してルールの説明だ！ルールは簡単。一チーム六〜十五人までで一試合の戦闘参加人数はこちらにあるサイコロを振って決めさせてもらう！』

そういつとアリーナの上空に魔法のパソコンウィンドウのようなスクリーンが展開され、そこにサイコロのグラフィックが現れる。そのサイコロには三以下の数字が無く、一と二のところには七と八が書いてあった。

『さらに！今回の試合は全三回ある！限られた人数での采配が勝負の鍵を握るッ！・・・てか、口で言ってもわかりにくいよな。ま、そんなわけで第一試合から行ってみよう！』

観客からの歓声が大きくなる。

「始まったね〜」

「そうだね」

「ね、ねえ・・・周りの人たち強そうだよ？」

「大丈夫だ。オレ達でだいたいは方をつける」

「ああ。そうだな！」

『お前はザコだから黙ってる』

「みゃ〜」

「情報は既に集まってるよ」

「ソラ！がんばろうね！」

「……でも、スズの言ったとおり、周りの人達は強そうな人ばかりだ。

むしろ、ボク等のような子供で構成されたチームが珍しすぎる。でも、ここはBブロックだし……。Aのほうにはもっとボク等と年が近いチームがることを願おう。

「そういえばリュウ。ボク等は何試合目？」

「今からだ」

「……マジ？」

「ちよつと！？心の準備が！！」

『では、第一試合！！冒険者ギルドから参戦！』サンライズ『夜明け』とその  
愉快的な中間達！！』

「何この名前？」

「オレ達以外にも一般人がいるからな」

「……本当に愉快的な仲間になりますよ。特にシャンあたりが」

「いい加減にシャオは姉を敬うですう！！」

『対する相手は！！傭兵ギルドからの参加！！』レイヴン『！！』

向こうからは十五人ほどのチンピラ集団が現れた。  
・・・全員ガラが悪い。

「へっ。何だ何だ？相手はガキかよ。女子供相手に本気出す趣味ねえんだけどなあ」

「おい！恥かく前にさっさと棄権しろよ！！」

周りの人は下卑た笑い声を上げる。  
でも、観客からもボク等に野次が飛ばされる。

『初戦から両者共に気合は十分！！では、ダイスロール！』

上のスクリーンのサイコロが回る。

そして、止まった目は4だった。

『決まったああああああ！今回は四人！！では一セット目、選手はフィールドに入ってくれ！！そして残りの選手は脇にある控え席に行ってくれ！！』

控え席？

周りを見ると、バッターボックスみたいなのところがあった。

あそこに行くんだろう。

「じゃ、誰から行くんだ？」

「・・・とりあえず。ここはウケを狙って田中で」

「チヨイ待て。俺はウケ狙いなのか！？」

『おつしゃああああああああ！！久々だぜ！！血が騒ぐ！！  
！！タロウ！行くぞ！！！！』

ボクはリカにアイコンタクト。

……今回のはうまく行ったようだ。

「……太郎。がんばって」

「行つてきます！！」

田中は自ら死地に赴いてくれた。

あいつが単純馬鹿で助かった。

とりあえず、ヤツにはスカウターの代わりになつてもらおう。  
性能が限りなくゼロに近いけど。

「っしゃあー！！来いや！」

「へへっ」

「ザコが」

「……あれ？二人？」

『両者準備が整つたようです！』

「待て！！これは陰謀だ！！おい！？ハメやがつたな！？」

「大丈夫。田中はミストも合わせて二人だから」

「納得できねえ！……！」

『では、始め！』

「マジかよ！？」

『タロウ！やるぜ！……！』

「何でお前は元気なんだよ……！」

「何を「ごちゃごちゃ」言ってるんだ……！  
グラン・ヒンサー 大地の挟撃　……！！」

地面が盛り上がり、二対の壁を作る。

それは田中を挟むようにして潰そうとする。

「ぎゃあああああああ……！！……？？」

田中の断末魔の悲鳴。田中のいたところには土の柱。そして静寂に包まれる会場。

……なるほど。相手はチンピラだけどやっぱりそれなりに強いみたいだ。

『大地』の中級中位魔法。

それをあんな短時間でできるとは……。

『……あ……』  
サンライズ 『夜明け』の田中選手。一撃でやられました  
た』

「ハッ！やっぱり所詮ザコか……！」

「おいおい。俺の出番までとるなよ……！」

『では、次の試合に参ります。次の選手は・・・』

「何言ってるの？田中はまだ負けてないよ」

ボクがそういつと周りが

「はあ？お前馬鹿か？その地味なヤツは俺が倒したたる？」

「だよ。おい。さっさとやれ」

リュウがそういったとき、土の柱からいくつもの剣の刃が出てきた。

それらは土を適当に斬り、土の柱を割る。その中から土ほこりまみれの田中が出てきた。

「マジ死ぬかと思った！！おい！俺には魔力が無いんだぞ！！殺す気か！？」

柱の中は綺麗に田中のいた部分だけがへこんでいた。

「いや、普通は死んでるから」

ごく普通に魔力を持ってて人間は下級の中位までしか耐えられない。  
スズぐらいあってやっと中級の中位をかるうじて何とか耐えられる。  
でも、二回目は無い。

「な！？魔力無しで中級中位魔法を無傷だと！？」

「あ〜なんだっけ？俺、魔力無効化体質キャンセラーとか言っちゃつらいよ」

「なんと！！田中選手は魔力無効化体質キャンセラーだった！？それなら魔法が効かなかったのもわかる！！」

「ハッ！なら魔法に頼らなけりゃいいだけだ！！傭兵を舐めるな！！」

魔法を放つたのとは違うほうが大剣を手に田中に突っ込む。

「盾だ！！」

『命令すんな！』

田中が両手を前にかざすといくつもの盾が出現する。それらは空中に浮いて敵の剣を受け止める。

「何だこれは！？」

「教える必要はないな」

『ハッハッハ！！俺様は魔導宝具アーティファクト、幻想武器『ミスト』だ！！』

「空気読めよ！？」

「それが『ミスト』であるはずが無い！！『ミスト』は所有者を乗っ取る呪われた魔導宝具アーティファクトだぞ！？」

「俺、魔力無効化体質キャンセラーだから大丈夫だったらしいぞ」

『不本意だがそういうことだ。俺の宿主を殺すとまた次を探すのが面倒だ。降参するなら俺は何もしねえぜ』

ミストはいつかみたい田中の肩辺りに自分の姿を投影して不適な笑みを敵に見せ付ける。

・・・てか、こいつやめる気ないな。  
そんなことしたら・・・。

「てめえ!!」

「ブツ殺す!!」

「俺じゃねえ!!」

『そうこなくつちゃあなあ!!』

相手がブチギれるに決まってる。

ボク等は半ば戦闘狂と化したミストを呆れ顔で見る。

「ツチ!この盾が邪魔だ!!」

「だが魔法は効かないぞ!」

『・・・面白くねえ。タロウ。終わらせるぞ』

「むしろさっさとやれよ!!」

そういつた瞬間、盾が消える。

その代わりにまた、大量の盾が召喚される。



ミストの剣は相手二人の剣を叩き斬り、剣の切っ先が首を捕らえる。

誰がどう見ても相手の負けだ。

『ハッ。ザコが！』

「完全にお前悪役だよな」

客席から歓声上がる。

『田中選手の逆転勝利ッ！！いやあ、まさかのどんでん返し。強いぞ』  
『サンライズ夜明け』！！』

その言葉に歓声が更に大きくなる。

向こうは逆にイライラしてる。まあ、ただの子供に負けたんだからね。

『では、二回戦！！選手は入場してください！！』

「じゃ、誰が行く？」

「オレ、メンドイからパス」

「わたしが出たら相手が可愛そうだよ？」

「あたしは自身が無いな・・・」

「ワタシは情報専門だからね」

「ソラが行くなら行く」

「ボクは正直嫌」

「では、俺が行きます」

「あ、それなら私も行くですう！」

そういうと双子がフィールドに入っていった。  
相手は一人。

でも、油断はできない。

「……オレの相手は双子の姉妹か？しかもさっきのヤツよりガキじゃねえか」

「……誰が姉妹ですか？」

「は？お前等だよ」

「……俺は男です！！」

「はあ！？」

……そういえばシャオ君って結構中性的な顔立ちしてたね。  
前にも似たようなことがあって結構コンプレックスになってた気がする。

『では、二回戦……始め！』

「すみません。降参してください」

「は？何言ってるんだ？お前がするほうだろ？」

「・・・シヤン」

「おっけ・・・てい！」

可愛らしい掛け声に似合わない轟音が響き、地面が揺れ、砂煙が舞う。

そこで不自然に砂煙が掻き消える。

砂煙の消えたところには双子と、大きなクレーターがあった。

「もう一度聞きます降参してください。俺は手加減できませんが、姉はできません。死ぬ覚悟がおりなら止めません」

「シヤンちゃんは最強なのですよ！」

他の方々からしたら『最凶』だよ。

今回の試合は割と平和に終わった。

くその日の夜く

「いやく疲れたく」

「いや、リュウは何もしてないよね」

「ホントだな。俺なんか全試合一回戦に出ただぞ！？」

「まあまあ、お二人ともそうおっしやらずに」

「みゃ〜」

ここは選手用の宿屋、男子部屋。

あの後、二試合やったけどストレート勝ちで本戦に進んだ。

まあ、相手が相手だし……。

「ま、明日からが本番だ。明日は勝ち残ったヤツらでくじ引きしてトーナメントを決める。本戦は桁違いに強いらしいぞ」

「でもさ、ボク等って本気出していいの？」

別にこれは嫌味じゃない。

ボク等が本気を出すと云うこと、特にボクとリュウにリカ。それはボクなら魔法陣で、リュウは魔法剣、リカは吸血呪ヴァンパイア・スヘルを使うってこと。

ボク等が巷を騒がせる『闇夜の奇術師団』ってバレやすくなる。

「ああ……ジジイに聞いたんだけどな。やっぱり極力使うなとさ」

「だよね」

「お二人は大変ですね」

「まあね……詠唱か……鬱になる」

「お前、詠唱はからっきしだもんな」

「そうなんだよ」

「ま、オレも魔法剣使えねえし」

ボクとリュウはため息をつく。

「ま、明日もいろいろあるし・・・もう寝る。おやすみ」

ボクは一足先に眠りについた。

side 茜

（同時刻）

「と、言うわけでガールズトーク大会！」

「「イエー！！」」

「え？がーるずとーく？」

「何するんです？」

ノッてくれたのは坂崎さんと宇佐野さんだけだった。

アンジェリカさんは三谷君がいないからって暗くなりすぎ！！

「そう！みんなでお泊りと言えばガールズトーク！これが基本！

「！

「そんな基本初めて聞いたですう」

「と言うわけで自分の好きな人を言っちゃおう！！」

「え〜!?!」

「……リカちゃんはみんな知ってるよ」

「と言っわけで浮いた話一つ聞かない坂崎さんから!?!」

「わたし〜?」

坂崎さんはファンクラブができるほど可愛いのに何故か浮いた話一つ聞かない。

そんな人の好きな人って気にならない!?!?

「ん〜……わたしはいないかな〜」

「じゃ、好みのタイプは!?!?」

「お料理が上手な人!」

「……ちなみに何故?」

……宇佐野さん。

電子手帳開けてどうしたの。

「ごはんをお腹いっぱい食べたいから!」

良くも悪くも欲望に忠実な人だった。  
気をとりなおして次!!

「シャンちゃん!……は飛ばして宇佐野さん!」

「何故とばすですう?」

「だって、李君でしょ?」

「ち、ちちち、違うですう!!」

「……みんな知ってるから。しかも本人も」

「……ワタシの情報は三万で売ります」

「しかも宇佐野さんは自分の情報すら売っちゃうんだね」

ダメだ!

これはガールズトークじゃない!  
違う!一人だけ純情な乙女がいた!!

「じゃ、アンジェリカさん!……って、三谷君だよね」

「うん。ソラ以外ありえない」

「うわ〜言い切っちゃったよ。じゃ、告白は?」

「無理〜!!」

アンジェリカさんは布団を被ってしまった。

「……ワタシからすれば布団に入り込んだり腕にしがみついたりするほうが勇気があると思う」

「そんなことしてたの！？大胆！！」

「それとソラ君の初ちゅーもリカちゃんが寝込みを「ダメー！！」

」

「シット！なんてこつたい！」

純情な吸血少女は以外に過激派だった。

「じゃ、茜ちゃんは？」

「あ、あたし？」

あたしの好きな人……。

「うーん……間君みたいなタイプかも」

「「「「「おお」」」」」

何だかガールズっぽくなってきた！！

「ちなみに何で？」

「間君でさ、ぶっきらぼうだけど……いざといつときもすく優しいじゃん？」

「……ソラがいなくなったときも本人なんでもないような感じだったけど心配してた」

「噂のシンデレレですっ？」



「・・・なるほど。委員長は間っちがお好き、と」

「うん。でも、別に間君は恋愛対象じゃないかな？あくまであんなのがタイプってだけで」

その夜はガールズトーク(?)で盛り上がった。

## 5話・OPENER（後書き）

作 「と、言うわけで地味に伏線、そして大会予選 + 的なものでした」

鈴 「何だかいろいろあるね」

作 「ちなみに僕の中ではリュウ、茜フラグは無いです」

鈴 「へえ〜。じゃ、誰なあるの？」

作 「さあ？」

鈴 「じゃ、わたしは〜？」

作 「・・・次回予告だぜ！」

鈴 「何で目をそらすの〜?!？」

作 「大会予選をクリアしたソラ達、次に現れる対戦相手に勝てるのか!！」

鈴 「みんなががんばれば大丈夫だよ」

作 「そして、ついに・・・!！」

鈴 「ついに？」

作 「そこはお楽しみ。じゃ、次回もよろしく」

鈴 「よろしくね」

## 6話・OVER DRIVE?

side空志

「……………どうしたの？」

ボクは目の下に隈を作った女子達に聞いた。

「ガールズトークしてたら盛り上がっちゃって……………」

「……………ZZZZZZ」

「立ったまま寝るな……………って坂崎器用だな!？」

「つか、相手の手の内がわかってるガールズトークなんて面白いのか？」

「何で?じゃ、なんて話したか当ててよ」

「坂崎の好きな人はいない。タイプはどうせ飯屋の息子とかで理由は自分が腹いっぱいになるため。宇佐野は自分の情報すら売るよくなやつだ。シャンはシュウだろ?リカは言わずもがなだ……………お前だけだなわからないのは」

何でそんなすらすらと。

インチョーもこいつ当てた!みたいなこと言って驚いてる。

「シャン起きろ」

「シャオ〜負ぶってってですよ〜」

「はわ〜・・・さすがのワタシも少しだけ眠いかな」

一番元気そうなあんたが何を言うか。

で、唯一いつもと変わらないのが・・・。

「みんな元気ないよ〜」

「リカはさすが吸血鬼ヴァンパイアだね〜」

「みゃ〜」

微妙に不安なコンディションでボク等は大会に臨んだ。

『レディース・エンド・ジェントルメン！！大変長らくお待ちいたしました！闘技大会二日目、本戦を開催いたします！』

司会の言葉に会場が盛り上がる。

ボク等は選手控え室にいたにもかかわらずよく聞こえた。

試合はトーナメント方式で昨日とほぼ一緒。

でも、今回はかなり強いらしい。

話によるとここに来るまででかなりふるいにかけられるらしい。

ボク等みたいにストレート勝ちしかしてないチームのみがここに立ってるみたいだ。

いたとしてもすぐに負けるとか昨日、他のチームの人の会話を盗み聞きした。

つまり、最低でも田中レベルはあると……。

「あれ？よく考えたらそれってザコじゃ？」

「おい。お前、さりげなく俺をザコ呼ばわりにしたよな？」

「心読んだ！？」

「声に出てたわー！！」

「ボケるのもたいがいにしとけトーナメント表が出るぞ」

リュウがボク等にそういうと、空中にスクリーンが展開。

そこにトーナメント表が現れる。

一番下にはチーム名が書いてある。

ボク等は……っと。

「また一回戦目？」

「らしいよ。でも、ソラなら楽勝だよ」

「いや、ボク魔法陣使えないからさ……」

「ソラ君ドンマイだね」

「みゃ」

「昨日は双子と田中に任せっきりだったからな。今日はオレ達でやっつくからお前等は休憩でもしてる」

「いいんですか？」

「遠慮なくそうするですう」

「んじゃ、俺はベンチから応援しとく」

『では、第一試合！選手は入場してください！』

「行くぞ！」

ボク等は思い思いに返事をするトリユウについていった。  
フィールドに入ると周りから歓声上がる。

『初出場にもかかわらずその力を見せ付けるルーキー・・・冒険者ギルド所属『サンライズ夜明け』の登場だ！！』

司会の言葉に合わせてどんどん会場のボルテージが上がってく。

・・・初戦からテンションマックスですね。

『さて、対するは・・・そのトリッキーな魔法で相手を翻弄する自由気ままな大道芸人達の集団、『黒猫サーカス団』！！』

・・・何でサーカス団が出場してるの！？

てか、観客がうるさい！

『さて、もはや大会常連の『サンライズ黒猫サーカス団』が勝つか、それとも『サンライズ夜明け』が勝つか！全員、見逃すなよ！』

しかも相手は常連なんだ！？

サーカス団強っ！？

ボクは向こうから入ってきた人たちを見る。

「……あれ？ピエロさん？」

「……おゝ。君はいつぞやの女の子の連れじゃないか！」

「昨日、噴水の広場で知り合ったピエロさんだった。」

「まさか、君達とは……」

『おおゝ？どうやら互いに知り合いだったようですね』

「団長？あれが昨日のあの龍の女の子ですか？」

「団員らしき人がピエロさんに聞いている。」

「てか、団長さんだったんだ。」

「ああ。……そうだ。いいことを思いついた。君！」

「はい？あたしですか？」

「インチヨーが名指しで指名される。」

「……嫌な予感しかしないけど、今回はボクに関係が無いはず！」

「この試合、私達が勝つたら入団してくれ！！」

「……え？」

「「「ええゝ！？」」」

インチョーは話についていけないのかぼかんとしてる。  
ボク等は急な展開にビックリすることしかできない。

『何だか面白いことになりましたね。では、それを認めます！』

「おい待て！それはオレ達が決めることだろう！？」

リュウが慌てだす。

ボク等もパニックで頭がまともに回っていない。

『では、話もまとまったところでダイスロール！！』

まとまってない！！

ボク等は心の中でそう突っ込みながらスクリーンに映し出された  
サイコロを見る。

目は・・・五だ。

『では一戦目、どうぞ！』

「助けて！！」

インチョーがボク等に助けを求める。

元から優勝しなきゃいけないんだけど、負けられない理由が一つ  
増えてしまった。

「ちょ！？誰が行くの！？」

「・・・ここは一気に行こう。リカとスズで」



前衛のチートと後衛のチート。  
これなら大丈夫でしょ。

「いやあゝ。ソラとがいい〜」

「……この際それでいいや!」

「そんな適当に決めないでよ!」

「大丈夫だつて。ボクも負けるつもりないし」

「それにアタシ達も十分強いよ!」

そういうとボクはリカとフィールドに入っていく。

既に相手は準備を済ませていた。

相手は片方がボク等と同じ年ぐらいの少年。

もう片方がニメートルはある偉丈夫。背中に背負った戦斧がやたらと大きい気がするけどあの人が使うとちょうどよさそうなサイズだ。

『さて、両者決まったようです。では、始め!』

「……これはリカがあつちのどつかい人ね!」

「わかった」

「は?オデがだか?譲ちゃん、悪いこたあ言わねえから降参しな  
つて」

ものすっごい訛ってる!?

どんなド田舎から来たんだよ！

「舐めないで……『クレセント』」

リカは自分の大鎌を取り出すと構える。

向こうの人も戦斧を構える。

そして、リカの姿がぶれる。

次の瞬間にはでっかい人のすぐ近くにいた。

でも、相手はリカの動きに反応して鎌を受け止める。

それにもかかわらず相手はリカのフルスイングした鎌で会場の壁にまで吹っ飛ばされた。

会場はリカが自分の背丈と体重を遥かに越える男の人をぶっ飛ばしたのに驚愕の声を上げる。

相手も相手でごく普通に立ち上がったし。

「うわ〜。ダオスさんが吹っ飛ばされたよ。あの子すげ〜」

「そのわりには驚いてないね」

ボクは目の前にいる少年に言う。

「まあね。そっちには魔力無効化体質キヤンセラーもいるんでしょ？他にも隠しだまとかありそうだね」

「おぉ、どじっ思っっ？」

「ま、いいけどね。ガトウです。よろ」

「三谷空志」

「みゃ！」

「こっちはレオ・・・って、ついてきたの!？」

いつの間にかレオがボクのフードにもぐりこんでた。

・・・ま、いいか。

とりあえず銃を放ってみる。

相手は軽業師のように避ける。・・・て、軽業師か。

「猫か・・・キャラ被るんだよね」

「何言ってるの?・・・君は獣人<sup>ビースティアン</sup>族じゃないよね？」

「もち。ごく普通の人間」

なら、どこに被る要素が？

「ちなみに被るってこういうこと。 獣装・猫！」

そういうとガトウが光を纏う。

光はすぐに消え、そこにはシユールな光景が。

「・・・猫耳？」

「そうだにゃ。言ったにゃ、キャラ被るってにゃ」

ガウトからは猫耳に尻尾、手からも鋭利な爪が生えていた。

ま、一つだけいいたい事がある。

「男が猫語はちよっと・・・」

「いやいやいや!?!女の子だから!」

「……え?」

「いや、わたし女の子。ぴちぴちの十八!」

「……年上!?!女子!?!でも、年頃の人が猫とか「これ使うと強制的ににやるんだ!」……さいですか」

まさかの展開。

名前から口調から男の子っぽいから。  
ついでに見た感じも。

「……まあ。本気で行くにや!」

そういうとガウトはさつきよりも若干スピードを上げてボクに向かってくる。

たぶん、自分に動物の特徴を付与する魔法なんだろう。  
猫だから機敏さとかかな?

ま、対処できなほどじゃない。

「風火　じゃなくて。」

其は風の法則。

風よボクの力となれ。

それは猛り狂う迅き風の如く。

フェザー・ステップ  
風の舞

魔法が発動してボクは足元に風を纏う。

風の推進力を使って高速での移動を可能にしておく。

フウカシヤリン  
・・・でも、風火車輪のほうが段違いに速いんだよね。

今回はできるだけ使っなくなって言われたししょうがない。

ボクは銃を放つ。

だが、相手も身体能力が上昇したために簡単に避けられる。

・・・これじゃ埒があかない。

「みゃ〜」

「ん？どうしたの？」

「ふん！子猫にできることなんかないにゃ！」

「みゃあー！」

何故か猫同士で会話を始めた。

レオはボクの返事を待たずに地面に降り立つ。

そして、いつものようにライオンに変身。

「・・・へ？」

レオが咆哮を放つ。

ジ・エンド。

急な事態についていけなかった相手はあっけなくレオの手加減された光線によって戦闘不能にされた。

「やっぱり百獣の王は強いね」

「がっ」

レオは当たり前だとしても言うようにボクに言う。

で、ボクはリカのほうを向いて見る

そこには美少女とむさい大男が力比べをするというシュールな光景が広がっていた。

実際に、今現在も鎌や斧によるクレーターの製造を二人はせっせとしている。

「大変だね〜」

「がう」

「手伝ってよ〜」

「ガウトちゃんが負けただけか！？おめーさん強えんだな」

「そういうアナタもリカについていける時点でかなりすごいです。まあ、そろそろ本気でやればいいんじゃない？」

「いいの？」

「舞さんが何とかする。しなくてもさせる」

宇佐野さんに頼めば万事解決のはず。

・・・脅迫しようとしてるんじゃないよ？少し頼むだけだよ？

「おめーさん、本気出してなかったただか！？」

「うん。というわけで」

その瞬間、リカの姿が本当に消失した。

ついさっきまで、リカはボクでもわかる程度の速さで戦っていた。

あくまで、リカの本気はシュウの身体強化薬ドーピングの服用したとき並みの姿が消えるほどの速さと、大岩を片手で碎けるその力にある。

次の瞬間には大男は急行列車にでも轢かれたみたい壁にものすごい勢いで吹っ飛んで激突。壁にめり込むどころか破壊して通路が丸見えになってる。

「……リカ、死んでないよね？」

「うん。適度に加減した」

あれで？

普通なら死んでると思うんだけど？

ボクなら確実に死ねる。

『な、なんと！？初出場のチーム、魔道具技師の三谷空志と鎌使いのリカ選手が常連の獣装のガウト、豪腕の斧使いドルクがやられてしまった！？』

周りは呆然。

ボクとリカは疲れたーとか言ってみんなの所に戻る。

上の観客席でガチャガチャ言ってるけど気にしない。

「おつ」

「お疲れ」

「さすが三谷っち、リカっち」

「……俺が出ればよかった」

「はいはいはい。田中、乙」

「さすが三谷さん達です」

「リカさんすごいですう」

「ボクはほとんど何もしてないんだけどね」

「がう」

ライオンのままのレオが言う。

ボクがレオの頭をなでたり喉の辺りをなでると、レオはごろごろする。

「何だか魔道具技師っつーより猛獣使いだな」

「ま、確かに魔道具技師がライオン手なずけるとかあまり無いだろっね」

「いや、絶対にねえよ」

『・・・信じられないことが多々ありますが第二試合!!』

「だってさ。どうする?」

「ここはあえて負けるか?」

「ちよつと!?!あたしがいなくなるんだけど!?!」

インチョーが慌てる。



・・・まあ、確かにそうだね。

「ここはリュウとスズで瞬殺してきたら？」

「あ？・・・もはやイジメじゃねえか」

「ボクもそう思う」

「じゃ、がんばってくるね」

「おい！オレを引つ張るな！」

なんだかんだでスズがリュウを引つ張っていった。

あの二人なら大抵の魔法を消すチートだからね。

まさに外道。

敵さんドンマイ。

二人はリカが散々壊したフィールドに立つ。

・・・てか、直せよ。

「かつたりー」

「そんなこといつちやダメだよ」

向こうからは踊り子っぽい女の人と手に鞭を持った女の人が出てくる。

『両者、決まったようです！では、第二回戦、始め！』

すぐにリュウは相手に接近。

今回、リュウは魔法剣を使わないから双剣はもっぱら杖の代わり

にでも使うんだろうと思っていたら違った。いつものように詠唱を素早くすると 影<sup>シャドウ・パス</sup>抜け で移動。相手に一気に迫る。

「甘いわね。おねーさんは強いわよー」

そういつと踊り子の人が手をさつと振る。

すると、リュウの襟の一部が刃物で切られたように裂かれる。

リュウはヤバイと思ったのかすぐに距離をとる。

「なにあれ？」

「・・・魔法？」

「月詠<sup>ツキヨミ</sup>・・・属性は『斬』？よくわからないけどたぶんそう」

「何だそれ？」

「・・・斬る属性なんじゃない？」

「三谷っちアバウトだね」

「『斬』ですか？珍しいですね」

「知ってるの？」

「はいですう。『斬』は簡単に言うと刃物以外にこの属性を付与すると剣みたいに斬ることができる属性ですう」

「つまり、あの人は手に付与させて、更に魔法か何かを使ったんだと思います」

なるほど。

でも、ボク等はベンチだし教えるのはダメだね。

ここは公平に行こう。

「チツ・・・珍しい属性持ちってどこか？」

「察しのいい子は好きよ。でも、レディ・ファーストな紳士はもっと好きね」

「・・・降参しろってか？」

「・・・していただけるとうれしいです」

今度は鞭を持った人が動いた。

いつの魔に描いたのか魔法陣が書いてある。

「ボクと同じ・・・じゃない!？」

「・・・サモン召喚」

魔法陣が輝く。

そこから何匹ものモンスターが出てきた。

鷲のような頭を持ち、ライオンの体躯を持つモンスター、グリフオンだった。

「・・・行け」

「させないよ!」  
アンチ・シエル 相殺殻!」

スズが六角形の盾を展開。  
それでリュウの周りを囲んでガードする。

「防御魔法？・・・まあ、いい。行け」

今度はスズに狙いを変える。

スズはうかつにも自分の盾を全部リュウに回している。  
つまり、スズを守るものは何も無い。

「ヤバい！？坂崎！こいつをさっさと戻せ！！」

「え！？う、うん！！」

でも、グリフォン達が邪魔で思うように動かせないようだった。

「遅いわよ 惨殺の斬線 ！」

リップバー・リップバー

踊り子さんが踊る。

それに合わせて魔力が空中に固定されていくのがボクには視えた。  
解析・・・。

「あ、ミスった。ま、大丈夫かな」

あれが大丈夫だって！？

確かに威力は低いけど当たり所によってはやばいでしょうが！

「まずい！？リュウ！！スズがやばい！」

「わかった！」

リュウはまたも シャドウ・パス 影抜け で移動しようとする。  
そこで、グリフォン達が四方から火を噴いた。  
リュウの足元の影が薄くなる・・・。

「!?!?!? てめえ!!」

「させない」

リュウは形振り構わずに盾の間を抜けてスズのところに行く。  
後からグリフォンが攻撃してくるがお構い無しに突き進む。

そして、相手が踊り続ける

リュウは後ほんの少してつく。

相手の魔法が発動。

空中で待機してた目には見えない斬撃がスズに殺到し、更に踊り  
続けていることでどんどん斬撃が追加されていく。リュウ達の周りは  
砂煙で見えなくなった。

「おい!?!?リュウ!!」

「鈴音!!」

「間!!」

「間君!!」

「すずっち!!」

「二人とも!!」

ボク等は固唾を飲んで煙がはれるのを待つ。

煙がはれると、そこにはスズを抱きかかえるようにして庇ったりユウがいた。

ところどころが切れ、血がにじんでる……。  
ボクは踊り子の人に怒鳴った。

「さっきの！確実に殺す目的で使っただろ！？」

「な！？……確かに威力の設定を間違えたわ。でも、これは事故よ」

「っ……。リュウ！！大丈夫か！」

「ああ、大丈夫だ。死んだオレのババアが川の向こうで手を振ってる……」

「絶対に大丈夫じゃない！？」

「リュウ君？」

「おう。坂崎、大丈夫か？」

「え？……血が……」

「あ？んなもん掠り傷だ……」

「うそ！！だって、わき腹からいっぱい出てるよ！？」

ボク等はリュウのわき腹の辺りを見る。  
でも、こっちはわからない。

「まさか、反対側!?」

「……確かに、気が流れてるですう!」

その言葉を否定するようにリュウ立ち上がった。

「大丈夫だ。バカ! お前もんな顔すんな! スズ……さて、もう  
いっちょやる……ぞ」

そして、崩れ落ちた。

「イヤアアアアアアアア!!!」

スズの悲鳴が会場に響き渡り、魔力が暴れだした……。

## 6話・OVER DRIVE? (後書き)

作 「と云うわけでまさかの相手は大道芸人という、そして何かやばげです」

小狼 「・・・俺がここに出ていいんですか?」

香桜 「気にするなですう!」

作 「今回のゲストは双子です」

小 「で、どうなるんですか?」

作 「いや、それ言ったらネタバレだから」

香 「・・・ほーほーですう。次は鈴音さんが・・・」

作 「殺れ!!」

小 「わありました!!」

香 「え!?何ですう!?!」

作 「ネタバレの防止だ!!」

香 「その前に殺人の防止をしてくださいですう!!」

小 「俺達は獣人族ビースティアンだから少なくとも半分は人殺しじゃない」

香 「半分は人殺しですう!?!とにかくダメですう!」

作 「しょうがない。今度からはネタバレに気をつけたまえ」

香 「何だか普段はかなりポケ倒すのにこういうときだけズルイですう」

小 「では、次回は何?」

作 「おっけ。・・・次回!鈴音が暴走!?それとも・・・?」

香 「私達の順番はどうですう?」

作 「あります!」

双子 「「いえい!!」」

作 「と云うわけで次回もよろしく!!」





「あれが!？」

スズを中心にして魔力が暴風のように荒れ狂う。

運営が事態の收拾に挑んだが魔力にはじかれている。

そこまでの密度を保てるのはスズの魔力量だからこそだろう。

「おい!じゃあ、やばいんじゃないのか!？」

「はい。魔力を使い続ければ無くなり、無くなれば生命力を変わりに使います」

「そして・・・死ぬですう」

「は、早く助けないと!!」

「無理だ!みんなじゃはじかれる。・・・ボクが行く

其は魔に属す法則!!」

ボクは真言で魔力を斬りながら進もうと真言を紡ぐ。

それと同時にスズの声が聞こえた。

ボクは驚きに目を開いてスズを見ると、そこには杖を構えて詠唱をするスズの姿があった。

「我、紡ぐは世界の理」

「何を詠唱してるの!？」

「解析!・・・ダメだ。魔力が乱れすぎて特定できない!」

「闇あれば光ある。」

絶望あれば希望がある。

裏あれば表あり、それが逆の理。

有を無へ、無を有へ。その力をここに!!

逆<sup>リバース</sup>」

スズの属性と同じ名前の魔法。

でも、この詠唱の長さ、そして一つ一つが全部力を持つように感じられる……。

これが示すのは一つしかない。

「『<sup>リバース</sup>逆』の真言!?!」

「何で!?!」

「坂崎さんは真言ができたんですか!?!」

「知らなかったですう!」

「ボク等も知らないよ!」

田中達が置いてけぼりだけど今はしょうがない。

魔法が発動すると、スズを中心にまぶしい光が発生。

その光は拡大し、ボク等までも包み込んだ。

あまりにまぶしすぎてボクは目を手で覆う。

そして、唐突に光がやむ。

そこには既に暴走した魔力は無かった。

「……なんとも無い?」

「……うん」

「……ですう？」

そう、まるで何事も無かったかのように……。

「え？何で!？」

「どうしたの？」

「気づかないの!？何も無かったかのようになってる!」

「……三谷、大丈夫か？何も無かったんだろっ？」

「田中、その節穴の目を開いてよくく見る!」

「あ？何も無いじゃないか。ここで戦闘なんか無かったみたいだ」

「あ!？アタシの壊した壁とかクレーターが無い!？」

そう。

まるで、何事も無かったかのようにフィールドが元通りになっていた。  
いた。

クレーターも、壁も。

そして、リュウの怪我まで。

「……あ?……何でオレは外で寝てんだ？」

「リュウ君!」

スズはリュウに抱きつく。  
・・・熱々ですな。

「うおい！？何だ！？オレは確か大怪我させられて・・・」

「やっぱり自覚あったんだね〜！？」

「あ・・・まあ、何だ・・・」

「リュウ君のバカ！！・・・でも、よかつ・・・た」

そこでスズが倒れた。

ボク等は急いでスズとリュウの元に行く。

「シャン！」

「もちろんですう」

シャンちゃんは気功術で疲労や簡単な怪我なら治せる。  
双子はなれた動きでスズの介抱を始める。

「リュウ、大丈夫か？」

「ああ。なんとも無い。・・・何があった？」

『あ・・・いったい、何があったんでしょう？』

ボクは司会を無視してリュウにかいつまんで話す。  
でも、リュウにもこの現象はよくわからないみたいだった。

「・・・後でジジイに聞く。それしかねえな」

「そうだね」

「・・・あの〜」

ボクは声のしたほうを向く。

そこには相手さん達が。・・・そういえば試合中でしたね。

「そろそろ事態を何とかしたいんだけど？」

「話は簡単だ。オレ達の負け」

「ちよつと！？あたしは!？」

「お前な・・・。オレはあの攻撃で戦闘はできない。それにスズは今倒れた。負けじゃねえか」

「いやいやいや!？でも、それは事故で!!」

「がたがたうるさい。お前が次出て勝ちゃあいいんだよ」

そついうとリュウは立ち上がろうとする。

そこで少しだけよろめいて、ボクは反射的に肩を貸そうとする。でも、リュウは大丈夫だというと自分で歩いていった。

「何だつたんだ？」

『さあ！思わぬハプニングでしたが、試合は同点！泣いても笑っても次で決まる!!』

「あ、ボク等も戻ろう」

「誰が出るの？」

「インチョーと・・・」

誰が出るか考えていると、向こうからピエロさんが出てきた。

「うちの者がすまない」

そう言って頭を下げる。

・・・ピエロの衣装で謝るとか。

「まあ・・・。事故ですし・・・」

しょうがないっちゃしょうがない。

「そう言ってくれば助かる・・・。次の試合なんだが・・・君達がよければその子と私の一騎打ちにしないか？」

「え、でも「お願いします」何で！？三谷君！？」

「ボク等で戦えるのが後は田中か宇佐野さんだけど？」

双子ちゃんはスズの介抱中だから無理。

つまり、戦力になるのはまだ出ていない田中か宇佐野さん。

でも、ボク個人としては宇佐野さんが出る事態だけは避けたい。理由はかなり危険すぎるからだ。

・・・相手の精神が。

「・・・わかった」

「おい！？何故だ！？」

「・・・足手まとい」

リカの一言は田中を撃沈させた。

まあ、ホントのところは田中がいてインチョーの魔法の威力が落ちる危険性があるかなあって思ったただけなんだけど。

「ま、そういうわけをお願いします」

「わかった」

そういうと、ピエロさんはフィールドの真ん中に歩いていった。  
・・・よし。

「インチョー」

「え？何？」

「ほれ」

ボクはインチョーに一枚の魔術符を渡す。

「何これ？」

「新作。今回は・・・ま、使えばわかるよ。でも、実験中のヤツ  
でさ・・・だから、本当にやばいときに使ったほうがいいと思う」



「・・・うん、わかった」

そういうとインチョーもボク等に背を向けてフィールドのほうに歩いていった。

さて、ボクも行きますか。

「じゃ、リカ。もしものときのためにここにいて。ボクは少し行くところがある」

「え〜」

「だって、ここに魔法に関わってるのがリカしかないし」

リュウ達は救護室に行ってる。

必然的に魔法で対処するようなことがあったらリカしか残らない。

「む〜・・・。でも、アタシも鈴音心配だけど茜も少し心配だからわかった」

「よし。後で何かおこるわ。ついでにレオも置いてくから」

「みゃ」

ボクはレオをリカ渡しながらそう言うと、リュウ達のところに向かった。

side茜

「なんだろう?」

ま、考えてもしょうがない。

坂崎さんのことも心配だけどあたしも自分のことがかなり心配だ。だって、負けたら何かよくわからないけどみんなとお別れしそうなんだよ!?

そんな事態は避けないと!

「……いざというときは宇佐野さんの情報チカラによる脅迫で……」

「あの……大丈夫かい?」

ハッ!?

あまりの窮地に考えが危ない方向に!?

……宇佐野さんは最終手段にしよう。

「大丈夫です」

『……ハイツ!というわけでハプニングもありましたが再開です!!今回、対戦相手は双方一対一で行う模様。ま、自分ごと<sup>バントマイマー</sup>に他人が首突つ込むってことですか?……とにかく三回戦目、『<sup>バントマイマー</sup>全てを具現化する者』ピエロ!そして『魔術符使い』多湖茜!両者、始め!』

まず、あたしは両手に一枚ずつ魔術符カードを構える。

三谷君みたいに相手のことがわからないから、相手を観察するのが基本だろう……だといいな。

でも、ピエロさんは特に何もしない。

……。

……。

……。

.....

「.....あの.....何もしいんですか？」

「いや、むしろそっちからしないの？」

「いや〜。あたしは三谷君を真似て相手の出方をみてからにしようかな〜って」

「それは相手によりけりだよ。特に、君みたいにこういうことの初心者ならなにか打って出たほうがいい。そうすれば相手がひよつとすると手の内の見せてくれるかもしれない」

何だか親切に教えてくれた。

.....裏とか無いのかな？

「ああ。これはサービスだよ。ウチの馬鹿が君の仲間を怪我させたからね」

「だから、あれは事故.....!!」

「はいはい。お前はやりすぎだから加減をそろそろ覚える」

.....踊り子の人に向こうで仲間っばい人たちに取り押さえられた。

「ま、そういつわけだ」

「じゃ、アックア・ランス水の槍「！」

空中に水が集まる、そして一本の水の槍を形作るとピエロさんに放たれる。

「やはり、『水』の属性が」

ピエロさんは手を動かす。

すると、水の槍は見えない壁にぶつかっただけで防がれた。

「と、まあこれが私の『手品』だ」

「へっ……」

「……え？驚かないの」

……え？

ここって驚くところなの？

だって、三谷君とか間君はもっとえげつないことしてたような気がする……。

それに、三谷君も 月守 ツキモリ という魔法は手をかざしただけで相手の魔法も攻撃も防御してたし……。

「……よし、気にしないでおう！」

「え、ええっ……」

あたしは魔術符を取り替える。

片方は ウォーター・ボール 水の弾丸、もう一つは ドリンク 飲料水の カード 魔術符。

は飲み水を生み出す魔術符。……実はこれ、ドリンク 飲料水の魔術符って言うて

るけど見た目は金属製のコップだ。はたから見たら何してるんだろ  
うこの子？見たいな感じで見られているだろう。でも、ここで天才  
のあたしは考えた。滾々と湧き出る水に、水の弾を組み合わせたら  
・・・ふふふ。

「ウォーター・マシンガン  
水の機関砲！」

コップの飲み口を相手に向ける。  
そこから勢いよく水の弾丸が高速で放たれた。

『おお！？多湖選手、いきなりコップを取り出したときには何を  
トチ狂ったかと思いましたが・・・まさかこんな使い方をすると  
は！？まさか、あれも魔術符の一種なのか！？』

「ちょ！？何これ！？コップから！？」

「初めてだけどこれも使うよ！！！」

コップを構えたまま今度は アクア・ウィップ 水の鞭 の魔術符を取り出して左手  
に持つ。そして更に魔術符カードを手に持つ。選んだのは ウォッシュ 洗濯 の魔術  
符。

「アクア・トゥウィンス  
絡みつく水鞭！！！」

二枚の魔術符カードから螺旋を描いて水が放たれる。

「さつきから！・・・これならどうだい！？」

相手は剣を抜くモーションを行い、居合い切りのような動作をあ  
たしの水の鞭に放つ。

すると、その部分がまるで刃物によって切られたみたいになつくと切れた。

でも、まだあたしの魔術符カードからは水があふれ出る。

「しつこいな……」

ピエロさんはそこでさっきのように手をかざし、攻撃を防ぐ。

「えい！」

そこであたしは水の鞭を適当に振る。

すると、水は鞭のようになつてループを描き、相手に届く。

「な！？射出系が曲がつた！？」

「ふっふ。これは水の鞭なんだよ！」

「ウソオ！？」

何故か周りの人もすごく驚いている。

……何でだろう？

「ま、そこは気にしない！！」

「つく！？」

相手に水がぶち当たる。

これで準備オツケ！

「な！？何だこれは！？」

そこには水の鞭でぐるぐる巻きにされたピエロさん。

・・・てか、何で頭から水を被ってピエロのメイクが落ちないんだろう？

「よし！エリア！」

エリアは魔術符を取り出さなくても呼べば来てくれる賢い子だ。空中に水が集まり、小さな人の形を造る。

『きゅー！』

「来たな・・・」

「じゃ、エリア！トドメお願い！！」

『えりあ、がんばる』

エリアはそういうと水を操作。

手を上にかざすと、大きな水塊を作り出す。それをピエロさんの頭の上に持っていく。

そして、エリアが手を振り落とし、水塊をピエロさんに叩きつけた。

・・・って！？

「エリア！？あんなことして大丈夫なの！？」

『きゅーっ。』

「可愛い声だしてもダメだよ！？」

「よっ。リュウ元氣〜？」

救護室に行くと、リュウは椅子に腰掛けていた。

「あ？オレは別になんともねえよ」

「だろうね。魔力の感じからしても普通だし」

「で、だ。問題は坂崎だ」

「だね」

リュウの睨みつける先、そこにはカーテンで仕切られているけど、  
・ベッドにスズが寝ているんだろう。今は双子ちゃんが介抱をし  
てるはず。

「てか、勝手に救護室使っているの？」

「いいですう！許可は取りました！」

「・・・シャン。あれは明らかに無理矢理だろう？救護の人が泣  
いていたぞ？」

・・・そうか、何かしくしく聞こえらると思ったら・・・。

声のほうを見てみると、隅に何やら黒いオーラのものは確認で  
きたけど・・・。ボクにはこれ以上確認する勇氣は無い。見たら  
いりると鬱になれそうだ。



「……んん……」

「気がついたですう!!」

「鈴音さん。大丈夫ですか？」

「……あれ？シャンちゃんにシャオ君？」

「入っていいか？」

「大丈夫ですう」

リュウが確認を取るとカーテンを開けて中に入っていく。中には少し疲れた表情のスズにほっとした双子の姿があった。

「……あ……リュウ君!？」

「おわあ!？」

スズはいきなりリュウの服を引っつかむと服を捲り上げてわき腹の辺りを見た。

「あれ？大丈夫なの？」

「……ああ。お前のおかげだな」

「へ？わたし？」

「うん。たぶんだけどね。……で、スズそろそろリュウの服か

ら手を離れたほうが言いと思うよ?」

「……そうですね」

「いろいろと誤解をつむですう」

「……きや!?!」

スズは一瞬だけきよとんとするとすぐに状況に気づいたのか少し顔を赤らめて手を離す。

「……男の子の裸を……// // //」

「おい。オレは裸になつてねえぞ」

「それは些細なことだよ」

「些細にするな!! オレを変態にする気か!?!」

いつもの調子に戻つたみたいだ。  
まあ、特に何も無くてよかった。

「じゃ、本題に行こうか」

「本題?」

「……お前の力だ」

「力?」

ボクはあのとときに起こった事をできるだけ細かく話した。  
リュウが庇って、スズが暴走みたいになっただけなことを。

「……で、オレの怪我、そしてフィールドが修復された、と  
「そうとしか表現できません」

「あれは驚いたです」

「うん。それで、ボクは……あれは真言なんじゃないかって思  
ってる」

「……はい？」

みんな疑問に思うのも仕方が無いだろう。

『リバース』は魔法を消す魔法。

そんなもので真言を使ったらそれに関係することが起きるはず。  
でも、今回はまったく関係が無い。別に解除された魔法も無けれ  
ば無効化した魔法も無い。

「でも、今回のこれは確実にスズが起こしたものだ」

「確かにそうかもしれませんが……」

「……真言は決まっていらない」

「リュウ、さん？何を言ってるんです？」

「真言はな、コレといって詠唱法や展開法、その他もろもろのこ  
とに決まりが無い」

「は？それってどういうこと？」

「……ソラ、お前が真言を始めて使ったとき、お前はそれが真言と知って使ったのか？」

「……いや、全然知らなかった。ボクは……ただ、そのときみんなを守りたいって思って、頭に浮かんだことを実行したら……」

ボクはあのときのことを思い出す。

智也さんにみんなが倒されて……。そしてリュウ達が励ましてくれて……。全ての攻撃や魔法を薙ぎ払う力があればって思ったら……。月夜<sup>ツキヨ</sup>が構築できるようになった。

「あ、わたしも同じだよ」

「そう、真言は本人のみが使える固有の究極魔法なんだよ」

「……ゲームで言うそのキャラのみの必殺技？」

「そんなトコだ。強い願いさえあれば真言は別に赤ん坊でも使おうとしたらできるものもある。実際に世界でほんの数件だがそういった事象はある」

……そこで何でボクを見るのかな？

聞きたくないけど……！！

聞いたらいろいろと変なレッテルを貼られそうだし……！！

「……真言を使う赤ん坊ですか……中々にシニールです」

「ああ。で、だ。真言と云えど、自分の属性に沿った力しか発言できない」

「……まさか、真言を使えるのが少ない理由って、自分の強い思いとその属性でできる力……つまりは本質みたいなのが完全に一致してできるの？」

「ああ。それが一番有力な説だ。つまり、坂崎が真言を使ったのはオレを助けるっつー強い願い。それと『逆』<sup>リバース</sup>属性の本質を使ったんだ」

「……難しいよ」

「……真言っつーのは簡単に言うとなパズルのピースみたいなものだ。坂崎は自分の思いっつーピースと属性のすっげー力っつーピースをうまくはめれたからパズルが完成して真言を使えるようになったんだよ」

「おお〜！？わたしすごい！？」

「おお。すごいすごい」

「……子供と親の会話に聞こえる。

リュウがパパでスズが子供……ヤバ、何かめっちゃはまった！？

「でも、何で他の人はできないの〜？」

リュウがこいつは話を聞いてたのか？って顔でスズを見る。

「ああ。だが、ピースの組み合わせが山のようにあって結構なやつはそれをはめられないことが多いんだよ」

「へ」

「ま、戻すぞ。つまり、坂崎が真言を使えたってことは『逆』の本質をこいつは無意識に使ったってことだ」

「……で、本質がリュウの傷を治して、フィールドをも修復する」と

「明らかに治療系ではありえないですう」

「……俺もそう思います。……鈴音さんの力はこう……もっと根源的な感じがした気がします。……法則を操るような」

「そんな法則って……あ」

「どうした？」

ボクは唐突に思い出した。

ルーミアさんに出会ったときに見せてもらった。属性の樹形図のような石版を。

確か、スズの属性は……三魔源素スリーシンボルの星のマークのすぐ外側の円の中に……。

そして、ルーミアさんは三魔源素スリーシンボルは魔法の根源とか言ってた気が……。

「……ひよっとすると、スズの力はボク等が想像してるよりもやばいかもしれない」

「どういうことだ？」

「わからないけど・・・」

「むう・・・考えてもしょうがないよ！」

考えることに飽きたのかスズはベッドから起きて立ち上がる。

「おい。大丈夫なのか？」

「もちのろんだよ。じゃ、リュウ君」

「あ？」

「リュウ君はわたしに借りができたよね？」

「・・・まあ、そうだな。状況からお前が怪我を治してくれたみたいだしな」

「ふむふむ。じゃ、お願い聞いて!!」

「・・・おい」

ボクはリュウから視線を外す。

双子ちゃんもだ。こういうのはさっさと出て行くに限る。

「じゃあ・・・リュウ君はこれからわたしのことを『スズちゃん?』って呼んでね」

「呼べるか！何が楽しくてオレが女子を『スズちゃん？』って呼ばなきゃいけねーんだよ！？」

「だって。冬香ちゃんもリカちゃんも名前なのにわたしだけ名字だよ！？ずるいよ！」

「知らねーよ！？最初からだろ！？今更だぞ！？」

「いいじゃんいいじゃん！よきにはからえ」

「ワケがわからんわ！？」

ボクはこの二人の不毛な口げんかを見て双子に言った。

「なんだかんだでリュウが折れるほうに千円」

「残念です。俺も千円です」

「な〜！？私もそっちに賭けようと思ったのにですう！！」

賭けが成立しなかった。

数十分後、リュウがスズにボクと同じように『スズ』って呼ぶことで決着がついた。

なんだかんだでこの二人は仲がいいよね。



7話・ULTIMATE MAGIC（後書き）

作 「とう言うわけで『真言』をお送りしました！」

美 「ついにスズっちも真言を使えるようになっただね」

作 「イエス！そして、謎の多いスズの属性の力の一端を見せました！」

美 「あり？スズっちは魔法の無効化じゃないの？」

作 「・・・つぶ。甘いよ、お汁粉より甘い！！」

美 「作者は甘党の癖に」

作 「ぶっちゃけ、僕はひねくれてるからね！そんなメジャーなものにするわけが無い！」

美 「自覚あるならやめろとお便りをいただいております」

作 「ま、とにかく次回は今回の続き！」

美 「話にまとまりが無いネ」

作 「事態はどんどん加速！！さて、主人公達はどうなる！？」

美 「・・・なんでここに来たか忘れてる気がする」

作 「次回もよろしく！」

美 「読まないと（以下略）」

8話・UNKNOWN PAST

side空志

「いやあ。珍しいものを見せてもらったね」

「そうですね」

「はいですう」

「リュウ君がデレる日が来てよかったよ」

「デレてねえ!？」

ボク等は救護室から出て、闘技場のベンチに向かっている。  
アナウンス救護室の投影魔法ではまだ戦ってるっぽかった。  
結構長引いてるんだね。

その時、ボクは見知った魔力を感知・・・というか視覚した。

「・・・ゴメン。トイレ行ってくる。先に行つてて」

「おっ。さっさと来いよ」

リュウ達は先に行った。

・・・さて、と。

距離・・・これならいける。

「フウカシャリン  
風火車輪」!

「・・・!？」

逃げようとした人影をボクは フウカシャリン 風火車輪 の加速で相手の前に立って逃げ道を断つ。

「さて、どうする？鬼ごっこはボクの勝ちだと思っけど？」

「・・・あんだ、性格悪いわよ」

「いやいやいや！？それを言うの！？しかも君が！？」

「・・・氷漬けにするわよ？」

「遠慮します。ま、少し話さない？・・・冬香」

目の前には黒髪のショートカットの似合う眼鏡のおねーさま。  
数法術士、平地冬香がいた。

side茜

「優しいですね」

「え？」

その声は後から聞こえた。  
振り向いた先にはピエロさんが何事も無かったかのように立っていた。

『おおっつと！っ？やられたと思ったピエロ選手がいきなり後から表れたぞ！っ？』

「あれ？確かエリアの水塊に……？」

「いやあ、さっきのは危なかった当たる直前で君の水の鞭が緩んでね。それでまあ、後はこういう風に」

ピエロさんはそういいながら手を手前から外に押し出すように動かす。

そして、一歩踏み出すと……消えた。

「え！？」

「ここだよ。ここ」

「！？」

今度は、あたしのすぐ後ろにいた。

……何が起きたの？

『さっきまでは本調子ではなかったのか！！さすがは』バント『全てを具現化する者』！！』

「……よかった。これで驚いてくれなかったらどうしようかと」

「ま、魔法？」

「そうだ。これが私の一族に伝わる魔法だ」

そういつと、さっきと同じモーションを行つと今度はあたしから離れた位置に出現した。

何がどうなってるの！？

三谷君でもこんな風にできたっけ!?

・・・どっちかって言うと間君の魔法に近いけど・・・間君みたいに剣を持ってないし・・・詠唱もしてない・・・何で!?

「いい感じに混乱してるね。じゃ、この隙に・・・」

「よし、考えるのはやめよう!」

「・・・は?」

『ええ〜!?!ここで茜選手が考えることを放棄した!?!』

よく考えたらこれはあたしのキャラじゃない。

考えるのは三谷君担当だし。

そう思ったら何だかすつきりした。

「よし!エリア、あの人やつつけよう!」

『うん。えりあ、がんばる』

もう!かわいいなあ!

「は!?!そんな場合じゃなかった・・・でも、もうピンチっぽい  
しいいよね」

あたしは三谷君から貰った新作の魔術符カードを取り出す。

『お?茜選手は新しい魔術符カードを取り出しましたね。何をする気で  
しよっ?』

そんなのあたしは知らない。

だって、三谷君に押し付けられたんだし。

試作品とか言ってたけど大丈夫だよな。

あたしは魔術符カードを起動させた。

「……あれ？」

『……どうしたんでしょう？魔術符カードが発動しないのか？』

「え〜！？失敗作！？」

『……くる』

エリアがそうつぶやく。

あたしが聞こうとした瞬間、それは起きた。

魔術符カードから光が放たれる。

そして、いたるところの地面から水が間欠泉のように湧き出てきた。

「魔術符カードで！？」

水はとどまることを知らないみたいの間欠泉のように湧き出す。

そして、足元を水でいっぱいにして、既に水嵩が足首ぐらいまである。

これじゃ濡れるー！！

「……あれ？濡れてない？」

「おい！？ずるいぞ！？こっちはずぶぬれだー！！」

「おお〜三谷君の魔術符カードすごい！」

「あの子が造ったのか!？」

「うん。ログってドワーフの人の下で」

「ログ?・・・ログ・ラギスか!？」

ああ〜・・・。

そんな名前だった気がする。

そして何故か会場が騒ぎ出す。

「な、なんと!?!あの魔道具技師の少年は天才魔道具職人、ログ・ラギスの弟子だった!?!そして、その少女はその魔術符カードの使用者だった!?!」

・・・でも、何がしたかったんだろう?

この魔術符カードの意図がよくわからない。

おかげで軽くフィールドが湖に・・・・・・・・。

「・・・・・・・・エリア?」

『えりあ、できるよ』

「よし!やっちゃって!」

『うん!』

そついうとエリアが地面の水を操作。

前のミニサイズの水の龍を何体も生み出す。

それがピエロさんに向かっていった。

「な!?!」

でも、よくわからない魔法でまた防御された。  
ま、気にしない。

「アクア・ランス  
水の槍　!」

あたしは魔術符を起動した。

そして、水の槍が地面から飛び出て相手に攻撃する。

ピエロさんは予想外だったのか驚愕の表情を浮かべていた。

そして、槍がピエロさんにぶち当たって、ピエロさんは綺麗な放物線を描いて空を舞った。そして、水浸しの地面に叩きつけられる。

「がはあ!?!」

「エリア!」

『きゅ!』

あたしはエリアに指示を飛ばすと、エリアはすぐさま水を操作。  
水がうごめき、ピエロさんは水の縄にがんじがらめにされる。

そして、あたしは特大の水の槍を空中に生成して、ピエロさんに向ける。

「あたしの勝ちです」

「……そのようだ。……参った」



『ここで決着！！激闘の末、勝利をつかんだのはルーキー、』夜<sup>サ</sup>  
明け』の多湖選手だ！！！！』

司会者の言葉が響くと同時に観客が歓声を上げる。

・・・よかった。勝てた。

あたしは安堵からか水浸しの地面にぺたんと座り込んでしまった。

『ますた、だいじょうぶ？』

「うん。大丈夫だよ」

「やった〜！茜ちゃんお疲れ〜！」

声のしたほうを向くと、そこには坂崎さんがいた。

「もう大丈夫なの！？」

「うんうん。元気だよ〜」

「・・・元気がありすぎて困ってるぐらいだ」

「茜、お疲れ」

「いやあ、さすが委員長だね」

「・・・委員長は関係くない？」

「大丈夫ですか？」

「体におかしいと感ずることがあれば俺かシャンに言ってください」

い  
「

口々にみんながねぎらいの言葉をかけてくれる。  
・・・あれ？

「三谷君は？」

「ああ・・・あいつはトイレだ」

「・・・応援してくれなかったんだ」

地味にシヨックだ。

こんな魔術符押<sup>カード</sup>し付けてそれは無いでしょう？

side 空志

ここは闘技場前の広場。

今は闘技場のほうに人が行ってるのか結構人が少ない。  
ま、ボク等には好都合だけど。

「で、何で逃げたの？」

「・・・」

「・・・じゃ、質問を変える。・・・二日前、いたでしょ？」

「・・・」

だんまりか・・・。  
何だからしくない。

・・・二日前のときも。

（二日前）

噴水の広場。

インチョーとエリアでパフォーマンスをした後のこと。  
リュウ達は何故か血相を変えてボク等にいった。

『冬香がいた』って。

「・・・で？」

「でって・・・なあ・・・」

「最初から話したほうがいいと思うよ」

宇佐野さんはいつものようなふざけた態度じゃなかった。  
・・・何があったんだ？

「ついさっき、ちょっとしたごたごたがあったんだ」

「ごたごた？」

「この祭りのメインは闘技大会だ」

「あゝ・・・。血の気が多い人が暴れたとか？」

「そう。で、絡まれたのが・・・」

そこにいた冬香だった、と。  
そういうことか。

「でもそれが？」

「ああ、冬香に・・・正確にはそこにいた冬香のギルドメンバーらしきヤツが絡まれたんだがな・・・」

「というか、絡まれたっていうより喧嘩を吹っかけたんだよね」

「・・・でだ。そいつは冬香に言ったんだよ『そいつを殺せ』ってな」

「・・・は？」

『殺せ』？

いや、でも冬香がそんなことを・・・。

「で、冬香たちは・・・相手を氷漬けにした」

「・・・嘘。・・・だって、平地さんは確かにがめついし、お金の亡者だけど！」

「そうだよ！確かに数字オタクだけど、冬香がそんなことするはず無い！！」

・・・何故だろう。

リカとインチョー、二人のフォローがまったくフォローになってない気がする。

「でも、幸いにも運営の人がすぐに来てくれたから何も無かったけど……」

「……なら、現場に行こう」

「……確かめるのか？」

「ボクにはその力がある」

月詠<sup>ツクヨミ</sup> を使えばわかる……。冬香がした魔法なのかも。

「……こっちだ」

ボクは、リュウについていった。

「ここなんだね」

「ああ」

ここは何の変哲も無いごく普通の通りだった。

ただ、通りの真ん中あたりに少しだけ氷が残ってる。

ボクは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を発動させる。

念のためにカラコンをつけているから周りから見てもボクが『闇夜の奇術師団』の『幻想術士<sup>マジンシャン</sup>』だと気づかないと思う。

「……どうなの？」

「……」

「……ソラ」

「……ホントだった」

ボクがそういうとみんなのリユウと宇佐野さん以外の顔に驚愕の色が現れる。

……でも、ボクは信じたくない。

周りを見渡し、一つの屋台のおじさんに聞いてみる。

「へい、らっしやい！」

「すみません。ここで平地冬香って数法術士が喧嘩して相手を半殺しにしたって聞いたんですけど？」

「ヒラチトウカ？誰だ？」

「黒髪のショートカットの眼鏡をかけた女の子です！」

インチョーがそういつた途端、顔色を変えた。

「な！？お前、『魔氷狼<sup>フェンリル</sup>』の知り合いか！？俺は何も知らない！  
！帰れ！！！」

そういうとおじさんはボク等にあっちへ行けと手を振った。

……この人から聞くのは無理そうだ。

「……リユウ、『魔氷狼』って？」

「お前な、オレは魔法なら大抵のことは答えられる。が、人間社会のことはほとんど知らんぞ？」

「……よし、情報魔の力を借りよう。  
嫌だけど。」

「宇佐野さん」

「……今回は事態が事態だからいい。ワタシが情報を集めたときに聞いた話だと、『魔氷狼』ってというのが傭兵ギルド、『災禍の焰』ってチームに所属してるらしいよ。で、そのギルドはものすごく強いらしいよ。何でも適当にここの大会に来れば必ず優勝してくみたい」

「……じゃ、今回はそのギルドが来てるの？」

「そういうこと。で、『魔氷狼』……おそらく、冬香たちは……話が本当なら後方職にもかかわらず一人で出てる得意の無敵艦隊で敵を殲滅する冷酷で一匹狼な氷の数術士って言われてる」

「……無敵艦隊、コード 巨人 系のヤツか」

「たぶんね」

なるほど。  
『魔氷狼』、ね。

「でも、冬香は冷酷なんかじゃない」

「……うん。冬香はアタシが討伐対象になっているのに、アタシが人間を襲わないってわかってくれたらやめてくれたんだよ？」

絶対に何か理由があるんだ。

一番怪しいのが……。

「……冬香のギルド」

「けどな、オレ達にはどうしようもない。ギルド同士の交流は基本的に無い。あったとしても、オレ達みたいな弱小ギルドの相手をしてくれると思うのか？相手はこの大会の強豪だぞ？」

「……なら、別の方法で確かめる」

「……お前、アホだろ？」

「いくら方法が無いからって……」

「ソラが壊れた!!」

「……いつそのこと死んでくれ」

「……田中っちサイテー」

外野がうるさいけど無視しよう。



ボクはバカ騒ぎして回りに迷惑をかけながら通りを進む一人の青年に目を向ける。

「ホントにあの人なんだね？」

「ああ」

「間違いないよ」

よし。じゃ、作戦実行だ。

ボクだけで青年のほうに歩いていく。  
そして、思い切り肩をぶつける。

「ああ！？お前！！どこ見て歩いてんだよ！！」

・・・ものすごくガラが悪い青年がボクにブチギレる。  
第一段階完了。

周りの人がものすごく慌てている。  
たぶん、この人の悪名は相当なんだろう。

「・・・そつちこそ」

「んだと！？ガキの分際で！！」

「じゃ、あなたはガキ相手にブチギレる大人気ない人ですか？」

「・・・てめえ、死にたいようだな。・・・冬香！」

よし来た！！

これがボクが考えた作戦。

てか、さっきの半殺しの事件をボクが再現するっただけ。

「……って、あいつそっぴい大会の登録に行ってたか」

「……へ？」

「はぁ……。なら、オレサマ直々に潰す！」

「……マジで!？」

ボクは急いでリュウ達を見る。

……いい笑顔でグッドラック!ってされた。

「すみませんでした!!  
フウカシャリン 風火車輪 !!!」

ボクは魔法を展開して逃走。

後のガラの悪い人は怒号を上げてボクに魔法を放つ。

そして、ボクは思った。

「今度からはちゃんと確認してからにしよう」

特に相手がいるかどうか。

「……あんなバカ？」

「いやぁ……その時は焦ってたぞ」

冬香はかわいそうなものを見るような目でボクを見てきた。  
・・・実際にボクもそう思う。

「で、どうなの？」

「・・・はいはい。確かにあの時いたわ」

「じゃ、何でボクがあんなことしたのかもわかる？」

「・・・大体は。あんた、ものすごいお人好しだから」

「で、どうなの？」

ボクは再度冬香に聞く。

冬香の顔からは特に何も浮かぐことができない。

「・・・わたしがした。命令されて」

「・・・そう。わかった」

ボクはそれだけを確認すると立ち上がる。  
そしてそのまま会場に向かう。

「聞かないの？」

「聞く必要があるの？」

「わたしは、相手を半殺しにしたのよ？」

「……冬香、一つ言っとくけどさ。例え、冬香が脱税しようが銀行強盗しようが横領しようが……信じてるから」

「……全部お金方面の犯罪なのは気にしないでおくら」

冬香が呆れた表情でボクに言う。

ボクは冬香に「やっと笑ってやると、会場の中に入っていった。さて、宇佐野さんの力を使うかな。とにかく突き止めてやる。」

8話・UNKNOWN PAST（後書き）

作 「と、言うわけで『知られざる過去』をお送りしました」

樹 「私の出番が無いのですか？」

作 「ゲストには現在、全力で空気のシュウにきてもらいました」

樹 「・・・」

作 「ま、この章は冬香中心に回っていくんで」

樹 「ですが、冬香さんはあまり出てませんよね」

作 「まあまあま。そのうちスーパー冬香ちゃんタイムが発生するから」

樹 「はあ」

作 「ま、そんなわけで次回！・・・は、ポケ倒します」

樹 「常にポケ倒してませんか？」

作 「え？そう？」

樹 「自覚してください」

作 「次回はぶっちゃけ無くてもいい気がしてるんだよね」

樹 「・・・何をしてるんですか？」

作 「次回もよろしく！」

樹 「・・・」

9話・BRIEF REST

side 冬香

あいつはわたしが呆れた顔で見ると、にやっと笑って会場に歩いていった。

まるで、こっちに引きずり戻してやるから覚悟しとけて感じて。

「……さすがにこれは無理よ」

「姉さん！」

わたしが声のしたほうを向くと、そこには一人の少年。わたしの弟がいた。

「ちょ！？何でここにいるのよ!?!」

「抜け出してきた」

「バカ！帰りなさい!!」

「少しなら大丈夫だって」

弟は無邪気な笑みを浮かべて言う。

「……しょうがない。」

「わかったわ。少し見て回ったら帰りなさい」

「わかってるって。姉さんも行くこう!……どうせ暇なんだから」

「どっせつて……ま、確かに暇よ」

「じゃ、行くうー!」

元気に駆けていく弟の後姿を見つめながらわたしは人ごみの中へと歩いていった。

side 空志

さて、冬香は信じる。

とすると、何か脅されてる可能性がある？

……でも、何でだ？

正直、冬香の力があれば大抵の事は返り討ちにできる。

「あ、ソラ!」

「おお? みんなういたよ」

「……さすがアンジェリカさんの三谷君リーダー」

なら、考えることは簡単。

冬香の力をもってしても不可能なことでもってことになる。

ケースとしては、相手が冬香より遥かに強すぎる。

……でも、ボクの目をもってしても今のところは優子さんレベルの魔導師はここに一人もいない。智也さんレベルは……いない。なら、必然的にこれは無いな。

後は別にそんなにスゴイ人は……そういえばあの占い師の人……あのあたりで何か感じたんだよね……。あ、今はそっちなじゃなくて冬香だ。

「……ダメだ。気付かねえ」

「す、スゴイ集中力だね……」

「……無理に星をつけなくていいと俺は思っぞ?」

『あ?何して……ぶわははは!!!何だよこれ!?!』

「何で額に『肉』って描きたくなるんでしょうか?」

「ここはヒゲも描くですう」

「みゃ〜」

「ちょっと!?!ソラに何するの!?!」

なら、恥ずかしい過去とかで?

………無いね。」

冬香なら、きっと相手に自分以上のえげつない過去で逆に脅し返す気がする。

……借金?

おお!?!」

これならありそう!

ガメツイからね!?!」

「今なら……ちゅーしても気付かないかな?」

「……お前は公衆の面前で何をしようとしてる?」

「もちろん、愛のかた」もういい。黙れ」……ちえ」



「熱々ですう！」

「……シヤン、そんなに目をギラギラさせて見るな」

「じゃあ、おそらくそうだとして……」

「……はあ、いい加減に現実を見よう。情報が少なすぎて判断ができない。」

「ああ〜!!!!」

「なんかソラ君が危ない人になってるよ!？」

「え!? 何でみんなここに!？」

「いつの間にかボクの周りにみんながいた。」

「気付いてなかったのかよ……。まあいい。ソラ、勝ったぞ」

「ふ〜ん」

「それだけ!? あたしの勇姿を聞いてくれないの!？」

「いや、信じてたからね」

「で、三谷っちは何か考え事でもしてたのかな〜？」

「うん、冬番の」

「「「「!?!?!」」」」

「……ん？」

「何でみんな驚きの表情に……。」

「はっ!？」

「ボクはさっきまでリカのいたところを向いた。」

「そこからは何故かブラックモードのリカ様が御降臨なさっておられた。」

「ソラ?」

「何でございましょう、姫」

「……一緒に」よくわからないけどそれは誤解だ!」あの世で暮らそ」

「……ソラ君、今まで楽しかったよ」

「ああ、オレもだ」

「俺も短い間でしたが忘れません」

「がんばるですう」

「……あの世でも元気だね」

「……くっ」

『タロウ、笑うところか?』

待って!?

ボクが死ぬことが決定事項になってますよ!?

「ソラ」

「・・・リカ」

ボク等は互いに見つめあう。

リカのほうは鎌を構えて・・・。

何故だろう? 鎌がなければ、ドラマだとかなりいいシチュエーションだと思っのに・・・。

「じゃ、先に逝ってね」

「・・・お願いだから弁解のよぎゃあああああああ!!!??」

後になって聞いた話だけど、この近くにいた人は夏にもかかわらずものすごく震えていたらしい。

「ごめんなさい」

「・・・うん」

ボク等は宿泊してる宿に戻ってきた。

ちなみに男子で借りているほうに集合した。・・・さすがに十人近くもいると狭い。

「毎度毎度、飽きねえな」

「でも、ソラ君もよく生きてたよね」

うん。ボクもそう思う。

「・・・そろそろ優子さん恐怖症以外にリカ恐怖症が入ってきた感じがする」

「・・・え。そんな！？嫌だ！！それだけは嫌だよ！！」

リカがいきなりボクの服をつかんで泣きながら懇願してきた。

「え！？何で泣くの！？だ、大丈夫だから！！冗談だから！！」

「ホント？冗談？アタシのこと、嫌わない？」

どことなく言動が幼い。

・・・幼児退行を起こしてる？

「そうそう。冗談冗談。嫌わない。怖がらない（たぶん）」

「ホント？アタシのこと好き？」

「うん。好き好き。マジで。ホントに」

「ホント？えへへ」

「……こいつは自分で首を絞めてることに気付いてないんだよな」

「それが三谷君だし」

幼児と化したリカがボクにくぐりつともたれてくるけどこの際いろいろと無視しよう。

ボクの精神的疲労も何とかなるはずだ。

「で、お前は冬香に会ったんだな？」

「うん。と言つか追い詰めた」

「……何してんだ？」

「いや、逃げそうだったから」

「……まあいい。何を話した？」

ボクは冬香と話したことを全部話した。  
……特にないけど。

「……って感じかな？」

「……ふん」

「……で？」

「……でって何？」

「・・・まさか、それだけですか？」

「うん。これで全部」

「・・・本当の本当ですう？」

「うん」

「すーすー」

「・・・あれ？リカがいつの間にかボクの背中では寝てるし。だからレオがボクの膝の上でお腹出して寝てたのか。・・・てか、レオの野生の本能がいろいろと・・・。」

「おい！？お前バカか！？」

「俺もお前がバカだと思っていたがそれほどとは！」

「本当だよ！」

「信じられない！」

「インチョーとスズに言われたくない！！」

「それでもワタシの後を継ぐ気！？」

「無いよ！？・・・それに、冬香が理由もなしにそんなことするヤツじゃ無いって信じてるから」

「・・・だがな」

「リュウ、冬香はボク等の仲間だ。それに、みんなも冬香のことはそれなりに知ってるでしょ？」

「・・・まあ、な」

みんなが控えめにうなずく。  
ボクは言葉を続ける。

「とにかく、冬香には何らかの理由でアレをした可能性がある。  
だから、情報を集めよう」

「おっけ～。そこはワタシに任せなさい！」

「わたしもがんばるね～」

「あたしも手伝えばいいんですよ」

「メンドイが・・・やるしかねえか」

「俺もがんばるか・・・うまくいけば好感度が」

「俺でよければ・・・」

「私もやるんですっ！」

「おっけ～。野郎ども！なんとしてでも冬香ちゃんを助けるぞ！」

「」「」おっ！」「」

よし、そうとなれば、あのギルドについて調べるのが……。  
……。……。何か一人多くなかった？

「……。番号！-1！」

「2だよ」

「3だ」

「4」

「5」

「」「6、7」

「さすが双子……。8」

「9だぜ」

なんだ。ばつちり……。じゃない！？

リカは寝てるから返事できない！？

そして、周りを見渡すとそこには耳のとがった……。。

「ハロー！みんなのアイドル、ア」  
ライエン 雷燕  
「！-1」いきなりいい  
いいいい！？」

感電する物体X。

そこへリユウはすかさず魔法剣を叩き込んで窓（二階）から外に



ぶっ飛ばす。

「……よし、じゃあとりあえず、今日はまだ時間があるし、冬のギルドのことを調べてみよう」

「そうだな。おし、行くぞ」

「……ソラさん、リュウさん、華麗に誰かをいなかったことにしてますよね？」

「誰かいたっけ？」

「……いません」

「シャ、シャオに武器をむけるなですう！だからって私もだめですう！！」

おかしいな。ここにはボク等9人とレオの一匹しかいないじゃないか。

つまり、あれは空耳だったんだよ。

「さっきの、アリ……」

「だれそれ？そんな天災ボクは知らない。リュウは？」

「ああ。オレも知らんな、そんな災厄」

「ちよつと待ったあああああああ……！！」

「「ッチ！」」

「今、『ツチ』って!？久しぶりなのにその反応!？」

「……やっぱ、ここは消し炭にしとけばよかった」

「オレももつと細かく刻めばよかった」

「アリアっちじゃん!」

「美末ちゃん?久しぶり」

ま、そんなこんなで魔窟で服屋を経営してる厄介事バンドラのの詰まった匣  
だった。

「で、何か用？」

「もちろん、みんなの応「お帰りはあちらです」「何で!？」」

あんたがどれだけボク等（特に自分）に迷惑かけてると思ってる  
の!？

できるだけ早くお帰り願いたい!!

「今回は純粹に仕事よ!」

「仕事？」

「……ゴメンね。わたしが頼んだの」

以外にも、スズがアリアさんに頼んだらしかった。

……でも、何で？

「だって、リュウ君の服が破れちゃったでしょ〜？」

「・・・あ？確かお前の魔法で元通りになったはずだぞ？」

「・・・なるほど、ボク等は魔法防御の特殊加工の服着てるけど、インチョー達って着てないよね？」

「そんなのあるの？」

「ワタシはアリアっちに貰った」

「さすが魔窟の技術です」

「その技術ってまだまだ実験段階のはずですう」

「ふっふっふ・・・この私、アリアちゃんに不可能はないのだよ、キミ！」

アリアさんがびしっと双子ちゃんたちをさして言う。

「ま、この人のオーバーなアクションはいつものことだ。放っておこう。」

「ま、隆介達の服も最新の一番魔法防御の高いやつに変えておこう。」

「いいのか？悪いな」

「その変わり、優勝賞金で払って」

「わーってる。オレ達を誰だと思ってるんだよ」

「おっけーおっけー。じゃ、コーディネート開始！」

そういうと、アリアさんはポケットの魔術符カードからカバンの魔術符カードを大量に出した。

それぞれに色で印が付けてあるみたいで、これが帽子、これがズボンとか言ってる。

そして、何着かの服を取り出す。

「よし。じゃ、これが女子」

「ホント？やった〜！」

「わ〜い！」

「やったーですう！」

「ワタシは出ないからいい・・・」

そして、女子がバサツと広げて自分の体に合わせてみると・・・。

「・・・メイド服じゃん!?」「」「」

「おう！安心しなさい。オプションもちゃんと・・・」

そういつてアリアさんは猫耳とかもはや狙ってるとしか思えない衣装を取り出す。

「・・・リュウ」

「ああ。今、お袋に電話「ジョークツ！！イツツ、ジョーク！！これが本物！」」

「間！お前、何で止めた！？女子（特にアンジェリカさんの）メイドが見れたんだぞ！？」

「黙れ廃人」

「みゃ」

「……さすがに俺も引きます」

「……ソラ、田中がやらしい目で見てくる」

例のごとく、田中は部屋の隅に行って床にのの字を書き始めた。あれって、実際に見ると引く。

田中はみんなから無かったことにされた。

「じゃ、男子は出てって」

「あ？今着るのか？」

「いいじゃんいいじゃん。ま、私が持ってきたのはぶっちゃけ、キミらの戦闘服だけど、それなりにおしゃれにしようと……と思っよっ。」

「……何で自身が無いんだよ」

ボクとシャオ君で田中をズルズルと引きずって行って、廊下に放

り出した。

いまだに変なオーラ出していじけてるのを見ると何だか無性に・  
・腹が立つ。

レオも何故か田中にぺしぺしと小さな前足で叩いてる。

「田中だからかな？」

「・・・どうでしょう？」

「ま、女子が中で騒いでる間、オレ達は適当に冬香の情報を探るぞ」

「わかった」

「にゃ〜」

「わかりました」

ボク等はそれぞれの方向に向かって走っていった。  
田中を放置して。

9話・BRIEF REST（後書き）

作 「とう言うわけで、『つかの間の休息』でした」

ガント 「おい。俺の出番は？」

作 「しばらくは無いです」

ガ 「なんだと!？」

作 「別にいいじゃん。ガントさんは何気に出てるし」

ガ 「いやいやや!俺の勇姿はもつと魅せるべきだ!！」

作 「字が違う気がするけど気にしない。でも、忘れ去られていた  
アリアさんよりマシ」

ガ 「だが、つい最近俺が忘れられそうだと宇佐野に聞いたが？」

作 「・・・次回!」

ガ 「オイ!！」

作 「邂逅、そして・・・ついに最終兵器が・・・」

ガ 「オイ!？何の次回予告だよ!？」

作 「その先に見るものとはいつたい・・・」

ガ 「この作品の趣旨にあつてねえ!！」

作 「・・・次回、『邂逅と情報』」

ガ 「・・・オチが見えてきたぞ」

作 「乞うご期待」

## 10話・IN THE MORNING

### side空志

結局、昨日は男子で調べたけど何もわからなかった。

まあ、不定期に出てきては必ず優勝をしてくっついていうのだけじゃなかった。そして、今回も着々と優勝へのコマを進めていることも。

そして後は、そのチームに冬香がいるだろうってことも。でも、人数ぐらいはわかって欲しいんだけど？

ある人は三人とかある人は十五人・・・拳句、百とかいう人までいた。

大会の規定をちゃんと読め。

「まあ、そんな事いつてもしょうがないか」

ボクはとりあえず宿のベッドから降りる。

・・・みんなは結構熟睡してるようだ。

何もすることが無いから、とりあえず外に行って魔法の練習でもしてこよう。

寝巻きはジャージだから特にこのまま出て行っても問題ない。後は適当に靴を引っ掛けて外に行く。

外はまだ早いからか人はいない。

宿の中庭のようなところでボクは胡坐をかいて座る。

「ま、ボクにはそのほうが好都合だ。・・・来い『サルでもわかる大魔導書』」

ボクはそう言いながら右手を前に出す。

すると、そこに一冊のハードの本が現れる。

ボクはページをめくり、目的の魔法陣が描かれたところを開ける。



「……突風」

本の魔法陣が光り、ページから浮かび上がる。すると、魔法陣から風が吹き荒れる。

ボクは魔力をコントロールして勢いよく吹く風をそよ風程度にとどめる。

「……よし、『ボール』」

ボクはテニスボールほどの大きさのゴムボールを取り出すと、魔法陣から吹く風に乗せて宙に浮かせる。

ここからが本番。

精神を集中してボールをどこかに吹き飛ばさないように風を強くしたり弱くしたりしてボールをコントロール。ボールは見えないエレベーターに乗ってるように上下に動く。

ま、こんなもんかな？

ボクはまたまたページをめくる。

そしてとある魔法陣のところまで手を止める。

「……魔術変更 フウエンジン 風円刃」

ボクは起動していた魔法陣と入れ替わりに別の魔法陣を起動。

これは新作。風が竜巻のように回転して、一つの輪を形成。それが回転して切り裂く。簡単に言うと、チャクラムの魔法。ま、チャクラムと違ってこれは魔法だからボクが好きに移動させられる。

「……でも、どうしてチャクラムって投げた後に自分のところに戻ってくるんだろう？」

・・・ま、今は練習、練習。

ボクは フウエンジン 風円刃 で風のチャクラムをいくつか造り、それで一人卓球的なことをする。

・・・いや、これ大変なんだよ？

本来、斬る魔法で切り裂かないように、かつ、五つぐらいの エンジン 風円刃 を縦横無尽に移動させてボールを地面に落とさないようにしてるんだから。

これが地味にいい訓練になるんだよ。  
コントロール 魔力操作の。

「うわぁー、すげえ！！」

「！？」

ボクはいきなり後から声を聞いて驚き、思わずゴムボールを切り裂いてしまった。

・・・また、新しいの買ってこよう。

後を向くと、そこには中学生か小学生ぐらいの男の子がいた。

「あ、すみません。邪魔しました？」

「いや、いいよ。ボクも適当に切り上げようと思ってたし」

そろそろみんながおきだす時間になるからか宿の厨房から料理のいい匂いがここまで漂ってくる。

「そうですね？・・・でも、さっきのって、数法術ですか？」

「あゝ・・・内緒にしてくれる？」

「この子がものつすごく目をキラキラさせて尋ねてきてボクはむげにできなかった。」

ま、別に隠すほどの事でもないし。

「はい！」

そういつと男の子はボクの目の前に正座して身を乗り出すようにして座る。

「おっけ。・・・これはさ、魔法陣による魔法の発動なんだ」

「魔法陣による？・・・古代の魔法ですか？」

「ま、そんなところ。ボクに魔法を教えてくれた人がこんなふざけた本を渡してきたさ」

そう言いつつ『サルでもわかる大魔導書』を見せる。  
それを見せた途端、男の子は笑いをこらえていた。

「ま、そんなわけ」

「へへ。世界はスゴイ！数法術と詠唱しか見たこと無いからな」

「そうなの？珍しいね」

「そうなんすよ。姉さんが数法術士で僕も少しかじったことがあるんですけどね、全然ダメでした」

まあ、普通はそうでしょ。

数法術は結構使い手を選ぶ。

確かに、数法術を使えたら詠唱よりも効率よく自分の魔力を魔法につき詰め、さらにはコントロールできる。でも、基本がものすごく難しいらしい。

ボクも冬香から魔法の参考に聞いたことがあったけど、未知の言語を聞いているようにしか思えなかった。

だから、そんなわけのわからないものよりも詠唱使うほうがいいって人がたくさんわけ。

「でも、ちゃんと刻印をしてもらったんですけどね」

「刻印？」

「はい数法術を使う際、デバイス魔術機械と魔力をシンクロ同調する必要があるります。そこで、初心者の人のために魔力の通路をパス設けるんです。僕の姉さんもまだまだとか言っけて刻印をつけたままです」

へへ。じゃ、さっきから感じた違和感はそれか。数法術士に会うたびに変な違和感を感じてたからね。冬香とこの子だけだけ。

「……ボクのところにも数法術使う女の子がいるよ」

「そうなんですか！？珍しい！！」

「うん。でも、わけあって今は別行動。大体、あれは賢いけど変なところでバカだから……」

……うん、冬香は数字以外はホントにバカだ。

俗に言う『賢い馬鹿』だ。

「そうなんですか？……僕の姉さん、つい最近元気ないんです

「よ」

「そうなの？」

「はい。本人は隠そうとしてるみたいですけど・・・」

・・・どござその冬香さんに似ていらっしやる。

そして、男の子はやべっといういながら急に立ち上がる。

「すみません！実は、抜け出してきたもんで・・・。そろそろ戻らないとバレて姉さんに殺されるんで！」

そういうと風のように走り去っていった。

「・・・面白い子、だったね」

ボクの声は早朝の空気にとけて消えていった。

side 隆介

「ソラがいなーいつ！！！？？」

オレは甲高い叫び声で目が覚めた。

声の方向を向くと案の定と言うか・・・。

「アンジェリカさん、おはようございます！！今日もいい朝で」  
ソラどこ！？」「・・・」

田中の野郎がリカにガン無視されて泣き崩れた。

シャオのヤツはまだ寝てやがる・・・。どんだけだよ。

「オレは知らん。ついさっき起きたところだからな」

「むう〜・・・血が欲しいのに・・・」

いや、お前はソラが欲しいんだろ？

それにお前は何でソラの寝ていたベッドの枕を抱きしめている？  
しかも、オレの見間違いじゃなけりやニオイかいでるよな？  
これは既に末期だ。いろいろとダメすぎるだろ。

「アンジェリカさん！！俺の血でよければ！！」

「ね〜ソラどこ〜？」

さりげなく田中をスルー。

ま、いつものことだが。

「知らん。お前のセンサーのほうが高感度だろ」

「・・・あれ？どうしたの？」

噂をすればなんとやら、か。

話題のソラが帰ってきた。

「ソラ〜！おはよう〜！！」

「あ、おはげぶう！？」

・・・朝っぱらから元気なバカップルだ。

「いやん」

「……何でお前はそういう言葉には心の声まで反応できる？」

「愛の力ゆえに……」

「……こいつは何がしたい？」

ま、いいが。

オレはベッドから降りるとシャオのやつをたたき起こす。

「ソラ。リカに血を飲ませたらメシにしろ」

「あ、おっけ〜」

「アンジェリカさん！今回は俺が！太郎は出てって！！」ぎゃあ〜！？」

田中はリカの蹴りであいていた扉から廊下へ吹っ飛ばされた。

「あれ？田中君が飛んできたけど？」

「どうせ、アンジェリカさんに何かしたんでしょ」

「私もそう思っただろう」

「田中っちも懲りないね〜」

「リカさん！？何でそんな風にボクに迫るの？」

「え？別にソラを襲って既成事実とかまったく考えてないからね

「……じゅるり」

「リュウー！何故かよくわからないけど貞操の危機を感じアア  
ッ！！」

オレは何も言わずにそつと扉を閉めた。

まあ、ここから先は本人達だけで楽しんでもらおう。

side 空志

「……マジで死ぬかと思った」

「お前は朝から何をしてんだ？」

「いやあ、リカがさ、『ソラの朝を起こすのはアタシの役なのに  
！！』とか言ってる何故かボクは罰ゲームという名の死刑にされそう  
になった」

だって、全身の血を吸おうとしたのかめっちゃ迫ってきたんだよ  
！？

何故か服を無理矢理引っぱがそうとしたし……。

「……たぶん、それは違うと思うよ」

「違うっ？」

「……ま、話しちゃうと確実にR18な内容だから気にしない  
で」

「さて、三谷うちがついに大人の階段のぼるっ」と



何故だろう？ものすごくいろいろな人に誤解されそうだな。そんな気がする。

ボク等がそういうふうしてるうちに闘技場に到着。昨日にもまして活気がある。

「ま、今日もがんばりますか」

「『夜明け（サンライズ）』だ」

リュウが受付の人に言う。

そして、受付の人は何かの紙を取り出して確認を取る。

「確かに……ですが、一人足りませんよね？」

あれ？

ボクは周りを見渡す。

まずはボク、そして、腕に引っ付いてるリカ、受付に話しかけたリュウ、スズ、インチョー、宇佐野さんに双子ちゃん。

「完璧だと思いますが？」

「いやいやいや、魔力無効化体質キャンセラーの方がいませんよ？」

「『ああ〜！』」

田中がいたか。

「わかりました。問題ないです」

「・・・はい？」

「田中さんは言っちゃ何ですけどザコですう」

「太郎がいなくてもまったく問題ない」

「おし、じゃー行くぞ〜」

啞然とする受付の人を放置してボク等は控え室に向かった。

「俺はホントに『夜明け（サンライズ）』のメンバーの一人だつて！〜！」

「はあ？お前みたいな不細工がそんなわけ無いだろ！あのチームは顔がいいやつが集まりだぞ？お前、あそこの女性選手に近づこうとしてんなこと言ってるだろ！？」

「違あ〜う！〜！」

一人のアホな少年がボク等の女子目当てに身分を偽って会場の選手控え室に入ろうとしたとか。ま、ボク等には関係の無い話だね。

『レディース・エンド・ジェントルメ〜ン！！闘技大会本戦、二  
日目を始めるぜ！！』

「何で控え室まで響くかな？」

「まあ、別にいいんじゃない？」

リカの言葉にそれもそうかと思ってボクはみんなを見る。  
ま、みんなの服が変わってる。

リカはショートパンツに半そでのピッタリとしたシャツ。・・・  
いつものことだけど、腕に例のブツが当たっております。でも、さ  
すがにこれは・・・いや、なれたけど。慣れたらダメなのに・・・。  
そして、リユウは全身を黒で固めてる。

黒のジーンズに黒の半そでTシャツ。・・・以上。暑くないのか  
な？

双子ちゃんは中国の拳法をする人が着るような服を青と赤の色違  
いできている。

で、スズは制服のようなカッターシャツとスカートをはいて、そ  
の上に絵本の中から飛び出してきたような魔法使いの服を装備して  
いた。三角帽にマント。ただ、色が白だったりする。

で、インチョーは長ズボンのジーンズに上はタンクトップ。

腰にはアリアさんが用意してくれたのか魔術符入れカードのような革の  
ホルダーがつけてあり、そこに金属の魔術符カードが入っていた。

・・・で、ボクはいつもの服の上に何故かフードが大きい空色  
のローブの様な物を装備してた。

「何でボクはこれだけ？」

「何か、アリアさんが必要ないって言ってたよ〜」

「何で!？」

「むしろ、お前の服が一番防御が高いらしい」

「・・・何でボクが一番高いかは聞かない」

予想はつくけどね!!

レオは既にボクのロープのフードの中でご満悦のようだ。

後から女の人の声であの猫ちゃん顔だけ出して可愛くない?とか欠伸したー!とか騒いでる。

・・・で、一番問題なのが。

「何で宇佐野さんがメイド服なの!？」

ボクの目の前にはツインテールのフリフリなスカートのメイドさんがいた。

しかも見た目が小学生だからある性癖の持ち主の方はものすごくうれしいに違いない。

「なんでしょうかゴシユジンサマッ」

黙れ!

こいつは確かに見た目小学生のロリだけど中身はそこらの悪知恵の働くおばあちゃんよりも恐ろしい!!

「あらら〜ゴシユジンサマ、つい最近、またまたクラスの子の方に何か頼まれて手伝ったようですね」

「ん?あれ?確か・・・財布をなくしたとかで・・・てか、何で女子を強調「ソラ?」・・・何でございましょう、姫?」

何故かりカがものすごく爽やかな笑顔を浮かべていた。  
この笑顔を見れば、誰もが見とれただろう。  
・・・膨大な魔力を垂れ流していなければ。

「どっぴいっこと?」

「いや、だから、その・・・ただ、財布を捜すのを手伝っただけ  
で・・・」

「・・・後でお願い一つ聞いてもらおうかな?」

「・・・・・・・・このボクにできることであれば何なりとおおせく  
ださい」

みんながボクに合掌をする。

うん、宇佐野さんに逆らうところなるってことを忘れてたよ。

・・・みんなも気をつけてね。

リカが後でソラには執事服着てもらおっかな〜とか言う恐ろしい  
言葉が聞こえるけどあれは幻聴だ。全力でそうだ!

『じゃ、次の試合を始めるぜ!!!まずは・・・』

「確か次はオレ達だ。だが、今回は勝ち進めばもう一回ある。そ  
の辺を踏まえてやれよ」

ボク等が話している間にボク等の前のチームの試合が終わったよ  
うだ。

そして、リュウの言ったとおりボク等の名前が呼ばれる。

ボク等は普通に中に歩いていく。



「何だ！！お前等知り合いか！！」

「ごつい男が大声で言う。

・・・てか、うるさい。

「・・・ウチ違う。・・・鬱だ。・・・眠い」

・・・ものすごく無気力な女子がぼそぼそとしゃべる。  
ホントに今にも寝そうだ。

「俺にかかりやあ。ザコだがな！！」

ものすごく小物臭がする線の細い男子が言った。

「ねーねー！リンゴアメ欲しい！！」

まったく関係の無いことを・・・男子かな？女子かな？何だか中性的な顔立ちの子が言う。

「中々に個性的な人達だね」

「お前が言うか？一人だけその道の廃人を狙った衣装にしか見えないお前がだぞ？」

リュウの言うことは最もだと思う。

宇佐野さんは本気で何がしたいのかわからない。

このメンバーの中で一番力オスである意味において最凶の人だと思っ。

『では、サイコロの目は七！早速、第一回戦といきましょう！！』

いつの間にかサイコロが振られたらしい。

偶然にも向こうの人数と同じだ。

どういふ風に来る？

向こうは七人で話し合うとすぐにルクスとジュリアさん、そして小物臭のする男の人が出てきた。

じゃ、ボク等は……。

「ここはワタシが行くよ」

「いやいやいや！？宇佐野さんはダメだよ！（相手が）危険すぎる！」

「大丈夫！手加減（そこはかたなく廃人にする程度で）抑えるから！」

「どのあたりが大丈夫なんだよ！？」

「そうだよ〜！相手の人がかわいそうだよ〜」

「おい！？お前等、俺がそんなガキンチョに負けるってか！？上等だコラ！この『傲慢』を司るこの俺様、安藤剛あんどうがぶっ潰す！来いや！」

スズのうっかり発言で小物臭の男、安藤剛さんはブチギレしてしまった。

……びびりしよび。

「ほらほら〜。ワタシがやれば万事解決だよ〜。って言うか行く

よ



「「「・・・あ」「」」

ボク等が頭を抱えてる間に宇佐野さんはフィールドに行ってしまった。

ボク等はこのとき思った。相手は終わったなって。それも人生的な意味で。

ボク等とはばつちりが嫌だからおとなしくベンチに座っていた。

『おお！？』<sup>セラテム・ベッカータ</sup>『七つの罪』が三人に対して『夜明け（サンライズ）』は一人の女の子だ！・・・何故かメイド服の』

観客席からは一部の男共が歓声をあげている。

・・・知らないって幸せだね。

『ええ〜・・・登録情報によりますと・・・宇佐野美未さん、情報屋』だそうです・・・。戦えるんですか？』

「もちろん！情報は剣となり、盾になるだよ」

核兵器の間違いじゃないかと思う。

相手にはできれば今すぐ降参して欲しいと思う。

特に、ルクスとジュリアって人の末路が既に見える。

『では、試合を始めます！！』

フィールドには貴族風なルクスにごく普通の少女ジュリア、そしてチャラい格好の剛。

対するこっちはメイドさんの皮を被った情報魔。

そして、向こうはすぐに剛のほうに宇佐野さんに距離を詰める。



ところどころで俺の地位がとか言ってる気がする。

「・・・わかった。降参だ」

・・・ドンマイ。

ボク等は敵ながら同情の視線を向ける。

相手はお前等もか・・・と言う表情で見て、ベンチに戻っていった。

「剛さんが・・・」

「っふ。剛君は何の弱味を握られたか知らないがこの僕には通用しないよ！」「昨日、ルクスさんは通りがかった女の子にナンパしてましたね」「ノオオオオオオオオオオオオ！！？」「ルクス？」「いや、違うんだ、違うんだよジュリア。僕はキミ一筋「ちよっとお話ししよう」「イヤアアアアアアアアアア！！？？」

・・・ルクスはジュリアに引つ張られて場外へ行った。

ま、ある程度は予想してたけど、ルクスは『色欲』でジュリアが『嫉妬』だったんだね。

なんというか・・・最悪の組み合わせだ。

『・・・え〜・・・宇佐野さんの勝ちです』

そして、断末魔の悲鳴が聞こえた気がするけど気のせいだ。そうに違いない。

「勝ったよ」

「・・・ああ。そうだな」

「・・・お疲れ様です」

「・・・お疲れです」

ボク等は今後一切宇佐野さんの力を闘技場で使わせないようによつと心から誓った。

10話・IN THE MORNING（後書き）

作 「いえい！久しぶりだぜ！！」

龍 「そうじゃの」

作 「まあ、そんなわけで『早朝にて』をお送りしました」

龍 「・・・別に関係ないかの？」

作 「何言つか！？これはあからさまだがフラグだ！！」

龍 「・・・ぶっちゃけるの」

作 「つふ。だが、読者さんが考えてるフラグと僕のフラグが重なるだけでも！？」

龍 「そういえば、自分でひねくれるとか言っておったの」

作 「イエス！今回も作者パウワウでやっちゃうぜ！！」

龍 「で、正直のところどうなのじゃ？」

作 「・・・次回予告！！」

龍 「・・・逃げおったの」

作 「今回は・・・ついにやつ等がタツグを組んだ！！」

龍 「・・・じゃが、わし的には微妙じゃの」

作 「ふっふっふ。・・・サーセン」

龍 「・・・おぬしは何がしたいのじゃ？」

作 「ま、敵の『怠惰』のお方に注目ってことで」

龍 「・・・」

作 「ま、次回もよろしく！！」

## 11話・CONVERGENCE

side空志

『さ、さて・・・では二回戦の準備をお願いします!!』

向こうはその言葉と同時にすぐに選手を出す。

出てきたのは、スズと大食い大会で戦った・・・たぶん『暴食』  
を司っているライニーって女の子にメンドイとか連発してる女子、  
何かまた関係の無いものを欲しがってる少女か少年かよくわからない子。

「・・・じゃあ、ここは俺が行きます」

「なら、私も行くですう」

「・・・じゃ、あたしもがんばる」

ボク等からは双子とインチョー。

・・・他は出ないようだ。

ま、ボク等は勝たなきゃいけない。そして、今日は勝てばこの後にもう一試合来る。ここで全戦力を投入なんてしたら後々で大変なことになるからね。ある程度は残しておかないと。

「みんながんばれ」

「応援してる」

「インチョーのカード魔術符、  
アクア・エリア水域は制御さえすれば双子ちゃんも  
ぬれないから」

「・・・だが、ヤツ等は七人にもかかわらず残り全員を投入か・・・何かあるのか？」

「私達がんばるから大丈夫ですう」

「俺達もできるだけのことはします」

「あたしもエリアもいるから大丈夫！」

そういうと三人はフィールドに入ってしまった。

でも、中々にバランスがいい組み合わせになってる。

治療にシャンちゃんだし、前衛にシャオ君、後衛がインチョー。

それに、シャンちゃんは普通に前衛でもかなり強い。

体内の『気』、つまりは魔力全てを自分に持つていくことが無意識にでき、意識したときには『気功術』として治療に使える。

・・・何でボク等のメンバーの治療担当は前衛が多いんだろう？  
だって、シユウもたぶんボク等の中で魔法抜きなら最強の人だし。  
いや、魔法があっても対抗できるのがり力だけという超人だからな・・・。

『出揃ったようです！！では、第二回戦始め！！』

その言葉同時に双子ちゃんが何も示しあっていないにも関わらず前に飛び出す。

インチョーは既に魔術符とコップを取り出し、相手に向けている。

「・・・メンドイ」

「早く終わらせようよ。お腹減った」

「おお！？あの双子速い！」

そういうとリンゴアメが欲しいとか言ってた子とスズがライニーちゃんとか言ってた子が前に出る。

そして、ライニーは小さな体には似合わない武器を……。

「って、大砲！？どっから出した!？」

「……まあ、オレ達も似たようなもんだ気にするな」

まごうことなく、大砲を……それを小脇に抱えるようにして持つ。

「撃て〜」

へろへろとした声からは想像ができないような光の砲弾を双子に向かって撃つ。

……たぶん、魔法銃の一種だ。砲弾からは魔力しか感知できない。

「シャオ！」

「大丈夫！」

そういうと双子は簡単に避ける。

ま、それもそうでしょ。シュウはアレぐらい目をつぶっててもできると思っし。

でも、次の現象にボク等は目をむいた。



「追！」

ライニーが一言言った途端、砲弾はありえない起動を描いて双子に向かつていった。

双子はそのことに驚き、とっさの行動ができない。

「危ない！！エリア！」

『きゅー！』

インチョーがエリアを呼びだし、水を操作。そして、水塊を精製し双子を吹き飛ばす。

「「わきやあああああああああ！？」」

「・・・ゴメン」

『・・・ごめん。えりあ、まちがえた』

・・・何をしてるんだろう？

威力は低かったのか双子は普通に立ち上がる。

「大丈夫、ですう・・・」

「俺も助かりました」

「おおー。ナイスコンビネーション！」

どこが？って思ったけど突っ込まない。

向こうのライニーはどこと無くスズとベクトルが似通ってるんだ

ろうつてことで自己完結しておく。  
ボクは隣のリュウに聞いてみる。

「あれは？」

「あれは本来、魔法銃を使うものの基本技能だ」<sup>スキル</sup>

・・・あれ？

ボクはあんなのしたこと無いよ？

ボクのその表情から何を言いたいのか察してリュウは重ねる。

「本来、魔法銃を使うのは膨大な魔力を持つているがそれを魔法として行使できない、あるいは極端に魔法を収束させることができないヤツのために考え出された武器だ」

要するに、あまり魔法がうまくない人のために考え出されたんだろつ。

・・・じゃ、ボクがこの銃を持つてる意味って何？

「ま、これを期にお前も覚える。そうすれば攻撃のバリエーションが増える」

「まあ・・・するけどさ」

ボクはそう言いつつ <sup>ツクヨミ</sup>月詠 をこつそりと展開。

相手の銃の魔法構成<sup>プログラム</sup>を解析する。

もちろん、ボクの持ち技に加えるために。

「・・・でもさ、よく考えるとあの魔砲じゃつぎ込む魔力も桁外れになるんじゃない？」

「ああ。だから、アレは完全に後衛の武器だ。・・・だが、何でヤツは前に出てきた？」

そんな魔法の素人に聞かれても・・・。ボクがそう思ったときだった。

さっきからライニーは魔砲弾を撃ちまくっていたからかついに魔力が切れた。

ま、これもボクだからこそわかることだけだ。

「む？魔力が切れた？」

「おけおけ。ライニーは後ろ行って！リートがやっちゃうもんね！」

そういうと、自分をリートと呼んだ少年か少女かいまいち判断のつきにくい子はどこからとも無く二本のナイフを取り出し、三人を相手に切りかかる。

双子は息のあったコンビネーションで相手を少しずつだけ確実に追い込んでついている。

そして、双子が何の合図もなしに突然猛攻に出たそのとき、まるでそこを狙ったかのように魔砲弾が放たれた。

その先には、ライニーがいた。

「何で!?!？」

「あ?どうした?」

「いやいやいや!?!魔力が切れてたのに撃つたよ!?!」

「え〜・・・ソラ君の間違いじゃないの〜？」

「でも、ソラが間違っただことってあんまり無い」

「今回はそのたまたまだったんじゃない？」

ボクもそう思っただろう。

その魔力がほぼ回復していなければ。

「今のあの子の魔力は最初のとときとほぼ一緒」

「んなバカなことがあるか」

「んなバカなことが目の前で起きてるの！！」

でも、いきなりの不意打ちにもかかわらず双子は冷静に対処。

インチョーも ウォーター・マシンガン 水の機関砲 で相手を攻撃する。

相手は魔砲をインチョーに向けて撃つことで弾丸を弾き飛ばし、インチョーが避けなくちゃいけない。

そして、何発か撃つとまた魔力が切れる。

「むう〜まただ〜」

「はいはい。さっさとしちゃってよね〜」

そういうと、ライニーは突然どこからとも無く大きなおにぎりを取り出した。

ボク等がいつたい何をしようとしてるのか困惑していると、戦闘の最中にも関わらず大きく口を開けておにぎりをほうばり始めた。

ボク等はその光景に啞然としてしまった。

「……どういうことだ？」

「きつとお腹が減ったんだよ」

「……そんな……鈴音みたいなの……」

「……まあ、余裕なんじゃない？」

「違うわ！！解析したらとんでもないことがわかったんだけど！？」

「何だ？」

「何か、おにぎり食べたら魔力が回復した」

「……ソラ、RPGのしすぎだよ」

「違うから！」

「準備オツケ……撃て〜！」

またもへろへろとした声で砲撃を開始。

魔力が切れていたとは思えないほどの威力だ。

属性は『変換』とでも言うのかな？

それで効率よく魔砲の弾丸の特性を変換し、更には自分の魔力が無くなれば外部からエネルギーを摂取して、つまり食べることで自分の魔力を回復。

「『暴食』。そういうことか」

「わたしもがんばればできるかな？」

「……鈴音ならできそうな気がしてきた」

うん。ボクもそう思う。

何でだろう？とても不思議だ。

たぶん、スズは常識では測れない超常的な存在なんだろうね。

「……おい、そういうや向こうのもう一人のヤツはどうしたんだ？」

……そういえば、敵は二人で双子とインチョーに対応している。ボクはさっきまで敵の三人がいたところを見ている。

そこには腕を組んだままたずむものすごく眠そうな女子。今にも寝そう……。

「……すー……」

「……おい」

「……リカ？」

「アタシにも聞こえた」

「ほい、双眼鏡」

宇佐野さんがボクに双眼鏡を渡してくれた。ボクはそれをのぞいて相手を見してみる。

宇佐野さんが何で双眼鏡を持っていたのか聞かないでおく。

「それはメイドだからですよ、ゴ・シュ・ジ・ン・サ・マ」

「聞いてないし意味がわからない」

ピントを合わせてみると、そこには……。

「……立ったまま寝てる」

「おい、そんなギャグは要らんぞ」

「さすがにそれは……」

ボクは無言で双眼鏡を二人に渡して確認させる。

相手を見た瞬間、二人は明後日の方向をむき出した。

「……ZZZZZZ」

「そろそろ起きてよ」。リート疲れた。それに早くお祭り行きたくい！」

「私もお腹減った。ディアさん。ちゃっちゃとして」

「……ZZZZZZ」

「疲れたー!!」

そして、リートと名乗った子がいきなりナイフをディアと呼んでいた女の子に投げつけた。

そして、何も無いはずの空中で硬質な音を響かせて地面に落ちた。

「……ん？……眠い。……リート、お前か？」

「だって〜！！もう疲れた〜！！」

「……我侂なヤツだ。……さすが『傲慢』。……ZZZ」

「寝るなー！」

そういいながら二人のコントがこつちの三人の攻撃をガードして  
繰り返される。

ふざけたことをしてるけど………ものすごく強い。

「……ああ………わかったわかった。瞬殺するから」

そして、おもむろに杖を取り出す。

そこを詠唱の邪魔をするために双子が強襲。

開いた穴はエリアとインチヨーが何とか持つ。

エリアが水を操作して小さな水球を縦横無尽に走らせる。

インチヨーはさつきから弾幕系の攻撃を仕掛ける。

「ハッ！！」

双子の息のあった攻撃が行くが、相手は杖を軽く一振りするだけで  
双子を吹き飛ばした。

あの人が何！？強すぎない！？

それに、今解析してわかったんだけど………！

「……甘いよ。 フィジカル・ブースト 身体強化 はもちろんしてるに決まってるで

しょ。……ちなみにジ・エンドだから」



そういつとディアは手を上にかざす。  
やっぱりか!?

「三人とも!!それはやばい!!降参してもいいからとにかく死ぬな!!」

「え!?急に何を言い出すの!?!」

「……………降り注ぐ隕石」

「……………うそお!?!」

突然だった。

いきなり上空に燃え盛る大岩の塊がいくつも出現。

『火』、『風』、『土』の本来は三人でつむぐような混合魔法。

向こうの学校でスズがこれの下位魔法である 劫火の隕石 をや

られて大変なことになりかけた。

「それを一人って何!?!てか、三属性持ちとかいるの!?!」

「ああ……………いるぞ?目の前に」

「ボク以外で!!それにボクはいろいろと規格外でしょ!?!」

それに、ボクのある『火』はひよつとすると『天空』の要素の一つなんじゃないかって思い始めた。……………とある魔法の実験で。

「お前な、自分だけが規格外じゃねえんだぞ?確かにホントのホントに希少だがちゃんと三属性もいる。だから多重属性なんだろう

が

「知らねー！」

「でも、<sup>ミックス</sup>混合魔法はすごいね。それほどの魔力を持つてるのかな？」

「それに、ワタシの情報だとあの人は体術もすごいらしいよ」

なにそのチート！？

すごすぎ！？

そして、そんなことを話し合っているうちに会場を大きな地震が襲った。

「・・・ホントに死ぬかと思いました」

「もう二度と来ない・・・」

「・・・疲れたですう」

アリアさんの服のおかげかインチョー達はボロ雑巾のようになりはすれど生きていた。

ホントに今回はアリアさんに感謝だ。

「・・・おかしいな？ペしゃんこで消し炭になるはずなのに・・・」

・まあいいや。・・・寝る」

向こうから恐ろしい独白が聞こえたけど聞こえないことになってお  
こつ。

そのほうがこの三人には都合がいい。

『・・・さて、会場の修復が完了いたしました！三回戦目の準備  
をお願いします！』

「・・・どうする？」

相手は一人。

あの大柄でごつい体格で大声の人。

そして、たぶん『憤怒』を司る。最後の一人。

・・・こういう人はかなり強いって定番だ。でも、ここで残りの  
メンバーを投入するのまあ・・・。

「よし、リユウ！レオ！」

「みゃ  
」

「おし。オレ達だな」

ボクとリユウがフィールドに向かう。  
今回はリカも文句を言わずに・・・。

「ダメだよ。後でソラ君を好きにしていから今回はガマンし  
て」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

後でボクが売られた気がする。

スズめ・・・後で覚えとけ！スズのゴハンを片っ端から奪ってやる！

「お前等が俺の相手か！！」

「そうだ！！」

「そうか！！何でそんなに大きい声なんだ！！」

「アンタが言うか！？アンタが！？」

『選手が出揃ったようです！では、第三回戦、始め！！』

ボク等のボケはまったく無視して試合を始める。

・・・空気を読んでいるのか読んでいないのかまったくわからない。

「俺は『憤怒』を司るヴァルス・サタンだ！！」

「あ、丁寧に・・・ボクは三谷空志。で、こっちの黒いのが間隆介」

「黒いのって、お前・・・」

「そうか！！では、行くぞ！！！！」

一際大きくボク等に向かって言うと、手に二メートルほどの大きな剣・・・ツヴァイハンダーが現れる。ツヴァイハンダーの特徴は

剣身の根元近くに革などが巻かれています。革でまかれた部分を持って振り回しより大きな破壊力を生み出す。By煉さん。

そして、相手もその例に漏れず自分の身長を越える大剣を柄と剣身の革がまいてある部分を掴みこつちに突進してくる。

「まずは手始めに 雷ライ . . . .

其は風に属す法則

風よ、ボクの力となれ

それは猛り狂う迅き風の如く

フェザーステップ  
風の舞 !」

「詠唱が遅いぞ . . . シャドウ・パス 影抜け」

ボクは風で移動し、リュウは影にのまれて消える。  
ヴァルスはそんなのお構い無しでボクに突撃。  
大剣をボクに振りかざす。

そこでボクはある程度は予想がついていたから魔法銃を構えて魔法弾を叩き込む。

クリンベント  
全弾直撃。

だが、相手の勢いは止まらない。

「ああゝさすがにまずいかな？」

「もっと魔力の収束を練習しとけ！」

リュウがどこからとも無く現れ、魔法の刃をともししていない短めの刀身の双剣で切りつける。完全に間合いのうち。

そこで、ついに相手は魔法を発動した。

相手の体から炎が発生する。

「ナルホドな！」

リュウは軽業師のように跳躍して距離をとる。

ボクは魔法の推進力を持ってリュウの隣に高速で移動。

「『炎』で魔装系、か。ベタだね」

「そういうお前等も『闇』と『風』か？しかもかなりトリッキーな戦い方だ」

「そんなホメんなって」

「そうそう。でも、残念でした。少しだけ外れ

其は雷に属す法則！

鮮烈なる光の刃。

それは空の怒りの如く！！

ライジング・ソード  
空の雷鳴剣　！！

ボクは上に手をかざして魔法を発動させる。

すると、バチバチという音を立てながら雷が収束。

それは一本の雷の剣を形成し、相手に放たれる。

雷が空気を焦がす臭いがし、着弾したあたりの地面から雷の柱が昇る。

「ん……。まあまあかな？」

「だな。まあ、ごく普通レベルだ」

そういうとリュウは ダーク・エッジ 闇の刃 とつばやくと大量の黒い刃がボク

が狙ったあたりに殺到する。

そして、そのあたりから大きな火柱が上がった。

その火柱の中からまるで悪魔か何かのようにヴァルスが出てくる。

「・・・なるほど、『風』と『雷』・・・いや、『天空』か？」

「名前」

ボクは魔法銃から弾丸を放つ。

相手はその弾丸を大剣を振り回してなぎ払う。

「・・・おい、ソラ参謀どうする？」

「さあ？何も思い浮かばないからリユウ突撃隊長が何とかするってことで」

「ハア？メンドイ」

相手はボク等のところにその体には似合わない俊敏さで肉薄。

そして大剣を振り下ろす。

ボク等は間一髪で避け、そこに牽制の魔法を放つ。

そしてまた膠着状態になる。

「これじゃキリが無い」

「だな・・・別にジジイには連絡したが別に本気出したところで問題ないツツーてたからな」

・・・よく考えると、ボク等よりも特殊な魔法を使ってた人がゴロゴロ転がってた気がする。

「・・・本気で行く？」

「それが手っ取り早い」

ボクは フェザー・ステップ 風の舞 を解除し、リュウは双剣を腰の剣帯に収める。  
ヴァルスはボク等の行動に眉をひそめ、周りの観客も困惑の声を上げる。

『どうした？』夜明け（サンライズ）の隆介選手に空志選手は降参でもする気か？』

「誰が降参だ？」

「そうそう」

「こっからは全力だ！！」

そういつとボク等は一気に魔力を解放。  
今までためにためてた分をここで吐き出す。

「魔法陣展開・・・」

「魔法剣・・・」

ボクの銃には紋様が現れ、リュウの双剣からは黒い光が鞘から漏れる。

「ライセンスックウボウ 雷閃疾空砲 ！」



「刹那！」

ボクからは雷を内包する風の弾丸。

リュウからは極限まで収束させた闇の刃を居合い抜きのように抜き放って飛ばす。

ヴァルスは攻撃を受け止めるといふ愚を冒さずに避ける。

その瞬間ヴァルスの横ギリギリをボク等の魔法が駆け抜け、壁に着弾して轟音を響かせる。そこには壁どころか新しい通路ができていた。

「……やつちやった」

「……ああ」

「な、何だ！？いきなり魔法を放ったと思ったらさっきまでとは段違いの威力！！！？この二人、ここまでの実力を隠してここに来た！？」

「……それがお前達の本気か？」

「それなりにだな」

「まあ……。そういうわけでボクの目はごまかせないよ。そっちも本気で来なよ」

「……どういうことだ？」

「いや、君さ、ホントは『炎』と『氷』の多重属性持ちでしょ？」

デュアル

その言葉に向こうのメンバー全員が驚く。

ま、そりゃそうだ。

いきなり見ず知らずの人に見せてもいない属性を言い当てられたら誰だってビックリする。

「おい。初耳だぞ？」

「別にリュウは知らなくても対処したでしょ」

「まあ、そうかもしれんがな・・・魔法剣 黒刃」

リュウが構えを取ると剣に黒い魔力の刃が展開される。これでリュウは無詠唱で魔法剣を行使できる。

「お前のは魔装系の一種か？」

「違う。これはあくまでオレが『魔法剣』と名づけた一種の詠唱法だ」

「でも、来ないならこっちから行くよ？」

ボクは魔法陣を展開。

今回はできるだけ動物系の魔法はやめておこう。後でいろいろと大変そうだし。

「レオ。出番だよ」

「みゃ」

ボクのフードの中にずっといたレオもやっと出番かとも言うように地面にすたっと降りる。そして、光に包まれると一頭の翼の生

えた獅子がそこに現れる。

「じゃ、レオは適度に攻撃して」

「がう」

レオは心得たとばかりにボクに短くうなるようにして答える。  
じゃ、ボクもやりますか。

「リュウ！相手の動きを！」

「わかった！・・・魔法剣 影討ち」

その言葉でリュウは自分の影の中にずぶずぶと入っていく。  
その次の瞬間には相手の真後ろに。

相手はそれに気づいて力任せに大剣を振るう。

リュウはそれを先読みしてしゃがみ、続けざまに魔法を放つ。

「魔法剣 影縫い ！！」

リュウが剣の片方を影に向かって突き刺す。

すると、相手はまるで縫い付けられたかのように動けなくなる。

ボクはそこに魔法を叩き込む。

「ライセンシククウホウ  
雷閃疾空砲」

ボクの銃から魔法が放たれる。

そして、ありえないことが起きた。

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「っ!?!」

リュウがそこで剣諸共吹き飛ばされた。

そして、相手はどこから出したのか二本目の大剣を取り出し、ボクの魔法を受け止め、そのまま横へと流した。

「何だ!?!リュウ!?!」

「大丈夫だ!?!こいつ、ものすごいバカ力だ!?!」

「いやいやいや!?!?」

それでも大剣ツヴァイハンダー二刀流とか聞いたことが無いですよ!?!?

と言うか大剣の二刀流つてのを聞いたことが無い。

普通は片手半剣ハンド・ア・ハーフ・ソードでするものだ。

むしろ、リュウの剣はそれよりかなり短い。

そこで魔法の刃をはってちょうどいい長さになるっただけ。

「いいだろう、俺も本気を出す!?!」

そして、剣の片方から熱気が、もう片方からは冷気があふれ出した。

・・・何かどこぞのテ コマンドメ ツ?

「俺がここまで本気を出したのはかれこれ……………いつ以来だ?」

「「知らねえよ!?!」」

「三年前じゃない?」

「いや、一ヶ月前だろう?」

「……んあ?」

「それより早く祭り〜!」

相手チームはフリーダムだった。  
って、今は関係ないし……。

「まあ、そんな事はどうでもいい」

どうでもいいなら言わないでください。

こつちがいろいろと大変だから。

「行くぞ……。  
コールド・フレア  
凍てつく炎　!!」

気合の声と共に思い切り二本の大剣がすぐそばのリュウに振り下ろされる。

リュウはいつものように影から影へ移動することで攻撃を回避。

さっきまでリュウのいたところには猛り狂う青白い炎が周囲を凍らせていた。

「なにあれ!? 物理法則的にありえない!?!」

「わからん!! 魔法だろ!」

「俺の剣は絶対零度の炎で凍る。このようにな!?!」

今度はボク等に向かって剣をフルスイング。

すると、さっきの青白い炎がボク等に向かって放たれる。  
炎の通った先は燃える氷になって残ったままだ。

「リュウ！」

「わあってる！！  
ダーク・イロージョン  
闇の侵食　！！」

リュウの闇が魔法を喰らう。

でも、そのリュウの魔法をもつてしてもとどめるのが精一杯みただ。  
いだ。

ボクは魔法弾をいくつか放つ。

相手はそれに合わせて二つの剣を振って氷の炎でボクの弾丸を止めた。

「なんつーか、あれはねえだろ」

「・・・まず、たぶんあの魔法は二つの剣を振ることが条件。  
炎に少しでも触れれば攻撃も凍結。・・・なら、魔法を壊そう」

「・・・いいのか？」

「大丈夫だよ。リュウ、頼んだよ」

「おう」

「よし、レオ！咆哮覇だ！！相手に近づくのはダメ！！」

レオはボクの指示ですぐにボクのそばで咆哮覇を打ちまくる。  
リュウは炎を避けて相手に接近。

そのまま攻撃して相手の注意を自分に向ける。

「俺に近づくと大変なことになるぞ？」

「だろうな！！魔法剣 斬黒 ！！！」

リュウは黒い斬撃を放つ。

相手はそれを自分の周りに炎を展開。

氷の壁で防御をし、物理攻撃は攻防一体の炎を飛ばす攻撃。そうするうちに相手の足場が少なくなる。

「おいしいのか？そんなにやるとお前の足場もなくなるぞ？」

「ふん！俺がこの魔法をコントロールできないとも思ったのか  
！！！」

相手は炎をコントロールして自分は凍らないようにできるようだ。  
・・・たぶん、インチョーが アクア・エリア 水域の魔術符カードを使っても術者がぬれないようにボクが設定したみたいだ。

「ツチ！おいレオ！やれ！！！」

レオは言われなくともでも言うようにヴァルスにどんどん攻撃  
をしていく。

もうすぐだ。

「おい！お前まだかよ！？」

「・・・できた！リュウは下がって！！ 月夜ツキヨ ！」

ボクは魔方阵に手を突っ込む。

リュウが隣に来るのを確認して、相手に話しかける。

「・・・ねえ、アルテミスって知ってる？」

「？」

「アルテミスはギリシャ神話に出てくるゼウスの娘で『月の女神』なんだ」

「・・・それがどうした？」

「でも、アルテミスは他にもいろいろと司っていることがあるんだ。例えば、豊穰とか・・・狩猟とか。それで、海と馬の神のポセイドンが三叉矛トライデントを持つようにアルテミスは『弓』を持っていたんだ」

「だからそれがどうした!!」

ヴアルスは痺れを切らして炎を飛ばす。

リュウはすかさず 闇の侵食ダーク・イローション でガードしてくれた。

ボクは、それをしっかりと見据えて言う。

「つまり、こういうこと！来い、『月弓』ゲツキユウ！！」

そして、魔力がボクの手集中して一つの形を作る。

それは、銀色に輝く綺麗な弓だった。ただし、矢は無い。

「そんなもので俺は倒せない！」

「・・・ボクさ、魔力のコントロールは得意なんだけど収束が全然ダメなんだ」



「そんなもの、銃を見た時点でわかっている!!」

「で、実はこの魔法は刀とかによくしてたんだ」

「何をワケのわからんことを!」

「今回、ボクはこれにたった一つの魔術構成を組み込んだ」

プログラム

そして、ボクは弓の弦に矢を番えるように構える。

「ボクがここに注ぎ込む魔力をとにかく収束するように!!」

ボクはそこで思いつき魔力をつぎ込み始めた。

魔力は見る見るうちに収束し、光り輝く一本の矢を形成する。

そして、ボクは収束を弓に任せ、とにかく矢の形になるように魔力を整えていく。

ここでミスれば全部おじやんだ。

この弓と言う武器、そして魔法の特性上まっすぐに飛んでいかな

い。  
「な!?それは魔弓か!?そんな古代の魔法を!!」

「・・・なにそれ?」

「ああ。魔弓は魔力を矢のようにして放つ武器だ。だが、これには膨大な魔力、そしてコントロールが必要なため廃れていった」

わああ。

じゃ、またボクはやつちまったわけだ。

「……ま、いい感じに収束したし……穿て!!」

ボクは、弦から指を離す。

すると、弓から光り輝く矢が高速で飛び出し、相手の氷の魔法を吹き飛ばして突き進む。

そして、相手に着弾。

一瞬光ったかと思うと相手がぐらりと揺れ、ばたんと前のめりに倒れる。

「おい、大丈夫なのか？」

「……大丈夫、魔力にダメージが行ってるだけだから……都合よくいつもの具現化マテリアライズと同じ効果をやってくれたみたいだね……たぶん、この魔法自体がそういう効果の魔法だからかな？」

「ま、何はともあれオレ達の勝ちだ」

シーンと静まりかえった会場にリュウの声が響いた。

11話・CONVERGENCE（後書き）

作 「とう言うわけで『収束』をお送りしました」

空 「いやあ、やっとできたよ。あれ限定だけど」

作 「まあ、自分は結構神話とかそれなりに好きだし、いつかは出そうと思ってた」

空 「でも、アルテミスってホントに神器的なモノが『弓』なの？」

作 「いや、それはさすがにわからなくて……。ぶっちゃけ、たぶん」

空 「……いいの？」

作 「……許して」

空 「まあ、神様が持つのでよく知ってるのが北欧神話だしね」

作 「偏った知識でゴメン。だが、反省はしていない!!」

空 「それで馬鹿なんだ」

作 「次回予告じゃああああああああ!!」

空 「……またか」

作 「次回、ちよこつとシリアスに突入！」

空 「へ〜。そうなんだ」

作 「何かノリで進めてたらこうなった」

空 「シリアスってノリで造るものなの!?初めて聞いたよ!?!」

作 「自分の才能が恐ろしい!」

空 「……ある意味でスゴイ才能だよね」

作 「つーワケでがんばれ、主人公」

空 「……またボクか!?!」

作 「次回もヨロ!!そしてダツシュ!!」

空 「逃げるなあああああああ!!」

## 12話・SEPARATION

Siderika

「やった〜！！ソラが勝ったよ〜！！」

「・・・その前にソラさんの使った魔法に突っ込むですう」

「そうですね。・・・あの人はまた古代の魔法を復活させて・・・

」

「でも、ソラ君ならありえないよ〜」

「・・・え？あれってそんなにすごいことなの？」

「真言ってあんなものじゃないの？」

「・・・うん。ソラならアレぐらい普通。

むしろアレぐらいできなかつたらソラじゃない。

「酷い言われようだね」

「ソラだ！お帰り！」

アタシはソラに抱きつく。

いつものように腕を思い切り抱きしめるようにして。

「・・・でも、つい最近効果が薄れていたんだよね。  
何か新しい方法を考えなくては！」

「おい、オレには勞いの言葉の一つも無いのか？」

「リュウ？がんばったんじゃない？」

「……えらく適当だな」

「まあ、リカちゃんだししょうがないよ。リュウ君お疲れ」

「おう」

「よし、じゃあみんな。行くよ」

いきなりソラがそんなことを言い出す。

でも、まだ時間はあるけど、もう一試合あるんだよ？

「「「どこと？」「」」

「もちろん、相手のチーム『セブテム・ベッカータ』の七つの罪のどこと」

「「「？」「」」

何がしたいの？

ソラのことなら知らないことは無いと思ってたアタシでもわからなかった。

s.i.d.e 空志

「ちわ〜！」

「お前ももう少しデリカシーは無いのか〜！」

「あんたは何で試合が終わった途端に大声に戻ってるの!！」

「これが俺の素だ!！」

「いやいやいや!素って!いい加減にしろ!」「のわっ!何するのさ」

「お前等うつさいんだよ!！」

・・・なんだろう、ついつい相手に乗せられた。

「ふっふっふ、貴女はあの子の!この僕に会いに来てくれたのですね!！」

「・・・ソラ・・・」

「ゴメン。ガマンして」

「それに、貴女も美しい!!是非ともお茶を「ルクス!!」じゅ、じゅりあ!?これは・・・その・・・いや!?違うんだよ!?だから、鞭はやめてええええええええええ!!??」

後でSMプレイが行われている気がするけど気にしない。

そして絶対に後は振り向かない。

それがジャステイス。

「何だよにーちゃん。リート達はさっさと祭りに行きたいんだよ。大会もリーダーが『腕試しをしようではないか』とか言って無理矢理来たんだからさ」

「んだよ。俺達を笑いに来たのか？ああん!？」

「その屋台の焼きそばは美味だった」

「ホント？でも、こっちの屋台のたこ焼きもおいしかったよ」

「・・・ZZZ」

一部フリーダムだけど気にしない。

ボクはリート・・・君なのか？ちゃんなのか？

まあいいや。リートに向かうと言う。

「知りたいことがあるんです。知っていたら教えてください。平地冬香、またの名を『魔氷狼<sup>フェンリル</sup>』のことを」

その言葉に反応したのは二人、以外にも剛とディアさんだった。

剛はともかく、立ったまま寝てたディアさんが起きるとは・・・。

「何だ？二人は知ってるのか？」

「・・・まあな。何で知りたい？」

「・・・」

剛がボクに尋ね、ディアさんは起きているけど無言を貫く。

「・・・仲間だから」

「はあ？バカも休み休み言えあいつは『災禍の焰』のエースみたいなもんだぞ？お前等みたいな弱小冒険ギルドが仲間なわけねえだ

る

「そっちがどういおうと、冬香がなんていおうとボク等は仲間だ。一緒にバカやって、来た仲間だ」

「・・・ならば、それは『魔氷狼<sup>フェンリル</sup>』では無いな。ヤツは冷酷なヤツだ。そんなバカをするようなやつじゃない」

今まで沈黙を保ってきたディアさんがボクに言う。

そのことに少し意外だったのかヴァルスがほんの少し驚きの表情を見せる。

「・・・違う。冬香は確かに一時期アタシを殺そうとした」

「リカ！」

リカが自分の正体をバラすようなことを言い始め、ボクは慌ててリカに何も言うなと目で伝える。

でも、向こうはいきなり殺そうとしたなんて単語を聞いて息をのんでいた。

後のSMプレイの音も聞こえなくなった。

「だってー!!」

「とにかく、だ。こっちは少しでも、些細なことでも情報が欲しい」

「・・・何故、この娘を殺そうとした『魔氷狼<sup>フェンリル</sup>』を？」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」



ボク等はその質問に全員が口をつぐんだ。

だって、ボク等は表向きは冒険ギルドに所属する『夜明け（サンライズ）』だ。でもその本当の姿は『闇夜の奇術師団』。人間でありながら魔物の側につく、薄汚れた人間と言っ認識の人間と魔物のお尋ね者だ。

「・・・ソラ、ゴメンね」

「リカ？何を・・・ッ!？」

「「「!？」」「」」

そこにいた全員が驚いた。

リカはボクの首に手を回して抱きついたかと思うと、吸血した。

「お、おい!!そんなことは人のいないところで、きちんと節度をもって・・・!!!」

「リーダー!!このお姉ちゃん、このにーちゃんの首に噛み付いてる!!!!」

「な!?!・・・お前、ヴァンパイア吸血鬼か!？」

ボクは力づくでリカを引っぺがす。

リカの犬歯が皮膚を少しだけ切り裂いてボクの首から血が出てくる。

「違う!!これは・・・少しふざけただけで!!!!」

「ふざけただけで君は首に怪我をしたんだよ？」

「……ソラ。もう無理だ」

「っ……リカ！なんてことをしてくれたんだ！！」

「だって、だって……」

ボクは高速で詠唱。

マテリアライズ具現化、ツキヨ月夜。

バージンは刀。『ゲッセン月閃』を呼び出す。

そして、ずっと目にはめていたカラコンを外す。

「……状況が変わった。ボク等は『闇夜の奇術師団』だ」

その言葉に相手は反応し、驚愕する。

ま、そうだろう。

巷で有名な人間に仇なす人間が自分達とそんなに変わらない人間  
だったんだから。

「……これは具現化。マテリアライズこの魔法は相手の魔力を直接斬ることができる」

「そうか！！だからあの時、内側から斬られたような痛みが！！」

「そういうこと。でも、威力を調整すれば簡単に拷問できる。防  
御も不可。逃げようとしても無駄。逃げられると思うな」

「……」

「ソラ！」

「黙ってる!!!」

「ッ!？」

ボクはリカに強く言い放つ。

たぶん、普段からボクはリカを甘やかしまくってるからリカはど  
うしていいか混乱してるだろう。

まあ、たぶん嫌われる。

別にそれならそれでいい。ボク以外の人間にそろそろなれてもら  
わないといけないし。

泥を被るなら………ボクだけで十分だ。

リュウもそれを知ってか何も言わない。

他のメンバーも一部は気づいてるだろうけどボクの気迫に何も言  
ってこない。

「……ここで洗いざらい吐いて日常に戻るか、死ぬより辛い目  
に遭って廃人になるか。……どっちがいい？ボク自身としては後  
者が安心できるね」

ボクは刀の切っ先を向けて脅す。

そして……。

「下手な芝居はやめろ!」

「……あなたはうるさい」

「……ソラさんと言いましたか？」

ジュリアさんがボクに聞く。  
ボクはうなづいておく。

「……やめましょう。そんな事。それに……貴方は嘘つのが下手ですよ」

「ボクは本気だ。なんなら……キミが最初の被害者にもなる？」

「……つぶ。なるほど。ジュリアの言つとおりだ。君は嘘がへたくそだ」

ボクは無言で空いた手で銃口をルクスに向ける。  
だが、ルクスは平然としている。

「……どうした？ボクが引き金を引けば……ただではすまない」

「そうだね。君の魔法はよくわからないが、あの時、壁をぶち抜いた魔法をするときのような紋様が銃に浮かんでる。僕が受けたらひとたまりも無いだろうね」

「でも、貴方が本当に悪人なら、『被害者』なんていいません」

「そんなの、言葉のあやだ」

「いいえ。私は『嫉妬』を司るジュリア・レヴィアーナです。私は『嫉妬』してますから。ホントに、私の大好きな人にもこれくらい……私を大切にして欲しいと……」

「は、ははははは……。な、何を言うんだい、ジュリア？ボクはこんなにも君を愛しているじゃないか！」

腕を広げてオーバーアクションをとり、そのまま抱きつこうとする。

そこをジュリアさんに一撃で静められた。

「それに、『魔氷狼<sup>フェンリル</sup>』……いえ、冬香さんのために私達に接触したのでしょうか？そして、リカさんのために自分が泥を被るつもりでこんなことを……違いますか？」

「……どっちにしろ、ボクは目的のためなら悪魔に魂を売って神を殺す」

「なら、どうぞ。私を切り刻みでも、蜂の巣にでもしてください。そういって、銃口を自分の額に、刀の刃を自分の首に持っていた。

……そして、ボクは迷わず引き金を引いた。

「……やはり、銃口をちゃんと額に向けたにも関わらずれますよ？」

「……やっぱ、避けたか」

「はい。貴方は目的のためならどんなことでもします。だから、平気で銃を撃つフリをするだろうと思いました。そして、致命傷にならないところを狙うだろうと」

「……なんって策士だよ」

「そちらの策士様に言っていただけるとは光栄です」

ジュリアさんはやわらかく微笑む。

・・・ボクの完敗か。

なら、次にとる方法は一つだけだ。

「・・・すみません。ボクの仲間は確かに吸血鬼ヴァンパイアだ。でも、大切な仲間なんだ。だから・・・このことは内緒にしてください！」

ボクは土下座した。

それしか思いつかなかった。

さっきのことでボクが向こうを本気で傷つける自信はないってわかってる。

なら、ボクが出せるカードは・・・プライドだけだ。

「なんなら、ボクをどっかに突き出してもいい。でも、少し待って。冬香を連れ戻してから・・・それならいい。でも、ボク以外の仲間はぐわあ!？」

いきなりものすごい力で肩をどつかれた。

「はっはっは!! いいぞ!! お前!! 気に入った!!・・・どうやら、バグニール等の出した内容とは違う点が多々あるようだ!!」

「・・・あゝあゝ・・・ぞうだなゝゝ・・・お前、いいやづだなゝゝ」

「あゝ・・・引かないであげて。ごーには何かごーゆるーのに涙もろいの」

「……ふん。それで、気になっとなんだが『闇夜の奇術師団』とは何だ？……サーカス団か？」

「……ディア君、つい最近有名な魔物と人間の極悪集団をやつだよ」

「……ふむ。……こいつらがか？何をたわけたことを」

「わかった！！俺達でよければ力になるう！！」

「……いいのか？お前達は魔物側の人間とその魔物のチームに手を貸そうとしてんだぞ？かく言うオレもドラゴンだ」

「なるほど！！だからアレほど強かったのか！！」

「……お前と会話しているとオレがアホに思えてくる」

「……おい、お前、ソラとかいったな。『フエンリル魔氷狼』は本当にお前のダチなんだな？」

ボクはその言葉にうなづく。

そして、剛は言う。

「俺が知ってるのは、やつは冷酷で非情。命令されれば敵に一切容赦しねえようなイヌっころだ」

「……私も同じように聞いている。だから、お前達言う……冬香はどんな人間だ？」

ボク等は隠す必要の無くなった事実を全て言う。  
四月に冬香に出会い、戦い、そして……ここであったこと。

「……別人としか思えないな」

「ああ。まだ、最後のほうがじっくりとくるもんだぜ」

「冬香と言う女はそんなに非情なのか!!??」

「……ああ。……そういや、噂であったな。『フェンリル魔氷狼』が小さな男のガキを連れていろいろと歩き回ってるって噂」

「……小さな男の子？」

「ああ。そんなときはそんな都市伝説みたいなもん信じられなかったが……」

「……お前達の話だと案外本当かも知れん」

「可愛いところがあるではないか!!」

「リーダーは黙れ!!」

「……スマン!!」

「他には？」

「……あまり思い浮かばない。だが、よく考えるとヤツは『災禍の焰』でも別に誰かとするんでる訳じゃねえな」



「……そうだな。……むしろ、距離をとっている」  
「……」

ダメだ。

これだけじゃわからない。

……決定的な何かが無い。

「いたあああああああ！！！！」

この空気をブチ破るようにして幼い少年の声が聞こえた。

そのほうを向くと、そこにはやっぱりと言うか……少年がいた。  
つて、この子は……。

「君は……朝……」

「おう！兄ちゃんすげえんだな！！真言とかはじめて見た！！」

「おい、ソラ？」

「あ、うん。今朝、たまたま早く起きたから宿の中庭で魔法の練習したんだ。その時に知り合った子で、名前は……」

そういえばボクはこの子の名前を知らない。

……あの時、あわただしく出て行ったからな。

「あ、僕は平地春樹つばはるです。家族は上に数法術を使う自慢の姉さんがいます！！」

……おい。

「この子今なんて言った？」

「……ゴメン、もう一回苗字言ってくれろっ。」

「はい？平地ですけど？」

「……君のお姉さんの名前は冬香だね」

「あれ？何で知ってるんですか？」

「」「」「」「」

「あれ？皆さん、どうしたんですか？」

「」「」「なんじゃそりゃ!?!」「」「」

「やっぱり、あそこのラーメンだよ」

「いやいやいや、うどんだね」

「二人とも甘いよ!こっちの蕎麦屋に決まってるじゃん」

「ごく一部はものすごくマイペース。

と言うかゴースティングマイウェイだった。

「はあ〜。姉さんの知り合いですか!?!知らなかったです!?!」

「うん、まあね」

冬香の弟の春樹君、通称ハル君はそうだった。

「・・・お姉さんってハル君から見てどんな人？」

「とても優しいです！病気の僕のためにいろいろなたこに連れて  
つてくれるんですよ！！」

「病気？」

「あ、はい。よくわからないんですけどたまに体がフラツとする  
程度なんですけど。どうも魔力的な疾患らしいです。でも、薬を姉  
さんのギルドの人が調合してくれてるんで大丈夫なんです！」

そこでハル君はびしっと親指を立てる。

「あ、そついえば言っちゃいけないんだけど・・・。すみません。  
内緒にしてくださいます？」

「あ、うん。大丈夫」

「おい、ソラ・・・まさか」

「うん。たぶんそうだ。今から解析する。・・・ハル君」

「はい？」

「このリュウってお兄さんから話を聞いて。たぶん、君のお姉さ

んの元気が無い原因がそれだ」

ボクはハル君の魔力を解析する。

「おい、何してんだ？」

「邪魔をしないで」

「？」

とにかく解析する。

でも、わからない。

・・・いや、ボクがわからない原因は・・・。

「ハル君？」

「はい？」

「薬って今持ってる？」

「はい。念のためにつて姉さんが」

そして、魔法薬をボクに見せる。

そして素早く解析。

「・・・やっぱりだ!!」

「・・・ソラ、さん？」

ハル君が不安げにボクを見る。

「……ゴメン、君に辛いことを言う。冬香は……君のせいで元気が無い」

「……え？」

ボクはハル君に全てを話した。  
冬香が仲間になるきっかけ、そして今回のこと。

「……そんな……なら、薬を飲まなければ!!」

「ダメだ。それを飲まないと今より大変なことになる。でも、それが冬香の……『魔氷狼<sup>フェンリル</sup>』の鎖になってる」

「……マジかよ」

「……何とかして助け出す方法はないのでしょうか？」

「わからない。……シュウがいれば何とかなっただけど……」

「ダメです。シュウは師匠に半殺しにされてますから。師匠が許して大会の最終日になってるんです」

「……一応は薬を貰っておこう。……冬香には落としたとか言っておいて。それと、ボク等が出会ったことも内緒だ」

「は、はい！大丈夫です！薬は何回か落とすことがあるので、まかせます!!」

……それでいいのかな？

いや、ダメだろうけど緊急事態だ。

これからは冬香救出の作戦を考えなくちゃいけない。  
ボクはポケットの魔術符カードからピアスを取り出す。

「これをこっそりもってて。耳につけるのはダメ。冬香にバレる」

「わ、わかりました」

「じゃ、とりあえず今日は帰って。・・・大丈夫。絶対に助けるから」

「・・・姉さんを、お願いします」

そういうと、ハル君はかけていった。

・・・よし。

「・・・君達の仲間は・・・大変なことになったね」

「・・・クソがつ！」

「・・・メンドイ」

「どっぴするつもりで？」

・・・。

「ゴメン。ボクは少し考えたい事がある。だから、この後の試合はみんなだけでがんばって」

「おい。人数が・・・」

「おい！？やっと見つけたぞ！！俺をおいてくなよー！！」

タイミングよく田中がやってきた。

ボクは田中を見て言う。

「ボクの変わりは田中がする。それで問題ない。・・・じゃ」

ボクはそこから逃げように走り去った。

・・・さつきから一度も声を発さないリカのほつを見ずに。

12話・SEPARATION（後書き）

作 「というわけで、『離別』をお送りしました」

隆 「おい、何かこういうの多くないか？」

作 「いや、でもさ、適度に離さないとダメじゃん？たぶん」

隆 「・・・まあ、確かにベタベタの甘甘だからな」

作 「でしょ？ここでピリツとした刺激を」

隆 「だが、これから先微妙になるとも聞いたぞ？」

作 「・・・いや、がんばったんだよ？」

隆 「・・・もういい。さっさとやれ」

作 「おけ！次回！！コメディが入るぜ！」

隆 「おいコラ待て。何でここで入るんだ？」

作 「いや、これはコメディだから」

隆 「・・・魔法剣 斬黒 ！」

作 「ぶぎゃあああああああああ！？」

隆 「・・・次回も頼む」



13話・TWO PEOPLE TWO PEOPLE

sideリカ

「……………」

ソラが走り去って行った時、アタシはいつものように後を追いかけることができなかった。

何でかはわからない。

……………うん。わかってるけど、認めると……………。怖かった。ただ、拒絶されるのが。

「……………いいのかい？」

向こうのチームのキザ男、ルクスとか言うのが声をかけてくる。

「……………だつて……………」

「……………ジュリア、君は向こうを頼む」

「ルクス……………手を出さないでよ」

そういつとジュリアがどこかに行った。

それに触発されるみたいにみんなが歩いていった。

……………鈴音はゴイングマイウェイだった。

「……………」

「……………」

アタシ達の周りはただ、沈黙で支配されていただけだった。

side 空志

「・・・静かなトコがここしかないとか・・・はあ」

ボクは何故か浜辺にいた。

波の打ち寄せる音しか聞こえない。

・・・ホントに静かだ。

「・・・みー」

「うん？大丈夫大丈夫・・・まあ、違和感はあるけど」

「こんなところで黄昏てどうしました？」

ボクは声のした方向を向くと、そこにはジュリアさんがいた。

「・・・一人にしてくださいって言ったのに」

「そうなんですか？てつきりフリだと」

「フリ？」

「はい。玉手箱的な」

・・・絶対にあけてはいけませんとかか。  
でも、あけたくなるのが人の心理。

「で、いいんですか？」

その質問に何がとは聞かない。  
・・・わかりきってるから。

「・・・さあ？」

「無責任ですね」

「・・・まあ、ボクなりに考えはあります」

「どんな？」

「・・・」

ボクは言ってもいいものかどうかと悩んで、手を首に当てた。  
その時、ぬるっとした感触が手に伝わる。  
手を見てみるとそこには血がべったりとついていた。

「・・・そうか、無理矢理引き剥がしたときに・・・」

「・・・真っ赤ですね」

「・・・まあ、そうですね」

ボクは海辺に行くと、手を海水で洗った。  
そして、元の場所に座る。

「・・・治さないんですか？」

「・・・リカを傷つけた罰です」

「ルクスにもそれぐらい反省して欲しいです。嫉妬します」

ジュリアさんがむっとした顔になる。  
何故か可愛らしく見える。

「では本題です。考え、とは？」

「……リカって、実は人が怖いんです」

「そうなんですか？でも、貴方にはそうでもないようですが？」

「むしろべったりでしょ？でも、怖いんです。人間と友達になるうとして、バレて、裏切られて、その繰り返し。そして、ボク等と出会った」

「……そうなんですか？」

「まあ……。で、リカはボクからなら吸血を行えます。でも、他の子では無理。吸血しようとするかどうかどうしても相手に痛みを与えちゃうみたいで」

「……中々にシユールヴァンパイアな吸血鬼ですね」

若干呆れた顔でジュリアさんが言う。

でも、ボクもそう思う。

「……でも、それじゃダメでしょ。……ボクは、ずっとリカのそばにいられるわけじゃないし」

「……確かにそうですね。……でも、少なくとも、今のあの子は貴方を必要としていますよ?」

……そんなこと、ボクだってわかってる。

今のリカは人間恐怖症でボク以外の人間には心を開けない。

……いや、ボクにだって開いてるのかわからない。

でも、吸血することができるのがボクだけ。それは変わりようの無い事実。

「……貴方は、肝心なところがわかってないです」

「肝心なところ?」

「はい。……でも、それは人に言ってもらわんじゃ意味が無いです。それに、リカさんがかわいそうです」

かわいそう?

リカが?

……肝心なところ?

「……できるだけ早く気づいてあげてください。……失ってからでは遅いですよ」

そういつと、ジュリアさんは行ってしまった。

……。

「……ぶつちやけ、ボクを嫌って、それで他の人に無理矢理にでも慣れてもらえばいいと思ったんだけどな……」

「……」

ボクの間いかけに相棒である白い子猫は何も答えてくれなかった。

s i d e ルクス

「いいのかい？」

彼女、リカと呼ばれる少女は何も答えなかった。

たぶん、あのソラという少年に心から、それも絶対の信頼や好意を抱いてた相手になりにキツイ物言いをされたからね。

あの少年の性格から考えて普段はお人よしで誰にでも優しい性格をしているんだろうと思う。

だから、まだ、出会って日が浅い少年のこういう態度を見たことが無かった分、ショックが大きかったのだろう。

だが、この子は傍目に見てもあの少年に依存しすぎてるようにも思う。

……まあ、自分も人のことをいえたものではないけどね。

「……当ててみようか？君は、あのソラという子に拒絶されるのが怖いんだろう？」

「……」

何も答えないけど、その表情が全てを語っていた。  
ものすごく、悲痛な表情かおだった。

「だが、いいのかい？君はあの少年が欲しいんだろう？自分の全てを捨てても。例え、それが全世界の人を敵に回そうとも」

「……わかんないの」

やっと言葉を発してくれた。

「わからないとは？」

「……アタシ、ソラに助けられたの」

その後のことはこの少女側から見た、自分が殺されそうになったときの詳しい話だった。

あの時、僕達はこの少女が『フェンリル魔氷狼』、つまりは冬香という少女に命を狙われたとしか聞いてない。

「……で、アタシは……ソラが好きなんだな〜って思った」

「……そうか。で、君はどうしたい？」

僕がそう聞くと、彼女は今にも泣き出してしまいそんな表情になっってしまった。

だが、内心の動揺を押し隠してじつと耳を傾ける。

「……わかんない。何をしたいのか。……何をすればいいのか。……わかんない。……ねえ、アタシはどうすればいいの？」

僕にすがりつくような目を向けてくる。

まるで世界から捨てられてでもいるかのようだ。

でも、僕に言えることは一つだけだ

「……君がやりたいことをすればいい」

「え？」

「僕が『別れる』と言えば別れるのかい？」

「それは……」

「そんな事は、他人に言われてやることじゃない。……とだけ  
言っておこう」

僕がそついいきると、向こうからジュリアがやってきた。  
……ちよつどいい。

「じゃ、僕はこれで」

「あ……」

彼女は何か聞いたがっていたがあえて無視した。

「……いいの？」

「ああ。それを決めるのは僕じゃない。……そうだろ？」

「……まるで、あのリカちゃんって、昔の貴方みたい」

「それなら、向こうの彼は君だ」

「……かもね」

『色欲』の僕と『嫉妬』のジュリア。

狙ったとしか思えないような組み合わせ。  
だが、そうなってしまった。



「でも、何故か彼らなら大丈夫だと思うよ」

「……いつもそんな根拠の無いことばっか言ってる……」

「失敬な。根拠はある。……僕達に似てるって事さ」

side 隆介

「……リカさん達、大丈夫ですか？」

「……さあな。……ソラのヤツはまた、自分を勘定から外して突っ走りやがって」

「ソラさんも、リカさんのためだからって……」

「……でもわたしよくわかんなかったんだよね」

「それは……あれだけ宇佐野さん達と屋台の話をしてたら、ね？」

「……？さっきから何言ってるんだ？」

「田中っちはメンドイからいって」

「さり気にひどくねえか!？」

「……だが、むしゃくしゃする。」

「……次の試合でぶっ飛ばすか。」

『さて、ではでは次の試合！！まずは……期待のルーキー、  
『夜明け（サンライズ）』！！そして、対するは……今大会初出  
場で最小のチーム！！』マスク・ド・デモン』！！』

オレ達はその言葉にフィールドに出る。

……次はどんなヤツが相手……。

「ふはははは！！！！わしが相手じゃ！！！！」

「……何で俺が」

「掛かって来いや！！！！」

「……おい、人数が少なくねえか？」

『あゝ……何故か大会運営側から特例でOKでした』

相手は三人だった。

一人は龍の仮面をつけた爺さん。

もう一人は変な仮面をつけた青年。

最後はオレ達と同じぐらいの年の女で、魚を模した仮面をつけていた。

「ね〜ね〜、何でりゅ〜それ以上は言うな。オレ達が知り合いだと思われる」何で〜？ダメなの〜？」

もちろんだ。

主に世間的にだ。

あんな変態仮面一座と知り合いたとか思われたくない。

「でも、どうするの?」

「だよ〜。間違いなく相手は『災禍の焔』を超える最強のメンバーだよ」

「・・・最悪だ。俺の出番が」

・・・よし、しょうがないがやるしかない。

「オレに考えがある。オレに全て賭ける」

「え、でも・・・」

「大丈夫なんですか?」

「そういうのは三谷っちが担当だよ〜?」

「すごい!リュウ君ってソラ君みたいにできるの!??」

「馬鹿か?オレにはあそこまで割り切る自身がねえ」

「なら、どうすんだよ?」

「相手は魔王ですう!!私達は冬香さんのためにも勝ち進まない  
とダメですう!!」

「だから、こうすんだよ・・・おい!!司会!!」

『はい?なんでしよう?』

オレは呼吸を整え、大きく息を吸う。  
そして言い放つ。

「あの三人はオレ一人で十分だ。一試合のみで決着をつける!!」

「「「!?!?!」」」

「ふん!小童が言うようになったの!!」

「君がこの私に勝とうなんぞ百年早いっ!!」

「・・・何でもいいが帰してくれ」

『ああ・・・相手もいいようなので許可します。ですが、そんな大見得きつて三秒とかで終わった場合は出場停止でと運営から来  
てます』

「上等だ」

オレはそういうとフィールドに歩いていく。  
後のやつ等がかなりうるせえが問題は無い。  
速攻でカタをつける。

「・・・おい、ジジ」わしは『ますく・・・どどらじん』じゃ!!」  
・・・クソ仮面。「じゃから」クソ仮面。「・・・」オレ達にはど  
うしても優勝しなくちゃいけねえ理由が一つできちまった」

「依頼なら問題ないぞ?」

「・・・冬香のことだ」





「お、マジか？やりに」

「……お嬢様、帰りますぞ」

「ちよ、ちよ〜とだけ待とう！私達には口っという便利で平和的な器官が……」

「そ、そうじゃぞ！？じゃ、じゃから落ち着け！」

「智也さん。貴方はどちらの味方かしら？」

智也は仮面を外し、手をすつとジジイたちに向ける。  
……これでジ・エンドだな。

「わしはまだ負けんぞ！！」

「わ、私だつて！！」

「「反省しなさい！！」」

そこから先は……。

まあ、悲しい事件だったとだけ言っておこう。

『ああ……『マスク・ド・デモン』が自滅しました』

ま、打倒だろう。

会場が何故かものすごく静かなのは突っ込まないでおこう。

「おし、勝ったぞ」

「勝ち方がえげつないね」

「褒めんな照れるだろ」

「……リュウ君は照れると刃物を突きつけるの!？」

「……まあ、俺もえげつぎやあああああああ!?!?!?!」

田中は何となくむかついたからぶっ飛ばした。

まあ、大丈夫だろう。

「……でも、間君のおかげで問題の一つは解決したよね!！」

「ああ。そうだな」

問題の一つ、はな。

何故か急に悪くなった天候はまだまだもとに戻る気配が無かった。



13話・TWO PEOPLE TWO PEOPLE（後書き）

作 「とう言うわけで『二人と二人』をお送りしました！」

鈴 「何かいつの間にか大変なことになってる!？」

作 「そーいえば君はライニーと食べ物の話で盛り上がったから

ね」

鈴 「むう〜何だかおいてけぼりだよ」

作 「まあまあ、君は真言ができるようになったからいいじゃない

か」

鈴 「でも」

作 「あんなところに肉まんがッ!？」

鈴 「加速そーち!!」

作 「・・・ガチで消えたよ。ま、次回予告」

鈴 「なかったよ」

作 「・・・二人はどうなる?でも、物語はどんどん進んでいく!

!」

鈴 「進まない物語ってあるの?」

作 「・・・あんなところにもまんがッ!」

鈴 「スズちゃんダーツシュ!!」

作 「そー言うわけで次回もよろしく」

鈴 「なかったよ」

作 「何で食べ物のときはそんな超人的パワーが出るの!？」

14話・INVASION OF THE STAR

side 隆介

あの後、ソラが帰ってきたのは夜遅く、オレ達が寝静まるような時間だった。

その時、オレはずっと起きていて、ソラがそのことに気づくと少しの驚きと、気まずさの混じった表情だった。

「……まあ、オレは何も言わんがな。……リカが心配してたぞ」

「……そっか」

「いいのか？」

「……たぶん。……後々、リカのためになると思うし」

ソラは寝巻きに使っているジャージに着替えながらオレに言った。オレに顔を向けずに。

「……オレはもう言ったからな。……あの時、少しはオレ達を頼れってな。だが、あの時にお前がやって無きゃオレがやってたのも事実だ」

「……だろうね。リュウはなんだかんだで優しいからね」

「お前ほどじゃねえ」

その言葉を境に宿の室内に静寂が訪れる。

言う必要が無いからな。これでも三年の間、ずっとこいつを見て、ソラもオレを見てきた。たぶん、わかるだろう。

「・・・なあ、リュウ」

「んだよ」

「・・・ボクはさ、甘やかしすぎたのかな？」

「さあな。・・・だが、これだけは言える。お前がいなきゃ、リカはずっと人間を信じられなかったろうし、笑顔も見せなかった。・・・お前がしたいことをすればいい。わざと嫌われて、それで無理矢理にでも他人と関わらせようとしてんだからな」

「やっぱ、リュウはお見通しなワケだ」

当たり前だろ。

ソラはこうした。自分が最初にまん前に出る。そしてお前は相手を脅す役を買って出て、リカがそれを止めることを計算に入れた上での行動だ。そこで、いつもの平和ボケした性格のお前がリカにきつい言葉を浴びせれば、普段からの行動を考えれば自分を嫌うだろうと考えた。そうすれば、例え脅しが通用しなくてもリカを自分からある程度引き離すことができるかと踏んで。

だが、こいつは一つだけミスをした。

いや、この考えではむしろ効果的過ぎた。リカが、この馬鹿ソラを好きだっただけを・・・。

確かに、リカは多少どころかなり強引なところがある。

ソラを想うあまり、かなり大胆な行動に出る。

それが、自分の人間嫌いに拍車をかけているとも知らず。

ひよっとすると、あいつもわかっているのかもしれない。

「だがな、あいつは怖いだけかもしれないぞ？」

「……また、裏切られないか、かな？」

オレはうなづく。

あいつは何回も友達になろうとしては正体がバレて殺されかける  
っつー人生を送っている。

そこで、初めてできた本当の仲間を、『好きな人』っつー大切な  
ヤツを絶対になくしたくないからあんな過剰なまでにべたつくのか  
もしれない。

「でも、それでボク等以外の人間と関わらないんじゃないんだ」

「ああ。確かにな」

オレもそう思う。

それじゃ意味が無い。

「だが、あいつも冬香を想っての行動だ。少なくとも、四月のあ  
いつはお前以外の人間が傷つこうがなんとも思わなかったとオレは  
思う。そこは進歩してると思うぞ？」

「……そうだね」

「ああ」

「……いろいろゴメンね。面倒ごと増やしてさ」

「まあ、しょうがねえだろお前はトラブルメーカーだしな」

「……リュウにだけは言われたくない」

ソラはそういうと部屋に備え付けのシャワーを浴びに行った。

……明日はBブロックの決勝だ。オレもそろそろ寝よう。

sideリカ

体がだるい。吸血鬼ヴァンパイアだから、そんなコトあるはずが無いのに……

……結局、ソラはアタシが起きているときには戻ってこなかった。

正直、アタシは吸血鬼ヴァンパイア。夜通し起きてても問題は無かったけど、みんなに無理矢理寝かせつけられた。

……いつも、すぐそばで感じるソラの気配が感じ取れない。

「……あの時みたい」

ソラが、暴走しちゃった事件。

あの時も、アタシはソラがまるでもう手の届かないところに行っちゃいそうで怖かった。また、無くしちゃうんじゃないかって思った。

「リカちゃん、大丈夫？」

「え？……うん」

鈴音がアタシに声をかけてきた。

返事をしてもどうしても頼りないものになっちゃう。

「……そっか。……さっきね、男子の部屋からソラ君が出てきたよ」

「っ……うん……」

「……でも、ソラ君も酷いよね。こんな美少女になっちゃうんだもん」

鈴音はぷうくと膨れて愚痴る。

アタシを元気付けてくれようとする。

……いつまでもこれじゃいけない。

「あ、朝ごはんだからみんなで食べよ」

「……うん」

side 隆介

「おい！こつちだ！！」

オレは坂ざ……。

「リュウ君！！」

「……スズ様、こちらでございます」

……こいつ、人の頭の中まで読みやがって。

オレが言い方を変えた途端に何故か胸を張って得意げになりつつ席についた。

「で、どつだ」

「・・・やっぱ元気ないね」

「・・・そうか」

ここにはオレとスズだけ。

他の男子はテーブルは近いが別のところだ。

ここはレストラン形式の食堂だからな。店員に頼んだ料理を持ってきてもらう。

「おっは」

「おはよ」

「おはようですう！」

「おはよう！」

最後に言ったのがリカなんだが・・・顔が引きつってる。無理してるのがバレバレだ。

「あ！おはようございます！！アンジェリカさん！！今日もお美しいですね！！」

「あ、うん・・・そう・・・」

田中が馬鹿みたいな挨拶をするがリカは適当に流す。

「・・・いつもならソラの影に隠れて」・・・『で終わるのにな。』

田中は無視されるより辛いらしい。

田中も疑問に思ったのかソラに聞く。

「……おい、何か今日のアンジェリカさんおかしくないか？」

「何？田中はリカに罵られたい変態だったの？」

「バツ！？違いーよ！？」

「……ソラが適当に話を摩り替えやがった。  
それに乗る田中も馬鹿だ。」

「……大丈夫ですう？」

「……これじゃやばくないですか？」

双子の疑問も最もだ。  
だが……。

「やるしかねえんだよ」

オレは自分に言い聞かせるように言った。

### side 空志

結局、リカとは一言も話さなかった。

……まあ、ここで謝ったりしたら意味が無い。  
ボクは自分にそう言い聞かせて、前を向いた。

ここは既に闘技場の控え室。

今日は大会Bブロックの決勝戦。

ここで優勝すればAブロックの優勝チームと戦う。



たぶん、冬香のチームと。  
ボク等は何が何でも勝つ必要がある。

『さてさて、ついにきたぜ!!! Bブロック、決勝戦だ!!!』

その言葉で会場が沸く。

これまでとは違い、観客席は客でいっぱい。

あちこちから野次とかが聞こえる。

『では、まずはチームの紹介だ!!! まずは・・・今大会、初出場  
そして、若いながらも圧倒的な力でここまで勝ち昇ってきたあああ  
あ・・・冒険者ギルド所属、サンライズ『夜明け』!!!』

その言葉に、会場が更に沸く。

・・・でも、ボク等はその場で特に緊張とかはさほど感じなかった。  
それより重要なことがあるし。

『さて、そして対するは・・・出ました!!! 今大会の優勝候補!

!やはり、ここでこいつらが立ちふさがる!!! 冒険者ギルド所属、  
トウヘルブ・コンストレイションズ  
『**十二星座**』!!!』

その言葉に更に会場が沸く。

たまにそんなやつらやつちまえとか言う野次が飛ぶ。

・・・よほど強いんだろう。

ボクはそう思って向こうを見る。

そして、その時だった。

「・・・!!!」

ボクは何かを感じた。

何を？と言われると返答に困る。  
でも、確かに感じた。

「どうした？」

「……いや、なんでもないよ」

『……出た目は五！！さて、では第一回戦の準備をどうぞ！！』  
司会の言葉と同時に会場が静まる。  
どんな編成で来るのか興味津々だ。

「おし、我らが参謀、誰が行く？」

「……ボクだけで」

そういった途端、周りが一瞬だけ静寂に包まれる。

「おい！三谷、お前正気か？」

「ソラ君？どうしたの？」

「三谷君、冷静に考えて」

みんなはボクが昨日のことを引きずってるんだと思ってるんだろ  
う。

それがわかったのか、リュウはボクに鋭い視線を向けただけだ。

「……お前の考えがあつてのこと、だよな？」

「もちろん。ボクを誰だと思ってるの？」

「・・・わーったよ」

「間うち！？いいの！？」

「そうですね！？」

「相手は優勝候補ですう！！」

「ソラ君もリュウ君もどうしたの〜！？」

「・・・ソラ」

「だがな、一つだけ言っとくぞ」

リュウはフィールドに歩いていこうとしたボクに後から声をかけた。

「・・・なんだろう？」

「無茶はすんな。今のお前は・・・無茶をするときの顔だ」

「・・・無茶をする場面が無かったら無茶をしようが無いよ」

ボクはそう言って田中の足元に昼寝中のレオを置いていく。そして、ポケットからこっそりとスプレー缶をみんなの死角に置く。

「・・・よし、幸いにも向こうはまだ決まっていなみたいだ。」

『どうやら』<sup>サンライズ</sup>『夜明け』のほうは決まったよう・・・ん？どうした

？三谷選手が相手チームのほうに歩いていったぞ？』

ボクは、司会の人が言うとおり相手チームのベンチに向かっていった。

確認をするためと……。

「な、何だあんたは！？こっちは作戦を考えてるところだ！！」

背中に大きな弓を担いだ人がボクに文句を言うけどここでは無視しておく。

そして、そこにいる人を見渡す。

「……やっぱり、貴女だったんですね。占い師さん」

「……貴方は……あのときの」

「あり？ティーナちゃんの知り合い？」

「は、はい。この前、占いを」

「……なんだ？占いの結果が気に入らないのか？そーゆーのはお断りしてる」

「単刀直入に言います。その占い師さん、ボクと戦ってください」

「……！？」

ボクがそういうと、周りの人達が驚愕の表情を浮かべる。

「ボクの見立てではこの人が一番強い。それに、この力に対応で

きるのはボクぐらいしかいない」

「何を言っている！！誰がお前の言い分なんか！！」

ボクに大柄な男の人が食って掛かってくる。

ボクが言葉を続けようとすると、意外なところから声でさえぎられた。

「……いえ、彼の言うことはおそらく本当です」

「な、何を！！」

「でも、一つだけ言います。やるからには、全力でお願いします。ボクも、全力で行きます」

「おい！！今までまったく本気を出してないような言い分だな！！」

「……いえ、それもおそらくは本当です」

「……嘘だろ」

誰かがそんな風に言った。

でも、まさかとは思ったけど……。

「わかりました。私が行きます」

占い師さんは、それまで被っていたフードを脱ぐ。

下からは、少し幼さの残る顔の金髪で髪の長い少女が現れた。

『何があつたのでしょうか？今まで一度も参戦したことのない人が出ましたね』

ボクは司会の言葉を聞いて目の前の少女に尋ねる。

「……大きすぎる力？」

「……そう。あたり」

『ま、何はともあれ決まったようなので……試合、開始！！！』

試合の開始が宣言される。

「ボクは三谷空志。冒険者ギルド所属『サンライズ夜明け』の魔道具技師」

「私はティーナ・ライトテイカー。冒険者ギルド『トゥウヘルプ・コンストレイション十二星座』の魔法使いです。行きます！！」

その言葉と同時に魔法が放たれた。

s i d e r i c a

「何で？ソラが……」

「……確かにらしくねえ」

「ソラ君は勝つためにあんなことしないよね？」

「……何か考えがあるんでしょうか？」

・・・たぶん、そうだ。

あの人は・・・アタシとソラの占いをしてもらった人。  
あの時、ソラは何か感じたとか言ってた。  
たぶん、それが理由だ。

「でも、何で？」

「行きます！！」

占い師、ティーナが魔法をつむぐ。

・・・どうやら、自分の指にはめた指輪が武器みたい。

「スター・ライト  
星の輝き　！！」

「ライエン  
雷燕　！！」

両者の魔法が激突する。

でも、ライエン 雷燕　！？

「おい！？ソラ！！何でそれを使った！！」

「相手の魔法もおかしいですう！！あんな、中級の上位魔法を魔法名のみで発動させました！！」

「それに、あの魔法は見たことが無いです！！」

『おおお！？な、何だこの魔法！？両者共に上級レベルの魔法を詠唱無しで放ったあ！？』

ソラ、ダメだよ！

ソラまで……。

「おい！！やめろ！！その力は使つな！！」

「ティー！！ダメ！！」

向こうも必死だ。

たぶん、向こうも普段はこの力を隠してたんだろう。

「……そう、か」

「リカちゃん？」

ソラが感じた理由。

桁外れな力。

「……あの子、スリーシンボル三魔源素だ」

side空志

「やつぱりね！！」  
フウカシャリン風火車輪「！！」

「私もおかしいと思ってたんですよ！！」  
スターインパクト星の一撃「！！」

ボク等は互いに確認しあいながら戦う。

これしかないと思つたよ。

ボクの力にまるで共鳴するように感じる力。

そして、こっそりとマナで書いた文字を読めるところとかね！！

「まさか、マナを操作して『スリーシンボル三魔源素』って書くとは思いません



でした！」

だろうね！！

あれはボクの専売特許だ。

「改めて自己紹介しようか？」

「いいですね！！私は、スリーシンボル三魔源素で『星』を司るものです！！」

「・・・最強の魔法の力が、ボクは『月』の力を司るもので！！」

魔法銃から ライセンシクウホウ雷閃疾空砲 を放つ。

それを相手はいとも簡単に止めた。

「シルド魔法盾 ……なるほど、知を司る力ですね」

「そうだよ！！ ホムラドリ焰鳥 ……」

今度は意志を持った炎の鳥達がティーナに突撃していく。

向こうは魔法の壁を展開して簡単に受け止める。

・・・さすがは魔法の力最強なだけはある。

何故か解析できないけど、たぶん向こうは上級魔法を詠唱方式にもかわらず無詠唱で放ってくる人だ。

「つくづく、ボク等の属性はチートだね！！」

「まったくです！！」

ボク等は魔法の応酬を続ける。

そして、均衡していたと思っていた実力は突然に崩された。

向こうの魔法によって。

「ですが、それが貴方の本気なのですか！！！！」

「そうに決まってる！！  
ヤマタノオロチ 八岐雷大蛇　！！！」

ボクは瞬時に魔法陣を展開させ、八つの頭を持つ雷の大蛇を呼び出す。

大蛇はティーナに向かって八つの頭を駆使して噛み付こうとする。

「・・・これが、本気なんですか！！！」

その瞬間、ティーナの魔力に変化が起きた。  
でかいのが来る！！

「私達の力は、その程度ではありません。」

数多の星に願いを！！  
シューティング・スター・アサルト 流星の強襲　！！！」

向こうはついに短いながらも詠唱を始めた。

そして、上空に自分が押しつぶされると錯覚しそうなほどの魔力が収束していたのがわかった。

「新兵器の投入！！来い、ナイフ！」

ボクはポケットの魔術符カードから何本かのナイフを呼び出す。

そのナイフは刀身の幅がやたらと大きく、刀身には青いラインが引かれ、まるで回路のようになっている。

ボクはそれを自分の周囲の地面に突き刺し、魔法を起動する。

「月界　！！」

月界ゲツカイ のときに使う補助用魔術符サポートカードの改良版。  
あの遺跡の回路をヒントにより強固な月界ゲツカイ をはれるようにした。

結界が発動すると同時に相手の魔法も発動した。  
高密度の魔力の塊が雨のように降り注ぎ、結界に当たっては轟音を響かせる。

でも、どうにか持つみたいだ。  
相手の魔法が終了したと同時にボクは結界を解除した。

「・・・何故、先ほどから『月』の魔法を使わないのですか？」  
いきなりの向こうからの質問。

「どういうこと？ボクは最初から使ってるけど？」

「あれがですか？笑わせないでください。私達の魔法は、あんな小細工ココエを施した手品ではありません」

とてもはつきりと言われた。

ボクが作り出し、何度も窮地を救ってくれた魔法を。  
でも、何故か怒りはわいてこなかった。

「・・・もう一度聞きます。貴方は何故、本気で来ないのでですか？」

・・・うすうすは感じていた。

やっぱり、そうだったのだった。

だって、月の神霊であるルーミアさんは『月』の名前を持つ魔法

を発動していた。

でも、ボクが月の名前を持つ魔法は、防御系魔法と真言だけだ。しかも、四つだけ。月守ツキモリ、月界ツキカイ、月夜ツキヨ。まあ、例外として月詠ツキヨミ。

これがボクの全てだった。

「それに、先ほどからやってるのは何ですか？そのふぬけた攻撃は！..!」

「.....」

「.....わかりました。私達の魔法では、一般的な魔法とは基準が少し違うのは知っていますか？」

いきなり向こうがボクに何かを説明しだした。

ボクは疑問に思いながらもその言葉をじっと聞く。

「普通、魔法は上級、中級、下級の三つのランクがあり。更にその中で上位、中位、下位とランク付けされ、全部で九段階のレベルがあります」

そこで一旦言葉を切り、ボクに視線を向ける。

そこには、何故か悲しさが満ちているように思えた。

「ですが、私達は使う魔法がどれも強力なため、中級がデフォルトで出せます。これが私達にとっての下級魔法なんです」

「嘘!?!」

「真実です。そして、私達には上級より一つ上のランクである、

魔導マキを使えます。ちなみに、これは古代の魔法です」

魔導マキ？

てか、中級が下級？

それじゃ、ボクが今まで使ってたのって！！

「貴方が使う魔法、特に動物系のものは複雑な魔術プログラム構成ですがおそらくは中級の上位程度。つまり、私達の世界ワールドで貴方は下級魔法を使って倒そうとしているんですよ？」

マジかよ……。

これじゃ……勝てない。

「そして、これが魔導マキです。

私は願う！！

幾千の星を見つめる！！

私はこの世界で歌い、ともに生きよう！！

響け、星の唄……。

スター・ゲイザー  
星の観測者　！！」

膨大な魔力が渦巻く。とっさに 月詠ツクヨミ を使うけどやっぱり解析  
ができない。

ただ、これだけはわかる。今までの大会で使われてきた魔法なんか目じゃないものが来ることは。

ボクはさっきからの魔法のタイプを考え、上空からの攻撃を警戒する。

「……甘いです。これは、観測者です！！」

そして、魔力が地面から放出される。  
しまった！！

「……散りなさい」

その言葉で、足元の魔力が爆発。

大きな光と共にボクの体が紙切れの如く吹っ飛ばされた。

そして、地面に強打。肺の中の空気が強制的に口から吐き出された。

「があ！？」

「……手加減したとはいえ、まだ意識を保っていましたか」

「……ツハ。……ボクの知り合いに……天災だけど、腕のいい……服職人がいるんで……ね」

ボクは何とか体を起こし、片膝たちになる。

……これが限界か！

「ですが、何故そこまでするんですか？別に、私がやる必要は無かったです」

そう。

別に、この人と戦う理由はない。

でも、残念ながら、ワケはある。

「……ボクさ、一人の女の子に嫌われてでも何とかしなきゃいけないことがあったんだ」

「・・・」

相手は何も言わずにボクの言葉を聞く。

「でさ、たぶん嫌われた。・・・でも、悔しいんだ。何で、その子を傷つけてまでやったのかって。確かに必要なことだった。でも、もっとボクに力があればもっといい解決方法が・・・どこその勇者の爺さんよろしく、『みんなが笑顔になれる』ようにできたかもしれない。だから・・・ボクと同じ系統の力を持つ、貴女と負けてもいいから戦って、もっと、強くなりたいって思ったんだ!!」

ボクは自分の体に鞭打ってふらふらになりながらも立ち上がった。  
・・・まだ、いける。

ボクは、両手に銃を持つと、それを相手に、向けて構えた。

「だから、まだ、これだけで負けられない！」

その時、光があふれた。

14話・INVASION OF THE STAR（後書き）

作 「ついに来たよ！『星の襲来』！」  
ルーミア 「わらわはルーミアぢや」  
作 「ちーすつ！今回は専門家の方にお越し願いました」  
ル 「ついに来よったな」  
作 「イエス！『星』の子でたよ！」  
ル 「『星』は簡単に言えば最強の魔法を使える属性じゃ」  
作 「でも、それだと主人公も同じ？」  
ル 「いや、『月』は正直行って三魔源素スリーシンボルの中では一番弱い」  
作 「ぶっちゃけますねー」  
ル 「ただ、わかるだけじゃからな。まあ、魔力を知るからこそマ  
ナを操れるんぢやがな」  
作 「じゃ、『陽』は？」  
ル 「それは力の属性ぢや。詳しくはまた今度な」  
作 「へへ。わかったようなわからないような？」  
ル 「また今度教えてやる」  
作 「じゃ、ここで茶番は終わりにして次回予告！」  
ル 「・・・茶番？」  
作 「僕作者だし」  
ル 「・・・」  
作 「さて、ソラの武器が進化エボルト。ソラは勝てるのか？」  
ル 「いや、無理じゃる。第二段階では勝てん。それに、向こうは  
様子がおかしいぞ？」  
作 「それで勝てるようにするのが作者！」  
ル 「・・・駄作のような気がしてきたぞ」  
作 「まあ、次回もよろしく！」



## 15話・CONTROL

side 隆介

「あいつ、自棄になってやがる!!」

「ちょっと!? ソラ君はもうボロボロだよ!？」

「さすがに助けに行かないとまずいよ!？」

「そんなの、当たり前だろ!？」

「さっきからのあいつの戦いは変だ。」

「誰の目から見ても。」

「ですが、何で誰も気づかなかったんですか!？」

「確かにそうだな。何で、俺達の足元に変なもんが置いてあるのに誰も気づかなかったんだろうな？」

「……田中っち、自分が一番近くにいてそれは無いよ」

「……この、ふざけた絵がむかつくですう」

「シャンが言う絵つつーのはこれの事だろう。」

「いつの間にか、ソラがオレ達の足元においていきやがったヤツ。」

「それはスプレー缶のような形状で、『ログ製・イタズラ用トリモチ』とか書かれていた。」

「すぐそばにドワーフのおっさんがしてやったりな笑みを浮かべてるのがそこはかとなくむかつく。」

「あの魔道具馬鹿がああああああああ！！？？」

ソラに変なもん渡すなよ！？

しかもこれのどこがイタズラだ！？

魔法で相手の足に確実に当たって身動きを取れなくするとかドンだけ悪質なんだよ！？しかも時限式じゃねえか！？

レオなんかマジ泣きしてるぞ！？

オレ達がああだこうだ言ってるとき、変化が起きた。  
ソラから光があふれた。

「ついに相手が仕留めに掛かったか！？」

「ソラッ！！」

「ソラ君！？」

だが、光は一瞬で収まった。

そして、見た感じソラには何も無い。

・・・どういうことだ？

「・・・あれ、わたしと同じ？」

「あ？スズと同じ？」

「・・・王ホルト進化」

あれか！

何かソラが言ってたやつ。確か、オレ達の武器には進化のプロケ魔術構ラム成がかけてあって、時たま急激な変化を遂げる。それをソラやログ

のおっさんは進化エボルトとか呼んでいた。

「じゃあ、ソラがか!？」

「た、たぶん?」

オレ達三人の話についていけない残りのヤツには後で教えとこう。

「・・・ソラ」

だが、リカの表情はさえなかった。

・・・まあ、オレも心配だ。結局、無茶しやがった。

side 空志

いきなり光があふれ出した。それに驚いてボクは思わず目を見開いて視線を敵から銃に移してしまった。

でも、相手も驚いているのか固まったままだ。

「・・・進化エボルト、か」

ボクは光が収まると、自分の銃を確かめた。

片方、右手の『ナイト』は前の自動式拳銃のまま。剣もついている。  
る。

そして、大変化したのが左の『ナハト』。回転弾倉リウオルバー式に変化していた。

・・・いや、変化しすぎでしょ。何故か刃はついたまんまだし。

「・・・まあ、いい。こっちもやられっぱなしじゃ嫌だし・・・  
全力で行く!!」

魔法陣を、『ナイト』に展開した。  
そこに映し出されたのは紋様なんかほとんど無い魔法陣。

「 其は魔に属す法則！！ 」

「 ……いいでしょう。受けて立ちます 」

そういつと、向こうも構える。

そうしてくれれば、ボクも魔法のほうに集中できるからありがたい。

「 月夜 ツキヨ ！！ 」

今回、ボクは真言の魔法陣を銃に展開した。そして、銃からは光があふれる。

正直、どうなるかはわからない。

それに、これも所詮は小細工だ……。

「 でも、ボクに出せる全力はこれだけなんだ 」

ボクは銃を持った手を一振りして光を払う。

そこから現れたのは、弩 ボウガン だった。

ボク左手の『ナハト』を一旦仕舞って両手で構え、魔力を込める。  
ボウガン 弩の矢を収めるところに銀の光が集まり、矢の形になる。

そして、引き金を引いた。

放たれたのは、三条の光。

つまり、魔法弩の三点バースト。しかも、具現化 マテリアライズ と言う防御が限りなく不可能に近い魔法。

魔法の収束率によって変化するが、これは元からそういう魔法構成<sup>ラム</sup>だ。つまり、これを受ければほぼ間違いないで勝てる。

「……まだ、ダメです」

普通の相手なら。

ティーナはそういってどうやったのかはわからないけどボクの魔法の矢の三点バーストは防がれてしまった。

そこで、ボクはまた思い切り魔力を装填した。

そして引き金を引く。

それを何回も繰り返した。

「……何回しようと同じです」

「……ッ」

なら、もっと、魔力を！

そう思ったとき、弩<sup>ボウガン</sup>が内側から弾けるように壊れた。

「なっ!?!」

「……魔力の収束が甘いからですね」

ボクの全力のマナの装填に耐え切れなかった？

こんなコト、今までなかったのに……。

「……ダメだ。これじゃ、勝てない……できない……」

ボクの脳裏に一瞬だけフェイクの顔がよぎる。

凶悪な笑みを浮かべ、何故かボク等を付けねらう、自称魔王。

そして、冬香の顔。  
助けるって言った。

ハル君の顔。

姉さんを頼みますって言われた。

でも、自分がどうしようもなく無力に思えた。

・・・知らなかった。自分が、ここまで自分の力を使いこなせていなかったなんて。

「・・・もういいです。ハンデをあげます」

そういうと、向こうは掌を上に向けた。

そこに魔力やマナがものすごい勢いで収束されていく。

そして、ティーナの掌の上にはマナのみで構成された巨大な十メ

ートルほどの塊が出現した。

月詠ツクヨミ を使うまでもなく、可視可能なまでに凝縮された魔力塊  
だつてことがわかる。あれがボクに放たればただではすまない。

「・・・マナを使うのは大変ですね。自分の魔力じゃないからか  
全然言うことを聞いてくれません。・・・逆に、これを操れるであ  
るう貴方がどうしてこんなに弱いんですか!？」

まるで、ボクをなじるように言う。

・・・そんなこと、ボクが一番よく知ってる。

「これを貴方にぶつけます。貴方ならマナのコントロールを奪い、  
攻撃を無力化することができるようでしょう。ですが、それには貴方が  
本気を出せばの話です」

「・・・何を言って」

「貴方は！！無意識に力をセーブしてます！！理由は何ですか？化け物とも呼ばれましたか？あるいは、暴走でもしましたか？」

ボクは思わず暴走と言う言葉に反応する。  
相手はそれで全てを理解したみたいだった。

「・・・それが何ですか？たかが、暴走で！！私は、暴走した上、化け物と罵られ、故郷で孤立しました！！ですが、貴方のようにそこでふぬけたりなどしませんでした！！力の暴走が怖い？なら、モノにしなさい！！そして、貴方には仲間がいるんですよ！？あの、貴方を慕ってくれている少女が！他にもいるんでしょう！？私には、残念ながらもいませんでした！！暴走したとき、みんなは私を恐れ・・・この『トゥウェルヴ・コンストレイションズ十二星座』でやっと手に入れられたんです！！私は後で恵まれました。貴方は最初から恵まれていたのに！！」

そうか。

だから、さつきから怒っていたのか。

ボクが、同じ三魔源素スリーシンボルでありながら、力を恐れ。挫折したボクが許せなかったんだろう。

力と、立ち向かえず、ただ、リカとのケンカを理由に適当に逃げたボクを。

・・・力以前の問題だった。

いや、たぶんボクはどこかで知っていた。  
でも、認めたくなかっただけだ。

「でも、ボクには無理だ・・・」

「なら、一回、死んで考えなさい！！」

死んだら考えれないよ。

そんな軽口を叩こうとした。

それが最後のボクの抵抗になると思っ

て、魔力の塊が放たれ、ボクに向かってくる。

そして、ボクと魔力の塊の間に誰かが割って入ってきた。

「ダメー!!」

その人物は、自分の背丈ほどもある大鎌を振り下ろし、魔力の塊を押しとどめた。

「おい!!何で出てきた!!」

「だって、ソラが!!」

「おい!!この魔法を止める!!この子は関係ない!!」

「・・・貴方が止めればいいです」

何だよ!ボクは、目の前の人物を見た。  
リカだった。

半泣きになりつつ、ボクにまくし立てるように言った。

「だって・・・。アタシは吸血鬼ヴァンパイアだよ?ソラと、あのティーナって人の会話・・・全部聞こえちゃった」

「だから何!!」

「ゴメンね。アタシがソラしか見てないから・・・。だから、ソラはアタシのために・・・」



「わかったから！！でも、あれはボクが悪い！！だから、逃げて！！」

「でも！！アタシは・・・まだ、人間が怖い・・・今回も、ソラがどつか遠くに行っちゃうんじゃないかって思った・・・アタシ、いやっ・・・！！」

「・・・リカ！？」

突然、リカが膝をついた。

ヴァンパイア

吸血鬼の力をもつてしても無理だったらしい。

もう、リカは限界だ。

「もう、いいから！！早く逃げて！！」

「ソラ、お願いだから、自分も・・・自分のことも幸せになれるように作戦を立ててよ！！ソラは、それができるでしょ！！」

リカはそういうと、ボクに目をむけた。

決意の籠った目で。

「アタシ、絶対に、逃げない！！」

でも、リカの足がどんどん地面を滑っている。  
本当に限界なんだ。

向こうはただ、手を組んでこっちを見てるだけだ。  
いや、そこで口を開いた。

「・・・貴方は、それでいいんですか？」

「・・・そんなの・・・っ！」

「きゃあー!？」

ついに、リカが足を滑らせた。

ここまでよく持ったと思う。

こんなの、簡単に言えば世界の力をその細腕一本で支えようとしてるんだから。

そして、その世界の力がリカを押しつぶそうとする。

「そんなコト・・・させるかあああああああ!?!」

ボクはとつさにリカを抱きとめ、右掌を前に突き出す。

そして、自分でも無意識に、全力でマナをコントロールした。

ボクはその時に気がついた。相手の魔力が解析できると言うことに。

ボクは掌にどんどん魔力を収束させ、直径五センチほどにまで小さくした。

「そ、ら?」

「・・・どうよ。やってやったよ」

相手はあのタイミングでやるとは思ってなかったのか驚きの表情だ。

こっそりと展開してある防御魔法からもそれが伺える。

ボクは右手で銃の形を作ると、相手に照準を合わせる。

「でも、やっぱり、最後に一発くらいいいよね!?!」

ボクがバーンというとき、収束させたマナが高速で相手の右耳のあたりすれすれを通っていく。そして、壁に着弾した途端。会場を大地震が襲った。

ボクが狙ったところにはもはや修復不可能なんじゃないかと思うほどの大穴が穿たれていた。

「ボクの負け……です。……でも、ざま　」

そこで、ボクは地面に倒れた。

とつさに自分が後に倒れてリカを地面に叩きつけなかったことは褒めて欲しい。

「ソラー!!」

リカはボクから降りると、膝枕をしてとても心配そうに覗き込む。  
……はあ。

体が動かない。また、このパターンか。

「せつかく……。嫌われたに……。これじゃ意味、無いじゃん……」

「……ゴメンね。アタシ、ソラの優しさに甘えてて……」

「まあ、ぶつちやけ……。ボクも、甘やかしてたし……」

それはそれは激甘で。

近所の甘味屋が驚くぐらい甘く。

「アタシ、ちゃんとがんばるから……」

「・・・そっか」

「うん。でも、アタシにはまだ、ソラが必要な・・・」

「・・・そっか」

「・・・うん。だから、もう少しだけ・・・ほんの少しでいいから・・・甘やかさせて」

『一人にしないで』・・・。ボクには前の言葉とダブって聞こえた。

・・・そういえば、ボクはリカを一人にしないって約束したんだっけ。

そんなことを頭の中で思い出しつつリカを見た。

「リカの目つてさ、よく見ると、紅玉ルビィみたいに綺麗だよね」

「・・・ふえ？」

リカがものすごく赤くなった。

言葉の選択をミスったか。・・・ものすごく怒ってる。

「・・・リカ？」

「は、ひゃい!？」

「・・・例え、リカがボクを嫌ったって大丈夫だよ。絶対、見捨てない。それだけはいえる」

「・・・うん」

そこで、ボクは意識を手放した。

sideリカ

ソラが目を閉じた。

さっきまでのダメージが相当堪えたんだと思う。

「あ、あの〜」

そこで、さっきのティーナとか言う子がアタシとソラのすぐそばに来た。

どうしたんだろう？

「……ついさっき、気づいたのですが……その……ソラ君、でしたっけ？……そのこの目は何段階ですか？」

目？段階？

……そういえば、ルーミアがそういうのを言ってた気がする。

「え〜っと……確か第二段階？」

「……ホントですか？……でも、さっきのは……第三段階……勘違い？」

ティーナがいろいろとぶつぶつぶつぶやく。

アタシが確かにソラは第二段階だっけって言うことを教えると、ティーナの顔がサーッと青ざめていった。

「……いえ、まさかとは思ってたんですよ？……でも、普通、

マナの操作は第三段階からだって……テセラに聞いてて……」

……？

何が言いたいんだろう？

「リュウさん！！  
シャドウ・パス影抜け はどうですか！？」

「その手があったあああああああ！！！！」

後からリュウ達の声が聞こえたかと思うと、アタシの影からみん  
なが出てきた。

「よし、リカ。お前はよくやった。さすがはソラスペックが関わると性能  
がお袋を凌駕するだけの事はある！！」

「リカちゃんすごいね〜！こっ、床をべりべり〜って」

……何故だろう？

褒められた気がしない。

「でも、貴女も少しこれはやりすぎじゃ……」

「す、すみません。て、てつきり、第三段階以上だと思って……」

「あ？どういことだ？」

「あの……マナの操作が第三段階以上のスキルなのをご存知で  
すよね？」

「……あ、そういえばリュウ達に説明するの忘れてた。  
鈴音は……まあ、鈴音だし。」

「……ご存知、ない？」

「ああ。オレ達は……つか、こいつとこいつ  
そう言いつつリュウは鈴音を前にだした。」

「こいつらは四月から訓練したばっかだ」

「え！？……ほ、本当ですか？」

「ああ」

「……あ、あははは……」

乾いた笑みをティーナが漏らす。

そして、いきなり土下座を敢行しだした。

「ごめんなさい！！そうとは知らず！！てっきり、ただのヘタレ  
なのかと！！」

「……あなたが間違っでない気はするね」

「……何だか話が読めてきた気がする。  
要するに。」

「……勘違いでソラを殺しかけた？」

「す、すみません!!」

「てか、ソラさんが回復しませんですう!!」

「……シャン、ソラさんのは力の代償みたいなものだから無理だ。傷の治癒に専念しよう」

「……三谷の野郎……アンジェリカさんに膝枕……」

「ここでソラの仇をとる!!」

「落ち着け!?!ソラは死んでねえ!?!」

「そ、そうだよ!!」

「そ、それに、むしろ仲直りできたじゃん!!」

むう……そうか。

アタシはしぶしぶ鎌を消した。

「……まあ、何だ。こっちもいろいろとあってな。それがこうなっただけだ。気にするな」

「でも……」

「まあ、とにかくだ。こいつはもう連れて行く。幸い、うちの薬剤師から連絡が来てな。もうすぐ到着らしい」

「シユウが来るですう!?!」



「おお〜。じゃ、シユウ君にソラ君を任せておけば大丈夫だね！」

そして、リュウは不適な笑みを見せて言った。

「ま、こいつはお前に負けた。だが、次はこうはいかねえ。それだけは覚えてる。そしてな……オレ達は、結構強いぞ？」

そういうとリュウはみんなに下がるようにいった。  
みんなはそれにしたがってベンチに戻る。

「次はオレが相手だ。何人で掛かってこようがぶっ飛ばす！」

「……わかりました」

そして、ティーナは自分のベンチに戻っていった。  
フィールドには、意識のないソラと、アタシ、リュウが残される。

「おし。お前等も下がれ」

「……うん。ソラは？」

「んなもん、お前が救護室にでも連れてけ」

「え、でも……」

ついさっき、ソラと約束したばかりだし……。

今回は、ちゃんとみんなの迷惑にならないようにちゃんと試合に出たいと思う。

「誰かがソラを運ぶ必要があるだろ？別にそれがお前だけだ。」

だが、運んで、シユウと合流したらすぐに戻って来い」

リュウがぶっきらぼうに。

だけど、優しさの籠った声で言った。

「わかった！」

そういうと、アタシはソラを背負った。

今はこのぬくもりがものすごくうれしい。

・・・錯覚かもしれないけど、前よりもずっと近くにソラを感じてる気がした。

15話・CONTROL（後書き）

作 「とう言うわけで『操作』をお送りしました」

ティーナ 「す、すみません！本当に・・・」

作 「まあ、ぶっちゃけ、この物語は主人公最強モノじゃないから特に問題なし」

ティ 「で、ですが、第三段階でもないのに何故？」

作 「いや、人は窮地にたたされると限界以上の力を出すんだよ」

ティ 「・・・貴方はいつたい何をさせたのですか？」

作 「ちよつとした修羅場をプレゼンツッ！！」

ティ 「・・・」

作 「まあ、そんなわけで仲直りもさせて適度に距離をたらせる算段もついたってことで次回予告！」

ティ 「薬剤師さんが来るんでしたっけ？」

作 「イエス！我らが格闘薬剤師が来るよ！」

ティ 「・・・どういう方ですか？」

作 「唯一の常識人」

ティ 「・・・格闘士で薬剤師なのですか？」

作 「そこは気にしちゃいけない！」

ティ 「いえ、お医者様が相手に怪我をさせるのはどうかと・・・」

作 「次回もよろしく！」

ティ 「・・・逃げられました」

## 16話・FOR FRIENDS

side空志

「・・・知らない天井だ」

「いえ、何故いつもそのポケで始まるんですか？」

「みや」

とりあえずたぶんは救護室だろうと言つことのでいつものようにポケておいた。

まさか帰ってくるとは思わなかったけど。

声のしたほうを向くとレオがボクのそばで寝そべっていて、やっぱりと言つか・・・我らが回復職ヒーラーのシュウがいた。

「最後の日じゃなかったけ？」

「・・・逃げてきました」

・・・シュウ、それは死亡フラグだよ。

出掛つた言葉を何となく飲み込んでおく。

本人が一番よく知ってそうだからね。

「・・・みんなは？」

「はい。まだ戦ってます」

そういうと、シュウは魔法投影映像ヴィジョンをさす。

そこにはリカとスズが戦っている姿があった。

「また、いろいろとやらかしたんですね？ シャンが半泣きで連絡してきましたよ」

「・・・じゃ、全部知ってるんだ」

「はい。今回のリカさんのことも、冬香さんのことも」

そして、シユウは手をボクに差し出す。

「・・・そのために来ました。魔法薬を」

ボクは、ポケットの魔術符カードから例の薬を取り出す。

ボクでは、魔法薬の構成はよくわからない。

わかったとしても、魔法薬はその服用者の魔力と同調し、核を解析して破壊じゃ間に合わない。と言うか、そこにある本人の魔力はおろか生命力にもダメージを与えるかもしれないから軽々しく解呪できない。

「・・・ソラさん、確認のために聞きますが、構成は？」

「服用者の魔力発散。それと、一定以上の間、服用しないと生命力まで発散する。簡単に言うと、意識的に自分を暴走させる薬だね」

そう、これが冬香の弟、平地春樹君が飲まされていた魔法薬。

こんな薬を作るなんて・・・！！

「・・・これは禁呪系統タブーの魔法薬です。もちろん、法律でも禁止されています」

「何でそんなものを!？」

「……これは、確かめなくてもわかります。こんな、はるか昔に禁止された有名すぎる禁薬を飲ませるなんて……!」

シユウは拳を思い切り壁に叩きつけた。

それだけでこちら辺を大きく揺する。

「……薬剤師の風上にも置けません。いえ、ゴミクズ以下です」

シユウがものすごく怒ってる。

……こんなシユウ、はじめてみた。

「……治せるの?」

「……基本的に、禁薬の類は普通なら解呪できません」

……マジかよ。

なら、どうしようもないじゃん!

「ですが、ソラさん。私達は普通じゃありません」

そういつと、シユウは薬ビンを片手にどこかに歩いていこうとする。

「……残念ながら明日の試合には出れそうもありません」

「……できるの?」

「誰に聞いてるんですか? 樹族は薬の知識に長けた種族です。私

は、絶対に解呪薬を作ります」

そういうと、シユウは出て行くこうとする。

「あ、ゴメン。シユウには別の頼みもある」

「なんでしょう？私にできることであれば・・・」

「いや、できるんでしょう？解呪薬。なら問題ないよ。ただ、冬香の弟のハル君に直接届けに行つて、そのついでにお姉ちゃんの雄姿でも見せてあげてって思ったただけだから」

そういうと、シユウはいつもの爽やかな笑みから一転させ、不適な笑みを浮かべる。

「そうですね。わかりました」

そういうと、シユウは足早に出て行つた。

たぶん、ボク等のいる宿にでも向かつたんだろう。

ボクは自分の体に異常が無いか大雑把に見る。そしてレオに目で合図をすると、特等席と化したローブの大きなフードの中に入ってきた。それを確認して救護室を後にした。

・・・隅から怨念のようなモノを感じた気がしたけど無視しておこう。

たぶん、シユウのせいだ。

「……ん？お前、もう大丈夫なのか？」

「うん」

フィールドを見ると、そこにはリカとスズの二人。敵も二人が出ている。今のところは拮抗してるようだ。

「三谷っちが来たよ〜」

「ホント？……おお〜……李君すごいね」

「シユウはどうしたですう？」

「……解呪薬、ですか？」

「そうそう、ついでにハル君を明日のいいトコで連れてくるように頼んだ。……と言うわけで宇佐野さん？」

「おっけーおっけー！ワタシに知らないことは無いのだ〜」

そういうと、宇佐野さんはいきなりどこかに走り去って行った。……情報収集か。まあ、これで大丈夫。

「……さっさとこの試合を終わらせよう」

「おう。……おい！！リカ！！スズ！！ソラがさっさと終わらせろだよ！！」

その言葉に二人がこっちを向く。

二人は何か言ってるみたいだけどボクにはよく聞こえない。



でも、何となくはわかる。

そこでボクはゴーサインを出した。

その瞬間、リカが消えた。

スズは アンチ・シエル 相殺殻 を相手に向けてドーム状に展開する。

そして、ドンという音が響き、その音が響くたびに相手は踊るような動きをとる。

・・・まさか、 アンチ・シエル 相殺殻 を足場に敵に三次元的な攻撃を仕掛け  
てる？

「いつの間に・・・」

「ああ。スズがリベンジしたいってな。それでリカを指名してたんだよ」

そうか、それをリカに説明したと。

・・・何気にえぐい。

あんなの、普通じゃ避けられない。

そして、相手にも限界が来た。

リカが鋭く放ったけりがこめかみの辺りに炸裂。

相手はその攻撃で壁に礫にされるようにぶっ飛ばされた。

敵の相方がその光景にぎよっと目を見開く。

「えい！」

その瞬間、スズのやたらと可愛らしい気合の声が響き、それと同時にゴンという鈍い音が響く。

そこには、 アンチ・シエル 相殺殻 で頭部を強打されて気絶してる敵がいた。

・・・うん、魔法が効かないからかなりえげつない攻撃だ。

確かに、盾で攻撃する技術があるとか聞いたことがあるような気がしないでもないけど・・・。

何故か相手が可愛そうに思えた。

「これでオレ達の勝ちだ」

「・・・あれ？誰がリカとスズの前に？」

「オレ」

リュウは一言で答え、さすがに二対一はないわとか言った。

・・・そうか、ゴメンね。ボクのせいであるいろいろ心配かけて。

そして、司会の声が会場に響き、ボク等の勝利を宣言される。

これで、明日の決勝に出れる。

「ソラー！！大丈夫だった!？」

戻ってきて一番、最初にリカが発した言葉。

・・・何故かいつもの調子のリカにボクは苦笑を漏らした。

「大丈夫。まあ、これで決勝に進める。・・・けど、その前にやることがある」

ボクはまたみんなの前に立つと先頭を歩いていく。

みんなは疑問符を浮かべながらもボクについてくる。

そして、反対側に行くと、ちょうど『トウエルブ・コンストレイションズ十二星座』の方々が現れた。  
ナイスタイミング。

「……また情報収集か？」

「ううん。後はシユウと打ち合わせするだけ。これは……三魔<sup>スリー</sup>源素<sup>シンボル</sup>に関わりのあること」

ボクはだばだばの占い師のローブの姿を見つけ、声をかける。

「ちわゝ。ティーナさん？」

「はい？……あ……」

ボクを視認した途端、いきなり土下座された。  
何で！？

「すみません！！てつきり、私は貴方が第三段階でかなりの力を  
持つてるとばかり！！」

「ちょ！？落ち着いて！？待って！！ボクは何もしてません！！  
だから武器を収めて！！」

ボクは必死に言葉を発し。何とか誤解を解く。

「……取り乱してしまつてすみません」

「いやいやいや……むしろ試合中のボクは自棄<sup>ヤケ</sup>になつてたんで

「……で、小僧、なんのようだ」

ボクに向こうのリーダー格らしき偉丈夫が声をかけてきた。

……何でエモノが細剣<sup>レイピア</sup>なんだろう？

こつゆう人つてもつとでつかい武器じゃないの？  
その視線に気づいたのかリーダー格の人は頭をかいて説明した。

「・・・俺はな、力が弱いんだ」

「へへ。そうなんですか？」

「ああ。小学生の女子と腕相撲をして負ける」

おい！？

それは弱すぎでしょ！？

そんな形なら近所の小学生の子が見ただけで泣くよ！？

「・・・あはははは・・・リオンさん、優しいですから」

「そうそう。それで『泣く子も黙るライオンさん』だもんね。主に面倒見のよさの意味で」

背中に大きな弓を担いだ人が教えてくれる。

・・・なんだこの人達？

「・・・おい、お前は雑談しに来たのか？」

「いや、違うけどさ。・・・まあ、知ってるかもしれませんがボクは三魔源素スリーシンボルの一つ、『月』の属性持ちです」

「・・・確かにそんな感じはしてたわ」

水色の髪の毛が印象的な女の人がボクに言う。

・・・何で瓶かめを持ってるんだろう？

「で、そんな人が何か用ですか？」

まるで歌うような口調でスズ以上にほんわかした空気の人**が**ボクに聞く。

「単刀直入に言います。フェイクと言う人がスリーシンボル三魔源素を狙ってるらしいです」

その言葉にリカ以外の人が驚く。

・・・あれ？

「おい、初耳だぞ」

「え？言わなかったっけ？確かスズに・・・」

「あれ？わたしそんな話聞いたっけ？」

「聞いているはずだよ！？ルーミアさんに！！」

「むう・・・っは！！」

よかった。どうやら思い出してくれたみたいだ。

「忘れちゃった」

「・・・鈴音」

ダメだった。

スズは正真正銘のアホの子だった。

「・・・とにかく、その人に狙われています」

「わかった。返り討ちに」

「いえ、絶対に逃げてください」

ボクは無無を言わせぬ口調で相手の言葉にわって入った。でも、相手はそれぐらい非常識だ。

「フェイクは、どういうわけかそこらへんの魔王をはるかに超える魔法でボク等をボコボコにしました。少なくとも、ボク等に負けるレベルじゃ勝てない」

「でも、こつちにはティーナちゃんも」

「ワケは言えませんが、かなり強い魔王二人が相手でやっと向こうが引いてくれました。通り名は『結界』と『閃光』です」

その言葉で更に目を見開かれた。

・・・やっぱ、あの二人はふざけてるけど超強いんだ。

「『結界』に『閃光』？最強の魔王かよ・・・」

「でも、何で？」

「それには答えられないっつーか・・・たまたま近くを通りがかったついでみたいな感じだったな」

リュウはその魔王についてきたくせに・・・。

まあ、嘘は言っていない。  
真実をちょこつとはぐらかしてあるだけで。

「……まあ、とにかく、フェイクは危険です。逃げてください」  
「……忠告、ありがとう」

そういうとリオンさんと呼ばれた人はボク等に背を向けた。  
……あ、小さな子がこけた。そして痛かったのか泣いてしまう。  
リオンさんがどこから出したのか飴玉を渡す。すると、小さな子は泣き止んだ。

「……いや、面倒見よすぎでしょ」

「……だな。つか、狙ってるのか？……ま、帰るぞ」  
そしてボク等も宿のほうに帰ろうとする。  
そこでボクは声をかけられた。

「あ、あの〜」

声に振り向くと、そこにはティーナさんがまだいた。

「どうしたんですか？」  
「あ、敬語はいいです。私もやめますから」

「あ、うん。で、何？」

「はい。さっきはごめんなさい」

さつき、ね。

何回も言ってるんだけどボクも自棄ヤケになつてたからな。

「でも、その力を恐れなくてください。確かに力があれば何でもできる。でも、何をするかはその人次第。貴方が、使い方を間違えなかつたら大丈夫です」

「・・・やっぱ、無意識のうちにセーブしてたんだ」

うすうすは感じていた。

これじゃ、あの時と変わってない。

「でも、大丈夫。私に仲間がいるように貴方にも仲間がいます。・  
・そして、その力で守りたいものを守ってください」

そう言うと、ティーナさんは自分のギルドの方に走って言った。  
ボクはその後ろ姿を見ていると、向こうからボクを呼ぶ声が聞こえた。

たぶん、いつまでも来ないボクをみんなが・・・。

「ソラ〜!？」

「うっぱあ!？」

・・・久しぶりに受けたよ。  
リカのタツクル。

「な、何で・・・？」



「ソラは何！？あの人が好きになっちゃったの！？」

リカはいきなりそうまくしたてるとボクの襟首をつかんで問いただし始めた。

・・・何でそうなるの？

途中でおんなじ境遇だからとかこれじゃ未美に借りた小説と同じことに！？とかいろいろ言ってる。

「いや、別にそんなんじゃないよ。ちょっと魔法の講義を受けただけ。・・・それと宇佐野さんから本を借りるのはやめた方がいいと思う」

「ホント？」

「はいはい」

「・・・わかった」

そう言つと、リカはボクの襟から手を離れた。

「じゃ、行く」

「おっけ〜」

ボク等は次の決勝で冬香を取り戻す作戦を考えるために宿に戻って行った。

・・・上等だよ。

この力の全力でまずは冬香を助けようか。  
ボクはそう心に誓った。

16話・FOR FRIENDS（後書き）

作 「少し早めの投稿！そしてシユウ君登場！『友のために』をお送りしました」

樹 「ひよつとしたら今回も私の出番が無いかと思いました」

作 「いくら僕でもそんなことはしない」

樹 「何はともあれ、皆さんと合流できてよかったです」

作 「まあ、そんなわけでいつの間にか話数三桁を超えた！」

樹 「そうなんですか？」

作 「イエス！何かがんばったな〜って思う」

樹 「そうですね」

作 「まあ、次回予告と行きますか！」

樹 「次は決勝ですか？」

作 「まあ、その前に準備をつて話。露骨なフラグとか盛りだくさ

ん

樹 「・・・それはいいのですか？」

作 「さあ？・・・とにかく、決勝は次の次あたりに来るよ」

樹 「そうですね。緊張しますね」

作 「まあ、がんばれ。てことで次回もよろしく」

## 17話・BEFORE NIGHT

side空志

「ま、そう言うわけ」

ボクは宿につくと、シユウと話したことを全員に話した。  
みんなの顔は正直、暗い。

「・・・何かいい方法は？まずは・・・田中で」

「・・・俺、競技場に忘れ去られた」

「・・・よし、次！」

「おい！？無視か！？何で俺はいつもそんな役回りなんだよ！？」

「田中君だからしょうがないよ」

スズの一言に田中は撃沈した。

よし、うるさいのが消えたところで再開。

「でも、解呪薬はちゃんとできるですう？」

「・・・シヤンがシユウを疑うのは珍しい」

「べ、別に疑ってるわけじゃないですう！！ただ・・・」

「ちゃんと間に合うか、そういうことですよね」

その言葉と共に別に別に部屋を取ったシユウが入ってきた。  
シャンちゃんはシユウの登場で赤面してる。

「初々しいね」

「いや、お前が言うか？」

「？」

よくわかんないけど、まあいいや。

「シユウ、薬は？」

「はい、おそらく、明日の朝までにできます。……ですが、春樹さんでしたか？その方はどちらに？」

「ピアスを渡して、話を聞いたら、どうもここで一番の宿に泊まってるらしい。……確か、名前は……」

「『グランドマリンホテル』だよ」

宇佐野さんがどこからともなく現れた。

……窓から。

何でそこから？

「いやあ〜。ワタシ、ルパンになってみたかったんだよね！」

「……いや、ワケわかんないから」

「へいへい。三谷っちはノリが悪いな〜。じゃ、本題ね」

そういうと宇佐野さんは一枚の紙を取り出した。  
そこには、ホテルの内部構造が書かれていた。  
・・・どうやって手に入れたのかは聞かないでおう。

「もち。色仕掛けで」

「・・・で？」

「いや、これはホントだよ？こっ・・・特殊な性癖の持ち主を」

「舞さんだな！？舞さんしかないよね！？」

まさかのロリコン狙うか！？

自分の容姿を百パー利用とか・・・。

「ま、とにかくそーゆーワケで見取り図ゲッツ！！」

「・・・いいや、宇佐野さんがいろいろとおかしいのは今に始まったことじゃないし。他に情報は？」

そこで宇佐野さんは愛用してるウサギのシールが貼られたシステム手帳を取り出す。

「えっと・・・敵の総数、推定二十。セキュリティレベルはそれほど高くはない。・・・しかし、ターゲットに会えるのはリーダーと思わしき『ラズ・フィーレ』のみ。冬香はリーダーが許したときのみ付き添いつきで面会を許されるそうです」

宇佐野さんは唐突にいつものふざけた態度から淡々とした態度に

変わる。

裏・宇佐野さんだ。機械を使うと何でこうなるんだろう？

「何で急にそんなわかつたの？」

「……『災禍の焰』のメンバーに色仕掛けをしました」

ドンだけロリコンが多いんだ！？  
いろいろとダメでしょ！？

中身は高校生だけ……。

「……続きをよろしいでしょうか？」

「あ、はいどうぞ」

「……ホテルには常に『災禍の焰』の構成員メンバーがいます。それが最低で二十人ほど。十五人が闘技大会に出ているようです」

「でも、強い人は闘技大会に出てるから大丈夫じゃないの？」

「……いえ、冬香さんが弟ターゲットさんを連れて逃げないよう、守護にもそれなりの人をまわしているようです。更に、私達のことガバレつつあるようです」

そりゃそうか。『魔氷狼』フェンリルを聞いて回ってるなんて人はそんなにいないだろう。

たぶん、向こうは冬香がこっそりとどこかに依頼でもしたんだろうとか考えているんだろうと思う。つまり、見つければ袋にされる危険がある。

そして、潜入できるのがシュウだけ。

ここで下手に人数を減らせば相手にいろいろと怪しまれる。

「まず、ボクが考えているのは冬香を『災禍の焰』の目の前で奪い返す。いや、むしろ奪う。そして冬香自身の意思でこっちに来てもらう。これができれば相手もあきらめるだろうと思う。でも、そのためにはハル君を何とかしなくちゃいけない」

そうしないと、冬香はボク等でさえ殺す気で掛かってくるのが目に見えてる。

・・・問題はどうかやって救出するか、か。

「・・・そこもぬかりはありません」

そこで宇佐野さんはどこかの制服のような服を取り出した。

「・・・ちよつと拝借しました。これで李さんを変装、および潜入させます」

「・・・でも、ばれない？」

「大丈夫です。ホテル側に協力してもらいました」

・・・何故だろう？

脅迫したようにしか聞こえない。  
深く追求するのはやめておこう。

「では、私がこれを着ていけば問題ありませんね」

「でも、シユウ君一人は大変じゃない？」

「そう思ってもう一つ持ってきています」

そして、今度はメイド服・・・って、おい！？  
何でメイド服！？

っ！か、あんた好きだね！？

「・・・これを誰かに着てもらいます」

「これって、私達のサイズですっ？」

シャンちゃんがメイド服のサイズを見て宇佐野さんに聞いた。

「はい」

そうか・・・何で知ってたの？

「じゃ、私が行くですっ！」

「それは無理です。一人ぐらいは回復職ヒーラーがないと」

おい。じゃあ何でもって来た。

そこで、宇佐野さんは何故かシャオ君をじゅっと思つめた。

「・・・嫌ですよ？」

「却下です」

宇佐野さんはシャオ君にぴらっとな枚の写真を見せる。  
シャオ君は吐血して倒れた。



「シャオ〜!？」

「・・・わ、わかりました。俺が引き受けます」

・・・君も苦労してるんだね。

ちらつと見えたけど、何故か問学園の高等部の教室を背景にシャオ君がやたらとひらひらで短い袴をはいて、更に女子に取り押さえられていた気がするけどボクは見なかったことにしておくよ。

うん、あれは袴だよな？断じてスカートとか言うものじゃないよね？

「・・・これでオツケ」

宇佐野さんは手帳を片付けるといつもの調子に戻った。

・・・でも、何故かあんまり大差ないように思える。

「じゃ、決勝のほうはどうする？」

「・・・やっぱ、ある程度こっちの戦力を見せて相手に絶対届かないって言うのを見せ付けるべきだと思う。そうすれば向こうも下手に手をださないし、出してもボク等じゃなくて龍造さん達が黙っていないと思う」

・・・あの人達、地味に過保護だからね。

むしろ、今回なら頼めば闇討ちとかで敵を全員瞬殺してくれそうな気がする。

でも、今回は冬香をこっちにつけて向こうにその恐ろしさを植え付けるってのも考えてるからな。

「まあ、だから決勝のルールを少しいじろうと思う」

「んなことできんのか？」

「うん、この大会さ、結構融通が利くんだ。ま、それには双方の了承が必要だけど」

だから、これまでいろいろと例外的なことも進めれてきた。

「だが、それには向こうの了承も必要だぞ？」

「いや、それは大丈夫。ボクに考えがある。でも、これぐらいしか話せないな」

ボクは部屋の床にごろんと仰向けになる。

「やっぱ、ボクは作戦担当って言っても、その場で考えた行き当たりばったりが多いからさ、こういうの苦手なんだよね」

「……そういえば三谷君っていつも戦闘の途中で指示飛ばしてたね」

うん。

だって、ボクの属性も相手の分析だし。

実はとっさの判断がそれなりにいいだけだったりする。

……今回のティーナさんではしくじったけど。

「ま、そういうわけだから今日は適当に休んで明日に備えよう。  
・ボクはハル君に連絡しておくよ」

そういうとボク等は思い思いに明日の準備やなんかをし始めた。

時間は・・・ちょうどいくらいかな？

side 春樹

ソラさんから貰ったピアスを手の中で弄っていると、かすかに音が聞こえてきた。

急いでそれを耳につけて通話を開始した。

『こんばんわ。どう？』

「あ、はい。・・・まあまあです」

『まあ、病人にする質問じゃないしね』

「まあ・・・」

『君に伝えることがある』

ソラさんは唐突に真剣な声で話しかけてきた。

思わずぐくりと喉を鳴らし、ソラさんの言葉を聞き漏らすまいとする。

『明日の決勝戦中、そっちにシャオ君ともう一人、君は知らないけどボクの仲間が迎えに行く』

ついに来た。

つまり、ソラさんは全ての準備を完了させたんだろう。

『でも、危険かもしれないとだけ置いて置くよ。たぶん、そっちに送る二人はかなり強いから大丈夫だとは思うけど・・・』

「・・・大丈夫です。でも、姉さんは？」

『それは聞くことじゃないね。冬香は取り戻す。それだけだよ』

その言葉が、僕には何故かとても心にしみた。  
何でだろう？

・・・。

「・・・ソラさん。聞いてくれます？」

『うん？いいよ』

「僕と姉さん、実は孤児なんです」

そのことを話したことはない。

姉さんもたぶんそうだ。知っているのはこのギルドの人たちだけ。

『ホント？でも、それなら確かに冬香や君が親に頼れないって言うのがわかるけど・・・』

やっぱり、疑問に思ってたんだろう。

だって、普通ならこんな仕打ちを受ければ親が黙っていないと思う。

聞いただけの話でもたぶんそうだと思う。  
でも、僕や姉さんにはいない。

「それで、僕と姉さんは孤児院に捨てられたんです。当時、二歳の姉さんと生後生まれて間もない僕達が教会の前にいたって院長先生に言われました」

『院長先生？』

「あ、はい。サンクトス教会は孤児院もかねていたんです。そこで身寄りのない子供達を育ててくれて・・・」

『うん。それで？』

「で、僕と姉さんはそこで育ちました。院長先生は僕達にいろいろなことを教えてくれました。・・・魔法とか。そこで、姉さんは数法术を使っただんです」

『中々に博識な院長先生だったんだね』

「はい。ですが、突然なんですけど教会への寄付が激減したんです」

『・・・』

「それで、姉さんは自分の力でギルドに入って、お金を稼ごうとしました」

『それが『災禍の焰』だった。ってこと？』

「はい。そこで元から僕は体が強いほうではなかったので姉さんと一緒に孤児院を出て、ギルドに仮加入しました」

『うんうん』

「・・・ですが、僕等がギルドに入るとき、院長先生はものすこ

く反対したんですよ。でも、どうしても力になりたくて・・・院長先生に『なら、何で関係のない僕等を助けてくれたんですか？』って聞いたんですよ」

『・・・』

「で、院長先生は笑って『お前達は私にとって大切な子だからね』って言うてくれたんです。だからお前達が無理をする必要ないって

『なるほど』

「でも、笑っちゃいますよね。助けようと思ったたらこんなことになつてしまつて」

『・・・いや、人を助けるつてもものすごく大変なんだよ？だから、その程度の失敗で落胆してたらボク等のところ来ても長続きしないよ？？』

「・・・その程度、ですか？」

『うん。だから、今回はボク等が助ける。でも、次は君もボク等を助けて』

「・・・僕は、姉さんの力になれますか？」

『君がいなかったら冬香はあんなにがんばれないよ。・・・それとゴメン。急だけど用を思い出した。じゃ、また明日』

「・・・はい」

そして、通信が切れた。  
暗い部屋の中、空を見上げる。  
そこには綺麗な三日月が浮かんでいた。

s i d e 空志

「・・・」

ボクは考えていた。  
まさか、冬香が孤児だとは思わなかった。  
でも、それならいろいろとギルドであんな目に遭っても要る理由にはなる。

「たった一人の肉親を助けるため、ね」

ボクは宿の中庭から部屋に向かう。

・・・これから大変だ。

そして、部屋にはまだみんないた。

「終わったのか？」

「うん。でも、計画に一部変更だ。考えすぎならいいんだけど・・・  
スズ、田中、宇佐野さん」

「ほえ？わたし？」

「俺か？」

「なんだい」

「今から『エレオール魔法学園』に向かって」

「「ど」?」「」

「え〜?何で〜?」

「いいから」

ボクは部屋にあるメモ帳の紙を引きちぎり、そこにいろいろと書いていく。

「これをサリナさんに。・・・後はこっちで準備しておく」

「おいおい、何しようとしてんだ?」

「うん。・・・策士はさ、罫を仕掛けるなら二重にしておくんだよ。まあ、念のための予防線って所かな?」

そして、今度はケータイを取り出して連絡。

・・・まあ、これでよし。

「まあ、これで明日の戦力がボクにリュウ、リカ、インチョー、シャンちゃんだね」

「・・・少なくねえか?」

「一人当たり三人ですう」

「何であたしが戦闘要員なの!?!?」



「まあ……適材適所か？」

「ソラが言うならがんばる」

「まあ、そんなわけだから。それと、スズ達の指示はその紙に書いておいたから。その通りにね。あ、移動にはこれで」

ボクは移動術式の書かれた魔術符カードを渡した。

これで転移が使えないスズでも魔力だけを込めれば転移できる。

それをスズに説明した後、スズは転移した。

そして、部屋が静寂に包まれる。

「……これで何もいいんだけどね」

見上げた空には、綺麗な三日月が昇っていた。

17話・BEFORE NIGHT（後書き）

作 「とう言うわけで『前夜』をお送りします」

春樹 「ついに始まるんですね」

作 「そうそう。ちなみにキーワードは何故か『メイド服』になっています」

春 「・・・美未さんってどういう人？」

作 「あーいう人です」

美 「リカちゃん！三谷っちが、また・・・」

リ 「ソラー!!!」

空 「ん？何・・・ぎゃあああああああ!!!??」

春 「・・・見なかったことにします」

作 「そんなわけで次回！ついに決勝が始まる・・・そして相手がい！」

春 「相手が？」

作 「まあ、ここまで。次回をお楽しみに」

春 「それもそうです」

作 「まあ、何故か敵がロリコン扱いになってしまったりするんだだけ」

春 「何で!？」

作 「次回もよろしく!」

春 「スルーツ!？」

## 18話・FINAL

side空志

『ついに始まりました！！マリネシア祭闘技大会、決勝戦！！』

司会の声で観客席からもすごい歓声が響く。  
てか、うるさい。

「・・・ホントに大丈夫なの？」

「みゃ〜」

「うん。たぶん」

「まあ、適当にやれば勝てるだろう」

「今回は平地さんの救出が最優先だよ？」

「何だか緊張してきましたですう」

まあ、ボク等はおおむねいつもと同じ。

ボクは自分の武器に手を触れようとして、右手に何の抵抗も感じないことに気づいた。

見下ろしてみると、そこには『ナイト』があるはずなのにあったのはホルスターだけだった。

「・・・そうか、昨日壊れちゃったんだっけ」

「あ、ソラこれ！」

リカがボクに布で包まれたものを渡す。  
そこにはばらばらになった『ナイト』の残骸があった。

「あ！？回収してくれたんだ」

「うん。一応ね」

「ありがとう。ま、今回は『ナハト』だけでもいいでしょ」

ボクは『ナハト』を左の腰から引き抜いて右に変える。

これでよし。

でも、魔法銃で回転式とか意味が無い。

それに、どういう原理かわからないけど地味にセミオートだし。

・・・あれが三点バーストの銃だとすると、こっちは？  
解析したけど特に何の効果もないんだよね。

「・・・気合で何とかしよう」

『では、両者お入りください！！』

その言葉にボク等はフィールドの中に入って行った。

向こうにはボクがぶつかったチンピラな人、そして後ろのほうに  
冬香。

そして、中央にはリーダー格らしき・・・あれ？

「・・・リュウ、何でだろう？ものすごく見覚えのある人がいる」

「・・・奇遇だな。オレもだ」

「・・・お前は・・・そうか、あの時の!!」

向こうも気づいたようだ。

なら、こつちもやることは決まった。

ケータイを取り出す。

番号はもちろん、1・1・0

「あ、警察ですか？変質者です」

「うおい!？」

「そうだぞ。お前はアホか？ここの警備員に突き出せよ」

「あのときのクソガキが!!」

そう、ラス・フィーレは四ヶ月前、ボク等をあの公園で襲った人物だった。

・・・なるほど。

「これで心置きなく、潰せる」

「ああ、そうだな」

「な、何故ですう？ソラさん達の魔力があがってるですう!？」

「は、間君？三谷君？どうしたの？」

「そ、ソラ、落ち着いて・・・」

「簡単に説明するとき、あの人、ボクとスズを襲った人。そんな時

はリュウが助けてくれた」

そして、今度はリカの魔力が上がった。

「そう、わかった。八つ裂きにする」

うん。いつもなら止めるけど今回は許す。

八つだろぅが九つだろぅが三枚だろぅがオツケーだから。

「何かいろいろと危ないですぅ!?!」

「みんな落ち着いて!?! 作戦は!?! 平地さんは!?!」

まあ、インチョーの言うとおりだ。  
とりあえずやろぅ。

「そこの変質者!?!」

「違う! 俺はラズ・フィーレだ! クソガキ!?!」

「黙れ、変質者の分際で。この何で『災禍の焰』がロリコン多いのかわかった。あんたがリーダーだからだ!?!」

「誰がロリコンか!?!」

「あんただよ!?! まだ高校にあがりたての少女を攫おうとしたくせに!?!」

「な!?! 違う!?!」

「黙れロリコンギルドのロリーダー」

「何でそこで変な造語を作る!?!」

会場からはロリコン?とかいろいろいると噂されてる。  
途中でサイテーとか変態とか言う声も聞こえる。

「よし。相手がよく知ってる(?) 相手でよかった!」

「おい、うまく事が運びすぎだろ?」

「もう一押しだよ……」

相手のラズ、じゃなくて変質者ロリコンは怒りに震えている。

まあ、ボクもあらぬ噂をあんな風に目の前で立てられたらキレる。  
……でも、何故か相手の中に気まずそうに数人がしてるのは何  
でだろう?」

冬香を見るとものすごい顔でボクを睨んでた。

……無視しよう。

「……お前等、全員ぶっ潰す」

待ってたよ。

その言葉!!

「ふん。ロリコンが?無理無理。そっちが全員で掛かってきて  
も無理じゃない?」

「言ったな?」

「ああ、言ったよ。あんた等じゃボク等に勝てない。なんなら、ボク等全員とそっち全員でやるつか？そっちのほうの手っ取り早く済む」

「上等だ！ぶっ殺す！！」

「……ソラさん、相手の挑発がうますぎですう」

いや、そんなホメられても。

「ソラ、ホメられて無いよ」

「……ま、これで舞台は整った。まず、冬香意外を潰す」

その言葉に全員がうなずく。

よし、準備はオツケーだ。

『ああ……何だかよくわかりませんがいきなりの総力戦となりました。ですが、例の如く運営からゴーサインが出たのでこのまま続行！！……では、決勝戦、始め！！』

その言葉で、ボク等の戦いが始まった。

まあ、ボクはその言葉と同時に銃の引き金を引いたりするけど。

「遠隔展開……アマイカスチ 雨雷 ！！」

……よし、これで大多数はやれた。

「……えげつねえな」



side 樹

「・・・シャオ、もっと堂々としてください。目立ちます」

「・・・無理言つな。何で俺が女装なんだよ」

私はメイド服を完璧に着こなすシャオを見てため息をつきました。まあ、シャオは元から中性的な顔立ちですし・・・感覚的にはシヤンがもう一人増えたような感じになります。

「・・・いえ、ですから本当にお願ひします。目立ってます」

「だ、だが、しょうがないじゃないか」

「ですから、その恥ずかしがるそぶりだけはしないでください」  
そんなことをするので周囲の男性からの注目を浴びっぱなしです。おそらく、保護欲とかそんなものを奮い立たせるんでしょうね、今のシャオは。

おっと、目的の部屋につきました。

「では、手はずどおりに」

シャオはこくりとうなずくと機械じみた動きで目的の部屋の前に立つ人に近づいていく。

・・・大丈夫でしょうか？

「ん？何だ？」

「あ、あの・・・お部屋のお掃除に・・・」

「ここはいい。帰れ」

「……今です」

私がピアスにそうつぶやくと、中で咳をする音が聞こえます。

まあ、春樹さんに頼んで合図があればするように頼んだのですが。

「部屋が埃だらけだからです。お掃除しないと……」

「……ツチ。これだから面倒だってリーダーにも言ったのよ。……十分だけださつさとやれ」

たぶん、冬香さんを縛り付けるために春樹さんのことは丁重に扱うように指示されていると言うソラさんの見立ては当たったようです。

では、失礼しますか。

私はシャオと一緒に中に入ります。

そこには、ベッドから上半身だけを起こした少年が一人だけいました。

中に人がいません。……不用心ですね。

「……ソラさんの？」

「はい。私が李樹<sup>リー・シューウ</sup>、こちらのメイドが劉小狼<sup>ルー・シャオラン</sup>です」

「……不本意ながら女装をしていますますが男です」

ホントに不本意そうな顔で言いました。

まあ、それを聞いて春樹さんが驚いてますね。

「……女の子にしか見えない」

「……シユウ、泣いていいか？」

「その前に解呪です」

私はポケットの魔術符カードから小さな小瓶を取り出します。  
これが、解呪薬です。

……ですが、問題が一つ。

「……すみません、一つ先に謝る必要があります」

「？」

「実はこれ、急造したものでして……。ちゃんとした実験は済んでいません」

その言葉に春樹君の顔が少しだけおびえた表情になります。  
……でしょうね、要するに貴方で人体実験をしますといってる  
のと同じことです。ですが、私の力が及ばないために……。

「……正直に言うと、これはお勧めできません。……ですが、  
冬香さんを助けるにも貴方の力が必要です。……お願いします」

「……大丈夫です。……僕も、皆さんの力になりたいです」

そういつと、春樹さんは恐る恐るではありませんがピンを手に取り、  
じっと見つめます。

そして、意を決した表情になり……。

「ん！」

「!？」

「……」

一気に飲み干しました。  
そして、一息つくと……。

「……ッ！あああ!？」

「シユウ！」

「わかりません」

いきなり苦しみ始めました。

side 空志

敵は……冬香を入れて四人。

さすがにいきなり中級上位の戦術系魔法を受けるとは思わなかったのか奇襲に成功した。

でも、アレで全員しとめるとまでは行かなくても大ダメージを与えるつもりだったんだけど……。

意外にも四人にはダメージらしい傷は特にならない。

……つまり、あれが向こうの主戦力か。

「ボクは変質者ロムを叩く！リュウは冬香を足止め。リカ、インチョー、シャンちゃんインは残り二人を戦闘不能にしたらおって指示する！」

「ハッ！お前、狙ったのか？まあ、いい。リベンジと行くか！！」

リュウはよくわからないけどやたらと好戦的なセリフを吐いて冬香を足止めしに行った。

・・・大丈夫かな？

「茜、シャン・・・行くよ！！」

「わかったですう！」

「何で？あたし達はあの人達やっつけること前提なの！？」

インチョーがぶーたれてるけどリカが無理矢理引っ張っていった。  
よし、こつちも行きますか。

・・・主に復讐に。

「と、言うわけで変質者さんロコロ。お願いします」

「・・・俺はラズだ。だが、前とはかなり違うな？・・・何者だ？」

ボクは『ナハト』を右手に構えて言う。

「ただの・・・魔法使いだよ！！」

ボクは銃を撃つ。

相手は長剣ロングソードをどこからともなく出現させて、ボクの魔法弾をはじく。

・・・この人は魔装系じゃない。それは前の公園のことかわかっ

てる。

でも、前衛系の炎と風の魔法使い。  
結構手ごわそうだ。

「フレア・バレット  
火炎の弾丸　！」

向こうから炎の弾丸が飛来。

「わざわざ懐かしい魔法をどうも、  
ツキモリ  
月守　！！！」

ボクは公園で初めて目の当たりにした魔法を魔法陣の盾で防御する。

相手はそれを見て魔法を更に展開。

あれは……。

「なら、これもどうだ！！  
フレア・プリズン  
炎の監獄　！！！」

ボクの周囲から何本もの火柱が上がる。

・・・前と比べて本数がかなり増えているトコを見ると、やっぱりあれは全然本気じゃなかったのか。  
なら、こっちはこうだ。

「レイキ  
水霊亀　！！！」

ボクの足元に水で構成された大きな亀が出現。

「頼むよー！」

ボクがそう言うと亀は甲羅に籠る。

すると、いきなり甲羅がバラバラになってボクを守るように水の

六角形の盾が展開。

スズの魔法を見て考えた魔法です。その代わり、スズみたいに魔法を消せないけど全自動で動く優れもの。

炎の柱を食い止める。

「ミスカモメ水鷗　！！」

ボクは水系統の魔法で攻める。

・・・でも、正直あまり得意な属性じゃないから不安だ。

「そんなものはな、焼け石に水って言うんだよ！」

炎だけに？

別にうまくない。

「レオ、手伝って！」

「みゃ！」

ボクはレオにそういう。

レオはすぐにフードから出てひらりと地面に降り立つ。  
そして、ライオンの姿へと変化する。

「・・・そういえば、そいつもいたのか」

「そうそう、完全復活したレオにぶっ飛ばされる！！」

レオはその言葉で咆哮を放つ。

極太の光線が相手に向かう。

それを難なく相手はかわしボクにこんなことを言った。

「・・・それはいいことを聞いた。感謝する」

「ん？何を言ってるの？」

「こういうことだ。」

仮契約を行使！」

そう相手が言った瞬間、いきなりレオが苦しみだした。

「レオ！？どうしたの!?!」

レオは首を振り乱して大暴れする。  
ダメだ。ボクの言葉が届いてない。

「何をした!?!」

「さすがは聖獣、スカイ・レオン『飛翔獅子』だ。まだ自我を持つか・・・大抵、こういうのを捕まえる場合、逃げないように契約を結ぶことが多い。そうすればさっきのように契約を行使して無理矢理言うことを聞かせられる。つまり、俺は仮だがそいつの主人なんだよ」

そついうと悪魔じみた笑みを浮かべ、その呪いのような言葉を発する。

「そいつを・・・殺れ」

その言葉にレオは目をかっと見開き、ボクに咆哮を放った



s i d e 隆介

「よう、元気にしてたか？」

オレは目の前の冬香に話し掛ける。  
だが、向こうはオレを視線で殺そうとでもするみたいに睨み付ける。

「……まあまあね。どこかのお節介が来なきゃね」

そう言っただけ息をつく。

「そんな褒めんなって。あいつが調子に乗る」

「そうね。たぶん、知ってるだらからいつけど、わたしはあんた達を殺す気でやるわよ？」

冬香がその言葉と同時にケータイ型のデバイス魔術機械を取り出す。

……なるほど、完全に前の再現だな。ここにスズがいりゃ完璧だったのにな。

「……お前、覚えてるか？」

「何がよ？」

「オレとスズ、最初に会って戦ったとき、お前が設置型の数法術を遠隔展開してオレ達をやったよな？」

そう、あの時、リカを守るために戦ったとき、あの時は罠として仕掛けられていた数法術にかかり、オレ達は気絶した。

「そうね」

「だがな、今回は負けねえぞ？」

「・・・今回もわたしが勝つ！！」

オレはその言葉で冬香の背後に現れる。

魔法剣 影討ち 影から影に移動し、相手の不意をつく奇襲攻撃。  
だが、これはオレがよく使う手だ。向こうもそれぐらいはわかっ  
てるだろう。

冬香は後を向いたまま数法術を発動。

冬香の周囲の空気が凍り、背後に氷の分厚い壁が出現。

「ッ！」

「そんなの、お見通しよ！！」

だろうな。

オレはバックステップを踏み、双剣を構える。

「・・・魔法剣 刹那！」

斬黒 のようにこれは攻撃を追尾させたり大量の闇の刃を出せ  
ない。

だが、この二閃は 斬黒 の速さをはるかに凌駕し、攻撃力も高  
い。

冬香はこれをはじめてみるはずにも関わらず、防御ではなく回避  
を選択した。

勘のいいヤツだな。

氷の盾で防いでいたら盾諸共冬香を切り刻んでいたな。

そして冬香は回避行動をとりつつも数法術を起動させ、数法術特有の数法陣を大量に展開する。

フアラングス  
槍衾 か！

「ショット発射！」

その言葉で冬香お得意の氷の槍の弾幕が放たれる。

オレはそれをシャドウ・パス影抜けで回避したいが、手ごろな影が無い。しょうがねえ。

「ダーク・イロージョン闇の侵食　！！」

変わりに得意の侵食魔法で退行する。

闇がオレの前に壁のように展開し、氷の槍を喰らい尽くす。

そして、弾幕が途切れたのを感じ、オレは魔法を解除する。

そして、目の前には巨大な土の巨人ゴレムが何体もいた。

「なんだと！？」

「あんたのその魔法は一時的にだけど視界が限定される。だから、こっちの方が効果的よ」

「なんてな。んなこと、オレがよく知ってるっつーの」

オレは既に構えていた。

こんなの、基本中の基本だ。

『闇』系統の魔法は範囲系を使うとどうしても視界を黒一色にして相手が遅延魔法ディレイ・スベル、つまりは伏兵的な魔法をカウンターでくらいやすい。

「だから、対策ぐらいはしてある！！魔法剣 闇矢 ！！」

オレは闇の魔力をその身に纏い、剣を目の前で交差させてそのまま突撃する。

それはまるで黒い闇の矢のように駆け抜ける。

そして土の巨人ゴレムに風穴を開け、冬香の横を通り過ぎる。

「どうだ！オレもそれなりにやるんだぞ！」

「・・・何？情けのつもり！？ただ、わたしの横を通り過ぎるだけ？わたしも舐められたもんね！！」

たいそうご立腹のようだ。

だが、オレは別にわざとやったわけじゃない。

「この魔法展開の特徴はな、構えてりゃ魔法ができるんだよ。こういう使い方もあんだよ！！」

オレは十字に構えたままの剣を冬香に向かって斬るモーションを行う。

すると、十字の黒い 斬黒 が放たれる。

「魔法剣 闇十字」

「派生魔法デライブ・マジック！？この速さで！？」

そう、簡単に言っちまえばこいつはものすごく簡単に派生させる、つまりはコンボを組むことができる。今までは単発でしか使ってたかったからな。

冬香はとっさに起動言語キーワードを唱えて魔法を相殺させる。

砕け散った氷がまるで宙にキラキラと舞った。

「……確かに、少し油断してたわね」

「そうか……。だが、本来の目的は一応お前の救出なんだよな」

「……無理よ」

「さあ？お前、誰が作戦を考えてると思ってるんだ？」

「……それでも無理。確かに、ソラは突拍子もない作戦で相手の裏をかくかもしれない。でも、今回は……ラズはソラと同じタイプ、つまりは頭使って戦う人間よ」

そして、レオの咆哮が響く。

だが、それは悲鳴のような咆哮だった。

オレがちらりとそっちを見ると、そこにはソラに向かって咆哮を放つレオの姿があった。

「な!？」

「……たかが数ヶ月戦闘をしてきた子供が、歴戦の猛者を相手に無理よ」

そういう冬香の目は、どこか悲しそうだった。

18話・FINAL（後書き）

作 「とうとうわけで『決勝戦』でした」

隆 「まさかだな」

作 「ふはははは！」

隆 「だが、ここでまさかの因縁の対決だがいろいろとどうするつもりだ？」

作 「それは考えてある。ちゃんとフラグも全て回収する！」

隆 「へ〜。ま、やりやいいんじゃない？」

作 「・・・適当だな〜。とにかく次回予告！」

隆 「そうだよな。いきなりやべえ事が起こってるもんな」

作 「春樹は苦しみレオは縛られ、冬香もありやりや・・・」

隆 「ありやりやてなんだよ」

作 「策謀渦巻く次回もよろしく」

隆 「何か綺麗にまとめた!？」

## 19話・MISSION IMPOSSIBLE

sideリカ

いきなり苦しそうなレオの咆哮が聞こえたかと思うと、レオはソラに攻撃を始めた。

「レオ!?!何で!?!」

「ッ!?!アンジェリカさん!!前!!」

「危ないですう!!」

アタシとシヤンは前衛で相手を攻撃、茜が後方でアタシ達の支援をするっていう戦闘陣形フォーメーションをとっていた。

「邪魔しないで!!」

「ぐっ!?!」

向こうはアタシの大鎌の一閃を波打つ大剣、フランベルジュで防ぐと距離をとる。

向こうの武器は武器を破壊するための武器だけどアタシ達の武器はそれぐらいじゃ壊れない。さすが、ソラの武器!

「は!?!今はそんな場合じゃなかった・・・!」

「いいから真面目にしてくださいですう!?!」

「もう!アンジェリカさんは三谷君の応援にどうぞ!あたしが何

とがします!!」

茜はそういうとエリアを呼んで、相手を攻撃するように言った。  
・・・でも、ソラにノルマ付けられちゃってるしな。

「・・・ソラ、ゴメン」

アタシは距離をとってこっそりと魔法を使う。

「・・・ヴァンパイア・スヘルゲン 吸血呪 マガン 夢幻ノ魔眼 ・・・！」

アタシはその目の状態で相手に向かって全力でダッシュ。そしてその目で相手を睨みつける。

魔法抵抗が高かったら意味が無いけど、やらないよりはマシ！  
幸いにも相手は催眠術に掛かったみたいだった。  
相手は急に眠気が襲ってきているはず。  
シヤンの近くに行って耳打ちする。

「今のうちに！」

「・・・こっそり使ったですか？」

「バレてないから問題ないよ！」

「それもそうですっ！」

一気に相手に肉薄してアタシは鎌をフルスイング。  
シヤンは『気』を込めた拳で相手に凶悪な一撃を加える。  
敵二人はアタシ達の攻撃で一気に壁に吹き飛ばされた。



「おっけですう！」

「アタシはソラとレオを何とかする！」

「私はラズとか言う人にするですう！」

「・・・じゃ、平地さんで！」

そういうとバツと分かれる。

ソラはなんとかレオの咆哮を避けたらしく、今はレオをなだめにかかっている。

「レオ！落ち着いて！」

でも、レオはただ苦しそうにソラに攻撃をしている。  
何で？

「ソラ！」

「リカ？レオが何か変なんだ！！！」

ソラにしては珍しく、ものすごく取り乱して今にも泣きそうな表情だ。

・・・よっぽど、レオに攻撃されたのが、そして苦しんでいるのが堪えたんだろう。

「何があつたの！？」

「いや、あいつが何か仮契約とかで主人だからって・・・」

「・・・嘘」

契約、それは自分と魔物や動物と魔力的な繋がりを作る魔法。これをすれば言うことを理解できない魔物でもその意思を理解できるし、言うことを聞かなかつたら命令して無理矢理に実行させることができる。

「でも、レオはソラと契約してたんじゃない？」

「いや、ボクは契約なんて初めて聞いた」

「ッ!？」

うかつだった。

ソラは普段から驚異的な魔法を使ってるけど、魔法に関わったのはここ数ヶ月。つまりは素人同然。普通なら知ってるようなことでも知らないことのほうが多い。

「・・・でも、アタシにもどうすればいいかわからない。でも、このままだと、レオはあの人にとられちゃう」

アタシがそういうと、ソラははっと目を見開き、そして決意の籠った目をアタシに向けた。

「・・・ボクがレオを何とかする」

「でも・・・」

「あれは『仮』って言うってた。それに、まだ自我を保つかって・・・」

「……そういえば、普段のレオならもつと速い」

でも、レオはところどころで今の動きを拒絶するみたいに一時的に停止している。

……『飯』だから完全に支配下に置いていない？

「なら、チャンスかも!？」

「……よし、じゃあ……リカは冬香のところに行つて。それでインチョーをこつちに。相手は火の魔法使だから水の属性で何とかなる」

「わかつた!」

そういうと、ソラはレオに向き直つた。

……がんばつて、ソラ。

side樹

「何だ!?!どうした!?!」

廊下に声が漏れてしまったのか、慌てるような声が聞こえました。

「まずいです。シャオ……!」

「メイド服よりもこつちの方がらくだから俺的にはむしろラッキ―だ!?!」

シャオはメイド服を脱ぎ捨てると、下からは中華風の戦闘衣が現

れました。

「……シャオは、こういう風に武器とかを隠すのが得意ですからね。」

しかも、いつの間にかトンプアーを出しています。

「ここまでの恨みッ!」

「おい!? さっきのメイドがいきなりチャイナな服を着たぞ!」

「サービスか!」

「俺は漢オトコです!」

「「ぎゃあああああああ!?!?!」」

「……深くは突っ込まないでおきましょう。」

今のシャオは軽く狂戦士バサカとなってますし……。

それよりも春樹さんです。

「う、ああ……!」

私は脈や瞳孔を確認し、容態を確かめます。

「……おそらく、禁薬を打ち消そうと薬が働いているからだとは思いますが……。シャンならなんとかできたかもしれません……。」

自然に治るのを待つしかありません。

その時、扉を蹴破るように入ってきたシャオが入ってきました。

「シュウ! こいつは手ごわい!」

「……では、私が行きます。シャオは春樹さんを頼みます」

そして、私はシャオと交代。<sup>スイッチ</sup>

目の前の甲冑姿の方の前に出ます。

「……ずいぶんと重そうですね」

「どうやら、お前達に武器はないようだ。それに魔法も使えない。まあ、魔法が使えたとしてもこの甲冑の前には意味が無いがな」

そういつと目の前の男性はニヤリと（たぶんですけど）笑いまし  
た。

「……なるほど、前衛系職、<sup>ファイター</sup>戦士の中でも防御に重点を置いた守  
<sup>ディアン</sup>護士ですか。確かに、私達のように<sup>クッブラー</sup>拳打士にとっては不利です。  
拳を痛めますから。」

「……油断していると痛い目を見ますよ？」

「ハッ！お前のようなガキが何をできる！！」

「……いえ、私は確かにこの少年と一緒に<sup>クッブラー</sup>拳打士ですが、薬劑  
師でもあります」

「だからなんだ？」

「薬は、用法用量を守って正しくお使いください」

そういつと私は薬ビンを相手に投げつけます。

敵はそれをただ見ているだけで何もしませんでした。

……お気の毒様です。

「何だ？それがどうし・・・た？」

「気づきました？それは気化しやすく、多くの量を吸えばちよつとした麻痺薬になります。ちなみに、本来の用途は気付け薬です」

「な・・・あ・・・!!」

私は立ち上がり、悠然と相手の目の前に立ちます。

相手は目だけで私を追い、体をブルブルと震わせて少しでも体を動かそうとしています。

「最も、私はそんなものでは負ける気もありませんでしたが」

「ガア!？」

『鎧通し』。ゲームとかである防御を無視して攻撃できる技です。現実では鎧などを着けていても衝撃を貫通させて相手にダメージを与える技です。

「さすがシユウ、俺はできないからな」

「ですが、シャオは武器であればいいじゃないですか？」

私は貴方が相手の甲冑の間を攻撃して相手にダメージを与えられる武器を見たことがある気がするんですけど？

「いや、シャンに爪楊枝代わりにされてどっかに行った」

「はあ・・・」

後でシャンにはよく言っておきましょう。

・・・気配を探っても特に人はいないようです。

「気づかれる前に逃げましょう」

「だが、どうする？」

日時は昼間。

隠れられるような場所ありません。まあ、考えてありますが。

私は今の服を脱ぎ捨て、シャオと似たような服になります。

そして、ソラさんにいただいたポケットの魔術符カードから大きなトラ  
ンクケースを取り出します。

・・・少し辛いかもしれませんが我慢してください。

「今から旅行者のフリをして逃げます。更に、陽動のためここで  
火事騒ぎを起こします」

既に宇佐野さんに頼んで警報機の位置は把握していますそこを避  
けて火をできるだけ大きくしておきます。

後は、火を起こして避難してる人たちにまぎれて外に出ます。

「では、ここに発火用の薬を置いておきます。・・・後、三分ほ  
どで火の手が上がります」

「で、どうするんだ？」

「このロビーに移動しましょう。そして野次馬にまぎれましょ  
う。そうすればまさか春樹さんを奪った人が逃げていないなんて思  
わないでしょう」

そして、私達は窓から裏に飛び降りました。  
もちろん、トランクには細心の注意を払って。

私達が着地してロビーに回りこんだとき、ちょうど警報機がなり始めました。

そして、私達のいた階の辺りがバタバタします。

それを私達は不適な笑みをこらえて野次馬に混じってみていました。

side 空志

「・・・レオ」

「~~~~~!!!!!!」

「何をしている!!! さつさと殺せ!!!」

「三谷君の邪魔はさせない!!!」

「レオちゃんを返すですう!!!」

インチョーやシャンちゃんがレオのために戦う音が聞こえる。

そして、レオは声にならない叫び声をあげている。

まるでボクにこれ以上近づくなとも言ってるように。

「なあ、ボク等さ。初めて会った時は、すごかったよね」

誰にも見えない猫。

それがボクの認識。

後になって考えてみれば、当時のボク等みたいに魔法に携わって



いない人には見えない系統の魔法を使つてたんだらうと思う。

そして、その時の疲弊してたレオは・・・まるで人は信じられないとでもいうように、ボクの弁当の残り物を食べず、拳句は鋭い爪で思い切り引つかいてくる始末だった。

「で、全然食べないレオの首根っこ引つかんで無理矢理食べさせたよね」

その時、本当に捕まえるのが大変で、更には捕まえたら捕まえたで爪で引つかいて逃げようとするもんだからボクの腕にかなりの傷ができた。

「・・・でも、それはあいつに・・・ラズにボコボコにされたからだよな？」

だから、レオは人間を怖がり、そして自分とかかわりを持って、またラズが襲いに来られたときに巻き込まないようにしてくれただと思う。

レオは、とても賢い。それぐらいはする。

「でも、ボクやリユウには心を開いてくれた」

春休み、ちよつとづつではあるけど懐いてくれて・・・。

そして、今ではボクの最高の相棒<sup>パートナー</sup>。

「ボクは、今までレオをいて、すごく楽しかった・・・レオは？」

レオはいやいやをするように頭を振り乱し、その強靱な前足をボクに向けたたり、おろしたりを繰り返す。

「でも、まだ・・・これから・・・楽しいことはいっぱいある」

「ツチ！完全に支配下に置いていないのが原因か！！」

ボクの脳裏にレオの姿が移る。

子猫のときに、イタズラをしてはみんなに怒られたり。

やたらといっぱいゴハンを食べたり。

何故かいろいろなものを見つけてきたり。

それで、ボクに甘えてきたり。

ライオンの時ではいつもボクの前に立って手助けしてくれて。

そしてたまに大きな背中に乗せて飛んでくれたりする。

そんな、日常。

「だから・・・これからも、おいしいものいっぱい食べて、遊んでよう・・・。ボクと・・・いや、ボクと、そしてみんなと」

「 契約の行使！！そのガキを殺せ！！」

ラズが力を込めてその一言を言う。

レオは口をあけ、咆哮覇の構えを取る。

でも、こんな至近距離じゃ避けるのが無理だ。

ボクは思い切ってレオの顔のまん前に走る。

そして、鬣を掴み、目の前で怒鳴る。

「レオ！！お前はあんなヤツのいいなりになるのか！？お前は、ボクの相棒パートナーじゃなかったのか！！！」

そして、ボクはレオの頭の振りで思い切り吹き飛ばされた。

これで、レオがボクに咆哮覇を撃つてもレオのほうにダメージは行かない。

・・・終わった、のか？

ボクは絶望的な気持ちで、目を閉じた。

そして、レオの大気を震わせるような咆哮が響く。

・・・。

・・・。。。

・・・。。。。。

・・・。。。。。。。

・・・。。。。。。。。。

・・・。。。。。。。。。。。

「・・・・・・・・あれ？」

なんともない。

ボクは目を開ける。

そこには、ドアップのレオの顔。

「うおわ!？」

「がっ」

いや、驚くなよって言われても。

いくらレオでも・・・顔が猛獣だよ？ビックリするよ。

「って、何で!？」

レオが顔でさっきまでラズとインチョーとシャンちゃんが戦っていたあたりをさす。

そこを見ると、二人とラズを分断するように咆哮覇で造ったらしい溝があった。

「いや、咆哮覇じゃないよ？仮契約は？」

「な、繋リンクがりが、切れた、だと!？」

「……どういこと？」

「がう?？」

「……わかんないって。」

「仮にもレオに起きたことでしょ？」

「まあ、一つだけわかったことは……。」

「レオ、行ける?？」

レオはその言葉に、誰にモノを言っているとも言つかのよう  
に鼻を鳴らす。

「そっか、やっぱり、お前は最高の相棒パートナーだよ。」

「レオ、前に考えた戦術フォーメーションで!？」

「がう!？」

その言葉でレオが先行。

翼を広げて低空飛行をする。

「フウカシャリン  
風火車輪 !!！」

ボクは魔法で自分のスピードをあげ。

レオの後についていく。

先行したレオはその大きな体に似合わない俊敏さで前足を振るい、

鋭利な爪でラズを切り刻もうとする。

そして、向こうはそれを回避。

でも、今のボクはレオの巨体に隠れる形になっている。

「油断大敵!!」

「しまっ!?!」

ボクは引き金を引きまくって銃を乱射。

まあ、こんなもんでしょ。

その攻撃で相手は気絶した。

「こっちは片付けた!」

「わかった!」

リュウはそういうと冬香に拘束系の魔法を連発。

でも、やっぱり割と長くいたからか先を読まれてる。

それにリカを弾幕で近づけさせてない。

・・・なら、こっちも人数増やして何とかするしかないか。

「インチヨーは後方で弾幕系の魔法、シャンちゃんはボクと前衛  
!」

「おっけ!」

「わかったですう!」

そういうとインチヨーはコップを構え、ボクとシャンちゃんは冬香に攻撃。

でも、こっちに気づいて冬香は弾幕の数を更に増やしてくる。

「なんてヤツだよ!!」

「さすがだ、ね!・・・冬香!!」

「・・・何よ?」

冬香はイライラとした感じの声でボクに聞いてくる。  
ボクは冬香に大声で言う。

「そっちのリーダーはやられた!いい加減にあきらめろ!」

「あんた、交渉術ネゴシエーションはヘタクソね!」

「いや、ボク等の交渉のカードがまだ来てないんでね」

「遅れてすみません!!」

その時、声と共に三つの影がボク等と冬香の間に出現した。

「は、ハル!?何で!?ダメじゃない!さつさと・・・」

「大丈夫です。既に魔力発散薬、通称『オーバードライブポーションOD薬』は解呪してあります」

「・・・う・・・そ・・・」

「姉さん・・・僕は・・・もう、大丈夫だ」

「……シユウ、なんでハル君は苦しそうなの？しかもしゃべり  
じぶそつだし」「

「……少し長くなります」

side 樹

（数分前）

「シユウ。これはどうにかならないのか？」

「……私ではなんとも」

ここは私達の宿。

目の前には苦しそうに喉を押さえる春樹さんがいます。

……自然に治るのを待つしかないのですが。

そこで、春樹さんがいきなり私に手を伸ばして何かを言いました。

ですが、声がかすれてよくわかりません。

私は耳を春樹さんに近づけてたずねます。

「……み……ず……」

「水、ですか？」

「とつてくる」

そういうとシャオはすぐに水をコップに入れてとりに来ました。

そして、水を春樹さんの目の前に持っていくと、春樹さんは目にもとまらない速さでコップを引ったくり、水を一息で飲み干しました。

「……ぜえー……ぜえー……」

「……シュウ」

「……私は薬の味見は今回に限っては何もチェックしてません」

私は少し余った解呪薬を取り出し、ほんの少しだけ舐めてみます。

……口が熱い……って、辛いです!!???

私はダツシュで水をコップに入れ、水を何杯も飲みます。

「……まさか、そういうことですか？」

「……だろうな」

私達は、いまだ苦しむ春樹さんに水を飲ませ続けました。

side空志

「と、言うわけです」

「アホか!？何でそんな激辛な薬ができるの!？」

「いえ、偶然にもそういう薬草ばかり使ってしまった」

シュウはハツハツハとか言いながら適当にごまかした。

……ごまかせてないけど。

「僕は、もう大丈夫……。だから、姉さんは……無理しなくていいんだ」



「ハル……」

「ハッ……いい、のか？」

ボク等がその声に振り向くと、そこにはいつの間にも回復したのか、ラズが膝立ちになりながらもボク等を睨みつけていた。

「……どういうことだ？」

「俺が、『フェンリル魔氷狼』を縛るのにたつた一本の鎖だけでやったと思うのか？」

「ちょっと、それ、どういうことよ？」

冬香がその言葉に驚いている。  
……冬香にも隠していた切り札ジョーカーか。

「……こっちに戻って来い。……孤児院がどうなってもよければな」

19話・MISSION IMPOSSIBLE（後書き）

作 「やつがついにカードをきつてきた!!」  
空 「いやぁ、ホントだね」  
作 「つーワケでどうなる!？」  
空 「まぁ、何とかしてはおいたから大丈夫だと思うけど」  
作 「・・・面白くない」  
空 「いや、どういう面白さを求めているの？」  
作 「と言っわけで次回予告」  
空 「・・・聞いてない」  
作 「相手の出してきたカードに空志はどう答える？」  
空 「まぁ、コネをいろいろと」  
作 「そして勝負の行方は！」  
空 「なんかそれっぽい」  
作 「次回もよろしく!」

## 20話・THE END

side 冬香

「孤児、院？嘘、何で？」

意味がわからない。

何でよ？

そんな・・・院長先生も、チビ達も関係ないじゃない・・・！

「お前が言うことを聞けば問題ない。さっさと戻って来い」

「貴様！」

リュウが怒りでラズを攻撃しようとする。

わたしは、もしもここでラズを守らなきゃ孤児院を襲われると思  
って思わず防御のための魔法を展開した。

氷の壁がラズをリュウの攻撃から守る。

「冬香！！！」

「リュウ、無理だ。冬香は弟君以外に孤児院まで人質に取られて  
いたんだ」

「ソラ！お前、これを！」

「・・・ハル君から聞いていた」

「なら、何で三谷君は・・・！」

無理よ。

いくらハルに教えてもらったからってそんなどころつ出来ない。それに、そんな戦力がすぐに集まるとも思えない。相手は、プロの人間よ。

「うん、さすがにそんな守る戦力は集められないから、ここに呼んだ」

「「「・・・は？」「」」

全員が思わず素つ頓狂な声を出した。

その時、わたしの耳に幼い複数の声が聞こえた。

「とーねえー！」

「がんばれ〜！」

「まけるなー！」

そのほうを向くと、そこには小さな子供が十数人と、初老の女性がいた。

「・・・院長先生？」

「あんだねえ・・・。だからやめとけって言ったんだよ。あたしや」

「ちわー。ボクがソラです」

「なるほど。わざわざ呼んでもらって悪いねえ」

「いえいえ。皆さんも冬香の雄姿を見たいでしょうから」

「な、なんだと……」

ラズが驚きに目を見開いている。

わたしもそうだ。

だって、こんな大人数を転移させたら、すぐにバレる。

「タネは簡単。ボクには、普通じゃない仲間があちこちにいるんだよ。学園とかにね。それでこっそりと転移させてここに呼んだ。でも知らなかったよ。精霊魔法の転移はマナを使うから察知されにくいんだね」

精霊魔法。

……そういえば、ソラの知り合いに一人だけ精霊魔法を使える女の子が……。

「で、でも、学生ギルドがそんな……危険な依頼を……」

だって、そんな特殊部隊みたいなこと、学校側が認めるはずがない。

「いや、ボクが頼んだのは『孤児院の留守番』」

「ボクはまず、魔法学園の学生ギルドに依頼として『孤児院の留守番』を出した。

それをスズ達に頼み、ひよつとしたら武装した空き巣が入るかもって言って全員に武装させた上で行かせた。これなら、サリナさんに事実を少しだけ言ってないだけで、大丈夫。」

「でも、相手はプロよ！？そんなことしたら・・・！！」

その時、ソラのほうからケータイの着信音が聞こえた。  
ソラは試合中にも関わらず普通にケータイに出る。

「もしもし？・・・お、カザハじゃん。・・・わかった。引き続き留守番をお願い」

そういつとソラはケータイを切って、わたしに向き直る。

「いやあ、やっぱりさ偶然にも武装した空き巣が来たってさ。まあ、そこにはアスカに四条さんがいたからさきに動きを察知して逆に奇襲をかけたって。てか、重力系属性のジグにイトコの子の口イとかSの人も多々いたとか・・・。空き巣の方々にはドンマイとしかいいようがない・・・。まあ、守る戦力じゃなくて攻める戦力を投入したのが大きいだろうけど」

「おま、え！！」

「ん？どうかしました？ボクは、たまたま頼んだ留守番の報告を聞いただけですけど？」

「・・・お前、えげつないな」

「そう？まあ、ボクは基本的に罾を二重にかけようと思う人だからさ」

そう言ってソラは不適に笑う。

わたしも、ハルもただただ驚くだけだ。

「まだ、だ・・・」

「いや、お前の負けだ。とっとと認める」

リュウがばつさりと切り捨てるように言う。

これで、わたしもやっと・・・。

「まだだ！！・・・アウトコード オーバードライブ 暴走 ！！！」

その時、何かがわたしの中で弾けた。

side空志

ラズが、まるで冬香が数法術を使うときのようなことを言った。

確か、『コード』は冬香がその後 フアラックス 槍衾 とか ギガント 巨人 とか発

動させる前につけてた。

そして、それを聞いた途端、冬香が苦しみ始めた。

「あ、ああああああああ！！！！！！！！」

そして、冬香から膨大な魔力が発生し、周囲が凍っていく。

「リュウ！」

「これは・・・」

「ソラ！これ、暴走！」

「急にですか!?!」

「知るか!!」

最悪だ。

「まさかとは思っていたけど……」

「ソラ？お前、これも……」

「うん……いや、暴走させるものだとは知らなかったけど……」

冬香からは、違和感を感じた。

それが何だったのかはわからない。

で、次に数法術をかじったことのあるハル君に出会つと、また、違和感を感じた。

その時に聞いた話からボクは『刻印』と呼ばれる数法術士が使う特殊な魔法の一種のせいだと思った。

でも、ハル君の違和感のおおもとは、魔法薬の効果だった。

そして、相手はどういうのかわからないけどボクは相当用心深い相手だと思った。

だから、孤児院のほうにも何かしてくるんじゃないかと思ってスズ達を配置した。

「でも、まさか刻印のほうに細工してあつたなんて……」

「なんだと？確か、デハイス魔術機械との同調を高める特殊な術式だな？」

「うん。たぶん、それに冬香をわざと暴走させるプログラム魔術構成を組み込んだんだと思う。……でも、何でそんなことをした!!」



ボクはラズに問いかけた。

「ハッ！・・・こんな大衆の前でこんな話を聞かれたら俺は牢屋入り確定だ」

「そんなの決まってるでしょ！！」

「・・・ラズは自分のしたことの責任を放棄するつもり」

「最低ですう」

「そうだね」

「ああ。ロリコンな上にクズだとか救いようがねえな」

「ロリコンは余計だ。・・・まあ、こいつで暴走させ、全員殺す。・・・詰めが甘いんだよ」

観客は別に驚きもしない。たぶん、ただの余興とでも思っているんだろう。

それをわかってラズはそう言う。そしてボク等をあざ笑う。確かにそう思うよ。

「そだね。あんたは詰めが甘い」

「・・・なんだと？」

「ここまで予測したボクが何もしないとも思ってたの？何でシヤンちゃんをこっちに置いたと思ってるんだよ・・・全員、戦闘形フォーメーション」

態変更、ボクが撃つ!!」

「わかった!」

「リュウとリカは前! 冬香を邪魔して周りの被害をゼロに!」

「さすがに無茶を言っな!」

「リュウはできないの? アタシはソラのためならできる」

「・・・負けられねえな」

「インチョーとシャンちゃんはどこで。シャンちゃんは今はいい。インチョーもたまたまに援護する程度。こっちに攻撃を絶対に向けさせないで」

「わかった」

「おっけーですう!」

「私達は?」

「シユウ達はラズを逃がすな。レオも」

「わかりました」

「僕は!」

「君は運営にこのことを説明しに行って」

「わ、わかりました」

これで大丈夫。

ボクは 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を発動させる。

それだけで膨大な量の魔力が冬香から放たれているのがわかった。

「 其は魔に属す法則！！ 」

ボクは魔力を練る。

・・・大丈夫だ。今回は弓なんてものじゃ狙いが外れる危険性がある。

ボクの狙いは、冬香の『刻印』を破壊すること。それが無理でも暴走の術式を破壊。

スズがいればどうにかなったかもしれないけど、今回は仕方ない。向こうの学園で知ってるのはボクかスズ、リカの三人。

でも、ボクはぶっちゃけ行けない。行ったらリュウに殺されそうな気がする。

リカはリカでいろいろとダメな気がする。今回は一人だから男子にこそぞとばかりに告白でもされて話どころじゃなくなる。

で、残ったのがスズ。一抹の不安が無いでもないけど・・・。まあ、しょうがないって事で行かせた。リカのこと以外でならちゃん

としている田中に宇佐野さんも行かせたから大丈夫だろうと思っただけ。

いないものを嘆いても仕方ない。今回はボクだけなんだ。

「 月夜<sup>ツキヨ</sup> ！！ 」

魔法陣が輝く。

そして、ボクはそこに魔力をつぎ込む。

昨日の・・・アレみたいに・・・。

そして、ボクは手を魔法陣の中に突っ込み、一気に引き抜く。  
そこには、一振りの刀。

「バージョン刀、『ゲッセン月閃』」

「何で刀ですう!？」

「矢だと外す可能性がある。今回だけは失敗はダメ。冬香も持たない」

「でも、危ないよ!？」

「今の冬香のほうが危険。インチョーはシャンちゃんを守ってて」

「そ、そういことですか?」

「そ、そういこと」

ボクはレオを呼ぶ。

すると、レオはラズのほうからボクのところに来た。

「レオ、ボクを乗せて冬香の近くに。それで咆哮覇を至近距離で拡散して撃つ。できる?」

「がう」

さすが。

それでこそボクの相棒だ。パートナー

ボクは久しぶりにレオの背中に乗る。

すると、レオは上空に飛び立つ。



「ロリコン！」

「ロリコンじゃない！」

「いいのですか？よそ見しても？」

「つく！？」

「シュウ！そんなヤツより冬香だ！術式は破壊した！」

「な、なんだと！？」

うんうん。

みんなそういう顔するよ。ボクとかスズが魔法を破壊すると、普通はありえないからね。

「さて……。リュウ？リカ？」

「おう。どうする？」

「……ロリコン」

いや、それは関係ないよね、リカ？

……あながちそうでもない？

「こんな……」

……どうも、諦めが悪いようだ。

でも、この人の事だから何かまだ隠してそうだ。

「所で、ガキにやられて、たまるかあああああああ！！！」

そして、ラズは今まで隠していたのかあるものを取り出した。

銃の形をした魔術機械<sup>デハイス</sup>。

・・・なるほど、数法術士だったのか。それで冬香の『刻印』に細工ができたんだな。

「コード 煉獄<sup>インフェルノ</sup>！」

その言葉で、フィールドが一気に火の海に変わる。

やば！？

すぐさまナイフを投げてボク等の周囲を囲む。

「<sup>ゲツカイ</sup>月界！冬香達は！？」

そつちを見ると、インチョーがエリアに頼んで張ったらしい水のドームが展開されていた。

まあ、ひとまず安心だ。

「つか、こつちの方がやべえな」

「これじゃ、下手に動けない」

「確かに冬香の 氷地獄<sup>コキョウトス</sup> より酷い」

考え方によっては冬香のほうが酷いときもあるけど。すると、上の観客席のほうから悲鳴が聞こえた。はっとして上を見ると、火の手が観客席にまで回っている。

「ちょ！？関係のない人まで！！」

「無駄だ。あの野郎、聞くきがねえ」

「……力づくで止めるしかないよ」

そうなるのか。

なら、これを解除して向こうに攻撃しなきゃいけない。

「……でも、ボクが風で炎を吹き飛ばしてもどうなるかわからない。相手は数術士だし。……逆にこっちの力を利用されそう」

「……オレが真言でやるか？」

「でも、リュウが真言をすれば相手は気付くよ。その前に観客を焼かれる」

「……ボクの刀もまだ手元にあるけど、これじゃ無理だ」

「……考えてみましょうがねえ。お前、ミスカモメ水鷗で何とか炎をできないのか？」

「……わかった。やってみる」

ボクは魔法陣を遠隔展開しようとした。

そこで、何故か腰に収めた銃に気付いた。

何故かボクは自分の魔法や武器は解析ができないはずなのに解析できた。

……いや、エボルト進化前の状態ならボクは解析できた。

でも、エボルト進化してボクの銃は自分の魔力に同調するようになって解



析ができなかった。

少なくともティーナと戦ったときはそうだった。  
三点バーストの銃だって撃ったその時に気付いたぐらいだ。

「今は考えてもしょうがない。でも、これなら……」

ゲツカイ  
月界 を展開したままボクは銃を構えた。

そして、ミスカモス 水鷗 の魔法陣を銃に展開。

二人は怪訝な表情を浮かべるけど気にしない。  
銃の回転式弾倉をカチカチとまわし、止める。

バレット・チエンジ  
「銃弾変更 散 ！！」

そして、銃の引き金を引く。そして ゲツカイ 月界 の一部を解除してそこから弾丸のみを出してまた閉じる。

すると、魔力の弾丸は途中で分かれ、更に遠隔展開。  
青色の魔法陣が展開し、水で構成された鳥が何羽も飛び出す。

「おし！見たか！これが『ナハト』の新機能！」

「……別に魔法名つばいの言う必要はなくなえか？」

リュウがボクの銃の操作を見て一言言う。

「いや、初めてだから言ったほうがいいかなって」

「……ソラって、たまに変だよな」

「おい、こいつはいつも変だ」

「リュウ、ちょっと拳で語り合おうか」

「余裕だな！」

ラズがそう言った瞬間、ミスカモメ水鷗に周囲の炎を当てる。  
すると、ミスカモメ水鷗はボンと音を立てて消滅。

「・・・水蒸気爆発か」

「どんだけ高温なんだよ」

「・・・ソラ、なんとかならない？」

「いやあ、さすがに無理かな？」

「ハッ！なら、さっさとこの炎に焼かれる！」

その言葉でラズがボク等に周囲の炎をけしかける。  
さすがに、魔法で炎をガードできてもその熱がどうかわからない。

「まあ、確かにボク等ならできないね」

その時、凜とした声が響いた。

「コード コキョートス氷地獄！」

その瞬間、炎で埋め尽くされた空間が凍りついた。  
・・・てか、よく見ると炎が凍ってない！？

「ありえない。何かいろいろな法則を無視してる」

「違うわよ、バカ！炎の周りの空気だけを凍らせたのよ！」

「……いや、オレが思うにそれってものすごく難しくねえか？」

「でも、冬香……お帰り」

後から誰かが歩いてくる。

「……ただいま」

冬香だった。そして後からはシュウに双子にインチョーが着いてくる。

さすがはシャンちゃんにシュウ。我が回復職<sup>ヒーラー</sup>達は優秀だ。

「つか、あんたももう少し優しく起こせないの？さすがにイケメンじゃないのは前世からやり直しても無理だからしょうがないとして」

「……冬香でもその発言は許さない」

「ちょっと！？リカさん！？仲間に鎌を向けるのはやめませんか！？」

「仲間だ？そいつは、俺達の兵器だ！！」

ラズがそんな風に言う。

……この野郎。

「そうね。確かにアンタ等といたわたしはただの兵器と同じだっ

たわ

「冬香さん!?!」

「平地さん……」

「でもね、アンタ等のつけた『フェンリル魔氷狼』の鎖はね、わたしの仲間に解かれたのよ!?!」

「……冬香さん、かつこいいですう!」

「きさ、ま……!?!」

冬香は今まで持っていたケータイ型のデハイス魔術機械をラズに向かって放り投げる。  
すると、デハイス魔術機械は周囲の氷にあたって砕けすぐに使い物にならなくなった。

「それ、いらないわ」

「お前、デハイス数法術士がデハイス魔術機械を放り投げるこの意味を知ってるのか?」

「ええ。そんなへボいのよりいいの持ってるのよ……『数宝珠』!?!」

すると、冬香の手に機械のボールのようなものが現れる。

「これが、わたしの本当の実力よ!」

冬香が数宝珠を展開し、空中に魔力でできた光のキーボードを展開させる。

そして、指を滑らせる。

「再実行よ！コード 氷地獄コキョウトス ！！！」

すると、先ほどとは比べ物にならない冷気が漂い、周りを凍りだけの世界に変えた。

「つて、寒い！！夏なのに寒い！」

「い、異常気象ですう！！！」

「・・・私はカイロみたいな薬は作ってませんからね」

「つか、お前は余裕そうだな！！！」

「はい。樹族はこういう地方に住んでいたので」

「し、新事実！で、でも、今は寒い・・・ソラ！肌で暖めあおう！！！」

「いや、それは急激に冷えた血液が心臓に行かないようにする緊急措置であって今はある意味緊急事態かもしれないけど確かこれは冬に池に落っこちたとかそういうときに・・・」

「そ、そんなことはどうでもいいです！俺、やばいです」

「シャ、シャオ君、き、狐なのに・・・なんであたし達みたいにな、なってるの？」

「関係ないです」

「な、何だこれは!?!」

向こうはどうもこれを見るのが初めてのようだ。

「冬香、ドンだけ手加減してたんだよ」

「さあ? まあ、殺さない程度に?」

「こん、な氷、業火の前には無意味だ!! コード フェニックス 不死鳥 !!」

すると、相手の上空に炎が集り、五メートルほどの巨大な鳥の形をとる。

ボクは反射的に ツクヨミ 月詠 で解析。

「冬香、属性は『風』と『業火』。しかも結構特殊な魔術構成してる」

「中身は?」

「ボクは数法術の中身を理解してないからそこまでしか今はできない」

「そう。なら、攻撃すればわかるわ・・・コード ギガント 巨人 !!」

そういうと、ボク等の周囲の氷が盛り上がり、そこから手に様々な武器を持った氷の人形が現れる。

そして、冬香がキーボードに何かを打ち込むと行軍を開始。

さすが冬香の一人艦隊。いつ見てもビックリだ。

「そんなオモチャでやられるか!?!」

炎で構成された鳳に冬香の氷人形達が攻撃する。

しかし、攻撃しても魔法が消滅しない。まるで、  
八岐雷大蛇ヤマタノオロチのように。

氷の人形は目立ったダメージこそ負ってないけど、こっちからの攻撃が通じないみたいだ。

「なるほど、要するにソラのヤマタノオロチ八岐雷大蛇 みたいな自己修復のプログラム魔術構成になってるのね」

「そうだ。だから、俺がやめるといわない限りこいつは暴れ続ける!?!」

その言葉通り、炎の鳳はそこら中に炎を撒き散らす。

幸いにも観客は避難してるみたいだ。

でも、これじゃ祭りに来た人にも被害が及ぶ。

「お前等の負けだ!」

「・・・バカじゃないの?」

冬香が相手をいきなり罵倒した。

「なんだと?」

「ソラのヤマタノオロチ八岐雷大蛇 は一応対人系の戦術魔法。だから、別に攻撃がすり抜けても問題はない。基本的に相手を気絶させる程度の

ものだし。でも、あ...たのは違う。それは、相手の拠点を攻めるよ  
うな攻城系の魔法よ？それで、さっきの氷程度を破壊できないんじ  
や意味が無いわ。」

そういうと、冬香は数宝珠にもものすご勢いで何かを打ち込み始め  
た。

「そんな、魔法はわたしが凍らせる！！」

そういった途端、冬香の足元、つまりはボク等の足元に十メー  
トルほどの数法陣が展開する。

「コード・・・<sup>フェンリル</sup>魔氷狼　！！鎖から解き放たれた<sup>フェンリル</sup>魔氷狼の恐  
ろしさを知りなさい！！」

冬香の二つ名と同じ名前の魔法。

それが発動されると、氷で構成された大きな狼が何体か出現した。  
一つ一つの狼が強烈な冷気を発し、周囲を更に凍りつかせている。

「そんな、氷で炎がやられると思っているのか！！」

ラズの言葉に答えるように炎の鳳は狼達に攻撃する。

炎を撒き散らし、狼を溶かそうとする。

冬香は何か操作すると狼達が俊敏な動きで行動を始める。

「この魔法には自立稼動術式、そしてこれまで以上の速さを出せ  
るように計算して、更には発する冷気で相手を凍らせることができ  
るわ。そして、こういう魔法の弱点は・・・」

狼達が炎の鳳に突進していく。



でも、炎の鳳をすり抜けるだけで何のダメージも与えられない。

「ハッ！そんなものは意味が無い！」

「すでにあんたの負けよ」

狼達はその突進の勢いを殺さず、ちょうど反対側にいたラズに突進する。

「・・・な　！」

相手が発したのはその言葉だけだった。

狼達がラズを氷漬けにする。

すると、制御を離れたのか数法術で作り出された炎の鳳も小さくなくなって消滅した。

「文字通り頭を冷やしなさい」

冬香はそういつとボク等のほうを向いてすがすがしい笑みでこう言った。

「んで、ただいま」

「」「お帰り！」「」

こうして、ボク等の元に冬香が戻ってきた。

20話・THE END（後書き）

作 「とうとうわけで『決着』をお送りします」

冬 「やっとここに來れたわ!!」

作 「今回は冬香中心の話を書かせてもらいました」

冬 「の、わりにぜんぜん出てないんだけど？」

作 「・・・ドンマイ」

冬 「・・・シバくわよ？」

作 「女の子がシバくとか言っちゃダメです」

冬 「うるさいわね」

作 「命の危機!?!?!次回予告!?!」

冬 「・・・いつもその手で逃げるわね」

作 「次回予告してれば攻撃できないからね!?!」

冬 「逆に、終わればやりたい放題よ」

作 「・・・このまま、終わろうかな？」

冬 「じゃ、氷漬けにしてあげるわ」

作 「ちょ!?!待っ!?!冗談!?!いやあああああああ!?!?!?!」

冬 「まあ、そんなわけで次回がこの章のエピローグよ。次回もよろしく」

## 21話・SEA!

side空志

季節は夏。

夏といえば海!

というわけで闘技大会の翌日。ボク等は海に来ていた。

何故か留守番部隊のはずの風葉達がいるのは気にしないでおう。

「わ〜い!海だよ〜!」

「うみー!」

「ひろーい!」

「ちょっと!?!あんだ達ちゃんと準備運動しなさい!」

「綺麗ですう」

みんな元気だね〜。

・・・ボクは溶けそうだよ。

「ソラ?大丈夫?」

「大丈夫・・・たぶん。まあ、リカも気にせず遊んできなよ」

ボクがそういうと、リカは申し訳なさそうな顔をしつつも海のほうに走っていった。

・・・というか、いつの間に水着を買ったの?

ボクの脳裏には何故かピースサインをする母さんと海美が思い浮

かぶ。

「だが、以外だな。・・・おそらく、冬香か？」

「そうですね。私も一番はリカさんかと思っただけですが・・・」

「だが、あれがちょうどいい！」

「・・・シャオ君。あの男衆は何を言ってるの？」

「・・・大きいです」

・・・なるほど。

何がとは聞かない。

ただ、冬香は以外に着やせするタイプだったらしいとだけ言っておこう。

「うんうん。以外に冬香っちはナイスバディなんだね」

「・・・どっから沸いてきた。そしてその水着は何だ？」

まず、リカは黒のビキニっぽい水着。

冬香はごく普通の青の水着。

スズはひらひらがついた子供っぽい水着。

インチョーはワンピースの水着。

「何で宇佐野さんはそんな狙ったとしか思えない水着？」

「え？スクール水着だけど？」

・・・胸のところにはひらがなで『みみ』とか書いてあるのは気にしない方向でいこう。

てか、何で向こうに行かないの？

「実はこのワタシ、泳げないんだね」

ただのカナヅチだった。

それで暇だったからボク等のところに来たんだろう。

「でも、何はともあれ冬香つちが戻ってきてよかったね」

「まあ、ね」

あの後、氷漬けにしたラズを警備の人に突き出した。

そしてボク等が知る限りのことを全部話して、冬香は事情聴取のために少しだけ話を聞かれ、すぐに解放された。まあ、一目瞭然で脅迫させられてたことがわかるしね。

犯罪者に成り下がった『災禍の焰』は即解散。冬香はすぐにボク等のところにはいつてすべて完了。大会も一応は優勝って事で依頼も完遂。

それで、今日は冬香のいたところの院長先生に誘われて近くの海に遊びに来た。

「でも、いいのかい？あれはあんた達が優勝して手に入れたもんだろ？」

「ああ、んなもん気にすんな。オレ達が持ってたところで使い道に困るだけだ」

「そうですね。基本的に私達は大丈夫ですね」

「薬はシユウが作りますし、ソラさんも装備を整えてくれますしね」

「そうですね。まあ、そのお金で孤児院の子供達に美味しいものでも食べさせてあげてください」

ボク等は優勝賞金を全部、寄付という形でサンクトス孤児院に渡した。

冬香が平謝りにボク等に頭を下げたのが何故か笑えた。

「お〜い！間君達〜！」

向こうからインチョー達が呼んでくる。

・・・どうも、ビーチバレーをしようとしてるみたいだ。

「くらえ！！俺のカザハスペシャル！」

「何の！！このわたしのスナイパーサーブをくらえ！！！」

「スライダーだ！！！」

「ちょ！？重力の魔法ですんな！！！」

・・・何だか混沌と化してるけど気にしない方向で。

「・・・まあ、やることもねえし。行くか」

ボク以外の男子がうなずく。

ボク？

既に夏の暑さに参ってます。

「……まあ、こいつはいつものことだからほっとけ」

「……頼むよ」

できれば何か飲み物欲しい……。

みんなは若干呆れた表情でボクを見ているのを感じ取れる。  
まあ、でもなんだかんだでみんなは遊びに行った。

「……あんたは何で行かないんだい？」

「行ったら確実に溶けます」

とことん夏にダメなボクだった。

現在進行形でうつ伏せで寝ている。

「……おや？」

そこで院長先生が声を上げる。

どうしたんだろう？

「……アンタ、何してんの？」

「冬香？」

ボクが顔を上げると、そこには冬香がいた。

「さてさて、年寄りも少し散歩にでも行くかね」

そういつと院長先生は変に気を利かせて行ってしまった。  
・・・別にボクと冬香はそんな関係じゃないのに。

「・・・どつたの？」

「まあ・・・その・・・何・・・」

何だか冬香の言葉にはいつもみたいに歯切れがよくない。  
・・・何か悩みかな？

そんなことを考えてると冬香がボクの隣に腰掛ける。

「悩み？」

「違うわよ。・・・今回、アンタにはものすごく世話になった気がして」

そんなことか。

「別にボクだけってわけじゃないでしょ。・・・それに、仲間だから当然」

「・・・普通、わたしがあんなこと言ったら大抵の仲間はわたしを見捨てると思うんだけど？」

・・・何をこの方は言っておられるのでしょうか？  
そんなの、今更過ぎる。

「残念だったね。ボク等は普通の仲間じゃないんでね」

「・・・まあ、確かにいろいろとそうかもしれないけど。わたし





だって、冬香にはそういうイメージしかない。  
それはハル君からも確認済みだ。  
でも、他にも理由があるけど。

「それに……」

「それに？」

ボクはあえてこの言葉を選んだ。

「『お前達はボク等にとって大切な仲間だからね』」

その言葉に冬香が目を見開いて驚く。

そりゃそうだろうね。これは院長先生の言葉をボクが借りた。  
まあ、ハル君から教えてもらった言葉だけだ。

「はあ……アンタはまた……。でも、よくつくわかったわ。  
こうしてアンタはいろいろな人にフラグを作っていくのね」

「……あれ？何だか方向が変わってない？」

「あ、安心なさい。わたしは残念ながら攻略対象外だから。そ  
れにアンタのお姫様が怖いからね」

「……あの……。先ほどから何を？」

「……でも、お礼はしたいわね」

「いや、いいから。別に……」

「わたしの気が済まないのよ。基本的に借りを作りたくない人間だし」

そういつと冬香は何かを考える。

別に借りとか・・・。

ボクはそんなの気にしないのに。リュウは例外として。

「ん・・・やっぱり、女の子のお礼はこれかしら？」

「はい？何を言ってる・・・！？」

何か頬にやわらかい感触。

それが離れたのを感じ取ってボクはギギギッとロボットのよう  
に冬香のほうを向く。

冬香の頬が微妙に赤いことを知り、現実逃避気味に聞いてみる。

「あああ、あのののの！？」

「え？お礼のチューよ。嫌だった？」

「え？・・・いや！？その！？・・・な、何で！？」

「ソラー！！」

「ぶはあ！？」

いきなり飛んできたリカにボクは押し倒された。

・・・何故に？



「これからもよろしく」

ボクにはそういう風に唇が動いたように見えた。  
・・・よし、それじゃあ。このお姫様を何とかしてボクもみんな  
のところに行くかな。

〽数日後〽

sideリカ

「あははは〽。アタシを捕まえて〽」

「お〽い!待って〽!」

海辺の砂浜。

綺麗な海に青い空。

ここにはアタシとソラの二人きり・・・。

あ、よだれが・・・。

「きちゃ」

「大丈夫!？」

なれない砂の地面に足を取られてこけちゃった。

そこをソラが急いで駆けつけてくれた。

そして、ソラはアタシを覗き込むようにして見る。

・・・このシチュエーションは!!

「・・・リカ」

「・・・ソラ」

互いの名前を呼んで・・・そして顔が近づく。

「・・・リカ」

「・・・ソラ」

「・・・リカ・・・」

「・・・ソラ」

「リカ・・・ん！」

「え？」

「リカさん！」

あれ？ソラってアタシにさん付けで呼ぶっけ？

・・・それに声が高い、というより女の子の声？

「リカさん！！！！」

そこでアタシは目が覚めた。

目の前にはソラの妹の海美がいた。そしてアタシはまるで海美に抱きつくようにして顔を寄せ、キスしようとしてたらしい。

・・・・・・夢オチ！！！！

そういえば昨日、帰ってきたんだっけ。

「おい。もう朝だよ〜」

ソラの声と共に部屋の扉が開けられた。

「……あ」

「……ゴメン」

ソラはそういつとすつと何事もなかったかのように扉を閉めた。

「「違うの!?!」」

三谷家の朝にアタシと海美の声が響き渡った。

side空志

「いやあ、てつきりリカがそっちの趣味なのかと」

「違う!アタシは男の子が好きだよ!?!」

「てか、リカさんって華奢なものにもすごい力ですね」

でも、朝の光景を見たら誰だつてそう思うと思う。

まあ、アレを田中に見せたら鼻血噴いて倒れる気がする。

そんなわけでボク等は昨日帰宅。

みんなもそれぞれの家に帰っていった。

冬香はもちろん、孤児院に。

そこで子供達の面倒を見たいようだった。

院長先生は別にどこでも好きなところにいきゃいいと言ってたけど、どことなくうれしそうだった。

これで本当に一件落着。

そして、少しだけボク等は変わった。

「あ、そういえば今日は鈴音と茜に遊びに誘われてた」

「うん。わかった。暗くなる前に帰ってきなよ」

「うん」

そういうとりカはさっさと用意を済ませて玄関に行く。

・・・何でボクを引っ張っていくの？

「・・・ん」

「何？」

「え？海美と奈美が出かけるときにはお出かけの「わかった。後で母さん達はシメとく」・・・して欲しいのに」

そういうとりカはボクに行ってきますと行って一人で出かけた。よし、これでいいんだ。

「あれ？兄貴とりカさんついに終わった？」

「終わった？・・・いや、むしろ始まったんだと思うよ」

ボクも重労働バイトの準備をする。

・・・ログさんがうるさいんだよね。



後で海美がマジで！？とかついに兄貴に春が！？とかいってるけど意味がわからない。

「あ、それとリカに変なこと吹き込むなよ」

そついつと何故か海美は全てを悟ったような顔になってボクに一言。

「・・・兄貴、さすがにそれは引く」

「わけがわかんないから。・・・ボクもバイトに行ってくる。・・・主にボランティアだけど」

「バイトしてたの？まあ、いつてらっしやい」

ボクもそついつと家を出た。

さて、これからが本番だ。

夏の熱い日差しの中をボクは突き進んで行った。

21話・SEA！（後書き）

作 「と、いうわけで！ついに冬香のターンが終了！」

空 「いやあ、今回も大変だった」

隆 「だな」

作 「まあ、そんなわけで次回は九月って事で舞台は再び学校に戻ります」

空 「またか・・・」

隆 「何でそんなに憂鬱そうなんだ？」

空 「だって、学校にはあのテロ集団がいるんだよ？」

隆 「もう、いっそのこと死んで来い」

空 「よし、リュウ。拳で語り合おうか」

隆 「おい。ガントのおっさんになってるぞ？」

作 「まあ、その前に番外編をはさむけど。つーわけで次回もよろしくー！」

## 夏の特別編・奇術師たちの休日？

side 冬香

わたしの朝は基本的に遅い。

それで寮のほうにいてもわたしが大抵一番最後に起きる。

そしてそれは今日も例外じゃなかった。

まず、目覚めてみると朝の四時。

・・・これは早すぎるわ。

わたしにはまったく関係のない時間ね。

二度寝しよう。それがいい。

そして睡魔に誘われるがままに眠りにつく。

次に目が覚めたのは九時。

・・・眠いから寝る。

「「「とーねえ！」「」」

「「「起きろー！！」「」」

グギッ

「ぎゃあああああああ！！？？」

決してこれは年頃の女の子が上げる悲鳴じゃない。

でもしょうがないでしょ！？

さすがにチビガキとはいえ、それが何人も一斉にのしかかってきたらかなりの脅威になる。それに、さつき変な音が聞こえたわよ？わたしの体から。

「おーきーろー！」

「お、起きてるわ」

危うく永遠に寝たままになってた気もするけど……。

「よし！ハルにーにホウコクだー！」

「「「お〜！」「」」

チビ達は編隊を組んで颯爽とわたしの部屋から出て行った。

……後で覚えておきなさい、ハル。

わたしは適当な部屋着に着替えると孤児院のリビングに向かった。そこにはハルと院長先生がいた。

「あ、姉さんおはよう。よく眠れた？」

「ええ、危うく永眠につくトコだったわ」

「安心しな。ちゃんと被ってやるから安心して主の下に逝きな」

「それが聖職者としての言葉!？」

「おや？じゃあ、適当に地獄にでも送っとくよ」

相変わらず無茶苦茶だ！

何でこんな人が教会のシスターなんてやってるんだろっ？  
言葉遣いも結構荒っぽいし。

「そんなに寝めるなよ」

「頭の中を除いたことには突っ込まないけどこっちは突っ込むわ。  
」ピコたりとも褒めてないわ」

そういうと院長先生はケタケタ笑う。

・・・絶対にこの人がシスターなんておかしい。

わたしなら本当に教祖に慣れそうな気がする。

でも、何故か近所の人には慣れ親しまれているのよね・・・。  
世の中不思議だわ。

「あ、そうだ。忘れてたよ」

院長先生はどっこいしょと掛け声つきで立ち上がる。

「あゝ・・・年はとりたくないねえ」

「いや、アンタほど元気がありや十分でしょ」

わたしの言葉にまたもけらけら笑うとのんびりと裏に行った。  
たぶん、教会の掃除とかそんなところだろう。

「よし、わたしも手伝いますか」

「姉さん、院長先生の邪魔しちゃダメだよ？」

・・・善処するわ。

サンクトス教会。

ここは孤児院の隣にある教会。

院長先生・・・サーシャ・クロイツがシスターをして両方を管理してる。

ちなみにここは『大地の王国』ガスにある小さな村。

この国の特徴としては緑が多く、四国の中で一番農業が盛んってところか。

そういえば、樹族の集落はガスにあるって聞いたことが・・・。

「冬香さん？」

・・・後から声ね。これは幻聴だわ。こんなタイミングよく樹族の知り合いがピンポイントで来るわけが無い。

「・・・違います。そして聞こえない！」

「やっぱり冬香さんですう！」

「知らないわ。わたしの名前はトーカ・ヒラーチ。国籍不明の女の子DEATH！わたしの知り合いに双子で獣人族なんていないわ」

「・・・そろそろあきらめませんか？」

「わかったわよ」

後を向くとやっぱりと言うか・・・。  
シュウにいつもの双子だった。

「・・・ハア」

「何で落ち込んでるんですう？」

「さあ？」

「……ひよつとして、それですか？」

「……できれば記憶から消して欲しいわ」

わたしの今の装備。

修道服。

箒。

以上。……完全に教会の手伝い用の格好なわけよ。知り合いには死んでも見られなくなかったのに。

「でも、似合ってますよ？」

「はいはい。どーもどーも。……で、アンタ達は何しに来たの？」

「はい。わたしの師匠が酒を買って来いと」

「……それっていいの？」

確か、格闘家みたいな人はアルコールがダメとか聞いた気がする。

「たぶん、ウチの師匠だから大丈夫ですう」

「……何、その理論？」

何故か男子達もうなずいてるし。

「……まあ、わかったわ。じゃ、さっさと行きなさい。わたしは忙しいの、そしてこのことはしゃべらないで。もし、しゃべったら氷漬けにするわ」

「わかりました」

シユウは、そう爽やかに言うと双子を引き連れて酒屋に行った。  
……てか、未成年が買えるの？  
関係ないしいいか。

わたしは修道服姿で教会の表を掃除すると中に戻っていった。  
そして次の仕事の準備をしに行く。

「何でわたしが修道服このカッコで買い物しなきゃいけないのよ！」

院長先生曰く、大人の言うこと聞かなかった罰だとか神の思し召しだとか言ってたけど。

こんなカッコなんかしたこと無かったから、行く先々で知り合いの人達に驚きの表情で『帰ってきた途端にコスプレに目覚めたのか？』とか聞かれた。

断じて違うと数宝珠片手に説得してきたわ。

「にしても、重いわね……」

食材とかをいろいろと買ったけど、中身が何故かパーティに使うようなものばっかだ。



・・・何かあったっけ？

「おっい！！そつちだ！！」

帰り道の橋の上、いきなり大きな声が聞こえた。

いや、よく聞いてみると何だか騒がしい。考え事に夢中になって気付かなかったようだ。回りにも野次馬がたくさんいる。

声は橋の下から聞こえてくる何事かと思っ人垣の中に体をねじ込んで騒ぎをしてみる。

どうも、川に子供が・・・。

「つて、夏輝!？」

ウチの孤児院にいるチビの一人。

活発な五歳の少年で孤児院のムードメーカーだ。・・・周りにもチビ達がいるみたいね。

ちなみに名前は院長先生が付けてて、いつも春にここに来たから『春樹』とか夏に来たから『夏美』とかいい加減に名前を決めていく。

つて、そんな場合じゃない!!

わたしは数宝珠を出現させて川に飛び込もうとした。

でも、周りの人に止められてしまった。

「離して!!アレは、ウチの孤児院のチビガキの一人なのよ!!」

「ダメだ!危険すぎる!!つい最近、雨が降って川の水量が増している!!」

「わたしの数法術で何とかなるわ!!」

もう、いつそのことこいつを氷漬けに使用と思ったとき、下の川岸から声が響いた。

「あ！？君！！」

「氷華ヒョウカ！！」

その声が響くといくつもの魔法陣が展開した。そして、魔法陣のあった辺りが急速に凍っていく。・・・でも魔法陣で、あの魔法名ってソラ！？そして、氷りの上を一人の少年が走っていった。

「ハル！？」

何で？あの子は魔法が使えないはず・・・。  
ハルは氷の道を川の上に作ると夏輝の近くに行き、ふちにしゃがむと手を伸ばす。

夏輝はハルの手に必死になって掴む。ハルはそのまま引き上げた。

「ふう・・・大丈夫だった？」

夏輝はその言葉にしゃくりあげ、わんわんと泣き始めてしまった。ハルはよしよしとまで続けていた。

その光景を見た周りからは拍手がおき、ハルの健闘をたたえた。

「・・・よし、じゃあ、姉さんが来ると確実に絞られるからさっ  
わっ」

「誰が絞るって？」

わたしはこっそりとハルの後に移動。  
それに気づいてなかったハルはまるで油の切れたロボットのよう  
に首だけを回してこっちを見る。

「あ、あははは……。どう？すごいでしょ？魔法使えたよ？」

「その前に、言うことは？」

「……。総員撤退！！！」

「逃がすか！！コード 氷地獄コキユートス ！！！」

わたしは逃げようとしたチビ達を全員氷の檻の中に閉じ込める。

「さ、さすが姉さん……」

「……で、何でここに？」

「いやあ、これには深いわけが……」

「じゃ、帰ってからゆっくりと聞くことにするわ」

「え？ちよ！？いやあああああああ！！！！？」

こうして、わたしは容疑者らしきチビ達と氷の置物オブジエと化したハル  
を引っ張って孤児院に帰っていった。

「帰ったわよ」

「お帰り。・・・って、春樹は何で氷漬けなんだい？それにチビ達も元気が無いね」

「雨で増水した川に溺れかかったからでしょ。はい、これが頼まれてたもの」

わたしは買った物を孤児院の大きなテーブルの上にドンとおくと院長先生に言う。

「川に？なんでそりゃ？」

「だって、きょうは「しー！いっちゃだめ！！」・・・」

「・・・何を隠してるの？」

「」「隠してないよー！！」「」

・・・怪しいわね。

何故か院長先生は合点のいった表情だし。

「そうかい、そうかい。でも、危ないからね。今度からはすんじやないよ」

「」「ハイ！！」「」

「・・・まったく、元気ね」

わたしはハルの氷を解除。

「し、死ぬかと思った」

「アンタもね、元がそんなに体強くないんだからあんな事やったらダメよ」

「……なるべく気をつけます」

「……あの馬鹿シムの影響を受けてるわ。  
たぶん、魔法もあいつから教えてもらったのね……」

「まあ、いいわ。で、もうすぐ夕飯だけ何するの？」

「ああ。あんた達の『お帰りパーティ』するから適当に待ってな」

「ふん。わかったわ……って、ちょっと待ちなさい」

「なんだい？」

「今なんて？」

「適当に待ってな」

「もうちょい前ね」

「ああ」

「……わかっててやってるでしょ？」

「さあてねえ？」

院長先生はいつものようにけらけら笑うと台所にいった。そしてチビ達もそれについていく。残されたのはわたしとハル。

「……朝から何かを隠してた感じはしてた。で、念のために後をついて行って川で花を摘んでるのを見たんだ」

「……まさか、プレゼントに？」

「たぶんね」

台所のほうからはにぎやかな声が響いてくる。その声を聞いていると何だか穏やかな気分になってくる。

「……姉さん」

「何？」

「ただいま」

「……そうね、おかえり。わたしもただいま」

「おかえり」

わたしとハルは殺風景な孤児院のリビングでにぎやかな声を聞きながら過ごした。

---

From リュウ  
件名 なし  
本文 お前、コスプレに目覚めたのか？

From ソラ  
件名 なし  
本文 まさか、冬香にそんな趣味が・・・。  
リカもビックリしてるよ。

From スズ  
件名 なし  
本文 冬香ちゃん、似合ってるよ〜 (^| ^)(b  
From シュウ  
件名 なし  
本文 すみません。うっかり漏らしてしまいました(笑)

---

わたしはケータイをパタンと閉じる。

「・・・シュウ、覚えておきなさい」

早く夏休みが終わらないかしら？  
みんなに会うのがものすごく待ち遠しいわ。



**夏の特別編・奇術師たちの休日？（前書き）**

今回は別の人のフラグを・・・

## 夏の特別編・奇術師たちの休日？

side 隆介

「・・・眠い」

「そんなこと言っていないで、早く食べなさい」

夏の早朝。

オレを世話のかかるガキのように扱うのはもちろんお袋だ。

・・・別にそんなのんびり食ってるつもりはねえんだけどな。

「ダメよ。もっと早く食べなくちゃ。鈴音ちゃんみたいに」

「あれは無理だ」

リカがソラの関係で限界を超えられるなら、スズは食い物で簡単に限界を超えられるヤツだ。残念ながらオレにそんな超技術スーパースキルはない。つかいらん。

「そう?」

「みゃ〜」

「あら?レオちゃんおかわり?」

あ、そついやレオはソラの家で飼えないからってオレのところに戻ってきた。

・・・つか、猫の癖に凶々しいな。

それに何でお袋は息子のオレよりもレオのほうを可愛がってんだ

よ。

「……じっそさん」

「お粗末さまでした」

オレはそういつと適当に家で過ごすことにした。

「……暇だな」

オレの部屋にいても特に何もすることが無い。  
……でも、あいつらは基本的にここにはいねえからな。遊ぶ相  
手もそんなにいない。

「……散歩でもするか」

オレはお袋に一言声をかけて魔窟ネストの中を歩き出した。  
メインストリートはいつものように人、じゃなくて魔物で賑わい、  
喧騒喧騒に包まれている。

そして、歩いていると一つの店から怒鳴り声が聞こえた。

「貴様、それでも俺の弟子か!？」

「いやいやいや!?!だから弟子にしないでよ!?!それにこれは不  
可抗力で!?!」

「んなもん知るか！魔道具は繊細なんだよ！特に魔銃はな！  
オリハルコン  
！神金鋼でできてるからってそれはかわらねえ。もつと丁寧に扱え  
！！どうしたらこんなバラバラになるんだ！？」

「魔力の込めすぎ？」

「このクソ弟子が・・・」

「だから、弟子じゃ・・・って、何でそんなもの出してくるの！  
？ちよ！？待って！？」

「ファイア  
発射！」

その言葉でログのおっさんところから火災が発生。つか、店に大  
穴が開いた。

その穴から二つの影が飛び出す。

「今日こそはコイツで魔道具のすばらしさと大切さをその身に刻  
んでやる」

「こつちだっていい加減にボクを弟子にすることは諦めろってわ  
からせる」

バルカン砲の様な物を抱えたログのおっさんといつの間にか銃を  
構えたソラの二人だった。

警備のヤツ等は何ですぐに来ないと思っただらやってきました。

そして、すぐに結界を二人を囲むようにして張る。

「・・・おい」

オレは近くにいた警備の一人に聞く。  
ちなみにオレはジジイの仕事柄で警備のやつとかなり昔からいる  
魔物なら大抵のやつは知っている。

「はい？・・・これは隆介君ではないですか」

「ああ。で、何であいつらを止めない？」

「いや、こついうことは何回かありまして・・・。いえ、最初の  
ほうは止めようとしたんですよ？」

そついうと結界の中からいきなり爆音が響く。

見てみればログのおっさんがバルカン砲型の魔砲をぶっぱなして  
た。

そして、ソラはいつものように魔法で応戦してる。

「・・・さすがにアレを止めるのは無理だって事が中央警備隊の  
判断です」  
センターガード

なるほど。それならしょうがない。

オレもあの中に飛び込もうとは思わない。

それで、周りに被害を出さないように結界を張ることにしたって  
ことか。

「ログさんが勝つほうに賭ける」

「いや、ソラのほうだろ？」

どうやらあの二人は結構な有名人になってるらしい。

「あ、コラ！賭け事は禁止！」

そついうと賭けをしようとしていたやつところに注意をしに行  
った。

・・・まあ、見ても面白くねえし行くか。

オレはそついうと再び散策を開始した。

だが、少し歩いただけでまたも足を止めるハメになった。

「おい！これって、学園の紋章の最新版！？つか、これが普通に  
ここで普及してる！？」

「・・・これは・・・業物・・・」

「おお〜！？何この機構！？オレツチに教えて！！」

「すばらしいですね。ここまで珍しい銘柄の紅茶が・・・しかも  
安い・・・」

・・・いつからここには気軽に人間も来るようになった？

いや、目的が人間との共存だから問題ねえんだけどな・・・。

すると、狙撃銃用の部品を見てた女子がこつちに気付いた。

「あ、三谷の隣にいた黒いの！！」

「違いよ。誰が黒いのだ。つか、何でいんだよ」

「え？普通に？」

普通につて・・・。

ここはエナードの中心よりほん少し南にある広大な森、通称『迷

いの森』にある隠れ里みたいなもんだぞ？

ここに来るためには通行を許可を貰って自分の転移魔法を登録しないと来れない。

徒歩で来るヤツは確実に森の中で野たれ死ぬ。

万が一にもこの近くに來ても設置型の転移罫ポータルトラップでランダムで森のどっかに転移される。

まあ、前回のバグニールの進行はホントにイレギュラーだったとしかいいようが無い。

オレの疑問に答えるかのように影の薄い、つか、存在感を感じさせない男子がオレに言った。

「……我々は隆介殿の祖父殿に許可を貰っておりますゆえ」

「ああ。なるほど。わかった」

「でも、何でこの商品で似たようなのがこっちの学校に？」

今度はやたらと動物を連れた女子がオレに聞く。

「知らねえのか？お前等んとこのサリナ理事長はウチのジジイと古くからの知り合いだ。それでたまにこっちが技術を提供、あるいは試作品のデータを取ってもらっている」

「なるほど」

そういうと向こうにいるヤツが全員納得した。

……つか、何でこういう状況になっただ？

「お前は魔法剣使いではないか！！」

・・・何故だ？

こんなにうるさい人間の知り合いは一人しかいないはずだ。だが、知り合ったのはつい最近、ここに来れるわけがねえ。

「おお〜？リュウ君だ〜」

「お前かよ」

何故か向こうから大声の主、『セブテム・ベッカー』で『七つの罪』で『憤怒』を司るヴァルス・サタンとその愉快的仲間達がやってきた。スズと一緒に。

「まあ、こいつ等が何でここにいるのかはわかった。で、何でここに来た？」

「魔物の統括する平和な都市を見てみたくなっただけ！」

「うるせえ！！」

「む！？すまんな！！」

ダメだコイツ。

他のやつ等もゴーイングマイウェイな感じでおのおのが適当に見てる。

・・・若干一名ほど歩きながら、そして時に立ち止まりながら寝るといふふざけた技を披露してるやつがいる気がするが気にしないでおこじ。

「すごいな。ソラの周りはこんなに個性的な人ばかりいるのか・・・」



「・・・そこで何故、オレを見る？」

オレは一人の男子生徒に突っ込んでおく。  
つか、誰かこの空間を何とかしてくれ。

「そーいえばリュウ君はこんなところでどうしたの？」

「散歩。特にすることもねえしな」

「へ〜」

「んじゃ。オレは適当に過ごしてるからお前等も暗くならねえうちへ帰れよ」

そついうとオレは今度こそあても無く一人で歩き出した。

「・・・にしても暇だな」

オレは今、公園にいた。

アレから特に何も無くてオレは冷たい飲み物を買って適当にベンチに座った。

・・・公園に一人とかねえわ。

周りを見渡してもここにいるのはオレ一人。

こついうのを見ると世界にオレしかいねえみたいだな。

まあ、こついう風に静かなところで昼寝も悪くねえか。

幸いにもここは木陰の中。

それに近くに池があつてわりと涼しい。

まあ、実を言つと魔窟<sup>ネスト</sup>は結界に囲まれててジジイがそれに特殊な術式を組み込んで夏でもそんなに暑くならないようにしてある。

まあ、十分に暑いが。

まあ、することもねえし・・・昼寝だな。

オレはベンチにごろんと横になると目を閉じた。

・・・なんだ？

後頭部にやわらかい感触。

目を開けてみる。

すると、かなりの時間を眠っていたのか日が西に傾いていた。

そして、目の前には見知った顔。

「・・・何してんだ？」

「ふっふっふっ・・・膝枕だよ」

いや、それはわかる。

わからないのは何でお前がそんなことをしてるかつつー事だ。スズ。

「うん・・・何となく？」

「・・・そういうのはカレシにでもしてやれ」

オレはそう軽口を叩きつつ起き上がる。  
そしてベンチに二人で腰掛ける。

「でも、いないんだよね〜。一度でいいからモテてみたいね〜」

「……どの口で言いやがる？」

さすがはパッシブスキルにゴーイングマイウェイLV5（MAX）があるだけはある。天然過ぎる。

「お前が言えば大抵の男子は涙を流すと思うがな？」

「え！？そんなに嫌なの!？」

「……逆だ」

「逆〜？」

一瞬だけ泣きそうな顔になったスズはオレが否定すると余計にワケがわからなくなったような表情で首をかしげた。

「お前な、自分が周り比べてかなり可愛い部類に入ってることに気付けよ」

「え〜？だって、リカちゃんとか冬香ちゃんのほうが美少女だし、綺麗だよ〜」

「比べる対象を間違ってる」

それにあの二人はスズとは違う系の顔立ちだ。

ま、冬香が女子にしては凛々しい雰囲気綺麗。リカが花も恥ら

うの美少女ならスズは可愛い。  
どれも似たような意味と思ったヤツ、これが違うんだな。

「だって、二人とも学校にファンクラブがあるって噂だよ？」

「おい。お前もあるぞ？」

「ドンだけボケる気だ！？」

「さすがに疲れてきたぞ！？」

「またまた〜。嘘でもうれしいよ〜」

「・・・何だか疲れてきたな」

コイツに熱を上げている男子のヤツにオレはエールを送ろう。

「そうか、誰かに似てると思ったら、お前はソラに似てんだな」

「ソラ君に〜？」

「ああ、主に自分が全然にモテないと思っているところが」

「そんな！？いくらわたしでもそれぐらいはわかるよ〜！？」

「いや、わかってねえだろ」

そこでオレはふと思った。

・・・コイツは、オレが魔法を庇ったときに過剰なまでに反応し、魔法を暴走させ、結果的に真言らしきものを発動した。

オレの記憶が正しければ今までに死ぬような目に何回もあってた

にも関わらずだ。

「わかってるもん……。だって、リカちゃんがソラ君にゾッコなのは知ってるし、二組の……」

「お前さ、何であの時魔力が暴走したんだ？」

「……え？」

スズは突然の質問にほうけた表情になる。

そして、何故か顔を少し赤らめる。

「……リュウ君の裸を見ちゃったんだっけ？」

「おいコラ、変な部分のみを思い出すな」

「リュウ君がわたしのせいでお婿に行けなくなっちゃった〜!？」

「……で、何であの時は異常に反応した？」

そう聞くとスズは少し赤い顔のままオレに言う。

「……あの時ね、リュウ君が死んじゃうかもって思った」

「大袈裟だな。あそこはそういう大会だ。ちゃんと対策ぐらいしてあるに気まってるだろ？」

「……うん。でも、すごく不安だった。このまま、わたしの手の届かないところに行っちゃうかもって思った」

そういうと、スズは何を思ったのかオレの左手を自分の右手でぎゅっと握った。

まるで、どこにも行かないで欲しいとでも言うように。

「おいおい。オレはまだ十五年しか生きてねえんだぞ？まだまだ死ぬつもりは無い」

「でも……」

スズは更に手に力を込める。

そんなに強くは無い。だが、何故か絶対に離れない……そんなような気がした。

「そうじゃなくてもイヤだったよ。……リュウ君を見るとね、傷つくところを見てるとね、何だか……苦しくなるの……」

いつものスズでは見れない切なげな表情だった。

オレは静かにスズの言葉を聞いた。

「……まるで、告白だな」

「……うん、そうだね。わたしは……リュウ君のコト、好きなのかな？」

「疑問系かよ」

「だって、わかんないんだもん」

「……まあ、オレ達はまだまだガキだしな」

そういつとオレは雲ひとつ無い快晴の空を見上げた。  
空は青く、突き抜けるように高い。

「……でも、つい最近はリュウ君に会うとちよつとドキドキする。それにずっと一緒にいたいって思うときがあるよ」

「……いきなりカミングアウトか？」

「そだね。カミングアウトだよ」

スズを見ると照れた風な顔で言う。

「……コロコロ表情を変えて大変なヤツだ。」

「だが、いきなり言われても困るな。うれしいけどな」

「何で？」

スズは残念そうな表情で言う。

「……オレとお前には決定的な差がある。」

「オレは竜ドラゴンで、お前は人間。この差はでかい」

「？」

「人間の寿命は大まかに見て百だとすると、竜は千年ドラゴンを生きる」

「え？でも、さつきはリュウ君も十五年しか生きてないって……」

「

「ああ。魔物の特徴で大抵の魔物は人間で言うところの成人、つ

まりは二十歳ぐらいまで人間と同じような成長スピードだが、そこから変化が現れる。急激に成長スピードが落ち、その種族の天寿を全うする。だから、大抵は同種族間で交際とかしてんだ。あるいは寿命が近い種族同士とかでな」

そうしないと、片方が悲しむ。

大切なヤツを先に亡くすんだからな。

「・・・じゃあ、ヴァンパイア吸血鬼は？」

・・・聞くと思った。

リカとソラが心配なんだろうな。

「・・・ヴァンパイア吸血鬼は、寿命が存在しないと聞いている」

スズはその言葉で悲痛な表情になった。

・・・だろうな。リカはソラに自らを捧げるかのように依存している。

それこそ、ソラが死んだら確実に後を追うぐらいに。

「でも、リカちゃんはそのことを・・・」

「もちろん知ってる。自分自身のことだしな。・・・だが、これには例外がある」

「例、外？」

「ああ。特殊な方法を用いることによって長いほうの寿命に依存させる。簡単に言うとコンソメと人間がこの方法を使えば相手の人間が千年生きられるようになる」



「え？じゃあ、そうすればいいじゃん」

「……よく考える。その間に、自分の家族や友人、そいつらが先にどんどん死んでいくんだよ」

スズははっとした表情になり、うつむく。

そう、どっちにしても辛いことに変わらない。

一人をとるか家族をとるか。最悪な二者択一<sup>オルタナティブ</sup>。

普通は無理だ。選べない。

「だから、リカは自分から告白しねえし、そうしようって言わねえんだよ」

ソラ至上主義のヤツだからな。

ソラに辛い思いをさせたくないんだろうな

だから、今を、そしてこの瞬間もリカはソラと少しでも長く過そうとする。

「……はっ！そういえば重要なことを聞いて無かったよ〜！」

「……おい、さっきまでのシリアスを返せ」

スズはオレの言葉を無視してぐいと顔を近づけた。

「わたしの告白モドキを聞いてリュウ君はどう思ったの？」

「……言わないとダメか？」

オレはガラにも無く弱気な声でスズに聞いた。

だが、スズは首をぶんぶん縦に振って先を促す。

「オレは・・・わからねえな」

オレがそういうと、スズは一瞬、ぼかんとした表情になり、そしてぷくうと頬を膨らませた。

「むう・・・ズルイ」

「お前もわからねえっつーただろ!？」

「ズルイ!! そういう時はオトコノコは甲斐性を見せなきゃいけないんだって美未ちゃんと冬香ちゃんが言ってたよ!!」

あの二人の言葉を真に受けるなよ!?

アレは面白半分で言うことが大抵だぞ!?

オレとスズはしばらくの間、互いにぎゃーぎゃー騒いでいた。手を繋いだまま事に気付かないまま・・・。

「・・・なんでこうなった？」

いつの間にか周りは暗くなっていた。

そして、スズは疲れたからかオレの肩にもたれるようにして眠っている。しかも、さっき気がついたが手がぎゅっと握られたままだ。解こうにも解けない。

・・・オレにどうしろと？

「いやあ、熱々だね」

「で、お前はいつからいた？」

オレは後から聞こえた声に特に驚きもせず answers。  
冷やかしかはガン無視だ。

「ホントについさっきだよ」

ソラはオレの近くに来ると、オレとスズをしげしげと眺めた。

「スズはリュウの好みどストライクだからね」

「おい、バラすなよ？」

「別にいいじゃん。みんな知ってるって」

「いや、断言する。絶対にお前以外は知らない」

「鈍感だね。リュウがスズをいつも守ってることぐらいみんな知  
ってるって」

「・・・お前にだけは言われたくねえ」

「それに寝てるところを起こさないあたり、優しさが滲み出てる」  
うるせえ。

オレの言葉は無視すんな。

「で、何でこうなったの？」

「……成り行き」

「そっか」

ソラはそういうと暗くなり始めた夕暮れの空を見る。

「まあ、なんにしても後悔の無いようにとだけ言っとくよ」

「うるせえな。お前はオレのお袋か？」

「優子さんならスズと付き合っぜ！って言っても、はいはいで済ましそっけど」

「お前、甘いな。お袋のことだからスズを泣かせたら絶対に息子のはずのオレが殺される」

「ああ……なるほど」

そういうとソラはそれがあつたかと手を叩く。  
だがな、オレは攻撃されっぱなしっーのは性にあわねえ。

「お前も早く帰らねえとリカに殺されるぞ？」

「……マジで心配になってきた」

ソラは顔面を蒼白にしていった。  
そのまま。

「じゃ、ボクはダツシユで帰る！！リュウもスズを送ってあげなよ！！・・・それとリュウ、ゴメンね」

「あ？」

オレが何故急に謝ったか聞こうとするとソラは南門に向かった。そこにある門で学校に行くんだろう。

「んだよ。おい。起きろ」

オレはスズを揺すって起こす。すると、スズは眠そうな目をこすって起きる。

「おはよ〜・・・あれ？何でリュウ君が家にいるの？」

「バカか？ここは魔窟だ」

「おお！？お昼寝しちゃった！？」

「・・・まあ、いい。とっとと帰るぞ。とりあえずオレがお前んちまで送ってく」

「うん！了解だよ〜！」

そういうとスズは寝起きのはずなのにやたらと元気な声を出し、オレの腕を掴んで引っ張って行った。

side 空志

「・・・よし。行ったみたいだ」

「でも、何でこんなことしたの？」

草陰にはボクとリカがいた。

なんだかんだで何故かリカがボクを迎えに来た。

そして、帰る途中で騒いでるリュウとスズを発見。

で、何だか面白そうだったからリカと覗き見してた。

「ボクの悪友にちよつとした恋のお手伝い」

「……でも、何もしてないよね？リュウがスズ好きなのってみんながそこはかとなく感じてたよね？」

「若干一名ほど違う女の子がいるけどね。スズって鈍感だね」

「……ソラ、全世界の生物に土下座して謝って。そしてアタシにも」

「何故に!？」

何かりカにした!？

全然思い当たらないんですけど!？

「じゃあ、何で鈴音が寝てる時にあんなこと言ったの？」

「いや、ボクはちゃんと起きてるのを確認したよ。魔力でだけど」

ボクは 月詠ツクヨミ をして魔力の感じからスズが起きる直前なの感じ、  
そこでリュウに接触。

たぶん、スズは全部聞いてると思う。

「ま、そういうわけでリュウがスズに惚れてることがバレちゃったわけだ」

「……でも、種族が違つと寿命が」

「知ってるよ。ログさんに聞いたことがある。でも、ボクならそれぐらい何とかする。それはリュウも同じだと思つね」

もし、その程度でスズを悲しませるんなら優子さんじゃなくてもぶつ飛ばす。

それこそ全力で。

「……ソラは、いつもすごいね」

「そう？まあ、影ながら二人を見守つて行きましようか」

そういうとボクは立ち上がった。

もう、門ゲートに向かつてもリュウと鉢合わせつて事態にはならないでしよ。

「……ねえ、ソラ？」

「ん？どつしたの？」

「……も、もしも、アタシが……やっぱりなんでもない！」

そういうとリカはボクの前を走る。

そして、ボク前に来るとくるりと反転して体をボクに向ける。

「ソラ、アタシは、あの二人なら大丈夫だと思うよ」

「……うん。ボクもそう思うよ」

「……よし！じゃ、帰ろう！」

「……だから、腕に……もっいいや」

ボクとリカはいつものように薄暗い夕暮れの道を歩いていった。





「……すみません」

九月。

二期生の学校にとって、今回は前期の期末試験。  
夏休み明けにあるって言うのがホントに泣ける。

だがしかし!!!

今回のボクは違う!

今までは魔法を使いまくってぶっ倒れたりとかで補習の嵐!!  
だが、今回はそんなことは無い!!

普通にテストを受けられる!!

普通。

なんていい響きなんだ!!

やっぱり世の中普通が一番だね。

ボクは配られたテストのプリントを見て問題を解いていこうとする。  
る。

問1

魔法展開方法にはいろいろな種類がある。その中で自分が知っているもの……

「ガントさああああああああん!？」

「何だ？テスト中は静かにしろ」

ボクは試験監督になっているガントさんにテストの問題について突っ込む。

だって、隠しといてこれ!？

何がしたいの!？

「大丈夫だ。特定の人物仕様だ」

「な、なるほど。さすがにそうですね。いくらなんでもそうですね  
すよね」

ボクは乾いた笑い声を上げながらもテストに意識を戻した。

問2

大馬鹿野郎、三谷空志の中間テストの点数は？

「シバくぞ貴様あああああああ!!!」

「うるさい!そんな簡単な問題で躓くな」

「どういう意味、それ!？」

「決まってるだろ。答えはゼロだ」

「おい、言うな。まあ、サービス問題だからいいが」

「ダメだろ!？何このアホ教師!？」

こいつら最低だ!!

・・・これだと他の問題もろくなものが無い気がする。

ボクはとりあえず全部の問題に目を通してみることにした。

### 問3

次の中でフラグを乱立させるのが得意なのが?

a . 上条 麻

b . 三谷空志

「ちょい待てやあああああああああ！！！！」

「いちいちうるさいぞ」

「何この問題！？オタクか！？しかも何でボク！？」

「これが一番難しいんだがな」

「嘘だ！確実にボクは別の意味でのフラグゲッターだ！！」

「え〜。ものすごく難しいよ〜」

スズ、お前の目は節穴か！？

つか、何でみんなも確立は二分の一とか言ってるの！？  
次！！

問4

テストなう

「何つぶやいてんのおおおおおおお！！！？？」

「……………いい加減にしてくれよ」

「こつちがだよ!!何でテスト中につぶやくの!?!しかもどう答えたらいいの!?!」

「最近流行のツイッターとか言うヤツだ。そして問題の答えを考えるのがテストだ」

これは絶対にテストじゃない!!  
ほ、他の問題は!?!???

問5

は みねか るさんの作品を三つ以上答える

・・・うん。ちよろいちよろい。  
え〜っと・・・怪盗ピ・・・。

「こつこめやあああああああ!?!?!」

「わ!?!急に何!?!キレる十代!?!・・・あ、ガントさんはおっ  
さんか」

「ついさっきまで突っ込んでいたにも関わらず急に放棄するなあ



答案を後から持つてくるように言った。  
そしてボクの答案も持つていかれた。  
何故だろう、ものすごく不毛な戦いを終えた後の気分だった。  
・・・一応、全部書いたけど。

「ああ〜終わった終わった」

リュウがテストから解放されたことをものすごく喜んでた。  
まあ、みんなそうだけど。

周りにはテストの答えを合わせている人がちらほらといる。

「やっと終わったよ〜」

「鈴音、お疲れ」

「・・・ボクは精神的にもものすごく疲れたよ」

「ああ。確かに今回はたまたに難しいのが出てたな」

・・・何でそこでボクを見るのかな？

もし、あの問題のことを言ってるんならボク等は今後の付き合い方を考える必要がある事態に陥りそうなんだけど？

「おい。知ってるか？転校生が来たらしいぞ？」

「また？この学校多いな。で、男？女？」



近くの男子が話していた。

どうも、またも転校生が来たらしい。

・・・確かに、リュウ達が来るわ双子が留学しにくるわでかなりの頻度で来るしね。

ボクは何とはなしにその会話に耳を傾けた。

「女子。でも、地味子だったらしいぞ」

「な〜んだ。どうせなら美少女がよかったのになあ。まあ、このクラスは美少女率高いからいいけどさ」

「だが、あれじゃあ、な・・・」

そういうと男子達は何故かため息をついた。  
・・・何で？

まあ、いいや。リュウなら転校生のこととか知ってるのかな？

「リュウ、転校生がまた来たの？」

「ああ。らしいな」

「あれ？リュウ君知らないの〜？」

「いくらオレでも学校の全部を把握してるわけじゃねえしな」

「・・・」

「あれ？リカ、どうしたの？」

何故かりカがきよるきよるとしている。  
何だか警戒してる小動物をほうふつとさせる。

「・・・イヤな予感がする」

「「「イヤな予感？」」」

ボクとリュウ、スズは首をかしげる。

リュウはそこで何故かボクを見る。

でも、いつもと変わらないことを確認したのかりカに再度たずねた。

「おい。危機察知スキルを持つソラが何にも感じてないんだぞ？」

「いや、それはそれでいい加減にして欲しいかな？」

「・・・でも、感じる」

ボク等はそんなりカを見てついにテストで頭をやられたという結論に至った。

「おし、りカ。シュウか親父のトコ行くぞ」

「何で？」

「ああ・・・定期健診だ」

「ソラにしてもらうからいい」

「ちよっと待とうか。できないから」

それに何故かクラスの男子の殺気が上がったよ!?  
何で!?

「リカちゃん、ソラ君が何でも言うこと聞くからってさ」

「ちょっと待って、何でそこでボクを売るの!？」

「わかった!今すぐに行く!!」

そういつとリカは何故かきびきびを準備を始めた。

途中で鼻歌交じりに何かをくちづさんでいる。

そして何故かそのリカのうれしそうな仕草にクラスの殺気が減少、  
変わりに諦めムードな雰囲気漂う。

・・・そういえばつい最近は何口攻撃を受けなくなったね。

たぶん、みんな誤解を解いてくれたんだろうね。

「やっぱ、地道にでもわかってもらえるっていいね」

「いや、全然違うからな。もう、全員がいろいろと諦めてるんだ

よ」

「何を？」

「・・・たまにソラ君がわざとしてるのかなって思うときがあるよ」

リュウとスズが呆れたようにため息をつく。

・・・何で?

てか、これは地味に仲良くなってますよアピールかっ!?

ま、そんなことはいいからリカをシユウと颯太さんに頼んで治してもらおう。

そしてボク等は上機嫌なりカの後ろについて教室から出て行くこととしたそのときだった……。

「……っ!? ソラ!! 危ない!!」

「はい? って、ちょ!?!」

扉に手をかけたりカがいきなりボクの手を掴んでぐいと引つ張って自分のほうに持つてくる。あまりの力に腕がもげそうなくらい痛い。

だが、リカの切羽詰った声にボク等は半ば反射的にいつでも魔法を放てるように準備する。

そして、ボクは扉の前にいないにもかかわらず何故か扉から突撃してきた何かによってぶっ飛ばされた。

「ししよー……!!!!」

「ッ!!!?!?!」

声にならない悲鳴が上がる。

鳩尾に入った……!! しかも、のしかかられる!! ！  
でも、師匠?

そんな事言う知り合いはボクの周りには一人しかいない。  
そしておそらくはその女子を見ると……。

「……誰?」

ガチで知らない人だった。

てか、ホントに誰？

下手したらこの子リカ並みに美少女だよ？

長い前髪からのぞく大きな二重の目が印象的だ。

男子はこういう儂ない感じとかそういうのにぐっと来るってリュウが言ってた気がする。ボクは実際にそういう感じの子を見たことが無かったからよくわからなかったけど、なるほど。わかる気がする。

「誰！？ソラから離れて！！」

「え？わ、わたしですよ！？アンジェリカさん！？」

「誰だ？」

「わたし達の知り合いにこんな可愛い子っていたっけ？」

「そ、そんな・・・可愛いだなんて・・・。坂崎さんお世辞が上手です」

そついうと顔を少し赤らめてもじもじと動く。

そして、前髪がすっと落ち、顔の上半分を隠す。

「「「ああ〜！？」」「」」

「は、はい！？どうしたんですか！？」

ボク等が出した大声に驚いて女の子が立ち上がって周りを警戒する。

って、やっぱり！？というか何この新事実！？

「四条さん!？」

「奏!!!」

「奏ちゃんだ〜!？」

「……こいつ、精霊魔法の」

「は、はい?今、き、気付いたんですか?」

きよとんとした表情で四条さんがボク等に言う。

リカはそこで何も言わずに四条さんの前髪を上げてクラスのみんなに見えるようにする。

その途端に歓声や驚愕の声上がる。

「お、おい!?!何だあの可愛い子!?!」

「す、すごい可愛い子がいる!?!」

「なにあの子!?!あんな子いた!?!」

クラス中の人間が軽くパニックに陥った。

そこでリカは四条さんをみんなの視界から隠して前髪を下ろす。

「あれ?さっきの子は?」

「ついさっきまでそこに……」

「おい!?!さっきの子を探すぞ!?!」

そういつと一部の男子が四条さんの横を通り過ぎてどこかに走り去って行った。

・・・うん。下手な変装よりすごいね。

「で、何でここに？留学？」

「で、転校してきました！」

・・・なるほど。みんなが地味子とか言ってたのは四条さん・・・  
って、おい！？

何で！？君はサリナさんとの学校で魔法を勉強するんじゃないの！？

「せ、精霊魔法は学ぼうにも向こうで教えてくれる人がいないので・・・。それなら似たような事、つまりはマナを見れる師匠に何とかしてもらおうかと！」

「・・・要するにソラが目当てね」

ボクははっとしてリカを見る。

すると、そこには 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を自動展開させるレベルの魔力を垂れ流したリカ様がいた。リュウとスズも魔力を感知して冷や汗をかいている。

ヤバイな。今日はカラコンしてないのにな。

「現実逃避はやめて何とかしろ！！」

リュウからのアイコンタクト。久々だね。

リュウとスズが立て続けにボクにアイコンタクトをとる。

「おい！何とかしないとコイツが死ぬぞ！？」

「ソラ君！何とかして！！！」

すかさずボクはアイコンタクトを返す。

「どうしたらいい！？」

「「いつもの作戦で！！！」」

「自分の身を売れと！？」

リュウとスズはボクはどうなってもよかつたらしい。

でも、ここでボクが何とかしないと確かに四条さんがやばい。

・・・これが前門の虎に後門の狼ってやつか！？

あるいは八方塞！？

「・・・後で手伝ってよ」

「わかつたよ〜」

「オレ達にできることであればな」

珍しく支援を申し出てくれた。

これならまあ、マシかな？

「リカ、とりあえず落ち着こう。まあ、ボクにできることなら何でもするから」

「ゴメン。今はそれより重要なことがあるの」



「リカ（ちゃん）が断ったあ!?!」

ボクもビックリだ。

リカは何故かボクが何でも言うことを聞くを発動させると必ず食いつくの……!?!?

「ア、アンジェリカさんは、いつも師匠にそんなことを……ふ、不潔です!?!」

「そ、そんなこと（まだ）してないもん!?!か、奏こそ何でソラに付きまとうの!?!?やましい気持ちがあるの!?!?」

「……リカ、お前が反論できる要素がまったくないと思うぞ?」

「わたしもそう思うよ。いつもあの手この手で……だからね」

……あれ?

ボクが当事者の内容のはずなのに全然ついていけない。

「ち、違います!?!わたしは、で、弟子として……!?!」

「でも、ソラは認めてないじゃん!?!」

「い、いいえ!?!じ、実は心の奥底で認めてくれてるんです!?!アンジェリカさんこそ師匠の何ですか!?!」

「ア、アタシは……（未来の）お嫁さん!?!」

「いや、両方違うから。それにリカは何でいつもボクをそういう

風にからかつの  
「

「ほら!」

「……こいつ等、仲いいな」

「でも、ソラ君もいい加減に気付いてあげようよ」

テスト明けの放課後は何故かやたらとにぎやかだった。

1話・EXAM（後書き）

作 「新章突入！今回は『テスト』からのスタートだ！！」

空 「いや、全然テストじゃなかったよね？」

作 「実はさ、ネタが無くて。あのラディエさん登場並の面白さに  
できなかったんだよね」

空 「いいから！そんなことしなくてもいいから！」

作 「まあ、というわけで今回はこんなもんで許してください。そ  
して遅れてごめん」

空 「別にいい！それに遅れたことがついでになってるし！？」

作 「まあ、これも俺様クオリティってことで」

空 「どんなクオリティ！？」

作 「というわけで次回からもがんばります」

空 「ボクの言葉は完全にスルーかッ！？」

## 2話・RUMOR

side空志

「・・・なるほど、通りでソラがどのクラスかわたしに聞いたわけだわ」

どうも、冬香のクラスに四条さんが入ったらしい。

そこで冬香は聞いたことがある気はしたけど実際には数日しか一緒に行動してなかったから気付かなかつたらしい。

それに、精霊魔法を使うせいで普通と同じ魔法使いみたいに魔力の感知が利かなかつたらしい。

それで魔法使いつて気付かなかつたようだった。

「それにしても、お久しぶりですね」

「は、はい。薬剤師さんですよね？」

「まあ、おおむね合ってますう」

「シユウは兼業で格闘士ですが」

「・・・あれ？何で双子ちゃんが？」

「僕と同じで転校してきたみたいですよ」

「・・・何でハル君も？」

「院長先生が学校ぐらい通えつて。それに魔法陣の展開方法はソラ先輩かソラ先輩に教えた人に聞かないと無理みたいなんで」

「ちなみに寮はそちらに行くらしいです」

「おおー！今日からもつとご飯作らなきゃ！奏ちゃんも来るんだよね？」

「は、はい。よろしくお願いします」

「・・・むう」

リカがふくれつつらになってる。

もうこれ以上騒がしくなったらホントに近所からの苦情が来るよ。でも、これでかなりの大所帯になったね。特にこの屋上での昼食会が既に二桁を突破した。相変わらず田中はリカに迫っては撃沈をしてるし。

「あ、そういえば噂知ってる？」

「「「噂？」「」」

インチョーの突然の質問にボク等は疑問の声を上げた。

すると、宇佐野さんが待ってましたとばかりに立ち上がって胸を張る。

「ワタシから説明して進ぜようぞ！噂とは怪談のことなのだ！」

「怪談？」

「何で階段の話なんかするんだろっかね？みんな、階段でよく躓くのかな？」

「さ、さあ？わ、わたしにはさっぱり・・・」

「漢字が違いよ。『階段』じゃ無くて『怪談』だ」

「要するにお化けの話ですね」

「お、お化け？」

お化けと聞いた瞬間、リカのむすつとした表情が恐怖の表情に変化した。

「リカ、どうしたの・・・って、そうか、そうだったね」

「ん？どうしたんだ？」

リュウがリカとボクの様子が変わるのを察したのか聞いてきた。ボクはリカに視線を向けると小さな声で無理無理とか言っていた。

「・・・まあ、こう言う訳だよ」

「なるほど、大体はわかりました。リカさんは幽霊が怖いんですね」

「意外ですね。だって、吸血鬼ヴァンパイアでしょ？西洋妖怪筆頭ですよね？」

「まあ、リカだし。吸血鬼ヴァンパイアの癖にソラの血しか飲めないから」

「だが、そんなアンジェリカさんも可愛い！！」

みんなの評価についてリカがブチギレた。  
ボクの隣に座っていたリカはバツと立ち上がると早口でまくし立てた。

「だって、お化けだよ！？死んだ人の怨念なんだよ！？カガクでは説明のつかない事なんだよ！？」

「いや、魔法も説明つかないから」

「違うもん！！だって、だって……怖いじゃん！？だって、吸血鬼ヴァンパイアは説明できるもん！でも、幽霊は何で発生するのか説明できるの！？」

「とにかく、リカさんはホントに幽霊がダメなのですか？」

「はっ！？そっいえば遺跡でも怖がってたよ」

「うん、スズと四条さんがまったたく女の子らしからぬこと言ってたのが昨日のように思い出せる」

「だって、甲冑相手に中の人がんばってるね」とか言うんだよ？

絶対、お化け屋敷とか行くとお化け役の係りの人に笑顔でこんにちはわーって言う系の人だ。

「で、とりあえず噂って？」

いい加減に話が進まないからボクは宇佐野さんに話をふつた。すると、宇佐野さんは心得たとばかりに話し始める。

「おっけ……九月に入ってから、噂が流れるようになった

の。ちなみに大体が寮生からの証言。どうも学校の近くにある廃校舎近くの林から青白い火の玉つばいのが見えたってさ」

「……で？」

「それだけだけど？」

「なら、見間違いじゃねえのか？」

リュウの疑問は最もだ。

ただ偶然誰かが夜に外で歩いてただけでケータイとかの液晶がそういう風に見えるときがあるって聞いたことがある。

「……っふっふっふ。甘いよ、甘いのだよ三谷っち！！それはもうチョコレートパフェにあんこをかけたくらいにっ！！」

「それ以前に不味いと思う」

ボクのその言葉を無視して宇佐野さんは愛用のシステム手帳を取り出す。

そして、いつものように淡々とした口調に早変わり。

「……目撃される時刻が午後九時ごろと決まっています。そして、人魂は深夜二時ぐらいに消えてなくなるそうです。それがここ一週間ほどずっと続いています」

「ずっと？……それに時間帯が変だな」

「……確かに、幽霊が出るにはむしろ早いね。でも、人が出歩くには遅い」



そう、これはそんな時間だとボクも思う。  
・・・どういうことだろう？

「そう、わかんないでしょ？だから、みんなで肝試ししよー！  
・ってことになったから」

「「「・・・は？」「」」

「いえ〜い！！」

「おお〜！いいね〜」

スズと宇佐野さん以外のメンバーが驚きを口に現した。  
宇佐野さんはともかく、スズは絶対に天然だ。

「あの、初耳ですが？」

「うん。一組の子で教えてないの間君たちだけだもん」

「ちよっとよく考えろ。そんな夜中に肝試ししてみろ。学校にバ  
したら面倒なことにあるぞ？」

「そこも大丈夫！理事長先生に言ったら司書の城崎さん連れてく  
ならいいって」

「城つちは既に懐柔済みだから問題は無いのだ〜」

何この連携？

てか、智也さんがおとなしくついて行く？

そんなのおかしい。智也さんはそんな夜中は危ないからやめろつて言う、ボク等の知る大人の中で数少ないまともな人だ。

「……つふつふ。これを見せたらすんなりオーケーしてくれたよ」

宇佐野さんが見せるのは夏の冬香の事件のときにいた変な仮面を被った智也さんの写真。

なるほど、黒歴史を封印したいんですね。

核兵器を凌駕する宇佐野さんの情報という武器の前には智也さんも得意の『消滅』をもってしても対抗不可能だったらしい。

「でも、これをボク等に見せていいの？」

「だって、三谷っち達は知ってるでしょ？」

確かに。

まあ、ボク等はそんな人を陥れようとはしないからね。

「おい。どの口でそんなことを言う？お前の口癖は『全力で』と『畏は二重に』だろ？」

「エ？ナンノコトカナ？」

「……三谷君、この二つを組み合わせるとかなりえげつないよ？」

『畏は二重、全力で仕掛ける』

うん。こんなことを座右の銘にするのはかなりの鬼畜と見た！！

「「お前だよ!」「」

「じゃ、そういうわけだから肝試しがんばって」

ボクはスズ作の弁当を取るとさっさと教室に行こうとする。

そこをボクはガシツと肩を掴まれた。

わかっていながらもボクは振り向きながら言う。

「今日さ、ログさんところで修行しなきゃいけないだよ。魔道具作りの。だからすっごく疲れるから寮で早めに寝たいんだよ」

「うん!それがいいよ!絶対!!そうしよう!」

リカはボクの言葉に高速で首を縦に振りながら言う。

・・・見てるとリカが馬鹿になるんじゃないかって心配になる。

そして、スズが何を思ったのかリカに耳打ちをする。

すると、リカの顔がどんどん赤くなっていく。

「よし、肝試し行こう!肝試しサイコー!」

「うん。いってらっしゃい」

別にボクがリカについてく道理は・・・。

「行くよね?」

「喜んで!だから鎌を仕舞ってください!」

脅迫されました。

てか、学校で出しちゃダメ!!

リカは満面の笑みで何だかうれしそうな表情。いや、むしろいろいろな欲とか黒い感情が湧き出てきてる気がする。

「じゃあ、そういうわけで三谷君は参加、と。他にも参加したい人がいたらあたしに言ってね」

そういうとインチョーはどこかに行った。ボク等はそれを皮切りに次の授業に向かっていった。

「ハアア!!」

振り下ろされる刀。

ボクはそれを間一髪で回避。

フウカシャリン  
風火車輪の推進力を使って高速での移動。でも、相手も得意の風の魔法でこっちに肉薄。

「ダーク・イロージョン  
闇の侵食!!」

黒い闇の壁がボクと相手の間に急に現れる。

相手はその急な出現にもかかわらずボクがいるであろうところをまずは浅く逆袈裟に斬る。そして返しの刀でボクに致命的な一撃を当てようと追撃を加える。

そこに高速で一つの影が飛来し、左の腕で刀の攻撃を流すようにして無力化。

「水鷗ミスカモメ！！」

ボクはそのまま水の鳥を出現させて相手にのみ攻撃。体勢が崩れていたにも関わらず相手はボクの魔法が少しかすった程度で済む。

「シユウーどいて！！ 紫電シデン！！」

ボクは、刀をガードしてくれた影、シユウに言つと電撃魔法を発動。

指向性を持った電気が 水鷗ミスカモメ によつて濡れた地面を走り、相手を感じさせようとする。

それを相手は刀による一閃で電気を切り払う。

・・・なるほど、その刀は雷をも斬つたとされる『雷切』なんですね。

「ソラ！後に下がれ！！」

「わかつた！」

ボクはすぐにリュウとポジションを入れ替えスイッチ。援護していたリュウが前に出てボクが後に。

そして、ボクは素早く呪文を詠唱。

「月夜ツキヨ！！」

魔法陣に手を突っ込み、引き出すのは大弓。 月夜ツキヨ のバージョ

ン弓、『月弓』。

そこにボクは魔力を込め、弦の部分を引き絞る。白銀の光の矢が形成される。

それに気付いた相手、優子さんが手に風を収束させてその塊でリ  
ユウ達をぶっ飛ばした。

でも、こっちは準備完了だ……！

「穿て！！」

矢を放つ。

優子さんは危険と感じたのか、ボク等の攻撃に対して初めて本気  
の防御姿勢をとった。優子さんはとっさに刀に魔力を注ぎ込み、ボ  
クの具現化をボク以上の魔力密度を以って弾こうとする。

でも、これについているのはただ魔力を収束させるためだけの魔  
術構成。ロケラムいくら優子さんが最凶の破壊神でもこれなら何とかなるはず！！

そして、それは優子さんの刀に真正面から激突し、優子さんを吹  
っ飛ばした。

「……や、やった？」

「おつしゃああああああああ！！お袋に初めて一太刀入れ  
たぞー！！」

「よかったです！本当によかったです！！」

ボク等は思わず感動の歓声を上げる。

すると、優子さんが少しボロボロになりつつもボク等のところに  
歩いてきた。

「えらいわね。ここまでよく成長したわね」

「つか、お袋もあれ喰らってよく平気だな」



「お、お前、甘いぞ。この十五年間は封印してたお前の警護に時間を割いてたからな。んなことわかるか」

「では、ここからが私の本気です」

優子さんはいつものようなファンキーな戦闘狂じみた顔ではなく、いつもボク等に接する態度で言う。

逆に、それがものすごく恐ろしいって事は本人は知ってるのかな？

「では・・・、行きます！ー！」

「「「ぎゃあああああああ！?!?!?!」「「「」

まあ、結局はいつものようにボク等の悲鳴が間学園に響き渡った。

side 冬香

わたし達が龍造さんの元で魔法訓練をしているとき、唐突に断末魔の悲鳴が聞こえた。

「・・・」

わたしは何も言わずに合掌した。

わたしにできることはこれぐらいしかない。

今、わたし達のいるところではそれぞれが自分なりの練習をしている。

スズは アンチ・シエル 相殺殻 を縦横無尽に動かしては数をどんどん増やしている。リカは鎌を振り回して何かの型を練習、双子は二人で組み手。そして、我が弟のハルは・・・。



「そうじゃ、そのイメージを解き放つ感じでの」

「はい」

そういうとハルは目を閉じ、精神を集中する。

そして自分の掌に魔力を集中させる。

「魔法陣展開」

その言葉でハルの前に丸い円にいろいろな文字や記号が書かれた青色の魔法陣が展開する。でも、普段見慣れているソラのものとは比べるとほんの少しだけ構造が単純そうだ。

ハルは唐突にカツと目を開けると魔法名を答えた。

「氷華ヒョウカ！！」

その瞬間、魔法陣を中心にして冷気が漂う。

そして、一気に空気が凍って氷塊を作り出した。

ハルが前にも見せた一定範囲を凍らせることのできる魔法だ。

「そういうことじゃ。魔法陣は使えるようになるまでは大変じゃが、このように呪文展開速度はゼロじゃ。威力は込めた魔力量によって変わってくるのじゃ」

「へえ〜。すごいですね」

「じゃが、わしよりもソラのほうがいいと思うぞ？ソラには解析アナライズができるしの」

「いえ、多くの人に聞くべきでしょ？こつこつこつとは」

「勉強熱心じゃの〜」

「でも、ハル。無理しちゃダメよ。アンタは体弱いんだから」

「ふむ。そうなのかの？ソラが言うには魔力量的にはスズちゃんレベルじゃと聞いておるがの？」

「へ〜。そうなの・・・はあ！？ハルって、『氷』じゃないの！？」

「さあ。わしは詳しくは聞いておらん」

ちよつと、待ちなさい。スズレベルって事は、あの、智也とタメ張れるレベルよ？なら、わたしの力よりも明らかにハルのほうをやったほうがよかったじゃない。あいつら馬鹿ね。

まあ、わたしでさえ知らなかったんだからしょうがないか。それに、ハルが魔法を使ったところなんて全然見たことが無い。それでハルに薬飲ませて魔法を使えないようにしてたんだからね。

「そういえば、おぬし等は肝試しに行くのか？」

「あ〜・・・わたしはパス。面倒だし。それに、ただの噂でしょ？」

「え？姉さんは行かないの？」

「・・・アンタ、行く気？」

「ま、まあ」

「何でもよいがの、ソラには後で念のために調査をしておくように言っておいた。おぬしらも何かのときのために一応は心の隅にでも覚えておいてくれ。・・・まあ、智也君もおることじゃし、大丈夫じゃと思っがの」

そついうと龍造さんは再び魔法陣のことをハルに教え始めた。

・・・ハルが行くのか。まあ、別にそこまで過保護にする必要もないし、わたしは休ませてもらいますか。

## 2話・RUMOR（後書き）

作 「とうわけで『噂』でした」

冬 「事件の予感ね」

作 「そうですね。そして、作者はぶつちやけるとひねくれてるの  
で楽しいことにします」

冬 「・・・アンタの楽しいはこっちにとって迷惑が多いのだけど  
？」

作 「そんなことより！最近は一話の一話から小説の修正をしてま  
すそんな和歌家でタイトルが変わってるけど特にそんな変更はして  
ないので安心してください！」

冬 「いきなり摩り替えたわね」

作 「まあ、いいじゃない。つーワケで、次回もよろしく」

### 3話・TEST OF COURAGE

side空志

と、言うわけで夜になりました。

あの後、優子さんにボコられて男子三人は三途の川までピクニックに行く羽目になった。

「はい。じゃあ、集合確認するからこつち来て〜！」

インチョーが大声でボク等に言う。

今回、インチョーのカリスマ・・・というかアホな一組の生徒が中心に学校近くの林に来ていた。ちなみに、ボク等の寮からはボクにリカ、シュウ、冬香、四条さん、ハル君になってる。レオはボクの部屋で早々に寝た。

それに、一組以外の人間は全員寮で生活してる人間、つまりは暇人だった。

「結局、冬香はブラコン発揮したわけだ」

「黙りなさい。氷漬けにするわよ？」

「でも、ソラ先輩から聞くにシャンさんはシュウさんにべったりなのに来なかつたんですか？」

「はい。シャンは早寝早起きが基本です。それでいつも九時までに寝てるんです」

子供!?

シャンちゃんはどここの小学生！？  
なんかイイ子過ぎる！？

「でも、何でハル君はボクに先輩なのに他は『さん』なの？」

「魔法的にも年齢的にも？」

「……まあ、いいけど。」

ボクが言ってもなんか押し切れられそうな気がするし。  
どこぞの押しかけ弟子的なことをしてる女子と一緒にで。

「く、くしゅん……」

「……智也さんも大変ですね」

「……ああ」

うん。いつも通り口数が少ないですね。

ボクは幽霊よりも智也さんの存在感のほうが薄くないかと真面目に心配になってきた。

「……ヴァンパイアヴァンパイアの小娘は？」

「リカですか？」

「……ああ。いつもならお前の体のどこかに引っ付いているが？」

ボクは黙って指差す。

その先にはしゃがみこんで縮こまっているヴァンパイア吸血鬼の少女がいたり

いなかったり。

「……まあ、そういうわけで幽霊にビビってます」

「……ヴァンパイア吸血鬼なのにか？」

智也さんは半ば呆れた風な感じに隅で震えているリカを見た。

まあ、男子からそこがイイ！と言っ言葉がちらほら聞こえ、女子から白い目で見られている人がいた。

「じゃ、今から肝試しを始めます」

そういうと、主催をしていたインチョーがしゃべりだした。

たぶん、今回の肝試しのルールとか諸注意でしょ。

「今回は、一応学校に許可を貰っているので問題はありません。

でも、基本的によその迷惑にならないようにしてください」

それ、無理じゃない？

だって、肝試してて絶叫が響くものだよ？

ボクと同じ事を思ったのか一人の女子生徒が質問する。

「でででで、でも、き、肝試して、ひ、悲鳴が上がるものだよね？」

リカだった。

うん。悲鳴を上げること前提だっということがわかった。

「うん。でも、がんばって出さないでね」

インチョーは無茶な注文を満面の笑顔でつけた。  
インチョー、意外にSだね。

「じゃ、この時点で質問は？」

そういつと何人かの手が拳がる。

インチョーは適当に人を当てて聞く。

「どついう風に行くの？一人で？」

その言葉にリカの肩がビクツと跳ね上がる。

・・・反応が面白いと思ったボクはSが入っているのかな？

「今から説明する。まず、人数は二人。基本的に男女ペアに・・・

「『アンジェリカさん！！』」

一斉に男子がリカに右手を出して頭を下げる。

・・・なんか、こういうのをテレビで見た気がする。

「・・・ソラと行くから無理」

・・・さりげなくリカがボクの死亡フラグを立てた気がする。

でも、それを聞いた男子の方々は何故かわかってたよって顔を  
して肩を落とす。

・・・よくわからないけどご愁傷様。

そこでインチョーが何故か不適に微笑んだ。

「っふ。・・・安心しな男子。今回は公平にくじで決めるよ！！」



「「「さすが!」「」」

その言葉で何故か全員が沸いた。

男子からは俺がアンジェリカさんと!とか、そして女子からはお姉さま!とか李君と!見たいな感じで欲望にまみれた声が聞こえた。

「はいはい。並んで並んで」

そして、パシリの田中とノリノリな宇佐野さんがどこからも無く現れて上が丸くあいた箱を持つてくる。つか、田中いたんだ。すると、その箱に甘いものに群がるアリのようにみんながくじをひきに行く。

「同じ番号の人とペアね。ついでに行く順番もこの番号どおりで」

そして、くじに書かれた順番どおりに全員が並ぶ。

ボクはっと・・・十九番。

確か、全員で五〇人前後って言ってた気がするから、後のほうだね。でも、相手は誰だろう?

「・・・まさか、十九つてアンタ?」

ボクは危機覚えのある声に後ろを向く。

そこには、眼鏡をかけた短髪の凛々しい女子。というか冬香だった。

「あ、冬香なん・・・だ」

何故だろう。

ものすごい視線が……。

マジで視線だけで射殺されそう。

「貴様、お姉さまにもしもあんなことやこんなことをすれば……

「アンジェリカさんの次は平地さんとは、いいご身分だな」

何で、ボクは耳元でこんな風に脅されなきゃいけないんだろう？  
別にボクと冬香はなんとも……。

「どうしたの？急に顔を赤くして」

「いいいいいい、いや！？何でも無いですけど？別に思い出してま  
せんヨ！？」

「ふうん」

何故か冬香はにやついた笑みを浮かべた。

……なにその全部わかったわよ的な。

「そういえば、幽霊って実際にいるらしいわ」

「……急に何？でも、冬香ならいても数魔法術で」

「わたしも一人の女の子だし、怖いものは怖いよね」

完全に冬香がボクの話のスルー！。

「と、言うわけでこんなか弱い女の子を守るために繋いでくれるわよね・・・手」

と喋って冬香がボクの腕を取った。

その言葉と行動で周りの殺気が上がった気がした。

・・・絶対、からかってる！！

「ちょ！？アンジェリカさん！？四条さん！？」

「離して！！冬香にとられる前に殺る！！」

「師匠に不埒なことをする雌狐は消します！！」

「冬香！僕が殺される前に手を放して！！」

「いいじゃない。減るもんじゃないし」

「いや、このまま続ければ減っちゃダメなモノが減る気がする！  
！特に命とか！！」

でも、冬香はずっと不適な笑みを浮かべたままだった。

・・・何、この子ってこんなキアラだっけ！？

「ツチ！いつの間に三谷は平地さんと仲良くなった！？」

「絶対寮だ！そこで何か間違いがあったに違いない！！」

お願い！変な噂を流される前に離れて！！

「はいはい！そんなことより、肝試し始めるよ！ちゃんと廃校舎

の中に行ってお札持ってきてよ！」

「「「へい」」」

インチョーその言葉でみんながおとなしくなった。

・・・助かった？

「何だ。面白くないわね」

そういつと冬香は興味をなくしたみたいにボクの腕をぱいと捨てるようにしてはなす。

よかった。主に自分の命が助かって。

「じゃ、はじめよろ。まずは一番の人！」

「俺だ！じゃ、アンジェリカさん、行きましょう！」

「う、うん・・・」

そうか、一番はリカだったのか。

・・・って、やばくない？

「冬香・・・」

「・・・確かにマズいわね」

でも、ボク等には止めるすべが無い。

「でも、いいんじゃない。この際、アンタの重要性をわからせる

べき」

「いや、なにそれ？」

その時、リカの悲鳴が上がった。  
そして、リカが林の中からもものすごい勢いで飛び出し、まっすぐにボクに突撃。

「ぐぼあ!？」

いつものことなので以下省略。

「ななななななななななな何かに、お、お尻触られた!！」

「お、落ち着こうか。それに何かした？」

「思い切り殴った!！」

・・・うん。予想通り。

ボクはインチョーに声をかけた。

「インチョー。林の中の男子を救出してあげて」

「わかった」

そういうと、インチョーは数人の男子を引き連れて林の中に。

「うお!？何があった!？」

「こ、こけただけだ」

「こけてお前は上下逆さまに木からぶら下がるのか！？それに顔も原型がわからないぞ！」

「……ずいぶんと器用なこけ方をしたらしい。それに暴力的な幽霊も一緒か……。」

「リカ、殴っただけじゃないの？」

「……よく覚えてない」

その言葉で周りのみんなの表情が引きつる。

「……だろうね、おそらくドサクサにまぎれてリカにボディタッチを行使しようとした男子が何故か木から逆さまにぶら下がってフルボッコにされる怪現象が起きてる。」

まあ、犯人は残念なことに一人しかいないってことになる。

「三谷、お前ってスゴイヤツだったんだな」

「ああ。俺も見直したよ」

「三谷君、がんばってね」

「死ぬなよ」

みんながやたらと慈愛の籠った目で見てくれた。ボクもみんなの誤解が本当に解けてうれしいよ。

「……みんな、何でソラに声をかけたの？」

「やっと、認めてくれたんだよ」

「？」

よくわかっていないリカをそのままに肝試しはどんどん進んでいった。

「……もうすぐだね」

「そうね」

次々とみんなが林の中に入って行って、残りは数組。たぶん、後ほんの少しでボク等だ。

「でも、林からはリカ以外の悲鳴が聞こえないね」

「要するに、幽霊の話はデマだったって事でしょ」

いたらいたで結構面白そうだったのに。

幽霊と知り合いとか面白そうじゃない？

その時だった。林の中から急に悲鳴が上がった。

「ついに幽霊が出たかっ!？」

「……アンタ、何で楽しそうなの？」

だって、こういうのにはハプニングがつき物でしょ？

そうじゃなきゃ肝試しじゃない。

それに、イレギュラーがあつてこそイベントは盛り上がるって何かの本で読んだ気がする。

そんなことをつらつらと考えていると、一人の女子が血相を変えてボク等のほうに旅出してきた。

「で、何があつたんだ？チカンか？」

「ち、違う、で、出た」

周りの男子や幽霊が怖くない女子がやってきた女子に聞いていくけど怖がついていて要領を得ない。

「・・・あれ？そういえば相方の男子は？」

ボクはこの女子のペアの男子が全然こないことに気づいて聞いた。どうしたんだろう？

でも次の言葉で、この騒ぎの意味が一八〇度変わった。

「い、一組の、た、確か、田中、君。逃げろって・・・」

「智也さん！ここでみんな守って！！」

「・・・わかった。頼むぞ」

「わたしも行くわ！！」

「アアアアア、アタシも！！」

「無理だから。そんな足がブルブル震えてたら・・・」



「・・・がんばってね」

リカは今回ばかりはおとなしくボクの言葉に従ってくれた。そして、ボクと冬香が林の中に走っていった。

「ソラ！田中の場所は！？」

「今、極端に魔力の無いところを探してる！」

田中は魔力無効化<sup>キャンセラー</sup>体質だ。

だから、田中自身の魔力はボクは感知できない。でも、逆を言うと、田中の魔力はまったく無い。ということは、マナも魔力もまったく無い場所に田中がいる可能性が高い。

「冬香は他のメンバーを呼んで！」

「わかったわ！」

そういつと冬香はピアスをつける。

でも、今回はこの近くでピアスを持つてるのはシユウだけだ。リユウとスズはどうせ寮でイチャイチャしてるだろうから無理だね。

「勝手な妄想はやめときなさい」

「でも、ついにスズがリユウにフラグを立てたよ？」

「ホント！？って、今はこっちに集中しなさい」

「・・・はい」

そして、ボクは見つけた。

冬香に田中の位置を見つけたことを言っ  
てすぐにそこへと向かう。  
すると、少しだけ空けた空間に出る。

そこには、青白い火がたくさん出ていた。

「こりゃ、ホントに幽霊かもね」

### 3話・TEST OF COURAGE（後書き）

作 「と、言うわけで『肝試し』でした」

奏 「ど、どうも。し、四条奏です」

作 「・・・そういえば、僕の友人にはこんな感じの子がいない気がする」

奏 「ど、どういうことですか？」

作 「良くも悪くも僕の周りの女子は漢らしい人が多い」

奏 「はぁ・・・？」

作 「それで四条奏みたいな自信なさげな女子の知り合いとかいない気がする。むしろ全員自身に満ち溢れてる気がする」

奏 「そ、それはすごいです。わたしも見習わないと！」

作 「で、僕の地位的なランクがどんどん下がっていくと」

奏 「・・・」

作 「ま、雑談もこの辺にしといて連絡。活動報告をよければ見ておいてください。わりと重要なこと書いてあります」

奏 「よ、よろしく願います」

作 「そして次回！ついに幽霊登場！？」

奏 「・・・ちよつと、ドキドキします。挨拶とかがんばります！」

作 「何かおかしいけど突っ込まない！そしてキング・オブ・モブのあいつががんばるぜ！」

奏 「・・・誰ですか？」

作 「わかる人にはわかる。て事で次回もよろしく！」

## 4話・GOAST?

side太郎

〈数分前〉

俺のっターン!!!

いや、すみません。モブの中のモブと名高い田中太郎です。

今回は最初から登場はしてるけどホントにチヨイ役という感がぬぐえないポジションだったが、久しぶりに俺視点だ!!

『どうでもいいが、さっさと話し進めろよ』

ああ、そうだったな。

そついや、お前、かなり久しぶりだよな？

『ああ。俺様はあの大会でちょっと出ただけだったな』

そうだったな。

あの後には結局は三谷達に全部の出番を持ってかれた。

・・・これがモブの宿命かッ!!!???

『だから、さっさと進めろよ』

「わかってるって!」

「うわあ!??ちよつと、急にどうしたの!??」

「あ、いや……。なんでもない」

相方の女子、確か寮生の同い年のヤツで三組とか言ってた気がする

るな。

まあ、俺はアンジェリカさん一筋だから関係ないけどな！！

『それがあの、吸血鬼少女を遠ざけてるって事に気付けよ』

「黙れ」

「いきなり何よ!?!」

あ、しまった。

「いや、君に言ったんじゃ・・・」

「もういい!!何なのコイツ・・・」

女子はぶいとそっぽ向いて行ってしまった。

・・・マジかよ。

『ツプ。ダッセー!!!』

黙れ、このクソガキ!

お前のせいだろうが!?!

俺はミストに当たりつつ女子の後を追った。

「でも、何も出ないな」

俺は多湖が用意したと思われる、手書き感あふれる貧相なお札を  
ゲット。

今は帰りの道を歩いている。

「幽霊なんかいるわけ無いじゃない」

「でも、鬼なら毎日見てるけどな」

「どういこと?」

「ガントさん」

「ああ。確かに、鬼みたいなガタイ」

いや、実際にそうなんだけどな。

だがこれを知るのはごく一部の限られた人間のみ。

まあ、バレたら留年コースだけだな。

それに、教えたところで信じるやつはいないだろう。

その時、俺の視界の隅で何か光った気がした。

「おい。さっきそこで何か光らなかつたか?」

「え?本当?・・・幽霊なんじゃない?」

向こうは俺がビビるとでも思ったのか悪戯っぽい笑みを浮かべる。  
普通なら、俺は笑い飛ばしただろう。

だが、残念なことに俺はこの数ヶ月で普通とは程遠くなってしま  
った。

『ああ。俺もそんな気がする。それに、かすかだが魔力を感じる』

「よし、ならその幽霊の正体を確かめに行こうぜ」

「……え？マジ？」

「マジマジ。……それとも何？俺に挑発しといて行かないとでも思ってたのか？」

「そ、そんなの、折込済みに決まってるでしょ！」

挑発するはずが逆の立場になってしまった女子はここで逆に俺の挑発に乗ってしまった。

俺は先頭に立って林の中を進んだ。

「ね、ねえ……。こんなところ来て大丈夫なの？」

『さあな。だが、近づいてはつきりした。……魔力を感知した』

「なあ、やっぱり俺が一人で見てくるからさっきの道で待っててくれね？」

「じよ、冗談幽霊なんていないから大丈夫よ！」

まづいぞ。

さっきの言葉で感情的になってる。

『……まあ、最悪は俺が盾出して守りゃいいがな』

それだと、俺の留年確定だな。

『いいじゃねえか。女子守ってだぞ？あの吸血鬼の小娘に見直されるかもな』

「しゃー！やるぞー！！」

「ちょー！？いきなり何元気になってんの！？頭おかしいの！？」

すると、少しだけ空けた空間が見える。

ここらへんにいるのか？

そして、それは唐突に起きた。

いきなり、目の前にいくつもの青い炎が空中に浮かんだ状態で現れた。

まるで人魂のように。

「・・・え？何、これ？」

ミスト！

これは何だ！？

『わからねえ！だがな、俺様達が歓迎されてないことは確かだな』

人魂はミストの言葉を聞いたかのように俺達を包囲した。

そして、人魂が俺達に向かって突っ込んできた。

「危ない！！」

俺はとっさに女子の盾になる。そして、女子がいきなりの攻撃に悲鳴を上げる。

やっぱり、魔法だ。俺に傷一つつかない。



『タロウ！だがコイツらは多い！お前でも全部は無理だ！』

「なら、どうすんだよ」

「い、いきなり何!？」

女子が文句を言うが今は勘違いを訂正してるほど余裕が無い。  
人魂はどんどん俺達に突進してくる。

『……タロウ。お前の体の支配権を俺様によこせ』

ミストはいきなりそんな注文を俺につける。

……何をする気だ？

『俺はお前を乗っ取るうとした前科があるが……』

「まあ、別にいいけど？」

『……おい。話の途中に何だ？』

「支配権はお前によこす。何とかできるならさっさとしろ」

『お前な、わかってるのか？俺は呪われた魔導宝具アーティファクトだぞ？これを  
チャンスにお前の体に乗っ取るつもりかもしれないぞ？』

「……お前な、俺は知ってるぞ。お前が実は優しいことを」

『……お前の脳みそ大丈夫か？』

「ああ。だって、お前は俺の頼んだことをすぐに実行してくれてるだろ？それも、お前が嫌いそうな正義の味方ゴツコの的なことを。それに、お前の能力はお前が操作しないと発動しないんだ。じゃあ、何で俺やみんなのためにその力を使ってくれる？」

『・・・たまたまだ』

「ミスト、お前は確かに呪われてるのかも知れない。それで人を乗っ取るのかも知れない。・・・だけどな、俺は何か理由があつてお前はそれをしてるんじゃないかと思う」

『・・・だからどうした？』

「お前を信じるって事だよ。バカガキ」

俺がそういうと、ミストが沈黙した。

俺がミストに声をかけようとしたときだった。

いきなり、俺の視界が変化した。

俺は、何故か上から俺を見下ろしていた。

『どういうことだ!?!?』

「ヘッ!・・・らしくねえコトいつてんじゃないやねえよ、タロウ」

その言葉に、俺が・・・正確には俺の口が答えた。

『お前、ミストか?』

「当たり前だろ。それが俺の視点だ。そこから三六〇度見渡して敵に攻撃する」

『そう、なのか。つか、お前何する気だ？』

「こっすんだ、よッ！」

いきなり、俺の体を借りたミストが猛スピードでダッシュ。

そしてそのまま蹴りで人魂を攻撃する。

すると、人魂に斜めの斬線が入り、切れた。人魂は形を維持できなくなったのかそのまま消滅してしまった。

『す、すげえ。でも、俺にそんな運動神経無いぞ？』

「・・・まあ、お前の一〇〇パーの力だからな。これぐらいは誰でもできる」

「た、田中、君？」

俺が声のほうを向くとそこにはあの女子。

・・・そういやいたの忘れてた。

『ミスト。さっさと逃げようぜ』

「無理だな。相手が逃がしてくれそうに無い」

確かに、向こうの包囲網がどんどん迫ってきてるような気がする。

「俺様が食い止める。さっさと逃げろ」

「で、でも、田中君・・・」

「さっきの見たろ？大丈夫だ」

「・・・わ、わかった」

そして、女子は走っていった。

そこへ逃がすまいと追撃を加えようとした人魂をミストはぶっ飛ばす。

「余所見すんなよ。お前の相手は俺様だろ？」

「・・・つか、ホントに大丈夫なのか？」

「・・・実は、やべえんだよな。コイツは魔力無効化<sup>キャンセラ</sup>体質の体に使うと俺の魔力が削られてくんだよ。ンでもって無くなれば俺様が消滅する」

『おい！？そんな大事なことはさっさと見え！代われよ！？』

「お前が出たところで意味が無い。それに、これは魔力無効化<sup>キャンセラ</sup>体質を自分でコントロールできれば特に問題はなくなる」

『そ、そうなのか？』

「ああ。まあ、今回は十数分がリミットだな。・・・それまでに殺る」

『・・・字が怖え』

「行くぞー！」

そして、俺の体を使ってミストは人魂を殲滅し始めた。

side 空志

「田中！大丈夫！？」

「ああ？・・・お前かよ」

・・・おかしい。

田中はこんなキャラじゃなかったはずだ。

ボクはいつものように月詠<sup>ツクヨミ</sup>を発動。

でも、特に何の変化も無い。いつものように魔力が無い。

すると、いきなり人魂がボク等に向かって突っ込んできた。

ボクと冬香はとっさに魔法で応戦しようとするけどいきなり人魂が消失し、代わりに田中の姿が近くに現れた。

状況から察するに、田中が高速で移動して人魂に何かしたんだろう。

「・・・アンタ、誰？」

冬香がやや困惑しながら聞いた。

「俺様だつて」

「「俺様？」」

ボク等の知り合いで俺様なんて呼称を使うのいたっけ？

「だあ〜！俺様だつての！ミストだ！！」

「……ゴメン、田中。今からミスト倒してお前を元に戻す!!」

「違い!?俺様がタロウに断つてやってんだよ!?ちゃんと戻す!つか、戻さないと俺様が死ぬ!!」

「……信用できないわね」

「おっけ。わかった」

答えたのは同時。

言ったことはまったく別の内容をボクと冬香が口にした。

「あんたバカじゃないの!?相手は呪われたアーティファクト魔導宝具よ!??」

「……大丈夫じゃない?」

「……また、いい加減な」

冬香が若干呆れるがボクは無視した。  
でも、それより先にすることがある。

「……この、人魂どうする?」

「わたしは氷漬けにするけど?」

「俺様はそろそろ片付けないとやべえんだよな」

そして、人魂が再び襲い掛かってきた。

「ミスカモ水鷗!」

「コード 槍衾ファランクス！」

「・・・シッ！」

ボクと冬香は弾幕系攻撃魔法で殲滅し。田中の体を借りたミストは高速で移動して人魂を倒す。でも、一向に数が減る気がしない。

「遅れました！」

「す、すみません！」

シユウと四条さんが来た！  
これなら何とかなるか？

「でも、四条さんにピアスは渡してないよね？」

「私と一緒にだったんです」

「なるほ、どっ！」

「か、風の刃　！！！」

一気に敵の数が減っていく。  
だが、何故か一向に減る気配が無い。  
・・・どっ！ってことだろう？

「ソラ！アンタ、解析できないの！？」

「・・・やってるけどよくわからない！どう見ても迎撃用術式が組み込んであるだけだよ！」

「迎撃？バカか？こいつらは俺様達を認知した瞬間に襲い掛かってきたんだぞ！？」

「今はそんなことよりも数を減らすことに集中しましょう！」

そしてボク等が再び人魂の殲滅に集中してたときだった。

軽快に地面を蹴る音が聞こえ、それがボク等のところに向かってくる。

「おわあ！？」

そしてこけた。

・・・ハル君、君は何がしたいのかな？

「ハル！？アンタなんでここに！？てか、暗いんだからこんなところに来ちゃダメよ！」

「イテテ・・・。あ、いたいた。ピアスをまだ返していなかったからここに急いできたんだよ、姉さん」

「そんなことはどうでもいいから、アンタはさっさとみんなのところに行きなさい！」

「いや、むしろハル君がいたほうが早く終わる！ハル君、炎を消して！」

「え？・・・やるんですか？まだ、練習したこと無いんですけど



「？」

「大丈夫！君は筋がいいからできる！」

「ちょ、ソラ？アンタ何言ってるのよ！？」

「そうです！魔法をほとんど使ってなかった春樹さんには少々酷です！」

「よ、よくわかりませんが魔法をあまり使ったことが無いのならやめたほうが……」

「足手まといだ！俺様がこのガキの分もやってやらあ！」

みんなが口々に言う。

……そういえば説明してなかったなあ。

しかも、ハル君は最後のミストの足手まといって言葉でスイッチが入ったようだった。

真剣な表情になると、精神を集中させる。

ボクはすぐさま前線を離れ、ハル君の下に行く。

そして、ポケットの魔道具から青いラインが回路のように刻まれたナイフを数本だけ取り出し、ボク等を囲うようにして地面に突き刺す。

「ゲッカイ月界！」

そして、ナイフで囲った範囲に光の壁、結界が生成される。

「よし、じゃあ……火の分解をしよう。暖と乾だね。これは基本操作だから大丈夫」

「・・・わかりました」

みんなはボクが抜けた穴を埋めようと必死になってる。  
・・・そんな殺気の籠った目で見ないでください。  
そして、ハル君の声が聞こえる。

「魔法陣を展開。暖、乾に干渉」

その言葉通り、魔法陣がボク等の足元に展開される。  
ごく普通の白い光を放つ何も書かれていない魔法陣だ。  
ま、今回は厳密に言えば魔法じゃないからこれで十分。

「ちよつと！何してんのよ!？」

「いいから。大丈夫大丈夫、この子、みんなが思ってるよりす  
いよ」

「本当に大丈夫なのかよ!？」

「し、ししよ〜・・・」

「皆さん、ここはソラさんを信じましょう!」

「って、シュウが言ったけどもうできたみたいだね」

準備ができたのか、ハル君の魔法陣が強い光を放つ。  
そして、ハル君の言葉が命令を下した。

「<sup>キール</sup>気を操作。分解」

その一言でいきなり人魂が消失した。  
人魂に殴りかかろうとしていたシユウやミストがたたらを踏み、  
冬香や四条さんが魔法の発動を中止した。

「……で、できた」

「お疲れ」

「何、したの？」

「まさか、『逆』<sup>リバース</sup>ですか？」

「違うよ。ハル君の属性は『<sup>キテル</sup>気』って言うのかな？……外部にある火や水、風に土の更に元に当たる『暖』『乾』『冷』『湿』を操るんだ」

そう言ってもみんなはよくわからないみたいだ。

「簡単に言うと、さっきの四つを組み合わせると火とか水を発生できる」

「……え？それって、自然系の四元素属性全部使えるってこと？」

「厳密には違う気もするけどあなたがち間違いじゃないかな？」

「……すごいですね」

「……だが、さっきは何をした？俺様には火が消えたようにし

が見えなかったぞ？」

「それは、あれは人魂ですが、厳密に言えば『火』。だから、火を構成する『暖』と『乾』を切り離して分解したんです」

「そういうこと。癖のある属性だけどかなり強いね」

「……と、とにかく、何はともあれ。わ、わたし達は助かったんですよね？」

みんながほつと安堵のため息をつく。  
すると、冬香が進み出てきてハル君の頭をポカリと叩く。

「いたっ。姉さん、何するの？」

「でも、アンタはド素人なんだから、こんな無茶なこととはしなくてもいいの。わかったわよね？」

冬香はドスをきかせた声でハル君に脅すようにして言い聞かせた。  
ハル君はその剣幕に反射的に頷いた。

「……じゃ、姉弟の話も終わったことだし、今回の原因究明と行きますか」

そう言ってボクが 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を使い、魔力の元をたどろうとしたときだった。

「ご主人様！コンビニで買ってきましたよ！」

いきなり女性の声が聞こえた。

ボクは声のした方向にすかさず  
認する。

ホムランドリ  
焔鳥

を放ち、相手の位置を確

「……どちら様でしょうか？」

「完全にこっちのセリフだね」

そこには、病的なまでに青白い肌で、手にコンビニの袋を持った  
メイドさんがいた。

……何でメイド？

#### 4話・GOAST? (後書き)

作 「すみません。遅れましたが『幽霊?』をお送りします」

太 「俺が、主人公!」

作 「まあ、この頭のおかしいのはほつといて」

ミ 『むしろ俺様のターンじゃね?』

作 「これもほつといて……。やっぱ、内緒でやってるんでいろいと面倒ですね見つからないようにこっそりとするって」

太 「この調子で出番増やそうぜ!」

ミ 『確かにそれはいいな』

作 「まあ、それでやっとできたこれを投稿してるわけですけども。

・・・・次回から『これがひねくれ者の作者・夜猫クオリティ全開』  
でいきます」

太 「ゆくゆくは三谷を押しつけて俺が・・・」

ミ 『冗談は顔だけにしとけ』

作 「・・・いい加減、うっせえな。こいつら」

太 「なんだと?この主人公の俺に何を言うか!」

ミ 『つか、俺様の出番も出せ』

作 「安心しろ。これで田中は出番終了。そして次回からコメディに走る!」

ミ 『おい!?まだ、戦闘が終わった雰囲気じゃねえぞ!?』

作 「それが『ひねくれ者(以下略)』」

太 「畜生!俺とアンジェリカさんのラブシーンが!」

作 「んなもんないから安心しとけ」



「シユウ!？」

冬香が驚きの声を上げる。

そりゃそうだ。ボクも驚いている。

シユウはボク等の中でもかなり強い。でも、そのシユウが一撃でやられたんだ。

「大丈夫です。骨は折れていません」

「で、でも、ささ、さつきスゴイ音が・・・」

「違います。折れたのは、向こうの骨です」

「はあ!？」

田中が素っ頓狂な声を上げた。

ボクもその言葉で向こうをよく観察する。

いや、しなくても両腕が変な方向に捻じ曲がっているのがわかった。

「・・・以外です。わたしの動きについてこれる人がいるとは」

そして、相手には痛がっている様子も無い。

「どっどっ、どっどっ」

「・・・仕方が無いです」

向こうは何かをポケットから取り出した。



それは、一見するとただのペンか何かに見えた。

『なんだと！？ヤツの持ってるのは魔導宝具だ！』  
アイティファクト

「ミストか？知ってるのか？つか、お前、もう大丈夫なのか？」

『んなこと言ってられねえよ！アレに決まった名前は無いがな、俗にこういわれてる！変幻武器『ミラージユ』ってな！』

「なにそれ？」

「僕も本を読みますが、聞いたことが無いです」

『アレはな、持ち主の特性に合わせて変化する武器だ！！』

そして、その言葉を受けたかのようにメイドさんのペン、もとい、変幻武器『ミラージユ』が光る。そこから現れたのは、先端が緑色で二つに分かれ、全体的に白い、スーパーでよく目にする……。

「『『『ネギ！？』『『」

長ネギだった。

「何を言いますか。メイドさんの最強武器といえばネギでしょう」  
メイドさんがさも当たり前のように言う。

「いろいろとおかしすぎるー！」

「ちよっと、ミスト！あれが本当に魔導宝具なの！？わたしには  
アイティファクト

ただのネギにしか見えないわ!」

『・・・俺様も自信が無くなってきた。それに、あの魔導宝具は  
アードイファクト  
噂が正しけりやどつかの遺跡奥深くに封印されてるらしいからな』

暗い林の中。

そこには数人の少年少女。

そしてそれに対峙するネギを構えたメイドさん。

・・・シユールすぎる。

「・・・どうでもいいですけど、この、最強の武器を持ったメイ  
ネギ  
ドの私に叶うものはいない!」

「ものすごい自信!?!」

ネギ構えて最強な気分になれるのはこの世界を探しても貴女だけ  
だと思う。

「というわけで参ります!」

そして、再びこっちに突撃してきた。

・・・って、おかしくない?

「何でネギをもてるの!?!」

そして、そこには両腕でネギを振り下ろそうとするメイドさんが  
いた。

ボクはありえない事態にパニックになりながらも回避。

「  
ライエン  
雷燕  
!」

雷の鳥が至近距離で直撃。

これなら、大抵の人は気絶する。

それにもかかわらず、相手はそのままネギを力任せに地面に叩きつけ、地面を陥没させた。

「あり、得ない！」

ボクは地面から飛んできた土やなんかと一緒に吹き飛ばされる。

「コード 槍衾！」  
ファランクス

冬香がとつさにボクへの追撃が来ないようにけん制してくれる。しかし、相手はそれすら無視した。氷の槍が自分の体を貫くのも無視した。

「な!?!」

「  
ジャッジメント・スパーク 神々の怒りに触れし愚か者に罰を！  
雷神の裁き！」

ツクヨミ  
月詠！

・・・解析。上級上位『雷』系の魔法。それがネギに収束されている。  
それをこんな詠唱で・・・!!

「でもラツキー!?!?! 『ナハト』！  
シデン 紫電！  
チャージ 装填!!!」

ボクは自分の銃を呼び寄せて、銃にシデン紫電を纏わせ、魔力を装填させる状態にして上に思い切り放り投げる。

すると、メイドさんはネギをボク等に向かって振り下ろし、そこから雷の奔流が放たれ、銃に直撃した。

「……あら？」

「次はこつちの番だ！」

ボクは宙に放り投げ、落ちてきた銃を掴み、その銃口を相手に向ける。

ボクの手には雷の上位上級魔法の魔力が装填された銃がある。そして、引き金を引いた。

雷の奔流が相手に向かって殺到し、メイドさんはその威力に盛大に吹き飛ばされた。

そして、湿った音共に木に叩きつけられ、動かなくなった。

「……やったわね！」

「ソラさん、さすがです！」

冬香とシユウがボクの肩を叩いて褒めちぎる。

そこで、ボクは思い切り吐いた。

「し、師匠！？だ、大丈夫ですか！？」

「……む、無理。だって、初めて……相手を、殺しかけた。少なくとも、自分の、意思で」

吐き気がまたこみ上げてくる。

もう、胃の中には何も無いのに。

そして、近くを見ると田中も吐きそうな表情だった。

「でも……ソラ先輩のあれは正当防衛です」

「し、師匠は前に魔獣を倒したときは何もでしたよね？」

「アレは、結果的にボクはトドメをさしてなかったから、ね……」

「

最後はリカにやってもらったの同然。  
それはスズも同じ。

「それでこの仕打ちは無いです」

そして、またもありえないことが発生。  
メイドさんがまたも普通に立ち上がった。

「な、んで？」

「あらら。服がボロボロです。これではいつ悪漢に襲われても文句を言えません」

メイドさんはネギをトンと服に当てた。  
すると、服が見る見るうちに再生した。

「……これで問題ないです。……むしろ、さっきの方がご主人様は喜ぶでしょうか？」

「アンタ、何者？」

「そうです。先ほどの腕の再生に、さっきの上級の魔力を持った

弾丸を受けても何事も無かったかのように立ち上がる。・・・人間  
ですか？」

「いいえ、私は人間ではありません」

あつさりと、向こうはなんでもないように言い切った。  
なら、不死系の魔物？

「でも、おかしい。君は、明らかに魔物じゃない」

「貴方、何者ですか？さっきの私の魔法を防いだことといい・・・

」

相手の言葉の意味を考える。

人間であって、人間でないモノ。

そういうことだろうか？

「なんにしても、私では相性が悪いです」

そういうと、いきなりメイドさんがガクツと膝から崩れ落ちた。  
ボク等は何事かと再び構える。

「・・・ふっふっふ」

向こうが唐突に笑い出し、ガバツと勢いよく立ち上がる。

「ここからはこのリンちゃんが貴方達を成敗するのだ！」

「「「・・・誰？」「」」

つか、何この人。可愛いそんな人？  
ボク等の間では疑問符しか思い浮かばない。

「そんなわけで変るのだ〜！」

全力でふざけてるとしか思えないポーズでネギを構えた。  
すると、またも武器が光りだした。

底から現れたのは全長三メートル、横幅一メートル弱ほどの、メ  
イドさんが振るうにはあまりにも似つかわしくないほど大きな大剣。

『んなバカな！？』

「ミスト？どうした？」

田中がミストの慌てた様子に気付いてそのお内容を探ねる。

『あの、アイティファクト魔導宝具は一人につき一つの形しかないはずだ！！』

「なら、やっぱりあの人はいろいろな意味で異常だね」

「・・・確かに、メイド服でネギ構えて人が代わったとか思え  
ないような言動を行い、かつ、腕が折れても瞬時に回復してしまう  
ような人はいろいろと異常ですね」

・・・うん。みんなそう思ってると思うよ。シユウ。

「じゃ、行くのだ〜！リンちゃん、あた〜つく〜！」

ふざけた突撃の声と共にメイドさんがこっちに攻撃を仕掛けてき  
た。

さっきの攻撃でボク等の間に油断は無い。  
来るだろうと予見していたため、簡単に回避した。

「甘いのだ！」

そして、それはどうも向こうのフェイントだったようだ。

さっきのパンチと違い、明らかに急所を狙った突きがシユウに放たれた。

「シユウ!？」

「問題ありません！」

シユウは相手の突きを受けずに、自分の横に流す。そしてシユウは接近戦は不利だと感じたのか相手を思い切り吹き飛ばした。

「風の刃！」

「コード 槍衾フアラシックス！！！」

「氷華ヒョウカ！」

三つの魔法が追撃を行う。

でも、メイドさんはその大きすぎる大剣を紙切れのように扱って全ての魔法を切り裂いた。

「な、なんですか!？」

「ありえない!！」



「わたし達の周りだとアレは日常茶飯事よ！」

「きゃはははははは！まるでゴミクズみたいなのだあ！！」

狂ったように嗤うメイド。

・・・バックに何かよくないモノが見える気がする。

「・・・さつきとまるで違いすぎます！」

「三谷！アレは何だよ！？」

「知るか！ボクが知りたい！」

最初は、ただ何の意味も無いケンカのとくに使うようながむしや  
らなパンチ。

そしてかなりの腕前のように見える魔法。

その次には確実に殺すという意味がちゃんと乗った殺人拳のよう  
な拳。

そして体全部を使って戦う格闘センス。

何もかもが違う。

「ハーハツハツハ！まずは強そうなお前からなのだ！」

「私ですか！？」

そして、この人が変わったとしか思えないほどの人格の変貌。  
マジで何が起きてるの！？

しかも、それだけならまだいい。

こっちは攻撃をしてるのにまったく相手には効いてないことの方  
が辛い。

こんなの、向こうの勝ちが決まったゲームだ。  
なら、そんなゲームからは逃げればいい。  
でも、向こうはかなりの腕の剣術を使う。  
背を向けた途端に背中をバツサリっていうのもありえる。

「・・・打つ手が無い！」

「いくら私でも限界があります！逃げてください！」

「無理よバカ！コード 氷地獄コキョウトス！」

冬香がその数法術をもって相手のみを氷漬けにする。  
しかし、向こうはその体格にありえないほどの強力を発揮して自  
分を閉じ込めた氷の牢獄を破壊する。

「ホントに打つ手が無いじゃない!!！」

「ミスト！お前は何かできないのか!？」

『無理だ。力を使いすぎてこれ以上やれば俺が死ぬ』

「精霊さん達！何か無いの!？」

「僕にも、力があれば・・・!！」

「びゅーん！」

「ぐっ!？」

ふざけた擬音付きのフルスイングと共にシュウが吹き飛ばされる。

ボクはシュウに追撃が行かないように魔法を飛ばすけど相手はそれを大剣の一振りで薙ぎ払う。

「まずはひとおおおおおおおおり!?!」

「『『シュウ!』』」

ボク等がもはやここまでかと思ったときだった。  
シュウとメイドさんの間に一つの影が入り込む。

そして、その影はメイドさんのバカみたいに大きい大剣を蹴り上げた。

「うおお!?!」

「お前は……」

そして、その人物は……。

「何しとんねん!?!」

「ぶぎやあ!?!」

メイドさんにハリセンを突っ込み共に叩きつけた。

そして、周りにはスパーンという爽快な音が響く。

地味に痛かったのか、武器を手放し、両手で頭を抱えている。

そして、その影はボク等のほうを向いて……。

「すまん!」

土下座した。

ボク等はただただ呆然とするしかなかった。

「いやあ、ホンマに悪かったな。このバカが勝手に暴走しよって。お前も謝れ」

「バカなご主人様を許してください」

ものすごく真面目な顔でそういった。

その瞬間、またもその後頭部にハリセンが炸裂した。

「誰がワイの不始末を謝れ言うた！？お前のでかしたことや！」

「……あ、ご主人様。これが頼まれていたものです」

「完全にスルーかいな！？」

「ちなみに全て私が食べました」

「お前いい加減にせえへんとシバくで！？」

「あ……夫婦漫才中にすみませんが、どちら様で？」

「夫婦ちゃうわ！」

「……え？あの日のことは嘘だったのですか？」

「どの口ぞ」

「さあ？」

「もうええわ。お前、ちょっとそこらへんで黙っとれ」

「な、なんと！これは放置プレイ！？・・・ご主人様、いつの間にそんな高等技術をつ！？」

「・・・ちよつと、アンタ達。いい加減にしないと氷漬けにするわよ？」

「「ごめんなさい」」

二人同時に土下座した。  
・・・なんだこの二人？

「・・・で、君達誰？」

「俺はカバネ・ラジエ」

「私はこのアホなご主人様のメイドです」

「このすつとごどつこいのアホメイドは立花可憐<sup>たちばなかれん</sup>」

ボクはこのキャラの濃い二人を観察した。

方や、関西弁でくすんだ赤い髪を持つボク等より少し年上っぽい人。見た感じは普通の人。・・・スコップを背負ってなければ。

そして、さつきから主従関係がいろいろとおかしい、そして無表情なメイドさん。たぶん、このカバネって人と年齢は同じぐらいだ

ろっ。

「じゃ、ボク等のほうも・・・」

「おい。まだワイ等の紹介は終わってへんで」

「・・・は？」「」

ボク等は素っ頓狂な声を出した。

紹介が終わってない？

いや、あんた等二人だけじゃ・・・。

「で、コイツが幽霊でカレンの妹、花梨かりんや」

すると、いきなりカレンさんがガクツと肩を落とした。

そしてはねるようにして立ち上がる。

「ハロハロ〜！リンちゃんなのだあ！！」

「・・・おい。やからいきなりそれはやめとけ言つとるやろ。見てみい、ドン引きやで」

まるで、百八十度性格が・・・いや、人が変わったとしか思えないほどの変化。

「まあ、そんなわけでワイは死ネクロマンス霊術師で、今カリンが借りとるこのカレンの体は屍リビングデッド。まあ、つまりは生ける屍や」

「・・・いやあ〜。このすけ〜。やらしい目で私の体を見たのね〜」

「・・・おい。元に戻って遊ぶなや。しかも棒読みやし」

ボク等は目の前の事態に追いつけずにフリーズしてた。

5話・NECROMANCER（後書き）

作 「ついに来たよ！『死霊術師』をお送りします！」

カバネ 「いやほう！ワイがイケメン死霊術師ネクロマンサーや！」

花梨 「冗談は顔だけにしておいてください」

カ 「おい。それはどういう意味や？」

花 「ブサイクです」

カ 「仮にもお前メイドの癖に何を言うか！？」

作 「まあ、そんなわけでかなり濃いキャラができてしまいました。

自分の才能にビックリ」

花 「そうですね」

カ 「何を言うとする。お前のことや」

作 「あんた等二人共だよ」

カ 「嘘やろ？」

花 「そ、んな。ご主人様と、同レベル・・・」

作 「まあ、そんなわけで今回はキャラの濃い二人が何でここに？

と言う話です。次回もよろしく！」



## 6話・CIRCLE OF MAGIC

side空志

ネクロマンシー  
死霊術。

よく、RPGなんかで出てくる悪役形の魔法使い。

数々の死霊や怨霊、マミーリビングデッドに生ける屍などの不死アンデッドを使役する魔法

使い。

ネクロマンシー  
簡単に言うと、死霊術と聞くと、大抵の人は誰かおかしな人が墓

場でつるはし持って穴を掘りながらケタケタ笑っているイメージを持って  
持っているだろうと思う。

「つか、お前は何でお使いも満足にできへんのや!？」

「ご主人様のものは私のものですから」

「何そのジャイアニズム!?!明らかにメイドと主人の主従関係あらへんやないか!?!」

「いいじゃないですか。たかがプリンで……もぐもぐ」

「……おい。お前何食つとる?」

「余分に買ってきたプリンですか?」

「なら、それよこせや!?!」

残念ながら、目の前にいるのはそんなイメージとはかけ離れた・  
・それも死霊術師ネクロマンサーと生ける屍リビングデッドがプリンの取り合いをするという不毛な争いを繰り広げていた。

「・・・というか、生ける屍リビングデッドがメイド服着てる時点でいろいろおかしい。」

「・・・あのさ、ボクは全然魔法関係の素人だけどさ、まさか、死霊術師ネクロマンサーがこんなに愉快な人だとは思わなかった」

「いえ、私達も死霊術師ネクロマンサーに会うのは初めてです」

「え？そんなの？」

「は、はい。元々、死霊術ネクロマンシーを使えるという素質を持つ人が限りなく少ないんです」

「まあ、別に属性が『死』とか『幽霊』とかそういうんじゃないし。それに、死霊術ネクロマンシーと属性はそれほど関係が無いってわたしは聞いているわ」

「僕も姉さんの言うとおりでと思います。本で読んだ事があります。確か・・・死霊術ネクロマンシーを行使するのに必要な技能は、『幽霊との対話』と『幽霊への干渉』だったように思います」

「ほお。そこの僕はよう知つとんなあ」

プリンプリンの争奪戦が終わったのか、カバネがボク等のほうに意識を向けた。

・・・ボクよりも年上に見えるのに奪い取ったプリン片手に相方のメイドにどや顔で大人気ない。

「ちなみに、ご主人様は『雷』の属性です」

「おい！？人の属性を勝手にバラすなや！」

「ちなみに、私も『雷』です」

「自分もかい！？」

「で、その貴方」

「スルーかい！？」

メイドさん、カレンさんはカバネを完全にスルーしてボクのほうをびしつと指差す。

・・・なんだろう？

「あの・・・カレン、さん？」

「はい。・・・ご主人様は呼び捨てで構いません。おそらく、貴方より年上ですが」

「・・・まあ、そんなぐらいはええけどな」

絶対にいろいろと主従関係がおかしい。

少なくとも、ボクが想像するような使用人とその主人の関係じゃない。

「じゃあ、そんな死ネクロマンサー霊術師さんが一体ここに何のよう？」

「・・・ああ。ワイが何でここにおるか？それはやな「それより、先の私は上級上位魔法を放ったつもりですが。何故、貴方は回避できたのですか？」・・・おい」

「た、確かに師匠がどうやってあの魔法を防いだのかは気になります」

「僕もです」

今はまだまだごく普通の感覚を持っている四条さんとハル君の疑問の声。

そしてそれを大体の予想はついているのか死霊術師ネクロマンサーのほうに興味津々の冬香、シユウ、田中の三人。

・・・まあ、ここはボクがさっさと説明して向こうに話させよう。

「簡単です。アレは要するに横方向への雷を放つ魔法。だから、ボクは自分の銃にそれを誘導させて、さらに銃を魔力充填モードに切り替えて置いたんです」

「・・・なるほど。それでその武器に全ての魔力が吸収されたんですね」

後はごく普通に引き金を引くだけ。

てか、こんなのはよい子はまねしちゃダメだと思う。武器を手放すって言うのは簡単に言うと自分の命を投げ出すも同じだからね。

「まあ、できるかどうかログさんところで面白半分実験したのが役に立ちました」

「・・・なるほど。参考になりました」

カレンさんはいつの間にか取り出したメモ帳に何かをさらさらと書いてスカートポケットに仕舞った。

「では、私達の番ですね」

「せやな。ワイらは少し人を探しとる」

「人、ですか？」

「でも、それが何でこんな時間に？それも学校の敷地で」

「それはワイは死ネクロマンサー霊術師やし？行くトコ行つたら地域によっては『邪教の使徒め！』とか言われんでな。まあ、他にもいろいろ理由はあんねんけど今回はどうしてもここに来こなあかんかった」

「何ですよ？」

「カリン、つまりは俺に憑いとる幽霊が『呪力』を感知したでな」

その言葉にボク等は驚いた。

呪力。簡単に言つと魔力がよどんで回りに悪影響を及ぼす放射能的なマナのこと。

「四条さん？」

「・・・せ、精霊さん達は何も」

ボクもだ。

・・・遠すぎて気付かなかつたのかな？

「・・・なんや？いきなりお前等怖い顔なんぞしよつて」

「……理由は言えませんが、このソラさんと四条さんは呪力を感知できる魔力感知能力に長けています」

「で、この二人は特に何も感じてない。しかも、こっちのソラに關しては呪力を感知するといろいろと面倒なことになるのよね」

「……要するに、私達が嘘をついていると？」

「そうだね。かなり怪しい。しかも、ボク等はひよっとすると『邪法』を使っているかもしれない人を敵に回してる」

「「ハア!?!」」

「……あれ?何でみんな驚いてるの?」

何故かみんなが驚きの表情。

……言つてなかつたっけ?

「言つてませんよ!?!」

「というより、わたし達の敵つて誰よ!?!」

「姉さんがさりげなく最強発言してる!?!」

「ななな、何で師匠はそんなに敵をぼんぼん作るのですか!?!」

なんかみんながギャーギャーとうるさい。

てか、完全にカバネさん達が置いてけぼりだ。

「……いや、いたじゃん。フェイクつて人が」

「あの黒いの？何かやたらとたくさん属性の魔法をぶっ放した」

「・・・それに、体術もかなりできましたね」

「・・・あ、あの男の方ですか？た、たしか自称・魔王さん」

「そうそう。あの時、ボク等が地面に飲み込まれてすぐにボクが魔獣の腕に纏わりついてた呪力をなんか加工できたじゃない？」

「・・・あ、そういえばそうでした。黒い玉ですよ？」

「そうそう。ボクはとりあえず『呪玉』って言うてるけど。で、いろいろあつてルーミアさんに出会って更にはフェイクから逃げて、ボコボコにされたときにどうもそれを落としたんだよね」

「・・・黒い玉？」

『・・・何かどっかで聞いた気がすんな』

「そういえば、あの時はフェイクが何かを見つけてそれで自分から退いてったわね」

「そう。ボクもリュウからその話を聞いてすぐに荷物を調べたけどそれがどうしても見つからなかった。だから、ボクはフェイクは邪法を使ってたんじゃないのかなって思った。あれは高密度の呪力の塊だから媒介にはうってつけだし」

「・・・でも、何でソラ先輩の持ってた呪玉を持っていくだけに

「？」

「さあ？そこまではわかんない」

そしてボクはカバネさんと花梨さんに向き直った。

「そんなわけで、ボク等はかなりまずい人と知り合いです。それにこここの理由が理由なんで」

なんといつても、ここは一応曲がりなりに魔王の領地。

それに平和をうたう間龍造のところだから魔物からも人間からも狙われるというかなりの数の敵もいる。不安要素は一つでも消すに越したことは無い。

「まあ、呪力言うてもたいしたこと無かったけどな」

「はい。呪力の浄化自体は一週間ほど前に終わっています」

なら、ますますワケがわからない。

一週間前、つまりはボク等が夏休み中で呪力を感知できなかったのはわかる。でも、何で一週間もとどまり続ける必要がある？

確かにマナの特徴としては周りの環境の影響を受けやすい。だから呪力が発生した場合はすぐに対処しないとどんどん呪力の影響を受けて回りに悪影響を及ぼすとは一応聞いている。そうなると大規模な浄化魔法を施さないとダメなのも知ってる。

「確かに、呪力を放置したら感染病インフルエンザみたくにどんどん回りに悪影響を与えるのは知ってる。でも、様子を見るにも長すぎない？」

「……ワイは察しのよすぎる子はあるんやないんやけど」



なあ？」

「ご自分が鈍感ですから。ないモノねだってもしよぅがありません」

「……あの、貴方の主が泣いてますけど？」

「大丈夫ですいつものことです」

いつもこんなコトしてるのか……。

この鉄仮面でも被ってるかのような表情のメイドさんは主従関係という言葉を知っているのだろうか？

「では、隠しても仕方が無いので話します」

「……アンタのご主人はいいの？」

「ご主人様？それはなんででしょう？」

「ま、真っ向から自分の立場を放棄しました！？」

「いえ、別にこれは可愛いと思ったので着ているだけです」

「なあ、魔法使いってこんなのはっかか？」

『いや、タロウが見てるやつが特殊なだけだ』

「カミングアウトはいいからそろそろ話を戻さない？」

「そうやぞ。ワイらはただ人探しをしとるだけやしな」

何故かいつの間にか復活したカバネさんに突っ込まずにボク等は聞いた。

「人探し？」

「せや。ワイの探しとるのに似通った特徴の爺さんがおんでな」

「ご老人、ですか？」

「・・・まさか、アンタの探し人って勇者とか言わないわよね？」

冬香がそういった途端。ボクの脳裏には拳一つで最強の魔王を殴ろうとしていた一人のおじいさんが浮かんだ。

・・・まあ、探される理由はどうせ魔物がどうとか言う話なんだろうな。

「違います。私達が探してるのは魔王です。通り名は『結界の魔お』全員構え！！！」

まさかの名前の登場にボク等は全員が構えた。

ボク等に武器を突きつけられて驚く二人。そして、恐る恐るといった感じでカバネさんが口を開く。

「あ、あんな。ちょっとええか？」

「三十文字以内で」

「無理じゃボケ！お前は何が楽しくてこんなピンチでボケンねん！」

「私、生ける屍リビングデッドですから」

「ちょ、おま！？自分だけ逃げるつもりか！？」

「はい。ご主人様、貴方のことは忘れません。・・・十秒ぐらい」

「何その数字！？てか、自分の主人の事ぐらい一生覚えんかい！  
！」

「アンタ達は漫才するしか脳が無いの！？てか、面白くないわよ  
！」

冬香がブチギレた。

いや、正直ボク等もそろそろいろいろと限界だったし。

「で、何で『結界の魔王』に？」

「何で自分等に言わなあかへんねん」

「簡単ですよ。私達はその魔王の関係者。言ってしまうえば直属の部下のようなものです」

「な、なん」なるほど。納得しました「・・・ワイのセリフを盗んな！しかも何で納得できたんや！？」

カバネさんは驚きを表したが、花梨さんのほうはそうでもないよ  
うだ。

でも、納得？どういことだろう？

「疑問に思っていました。その貴方と貴方の魔法展開方式が魔法陣であることに。ですが、それも龍造様の部下、あるいはそれに親しい間柄であるならば不思議ではありません」

ボクとハル君をさして花梨さんがいった。

「龍造さんが、魔法陣を使うことを知ってるんですか？」

「はい。魔法陣の詠唱を考え出したのは私の家系です。元々、大規模魔導術式専用の展開方法でしたが、龍造様はるか昔に私のご先祖様が太古の魔導師達が好んで使われていた展開方式に改良を加えて作り出した『魔法陣』を学んだようです」

「ま、じで？」

「まじです」

まさかの事実。

みんなも驚きを隠せないようだ。

魔法陣での詠唱。大昔の魔法使い達が主に使っていたと言われる古代魔法術式展開法。これを、龍造さんじゃなくて、目の前にいるふざけたメイド服の生ける屍リビングデッドのご先祖様が作った？

そこでボクは一冊の本を取り出した。

「でも、ボクが持つてる『サルでもわかる魔導書』って、龍造さんがくれたんだけど？」

「・・・見せていただけますでしょうか？」

ボクはカレンさんに魔導書を渡した。

そこで、カレンさんはぱらぱらと魔導書をめくり、ざつと斜め読みをするとボクに本を返した。

「はい。これは私の知るものより更に研究が重ねられているようです。おそらく、魔王である龍造様自らが考え出したもの。というか人間でこれは無理だと思います。貴方、本当に人間ですか？」

軽くボクの人間性を否定された。

てか、みんながやっぱりお前は人間じゃないのか的な感じで見るんですけど？

「い、いや、普通にできるよ。それに、ハル君だって・・・」

「まず一つ目です。これには膨大な魔力が必要です。最低でそちらのハル様と呼ばれる方並みの魔力です。ハル様はあまりの大きさのために魔力があふれています」

「なるほど。逆に魔力がかなり低い詠唱がカスでダメなソラができるようなものじゃないわけね」

「・・・何で罵倒するの？」

「そして、それを、周りのマナを使うことによって解消しているソラさんは確かに普通ではありませんね」

ボクのつぶやきはスルーされた。

「二つ、この魔導書を読めるといつ時点でおかしいです」

「え？・・・で、でも、普通は魔導書って誰でも読めますよね？」

「はい。波長が合えばですけど。僕はこの魔導書との波長が合わないらしくて読めませんでした」

『だが、これは魔王の著書だ。少しぐらい特殊でもおかしかねえと思うけどな』

「……おい。話についていけない」

「とりあえず、話が進まないのをおいておきましょう。そして、今回はとある理由により龍造様にお会いしに来たというわけです」

「でも、何で急に？……いや、ボク等が知らないだけで龍造さんとの交流があったの？」

「いえ、ありません。少なくとも私は龍造様に会ったことはありません」

「では、何故急にこちらに？」

「た、確かに、少し不自然だとお、思います」

シユウと四条さんが疑問の声を上げる。  
確かにそうだ。

「はい。まずは私が死んだことの説明です」

「……あ、そっか、そういえばアンタは死んでんのよね。あまりにも生き生きとしてるから忘れてたわ」

「でも、何で死んだことを伝えに？確かに、そんな若さで死んだから何か理由があるんだろうけど・・・」

そして、彼女は感情のはいってない顔のまままで答えた。

「・・・私とご主人様の住んでいた村は、一体の魔物に蹂躪され、滅びました。ご主人様は村、唯一の生き残りです」

## 6話・CIRCLE OF MAGIC（後書き）

作 「とうわけでもお久しぶりです！やっと書けるようになった夜猫です。今回は『魔法陣』をお送りしました」

空 「ホントにひさしぶりだね」

隆 「ああ。てっきり更新を放棄したのかと思ったな」

作 「今回のスランプは長かった」

空 「いや、普段はスランプって言っても一週間ぐらいだったよね？」

隆 「・・・短いな、オイ」

作 「まあ、今日から再会していくってコトで許してください」

空 「いつもより作者が丁寧だ・・・」

隆 「明日は槍が降るぞ」

作 「どんな異常気象！？・・・そんなわけで次回予告です」

隆 「お前も切り替え早いな・・・」

空 「次は・・・なんかボク等ほとんど出てない気が・・・」

作 「次回はまさかのあのお方の回だと！？そんなわけで次回もよろしく」



## 7話・LITTLE DEMON

side 空志

「ほ、ほろ、ぼ、された？」

四条さんが普段以上にどもりながらたずねた。

「はい。数ヶ月ほど前、魔物達に滅ぼされました。そして、この魔王が襲ったのかを聞ければいいかとも思ったので」

「ありえない……。だって、魔王達はしばらくの間、侵略行為を行わないって……」

「いや、本当や向こうは魔獣やなかった。……。いや、魔獣と魔物の混成軍やった」

「でも、アンタぐらいの人が村にはいたんでしょ？」

冬香はそういと花梨さんをさす。

「はい。もちろん、普通ならば私の魔法で大抵の敵は粉碎できま  
す」

「やけどな、その魔獣はやたらと強力やったんや。見た目の感じから確実に俺等でも片手でひよいのレベルやった。にもかかわらず  
村人全員がワイを残して殺された」

見た目以上に強い魔獣。

その言葉にボクの脳裏にある出来事が浮かんだ。

エレオール魔法学院での魔獣及び呪力の発生。  
偶然・・・にはできすぎていると思う。  
たぶん、その魔獣は呪力で強化されてた魔獣だと思う。  
そして、その答えが行き着く先は・・・。

「魔王、フェイク・・・」

↳翌日↳

「と、言いつとらしいです」

「・・・そうじゃったか」

今現在、既に午後の授業中、というかボク等はいつもの通り魔法の訓練前。

今は龍造さんに昨日の夜のことを話していた。

「で、お前が言ってた死ネクロマンサー霊術師はどこにいった？」

リュウはそう聞く。

昨日のあの後、あの二人は近くに借りていたビジネスホテルかどっかに行ったらしい。

そして、この時間に理事長室にくるように行ってたんだけど・・・。

「さあ?・・・どこにいるんだろう?」

「・・・おかしいの。わしの面会許可は既に出しとるはずじゃ。例えどんな変人が来ても通せとな」

「ソレで片付けちゃうのもどうかと思うね」

「実際見るとホントにあの二人は変よ」

「・・・確かに、あのキャラは・・・すごいですね」

その時、理事長室の大きな扉を叩く鈍い音が聞こえた。

そして入りますと言う声で優子さんと二人の人影が入ってきた。

ごく普通の大学生っぽい雰囲気のカバネさんに、相変わらずメイド服の花梨さんだった。

「・・・お主が、タチバナの子孫か？」

「はい。魔王龍造様、お初にお目にかかります。いきなりですが世界の半分ください」

「おい！お前は何をいきなり言うтонのや！？どこかのRPGで最後の選択間違つとるぞ！？」

「では、全部ください」

「程度ちゃうわ！むしろ酷いわ！何を魔王の横から世界盗つとんねん！？」

「いえ、チャンスじゃないですか。世界を私色に染める・・・！」

「絶対、お前の世界の住人だけにはなりたくないわ！」

「……確かにあの薫の血じゃな」

「……どういこと？」

「タチバナカオル。人間の初めて友じゃ」

「お義父様は当時おいくつで？」

「そうじゃな……軽く八百年ぐらい前じゃからの。たぶん……十歳ぐらいかの」

「アバウトね」

「いや、竜は長命だ。だから正直言つと年齢を正確に答えられるようなヤツが珍しいんだよ」

「へえ。そうなんだ」

「でも、僕と先輩が使つてる魔法陣を考えた人ですよ？どんな人だったんですか？」

「……まあ、ちょうどよい今日はわしの昔の話でもするかの」

「ああ。それはいいんだけどよ、リカはどうした？さっきから何も言つてねえけど？」

「ああ……リカさんは、カバネさんと花梨さんが来た途端にそっちに……」

ハル君が示した方向を見る。

「というかボクの腕にすがりつくようにして気絶している吸血鬼の少女がいたりいなかったり……。」

「……リ、リカさんって、ホントに吸血鬼ヴァンパイアなんですか？」

「……たぶん」

「……まあ、リカちゃんには後でソラが教えておきなさい」

そういつと龍造さんはボク等に適当に座らせ、語りだした。

side 龍造

（八百年前）

手に魔力を込める。

すると、そこには光があふれる。

……ただ、それだけ。他には何の反応もない。

「……おいおい。またやってるぞ」

「あ、ホントだ」

「やつても無駄なのにな」

「……やってみなけりゃわからないだろ……！」

というわけでキレた。

いや、人生……じゃなくて竜生諦めたらそこで試合終了だよ!?

「……さすがに、一週間経っても何も成果が無いのはどうだろう?」

「うっ……」

「事実だから言い返せなかった。」

「俺自身、これは『光』なんじゃね!?」と思つて光系の魔法を使つてみたけど何の効果もなし。そのほかにも該当しそうな『熱』だとか『火』だとかを試してみたけどまったくダメだった。」

「……才能、無いのかな」

「今になつて気付くのか……」

「ふん！」

「思い切り殴つた。」

「でも、帰ってきたのはゴンと言つ音。」

「……俺さ、一応<sup>フランケンシュタイン</sup>人造人間だからさ」

<sup>フランケンシュタイン</sup>人造人間の鋼鉄の体はものすごく痛かつた……。

でも、魔法の練習をしてから本当に何の成果もない。」

「自分の属性魔法は魔物なら簡単に初級上位ぐらいは簡単にできる。でも、自分はソレすらも成功していない。」

「できたのは自分の魔力で身体能力を上昇させる <sup>フィジカルブースト</sup> 身体強化 ぐらいだ。でも、これは全身に魔力を行き渡らせるだけだから、特殊な属性でもない限り正直誰でもすぐにできる。」

「……いいんだ、俺は最強の戦士になる!!」

「いや、魔王の息子が魔法使えないってどう?」

「・・・」

そう。俺の父親は魔窟ネストの現魔王、間龍司はびまろゆうじ。通り名は『黄昏の魔王』として近隣の人間に恐れられている。

ぶっちゃけるとかなり強い。

それこそ、どっかの国から派遣されてきた「俺は勇者だ!!」と、明らかに何か変なものを食べたとしか思えないような変態・・・でも、かなり強かったけどそいつを瞬殺してた。

「要するに、このままいくとお前は落ちこぼれるわけだ」

「・・・いいんだ。この剣で父さんに勝てれば・・・!!」

「・・・それ、槍だぞ?」

「・・・知ってたさ」

「嘘付けえ!? お前、ものすごく自信満々に答えてたぞ!? つか、槍と剣の違いがわからないって、どう!? 既にいろいろと終わってる気がするんだけど!?!」

「チエストー!?!」

俺の渾身の一撃は鋼鉄の体に傷一つつけることができなかった。

「・・・ただいま」

「おう。帰ったか・・・どうした？」

家に帰ると、居間で父さんが新聞を読んでいた。たぶん、仕事が早く終わったんだろう。

「・・・うん。魔法がうまく使えなくて」

「そうか、まあ、俺も最初は全然うまくできなかった。今でこそ誰が言ったのか『黄昏の魔王』なんて呼ばれているがな。ガハハハハ！！！」

「あなた！そこはもう少しいいアドバイスをあげるとかじゃないの？」

「ああ・・・・・・気合だ！！！」

「うん。ものすごく勉強になったよ・・・。で、母さんは？」

「・・・俺のアドバイスは？」

「そうね・・・」

「無視か！？・・・ツハ！？これが家庭崩壊の危機！？」

何か父さんが変になり始めたけど無視しよう。

母さんにも聞いてみたけど、それは既に先生に教えてもらったり



したものであったりであり参考にはならなかった。

「自分の属性がすぐにわかる魔法があればいいのにね」

「うん。本当にそう思う」

「俺を捨てていかないでくれー!!」

・・・うん、幻聴だ聞こえない。

俺は部屋に戻って魔法の練習をすることにした。

～翌日～

「だあー!!できない!!」

結局、昨日の夜もがんばったけど何もできなかった。  
いや、どの魔法も効果があらわれなかったって言うのが正しい。

「龍造！早く学校に行かないと遅刻するわよ～!!」

「わかってる!!」

俺は母さんの声でリビングに行く。  
そこには既に父さんの姿はない。

「ほら、早く食べて学校に行きなさい」

「わかってるよ・・・」

俺は若干ふてくされながらも朝ごはんを腹に収めると学校に向かって駆け足で登校した。

すると、目の前に見知った顔を見つける。  
同じクラスの魔物達だ。

「おは・・・」

「おい。あの龍造のヤツ、どう思う？」

「魔法のことか？」

挨拶をしようとしたらどうもむこうは会話の途中だったらしい。  
しかも自分のこと。

俺は何故か挨拶を途中で止めてクラスメイトの話に聞き耳を立てた。

「ああ。アイツ、魔王の子供の癖に全っ然魔法ができないよな？」

「まあ、そうだね」

「ということとはさ、俺達は将来的にアイツの統治するこの魔窟で過ごすことになるじゃんかよ？」

「・・・ああ。何となくわかってきたかも」

「確かに、魔王はわたし達を人間から守ってくれるもんね」

「でも、次期魔王があれじゃ・・・」

「でも、竜<sup>ドラゴン</sup>って千年生きるらしいじゃん？」

「時間がどうかしてくれるってか？」

「でもさ、その前に龍司様が人間に殺されちゃったら？」

「・・・そうか、そういうこともないとも言えないよな」

「ああ、人間ってのは狡賢いからな。龍司様を背後からブスリってことも平気でやるに決まってる」

「で、その時に・・・」

「ああ。魔法もろくに使えないあいつじゃな・・・」

周りのみんなもそれに同意するようにしてうんうんとつなずいていた。

そして、俺はその場を逃げ出した・・・。

どれくらい走っただろう・・・。周りは木々で囲まれて方向感覚を狂わされる。

簡単に言つと、俺は迷子の状態だった。たぶん、ここは魔窟の外に広がる『迷いの森』だろう。

いや、両親は何かのときのために魔力を込めるだけで使える転移<sup>カード</sup>の魔術符を渡してくれていたからすぐに帰れることは帰れるんだけど

ど……。

「……学校、サボっちゃったな」

誰が聞いてるわけでもないのに一人で愚痴を言う。

更に出てくる言葉もどうでもいい言葉。

でも、こんなことを言ったからと言って学校に戻る気になれない。  
……正直、何でこんな出来損ないの俺が魔王の息子なんだろう  
と思った。

だって、周りにはもつとスゴイヤツがたくさんいる。

基本的に魔物は人間よりもレアな属性が出にくい。でも、俺の友達には比較的発現しにくい属性の『光』とか空間系の属性を使えるやつだっている。そんなやつ等が魔王をしたほうがいいに決まっている。

こんな、魔法もろくに使えない魔王なんかより……。

その時だった。誰かの声が聞こえたような気がした。

「……気のせい、かな？」

「……て……」

いや、聞こえる。

誰かの声、と何かがものすごい勢いで走ってくる音。

……何故だろう？ すごく嫌な予感がする。

しかも、方向はわからないけど、どうもこっちに近づいてきてる  
みたいだ。

「助けて！」

「無理!!」

後から聞こえた声に即答した。  
そして力の限り走り出した。

「ちょっと！！アンタ！！こんな弱い女の子が助けを求めてるんだからかつこよく助けなさいよ！！」

「無茶言つなよ！つか、君誰！？それに後から聞こえるのは何！？」

「私は通りすがりの勇者！このごろ村の畑の野菜をパクる魔王をやっつけようとやってきたカツコイイ女の子よ！！」

「おい、どこが弱い！？しかも勇者が魔王に負けるってどうよ！？」

「え、えつとお・・・それは・・・ほら！！勇者の剣がなかったから！！」

「寝言は寝て言え！」

チラツと後を向いてみる。

そこには、活発そうな・・・と言うよりお転婆さが全身からにじみ出ている自分と同じぐらいの少女。その後には魔獣じゃないかと思っほどの大きさの化け物イノシシがいた。

「見るんじやなかった！！」

「ちょっと、ソレどういう意味！？」

「寝たら悪夢を見る!!」

「なにそれ!?!わたし、そんなにダメ!?!」

「違うわ!イノシシ!」

「わたしはイノシシじゃない!」

「何この子!?!」

会話がいろいろとかみ合っていない。

「つく、こうなったら仕方が無い」

俺はその言葉が気になって後ろを向いた。

そこには、掌をイノシシに向けている少女。

「魔力収束、魔法陣展開」

すると、その少女の掌の前に光る、紋様が現れる。

それは、明らかに魔法陣。でも、ありえない。

本来、魔法陣は複数の人間で大規模戦術魔法を私用するために考  
え出されたもの。

ソレを個人で私用するなんて聞いたことが無い。

「発ッ!」

そして、ものすごい音と共にイノシシは盛大に吹き飛ばされた。  
俺達と一緒に。

「「ぎゃああああああああああああ！！？？」」

俺達の甲高い悲鳴が上がる。

そして、俺は地面に体を強く打ちつけ、何かが上から激突したような痛みに気絶した。

「……………うん……………？」

「あ、気がついた」

目を開けると、そこは知らない場所。そして目の前にはさっきの少女。

「あ、まだ起きちゃダメ」

そういうと、少女は起き上がるうとした俺の肩を押さえて起き上がらないようにした。

そうか、たぶんどこかに怪我をして傷口とかが広がらないようにしてくれているのか？

「この魔法の実験台にするから」

「誰が実験台になるか！！」

その言葉で飛び起きた。

現実はいろいろと厳しいんだ……。覗き込もうとしていたのは

どうも掌に展開していた魔法を俺に使おうとしていたらしい。

「何を言ってるの」

すると、少女の後ろのほうから大人の女性の声が聞こえた。  
そして俺と少女の近くに来る。

「さつき帰ってきたと思ったら男の子を背負ってきてるじゃない？  
そしたらあのイノシシの魔獣をやっつけようとして魔法を使った  
ら何か失敗してその時に岩にぶつかったって言うじゃない」

「って、やっぱり魔獣だったのか!？」

「し、知らなかったんだもん！」

「でも、岩もずいぶん軽いのね。何せ、か弱い女の子の力でどか  
せるぐらいなもの」

「そ、それは！わたしが考えた浮遊の個人用魔法陣で！」

「あら？それは開発中だから使えないって言ってなかったかしら  
？」

「・・・」

押し黙る少女。

・・・おい、まさかとは思うが。

「最後、アレはお前が俺にのしかかってきたのか？」



「ち、違うもん!」

「そうか……。でも、あの岩やたらと重かったな。それに柔らかかったし」

「誰が重いですって!？それに柔らかいって何!？このスケベ!」

「……………」

「この少女はよくも悪くも嘘がつけない性格らしい。」

「この少女の母親らしき女性はあため息をつく俺に向き直った。」

「ごめんなさいね。こんなことに巻き込まれて」

「いや……………」

どう答えていいのかわからずに俺の返答はあいまいなものになってしまった。

そして、それを見てふつと微笑むと今度は少女に言った。

「ほら。助けてもらったんだからありがとうって言いなさい」

「……………むしろ、わたしが助けたんだもん」

「はいはい。でも、この子が来なかったら魔法を使う気にはなれなかったでしょ?」

「……………」

そういつと、少女は俺のほうを向いて若干不機嫌そうな顔で言った。

「ありがとう」

「あ、いや……その、お前の言うとおり俺が助けてもらったよ  
うなものだし……こっちこそありがとう」

「そう？わかってればいいのよ！」

俺がお礼を言った途端にいきなり態度がでかくなった。  
俺はそんな少女のコロコロかわる態度に若干呆れた。

「そういえば、貴方の名前は？」

「間龍造」

「……へえ、さえない顔のわりにカッコイイ名前ね」

「うるさい」

すると、少女は俺に手を差し出した。

「……なんだろう？」

たぶん、この少女のことだから握手じゃないはずだ。だとすると……。

「……ゴメン、今は持ち合わせが無いんだ」

「ちょっと、アンタわたしをどんな女の子だと思っているの！？」

「破天荒、お転婆、じゃじゃ馬」

「ムキー！！握手よ！あ・く・しゅ！！わたしはタチバナカオル。カオルでいいわ」

「じゃあ、俺も龍造でいい」

そして、俺達は握手をした。

これが、後に『結界の魔王』となる間龍造と、魔法陣による詠唱を完成させたカオルとの初めての出会いだった。

## 7話・LITTLE DEMON（後書き）

作 「ども、お久しぶりです。というわけで『小さな魔王』をお送りしました」

空 「ホントに久しぶり」

作 「おう。まあ、そんななわけで今回は龍造さんの過去の話を二、三話かけてやっていきます」

空 「へえ〜。でも、まさかの展開」

作 「自分でもこうなるとは思わなかった」

空 「・・・無計画だったんだね」

作 「つい最近、VRMMORPG系小説のネタが思い浮かんだんだよね〜」

空 「話をそらすな」

作 「まあ、安心しろ。今回出てくる話ではかなり重要なものが地味に出る」

空 「へ〜」

作 「・・・信用してないな」

空 「だって、作者だし」

作 「・・・次回！チビリューゾーはカオルとこういう日々を過ごしていました」

空 「うわあ〜・・・。シリアス展開のはずがほのぼの展開になってる」

作 「次回を乞うご期待！」

空 「・・・いや、こんなむちゃくちゃ展開に期待って」

## 8話・DEMON・S FRIEND

side 龍造

自分の中の魔力が渦巻いているのがわかる。

そつだ。これを詠唱による設定で魔法を構築し、そして魔法として世界へ干渉する力を放つ。

理論はわかる。でも……。

「……またか」

できない。

まったくできない。

さっぱりできない。

全然できない。

もうマジでできない。

本気ででき……。

「男がメソメソすんな！」

後頭部に何かが激突。そして俺の体はそのままぶっ飛ばされる。

地面をゴロゴロと転がって近くに切り株に激突して止まった。

……体中がものすごく痛い。

「何すんだよ!?!」

「魔法が使えないぐらいで何?わたしだって使えないわよ!」

「……いや、それって自慢することじゃないよな?」

「シャーラップ！！人生、前を見て歩かなきゃいけないのよ！」

「いや、お前は前向きすぎだ」

「黙りなさい。とにかく、もっと強気に行かなきゃ！」

コイツとであって既に一ヶ月。

俺とカオルは今でも友達として日々を過ごしていた。

そしてここはカオルの村の近くの林にある少し開けた場所。俺とカオルは毎日のようにそこで適当に過ごしていた。

「でもさ、何でお前は魔法が使えないんだ？てか、俺と会ったときは普通に魔法使ってたよな？・・・暴発したけど」

「ん？ああ・・・あれね。アレはまだ考え中なんだよね」

そういうと、カオルは地面に落ちていた杖を拾うと地面に何かを書き始めた。

それは、何だかやたらと複雑な魔法陣だった。

大きさは二メートルほど、そこにはびっしりと細かい字でいろいろな文字や記号で埋め尽くされていた。

「よし、これでオツケー」

そういうと、カオルは両手を魔法陣にぱんと音を立てて触る。

「魔法陣展開」

すると魔法陣が輝きだし、描かれた線が光り出す。

俺はその光景に見とれていると、カオルは魔法を発動させた。

「・・・発<sup>ハッ</sup>」

すると魔法が発動し・・・大爆発が起こった。  
俺はまたも吹っ飛ばされた。

「何すんだよ!？」

「イテテ・・・いいの。アレは」

「よくねえよ!何で何回もぶっ飛ばされなきゃいけないんだよ!」  
「？」

「アレはね、<sup>エッセント・スベル</sup>古代魔法の一種らしいの」

カオルは俺の言葉を華麗にスルーした。

まあ、いつものことなので俺はカオルの言葉に耳を傾けた。

「効果は使った人の魔力を全部使って、その人の属性の特徴を顕現させる魔法陣なの」

「・・・なるほど。要するにカオルの属性は爆発すると」

「・・・なぜかしら?全っ然褒められた気がしない」

「待て!その魔法陣をこっちに向けるな!」

俺達は無意味な追いかけてこを始めた。

そして、俺達が走りつかれて互いに冷静になる。

「……で、それがどうしたの？」

「わからない？これは、唯一個人でもできる魔法陣なのよ？つまり、詠唱以外の魔法展開ができるということ！」

ババーンと後に効果音がつきそうな感じでカオルが言った。

「……なあ、知ってるか？大昔、魔法使いは詠唱じゃなくて魔法陣での展開が主流だったらしいぞ？」

「……へ？」

「つまり、フツーにできる」

「……」

そういうと、カオルは肩落として落ち込んでしまった。

……そんなに自分で新しい詠唱法を考え出したかったのかな？すると、急に不気味な笑い声が聞こえた。

いや、それは肩を震わせて変なオーラを醸し出しているカオルなわけだけど……。

「よっしゃー！わたしの時代到来ー！」

「……医者、呼んでこようか？」

「いらない！よし、そうとわかればそれをこの時代に復活させるわよー！ー！」

「何で？」



「詠唱がヘタクソな子でも魔法が使えるように！」

「本音は？」

「わたし詠唱、大っキライ！」

ものすごく個人的な理由だった。  
どうも、カオルも自分と同じで魔法がうまく使えないみたいだった。

「なあ、俺もその魔法陣使ってやってみていいか？」

「え？いいけど？・・・何？自分の属性もわからないの？」

「うん、まあ・・・そうなんだよな。自分もいろいろと試してみただけど、全然魔法が使えなくてさ」

「へえ、わたしと同じじゃない。わたしもさ、『炎』の属性かと思っただけど、全然炎の魔法が使えないのよね。てか爆発する」

カオルはそっぴいながら俺の手を魔法陣のところにつけさせた。

そして、魔力を込めるようにいう。

魔力を込め、魔法陣に魔力を流す。

「今よ。『魔法陣展開』って言うて」

「魔法陣、展開」

すると、地面に描かれた魔法陣に自分の魔力が流れ、光を帯びる。

「じゃ、魔法名を言って」

「わかった」

そして、俺は深呼吸をすると魔法名を答えた。

「発<sup>ハッ</sup>」

魔法陣が一際輝く。

そして、自分の中にある魔力全部が持っていかれる。

未知の感覚に思わず手を魔法陣から離してしまいそうになる。

「ダメ！離れたら魔法が暴発しちゃう！」

「わ、わかった」

そして、自分の中の魔力全てが魔法陣に注ぎ込まれた瞬間、それは起きた。

生まれて初めての魔法。

それは……。

「ごふ!？」

「ちよっ!？」

顎に何かか直撃する音と衝撃。

そして自分に降りかかる鈍い痛み。

何故か眼前に広がる青い空。

……どうも、今日は厄日のようだ。

「……で、何これ？」

「さあ？」

痛みにうめいてから数分後。

それまであまりの痛みにのた打ち回っていたが、それも治まった。そして、今日の前に広がっているのは透明なもの。

それが魔法陣の中心にある六望星を囲むように六角形の箱を作っていた。

正直、こんな属性は見たことが無い。

「……魔力を加工できる魔法？」

「そんなバカなって言いたいけど、そうかも」

そういうと、カオルは半球状のドームをバシバシ叩く。

「これ、物質化してる」

「マテリアライズ  
具現化？」

「……さあ？でも、マテリアライズ具現化って魔力を武器に変換するんじゃないかな  
かったっけ？」

「だよな……」

元々、具現化は近接系の魔法使いが武器無しでも魔力さえあればその代わりになるものを作り出そうとした結果できたもの。でも、これは明らかに武器ではない。もし、形状を変化できるならそうかもしれないけど……。でも、できるとしても鈍器だよなあ……。具現化は確かどんな武器でも魔法で再現できるって言うのがウリだからなあ。。。

「でも、どっちかって言うと、バリアーっぽいよね？」

「ああ……。言われて見ると確かに……。でも、そんな属性があるのか？」

「さあ？」

子供の頭ではよくわからないことが多すぎる。

まあ、機会を見つけて適当に探すしかないよね。。。

「じゃあ、とりあえずこの属性はなんて呼ぶ？」

「……うん……『盾』？」

「……ダサイ」

「でも、そうじゃん」

「そこは『バリアー！』とかカツコイイのにしようよ！」

「どこがカツコイイの！？しかも何故か自分だけ他のと違う！？」

「いいじゃんいんじゃん。わたしなんか自分の属性は『火』の系統のはずなのに全然できないんだよ？」

「……そういえばさ、気になってたんだけど……」

「何で、わたしが詠唱で魔法使うんじゃないかって魔法陣でやるうとしたかってこと？」

俺はその言葉に素直にうなずいた。

考えてみればそうだ。

人間は、魔物と比べると希少属性が出やすい。そのために、自分の魔法の使い方がわからずに魔法を使えないという認識のままほったらかしにされることがある。

でも、別にそれでいいはずだ。

人間は希少属性が出魔物に比べて出てきやすい。でも、逆に魔力の素養がほとんどない人も魔物よりはるかに多い。だから、人間では別にそれほど恥ずかしがるものでもないし、できないのならば別のことをがんばればいい。そういう認識だと聞いたことがある。

「うん。正直、別に魔法が使えないからバカにされるとかないよ」

「……」

「でも、できないから諦めるってイヤなんだよね」

そういうとカオルは立ち上がり、くるっと俺のほうを振り向いた。

「だって、人生がんばればできないことは無いってお母さんが言ってたよ。それに生きてれば大抵のことができるって」

カオルはそこで一旦言葉を切り、俺を見据える。

「魔法が使える方法を探せばいい。ただそれだけでしょ？その魔法でいつか相手を見返してやればいいんだよ！魔法がダメなら他の事で……」

カオルは何故か自信満々に胸を張っていった。

俺は自分のこと、特に友人関係のことを話したことはない。いや、だからこそか？

カオルは何かを感じ取ってそういうのかな？

でも、魔王の息子の俺がこんな人間の破天荒娘に励まされるとは……。

「一生の不覚だ……」

「何で！？今は『お前のおかげで俺、がんばれるような気がするよ』とか言うところじゃないの!？」

「そんなのは三流小説の中だけで十分」

「むきいー!!もう！バカなりユーザーはわたしの実験台になれ」

そして今日も俺達は騒がしい一日を過ごした。

〈数時間後〉

「なあ、父さん」

俺は家に帰ってくると、真っ先に父さんに声をかけた。

「何だ？ そんなにかしこまって……。小遣いか？ しょうがないな。ちよつとだけだぞ？」

「そんなことよりさ……」

「……お前、そんな事よりって……。もしかして、父さんと話したくない？」

父さんのアホな言動は完璧に無視して話を続ける。

こうしないと本題にたどり着けないのは既にわかっている。

「俺に、武器の使い方を教えて欲しい」

「……いいのか？ お前は、どっちかって言うって頭で考えるタイプだろ？」

「つい最近、俺の友達に言われた。魔法がダメなら別のことで見返してやれって。でも、俺もアイツを見返したいって思ったんだ。だから、とりあえず魔法じゃなくて力で見返してやる。魔法がなくてもやれるって見せ付けてやりたい」

「そうか……。言っとくが、息子だからって手加減しないぞ？」

「上等」

こうして、俺は遅まきながらも一步前へ進み始めた。

（二年後）

「待ちなさい！リユーズー！！」

「誰が待つかっ！？好き好んで実験台になりたいやつがいたら見てみたいわ！！」

二年の月日が経った今、俺は今日もカオルに追いかけていた。  
まあ、内容はいつものように魔法の実験台……。

まあ、魔力は確かに普通の人間よりかなりあるから問題は無い……  
・んだけどなあ……。・。

「大丈夫！今回は爆発しないから！」

「お前、それ何回目だ！？そう言って森の一部にクレーターを作成したのはどこのどいつだよ！？」

「アレはたまたま！」

「嘘つけえ！！お前の実験のせいで毎日アザだらけになって帰る俺の身にもなれ！」

「何この子？この美少女の色白すべすべお肌で大和撫子なわたしにアザをつけろっていの！？」

「全世界の美少女で大和撫子な人に謝れ！」



「ちょっと、それどういう意味!？」

「見た目だけの癖に!」

「むかー!!--これでも学校では毎日告白されてるんだよ!？」

「嘘つけ!」

不毛な言い争いを続けながら俺達はそこら中を走り回っていた。道行く人々に『ああ、またこの子達は』的な目で見られる。

「今日も二人は仲がいいねえ」

「「どこが!？」」

駄菓子屋のおばあちゃんにまで言われている始末だし……。

この後、俺は結局カオルに捕まっていたもの林にある広場まで連行されていった。

「で、今回は何すんだ？」

「うん。今回はなんかこう……魔力を剣みたいに伸ばせるのにしてみようよ!」

「あーうん……がんばれ」

「アンタがやんの！」

「何で俺……」

「だって、わたしがしてみたならまた爆発しちゃったもん」

「自分でやったんかい！」

俺がやる意味なくね？

「だって、リユーズーが使えるそうなやつってこれぐらいしかないんじゃない？」

「……まあ、確かに」

コイツは……。

俺達は既にいくつかの魔法を完成させている。

まあ、自分の属性がどんなものかわからない以上、魔法陣の構成はあの自分の属性効果を顕現させる魔法をベースにそれを小さな弾丸として射出するとか自分の目の前に壁を作るとかしかできていないけど。

だが、やってみてわかったことだが、どうも俺の魔法陣は防御系が何故かすんなりとでき、逆にカオルは攻撃系がうまくいく。

……おそらく、性格の差だ。

「今、なんか失礼なこと考えたでしょ？」

「いえいえ、滅相もない。今日も薫様は美しい」

「よし、爆破決定」

「何故だ!？」

俺は普通にお世辞を言ったはずだ!

「?くさいのよ」

「ホントだったらどうするんだ!？」

「ほら、その言葉で少なくとも今回は本当じゃないんじゃないんじゃん」

「・・・おい、『狼少年』の話知ってるか？」

「知ってる」

「アレはな、どんなに嘘つきな人間でも最後は本当のことを言うかもしれないって教訓なんだぞ?」

「あら?わたしはてつきり嘘つくと信じて欲しいときに信じてもらえないって言う教訓だと思ってた。というわけで死刑!」

「ちよ!?!ま・・・!?!」

「魔法陣展開・・・ツルギ 剣!!」

ここでもう一度重要なことを説明しておこう。

俺達は、いくつかの魔法を完成させた。

その中でも、俺は防御系を得意とし、カオルは攻撃系を得意としている。

つまり、実験中の新魔法 剣<sup>ツルギ</sup>を一発で成功させやがった。  
魔法陣から炎があふれ、爆ぜながら剣の形へと収束していく。  
そしてそれを……。

「天誅うー！！」

俺に向かって思い切り振り下ろす。

「うおおおおお！？ 盾<sup>シユン</sup>！」

俺はこのとき、唯一使える魔法陣、防御系魔法 盾<sup>シユン</sup>を発動。  
これはもはや俺専用の魔法となっていて、魔法陣を展開すると透  
明な壁が俺の周囲を囲うようにして守る。

そして炎の剣と透明な壁が衝突し爆音を響かせる。そしてカオル  
は予想外の効果と威力に吹き飛ばされる。そしていつも自分の魔法  
で吹き飛ばされるせいか空中に身を投げ出されながらもうまく受身  
を取る。

「ツチ。面倒な魔法を使いこなして……」

「おまつ！？殺す気か！？」

「大丈夫。龍造はそんなぐらいで死なない……といいね」

「おい！？」

普通に殺す気だったのかよ！？

俺はたまに……と言うかしょっちゅうカオルの人間性がわから  
なくなる。

カオルはびよんと跳ねるように飛び起きると地面に魔法陣を描き

始める。

「やっぱ、これじゃなくてこれなのかな？」

「これは普通の魔法陣ではあんまり関係ないって言ってなかったか？」

「でもさぁ・・・これって、全部の魔法陣にあるんだよね」

俺達は魔法陣の作成のとき、既存の集団用魔法陣を参考に個人用魔法陣を作っている。

今のところ魔法陣の効果と記号を照らし合わせ、共通する部分を抜き出し魔法を作っている。

例えば、集団用魔法陣の射出系の魔法が二つあったとするとき、共通するものを抜き出して、これが『射出』を意味する魔法陣の記号、あるいは紋様なのではないかと仮定をたてて魔法陣を作っている。

そして後は実験。

今のところ、実験の結果はほとんどが何も起こらない。それかともんでもないことを引き起こして俺達が数日間寝込むといった感じだ。

「でも、炎の剣ができるはずなのに爆発するってどうよ？」

「・・・カオルだからじゃないのか？」

「天誅！」

「だからやめるバカ！」

いきなりキレルカオルをどうにかなだめると今回の本題へ。

「で、今回はどんな魔法陣だ？」

「ちよつと待ってて、確かここに……」

カオルは自分のポケットを探ると一枚の紙を取り出す。

そこには、鉛筆で描かれた綺麗な魔法陣が描かれていた。

カオルは魔法陣を描くことだけならばものすごく綺麗に描ける。

ただ、普段の字は女の癖にやたら男らしい字を書くというか・  
・要するにヘタクソだ。

まあ、今はそれよりも魔法陣だ。

魔法陣の特徴としてはそれを使用するとき、鮮明にイメージをして魔法陣を展開できれば魔法をすぐに発動できる。でも、これが難しい。だからこういう風に何かに描いてそれに魔力を流し込んで使うことが多い。

ちなみに、俺達は紙等に魔法陣を描いてそれを展開させる方式を媒介展開。

そして使用者の鮮明なイメージで展開する方式を抽象展開と呼んでいる。

「今回も紙に書いたけど……こういう剣とかは媒介展開よりもイメージの展開のほうが都合がいいと思うの」

「……俺も何となく言いたいことはわかる気がする」

「じゃ、やってみて」

「わかった」

俺は何もか描かれていない魔法陣を展開する。

そして、そこに少しずつ 剣ツルギ の魔法陣の記号を刻んでいく。  
何回も何回も紙の見本と見比べながら魔法陣を作り、完成させる。

「じゃ、やるぞ」

「うん。・・・って、こっちに向けないだよ」

「わかってるって。じゃ、行くぞ・・・」

俺は魔力をその魔法陣に流し込む。

魔法陣が俺の流した魔力の分だけ輝きを増す。

「 剣ツルギ 」

すると、掌に展開した魔法陣から六角柱魔法陣からよきによきと出てくる。

それは、とどまることを知らず・・・。

「ちょ！？止まんないんだけど!？」

「なるほど、魔力を流した量によって長さが変わる、と」

ダメだ！

コイツ検証始めやがって自分の世界に行っちゃまった!？

「おい!どうすんの!？」

「・・・そのうち止まるんじゃない?」

「アバウト!？」

そつこつしているうちにやっと止まる。

・・・つか、長い。

軽く五メートルは伸びた。

「で、どう?」

「・・・なんかさ、掌から伸びてて使いづらい」

この六角柱は俺の掌の魔法陣から直角に伸びている。ついでに掌から出てきたようにしか見えない半透明の六角柱をブンブン振る。

これなら普通に剣使ったほうが楽な気がする。この六角柱を握るにしても槍で言う石突を握って振り回すのはやりづらい。

「でも、そんなでつかいの持って重くないの?」

「いや、全然」

「重さはなし・・・っと」

カオルはいつものようにメモに何かを書く俺が出した棒についていろいろと実験を始めた。

この状態で魔力を込めたらどうなるとかそんな事。

「・・・なるほど。・・・でも、これは龍造には向かないのかあ」

「ああ・・・まあ」

「でも、魔力を切っちゃうと棒が消えるしな」



「なんか、魔法を固定。みたいなことができれば楽だよな」

「ああー。それ、わたしも最初のころそう思った。でも、よくある複数人数でやる魔法障壁を作るっていうのには定期的に魔力を補給すれば大丈夫ってゆーのがあった気がするんだよねー」

俺も一応は聞いたことがある。

その魔法は、主に籠城戦とかで使われていたらしい。籠城戦に持ち込むと、自然に長期戦になる。つまり、少しでも魔力を温存しようと考え出されたモノがそれだ。

「でも、知ってるのか？」

「そう。それが問題」

つまりは知らないと。

「……無理じゃね？」

「……気合よ」

「こうなったら、俺達が魔法陣の魔法文字「コト」を一から作ったほうが早い気がするな。さすがに模倣じゃ限界がある」

俺は無茶なことを冗談で言ってみた。

すると、カオルは顔を輝かせた。

「それよ！籠造には上出来じゃない！」

「……は？」

「そうよ・・・ないなら、あるいはわからないなら造ればいい！」  
ダメだった。

もう本当にいろいろと。

でも、つい最近は俺達も魔法陣作成が滞っている。

まあ、子供の頭でどこぞの偉い宮廷魔導師が何十年の時をかけてやることをやってるんだから当たり前だ。

まあ、俺達の場合は模倣で下級下位魔法どころかそれを下回るレベルのお遊びのような魔法だったから何とかなっただけ。

「・・・何よ。その可愛そうなものを見る目は？」

「お前、自分の言ってることわかってるか？」

「うん」

「お前な、どこぞの魔法を研究してる爺さんが数十年、あるいは弟子に引き継がせて数百年かけて作る魔法をたかが十年チヨイしか生きてない俺達がやるっていつてんだぞ？」

「それが何？」

俺はカオルにコトの重大さを教えようとしたがものすごく短い言葉で返された。

いや、それが何？はないだろ・・・。

「長く生きてなけりゃ魔法は作れないの？」

「俺達には知識がなさ過ぎるだろ？」

「そんな前々からあるようなものを使ってるからダメなのよ。もつと、時代は最先端を行かなきゃ！」

「・・・俺さ、聞いたことがあるんだけどさ、魔法の言語って、年間数万は生まれるけどその中で使えるのはたったの一つか二つあればいいほうなんだぞ？」

「なら、わたし達がその一つになればいいじゃない」

「・・・」

何を言ってもカオルの暴論ではじかれるような気がした。

いや、もう無理だと諦めるべきだとはわかってる。

でも諦めた瞬間、そこにいるいと俺の人生が終了する気がする。

「でも、ただ適当に魔法文字を作ってもできるかどうかなんてわからないんだぞ？」

「大丈夫。考えてある。・・・てか、今考えた」

そこでカオルはニヤリと、やたら男らしく笑った。

こういうとき、大抵はろくなことじゃない・・・。

8話・DEMON・S FRIEND（後書き）

作 「というわけで『魔王の友達』をお送りしました」

隆 「てか、ジジイも昔はまともっぽかったんだな・・・」

作 「うん。なんかそうだった」

隆 「なんかって何だよ、オイ」

作 「それが俺クオリティ」

隆 「・・・」

作 「ま、そんなわけで次回予告。カオルが考えたこととは？」

隆 「・・・オレが思うに、こういうときは突拍子もないこと考えるんだろうな」

作 「自分も何故こうなった！？って思ってます。そして、次回は地味に重要なキーワードが登場！何故か重要なのは現代においてだけどー！」

隆 「・・・そういうこと、回想ですか？」

作 「だから、自分でも驚きを禁じえない」

隆 「・・・」

作 「恐ろしい子！・・・自分！」

隆 「・・・あゝ・・・。まあ、何だ・・・次回も頼む」

## 9話・MATRIX MAGIC

side 龍造

「ああ・・・母さん？」

「ん？どうしたの？・・・あ、今日もうまく魔法ができなかった？いいのよ、それぐらい。それに魔王の息子だからって魔王にならなくてもいいのよ？・・・それに、ここだけの話し、魔王は変な人が多いらしいからやめておきなさい」

「おい。現役魔王の前で何を言うか」

「うん、そんなことはどうでもいいんだ」

「おい！？息子よ！お父さんの仕事だぞ！？それをどうでもいいってどうゆー！？？」

「あら？？じゃああ、何かしら？」

「いや、明日さ。友達と遊びに行くから帰りが少し遅くなりそうなんだ」

「そう？いつまでなら帰ってこれるの？」

「・・・六時？」

「・・・」

やっぱり、あまりいい顔はされなかった。

魔物で竜<sup>ドラゴン</sup>だけど俺もまだまだ子供だし……。  
人間にバレたらいろいろと面倒だしな……。

「はあ、あんまり我俣言ったことがないからね。……しょうがない、今回だけよ?」

「母さん最高!」

「もう、ゲンキンなんだから」

「おし、龍造。お父さんが小遣いやろう」

「いや、別にいらない」

父さんが床に手をつけて滂沱の涙を流しているが気にしない。  
いつものことだ。

まあ、これでよかった。

……明日、カオルに殺されなくて済む。

↳翌日↳

「で、お前、今度は何するつもりだよ?」

「うん。さすがに、魔法文字を本当に一から作るのは大変じゃない?」

「……なんだ?お前、著作権無視するつもりか?」

「違うわよ、バカつい最近、『数法術』って言うわけのわかんない魔法ができたでしょ？」

「ああ……。確か、なんか魔導機器<sup>デバイス</sup>って媒介使ってやる魔法な」

つい最近、数法術とか言う小難しいものができたらしい。

話によると、効率よく魔力を使って魔法を放つことに重点をおいた魔法らしい。これを使えば今まで無駄に消費されていた極微量の魔力さえ余さずに使えるらしい。

「それがね、なんと、昔の魔法陣を応用して作ったっていつてるじゃない」

「そうなのか？」

「うん。調べてみたら雑誌のインタビューにあった」

「なるほど。つまり、その人に聞けばひよっとすると魔法<sup>コード</sup>文字をどうにかできるかもしれない、てことか？」

「そう！わたしって天才!？」

「でも、どこに住んでるか知ってるのか？」

「モチ。このカオル様に掛ければちよいちよいのちよいよ」

そういつとカオルはポケットから一枚の紙を取り出す。

そこには、『神聖都市エターナルガーデン 三番街・

・ x x

x』と書かれていた。

「……『エデン』かよ」

「何か問題あった？」

「いや、ないっちゃないが……」

いや、かなりある。

神聖都市エターナルガーデン。通称『エデン』。

この都市は、魔物の脅威を払うために作られた都市だ。簡単に言うと、俺達魔物にとっての天敵。

もちろん、この都市によって滅ぼされた魔物は山のようにいる。

しかも、どこぞの魔王もやられたとか言ってた気がする。まあ、やられたところはポツッと出の駆け出しだったけど。でも、父さん達の話では結構いい線をいってたらしい。

そんなところに魔物の俺が行くって、なあ……。

「でも、『悠久の箱庭』で『楽園』ってどうよ？」

「……確かにイタい名前ね」

俺は適当に話をふってカオルの疑問を彼方へと吹き飛ばした。

「特に『有給の』ってあたりが泣けてくる」

「違うからな？そんな怠惰な名前の都市じゃないぞ？」

そんなんじゃないよそこにいるヤツが毎日有給とって仕事放棄してる……  
トの国になってる。



「まあ、そんなコトはどうでもいいからすぐにエデンに行くよ！」

「ハイハイ。で、門はどこだ？」

「こつち」

俺達はエデンの魔導師を訪ねに行くことになった。

「・・・ここ、かな？」

「・・・この町、大丈夫か？」

「何が？」

「何がって・・・」

魔物おれがこんなところまで来ても気付かないってこと。

魔物の排除を謳うたう神聖都市ゴゴが俺の存在に気付かないってどうだ？  
・・・こんなだったら普通に忍び込んで内側から奇襲かけたら  
制圧できる。

そう思ったときだった。

俺はいきなりものすごいプレッシャーを感じた。

あまりの力の大きさに冷や汗が出る。体がこわばり、指一本すら  
動かせない。

俺が隣を見ると、カオルも顔を青ざめさせていた。

どうも、俺達は同じものを感じ取っているようだ。

「余所者が何をしている」

威厳に満ちた重々しい声。

俺は言うことを聞かない体を無理矢理声がしたほうに向かせる。そこには、二十代ほどの白を基調とした軍服を着た青年がいた。そして、その青年が俺達にもすごいプレッシャーを放っている。周りの人はまるで何事もないかのように普通に過ごしている。

「な、何、この、人……」

「な、なる、ほど……。そういう、ことか」

俺達にのみ伝わる恐怖。

いや、たぶん、これぐらいのことはこの都市では日常茶飯事なんだろう。

こんな、魔物よりも化け物らしい力を持ったヤツがいるのが当たり前なんだ。内側から攻めたとしても攻め落とせるかどうか疑問が残る。

簡単に言うと、ここにいる人間、全員がものすごく強いんだろう……。

俺はカオルの盾になるように前に出る。

「……ほう」

「隊長！何、子供をビビらせてるんですか!?!」

すると、傍から若い女性の隊員が出てくる。そして、俺達と同じ目線になって怖かったねーと言ってくれる。

「ゴメンね。あのおじさんが怖い思いさせちゃって」

「・・・おい。俺はまだおじさんと言われる年齢じゃないぞ？」

その言葉と同時に俺達に向けられていたプレッシャーがなくなる。俺達はその途端、地面に座り込んでしまった。

「ちょ！？隊長！？この子達かなりグロッキーになってますよ！？」

「おい、そいつはな・・・まあ、いいや。悪い」

二十代の男の人はそういうと頭をかきつつも俺達に謝る。

「そんな適当な謝り方をして・・・。ゴメンね、僕達。このおじさんね、つい最近魔物大群が動くって情報聞いたからピリピリしてるの」

「は、はあ・・・」

カオルがそう返事をするが呆然としたままで言葉の意味を理解しているのか怪しい。

それを見て女性の隊員が俺達に質問をする。

「じゃあ、君達は何でココに来たのかな？」

「ハッ！？そうよ、数法術のコト聞かなくちゃ！！」

・・・一気にカオルが覚醒した。

このあまりの豹変振りに目の前の女性隊員さんも目を白黒させる。

「『数法術』？つい最近、ここの先生が作った魔法系統よね？」

「はい！わたし達、新しい魔法系統、『魔法陣』のことを研究しているんです！」

カオルはここぞとばかりに目の前の女性隊員さんに熱弁をふるう。魔法陣の特徴。よい点、悪い点、そしてその改善点、俺達が考えて作り出した魔法、それをマシンガントークで。

「へえ〜。こんなに小さいのにすごいね。偉い」

「ちよつと、聞いた、龍造？」

「まあ、本音が詠唱がキライって所を話してないことはわかった」

「ツルギ 剣！」

「タテ 盾！」

いきなり衝突する二つの魔法。

「コラ」

「「イタっ!?!」」

そして俺達は頭を叩かれた。

「こんなところで魔法使っちゃダメでしょ〜」

「……ハイ」

何故か、優しそうなお姉さんの後ろに般若が見えた気がした。  
俺達はその迫力に返事した。

すると、その女性隊員は般若を引っ込めると俺達に優しげな微笑を見せて話しかける。

「でも、こんなところに小さな子供だけで危ないよ？最近はこのわ  
ーいおじさんとかがいっぱいいるからね」

「……おい。そこで何で俺を見る？」

「わかりました」

「……ガキが」

「隊長？」

「……スマン」

どっちが上司なのかいまいちわかりにくい上下関係だった。

そして、女性隊員は俺達に遅くなるまでにお家に帰るんだよ？と  
いうと隊長と呼ばれた男の人と通りを歩いていった。

「……じゃ、わたし達も行きましょう」

「そうだな」

side 女性隊員

「隊長、何であんな小さな子供を怖がらせたんですか？」

わたしは気になって隊長に聞いてみた。

無論、子供とはさつき話した男の子と女の子の二人だ。

「・・・お前、あれが何に見えた？」

「はい？」

「いや、すまない。変なことを聞いた。だが、これだけは言っておく。・・・あの二人の子供は、俺の力の大きさを測る器を持っていた」

「はあ？」

「・・・簡単に言うのだ。あの子供達の力はおそらく相当強い」

「・・・隊長が言うんでしたら、相当ですね」

要するに、子供の時点でそんな力がある。つまりはかなり希少で強力な属性持ち。

それに、自分達で作った魔法を実際に使い、行使していた。

「将来、あの子達はエデンを脅かす存在になるかもな」

「またまた。エデンに喧嘩を売るような人間はいませんよ」

「確かに、人間ならな」

そういうと隊長は口を閉ざし、黙々と城、つまりはエデンの王宮に向かつていった。

でも、わたしが思うに、隊長が負ける姿が想像できないんですよ……。

だって、属性『陽』を持つエデン最強の第一部隊オーデインの隊長なんですよ？

side 龍造

「で、ココか？」

「……うん。ココみたい」

俺達はある一軒の家の前にいた。というか、若干信じられない見た感じ、ごく普通の家。

だが、ココは高級住宅街。むしろ普通の家があると違和感がハンパ無い。つか、家を建てるところを間違えている。

「TPOをわきまえろって感じだな」

「……確かに」

そういうとカオルが周囲から浮きまくっている家のインターフォンを鳴らす。

すると、しばらくして一人の初老の男性が出てきた。

「……何か用かな？」

たぶん、この人が数法術を作り出した人、ハファリア・ガニユス。

俺はストレートに数法術をどうやって造ったか教えてくれとも言えず言葉を考える。

要するに、この人の研究成果を見せろって言ってるのと同じだからな……。

「まあ……その……」

「数法術をどうやって造ったか教えてください!」

……良くも悪くもバカ正直なやつがいたのを忘れていた。

「はっはっは。いきなり言われて驚いたよ」

「すみません。こいつがバカで」

「何よ!? だって、ココには魔法<sup>コード</sup>文字の参考になりそうなことを聞きにきたのよ?」

ハフアリアさんはカオルのぶしつけな質問に一瞬だけ呆けたような表情をすると、次の瞬間には大きな声で笑い出した。

俺はいきなりコイツが質問したもんだから、怒りを通り越して笑い始めたのかとひやひやしたが、どうもこの人はただ単におおらかな人だったらしい。

……おおらか過ぎる気もするけど。

で、今は家の中に通されて応接室っぽいところでお茶を馳走になってる。



「で、数法術の魔法文字を知りたいのかね？」

「ハイ！わたし達が作ってる詠唱系統、『魔法陣』の参考にしたいんです！」

カオルはここぞとばかりに勢いこんで俺達の考え出した魔法陣について語りだした。

・・・なあ、茶菓子をはおばりながら言っなよ。

俺はカオルの横で何回も頭を下げた。なんか、そうしないと相手に悪い気がした。

「・・・なるほど、まあ、別に大丈夫だが？」

「「いいの!?!」」

「おや？そのために遠くからはるばる来たんだろ？」

「いや、こんな簡単に聞けるとは思わなくて・・・」

「まあ、確かにそうだろうね。魔法の研究成果は魔導師にとっての生命線だ。それで食ってるんだからね」

「でも、それなら何でわたし達に教えてくれるんですか？」

カオルも一応は厚かましいお願いをしていたことをわかっているらしい。

少し申し訳なさそうにハフアリアさんに聞いた。

「まあ、ぶっちゃけると、私の数法術は不完全だ」

「不完全だから教えてもいい？」

「いや、普通はそれでもこんなことはしない」

「じゃあ、何で？」

「簡単だよ。君達みたいな子供が魔法に興味を持って、それで今の魔法をよりよいものにして欲しいと思ったからだよ」

そう聞いて、俺達は思わず黙り込んでしまった。

自分達は、他人のためと言うより、自分のために魔法陣を考え出した。

魔法がうまく使えない。なら、使える魔法を作り出そう。・・・そう考えて。

でも、ハフアリアさんは未来ある俺達が今後の魔法をよりよいものにして欲しいために教えてくれるつもりだ。

何故か、胸の奥にもやもやとしたモノが広がった。

「でも、わたし達は自分のために魔法陣を作り出そうとしてるんですよ？」

カオルも俺と同じ気持ちなのか、自分の中の正直な気持ちを吐露した。

「それでも、だ。つい最近、詠唱形態の魔法で既に満足している人が多い。でも、魔法の可能性はそれだけじゃないだろう？・・・そうだね、君達風に言えば、何だか、そういうのはイヤだって思わないか？」

「……」

どことなく悪戯っぽい笑みを浮かべて俺達に言った。

そして、それはいつもカオルの言ってる言葉。

カオルはできないから、不可能だから、下手だから、と言う理由で物事を諦めたくないと言う<sup>タチ</sup>気質だ。

そして、それは目の前にいるこの人にも当てはまるようだった。

「まあ、とにかく、私は未来を担う子供たちになら教えてもいいかなと思っただよ。……で、君達はどうしたい？」

そんなの、俺達の答えは決まっている。

いや、本来はそのために来たんだから……。

「「お願いします！」

s i d e ? ?

「……どうだ？準備のほうは？」

荘厳な空気を醸し出す一室。そこには大きな机を囲むようにして椅子に座る複数の影があった。初めに声を出したのは上座にある、

一際大きな椅子……いや、玉座に腰掛けたもの。

そして、その言葉に答えるために影のいくつかが立ち上がる。

「は。やはり、平和ボケした領ですので簡単に潜入することができました」

「軍備も補給用物資も手配済みです。兵の方もいつでも進軍させ

ることが可能です」

その言葉に玉座に腰掛けたものは満足げにうなずく。

「では……三日後に軍を進めるぞ」

「」「」は！」「」

そういうと、玉座に座った影を残して残りは部屋から出て行った。そして、誰もいない部屋に忍び笑いが漏れる。

「くくく、待っているよ？……『黄昏の魔王』よ」

9話・MATRIX MAGIC（後書き）

作 「すみません、遅くなりました。というわけで今回は『数法術』でした」

龍 「中二成分がこれでもかというぐらいにのっておるの」

作 「なんかこうなりました」

龍 「・・・なんかって、お主」

作 「まあ、そんなわけで・・・がんばれ、昔の龍造さん！」

龍 「・・・わしは？」

作 「・・・がんばればいいんじゃない？」

龍 「軽いの!?!」

作 「そんなわけで、次回！」

龍 「・・・わし、泣いてしまうぞ？」

作 「さて、結局なんか最後にあからさまなフラグってコトで・・・何か起きます」

龍 「いや、何も起きん小説はどうかと思うがの」

作 「昔の龍造さん達の魔法陣は？そして旧魔窟<sup>ネスト</sup>はどうなる？・・・というわけで次回もよろしく願います」

## 10話・BARRIER

side 龍造

「・・・君達、大丈夫か？」

「大丈夫です！」

「・・・たぶん」

アレから三日目、俺達はハフアリアさんの家に俺達は数法術の魔法文字について勉強させてもらっている。

だが、普通に難しい。

大体、最初の数行にあるこの魔法文字は何かと質問したら『魔法の言葉だ』と真顔で返された。

いや、俺達はその魔法の言葉を勉強しに着たんだけど？

「・・・最初の言葉は本当に規則性がなさ過ぎるんですけど？」

「まあ、そういうものだからしょうがない」

何だか、いろいろと疲れてきた。

だが、面白いこともわかった。

この数法術、なんと魔法文字の理解さえできれば自分オリジナルの魔法を作成可能らしい。

そこで、俺達は考えた。

もしも、魔法文字を作り出すことに成功すれば、抽象展開のときに魔法文字を改良あるいは付け足して、数法術と似たようなことができるかもしれない。

そうすれば、自分で作り出した物なワケだから普通に覚えるより

も簡単に魔法を行使できるようになるかもしれない。  
そんなことを考えつつ、俺達は教えてもらった後、いろいろと実  
験を繰り返している。

「でも、数術も昔の魔法陣を元に考え出してあったんですね」

「ああ。だから、君達に教えてもいいかと思ったんだ。それに、  
一から教えるよりはるかに楽だ」

「……ぶつちやけますね」

「龍造君、ココ間違ってるぞ」

「……ガンバリマス」

「やっぱ、龍造はダメね。ハイ！見てください、このわたしの華  
麗な魔法構成を！！」  
プログラム

「ココとココ、それとココも違う」

「……え？」

「……どつちがダメなんだか」

「ツルギ 剣！！」

「シユン 盾！！」

「……またかい」

ここでも、俺達の関係はおおむね変わってなかったりする。

しかも、ハフアリアさんも慣れたのか数法術で水を操作して文字通り火の粉が降りかからないようにしている。

ただ、変わったことと言えばひとつだけある。

「・・・威力が制御できるようになったのはよかった」

「ふん！これで続けて龍造に 剣<sup>ツルギ</sup>を叩き付けれるわ」

そう。俺達は魔法陣の制御に成功した。

数法術は効率的に魔力を使い、少ない魔力で最大限の威力を発揮するということに重点が置かれていることに気付いた俺達は、その制御魔法文字をまず先に考えた。

と、言っても数法術の魔法文字を使わせてもらっているだけ。ホントにこの人はいい人過ぎる。・・・たまに悪い人に騙されないかなと思う。

「でも、できるようになったって言っても、制御だけなんだよな・・・」

「そんなにすぐ結果が出るようなものでもないさ。この、数法術に関して私の師の師から、つまり三世代かけてやっとこの程度だ」

「・・・やっぱり、大変だな」

わかってはいたつもりだけど、やっぱり人間だとそうなるのは当たり前だよなとも思う。

「カオル、俺達が一生やってできるかどうかかわらないってさ。どうするっ？」



「いざと言うときは龍造に責任を取ってもらって……」

「おい。何で俺が責任を取らなきゃいけないんだ!？」

「大丈夫、龍造なら千年ぐらいヨユーでしょ」

「何の根拠を持って言ってるんだ!?!つか、千年ってどういうことだ!?!」

「え?だって、いざと言うときは龍造が何とかしてくれるでしょ?」

「いや、だから根拠は!？」

「……龍造だから?」

無茶苦茶だ!とか俺は講義の嵐を上げていた。

表面上では。内心ではかなり焦っていた。

もしかして、コイツは俺が魔物であることを知っているんじゃないか?一瞬だけだがそう思わせる言動だ。もし、俺とカオルが契約すれば確かにカオルの寿命をはるかに延ばすことができる。

だが、別にコイツの前でそんなボロを出すようなことは何もしていないはずだ。

どうせ……不本意だけど、俺を実験台に積極的に魔法の実験をするってコトだろうと思う。もし、前者の理由ならかなりおかしいし。

「魔物は、全人類の敵……か」

「ん？龍造、どうしたの？」

「いや、何でも……。てか、こづいう風にすればできんじゃね  
？」

「……どうだろ？実験してみるしかないよね」

「あ、俺トイレ」

「まあまあ、待ちなさいって」

「掴むな！ちびるぞ！？」

「逃げなさんな、ダンナ……。ふふふ」

「お前がそんな笑いかたしても頭がおかしくなったと思えな  
い……」

「……あゝ……。何でもいいが、家は壊すなよ？」

「待つて！？ココは止めて！？」

「龍造！許可も出たからやるわよ……！」

「助けて……！？」

俺は結局、いつものようにコイツの実験台になった。

「・・・今日も死ぬかと思った」

「死ななくてよかったね」

「誰のせいでごうなっと思ったんだよ!？」

「まあまあ・・・でも龍造のおかげで新しい発見もあったし」

「・・・確かに、そうだけどさあ」

俺達はエデンから家に帰る途中。

村の近くにある門ゲートから出て、村へと向かっている途中だ。

俺達は魔法文字コードをハフアリアさんの家で勉強してからいつもものところへ行って魔法の研究をしている。

まあ、今は俺達が考え出した魔法の改良を中心に魔法構成プログラムを考えている。

まあ、既に改良をして前とは比べ物にならないほど使い勝手がよくなってる。

・・・まあ、結局のところ二つか三つしかないわけだけど。

「でも、たった三日でココまでよくできたな」

「ふふん。それはわたしが天才だからよ」

「・・・まあ、確かに天災だな」

「何？龍造にしては珍しいじゃない。もっとわたしを褒めなさい」

「薫様は天災です」

「……何で？全然褒められた気がしない」

「冗談だろ？俺はこんなにも誠心誠意心を込めて言ってるんだぞ？」

内容は確実に悪口だが。

俺達がそんな取りとめのない話をしながら、いつもの林の中へと入る。

そして広場のほうへ行こうとしたとき、林の中から複数の声がした気が。

「あれ？誰がいるのかな？」

「……でも、今って狩りのシーズンじゃないよ、な？」

「……うん。この辺は冬になるとだから」

今の季節は春も既に終わりかけの晩春。

そして、俺達がココを魔法陣の練習場所に使っている理由は人があまり通らない、なんだけどなあ……？

「……どうする？」

「……ひょっとすると、迷子になった人かも？」

俺達はそういうと、迷子だろうう人を助けるべく声の下方向へと向かった。

そして、そこにいたのは……武装した魔物の集団だった。俺達はそれを見て一瞬だけフリーズするが、俺はすぐにカオルの頭を押さえつけて藪の陰に隠れ魔物達に見つからないようにした。

「な、なにあれ!？」

「……魔物の、兵隊？」

そうとしか考えられない。

どこかわからないけど、別の領の魔王軍がココへ攻めてきたんだろ。

だが、ココは魔窟<sup>ネスト</sup>の領地。

底から考え出される結論は……。

「……魔王軍同士の戦争」

「嘘!？」

「バカ!声がかい!」

俺は大きな声を出したカオルの口を手で塞ぐ。

カオルはパニックになるがすぐに落ち着きを取り戻す。

俺は大丈夫だと判断してカオルの口から手を離す。

「ど、どうするの!？」

「……まず、お前はハフアリアさんのところに逃げる。俺が村に先回りしてココから避難するように言っ」

「でも、龍造が……」

「大丈夫だ。村の人に伝えたら俺もすぐにハフアリアさんトコに行くから」

「それは困るなあ」

「「!?」」

俺達はいきなり後ろから現れた影に気付かず、襟首を掴まれて子猫みたいに吊り上げられた。

「は、離せ!」

「・・・!?」

俺は逃げようと必死に暴れるが相手はびくともしない。首を後ろに回してみても、そこにはまるでトカゲが人のように服を着て二足歩行してる姿があった。

「リザーディアン 蜥蜴人族・・・!」

「ほお?よく知ってるな」

「ああ?・・・何だそのガキ?」

「ああ、ココで盗み聞きしてたんだよ」

そういうと、俺とカオルをまるで荷物を扱うみたいに放り投げた。その投げた先には、多種多様な魔物の群れ。・・・間違いない。魔窟にこんな魔物はいない。

俺は恐怖で動けないカオルを庇うようにして抱き寄せる。

「……りゅ、龍造」

「大丈夫だ。俺が何とかする」

周りは魔物、二人で逃げるのは正直言っただけで絶望的。  
どうする………！

「何だ？ガキの癖に騎士<sup>ナイト</sup>気取りか？」

「……」

「ハッ！ビビッて声もでねえか！！」

「とんだ臆病騎士様だな！」

周囲の魔物達はその言葉に下卑た笑い声を上げる。  
でも、俺もそう思うよ……。

こんなことになるなら、ちゃんと魔法を練習しとけばよかったな……。

そうすれば、カオルを守れたのに……。  
でも、俺には……この力がある。

「……カオル、俺が注意をひきつけるからその間に逃げろ」

「で、でも、そんなことしたら龍造が……」

「大丈夫だ。あの時の魔獣<sup>イフシシ</sup>よりマシだ……。カウントは三だ」

俺は数をカウントし始める。

そして、両手を地面に叩きつけて魔法陣を展開し発動。

「ツルギ 剣！」

地面に展開された大きな魔法陣から太い角棒が勢いよく飛び出る。リーダーっぽい雰囲気を持つ魔物の顔面に直撃し、カオルが逃げる。

「・・・なんだ？この魔法？」

「な、何で・・・」

でも、完全な不意打ちだったにもかかわらず、魔法はリーダー格の魔物の手で簡単に止められてしまった。

そのことに、カオルが思わず立ち止まり、逃げるタイミングを失ってしまった。

「・・・少し、灸をすえてやらなきゃいかな」

そういうと立ち上がり、俺の目の前に来る。

おもむろに俺へと、まるで虫を払うように手をさっと振る。すると、簡単に俺は吹き飛ばされた。

「龍造!？」

「だ、大丈夫だ・・・」

幸い、体に怪我はない。

たぶん、カオルの魔法の実験に付き合わされて受身がうまくなっ



てたんだろつと思う。

そして、俺は追撃を警戒して防御用の魔法陣を展開する。その姿を見て、相手は何かに気付いたようだった。

「・・・そうか、そういうことか。やけに魔物を見ても平然としてるわけだ。それに、どこかで見た気もするわけだ」

「・・・」

「・・・龍、造？」

たぶん、カオルにはどういうことかわからないだろう。

いや、わかったかもしれないけど、認めたくはないだろう・・・  
たぶん。

実は、友達が魔物で・・・。

「『黄昏の魔王』の息子よ」

魔王の息子なんて・・・な。

それを聞くと、カオルは顔を伏せる。

・・・やっぱ、怒ってるのかな？

だって、俺が魔物だってコト、ずっと隠してたんだもん・・・。  
友達だって、信じてくれていたんだもん・・・。

それが、実は魔物だったとか・・・裏切られたと思ってるんだろつな。

「・・・カオル、ゴメンな」

俺は、無意識に謝っていた。

ホント、とんだ臆病騎士サマだ。

「・・・バカじゃないの？」

俺が謝った途端、カオルがきつと顔を上げると、俺を睨みつける。そして、俺のところにつかつかと歩いてくる。

魔物達は、たかが人間の子供だとただ目で追っただけだ。

「・・・そんな事、何となくわかってたわよ。それに、ただの人間があんなところにいるわけないでしょ？」

「・・・はあ？・・・じゃ、じゃあ、何で俺と一緒にいたんだよ？」

「そんなの、決まってるじゃない」

そういうと、カオルは肩膝をついている俺を無理矢理立たせる。

そして、同じ目線になると言った。

「龍造は、わたしの数少ない、大切な親友だからよ」

一瞬、俺はカオルが何て言ってるのかわからなかった。

そして、次第に理解していくと、今度は次々と疑問が浮かんでく

る。

「でも、俺・・・魔物で、魔王の息子だ・・・」

「違う。龍造は、バカで、お人よしで、魔法がヘタクソな、ただの子供なんだよ?」

そういうと、今度は相手のリーダー格の魔物の前まで行き、カオルは睨みつける。

「だから、わたしの親友を傷つけるのは・・・許さない」

そして、カオルは自分の右手を素早く相手に当て、たった一言だけ言う。

「<sup>ハッ</sup>発！」

零距离での魔法。

使ったのは自分の魔力を全てを使って魔力的な特性を放出する魔法。

しかも、カオルの魔力的特性は『爆発』だ。

それを受ければただではすまないだろう。

この光景を見て、相手はパニックに陥る。

子供を殺せだとか、傷を治せだとか、事態の收拾がついていない。俺はこの気に乗じて逃げることにしようとかカオルの手を掴む。

「カオル！今のうちに逃げるぞ！」

「もちろん！」

そういつと、俺達はパニックに陥る敵の拠点を走り出した。

走り出して数分。

後から何か追いかけてくる気配を感じた。

「ちっ！もう来た……。カオル、大丈夫か！？」

「……。う、うん」

次第に走るスピードに遅れが見えるカオルに俺は声をかけた。

そして、後を振り向くと、そこには今にも倒れそうなカオルの姿があった。

俺はすぐに急ブレーキをかける。

「おい！？ホントに大丈夫なのか！？」

「だ、大丈夫……。早く、村に知らせ、ないと……」

そういつと、カオルはぐらりと体のバランスを崩す。

俺はとっさにカオルの体を支える。すると、手に湿った感触。手を見ると、そこは真っ赤な液体で濡れていた。

俺が絶句していると、カオルは青白い顔で苦笑いする。

「あ、はは……。バレちゃった」

「バレちゃったじゃない！何で言わなかった！？」

「だって、龍造、早く逃げないと、殺されちゃうじゃん。．．．それに、村の人だって」

「それで、お前が死んだら、元も子もないだろ！！」

そういうと、俺は覇気のないカオルを無理矢理背負い、走る。スピードは格段に落ちる。それに、走りづらい．．．。でも、こいつが死ぬのだけは絶対にイヤだ。

「死ぬなよ！いや、むしろ死んでも生きる！」

「．．．龍造って案外無茶苦茶言うんだね」

「無茶苦茶はお前の専売特許だろ！それに、そんな喋り方、お前らしくないんだよ！」

「．．．そう、かもね」

俺達にとっては通いなれた林の小道。

今は何でこんなところを練習場所にしようとしたのかと、昔の俺達をなじりたくなる。

いや、理由は魔法実験で関係のない人が巻き込まれないようにしようとしただけだったが。

でも、こんなことになるなら．．．。

「．．．ねえ、龍造」

「何だよ、置いて逃げるとかだったら、張り倒す」

「違うよ。……もし、魔物と、人間が、仲良しだったら、こんなことにならなかったのかな……」

人間と魔物。

決して相容れることのない存在。

それが、普通の、世間一般での認識。

「……バカ野郎、お前がそんな事言うのか？無いなら造る、だろ？」

「……そうだね。龍造なら、きっとできるよ」

その言葉に、俺が反論しようとしたとき、カオルはいきなり何かを思いついたらしく、俺に言葉を言わせなかった。

「龍造の属性、まだ名前決めてなかったよね……」

「いきなりなんだよ……。今はそんな場合じゃないだろ」

「龍造はさ、わたしの攻撃性の高い属性と違って、みんなを守る力だよ……。だから、『結界』って言うのはどうかな？」

「『結界』……？」

「うん……意味はね」

この言葉を俺は絶対に忘れないだろう。

そんな子供の俺でも安易に想像がついた。

そして、コイツとの誓いを絶対に忘れない。

現実に見せると、このときに誓ったんだと思った。



10話・BARRIER（後書き）

作 「とうわけでお久しぶりです！『結界』をお送りしました」

空 「ついに、龍造さんのヤツが・・・」

作 「そうそう。でも、それは次回に持ち越すぜ！」

空 「うわぁ・・・。こういうの、普通にウザい」

作 「・・・やめて、ハートが弱い作者がいろいろとダメになるよ？」

空 「はいはい、がんばってね」

作 「スルー！？」

空 「じゃ、次回予告してよ」

作 「・・・何か釈然としないものがあるけど、次回！魔物の軍勢襲来！村人や、龍造にカオルはどうなる！？」

空 「次回もよろしくお願いします」



11話・LINKING THE WORLD・SMAGIC

side 龍造

「見えた!!」

「・・・」

カオルは意識が朦朧としているのかさつきから返事が無い。  
あれから数分。

やっと村の入り口が見えた。

そこには、いつもと変わらないカオルの村の日常。

人々が通りを行き交い、友人と談笑していた。

そして、俺はその中に見知った人影を見つけた。

「おばさん!!」

「あら？龍造君？・・・また、ウチの娘は」

「違う！カオルが怪我して、死にそうなんだ!!それに、魔物の  
軍隊が近くで拠点を張ってる!!」

「何を言ってる・・・」

そして、カオルのおばさんは、俺に背負われているカオルを見る  
と、血相を変えた。

そして、おばさんの知り合いの人が医者呼びに行き、俺はカオ  
ルをおろした。

「か、カオル!!」

「……………おか、あ、さん？」

「何で、どうして……………」

「俺のせいです……………。俺が、逃げようとしたときに失敗して、カオルが魔法の余波で怪我を……………」

支離滅裂にいつもの林であったことをおばさんに伝えようとする  
と、おばさんが俺の目の前で膝をつき、同じ視線になって聞く。

「龍造君、落ち着いて……………。いつもの林で？」

「……………はい」

そして、俺はおばさんに聞かれるままに答えた。

魔法の練習をしようとしたら、声が聞こえて、そこには魔物がいて、俺達は掴まって、俺が魔法で逃げようとしたら失敗して、カオルが奇襲に成功させたけどその変わりに怪我をして、そして走って逃げてきて……………。

俺はそれだけのことを何とか伝えることができた。

「……………魔物だ！！魔物の大群だ！！」

半信半疑に外を見ていた人が大声でそういった。

俺はその声で村の外を見ると、先頭にはカオルが一撃入れた魔物がいた。

……………やっぱり、俺が何とかするしかない。

俺はそう思ってた村の外へと走り出そうとしたとき、何かに手を掴まれた。

「カオル、離してくれ。俺なら、あいつらにココを襲わないように交渉できる」

「……でも、そんなことしたら、龍造が」

「待って、君にそんなことができるの？」

そう、疑問に出したのはおばさん。

やっぱり、気付いていたのはカオルだけだったのか。

「価値はある。だって、俺は……」

「ダメ、行かない、で……。そんなの、関係ない。龍造は……  
龍造だよ……」

その言葉に、俺はホントに感謝の念が耐えない。

でも、今のこの状況を何とかできる可能性を持つのは俺だけなんだ。

「でも、俺は……こんなんでも……」

魔王の息子だから。

そう言おうとしたときだった。

「そこか!!」

ものすごい大声とともにあのリーダー格の魔物が俺を見てそういった。

すると、一瞬だけ村人たちは呆けたような顔をして、それが誰に

向けられたものかわかると、パニックに陥った。

本当に俺達の言うとおりでたつたと、やっと理解できたようだった。

「ま、待ってくれ！この村を、巻き込まないでくれ！」

俺がそういつと、相手が言葉を返してきた。

「誰のせいで、この俺が人間の小娘如きに傷を負わされたと思っている！！貴様らは最後まで生かし、その目の前で全員を殺してくれる！！」

最悪だ。

俺達のせいで……。

「……龍造」

そのとき、俺に小さな声で話しかけるやつがいた。

カオルだ。

カオルは俺に小さく、だが、俺にはつきりところ言った。

「お願い、みんなを、守って……」

「……わかった」

そうだった。

後悔しないように……。

カオルはいつもそうやって俺を引っ張りまわした。

いつも、ハチャメチャなことやって俺をボコボコにしたりしたが、コイツはいつも俺達が後悔しないように魔法を勉強し続けてきた。

だから、ココで……。

俺は媒介展開をするのにいつも持っている数枚の紙とペンを取り出し、そこに慣れ親しんだ魔法陣を描いていく。

その作業は、すぐに終わる。

「おばさん！この紙を、村の外に！」

「え？でも……」

「時間が無いんです！これを、魔法で転移させてください。俺は、まだそんな魔法を使えない……」

俺がそういうと、おばさんは何かを感じ取ったのか俺が書いた魔法陣の紙を手に取り、素早く転移の魔法を発動準備をする。

「……どこに転移すればいい？」

「村の外四箇所に円を描くように。それと、魔物の軍勢が入っていないところに」

「わかったわ」

そういうと、カオルのおばさんは転移を発動させ、紙が手元から

消失。俺は自分の手に残った一枚の紙、<sup>シユン</sup>盾の魔法陣が描かれた紙に魔力を流し込む。

すると、それに呼応するかのように村の外に配置された魔法陣の紙も反応しているのが感覚的にわかる。

「世界を結び、みんなを・・・カオル達を守る力を！！」

<sup>クツカイ</sup>結果！！

すると、魔法陣が設置されたであろう場所から魔力があふれ、魔力線がつながる。そして、その魔力線に沿って半透明の壁がせり上がっていき、この村を四角形の半透明な部屋で囲む。

誘導展開。

今日、たまたま見つけた魔法陣現象だ。

きつかけは簡単。<sup>ツルギ</sup>剣は俺にとつて使いにくい魔法だ。それ以前にも説明したと思う。だから、魔力をカットしても<sup>ツルギ</sup>剣が消えないようにしようとしたとき、魔法陣が二つあればどうだ？ということに疑問を持った。

俺が<sup>ツルギ</sup>剣の魔法陣を両方の掌に展開すると、その現象は起きた。まるで、魔法陣がそれぞれの存在を確認するかのように点滅を始めた。

そして、カオルはすぐさま自分も<sup>ツルギ</sup>剣を展開。だが、カオルの魔法には何の反応もしなかった。たぶん、同じ魔力にしか反応しないんだろう。

そこで、俺達は仮説を立てた。

魔法陣は、小さなものでも数を増やせば強化できるのではないかと。

そして、ハフアリアさんもこの現象に興味を持ったのかそこで簡易的な実験をして、媒介展開をするとかなり安定することが判明。

そして、今回は俺の得意とする魔法陣<sup>シユン</sup>盾を展開し、上位の魔法へと昇華させた。

すると、相手は行軍をやめ、俺の生成した ケツカイ 結界 に魔法を打ち込んで破壊しようとした。

だが、俺の魔法はどうも防御に重点がおかれているためにか中々破壊することはできない。

業を煮やした相手の指揮官っぽい魔物が怒鳴り散らし、部下を叱咤して自分も魔法を放つが俺の魔法はびくともしない。

「貴様、どれだけ愚弄する気だ！」

「黙れ、俺は、みんなを、カオルを守るんだよー！」

そういうと、相手は邪悪な笑みを浮かべ、俺に・・・いや、村人達に言うように言った。

「守る、だ？お前は、自分の立場を知っているのか？お前は、魔王の息子だろー！」

相手がそう言った瞬間、パニックに陥っていたはずの村人達が一瞬静まった。

俺はというと、ついにバレた・・・と言う思いでいっぱいだった。そして、村人は理解が追いつくと俺を見た。

そこには、戸惑いの視線と、憎悪に満ちた視線の二つで支配された。

「この子が、魔王の息子？」

「ありえない、あれは嘘よー！」

「でも、何でそんな嘘を？」

「でも、この子は俺達を守ってくれた」

「待てよ、俺達を油断させて一気にやる気かもしれないぞ?」

「でも、それならチャンスはいくらでも・・・」

「だが、この魔物達がココに来たのはこいつのせいかもしれないんだぞ!?!」

ああ、やっぱりこうなるんだ。

魔王なんて、所詮は魔物の王。悪の親玉だ。

・・・ゴメン、カオル。俺には・・・やっぱり無理かもしんね・・・

「・・・違うよ、龍造は、わたしの友達、だよ?」

カオルのうわ言のような声が聞こえるが村人たちには届かない。いや、実際にうわ言だと思われるんだろう。

「・・・ゴメンな、カオル。やっぱり、俺行くわ」

「・・・ダメ・・・!」

俺はカオルの手を強引に振りほどくと村の外へと歩き出す。そして、相手の指揮官の前まで行く。

「どうした? 『黄昏の魔王』の息子よ」

「・・・取引したい。俺は投降する・・・だから、この村の人達には手を出さないでくれ」



「……よかるう。ならば、この魔法を解け」

俺は、自分が出て行くためにも魔法をとこうとした。

そして、まるでタイミングを見計らったかのように炎の塊が敵の指揮官を直撃した。

「ぐう！？……何者だ！」

「俺だよ、『雷拳の魔王』」

そういうと、声のした方向から槍を肩に担いだ一人の男が現れた。  
『黄昏の魔王』、すなわち俺の父さん。

「父さん！」

「龍造、絶対に魔法を解除するなした瞬間にこいつらはその村を襲うぞ」

「……ツチ。だが、お前一人で何ができる？」

「そうだな。子供相手にマジになる雑魚魔王の相手ぐらいにはなるんじゃない？」

「……よほど死にたいらしいな」

「そうだな。焼死体になる前にさっさと自分の領地に帰れ、どへタレ」

「言わせておけばあー！！」

ついにブチギレた相手が父さんに雷を纏わせた拳を突き出す。父さんは槍に炎を纏わせると相手の拳をいなし、槍の刃を地面に突き立てる。

「ラクナロク 神々の黄昏」

すると、槍を中心に光が収束し、次の瞬間には大きな爆発を起こして炎が猛る。

そして、周りは夕暮れのような空の色へと変化する。

それが、父さんが『黄昏の魔王』と呼ばれる由縁。

炎が収まると、そこには最早炭のようなとしか表現できないような物体があるだけだった。

「まあ、生きてるだろう。・・・だと、いいな」

「ぎ、ぎざまあ・・・」

「よし、問題なし」

いや、俺は問題大有りだと思う。

だって、父さんのあの魔法は真言。今までどっかに隠れてて詠唱の準備をしたとしか思えない。いや、それはまだいい。ただ、全員倒して、その後始末はどうすんの？

「大丈夫だ。父さん権限で部下の人に頼むから！」

そういつと親指を立てる。

・・・いや、グツじゃないよ。ホントに。

「だが、すまんな・・・来るのが遅れて」

「何がだよ。・・・全然遅れてなんかいない。だって、村の人達全員無事だ」

「・・・そうか」

父さんが俺に謝ったことの内容はわかってる。ただ、そんなのしよつがないじゃないか。

「・・・俺は、魔王の息子だからな」

そういつと俺は魔法陣を解除し、父さんに一步步み寄る。

「・・・だから、家に帰ろう」

「・・・そうだな」

そういつと、父さんと俺は魔窟へと転移された。

（数日後）

「・・・」

「・・・アナタ、さすがにこれは・・・まずくない？」

「俺もどうしたらいいかわからないんだ!」

父さんと母さんが何かを言ってるような気がするが今の俺の耳には入ってこない。

いつものように時は進み、魔窟は今日もにぎやかだ。

・・・でも、俺はその限りではない。

さつきから何をすることも無くボーっとしてるだけだ。

アレからカオルの村には近づいてすらいない。ただ、何故か魔法陣の研究だけは続けていた。いや、なんで続けているのかはわかる。でも正直な話、今の俺にできる魔法は二つほどしかない。しかも、ハファリアさんに何も言わずに休んでいた。・・・たぶん、カオルも怪我しているから行ってないだろう。

「・・・父さん」

「な、何だ！？俺にできることがあれば言ってみろ！！」

「・・・ちよつと、知り合いの人に会いに行ってくる」

そういつと、何故か両親が満面の笑みを浮かべて行って来いと言

う。

そして何故か抱き合って歓声を上げていた。

・・・さつきからなんなんだ？

俺は魔窟内の門からエデン近くの門に跳ぶ。

ココからは歩いて数分ほどでハファリアさんの家に着く。

そして、いつものように歩いてハファリアさんの家に行く。

すると、ボロ屋敷が見えてきた。俺は今にも壊れそうなインターフォンを押そうとしたとき、誰かがハファリアさんの家から出てきた。

「……あ」

一瞬、俺は夢でも見てるのかと思った。だが、コイツならありえると判断し、ハファリアさんの家から出てきた人物、カオルから逃走した。

「ちょ！？待ちなさい！！」

「待てと言われて待つやっはない！！」

「このやり取り懐かしい気がする！？……ッ」

後から追いかけてくるはずのカオルの走る音が止まったことに疑問を抱き振り返る。

すると、そこには俺を追いかけているはずのカオルが突然しゃがみこみ、自分のわき腹を押さえて痛みに耐えるような仕草をしていたカオルがいた。

つて、あそこは怪我したときの……！！

俺はカオルに駆け寄って、片膝についてカオルを見る。

「お前、無茶すんなよ！怪我してんだろ！？」

「……捕まえたあー！！」

「おまつ！？嘘かよ！？痛い！？痛い！？死ぬ！ギブギブ！！」

「何でいつもの時間に来ないんだ、このアホ魔王の息子が!」

「ゴメン!許して!もうしないから!」

そこには、普通の少女にコブラツイストをされる魔王の息子と言  
うシュールな光景が出来上がっていた。

「し、死ぬかと思った」

「ふん!」

俺はたいそうご立腹なカオル様により地獄への片道切符をプレゼ  
ントされる羽目になった。そしてその後、俺とカオルは誰にも見  
つからないよう、いつもの林に来て、そのこの地面に座っていた。

「で、何か言いたいことは?」

「・・・死にたくないです」

「却下」

「即答!」?

即答だった。

どうやら、カオルは相当怒っているらしい。

まあ、確かに俺が悪いような気がしないでもないけど・・・。

「・・・アホ龍造。何で、勝手に行っちゃうの？」

「だって、俺・・・魔王の息子だし・・・。あれ以上いたら、カオルにも迷惑が掛かる」

周りには俺のせいで魔物が村に攻めてきたって思ってるヤツが大勢いるだろう。

それに、実際にそれはその通りだとしか言いようが無い。

だから、魔王の息子と仲良くしていたカオルには確実に迷惑が掛かる。

よくて村八分。悪くてエデンかどっかに魔物に加担した家族とその娘ってレットルを張られて死刑。・・・そんなところか。

「・・・うん。わたし、そんなにうそが上手じゃないから正直に言うけど、たぶん、迷惑かかったと思う。・・・でも、それ以上に、龍造が行っちゃったことのほうがわたしにとって迷惑だったんだよ!？」

俺は、カオルの声が震えているのに気がついた。

たぶん、こいつにしては珍しく、泣くのをガマンしているんだろう。

「でも、俺だって、お前や、おばさんに迷惑をかけたくなかったんだよ・・・」

「そんなの・・・! わかってる! でも、それぐらい、何とかしなさいよ!」

「・・・相変わらず、無茶なこと言うな」

そして、俺は立ち上がる。

「……でも、俺には無理だった」

俺がそういうと、カオルは文句を言おうと口を開く。

俺はその言葉にかぶせるようにして言った。

「だから、いつか……俺が魔王になる。そして世界を結ぶ……  
『結界の魔王』として……な」

「龍造……」

あの時、カオルが言った言葉が頭の中に蘇る。

その言葉だけ、一言一句間違うことなく完璧に思い出すことができる。

『龍造はさ、わたしの攻撃性の高い属性と違って、みんなを守る力だよ？……だから、『結界』って言うのはどうかな？』

『『結界』……？』

『うん……意味はね　この世界を、結ぶって……』

そういうと、カオルは自分を指差す。



『こつちの世界と・・・』

そして、俺を指差す。

『そつちの世界を・・・そうすれば、みんな、幸せだよね・・・』

『・・・そうに、決まってるだろ』

俺はカオルを指差す。すると、カオルも自分を指差した。  
俺達はまったく同じ言葉を一緒に言った。

「こつちの世界と・・・」

そして、二人で俺を指差す。

「こつちの世界を、結ぶ・・・」

そういうと、俺はカオルに自分の手を差し出す。

「そうすれば、みんなハッピーだ。・・・今の俺には力が無い。  
だから、いつか俺が・・・人間も、魔物も喧嘩しないような、争い  
あわないような世界にしてみせる」

カオルは、俺の顔と差し出した手を交互に見ると、やけに不適な  
笑みを浮かべる。

「その言葉に嘘は無いわね？もし、わたしが生きてる間にそうなつてなかったら・・・わたしが勇者になってヘタレな『結界の魔王』をぶっ飛ばしに行くわよ」

そう言いつつ、カオルは俺の手を掴んで自分も立ち上がる。

「・・・それは・・・さすがに怖い・・・」

「そう？だったら、死にもの狂いでがんばりなさい・・・。あ、そうだ。なんならわたしが世界最強の魔法でおまじないしてあげようか？」

「あ、俺急用思い出したから帰るわ、じゃ！」

「まあまあ、待ちなさいって」

俺は手を振りほどこうとしたががちりとカオルに手を掴まれていて逃げ出せない。

「いやだ！何でこの場面で俺がお前の魔法の実験台にならなきゃいけない！俺は空を飛びたくない！」

「大丈夫！今回は飛ばないから！・・・龍造には刺激が強いかもだけ」

「お前、何するつもりだ！？」

やばい、コイツ何かするつもりだ。

いつもより目がマジになっていて危険な雰囲気しか感じられない。

「……イヤだ！何で俺がお前にいつも振り回されなくちゃいけないんだよ！？大体、俺は一応魔王のむ……」

俺はマシンガンの如く口からいろいろな言葉を吐き出すが、カオルの核兵器により口を閉ざすしかなかった。

頬に、何か湿った感じが……？

そう思って、カオルの顔を見ると、そこにはいつものように女の子らしくない不適な笑みを浮かべた少女。ただ、ほんのりと頬の辺りが赤い気がする……。

「ほ、ほら！最強のおまじない、でしょっ！！……お母さんが言ってたもん！」

「あ、ああ……」

……ただ、威力が強すぎて自分にも被害ダメージが及んでいる気がする。

「……じゃあ、次に会うまでにちゃんと、やることしときなさいよ」

「……期間が短くなってるぞ？」

「安心して。ちゃんとカッコイイ女勇者になってぶっ飛ばしに行くから」

安心できねー！

いつもならそういつところだと思っ。

「……なら、そんな時は俺がお前より強くなって返り討ちにしてやる。で、今までのことを利子つけて返済してやる、勇者よ」

「できるんなら、してみなさいよ。魔王様？」

俺達はそういうと笑いあい、それぞれの道を進みだした。

11話・LINKING THE WORLD・S MAGIC (後書き)

作 「やっと終わった龍造さんのターン！『世界を結ぶ魔法』でした！」

隆 「やっとか。二、三話のはずが長くなったな」

作 「自分でもビックリ。・・・まあ、実はサブのほうがやたらとかけてるって事実」

隆 「・・・おい」

作 「大丈夫！メインはちゃんと終わらせるから！」

隆 「・・・大丈夫かよ、ホントに」

作 「まあ、これで一応のタネ蒔きのほうも終了で、次回から時系列は戻ります」

隆 「ん？次回予告か？」

作 「そう。というわけで次回！やっと本題に突入。そしてわかる真実とは？」

隆 「・・・聞いてるだけだと壮大だな」

作 「残念、これはつりです」

隆 「自分から言いやがった!？」

## 12話・LIFE

side空志

「それが、わしとカオルの出会いじゃった」

「・・・なんていうか、龍造さんも昔はまともだったんだね」

「そこか！？先に言うのはそこかの！？」

ボクはむしろそこ以外にあるのかと周りを見渡してみる。

・・・よし、みんなの眼もそう言ってる。大丈夫だ。問題ない。

「・・・でも、すみません、それって、お義母様ですよ？」

「そうじゃの。いやあ、まさか本当に勇者になってわしのところに乗り込んでくるとは思わなかったの」

龍造さんは懐かしい思い出じゃ、といいながらハツハツと笑う。  
いや、それよりも聞きたいことがあるよ？

「おい、ジジイ、ちょっと待て。今無視できない単語が出てきたぞ？」

「・・・今、勇者が魔王に嫁ぎに来たって風にわたしに聞こえた気がするけど？」

そう。ボク等の耳がおかしいのか、そういう風に聞こえた。

しかも、リュウとカレンさんの関係にいろいろと大変なインパクトが襲来しそうな気がする。

「ん？そうじゃが？」

「いえ、『そうじゃが？』ではありませんよ。どこに勇者と結ばれる魔王がいるんですか！？」

「同じじゃー！」

龍造さんはふんぞり返ってえらそうに言う。

「……でも、ということは？」

「ま、まさか、リュウ君と、カレンさんは、従姉弟？」

「弟よ、久しぶりに会えてうれしい」

「イヤだよ！？俺の従姉弟がこんな変態とか！？しかも生ける屍リビングデッドだし！？」

「おい！？ワイは聞いとらんで！？」

「……落ち着かんか。その娘とカオルに血の繋がりは無いはずじゃぞ？」

「は？……どづいつことだ？」

ワケがわからない。

やっと出番がげふんげふん……とにかく、いろいろと情報が混雑してる。

「まず、カオルの名前は同じじゃ」

そういうと、龍造さんは紙とペンを取り出し、そこに漢字を書く。そこには、『橘薫』と書かれていた。

「じゃが、そっちの娘は立花のはずじゃ」

「よくご存知ですね」

「まあ。カオルがわし過ごしとるときに、『立花』と言う子供に教えたとか言っておったの。苗字が一緒に親近感が沸くとかでの・・・ただ、師匠があんなじゃったからミニカオルが出来上がったの」  
「そういうと龍造さんはどこと無く遠い目をした。  
でも、それは達観したようなものではなく、どこと無く哀愁が漂うものだった。」

「・・・そういえば、龍造さんの奥さんは今、どうしてるの？」

「数十年前に死んでしまったの、寿命じゃ」

ボク等は沈黙に包まれた。

そして、何故かいきなりリカが元気に質問しだした。

「で、どうして人間と夫婦に!?しかも、そのセリフだと契約したみたいですけど!？」

「・・・なんというか、リカちゃんは欲望に忠実じゃー」

「・・・は!? そうだよ、龍造さん、参考までにどうしてそうなのか教えて〜!」



「……スズ、そこで何でオレをチラ見するんだ？」

「ふ、リュウは鈍感だね。そんなの、火を見るより明らかだよ」

「お前にだけは言われたくねえ。……ホレ、リカがお前を盗み見てるぞ」

リュウが示す方向には何故か頬を赤らめて龍造さんを尋問しようとしているリカの姿が。

「でで、でも、こんなことがあるんですね」

「うん。でもそんな人が魔法陣を、ね……」

理由はいたって簡単。ただ諦めたくなかったから。

その一心で自分が使える魔法展開方法を考え出し、そして、今現在ココに至る。

たぶん龍造さんはあの後も魔法陣を研究し続け、パラレル・ライン・ス同時並行処理詠唱ベルをその過程で生み出したんだろう。

「そうじゃ。だから、わしはまだ魔法陣の研究を続けておるぞ。

いつか、本当に誰でも使えるようにしたいからの。……その時は、お主等にも手伝ってもらえるところらしいがの」

そういうと、龍造さんはボク等を見る。

「まあ、そういことじゃ。……でじゃ、本題に入ろうかの」

「……本題、ですか？」

ハル君がきよとんした表情になる。  
いや、みんながきよとんとしている。

「……お主等、忘れとるの。そのカバネという死ネクロマンサー霊術師の村の魔獣の件じゃ」

「「「ああ！」「」」

いや、回想が長いからすっかり忘れてた。  
そういえばそうでしたね。

突如として、呪力を纏った魔獣がカバネさんの村を襲撃。そしてカバネさんを残して全滅。……あれ？

「……そういえば、カレンさんは生リビングデッドける屍なんですよね？」

「はい。ちなみに、メイド属性です」

「ちやうからな！？属性の意味、絶対に間違つとるでな！？」

とりあえず、そのふざけたおしゃべりはスルーしておくことにする。

ボクはそれよりも気になったことがある。

「……カバネさん、貴方が死ネクロマンシー霊術を行使して、カレンさんをそ  
うしたんですよね？」

「……そうや。……カレン、コンビニ行ってプリン買って来  
い」

「わかりました。ご主人様の分はココに来るまでに食しておきます」

そういうと、カレンさんは理事長室から出て行った。

そして、後には深刻な顔のカバネさんと、やや困惑気味のボク等。

「・・・まず、ワイとカレンはな・・・幼馴染で彼女やってんねん」

なんでもないように、本当にごく普通にそう言う。

ボク等は、その言葉に思わず息を呑んだ。

「まあ、それで例の魔獣の襲撃や。そこで、何回も言うけど・・・ワイ以外の人間は全員殺された。・・・カレンも例外やない」

そういうと、カバネさんは自嘲的な笑いを顔に浮かべる。

「そつからは、たぶんベタな展開や。どんな形でもええでワイは、カレンに生きて欲しかった。・・・そこで、初めて死ネクロマンシー霊術を行使したんや」

ボク等は、その言葉に何も言えなかった。

そりゃそうだ。

大切な人が死んでしまって、自分には曲がりなりにも、それが例外外法と呼ばれる方法でも、大切な人を蘇らせる方法がある。

だから、それを使った。もしも、自分がカバネさんと同じ目に遭ったら・・・。たぶん、何が何でも、それも目の前にその方法があるのなら悪魔に魂を売ってもやろうとしただろう。

「でもな、因果なんか・・・。アイツ、ワイと付き合うとった

ことをさっぱり忘れとつたんねん。・・・たぶん、魂の定着が不完全やったんやろな」

その代わり、破天荒な性格はそのままやけどな、と笑いながら言っただ。

そういうと、いきなりカバネさんがガクツと崩れるようにして理事長室のソファにもたれかかる。何事かとボク等が慌てだしたとき・・・。

「そうそう、ホントにお姉ちゃんって酷いよね。わたしががんばってカバネを慰めたんだよ」

いきなり、カバネさんが女子なししゃべり方をし始めた。

「お前、勝手にワイの体を使っなくなっていつも言うてるやろ！？ええー。だって、憑依できるのがお姉ちゃんかカバネだけなんだもん」

・・・そういえばいたね、カレンさんの妹のカリンさん。カバネさんにとり憑いてるといふ元気な幽霊といういろいろとおかしい人（？）。目の前でカバネさんが変な薬に手を出したんじゃないかと思えないような行動に若干ドン引きした。

「・・・まあ、そんなわけでワイはまず、その村人達の幽霊を成仏させてから唯一関わりのありそうな魔王の下に向かったわけや」

「成仏、ですか？」

「そや。だって、幽霊をそうせんとかわいそうやろ？」

「ココにいるけどね！・・・まあ、そういうわけで、ココまで幽

霊を成仏させながら来たんや」

「でも、何で成仏を？・・・俺の記憶では死霊術師ネクロマンサーの強さは幽霊リヒングデッド、生ける屍だと聞いていますが？」

「アホか。そんなんしても意味無いやろ？別に、ワイは強くなりたくて死霊術師ネクロマンサーになろうと思ったわけと違うで？・・・ただ、村の中にたくさんおつたんや。悪霊になりかけて、苦しんどる人らが」

「悪霊？」

いきなり新しい単語がぼんぼん飛び出してきてボク等は若干話しに追いつけなくなってきた。それを察してくれたのかカバネさんは説明してくれた。

「悪霊って言うのは、簡単に言えばワイらに害をなすことのできる、ある意味では上位の幽霊や。こうなるには二つのパターンがある。一つは珍しいケースで『呪力による感染』。こうなると幽霊は凶暴化して、普段ワイらに干渉できん幽霊がこっちに攻撃できるようになる。で、もう一つよくあることで、『感情によって悪霊化』してまうことや。これらは、死霊術ネクロマンシーを使えば強制的に被うことができんやけどな・・・」

そついうと、カバネさんは言葉を濁す。

「・・・ワイ、これはあんまり好きと違うねん」

「・・・オレの記憶が正しけりや悪霊化した幽霊に対抗できるのは死霊術師ネクロマンサーだけだ。それでイヤって・・・どういうことだ？」

なるほど、つまり死ネクロマンサー霊術師は日常的に悪霊を祓っている可能性がある。でも、カバネさんはそれが好きじゃない。ある意味、自分の役割を放棄してるみたいなものだ。

「……祓うとな、幽霊を本当に強制的に排除してしまうんや」

「……どういこと〜?」

「簡単だよ!要するに、もう一回殺すんだよ……」

いきなりカリンさんにシフトチェンジして言う。

でも、衝撃の言葉にそんなことに気が向かなかった。

「もう一回殺す?」

「……そうや。幽霊は簡単に言つと魂の塊。それを問答無用で消すんや。殺したも同然やる?やで、ワイは悪霊化を解くもう一つの面倒な方法を使つとる」

「もう一つの方法?」

「それが悪霊を一時的に拘束し、更に深層領域に干渉。からのパシリを行うというご主人様のDM行動です」

「誰がDMじゃ!?そうすれば未練もなくなつてばっちり解決。悪霊化の基本的な要因は『未練』やからな。それでみんなハッピーやる!?つか、どこから聞いた?」

「そうですね、確か……『俺はカレンが好きなんだよお!!』というあたりでしょうか?」

「言つとらへん！いつペンも言つとらへんでな！？」

「……すみません、お友達からも勘弁していただけませんか？」

「告白してもないのに断られた！？しかもお友達ですらない！？」

「……あ、奴隷なら大丈夫です。もちろん、ご主人様がですけど」

「人権を考慮お！！！」

「私、<sup>リビングデッド</sup>生ける屍ですから、人権にうとくて……」

「逃げた！？」

「……なんていうか、ものすごくタイミングが……」

まあ、いい。基本的に知りたいことはわかった。

まず、カバネさんはやたらめつたら死人を蘇らせ、使役して自分の力にするような人ではないということ。そして、おそらくは死んだ人にも安らかになつて欲しいというタイプの人であること。これなら、ボクだつたら十分に信用に足る人物だと思う。

「まあ、カレンさんも着たことだしちょうどいいや。……龍造さん、これは全部はなすつて言う方向しかありませんよね？」

「……そうじゃの」

「全部？お前、何言つとんのや？」

「おぬしらはどうじゃ？それにリカちゃんとかの」

みんなは特に何もいわない。

リカもカレンさんにビビッてはいるけど首を縦に振る。

そして、龍造さんはリュウを見る。

「・・・オレかよ。メンドイ」

そう言いつつ、リュウはボク達、『闇夜の奇術師団』のことを話した。

「・・・」

「・・・魂が抜けてるっぽいけど大丈夫かな？」

「さあな」

簡単に言うと、リュウが『オレ達って『闇夜の奇術師団』なんだぜ？ひゃっはー』的なことを言ってるから数分。唾然とした表情のカレンさんに相変わらずポーカーフェイスを保ちつつも、たぶん驚いているカレンさんが目の前にいた。

そして、逸早く自分を取り戻したのはカバネさん。

「じ、自分等、そうやったん？」

「はい。私達は紛れもなく、多くの皆さんが『闇夜の奇術師団』」



と呼ばれるものたちだと思っています」

「て言うか、最初に戦ったときに気付きなさいよ。アレは普通にいつも通りの戦い方だったんだし」

「た、確かにそうですね……。でも、あ、あたし達は違いますよ?」

「……こないなべっぴんな譲ちゃんまでそうやったらビックリやわ」

「あ、あの……。だから、アンジェリカさんは……。そ、そんなんですけど……」

ボク達は心の中でアンタのことだと突っ込んだ。

どうも、この子は自分の容姿が（前髪を上げたとき限定で）どれだけ目を引くのかよくわかってないらしい。

まあ、確かに前髪を下ろしていたらただの地味子だけど。

「まあ、ええわ。要するに、お前等が少し前に会ったフェイク言う自称・魔王が怪しいんやな?」

「そうだよ。あの時はホントに大変だったね」

「ええ。……ところで、それを聞いてどうするおつもりで?」

それはボクも気になった。

だって、もしも復讐するとかだったら絶対に止めないと。だって、絶対に勝てない。

龍造さんとライネルさんの魔王が二人いても余裕の表情を崩さな

い、ふざけた魔物だ。普通の人間じゃなくても勝てるわけが無い。それこそ、普通じゃない魔王でもない限り。

いや、あいつ自身が普通じゃなさそうだったからどうなんだろう。。。

とにかく、そんなヤツにカバネさんが殺されるわけにはいかない。

「・・・いや、その話聞いてようわかったわ。ワイは何もせん」

「「「・・・は？」「」」

意外な答えにボク等は素っ頓狂な声を上げた。

いや、だってそこは普通なら復讐だとか言う場面だし。ボクもとめる準備をしてた。何だか空回りした気分だ。

「自分等はカレンをボコボコにできるようなやつらやで？そんなやつ等に無理や言わせるんやで相当やる？それに、最強と名高い『結界の魔王』も認める強さなんやろ？」

そういうと、カバネさんは龍造さんを見る。

龍造さんは何も言わず、首を縦に振る。

「そうじゃ。ヤツだけは関わるな、危険じゃ」

「ほいほい。ワイ等も進んで死にたいわけとちやうでな。・・・

・・・まあ、相手がわかれば復讐するつもりやったけどな」

カバネさんはそういうと獰猛な笑みを浮かべる。

その執念にボク等は思わず体をぶるりと震わせた。

「ですが、ご主人様であればどこの魔王であれ、返り討ちにあっ

ていたと思いますが？」

「それに、主戦力は女の子二人だしね〜！ 自分等、ココは  
そういうシーンちゃうやろ！？空気読めへんのか！？」

ただ、この人達の間ではシリアスの展開は数秒で失われるようだ。

・・・もはや、ある意味で才能だと思う。

そして、微妙な空気のままこの日は解散になった。

12話・L I F F E（後書き）

作 「やっと戻ってきたよ現代に！というわけで『命』でした！」

カバネ 「やっとワイの時代が来たか！？」

カレン 「いえ、むしろ私の時代です」

作 「・・・キャラ濃いのがキター！？」

カバネ 「自分で作っというよう言うわ」

カレン 「そうです。私がプリンを買いまくってる所を書くのもその解き何故だかプリンを食べたくなつたが理由と聞いてますよ？」

作 「だって、食べたくなつたんだ！」

カバネ 「・・・お前、アホやる？」

カレン 「ついに、理解してくださるときが来たのですね、「ご自身がばあであることに！！」

カバネ 「ちやうわボケエ！？」

作 「というわけでこの二人はほっという次回！やっと動き出す物語。さて、今回は『季節はずれの幽霊編』です！」

カバネ 「・・・やから、何でワイのプリンを勝手に食うねん！？」

カレン 「ご主人様のものは私の物です。もぐもぐ」

作 「・・・次回もよろしく！」

カレン 「読んでくれませんか、アナタを私色に染めます」

カバネ 「それだけはすんな！！」

### 13話・CURSED MAGIC

side空志

アレから数日。

ボク等はおおむねいつもの日常に戻っていた。  
すなわち、フルボッコのお時間。

「・・・では、今日はこれぐらいにしておきましょう」

「「「「「」」」」」

既にボク等はリアルで屍と化していた。  
もう、何も言う気力も起きない。

「・・・なるほど、大体わかりました。あれが彼の魔法スタイル  
ですか」

「ええ。大体はね。銃と徒手格闘に織り交ぜて魔法を使っている  
わ」

・・・何故か、隅でボクの魔法を観察していた使用人な生ける屍  
のほづが生き生きとしている気がしてくる。死んでるのに・・・。

「つか、何でまだいんだよ？」

「ご主人様が『ココおもしろいな！少し遊んでから行くわ！』・・・  
とのたまりやがりましたので」

「・・・やっぱさ、絶対に主従関係がおかしいよね？」

普通はご主人相手に『のたまりやがった』なんて言わない。

「大丈夫です。問題ありません。ご主人は私がどんなことを言っても結局は言うこと聞いてくれるドM野郎なので」

「・・・カバネさんがかわいそうになりますね」

確かに。

でも、何故かボクにはそういつたときのカレンさんの表情が少しだけ暗くなった気がした。いや、ポーカーフェイスだからよくわからなかったけど・・・。  
たぶん、気のせいだ。

「だがお袋、今日はいやに早く終わったな」

そう言っつてリュウは時計を指す。

ボクも時計を見てみると、まだ五限目が終わっていない時間。いつもなら放課後までぶっ続けでシバかれる。

しごかれるじゃないってところがとても重要。

「今日はお義父様がお話があるとかで一回手合わせしてからみんなに集まるようにつて」

「へえ〜」

珍しい。・・・このパターンだと、舞さんとかライネルさんからの依頼か？

人間相手に、かつ穩便に済ませたいときはよくボク等が呼ばれて問題解決に向かう。

たぶん、この類だ。

「わかった。行くぞ」

ボクとシユウはリユウの言葉に従って理事長室に向かった。

理事長室に着くと……って、言ってもすぐそこにあるけど。でも、何で理事長室に訓練場なんかがあるんだらうとボクはほんの少しだけ疑問に思う。

とにかく、理事長室に着くと、そこにはボク等以外にも珍しい人が。

颯太さんに智也さん、ガントさん、

まあ、今は龍造さんの話だ。

「全員来たの？……まあ、わしからのありがたい話じゃ」

「御託はいいからとっとと始める」

「優子さん、この頃孫が冷たいのじゃが……」

「お義父様、早く話してください」

どうも、龍造さんに味方はいないようだった。

まあ、普段が普段だからね。魔王の中ではだいたいぶまともな部類だとは思ってきただけ。

「わかった。本題じゃ」

そういうと、龍造さんはオホンと咳払いをしてからボク等を見て言う。

「今日からそれぞれにあった訓練をして行く、ということじゃ」

「・・・いきなりね」

「どついでのことですか?」

「いや、俺に聞かれても・・・」

「簡単じゃ。例えば、ソラならば今後はわしが教える。後、ハル君もじゃ」

「へえ・・・。マジで!??」

ボクはやったとは声に出さず心の中でガツポーズ。

若干二名ほどから嫉妬の視線を感じるが大丈夫だ。問題ない。むしろ完璧。これで優子さんの暴力から開放される・・・!

「無論、お主はわしが直々に体術も叩き込んでやるから安心しておくがよい」

「おおー!?!?すごいよソラ君!まあーさま直伝のすごい技とか覚えられるかもよ!?!?」

「ソラスゴイ!?!?がんばって」



「し、師匠のし、将来は魔王様なんですか？」

女子三人が何故か目をキラキラさせてボクを見る。

・・・いろいろと方向性がおかしい気がする。それに・・・。

「嘆けばいいのか、喜べばいいのか・・・」

正直なところ、ものすごく判断に困る。

だって、こんな中でも最強の『結界の魔王』だよ？ たぶん、それなりに体術のほうも強くなければ最強なんて呼ばれないはず。

「安心せい。少なくとも優子さん並のスパルタではないからの」

「ぜひよろしくお願いします」

「ソラ先輩、即答ですか・・・。でも、僕もよろしくお願いします。」

そして、みんなの担当がいろいろと決まっていく。

リュウがまたも優子さんに当たったときは思わずボク等全員で合掌した。

ちなみに、リュウは決まったとたん迅速さま訓練場に逆戻り。

断末魔の叫びが聞こえた気がしたけど、たぶん気のせいだ。

ちなみに割り当ては、シュウが智也さん。双子は双子同士で格闘。たまにシュウと智也さんがそこに入る。スズ、冬香が颯太さん。スズは颯太さんの魔法授業はあんまりなのか微妙な表情だった。そして、四条さんが何故かボクというミラクルな結果に。

「何でボクなんですか？」

「それがの……精霊関係ならばエルフが得意なのじゃが……」  
「わかりました。ボクでよければ」

なるほどと納得せざるを得なかった。

いや、知り合いのエルフとか残念なことに一人しかいない。四条さんまで毒牙にかける必要はないという判断なんだと思うことにした。

「で、リカは？」

「もちろん、そのガント君じゃ」

「……理事長、俺の名前は原土元太はらどがんだです」

「なんじゃ？お主はガント君じゃろ？」

「……もういいです」

まあ、いつものことだ。

でも、正直不安だ。

「大丈夫ですか？リカですよ？（いろいろな意味で）最強ですよ？」

「大丈夫じゃ。というわけでリカちゃんの担当はガント君……」

そこで、何故かすつと龍造さんの首元に大鎌の刃が。

「リカさん!？」

「何でソラと一緒にじゃないの？」

ダメだ!軽くブラックモードが入ってる!?

ボク等は目に見えてパニックに陥った。

いや、見学に来てた死ネクロマンサー霊術師と生ける屍リビングデッドはきよとんとしている。

「なんや?どないした？」

「・・・さあ?」

「つぶ。リカちゃん、わしもいつまでもお主の頼み事を聞いてあげるとは思わんことじゃの」

「何で!?!そこをカッコつける必要あるの!?!」

「龍造さん!リカさんの言うことを聞かないと大変なことになりますよ!?!」

「そ、そうだよ!リカちゃんはソラ君が関わるとすごいんだよ!?!?」

「バカ理事長!アンタ、ココに優子さん二号でも造る気!?!」

一部ついていけない人もいるが今はそれどころじゃない。早く何とかしないと確実に血の雨が降る。そして、最終的にはボク自信を売らなきゃおさまらない。そんなことはイヤだ!

「アンジェリカ、お前はもう少しガマンをしろ。三谷と少し距離

を置けば……」

「それ、前に龍造さんに言われて騙された」

「……そうか」

そういうと、ガントさんはしょうがないという顔をする。

そして、リカの首根っこを掴むと、猫か何かのように連れて行っ  
た。

「え！？何これ！？離して！はーなーしーてー！！」

「お前な……お前は力でのゴリ押ししかしてないから俺みたい  
なのが相手だと普通に負けるぞ？……力の使い方を覚えて三谷を  
振り向かせたらどうだ？」

「わかりました。教官！」

行く途中、何か会話が聞こえてきたような気がしたけどこっちま  
では届かなかった。

ただ、さりげなくボクが餌か何かみたいに使われた気がするけど・  
……。

「……これで全部じゃの。お主等は他に質問はあるかの？」

ボク等は特に何もないと首を横に振る。

龍造さんはそれを見て満足すると、解散するように言う。

そして、理事長室に残ったのはボクとハル君、そして四条さん。

「……で、龍造さん。ボク等は何するの？」



もちろん、テロリスト暴徒と化した生徒達にだ。  
まず、この発端はコレ。

『おい、つい最近、学校内でメイドが出没するらしいぞ?』

『マジで?んなバカなことが・・・』

『・・・ご主人様はどこでしょうか?』

『・・・』

『あ、すみません、ココらへんにドMな青年がいませんでしたか?』

『三谷<sup>ヤシ</sup>か!?!?』

『違うわ!むしろ何でボクがドMなんだよ!?!?』

『そうですね。むしろその人は私に襲い掛かって・・・』

『貴様あああああああ!!?!?』

『誤解だあああああああ!!?!?』

まあ、そういうわけ。

偶然カレンさんを見かけたもんだからどうしたのか聞こうとしたら男子生徒A、Bの話に思わず突っ込んでしまい、カレンさんが非情にまずいタイミングで爆弾を投下してしまったがためにこういう状況になってしまった。

まさに主人公<sup>トラブルメーカー</sup>体質だ。

ボクは校舎を駆けずり回って何とか男子の追跡網を突破。

・・・何故かこの頃逃げるスキルが格段にあがった気がする。

「中々のものです」

「うわあ！？いきなり!?!」

突然、ボクの隣にメイド服着た生ける屍リビングデッドが現れた。  
しかもプリン食ってるし。

「魔法も使わずにすばらしいです。驚嘆に値します」

「・・・あのお、貴女のせいでボクはあんな追いかけっこをするハメになったんですけど?」

「そうなんですか? 酷い悪女がいたものですね」

そういうと、まるで自分は何も知らないともいっつかのようにプリンをもぐもぐと食べる。・・・てか、袋の中にあるのもプリンな気がするんですけど? アンタ、プリン好きだね。

「それはそうと、ご主人様を見かけませんでした?」

「いや? 何で?」

「いえ、コンビニでプリンを買ってきましたので。・・・あ、全部食べ終わりました」

「・・・うん、お使いぐらいちゃんとしようよ」

少なくともボクよりお姉さんなんだし。  
買ってきたプリンを全部食べるとか……。

「お時間を頂、ありがとうございます。ではこれで」

そういうとカレンさんはどっかに行く。

まあ、たぶん、カバネさんを探しにいってるんだろうと思うけど。  
そして、そんなことを考えているとチャイムがなる。

「ヤバ！？遅刻だ！！」

ボクは魔法で転移するかどうか地味に悩みつつも普通に走って教室に向かった。

「ガントさん、酷い」

「いや、お前が悪いだろ？つか、何で遅刻した？」

ボクはリュウに休み時間の間にあったことをそのまま伝えた。  
すると、リュウは呆れた顔になる。

「お前、トイレに行くだけでよくそんな風にできるな」

「やりたくてやったわけじゃない」



「……ソラだからしょうがないよ」

リカの一言にボクは泣きそうになった。  
いや、もうなれたけど。

「お待たせ〜！ゴハンに行こ〜！」

スズの言葉にボク等はいつものように屋上へと歩いていった。  
屋上に行く間に、冬香やシュウ達とばったり出会い、そのまま屋  
上に。

屋上はいつものようにあまり人がいない。

屋上は人がいそうなイメージがあるけど、別にそういうわけじゃ  
ない。

だって、ゴハンを食べるのにわざわざ屋上に上がるのは面倒くさ  
いという人が多いからだ。大抵は教室か食堂で食べる人が多い。

まあ、一時期はこの女子の力で屋上が見えやすく場所が無いと  
いうふざけた状況に陥ったことがあったけど、何かしらの暗黙の了  
解ができたのかすぐにここには誰も来なくなった。

そして、そのボク等以外誰もいない屋上でいつものように適当に  
駄弁りつつスズお手製の昼ごはんを食べる。

でも、今回は違った。

「おい！」

『やべえぞ！』

「ん？田中と、ミスト？」

今日はミストが気になることがあるとかで遅れていた田中とミス  
トがあわただしく屋上に突撃してきた。

「どうしたの？田中君。・・・どうせ、アンジェリカさんのファンクラブが三谷君殺そうと必死になってるって情報？」

『んなどうでもいいこと違うわボケ！』

「いや、人の命どうでもいいってどう？」

『呪力だ！』

「え？ええ！？・・・精霊さん達は何も言ってますんよ？」

「・・・リュウ、ボクの目って魔力に反応してる？」

「いや。いつも通りだ」

「いや、俺もよくわかんねえんだけど・・・」

『タロウはいい。俺様が説明する。だろうと思ってたぜ。こいつはギリギリ精霊が感知できないレベルでいたるところに呪力が発生しているんだからな』

「え？ええ？ほ、本当ですか？」

そういうと、四条さんは精霊と交信するために意識を集中する。しばらくすると、ボク等を見回して言う。

「あ、あの・・・た、確かに、自然消滅してしまいそうなものはいくつかあるそうです」

「俺の聞いた話ではたまに呪力が複数発生することもあるらしいですけど?」

「そうなのですか?」

「では、ミストさんは何を問題視しているのですか?」

『問題だ。それが一定間隔で配置されていたらな』

「……一定間隔?配置?……それって、まさか!」

ハル君が驚きの声を上げるが、みんなはピンと来ないらしい。そりゃそうだ。ボクもまさかとは思うけど……。

「魔法陣の、呪力バージョンがあるの?」

『ああ。もちろんだ』

その言葉に全員が息を呑む。

まあ、邪法を使ってるって言うてるのと同じだからね。

つまり、発動させればものすごく大変なことになる可能性が高い。

『今、情報魔のチビに理事長室に行つてバカ魔王にこのことを伝えるように言つてある』

「だが、何でお前が気付いたんだ?」

『俺を作つたやつが俺に魔力探知のレーダー的な魔法構成を組み込んだんだよ。んで、お前等と違つて俺達は通学だ来る途中に呪力が等間隔で並んでたらイヤでも気付く』

なるほど。

要するに、ボク等は学園ユウにいたから気付かなかったと。

「……おい、今すぐにジジイのところに行くぞ！」

そついうと、ボク等は理事長室に向かって走り出した。

13話・CURSED MAGIC（後書き）

作 「とう言うわけで『邪法』をお送りしました」

龍 「なんじゃ、大変になつてきたの」

作 「イエス！種蒔きは終了してるので全力でとばしてくぜ！」

龍 「その代わり果てしなく微妙じゃがの」

作 「自分でもそう思った！」

龍 「・・・」

作 「そんなわけで次回！いったいこの魔法陣は何のために？そして怪しい人は・・・」

龍 「次回もよろしく頼むぞ」

## 14話・LIVING DEAD

side空志

「ジジイ！」

「来たか、話は田中君とミストから聞いておるな？」

「ああ」

理事長室に入ると、そこには龍造さんと宇佐野さんがいた。

「・・・報告します。・・・現在、どうもこの学園を囲むようにして魔法陣が展開されようとしている模様」

「正確には呪術陣じゃ。わしも意識的に呪力を感じ取って地図に書き取ってみたがの・・・」

そういつと、龍造さんは机の上にこの学園周辺の地図を広げる。ところどころに赤丸で印が付けてあるところがそうなんだろう。まるで、学園を取り囲むかのようにして展開されている。

「おい！これじゃあ、ココを魔法の基点にしようとしてんのが丸わかりじゃねえか！何で気付かなかった！？」

「ギリギリ、わしの探知網からも外れとった。それに、精霊も何も違和感を感じぬ程度にまで呪力が抑えられておった。それこそ、ものの数時間ほどで呪力が自然消滅してしまう程度にの」

つまり、話をまとめると・・・。

「要するに、コレは今すぐに配置を終えて発動させなきゃ意味の無い代物ってコトだね」

「そうじゃの」

「ん？・・・どついでに？」

またこの子は・・・。

「・・・か、簡単ですよ。きつと、犯人さんも魔法陣を作るのが初めてなんですよ」

「いや、むしろ逆だね。たぶん、相手は相当魔法陣の扱いに慣れている」

とりあえず、スズと四条さんのポケに付き合ってる暇はない。適当にスルーしておこう。

「でも、何でそれがわかるんです？」

「・・・魔法陣を使わないからピンと来ないかもしれないけど、コレは要するにボク等に気づかれたくない意思の現れだと思う」

「僕もそう思います。相手は、時間がたてば消えるインクを使っているようなものです。だから、効率よくやるには魔法陣を熟知している可能性が高い、ということですよね？」

「そうそう。それに、魔法陣を使うにしても使えるポイントと使えないポイントが確実に出てくる。・・・こんな大規模術式ならな

おそろし

「なら、相手はこの町を熟知している、かつ魔法陣の扱いに慣れている人ということですか？」

「わしもそうじゃと思う。じゃが・・・」

龍造さんが何かを言おうとするけど、言葉を濁す。  
みんなはどうしたのかと首をひねる。

「やっぱり、龍造さんもその可能性にたどり着きましたか・・・」

「・・・でも、そんなことが？」

ボクと龍造さん、ハル君の間でのみ空気がどんよりとしたものになる。

「おい。お前等だけで話すなオレ達にもわかるように言え」

「いや、みんな、知ってるんだよ。この町を知ってそうで、魔法陣の扱いがものすごくうまい人」

「この町に住んでる魔法陣を使う魔法使って、ソラと、龍造さんと春樹だけだよね？」

「・・・違います。もう一人、あるいは二人ほどいます」

「え？でも、三谷君と平地さんの弟君以外でいたっけ？」

宇佐野さんの言葉にみんなも疑問の声を上げる。



・・・みんな頭が固い。

「確かに、ココに住んではないない。でも、数日間滞在している魔法使いがいる。しかも、呪力を感知できる、ね」

「・・・あ、あのオバケの二人？」

一番最初に気付いたのはリカ。  
その言葉にみんなが理解を示すと同時に困惑の顔色を隠せない。

「ですが、あの方達はこんなことをするのでしょうか？むしろ、呪力を浄化してくれたらいいですよ？」

「いや、それはわからない。俺達はそれを見ていません」

「そう。今までのことは相手の話を聞いて判断しただけだよ。だから、相手が嘘をついている可能性も否認ない。・・・まあ、どっちにしても相手に聞かなきゃ始まらない」

「そう言うわけじゃ。二人はまったく関係が無いかもしれんが、まずはあの二人を捕まえて話を聞くのじゃ」

そして、ボク等は学校を早退して呪力の搜索をすることになった。

「で、どうすんだ？」

「まず、チームを二つに分けようボクと四条さんを中心に」

「な、なななな何ですか!？」

「まず、ボクと四条さんは呪力感知がみんなより簡単にできる。・  
・ボクの場合は目が痛くなるけどね。それに、精霊魔法は呪力の  
浄化もできるみたいだし。ボクも一応はできる」

呪玉としてだけど。

でも、やらないよりはマシだと思う。後で龍造さんに言って処分  
してもらえばなんとかないるはずだ。

「でも、今回はミスと田中もいるぞ？」

「いや、これがいいと思う。・・・考えたくないけど、カバネさ  
ん達がもしも敵だったときのために」

ボクがそういうとみんなの顔が曇る。

確かに、知り合いが実は敵でしたなんてあまりいい気はしない。  
でも、最悪の状況を想定しておくべきだ。

「とにかく、どっちにしろ、分かれて効率的にやらないと後々面  
倒なことになる。最悪、呪術陣が発動するのだけは止めないと・・・

そういうと、みんなは押し黙る。

たぶん、わかってはいるけど納得はできないって感じかな・・・。

「とりあえず、いつもみたいに適当に分かれて」

そういうと、ボク等は適当に分かれる。

ボクのほうにリカ、スズ。双子。

四条さんのほうにリュウにシユウ、冬香、ハル君が。

おろおろする田中はボクが引き取りました。まあ、コレでバランスは大丈夫。

「よし、じゃあボク等はこっちに行く」

「は、はい。あ、あたし達はこっちに・・・」

「みんな、気をつけて！」

そういうと、ボク等は町の中を駆け出した。

走り出して数分。

ボクはいつものように 月詠<sup>ツクヨミ</sup>を展開し、呪力を探す。

ついでに、田中もいるからミストの持つ魔力レーダー的なもので調べて貰う。

『あつちの方向だ』

「うん、見えてきた」

「ソラ、そろそろまずいんじゃない？」

リカが心配してくる。

まあ、そうだろう。ボクの目は呪力を直視すると目に激痛が走る。それは前回の遺跡での騒ぎのときに経験済み。

「でも、見ないことには何もできない。ま、こっちにはスズがいるから呪力を消してもらえばいいんじゃない？」

「うん？がんばるよ〜！」

「……俺、坂崎さんだとそこはかとなく心配になるんですけど？」

「大丈夫ですう！鈴音さんなら魔法は完璧に消せるですう！」

「でも、この魔法構成プログラムはどういうものなのでしょう？」

そう、そこがボクも気になっているところだ。

呪力を使っているって言うことはおそらく邪法。

でも、正直な話、ボク等は邪法について全然知らない。

まあ、古代の禁忌魔法タブーだし。そのせいか龍造さんに聞いても詳しいことはわからなかった。

それか、知っているけど、知らないほうがいい類のことなのかもしれない。

「まあ、なんにしてもろくなものじゃないね。っと、呪力発見」

ボクは視界の隅に映った黒いまがまがしいマナの塊を発見した。

・・・規模は野球のボールぐらいの大きさのモノが道のど真ん中にぼつんとある。

周りには何故か人がいない。

「……そういえば、俺達は今まで人に会いましたか？」

「……そうか、コレ罷だ」

「「「……は？」「」」

ボクがまるで当たり前のように言つと、みんなはビックリして素  
つ頓狂な声を上げる。

……あれ？何か驚くようなこと言つたっけ？

そんなことを考えたその時、ボク等を囲むようにして魔法陣が展  
開。

みんなは急な事態に追いつけていないのかただただ驚愕の表情を  
浮かべるだけ。

ボクは足元に展開した魔法陣に手をついてすぐに魔法陣を分解し  
た。

「……これでも、魔王仕込の魔法使いなんだね」

『お前、もう人間じゃねえよな』

黙れ。

ボクがミストにそういおうとしたとき、レオが『みや』と一声か  
け、ボクにある一点を示す。

すると、一つの人影が現れた。

side 隆介

オレ達の足元で魔法陣が展開される。

オレを含め、誰も予想外の事態に動きが止まる。

いや、シユウだけは何とかしよとしているみたいだがアイツに魔法は使えない。だから、ただ手をこまねいているしかない。そこで、意外な人物が動く。

「魔法陣に干渉、分解せよ」

冬香の弟、春樹が手を地面につけ、魔法陣に触れる。すると、魔法陣が急速に光を失っていき、消滅した。オレ達四人は驚愕の表情で春樹を見る。

「・・・あのお、皆さん、どうしたんですか？」

「お前、ソラみたいだな」

「え？そうですか？うれしいです」

そういうと、春樹は本当にうれしそうな笑顔を浮かべる。だが、コイツはわかってないな。

ソラみたいってのはオレ達の間での『人外だな』って言葉と同義だ。

「ちょっと、人の弟を人外呼ばわりしないでくれる？」

「でも、ソラ先輩なら触れるだけで干渉できるんですよね・・・俺もがんばらないと」

いや、俺が思うにお前等どっちもどっちだなんて思ったぞ？まあ、伊達に魔王直伝の魔法陣使ってるってわけじゃねえな。

「おし、四糸。できるか？」

「はは、はい！ガンバリマス！・・・精霊さん達が・・・」

「では、私達は周囲の警戒に当たります」

そういうと、オレ達はそれぞれの仕事につく。

四条は目を閉じ、精神を研ぎ澄ましているのがわかる。そして、かすかにオレ達とは違う魔力がその周囲からあふれている。それは、どんな穢れをも洗い流してしまう綺麗な水のような魔力だ。

「・・・え？・・・み、皆さん、誰か来ます！」

そういうと、何かの光がこちらに放たれる。

オレはとつさに ダーク・イロージョン 闇の侵食 を発動させ、魔法を受け止める。そ

こへ冬香と春樹が魔法が飛んできた方向へと魔法を打ち返す。

だが、それも相殺される。

「・・・雷の魔法、ですか」

そう、こっちに向かって放たれた魔法は明らかに雷の魔法。

心なしか、空気中でまだパチパチと静電気のようなものを発生させているような気もする。

そして、魔法が放たれた方向から声が聞こえた。

「・・・ココで、何をしていますのしょう？」

「それは完全にこっちのセリフよ」

「だな、知り合いにいきなり攻撃しかけるとはどういう了見のメ  
イドだ？」

そこにいたのはメイド服を着て、右手に長ネギを持ったポーカーフェイスな人間の女、ただし正体は生ける屍<sup>リビングデッド</sup>。立花可憐がいた。どういふつもりか、相手はオレ達に向かって魔法を放ってきた。

「貴方達が私の敵でないと云う保障がありませんから。それに、時間がありません」

そういふと、可憐はオレ達に向かって長ネギを向ける。

「・・・なあ、オレ達のことバカにしてねえか？」

「何を言っんですか？私は至極真面目です」

可憐は淡々と、ポーカーフェイスを貼っ付けたまま言う。  
・・・長ネギをオレ達に向けて。

「・・・ホントに、わたし達をバカにしてるとしか思えない魔導<sup>アーティ</sup>ファクト<sup>ファクト</sup> 宝具よね」

オレ達のコメントに本気で首をかしげるメイド生ける屍<sup>リビングデッド</sup>。

そして、向こうは会話は十分だとも言うように魔法をつむぎ始めた。

「 奔れ、雷」

そういふと、相手の長ネギを中心にいくつもの魔法陣が展開する。

「・・・要するに、本気って事か」



「・・・そのようです」

オレとシユウは戦闘のために構える。

そして、平地姉弟は四条の盾になるようにして前に立つ。

「四条は任せたぞ」

「わかりました」

「アンタ達もボコられないようにしなさいよ」

「んなもん、心配するだけ無駄だ」

「大丈夫です。私の薬で何とかしますので」

「デイスチャージ  
放電」

相手の魔法陣から雷の魔法が放たれるのを合図に、オレとシユウは駆け出した。

14話・LIVING DEAD（後書き）

作 「とうとうわけで、『生ける屍』をお送りしました」

樹 「いえ、ココに来るのも久しぶりな気がしますね」

作 「確かに、基本的にシユウはポケキャラじゃないからあんまり呼ばない気が」

樹 「・・・そこに重点をおいていたのですか？」

作 「もちろん。そして次回予告だ！」

樹 「何故、急に・・・」

作 「なんか言われそうな気がしたから！」

樹 「・・・」

作 「とうとうわけでメイドさん襲来、パート2！今回は本気だ！」

樹 「可憐さんはかなりの魔法の使い手のようですね」

作 「うん。性格はともかく」

樹 「・・・本当にそうですね？」

作 「ちなみに、コイツは僕の友人に似たようなやつがいました」

樹 「・・・嘘でしょう？」

作 「いや、マジで」

樹 「・・・」

作 「いや、世の中にはいろいろな人がいるよ。ウン」

## 15話・SUSPECT

side 隆介

オレは双剣に魔力刃を纏わせるとそれを横に風ぐ。  
そうすると、可憐の雷魔法は切り裂かれる。

「・・・さすがは、魔王様の御子息ですね。特殊な魔法でしょうか？」

「ハッ！コレぐらいしねえと、お袋に殺されんだよ！！」

「「・・・」」

若干二名ほどがオレに合掌したような気がしたがおそろく気のせいだろう。

ダメだ、戦闘中に集中を切らすのは・・・。

「コード 槍衾フアラシックス！」

冬香お得意の氷の槍による弾幕。

その数、命中精度はソラの鳥系の魔法を勝るとも劣らない魔法。

「 迅雷の弾丸。

ライジング  
鳳雷弾 ！」

だが、相手も素早く魔法を展開すると雷の弾丸を機関銃マシンガンみたくに射出。

しかも、魔法陣は常駐型なのか冬香の数術と同じように消えない。

だが、相手は予想外のことをしてきた。

「 汝に雷神の裁きを！

ジャステイ・サンダー  
雷神之審判 ！」

可憐がそう高らかに魔法名を唱えた途端、上空に大きな魔法陣が展開し、バチバチと音を立てる。

「 嘘！？ 」

「 干渉、金属を精製。

ドクキョウ  
土華 ！」

春樹がとつさに『金属』の壁を精製し、壁にすることで冬香を魔法から守る。

「 つか、金属までできたのかよ！ 」

「 あ、はい。『暖』『乾』『湿』『冷』をコントロール操作しているいるできるように 」

何つーヤツだ。

・・・それにしても、魔法陣を展開しながらの多重展開かよ。

ソラも一応は複数の魔法陣を展開できる。だが、それは一度魔法陣を待機させているからだ。

例えば、ホムラドリ 焰鳥 を展開した後にソラは間髪いれずに ライエン 雷燕 を

展開する。だが、このプロセスの間には、一旦魔力を固定すると言うアイツにしかできないふざけた方法があるからだ。

普通は魔法は途中で止めてしまうと魔力が霧散してしまうからな。だが、目の前のメイドは常駐型の魔法陣の操作をコントロールしながら別の魔

法を展開しやがった。

バラレル・ライン・スベル  
劣化同時並行処理詠唱って所か？

「同じ、魔法陣使いとは思わないほうがいいみたいですな」

「ッ!？」

シュウが音もなく可憐の後に現れると、相手に魔法の反撃をさせる暇も与えずに突きを繰り出す。

だが、相手は生ける屍だ。リビングデッドシュウの攻撃どころか、オレ達の攻撃が効くのかさえ怪しい。

「大丈夫です！リュウさんは拘束系魔法を！私が魔法を食い止めます！」

「どうすんのよ!？」

「そうですね、既に魔法は組みあがっています」

そういう長ネギの周りにはさっきと同じように複数の魔法陣が浮かんでいる。

あれじゃあ、結局意味がねえ。

オレ達は全員がそう思った。

そして、可憐が魔法をつむごとく口をあけたとき……。

「ハッ！」

「」

声にならない声、というか、シュウは相手に声を出させなかった。

相手の喉を潰すと言う荒技で。

「……………なんというか、えげつねえ。」

「いくら生ける屍リビングデッドと言いましても、さすがにコレでは魔法は使えないでしょう」

「いえ、魔法を使える生ける屍リビングデッド自体がほとんどいませんから」

地味に博識な春樹の突っ込み。

オレも死霊術師ネクロマンサーに関してはそのなりに情報がねえから助かる。

いや、今はそれどころじゃねえか。

とにかく、やるなら今か……………!

「魔法剣 影討ち」

すると、オレの視界が一瞬だけ黒で埋められ、次の瞬間には可憐の後に現れる。

オレは更に魔法を重ねる。

「魔法剣 影縫い ……!」

「いつの間に!?!」

オレが可憐の影に自分の剣を突き刺す。  
すると、それと同時に可憐の動きが止まる。

「どうだ? オレ特性の拘束魔法は?」

「SMプレイですか…………ツ!? それで私にあんなことやこんなことをツ!?!」

「違い！？何言ってるのこのメイド！？頭がおかしいんじゃないの！？」

「あゝあ。後でスズにバレたら大変ね」

「ああ！？お前も何言ってるだ！？バカか！？」

「え？間さんは、坂崎さんが好きなんですか？」

「・・・四条先輩、それは今更では？」

「はい。これは既に周知の事実ですよ？それに、スズさんもリュウさんのことを嫌っていませんし。むしろ好きなのでは？」

「え？え？え？そそ、そうなんですか！？お、おめでとうござい  
ます？」

「お前も何言ってるんだ！？」

シユウと春樹も何を言ってるやがる！？

つか、周知の事実って何だよ！？

ヤツか！？ソラのクソ野郎か！？

「いや、普通に気付くでしょうが」

「・・・そうかよ」

自分でも慥然とした表情になるのがわかる。

つか、何でこんなところでこんな話をしなくちゃいけないんだ？  
オレが文句を言おうとしたときだった。  
突然、体に尋常じゃない悪寒が走る。

「な、んだよ。コレ!？」

「じゅじゅじゅ、呪力が急上昇してるそうです! ! せ、精霊さん達もこ、混乱しています! ! ?」

「アンタが一番混乱してるわよ! ! ?」

「姉さん! 落ち着いて!」

「浄化は? 間に合わなかったのですか! ! ?」

「は、はい。 . . . . . その。 . . . . . 精霊さん達がそちらの戦闘に注意が向いてしまったようで。 . . . . .」

「。 . . . . . もしや、貴女は精霊魔導師ですか?」

可憐が今更のように四条へ確認をとる。

その言葉に、おどおどしながらも四条が首を縦に振ると、可憐は愕然とした表情になる。

「そ、そんな。 . . . . . でも、そんな事。 . . . . .」

「おい、どういうことだ? まさか、お前等も浄化が目的か?」

「そうに決まっています。呪力は悪霊化を促します。悪霊化してしまえば幽霊は成仏させるほかに方法がなくなります」



「つまり、幽霊を二度も殺したくないお前の主人は浄化をする必要があったと」

「ですが、何で僕達を急に襲ったりなんか？」

「呪力の探知をして気付かないのですか？」

「・・・いや、オレ達の中で魔力探知に優れたのは二人だけ。その一人がコイツだ」

オレはそう言うと四条を親指で示す。  
すると、恐縮しきった顔で何故かお辞儀する。

「・・・なるほど、では、コレが呪法陣と呼ばれるものだとお分かりですか？」

「いいえ、初めて耳にします。ですが、呪力を使った魔法陣だということにはわかってるつもりです」

「その通りです。そして、問題はこの魔法陣の特徴が龍造様の使用するものに酷似していることです」

「それって、どういふことですか!？」

全員がその言葉に驚き、春樹が大声で相手を怒鳴りつけるようにして聞く。

「簡単です。私達は、龍造様がこの魔法陣を作成したのではと疑っています」

「んなバカなことがあるか！」

「そうよ。それに大体、アンタなんでコレがアホ理事長が作った物だってわかるのよ」

確かにそうだ。

コイツの言い分はいろいろとおかしい。

まず、ジジイはめったなことでも魔法は使わない。

使ったとしても、無詠唱のごくノーマルな魔法を使う。

ジジイが魔法陣を使うのはそれこそ、魔王レベルの相手でもない限りありえない。

「はい。確かに龍造様の魔法陣は見たことはありません。ですが、貴方達の魔法陣を見ていましたから」

「まさか、僕とソラ先輩の魔法陣を見て……」

「はい」

そんなことをこともなげに言う。

何だ、コイツは……！？戦闘中の魔法を見て、ほぼ一瞬で覚えたのか？

魔法的なセンスに限って言えば、天才だ。コイツは。

「ちなみに、呪力の配置図が私のスカートのポケットにあります」

「わたしが取るわ」

そういうと、冬香が可憐のところまで来て、スカートをあさる。

「……あん。……そんなところを触らないでください」

「……どこも触ってないわよ？」

「ひ、平地さん、そそ、そんな趣味が……ッ!？」

「……あつたわ。コレね」

そういつと、冬香は何事もなかったのかのように一枚の紙を取り出す。

それをオレ達に見せると、確かにそこには黒い点が打たれている。たぶん、呪力の位置だろう。

それは学園を中心にして円を描いてることがはっきりとわかる。

「学園を中心に円を描くように配置されています。それも疑う理由の一つです」

「でも、コレだけでわかるんですか？」

「無理ですよ。だって、点と点の間にはいろいろな線があるんです。それこそ、組み合わせが無量大と言ってもいいと思います」

「簡単です。この魔法陣に意味を持たせるものだけをピックアップすれば時間は掛かりますが素人でもできます。私の場合では見ればすぐにわかりますが」

何故か偉そうに言う。

ただ、体を指一本動かせない状況でやるか？

「ででで、でも、理事長さんが、そ、そんなこと・・・」

「ああ、ジジイがんなことするわけねえだろ！？ジジイは、『結界の魔王』なんだぞ！？」

「ですが、疑う材料はかなりあります」

その言葉にオレ達は何も言い返せなかった。

まず、魔法陣が学園を中心に配置されていること。そして、それがジジイの魔法陣、正確にはソラと春樹の魔法陣と似た様式であること。

「で、でも、ほ、他の人と言うことも、あ、あるかも知れませんか？？」

「・・・それじゃ、ジジイの魔法陣に似ているって所の説明がつかねえ。他の魔王ならできるかも知れねえ。けど、魔王では呪力を扱うやつは一人もいねえし、ましてや魔法陣なんて古臭い魔法展開使うのはジジイだけだ」

「それに、あれでも一応は魔王よ。他の魔王の侵入に気付かなかったなんていうほど間抜けじゃないわ」

ありえねえ。

オレはそう思ったかったが、何も言うことができなかった。

それに、つい最近になって急にオレ達の訓練を本格化させたのにも気になる。

だとすると、ジジイはあのフェイクとか言う自称魔王に対抗するため？そのために、ジジイは力に手を出した？

「ですが、急にそんなことを・・・」

「あ、あの、師匠に聞けば、わ、わかるのでは？」

「その手があったわね。ソラなら、確かに魔法陣を解読できる可能性があるわ」

「ちよつと待ってる！すぐに連絡する」

オレ達は学校に言ってたから今回はピアスを持っていない。それでオレはケータイを取り出してソラのケータイに電話する。  
だが、どんなに待っても一向に出る気配が無い。

「・・・クソッ！どうして出ねえんだよ！」

「ひよつとして、あちらも？」

「ご主人様との戦闘ですか？・・・確かに、それだと電話に出る余裕もないかもしれません」

「でも、ソラ先輩のほうにもかなり強い人たちが行ってますよ？」

「だな。リカに関して言えば吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>、そしてシユウと同じ師を持つ双子に魔法を無効化できるスズ、ついでに魔法が効かない田中だ」

「それでもです。ご主人様のほうには花梨が憑いています」

いや、それは最初に聞いている。

・・・それとも、他の意味があるのか？

「ど、どどいづことでしょうか？」

「ハーフ・ボゼッション ネクロマンシー。『半憑依』。死霊術の一種です。通常、一つの体には一つの魂しかありません。無理に一つの体に二つ以上の魂を住ませようとすると魂に負荷がかかり、両方の魂が消滅します」

「でも、それだと、アンタと花梨とか言う妹の魂が一緒に入ってたじゃない」

「違います。あれは正確には魂を交換したのです。私がこの体から出て行くことにより、その空いた所に花梨を入れることによって魂の消滅を防いでいます」

「でも、カバネさんは花梨さんと普通に入れ替わってましたよね？」

「はい。私達の目の前で花梨さんとカバネさんが話していました」

「それが、ハーフ・ボゼッション『半憑依』です。どういう理屈かは不明ですが、ご主人様は自分の体に二つの魂を存在させることができます。おそらく自分の魂に何らかの細工をなさって、体の支配権を花梨に託すことで均衡を保っていると思います」

だが、それがどうして向こうにその余裕が無い理由になるのかわからない。

「・・・おい、結局意味わからねえぞ？」

「察しが悪いですね。つまり、ご主人様は一時的に花梨と同時に存在することができるのです」

「……すみません、意味がわかりません」

春樹がそう言う。

だが、それも最もだと思っ。

実際、コイツが何を言ってるのか全員がわかっていないっばい。

「……要するにです。私の体では私、あるいは花梨のどちらかの才能しか使えません」

「才能？どういうことよ？」

「花梨には魔法の才能はゼロです。その代わり、あの子の白兵戦闘スキルはすばらしいものがあります。そして、ご主人様も私ほどではありませんが魔法を使うことにはそれなりに長けています」

いきなり自分達の才能について語りだすメイド。

だが、オレの中にはある一つの仮説が生まれてきた。

二つの魂。

つまりは一つの体にもしもカバネと花梨の魂が存在するとしたら・  
・・。

「おい、まさか、カバネは魔法を使いながら花梨の戦闘スキルを手にするとも言うつもりか？」

「少し違います。ご主人様が魔法を構成し、花梨がご主人様の体を動かして戦うのです」

マジかよ。

オレは実際に見たことが無いからよくわからないが、花梨は相当

な戦闘技術を持っているらしい。

それも、シユウが押されると言うレベルの。

それが生ける屍リビングデッドの性能もあつたかもしれない。だが、それでも常軌を逸している。

それに、高等な魔法を使えるという利点が加わればどうなる？  
完全なオールラウンダー。最強の戦士になるんじゃないのか？

「アイティファクト魔導宝具こそ持っていないませんが、あの二人なら勝てる人はほほいないと言つても過言ではありません。実際に、普通の人はご主人様達の相手になっていませんでした」

「それを聞いて安心したわね」

「・・・ちゃんと、聞いていたのですか？」

いや、あいつ等なら大丈夫なはずだ。

それは全員の共通認識だ。

「お前等、知らないかもしれないがな。オレ達を含めて、あいつらも普通なんかじゃねえんだよ」

「そうです。簡単にやられるような人達ではありません」

「そ、そうです。し、師匠達はすごいんですよ！」

オレ達がそういうと、またも背筋に悪寒が走る。

状況は悪くなる一方だ。

オレは剣を抜き、可憐の自由を解く。

「文句はねえよな？」



「ええ。今は状況が状況よ。浄化をしようとしてるんなら別に拘束しておく必要もないし」

「そうですね。ココは共同戦線を張りましょう」

「でも、もしも龍造さんが魔法陣を使っていたらどうするんです？」

「そ、そうですね？わ、わたし達では太刀打ちできません・・・」  
春樹と四条が暗い顔で言う。  
それなら問題は無い。

「ジジイはんなことしねえ」

「そうね。確かにアホ理事長はアホだけどこんなものに手を出すほど落ちぶれていないはずよ」

「ですが、万が一にも手を出していた場合には・・・」

「お袋の鉄拳制裁だな。いくら魔王でも大魔神には勝てねえはずだ」

「・・・あ、あの、間君のお母様は一体どういう御方なんでしょうか？」

「『風の戦女神』で魔王を超える大魔神だ」

オレがそう言うと四条は目を見開いて驚く。

・・・前髪に隠れて見えないがたぶんそうだ。  
そういや、コイツにはお袋のコトとかあんまり話してなかったな。  
オレ達の間ではお袋の強さの話は禁句だからな。主に数人が精神  
衛生上大変よろしくない。たぶん、錯乱する。

「で、でも、間君のお母様もグルだったらどうするんですか？」

「「「「「「「」」」」」」」

四条の何気ない一言。

オレ達はそれをできるだけ考えたくなかったのに・・・。  
それが示す事実は唯一つ。

「・・・遺言書く準備しとかねえとな」

「そうね」

「ですが、その書く時間をくれるのでしょうか・・・」

「姉さん達がなんか変なコトになってますよ!？」

「す、すみません!？本当にすみません!？」

「・・・あの、できれば早く行きませんか？」

何だかカオスな空間が形成されてしまっていた。

そして、またも事態は急に進む。

オレ達が来た方向とは反対の方向。つまり、ソラ達のいるである  
う方向から爆発音が聞こえた。



15話・SUSPECT（後書き）

作 「とうとうわけで『容疑者』をお送りしました」

冬 「どうなってるんのよ、これ？」

作 「いやあ、いろいろと容疑者が出てきて大変ですね。一体、誰がうつそつきだ!？」

冬 「普通に考えて、あの関西弁の死霊術師ネクロマンサーじゃないの？」

作 「つぶ。僕がそんな面白くないことをするとでも!？」

冬 「・・・アンタ、それだけで犯人考えるの？」

作 「あの、トリックスターと名高いロキ様を崇め奉る僕が!？」

冬 「聞ってる?戻ってきなさい」

作 「そんなの、ロキ様が許しても俺様が許さない!」

冬 「・・・コード 氷地獄コキユートス」

作 「わかつ・・・」

冬 「とうとうわけで次回。どうも、ソラ達の方に視点が戻るわね。じゃあ、次回もよろしく」

## 16話・VS NECROMANCER & GOAST

### side空志

ボク等は人影を認識するとすぐに構える。

そして、そこにいたのはやはりと言うか、背中にスコップを背負い、怪しげなローブを被った、まさに死霊術師ネクロマンサーな感じの格好をしたカバネさんだった。

「……いきなり攻撃ですか？」

「まずは、疑えがワイの信条やでな」

「激しく同意できますね。でも、敵がどうかぐらい聞いたらどうです？」

「そうか？今回はちいとばかし無理そうやでな」

みんなはボクとカバネさんのやり取りをただじつと聞いてるだけ。まあ、もしも敵じゃないなら戦わないに越したことはない。

「では、直球で行きます」

「なんや？」

「コレをやったのは貴方達ですか？」

「……えらい、面白いコト言っおつな」

ボクの言葉にすっと目を細める。

・・・これは、まさか・・・・・・・・。

「地雷踏んだ？」

「盛大にな」

みんながどうしてくれるんだとボクを白い目で見る。

・・・いや、まさかココでこうなるとは予想外だった。

というか、予想できる？そんなの、テレパシーでも使えないと無理じゃない？

「いや、たぶんボク等は敵じゃないと信じてますよ？」

「残念やな。ワイはお前を少しばかり八つ裂きにせんと気がしますまんわ」

「死んでますよ！？人間には対話と言う世界平和も夢じゃない最終兵器があるんですよ！？」

「ワイはあえて核に手を出すわ」

ダメだ！？

既にこつちの話を聞く気が無い！？

でも、この感じだと絶対にこの人はボク等の敵じゃない。むしろ、同じ目的のためにココまで来たんだらうと思う。

でも、相手はかなりご立腹の様子だし・・・。

「しょうがないよ。ココはソラ君が責任を取ろうよ」

「俺もそう思います」

「私もですう」

「まあ、死ねばいいんじゃないね？」

『ああ。俺様もそれで十分だと思っぜ』

「・・・ソラ、がんばって」

「助けて！？仲間が生命の危機だよ！？」

「「行くでい！！？」」

いきなり変に舌を噛むカバネさん。

つか、さつき声がダブって聞こえた気が？

「おまつ！？いきなりしゃべんな！舌噛みかけたやないか！？」

だつて、そろそろしゃべりたい頃合だったのだよ、キミ！

知るかボケ！？・・・まあ、ええわ。カリン、行くで！　　お

っすい！

すると、その宣言どおりカバネさんがボク等に突撃してくる。

コレくらい優子さんに比べれば余裕だ。

それは、みんな同じなのか自分の得意な方法でそれぞれが防御の体制をとる。

「甘いのだ！」

「ッ！？」

そして、ボクは気づく。

以前似たようなことがあったことを。ただ、それはボクが実際に経験したことじゃない。

その時、ボクはその光景を見ていた。フェイントをかけられて吹き飛ばすシュウの姿を。

とつさに魔法陣を展開する。

「紫電シツデン！」

「ッ!？」

ボクの体に纏わりつく雷。

ボクに向かつて鋭い蹴りを放とうとしていたカバネは無理な体勢にもかかわらずバツクステップを踏み、ボク等から距離をとる。

そして、油断なくボク等を見据える。

「・・・ほう。一番弱そうなお前からケリつけようと思ったんやけどな？蹴りだけに」

「生憎、同じ手はボクには通じない」

「なるほどな・・・何回も言うけどな、ワイは察サツしのよヨすぎる子は好きと違チガうねん」

やっぱりか。

でも、そんなことが可能なのか？

カレンさんの場合は、どっちか片方しか出ていないとダメだった。それで、カレンさんの時は魔法を使って、カリンさんの時は格闘を使った。

その時、カレンさんが言葉を話し、カリンさん並の格闘技術を発



揮するところを見ていない。だから、ボクは一つの人格につき一つの能力しか使えないと持っていたんだけど……。

いや、何かトリックがあるのか？

『おい。さっきのはあの妹の技じゃねえのか？』

「たぶんね。でも、カバネさんの自我を持ったままカリンさんの力を発揮するなんてことできるの？」

『俺様にはなんとも言い様がねえ。第一、ネクロマンシー死霊術自体が珍しすぎてよくわかっていないことのほうが多い』

「なら、呪力がどうのこうの言ってる場合じゃないね……」

そういうと、周りに呪力があるとかも無視して相手を ツクヨミ月詠 を発動させた目でしつかりと見る。

今回、呪力の規模がそれほどでもないのか、目に痛みはほとんどない。かなりラッキーだ。

でも、どんな魔法をも見破るこの目を持つても相手が何でカリンさんと同じことをできたのかはわからなかった

「……魔法じゃないのか、それともボクが未熟なだけなのか」

できれば後者であって欲しい。それなら、 ツキヨ月夜 で相手をぶつた切ればなんとでもなる。でも、魔法じゃないなら……どうしよう？

そして、そんなことを考えていても、相手は何もしてこない。

どういうことかと思考にまわしていた意識を相手に向けると、そこには掌に魔力が集中している相手の姿があった。

ボクは、迷わず即銃の引き金を引く。

カバネさんはそれに驚くと掌に隠していた魔法陣をこつち向け、魔法を発動させる。

「 汝に雷神の裁きを！

ジャスティ・サンダー  
雷神之審判 ！」

ボクの アマイカズチ 雨雷 のように上空に魔法陣が展開される。

ボクは銃をその魔法陣に向かって撃つ。  
すると、魔法陣は破壊され霧散する。

カバネさんは続けて起こる異常な事態に驚いている。  
そこをリカと双子が強襲する。

「 ツ！？ 」

相手に考える暇を与えない完璧な連携。

ただ、相手はありえない反応速度で三人の攻撃をさばく。

「 アンチ・シェル  
相殺殻 ！」

すると、今度はスズが敵も味方も関係無しに近接戦闘を繰り広げようとしている四人の周りに六角形の盾を展開させる。すると、まるで示し合わせていたかのようにリカがそれを足場に相手の死角から攻撃を繰り出す。

前の闘技大会の事件のときに見せたアレか。

「 スズ！ 適当に閉じ込めて！ 」

「 わかったよ〜 」

三人相手に猛攻を繰り出すカバネさんが相手じゃたぶん勝てない。

それに、たぶん敵じゃないし下手に怪我とかさせるのはダメだ。なら、拘束するしかない。

「三人が離れた瞬間にね」

「大丈夫だよ」

「・・・三人とも離れて！」

ボクが頃合だと思って声をかけると、三人は一斉に距離を取る。相手は攻撃を仕掛けようとしていたのか、急に敵がいなくなっただたたらを踏む。

そこへスズが アンチ・シエル 相殺殻 を詰める。そして、魔法を発動させる。

「 アンチ・エリア 相殺結界 ！」

アンチ・シエル 相殺殻 を媒介に半球状で半透明なドームが形成される。

「結界か？」

迅雷の弾丸。

ライジング 鳳雷弾 ！」

結界にカバネの魔法がぶち当たる。

ただ、結界に当たった途端に霧散して消える。

そして、魔法が無理なら何でも言うように拳で突く。

「っ痛！？・・・なんや、これ？・・・それに、お前等の魔法、いろいろとおかしいことばっかやないか」

「そうだね。ラッキーだったよ。もし、ここにいたのがカレンさ

んだったらこうはうまく行かなかったと思うね」

「そっか。カレンさんはわたし達の訓練を見に来てたけど、カバネさんは見に来てなかったもんね」

そう。簡単に言えば情報不足。

だから、急な事態に驚くことしかできず、それが致命的なタイムラグを生んだ。

「とりあえず、落ち着いてください。たぶん、ボク等は貴方達の敵じゃない」

「何を言うか。カレンがこの魔法陣を確認した時の驚愕的事実があんねん」

「驚愕的な事実、ですか？俺は魔法陣のことについてはあまり詳しくないのですが？」

「いや、そんなお前でも驚く。これは、『結界の魔王』の使う魔法陣と酷似しとる点がやたらと多すぎる言つとんのや」

その言葉にボク等はただただ驚くことしかできなかった。

要するに、コレは『結界の魔王』間龍造が作成したのかもしれないと言つて。と。

「でも、龍造さんがそんなことするのはありえない。それに、ソラの魔法陣の先生だし・・・」

「そうですね！確かに、龍造さんは少しアホですけどそんなことはしないですう！」

「俺もそう思います。あの方は類まれなるアホですがそれだけはありません」と

「そうだよ。それに、龍造さんならきつと何か理由があるんだよ」

「……自分等、ホンマに『結界の魔王』のこと信用しとんのか？」

「……いや、たぶん」

ボクも普段が普段だから特に何も言い返せない。

……やっぱ、普段の行いはかなり大切だ。

「でも、ボクも龍造さんがそんなことをするようない外道に成り下がったとは思えません。それに、ボク等はたぶん同じ目的のためにココに来たはず。呪力の浄化、違いますか？」

「……せや。けどな、呪力は普通の方法やと浄化できん。ワイの場合、呪力に敏感な幽霊のカリンが憑いとるで呪力の位置は完璧や。それに、死霊術ネクロマンシーにも浄化の方法はある」

「ま、行動で示しましょう。スズ、そこに 相殺アンチ」

「わかったよ」

そういうと、スズは長々と魔法を詠唱し始める。そして、魔法が完成する。

「相殺<sup>アンチ</sup>！」

すると、呪力の嫌な感じが消える。

ボクの目で確認してみてもそこには何もなかった。

「よし、浄化完了」

「はあ！？そんな早く終わるわけ無いやろ！？  
に終わってる！？ ホンマかいな！？」

え！？本当

「あ、コレで早いんですか」

「ホントだね。わたし詠唱遅いのにな」

「あれで！？意味わからん！？なにそれ！？」

「スズの属性は『逆<sup>リバーズ</sup>』、魔法を無効化することに特化した魔法。  
今回はやっぱり魔法で無理矢理呪力を作ったみたいだからスズの魔法で消せた」

「・・・んなアホな。『闇夜の奇術師団』には魔法を消す魔女がおるとは聞いたっただけだな」

「えへへ」

「・・・こんな天然丸出しの嬢ちゃんちゃんやとは思わなかった」

「「「「「「」」」」」」」

「ほえ？みんなどうしたの？」

うん。確かにこんな子がそんな凶悪な魔法使う子には見えないね。スズは完全にアホの子のポジションだし。

「まあ、そんなわけでボク等を信用してください。事態は一刻を争います。でも、コレで時間を稼げるはずです」

ボクがそうだった瞬間だった。

ボクの背筋にぞつとする悪寒が走る。

何事かと周りを見ると、どうやらみんなも同じものを感じ取っているみたいだ。

心なしか、みんなの顔がほんの少しだけ青くなっている気がする。

「な、何・・・これ？」

「え？何だか、寒い・・・？」

『おいおい。マジかよ』

「ミスト！？これはどういうことだよ！？」

「シャン！大丈夫か！？」

「だ、大丈夫ですう。シャオは？」

「な、何でや？魔法陣の一部を崩したのに起動した？」

どうやら、魔法陣が起動してしまったらしい。

でも、何で？さつき、スズが魔法陣の一部を崩したのに・・・。すると、疑問に答えるかのようにカバネさんの口が開く。

「簡単だよ。これ、ダミーだったんだね。たぶん、本命に使う呪力のポイントはもっと少ないんだと思う　　ホンマかいな・・・」

要するに、ボク等が浄化した呪力はただのダミーで。時間が間に合わず魔法陣が起動。

なんてヤツなんだよ。たぶん、黒幕はボク等が絶対に呪力を浄化することを前提にこんなことをしてきたことになる。そして、ボクの予想では確実に間学園近くの呪力は全部ダミーの可能性がある。

「・・・相手は相当に頭のキレがいい」

「せやな」

「でも、魔法陣が発動しちゃったけどどうするの？」

「とにかく、魔法陣を構成してる呪力の一部に行けばいい。そうすれば、ボクが魔法陣を分解できる。できなくても、スズに頼めば一発」

「そっか。じゃ、早く行こうよー！」

「うん。カバネさん、ボク等を信用してくれませよね？」

「わかった。それに、今はもめとる場合と違ちうでな」

若干、希望が見えてきた。

ボクはスズに結界を解くように頼む。

そして、幽霊は呪力に敏感と言う話を元にカリンさんに話を聞く。



「で、カリンさん。ココから一番近い魔法陣に使われている呪力は？」

「ゴメンね。それはさすがにわかんない。普通にこんだけ呪力があつたら、いくらわたしてもこんがらがっちゃうのさ」

「さすがにそんな都合よくは行かないみたいですね」

「でも、こっちはソラさんがいるので何とかなるはずですよ」

「やっぱ、ソラが上から見たほうが早いと思うよ」

「それもそうか。・・・レオ」

「みや」

ボクはレオに一言声を掛けると、レオは了解してボクの後頭部から地面にすたと降り立つ。そして、レオの体が光ったかと思うとそこには既に羽の生えた獅子の姿に変わったレオがいた。

「・・・何て言うかな、何でもありやな　確かに」

「まあ、コレで上からボクが見れば一発でわかる」

そういいながら、ボクが上へと飛び立つためにレオの背にまたがった時だった。

いきなり、轟音が響いた。

16話・VS NECROMANCER & GOAST（後書き）

作 「とうとうわけで『VS 死霊術師&幽霊』でした！」

リ 「・・・うん」

作 「・・・どうしたの？」

リ 「・・・つい最近、アタシが目立たない」

作 「ああ。妖怪の癖に妖怪が怖いと言うギャグスキルを持ってるからね」

リ 「何で？何で、ソラとのあんなことやこんなコトが無いの！？」

作 「そこ！？そこなの！？」

リ 「え？むしろそれ以外に何があるの？」

作 「いや、普通に自分の出番とか」

リ 「アタシが欲しいのは、もっとこう・・・」

く妄想が入りますく

空 「ふ〜。今日は汗かいたな。シャワーでも浴びようかな？」

ガチャ（脱衣所の扉を開ける音）

ガラガラ（風呂場の引き戸の開く音）

空&リ 「「あ」「

顔の赤くなる空志

空 「ゴメツ！？わざとじゃ！？」

リ 「むっふっふ〜」

ヤバげな表情のリカさん

空 「・・・あのお、リカサン？」

リ 「とう!」

空 「いやあああああああ!??」

リ 「って言う感じの」

作 「・・・いや、だってさ、あまりにも普通すぎて面白くないじやん」

リ 「・・・それだけの理由で・・・」

作 「なんかリカさんが落ち込んでいるが次回予告だ!」

リ 「もう、こんなグダグダなのイヤ・・・」

作 「突然の轟音。そこに現れるのは？」

リ 「・・・やっぱ、ソラと一緒に逝くしかないのかな？」

作 「と言うわけでリカさんがいろいろとヤバそうなので次回もよろしく!」

空 「あれ?リカどうしぎやあああああ!?!??」

作 「・・・南無」

17話・EVIL SPIRIT

side空志

突然の事態に反応できたのはボクとスズ、田中以外。

リカがボクの首根っこを掴んでどこかに引つ張って行くのを意識する。

視界の隅には、ミストが盾を展開して田中とスズを守っていたのが見えたから大丈夫だろう。

あまりの唐突過ぎる事態でボク自身、何が起きたのかわからない。ただ、一つだけわかるのが目がさつきよりも痛み出したと言っただけだ。

周りを見渡してみるけど、土煙にさえぎられて何が起きているのかよくわからない。

「ッ・・・このぐらいは問題ないか」

「ソラ？目が痛いのか？」

「大丈夫。それよりも、みんなは？それに何が？」

「わかんない。・・・でも、何かいる」

まるで、その言葉を合図にしたかのように、何かが空気を震わせて雄たけびを上げる。

その雄たけびを聞くと、何故か背筋に悪寒が奔る。直感的にわかった。

アレは、存在していいものじゃない。

「ソラ！？コレを吹き飛ばして！」

「……無理だ。レオがどこにいるかわからない。もしも、空中にいるんなら墜落するかもしれない」

たぶん、レオのことだからやられているなんて事はないと思う。ただ、条件反射的にその翼で空を駆けているのだとするとボクはうかつに突風ジェットブウを使えない。でも、かといってこの視界が最悪のままに戦闘するって言うのも無謀すぎる。

「……どうしたものか。……レオ！地面に降りろ！」

ボクが見えないレオに向かっていうと、それに返事するようにして獣の咆哮が聞こえる。

そして、レオが降り立ったところを見計らって地面に魔法陣を展開。緑色の大きな魔法陣を展開。

「トゥブウ突風！」

すると、地面に展開した魔法陣から風が発生する。その風が土煙を吹き飛ばし、何がいるのかを白日の下にさらす。幸いにも、みんなは何もなかったみたいだ。でも、目の前の事態にはただ驚くしかできなかった。

「な、何、コレ……」

「……怖い」

「……ホンマかいな」

ボク等が目にしたモノ、それは大きく真っ黒な人影。

あれじゃあ、まるで……。

「……悪霊……！！」

誰が口にしたのか、それとも自分が発した声なのかどうかもわからない。

人影は口らしき部分を空へと向けて大きく開け、魂を震わせるような咆哮を上げる。

その咆哮を聞くと、まるでボク等の魂が凍ってしまっんじゃないかと言うほどリーズしたのがわかる。

そして、ボクが気付いたときにはこっちに向かって口のような部分を向ける黒い何か。それは、まるでレオやあの黒い魔獣が咆哮覇を放つときのような……。

「ッ!？」

ボクはとっさにリカの前に出るとナイフを周囲に突き刺す。

そして、月の結界魔法、ゲツカイ月界 を展開する。

「あかん!? 防ぐな! 避ける! 侵食される!!」

どういうこと? そう聞こうとしたとき、ボクとリカは黒い魔力の奔流に飲み込まれた。

そして、盛大な爆発音が響いた。

side 隆介

「おい、何があつた!？」

「わかりません! とにかく、事態は私達だけの手では終えないの

かも知れません。すぐに皆さんと合流しましょう!」

確かにこの魔法陣が発動した今、ひよっとするとかなりまずい状況なのかもしれない。そうすると、オレ達は今すぐにでも分散させた戦力を一つにまとめてどんなことにも対処できるようにしたほうがいいかもしれない。

「ああ、そうしよう」

「でも、他のみんなはどこに行ったのよ?」

「四条さんに聞けばいいんじゃないですか? 精霊の御力で」

春樹がそういうと、ここにいる全員の視線が四条に向く。すると、いつものようにおどおどした感じで慌てだす。

「あ、あの、精霊さん達が怖がっています。ど、どどど、どうしましょう!?!、師匠達の居場所を聞いても、わ、わかりません・・・」

「・・・どうしましょう?・・・今回、カリンはご主人様に憑いているのでカリンでご主人様を探し出すこともままなりませんし・・・」

ぶつぶつと何かを言い出すメイド。

たぶん、こいつらにしかできない探索方法もあるんだろう。

オレ達は期待を込めた目でこのメイドを見つめる。

「・・・わかりました。あっちです」

ほんの少しして、カリンが顔を上げて指をビシツと挿す。そこは、おそらくは爆発音のようなものが響いた方向だ。すると、オレ達がそこに行くのがわかったかのようにいきなり何かの咆哮が聞こえる。

「・・・何かいるのか？」

「はい。少なくとも、レオさんではありませんね」

「あのチビライオンがあんなおぞましいとしか表現できない咆哮を上げたら引くわよ」

「・・・でも、それなら何があるんです？」

「あ、あの・・・せ、精霊さん達がそっちに行きたくないって、い、言ってます・・・」

「・・・まさかッ!？」

カリンは何かに気付いたのかいきなり生ける屍リビングデッドの力を全開にして走り出す。

「おい!？ちよつと待てよ!」

「追いましょう!」

「ああ、もう!!次から次に・・・!コード 魔氷狼フェンリル!!」

オレとシュウはカリンを追いかけるようにして全速力で走り出す。それに続くようにして冬香が作り出した氷の狼達が冬香達をその



大きな背中に乗せて走ってくる。

「わ、わ、速いです!?!」

「アంత、ソラの違法改造してある盤乗<sup>ボート</sup>ったんでしょ?コレぐらいガマンしなさい!」

「……というか、隆介さんもシュウさんも走るの速いですね」

オレ達はカリンのやたら目立つメイド服を追いかけるが、その姿が心なしかどんどん小さくなっているような気がする。

「……やはり、あの方が速すぎます!」

「やっぱそうなのかよ!」

「ドンだけふざけてんのよ、生ける屍<sup>リビングデッド</sup>って!」

「姉さん!もつと速くできないの!?!」

「こ、ここ、これ以上は無理です!?!」

オレ達は全力で走っているにも関わらず向こうはオリンピックレベルの速さで疾走する。

オレも一応は龍種だからそれなりに走るのも速い。つか、人間の素の力で勝てるやつはいねえと思う。だが、それを軽く越えるスピードで走っているのは明らかに異常だ。生ける屍<sup>リビングデッド</sup>の力はすさまじい。

「ご主人様!」

カリンがいつになく切羽詰った声で叫ぶ。

オレ達はその言葉につられて前を見ると、そこには異常な空間が広がっているとしかしいような状況だった。

目の前には、黒く、大きな不恰好な人の形をとった影のようなモノ。

そして、カバネや、他のやつ等がそいつを囲むようにして対峙している。

だが、よく見ると対峙しているんじゃない。これは、向こうの雰囲気にもまれてる。

この異常な光景にオレ達は突っ込もうとするが、カリンに止められる。

「おい、アレは明らかに異常だ。オレ達に行かせろ」

「ダメです。端的に言います。あれが、私達の恐れていた事態の一つ、『悪霊』です」

「あ、あれがですか？」

「はい」

『悪霊』。それは、つい最近こいつらが言ってた幽霊の、ある意味では上位的存在なモノ。幽霊と違い、死ネクロマンサー霊術師でなくとも視覚することができ、更には物理干渉もできるらしい。要するに、オレ達を殴ろうと思えば殴れる。そして、幽霊が悪霊化してしまうと、例外なく凶暴化してしまい、目に映るものすべてを破壊しようとしてしまうらしい。

「何で、そんなモノがココにあるのでしょうか・・・？」

「・・・わかりません。もしかすると、この呪法陣に関係あるのかも知れません。・・・いえ、十中八九そうでしょう」

確かに、タイミングがよすぎる。

こいつ等の話では『悪霊』の発生は珍しいものらしい。

そして、悪霊化してしまうには二つの要因がある。

一つが『負の感情による幽霊の暴走』。これはわりとよくあることらしい。それに、この悪霊化は何とかなできるともいつていた。

ただ、問題なのが二つ目の『呪力による強制的な悪霊化』。コイツは、例え幽霊自身にそんなつもりがなくても起こってしまい、更には悪霊化を解くことがほぼと言っていいほど不可能らしい。

「マジかよ」

「それに、あそこにいるみんなの様子がおかしいわ」

確かに、冬香の言うとおりだ。何故か、全員が呆然と悪霊を見ている。まるで、あの悪霊の雰囲気にもまれてるようだ。

「今はさほどではありませんが、悪霊の近くにいると誰もがああいう感じになります。おそらく、RPGやモハンで言うスタン状態なのでしょう」

「・・・ココでゲームですか？」

「ですが、それ以上に説明のしようがありません」

すると、まるで魂を凍りつかせようともしているかのような咆哮を悪霊が上げる。

オレ達は、その咆哮をモロに聞くと、背筋がすうっと寒くなる。

「何だよ、コレ・・・!?!」

「か、体が、思うように動かない、です・・・!?!」

「・・・やはり、呪力による、悪霊化ですね。・・・私でも、コレは無理です」

今度は、その言葉を合図にしたかのように悪霊が人間で言う口らしき器官を上に向ける。すると、口がコレでもかと言うぐらいに裂け、耳にまで達する。そして、その大口をソラやリカのいる咆哮に向ける。

オレはソラに大声で危険を知らせようとするが、声がつましく出ない。

そして、ソラは半ば呆然とした表情で、シュウ並の身体能力を持つリカもおびえるようにして悪霊を見つめるだけだ。

「リカさんは、幽霊が苦手です・・・!」

春樹がつぶやくような声で言う。

オレも今思い出した。リカは、妖怪でありながらお化けが怖いっつーふざけたヤツだった。今は、それが命取りになっている。

だが、運はオレ達に味方したみたいだ。

ソラが自分を取り戻したのか、リカの前に出て補助用の投擲用ナイフを周囲に投げる。

そして、月の結界を張る。

よし、コレなら・・・。

「あかん!? 防ぐな! 避ける! 侵食される!」

何故か、カバネのその言葉がオレ達の耳によく聞こえ、そして次の瞬間には極太の黒いレーザーのようなモノが悪霊の口から発射される。

そして、それが結界魔法を張ったソラ達に直撃。その一瞬後、ソラ達を中心にして爆発音が響いた。

そして、煙によってソラ達の安否がよくわからない。

「ッ！急いで、あの方達を……！」

切羽詰ったカリンの声。

だが、何故かその言葉がどこか遠く感じられる。

「正気に戻ってください！悪霊の攻撃は精神を侵食し、狂気に陥れます！そうすると、生きたまま悪霊のような存在になってしまいます！」

「ほ、ほほ、本当ですか！？し、師匠達をは、早く何とかさせんと！？」

「おい！アイツはすぐに倒せるのか！？」

「……難しいでしょう。アレは、私達や精霊魔導師十数人で倒すものです」

「ちょっと、それって……あの二人を諦めろって言うの！？」

「いえ、ですから……できるだけ早く助け出す必要があります」

「ッチ！……だが、あいつらだぞ？何とかできるんじゃないか？」

「お二方が魔力を全く持っていないのでしたら大丈夫です。ですが、そんなものは魔力無効化<sup>キャンセラー</sup>体質でしかありえませんか」

「……要するに、田中さん以外は無事ですまないと言うことですか？」

話から察するに、おそらくは悪霊の侵食とやらは魔力を蝕み、対象を狂気に陥らせる類のものだろう。なら、それは全魔法使いにとって、死刑を宣告されたも同じようなものだ。

だが、それ以上にまずいのがソラのやつだ。  
アイツの魔法は外部魔力<sup>マナ</sup>を使う。

マナとは万物に宿る魔力で、移ろいやすく、万物の影響を受ける。つまり、あの魔力を侵食する攻撃の影響を受けてそれを活性化させる危険性がある。そうになると、こいつ等の口ぶりではたぶん、助からない。

オレと同じコトを考えたのか、シユウが突撃の構えを取り、冬香が魔法を待機させる。

「じゃ、たぶんだけどソラを優先して助けるわよ」

「わかりました」

「……何故ですか？魔力保有力的にはアンジェリカ様の方がはるかに上ですよ？」

「アイツの魔法は特殊なんだよ。説明してなかったけどな、あいつは……」

オレが説明しようとしたその時だった。

いきなり、攻撃地点から突風が吹き荒れる。  
そして、風が吹いたであろう場所からいくつもの衝撃波が放たれる。

それは悪霊に向かって殺到し、悪霊を切り刻む。

だが、悪霊の方を見ると、まるで霧か何かを切ったときのようにその黒いからだが少し歪んだかと思うとすぐに元に戻った。

「ダメ！攻撃が効かない！」

「まあ、想定内だよ」

「何とも面倒なものよ。準備はできておるのか？」

煙の中からは、三つの人影が出てきた。

ソラとリカ、そしてやたらとスタイルがいい、最早場違いとしか思えないような金髪の女。確か、あの女はあの遺跡にいた……。

「ルーミアさん！？」「」

スズと、四条の驚愕の声が響いた。

side空志

本能的にヤバイと感じる。

だが、防御しないわけにもいかない。そうしないと、確実にリカが巻き込まれる。

自分だけなら フウカシャリン 風火車輪 で逃げればいい。でも、リカも一緒つてなると正直なところ、自信が無い。

ゲツカイ 月界 に黒い咆哮霸のようなモノが着弾。  
すると、目の前で不思議なことが発生した。

白銀の結界である 月界<sup>ゲツカイ</sup>の一部に黒いシミができると、そのシミがどんどん範囲を拡大していく。その光景に、さつきチラツと聞こえた『侵食』という言葉が頭をよぎる。

「まさか!？」

解析・・・完了。

結果・・・魔力の侵食、及び人間への精神的な干渉。

それがわかった瞬間、月界<sup>ゲツカイ</sup>が侵食され、真っ黒になる。そしてひびが入る。

ボクはまだ状況について来れていないリカを庇うようにして抱き寄せ、自分が壁になる。すると、どういう魔術的なことが絡んだのか、爆発音が響く。

さすがに、今回は無理かな・・・。

「・・・」

「・・・」

・・・あれ?何も起きない。

どういふことかと周りを見渡すと、そこには金髪のお姉さんがいた。

しかも、こっちをじーっと見てる。

「・・・ルーミア、さん？」

「うむ・・・」

「・・・」



「……」

「……」

「……のう、こういう所でそれはないんじゃないの？  
つか、いつまでそうやっておるつもりかのう？」

「へ？……あ！？ちょ！？てか、何でいるんですか！？」

今の状況を把握。

ボクはリカを庇うために抱きしめています。そして、ルーミアさんがそれをガン見。以上。

ボクはどんな羞恥プレイだと言いながら、慌ててリカを離す。

……でも何か変だ。こういうとき、いつものリカはよく訳のわからない暴走をするはず。そこで、リカをよく見てみると、そこには今だ茫然自失という感じの無表情なりカがいた。

「ルーミアさん、リカがなんか変です」

「吸血鬼娘ヴァンパイアが変なのはいつものことであろう」

「いや、確かにそうかもしれませんが……」

「わかっておる。どれどれ……」

そう言つと、ルーミアさんはその銀灰色の目でリカを観察する。  
そして、おもむろに「」つちを見る。

「やはりの。あてられておる」

「どういことですか？」

「アレを汝も見たであろう？」

「黒い、巨人みたいなヤツ？」

「うむ、アレは悪霊。汝等は悪霊の近くにおったでの。おそらく、悪霊の常時発する呪力にあてられたのであろう。こつ言う方がわかりやすいかの、『瘴気』というものだからの」

「『瘴気』って、よく、エセ霊能力者が言うアレですか？」

「まあ、それに近いかの。まあ、自然に治るのを待つしかあるまいて。で、今回のわらわの用は汝の目のことでの」

「目？・・・ツクヨミ月詠 のことですか？」

「うむ。ちよつと、失礼するぞ」

そういうと、ルーミアさんがぐいっつと自分の顔をボクに近づけ、銀灰色の目で見つめる。たぶん、こついうのをよく小説とかで言う『自分の心の奥まで見透かされているみたいだ』って感覚なんだろうなと場違いなことを考える。

「・・・ハッ！？ソラ！大丈夫、夫・・・」

・・・何で、こつもタイミング悪く、いや、ある意味ではタイミングよく自分を取り戻すんだろう。

「……む？おお、以外に早かったの」

「……ソラ？何ヲ、してタの、デスか？」

「リカサン！？なんかいろいろと大丈夫でございましょうか！？」

リカの目がなんかイツちやってるよ！？

なんか、ボクが見た中でも一、二を争うレベルのリカ・ブラックモードだ！？

「……ふむ、面白いから放置したいところではあるが今は緊急事態でもあるしの。小娘よく聞くがいい。ソラは意識が戻らない汝のためにわらわを呼んだのじゃ」

「……え？」

「まあ、コレは汝も知っておろう。わらわとソラは同じ属性ゆえ、<sup>ツクヨミ</sup>月詠 がどこまで進行しようとしておったのか汝を助けるついでに『視て』おった」

「……ホン、ト？」

「うむ、もちろん」

うわあ、そんな口からでまかせをよくもじゃあしやあと……。あれ？なんかボクも誰かに言われた気が？……。気のせいだ。たぶん。

とにかく、リカからは剣呑な空気が消える。これで、ボクの命の安全は保障された……。はず。

ココは強引にでも話を摩り替えておこう。

「で、ルーミアさんはどうやってボク等を助けたんですか？」

「普通に防御魔法を使ったが？ホレ、周りをよく見てみい」

ボクとリカが周りを見ると、確かにそこは白銀の魔法結界が張られていた。

今のボクの 月詠ツクヨミ では三魔源素スリーシンボルの魔法は解析できない。でも、たぶんだけどこレは精霊が魔法を使ったからこそできる技なんだと思っ。

「いや、普通に汝にもできるはず」

「・・・マジっすか」

「うむ。おそらく、コレでわらわの違和感の謎も解ける。いやはや、よりによって器用なことをするのう」

「・・・どういことですか？」

「今は、説明しておる暇はない。わらわがヤツの攻撃の防御を引き受ける。汝等は効かぬかも知れんが魔法攻撃を頼む。それと、ソラよ。汝、マナを直接ヤツにぶつけるのは不可能かのう？」

「・・・正直、わかりません」

確かに、一度だけ『星』属性を持つティーナにマナ百パーセントの大玉の攻撃をされそうになったとき、その制御を奪って弾丸にしてそれをそのまま打ち返したことがある。

でも、アレは普通に威力が高すぎてアレから全く練習していない。

もし、マナが暴走して学園の周囲が核でも打ち込まれたような惨状になると目も当てられないからね。

「……まあ、よからう。おそらく、汝の 月夜<sup>ツキヨ</sup> であれば大丈夫であろう。それで攻撃しろ。……もちろん、わかっておるうな？」

「それはもちろん。リカ、この煙を払う。その後に遠隔攻撃」

「うん？……わかった」

そして、ボクは再度 突風<sup>トツフウ</sup> を発動する。ボクの周囲から風が吹き荒れ、爆発の際に発生しただろう土煙を吹き飛ばす。

そして、目の前にはさっきの場所から一步も動いていない黒い大きな人影、『悪霊』がいた。

ヴァンパイア・スベスサイス  
「吸血呪 血濡れの大鎌 ！」

ヴァンパイア・スベル  
リカの吸血呪が発動し、大鎌から無数の衝撃波が放たれる。それは悪霊に全部当たるが、まるで効いていない。

「ダメ！攻撃が効かない！」

「まあ、想定内だよ」

「何とも面倒なものよ。準備はできておるのか？」

ボクは一つ頷くと魔法を発動させる。

「 月夜<sup>ツキヨ</sup> ……！」

いつものように魔法陣に手を突っ込み、そこから武器を取り出す。  
それは、一振りの綺麗な刀。

「・・・バージョン刀『ゲッセン月閃』」

17話・EVIL SPIRIT（後書き）

作 「すみません、遅れました。と言うわけで『悪霊』をお送りしました」

鈴 「今回は遅かったね」

作 「作者、これでもいろいろと忙しいんです」

鈴 「うん。わたしもいつもがんばってみんなのお料理考えるのとか大変だよ」

作 「まあ、そんなわけですみません。今後の展開を考えてたらしまりました。ハイ」

鈴 「うん？これからすごいことが起きるのかな？ルーミアさんも来ちゃったし？」

作 「まあ・・・でも、今になって思えば、ルーミアさんいらねんじやね？って思い始めました」

ル 「ほう。わらわは所詮脇役かのう？」

作 「・・・では、次回！」

鈴 「大丈夫？汗すごいよ？」

作 「違う！これは心の汗なんだ！！」

鈴 「おお！？心の汗はこんな風に出るんだね！？」

作 「とにかく、ルーミアさん登場！一体どうなる？そして、呪法陣を設置したのは？」

鈴 「次回もよろしくね」

ル 「うむ。とりあえず、作者よ。一回くたばれ」

作 「ゴメン被ります！ていやあああああああ！！？？」

## 18話・PURIFICATION

side可憐

いきなり煙の中から無傷で出てきたと思えば、未知の魔法を使い、その手にはつい先ほどまでは存在していなかった刀が。

どついうことでしょうか？もう、異常な事態が続きすぎて困ってしまいますね。

「……あれは、何ですか？」

「まあ、隠してもしょうがねえか」

「そうですね。それに、いつまでも隠しおけるようなものではありませんし」

「ホント、ふざけてるわね。……』月』の属性は」

「な、なな、何でルーミアさんがココに!？」

「……誰ですか、あの、女の人？」

「どうも、春樹様だけはあの女性の方は知らないようです。

……何ともつらやましい体の持ち主ですね、あの女性は。」

「おし、あいつらの援護……って、言いたいが、できんのか？」

隆介様が私に聞く。

確かに、悪霊の情報など、そうそうありませんし……。



「……すみません、状況についていけないのですが？」

とりあえず、状況がわからないので聞いてみます。

それに、この方達の反応では、いつものことのようですし。

「『月』の属性とは一体なんでしょう？そして、あの魔法。それに、急に現れたあの方は？」

「簡単に言うと、そんなに気にしないほうがいいわよ。いろいろと自信なくすから」

「……確かに、それは僕もそう思う」

「……本当に、何者なんでしょう？」

ただの魔王の弟子ではありませんね。

「……魔王を師匠に持っている時点で普通ではありませんが。」

「あ、あの、師匠達は攻撃していますが、き、効くのでしょうか？」

「いえ、悪霊には基本的に通常の攻撃、魔法は効きません。対抗できるのは死霊術ネクロマンシーぐらいです」

一応、他にもありますが……アレは嫌いです。

あの方達は、浄化しかできませんから……いえ、その代わりに呪力の浄化は私達の数段上を行きますが……。

「それ、何てチートよ」

「ですが、今回に限り、呪力で暴走した結果ですので精霊魔法も効きます」

とりあえず補足説明もつけておきましょう。

「要するに、世界のほんの数パーセントしか対抗できないわけですね」

「……それに、カレンさんの話では魔法での防御もダメですよ？……それだと、ソラ先輩がどうやって防いだのか疑問が残りますけど」

はい。なので教えてください。

「な、なら、わたしと、ルーミアさんがいれば、な、何とかできます？」

「……意味が図りかねますが、精霊魔法でなら大丈夫です。……他の方は皆さんを安全な所に……って、あの方は何をすることもですか!？」

私は突然高速で駆け出した三谷様を見て驚きました。

手には刀一本。その上、相手は魔法攻撃、物理攻撃がダメな上に防御魔法もダメと言うすばらしいチートぶりです。それに、相手は普通にでかいですし、あんな刀一本ではどうにかなる敵じゃないです。

三谷様は相手の足元を駆け抜ける。そして、すれ違いざまに悪霊の足と思しき部分に一閃。

すると、足首の辺りが切断される。

その程度では意味がありません……!

「無駄です！アレでは簡単に再生を・・・」

私がそういおうとしたとき、悪霊がいきなり苦悶の声らしきものを上げる。

悪霊を見ると、そこには頭を振り乱して暴れる姿がある。

三谷様のほうはと見てみると、そこには若干焦った様子で生成した刀を放り捨てる姿がありました。

そして次の瞬間、刀は黒く染まり、破裂。

「ダメだ。・・・ルーミアさん！少し時間を稼いで！」

「うむ、適当に牽制しておこうではないか。」

ルナティック・インパクト  
月光の衝撃」

そういうと、ルーミアと呼ばれた女性は悪霊に手をかざします。そして、悪霊は苛立ちをぶつけようとしてもしていたのか、右腕を三谷様に叩きつけようとしているところを狙って魔法を放たれました。

銀灰色の魔法の衝撃がルーミアと呼ばれた女性の掌から放たれ、悪霊の右腕を消失させます。

「・・・うむ。やはりわらわでは威力が大きすぎるのう」

「わかりました！」

ツキヨ 月夜 ! ツキガリ バージョン大鎌『月狩』!」

そして、今度は三谷様が先ほど同じ魔法を発動。今度はその手に大きな鎌が握られている。そして、それを・・・。

「リカ！」

「わかった！」

リカ様に投げる。

それをリカ様は器用に受け取ると構える。

「ヴァンパイア・スベスサイス  
吸血呪 血濡れの大鎌 ！」

先ほどと同じ攻撃。

ですが、それでは先ほどの結果と同じ……そう思った瞬間、  
ま  
たも痛みを感じたのか絶叫を上げる悪霊。

どういうことでしょうか？

何かの、手品？

「『マジック  
奇術師』、な。なるほど、確かに魔法と言う名の『マジック  
奇術』や  
な」

いつの間にいたのか、そこにはご主人様が。

更に、つい先ほどまでいなかった方々も……。

「あいつらが引きつけ取る間にワイが運んだ。全員呆然としとる  
けど大丈夫や」

「……アレは、一体？」

「アレがソラと、精霊ルーミアの属性だ」

私が疑問を声に出すと、隆介様が答えてくれました。  
ですが、おかしいですね。

「精霊？ですが、精霊はごく普通の人には見えないはずですよ。それこそ、神霊でもなければ……ば」

「……なるほど、アレは神霊ゆっわけか」

「ああ、ソラは『月』の属性を持つてる。三魔源素スリーシンボルって、アレは『知』を司っているらしい。ちなみに、後二つあるからな」

「『月』？スリーシンボル三魔源素』……まさか、遺跡にあったアレは、本当だったのですか？」

「ん？お前、知ってるのか？……まさか、こいつ等の言ってる属性盤を見たことがあるのか？」

「属性盤？……アレでしょうか、エレメント・ダイアグラム『属性の樹形図』のことでしょうか？……確か、アレは字がかすれて読みづらかったのですが、『星殿』と呼ばれるところで見たことがあります」

「それは、たぶん『星の精霊殿』ね。『月』の神霊ルーミアがいるんだから、『星』の神霊がいるところがあってもおかしくないわ」

冬香様が訂正を加えつつ私に教えてくれました。

なるほど、では、あの力は相当に強いはず。ガイドとしてついてきてくれた方によると、この三魔源素スリーシンボルの力は絶大で、真言を使えば世界を変えられるとまで言われていたほどです。

「で、あれはソラの真言でマテリアライズ『具現化』だ」

「……真言？あれが？」

「ご主人様が眉をひそめながら隆介様に尋ねます。」

「ああ。だって、普通に『マテリアライズ具現化』だぞ？ロスト・マジック失われた魔法の。しかも相手の魔力に直接攻撃できるえげつねえ技だ」

「……おかしいな。ワイが聞いたんはスリーシンボル三魔源素の真言はヤバイらしいで？」

「すみません、私にはあれでも十二分にすばらしいと思うのですが？」

「すみません、『月』の特徴は何ですか？」

「相手の属性、魔法の解析だ」

「……やはり、おかしいですね」

「どういうことよ？少なくとも、アレは上級上位以上の魔法よ？」

「はい。ですが、その程度です」

「……何が、言いたいんだ？」

「マキ魔導……そう言いたいんやろ、カリン？」

「はい。私も見たことはないので、推測ですが」

私の言葉を聞いても首をひねるだけ。  
では、簡潔に言いますよ。

「魔導<sup>マジ</sup>とは、上位属性にのみ許された上位上級以上の魔法です」

side 空志

「大丈夫!？」

「うん!でも、どうやってやっつけるの?」

「いや、やっつけちゃダメだ。これは、元は人の幽霊なんだ・・・」

別に、この幽霊も暴れたくて暴れているわけじゃない。  
ただ、呪力に当てられて一時的に自分を見失っているだけだ。  
なら、助ける。

「汝、もっと効率のよい魔法はないのか!・・・むろん、『月』  
で」

「・・・すみません」

ないっす。だって、『月』の属性自体が謎だらけなもので、自身でもどんな魔法を組めばいいのかまったくわからない。それに、ボクも一応はいろいろな実験をしている。でも、何かが違う。そういう気がしていつも魔法を作ってはポイしている。

「・・・まあ、しょうがないと言えばしょうがないからのう」

「ソラ!どこを狙えばいい!？」

リカが大鎌から衝撃波を飛ばしつつボクに聞いて来る。

そこには、四肢をもがれたような姿へと変貌してしまった悪霊がいた。

「・・・左胸、心臓のところ以外なら大丈夫」

「わかった！」

そういうと、リカはどんどん相手の黒い呪力を削っていく。相手は緩慢な動きでこちらに攻撃しようとしてくるが、既に何もできない状態だ。

「ルーミアさん！どうやれば悪霊は元に戻るの！？」

「汝、前に魔獣の腕から呪力を引き剥がしたことがあったであろう？それと同じ事をすればよい」

「でも、アレをやると・・・」

「わかっておる。しかし、わらわが手を出せばあの幽霊の魂を吹き飛ばす危険性がある。汝がやるしかない」

「・・・」

「ソラ！もうすぐアタシが削りきれるところがなくなる！」

もう、時間的な猶予はない。

それに、ルーミアさんとボクの解析結果から、たぶんまた再生する危険性もある。これで再生すると、媒体になつてる幽霊が本格的にヤバイかもしれない。



「リカ、今から呪力を『呪玉』にする。その間、ボクを守って」  
「わかった！」

そういうと、リカは悪霊に接近し、自分に注意を向ける。  
そして、ルーミアさんはボクの近くでいつでも防御魔法を展開できるようにする。

なら、後はボクが全力でやるべき事をするだけだ。

ボクは、掌を相手に向け、意識を集中させる。マナを視覚し、ボクの意味を乗せ、幽霊の魂を傷つけないように分離する。  
すると、悪霊は先ほどとは比べ物にならない断末魔の悲鳴を上げる。

その悲鳴は、周りのものに恐怖を与え、体の動き、思考を停止させる。

それに、思わずボクの思考も停止し、体が、そして頭が恐怖で支配される。

「しゃんとせい！一番辛いのは、暴れたくもないのに暴れておる、あの幽霊の魂ぢゃ！」

「ッ……はい！」

ボクは、必死に視る、そして探す。  
見つけるのは、ホントに小さな光。  
悲鳴を上げるかのようにゆらゆらと揺れる、それを……。

「……『視つけた』！」

マナを操作、呪力の加工……ッ！」

前にやったように、呪力だけを取り出す。

ただ、今回は深く結びついているのか、中々うまくいかない。ただ、ここで諦めると大変なことになって、幽霊も下手したら消滅する。

それだけは、ダメだ。  
意識を集中する。

「……………そう、あの時のように。  
ティーナのマナの塊をぶつけられそうになったときよりも、こっちの方がだいぶ楽だ。だから、絶対にできる！  
すると、呪力がぐにやりと歪んだ。かと思うと前とは比較にならない量の呪力がボクの掌に収束する。

「……………ツ！？ダメだ、これ以上は暴走する……………！！！」

「小分けにしろ！汝が前にやったときと同じ量ならば大丈夫であると思うぞ！」

「はい！」

そして、ルーミアさんのアドバイスに従い、呪力を少しずつ加工すると、球状に加工された呪力から地面にぼとりと落ちていく。十個に満たない程度の量を造ると、呪力が消えた。

「……………でき、た？」

「うむ。おそらくはのう」

「……………疲れた」

そう言いつつ、ボクは足元に転がった『呪玉』を回収する。  
……………どうしよう、今回はたくさんできてしまった。

そして、それは唐突に起こった。  
柔らかな風が巻き起こる。

それは、ボク等をなでるようにして通り過ぎると……。

『ありがとう』

そんな言葉が聞こえた気がした。

「ルーミアさん、さっきのって……？」

「うむ、おそらくは取り込まれておった幽霊の魂であろうな。呪  
力から介抱され、この世から旅たつことができたのであろう」

「……うん、よかった」

幽霊がキライなり力でさえ、この瞬間だけは穏やかな表情を浮か  
べていた。

「……本当に、呆れます。まさか、貴方が三魔源素持スリーシンボルちだとは」

「ホンマや。ワイが本気でやってもあかんかったやろうな」

声のほうを向くと、そこにはみんなが。  
どうも、無事だったみたいだ。

「何？ボクの属性、話しちゃったの？」

「いや、確かに教えたがな……。こいつら、元から知ってやが  
った」

「そうなんですか？」

「おう」

「はい。偶然、立ち寄った村に『星の精霊殿』と呼ばれるものがありました」

「ふむ……。おそらく、ステラのところか。……。あの青二才はどうしておるのか」

ルーミアさんはやれやれと肩をすくめながら言う。

「……。貴女は、『月』の神霊と聞きましたが、間違いないのですか？」

「うむ。わらわが『月』の神霊であるぞ」

「……。ふざけるとる」

「そうですね。ですがコレも何かの縁です。ぜひ、私に世界を手に入れることができる魔法を……!」

「何を魔王的思考を発動させとんねん!？」

「デモニズム何を魔王的思考を発動させとんねん!？」  
「ネクロマンサーまたも死霊術師のコンビはギャーギャー言いはじめる。  
ボクはその間、きよろきよろする。」

それを見てリュウが不審に思ったのか、ボクに聞いてくる。

「おい、お前挙動不審だぞ？」

「……いや、だって、レオがいない」

「……おお？そういえばそうだね」

「散歩？」

ボクとスズ、そしてリカも周りを見るけど、そこには白い獅子どころか猫の姿もない。

「ルーミアさん」

「そうかのう。そうすれば世界を手ちゅ……何かよつか？」

「……物騒な話はスルーしておきます。レオ、ボクがよく連れている白い猫、あるいはライオンはどこか知りませんか？」

「……おお、そういえば忘れておった。ちよつと、待て」

そういつと、ルーミアさんは『ひい、ふう、みい』と言いながらボク等を指差しながら数えだす。

……何故だろう、ものすごく嫌な予感がする。

そして、数え終わると、満足して一つ頷く。そして、何故かものすごくいい笑顔で一言。

「うむ。学園のほうは無視をしておくとして、この稲葉市に不審者がおるぞー」

「ものすごくいい笑顔で言うことじゃないじゃない！？」

「オイ！？」

すると、タイミングよくリュウのケータイから軽快な着信音が響く。

リュウはそれに素早く出る。

たぶん相手は龍造さんだったんだらう、一言二言話すとケータイを切り、ボク等に言う。

「ルーミアの言うとおりだ。侵入者だ数はどういいうわけか、目視による搜索にしかみつけられなかったみたいだ」

「おう、それは簡単じゃ。『エンシエント・スベル古代魔法言語』を使っておるらしいのう」

「はい！『えびせん・すべる』って何ですか？おいしいの？」

「き、きつと、そうですよ。だって、『えびせん』ですよ？」

ボク等はボケまくる二人の少女をスルーして話す。

「ルーミアさん、それって？」

「誰でも知っておる。むろん、汝等ものう」

「ジャミング魔法妨害等に使われる特殊な文字です」

ハル君がずばり、確信を言ってくれる。

なるほど。要するに、その応用で『ステルス索敵妨害』的なコトをしてるんだらう。

「ひょっとすると、汝の使い魔はそれに逸早く気づいたのかも知

れんのう」

すると、またもまるでタイミングを見計らっていたのように白く、大きな巨体がこっちに吹き飛ばされてくる。

そこには、その真っ白な体躯を怪我で赤く汚しているレオがいた。

「レオ！」

レオはボクの声を見せず、ある方向に咆哮を放つ。その先には人影。

たぶん、ココに来た侵入者。

「レオ！下がれ！シュウ！」

「わかりました！！」

ボクはシュウにレオのことを頼むと、レオの前に出る。そして、鳥系の魔法を放って相手を牽制。

けど、不思議なことに、相手に魔法が当たったと思った瞬間、魔法が何故か霧散してしまった。

「ふむ。ジャミング魔法妨害かのう」

マジですか。

たぶん、服か何かに『スペル文字』が描かれていたりするんだろう。それで、相手はステルス索敵妨害やジャミング魔法妨害を……。

「……おやあ？……誰かと思えば、ネクロマンサー死霊術師君ではないですか」

「……お前かい。そんな、男のストーカーとか、ホンマありえへん」

「……カレンさん、知り合いですか？」

「……知り合いたくありませんでしたけどね」

ボクがカレンさんに聞くと、カレンさんは苦虫を噛み潰したような表情になる。

そこで、相手をよく見てみる。

相手は年上の三十代男性。来ている服は白を貴重としていて、神秘的な文字が刺繍されている。たぶん、あれが古代魔法言語だ。

そして、一番特徴的なのが、相手の持っている杖。たぶん、十字架だ。

それは、まるで………。

「『エクソシスト被魔術師』です。霊を否定し、成仏をすることを生業とする。

……」



18話・PURIFICATION（後書き）

作 「とうとうわけで『浄化』をお送りしました！」

樹 「・・・どういうことでしょうか、これは？」

作 「この、作者夜猫のひねくれタイムの始まりだ！」

樹 「・・・ああ、いつものですね」

作 「イエス！今回、死霊術師<sup>〃</sup>いいやつ。祓魔術師<sup>〃</sup>悪。的な感じでゴー！」

樹 「・・・確かに、王道から踏み外すどころか、加えて逆走して  
る感じですね」

作 「それが俺、クオリティ！」

樹 「・・・まあ、いつものことですし・・・予告、します？」

作 「もち！とうとうわけで登場、<sup>エクシスト</sup>『祓魔術師』！第二ラウンドの開始だ！」

樹 「むしろ、まだ続くことに驚きです。いい加減終われと読者の  
方も思っていますよ？」

作 「だが、やめない。止まらない、むしろ止まれない！」

樹 「・・・」

作 「まあ、そんなわけで次回もよろしく！」

## 19話・EXORCIST

side空志

『エクソシスト被魔術師』、それは簡単に言うとお悪魔祓い。

教会で悪魔に取り付かれ、狂気に陥った人を助ける職業。

どうも、この世界では悪霊を祓う人らしい。

ただ、ココでの悪霊を祓うって言うのは『魂の浄化』。つまりはもう一度殺すこと。

つまり、カバネ達とは相容れない真逆の存在。

「何で、お前がこんなへんぴなトコにおんねん」

「簡単ですよ。我々の目的は『救済』救われぬ魂に救いを与えること」

「・・・ほう。要するに、お前等はもっかい幽霊を殺します言うとるわけやな？」

「殺す？何を言ってるのですか？我々は救いを与えるのです・・・貴方こそ、死者をこの世に縛り付ける。それを神が許すとても？」

「そんな神、ワイがボツコボコにしたるわ」

どこまで行っても平行線な会話。

片方は、完全な死を与えることによって救いを与え、片方は魂を縛りつけ時間を与えることで救いを与える。

どちらも正しいのかもしれない。

どちらも間違っているのかもしれない。

だって、死者は安らぎを求めているのかもしれない。逆に、死ん

でも死に切れないから魂を一時的に縛って欲しいのかもしれない。

「……やはり、貴方とは相容れないようです」

「ハッ！ワイはいつも言うところやる。お前は死を肯定し、ワイは死を否定する。どっちも間違つとる。でも、どっちも正しいかもしれない」

「つぶ。何を言うかと思えば……。死者を冒瀆する貴方が正しい？……否、断じて否！」

「そういうと、杖をぶんと振るう。」

「……おそらく、貴方は迷える魂を一つしか救済できていないようですね」

その言葉の意味する所。

魂の救済。

たぶん、ココに悪霊がいることを知つての発言。

いや、呪法陣事態は前から発動していた。だから、そんな不自然なところはない。

「……それが、どうした？ワイは、自分と、競争しとるわけ、違ちがうで？」

カバネさんは両手を爪が食い込むぐらいぎゅっと握り締めて言う。そして、カレンさんはその横につく。ただ、心なしかいつもより無表情になっている気がする。

「せっかく、迷える魂をココに集結させる魔法陣を張ったと言うのに」

その言葉に、全員が息を呑む。

「魔法陣を張ったやと？」

「ええ、ですから悪霊がいますでしょう？」

そういうと、ところどころから何かの絶叫が響く。  
たぶん、呪力に汚染された幽霊の……。

「お前か……？」

「ですから、我々が張ったと言っているでしょう。特殊な魔法石  
を使いました」

そういうと、その男は懐から黒い玉を取り出す。

「『呪玉』!？」

「ジユギヨク？違いますよ、コレは『浄化石』と言っそうです」

「んなもん、どうでもええわ！お前が、お前が、ここに呪力を振  
りまいた張本人か!!」

「ご主人様、落ち着いてください」

「落ち着いてられるか！あのアホ神官がこの事態を引き起こした  
んやで!？」『エデン』は、いつからこんな下衆げすいことしよる集団に  
なったんや!!」

そういつと、ずんずん相手に向かって歩きだすカバネ。  
怒りのあまり、周りを見ることができていない。

「何を言っているのか。『エデン』は常に気高く、優雅であり、  
誇りを持ち・・・最強であるのです。世界を完全に・・・そこに、  
悪である魔物はいりません。むろん、リビングデッド生ける屍も!」

「またも杖をぶんと風をうならせながら振るう。  
すると、杖の先から光が放たれる。」

その光の先には・・・。

「ッ!?!」

「カレン!」

「おそらく、魔法を仕込んでいたのだろう。」

「完全な不意打ち。例え、リビングデッド生ける屍だろうとかわすことは不可能な

距離。

「その光は、幽霊を浄化するための光。たぶん、リビングデッド生ける屍も例外じ  
やない。」

「普通なら、のう」

「ルーミアさん、何か言いました?」

「何も?」

「な、何故だ、何を、したッ!」

自分の魔法に絶対の自信を持っていたのか、取り乱す神官。

「うるさい。簡単だよ、そっちが『浄化石』とか言ってるコレ」  
そういうと、ボクは『呪玉』を見せびらかす。  
最初に数えたときは八つ。  
でも、今ココには七つしかない。

「これ、純粋な『呪力』の塊なんだよね。そして、そっちが使う魔法はおそらく、『浄化』に特化した魔法。だから、そっちの魔法を利用してもらったよ」

簡単に言うところだ。

呪玉をタイミングよく投げる。

魔法と接触。呪玉浄化。呪玉消滅。魔法の要領はそれで精一杯。  
完璧。

つまり、カレンさんに着弾する前にボクの目で魔法を解析。そしてカレンさんの代わりに呪玉を浄化させてもらった。

「バカな、それはあのお方が・・・！」

「『あのお方』？誰？」

「我らを手助けするために・・・！」

ダメだ。聞いていない。

「・・・あのさ、できればそれもつとやってくれない？コイツの処分に手間取らないし」

ボクの十八番<sup>オハコ</sup>、挑発。

ついでに小憎たらしい生意気な笑みも忘れない。

「……ソラ、笑顔が黒いよ？」

「……いや、いつもと変わらない」

『確かに、普段から腹黒いからな』

「よし、そのモブキャラコンビは後で潰す」

「貴様、我らの神聖なる魔法を……！」

「ソレが神聖か、笑わせるのう。わらわ達のほうがよほど神聖よ」

「確かにそうね」

その言葉にみんながうんうんと頷く。

……いや、スリーシンボル三魔源素つてそこまでなの？

すると、向こうは堪忍袋の緒が切れたのか、魔法を放つ。

「万能なる神に請う！」

汝に仇なす憐れな者に救済を！

セイクリッド・ライト  
神聖なる光！

敵の周囲に光が収束。そして、それはいくつもの球体を生成する。それを見て、敵はこちらに杖の先端を向ける。

「神の裁きを……！」

すると、こちらに向かって光球が向かってくる。

それをボク等とはつさに防御。

「『浄化』、ね。オレの『闇』の侵食とどっちが強えか、勝負すつか!？」

そういつと、リュウはボク等の周囲に闇の壁を展開する。すると、闇はむさぼるようにして光球を浸食し、喰らい尽くす。

「ダーク・イロージョン  
闇の侵食」

そして、闇の壁が消えると、そこには今にも拳を振り下ろそうとするカバネさんの姿が。それに驚きつつも、何故か不適な笑みを浮かべる相手の神官。

「カバネさん!ダメだ、そいつ、何か隠してる!」

「もう、遅い!」

そして、それは姿を現す。

神官が杖をすつと指で触る。すると、それに反応して発行する。次の瞬間には、杖の十字架の部分がぱかりと割れ、中から鋭い刃が現れる。

「ツ!？」

「邪教徒に・・・安らかな死を」

静かにそういつと、杖から一転して槍となった得物を素早く前に突き出す。

カバネはかわそうにも、既に重心が前に行き、後は防御を一切無



視した拳を突き出すほかに無い。

相手の凶刃は的確にカバネの急所、つまりは心臓の辺りを狙っている。

確実に当たる！

みんながそう思ったとき、カバネさんの体から赤く濡れた槍が出てくる。

「がはぁ・・・！？」

「・・・外しましたか」

相手は外したことに何の疑問もないようにいった。

・・・でも、どうやってあの距離で？

「ふん！カリンちゃんを忘れてもらっちゃダメだよ！ お

前、しゃべんな。これも、十分に致命的、や。ワイを、向こうまで

運べ！ おうさ！」

カバネさんはカリンさんと軽く話し、跳躍。

ボク等のところまで来ると、膝をつく。

そして、咳き込む。すると、その口から血が出てくる。

「肺をやられたですう！？ シュウ！ 何とかならないですう！？」

「これは・・・私では無理です。颯太さんに来てもらわない限りには・・・」

「スズ！ お前、オレを治したアレはできねえのか！？」

「え？ わかんないよ・・・」

「ソラ！前にした魔法は！？」

「やってはみる。けど、アレは軽症しか治せないんだ・・・春<sup>ハ</sup>  
伊吹<sup>レイブキ</sup>！」

魔法を発動する。

でも、コレはあまり効果が無いみたいだ。

シャンちゃんの気功術の方が痛みをかなり緩和しているらしく、  
若干表情が楽になったように見える。

「・・・許しません」

静かな声。

だけど、不思議とみんなの耳にその声が届いた。

声の方を向くと、そこには長ネギを相手の神官に向けたメイド、  
カレンさんがいた。

「生ける屍<sup>リビングデッド</sup>如きが、我々の神聖なる魔法に楯突くと言つのか？」

「カレン、あかん・・・！お前の、魂が、浄化される・・・！」

「ご主人様がこのパーフェクトメイドに意見するなど、身の程を  
わきまえてください」

いや、全然あつてるし。

むしろ、何でパーフェクトメイドがご主人の言つことを聞けない。

そう、ボク等は心の中で突っ込んだ。

すると、カレンさんの口が動く、そしてものすごく小さな声で・・・。

「……………ね」

「おい、自分、今なんて……………」

カバネさんが問いたださそうとしたとき、カレンさんは生ける屍リビングデッドの力で人間の限界を超えたスピードで相手に近づく。

相手はそれを呼んでいたのか、自分の周囲に光の障壁を生み出すことによって防御。

カレンさんは長ネギを障壁に叩きつけるが、障壁はびくともしない。

「やはり、無理かのう」

「どういうことですか？」

「『被魔術』は浄化、そして防御に秀でておる魔法系統。そして、ヤツは魔法妨害加工ジャミングを施した僧服、極めつけはあの絶対防御性。魔法、物理共に死角はない」

「でも、相手が防御してたら攻撃できないし……………」

「それがのう……………」

「基本的に、『被魔術師』エクソシストは周囲への被害が出ないように結界や防御魔法を展開しながらの援護ができるって僕は聞いてます！」

苦い顔をするルーミアさんの代わりにハル君が教えてくれる。

要するに、相手はサポートに特化しているんだらう。そして、ど  
ういう原理か不明だけど、向こうは魔法妨害ジャミングの影響を受けずに魔法

を行使している。

でも、完全に向こうは武装神官。たぶん普通に戦闘とかも人並み以上にできるんじゃないだろう。

それに……。

「『エデン』……か。リュウ、一応聞くけど、強い？」

「ああ。ジジイの頃からあの国が『最強』を誇っていたのには驚いたが……。おそらく、ヤツは魔物と戦うことに特化してると言ってもいいだろう」

「と言うか、魔物に勝てたらどんなヤツも勝てないと俺は思うんだけど？」

『まあ、タロウの言う事にも一理ある。絶対とは言えねえけどな』

「……ッ！」

舌打ちをしながらカレンさんがボク等のところにバックステップで戻ってくる。

「……私の攻撃がまったく通りませんね」

まず、問題点が三つ。

一つは魔法妨害<sup>ジャミング</sup>。コレをどうにかしない限り相手に魔法は通用しない。

二つ、防御しながらの攻撃を可能とする魔法。

三つ、普通に強いこと。しかも、魔物との実戦経験もそれなりにありそう。

「最後はどうでもなる。問題が一つ目と二つ目」

「わらわも同意見かのう。『逆』で全て解除できるのならば問題はないからのう」

「すみません、どういことですか？」

シヤオ君がボクとルーミアさんに尋ねてくる。

・・・スズの属性はややこしいからね。

「まず、スズの魔法じゃ相手の防御魔法、攻撃魔法を無効化できても魔法妨害ジャミングを無効化できない」

つまり、どうやってみても相手に全部ガードされ、こっちの攻撃が通らない可能性の方がはるかに高い。

どうしたものか・・・。

『何だ？その神霊のヤツ、知らねえのか？・・・ああ、解析が魔法妨害ジャミングではじかれんだな』

意外なところから声が。

というか、ミストだった。

「ミスト、何か知ってんのか？正直、俺は話しについていけねえんだけど？」

『おう。お前にいつか話そうと思ってたんだけどな、別にココでもいいか』

「なんじゃ、汝はわらわが知りえぬことを知っておると？」

『俺様はお前と同じくらいの時を過ごしているからな』

そうだ。

確かにコイツは姿かたちこそ小学生低学年ぐらいの子供っぽい容姿だけど、実際には魔導宝具、幻影武器『ミスト』の人工知能（AI）みたいなものだ。見た目と違い、その知識は多岐にわたっている。

『まず、俺の前の契約者に魔力無効化体質持ちがいた』

「……そういやお前、そんなこと言ってたな」

田中がそうつぶやく。それにミストはうなずくと話を続ける。

『ああ。でだ、そいつは俺様をうまく使えるようにいろいろな実験をした。その中に古代魔法文字エンシェント・スベルもあつたんだよ。まあ、何で調べたかは長くなるからな。省く』

確かに、少し気になる内容ではあるけど、今の状況が状況だ。必要最低限の情報だけあれば大丈夫だろう。

『ココからお前等の知りたい情報だ。簡単に言えば、アレには限界がある』

「限界？それはどういうものかのう？」

『簡単だ。魔力無効化体質キャンセラーがある一定以上の魔法を軽減できねえのと一緒。処理がおっつかなくなるんだよ、それも付与したい対象を小さく、そしてその内容を細かくすればするほどにな』

「要するに、あの服程度に魔法妨害<sup>シヤミンゲ</sup>、そしておそらくは索敵妨害<sup>ステルス</sup>も組み込んでいるかもしれない」

「そして、自分の魔法は使えるようにする内容」

『かなり強力な魔法なら突破できる可能性がかなり高い。つつても、上級中位魔法以上だけだな』

上級中位魔法、コレが使えればどこぞの軍に入って、かつ上級の職に就けるって言う噂（By智也さん）のレベル。

そして、相手にとって不運なことにボク等のほとんどはそれが使える。

ていうか、使えないのがシュウとかのガチ前衛系の方々だけだ。

「なるほど、わかりました。では、あの真つ白下衆野郎はこの私の最強魔法を持って消し炭にした後、感電死させます」

「オイ、順番がおかしくねえか？」

「それはいい。それなら、簡単だカレンさん、一番強い魔法の準備をお願いします」

「既にやっています」

カレンさんのほうを見ると、そこにはなにやら複雑そうな魔法陣を組み立てているカレンさん。  
よし、それなら安心だ。

「スズ、<sup>アンチ・エリア</sup>相殺結界の準備。合図と同時に」

「わかったよ〜！」

「リュウ、ボク、田中・・・じゃなくてミストは相手に突撃。リカはスズを守って。残りは牽制！」

そういうと、ボクは フウカシャリン 風火車輪 を展開。  
相手に接近戦を挑む。

「わかった！」

「ちょ！？何で俺じゃ ハッ！そうこなくっちゃなあ！」

そういうと、ボク等は相手に攻撃を仕掛ける。

「我々の神聖なる魔法の前に、死角などなし、まして、下賤なものに破られるものでもない！！！」

「なら、すぐにその魔法を破ってあげるよ！リュウ、ミスト！時間稼いで！」

そういうと、リュウと田中ミストの体が先行。

「それが、ドンだけ鉄壁か教えてもらうぞ！」

「キャンセラ魔力無効化体質の力も試してみねえとな！」

二人はやたらと息のあった動きで相手に攻撃を仕掛ける。

でも、向こうの神官はあらかじめ展開していた結界魔法に少しだけ魔力を込める。ただ、それだけで二人の攻撃を無効化した。



「ツチ！魔力無効化体質でもダメか！・・・タロウに教えとくん  
だつたな・・・」

「まだだ！魔法剣 刹那！」

リュウが剣を居合い切りでもするみたいに振るう。  
すると、黒い斬撃が相手に向かって飛んでいく。

確か、アレは魔法剣 斬黒 の上位魔法だった気がする。  
数を打てない代わりに、威力のみに重点をおいた魔法。  
でも、それでも相手の障壁には傷一つつかない。

「・・・それで終わりかね？」

「残念なことに、ボクを忘れてる！」

そういうと、さっきから構成していた魔法を解き放つ。  
生成するのは刀。

「これでも、喰らえ！」

煉さんに教えてもらった武器の扱い方のなんやかんやを全て無視  
して、ただ、単純に思い切り振り下ろす。

相手は、たかが刀如きで何を・・・。見たいな感じで小ばかにし  
た表情を浮かべる。

一瞬の拮抗。

でも、ボクの刀が徐々に結界を切り裂こうとする。  
それを見て慌てて魔力を込めだす。

すると、ボクの刀も徐々に切り込めなくなっていく。  
そして、完全に止まった。

更に、切り裂いた部分も修復されてしまう。

「ふ、ふむ。少し、焦ったではないか。これで、万策尽きたか？」

「いや、コレで王手詰みだ、スズ！」  
チエックメイト

「おっけーだよー！」

その言葉でボクは刀を捨て、  
フッカシャリン 風火車輪 の推進力でバックステ  
ップ。そこをスズの アンチ・シエル 相殺殻 が相手の周りを囲む。

「  
アンチ・エリア 相殺結果 ！」

どんな魔法も無効化する結界が張られ、相手の障壁がさっきまで  
会ったのが嘘のように霧散する。

「なっ！？！どういうことだ！？」

相手は魔法を展開しようとするけど、何も起きないことにパニッ  
クを起こしている。

そして、ボクはスズに魔法を解除させる。

ボク等の考えが読めず、混乱の極みに陥る相手。

「ココまでお膳立てしていただき、ありがとうございます」

声は、相手の背後から。

そこを見ると、若干信じがたいモノが見えた。長ネギに魔法を展  
開したメイド。

その魔法、雷で構成された五メートル程の、ふざけてるとしか言  
いようが無い大きさの大槌を肩に担ぐようにして持っていた。

それは、まるで……。

「ミヨルニル豪雷神ノ飛来槌……コレがこの魔法の名前です。私が冥土のお土産に教えてあげましょう。……冥土メイトだけに！」

「カレン、自分、駄洒落それが言いたかっただけやる……」

ぼろぼろの死霊術師ネクロマンサーのつぶやきは、放たれた魔法が発生させた轟音によって誰も聞き取ることができなかった。

19話・EXORCIST（後書き）

作 「とうとうわけで『被魔術師』をお送りしました！」

隆 「おい。最後のはなんだ？」

作 「・・・何か問題でも？・・・少なくとも法律に引っかかるようないことは何も」

隆 「オイ！少なくとも法に引っかかるのかよ！？」

作 「・・・大丈夫だ、問題ない」

隆 「オレが言ってるのは、最後の冥土のくだりだ！」

作 「それがやりたくてこの話を書いたと言っても過言ではない！」

隆 「過言であって欲しかった！！」

作 「つー訳で次回！」

隆 「あ、コラ！まだ話は・・・」

作 「まだまだ続くよ、事件はようやくクライマックスに突入だ！  
とうとうわけでよろしく！」

## 20話・MOON MANA

side空志

「……コレ、どうすんの？」

ボクは周りの惨状を見てとりあえずカレンさんに聞いてみる。幸いにも建物に被害はいつていないけど、周りの道路とかだけを見ると、ココを荒野と勘違いしそうな感じだ。

さっきの魔法がどれだけ強力だったのがよくわかる。

まあ、広場みたいなどころだからだいぶマシだとは思っけど。

「ええ、いい汗をかきました」

いや、全然聞いてませんから。  
てか、ちゃんと話してください。

「……すみません、そんないやらしい目で見ないてください」

「オイなんでオレに向かって……ハッ!？」

「リュウ、君?」

何故か、やたらと笑顔を浮かべるスズ。

……何故だろう、ものすごくデジャヴを感じる。

「いくら、私の汗をかいたメイド服姿が扇情的だったとはいえ……」

「オイ、お前、その口を閉じろ」

「・・・SMプレイですか？」

「違えよ!？」

「放置プレイですか。・・・それでどれだけの女性を虜にしてきたのですか？」

「リュウ君！」

「スズ!？何でお前がんなに怒るんだよ!？ちょ!？痛い!？マジで!？杖で殴んな!！つか、わかった!何となくわかった!すまん!」

リュウはカレンさんの策略によってスズから暴行を受けてた。  
・・・でも、バカバカと駄々をこねる子供にしか見えないのが現状。むしろほほえましさを・・・。

「ソラ?」

「・・・あの、何故にボクに鎌を？」

何故かふいと顔を背けて不機嫌だとボクに訴えるリカ。

・・・何で?

「・・・やはり、こちらの方が大変そうですね」

「・・・アンタ、何がしたいの？」

「わらわもこっちの方が大変かと思つのつ」

・・・あの、とりあえず目の前の敵はやつつけれたけど、まだ事態は收拾していないよ？

そのところ、わかってる？

「・・・ては・・・なら、な・・・きょうの・・・とに・・・」

小さな、怨嗟のようなつぶやきが聞こえる。

そこには、さっき倒した神官が。

「なるほどのう。予想より魔法妨害で軽減されておるか」

なるほど。だから、さっきの魔法を受けてなお意識をギリギリで保っていられるわけだ。

ちなみにアレをまともに喰らって大丈夫な人は、まず、いないだろう。

「神聖なる、我わ、れのま、ほうが、邪教、の使徒に・・・負ける、ことが、あつてはならない！」

「貴方の負けです。おとなしく、私に金目のものをよこしなさい」

長ネギを突きつけ、強盗のようなことを言い出す不良メイド。

・・・ホントに、この人は大丈夫なんだろうか？

というか、長ネギで本当にいろいろと滅殺している。

「金目のものなど、やるか！」

「いや、真面目に返さなくてもいいですから」

「神よ、この者達に、裁きを……！」

そういうと、懐からさっきの黒い石、呪玉を取り出す。

そして、それを握ると同時に、何かしらの魔法陣を展開。

「っ！何をするつもりですか!？」

時、既に遅し。

パリンというガラスコップが割れるような音が響く。

そして、静寂があたりを包み込む。

「せ、精霊さん達が……！」

「むう……。これは……」

最初に反応したのは四条さんとルーミアさん。

そして、変化は唐突に現れた。

向こうの神官を中心に不快なとしか表現しようのない風が巻き起こる。

それを感じ取ったのか、さっきまで強盗の物まねをしていたカレンさんもすぐにその場を離れ、ボク等のところにまで戻ってくる。

「何が、起こっているのですか？」

「うむ……。見ておった方が早いかなのう。……そういえば、ソ

ラよ、その呪玉はさっさと捨てた方がよいと思っぞ?」

「え?何でっうわあ!？」



いきなり、呪玉がもぞもぞと動き出したかと思うと、それはまるで生きてるかのように神官に向かって飛んでいく。そして、その上空でくるくると回りながら一つにまとまる。

「……おお、あのアホ神官も危ないのう」

「それはオレがする」

そういうと、リュウは 影抜け（シャドウ・パス）を展開。相手を影で包むと、そのままどこかに送る。

「ジジイのところへ送った。まあ、コレでいろいろな意味で大丈夫だ」

「……シュウ、いろいろとやばそうだけど無理？」

「無理です！カバネさんの傷が酷すぎます！」

どうやら、シュウはカバネさんの治療に移った模様。

「動かせる？」

「ダメです。もちろん、転移も」

「この怪我で転移は無謀です。怪我をした人を転移すると、怪我した人はものすごく消耗するです」

「それが元で亡くなる方もごく稀にいます」

「うむ。転移の魔法はその構成上、使用者だけでなく利用するも

の……」

「どうやら、絶対にダメらしい。」

ルーミアさんの解説は難しいのでカット。

「……でも、それだとかなりませうなんだけど?」

「奇遇ですね。私も同意見です。と言うか、ご主人様が足手まといです」

「……ホントに、このメイドさんはおかしい。」

そう思いながらもボクは詠唱を開始。

「オイ、何でそれをやりだすんだ?」

ボクはリュウの言葉を無視し、一振りの刀を生成。

「……簡単だよ。呪力が、アレに集中してる」

「マジかよ」

ボク等の視線の先、そこにはさつきから黒い魔力が集中している。たぶん、ボクとルーミアさん、そして精霊魔法を使える四条さんに、呪力に敏感なカレンさんぐらいしかわからないだろう。

「最悪と言うか、ある意味運がいいと言うか……」

「何で?これって運が悪いんじゃないの?」

「いいえ、確かにソラのいう通りかもしれないわね」

「僕も。要するに、ココには稲葉市の呪力が集中してるんですよ？」

「……ソラが、ルーミア、奏がそれを浄化すればいいって言うこと？」

「そうそう」

「……ねえねえ、みんな何のお話してるの？」

「す、すみません。わ、わたしにもちよつと……」

「……なあ、俺でも何となくわかるのにコレはいいのか？」

『タロウ、細かいことは気にすんな』

ミストの言うとおりだ。

この二人のボケは一から相手にしてたらキリが無い。

ボケはいつものように刀を生成。

たぶん、アレに有効な攻撃はコレか、スズの魔法ぐらいだと思う。

「……来るぞ」

ルーミアさんがそう言うと、呪力の塊は粘土の塊のようにぐにやりと歪み、ある形を作り出す。いや、ある意味では作り出していない。

そこに現れたのは、全長が十メートルと、相手にするのがバカらしくなるほどの大きさで、様々な動物の顔や四肢、体がつぎはぎにくっつけられたかのような生物。

「合成獣？」  
キメラ

「……そうとしか言い様がねえな」

「また、禁断魔法？<sup>タブー</sup>ドンだけ世界には法律守らないバカがいるのかしら」

「いいえ、おそらく、アレは偶然でしょう。合成獣<sup>キメラ</sup>は効率よく魔獣を生成し、軍事転用するために考え出されたものです」

「つまり、アレは効率が悪すぎるって言うことですか？」

「はい」

確かに目の前の合成獣<sup>キメラ</sup>は、まるで幼ない子供が粘土遊びをしていて、そこで何となく、くつつけたようなちぐはぐの体。そして、相手は動きにくそうにしている。

よくみてみると足が七本ぐらいある。

……あれは、歩きにくそうだ。それに、胴体は団子みたいで、そこにいろいろな動物っぽい顔が張り付いていたりする。あんなところにも、顔なんて必要ない。

「……なら、ひょっとすると、今はかなりチャンスなんじゃ？」

「何で？？あんな大っきいのに踏み潰されちゃったら大変だよ？」

「……そういうことか。ソラ、まさか、ココに呪力が全部来たのか？」

「そう。魔法陣に突っ込まれた呪力も、増加した呪力も。だから、アレを浄化すればそれで終わり。……………なんだけど……………」

「どうしたの？何か問題でもあるの？」

「おそらく、わらわ達の目が間違っていなければ、悪霊も取り込まれてしまっておる」

「なら、またさつきみたいな精密作業か……………」

でも正直なところ、できれば呪玉は作りたくない。どうもアレにはよくない使い方があらししい……………でも、それ以外の方法となると、カバネさんが何とかするかぐらいしかない。でも、あの人はかなりの重症だ。無理をさせるのはまずい。

「となると、ボク、四条さん、ルーミアさんが頼みの綱か……………カレンさん？」

「何でしょう？」

「あれってさ、悪霊の一種っぽいものになってるみたいなんだよね。対抗策とか思いつかない？」

「そうは言われなくても……………私、死ネクロマンシー霊術はあまり使えません。ご主人様と違って適正はあまりないようです」

要するに、さつきボク等が悪霊を浄化できたのは偶然で、かなり運がよかつたっぽい。

悪霊は拘束して未練を絶つのが浄化の近道。

呪力によるもの場合はあんまり詳しく聞いていないけど、たぶんそんなに変わらないだろうと思う。

「……そもそも、呪力のときに悪霊化したときはどうしてるの？」

「……ご主人様が言うには、幽霊にとって呪力はガン細胞のよくなものだそうです」

なるほど、このときの悪霊化は苦しいから暴れているわけだ。

なら、ガン細胞を切除すれば治る可能性があるか？

「ついさっきもそれで幽霊の魂っぱいのお礼を言われた気がする……。」

「よし、それなら……。ルーミアさん！アレは攻撃しても大丈夫かな？」

「うむ、おそらくは。少なくとも、侵食系の魔法構成は見当たらんのう。ちなみに、魂は合成獣の中心で核を形成してある」

「そうと決まれば……。」

「みんな、適当に攻撃して！体を削る感じで！」

「で、相手のど真ん中を貫かなければいいワケね」

「なら、ヤツをぶっ飛ばす！」

「そういうと、みんなが魔法で攻撃を始める。」

すると、合成獣は攻撃の痛みで苦しみだす。

その巨体を揺ると丸まり、体のいたるところから針のようなものを打ち出す。

「何！？アレ！？」

「突っ込む前に防御しろ！」

「あ、アンチ・エリア相殺結界！」

「か、風の精霊さん！」

「ゲツカイ月界！」

各々が魔法を発動し、攻撃から身を守る。

「何、あのハリネズミのモンスターもどき！？」

「……そういえば、呪力が設置されたところの近くにペットシヨップがありました」

「……おい、何が言いたい？」

「そのハリネズミ、かわいいなと」

「おお〜。そうなんだ！」

「わけわかんない！？この、ゾンビ何言ってるの！？」

「……たぶん、呪力に何かしらの影響を受けたんだろうってコトで納得しておこう。」

そして、ふと気付く。ボクや、スズ、四条さんが張った防御魔法に黒いしみができているのを。

とっさに、手の中の刀を振るい、その部分を切り取る。

みんなはボクの行動に驚いているけど、説明してる暇が無い。

「リカ！ルーミアさん！触らないで！」

「これって……！」

「うむー！」

ルーミアさんがマナの小さな弾丸を作り出すと、それでしみを吹き飛ばす。

……とりあえずは何も起きない。

「……そうか、今度は受動パッシブじゃなくて能動アクティブになったんだ」

「おい、さっきのは何だ？」

「なんか、三谷が作った刀にも黒いのがついてるぞ？」

「え？おわあ！？」

田中に言われて気付く。

ボクは刀を放り捨てる。すると、刀は真っ黒に染まり、軽い爆発を起こす。

「あ、危ない……。あれが侵食術式。ああなりたくなかったら気をつけて」



「・・・わかったわ」

ボクはまた詠唱をする。

今のところ、コレぐらいしか有効そうなのが無い。

そして、ボクの手には一振りの刀が・・・。

「嘘、でしょ?」

「おい、何でわざわざ前のヤツにしたんだ?」

まずい。

今、ボクの手の中にあるもの。

それは、初めてこの魔法を使ったときに出てきた、光で構成された剣だった。

「ストックが、切れた・・・!??」

「ソラ? さっきから何言ってるの?」

「ボクの中にある、月の魔力が切れた!??」

「・・・俺、意味がわからないんだけど?」

「やはりのう」

ルーミアさんを除いて、みんなが首をかしげる。

でも、何でルーミアさんがボクの知ってるの?

「てか、わかってたなら教えてくださいよ!?? コレじゃ、威力が格段に落ちますよ!??」

「・・・いや、おそらく、汝の魔力のことは知らん。想像はつくがのう。大方、月の出ておる日に、せつせと自分の中に純粹なマナを溜め込んでおったのであろう」

「そして、それを先ほどの魔法に使っていたと言っわけですね」

何故かやたらと魔法のことになると食い付きのいいメイドさんがルーミアさんとうんうんとうなずいている。

そして、みんなは顔に驚きの表情を貼り付けている。

「そうか、本当なら、お前は月の出ているときにしか全力で使えないんだっけか？」

「で、月がでていない時のためにマナを自分の中に取り込んでいたってワケ？」

「・・・要するに、魔力を貯金してたってことか？」

『たぶん、そうだろうな』

「ソラ君、節約してたんだね〜！」

「さすが、師匠！」

「でも、それなら・・・どうするの？」

「・・・どうしよう。」

すると、ボクの手から光の剣が消える。

アレ？魔法は解除していない・・・。

「なるほど、コレは面白いですね」

声の方向を向くと、そこにはカレンさん。しかも、手にはボクの造った光剣が。

・・・てか、ボクじゃなくても持てたのか。

あ、リ力が持てたか。

「あの、それ返してください」

「・・・ばい」

「ちょ!?! 『ばい』って何!?! 『ばい』って! 自分で言ってますよ  
たよね!?!」

「・・・なんちゃってです」

そういうと、捨てたかに見えた光剣を手品よろしくどこからともなく取り出す。

・・・なんだろう、ものすごく力チンときた。

「おそらく、コレ自体が魔法陣なんですね」

そういうと、突然、魔法も無しに光の剣が雷の剣に成り代わる。  
ボク等はその光景に驚く。

「何で!?!」

「ですから、コレ自体が魔法陣なのです。それゆえに、私が魔力を流せば『雷』の属性が反映されます」

そういつと、その剣を今度はマジで適当に捨てる。

「って、今はボクに武器はコレしかないんですけど!？」

「あんなしょぼいの、あってもなくても一緒です」

「人の魔法をしょぼいとか言っちゃダメだって!？」

これでもかと言う非難をボクはカレンさんにぶつけようとする。  
そこへ、カレンさんが言葉を重ねる。

「もつと強い武器<sup>マホウ</sup>、欲しいと思いませんか？」

たぶん、魂を悪魔に売り渡したら、悪魔はこんな感じの笑みを浮かべるんだろうと思った。

20話・MOON MANA（後書き）

作 「とうとうわけで、『月の魔力』をお送りしました」

奏 「し、師匠にはこんな秘密があつたんですね」

作 「説明を入れるのを忘れてたんで、この際入れちゃえ！ってコトでいれました」

奏 「こ、こういうのって、そ、そんな風に決めていいんですか？」

作 「俺だから許される所業だ（キリッ）」

奏 「す、すごいです！」

作 「とうとうわけで次回！悪魔と取引するのか否か・・・選択するのは、お前だ」

奏 「な、何だか、ものすごく壮大そうな気がします！」

作 「あくまで気がするだけ！次回もよろしく！」

## 21話・CHIMERA

side空志

「どづいう、コトですか？」

「貴方は、それが『真言』だと思っているのですか？」

「ん？ 汝、それが真言とっておったのか？」

「・・・」

ボクは、そのことに答えられない。

いや、うすうすとは感じている。

この魔法は、いろいろとおかしい部分がある。

「やはり、気付いていたんですね」

「そりゃ・・・。一応、他の三魔源素スリーシンボルの人から魔導マジのことは聞いている」

「でしたら、話は早いです」

だって、この魔法は、あまりにも、ボクのためにあるような魔法だったから。

相手の魔力を切り裂き、しかも、その切りたい魔力を選択できる。そんなの、月詠ツクヨミを前提条件にしてないとできない芸当だ。できなくても確かにこれは強い。でも、それだけだ。相手に有効な一打に欠ける。

そしてなにより、この魔法は不必要な要素がある。

本物の武器を生成する事。

具現化は、魔法使いが接近戦もできるようにと考え出した、近接戦専用魔法。別に、ココまで再現する必要はない。魔法で造ったから魔法に干渉できるし、相手にも普通にダメージを与えられる。もし、相手を斬る必要があれば『斬る』と言う概念をつければいい。方法は、風だろうが炎だろうが何でもいい。魔法は、それができるボクが智也さんに薦められて呼んでみた魔法の大全集みたいなものには、具現化はただの魔力の塊だって書いてあった。そして、それに対してボクのは……。

「では、魔法陣を強化しましょう」

魔法陣をベースに作られたもの。

それ自体が魔法陣で、魔法。

ものすごく、特殊な魔法だ。異質って言うてもいいかもしれない。

「それとルーミア様、いいでしょうか？」

「ぶつつけ本番ですか？ 汝、意外にギャンブラーよのう」

「いえ、あんな中途半端なものではアレを倒すことは難しいでしょう」

そういうと、今だ痛みに絶叫を上げる合成獣キメラをさす。確かに、侵食攻撃されたらたまったものじゃない。

「皆さんの安心安全のために三谷様のレベルアップを図りたいと思います」

「……ボクの安心と安全は？」

「では、魔法陣を構築してください。あ、皆さんは敵のこちらに攻撃を向けないようにしてください。それと、田中様はこちらでお願いします」

スルーしやがった、このメイド。

「では、ルーミア様、お願いします」

「うむ」

なんか、よくわからないイベントが発生した。

side 隆介

「何とかしろってもな・・・」

「おつきいよね」

・・・まあ、確かに。

数十メートルの生き物のような物体なんてそうそうみられるものじゃない。

ちなみに、竜ドラゴンの平均的な大きさは小さいのから五メートル、大きいので十五メートル程度。

しかも、面倒な魔法みたいなもんも使ってくる。あいつらは侵食系の魔法だと言ってるが、スズの『逆』リバーズでさえ、その侵食魔法をとどめていることができていなかった。

「オレ達に何をしろってんだよ」



「適当に魔法をぶつければいいんじゃない？射出系のヤツ」

「じゃ、冬香、お前がやれよ」

「へいへい。コードフアラックス 槍衾！」

とりあえず冬香が氷の槍の弾幕攻撃をする。

だが、ヤツも冬香の数法陣を見た瞬間、体に甲羅の様な物を展開して防御をする。

「亀かなんかかよ」

「あれ？あれってカメさんなの〜？」

「と、というか、あれは何なのですか？」

「未知の生物だ」

「おお〜！？あれが、『ゆーま』ってヤツだね〜！」

こいつ等、面倒くさい。

つか、マジでどうする？

コイツ、学習してるみたいだ。ヤツは、オレ達を見つける。すると、その黒い体にあった足を体の中に引っ込め、最終的に残ったのが二つ。

しかし、二本だけではうまく立てない。そしてまた、二本の足を出すと、四足歩行の生物っぽいになる。ただ、その姿は団子に適当な棒をつけたようなものにしか見えない。

「……やべえな、ヤツが学習する前に倒さないと、面倒なこと

になる」

「そうね。とりあえず、氷漬けにするわ。コード 氷地獄コキョウトス！」

冬香がまたも魔法を展開させる。

すると、合成獣キメラを中心にして冷気が漂い、やつ足元から氷漬けにしていく。

だが、そこで信じられないことが発生した。

『、』

わけのわからない叫び声の様な物を発生させる。

すると、まるでそれに応えるかのように炎が発生し、体に纏わりつく。

そして、氷地獄コキョウトスの氷を溶かしてしまった。

「魔法を、使っただと!？」

「そ、ソラみたいなことした!？」

リカの言葉でまさかという考えがオレの中で渦巻く。

・・・いや、やってみる価値はあるか。

「四条、ヤツに範囲魔法をぶつける、出来るだけ強いヤツ。合図で一斉だ」

「は、はひ!？」

そういうと、オレは魔法剣を放つために構える。

オレの横であたふたしつとも魔法を放つ準備をする四条。

オレは頃合を見計らって言う。

「おし、やれ！」

「ほ、炎の瀑布！」

「魔法剣 刹那」

オレの黒い高速の斬撃が奔る。

それに続くように四条の精霊魔法の炎の瀑布が殺到する。

そして、それはまた起こった。

『！』

『！』

何かを叫ぶような声。

そして、まず最初に放たれたのが水の瀑布。それが炎を消し去り、こちらに向かってくる。次に放たれたのが炎の槍。それはオレの魔法剣に直撃すると相殺した。

「ダーク・イロージョン  
闇の侵食」

オレは魔法剣を使いながら詠唱していた魔法を展開する。

漆黒の闇の壁がオレ達の周りに展開され、水の魔法を消し去る。

「……まずいな」

「何で、あの……真つ黒さんはソラ君みたいなのができるの  
く？」

「実際にソラと同じことしてるからよ」

「し、師匠の真似、ですか？」

そこで、リカが思い出す。

「・・・そういえば、さっきのハリネズミの話」

「・・・あ」

呪力発生地点付近にペットショップ。そして、オレ達にハリネズミのモンスターみたいな攻撃。魔法は悪霊が使っていた。それが進化したものだと思えば説明はつく。

そして、呪力の塊である『呪玉』をソラは作って・・・。そして、相手はまるでこっちの魔法がわかっていたかのような対応をとってくる。

「アイツの影響を受けたのか！」

「面倒すぎるわよ、あのバカ！」

マジでオレ達にどうしろってんだよ・・・。

#### side 空志

「まず、魔力とは魔法を行使するために必要なエネルギー。それで、この魔力を使い、詠唱をすることで外部魔力、つまりはマナに干渉し、魔法を形作る。そして、それが『魔法』という現象で外界に変化をもたらす」

「あの、いきなり何の説明ですか？」

「魔法の基本理論ぢゃが？」

「それはわかってます」

いきなり魔法の理論を語りだしたルーミアさんにボクは尋ねる。  
いや、ボクとスズは魔法の制御の勉強を始めてすぐにそれを颯太さんに教えてもらった。

それを今更するには時間が無い気が？

「まあ、本当ならばもつと突っ込んだところを説明したいが、今は時間が無い。端的にいうと、魔力はマナを取り込み、自分の属性魔力に最適化することで回復する。コレが基本的な理論」

「いや、それも知ってますって」

「そこで、コレが落とし穴となっておる」

「落とし穴？」

どういうことだ？

魔力はマナを体に取り込む。それで回復する。

少なくともコレは間違っていないと思うんだけど？

「簡単に言うと、汝の属性ではそれが足りない」

「・・・どういことですか？」

「よく考えてみる、わらわ達の力、『月』の属性は外部魔力、す

なわちマナを扱う。故に、本来、汝の魔力はマナそのもの」

「ああ・・・何となく言ってる事はわかる気がします」

「・・・汝、何を基準に魔法のランクを決めておるのか知っておるか？」

「??」

「それはのう、魔法のマナの含有量ぢや」

「マナの含有量？」

「マナは影響を受けやすい。しかし、一度マナを使い、それを操<sup>コントロール</sup>作<sup>作る</sup>でき、マナに影響を与え続ければ魔法はより強固なものとなる。要するに、魔法の強度の問題かのう」

「・・・どういうこと？」

「なんか、意味がよくわからない・・・」

「汝、具現化<sup>マテリアライズ</sup>は魔力のみでしょうとすればどうなる？」

「さつきみたいな光の剣になって、数回振ると折れる」

「しかし、マナを使えばそんなことはなかるう？むしろ、より強化されておったように思うが？」

なるほど。

詳しい原理はよくわからない。

たぶんそんな簡単にわかるようなものでもないんだろうけど。

言いたいことはわかった。

でも、それだとボクの方が魔法を司っているっばいんだけど？  
『星』はどうなるの？

「ちなみに、マナを集めるのに最も効率が良い方法も使用する魔力をできるだけ拡散させ連鎖させるようにしてマナを収束させることぢや。それに、そうすることで自分の近くにマナがなくてもある程度は勝手に収束される。マナとマナは影響を受けづらいからのう」

「なるほど」

「しかし、わらわ達にはそれができない。わらわ達は直接、周囲のマナを操作し、集めるしかできない」

「・・・要するに、極端にマナが薄いところではボク等は足手まといにしかない、ういうことか。」

「いいか、ココからが重要になる。よく聞け」

そういうと、ルーミアさんは真剣な表情でボクに詰め寄る。

「汝は、下手に魔力を持つておるためか、マナを一旦体に通し、自分に最適化してからそれを全力で使つておる。確かに、マナの含有量もそれなりにではあるが、それではどんなにがんばってもBクラス止まり」

「・・・ちなみにどつちで？」

世界的な基準か、エレオノール学園基準か。

「何を言っておる。わらわ達の力は、本来その枠には収まりきらん。それに、世界基準ではかなり下であった気がするぞ。・・・数百年前は」

「・・・」

どうも、それ以前の問題みたいだった。

そして無茶苦茶だ。

だって、ボクは半年前までは『魔法』の『ま』の字も知らなかったのに・・・。

いや、そんな泣き言を言ってる暇はない。

「それに、汝、一度だけ膨大なマナを収束させたであろう」

「何で知ってるんですか？」

「ほれ、あそこの学園長と『魔法映写機』<sup>てれび</sup>とか言うもので汝がド  
ンパチしておるの見た」

意外に暇をもてあましているみたいだった。

つか、見てたんかい！

「今、ココで、同じコトをしる」

「・・・マジですか」

「本来、マナの操作は第三段階からの技術<sup>スキル</sup>。だが、どういおうわけか汝はそれを中途半端とは言えモノにしている。汝なら、できるとにかく、マナのみで魔法陣を作れ」



これ異常ないほどの真剣な表情。  
いや、鬼気迫る表情と言ってもいい。・・・そんな表情でルーミアさんはボクに言う。

「・・・わかりました」

そして、ボクは集中する。

ボクの目に映る世界、マナを知覚する。

目の前には白銀に光る『流れ』。そして、それに干渉する。

すると、光の『流れ』がゆがみ、不規則にうごめく。

そして掌を突き出し、マナをそこに収束させ・・・。

「ダメじゃ！マナを取り込んでおる！・・・取り込むのはこの際よい。だが、それを出すな！！」

やっていない。そう言おうと思った。

でも、気付く。自分の中に微量なマナが流れてきているのを。

誰かに言われないと気付かないほどの量。

そして、それを掌から出している。

「・・・コレじゃ、ダメだ」

最初から。でも、何回もやり直せるほど時間が無い。

問題は、ボクが無意識に体内の魔力を使うこと。

それさえクリアできればいい。でも、無意識を制御しようなんて、

それも数分でできたら苦労はしない。

何かいい方法は・・・。それこそ、ボク自身が魔力を使えなくなれば・・・。

「・・・あ」

「..?」

「...いや、ひょっとしたら、できるかも」

「とりあえず、必要なものは...。」

「とりあえず、書くものとかないですか?」

21話・CHIMERA（後書き）

作 「とうとうわけで『合成獣』をお送りしました」

ル 「うむ。相手は面倒ぢやのう」

作 「とうとうわけで実は・・・って話からこうなりました」

ル 「しかし、今回は短いのう」

作 「すみません。こうした方がキリがよかつたんだよね」

ル 「うむ。まあ、今回はいろいろな伏線を回収しておるな」

作 「まあ、話の都合上、そろそろやつとかないと大変なんで」

ル 「うむ、がんばれ。わらわはあの学長のところで『てれび』でも見ておる」

作 「なんか、この人もフリーダムだよな」

ル 「ほれ、次回予告はよいのか？」

作 「はいはい。次回、ついに完成？マテリアライズ具現化！？そして、思いついた奇策とは？」

ル 「期待しておれ」

作 「最後盗られた！？」

## 22話・NECROMANCY

side 隆介

「ツチ！」

マジで、面倒だ。

ぶっちゃけ、ヤツはそれほど強くはない。

だが、攻撃しても大抵の攻撃がはじかれ、どんな魔法を放つても対処される。

「すみません、遅れました！」

その声と共に、長髪の男子がオレの横に音もなく現れる。

おそらく、やっとカバネの体のほうにキリがついたんだろう。

だが、双子がいないところを見ると、あいつらは後ろのソラの方に残してきたらしい。

「本当にな。コレで、前衛がそろった。やるぞ！」

その声で、オレが走る。

そして、それより速くシユウが相手に肉薄し、その高速の拳の乱打を浴びせる。

オレで目に捉えるのがやっと。おそらく、普通の人間の冬香やスズでは、シユウが何をしているのかよくわかっていないだろう。

そして、相手も。

合成獣は予期しないシユウの攻撃にうめくようにして体から触手の様な物を出すとそれでシユウを攻撃しようとする。

だが、シユウは既にそこにはいない。

「遅すぎます!！」

「それに、こっちを忘れんな!！」

「わたしもね!！」

「ヴァンパイア・スベスサイス吸血呪 血濡れの大鎌 !！」

オレは接近して魔法剣を浴びせ、冬香が弾幕を張る。

おそらく、相手には相当なダメージがいったはず……!

オレとシユウは一旦距離を取る。

そして、相手を見据える。

「や、やりました?」

「と言うか、僕達は何もしていませんね……」

「……来るっ!！」

リカが注意を働きかけたそのとき、合成獣キメラが人や、獣、鳥など、いろいろな音声が混じった叫びを上げる。

すると何を思ったのか、いきなり体を小さくし始め、前足にあたる部分を手のようなものに変えていく。

そして、そこに出来上がったのは、全長三メートルほどの巨大な人のようなもの。

顔がなく、ひよろひよろの棒でできたような体だが間違いないと思っ。

そして、今しがたできたばかりの手をこちらに向ける。

「どういっつもりだ?」

「・・・ねえ、ソラならココで何をするのかな?」

いきなりリカがしゃべりだす。

「・・・自分の得意なことを生かして、攻撃するのでしょうか?」

「たぶん、それ」

そこで、オレはヤツの特性、つまりは体を自由に変化させること、魔法を使えることをだと確認。

「オイ、それだと、まずくねえか?」

「・・・要するに、アイツの変幻自在な攻撃と魔法を合わせた攻撃をしてくるってこと!?!」

『、』

まるでそうだとも言うかのように相手は叫ぶ。

手の指が伸びたかと思うと、相手は伸ばした手をオレ達を逃がさないとも言うように即席の檻の様な物を編み上げ、それをオレ達に被せる。そして魔法を発動させる。

なら、次に来るのは・・・!

「スズ! 防御だ!」

「アンチ・エリア 相殺結果!」

スズがヤツより速く魔法を展開。

そして、ヤツの魔法が発動したかと思うと、目の前が真っ白の光で染められる。

それは、一瞬で終わった。

おそらく、雷系の魔法だろう。オレ達を逃がさないように退路を断つてからやる。この性格の悪さはあのバカの手口そのものだ。

「ッ！フェイント！！」

リカがいきなり大声で叫ぶ。

「ちょっと、フェイントにしても何に対してする必要があるのよ？」

「・・・ソラの方が！」

オレ達のはじかれたようにソラの方を見る。

そこには、真剣な表情で魔法を構築しているソラ達の姿が。

更にヤツは手をもう一本生み出し、指を槍の様に鋭くして高速で伸ばす。

あんなのに貫かれれば蜂の巣になるのは確実だろう。

「ミスト！防御しろ！」

『わあってる！』

田中がミストの力で多くの盾を出現させる。

そして、ミストは指の一本一本を盾でガードする。

『ッへ、ザコが！俺様の力、思い知ったか！』

すると、その言葉が癪に障ったのか、合成獣は雄たけびを上げる。すると、ミストがガードした指が何本もの糸のようになってバラけ、盾を回り込むように軌道を変更し、それをソラ達に突き刺そうとしている。

「ミスト、油断すんなよ！」

『・・・いや、俺様のスペック上、タロウしか守れねえし』

「ミストオオオオオオオオオオオ！？」

「月の加護を！」

ルチシールド  
月の防壁！」

ミストの代わりにルーミアがとっさに魔法で防御。さすが、神霊なだけあって魔法の展開も早い。

だが、相手はそれを最初からわかっていたかのように回り込み、攻撃を仕掛ける。

そして、それに気付いたカレンが魔法を構築しているソラを守るうと、抱き寄せるが・・・。

「・・・ギリギリ、セーフ、やな」

「カバネさん！」

「何をしてるですう！その体では無茶ですう！！！」

カバネがソラ達の前に立つ。

いつもは背負ったままのスコップを構え、それであるの攻撃をはじめたいらしい。



「カリン、おーきに。カバネ、さすがにこれ以上は  
アホ、むしろ、ワイがせな、誰がすんねん」

そういうと、カバネはその手に持ったスコップをガンと音を立てて地面に突き刺す。

すると、そこを中心に魔力があふれ出す。

「我、カバネ・ラジエの名の下において命ずる。

我が、眷族となりて力を収めた者たちよ、今ここにその力を示せ！

デス・パレード  
死霊達の宴　！」

カバネの声が響き渡ると同時、一瞬だけ辺りが静寂のみで支配される。

だが、次の瞬間、土がむき出しになった地面からぼこぼこ何かが飛び出す。

いや、よく見ると、それは……。

「ヒッ！？う、腕に、ほ、骨！？」

「……リカ、アンター回落ち着きなさい」

「まさか、これが『ネクロマンシー死霊術』か！？」

「どうやら、そのようです」

「しかも、あれ！森で僕達が戦った人魂です！」

春樹の指差すほうを見ると、そこにはカバネの周囲を浮遊するい

くつもの、青白い炎の塊達。そして、それらはカバネの方を見ると、何かを尋ねるような仕草をする。

「おい、俺たちどうすればいい？」

「しゃべるのか!？」

・・・普通に、しゃべってた。しかも、骸骨が。どうやってしゃべってたよ。

「あの黒いの足止めや。それで、お前等はコレで成仏しろ。異論は認めへん」

「まじかよ」

「いや、前のヤツ等はなんか引越しの手伝いしただけで成仏しろって言われてた気がするぞ？」

「・・・こっちの方が、だいぶましか？」

何故か、死霊たちはやたらと庶民的なことを話しながら合成獣キメラに飛び掛っていった。

そして、カバネは周りを見ると、何かを考えるような表情になる。

「・・・まあ、今回は敵がでつかいしな。アイツも呼ば」

そういうと、今度はポケットから何かを取り出す。

ココからではよく見えないが・・・何をするつもりだ？

オレがそう考えていると、カバネはそれを地面に置き、自分は少しはなれたところに行く。

そして、深呼吸をするとまた詠唱を始める。

「我、カバネ・ラジエの名の下に命ずる。

汝、私の呼びかけに応えよ。

その猛威をもつて、彼の者を滅ぼせ。

スビリ・コトル  
死霊召喚　！！」

辺りが静寂で包まれる。

そして、変化はすぐに訪れた。

カバネが置いた物に魔力が集中していくのがわかる。

唐突に地面が軽く揺れだす。

すると、カバネの置いた物のところが盛り上がり、次の瞬間には大きな地響きと共に何かが地面の下から勢いよく現れた。

その部分だけ土煙が舞い、一体何が出てきたのかよくわからない。

『久しぶりに呼ばれたと思えば……。カバネ・ラジエ、お前は  
何故、いつもそんな風になってから俺を呼ぶ』

ゆっくりとした、太い声が聞こえた。

そして、カバネは当たり前のように答えた。

「お前な、自分の図体の事わかつとるか？そうそうお前を呼べるわけ無いやろ……。それに、お前だけはワイがミスって永遠に隸属化してしもうたし、何回も呼ばれとうないやろ？」

『愚問だ。俺はお前に恩がある。この恩、お前が死ぬそのときまで返そう』

「……正直な話、モテるんやったら、別嬪さんがよかつたんやけどな。まあ、ええわ」

そういつと、カバネは一旦言葉を切り、土煙の上のほうを見る。  
そして、口をあける。

「ヴァジユ。あのでっかい黒いの、足止めしてくれへん？あ、周  
りの被害はいつもの通りな」

『・・・承知』

すると、土煙の一部から、あまりにも巨大すぎる腕が唐突に出て  
くる。

その腕は、合成獣キメラを地面に叩きつけるようにして殴る。そして、  
合成獣は冗談キメラじゃないかと言いたくなるぐらいに、地面に埋まる。

・・・おい、あと少しでもずれてたらオレ達がお陀仏だった気がするぞ？

そして、ヤツはその姿を現した。

青白い肌なのは、死霊術ネクロマンシー、あるいは死んでいるからだろうという  
ことだろう。そして、オレ達の目の前に現れたのは、巨大な人間と  
しか表現の私用が無いもの。

「巨人族ギガンテス、それも、古代種だと!？」

「巨人族ギガンテス!？あれが!？」

「あれがですか!？嘘でしょう!？」

「あ、ああ・・・ッ!」

「おお〜!？大きいね〜。でも、何でみんな驚いているの〜?」

よくわかっているにスズに春樹が簡単に説明する。

「だって、巨人族は、全長三メートルほどしかないんですよ!? あれ見て下さい!隣のビルと同じぐらいの大きさですよ!?!」

「・・・わかった〜!たぶん、いっぱいご飯食べたんだね〜!」

「わかってねえよ!アレはな、たぶん、大昔にしか存在してなかったっつー、古代種だ。古代種の巨人族の伝承には、山のような大きさだとか、ありふれたことしか書いていなかったんだが・・・」

まさか、本当に、山みたいな大きさだったとはな・・・。  
すると巨人、ヴァジユはゆっくりとした動作でカバネの方を向く。

「おい!俺達もいるんだ!ぶっ飛ばすなよ!痛えじゃねえか!」

「お前、死んでるんだから痛みもねえって!」

「おっと、そうだった」

・・・死霊達がボケたことを言ってるが、今は無視しよう。

つか、何で、巨人族がカバネに従っている?

伝承によれば、巨人族は戦闘種族。それに、図体だけでなく、誇りも山みたいに高いって聞いている。

それが、何で?

『カバネ・ラジエ、終わったぞ。これしきの相手、俺にとっては造作もない』

「まだや。よう見えてみい」

『何？・・・！』

巨人がいぶかしげな目でカバネを見るが、その足元から何かがあるのすごい力で巨人をひっくり返す。

驚く巨人を尻目に合成獣が雄たけびを上げる。

「どういうわけかはわからん。でも、あそこに・・・カレンとなんかしとるのおるやる？アイツが何とかするらしいで、お前はアイツの攻撃から、とにかくあれを守ればええ」

『・・・承知』

そういうと、巨人は素直にカバネの指示に従うかのように自分と同じ大きさもある合成獣キメラを押さえ込むようにして動きを封じる。

相手はそれを暴れて抜け出そうとするが、よほどうまく押さえ込まれているのか、巨人の体がピクリとも動かない。

つか、コレは何つー大怪獣バトルだよ！？

「・・・コレなら、アイツを待たなくてもいいんじゃない？」

「確かに。でも、あのヘタレ死ネクロマンサー霊術師は使役はしないんじゃないかなかったの？」

「・・・姉さん、さっきあの人？・・・まあ、幽霊がなんか言ってた気が？」

「・・・そういえば、何だか恩返しがどうとか言ってたね。・・・実は、あの人たちはツルさんなの？」

あんな、腐った人間みたいな鶴は絶対にイヤだ。  
少なくとも、オレは恩返しされたくない。

だが、あの時のヤツの言い分も嘘をついているようには見えなかった。

少なくとも、オレ達の中ではないなかった。大勢の目をごまかすなんて芸当はかなり難しいとオレは思う。

「まあ、どっちにしろ、コイツをぶっ飛ばさなきゃ聞けないって  
ーことか」

「そのようです。ですが、こつも暴れられては、迂闊に動けません」

確かに、シユウの言うとおりだ。

今も、合成獣キメラと巨人は互いに取っ組み合っている。

巨人はその体の大きさ、膂力によってねじ伏せ、合成獣キメラは己の体を変化させ、絡めてから真っ向勝負と戦法を変えては巨人に怒涛の攻撃を繰り出す。

しかも、それがオレ達のすぐ傍でやっているからまずい。

魔法も物理攻撃もスズの魔法でガードできるから問題はねえが・  
・万が一にも言うこともあるからなあ・・・。

「・・・大丈夫。問題ない」

リカが唐突に、ぼそりとつぶやくように言う。  
だが、何故か不機嫌そうだ。

「な、何でそんな事がわかるんですか？」

「・・・ん」

リカが指をさす。

そこは、確かソラ達のいる方向。

オレ達がそこを見ると、そこには異常なほどに、掌に展開したから光を放つソラがいた。



## 22話・NECROMANCY（後書き）

作 「大変遅くなりました。『死霊術』をお送りします」

カ 「ついにワイの時代やな！」

作 「まあ、実は割りと最近までこいつが死霊術師だったことを忘れてましたが」

カ 「な、なん、やと・・・！」

作 「いや、僕個人としては既に生ける屍リビングデッドなメイドさんで十分におなかいっぱいだったんで」

カ 「・・・ワイがおらへんかったら、カレンもおらへんのに・・・」

作 「そんなわけで次回予告！ついに完成？新魔法！次回もよろしく！」

カ 「・・・これが、惚れた弱味ゆうやつか」

作 「いや、あんたがMなだけだと思っ」

カ 「・・・」

## 23話・WEAPON MAGIC

side空志

「むじぞ」

「・・・いや、質問とかないんですか？」

「メイドですから」

よくわからない受け答えをされて、ボクの手にはボールペンからシャープペン、油性ペンに水性ペン、果てはポスターカラーマーカーまである。

・・・文化祭の用意でもする気ですか！？  
てか、ドンだけ持つてるんですか！？

「メイドは、最強職業です。勇者が転生すると冥土メイドになります」

「なにそれ！？しかもネタを引つ張らないで！？」

「ご主人様、もっとちやきちやき働いてください」

「ワイは怪我人やぞ！？」

「・・・はい？貴方、いつから私の主になつたんですか？貴方は私の奴隷ですよね？」

「・・・」

「カバネさーん！？がんばるですう！！」

「な、何故か、さっきの言葉の方がかなり効いたみたいなんですけど!？」

「……がう」

今も集中治療中のカバネさんは、何故かいきなり峠を迎えた。いや、今はこんなボケたことに突っ込んでる場合じゃない。

ボクは、とりあえず油性ペンを選ぶと、キャップを取る。

そして、自分の左掌にどんどん文字を書き込んでいく。

……たぶん、コレでいいはず。

そして、さっきと同じようにボクは左掌にマナをどんどん集めて、魔法陣の形に持っていく。

「汝、どうして……っ!？」

「……どうか、なさいましたか？」

「何故、いきなりできる!？」

「その反応だと、成功みたいですね実際、どうなるかわからなかったのですよかったです」

そういつと、ボクは掌をルーミアさんに見せる。

「これ、ジャミング魔法妨害のエンシェント・スベル古代魔法文字なんです」

「……それを知っているのであれば、使えばよかったのでは？」

「いや、わかったのはさっきですし……」

「お主、まさかさっきの神官の刺繍を覚えたとは言つまいな？」

「いや、ぶっちゃけるとそうなんですけどね・・・」

仕掛けはこうだ。<sup>カラクリ</sup>

まず、この事を説明するにはボクとハル君の訓練風景を説明する  
ひつようがる。

ボク等が龍造さんの下で最初にやった・・・と言つか継続して今  
もやっているのが書き取りテスト。

この書き取りの内容は、龍造さんが描いた魔法陣をほんの数秒だ  
け見せてもらい、それを紙に描いてあつていかどうかと言うもの。  
そして、魔法陣には二つの展開方式がある。

一つが媒介展開。紙なんかを描いた魔法陣を発動させるもの。特  
徴としても誰でも簡単にできる。

もう一つが抽象展開。頭の中でイメージした魔法陣を展開して魔  
法を発動させる。特徴としては、いろいろな魔法をすぐに発動させ  
る事ができる。

この二つのうち、どっちがいいかなんていえばそれは間違いなく  
抽象展開。

確かに、イメージがちゃんとしてないとうまく発動しないと言う  
欠点はある。でも、覚えさえしてしまえば、どんな強力な魔法だろ  
うと詠唱速度はゼロで済ませると言うことができる。<sup>スペル・スピード</sup>

要するに、この魔法の練習は、一瞬で魔法陣をイメージして展開  
する訓練だ。

0.1秒でも魔法の発動が早いに越したことはない。そういうこ  
とだと思つ。

まあ、そういうわけで、ボクはあれが魔法妨害と言われた瞬間に  
条件反射で記憶した。<sup>ジャミング</sup>

「……………職業病は恐ろしいですね」

「……………汝、あの魔王のせいでどんどん人間離れしておるぞ？」

「……………で、ココから何をするつもりですか？」

ボクはルーミアさんの言葉を見殺ししてカレンさんに尋ねる。

スルーか、と言うルーミアさんの言葉は聞いていない。耳にも届いていない。てか、それって何語？

「まあ、三谷様人外説は横に置いてくとしておきましょう」

「いや、人間だけど人間じゃない貴女に言われたくない」

「はいはい。では、レクチャーを始めましょう」

……………何故か、小学生を扱うかのように適当にあしらわれた。

そして、カレンさんは語りだす。

「私達の魔法陣を仮に橋流、そして、三谷様が扱う魔法陣を間流とでもしておきましょう。まず、この二つの大きな違いは詠唱の有無です」

確かに、ボクとカレンさん達の扱う魔法展開方式は同じ魔法陣でも、その方法に大きな違いがある。それが、完全に魔法陣に頼ったボク等の魔法陣に対しての、詠唱も交えたカレンさん達の魔法陣。

でも、龍造さんが真言を発動させるときも、どうしても詠唱が必要になるって言ってたから、かなり安定するのだらうとは思っ。

「でも、さっきの魔法、  
月夜ツキヨ はどっちかって言うところっちょ

りの魔法陣ですよ？これ以上に強化のしようがあるんですか？」

「甘いですね。チョコレートにハバネロをかけたぐらいに甘いですね」

「ボクは、貴女の舌の感覚が大丈夫か心配になってきました」

辛いのか、甘いのかどっちかにしてください。

「単刀直入に言いますと、三谷様の詠唱では無駄が多すぎます」

「……無駄？」

「はい。考えても見てください。詠唱とは、魔法のを安定させるための手法のひとつに過ぎません。それは、魔法陣でも同じことがいえます」

……地味に話しについて行けない。

いや、ついていけるんだけど、何が言いたいのかわからない。そんな、当たり前と言うか……。とにかく、それがどうつながるんだろう？

「要するに、重すぎるんですよ。魔法が」

「重い？」

「重いというのは、処理速度のことです。あなたのある魔法の場合、魔法陣で指定してあるにもかかわらず、更に詠唱で同じような内容をもう一度読み込んでいるのです。重くなるのも当たり前だと思います」

言われると、何となくそんな感じはする。

確かに、同じことを二回や三回も書く必要性はどこにもない。むしろ、わかりにくくなることが多い。

「つまり、もっと効率をよくするんですか？」

「その通りです。魔法陣用の詠唱は任せてください。三谷様は、例の魔導マキの魔法陣を構築してください。もちろん、詠唱は無しで

「わかりました」

そういうと、ボクは精神を集中させ、  
月夜ツキヨの魔法陣を思い浮かべる。

心なしか、いつもよりも鮮明なイメージを浮かべられているような気がする。

これも、龍造さんとの訓練のおかげだろう。

何も描かれていない魔法陣にどんどん記号や文字が描かれていく。そして、それは唐突に起きる。

みんなの焦ったような叫び、どうしたのかと疑問を浮かべたとき、ルーミアさんが動く。

「月の加護を！」

ルナ・シールド  
月の防壁　！」

ボク等の前に立つと、ルーミアさんは手をかざして、魔法を発動させる。

白銀の幕がボク等を覆い、その幕へ何かか激突するような音が響く。

それは、黒い何か、よく見ると合成獣キメラが指を伸ばしているのがわ

かる。

たぶん、その鋭い指でボク等を串刺しにでもしようとしたんだろう。

ただ、攻撃はまだ続いていた。

まるでルーミアさんの魔法のことがわかっていたかのように、脆弱な部分を狙って攻撃をする。

そして、魔法が破られる。

ボクはカレンさんに守られるようにして抱きしめられる。

無駄だと知りつつも必死に魔法を構築し、一秒でも早く魔法を作り上げようとする。

「……………て……………ネ」

とても小さな声、それがボクの耳に届く。

でも、それって……………。

「……………ギリギリ、セーフ、やな」

やってくるはずのない声。

何でだ？

この人は、さっき、重症で……………。

いや、双子の切羽詰った声からも、今も普通にそうなんだろうと思う。

「ご主人、様……………?」

「お前はさっさと自分のことやれ」

そういうと、カバネさんはボク等の前に立つ。

まるで、ココから先は通さないとも言つように。



「カリン、おーきに。 カバネ、さすがにこれ以上は  
アホ、むしろ、ワイがせな、誰がすんねん」

カバネさんは、いつも背中に背負っていたスコップを地面にガンと打ちつけるようにして突き刺す。

「 我、カバネ・ラジエの名の下において命ずる。

我が、眷族となりて力を収めた者たちよ、今ここにその  
力を示せ！

デス・バレード  
死霊達の宴 ！」

すると、周りが水を打ったような静けさに包まれたかと思うと、  
地面から何かが出てくる。

それは、骨の腕や、腐った腕、そこから、明らかに死んでるとし  
か思えない、人間がどんどん湧き出てくる。

「あれが、ご主人様の死ネクロマンシー霊術です」

カレンさんがボクから離れながら説明してくれる。

でも、カバネさんは死んだ人を使役しないんじゃないか……。

「今は、説明してる余裕はありません。それに、ご主人様は切り  
札も出そうとしています」

カレンさんの言葉に心えるかのように唐突に地面が軽く揺れだす。  
次の瞬間には大きな地響きと共に何か地面の下から勢いよく現  
れた。

その部分だけ土煙が舞い、一体何が出てきたのかよくわからない。

『久しぶりに呼ばれたと思えば……。カバネ・ラジエ、お前は  
何故、いつもそんな風になってから俺を呼ぶ』

ゆっくりとした、太い声が聞こえた。

そして、カバネさんは当たり前のように答えた。

「お前な、自分の図体の事わかつとるか？そうそうお前を呼べる  
わけ無いやろ……。それに、お前だけはワイがミスって永遠に隷  
属化してしもうたし、何回も呼ばれとうないやろ？」

『愚問だ。俺はお前に恩がある。この恩、お前が死ぬそのときま  
で返そう』

「……。正直な話、モてるんやったら、別嬪さんがよかつたんや  
けどな。まあ、ええわ」

そういうと、カバネさんは一旦言葉を切り、土煙の上のほうを見  
る。

そして、口をあける。

「ヴァジユ。あのでっかい黒いの、足止めしてくれへん？あ、周  
りの被害はいつもの通りな」

『……。承知』

すると、土煙の一部から、あまりにも巨大すぎる腕が唐突に出て  
くる。

その腕は、合成獣キメラを地面に叩きつけるようにして殴る。そして、  
合成獣は冗談キメラじゃないかと言いたくなるぐらいに、地面に埋まる。

見間違いじゃなければ、大きすぎる手が合成獣キメラを叩きのめしたよ

う西が見えない。それに、土煙から出てきたもの、あれは、まるで・  
・。

「巨人族、それも、古代種かつ!？」

「巨人族?」

「そ、それは本当ですう!？」

「それにしても、大きすぎないですか!？」

双子は、今度はレオの治療をしながらルーミアさんに驚愕の声を伝える。

「あ?巨人つて、あれぐらいの大きさじゃねえの?」

「ああ。本来、巨人は全長平均およそ三メートル。だが、アレは軽く十メートルは越している。確実に、大昔にいたつつーヤツだ。俺様も、本物を見るのは初めてだ」

ミストがわかりやすく説明してくれる。

「とにかく、コレで時間を稼げます。それと、それだけでは安定しないので付け加えます」

「はい?」

一瞬だけ、何を言ってるのか意味がわからなくなる。でも、それは次の瞬間には解消された。

ボクは何もしていないのに、いきなり複数の魔法陣がボクの掌の

周りにいくつか現れる。

更に、一部の文字が勝手に改変され、今までぎゅうぎゅうに詰められていた文字や記号が分割され、最終的に六つの魔法陣だけになった

「・・・コレで大丈夫でしょう」

カレンさんがそういうと、無秩序に並んでいた魔法陣が向かい合わせに並び、まるで箱のようになる。

それが、カレンさんの掌の中できると回っている。

「何、これ？」

「代理展開です。これも魔法人専用の特殊スキルで、三谷様の様子ですと、橘流のみの技のようです。簡単に言いますと、展開した魔法陣を代わりに組み立てる技術です」

「え？じゃあ、魔法陣同士で戦ったら、相手の魔法陣をのっとって攻撃とかできるんですか？」

「いえ、それはできません。条件としていろいろな制約がございます。一つが、魔法陣を展開させた人に接触していること。他にもいろいろとございますが、今回は省略させていただきます」

そういうと、カレンさんは魔法陣でできた立方体をボクに渡すように差し出す。

ボクはそれを恐る恐る受け取ると、どういっわけか魔法陣がカレンさんの手の中にあっただときよりも勢いよく回りだす。

「これは、魔法陣に不慣れな最初のころに使う方法です。では、

最後に私が三谷様の代わりに魔法を発動させます。・・・準備は、よろしいですね？」

ボクはカレンさんの言葉にうなずく。

カレンさんは一つうなずくと、口をあける。

「代理展開開始。

魔力的波長同調・・・クリア。

魔法陣同調・・・クリア。

詠唱を開始。

魔に属す力に命ずる。

集いて力と成せ」

すると、魔法陣の立方体が激しく回り、強く光り始める。

カレンさんはボクの手を掴むと、それを魔法陣の立方体の中に突っ込む。

「・・・そうですね、この魔法の名前は シンゲツ 真月 と命名しましよ  
う」

カレンさんがそういった瞬間、魔法が発動した。

今までとはまったく違う感覚。

まるで、力が水ミヅのように体に流れてくるような感じ。

それはすぐに治まる。

すると、光が収束し、一つの形を形成する。

それは、一振りの刀。

たぶん、ボクがよく生成してた ツキヨ 月夜 の 『ゲッセン 月閃』 の シンゲツ 真月 バ  
ージョン。

「・・・何か、変わりました？」

「はい。簡単に言うと、スー　ーサ　ヤ人へと覚醒できました」

「……」

いや、普通に前と使っていたのとまったく同じなんですけど？

「いえ、全然違います。以前のものは、核コアがその武器に設定されていた。ですが、今回の改良により、核コアを三谷様自身へと変更しました。武器の形状を変更させなかったのは、そちらの方が慣れているかと思いましたが」

カレンさんは胸を張ってえらそうなことをいう。

いや、でも、そんなこと言われても……。というのが正直な感想。何がすごくなったのかよくわからない。

「ほう、これは……。汝、その状態のときは気をつけた方がよいぞ？」

ルーミアさんはボクの魔法の詳細がわかったのか、いきなり忠告してきた。

……。でも、何を気をつければ？

「説明するよりも実行した方が早いです」

そういうと、カレンさんがどこからともなく例のネギを取り出す。それと同時にネギの周囲に複数の魔法陣を展開させる。  
そして、そのまま全力で合成獣キメラに向かって駆け出す。  
ボクは半ば反射的にカレンさんについて行く……。

「ッ!？」

「気をつけてください。今の貴方は、私の全力に軽くついて来れません」

ボクがただ、ボクは普通に駆け出したただけだ。

ちなみに、ボクの運動能力なんてたかが知れている。本当にごく普通の高校生レベルだ。

まあ、優子さんにしごかれているけど、どんなによく見積もっても学年で中の上程度だ。

そんなボクが生ける屍リビングデッドの、限界リミッターが外れた人の全力についていけるわけが無い。

でも、ボクはそれを可能にした。現に、自分で出した力をコントロールできず、躓きかけた。

「フィジカル・ブースト 身体強化 ……!？」

「はい。どうも貴方の属性上、フィジカル・ブースト 身体強化 は難しいらしいのですが、その魔法を媒介に何とかできました。ついでに、武器を換装できます。これは、三谷様の魔法陣を参考に作らせていただきました」

「こともなげにそう言う」

フィジカル・ブースト 身体強化 と言う魔法は、属性によってかなり特徴が出てくる。

例えば、炎系であれば単純な腕力が上昇したり、土系なら耐久力が増す。そんな感じだ。

それで、フィジカル・ブースト 身体強化 に向かない属性っていうのが多々ある。ボクの『月』もその一つ。まあ、ボクの場合はマナを体内で循環させても意味がなかったってだけなんだけど。でも、スズもコレばかりはうまくいってないらしい。

「では、その力をお願いします」

「は、はい！」

力に振り回されそうになるが、気合で何とかする。

周りの景色を置き去りにして合成獣キメラに肉薄し、その巨体に飛び乗る。そして 月詠ツキヨミ で解析する。

でも、相手はそれがわかったかのようにボクへ攻撃を仕掛けてくる。

合成獣キメラの体のいたるところから触手が生み出され鋭い槍のような形状になり、それをボク等に向かって突き刺そうとする。

動体視力まで上昇しているボクは何とかそれらを刀で薙ぎ払う。

「 迅雷の弾丸。」

ライジング  
鳳雷弾 「」

カレンさんも魔法でボクを他の触手から援護してくれる。

そして、巨人もカレンさんが来たのをみて、自分に注意を向けようとしていた。

でも、巨大すぎて攻撃が全然通らない。

どうすればいいの？

ボクがそう考えているとき、カレンさんは複数の魔法陣を使いながら、新たな魔法を構築。

「 奔れ、光の如き速さで。」

ライトニング・サンダー  
閃光ノ雷鳴 「」

魔法を使いながら、別の魔法を更に使用。

そんな事がありえるの？



ボクは、若干パニックになりつつも合成獣キメラに攻撃を加える。  
そして、その時だった。いきなり、ボクの頭キメラの中に何かが入っ  
てくる感覚。頭キメラが、痛い……！  
思わず、合成獣キメラの体に膝をつく。

#### 對抗術式の構築フロケラム

ボクが急に膝をついたのに驚いてカレンさんが何かをボクに話そ  
うとしている。

でも、ボクの耳にそれが届かない。

#### 類似術式を複製コピー

この期を逃すまいとして合成獣キメラがボクとカレンさんに向かって魔  
法や、触手の攻撃を仕掛けてくる。

#### 術式作成コンプリート……完了。

#### 術式起動ブート

ボクは、手の中にある武器を触手や魔法の群れに向かって思い切  
り振ると同時に叫ぶ。

「術式……断月ダンゲツ！」

刀を振りぬく。

すると、ボクの刀の斬線に沿って光の刃が放たれる。  
これじゃ、まるで……。

「魔法剣……!?!?」

リュウがよく使う、魔法剣 斬黒 そのまんまだ。  
でも、ボクは魔法剣の練習なんて一回もしていない……！

「どういう、コト？」

「それは、オブション・キャスト追加魔術！？何故、貴方が？」

カレンさんが驚愕の声を上げながらボクに聞く。

「オブション・キャスト追加魔法？」

「それは、私達が使う橘流の魔法術式です。隆介様に言わせると、パラレル・ライン・スベル劣化同時並行処理詠唱だそうです」

「パラレル・ライン・スベル劣化同時並行処理詠唱？」

でも、何で急に……？

いや、今は考えている暇はない。

これなら、キメラ合成獣に決定打を与えられる……！

「すみません、コレの使いかたがよくわからないんで、援護してください」

そういうと、ボクはキメラ合成獣から一旦降りて、地面に立つ。

そして、さっきの感覚を思い出そうとする。

でも、それはどういう原理かはわからないけど、まるでボクが最初から知っていたかのように使える。

頭の中にある、その魔法を選び、刀を構える。

でも、今度はさっきよりもマナを込める。

そのせいか、刀が強い光を放ち始め、熱を帯びだす。

たぶん、キャパティシー許容量を超過しちゃうとこの魔法が壊れるんだろうと判

断する。

なら、ギリギリで、効果的な一撃を放つ……！

「……術式 断月<sup>ダンゲツ</sup>！」

居合い切りのようにボクは刀を腰だめの姿勢から振るう。

刀から巨大な白銀の斬撃が放たれ、合成獣<sup>キメラ</sup>を一刀両断にし、断面も白銀の光を放っている。

ちょうど、真ん中には、何かの光の集合体がある。

たぶん、魂だ。合成獣<sup>キメラ</sup>に取り込まれていた魂があれなんだと思う。そして、合成獣<sup>キメラ</sup>はというと、ついさっきまでしつこく再生しまくっていたのに、何故か急にしなくなった。

断面が光っているのが関係しているのかな？

そして、次の瞬間には黒い合成獣<sup>キメラ</sup>の体が霧散して、何もなくなっ

た。あまりにもあっけない最期に、ボク等は呆然とした表情を浮かべていた。

23話・WEAPON MAGIC（後書き）

作 「とう言うわけで、『具現化』をおおくりしました」

空 「なんか、最後のほうがやつつけになってる気が？」

作 「違う！ちゃんと考えてこうなった！」

空 「・・・なんか、作者の残念な脳みそを披露しちゃったね」

作 「僕の脳味噌がこんなに賢くないわけがない」

空 「とりあえず、病院に逝こうか」

作 「まあ、とう言うわけで次回！」

空 「・・・いや、自由すぎない？しかも、ボクはツッコミしてる  
だけだし」

作 「ついに合成獣キメラを倒しました。次回はエピソードです」

空 「今回はかなり長かった気がするよ」

作 「うん。僕も書いて飽きてきた」

空 「おい!？」

作 「次回もよろしく!」

## 24話・A LIE

side空志

あれから数日。

既に龍造さんがいつもの如くふざけた魔法で何事もなかったかのよう  
に町を修復。

平穏な日々を取り戻していた。

それで、今日は理事長室で全員集合。

目的は、カバネさんとカレンさんの尋問だ。

「で、何で死霊達を使役していた？」

「確か、カバネさん達の説明では、自分たちは死霊を使役しない  
と言う風にききましたか？」

リュウとシュウがスパツと物事の核心を突く。

でも、確かにそうだ。

ボク等は最初に死霊術としての力、つまりは悪霊や死霊の使役を  
していないって聞いていた。でも、実際には巨人なんてオプション  
付きでとんでもないことをやりまくっていた。

「ああ……。あんな……」

カバネさんはどこか話しくそうにしている。

カレンさんに関しては当事者にも関わらずどこ吹く風とした感じ  
で明後日の方向を向いている。

そして、突然カバネさんは前につんのめるようにして力がぬけた  
かと思うと、口調を激変させて説明してくれる。

「何回もいうけど私達、というかカバネはね、あちこちで悪霊とか霊を成仏させてあげてるんだー」

「それが、なんの関係があんのよ？」

「簡単にいいますと、ご主人様に恩を感じ、ついて来る幽霊がたくさんいるのです。幽霊だけに」

「で、カバネは適当に手伝いをさせて、すぐに成仏させるの」

つい最近はお手伝いをして成仏させてたな。と何故か庶民的なことをいいながら懐かしそうに言う。

どうも、カバネさんは幽霊に好かれやすいらしい。

まあ、幽霊からしてみれば、自分を認識してくれて、更には願い事まで聞いてくれるんだから、それなりに報いたいと言う幽霊もいるんだろう。

そこで、どんなに断つても文字通り憑いて来る幽霊に根負けしてカバネさんが自分が困ったときに手伝いをしてくれたら絶対に成仏しろと言って、一時的に自分の配下に置いたらしい。そうすれば、悪霊化もしないから安心なんだとか。

「で、例外が巨人族ギガンテスのヴァジュ・ネグロイア・・・なんとか」

「名前を覚えてないの？」

「だって、長いんだもん。・・・まあ、ヴァジュさんだけカバネが最初のころに間違えて契約しちゃって、どうしても支配下から離せないんだって」

「それで、ご主人様は本当にどうしようもないときにのみ彼を呼

んでいます」

「どうも、そういってほしい。」

「でも、一番ワケがわからなかったのが・・・お前だ、ソラ」

「ですよ〜。・・・ちなみに、言っとくけど、パクったわけじゃないよ?」

「ホントかよ」

「リュウ、ソラはそんなことしない」

「ソラ君はそんなことしないよ!いくらリュウ君の魔法がすごいからって、そんなことしないよ!」

「そ、そうです!師匠は、やろうと思えばできる子だけです!」

「それに、刀でやろうと思ったら、術式 ダンゲツ 断月 しかできなかったんだよ」

ボクはいろいろと実験してみたけど、あれ以上の技はどうしてもできなかった。

たぶん、刀のとき専用の魔法なんだろうと思う。

「単に、汝がやっと『月』の属性に慣れてきておるだけだと思うがのう」

「・・・面倒な属性じゃ。して、ルーミアさんとやら、この子に教える気は?」

「うむ。この茶菓子はうまいな」

「……」

ルーミアさんは完全に自由人だった。

ボク自身にも、あの時何が起きたのかよくわかっていない。

「ただ、初めて 月夜<sup>ツキヨ</sup> 使ったときに似てた気がする」

あの時も何故か頭の中に急に湧き出てきた魔法を使った。

もちろん、それが具現化<sup>具現化</sup>だなんてまったく知らなかったのに、だ。

「まあ、なるようにしかならんかのう」

「うむ。ところで、茶の御代わりはないのか？」

おい、神霊。何、人ん家でお茶をたかっているんだよ。

と言うか、神霊に限らず、精霊は食べモノがいらんじゃ？

「では、そろそろこのあたりで失礼します」

「おう。いろいろと世話になったな。まあ、もうちょいココにお  
る予定やけどな」

そういうと、カバネさんとカレンさんは来客用ソファから立ち上  
がり、理事長室を出て行く。

「あ、そうだ」



「ソラっ？どうしたの？」

「いや、ちょっと聞きたい事が一つだけ残ってた」

ボクはそう言うと、レオを連れてカレンさん達の後を追った。

「すみません！」

カレンさん達は歩くのが速いのか、ボクが理事長室を出ると既にどこにもいなかった。

後を急いで追うと、どうにか追いつく。

「どうかしましたか？」

「カレンさんに聞きたい事が」

「ワイはどうすればええ？」

「少し長くなるんですけど・・・」

それに、この話はカバネさんに聞かれてもいいのか・・・。

「構いません。ご主人様、先にお帰りになってください」

「おう。わかった」

そういつと、カバネさんはそれ以上は何も言わずに帰っていった。さて、と……。

「で、御用件とは？」

「まず、ありがとうございます。あ後はいろいろとバタバタして言いそびれてしまいましたから」

「いえ、私もいい経験になりました」

「それと、単刀直入に言います。カレンさん、貴女は本当に記憶の一部を忘れているんですか？」

「……どういう意味でしょう？」

「ボク、疑問に思ったことがあるんです」

ボクはカレンさんの言葉を無視して続ける。

「いつも、思っていたんです。カレンさんがカバネさんのことを話すとき、いつもは無表情なポーカークフェイスなのに、そのときだけ表情に変化があるような気がしたんです」

「……私も、元人間です。笑ったり、泣いたりすることぐらいあります」

「でも、自分でも感情が表に出にくいことぐらい、貴女ならわかるはずだと思います」

ボクの言葉に反論しようとしたカレンさんに、ボクは言葉を更に

重ねる。

「ココからは、あくまでボクの想像で、思ったことを言うだけにしておきます。でも、カレンさんが実は記憶をなくしていないって方向になりますけど」

カレンさんはボクに何を言っても無駄だと思ったのか、口を閉ざし、ボクに続きを促す。

「まず、本当に記憶をなくしてるなら、何でカバネさんについているんですか？」

「……言ってしまうのもなんですが、ネクロマンサー リビングゲデッド 死霊術師に生ける屍が付き従うのは当然だと思いますけど？」

「ボクもそう思っていました。でも、ボクが聞いた話では、唯一失敗したのが巨人族のヴァジュ・ネグロイアさんだつて聞いています。つまり、貴女はカバネさんに縛られていないんじゃないですか？」

「……」

帰ってきたのは無言の返答。

更に、ボクは言葉を重ねる。

「そして、それだと腑に落ちない点があります」

「……私のエネルギー供給源、ですか？」

「はい」

どんな魔法であれ、魔力と言うエネルギーを使って動いている。

それは、ネクロマンシー死霊術も例外じゃないはずだ。

ボクはネクロマンシー死霊術という者は死者との契約魔法に近いものだと思っている。契約したから魔力の譲渡とかもできるんだらうけど、カバネさんとカレンさんの間にはそれが無い。

更に、カレンさんほどの高スペックなリビングデッド生ける屍ならそのエネルギー量は大変なものになるんじゃないか？それがボクの予想。

でも、コレは何回も言うけどあくまでボクの予想だ。

ひよつとすると、ネクロマンシー死霊術は魔力をまったく別の方法で得ているのかもしれない。でも、更に気に掛かる点がある。

「カレンさん、よくプリン食べてましたよね？」

「はい。それが？」

「死んでるのに、食べる必要ってあるんですか？」

「・・・ただ、ご主人様をいじりたいだけですか？」

「・・・うん。まあ、その・・・そういうと思ってたよ。

でも、ボクには突拍子もない考えがある。

間違つてたら相当バカにされるであろう考えが。

「もしかして、プリンが貴女のエネルギーなんじゃないですか？」

「・・・ツ！？」

「・・・嘘っ？本当に？」

自分で出した答えだけ・・・なんか、正解しても微妙な気分だ。

というか……プリンで動く生ける屍リビングデッドって……。

「あの、だとすると、さっきの答えが全部あってる気がするんですけど?」

「……いえ、すばらしいです。おそらく、ほぼ正解です」

「……正解したのに、微妙な気分だ」

「事實は小説より奇なり。と言つではありませんか」

「奇をてらいすぎです。じゃあ、カレンさんは記憶を?」

「はい。実はなくしていません」

やっぱり、と言う思いと、何故と言う思いが頭の中に浮かぶ。いや、なんでのほうも実は見当がついていたりする。

「……三谷様、『白雪姫』をご存知ですか?」

「……うん。たぶん、それは原作のほうを言ってるんですよ?」

「慧眼ですね。話しが早くて助かります」

『白雪姫』。

原作はものすごく……なんというか、ロマンの欠片もない。今回必要な部分は最後の方。毒リンゴを食べて死んでしまったところだろう。

王妃様は何回も白雪姫を殺そうとするけど、ことごとく小人達に

よってふせがれる。そして、王妃は毒リングを使うことを思いつき、白雪姫に食べさせることに成功。

どうしても、このときだけ白雪姫を助けることのできなかつた小人達はガラスの棺に入れ悲しみに暮れた。

そこを通りがかった王子様が死体でもいいから白雪姫をくれと言  
い、白雪姫を貰い受ける。そして、家来に運ばせていると、白雪姫  
が毒リングを吐き出し、息を吹き返す。そして、結婚して幸せに暮  
らし、王妃は真つ赤に焼けた鉄の靴を履かされ、永遠に踊らされた。  
ココでいいたいのは、カレンさんが白雪姫で、王子様がカバネさ  
んだというところだろう。

「それに、王子様は死体ネクロフィリア愛好家だなんて言う話もある」

「はい。私はご主人様を……いえ、王子様カバネをそんな風にさせた  
くなかつた」

「……好きだから、ですか？」

「……はい」

カレンさんは、カバネには前を向いて欲しいんですけどって力な  
く笑った。

好きだからこそ、カレンさんはカバネさんに普通の人を好きになっ  
て欲しかったんだろう。

だから、『自分がカバネさんの恋人だった』。そういう記憶がな  
ければ諦めるだろうと。でも、ここにいるということは……。

「カバネさんのこと、カレンさんは諦められませんか？」

「……はい。私は、どうしようもないくらいに、カバネが好き

ですから」

その頬を、つつと涙が伝う。

好きな人が近くににいるのに、手を出せない。いや、出しちゃいけない。それがどんなに辛いのかはボクにはわからない。

「……知ってますか？」

カレンさんは、ボクをまっすぐに見つめていう。

ボクは何のことかと首をひねる。

「恋というのは、命懸けですよ？」

「……そう、なんですか？」

そんなことを言われても、ボクにはどういふことかわからない。でも、何が言いたいんだろう？

「はい。……では、命が無い私はどうなんでしょう？」

「……」

その言葉に、ボクは何も言えなくなってしまった。

……確かに、恋とか恋愛は全身全霊をかけてすることなのかもしれない。でも、それがダメな時は？

どう、答えればいいのかわからなくなった。

「やはり、何でも知っている面白くないですからね」

「？」

「……私は、例え命がなくなろうとも、カバネのために全てを捧げます。それこそ、私が安心して私が眠れるようになるまで」

とても強い。

ボクは、そう思った。

「ですから、私はカバネをいじり、同じ時を過ごし、旅します。そして、カバネが死んでも、来世ではきっと一緒になろうと思いません」

カレンさんは微笑みながらそういって、ボクの両手を取り、手で包み込むようにして握る。

「ですから、三谷様もどうか、後悔なさいませんように……」

そういうとまるで祈るように目を閉じ、願う。

「……はい」

ボクは、本当ならそんなことをしちゃいけないと言わなきゃだめだったのかもしれない。

でも、ボクにはできなかつた。

「そういえば、何故、私がプリンで動くようにしたのか、わかりますか？」

「いや、そこまでは……」

「簡単ですよ。私、プリンがものすごく好きなんです」



「・・・なるほど。彼女も彼女なら、彼氏も彼氏ですね」

「はい」

そういつと、どことなくうれしそうに顔をカレンさんはボクに背を向け、歩いていった。

「・・・さて、と。どうせ、聞いてたんでしょ？」

残念なことに、ボクの目をごまかすのはかなり難しい。

たぶん、全身に魔法妨害の古代魔法文字エンシェン・トスベルでも書き込まないとごまかせない。

「やっぱり、ごまかせねえか」

「と言うか、アンタはどうしてそれも頭が回るのよ」

「最早、探偵か何かの領域ですね」

「ソラ君、探偵さんだったの？」

「残念ながら、推理小説読んで自分なりに推理して、あつてたことなんてないよ」

「・・・」

何故か、リカからの視線が痛い。

「・・・いや、今は気にしないでおうづ。」

「・・・ボクは、カバネさんにこのことを言いつつもりはないよ」

「・・・そうか」

「うん。・・・まあ、リュウ、恋は命懸けで、後悔してからじゃ遅いんだってさ。スズはどう思う?」

「おい!?!」

「ほえ!?!わ、わたし!?!そ、そそ、それは・・・!?!」

顔を赤らめる二人を放置してボクは歩き出す。

そして、何故か目の前に冬香とリカが回りこむ。

・・・ボク、何かしたっけ?

「ほれ、かのソラ君もそんなこと言ってるけどどうするの、リカ?」

「と、ととと、冬香、な、ななな、何を!?!」

「ほれほれ、後悔する前に!?!それに、どうせやることやってんだし、いいじゃない」

「・・・シユウ、この二人何言ってるの?」

「・・・まあ、そこはさすがソラさんと言いますか」

何故かシユウがリカに同情の視線を送る。

「む、無理いゝ!?!」

ついに、リカが泣きながらどこかへ全力疾走してしまった。  
・・・ちよっと、誰がなだめると思ってるの？

「はぁ・・・。じゃ、ボクはリカをなだめて理事長室に行くよ」

「わかったわ。がんばなさいよ」

「・・・何を？」

ボクは冬香からのよくわからないエールを貰って、リカを探しに行った。

・・・まあ、後悔しないように、生きていきますか。

24話・A LIE（後書き）

作 「とう言うわけで『嘘』をお送りしました」

カレン 「私の、メイド最強伝説はどうでしたか？」

作 「・・・あれ？これってそういう話だっけ？」

カレン 「はい。ですから、次回の私はどうなるのですか？」

作 「あ、うん。確か、伝説のネギを求めてカレンが・・・って、おい！？」

カレン 「・・・洗脳に失敗しました」

作 「何が洗脳！？次回はいつものように短編挟んで次の章だよ！？」

カレン 「そこで、私が伝説のネギを捜し求めるわけですね。わかります」

作 「わかってないよ！？」

カレン 「では、皆様、次回も、私の活躍をごらんになってください」

作 「ないからー！？」

## 番外編1・十二星座と楽しいクエスト？

sideティーナ

「と、言うわけでして……。引き受けてもらえますでしょうか？」

もすごく、豪奢と言うか……。とにかく、すごいとしか言いようのないところでリオンさんと、今回の依頼主さんがしゃべってます。

「……はい。本来、こういう仕事は我々、冒険者ギルドではなく、傭兵ギルドの方が确实ですが……。まあ、魔物のランクがさほど高くなさそうなので……。」

『何がさほど高くない、だか。こっちにや、ティーナがいるのに、ネッ！』

私は頭の中で聞こえた声に曖昧な笑みを送る。

あ、別に二重人格とか、エア友達がいるとか、そういうイタイ子ではないですよ？

それと、紹介も遅れました。

私はティーナ・ライトティカー。『トゥエルフ・コンストレイションズ十二星座』と言う冒険者ギルド所属の一つのパーティィーに入っています。そして、ココでの役職名のようなモノが『ツェヒミ双児宮』。

そして、今話をしているのがリーダーのリオン・ワルダーさん。身長が二メートルもあって、体もすごくたくましい。司る星座が『レオ獅子宮』。

ちなみに、さっき頭の中で語りかけていたのが、星を司る神霊、ステラ。リオンさんは、私達二人がいるから『ツェヒミ双児宮』にしてくれ

た。ステラもみんなと同じようにしてくれてうれしいみたいだ。

「では、そういうことで……。行くぞ」

「あ、はい！」

そう言って扉のほうへ向かうリオンさんに続いて私もぺこりとお辞儀をして出て行きます。

そして、豪華なお家、つまりこの領地の領主様の館を歩いていると、リオンさんがぼそりと言いました。

「……。面倒な依頼だ」

「そうなんですか？」

「ああ……。どうも、ここらで魔物が頻繁に出没し、悪さを働いているようだ。そして、領民から苦情が出てこつという風にしたらしい」

「……。なるほど」

「おかしいな……」

私がステラの声に引かれてそこを見てみると、そこには実体化してステラが……。

「ダメー!？」

「もがっ!？」

ペンダントから出てきかけていたステラの頭を掴んでペンダントに押し戻す。

こんなところで神霊なんか出てきたら騒ぎになっちゃう！

「……ステラ、さっき何を言おうとした？」

『イタタ……。おう？知らないの？ココはかなり平和な町なんだぞ？』

契約していないリオンさんにはこの声が聞こえないので、私が伝えます。

すると、リオンさんは釈然としない表情でステラに言います。

「いや、確かに平和そうだが……」

『いや、平和って言うのは、魔物が襲ってこないって意味で、だ』

「……へ？」

「どうした？」

「いえ、それが……。この町では、魔物が襲ってこないそうです……？」

「……だが、襲われているぞ？」

『さあ？でも、ココに出るのは……確か、『神速の魔王』ネ。噂ではどこかほっつき歩いているらしいけど』

「……」

「……さつきから、どうした？」

「……いえ、魔王にもいろいろな方がいるのだなあって」

「……もしかして、魔王がいないのか？」

『その可能性が高い』

「そうみたいです」

「なら、魔王が交代して方針が変わったというのは？」

『さあ？そこまでは感知できないネ』

「そこまではわからないみたいです」

「そうか……」

今回の依頼は魔物の討伐。

つい最近、近くの岩山に生息する魔物が活発に行動を始めたらしい。

そして、一部の畑から作物がなくなったり、行商のトラックが何者かに襲われたりとか続けざまに起こったみたいです。

「まあ、なんにしてもまずは合流してからだな」

「はい」



「と、言うわけで、討伐だ」

「あの、説明になってませんよ?」

私はリオンさんの説明に頭が痛くなってきた。  
今、私達は泊まっている宿にいます。

「へいへい」

「わかったわかった」

「・・・え」

でも、皆さんはわかったみたいだった。

・・・何で?

「どうせ、口下手なリーダーじゃ無理だつて」

そう言って励ましてくれたのが、一番仲良くしてくれるルピア・デナンドさん。

褐色の肌に赤い髪、体つきが・・・羨ましいです。大丈夫、きっと成長すれば私も・・・。そして、男勝りな女性で、姐御的な存在です。司る星座が『天蠍宮』スコーピオ。

「そうそう、そこは、ティーナちゃんが後で説明してくれるだろ?」

人のいい笑みで私にそう言ってくれたのは、アーロン・ダリウスさん、通称アルさん。華奢な体つきの男性で、よくルピアさんといいます。

私の考えでは、二人は実はできて……。

「あ、アル！ビール買って来て。依頼達成した後に打ち上げる用のないから」

「いや、今言うことじゃ……」

「買って来い」

「……はい」

「……無理ですね。」

ちなみに、司る星座は『サジタリウス人馬宮』です。

私はアルさんにかんばれと心の中でエールを送っておきます。

「……他はどうした？」

「いや、どこかに行っちゃってさ」

「……そうか」

どうしようかと考え込むリオンさん。

……確かに、コレでは少ないですね。

「はい、はい！」

すると、私の身につけているペンダントから元気な声が。

ペンダントから三十センチほどの、小人のような可愛らしい女の子が現れます。

「ステラか？どうした？」

そう、この子がステラ。

見た感じは小人のようですが、れっきとした神霊です。よく子供っぽい言動を連発しますが、神霊です。私も、妹のような扱いをしますが、神霊です。

「ティーナが行けば万事解決、ネツ！」

「・・・却下だ」

「ええ〜」

「ダメだよ。私の力をそんなに使っちゃ」

「でも、絶対にティーナが行った方がいい！それもすぐに！勘がそう叫んでるネ！」

「「・・・」」

「アハハ・・・」

リオンさんも、ルピアさんも若干呆れてしまっている。すると、とんとんとノックをする音が聞こえる。

リオンさんが一言だけ入れと言つと、二つの人影が入ってきました。

一人はルピアさんにパシられてしまったアルさん。もう一人は・

。

「リーダー。やっとお話終わったんですか」

「……ああ」

のほほんとした、おっとりした感じの女性。

セフィア・ノールトンさん、通称セフィさん。ルピアさんが私のお姉さんのような存在なら、セフィさんはお母さんのような存在でしょうか？司る星座は『白羊宮<sup>aries</sup>』。

「わかりました！では、行きましょうー！」

そういうと、鼻歌を歌いながら準備を始めるセフィさん。

……あの、まだ説明してませよね？

「セフィ、アンタ、何をしに行くかわかってるの？」

「はい。討伐ですよね？」

「なら、アンタは無理でしょ」

セフィさんは、数少ない『治癒』の属性。

その魔法にみんな、何回も助けられたとか。

「でも、怪我しちゃいますよ？」

「大丈夫だ。今回はそんなにランクの高くない、コボルト相手だ  
そうだ」

「・・・あれ〜?」

リオンさんが言った言葉に首をかしげるセフィさん。  
・・・どうしたんでしょ?

「あの、今回はそういうことになっていますが?」

「おつかしくな〜?」

「何だよ? アンタが領主の館に直接聞きに行ったわけじゃないで  
しょ?」

「でもね、ちょっと道に迷って森の近くまで行っちゃったんだよ  
ね。」

実は、この人、ものすごい方向音痴だ。

それも筋金入りで、誰かが見張っていてもいつの間にかいなくな  
る。

でも、不思議と待ち合わせとかの時間にはちゃんとつく。

「・・・要するに、そこで何か聞いたの?」

「そうそう。森の警備してる人に聞いたよ〜。つい最近、あの森  
に『死神』と『悪魔』が出るんだって〜」

「「「「「」」」」」」

「あれ? みんな、どうしたの〜?」

何だか、話が大変なことになってきました。

「大変な事になった」

「あの、どうします?」

その後、私達は一旦情報収集のために町へと行きました。そして、聞き込みをして、『死神』と『悪魔』の情報を集めました。

そこでわかったことは……。

まず、『死神』も『悪魔』も魔物が活発になり始めた頃に出てくるようになってきたことです。おそらく、どちらも魔物の類でしょう。

そして、大抵その二つはセットで行動しているとのこと。

格好は二つともボロボロのフード付きマントをまとっていて、魔物にしても何の魔物かわからなかったみたいです。

中には、小指で倒されたとか、ペンに負けたとか、野菜をやられたと思えば次の日には何故かお金が置いてあったとか、拳銃に大勢のむさいおっさん達が縄で縛られてさらし者にされていたとかわけのわからないものもありましたが……。

「そして、その『死神』と『悪魔』は突然現れて襲ってくるらしい。場所もランダム。まさに神出鬼没だ。……だが、聞き込みで詳しい場所を教えてもらうと、こうなった」

そういうと、リオンさんは森の地図を取り出し、みんなに見せま

そこには赤い点がたくさんついています。たぶん、そこが『死神』と『悪魔』が現れた場所。そして、重要なのが……。

「……ココを中心にして、出ている？」

「そういうことだ」

確かに地図のとある点を中心に、円になるよう点が配置されています。

「今回受けた依頼は『コボルトの討伐』だ。だから、俺は無理に来いと言わ」

「おし、みんな、準備しな！」

ルピアさんがそういうと、皆さんは準備を始めました。私もその一人です。

「……俺の」

「いや、いつものことだし、リーダーのおせっかい」

「やっぱり、ココに行くんですか？」

「そうだろうね。リーダー、作戦は？」

「ああ。むしろ、コボルトよりもこちらの方が危険かもしれない。だから、来たいものだけ」

「ココは、少数精鋭のほうがよくな？」

「相手は二人、そんなに人数がいても・・・か」

「じゃ、私がやります。これでも、力がありますから」

「おっしゃー！ティーナ、よく言ったぞ！」

「私もこっちですね〜 怪我しても大丈夫ですよ〜」

「おし！アル！アンタもこっち来なさい！」

「え？僕は・・・はい、ワカリマシタ」

「・・・俺も、行く」

こうして、私達は急遽、『死神』と『悪魔』の討伐も行う事になりました。

私とステラ、リオンさん、ルピアさん、アルさん、セフィさんが『死神』と『悪魔』の討伐。残りでコボルトの討伐。たぶん、皆さんがいるから大丈夫です！

「・・・ツ・・・歩きにくいわねえ」

「まあ、結構薄暗いしね」

「大丈夫か？気をつける」



「あ、私は大丈夫です」

そして、私の肩に乗ったステラが代わりに答えます。

「ティーナは無意識に フィジカル・ブースト 身体強化 してるからな。たぶん、この中じゃセフィのが大変……」

「呼びましたか」

振り向くと、そこには大きな荷物を背負ったセフィさん。

一応念のために聞いてみると、怪我したときのための医療用品がたくさん入ってるみたいです。

しかも、本人はニコニコと微笑み、汗一つついていません。そんな細い体のどこにそんな力があるのか、不思議です。

「……そうでもなかったネ」

「そうか……。もうすぐ着くぞ」

リオンさんが地図を見ながらそういうと、突然強い風が吹きます。あまりの風に、リオンさんがつい手から地図を離してしまい、どこかへ吹き飛びます。

そして、どこからか現れたのか、二つの人影が。その片方の人影が宙に舞った地図を片手で掴むと、それを見ます。

「人？」

「こんなところにか？」

「……まさか」

その人影は地図を眺めると、突然握りつぶし、風がその周囲を渦巻くのがわかります。

次の瞬間には、細切れにされた地図が空へと飛んでいくところでした。

地図を掴んでいた人影がもう片方の人影に目配せをすると、それで全てを理解したのか、こくりと頷きます。

そして、一本の大鎌を取り出しました。

ボロボロのフード付きマントに、大鎌を構えたその格好はまさに……。

「『死神』……!?!」

「じゃあ、そっちは……!」

『悪魔』と言おうとしたとき、『悪魔』のほうを見ると、そこには何故かペンのようなものを構えた『悪魔』が……。

「……何、あれ？」

「……たぶん、噂の『悪魔』？」

「武器は、ないのか？」

リオンさんの言葉に反応したのか、ペンを動かします。すると、ペンを走らせた後には光の線が残ります。そこには文字で『ペンは剣より強し』と、力強く書かれています。

「・・・ねえ、アイツ、殴っていい？」

「・・・たぶん？」

それが合図になったのか、『死神』と『悪魔』が猛スピードで駆けってきました。

そして、私達も向かい撃つためにそれぞれが構えます。

死神は明らかに人を超越したスピードで私達に接近し、その大鎌を振るいます。

ルピアさんが大剣を、振るい、アルさんが背負った弓矢で死神を攻撃しますが・・・。

「なん、だよ・・・この力!!」

死神とルピアさんがつばぜり合いを始め、そこで死神が鎌を引きます。

すると、込めていた力のせいで、ルピアさんが前につんのめり、そこへ死神の追撃が光のような速さで迫ります。

下からすくい上げるように放たれた一撃で、ルピアさんが砲弾のように吹き飛びました。

「ルピア!!」

「マジ!?!」

「ティーナ! 『悪魔』!」

「え・・・!?!」

ステラに言われて『悪魔』のほうを見ると、そこには複雑な記号

のような、文字の様な物を宙に書いている姿が。

「やばい！？あれ、エンシェント・スベル古代魔法文字か！？あんなの、使えるやつなんか見たこと無いぞ！？」

何を言ってるのかよくわからないステラに説明を求めようと思つたとき、文字を書き終わったのか、『悪魔』はさつとペンを振りまです。すると、文字の列がこちらに矢の如く放たれ、ステラに当たります。

「ぶぎゃー！？」

「ステラ！？」

ステラに当たった文字は、ステラをまるで拘束するかのようにつき付いていました。

でも、目だったダメージはないみたいですけど……？

「だ、大丈夫……。でも、いざって時の精霊魔法が使えないかも……」

「そ、そんな事が……！？」

「ティーナ、来る！！」

ステラの声でとつさに私は魔法で防御します。

そこには、刀で切りかかってくる悪魔が。

私は魔法の出力をあげ、弾き飛ばそうとすると、悪魔は刀でそれを切り裂き、私の目の前に。

どういふつもりか、悪魔は武器を消します。

「っ！・・・舐め」

よく見ると、掌に光の塊が。

そこから、突然棒が延びてきます。

私はとつさに後ろへ飛ぶことで攻撃を回避。

フィジカル・ブースト  
身体強化のおかげです。

「な、何なんですか、あれは・・・？」

「あんなの、あばずれ年増ぐらいしかできないって！」

それ、誰ですか？と聞こうとして、  
またも攻撃を受けます。

また、文字を飛ばしてきました！

「同じ手は・・・！」

「・・・」

避けた先に回りこまれました。

無言で棒を振るい、私にトドメでもさそうとしているのでしょうか？

「させない！」

「ルピアさん！」

今まで、姿がなかったので心配していたのですが、どうも無事だったようです。

死角からの一撃、完全な不意打ち。でも、相手は難なくそれに対

応じて見せました。

棒を後へ突き出し、ルピアさんを牽制。ルピアさんは一旦距離を取り、流れるような動きで大剣を悪魔に叩きつけようとします。そして、今度は悪魔が下がります。

「大丈夫なんですか!？」

「ああ！セフィに治してもらった。で、何もんだ、あれ？」

「わかりません、それに、ステラの精霊魔法を無効化されました」

「・・・嘘、でしょ？」

ありえない。だから、わからない。

でも、倒さないことにはどうしようもない。

ちらりとリオンさんたちをうかがうと、そこには蹴りを主体とした徒手空拳で相手に猛攻を仕掛けるリオンさんと、その援護をするアルさん。でも、相手はそれをもともせず戦っている。でも、それでもどこか余裕を感じる。

なら、やることは決まっています。

「すみません、時間を・・・」

「オツケー！」

そういうと、悪魔に向かってルピアさんが飛び込みます。

悪魔はそれがわかっていたかのように左手に持っていた武器と、右手に持っていた棒を取り替えます。

でも取り替えた武器は、とても小さな、掌に収まってしまうようなほど小さなナイフ。

「私を、舐めるなッ！」

「……」

相手は無言を貫き通します。

そして、すつと横にずれ、ナイフを一閃。

キンと澄んだ音を響かせました。

何事かと私が見ると、そこには小さなナイフで刃を両断されたルピアさんの大剣が。

「……はあ!?!」

ありえ、ないです。

それこそ、ドワーフの秘術で鍛えられた刃物でもない限り。

噂では、ドワーフの鍛えた剣に斬れないものはないとまで噂されるもので、アイティファクト魔導宝具の剣は、大抵がドワーフの作品であると言われています。

「る、ルピアさん!できました!」

「わかった!」

急いで私の傍に戻ってくるルピアさん。

悪魔は、何故か追ってきません。

ですが、好都合です。

「シューティング・スター・アサルト  
流星の強襲!」

上空で魔力が渦巻き、いくつもの光が流星の如く降り注ぐ。

そして、それを見た相手は、自分の左手に持った棒をまた刀に変化させ、右手に持ち替えます。

構え、居合い切りのような形で刀を何回も振りぬくと、白銀の斬撃がその数だけ放たれ、流星の全てを相殺。

爆発して煙が舞う中、後を誰かに取られた気配が……。

しまったと思ったときには、ルピアさんの首の頸動脈辺りにはナイフが、私の背中には刀が突きつけられていました。

チェック・メイト  
王手詰み。まさにそれでした。私は死を覚悟しました。

「……ちょ！？離せ！」

ルピアさんもダメだと思いつつも抵抗しようとしません。すると、信じられないことが発生します。

悪魔は、わかったとでも言うようにあっさり私達を解放。

あっけに取られる私達をよそに悪魔はまだ戦闘を続けるリオンさん達の方を向きます。

「終わったよ」

声、出せるんだとどうでも言い事を思いつつ死神を見ると、死神は消えたかと思うようなスピードで消失。いつの間にか悪魔の隣にいました。

リオンさんもバランスを崩し、地面に倒れ、みんながあっけに取られる中、悪魔は私のほうを向いて一言言いました。

「コレで、一勝一敗って事で」

「あの、何のことですか？」

「いや、ボクですよ？」



そういつと、なんの躊躇いもなく、死神と悪魔がフードを取る。  
そこから現れたのは……。

「ソラ君と……リカ、さん？」

「どづも」

ちょうど、一ヶ月ぶりの再会でした。

## 番外編2・十二星座と楽しいクエスト？

sideティーナ

「何で、こんなところに？」

「……いや、その……ちょっと、手伝いに？」

「こんな、森の中ですか？」

「まあ」

ソラ君はものすごく曖昧な笑みを浮かべると、手伝いに来たと言明する。

「……でも、納得がいかないことがあります。」

「何で、私達を攻撃したのよ」

「いや、ココはあの時の借りを返したり、ココまで強くなりました！つてやるべきかなと……」

「……いや、いい迷惑だったよ」

「それに、あの地図が既にいろいろとアウトでした」

「地図が？」

「……ちょっと待ってください」

そういうと、ソラ君は私達が進んでいた方向に向かうと、息を大

きく吸い込み……。

いきなり犬の遠吠えを実行。

若干、ソラ君の頭は大丈夫なのかと心配になってきたころ、がさがさと近くの茂みが揺れます。

狼でも近寄ってきたのかと攻撃態勢に入りますが、ソラ君にやめるように言われます。

そして、茂みから出てきたのは、一匹のコボルト。

「魔物!？」

「何で……!？」

「……ダメ」

すると、今までソラ君の影に隠れていたリカさんが大鎌で私達を牽制します。

「何でよ!?!魔物よ!?!」

「……アレは大丈夫」

「だから、何で!?!」

「\*\*\*\*\*」

「……なあ、ティーナ、あれ、何してるの?」

さ、さあ?あの、ソラ君はさっきからなんで犬の物まねをしているんでしょうか?

しかも、コボルトに向かって。そして、ありえないことが。

「コボルトがこくりと頷くと、トテトテと私達の前を歩いていきます。」

「じゃ、あの子について行ってください。それと・・・」

まるで、何もなかったかのように言うソラ君。

正直、頭がついていけません。

「もし、コボルトに攻撃してみてください。後々、大変なことになると思います」

そういうと、ソラ君は何の迷いもなくコボルトについていき、リカさんもそれに続きます。

私達は狐につままれたような気分でしたが、おとなしくソラ君について行く事に。

すると、しばらくして開けたところに出ます。

コボルトは地面をとんとんと叩くと、そこが開き、大きな穴ができました。

穴を見てみると、そこには丁寧に梯子までついています。

コボルトは梯子を無視して飛び降りていきました。

「じゃ、ここの下に下りてください」

そういうと、ソラ君も梯子があるにも関わらず飛び込み、更にはリカさんまでもが。

私達はどうしたものかと顔を見合いますが、意を決して下に行く事にしました。

「じゃ、俺達は梯子で行こう」

私達は順番に梯子を使って降りていきます。

そして、下に向かうに連れてどんどん明るくなっていき、一番下につく頃には昼間と変わらないような光が中を照らしていました。

しかも、更に驚くことが。コボルト達が……。

「……掃除、してる？」

そう、お掃除をしていました。

それも、せつせと。

ばうばう言いながらいろいろな所を隅々まで掃除していました。

何故か掃除機やハタキ、更に雑巾まで使つての本格的なものです。

……夢でも、見ているのでしょうか？

「すみません！こつちです！こつち！」

声に反応してそちらのほうを向くと、そこにはソラ君とリカさんが。

私達は混乱した頭でソラ君たちについて行くと、そこは普通に台所。

今、気付いたんですが、ココ、地下にあるにもかかわらず、私達が普通に暮らしているような設備です。

呆然とした表情で見えていたからか、ソラ君が決まり悪そうに言います。

「すみません。なんか、掃除中で応接間みたいなところが使えないらしいんですよ」

違います。

聞きたいこと、そこじゃありません。

しかもあるんですか、応接間？

本格的に頭がおかしくなったのかと思っていると、そこへすと湯飲み茶碗にお茶を淹れて誰かが渡してくれました。

「あ、どう、も……………」

反射的にお礼を言うと、その先にはつぶらな瞳に、エプロンを装備したコボルトが。

……………犬種は、柴犬ですか。

コボルトママ（命名）は口を開けて何かを言う。

「……………」

でも、私達には犬がほえているようにしか聞こえない。

「……………」

そこで、ソラ君は何かを言う。

「粗茶ですが、だって」

「……………あの、まさかとは思いますが」

「ああ、わかりますよ。コボルト語的なもの」

「……………」

最早、何も言うことが見つかりません。

「お前、何者だよ！？つか、エンシェント・スベル古代魔法文字を解除しろ！！」

「うお！？あ、ゴメン、すっかり忘れてた！」

そういうと、ソラ君はさっと指を振って、ステラに巻き付いた文字を分解した。

「で、ボクが何者って言われてもね……。ボクは三谷空志。元極普通の高校生で、現『月』の属性を持つ魔法使いだよ」

「んな事聞いてない！？……って、お前が『月』の持ち主！？マジで！？」

「あ……うん。一応」

ソラ君は私の肩に乗っている小人が気になるのか、私に視線を送る。

……あの、私の方が知りたい事がたくさんあるんですけど？

「あの、この子は、私の契約精霊でステラです。あの、驚かないでくださいよ？この子、『星』を司る神霊なんですけど」

「……へ〜」

……。。。

あの、それだけですか？

もっと、こう、『はあ！？』みたいな感じになるんじゃない？

「要するに、ルーミアの知り合い？」

「おまつ！？何であのアバズレのことを！？」

「……いや、普通に会ってるし」

「そうか、だから変な魔法を……！でも、契約してんのか？」

「いや、してないけど？それに、一応言っておくと、ルーミアさんコントロールに教えてもらったのは、マナの操作ぐらいだよ？」

「……コレだから、『月』はイヤなんだ」

そういうと、何故か泣き崩れるステラ。

……何で？

「でも、おかしくないですか？私達、スリーシンボル三魔源素はそれぞれの属性を司る神霊に自分の力の使い方を教えてもらってますよね？」

「……なにそれ、初耳なんですけど？」

「……アタシも知らない」

「ちよつとゴメン」

そういうと、ソラ君はケータイを取り出し、どこかに連絡する。何かを話していると、突然、私の目に魔法の反応が出る。何か、ココに来る……！

「ほれ、来たぞ」

「おまー!？」

「ん？……誰かと思えば、がきんちよか」



「誰かがきんちよだ！？年増！！」

「わかったわかった」

「なんかそついうのむかつく！！」

「す、ステラ！初対面の人にそんなこと言っちゃダメ！」

「誰が初対面だ！コレが年増、『月』を司る神霊のルーミアだ！」

・・・はい？

「でも、この神霊、魔法使ってなかった？」

そう、ですよ？

よく、神霊は魔法を単独で使えるという話がある。

でも、アレは間違いのようです。

神霊も精霊と同じ。そのため、人と契約し、精霊魔法としてしか行使できないとステラが言っていました。

「それが、コイツはできるんだよ！」

「わらわ、すごいからのう」

どうも、すごいらしい。

「何で、教えてくれなかったんですか！」

「わらわの教育方針は自習でのう」

「・・・それって、ただの放任主義」

「って、結局、君は何者かな？」

やっと正気に戻ったアルさんが話を元に返してくれました。

「確かに、神霊は知ってる。何故か魔物の言葉も話せる」

「しかも、私の剣を斬ったわよね!？」

「とりあえず、話が長くなるので・・・お茶でも」

そういうと、ソラ君は説明し始めました。

この四月、何の因果か『災禍の焰』のラズさんのおかげで魔物の町に飛ばされ、自分の力を知り、いろいろな事件に巻き込まれ・・・

明らかに、苦労している人生を送っています。

「・・・お前が、『結界の魔王』の知り合い？」

「と言うか、師匠に近いです」

「・・・息子とは友達」

「・・・あの、さ・・・。リカ、もっと堂々と話そうか。自分が吸血鬼ヴァンパイアだって言ったのはえらいけどさ」

確かに、現在進行形でソラ君の陰に隠れているリカさんが吸血鬼ヴァンパイアだとはわかには信じがたいです。

でも、あの人間離れした力。そうでもなければ納得しません。

「でも、何でこんなところにいる？『結界の魔王』は迷いの森に  
いるって噂だぞ？」

「それに、何で人間を片っ端から狩っている？」

リオンさんが目に剣呑な光を宿し、返答によっては……。と言  
う目をしています。

「狩るって……。さっきの地図、ここがその中心です」

「……。それに、アタシ達は気絶させて、あるいは逃げていかせ  
たりしてしていただけ」

「そうそう。そういう風をお願いしたし、この子達は殺さないよ」

すると、今度はどこからともなく一人の男の人が現れました。

「……………軽い人しか見えませんが、本当はどうなんでしょ  
うか？」

「……………アンタは、誰だ？」

「『閃光の魔王』、かな」

さらりと、ものすごいことを言われた気がする。

「……………もう一度目の前の男の人を見る。」

「今、アンタ、何て？」

「『閃光の魔王』、かな」

いえ、もう一度って意味じゃ……。

「本当にですか？」

「本当にだよ」

……嘘だ。

こんな、軽くて、町でのナンパを生きがいにしてそんな人が、新進気鋭で『結界の魔王』と仲がいいと噂の『閃光の魔王』なわけが無い。

「まあ、そういうわけでボクは龍造さん、つまりは『結界の魔王』経由でこの、ちゃんぽらんなライネルさんという『閃光の魔王』の依頼を受けたんだ」

どうも、このちゃんぽらんな人が『閃光の魔王』みたいですよ。

「だが、ココは『神速の魔王』の領地じゃ？」

「あ、それは僕の父さんです」

「ライネルさんの？……あの、放浪癖のある、龍造さんの古い友人のヴァネルさん、でしたっけ？」

「そうそう。よく覚えてるね」

目の前で、人間と魔王が繰り広げるフレンドリーな日常会話についていけない。

いつの間にか、リカさんはコボルトの子供たちっぽいものに引張られてどこかに行ってる。たまに、にゃ〜と猫の断末魔の叫びが聞こえる気がします。

「で、今回この子達に頼んだ内容だけど・・・」

ついに、本題です。

ココまで、長かったです。いろいろと常識を破壊されて既にK<sup>ノックアウト</sup>寸前です。

一体、どんな壮大な理由があるのでしょうか？

「僕はこの子達に引越しの手伝いを頼んだんだ」

「「「・・・」」」

今、ものすごく日常的な単語が聞こえた気がします。そんな、日常的な理由で、呼び出したんですか？

「で、でも、何で、それがこちらへの攻撃につながるんですか？」

「だって、僕達魔物だよ？見つければ、すぐに攻撃されて終了。で、引越しの準備の間、あの二人にこちら辺にいろいろな噂を流し

て、近づかないようにしてもらったんだ」

「で、近寄ってくるような物好きには鉄拳制裁をしました」

「・・・まさか、魔物が活発になった理由って」

「引越しの準備ですから。慌しくなるのはしょうがないです。ちなみに、行き先はライネルさんの統治する『霧の谷』です」

「でも、近くの畑から作物が・・・」

「あ、アレは子供のコボルト達の悪戯ですね。その後、ボクがその家の作物のところに盗った作物とお金を少しだけ一緒においておきました」

「だが、最近行商が・・・」

「あ、ここらへんに山賊が出てたんだ。それは僕が適当に潰しておいた」

「こともなげにそう言う。」

「・・・なんて言うか、思っていた魔王のイメージと全然違う。」

「・・・魔王さんて、実はいい人たちなんですな」

「ところが、そうはいかないんだな、コレが」

「ライネルさん、龍造さんは魔王達の派閥で、ハト派にあたる平和派<sup>ピース</sup>。でも、逆にタカ派にあたる強襲派<sup>アサルト</sup>なんて言うのがあります」

「そうそう、君達が戦った闘技場近くの魔王もそうだよ」

「・・・舞さん、ですか」

「そうそう、でも、アレは面白かったね。龍造さんと一緒にまったく関係のないシャニアさんと優子さんに瞬殺されてたね」

何が面白いのか、思い出し笑いをしています。

「・・・実は、皆さん龍造さんと舞さんに会ったこと、というのが見たことあるんですよね」

「・・・嘘だよね？」

「いや、覚えていないかもしれませんが、ボク等のチームが当たったんですけど・・・。その時、真っ黒いヤツがケータイで誰か呼んだ試合がありませんでしたか？」

・・・なるほど、あの試合ですね。

アレは、忘れるなど言う方が無理なくらいに悲惨な試合でした。

おそらく、あの呼ばれていた人達が・・・。

「あの、呼ばれていた人にボコボコにされていた方が、龍造さんと舞さんなんですよ・・・」

「「「「「」」」」」」

誰か、常識を返してください。

あんな、魔王がいたら、世界が平和すぎます。というか、魔物相手に必死に生きている私達がバカみたいに思えます。

「まあ要するに、人間に良い人と悪い人がいるように、魔物にも良い魔物と悪い魔物もいるってコト。たぶん、今回はコボルト達の討伐依頼に来たんだよね？」

相手はニコニコと笑っています。

ただ、私達にはどうしてもそれが恐怖としてしか捉えられません。

「ココに、コレだけのお金がある」

そういうと、『閃光の魔王』・ライネルさんは小袋を取り出すと私達の目の前に置きます。すると、その袋の口から少しだけ何かココロと転がってきます。

それは、綺麗な装飾の施された装飾品の類。

「僕の領地、『霧の谷』ではこういう細工が得意だね。コレを売れば相当なお金になるはずだ。それに、魔法具としての性能も一級品。コレをあげるから、ここのコボルト達には何もしないでね」

ニコリ。そんな音が聞こえそうなほどの笑み。

けど、放たれているのはものすごいプレッシャーだ。

もしココでノーといえば、どうなるかは簡単に想像できる。

でも、出されているのは破格の条件だと思う。相手は、その気になれば脅して、こっちに何の得もない申し出を受けさせることもできる。

従えば、依頼料よりも高いお金、あるいは装備。断れば……  
・絶対的な『死』。

何で、ソラ君が攻撃しないように言ったのか、今わかった。

ココには、本物の魔王がいたからだ。

リオンさんは冷や汗を流しながらもこくりと頷く。



「そう、よかった」

そういうと、今までライネルさんから放たれていたプレッシャーが嘘のようになくなる。

そこで、ようやく自分が息を止めていたのがわかり、必死に酸素を取り入れる。

「じゃ、もうすぐコボルト達の引越しの準備が終わるから。それまでゆっくりしてて良いよ」

そういうと、ライネルさんは僕も何か手伝うよとコボルトママに良いながら楽しそうに手伝いを始めた。

「……えと、大丈夫、ですか？」

「……何とか、な」

「あれが、魔王……」

「……それが、あの試合で」

「「「……」」」

ものすごく、微妙な空気になってしまいました。

「まあ、ライネルさんもやりたくてやってるわけじゃないですよ？ただ……どんなにあがいても、ライネルさん達は魔物、ですか」

ソラ君は、自分のことのように悲しそうな顔で言います。  
「……ものすごく、不思議な子だとは思いましたが……」

「……小僧は、何故魔物に味方する」

「別に、味方とかじゃないですよ。それこそ、ライネルさんの言うとおり、魔物にだって『良い魔物』に『悪い魔物』だっています。……でも、ボクは、知ってますから」

「知ってる？」

「龍造さん、ライネルさん、舞さん……そして、遙か昔に存在した勇者・橘薫は、魔物と人が共存できるような世界を望んでいるんです」

「橘、薫、だと!？」

「……あれ?知ってるんですか？」

「知ってるって、有名すぎるじゃない!」

橘薫。通称は『勇壮なる勇者』。

勇者の中の勇者と言われる勇者。女性でありながらも、どんな困難にも一人で立ち向かい、自らが生み出した魔法で敵を薙ぎ払った、最強の一人に数えられる勇者。

「……龍造さん、そんな人と……」

何故か頭を抱え込むソラ君。

「……どうか、したか？」

「いえ、こつちの話です。……なんか、ボクがコレを話すと歴史が壮大にひっくり返るので、やめておきます」

「そうなるかのう。まさか、『結界の魔王』とその『カッコイイ女勇者』が結ばれておるなどとなあ……」

「アンタ、いきなり出てきて何を言い出すの！？カミングアウトしちゃったよ！？」

「……あの、もう驚き疲れました」

こんなところで、歴史の裏側を垣間見るとは思いませんでした。本当に疲れてしまいました。

「……あの、それと、貴女の武器、壊しちゃってすみません」

「……そういえば、そんなこともあったわね」

既にルピアさんは手遅れです。

もう、社会復帰できるのかどうか……。

「お詫びと言っちゃなんですけど、ボクの自称・師匠を名乗るドワーフの試作品を渡しますので」

そういうと、ソラ君は一枚の魔術符カードを取り出します。

それを起動させると、その魔術符カードに描いてある円の中心に手を入れます。

最近になって出てきた、カバンの魔術符カード。そこに多くの武器をし

まっであるみたいです。

「……ふん！」

軽い気合を入れる音と共に金属音を響かせながらいろいろな武器が雪崩のように出てきます。

……と言うか、全部の武器の名前を言えるのか、自身が無いです。

「……おい、コレなんだ？」

「……ああ、それはFK。某魔王対策にと悪ふざけで考えたものです」

あの、どう見ても機関砲バルカンなんですけど？

「あの、FKってどういう意味ですか？」

「ファール・キラー バカ殺しです」

……こんな、ふざけているとしか思えない人にルピアさんが気に入るような武器があるわけ……。

「……お、おい、まさか、コレって、ぜ、全部、ドワーフの秘術が？」

「らしいです。そうじゃなければ、ボクのナイフであんな大剣は斬れません」

……まさかの、全部、アーティファクト 魔導宝具候補！？

ルピアさんの目に生気が戻り、狂ったように武器を物色し始めます。

よかつたの、でしょうか？

それから、私達の精神衛生上、問題のない話をして、何故かコボルトさん達の引越しを手伝って宿に戻ると、そこにはみんながいました。

「……一応聞くが、どうだった？」

リオンさんが酷く疲れた声でそう言いました。

「すみません、見つかりませんでした」

「……そうか、よかつた」

「え？よかつ、た？」

はい、本当によかつたです。

下手をすれば、この中の一人が帰らぬ人になっただけでもおかしくありませんでした。

「あの、リーダー、酷く疲れていますけど……そんなに、強かつたんですか？」

「……ああ。俺達が負けた」

「負けたって……」

「おいおい、じゃあ、どうすんだよ!？」

「問題ないわよ。別に、放っておいてもよかった類だから」

「・・・何で、ルピアだけ元気なんだ？」

「・・・と言うか、その武器、どうしたの？」

「あの依頼は結果的に達成された。けど、報酬は貰わないぞ」

リオンさんがそういうと、皆さんは呆気にとられた表情をしてから、猛反発。

それにリオンさんはライネルさんから貰った小袋をドンと置いて、みんなに見せます。

それを見ただけで、皆さんの猛反発もなくなりました。

「・・・あの、コレ、どうしたの？」

「・・・魔王・・・むしろ、悪魔と契約して貰った」

「・・・はい？」

「ゴメンね・・・。今日は、わたし達疲れちゃった・・・」

「だから、説明は明日にさせてください」

「私からも、お願いします」

「・・・」

もはや、ペンダントに籠ったステラは何も言わない。

そういうと、『死神』と『悪魔』の討伐チームは早々に寢床に着

いた。

翌朝、みんなにこのことを説明して私達に病院へ行くように言われたのは当然の流れでした。

番外編 2・十二星座と楽しいクエスト？（後書き）

と言うわけで、ごく普通の人から見れば予想のはるか斜め上を行くオチでした。

ただ、ボケたかっただけです。

では、今後も作者夜猫の小説を読んでいただければ幸いです。



### 番外編3・中学生達の一日

side 春樹

昼下がりの午後。今日は龍造先生達が用事とかで普通に授業を受けている。

他の先輩達もそれは同じだろう。

ちなみにココは間学園の中等部、二年B組。他のみんなは夏が終わった秋のちょうどいい暖かさに、睡魔との大バトルを繰り広げて・・・。

「……ZZZ」

……いたりとかはしなかった。

ほとんどの人達が負けていると言う悲しい状況だった。

何で、こんなに楽しいのにみんなは寝たりするんだろう？

シャンさんに言わせると「頭がおかしいですう!？」と言われてしまいそうだけど。だって、僕は数年の間をあのギルドのせいでパ……にしているし……。

そんなことを考えていると、不意に景色がガクツとぶれる。

何事かと思っていると、頬杖をついていた手の平からすべり落ちてしまったらしい。

自分もどうこう言いながら眠りかけてしまっていたようだった。

人のことは言えないなあ。

すると、タイミングよくチャイムが鳴った。

「時間が……どうでもいいが、寝てたやつは自分で何とかしろよ」

先生がそれはどうかと思うけど、とにかくそう言いながら教室を

出て行った。

それを見ていると後からつつかれる。

まあ、僕の後ろにいるのは……。

「珍しいね。平地君が居眠りなんて」

「まあ……疲れているのかな？」

三谷さんだ。

フルネームは三谷海美。何の因果か、僕はソラ先輩の妹さんと同じクラスになった。

ソラ先輩と同じで魔法を知っているのかと思ったけど、そんなことはまったくないらしい。むしろ、まったく知らない。

まあ、彼女自身が世話焼きな性格なのか、僕に何かとしてくれる。ちなみに、ソラ先輩の妹かと疑うくらいに全然似ていない。

正直にソラ先輩に言つと、『よく言われる。ついでに、兄がこんなヤツなのに、妹が可愛いかもね』と笑いながら言っていた。それなりに兄妹仲はいいみたいだ。

「へえ……あの、兄貴もやってるっていう特別な授業？」

「たぶん？」

「まあ、がんばんなよ！」

そう言いながら三谷さんが僕の背中をバシバシ叩いてくる。

正直な話、結構痛い。

そして三谷さんは次の授業の用意をし始めた。

「こーんにーちわーですう！」

「・・・シャン、うるさい。迷惑だ」

「はーるきくーん！どーこですーう？」

放課後、もうそろそろ帰るかなと思っていると、やたらと賑やかな人達が来た。

本来なら頭の上辺りにキツネ耳を出し、更にお尻のあたりからキツネの尻尾を出しているはずの獣人の双子、シャンさんとシャオさんだ。ちなみに、耳や尻尾は魔窟ネストに人型以外の魔物を見た目とある程度の力の制限を掛ける為の魔道具の作成に成功しているらしい。確かに、魔物の力は強大。下手をすれば人間なんか簡単に死んでしまう。それを制限する物があるというのは本当にすごい。いつか絶対に魔物と人間は分かり合えると思える。

まあ、そんなことよりも・・・二人はどうしてココに？

この二人は三年生のはずだけど？

「一緒に帰るですう！」

「どうせ、いつもより早く帰るんだから一緒に帰りましょうとシヤンが言いました・・・。こうなったシャンはどうしても止まりません」

特徴的な語尾に続いてシャオさんが丁寧に説明してくれる。

どうも、僕のためにわざわざココまで迎えに来てくれたみたいだった。

「・・・本当は、シュウがいなかったただけなんですけど」

「・・・」

どうも、僕はシュウさんの代わりらしい。

いや、どう考えても代わりにはならない。

まあ、半ば予想していた事実のカミングアウトを聞いて僕は帰りの準備を始める。

ふと、何故か僕は顔を上げてある一点を見る。

扉から外を見ると、そこには結構顔立ちの整った男子に言い寄られていた三谷さんの姿があった。

どちらも中々にいい雰囲気醸し出している。

「・・・どうしたのですう？」

双子の先輩達も僕の視線が気になったのか、僕の視線の先を追う。

「・・・ソラさんの、妹さん、ですか？」

「確か、海美ちゃんですう？・・・何だか、いい雰囲気ですう」

シャンさんが女子らしく、あんな感じにシュウと・・・と呟いている。

ただ、何故か僕にはそうは思えなかった。

いや、三谷さんの方はまんざらでもなさそうだ。でも、相手の方が何となく嫌な感じがする。何故かはわからない。

そんな僕の表情を見たからか、シャオさんが怪訝な顔で僕に尋ねてくる。

「どうしたんですか？浮かない顔をして？」

「何て言うか、嫌な感じが・・・」

「あの人が、ですか？」

シヤンさんは僕と三谷さんと話している男子の顔を交互に見る。すると、わかったぜと言うような感じでニヤリとこっちを見て笑う。

「・・・普通に、勘違いしている気が。」

「そうなのですか？春樹君はソラさんの妹さんが好きなんです。」  
「！」

雄叫びを上げるかのような大きな声で言う。  
その言葉に周りの生徒のみんなが振り向く。  
「・・・どうやって誤解を解こうか？」

「・・・シヤン、とりあえず落ち着け。春樹君は何か考えがあるんじゃないか？」

「考えて言うより、ただの勘ですけど・・・」

「ソラさんのようなことを・・・」

シヤオさんに呆れられてしまった。

シヤンさんは何故かうんうんと頷いている。

「やっぱり、勘は大切ですよ！・・・と、言うわけでココは尾行  
するですよ。」

「・・・何でそうなる？」

シャオさんの咳きは僕の心の声そのものだった。

目の前には仲睦まじく男女が一緒に帰っている。

そして、「こちらはと言つと・・・。」

「もっと近づくですう！」

「馬鹿。これ以上近づいたらバレル」

「・・・」

ものすごく暑苦しい状況。

僕達は寮には帰らず、そのまま一緒に帰った三谷さんとその男子を尾行。こっちは草葉の陰に隠れての移動になった。

・・・周りからの目がものすごく痛いことだけは言っておかなければ。

「でも、ソラさんに言わなくてよかったですう？」

「・・・いや、言わないほうがいいだろう？あの人、確かに普段は超が付く位優しい。でも、妹に彼氏ができたとか聞いたらどうなる？」

「・・・確かに、兄妹仲は結構よさそうですね」

僕達の頭上にはいろいろと変なオーラを出しながらあの男子生徒にえげつない魔法を放つソラ先輩の映像ヒジヨンが浮かび上がる。

「絶対に言えないですう」

「万が一にと言う可能性があるからな」

僕達の先輩を犯罪者にしたくない。その一心でこのことは隠すことに決定。

「でも、ソラ先輩をココに来る前に見かけましたよ？」

「それは、本当ですか？」

「はい。何だか、忙しそうにしていました」

「たぶん、誰かにパシられている所ですう」

なんて言うか、いつもそんな感じのことばかりやってる気がしてしょうがない。それで女子とかにも『いい人』止まりで、更には自分に対しての好意にもものすごく鈍感になっているという・・・。リカさんがものすごく可愛そうだ。

いや、今はそんなことよりも三谷さんが気になる・・・。

side 冬香

「・・・ちょっと、何でわたしがアンタとこんなコトしてんのよ

「？」

「だって、ブラコンの冬香には教えた方がいいかなって……」

「余計なお世話よ、この馬鹿！それに、アンタに言われたくないわよ！」

わたし達は今、とある生徒の尾行中。

……と言うか、この状況は何？

「つい最近、弟がアンタにどんどん汚されていくような気がしないんだけど？」

「……キノセイダヨ」

ムカついたから凍らせた。

でも、すぐに魔法を解析して無効化する。本当にムカつく。

「……でも、いいの？」

「まあ、いいんじゃない？海美が何しようとして、ボクには関係ない。それに、今回はボクの出る幕はなさそうだし」

そういうと、ソラはいつもみたいににへらと気の抜けているし  
か思えない表情を浮かべる。まるで、この馬鹿には既にある程度の  
未来が見えているみたいだ。

……本当に大丈夫なのかしらね。



side 春樹

「隊長、何だか雰囲気が悪そうだな公園に入りましたですう！」

「……あの、隊長って何ですか？」

「それに、雰囲気が悪そうって何だよ？」

二人は公園にいた。

僕達もその二人の後を追うように公園に入り、茂みの影に隠れる。そして、そっと二人の会話に耳を傾ける。

「……どう聞いても、カップル手前の男女の会話ですね」

「そうですね。……春樹君はやっぱり海美ちゃんが好きなのは？」

「いや、たぶんそうじゃないと思うんですけど……」

でも、何故か本当にこの男子からは嫌な感じしかしない。

そのことをできるだけシャヤンさんとシャオさんにうまく伝えてみる。でも、二人とも首を傾げるだけだ。

「……そんな、ソラさんみたいなこと言われても困るですう」

「あの人は、嫌な予感的中率は一〇〇パーセントですからね」

よくよく聞いて見ると恐ろしい話だと思っ。

どうしたらそんな特殊スキルが身につくのか、聞いてみたい気もするけど……。

「……お前等、何してんだ？」

「ぎゃあああああああですう！？」

語尾に絶対『ですう』をつけて驚いているシャンさんほどじゃないけど、僕もかなり驚いた。後を振り向くと、そこには見た感じ何の特徴もない男子生徒。

「た、田中さん！驚きますよ！？」

そういえば、ちらりとだけ見た事がある。

アーティファクト  
魔導宝具を使うキャンセラー魔力無効化体質の人。

そんなことを思っていると、その人の肩の辺りに小さな人影が現れる。

『おい、タロウこりゃマズったかもしねえぞ』

「誰！」

声の方を振り向くと、そこには睨むようにしてこつちを見てくる三谷さんがいた。男子生徒も少し驚いたような表情だ。

「バレた……」

「……平地君、なの？」

『すまん、ヤツの妹のことは俺様も知っていた。だから怪しいやつかと思っただがな……』

「俺もすまない」

「しょうがないです」

「尾行してたのは本当ですう」

そういうと、僕達は大人しく茂みから出て行く。

すると、三谷さんはやっぱりと言う表情と、どうして？とでも問いたそうな、いろいろな感情の混ざった顔でこちらを見てくる。

「……つけてたの？」

「……うん」

「どうして？」

「……」

答えられない。

だって、何となくそこにいる男子に嫌な感じがあったからとか、言ったところで失礼なだけだ。

それに、その人のことを三谷さんが好きなら尚更……。

「ねえ、答えてよ……」

「……あの、春樹君は……」

「貴女に聞いてません！わたしは、平地君に聞いているんです！」

シャンさんがその剣幕に思わず押し黙る。

普段から賑やかな性格をしているこの人には珍しいことだ。

「・・・そう、わかった」

僕が何も答えないことに業を煮やしたのか、三谷さんは自分のカバンと相手の男子生徒のカバンを持ってくる。

「速水先輩、行こう」

「え？でも・・・」

「いいの！」

「ちょっと、いいですか？」

帰ろうとした三谷さんをシャオさんが止める。

三谷さんはシャオさんにイラついたような目で睨む。

「春樹君は、貴女を心配してついでにきました。それに、この子は、貴女の兄であるソラさんに毒されつつあります」

・・・あんまりな言い分に僕は言葉を失ってしまった。  
でも、何故かそれだけで三谷さんには通じたようだった。

「兄貴は、無意味に変な主人公体質を持っているみたいに、平地君にもあるって言いたいの？」

「少なくとも、俺はそう思っています」

「なら、残念。わたしも、兄貴がどこぞのヒーローよろしくいろいろと解決するって言うのは聞いたことがある。でも、わたしはそ

れを信じていないから。兄貴は、どこにでもいる、ごく普通の……  
ヘタレよ」

そういうと、三谷さんは男子、速水先輩を連れてさっさと帰って  
しまった。

「コメントですう……」

「いや、シャンさんのせいじゃ……」

「……」

シャオさんのほうは何かを考えているみたいだ。

でも、僕のせいでの二人にも嫌な思いをさせてしまった……。

「本当にすみません」

「おい……さっきの、速水って言ったか？」

いきなり、僕達の会話に田中と呼ばれていた人が入ってくる。

「あ、はい。たぶん……？」

「……宇佐野ってヤツ知ってるか？」

「……？」

僕は首をかしげるけど、二人は何故かものすごく嫌そうな顔をす  
る。

それを見て田中さんは僕に説明してくれる。

「宇佐野つてのは、俺達の事情を知ってる生徒の一人で、情報屋なんだ。今日そいつが、三谷になんか情報を押し付けていたんだ」

「押し付け？」

『あの馬鹿の妹が性質の悪いヤツに狙われているかもしれないつてやつなんだつてよ。俺様がこつそり盗み聞いてきたからな、間違いないねえな』

まあ、情報ソースがどうあれ、宇佐野さんという人の情報は相当に信頼できるらしい。

『ただ、どういう目的で売ったのかはわからねえけどな』

「あいつは、代価さえ払えば自分の情報でも売るからな……。信頼性はともかく」

中々に恐ろしそうな人だった。

でも、それがどうしたのだろう？まさか、それがさっきの男子、速見つて人のことなのか？とりあえずそれを尋ねてみた。

「いや、そこまではわからなかった。ただ、三谷のヤツは自分でいろいろと情報を集めていたらしいけどな」

「……あ、思い出した」

そして唐突に、シャオさんが思考から抜け出し、声を出す。

「シャン、あいつつて三年の速水じゃないのか？」

「・・・誰ですう？」

「・・・お前が告られていただろうが」

「・・・誰ですう？」

シャンさんにはシュウさん以外に他の男子は目に見えていないみたいだった。

その返事を半ば予想していたのか、気にした風にもせずに僕達のほうに説明をしてくれる。

「確か、あいつは速水って三年の生徒です。勉強もできて、運動も完璧。しかもカツコイと三拍子そろった人で、女子からも人気があります」

「・・・あ、思い出したですう！ココに入ってからシュウの悪口を言った人ですう！」

「・・・でも、そいつには裏の顔があるんです」

「裏の、顔？」

「簡単に言うと、多くの女子に手を出しては捨て、何股もしてるって噂」

「「「!?!?」「」」

そうか、そういうことだったんだ。  
今なら、わかる気がする。たぶん、僕は重ねていたんだ。自分に、

そして……。

「今すぐ、追わないと……!」

「ちょ、ちよつと待つですう!?いきなりどうしたんですう!?」

「わかったんだ。あの速水って人、似てたんだ……ラズに」

そうだったんだ。あの、人を利用して、自分の利益のために使い潰すあの人に。

そのせいで、姉さんは……。それに、僕が気づいていれば……。

「だから、二度としない」

僕は躊躇うことなく、自分の中の魔力を体中に巡らせる。

大きな力が僕の中を渦巻き、巡り、髪の毛の先にまで染み渡らせる。

「フィジカル・ブースト  
身体強化」

唯一、龍造さんから教えてもらった、魔法陣以外の魔法。

「わたし達も行くですう!」

「まあ、乗りかかった船ですし」

そう言うと二人からキツネの耳が生える。たぶん、本気を出そうとしているんだろう。



「海美ちゃんは……たぶんこっちですう！」

そういうと、シャンさんは人間では考えられないほどの跳躍で一気に飛び出す。

……でも、たぶんって。

「大丈夫です。シャンはああ見えて、他人の魔力を追いかけるところに慣れていきます」

そう言つと、シャオさんもシャンさんに続くようにして跳躍した。僕はその言葉を信じ、フィジカル・ブースト身体強化で上がった身体能力にモノを言わせ、二人の後を追った。

side 冬香

「ちよつと、どつするのよ？」

今、目の前では想定外の事態が発生。

「まあ、何とかなるでしょ」

それにも関わらず、ソラはのんきに構えている。

「まあ、最悪はボクが行けばいいだけだしね。……でも、それも必要ないかな」

怪訝な表情を浮かべるわたしにソラはある方向を指をさす。すると、そこには堂々と魔法を行使して追いかけてよつとする三人

の姿。

「まあ、ボクは海美の魔力はわかってるから、それを追っかければいい」

そう言うと、ソラは今まで隠れていた木の陰から出て、のんびりと歩き出した。

side 海美

もう、サイテー。

平地君が、そんな人だなんて思わなかった。

そんなイライラした感情が表に出ていたのか、速水先輩が声をかけてくる。

「その・・・大丈夫？」

「・・・え？はい？・・・あ、大丈夫ですよ！？」

はぁ・・・。

平地君は、兄貴の友達の弟らしい。たしか、クールビューティな女性で、男女問わずモテるらしい。どうして兄貴がそんな人と友達なのかはよくわからない。しかも、夏休みがあけてから更に仲がよくなっていると噂がある。

まあ、そんなわけで兄貴から平地君のコトをよろしくとは聞いてた。どうも、平地君は体が強くなく、つい最近までは友達らしい友達もいなかったとか。でも、悪い大人に騙されたりしたとか、ワケのわからないことを言い出したときはどうしようかと思った。

一体、兄貴はどんなことに手を出しているのか・・・不安

だ。

平地君はいい子だよと兄貴からは聞いていた。実際に、平地君は人のいい男の子だ。まあ、顔立ちは整っているし、誰に対しても優しい。それに勉強もかなりできる。運動のほうはよくわからないけど、男子の話ではそれなりみたい。まさに優等生を絵に描いたみたいだ。うちの兄貴とは一味も二味も違う。それに女子からも結構人気アリ。わたしも気にはなっていた。

でも、あんな、ストーカーみたいなのをするなんて……。

「三谷さん、さっきの事、ショックだったの？」

「いや、全然そんなんじゃないですよ」

「そう？……そうだ、ちょっと寄って行きたいところがあるんだけど、いいかな？」

そういうと、わたしの手を掴んで引く張る。

わたしの返事も聞かずにと思ったけど、頭の中はさっきのことでいっぱいだった。

平地君は、何であんなことを？

……何で？

「ついたよ」

「……え？ココ、どこですか？」

物思いにふけていたわたしが連れて来られたところ、それは薄暗い路地裏。

何故か、速見先輩は喉を鳴らしてクツクツと笑っている。

「あの、先輩、何で、「コ」に……？」

「まだ、気づかないのかい？三谷空志の妹さん」

速水先輩は、こちらを見下したような表情で見ってくる。気づけば、近くの影にたくさんの人がいるのが見える。

「ああ、彼等は僕の友人だ……あの、三谷空志を潰すための」

「あ、兄貴を、潰す？」

意味がわからない。

何で、兄貴を潰すの？

何で、そのためにわたしがこんなところに？

「あの野郎、この僕をあるう事が嵌めやがった。全てにおいて優秀な、この僕を……！」

「な、何を、言ってるの？」

「まだ、わからないのか！？……なら、いいよ。何も知らずに、お前は利用されていればいい。……後は勝手にしてください」

そういうと、速見先輩がわたしから離れ、近くにいたガラの悪い人達が入れ替わるようにして近づいてくる。

そして本能的にわかった。何をされるのか、この後、どうなるのか。

「いや、やめて……」

恐怖で声が震える。

この言葉がちゃんと発声できたのかも怪しい。

足がすくんで動けない。

助けて欲しい、誰でもいいから……。そして、脳裏に浮かぶのは……。

「お願い、助けて……」

「その、汚い手を、どけるですう!!」

わたしの横を風が通り過ぎる。

それと同時に一番近くにいたガラスの悪い男の人が吹き飛んだ。

その人は近くにあったゴミの山に突撃して、あたりにゴミを撒き散らす。

顔を見れば、鼻の骨が折れているのか、鼻から血が出て、変な方向に曲がっている。

「ま、まだ、触つ、てもいねえ……」

そういうとガクリと力が抜け、気絶したみたいだった。

そして、わたしを助けてくれた人を見ると、そこには……。

「お前は……!」

「海美ちゃんに手を出すヤツは、このわたしがぶん殴るですう!」

ルー・シャンホウ  
「劉香桜!?!」

聞いた事がる。兄貴の知り合いの一人で、語尾に必ず『ですう』

をつける変わった女の子。ただし、ものすごく強い人がいるって・  
。。

「三谷さん！大丈夫!？」

「まったく、シャン、手加減しろよ」

「……平地、君？」

さつき、公園で別れたはずの平地君達がいた。

side 春樹

「あの、あの人、生きてますよね？」

「……だと、いいな」

「……」

シャオさんの希望を聞かなかったことにして、三谷さんに注意を  
向けた。

「三谷さん、大丈夫？」

「な、んで？」

「まあ、その……嫌な予感がしたというか……」

ものすごく説明しづらい内容でどうしようかと悩む。

「お前等、何で、ココに……!?」

どうも、うまく話をこまかせそうだ。  
僕はとりあえず、速見先輩に向き直る。

「三谷さんに、もう手を出さないでください」

「そうですね！お前みたいなの、性格ブス、さっさと消えるですう  
！」

「……なあ、それって使い方あってるのか？」

「なあ、なんか人数ふえたけどよお、こいつらもまとめてやって  
いいのか？」

唐突に、僕等のやり取りの成り行きを見ていたガラの悪い人の  
人が言う。

それに対して、速見先輩はただ一言だけ言った。

「……ああ」

「そうか」

「今回は上玉の女が三人か？」

「俺達、運がいいな！」

「……おい、誰が女だつて？」

「シャオをそんな道に引っ張っていくような人はボコボコですよ！！」

・・・シャオさんの触れてはいけないスイッチに触れてしまったところで、二人が攻撃を仕掛ける。

まるで、二人はテレパシーか何かで意思の疎通をしているかのよう動き、相手を次々に倒していく。

その光景には、ガラの悪い人も、速見先輩も目を丸くするだけだ。そして、矛先が今度はこっち向く。

「あいつだ！あの、弱そうな奴からやれ！」

・・・僕は、そんなに弱そうに見えるのだろうか？

そう思いつつ、ポケットの腕輪から武器を取り出す。

僕の武器は一本の棒、龍造先生仕込の棒術で相手の急所に叩き込む。

「お前、どこから、そんなものを・・・」

「・・・<sup>マシク</sup>手品です」

とりあえず誤魔化してみる。

ついでにそう言いつつも相手の意識を刈り取ることは忘れない。

ものの数分で殲滅は完了した。

side 速水

「クソッ！」



暗い路地裏を必死で走る。

何でだ、こんなはずじゃなかったのに！

そんな風に考えていると、何かにつまずき、僕は無様に転ぶ。

「まあまあ、そんな慌ててどこに行くの・・・速水君？」

「お前、はあ！」

聞き覚えのある声に振り向く。

そこには、憎たらしい笑みを浮かべた三谷空志と、ショートカットに眼鏡をかけた、クールそうな女性。高等部の制服を着てることから、この三谷空志の仲間だろうと言うことが伺える。

「コレでも一応は先輩だよ？先輩に対して『お前はあ！』とかないんじゃない？」

「・・・でも、わかる気はするわね」

「・・・」

女子の切り返しに苦笑いをした奴は、こちらを向く。

「さて、君はおかしいと思わなかった？」

「・・・何が、だ？」

「だってさボクは正直な話、いろいろなことをやってきた。それこそ、君以上にやばい相手のいざいざとか」

聞いたことはある。

困ったことがあれば、この三谷空志と間隆介と言う生徒に頼めば、大抵のことは解決してくれると。それこそ、ストーカーの撃退から財布探しまで。

「何が、いいたい？」

「簡単に言うと、逆恨みされているのは君が初めてじゃない。それこそ何回も対処している。まあ、主にリュウに適当にぶっ飛ばしてもらったただけけど」

「だから、僕はお前の唯一の弱点、三谷海美を……」

「そんな事、誰も思いつかないとでも思った？」

「こいつ、見かけによらずバカね」

「誰が、バカだ！僕は、選ばれて……！」

「ボクはね、海美の方へ向かってのヤツだけは速攻で潰した。それこそ、最悪の場合はいろいろと社会的に死んでもらったりとかね」

「……アンタ、何してんのよ。それに、人のことブラコンいう前に、アンタもシスコンじゃない」

「冬香ほどじゃないよ。……そして、何故か海美に対しての報復の結果だけは知られていない。どう思う？」

そういいながら、三谷空志はこちらに笑みを向けてくる。

ただ、それは悪魔の笑みだ。いや、死神の笑みかもしれない。既に僕の魂など、刈り取られている。

「あ……ああ……！」

「んじゃ、つい最近のボクは理事長つてすばらしいバックがいるからね。ちよつとだけ、学校に戻ってもらおうかな？」

「その前に、こいつ、わたしの弟に手を出そうとしたのよ？」

「わかったよ……殺しちゃダメだからね」

「了解」

冬香と呼ばれた女性がうれしそうにこちらへと向く。  
そして、そこから先の記憶が僕にはない。

side 春樹

「三谷さん、大丈夫だった？」

「うん、大丈夫……」

「もう、あの速水つて野郎を逃がしたのが痛いですう！」

「……まあ、そこは龍造さんやソラさんに頼めば大丈夫だと思う」

僕達は残念なことに、あの速水だけを逃してしまった。

今はこっちの三谷さんの精神状態の方が不安だと思っつてこっちに

いるけど……。

「……どうします？僕、三谷さんの家とか、わからないですよ？」

「確かに、もう時間が遅いです……」

既に周りの景色は暗くなっている。

こんな中、女の子一人を、しかもさっきあんな事があつたのに放っておくのは無責任すぎる。

でも、僕等にも門限がある。

「……やっぱ、ココはわけを話して門限を遅れます？」

「それがよさそうですね」

隆介さんには、できるだけ他と特別扱いしたくないから、普通に規則は守れと言われていますが……。今回はやはり仕方が無いです。

「……ゴメン」

三谷さんが小さな声でそう言う。

「いや、そんな門限ぐらい……」

「違うの。……うっくん、それもあるけど……」

「」「？」」「」

僕達三人はそれに首を傾げるだけだ。  
何か、他に謝られるような事はあつたっけ？

「さつき、公園で酷い事したのに……」

「いやぁ……アレは……でも、本当のことだし」

「……ストーカー、してたの？」

ストレートな物言いにどうしようと悩んでいると、何故かシャンさんが後から僕を羽交い絞めにする。

そして、手で口を塞ぐ。

するとシャオさんが口を代わりにあけて話し出す。

「春樹さんは、ちょっとした事情でマフィア的な組織に一時期拘束されていました」

その言葉を聞いた瞬間、僕は思い切り暴れた。  
でも、この双子のコンビネーションの前には無駄だった。  
しかも、三谷さんは絶句している。

「そんな、バカな……」

「それが、実際にそうなんです。しかも、お姉さんはそのせいでそのマフィアにコキ使われていると言う状況です。それを、ソラさんがその頭でえげつない策略を思いつき、俺とシュウと言う人が春樹君を助け出し、ここにいるという状況です」

「あの、ざつくばらん過ぎて内容が……」

「これ以上知ると、元の生活には戻れなくなりますよ?」

「……」

「まあ、そんな経験があったためか、あの速水から不穏な気配を感じた春樹君がどうしようかと悩んでいたのです」

「そこをわたしがつけようと提案してこうなってしまったです……」

「そう、なの……?」

反論もできないので、僕は頷く以外の選択肢を思いつけなかった。僕が大人しく頷くのを見て、シャンさんはやっとな拘束を解いてくれた。

「でも、ごめんなさい。嫌な思いをさせちゃって……」

「ううん、いいの。だって、わたしを助けるためにしてくれたんでしょ?」

「まあ。でも、ほとんどはシャオさんとシャンさんのおかげだし……」

「けど、わたしの方に向かってきた人達からちゃんと守ってくれたでしょう?」

まあ、確かにそうだ。

二人が攻撃に出ると、どうしても三谷さんを守る人がいない。戦力的にみても、僕が適任だったと思う。

「まあ、状況がそうだっただけで・・・」

「でも、その・・・アリガト」

三谷さんがもじもじしながら、照れ臭そうに言う。  
何故か、僕のほうも照れ臭くなってしまふ。

「あ、いえ」

軽い返事を返しては見たものの、何故か僕等の間には沈黙が訪れてしまふ。

・・・どうしよう？

そして、沈黙を破つたのも三谷さんだった。  
顔を赤らめながら僕に向かって言う。

「んと、それに・・・平地君、かつこよかったよ」

「・・・はい？」

「えと、平地君のこと、下の名前で呼んでもいいかな？」

「・・・え？」

ソレツテ、ドウイウコトデスカ？

いや、あのソラ先輩のレベルまで自分が鈍感だなんて思わない。  
でも、さすがに自分の耳と、センス、その他もろもろの感情を疑う。脳内で大規模なサミットを起こしても答えが『それ』に行き着く。

「あの、それって、どういう……」

「絶対はない！」

唐突に近くからものすごく大きな声が響いてきた。

そつちを見れば、そこには見知った人が二人ほどいた。

「このバカがわたしの義兄！？絶対にないわよ！？」

「それはこつちのセリフだよ！？こんな性格悪い義妹とかいいです！」

「アンタ、この美少女によくそんな事が言えるわね！？」

「春樹君みたいな義弟なら大歓迎だよ！でも、いくら心が広くても冬香だけは……」

「アンタに性格悪いとか言われたくないわよ、アンタの方が狡賢いこととしていつも相手をボコボコにするくせに！？」

「失敬な！ボクは『畏は常に二重に仕掛ける』をモットーにして  
いるだけだ！」

「それが性格悪いって言ってんのよ！ついでに頭もね！」

「そういう冬香は数字以外はからつきしじゃん！」

「世の中、数学できりゃ生きてけるわよ！」

「全世界の文型頭の人に土下座しろ！」



「ソラ先輩に、姉さん!？」

「え?あ、兄貴!?それに、平地君のお姉さん!？」

「誰がお義姉さんよ!？」

「冬香さん!誰もそんなこと言ってないですう!？」

・・・何だか、大変なことになってきた。

この場を収めるにはどうしようかと悩む。そして、僕がそんなことを考えていたところを三谷さんが僕の腕を掴む。

「春樹君、逃げよう」

「え?はい?それに名前・・・」

「わたしの事は海美でいいから」

「いや、そういうことじゃなくて・・・」

「春樹君!今すぐ逃げてください!」

「このソラさんシスコンと冬香さんブラコンの二人を止めるのは無理ですう!？」

「誰がシスコン(ブラコン)だあ!？」

・・・命の危険を感じる。

ココは大人しく逃げておこう。

「とりあえず逃げよう！」

そう言っ僕等は何故か愛の逃避行の物まねをすることになった。  
まあ、三谷さんの笑顔を見ていれば、コレでよかったかなという  
気もしないわけじゃない。

とりあえず今は、たぶん友達以上で恋人未満なこの友人のために  
傍にいよう。そうすれば、明日もいつものような笑顔であえると思  
うし……。

### 番外編3・中学生達の一日（後書き）

ちよつと長くなりました。

今回は中学生の三人＋一人と言う感じでやってみました。

投稿する暇がなくてこんなに間が開いてしまいました。次回から新しい章にてがんばっていきたいと思っています。

# 1話・THREATENING LETTER

Siderika

アタシの目の前には、ソラがいる。

そして、今のこの状況、なんとソラに抱きしめられている。

「姫、私は貴女を愛している……！」

ああ、夢みたい。

ソラが、告白してくれる……。

思わず、ぎゅっとソラを強く抱きしめる。

「……」

「……あの……リカ、さん……？」

「……」

もう、幸せすぎて周りの音が耳に入ってこない。

もう少しだけ、この幸せを噛み締めさせて……。

何故か、周りが騒がしくなっている気がする。

どうしたんだろう、せつかく良いところなのに……。

「リカちゃん！？ソラ君が……！」

「死ぬ！死ぬぞ、そいつ……！」

死ぬ？

……誰が？

そしてその時、誰かによって私の腕が解かれ、ソラと引き離される。

そして、アタシは現実に戻ってきた。

今、アタシ達はエレオノール魔法学園にいる。

そこで、何故かアタシ達はDクラスの出し物の劇の練習をしている……。

「……ハツ!? ソラは!?!」

「リカさんのベアハグで気絶しちゃってますよ!?!」

「いやあああああああ!?!」

エレオノール学園にアタシの悲鳴が響き渡った。

#### side 空志

「……いや、幸せに死ぬって、あんな感じ?」

「……いや、俺に言われても」

リュウは曖昧な笑みでボクのジョークに適当な返事を返してくれた。と言うか、レオはいつもみたいボクの傍で気持ちよさそうに寝ているのがなんかむかつく。

今、ボク等はエレオノール学園に来ている。

まあ、久しぶりに戻ってきてDとかの仲がそれなりに良い人たちにもみくちやにされたのは割愛しておく。

で、ボクとリカ、スズ、四条さんはDに顔を出すと、何故かいきなり拉致された。

そして、気付けば騎士物語系の劇の練習につき合わされていた。どうも、リカがスズを出演させて客を集めたかったらしい。

・・・まあ、確かに綺麗だし、わからないでもない。

で、リカはボクが相手の王子様をやらないうことが既に予想済みだったのかボクの配役が恥ずかしい役回りになってしまった。

少なくともボクのキャラじゃない。

そんなの、リュウかシュウにでもさせておけばいいと思った。

「で、早くこの理事長室に行きたいんだけどな？」

「ゴメンゴメン」

ボクは保健室のベッドから降りると、リュウの前に立って理事長室に連れて行く。

今回は、短期留学が目的じゃない。

むしろ、もっと面倒かもしれない。

（数日前）

「脅迫状？」

「うむ」

今日の魔法訓練はそんな龍造さんの物騒な単語からスタートした。

・・・でも、なんて命知らずだ。

「・・・魔王に脅迫状を送るとか、何者よ？」

「おお、わしじゃないぞ?」

「……じゃ、誰?」

「この学校に普通のか?」

「それも違う」

「それが、エレオノール学園の方に脅迫状が届いたらしいの」

エレオノール学園。

どういうわけか、龍造さんのことを知るサリナさんが経営する完全実力主義な魔法を教えるための学校。

でも、それならなおさらボク等に関係が無い……こともなさそうだけど……?

「それで、サリナからお主等に警備を頼みたいと言つのがきた」

「要するに、学生に混じって、脅迫犯を捕まえるぞ?」

「ですが、何故私たちなんでしょうか?」

「アタシ達じゃなくて、もっとちゃんとした所に頼めばいいのに・

」

「うむ、そうなんじゃがな……」

龍造さんは、どこか言いにくそうに口をにごらせる。

「……どうしたんだろ?」

「実はの、サリナにこの話を受けんとわしのことをバラすとかぬかしおつての」

魔王をストレートで脅す人がかなり身近にいたことが判明した。

「現在」

「ちわ」

「入るぞ」

「みや」

ボク等は理事長相手にも関わらずとてつもなく軽い挨拶で入っていく。

そこにはいつものようにサリナさんと、カルネル先生がいた。

カルネル先生はデフォルトの苦虫を潰したような表情でボク等に不愉快そうな表情を向け、サリナさんは何が楽しいのかニコニコと笑っている。

「久しぶりね、三谷君。それとはじめまして、龍造君のお孫さん」

「ああ、俺は間隆介だ。他にも後、数人いるが紹介は省かさせてもらう。で、噂の脅迫状とやらは？」

「ズバズバくるねえ」





「でも、何でこんな手紙を真に受けるんですか？」

「だって、イヤじゃない」

「……」

カルネル先生を見ると、そこにはいつものような仏頂面を保っている。

「言うか、いつもより顔が苦い？」

「ま、そういうわけで今回のキミ等のお仕事は、爆発物の発見とその処理。あるいは犯人を直接捕まえるでもいいよ」

「何でお手軽にその二択になるんですか？」

「言ってる内容は酷く難しい。爆弾なんてどう見つける？」

「だって、魔法が使われていればキミの目が見つけてくれるでしょ？それに、使われていなくても四条さんの精霊に頼めばいい」

その言葉にボク等は思わず反応した。

「……何で、四条の精霊魔法を知っている」

そう、四条さんはこの魔法学園に入学する際、どうも自分が精霊魔法を使えることを隠していたみたいだった。

「え？龍造君に聞いたただけだけど？」

「「……」」

あの魔王、何やってんだ？

とボクとリュウの考えがシンクロしたのは間違いない。

「でも、すごいよね。精霊魔法とか滅多に使える人がいないのに」

まあ、この人は精霊魔法に頓着はしないらしい。

まあ、魔王を脅すぐらいだし……。

「ま、そんなわけで……カル、あれ」

「……自分で持ってきてください」

そう言いつつもカルネル先生は理事長室の隅にある大きな段ボール箱から何かを取り出す。

どうも、ビニールで包まれている……。

「キミ等の仕事着」

「……ただの制服、だよな？」

そう、ココの制服。

「だって、そうでしょ？学生にまぎれて調べてもらっただから」

「まあ、そうですね……」

「それに、今、ちょうど準備期間中だから、いろいろな業者が入ってくるの。その中に爆弾がまぎれていないかも調べてね」

「・・・おい、オレ達はんなこと聞いてねえぞ？」

「だって、今言っただんですもの」

そういうと、ものすごく嬉しそうに言う。  
なるほど、大体わかった。

「サリナさん、アンタ、ボク等を自分の学校のイメージアップに  
使おうとしていますね？」

「え〜？ナンノコトカナ〜？」

サリナさんをボクは睨みつけるように言う。

そして、サリナさんは負けじと真正面から返す。

そうやってしばらくじっとしている。けど、折れたのはボクだっ  
た。

「じゃ、がんばってね〜」

そんな軽い声を背中に受けて、ボク等は理事長室を後にした。

「へ〜。そんな事があったんだね〜」

「だから、龍造さんがアタシ達に公欠を出したんだね」

「うん、その時点でおかしいことに気づくべきだった」

まさか、今日からの公欠とか思わないでしょ？

てつきり、ココの文化祭の初日だけだと思っていた。

「で、でも、皆さんは、どちらに?」

「みんなは、例の部屋で魔力測定。・・・絶対にリュウとかメーターが振り切れる」

そんなことを言っていると、どこからか女の人の『もういや〜!?!』  
と言つ悲鳴が聞こえてきた気がする。

まあドンマイ、事務担当の椿さん。

「と言うか、理事長先生に利用されたのか?」

そう言ってくるのは深緑色の髪のDクラスの代表、カザハ。

「まあね〜。だから、これからまたココに厄介になるよ」

「つか、ミタニーの仲間って、どうせすっごいヤツばっかなんだ  
ろ?」

「あの時の方々ですわよね?」

見るからにお嬢様とその従者的な二人、リオネさんとレクトが会  
話に参加。

いつものように二人で行動してるみたいだ。

「まあね。三人ぐらい増えてるけど」

「それって、この学校、大丈夫かな」

「どんな人でも受け入れる」

けらけら笑いながやってきたのがアスカさん、いろいろと危なそうな発言をしているのが副代表の杏奈さん。

ココで仲良くしていた人達に一通り出会う。

あと一人いないけど、ボクでは見つける自身が無い。

向こうから現れてくるのを待たないと。

すると、何故か先生が入ってくる。

ちなみに今日は日曜。先生は来ない。じゃあ、何故カザ八達がいるのかと言うと、学園祭の準備らしい。

・・・そんな、一週間前から泊り込まなくてもと思わなくもない。

「ちよつとお前等、話を聞け」

「せんせー。今日は授業ありませんよー？」

「先生、残業はしない主義だ。今回はこんな時期だが短期留学生が来た」

どうも、ボク等の扱いはまたも短期留学らしい。

まあ、おおっぴらに爆弾探してるなんて言えないだろうし。

ちなみにカザ八達にはバラした。

でも、もしもマジにあつてもボク等がいるから大丈夫だろうと言ってる。

いや、そんなことよりも誰が来たのかな？

そう思いながら見ていると・・・。

「と、言う訳で見かけないやつを見たら親切にしてやれよ」

そういうと、先生はさっさと教室から出て行ってしまった。

・・・・・・つまり、コレが意味することは。

「どうも、お前が一番アホらしいな」

「みゃ」

どうも、そういっことらしかった。

でも、レオにまで言われるってどう？

1話・THREATENING LETTER（後書き）

作 「とう言うわけで、『脅迫状』をお送りしました」

空 「また、面倒なことを・・・」

作 「今回は題して、文化祭編！いろいろな人が登場し直します」

空 「登場し直し？」

作 「まあ、それは今後のお楽しみってコトで！」

空 「果てしなく嫌な予感しかしない」

作 「既に不幸に見舞われた人がいるからね」

空 「・・・」

作 「そんなわけで次回！まあ、文化祭の準備をしようZEE！て感じですよ」

空 「じゃあ、次回もよろしくお願いします」



## 2話・PREPARATION PERIOD

### side空志

Dクラスの方々にアホの烙印を押されてから、ボクはとりあえず校内をみて回ってみることにした。

ついでに他のみんなのクラスも気にはなっていたし。

シユウと双子がCで、冬香がA。そしてリュウがぶっちぎりのSで、驚いたのが、ハル君もリュウと同じSだったと言うこと。

・・・確か、ハル君は十三歳だったはず。なのにSと言うランク付けの理由は、教師の皆さんも驚くほどの知識量だったらしい。

ハル君自身、元々が病弱で本をよく読んでいたらしく、孤児院にあった本のほとんどが魔法理論系の専門書だったらしい。

地味に、院長先生の正体が気になってくる。

それに、魔法の方も問題はない。

実技ではボクと同じ魔法展開系統から教師からは三谷<sup>ヤシ</sup>の再来かと戦々恐々としているらしい。

まあ、こんなことを長々と考えていじけていてもしょうがないと頭を切り替える。

周りを見ると、まだ一週間近くあるにもかかわらず準備に忙しそうな生徒であふれている。

「何でもみんな忙しそうなの？」

「・・・楽しみだから？」

最早当たり前のようにボクについてきたリカが言う。

でも、それだけなら学校がなんかしない？

「でも、こつこつうのって危ない気がするよ」

「危ない？何で？」

「だって、ココは普段は魔法の使用禁止じゃん？」

まあ、ココに限らずほとんどのところはそうらしいけど。

まず、校内の魔法私用は禁止されている。

要するに、廊下でサッカーするなって言うのと同じだね。でも、こついう時って、だいたい魔法の使用が解禁されるような気がする。すると、レオがココの制服のローブのフードの中で暴れだす。いきなりどうしたのかと思っていると、前のほうから声が聞こえてくる。

「お前、何すんだよ！？」

「そつちこそ！」

何が原因かはまったくわからない。

でも、ボクの目がマナを捉えられるようになる。

誰かが、魔法を近くで使ってる・・・！

周りには大勢の人がいる。こんなところで魔法なんか使ったら！

「ソラ！あそこ！」

リカが指差す先、そこには詠唱をしようと口を開ける二人の生徒。ボクは魔法の構成を目で確認。

状況を考えると、あれだ。

「ミスカモメ水鷗！」

水でできた二羽のカモメが相手の間に入る。  
それに二人の生徒はぎよっとすると、すぐに目の前の魔法を駆逐。  
でも、ワンテンポ遅い。

「こんな所で魔法使おうとして、危ないじゃないですか」

「……」

ボクとリカが二人の生徒に銃と大鎌を突きつける。

すると、やっと状況を理解したのか、複数の生徒が驚きの表情で  
ボク等を見る。

「何だ、その魔法……!?!」

「おい、アイツDだぞ?」

「Dがあんな魔法を?」

「ありえない」

「いや、もしもありえるなら……」

何故か周りのががやがやとしている。

いや、確かに今回は緊急事態っぽかったから魔法陣使って魔法使  
ったけど……。

もしかして、ボクの悪評だけがココに残ってたりするの?

「最強の、落ちこぼれ……?」

「うるさいよ?この銃で風穴開けて欲しい?」

「ソラ！？落ち着いて!？」

気づけばリカに羽交い絞めにされ、二人の生徒からは土下座されていると言う状況になっていた。

・・・おかしい、ボクはただ銃を突きつけていただけのはず。

「ゴメン、冷静さをなくしてたよ」

「・・・元に戻ってよかった」

安心した表情でリカがボクから離れる。

そしてボクはこの二人に向く。

「で、やっぱり文化祭の準備期間では魔法が解禁されるわけか。・  
・だからって魔法を相手に向けていいわけが無いじゃないですか」

「「・・・」」

二人は返す言葉もないのか、うつむいてじっと話を聞いている。

まあ、頭に血が上っていただろうし、今はずいぶんとおとなしい。

たぶん、自分がしたことを冷静に考えることができるようになったんだと思う。

すると、また周りが少し騒がしくなる。

・・・・・・何でだろう、嫌な予感がする。

「んじゃ、そういうことで」

と、言う訳で可及的速やかに撤退した。

side 生徒会長

私は校内を散策していると、何やら騒ぎが聞こえてきた。どうせ、どこかのバカが魔法を使って喧嘩でもしているんだろう。……面倒だ。そして眠い。すると、周りから声が聞こえてくる。

「何だ、その魔法……!？」

「おい、アイツDだぞ？」

「Dがあんな魔法を？」

「ありえない」

「いや、もしもありえるなら……」

おかしな魔法？

しかも、Dの人間がか？

……面白そうだ。

私は今まで自分にかけていた シエスタ 隠密 の魔法を解除。

私が独自に開発した魔法で、誰にも邪魔されず寝るにはものすごく都合がいい。

「何があつた？」

「え？ついさっきそこで……生徒会長!？」

その言葉に静まりかけていたその場が再び騒然となる。

・・・だから、魔法は解除したくなかった。

何故か私が姿を現すと全員驚く。

それに、この感じは・・・。

「逃げられたか？」

私は周りを見ると、おそらくはこの騒ぎの関係者であろう生徒二人がこちらを見て驚いている。

私はその二人の前に進むと尋ねてみる。

「何があった？いや、大体は予想がつくが」

そう言うと、二人の生徒はバツが悪そうな表情になり、逃げられないと悟ったのか、思いのほか素直に洗いざらい話してくれた。

「・・・で、最強のおちこばれと言うのは？」

「知らない、んですか？」

「・・・夏休みの前に短期留学でココに来たやつで、『魔法陣』  
とか言う古臭さアナログそうな魔法を使って、変な魔法を使うヤツです。よく、白い髪の女子といるみたいで」

「ふむ」

そう言われて脳裏に浮かぶのは、あの光景。

・・・世界は、以外に狭いらしい。

「そうか、わかった。もう、行っていいぞ」

そういうと、二人の生徒はきよとした表情になる。

「何だ？そんなにお咎め無しはイヤなのか？なんなら、私との『決闘』でもいいが？」

そういうと、その言葉に反応して二人の生徒は猛ダッシュで逃げていった。

今回の文化祭、とても面白いものになりそうだ。

私はそう結論付け、再び魔法を起動。

すると、突然姿を消した私に周りの生徒が驚くが、私はそれを無視して歩き出した。

しかし、今回は久しぶりに疲れた。生徒会室で寝よう。

#### side空志

ボク等はとりあえずDクラスの教室に戻ってきた。

そこには教室の机をどけて演劇の練習をしている姿がある。

監督をしているっぽいカザハのところへ行き、とりあえずボク等が手伝えることが無いか聞いてみる。

「カザハ、ボク等に手伝えることは？」

「あ？手伝えること、か・・・？」

そう言うと、カザハは『うん』と考え込む。

そして、顔を上げると・・・。

「そっぴや俺達のクラス、まだミスコンに出るやつと、魔法闘技

大会に出るヤツ、決まっていなかったよな？」

カザハが杏奈さんにそう聞く。

すると、杏奈さんは少しだけ考える仕草をしてうなずく。

「そう言われると……。じゃあ、アンジェリカさんに出てもらう？」

「え？そこはわたしでしょ！？この美人スナイパーさんが『アナタのハートを狙い撃ち？』って感じで！」

「よし、アンジェリカさんに出てもらおう」

アスカさんが後で騒ぐのを完全に無視して言う。

ボクがリカを見ると、どうもリカは乗り気ではないらしい。

「……何するの？」

「確か……」

「はい、これ」

カザハが説明しようとしたところを杏奈さんが横から何かプリントを出して封殺。

カザハは口をパクパクさせて自分の言葉をどうしようか悩んでいる。

そんなのは無視してプリントを見てみると、そこにはやっぱり三スコンについての内容が事細かに書かれていた。

1・女性であること、あるいは女装しても可。



- 2・各学年クラス一人出すこと。
- 3・買収行為を見つけた場合、または出場者に何らかの危害を加えた場合、そのクラスの出場者を即失格とする。

そんな事がつらつらと書かれていた。

そして、リカは下のほうを読んでいくとどんどん顔を曇らせていく。

「リカ、どうしたの？」

「……うん、ちょっと……」

そう言うと、リカはチラッとプリントのある一点を見る。

その先を目で追ってみると……。

「……おい、水着審査って何？」

「そう、それで誰もやりたがらない」

「でも、上の学年はそうでもないらしいよ？」

慣れって言うのは恐ろしい。

「いや、優勝すればできる限りの願いを叶えてくれるって言うのが大きいと思うぞ？」

「できる限りの願い？」

「ああ。俺もよくは知らないけどな」

「たぶん、アバウトすぎて初めての私達は誰も出ないんだと思うわ」

「へ」

「でも、アタシ、ソラ以外に裸見られるのいや」

「ちよつと落ち着こうか」

いろいろと話がぶつ飛んだ。

でも、何故か目の前の代表コンビは平然として対応した。

「そうか、彼氏以外に見られるのはイヤか」

「しょうがないわ」

そして二人は『うん』と考え込む。

そういえば、一人だけものすごくいい人材を知ってる気がするぞ？  
それを切り出そうとすると、レクトが何かを思い出したのか、ボク等の会話に入ってきた。

「そういや、ミタニーは出るって、さっき理事長の伝言をカルネル先生が伝えに来てたぞ？どうも、短期留学生チーム的な代表で」

「いや、それっていろいろとおかしいよね？」

機材の調子を見ていたレクトがさりげなく爆弾を投下した。

何でボクの了解も取らずに話しが進んでいるの！？

「いや、ミタニーの仲間が出たら、絶対に勝てないだろうからっ

て」

そういえば、ボク以外は全員上のクラスか。それで、一番下の馬鹿ボクが選ばれたと。

「でも、ミタニーでも大抵の人間が負けちゃうからハンデをつけるって言った」

「ボク出なくていいじゃん!？」

いや、わかってる。サリナさんが何をしたいのか。

このメンバーの中で一番能力がよくわかってるのがココに一時期通っていたボク。他のメンバーを使いたくてもどのくらいのハンデをつければいいのかわからない。それでそうなたんだろ。そして、最低クラスでもこんな実力があればそりやすごいよね。かなりいい宣伝になる。

でも、納得がいかない!

「ちなみに、わざと負けたら秘密をバラすって」

「脅迫以外の何者でもない!？」

なんか前に来たときのツケを、今、全部精算してる気がする。

しかも、ハンデをつけられた上にガチでやれとか鬼畜以外の何者でもない。

「ま、こっちは出たい人が出るからな。噂じゃ、ミタニーの仲間の年下君も出るらしいぞ」

「・・・」

どうしよう、ハル君に勝てる気がしない。  
いや、別にいいっちゃいいんだけど……。  
ハル君が勝った後の冬香のことを考ええるといろいろとメンド  
うだ。

「まあ、がんばれー」

そう言つと、レクトは再び機材の調整に戻つた。

ボクはもうなるようにしかならないと判断して諦めることにした。

「でも、ここの劇をどうとか言つてなかつた？」

「……やっぱ、アンジェリカがこっちの方がいいんだけどな。

なんかお姫様っぽいって言うかさ」

「そう、問題は三谷君を殺しかけるかもしれないってコト」

さすがにそれはイヤだ。

と言うか、ボクが王子様役なのは決まそれっているんだね。

リカは二人に必死に今度は大丈夫とか頼み込んでいる。

……そんなにお姫様の役がやりたいのかな？

すると、現お姫様のリオネさんの声が聞こえた。

「レクト！この衣装が着れませんわ！」

「ん？オレツチに着付けをしるってことかー？」

そう言つと、レクトは声のするほうへと向かっていく。

「な！？バツ！？変態！」

「ぐほお！？」

「……………まあ、どうなったかかって言つのは野暮だね。」

「でもさ、何でボク等に主役をさせようとするの？」

「だって、せっかく来たのに何もしないじゃ面白くないだろう？」

「そうそう、それに、みんな三谷君達のお世話になってるし……それに、王子様とお姫様は一番セリフが少ない」

「それに、この劇の目玉は決闘の部分。この部分は実際に魔法を使って戦って演技してもらつ」

なるほど、それなら見ているほうも楽しそうだし、何よりボク等なら十二分以上に役割をこなせるってわけだ。

「ただ、お前についていけるのがほとんどいないっていうな……」

「じゃ、そこはボクがリュウに頼んでみる。あいつなら何とかなると思つ」

まあ、一番長くいるし、行動パターンは両方共に知りすぎているから大きな怪我をしない程度には加減しながらできると思つ。

「そうか？じゃ、頼むわ」

そう言つと、カザハは周りにいくつかの指示を出して、ボク等に台本を渡してくれた。

「じゃ、別にセリフは大体でいいからな。できれば明日までに覚えろ」

「明日までか・・・」

結構無茶だけど、確かにそれぐらいしないと間に合わなさそうだし、リカは既に台本を開けて食い入るように読んでいる。

「結局、三谷君は断らなかつたね」

「まあ、その、なんて言つたの？」

頼まれると、断れなくなるタイプなんだよね、ボクは。

2話・PREPARATION PERIOD（後書き）

作 「とうとうわけで、『準備期間』をお送りしました」

リ 「・・・納得がいかない」

作 「・・・突然どうした？」

リ 「だって、文化祭って、もっとキャツキャウフフな彼氏イベント的な・・・」

作 「そんな面白くないこと、僕がするとでも？」

リ 「・・・」

作 「とうとうわけで、いつもの如く残念な女の子リカちゃんはこの文化祭でどうなる!？」

リ 「・・・うん。とりあえず、一番の敵は作者だった」

作 「そんなわけで次回!・・・どうしてこうなった!以上です」

リ 「・・・意味がわかんないよ」

作 「次回もよろしく!」

### 3話・JEALOUSY

side空志

「って、言うわけなんだけど、無理かな？」

「メンドイ」

まあ、リユウならそう言うと思った。

ボク等は借りている部屋で今日のことを話していた。

「つか、お前等仲いいな。俺達なんかまともに話せねえぞ」

「でも、Sならジグとかいたと思うけど？」

「あの、主席さんですか？なんと言うか、近寄りがたい雰囲気があります」

まあ、わかる気がする。

どっちかと言うと、孤高の存在タイプと言うかなんと言うか……。

「でもさ、以外だったが何で冬香はAだったの？」

「アンタね、わたしには数字しか扱えないのよ」

「……いや、そんな胸張って言われても」

「それに、属性自体がそんなに珍しくないわ。『氷』と『大地』、探せばわりとどこにでもいるわよ」



「なるほど、ね」

「まあ、俺達は魔法なんてほとんどしたことが無いですし」

「私も魔法薬以外に魔法は使えませんから」

「わたしはシュウと一緒によかっただけです」

「どうも、みんなフリーダムなようだった。」

そして遊び呆けていたボク等Dの方々とは違い、ちゃんと仕事をしていたみたいだった。

「一応、ココに来た業者をチェックしたけど、何も怪しい動きはなかったわ」

「そうだな。むしろ、この学校のやつ等が魔法をドンパチしてる方が危なかったな」

「それ、アタシとソラも遭遇した」

「さすがソラ君だね」

「す、すみません。せ、精霊さん達には何も言っていなかったの、き、気づかなかったみたいです」

「まあ、そんなものか。」

「でも、普通に爆破するって言うてもいつとかかいてなかったし、理由も思い当たらない。絶対に悪戯のセンだね」

「だな。ココを爆破してもメリットがねえしな」

みんなもそう思っているのか、特に反対もない。

「ま、それならそれでココの文化祭を楽しんでおけばいいじゃんわりと軽い気持ちでそう言うておく。

まあ、その前に友人作りから始めないとダメだけど。

「まあ、リュウがオツケーしてくれて助かったよ」

「おい、俺は何も言うてねえぞ!？」

「え〜。リュウ君が騎士さんやるとかっこいいと思うのにな〜」

スズのさりげない言葉に思わずうつと詰まるリュウ。

ボクはこっそりとスズにびしつと親指を立てておく。

既にタネは蒔いてあったのさ!ちなみにスズはリュウの騎士姿ってカッコよさそうだよな?と言う言葉で買収した。

そして、準備期間一日目がことうして終了した。

side 隆介

「・・・なあ、オレさ、何でこんなところにいんだ?」

「黙れ!坂崎さんにつく下郎が!」

目の前には自称元Sの優等生。

何故かオレはそいつにこの学園のシステムの一つである『決闘』を申し込まれていた。

確か、名前はロイ・ガリユーク。

「・・・なあ、オレ、お前になんかしたか？」

「黙れ！貴様の行い、万死に値する！具体的にはリア充爆発しろ！」

・・・そうか、リア充は爆発物だったのか。

今度からはそっちも警戒しねえとな。

まあ、そんな現実逃避をしている場合じゃねえな。

とにかく、こうなったのは少しだけ時間を遡る。

（数時間前）

オレはこのエリートクラスでぼうつとしていた。

まあ、特にすることも無かったしな。

「ねえねえ、間君。君が珍しい『闇』の属性持ちってホント？」

「・・・別にいいだろ」

聞いてくるやつ等（主に女子）を適当にあしらうが、何故かきやうと黄色い悲鳴を上げて自分の友人のところまで興奮したように話す。

・・・女子のやることはよくわからない。

こんなところをスズには絶対に見られたくない。

「お〜い、リュウくん！」

噂をすれば……。

時間を見てみれば昼時、たぶん、スズがいつものようにオレ達にメシを作ってくれたんだろう。

扉のほうを見るとニコニコと微笑みながら手を振るスズ。

……別に、かわいいなんて思ってないぞ？

オレはスズのところへ行く。

「よう、メシか？」

「そうだよ〜」

「わかった。で、あいつらは？」

「他のみんなはソラ君達が呼びに行ってくれたよ〜」

「てか、いい加減にわたしがいることに気づきなさいよ」

声のしたほうを見ると、そこには冬香と見慣れない男子生徒がいた。

……誰だ？

「ハル〜！さっさと昼ご飯にするわよ〜！」

「あ、姉さん〜！」

冬香がSの教室に首を突っ込むと春樹を呼び出す。

春樹は人当たりがいいからか、ここでも結構いい友人関係を築いているようだ。

年下にもかかわらずこのクラスは春樹をオレ達と同じように対応してくれている。つか、ソラに聞いた話じゃ、こいつらはプライドの塊らしいがそうでもないような気がするぞ？

「じゃ、そろったところで行くか」

「あ、リュウ君ちょっと待って」

スズが歩き出したオレの後をついてくる。

ただ、オレはこのときに気づけばよかった。

後の男子生徒の嫉妬の視線に。

「おゝい、こっちだよ」

学園の中庭。芝生が敷き詰められてすごく綺麗なところだ。

そして、ソラが大きな木の近くでココだと手を振る。

オレ達はどうも一番最後に来たらしく、既に他のメンバーがそろっている。

「……………って、言いたいんだけどな……………」

「お腹減ったよ」

「坂崎のメシはうまいからなー」

「・・・レクト、行儀が悪いですわ」

「・・・なあ、お前等金持ちなのになんで坂崎にたかってるんだ？」

「交友を深めるため」

「本音は？」

「坂崎さんのごはんおいしい」

何故か大勢の人間がいた。

たぶん、こいつ等がDクラスの仲のいい連中なんだろうけどな。

「お？ロイも久しぶりだね」

「おう。そうだな」

そう言いながらロイとか呼ばれた冬香と一緒にクラスのやつも当たり前のように芝生に座る。

それに続くようにしてオレ達も近くに座る。

「今日も一杯作ってきたよ」

そう言うと、スズはうれしそうに自分のポケットの魔術符カードから重箱の包みをいくつも取り出す。

・・・つか、どうしたらコレだけのものを一人で作りだせるんだ？いや、前に一度だけ聞いたことがあるが、『乙女の秘密』らしい。意味がわかんねえ。

まあ、そんなこんなで昼食会が始まった。

「なーなー、最近しのぶーが見当たらないんだけどさ、どこにいるんだー？」

「影崎さんは、『我々のことを嗅ぎ回っている輩がいます』とか言っつて、最近はいろいろなことを調べているらしいですわ」

「へー。忍っちも大変だねえ。坂崎ちゃんのご飯ウマー！」

「そうだよ、カザハ、ココにスゴイ子がいるんだよ！四条さんにミスコンをやってもらえばいいじゃん！」

「・・・おい、お前大丈夫か？お前の好みを一方的に押し付けられても困る」

「ちょー！？そんなこと言ったら・・・！」

「・・・ソラ？」

「リカサン！？冬香！ボクの誤解を解くためにも四条さんの前髪を上げてー！！」

「は、はいい！？な、何ですか！？」

「へいへい。貸しーね」

「・・・！？誰だよ、お前・・・！」

「え？え？代表さん？何を言ってるんですか！？わたしです！四条です！？」

「……嘘！？かわいい……」

「そ、そんな寺井さんの方がお綺麗ですよ!？」

「奏さんはなぜ前髪を上げないのですう?」

「……さあ?」

「そのほづが可愛らしいですね」

「シユウはわたしだけのですう!?!」

「はいはい、わかりましたよ」

そんな風にのほほんとした会話を楽しみつつ、オレ達はメシを食っていた。

そして事件が起こる。

「あ、リュウ君、ほっぺにご飯がついてるよ」

「ん?どこだ?」

「取ってあげるね」

そう言うとスズがオレの頬に触れ、米粒を人差し指ですくう。それをそのままパクツと自分で食べる。

「……よく、そんな恥ずかしいことができるな」



「ほえ？何が？」

等の本人はきよとんとしている。

たぶん、今のオレ達は、端から見たりゃ……。

「まるで、恋人みたいだね」

オレは思わずその声にうなずきそうになる。

声の方向を見れば、そこにはにやけた笑みを浮かべるソラがいる。やべえ。オレの経験則がそう言っている。

「あの劇さ、リユウとスズが王子と姫の役をやれば完璧だったと思わない？」

ソラはいろいろなものを含んだ笑みを冬香に向けた。

最近、冬香とソラはこういうことに関してはかなり仲がいいと思うか……。たぶん、リカの次に仲がいいと思う。

いつもならリカはココでソラにバカとか言って張り飛ばすだろう。だが、リカもソラの考えを読み取ったのか黙っている。そして冬香はそれに乗っかる。

「確かにね。ビジュアル的に美男美女だし、かなり劇にいいんじゃない？」

「そ、そんな……。リカちゃんとソラ君の方がきつといいよ」

スズの顔が赤くなり、もじもじと体を動かします。

……この野郎、覚えているよ。つか、オレまで顔が赤くなってきたじゃねえか。

「……もう、我慢ならん！」

そこで、一人の男子が立ち上がる。  
あの、ロイとか呼ばれていたやつ。

オレ達はそいつの突然の行動にあっけに取られながらもそいつの  
次の行動を見守る。

「ロイ、どうしたの？」

ソラがどうにかしてロイにたずねる。

「どうしたもこうしたのあるか！貴様、名はなんと言うつ！！」

そう言いながらオレにビシッと指を突きつける。

「オレ、か？」

「お前だ！！」

「間隆介だが？」

「貴様、この俺と『決闘』しろ！」

「……はあ？」

オレの口からはものすごく間抜けな声が出ていただろうと思う。  
全員があっけに取られる中、レオのやつだけはもぐもぐとメシを  
食っていた。

（現在）

「なあ、マジで何でオレがこんなコトしなくちゃなんねえんだよ？」

「うるさい！あんな坂崎さんとうらやまし・・・不埒なことをして、俺が勝って代わりにそれを・・・お前に天誅を下してやる！」

「本音が駄々漏れだな!？」

良くも悪くも正直なやつだった。

・・・そういや、ソラから似たような話を聞いた気がするぞ？

「つか、よくもこんなに人が集まったな」

周りを見渡せば、そこには所狭しと席についている生徒達。

だが、そのほとんどの声援がロイに向けられている。

・・・オレ、そんなに悪いか？

「そりゃそうだ。前の三谷がものすごかったからなそれを期待して見に来るヤツがたくさんいる。その上、お前は『闇』の属性らしいな？」

「・・・あゝ」

「おそらく、その属性を見ようとココにかなりの教師も来ている」

「・・・オレはパンダじゃねえんだけどな？」

「そして、お前が坂崎さんにとられまいとSの女子を中心に俺への応援部隊ができている！」

「余計なお世話だっ！」

「黙れ、このツンデレが！」

「誰がツンデレだ！」

何故か頭の中でソラがリュウのことに決まってるじゃん（笑）と言っビジョンが明確に浮かんだ。

そんなやり取りをしつつも事態はどんどん進んでいった。

ロイは学校から借りたであろう剣を構える。

「お前も構えろ！本気で行く！」

面倒なことになったと思いつつ、オレは武器を呼び出す。

「……『双牙』」

すると、オレの左腰に二つの剣が出現する。

「二刀流か、お前の年ではかっこつけもいいところだ」

「だな……けど、一つ言っとくぜ、オレは、あいつらの『リ―ダー』だぞ？」

その言葉にロイの顔色が変わる。

「ソラより強いかどうかはわからねえ。だが、はつきり言ってお前はあいつに負ける気は全くない。ま、それは向こうも同じだろうけどな」

「……要するに、三田に以上にがんばれって忠告か？」

「ああ、じゃないと、確実にお前は負ける」

そう言いながらオレは鞘から一本だけ剣を抜く。

「だが、お前に土俵を合わせてやる。オレが本気を出せばお前は絶対に勝てない」

「……それは面白いことを聞いた。なら、お前に本気を出させたら、俺は三谷やお前と同じ土俵に立てるわけだ」

挑発してみたがそれに乗らない。

どうも、ヤツはそれなりに戦いなれているみたいだ。

……ひょっとすると、使っちゃうかもな、魔法剣を。

オレは自然と口元に笑みを浮かべる。

まあ、周りから見りゃ獰猛だと思えないようなものだろうけどな。

「こりゃ、少しは楽しめそうだ」

「お前のメガネに叶って何よりだ」

そして、オレ達はそろって攻撃を開始した。

### 3話・JEALOUSY（後書き）

作 「とうとうわけで、『嫉妬』をお送りしました」

鈴 「ねえねえ、何でこんなことになってるの〜？」

作 「神様が定めた運命だからだよ」

鈴 「むう！？そうなの！？・・・それならしょうがないね〜」

作 「そう、だから、ここいらでリュウ君にはかっこいいことをしてもらおうと想ったんだよね」

鈴 「へえ〜」

作 「そして、ラストはあんな感じで・・・ぐっへっへ」

鈴 「作者さんがワルモノみたいだよ〜？」

作 「そんなわけで次回！かませイ又になり下がったロイはどうなる！？」

鈴 「そこは言っちゃうんだね・・・」

作 「次回もよろしく！」

## 4話・GROWTH

side空志

「いや、まさかこうなるとは」

ボク等は闘技場の一番前の席に陣取ってロイとリュウの『決闘』を観戦しようとしていた。

ロイが若干スズに惹かれていたようなことはわかってはいたけど、ココに来てこんなことをするような大胆なやつだとは思わなかった。

「・・・なあ、大丈夫なのか、ロイは？」

「たぶん」

「だが、俺の記憶ではアイツはお前と同じレベルの魔法展開速度を持っていたと思うが？」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこにはSクラスの代表のジグと、副代表のグランがいた。

「二人とも久しぶりだね」

「ああ。そうだな」

言葉少なめにそういうとボクの隣に腰を下ろす。

たぶん、この二人はかなりの勉強熱心だ。リュウの魔法を見て自分のものでもしようとしているんだろう。

しかも、グランに関しては『影』の上位属性の『闇』。かなりいい刺激になることは間違いない。

「確かに『闇』の魔法でお前さん並の魔法を放たれたら、いくらロイの代表でも無理ですぜ？」

「……いや、ロイもボクと一度やったことがあるし、ボクの時以上に警戒してるとは思うよ。それに、リュウの戦闘は大体だけどグランの戦法に似てる」

「……あれか？影から移動して相手に不意打ちを与える？」

「そう。だから、それぐらいロイにも予想できるから、まずそれはきかない」

そういうと、ちょうどリュウがロイに シャドウ・パス 影抜け を使って奇襲を仕掛ける。

だが、いつも以上に警戒をしているロイにはそれも防がれる。ボクは更に言葉を続ける。

「それに、リュウは魔法剣はたぶん使わない」

「魔法剣？」

「リュウが剣と一緒に使う魔法展開法。アレは詠唱がメンドイって理由でリュウが独自に開発したらしい」

そういうと、周りにいた人間がげんなりとした表情になる。

確かに、面倒くさいって理由であんなふざけた魔法を使ってきたらたまったもんじゃないね。

「そして、極めつけにリュウは双剣使い。今回は一本しか出して



ないから、ロイにあわせたつもりなんだと思う」「

「・・・それは、相手を舐めているんじゃないのか？」

「それはありえない」

カザハの疑問にボクは即答する。

「何でそんな事がわかるんだよ？」

「ロイは、かなり強い。それもボク等に限りなく近いところのレベルで。そんな相手ならリュウはむしろ自分に魔法剣を使わせてみるぐらいのことを言う。それに・・・」

「それに？」

「リュウとボクは、魔王と勇者の孫だよ？」

side 隆介

「お前の魔法、ずいぶん面白いな」

「三谷レベルのヤツに褒めてもらえるとは、な！」

オレに向かっていくつもの土でできた腕が襲い掛かる。

それらの手には全て剣が握られており、それが容赦なくオレに振られる。

オレはそれを紙一重でかわしつつも頭の中ではどう攻めるか考えている。

いくらオレでも、コレだけの数を捌ききれぬ自身は無い。  
・・・でも、お袋なら余裕なんだろうけどな。

「しゃあねえか」

オレはもう一つの剣を抜き、攻撃を受け止める。

「とりあえず、第一段階完了だな！」

「そうだな。オレに魔法剣を使わせるの、楽しみにしてるぜ・・・」

オレは次々に襲い掛かってくる腕たちを防ぎ、魔法で対抗する。

オレが得意なことは拘束だ。

闇から鎖を召喚してそれを相手にぶつけて動きを止める。

そして闇の強力な攻撃で屠る。

それが基本的な攻撃スタイルだ。

そこを更に攻撃的にしたのが『魔法剣』。こいつの拘束魔法は魔法剣 影縫い だけだ。

まあ、後は詠唱のほうで十分だって理由もあるけどな。

それに恐らくだが、この魔法のある程度の弱点にも見当がついた。オレは襲い掛かる腕を無視し、一気に相手に詰め寄る。

「・・・ばれたか！」

「やっぱ、そうなのかよ！」

この魔法、確か ガイア・ソードキロチン 大地の剣の断罪 は、まず最初にオレを拘束してその剣で攻撃しようとしてきた。

まあ、オレにかかれれば影に移動して何とでもなるけどな。

そこからはその腕それぞれがオレを捕まえようと、あるいは剣で攻撃しようとする。確かに威力は尋常じゃない。だが、その分自分を巻き込む可能性があるならそう簡単に使えないと踏んだんだが……。

「お前は、剣を持っているから近接系魔法使いだと勘違いされやすいつーわけか？」

「それは、間違いだな！」

相手はそういうとオレの二刀流に一本の剣で難なく対応してくる。なるほど、確かに剣の腕はオレよりもよさそうだ。

ただ、自分のリーチを広げるために魔法でそれを補ってるってコトか？

「それに、俺はあれから更に自分の魔法を磨いた！」

すると、ロイから魔力があふれる。

また魔法を使おうとしているんだろう。

オレはそれを察知し、魔法を使わせまいと攻撃を仕掛ける。

だが、オレの剣がそこで止められた。

「ガイア・ハンド  
大地の腕　！」

地面から出てきた腕にオレの剣が受け止められる。

そして、ロイは更にオレへと追撃を加えようとする。

オレはすぐに シャドウ・パス 影抜け で一旦離脱した。

「……さつきと同じじゃねえか」

「それは、どうかな？」

ロイは何故か不適な笑みを浮かべる。

そしてロイは二つの金属を精製し、剣の形にする。おそろく、それをあの土の腕に持たせるんだろうと思いつつオレは剣を構える。

「これなら、どうだ！」

ロイがそういうと、地面から腕がどんどん生えてくる。

これは……。

「冬香の劣化無敵艦隊じゃねえかよ」

だが、冬香の無敵艦隊よりもはるかに数が多い。

これはさすがにさばききれねえ。

これは威力じゃなくて数に重点をおいた魔法なんだろう。なら、こつちも魔法を使うまで……！

「ダーク・エッジ  
闇の刃　！」

無詠唱で下級の魔法を放つ。

無数の黒い刃がオレの影からいくつも放たれ、ロイへと殺到する。

ロイが腕の操作に気をとられているうちに……。

「ダイクネス・ジャッジ  
絶対的な闇の力をもって彼の者を裁け。  
断罪の闇　！」

オレの影の周りから闇の鎖が召喚され、ロイに向かって放たれる。

この魔法は鎖で相手の動きを止め、そこへ闇の刃での追撃を加える魔法。

アイツが最初に使ってきた魔法に似ている。  
だが、おそらく簡単に防がれるだろう。  
アイツとオレの魔法はよく似たタイプだ。だから、オレは更に魔法を準備する。

「 闇よ、万物を縛る縛鎖となりてここに顕現せよ。」

チエイン・ダイクネスロンド下  
鎖の闇輪舞

予想通りにオレの魔法を回避したロイ。  
だが、今度はロイの周囲のいたるところの影から鎖が呼び出される。

その鎖はロイに纏わりつき、ロイを完全に拘束した。

「・・・一丁あがり。一つ言っとくけどな、それをくらったらソラのヤツでも簡単には抜け出せないぞ?」

「なら、こいつを解けばお前の本気を見せてくれるってわけだな・・・?」

「・・・そういうことだな」

まあ、コレを解けたら及第点だろう。

そう思っていると、唐突にヤツの拘束が解ける。その様子は、まるで内側から破られたかのようだ。

オレは一瞬、自分の目の前で起こったことがわからなかった。一体、ロイのヤツは何をした?

「驚いている暇あるのか!？」

そういうと、ヤツはすぐさま魔法を構築。

速い……！

すると、ロイの前の地面に大きな魔法陣が現れる。

これは、まさか……？

「ここに顕現しろ、巨人召喚の陣！」

魔法陣から魔力があふれる。

マジかよ、こいつあの馬鹿の真似事しやがった……！  
それは徐々に姿を現す。

まず、頭らしき部分、そして腕、胴、足……。それは、まるであの巨人ヴァジユのような大きさの土くれの巨人。だが、次の瞬間には巨人の表面が光沢を帯びだす。現れたのは、金属でできた巨人。

全貌が明らかになるにつれて、オレは確信した。

古代魔法 属性造形術クリエイト。おそらくはそれをベースにした魔法。

よく、拳法は動物などの動きを元に造られていると言う。それは、魔法も同じだ。

まず、魔法は動物や自然現象を模した物が多い。

何故そうなったか、それは簡単だ。ただ単にイメージがしやすいから。

だから、ジジイから聞いた話だと、本当にはるか昔は一人ひとり極端に魔法が違い、自分のイメージが持ちやすいようなものになっていた。だから、できるヤツとできないヤツの極端な差があった。

だが、今は違う。今は魔法の汎用化を重点的にしており、全員が使え、全員が同じレベルの魔法と言うものになっている。

だから、今では魔法が使えて当たり前と言う風潮で、属性の良し悪しはその人の強さになっている。

だが、中にはほとんど聞いたこともないマイナーな属性で頂点に上り詰めるやつもいる。そういうヤツが昔の、つまりは古代魔法の系統を真似していることが多い。

「……こりゃ、相当面白いことになってきたな」

「ああ。アイツに負けてから、アイツに勝つために俺は魔法陣のことを調べた。そしたら面白い魔法があったんでね。参考にさせてもらった」

「……お前、絶対将来は行くところまでいけるな」

「それは、うれしいな」

「じゃあ、オレも約束どおり、本気でやってやる……！」

魔法剣 黒刃。オレの剣に黒い魔力の刃が展開される。

「それが、お前の本気か？」

「ああ。ただの、魔装系じゃねえぞ？これは、魔法剣って名前がついてんだからな！」

魔法剣 斬黒。オレが右の剣を適当に素振りする。

その先から黒い剣撃が放たれ、闘技場の壁を切り裂く。

「……なるほど。剣と一体になった魔法か。魔装は付与エンチャント魔術の一種だから、魔法をしようとしても詠唱は必ず要る」

「理解が早くて助かるな。魔法剣 鞭刃」

「やれ！」

オレは剣を振るう。

剣についた魔力の刃が伸び、巨人の足を斬ろうとする。  
だが、まったく利かない。  
相手はなのでかい拳をオレに向かって思い切り落としてくる。

「魔法剣 影討ち」

オレは影から影に移動。  
出てきたのは相手の後にできた影。

「それはもう、わかってる！」

今度は上から足が降ってくる。  
こいつ、速い！

「魔法剣 闇十字！」

だが、あっけなく弾かれる。  
まあ、それは予想済みだ。  
オレの攻撃でそれたところをすり抜け、前に立つ。

「生成、大地よその力をもって形と成せ！」

土系の属性の特殊技能でもある 練成。  
それを使ってロイはすぐさま馬鹿みたいにでかい剣と盾を創造。  
巨人はそれを掴み、両手にそれぞれを装備。

「切り刻め！」

巨人はわかったとでも言うように大きな咆哮を上げ、オレに怒涛の攻撃を放つ。



その巨体に似合わない俊敏な動きでオレに攻撃を与える。  
オレも正直なところ、避けるので精一杯だ。

「……やるしかねえか」

まあ、ソラもやったって言ってたから大丈夫だろう。  
それに、使っちゃダメだって法律もない。

大丈夫だ。問題ない。

オレは シャドウ・パス 影抜け で一旦退避。

相手と大きく距離をとる。そして、双剣を鞘に仕舞った。

「……どうした？」

「……オレの、取って置きを見せてやる」

双剣へと魔力をどどん送る。

……さすがだ、あのおっさんの弟子なだけはある。

まあ、本人に言えば否定するだろうけどな。だが、こいつのおか  
げで全力で撃つても耐えられるだろう。

オレが使おうとしているのは奥義に近いもの。つまり、真言。

「魔法剣 断龍漆黒剣 ！」

一本の剣を鞘から抜き撃つ。

放たれるのは、まるで龍の如き漆黒の一撃。

生きているかのようにうごめき、その顎を剥き、相手を噛み殺さ  
んとばかりに巨人へと向かう。

「迎え撃て！」

そして、巨人は真正面からそれを迎え撃つ。

漆黒の龍と金属の巨人の一騎打ち。

一瞬の拮抗、そしてオレの漆黒の龍が相手の剣をへし折り、巨人の上半身を消し飛ばす。

自分の体を維持できなくなり、体が崩れ落ちる。

「……さて、どうする?」

「……俺の、負けだな」

すると、さっきまで聞こえなかった客の声が聞こえ、歓声が上が  
る。

つか、やれやれだな。こんなヤツがここにいんのかよ。

「と言つか、お前たちは全員真言が使えるのか?」

「安心しろ。オレとソラ、そしてスズだけだ」

「……そんだけいりゃ上等じゃ?」

ソラは実は微妙に違つかもただけどなと言おうと思ったがやめてお  
いた。

いろいろと説明が面倒だし。

「ただどな、一つだけ言っとくぞ。あれ、おそらくは真言より強  
いぞ?」

「……いや、意味がわかんないぞ?」

「世の中にはな、真言より強い魔法を使うアホみたいなジジイが

いんだよ」

そう、ジジイがな。

どうすればあんな事を思いつくのかオレは知りたい。

「でも、お前の真言には負けたぞ？」

「オレの真言に勝てたらそりゃ人間じゃねえな。『闇』の特徴は一つ、侵食」

相手に侵食すること凶悪な攻撃力を生み出し、相手の魔力に干渉して拘束する。これが闇の基本。

「だから、あの魔法はその侵食力を極端に高めた一撃」

「……要するに、俺の魔法に干渉して、浸食。そこから分解みたいなことをしたのか？」

「ああ。ああいう魔法の特性はその再生力。それを侵食で無効化させてもらった」

まあ、オレの魔力を流し込んで無理矢理に魔法構築プログラムにエラーを起こさせたただけだな。

そうすりゃ、どんな魔法でも破綻する。

「……あの、二人だけは無理だけだな」

そう、あの気楽そうにこっちを見てる馬鹿二人は絶対に関係なくオレの魔法を無効化する。

「そうか……だが、俺は諦めない！」

いきなりロイがオレに向かってビシッと指を突きつける。

「絶対、坂崎さんは渡さない！」

「……あゝ……オレは、どう返せばいい？」

「絶対に、いつか勝ってやるからな！」

そういうと、ロイは何故かオレに宣戦布告をしてどっかに行った。  
……取り残された感がオレの今の気持ちの大半を占めているんだけどな、どうすればいい？

#### 4話・GROWTH（後書き）

作 「とうわけで、『成長』をお送りしました」

隆 「・・・なあ、オレは何でこんなことをやってんだ？」

作 「それは、僕のノリとか気分とかその他諸々で」

隆 「・・・しばらくぞ」

作 「とうわけで次回！」

隆 「この野郎っ！」

作 「まさかのあの人が登場！？」

隆 「・・・あの伏線かどうかも怪しいあいつだな」

作 「残念なことに、この作品は僕の初めての作品なので、伏線は  
ヘタクソです」

隆 「自分で言ったらおしまいだろ！？」

作 「そんな作者の作品ですが、次回もよろしく！」

## 5話・STUDENT COUNCIL

side空志

「・・・なるほど、あれがあの時ボクにぶっ放そうとしてヤツか」  
ボクはリュウが使った魔法剣の真言を見てそう思った。

「おい、それ以外に何かいうことはないのか？」

「・・・？」

むしろ何かあるの？

よくわからなくて首をひねっていると、ジグはもういいとため息をつきながら額を押さえる。

「・・・確かに、ロイもろいだが、お前のところの間ってヤツも  
そうだな・・・」

まあ、竜<sup>ドラゴン</sup>だし？とカザ八にはアイコンタクトをしておく。  
今のところ、ボク等のことを知っているのはカザ八達Dクラスの  
仲のいいメンバーだけ。

「でも、えげつないね。闇の侵食を最大限に生かした魔法か」

術式の解析完了。

記録・・・完了。

「ソラ？どうしたの？大丈夫？」

「……うん。大丈夫」

ボクがぼうつとしていたからか、リカが心配そうに声をかけてくる。

つい最近、よくこうなる。

何故か魔法を見ると勝手に解析され、勝手に記録している。

……一体、自分に何が起こっているんだろう？

ルーミアさんに聞いてはみた。

でも、問題ない。むしろよし。で会話が終了。

ボク等には専属家庭教師のような三魔源素スリーシンボルの神霊。でも、ルーミアさんは放任主義過ぎる。いい加減、力のことの二つや二つぐらい教えて欲しい。こっちはわからないコトだらけで困ってるのに……。

「ま、いい息抜きにはなった。さっさと仕事だ仕事」

「そういえば、ジグ達は何をするの？」

「……喫茶店だ」

……なんだろう、間にものすごくいろいろな思いが込められていた気がする。

「……行っても、いいよね？」

「……ああ」

どうも、行かない方がいいみたいだ。

苦渋の決断があったようだけど、ここはジグの精神衛生上は行かない方がいいだろう。

「そうか」

どこか安心した表情のジグに先に行くことを伝え、ボクはDの教室に戻った。

戻るついでに有耶無耶になった四条さんのミスコン参加を伝えるために生徒会室なるものに寄っていかなくては。

「カザハ、生徒会室ってどこ？四条さんを出させるために行かないやダメなんでしょ？」

「は、はいい！？し、師匠！？なな、何でわたしなんですか！？」

「・・・弟子よ、これは修行なんだよ」

「こんなときだけです！？」

残念だ。四条さんは騙されなかった。

コレがスズだったら騙されるのに・・・。

「そうだよ、奏ちゃん！ソラ君が何の意味もなくこんなことを言うわけが無いよ」

スズ、残念なことに何の意味もないんだ。

ただ単に楽しそうだからやってるだけなんだ。

「そ、そうなの、ですか？」

「うん、もちろんそうに決まってるじゃないか！」



カザ八達がジト目で見て来るけど気にしない。  
しょうがないんだよ。争いに、犠牲は付き物なんだ……。

「ボクも本当は心が苦しいんだ。四条さんがこういうことが苦手なのも知ってる。けど、それじゃダメなんだ！」

「……」

みんながボクの勢いに飲まれ、息もつかずにじっと聞く。それを確認してボクは言葉を重ねる。

「四条さんは、もっと自信を持った方がいい」

「……じ、自信、ですか？」

「そう！」

そこでガシッと四条さんの肩を掴み、目を覗き込むようにして真摯（そうな）目を向ける。

「四条さん、君は精霊魔法の使い手だ」

そういつと、四条さんの顔が曇り、顔をうつむかせてしまう。

「でも、それだって普通に考えればスゴイものなんだ！」

「ス、スゴイ、ですか？」

「うん。それに、それが邪道だとしても、行けるところまで行けば確実に自分のためにもなる」

ボクは四条さんと精霊に関してある推測を立てている。もし、それが成功すればかなりすごいことになる。ある意味革命かもしれない。

それがあるからか、四条さんは徐々にボクの言葉に乗せられてきた。

「でも、そんなにスゴイ事ができても、四条さんがそんななんじや他に精霊魔法が使える人に申し訳ないと思わない？」

「……で、でも……」

「でも、じゃないんだ。謙遜も、行き過ぎればダメなのと同じだ」  
全然違うと思うけどこの際は放置しておく。

「……そ、そうです……よね？」

「そうだ。だから、まずは大勢の人のまでも緊張しない、そこから始めるのにもこのミスコンはちょうどいいと思うんだ」

四条さんはほんの少しだけ考える仕草をする。

すると、いつもの気弱そうな表情からは創造できないほど力強い目をボクに向ける。

「……前髪で隠れててほとんどわからないけど。

「……わかりました。わたし、がんばります！」

そういうと、四条さんはどこかへと走り去って行った。

スズもその後が続いて『奏ちゃん、待って〜』と走っていった。

「「「・・・」」」

・・・みんなが、何か言いたそうな顔でこちらを見ている。  
ここで言う事は一つしかない。

「・・・いや、あそこまでうまく行くとは思わなかった」

「「「おい!?!」」」

みんなに盛大に突っ込まれた。

「まあ、本当の洗脳はまずその人の自己の否定から入るんだけど・・・」

「誰も洗脳の仕方なんて聞いてねえ!?!」

「でも、今回はどっちかって言うと、ただ勢いに乗せて言っただけだから後になってよく考えれば大丈夫。すぐに気づく」

まあ、四条さんとスズの天然ツートップには最早洗脳したも同然

だから、大丈夫だ、問題ない。

コレで四条さんは今からいろいろなミスコンの準備を始めているだろう。

「ボク等はそんな四条さん達のためにミスコンの登録をしに行こう」

「・・・お前、人間か？」

失礼な。

ボクは、ただ少しだけ魔王の教育を受けてるだけの普通の人間だ。

「で、ミスコンの登録は生徒会室でできるの？」

「ああ。しかも、お前たち運がいいぞ」

「運が、いい？」

その言葉にこの学校の生徒ではないボク等は首をひねる。

「どうも、今回は生徒会長が積極的に動いているらしい」

ボク等はますます意味がわからなくなってくる。  
それを見越してか、レクトから補足の説明が入る。

「ここの生徒会長はなー、とても面倒くさがりなんだー」

「……それ、生徒会長としてどう？」

「世界にはいろいろな人がいるんですね」

冬香とシユウが若干呆れたように言う。

いや、ボク等のほとんどはかなり呆れている。

「いや、でもやることはやるし、それに世界で数十人しかいない  
三属性持ちだ」

三属性持ち。

多重属性デュアルの人達の中で、三つもの属性を持っている人達のこと。

確かに、三つも属性を持てればこの学園で頂点に立てそうな気がする。

属性が多い方が魔力が多いらしいし。

まあ、とにかく中に入れてみればわかるだろう。

そしてボクが目の前に生徒会室と書かれたプレートのある部屋を  
ノックしてから扉を空ける。

すると、中から何か言い争う声が聞こえてきた。

「会長、何をこそこそ動いているのですか？」

「……ん？いつもみたいに 隠密シエスタ を使っていただけだ」

「いえ、ですから……」

「噂をすれば……か。客だ」

客と言う言葉にボク等に気づいた忍が振り返る。

彼にしては珍しく、結構感情を表に出して言い合っていたようだった。

いや、それよりも驚いたことがある……。

「……ディア、さん？」

「久しぶりだな」

やたらと漢らしい口調で話す女子、しかも『セブテム・ベッカー』に所属する『怠惰』のディアさん。

「まさか、お前達がココの短期留学生だったことがあるとはな……」

相も変わらず、眠そうな目でボク等を見る。

すると、またも扉の方が騒がしくなる。それと同時に扉が勢いよく開かれる。

「おっはー！ディアちゃん！びっくりだよー！もう本当にびっくりだよー！あのね、あのね……あり？」

「お〜？ソラ君たちだよー！？」

「あ、あの、どういう、ことですか？」

扉から入ってきたのはスズと四条さん。そして、『暴食』のライニー。趣味が食べ歩き、性格的なベクトル方向もスズとほぼ同じと言ある意味では驚異的な人物。

「……いつも言うが、私の方が年上だぞ？」

「でも、ディアちゃんはディアちゃんだよね？」

きよとんとした表情でさも当たり前のように言う。

既に諦めているのか、ディアさんはため息をつくと、またボク等に向き直る。

「……察しはついてると思うが、生徒会長のディアナリア・ロウスだ。そっちの大食い娘は書記のライニー・ガラ」

「おっひさー！」

「……お前等、会長と知り合いだったのか？」

「うん、まあ……」

と言うか、カザ八達と同じように裏の事情まで知ってる数少ない人だ。

「と言うか、ココの生徒だったら会ったときにわからなかったんですか？」

「……だって、寝てたし」

「……こういう人だった。」

そこで、さっきのカザ八の話とあわせて考えてみる。おそらく、この人は何よりも昼寝が好きなのはわかってている。リュウが常に面倒だとかしか言わなくなった感じだし。だから、当時ボク等に対して何の興味持っていなかったディアさんは……。

『会長、短期留学生が来るそうですよ?』

『・・・眠い』

そんなやり取りでボク等は知られることなくココまで来たんだろ  
う。

「と言うか、いつまで寝てるつもりなんですか?」

「・・・できるだけたくさん」

ダメ人間だった。

確かに、魔法の技量はありえないぐらいにスゴイ。

それも自分ひとりで混合魔法ミックスを使えるぐらいに。

混合魔法は多人数での魔法行使を目的とした特殊な魔法。魔力的な問題からも二人以上じゃないとできないはずのものらしい。それをこの人は三つ持つてるからと言う理由で行使して、しかも普通に格闘も強いと言うふざけている人だ。

「ディアちゃんはお寝坊さんだな」

「・・・大食い娘に言われたくない」

そして、こっちのライニーはと言うと、属性は『変換』とかそんな感じのもの。自分で食べたものを魔力に変換することができる。おそらく、それ以外に力があると思う。

・・・いや、そうであると信じたい。

「そういえば、ディアちゃんのクラスに行ったら、いろいろくれたよ」



そう言いつつ試作品っぽい食べ物の数々をどこからともなく取り出してくる。

「……どうも、ボクの前想は外れたみたいだった。」

「……まあいい。で、何の用だ？」

「そうだった。Dクラスのミスコン参加者の登録。そこにいる四条奏で」

「あ、あの、師匠、ついさっき気づいたことがあったんですけど……？」

「大丈夫だ、君ならできる！自分の可能性を信じるんだ！」

「……は、はい？」

危ない。プチ洗脳が解けかけていた。  
以外に効かないもんだね。

ボクはそう言うわけで四条さんの洗脳が解けないうちに登録した。

「おっけー。これで全クラスのミスコン出場者がけってー！」

どうも、カザ八達のクラスが最後だったみたいだ。

「……と言うか、よく堂々と来られるな」

「別にやましいことは何もしてませんよ？」

「……まあ、そうだけだな」

そう言いながらディアさんはちらりとカザ八達を見る。  
その意味することを察してボクは言っておく。

「彼等はボク等の事情を知ってる数少ない人間です」

「・・・珍しい人間もいたものだ」

アンタが言うかど心の中で突っ込んでおく。  
でも少しだけ気になることがある。

「他の生徒会役員がいないような気がするんですけど？」

「いや、コレで全員だぞ？」

「・・・全員とは？」

「私と、ライニー・・・うん、コレで全員だ」

・・・展開が読めた。

たぶん、他の生徒会役員を決めるのが面倒になったんだろう。  
一応確認してみると、ライニーはすつと目をそらした。

「・・・そんなに見つめないでよ」

ボケることも忘れなかった。

でも、そのボケ方はボクにとっては致命的だ。

「ソラ、他の女子を何でそんなに見つめるの？」

「・・・あの、鎌をどけていただけじゃないでしょうか？」

いつものように鎌を首に突きつけられる。これでリカが鎌を引けば、ボクのバッドエンドは確定だ。

「まあ、いい。そのうちこっちから行くことと思っていたからな」

「はい？」

唐突にディアさんがそう言う。

意味を図りかねて、口から変な声が出てくる。

「何、簡単なことだ。もしも、万が一、お前達のことをバレても何とかしてやる。それだけだ」

「・・・何ですか、それ？」

「不吉なことを言わないで欲しいわね」

ボク等はその言葉を聞いて仏頂面になる。  
明らかにフラグ以外の何者でもない。

「今回は、『爆破』の脅迫状が届いた。それを知らないお前達じゃないだろう？」

「まあ、確かにそうですけど・・・」

「万が一と言う可能性がある。お前達が全力を出さなければ行けない場合は出せ。まあ、こちらもそれなりには対処するが」

ディアさんはそういうと、一つ欠伸をする。

「ああ、眠い。．．．久しぶりに長くしゃべった。そういうわけだ。文化祭を楽しみつつ、適当にがんばれ」

そういうと、ディアさんは机に突っ伏す。

すると、規則正しい寝息が聞こえてきた。

それを見たライニーがさも当たり前のように毛布を取ってきて、ディアさんにかける。

「じゃ、みんな楽しんでってね〜！」

その言葉に見送られるようにしてボク等は生徒会室を出て行った。

sideディア

「会長、寝たフリをしても無駄です」

「．．．なんだ、バレていたのか」

そう言いながら私は風紀委員に所属する異例のDクラス生徒、影崎忍に顔を向ける。

と言っても、面倒くさいから机から顔は上げない。腕の隙間からこっそりと見るという方が正しいかもしれない。

「三谷殿に何をさせるつもりですか？しかも、他の方達のことも根掘り葉掘り．．．」

「．．．説明メンドイ」

「あー、もう！ディアちゃん！ヒトが話しているときは寝ちゃダメだよー！」

ライニーがうるさい。

でも、言ってることも最もな部分がほんの少しだけある気がするので、寝るのだけはやめる。

「……もしも、あの脅迫が本当だとして、止められるのがあいつらしか思い浮かばない」

「え〜？ディアちゃんががんばればいいんだよ！それに、わたしもいるよ？」

横でブイブイと言いながらピースするライニーを見て、かなり不安になってくる。こいつの力は下手をすればいろいろなバランスが崩れかねない。

影崎のほつもそう思ったのか、苦い顔をする。

「ですが、ただの悪戯の可能性の方がはるかに高いですよ？」

「……まあ、そうだな」

それならそれでいい。

だが、どうもあの連中はトラブルに巻き込まれやすいらしい。

ココも、前にあいつらがいたときにちょうど盗みに入られたりと怪しい部分がある。

「どっちにしろ、理事長からやつの手配等はこちらで決めると言われている。この文化祭を面白くするために利用するぐらいはい

いだろう・・・」

「・・・貴女、会長の偽者ですか？」

「失礼な・・・。本物だ・・・たぶん」

「影崎君、大丈夫だよ！ディアちゃんは、本当はガンバリ者だから！」

「黙れ。・・・じゃ、本当に寝る。書類は任せた」

私はそう言っつて、今度こそ寝た。

遠のく意識の中で、誰かがわめいていた気がするが気のせいだろう。

5話・STUDENT COUNCIL（後書き）

作 「というわけで『生徒会』をお送りしました」

ディア 「・・・眠い」

作 「今回は初登場のディアさんです」

デ 「・・・・・・眠い」

作 「たぶん、キャラ的には作者の怠惰な部分が顕現した感じですよ」

デ 「・・・ZZZ」

作 「このように。というわけで次回！」

デ 「私は寝ている」

作 「あんたむしろ出ないから。とりあえず文化祭の準備期間ライフを楽しもうぜ的な内容です。次回もよろしく！」

## 6話・IN PREPARATION

side 空志

「一回通すぞ！」

「「「ういーす」「」」

舞台は変わってDクラスの教室。

あれから戻ってきて、ボク等は劇の全体を簡単に通している。

まあ、何故かボクとリカが主役っぽいことをしている。

モデルはよくわからないけど、どうも騎士物語らしい。

あるところにとても綺麗なお姫様がいて、そのお姫様はいろいろな人から婚約を申し込まれる。でも、何故かその人はどの婚約も受けない。それは、ただ一人愛する自分の騎士のことが好きだから。ただ、問題があった。お姫様の好きになった騎士は平民の出。つまり、身分が違いすぎる。貴族の出ならばまだしも、平民などと・・・。そう考えた周りの人達は考えた。騎士ならば、騎士同士の決闘で決めよう。勝った方を婚約者と認める。だが、コレは罷だった。決闘にかこつけて殺そうとしていたことを知ったお姫様は、騎士に逃げるように言う。でも、騎士はそれを聞き入れず、むしろ好機とばかりにその申し出を受け入れる。まあ、後はありがちな話。騎士は相手となった名門の貴族出身の騎士を倒し、婚約者であることを認めさせる。そして怒り狂った姫の両親は騎士と姫を殺そうとするが、二人は駆け落ちをして、遠く離れた国で平和に、幸せに暮らした。

そんな感じの話らしい。

ちょうど、今は・・・。



「・・・メンドイ」

「まあまあ、一応は念のために手合わせしといた方がいいでしょ」  
ボクとリュウは向かい合うようにして対立している。

これから、適当に殺陣をしてみようと言う流れ。  
周りにはスズが張った結界を弄ったものがある。普通なら、スズの張った結界の中で魔法の行使はできなくなる。そこをいろいろといじって、どうにか中だけは魔法を使える私用にした。結界の壁に当たると魔法が消失するだけのものだから、心置きなく普通に魔法を使える。まあ、ボクもリュウも詠唱形式の魔法しか使わないけど。

「でも、いいのか？お前、魔法陣しかできないんだろ？」

「確か、詠唱のテストは零点の猛者だった気が？」

「大丈夫。つい最近、魔法陣と詠唱を両方使う人にいろいろと教えてもらったから」

まあ、精神的にいろいろとアウトだったけど。  
本当に、あの生ける屍リビングデッドのメイドさんは自重と言っ言葉を覚えて欲しいと思う。

「じゃ、よろしく頼むぞ」

カザ八達に肩をぽんと叩かれ、ボク等から離れる。  
とりあえず、武器は騎士が使いそうなイメージのある十字剣。もちろん、刃は潰してある。それに、基本的に魔法での攻防戦になつてほしいから別に剣で切りかかるとかはそんなに意識しなくてもいいらしい。

まあ、一応煉さんに一通りの武器の扱い方は叩き込まれている。  
まあ、器用貧乏感が否めないけど、魔法に頼っているボクにはコレ  
がちょうどいい。

「……んじゃま、適当にすつぞ。 ダーク・エッジ 闇の刃」

「わかった。 ボルト・バレット 雷の弾丸」

「いや、適当が無詠唱って何だよ」

ボクとリュウが使った魔法を見てクラスの皆さんが突っ込む。  
……別に普通だよな？  
だって、無数の闇の刃と雷の弾丸をぶつけ合ったただだよ？

「まあ、最初は軽いので、ちょいちょい難しいのいけばいいか？」  
「たぶん。」

雷よ、剣となれ。  
ライジング・ソード  
空の雷鳴剣」

「まじかよ、メンドイな。」

闇よ、彼の者を刺し貫け。  
ダークネス・スピア  
暗黒の刺剣」

ボクが放った雷の剣はいたるところの影から放たれた漆黒の刺突  
剣に刺し貫かれて消滅した。

「いえ、明らかにそのレベルの魔法、私達じゃ無理ですわ」

「そうだなー。少なくとも、詠唱をカットしすぎだー」

発動したんだからいいじゃんと思う。

「……もつと、手加減するの？」

「とりあえず、わたし達にその才能の一部をください！」

「……アスカ、とりあえず勉強してから言ったほうがいい」

まあ、そんなDの連中のツツコミをBGMにボク等は練習を続けた。

でも、やっぱり教室の中で魔法を使うのはちょっと、と言うか普通に危ない。ボクもリュウもかなりの神経を使って発動している。そのことをカザハに聞くと……。

「ああ、やっぱりそうだよな。競技場での許可を貰おうと思ったんだけどな……」

「あの競技場は他の所も使うから……。でも、何とか最終日だけは使えるようにしてもらった」

カザハと杏奈さんがそう言う。

まあ、普通は魔法での戦闘を演劇にするなんて無理だったんだと思う。そこはDクラスだからへばい魔法しか使えないって理由で何とかしたと二人がそう言ってたし。コレでも破格の待遇なんだろう。まあ、別にボク等が気をつけて魔法を使えばいいだけだし。それこそ舞台袖にスズが待機していればそれだけで防げる。

「まあ、ないもの言ってもしょうがないけど」

「……………よし、今日はコレぐらいでいい！」

監督役のカザハが一旦止めると、さっきまで張り詰めていた空気が少しだけ緩む。

周りでがやがやと一人ひとりが勝手に話し出そうとするのをカザハがまた止める。

「衣装の準備ができたっほい。衣装係のトコ行ってあわせてきてくれ！」

そういうと、Dクラスの面々が若干テンションを上げて衣装のことを友人と語りだす。

服の作成とかも魔法でどうこうできらしく、ほんの数人で三十人近くの服を作れるみたいだった。ボク等が飛び入り参加したにも関わらず、てきぱきと寸法を取ってできる、たいしたもんだと思う。

「お前もそんなところでぼさつとしてないで、さっさとチェックしてこい」

「…………ハア」

自分が主役ポジション的な場所じゃなかったら、なおよかった。しかも、王子様。絶対に自分のキャラじゃない上…………。

「じゃ、三谷君の衣装はコレね」

「…………何これ、イジメ？」

「何を言ってるの？ただ……………ちょっとウケを狙いすぎた

だけで……」

明らかにヨーロッパ中世の王族が着ていそうな、俗に言う白タイツ的なものをはいて、ズボンがかぼちゃみたいなの、あの服。

「イヤだよ！？何が楽しくてそんな服なの！？ボクの役って、騎士だよね！？」

「こんな前衛的な騎士もいかなかった……？」

「前衛と言っか、斬新過ぎる！？」

「なら、完璧。さっさと着る！」

「イヤだよ！？」

何が楽しくてこんな変な格好をしなくちゃいけないんだよ！？」

「ていうか、まさかコレがイヤで主役が決まらなかったとかじゃないよね！？」

「……」

「何で！？何で目をそらすの！？」

事情をよく知らないボク等は格好のカモだったわけか！

冗談じゃないとボクは逃走のために フウカシャリン 風火車輪 の魔法陣を展開して逃げる準備をする。そして魔法を発動するために口をあけ……。

「三谷君ストロップ！」

名前を呼ばれて、舌を盛大に噛んでしまった。  
目の前で花火が散り、あまりの痛さに口を押さえて悶絶する。

「……血の、臭いがする……」

そんな危険な声が聞こえた気がした。

声のした方向を向くと、そこには何故かうつろな目をしたりリカがいた。

「……一体、何があった？」

そう思っていると、杏奈さんがボクのところに来て、耳打ちをする。

「ゴメン、衣装係の子にもみくちやにされて……」

「されて、どうしたの？」

すると、杏奈さんは少しだけ困った表情で、更にボクの耳に口を近づける。

そしてさっきよりも声を落として言う。

「……血が欲しいって」

なるほど。

リカは吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>だ。人間にとってのエネルギー摂取の方法が食べることなら、吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>にとってのそれは吸血。それ以上の意味もあるらしいけど、よくは知らない。

いくら吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>と言っても、血だけを飲んでるわけじゃない。別に普通にご飯も食べるし、それも少しだけならエネルギーに変換されるらしい。ただ、吸血には劣る。だから、食事だけでは必要なエ

ネルギーの摂取が間に合わないらしい。だから、一応は三、四日に一回程度の頻度で吸血すれば大丈夫って聞いたけど……。

「……そういえば、リカに最後に吸血頼まれたのっていつだったけ？」

「え？」

「いや、いつもリカが吸血したいときにボクの血を吸血させているんだよ」

そう説明しながら記憶をたどる。

どんなに考えてもここ最近はずいぶん忙しくてすぐに寝ていた気がする。

一応レオに確認をとってみようとするけど、レオも首をかしげるだけ。

朝は一応、みんなの胃袋を支配しているスズが絶対に一緒に食べようって言うことで顔は合わせる。いや、リカは普通にボクに引っ付いてくるからいつでも言う機会はあつたはずなんだけど……。

「……まさか、気を遣ってくれた？」

まあ、吸血なんて要するにボクの血を抜くのと変わらない。

だから、吸血のし過ぎは死に至る。スズがよくボクに対してほうれん草とか鉄分の多いものを用意してくれることからそれはよくわかる。

まあ、何が言いたいのかというと、リカはボクの血液の摂取量には相当な気を遣っている。基本的にボクが何かしらの事情で疲労しているときは吸血されたことはないし、連続で吸血したりとかもしない。ちなみに、たまにボクがリカを怒らせてもそれはない。

で、一番重要なことが、ボクの記憶が正しければ明らかにここ数日リカはボクの血を吸ってないってコト。

「・・・リカが、マジで死ぬ？」

「いや、確かに既に死に体だけど・・・」

「いや、ココ最近リカはボクに気を遣ったのか全然吸血してないんだ」

「・・・ねえ、それって吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>としてどう？」

杏奈さんが最もなツッコミをするけど、今はそれどころじゃない。今のリカはかなりヤバい。それこそ、サメよろしく血の匂いをかぎつけて狩をしかねない状況だ。今すぐにも吸血させなきゃダメなんだけど・・・。

「ねえ、人がいないところってある？」

「ツッコミはスルーなの？」

「クソ、やっぱり文化祭の準備期間中であるところになんか人がいるか・・・!」

「あの、自己解決で終了しないでくれる？」

「でも、本当にどうすればいい？さすがにこれ以上リカをほったらかしにしたら・・・」

「・・・」



言わなかった部分は察してくれたのか、杏奈さんも真剣に考えだす。

すると、誰かがボクの肩を叩く。

「ゴメン、いま少し緊急事態で・・・」

「三谷君、わたしにはいい考えがあるんだけど？」

そこにいたのはスナイパーのアスカさん。

確か、座右の銘は『狙った獲物は逃さない』と言っておちよくっていると思えない言葉。

「違うよ！アナタのココロをヘッドショット？だよ！」

「なお悪いわ！相手を殺してるよ！？しかもヘッドショットなのにココロって意味がわかんない！？」

「まあまあ、この天才スナイパーのわたしにいい考えがあるの」

「・・・アスカ、なんの話をしているのかわかっているの？」

「え？アンジェリカちゃんと三谷君が、いちやこら逢引したいって話じゃないの？」

「どこをどうしたらそんな紆余曲折した上に屈折どころか次元の壁を越えたような回答になるの！？」

「まあ、概ねあってるからいいとして・・・」

「どこが!？」

さっきまでまともだと思っていた杏奈さんにまで裏切られた。でも、アスカさんはそれを聞くと満面の笑みで一つうなずく。

「よし、なら完璧。ついてきて」

そういうと、アスカさんはすたすたと教室から出て行った。

ボクと杏奈さんは首を傾げつつもリカを引っ張ってその後についていった。

「で、ボク等はどこに行くの？」

「え?ココだけど?」

そう言っアスカさんは指をさす。

その先にあるのは、『保健室』とプレートの掛かった場所。

「いや、無理でしょ。校医の人にリカの吸血を見せるわけにはいかない」

「それが大丈夫なんだなあー」

すると、何故か勝ち誇った顔をこっち向けて説明を始める。

「三谷君も、この期間は魔法が解禁されるのは知ってるでしょ?」

「まあ」

何故解禁されるのか。それは単純に便利だから。

ものすごく重いものを運ぼうとしても、誰かが フィジカル・ブースト 身体強化 を使

えば大抵のものを一人で運べる。料理やなんか魔法なら細かい調整が利くし、不測の事態があっても魔法で対処可能。

でも………。

「でも、その代わりに魔法での喧嘩が勃発したりもするけど」

「そう、杏奈の言うとおり。だから大丈夫」

「……いや、意味がわかんない」

「だから、魔法の喧嘩が起これば怪我するでしょ？そのせいでこの時期は校医の先生が引っぱりだこで、保健室にいないんだってさ」

そういうと、アスカさんは学校指定ロープの内ポケットから丸い何かを取り出す。

それをドアの鍵穴部分に引っ付けて魔力を送る。すると、かちやりと音を立てる。それを確認して、おもむろに引き戸をガラツと開けて、こっちにピース。

「レクト君作のピッキングツール！」

「ダメだろ！？」

Dクラスはどうしようもないやつの巣窟だと再認識させられた。てか、レクトは兵器以外にも作れるとは聞いてたけど、こんなも

のまで作るなよ……。いや、作ってもいいから第三者に貸すな。

「ちなみに、ちよこつと無断拝借をしてきました!」

「杏奈さん、ココに窃盗犯がいます」

「緊急事態なので見なかったことにします」

本当に、Dクラスはどうしようもないやつ溜り場だと実感した。でも、既にリカの目が変な方向を見てトリップしてる。

「わかった。とにかく、中には誰もいないの?」

「それは三谷君がよくわかるでしょ」

まあ、確かに。

ボクの目は誰の魔力も感知していない。つまり、ココは無人の状態。

ボク等はその中に入っていった。

「じゃ、二人は誰か来ないか見てて」

「おけおけ。後は二人でいちゃこらしてて」

「え?ちよつと……。!?」

アスカさんがものすごいことを言いながら外に出て行った。

……。あの、外で見張ってたら誰かに怪しまれない?

いや、とにかく今はリカの吸血ができればそれでいいか。

とりあえず、リカを保健室のベッドに座らせる。レオが何をする

のか先を読み、さつとベッドの上に降り立つのを確認してから、ボクは学校指定ローブを外し、更にその下に来ていたカッターシャツの上のボタンをいくつか外す。

そして、リカに首を差し出して言う。

「リカ、早く血を飲んで」

「.....」

既に危ない方向へトリップしているリカは『パパが川の向こうで手を振ってる』とか言ってた。

ラディエさんは死んでないよね？

でも、これはマジでヤバそうだ。ボクはリカの口を自分の首に持って言つて、噛ませる。

最初に、ちくつとした痛みがあったかと思うと、それはすぐになくなる。

リカが血を飲んでやっと戻ってきて、少しだけ驚いたのか体がびくつと反応した。そして、ボクは自分の血がどんどん吸われていくのを感じた。

そうしてしばらくすると、リカの口がボクの首から離れていく。

「ご馳走様でした」

「お粗末さまでした。リカ、こんなになるまで我慢しなくていいから」

「でも、最近はソラも忙しそうだったし.....」

「別にそれぐらい、いいって。それに、できるときにしとかないと少し困るし」

ボクがそう言っつて、今がどういう状況か理解したみたいだった。すると、何故か顔を真っ赤にしだす。

「え？こ、ここ、ほけっ！？」

「・・・なんか、新車の鶏になつてるよ？」

そう言っつてボクは立ち上がろうとした。

すると体がふらつく。軽い立ちくらみ、たぶん貧血の類か何かだろう。どうも今回はリカに多く血を吸われたらしい。

それを見たりカがとっさに支えてくれる。

「ありが・・・」

「ねえソラ、これ・・・」

ボクがお礼を言おうとしたら、その言葉をさえぎられる。

リカの視線の先、そこは・・・。

「・・・バレたか」

「うん、つい最近違和感、感じてたから・・・」

リカが見ていたところ、それはさっき吸血させたほうとは逆の首筋部分。

そこには、何かで引つかいたような傷の線が二本あるはずだった。あの、夏に起こった冬香の騒ぎでリカが首筋に噛み付いたときにできた傷。あのままほったらかしにして跡が残ってしまった。まあ、小さいものだから、注視して見ないとわからないけど。

「いや、治そうとは思ってたんだけどさ、これはボクの自業自得って言うか、なんていうわひゃあ!？」

別に、噛んだわけじゃない。ただ、いきなりのことでもものすごく驚いただけだ。

いや、だって……。

「……やっぱり、治らないね」

いきなり首筋舐められるとか、無理でしょ？

吸血鬼の唾液は軽い切り傷程度ならすぐに治せるらしい。

たぶん、吸血した相手の止血をするためだと思う。まあ、そうじやなかつたら、今頃ボクは失血多量で死んでる。ましてや首部分だ。押して図るべし。

「そりゃ、既に完治してるからね……。てか、そんなことを軽々しくやっちゃダメだ」

「……?」

何故かり力はきよとした表情になる。

「まあ、これで大丈夫でしょ。さっさと戻ろう」

そう言った瞬間、後で大きな物音が。

何事かとはじかれたかのように振り向くと、そこには何故か多くの人がいた。

アスカさんと杏奈さんに加え、スズに四条さん、冬香。そして少し離れたところにリュウとハル君がいた。ちなみに全員、どこことな

く顔が赤い。

「……一応聞くけど、何してたの？」

「え？だって、中で物音したからさ、ついに三谷君がアンジェリカちゃんに手を出したのになって？」

「そ、そうだよ！？最初から、見てないからね！」

「は、はい！アンジェリカさんが師匠に、き、キスしようとしてたところなんか見てませんから！」

「この馬鹿二人は、何バラしてるの！？」

「そ、その、決して、やましいことは……！」

「……そうか、よくわかったよ。それにしても、キミ達はいてるね」

「……リュウさん、この先の展開がわかった気がします」

「そうか。たぶん、オレ達もその展開に加わると思うぞ？」

何を、そんな当たり前のことを言ってるのか。

「よかったね、保健室がすぐ近くにあって」

とりあえず、全員に正義の鉄槌をくらわせた。

Dクラスの教室に戻ると、カザハが杏奈達はどこに行ったか聞かれたけど、とりあえず三途の川でも渡っているんじゃないかなと返



しておいた。

6話・IN PREPARATION（後書き）

作 「というわけで、『準備中』をお送りしました」  
樹 「とりあえず、なんでこうなったのでしょうか？」  
作 「たまにはほのぼのしたのも必要かと」  
樹 「いえ、今のところは全体的にのんびりしてますよね？」  
作 「ただの気分です」  
樹 「・・・そうですか。ところで、いい加減にこのお二人の仲を  
どうにかしてくださいという感想もありますか？」  
作 「残念ながら、この二人は当分予定はないです」  
樹 「・・・鬼ですか？」  
作 「ただの作者です。というわけで次回予告！」  
樹 「今回は、四条さんの話ですね」  
作 「おもにどうやってあの子を目立たせる？的な感じの」  
樹 「では、次回もよろしくお願いします」

## 7話・SPECIAL SKILL

side空志

「……マジで、どうしよう?」

「……確かに、そこまで考えていなかった」

保健室での事件(笑)の翌日、つまりは準備期間三日目。ボクが教室に入って耳にした第一声が代表二人のため息とも愚痴ともとれるこの言葉だった。

一緒に入ってきたリカにスズ、四条さんといぶかしげな顔を向けつつも一応聞いてみる。

「それが、ミスコンで出場者は何か特技をしなきゃいけないらしいの」

ミスコンという言葉で四条さんが泣きそうな顔になる。

既に洗脳的なものからはとけている四条さんは今にもミスコンをやめたいらしい。

ただ残念なことに、四条さんの(前髪に)隠れた魅力で既に後戻りができない状況。それでしぶしぶながらも出るだけならと許可が出た。

でも、現実は厳しかった。

目立つこと自体が苦手な四条さんに大勢の目の前で何か特技を披露しろって言われても……。

「……あ、ああ、あの、わ、わたしには、こ、交信ぐらい、しか……」

「……………さすがに、それしちゃつと、ねえ」

「まあ、な……………」

四条さんがそうですよ、と言いながら落ち込む。すると、レオが四条さんに元氣出せよとでも言うかのようにボクのフードから前足を出してぺしぺしと頭を叩く。

四条さんはものすごく珍しい『精霊魔法』の使い手。正確には精霊と交信できる体質の持ち主。

「精霊魔法は、精霊と言つ意思を持ったマナが精霊魔導師を媒介に発動する魔法だから。一部のアホどもは嫉妬してそれをぶつけてくるから始末に負えん」

「……………あの、いきなり何ででてくるんですか？」

ここにいて誰かがいきなり古臭い言葉遣いに目覚めたわけじゃない。

見た目は二十代で金髪、『ボン、キュ、ボンなばーじやぞ』と自称する月の神霊、ルーミアさんがいきなり登場した。

……………確かに、自己主張の激しい体つきをしているとは思つ。

「決まっておろつが。わらわとて、単独で魔法は使える。しかし、ぶっちゃけた話、精霊魔導師に使ってもらった方が楽で。」

「建前はわかりました。本音は？」

「わらわも祭りを楽しみたい」

どこまで行ってもフリーダムな神霊さんだった。

いきなり神霊が出現しては適当なことを話していく光景は既に見慣れているのか、誰も驚いていない。むしろ、今さつき廊下から『あ、ルーミアさんお久ー』とか言われてた。良くも悪くも、かなりなじんでいるっぽかった。

「でも、ルーミアさんが言うのも事実なんだよな・・・」

「うう、すみません・・・」

「四条さんが悪いわけじゃないの。悪いのは世論」

「話のスケールがおつきいね」

でも、確かにダメだ。別に力を持つてるのが悪いことじゃない。ただ、その力を持つてることをバカにするやつがいるのがダメなんだ。正直な話、四条さんが図太い性格なら、いろいろとよかった。でも、現実はいくつもある。

「や、やつぱり、わたしには、む、無理ですよお」

ものすごく気弱な女子だ。

そんな大勢の目の前で罵られた日には絶対に人は信じないとか、人間不信に走る。それに、もしも友人として付き合ってるボク等今までその矛先が向けば、ものすごく気にすることが容易にうかがえる。

「っふ、汝らは甘いのう」

ただ、そこで不敵に鼻で笑ったのがルーミアさん。さすが、神霊というか、伊達に数百年どころか数千年生きてるわ

けじゃないのかと、期待を込めた目でボク等が見る。

「汝らは、例えば自分が、力こそ至上とする世界でものすごく攻撃力が低く、逆に速さだけなら人よりも若干優れていたならば、どうする?」

「・・・人生を諦める」

「とりあえず、来世に賭ける」

「わたしはね、ものすごくがんばるよ!」

「・・・ソラがいればそんな壁ぐらい越えて見せる」

「にや」

レオはライオンに変身すればいいんじゃない?

それができるの、君だけだから。

しかも、最初の代表二人は既にいろいろとダメだった。もう、人生を投げ出していた。

後者の二人に関してはどう突っ込むべきか・・・。

「・・・たぶん、ルーミアさんが言いたいのは、こういうことでしょう?どんなに弱くても、ある部分を突き詰めて、その部分で一番になれば周りは認めてくれるはずだって」

「うむ。そこで・・・」

ルーミアさんは言ったん言葉を切り、ためるとびしっと四糸さんを指さす。

「精霊魔法も突き詰めてしまえば良い」

「具体的には？」

「神霊と契約する」

「ハードル高い！？」

「何、神霊はここにいるではないか。簡単じゃ」

「いや、アンタがフリーなのはみんなにバレてるけど？」

「・・・奏よ、がんばるのじゃ」

「そ、そこはウソでも契約してくれるって言うってください！」

「だって、わらわ契約とかしなくても問題ないし」

まあ、精霊のくせに魔法が使えるって言うふざけたスペックの持ち主だからね。

確かティーナの話ではいくら神霊でも、契約しないと普通はできないはずなんですけどとか言いながらルーミアさんを見てた気がする。

ついでに、ステラとか言う星の神霊さんもお前嫌いとか言いながらルーミアさんに喰ってかかって言った。

「・・・じゃ、どうするの？」

「そ、そんな、わ、わたしに特技、なんて・・・」

まあ、いきなり特技は何？って言われても困ることはよくわかる。

「ごういうのは、どっちかって言うと、四条さんをそれなりに知ってる人から第三者の意見を聞いた方がいいと思うんだけどね」

「それなりに知ってるって、どの程度だよ？」

「・・・例えば、授業を一緒に受けてるとか？友達とか・・・？」

一応ボク等がそれに当たる気がしなくてもないけど、どうしても思いつかない。

つまり、ボク等より四条さんと過ごす時間の長い人は・・・。

「・・・ほえ？」

「「「・・・ダメだ」「」」

心の底からそう思った。

全員の視線が向かった先はスズ。かなり似通った方向ベクトルならと思っただけど、この子のような超ド天然の意見が参考になるかどうかものすごく怪しい。

「一応聞くけどさ、四条さんのすごいところは？」

「奏ちゃんのすごいところ？」

そこでスズは腕を組んで考えてみる。

そして何かをひらめく。



「精霊さんとおしゃべりできる!」

「うん、よくわかった。ありがとう」

聞くだけ無駄だった。

というか、話を聞いていたのかな? いや、聞いてはいたんだけど、やっぱりそこに行くよね……。

でも、スズはそんなボク等の反応がお気に召さなかったみたいだ。

「むう〜。じゃあ、冬香ちゃんに聞いてみようよ!」

「……冬香に?」

何で冬香ってボクは考えた。

その疑問に答えるようにリカがぼそりつつぶやくように言う。

「……冬香と奏は同じクラス」

ああ、なるほど。

確かに、冬香は四条さんと同じクラスだ。まあ、ボク等よりいろいろと思いがたることがあるかも知れない。

とりあえず、ボク等は冬香に会いに行ってみることにした。

「で、ここがAクラス?」

「は、はい」

何故か四条さんはものすごく緊張している。  
何を緊張しているのかよくわからないけど、とりあえず入ってみる。

中では何かの作業中らしく、生徒がせわしなく動いている。そこで近くにいた男子生徒が扉の前に突っ立てていたボク等を見ていぶかしげな目をする。

「……お前ら、何だ？」

……いきなり、哲学的な質問っぽいものをされた。

「難しいね。これがテツガク、ってやつかな？」

「なんか、珍しくスズと同じ考えが頭に浮かんだ」

「……Sクラスよりも難しいことを考えているの？」

「わ、わたしも初めて知りました」

「違いよ！？お前らみたいなのやつが何でここに来てんのかって聞いてんだよ！？」

……よく、意味がわからない。

「ねえ、なんかボク等、悪いことした？」

「ソラは常に正しい」

「……リカちゃんの中で、ソラ君はチョウジゲンテキな存在に

なってるよ〜!?!」

「な、なんだかすごそうです!?!」

「あのさ、意味わかってる?主に三人とも」

「だから、何でお前らみたいな格下がここに居るのかって、聞いてんだよ!」

「・・・なるほど、そういうこと」

もちろん二重の意味で。

まず、ここはS程に今だ下のクラスを見下す傾向にあると。だから、ここに黒(Dクラス)の紋章をひつつけたボク等は空気読めよと言外に言われているわけだ。

そして二つ目に、どうもボク等のことをよく知らないみたいだ。

「ここに留学してきた、平地冬香さんと呼んでくれない?」

「なんだ、野次馬か?誰がDのやつ等の面倒なんか・・・」

「あ、冬香」

「ん?あ、本当だ〜。冬香ちゃん!」

目の前の男子は完全にスルーされた。  
そして冬香がこつち歩いてくる。

「どうしたの、アンタ達?」

「いや、いろいろなことがあって、四条さんがミスコンに出るとはオッケーなんだけども……」

「お、オッケーじゃ、な、ないです……」

「でも、特技がどうしようってなってさー」

「……確かにこの子は、ねえ」

「で、なんか得意なこととか思い当たらない？」

「そうね……」

冬香が考え出す。

たぶん、今頃は学校での風景が頭の中で再生されているはずなんだろうと思う。

「って、俺を無視するな！」

「……まだいたの？」

リカの痛烈な一言。

それによって、目の前の生徒は口をパクパクさせて言葉を失ってしまう。

「ねえ冬香。何でこんなに殺気立ってるの？しかもボク等に対して」

「え？……ああ、どうも、ここは一部の生徒がいまだにクラスがどうとか言ってるらしいわね」

自分は全く興味がないと言いたげに、冬香は必死に四条さんの得意そうなことを脳内検索中。それにも関わらずこっちの話にも返してくれる当たり、賢いのかなあと思う。

「でも、アンタが言つての本当なわけ？アンタが元Sの代表をぶちのめしたからある程度は平和になったらしいけど？」

冬香の何気ない一言で周りがざわつきだす。

「ぶちのめした？Dが、Sを？」

「それが、可能なヤツつて・・・！」

「そういや、噂であの生徒が戻ってきてるって・・・」

・・・ああ、ここにも悪評が轟いているわけですね。

ボクはげんなりしつつも答える。

「いや、どうもSだけらしいね。今さっきわかった」

「どうせなら、もっとえげつないの使えば良かったんじゃないの？」

「さすがに上位の動物形は下手したら死んじゃうって。・・・  
てかさ、思いつかないの？」

「ちよっと待って、考えてる」

冬香は地味に泣きそうな顔をしている四条さんを見て焦っている。

周りからは死ぬって!?!とかいう声が聞こえる気がするけど気のせいだ。やっぱあいつは悪魔で、噂は本当なんだなって声もなかった。

「いい加減、ソラの悪口を言うなら………狩る」

唐突にリカがしゃべったかと思えば、大鎌を取り出して牽制しだす。

いきなりの猟奇殺人予告に周りの生徒もドン引きしてしまい、一歩後ずさる。

「ちょ!?!それじゃ、本当にボクが当人だってバレる!?!」

「もう、その一言でバレてるわよ」

そして平然としているボク等には明らかに変なまなざしが来ている。

まあ、ここから出た後、冬香は大変なことになるだろうということに簡単にはわかる。

「……あ、一つだけあった」

「そ、そんなに考えても一つなんですわ……」

「……精霊魔法の比重が大きいのよ。それはアンタだけの才能だからね」

「そ、そうですか?」

冬香はまるで洗脳でもするかのように四糸さんの顔を覗き込んで

言っ。

まあ、単純でよかった。

「で、奏ちゃんの得意なことって？」

「ん？ああ、あれ見て思い出したんだけどね」

そう言って冬香が指さす方には、ギターっぽいものや、見たこともないような特殊な楽器を運んでいる生徒。

「まあ、アンタ達二人は見るの初めてだと思っけど、あれは楽器  
「よ

「「へえ」

「・・・奏、ロックバンド的なことができるの？」

「む、無理ですよ！？できません！？したことないです！  
「？

「いや、音楽の時間に歌うのがうまかった気がしたのよ」

何故か冬香の記憶がアバウトだった。

「・・・何で、気がするの？」

「・・・何て言うの？イメージが合わないというか・・・まあ、  
やらせてみればわかるんじゃない？」

その言葉で全員目が四糸さんに向く。

「え？・・・その・・・あの・・・」

「とりあえず何でもいいから歌ってみてよ」

「う、ううで、ですか？」

「「「「・・・」」」」

恥ずかしがる四条さんの言葉に、ボク等は無言の肯定で示す。

四条さんはなおもうなりながらも、しばらくすると意を決したような雰囲気になる。

そして、軽く息を吸い込み・・・。

・・・。

歌う。小さくだけ。

綺麗な声で、静かな旋律が流れる。

ボクはこんな歌は聞いたことがないけど、独特のメロディーだ。まるで、聖歌のようにも聞こえる。

そして、光が・・・！！

「・・・っ！？四条さん、ストップ！」

「ひゃ、ひゃい！？」

「ソラ君！？いきなり、ど、どうしたの〜！？」

「そうよ、せっかく特技が見つかったのに・・・」



「ソラ？」

講義の声を無視し、四条さんに詰め寄る。

「さつき、精霊が活性化したけど？」

「は、はい？あの、これ、精霊さんが、好きな歌なんです。お、お母さんに教えてもらって・・・」

四条さんの話を聞きながらも 月詠<sup>ツクヨミ</sup> を起動する。

さつきよりも魔力がはつきりと見えるようになる。そして、四条さんの周りにいる光の球を見てみると、やっぱり精霊魔法を使うとき並みに活性化している。

下手をすれば、四条さんが精霊魔導師だとバレていたかもしれない。それに・・・。

それに・・・。

「四条さん、無意識に魔力使ってる」

「え？」

「魔力を使って歌ったってこと？本当に？それなら今度からそうするわ」

「別に、魔力使って歌えば上手になるわけじゃないよ？」

冬香の見え透いた考えにとりあえず言うておく。

すると、冬香は結構本気でうなだれた。どうも、冬香は音楽が苦手なようだった。

「じゃあ、奏ちゃんが歌上手なものも、精霊さん達に歌ってあげたから？」

「上手、でしたか？よ、よく頼まれていたので・・・」

「うん、すごかったよー！」

「・・・とりあえず、その歌以外なら大丈夫かな？」

まあ、冬香が音楽の時間に歌とか歌う時に異常な魔力を感じたり、精霊魔法が唐突に発動していないみたいだし、普通の一般的な歌を歌う分には問題ないんだろう。

「まあ、これで任務完了。じゃ、教室に戻ってて」

ボクはそう言ってAクラスの教室から出ていく。

「ソラ君は？」

「ボクはお仕事。ついさっき変な魔力を感じた」

「え？え？じゃ、じゃあ、わたし達も行った方が・・・？」

「うん、とりあえず、リカも来て」

「わかった」

そう言いながらリカと歩く。

「・・・本当は？」

「精霊魔法と歌の関係性について調べる。もしも、歌に反応して精霊が活性化して、精霊魔法が発動すればマズい。しかも、今は文化祭期間中。さっきみたいな楽器持って練習している人がいる。まあ、三日前からもしてるはずだし、大丈夫だとは思うけど。・・・それに、いい機会だし」

「いい機会？」

「他にも調べたいことがある」

とりあえず、サリナさんに聞くか？  
いや、図書館にでも向かうか。

7話・SPECIAL SKILL（後書き）

作 「というわけで『特技』をお送りしました」

奏 「・・・わたし、そんなに地味なんですか？」

作 「・・・」

奏 「そ、そんなあ!？」

作 「四条さんの特技を無事発見できたけどまだ問題はありそう!

？」

奏 「・・・」

作 「そんなわけで調べに行こう!・・・次回もよろしく願います」

## 8話・TABOO MAGIC

side空志

「まあ、そんなわけで精霊魔法について知りませんか？」

「・・・それは、私も初耳だね。って、変な魔力を感じたからここに来たんじゃないの？」

「感じましたよ？四条さんの精霊から。歌っただけで精霊が魔法を発動させそうなくらいに活性化。これを変って言わずに何を変って言うんですか」

理事長室。

ボクは魔法のエキスパートであるサリナさんのとこに来た。

まあ、忙しそうだから会ってもらえなさそうだったけど、『変な魔力を感じた』って内容で相談したいって言ったらすぐに通してくれた。

「・・・まあ、そうなんだけどね」

「まあ、精霊魔法はかなり珍しいモノだっことは知ってるつもりです。それなら、ここにそれ関係の資料は？」

「さすがに、そんなモノ・・・」

「ボクが言ってるのは精霊魔法についてじゃない。あれは、ほとんどの魔法使いから忌み嫌われてる。積極的に調べてる人が少ないのは道理だし」

「じゃあ、ソラは何を？」

「『歌と魔法の関係性』、それについて。．．．たぶん、失われ  
た魔法関連だと思います」

「．．．．．君は、どこまで知ってるの？」

「大体のことは？まあ、禁忌も含めて」

そう言つと、ここにいるリカにカルネル先生、サリナさんも驚きの表情を浮かべる。  
そりゃそつだ。

「禁忌に触れること自体が罪。ごく一部の例外を除き、たとえ知  
つてるだけでも罰せられる。確か、これがこの世界での法律ですよ  
ね？で、ごく一部の例外つて言うのが国の高官。要するに『消滅の  
賢者』並みのトップ」

「え？でも、アタシ達だけじゃなくて、たくさんの方はどれが禁  
忌で、どれが禁忌じゃないくらいはわかるよ？」

「それは、本当に軽い禁忌。もしも、ここの学校みたいにランク  
を付けるならEより下かな？」

「何で、ソラがそんな極秘事項を、知ってるの？」

「智也さんに聞いた」

「．．．でも、彼は元とはいえ『消滅の賢者』よ？噂では、そんな簡単に教えるような人でもないような気がするけど？」

「順番が違っんです」

「・・・順番、だと？」

カルネル先生が、その仏頂面をさらに歪める。

その言葉にうなずきつつも答える。

「ボクのこの目、かなり特殊なのは知っていますよね？」

「魔法解析アナライズできる目なんて、この世のどこを探しても君ぐらいだからね」

「でも、実はそこまで便利じゃないんです。いや、便利なんですけど」

どう説明すべきか悩む。

この属性は自分でも把握できていないうえに、どうもこの力の使い方をコーチすべき立場のはずのルーミアさんはボイコットしてるし。

「これ、使いこなせていないからとかじゃなくて、普通にある程度の魔法の知識がないと使えないんです」

「そんなの、当たり前だろう？」

「いやだから、ボクは、正確にはボクとスズは、魔法を覚え始めたのは半年前なんですよ？なのに、だから、最初の方はどんな感じの魔法が来るのか程度しかわからなかったんです」

「いや、それは今も同じだよな？」

「全然違いますよ。だって、もしも今ここで何らかの魔法が放たれても、ボクはそれを瞬時に解析して、<sup>アナライズ</sup>対抗するための魔法を打てるだけの力がある。最悪、ボクは相手の魔法をコピーして、それをさらに昇華させることもできる・・・と思います」<sup>レベルアップ</sup>

しかも、最近じゃそれが顕著に表れている。

今までは自分がそうしたいと思わない限り何もできなかったのに、今じゃ知らない魔法を見ただけで勝手に解析して頭の中に記録されている。

「で、ボク等はこれまでに多くの事件に遭った。そこでわからない魔法を智也さんに聞いてみると・・・法律でも極秘扱いの禁忌に触れちゃってた。そんな感じですよ」<sup>タブー</sup>

後は簡単だ。

智也さんはボクが知らないはずの魔法を、しかも禁忌の魔法を知っていることにもものすごく驚いた。そして、それなら知らないよりもある程度教えてしまい、危険性を教える方がいいと判断したんだろう。

もしも、ボクが知らずに魔法を使えば大変なことになっていた可能性が高い。

「まあ、そんなわけで失われた魔法には禁忌関係が山のようにあるらしいですね」<sup>ロスト・マジック</sup>

「・・・そこまで知ってるの」

「まあ、ボクとしては一教師が知っている方が驚きですけど。そ



う言っわけで、あるんでしょう？失われた魔法ロスト・マジックに関する資料」

「・・・そんなもの、ないと言ったら？」

「遺跡のこと、全否定するつもりですか？・・・ひよつとすると、この文化祭期間中.....にあるはずのない資料が消えるかもしれない  
ませんか」

「はあ、言っただけよ。それに、下手打っであの子の魔法で潰れたら大変なことになるしね」

そう言っつと、サリナさんは自分の机をごそごそとあさりだす。  
そして取り出したのは判子のようなもの。

「ちよつとこっちに来て」

言われるままにサリナさんのところに行くと、その判子のようなものをボクの額にポンと押しつける。

「はい完了。これで君が一時的に登録されました期間は三日だけ。これで調べたいことを調べつくして」

それだけ言っつとバイバイとでも言っつかのように手をひらひらと振る。

「・・・あの、説明がなさすぎです。」

「さつき、魔法具でお前の魔力を一時的にゲスト扱いで閉架書庫クローズドの入室権限を与えた。ただ、閉架書庫の前に行くだけで扉が開く仕様になっている。まあ、行けば分かる」

クローズド  
閉架書庫、どうもそこに求めるものがある可能性が高いらしい。  
ボクはとりあえずお礼だけ言って理事長室を出ていく。

「あ、そう言えば予選は君はシードだから問題ないよ。ぶっつけ  
本番でハンデありのバトルしてもらおうから」

「扱いが酷い!？」

ぶっつけ本番のみでできるやつがいたら、それはもはや超人だ。  
しかも、ボクの力は奇襲で一氣にカタをつけるしかないようなもの  
ばかりなのに……。

「本戦は文化祭二日目から。ちょうど入室権限が切れた頃だね」

まさか、そのために期限を三日にしたんじゃないかと疑いたくない。  
る。

まあいいけど。

「はいはい。じゃ、ボク等は仕事なんで」

そう言って、やっと理事長室から出ることができた。

s i d e r i k a

とりあえず、理事長室から出てきて気になったことをソラに聞いて  
みる。

「ねえ、ソラ。あの話はどこまでが本当なの？」

「ん……。ほぼウソ、あるいはただの憶測」

堂々と言い放った。

しかも、理事長室の目の前で。

「でも、一応ホントに思った事を言った。まず、四条さんのあの歌、ものすごく独特な感じだったじゃない？」

「……うん」

それは今でも覚えている。

奏の歌は不思議な旋律を、そして不思議な歌詞で歌われていた。まるで……。

「まるで、神様に捧げるオラトリオ聖讃歌みたいだった」

「でも、それがどうしたの？」

「これは、あくまで推測なんだけど……。使われていた言葉、あれって古代魔法文字エンシエント・スベルなんじゃないかって」

古代魔法文字エンシエント・スベル。それは大昔に使われていたという特殊な文字。

文字自体に力ジャミングがあつて、さまざまなことを引き起こす。例えば、魔法妨害ステルスに索敵妨害もこの技術が使われていた。

「まあ、それだと四条さんの家系が、昔は精霊魔法を中心に使っていた一族って可能性が跳ね上がるけど」

「え？何で？」

「だって、そんなピンポイントで精霊魔法を使う子がいて、更には精霊を活性化させる歌がある。偶然がいくつも重なれば必然、そうとしか言いようがない。だから、本当は四条さんに今すぐ自分の家を探してもらった方がいいかもしれないんだけどね。まあ、さすがに今は無理でしょ。……………で、ここかな？」

そんな話をしていると、いつの間にか図書室というプレートのなかった部屋の前にいた。

ソラが部屋の前に行くと言もなく引き戸が開き、アタシ達はその中に入ってしまった。

「さすが、有名どころの学校。…………閉架書庫ってどこ？」

あまりに大き過ぎて、そして本で埋め尽くされていて、全然どこに何があるのかわからない。

「…………がんばって探す？」

「まあ、それしかないんだけどさ」

とりあえず、アタシ達は二手に分かれて探すことにした。

side 隆介

「んっふんっ」

「…………なあ、何がそんなに楽しいんだ？」

今、オレはスズと一緒にいろいろなところを回っていた。

一応仕事。本当はただの散歩。

オレは一人で歩いていたところをスズに捕獲され、そして周りにいたやつ等のおせっかいでこうなった。マジで余計なお世話だ。

「これじゃ、まるでデートみたいだね」

「・・・」

どう返したのか・・・。

こいつはいつものように、のんびりとした顔でニコニコと笑っている。

しかもどういうわけか、周りには明らかにカッブルな雰囲気を出すやつらでいっぱいだ。・・・これはオレに対する当てつけかなんかか？

「ねえねえ、あれって何？」

突然スズに話を振られ、オレはスズの指をさす方向を見る。

まあ、こいつとソラはつい最近魔法の世界に足を踏み入れたせい  
か、よくこういう風にあれ何？と子供のように聞いてくる。

「あ？・・・ああ、ありや魔法を使った発電機だな」

「発電機？」

「ああ、お前達の世界と違って、こっちは魔法っつー半無限のエネルギーがあるからな。使わない手はないだろう？」

「そっか、魔法があれば温暖化も関係ないもんね。それに、いっぱい使っても気にしなくてもいいもんね」

「それがそうもいかねえんだな」

首をかしげるスズにオレは説明する。

まあ、確かに魔法さえあればどんなものでも『魔力』という力で動かせる。ここでの発電の仕組みは、魔力が込められた石、通称『魔力石』を使っている。

これを専用の機械に取り付けて、後はソラ達の住んでいる世界同様にエネルギーとしての魔力を送る。

「だから、電柱っぽいのがあつたら？」

「そっか、あれは電気じゃなくて、魔力を送ってるんだね〜！」

「そう言うことだ。で、『魔力石』は人工的に作れるけど、そう言うのは内包してる魔力が天然のモノに比べるとかなり劣る」

まあ、人間が高々数十分込めたものか、世界が数百年かけて込めたものか、どっちが多くて魔力を内包しているのかは比べるまでもない。

「だから、あれは魔道工学系の生徒が作ったやつだろうな。どうせ、エネルギー効率をよくするための研究成果をここで展示しているんだろう」

「へえ〜。よくわかんないけど、すごいんだね〜！」

・・・まあ、確かにすごい。

「まあ、お前が言う永久機関を作ろうとしたやつもいないでもな

「かつたけどな」

「エーキューキカン？」

「……………ずっと魔力を作り続ける機械のことだ」

「おお〜」

「まあ、所詮はおとぎ話だけだな。無限インフィニット・ブースト魔力増幅って言ってたっけな？」

「おお〜。なんか、カツコ良さそうだね〜。でも、ソラ君とログさんならできる気がするよ〜？」

「……………」

ああ、オレもそんな気がしてきた。

「そうだな。それなら、未来のエネルギー事情はもう心配しなくてもいいな」

「そうだね〜。あ、リュウ君！あっちで何か配ってるよ〜！？」

「……………試食、か？」

「行ってみようよ〜！」

スズはそう言うとオレの腕をつかんで引つ張る。

オレよりもかなり小さいくせにどこからこんなに力を出せんだと不思議に思いつつ、オレ達はその教室に行ってみる。

「1-Sのハロウィン喫茶の試食をお願いしますーす！」

そこは、どうやらソラ達が喧嘩を吹っ掛けたSクラスの教室だったらしい。

既にほぼ完成しているのか、かぼちゃの飾りや、シーツを被ったようなお化けの絵などが飾られている。

そして、さつきから宣伝していたのがこの女子生徒だろう。数人が魔女っぽい恰好で客引きをしている。

そこへスズは飛び込んでいく。

「は〜い！何があるんですか〜？」

「あ、坂崎さん！とりあえず、かぼちゃを使ったプリンとか、ケーキを出してるよ？」

「じゃ、両方くださいー！」

顔見知りなのか、とんとん拍子に話が進んでいく。

その時、オレの足を何かが引っ張る。

たぶん、レオが喰い物の匂いでも嗅ぎつけてここに来たんだろうと思っ下を見ると……。

「だ……め……だ……だ……」

……ドン引きした。

だって、ミイラ男っぽいのがほふく前進でオレのズボンのすそを引っ張ってるんだぜ？

思わず、それに思い切り魔法を放って、意識を一瞬で刈り取る。

だが、そこで気付く。こいつ、Sの誰かじゃね？



「・・・やばいな」

オレ、まだ犯罪者とかになりたくない。  
いや、遅いかもしれねえけど。

「リュウ、さん・・・」

「あ？」

オレは呼ばれた気がして、そっちの方を向く。  
そこには、何故か脂汗を流し、腹を抱えてうずくまるシャンが  
いた。

しかも、隣ではシユウがぶっ倒れている。

「・・・おい、どうした？」

「スズさん・・・食べさせちゃ、ダメ・・・ですう」

「・・・どんな時でも、語尾は『ですう』なんだな」

そしてオレはよくわからんが、スズを止めようと声を掛ける。

「スズ、ちょっと・・・」

「む！？これは、塩と砂糖、その他諸々が・・・」

パタン。

味の批評をした途端、スズが前のめりに倒れた。

「スズウーっ!?!」

急いでスズを抱き起すと、そこには穏やかな笑みを浮かべ……。

「あはは。リュウ君、いつの間に天使さんみたいな羽が生えたの?それに、わたし達、お花畑にいたっけ?」

「待て、頼むから戻って来い!?!」

遙か天より高い、遠くの国へと旅立とうとしていた。

オレはとりあえず、まだ大丈夫そうなシャンに聞いてみる。

「なんだよ、これ!?!バイオテロか!?!」

「ち、違う、ですう……はう!?!」

シャンは変な声を出しつつ、お腹を押さえる。

しかも、腹から変な音も聞こえる。

「殺人、料理、ですう……」

「んなベタな!?!」

オレがそう突っ込むと、周りで次々に人がバタバタと倒れていく。しかも、口にはお菓子のようなものが突っ込まれている。

「まさか、お前とシュウは一緒に食べて?」

「シュウが、食べて倒れて、わたしに危険だと言いましたが、わたしの『気』なら大丈夫だと思って、食べてみた、ですう……」

「無駄なチャレンジ精神だな!？」

ただ単に食い意地が張ってただけだった。

「ついでに、シャオにも食べさせたで、すう……」

「鬼か、お前は!？つか、シャオどこだよ!？」

「……トイレに、駆け込んだ、ですう」

てか、オレはこのクラスの人間のはずなのに全然知らなかった。まあ、一日の大半をそこら辺を歩き回って異常がないか調べることに費やしているからな。決して、スズにいろいろ連れまわされるとかじゃない。

とにかく、知らなかったのはしょうがない。だから今は現状を何とかしないとダメなわけだが……。

「……シユウ」

「……」

返事がない、ただの屍のようだ。

まあ、この状況を何とかできそうなオレの仲間が既に殺<sup>や</sup>られてい

る。  
「シユウ、頼むからマジで起きてくれ!」

体をゆすってシユウの意識を取り戻そうとする。  
しばらくすると、かすかにうめき声が聞こえる。

「シユウ！」

「・・・遺言、を」

「その前に薬だ！」

「症状に、合うものが・・・」はあ！？」

なんか、散ってしまった。

マジで、どうする？

「ちょ！？何これ！？」

「・・・・・・鈴音！」

天の助け！

「ソラ！こいつ等を何とかしてくれ！」

「いや、ボクに何をしろと！？」

「こいつら、Sの殺人料理喰って死にかけてる！」

「んなアホな！？」

まあ、言いたい気持ちはわかる。

結局オレ達にできることが見つからないってことで、校医の先生を呼んで来た。

そして、まるで料理がダメだったSクラスヘスズが突撃して何故

か料理教室が行われた。これで少しでもましになってくれればいい  
と思った。

……マジで。

8話・TABOO MAGIC（後書き）

作 「大変遅くなりました。『禁忌の魔法』をお送りしました！」  
サリナ 「ここでははじめまして、かな？」

作 「どうも、はじめまして。私が作者のジョンソンです」

サ 「・・・なんでジョンソン？」

作 「気分とかそんなもんです」

サ 「・・・まあ、気分は大事よね。カルをいじるとかに」

作 「最近はなんか書く気が起きなくてずいぶんゆっくりとしています」  
ます

サ 「なまけ者め。そんなのうちの生徒会長だけで十分よ」

作 「彼女は僕の怠惰の権化です」

サ 「・・・」

作 「というわけで次回！とりあえず、他の人達に支援が移る予定です」

サ 「じゃあ、次回もよろしく」

## 9話・EACH DAY

side空志

その日は教室へはいると、既に雰囲気慌ただしかった。文化祭まで残り、二日。

演技の方はどうにかなって、後は演出と演出系魔法の練習らしい。前者はスポットライトとかで、後者はよくわからない。たぶん、ワイヤーアクション的なものだと勝手に解釈しておく。

いや、どっちも魔法ですればと思うけど、その属性に合う子がないらしい。だから、後は魔道具で魔力を光に変換するらしい。魔道具に関しては、既にリオネさんの魔法人形の作成と整備をしているレクトが中心になって部隊の大道具を作っている。

「ミタニー。ここんどこ、ちよいちよいつてして」

「……ああ、わかった」

『ちよいちよいつて何？と聞こうとしたら普通にわかった。どうも、魔法回路の精密作業だったみたいだ。』

ボクは、魔道具の本体ハートの作成についてはログさんから『がんばりましょう』の判定をくらっているが、中身プログラムに関しては既に何も教えることはないと評価を……。

「って、何でボクも手伝ってるの？」

気がつけば、いつの間にかボクはログさんより無理やり持たされた魔ツール工器具を片手にいろいろと手伝っていた。

「だって、ミタニーはあのログ・ラギスの弟子なんだから？」

「それは全然違う。あのドワーフのおっさんはボクに借金押しつけて無理やり働かせているだけだから」

「でも、オレツチ達の作るのよりかなりできはいいんだけどな」

ボクが魔道具を作ると、明らかに人間の方々が作る魔道具よりどうしてもドワーフよりな物を作ってしまうことが判明している。

しかも、ドワーフ作の道具はかなりいいものらしい。

簡単に言えば、ボクは既に人間から見れば一流とまでは行かなくても二流、ドワーフから見ればひよっこよりましのレベルに位置するというよくわからない現状。

「でも、なんか嫌だ・・・」

状況が状況だけに・・・。

まあ、そう言うわけでボクは準備期間をごくごく普通に過ごしていた。

・・・そういえば、みんなはどうしてるんだろう？

side 樹

「シューウ！どうしようですう！？バレたですう！？」

「・・・落ち着いてください。別にバれていません。それに、例えバレたとしても、ビースティアン獣人族なら問題は特にありません」

「でも、何でバレたですう！？」



「いや、ただ単に似合いそうだったただだ」

「……ところでシャオ、その格好は？」

「……聞くな」

私の目の前には、二人の少女少女がいました。  
言うまでもなく劉姉妹妹です。

「おい、俺は男だ」

「はい、男オトコの娘メですよね？」

「……いや、お前が言っていることは絶対に間違っている」

目の前にいるのはどう見ても双子の少女にしか見えませんが、男子の服を着ているときは辛うじて男子に見えますが、女装をしてここまでなるのは……。いえ、驚きです。

「どこからどう見ても完璧な双子姉妹ですう」

「俺は男だ」

「まあまあ。それより、シャンはどうして騒いでいるのですか？」

「そうですね！何故か私は狐みたいと言われたですう！」

「……ただ単に狐の恰好が似合いそうっただけだろ？」

「……たぶん、こっぴどいことでしょう。」

私達のクラスは『お化け屋敷』です。

そして、誰かがシャンの配役にたまたま化け狐か、そのあたりを選んだのでしょうか。まあ、実際にシャンとシャオは妖怪の類ですし・・・。

「そして、シャンは早とちりをしたということですね」

「そういうことだ」

「ですが、シャオは何故女装を？」

「私が着せたですう」

シャンがそう言いながら胸を張ります。

それをシャオは横目で嫌そうに見つめ、私に救難信号を出しています。

「・・・・・・・・・・・・・・・・スルーしましょう。」

「ですが、明らかに脅かす格好ではありませんよね？」

二人の恰好は、着物に狐の耳をつけただけのシンプルなもの。これでは、怖がる方も怖がれないようにおもえますが？

「客引きの方らしい」

「なるほど」

どうも、シャンとシャオは看板娘にさせられるようでした。

「ですが何故、皆さんはこつも殺気立って準備をしているのでし

よつか？  
「

周りを見てみると、どうしても生徒の皆さんが死に物狂いで準備をしているようにしか見えないのが不思議です。

リュウさんの話では既にSクラスは準備を済ませており、勉強をしているらしいです。

さすがはエリート、思考回路が違います。

「どうも、景品が目当てらしいですう」

「景品、ですか？」

「ああ。よく知らないけど一位は表彰されて、理事長さんがあの手この手で手に入れた景品をクラスに上げてしまっそうです」

「・・・」

説明がものすごくアバウトでした。

これでは、知りたい部分が全くわからないです。

「では、景品とは？」

「さあ？」

「それが、文化祭で表彰されるまでわからないらしいですう。ついでに一位の決め方も同じですう。でも、先輩からの話では毎回すごいと聞いているらしいですう」

ものすごく無意味な情報管制が敷かれています。

今までの情報をまとめてみますと・・・。

一つ、何らかの方法で一位を決める。  
二つ、優勝するとすごい景品が手に入る。  
以上ですか……。

「で、それを知らなかったCクラスはあまりにメジャーすぎる『お化け屋敷』にしてしまったために頑張っているらしい」

そう言うことでしたか。

Cクラスの方々は諦めの悪い方達が多いようです。それに、空気からしても、体育会系のノリが多く、魔法系のスポーツをしている方がほとんどですね。

おそらく、ここはスポーツ推薦系の方々が集まってしまったクラスなのでしよう。

Dに関してはソラさんから『変人』の集まりと聞いています。

今にして思えば、このクラス分けはほぼ完ぺきなのでは？と思っ  
てしまうことが多々あります。

「では、私達も手伝わなくてはいけませんね」

「お、俺はいい。ちょっとトイレ……」

「見つけたっ！！」

いきなり、教室の外から一人の女子生徒が飛び込んできました。  
そしてシャオとシャンを見つけると、まるで獲物を見つけた狼の  
ような目を向けます。

「しまっ！！」

「捕獲っ！！」

いつの間になっていたのか、しかも私でさえ見分けることが難しい女装状態のシャオだけを確保すると、どこかに行ってしまうました。

「……そういえば、シャオはあの人達から逃げてる途中だったですう」

「……そうでしたか」

私とシャンは、その光景を見なかったことにして、お化け屋敷の手伝いを始めました。

side 冬香

「……暇ね」

わたしは特に何もすることがなく、この学園を歩き回っていた。喧噪のやまない学園の廊下を当てもなく歩いてく。

しかし、何故かやたらとカップルの姿が目につく、というか多い。これは、わたしに対する当てつけかと疑いたくなる。

……いつそのこと脅迫状の主に爆破でも頼もうかと、本当に思った。

「……っ」

「……」

ぶらぶらと歩いていると、声が聞こえたような気がした。

でも、次の瞬間に確信に変わる。と言うか、いきなり目の前に出

てきた。軽い爆発音とともに二つの人影が。

「だあかあらあ、いい加減にしてって言ってんでしょうがあー!!」

「なんだよ！むしろお前みたいナブス、こっちからお断りだ！」

「何よ、アンタからこっちに言いよってきたくせに！」

「こっちが下に出てたら調子に乗りやがってー!!」

「・・・ちよつと、邪魔なんだけど？」

「部外者は黙れ！」

「・・・こいつら、本当にムカツク。」

「いいの、それは反抗とみなすわよ？」

「何、風紀委員みたいなこと言ってんだよ!？」

「あんたはAらしいけど、所詮は一年でしょ!?!二年のこっちにかなうわけ・・・」

「コード 氷地獄コキユートス！」

一瞬にしてこちら一帯が白一色の銀世界に早変わり。  
「ここはもう、既にわたしの領域セカイだ。」

「あ、アンタ、こんなことしたら、風紀委員が」

「残念ね。こっちはね、これでもバツクにここの理事長がついてるわ。……それにね、コード 巨人<sup>ギガンテス</sup>」

そう言うのと、周囲の氷から氷でできた人形達が次々に現れる。それらは氷でできたハンマーや剣、近接系のさまざまな武器を所持している。

「……このわたしの人形達に勝てるかしら？」

「「ひい!？」」

「ちょ!?!? 姉さん!?!」

わたしが目の前にいる生徒と会話をしている途中、ハルがやってきた。

「ちょっと、気をつけないと転ぶわよ？」

「大丈夫だって。……ほら、みなさん寒くて顔が真っ青だよ？」

ハル、たぶんそれは間違っていると思うのよ。

そんな心優しいハルは目を閉じて集中する。そしてかっと目を見開いて魔法陣を展開。

「 烈華<sup>レツカ</sup> 」

すると、魔法陣を中心に炎が走り、私の発生させた氷を次々に溶かしていく。

もう、魔法に関してはうちの弟はさすがだ。

「ま、ママ、魔法陣・・・!?!」

「あ、あの、生徒・・・!?!」

「うちの弟をあのバカと一緒にしないでくれない?つか、うっと  
うしいのよ。さっさと消えてくれない?」

「すみませんでしたー!?!」

「・・・姉さん」

ハルが半眼で睨んでくるけど無視しよう。

だって、あの馬鹿とできのいいうちの弟ハルが同一視されるとか、屈辱以外の何物でもない。

「・・・まあ、いいわ。で、何か用があつたんじゃないの?」

「いや、姉さんが見えたから」

「そう?」

「うん。暇だし、どっかに行こうよ!」

そう言つと、ハルはわたしの手を掴んで引つ張っていく。

最近までは逆だったのに・・・。体の弱いハルにいろいろなモノを見せてあげたくて、調子のいい日はいつもわたしが手を引つ張っている。それが今じゃ立場が逆になつてわたしがハルに連れまわされている。

「・・・本当に、わたしは幸せ者だ。」



「姉さん？」

「何でもないわよ。で、どこに行くの？」

「あ、うん。ここで面白いことをしてるらしいんだ・・・」

そして、わたしとハルは学園の中を歩きだした。

・・・どうせ、後でみんなにブラコンだとか言われる気がしないでもないけど、今はこの瞬間ときを楽しんでおこう。

side 杏奈

「・・・でね、今のアタシに足りないもの、それは胸だと思っ  
ないの」  
「ごめんね、アンジェリカさん。いきなりすぎて話について行け  
ないの」

「うん、わかるよその気持ち。杏奈みたいにデカかったら世の男  
どもを魅了できるからね！」

「分かってくれるの!？」

そうやってアンジェリカさんとアスカが、がしつと互いの手を握  
る。何故かアスカとアンジェリカさんの間で変な友情が結ばれた。  
いろいろと純粹そうなアンジェリカさんの情操教育に汚いモノが  
混入しそうなので何とかしないと。わたしが後で三谷君に怒られる。

「あのね、アンジェリカさん。三谷君はそんな人じゃ

」

「じゃ、どつするっどつやって三谷君を落とそうか？」

「……アタシ、いろいろとあの手この手でやってみただけダメなの」

「聞いていなかった。」

「……よし、ここは既成事じ」

「いい加減にきなさいっ」

とりあえず、ジョゼフィーヌ達にアス力を黙らせるように頼んだ。

「やめて!?!この鳥とかネコ達にわたしを攻撃しないように言うて!?!」

「アンジェリカさん、こんな誰とも付き合ったことのない干物女よりもリア充な女の子に聞いた方がいいと思うの」

「干物女!?!杏奈から見てもわたしって干物女だったの!?!」

騒ぎ立てる親友的なポジションの友人をスルーし、目的の人物がいないか探す。

するとその人はすぐに見つかった。いつものように旦那といちゃいちゃと痴話喧嘩をしている。

「ちよつと、……ニルメイカ夫妻?それともマーティス夫妻?」

「すみません、誰が夫妻ですか!?!誰が!?!」

「いやあ、テレるなあー」

全くリアクションの違う二人に話を振る。  
アンジェリカさんもなるほどと納得してくれたみたいだった。

「ねえねえ、二人はどうして付き合っただの？」

「だ・か・ら、わたくし達は付き合っただけだよ」

「うーん……まあ、幼馴染だしー。自然にとしかなー……」

「そう……」

「レクト、何を勝手なことを!？」

「ごめんね、アンジェリカさん。さすがに時間のアドバンテージだけは無理だから」

「ううん、いいの……」

そう言うアンジェリカさんの表情は暗い。

さて、アテにしていたこの夫婦もダメだとすると……。

「……残念だけど、わたし達には無理ね」

バカの権化が集まっているようなこのクラスには残念ながらリア充はいない。

ものすごく悲しい現実だ。

「やっぱ、ミタニー相手なら直球勝負じゃないかー？」

「確かに、三谷さんは超がつくほどの鈍感ですし……」

「やっぱり、ここは一息に襲」

「まあ、この干物女の言うことはスルーして」

アスカが泣きごとを言うてくるけど無視。だって、二言目にはなことをしろって、貴女はお酒の席に呼ばれた近所のおっさん？

「……とりあえず、こついうことは男子の声を聞きませんこと」  
「？」

「なるほど。そこで自分の旦那を押すということね」

「……レクト」

リオネさんは反論するのに疲れてきたのか、もう投げやりな感じだった。

「うーん？……ちょっと考えるからな」

そう言つとレクト君が頭をひねって考え出す。

そしてすぐに顔を上げて言う。

「……やっぱり、意外な可愛さを見せたらいいと思うんだ」

「意外な、可愛さ？」

アンジェリカさんはよく意味がわからずに首をかしげる。

かく言つわたしもよくわからない。

「たとえばなー．．．あるお嬢様はホラー映画を見るとどうしても怖くて一人で寝れなくなつて、そんな時は幼馴染の男の子と一緒に．．．」

「いやあああああああ！？言わないでええええええええええええ！？」

ものすごくにこやかな笑みを浮かべながら言ったレクトに、真っ赤な顔をしたリオネさんが掴みかかる。  
．．．．．うん、大体わかつた。

「何でリオちゃんが怒るのかなー？」

「な、ななななななな、何でそそそそそそそそそそそんなことをお、おとおお思うのですか！？」

「．．．うん、大体わかつた」

アンジェリカさんもよくわかつたみたいだった。

「．．．でも、具体的には何をすればいいのかな？下手したらリオネみたいに自爆しそうだし．．．．．」

「はう！？」

なかなかアンジェリカさんも傷口を抉るのがうまい。

既にリオネさんのヒットポイント的なものがゼロになりそうだった。人の顔があそこまで赤くなれるとは驚きだった。

「わ、わたくしがそ、そんなことをするわけが・・・」

「もういいよ、リオちゃん。みんなわかってるから」

「アスカさん！？いい加減にその呼び方はやめて下さりませんか  
と!？」

「そうそう。それが許されるのはオレツチだけだぞー」

「その通りです、それがいいのはレクトだ・・・け・・・」

何かを口走ってしまったりオネさんはその次の瞬間、自分の言い  
かけたことの意味を理解し、せつかく元に戻りかけていた顔が再び  
真っ赤になる。

そして、何も言わずにどこかへと走り去っていった。正確には声  
にならない悲鳴を上げてたのかもしれないけど。

「・・・杏奈、レンアイって大変なんだね」

「まあ、そうね・・・うん」

必死に三谷君をどうやってオトそうか考えているこの吸血鬼ヴァンパイアの少  
女を見て本当にそう思った。

でもこうして一緒に過ごしていても、アンジェリカさんはわたし  
達とそう変わらないように思える。ここにいるのは一人の男の子の  
ために一生懸命頑張る女の子そのものだ。

樹族ツリーの李君リはともかく、竜ドラゴンの間君もごくごく普通の少年にしか見  
えない。なんだか、魔物だって理由で淘汰してきたわたし達、人間  
は・・・。

「申し訳なく思うね」

「そうだよ、こんな美人スナイパーを干物扱いにするとか、失礼だね！」

「・・・そう言うことじゃないの」

「じゃ、どうして謝ったし!？」

わたしは自分の親友を生温かい目で見ながら、必死に考えるアンジェリカさんを見守った。

9話・EACH DAY（後書き）

作 「皆さんお久しぶりです。遅れてすみません、『それぞれの  
日』です」

空 「いや、本当に遅れたね」

作 「気分がノラなかつたんだ」

空 「考えうる限り最悪の返答だね」

作 「というわけで、またしばらく更新が止まるかも」

空 「舌の根も乾かないうちに!？」

作 「次は猫と犬の追いかっこ・・・」

空 「別作品ですけど!？」

作 「まあ、そんなわけで次回、ついに事態が動く!?!?よろしく!」

空 「ダメだこいつなんとかしないと」



## 10話・SEARCH

side空志

『脅迫状がまた届いた』

文化祭準備期間最終日、ボク等はサリナさんからその報告を受け、招集がかかってすぐに理事長室へと向かった。

理事長室に入ると、既にみんなとサリナさん、カルネル先生がいた。そして開口一番、サリナさんはこれが脅迫状よと言いながら、前の分もまとめてボク等に見せる。

「・・・今度は、時間の指定かよ？」

「23日の正午に爆破、ね」

ボクとリュウが声に出してそう言つとみんなは押し黙ってしまった。

サリナさんから詳しい話を聞くと、この脅迫状は今朝未明に職員が発見。封筒に理事長宛てと書いてあったらしく、そのままサリナさんのところに来たらしい。そしてサリナさんが封を開けてみれば二通目の脅迫状。

「手口が一緒ね」

「やっぱり、同一人物ですか？」

平地姉弟がそう言う。たぶん、二人の言つとおりだと思う。

こんなタイミング良く似たような内容が届くわけないし・・・。

「でも、学園内では今回の事件に関した噂が出回っているです」

「それは俺も聞いたことがあります」

「私もそうですね」

そう、噂って言うのは怖いもので、やっぱり情報がどこから漏れたらしい。まあ、一番怪しいのがDクラスのアホ共ってオチなんだけど。なんせ、一部がボク等の事情に詳しいから話さざるを得ない。けど、いくらバカでもあのメンツなら大丈夫だと思ったんだけどなあ……。

「で、でも、この期間はものすごく忙しいんですよ？せ、生徒がこんな悪戯をする暇があれば、ま、間違いなくお仕事を振り分けられると思うんですけど……？」

四条さんがものすごく自信なさそうにそう言う。

でも、確かにここ最近の学園内は異常な空気に包まれていた。たぶん、締め切り間近になった作家さんとかはあんな空気を醸し出さんだろうと思う。

「そうね、それは四条さんの言うとおりよ。この時期は生徒も先生も慌ただしくなるからあり得ないって考えてもらっても大丈夫だと思う」

「……なら、誰がやったの？」

リカが呟く声にみんなはまたも押し黙る。

結局は堂々巡りかな？みんなは一生懸命考え始める。でも、情報が少なすぎてどう特定すればいいのかわからない。

「……………ねえねえ、みんなは何を悩んでるの〜?」

……………若干一名だけ考えることを放棄していた。

「あのなあ、スズ。オレ達はこの脅迫状を送ってきたやつが同じなのか、それとも違うのかで悩んでいるんだ」

「それがわかれば、ただ単なる悪戯の可能性が大きいか、それとも本気なのかぐらいのことが分かるかもしれないでしょ?」

ボクとリュウは簡単に状況を説明。

まず、もしも手紙を送ったのが別々な場合。まあ、これは悪戯の可能性がぐんと上がる。少なくとも二通目に関しては、だけど。警察に届け出ると文化祭が中止になる可能性が高くなるからそれは避けたいみたいだ。ボク等としては中止にしてもらった方が安心なんだけどな……………。

そして同一人物の場合。これは本気の可能性が、と言うか完全にこれが犯行予告だつてことが確定すると思う。意味もなく手紙を二通出すなんてボクならしない。

一から説明するとスズはうんうん頷いている。どうもわかってくれたみたいだ、たぶん。

「……………じゃあ、何でみんなは悩んでいるの〜?」

ループした。

ボクとリュウだけに限らず、理事長室にため息の音が響く。

「何でみんなわたしをそんな目で見るの〜!?……………むう、だってこれは一緒の人が出したんでしょ〜!?」

スズが頬を膨らませながらそう言う。

「いや、だからそれがわからないから困っているんだよ」

みんなはボクの言葉にうんうんと頷く。

すると、スズの顔が何故か驚きの表情になる。

「え？そんなの〜？だって、このお手紙の紙と字は一緒じゃないの〜？」

なんだかスズがよくわからないことを言いだし………そうか！

……なるほど、地味にいいところに気づくのにスズは残念な頭をしている。

「まさか、スズが見破るとかねえ」

そう言いながらボクはスズの頭を撫でる。

みんなはボクのそんな行動にキョトンとするか……。

「何で、鈴音にはそんなことを簡単にするのに、アタシにはしてくれないの？」

「……お願いですから鎌を引いてください」

スズの頭から手を離し、リカの鎌を押しつけて説明を始める。

「スズはこの事件の前後関係からじゃなくて、この二通の脅迫状からそう判断したんだ」

そう言っただけは二通の手紙を見せる。  
でも、スズ以外は首をひねるだけだ。

「要するに、紙の材質と字のインク。そう言うことだよな？」

「うん？・・・そだよ？」

・・・もう、突っ込まない。疲れるから。

「これ、よく見ると紙の質と、字の濃さが全く一緒じゃない？」

「・・・確かに、言われてみるとそうね」

そう、スズはそこから判断したんだ。・・・  
・・・たぶん。

まあ、わざわざ紙の材質にまで気を使うような人はいないだろう。  
まあ、学園内部の人なら同じものができてしまう可能性もある。けど、それはあり得ないとさっき結論が出ている。つまり、別々の人が同じ紙を、そしてインクを使う可能性は限りなく低い。まあ、それでも確かにこの考えに無茶な部分があると言つのもわかる。  
けど、タイミングから見てもこれが正解に見える。

「まあ、これで23日の正午に爆破されるわけだね。この学園」

「不吉なこと言わないでくれる？」

サリナさんがボクを睨むが無視する。

「となると、この手紙が同一犯として何故急に送ってきたかってことになるね・・・」

「はいですう！」

「シヤンちゃんどうぞ」

「私達が騒ぎ立てないからですう！」

要するに犯人は愉快犯で、何のリアクションも見せないボク等に苛立ち、再三警告を発してきたというわけか。

「確かにありそう。他は？」

「……ひょっとして、爆弾の設置が既に完了しているとか？」

ハル君の言うことが本当だとしたら、それはものすごくヤバイ。けど、相手が指定してきたのは三日後の正午。それまでに見つけられてらどうするんだと言うこともあるけど、それだけ自信があるっていうことか……。

「……何とも言えないね」

「なら爆弾は設置していないが、それ以外の準備が完了したってのはどうだ？」

「うん、リュウの言ってるヤツのがありそうだね」

でも、どっちにしても相手がゲーム感覚で仕掛けていることに変わりがない。

相手は相当ヤバそうだ。

「どっちにしても、すぐに学園内を見回っておかないと・・・」

「でも、爆弾がどんなものなのかわからないよ？」

「もしも既に設置されているなら時限式じゃないでしょ？それに、設置されているとすると、外部から運び込まれてきた物品が怪しい」

「ちよつと待って、緊急で各クラスの代表に物品の仕入れ先を確認してもらおうわ」

そう言つと、サリナさんは今まで何も話していないカルネル先生に一言だけ何か言つと、カルネル先生は理事長室を出ていく。

「なら、ボク等は教室以外の所を調べよう。・・・そう言えば、一人だけこう言つのが得意そうな生徒がいるんですけど、協力を頼んでもいいですよね？」

「・・・寺井さんのことね？」

一年Dクラスの副代表寺井杏奈、属性は『友好』。杏奈さんが動物達に願ひすれば格段に効率が良くなる。それに、Dクラスで仲のいい人にはバラしてあるし。

「そうです。それと、四条さんはここから精霊達に願ひして探してもらえる？」

「わ、わかりました！」

そして、ボクはフードの中で今だねているレオを叩き起す。

ボクは寝ぼけ眼なレオに言う。

「レオ、何か怪しいものがあればすぐに知らせて。・・・拾い食いはダメだよ?」

「・・・にやあ」

レオは眠いと言わんばかりにトテトテと当てもなく歩いて行った。

「後は学園内を隈なく探すしかない。あえてどこを探るか指定しないから、とにかく全部調べよう」

「非効率的だが、今はそれ以外にやりようがねえからな」

見落としてはなくす。一応そう言う目的はあるけど、下策としか言いようのないゴリ押しな作戦だ。

もう、本当にグダグダだとしか言いようがない。完全に相手のペーシングに乗せられている。もしも相手が本気を出して襲いかかってきたりなんかしたらと考えるとゾツとしない。

「・・・なんにしてもやらないとダメだ。今現在の時間は九時。」

「じゃあ、今から正午まで探す。念のために二人一組で行動して昼はいつものようにご飯食べて、探したりないところがあれば午後も引き続き続行。それでいいかな?」

みんなはボクの言葉にうなずく。そしていつものようにリュウとスズ、シユウと双子、平地姉弟、最後にボクとリカといった感じで別れる。

これで準備は整った。そしてみんなは理事長室から出ていくと、思い思いの方向へと走っていった。



ボクも杏奈さんに頼んでからすぐに探さないと……。

「……あの噂、本当になりそうなの？」

「うん、そのために杏奈さんの力で動物達に怪しいモノがないか調べてほしいんだ」

とりあえず、ボクとリカは教室に戻ってカザ八達に事情を説明して、杏奈さんの力が必要だと言った。

全員、深刻な顔で黙りこんでしまう。

まあ、そりゃそうだ。規模がわからないけど、下手したら死人が出る事態になるかもしれない大事件……。

「よっしゃあ！やっぱ、こういう事態がないと祭りは面白くない！」

「まあ、ミタニーが来た時点で遠からずこういう事態になってた気がするからなー」

こいつら、致命的なまでにバカだ……！

正直な話、爆破予告犯よりもこいつ等の方が怖いかもしれないと冷や汗が頬を伝う。

「ならば、Dクラスの全員で探した方が早いではありませんか？」

リオネさんが嬉しい申し出をしてくるけど、それはできない。  
いや、大騒ぎになるじゃん・・・？そうならサリナさんとの  
契約を反故にする形になってしまう。それに、ここで騒ぎ立てない  
ように行動したとして、Dの全員が動いたことは少なからずすぐ  
バレる。なら、ただ事じゃないと察しのいい人に勘づかれたらそこ  
でパーだ。

「・・・いや、俺にいい考えがある」

意外にも、カザハが何かを思いついたらしい。

カザハは立ちあがって、みんなが自分に注目するように言う。そ  
して一言。

「ソラのヤツが、また厄介事に巻き込まれた。俺達も手伝うぞ！」

「「「おっけー」」」

「軽っ!?!」

「今回はあの爆破の噂がマジになりそうらしい。そこで爆弾を探  
す!」

「何、あつさりバラしてるの!?!」

「大丈夫大丈夫。みんな落ち着いてるから」

アスカさんがそう言う。

確かに、爆破の噂が本当だと言う割にみんなは落ち着いている。

・・・なんで？

「簡単ですわ。貴方が巻き込まれることは大抵が大事ですから、このつわさが出た時点でわたくし達は覚悟していましたわ」

「まさに信頼と安定のミタニーフラグだったな」

「嫌な信頼のされ方だ!？」

でも、この夫婦の言うとおりなのか、既に誰がどういう風に魔法使って調べようか考え始めているらしい。

そこでざわつき始めたクラスメイトをカザハが一喝し、更に続けて話す。

「だが、一つ問題がある。これを表沙汰にするのは御法度らしい。そこで、Dの大部分が動けば変に勘ぐられて噂に拍車がかかる可能性がある。でも、明らかに時間がないのも事実だ」

「「「「「」」」」」」

全員が静かに話を聞くなか、カザハの声だけが教室内に響く。カザハ一旦切った言葉を更に紡ぐ。

「そこでだ、俺に考えがある。……………全員、演劇の準備をしる。ゲリラ公演するぞ！」

「「「「「は?」「」」」」」

こいつ、バカに拍車がかかった。ボクはこの時、本気でそう思った。

side 隆介

「……スズ、そっちはあったか？」

「無いよ……。思ったよりも大変だね」

スズは額にうつすらと汗をかきつつオレに笑顔を向けながら言う。

「無茶すんなよ。つか、マジでどうすんだよ……」

手がかりも情報もゼロ。

できることは闇雲に探すだけ。もうため息をつく以外に方法が見つからない。

そしてもう何度目になるかわからないため息がついていると、何故かやたらと騒がしい音が聞こえてきた。

……なんだ？

オレは疑問に思っただけスズを見るが、スズも首をかしげている。すると、ここの近くも急に騒がしくなってきた。

「一年Dクラスの、『騎士物語』！只今、絶賛ゲリラ公演中！！」

「リハを兼ねているので、誰でも見に来てください！！」

……おい、何やってんだ！？

このタイミングでゲリラのリハ公演！？意味がわかんねえよ！？すると、今度は誰かに肩を叩かれる。オレは何の気配もなしに後ろに立たれ、驚愕しつつもスズを背にかばって相手と対峙する。

「お？忍君だ」

「・・・知り合いか？」

そこにいたのは中世的な顔立ちの・・・どっちだ？  
名前から判断しようにも、両方でありえるから判断できない。つ  
て、制服がズボンだから男子か。

「初めまして、影崎忍と言います。坂崎殿と一緒にの様子からお仲間と察します」

「あ、ああ。俺は間隆介だ」

「わかりました、間殿。代表より現状の説明を三谷殿の仲間に伝えるとの指示を受けたので、こうして来ました。現在、代表のシルファリオン殿の発案でゲリラ公演をしています」

シルファリオンってのは、確かソラのクラスの代表の名字だったはずだ。

・・・今はそうじゃない！！

「いや、何でそうなるんだよ！？」

突っ込みどころが多すぎる。

何でこうも堅苦しい言い方で、しかも忍者っぽいんだよ！？

「あのね、忍君は『あさしん』のお仕事をしてるんだよね？」

「いえ、それは遙か昔の話です。今ではそんな物騒なことはして  
おりません。ただ、我が家にそれ関係の魔法が代々伝わっている程  
度です」

「それって、いつでも暗殺者になれるってことだよな！？つか、スズはオレの心の中を読むな！」

なんなんだよ、このDクラスって奴等の奇人レベルは！？

「では、話を戻します。シルファリオン殿達の目的は演劇のリハも含んでいると思いますが、本当の狙いは魔法の使用です」

「え？魔法を使うの？」

今現在、魔法の使用は解禁されている。それにもかかわらず魔法の使用が目的？意味がわからない……。

「正確には、大規模な魔法の使用です。私達のクラスの索敵系魔法が得意なものに魔法を使わせ、危険物を即座に見つけるのが目的。演劇に派手な魔法を使えば、注意がそちらに向くと考えたためです」

「……そ、そういうことか」

今ここで俺達が大規模な魔法を使えば、生徒の誰かに勘付かれる。そうすればこの理事長との契約がパアになる。だが、Dクラスの演劇の演出に大規模な魔法を使えば、カモフラージュができる。たぶんそういうことだろう。

「ですから、至急間殿は三谷殿達と合流してください。リハーサルに遅れます。では、そういうことですので私はもう少し怪しいところを探してから皆様と合流します」

そう言うと、影崎と言うヤツは消えた。

……いや、マジで。魔法を使ったような感じもなく、唐

突に。

俺が半ば茫然としていると、スズが俺の袖を引っ張る。

「リュウ君。Dクラスのみんなが手伝ってくれるんだって〜！わたし達も早く行かなきゃ〜！」

そう言うと、スズは満面の笑みをオレに向ける。

まあ、確かに今ならどんな魔法を使って探しても大丈夫なはずだ。それに、ソラも演劇でオレと戦うフリをして、ホムラドリ 焰鳥 とかで探せるはずだ。

オレ達はそこから急いでソラ達の所へ走っていった。

10話・SEARCH（後書き）

作 「とうわけで、『搜索』をお送りしました！」

カザハ 「まさにDクラス連中のターンだな！」

作 「まあ、今回はそういう感じ。せっかくだし、こついうのもアリかと」

カ 「むしろ、どんどんいれようぜ！」

作 「んじゃ、そういうわけで次回予告、引き続きDクラスによる搜索だ！」

カ 「俺たちの雄姿が学校を救うぜ！」

作 「とか言うけど、完全なギャグ回になってたりします！」

カ 「おい!？」

作 「じゃ、次回もよろしくー」



## 11話・BOMB

side空志

「我は貴様を倒し、姫を貰い受ける！」

「ですが、私は貴方様に負けるわけにいかないのです！」

今、ボクの目の前には騎士の恰好をしたリュウがいる。

まあ、ボクもリュウと似たような恰好をしているけど。あれから忍のおかげでボク達は合流し、ゲリラ公演をしている。そして影ではみんなが魔法を使いまくって怪しいモノがないか探してくれている。

ボクとリュウがやっているのは魔法を用いた決闘のシーン。ここでボクとリュウが魔法を使って戦い、スズが魔法で周りへの被害が行かないように結界を展開してくれているはずだ。

「ならば、言葉は不要！」

「私も、剣にこの思いを乗せましょう！！！」

ボクがこのセリフが終了してからが決闘の合図。

ボクとリュウは互いに距離を詰め、刃を潰した騎士剣でつばぜり合いを行う。

そこからは全てアドリブでの戦闘の許可が下りている。後はできるだけ派手な魔法を見せつけるだけ。

「雷よ、剣となれ！」

ライジング・ソード  
空の雷鳴剣 ！」

「影よ、喰らえ！  
ダーク・イロージョン  
闇の侵食！」

互いの魔法がぶつかり、ボクの雷の剣はリュウの闇の壁によって喰い尽される。

このレベルで周りからは既に感嘆の声が上がっている。ボクとリュウが本気でぶつかればこんなものじゃ済まない。

ボクとリュウは頃合いを見計らって互いに距離をとり、そこから魔法の応酬を続け、時に剣で斬り合う。

……みんな、早く見つけて。

side 風葉

「まだ、見つからないのか!？」

「今、学園の六十%がやっと終わったところ!」

「こっちが一回目終了!二回目を頼む!」

今、俺は舞台裏で数人のクラスメイト達と連携して学園を調べている。  
俺たちなりにエリアをわけ、そのエリア内を三回調べ終わったら次のエリアを調べると言う形にしてある。

だが、既に演劇は終盤だ。今はソラと間と言うソラの仲間が協力してこの劇を長引かせている。だが、教師からの圧力がすさまじい。ゲリラ公演をすることで学園生達に自分の所を宣伝しようとしている風に見えたんだろう。

しかも、風紀委員までもが動いているらしい。ちなみに風紀委員はこの学校の治安維持部隊とでも言うのか、主な仕事が校則違反者

の取り締まりで、大体魔法等で抵抗されるために普通は使用禁止の魔法の使用許可が下りている人たちの集団だ。

話を戻そう、基本的に準備期間での宣伝はナシ。呼び込みは当日だけと言う決まりだ。今は風紀委員も忍がなんとか止めてくれるが、それもいつまでもつか・・・。

最悪、残った部分はソラ達自身に探してもらわなくちゃいけないかもしれない。だが、もしも何かミスがあって爆弾があり、爆発でもしたら・・・。惨劇どころじゃ済まない。

「マジで、面倒なことに首突っ込んだなっと思うよ。俺は」

「おい、カザハ。お前何やってるんだよ!？」

叱責の声とともにやってきたのはS代表のジグ。

俺達はSとDでありながらそれなりに仲がいい。とりあえず、俺は今起こっていることを手短かに話す。まあ、こいつはあの時にいなかったからソラ達の後ろの方はだいぶ隠したけどな。

「・・・そんなことが？」

「ああ。だから、こうやっておおっぴらに魔法使うためにあれをしてるんだ。こうすれば、どんなに大規模な魔法使っても劇の方向演出って思われるからな」

「だが、それなら先生達に知らせた方が・・・」

「それをすると、理事長先生の意向に反する。ソラ達の話じゃ、一部の先生は知っているらしいけど、全員じゃない。だから、俺達が学園のためにこんなことしてるってわかるとむしろ辛い」

そう言うと、ジグは押し黙ってしまふ。  
俺はジグから視線を外し、指示を飛ばす。  
すると、急にジグがまた話しかけてきた。

「……俺も、手伝う」

「何言ってるんだよ。お前みたいな優等生がこんなのに加担したらタダじゃ済まないぞ？」

「お前らよりマシだ。俺は先生達や風紀委員の足止めをしてくる  
そう言うと、ジグは俺の止める声も聞かずに走って行ってしまっ  
た。

「……お前の方が、罪は重いじゃないかよ。しかも、ものすごい  
バカだ。」

「お前ら、Sが時間を稼いでくれる！さっさと働け！」

「……イエス・サー！」「」

side グラン

どうも、またあの人たちは厄介事に巻き込まれているみたいで。  
いやはや、普通なら退屈でしかたがない学園のはずなのに、こう  
もイベントがあったら過労死してしまいますぜ？

「……ターゲット、補足。距離五十です」

「……いつでも動けるようにしといてくださいねえ」

でも、こんな天才の集まりのようなSがDの連中とバカみたいなことをやるっていうのも、楽しいのは事実。どうせ、普段じゃできないんだし、派手にやっときゃいい。

・・・でも、この作戦はそこはかとなく罪悪感が出てくるぜい。

「・・・ポイントに到達。・・・本当にするの？」

「・・・やるしかない。今、学園の未来は俺達にかかっていると  
言っても過言ではないんだぜい？」

「・・・副代表、その割には楽しそうですね」

「当たり前じゃないですかい。こんな面白いこと、そうそうでき  
ませんぜい？」

「まあ、確かに」

納得するあたり、こいつもバカだな。

しかも、何故か俺達男子はここで黒い笑みを全員が浮かべている。  
そしてその全員がお前らもこの苦しみを味わえ的なモノだ。

・・・いつから、Sはこんなやつ等の巣窟になったのか。

「カウント三で『魔女部隊』突撃してくれよう？」

「・・・大丈夫です。では、カウントを始めます。三・・・  
二・・・一・・・ゼロ！」

そして、廊下を進んでいた先生や風紀委員たちの目の前に魔女の  
コスプレをした女子の一団が立ち塞がる。

「一年Sクラスのハロウィン喫茶の試食をしています！ぜひ、どうぞー！」

「今は忙しい。後にしてくれ」

だが、女子たちは頑としてどかない。

それはそうだろう。女子たちは最近のバイオテロ事件（笑）でSクラスの女子は女子力ゼロの烙印が押されてしまっている。一応、坂崎ちゃんのおかげでだいぶマシにはなったものの、彼女達の山のように高い誇りはポロポロ。ここであのジグの旦那は一言言った。

『・・・お前達、自分達は坂崎がいなくとも女子力はあると言いたくないか？』

その言葉で、女子は情熱的な何かを取り戻した。

そしてつい先ほど必死になって新作の菓子を作った。

そこで更にジグの旦那の一言。

『どうも、先生達がこちら辺を回っているらしい。先生達に振舞ったらどうだ？』

恐ろしいまでに女子を誘導し、今現在に至る。

見た目は、本当に、普通に、むしろおいしそうだ。だけど、あれは絶対に何かがおかしい。もう、醸し出す雰囲気が違う。あれはヤバイ。あの料理を経験した俺達にはそれがわかつちまいますねえ。

こっからは、ダイジェストでお送りするぜい！

「そんなこと言わないでくださいよ。先生、可愛い教え子たちが頑張って作ったんですよ？」

「後で来る。だから・・・」

「ちょっとぐらい、いいじゃないですか!」

「う、うむ。では、少しだけ」

「じゃ、皆さんもドウゾ!」

「あ、どうも」

「はい、頂きます」

「じゃあ、私も」

パクッ。(一口で食べる音)

「・・・これは、うっ!??」

「な、なんだ、こ・・・れは・・・!??」

「味覚が、はか・・・!??」

バタバタバタッ!(次々に人が倒れていく音)

・・・ミッション、コンプリート!

これでDの連中を邪魔するやつ等の到着を遅れさせることができ  
たぜい!

「・・・副代表、あの人達からエクトプラズムの何かが出てい

「ませんか？」

「気のせいですぜい。と言っか、見なかったことにしたほうがいいですぜい」

「・・・了解です」

とりあえず、作戦が完了したことをジグの旦那に報告しますかい。・・・いや、落ち込んでいる女子のメンタルケアの方が先ですかねえ？

side 風葉

「カザハ、こっちの作戦で教師陣は死・・・到着が遅れる」

「おい！？何をしたんだよ！？」

さらっと恐ろしいことを言い始めたジグに俺は突っ込む。・・・つい最近、こいつがDに染まりすぎてバカになってないかと言う懸念があったが、既に遅かったようだ。

「この隙に、全力で調べあげる！！」

「ラジャー！！！！」

「何でお前が指揮取ってんだよ！？」

しかも全員言うこと聞いたし！？

ノリがいいことに定評のあるDクラスだった。



「・・・カザハ、何か見つけましたわ」

リオネの一言で俺はすぐにもリオネの近くに行く。

リオネは人形遣いとしての力で文化祭に使われる人形に同調し、  
人形の視線から教室内部に怪しいモノがないか調べてもらっていた。  
リオネは目を閉じて集中しているようだったが、普通に俺達と受け  
答えをしている。

「どうした？」

「いえ、気のせいならば良いのですが・・・。理事長室の近くの  
石像近くに、変なものがあります」

「杏奈、アスカに連絡してくれ。理事長室の石像だ！」

アスカはこの学園で一番高いところ、時計塔にいる。そこから『  
照準』の属性の魔法で怪しい個所のチェックをもらっている。  
一応念のために狙撃銃は所持してもらっている。

「・・・アスカからよ。『もっと正確な場所を教えて、リ  
オちゃん』だって」

「爆ぜなさいと返して下さる？」

「真面目にやれよな!？」

仲はいいんだが、ふざけないでくれ。今はそういう余裕がない。

杏奈は三毛猫、確か名前は『マイク』に何かを頼む。たぶん、リ  
オネの言ったポイントに向かわせたんだろう。

「………つか、三毛猫にマイクってどうだよ？」

「だって、マイクの綴りって『Mike』、つまりミケじゃない」

「心読むな、つかどうでもいい！」

「ちなみに、マイクは三毛猫にしてはものすごく珍しいオスよ」

「本当にどうでもいい!？」

「……本当に、いい加減にしてほしかった。」

「……あ、アスカから連絡よ。『リオちゃん、石像退けて』」

「いや、いくらなんでも石像退けるのは無理だろ」

「わかりましたわ」

「できるの!？」

「わたくしは要するに生物の形のモノなら五感を共有し、動かすことが可能ですわ。それと、リオちゃんではありません」

「そこは否定するんだな……」

つか、人形師とか何でもありだな。

「……いや、マーティスの家系だからこそできる業ワザか。」

「……わかったみたい。と言うかりオちゃん、石像にくっついてるらしいけど？」

「……」

リオネは無言で目を開けた。

「……さすがに、爆死の経験だけは御免被りますわ」

「オレッチの作った人形じゃねえからな」。痛覚の遮断が効かないからな」

どうも、これだけが人形師の欠点らしい。

人形師は自分の操る人形と五感を同調させる。そのせいか、人形にダメージがあれば自分にもそれに見合った痛みが伴ってしまうらしい。普通はレクトのような器術師マキナーが調整した人形しか使わない。そうすれば反応速度はおろか、痛覚も遮断できるから一石二鳥どころか三鳥も四鳥もある。

だが、これで解体をしたくてもできない。

「……杏奈から連絡。『爆弾かどうかはわからないけど、見た感じは文化祭準備のゴミっばい』だつてさ」

「……じゃあ、他の所はどうなっている！」

「もうすぐ、全エリアの確認が完了しそうだ！」

「一応、怪しいのはリオちゃんの言った部分以外は無い！」

「だから、リオちゃんはやめてくださる!？」

俺はリオネに諦める、リオちゃんはクラス公認のニックネームだ

と心の中で言いながら考える。

おそらく、念のためにもう一度頑張つて探しても結果は同じ。今回のリオネの発見のように、怪しいモノがあればアスカが目でチェック。あるいは散らばっているクラスメイトの一人が現地に赴いてチェックすることで安全を確認している。

なら、リオネの言っていたヤツが今のところ怪しいわけか……。

「誰か、近くにいないのか？」

「……今、忍つちが向かったらしいぞー」

レクトがそういう。

……よかった。忍はSクラスの処刑の犠牲にはならなかったみたいだ。

「……お、忍つちから連絡だなー」

レクトの言葉に全員が押し黙る。

そして、レクトの口が開いて……。

「……ただのポイ捨てのゴミだってさー。忍つちはこれ片してこつちに来るらしいぞー」

その言葉で俺達は脱力した。

なんだ、結局は取り越し苦労だったのか。まあ、なにはともあれ、何も見つからなくてよかった。

「……あら、レオ君？」

「みや」

すると杏奈がソラの飼い猫、レオを見つけた。

レオはこっちの言葉がわかっていているようなタイミングで一鳴きして答えると、レオはそのまま杏奈の所に直行。杏奈の膝に乗る。

「……本当に、自分が一番に何をすべきかわかっている。どんな躰をすればこうなるのか聞いてみたい。」

「……え？本当なの？」

杏奈が驚く声にレオは頷く。

すると、ひらりと杏奈の膝から降りてまたどこかにトテトテと走っていった。

「どうしたんだ？」

「……それが、ここと、ここ、そしてこの辺からも変な魔力を感じたって？しかも、これ調べてほしいみたい」

「動物って、魔力を感じられるのか？」

俺は疑問に思っただけ聞いてみる。

魔力を感じられるっていうことは、魔法を使えるっていうことだ。授業では魔力を感じると言う行為は魔法使いの放つ微弱な魔力同士の反発、あるいは共鳴が発生してわかるものらしい。だから、それほどの魔力を持たない動物ではそれが無理なはずだ。

例えるなら、コウモリが超音波を発生させて物の位置を知る感覚に近い。

「ううん。普通はできない。……けど、レオ君は三谷君が言うには『幻獣』らしいし？」

確かに、俺もあの子猫のレオが変身して翼の生えたライオンになるところは数回だけ見ている。

とりあえず杏奈の言った部分に赤で丸をつける。

「……でも、ここって教室だぞ？」

今は魔法があちこちで使われている。その中でこれだけが変な魔力かってどうしてわかるんだ？

「……魔力は、ソラの方へ教えた方がいいだろうけど」

「今、最大の見せ場の途中。それが終わってからじゃ遅い」

なら、どうする？

「ジグ、お前達のクラスで変な魔力を感じ取れるやついるか？」

「……それは、さすがに無理だ。教室内ではただでさえ魔力があふれているんだぞ？」

「……だよな。じゃあ、教室外は？」

「それなら、何とかなるか？」

すると、ジグは紋章エンブレムで連絡を取る。

紋章を叩くと操作画面ウインドウが開き、そこから対話のアイコントークを選択。そして副代表のグランを呼び出す。

「グランか？頼みたいことがある」

『またですかい？さすがに、もう殺人紛いの犯行は・・・』

「違う。教室以外に妙な魔力がないか全力で調べる」

『妙な魔力？まあ、わかりましたぜい。不自然なものがあればこっちから連絡しときますか？』

「頼む。・・・これで、とりあえずは大丈夫だ」

確かに、Sクラスの魔力探知なら俺達より遥かに精度はいい。だが問題は学園の教室の方。こっちは魔力の判別ができない。

「・・・四条さんなら、できるのではないかしら？」

「ああ、四条ちゃんのせもがつ！？」

「・・・どうした？」

「「なんでも」」

俺と杏奈は口を滑らせそうになったレクトの口を塞ぎ、を睨む。

ジグは精霊魔法がどうかと言わなさそうな人間だが、こっぴうのは俺達が軽々しく口にしていいモノじゃない。

「とにかく、四条に頼もう」

俺は紋章ですぐに連絡。

『は、はい、しし、四条です！?』

「四条、頼みたいことがある。妙な魔力を探してくれ」

『みよ、妙な、魔力、ですか？わ、わかりました。せい』

ブチっ！

俺は自分から秘密をバラそうとした四条との通信を切る。

「……いいのか、何か言いかけていたが？」

「いいんだ。問題ない、大丈夫だ」

「そ、そうか。……Dには、こういうことに特化した奴もいるのか……」

ああ、そういう風に勘違いしておいてくれ。

四条の魔法については俺達Dでは極秘事項トップ・シークレットになっている……はずだ。

すると、突然俺の目の前に『CALL・四条奏』と言う電話マーカーの画面が出てくる。

ついさっきの今でなんだと思いつつも出る。

『だ、代表さん、酷いですよ！？い、いきなり切らないでください！？』

「ああ、すまん。こっちも事情があるんだ」

「……俺には特に何もなかった気がするぞ？」

お前のせいだと心の中で突っ込みつつ四条に何かあったのか聞い



てみる。

『は、はい！せい』

「ジグ！お前の所からは何も連絡ないのか！？」

俺はここにジグがいることを四条に知らせるため、あえてジグに話を振る。

「きゅ、急にどうした？」

『へ、え？Sの代表さんが、いるんですか？』

「ああ、そうだが？」

『そ、そういうことですか。わ、わかりました。御迷惑をおかけしてすみません！』

「・・・カザハ、俺は教室以外の搜索のことを言っただけか？」

「ああ、言ってる」

もちろん嘘だ。

お前は最初から最後まで勘違いしておいてくれ。

「で、どうなっている？」

『は、はい。どうも、一階の・・・』

俺達は四条に言われた場所に目印をつける。

その内容の細かさにジグはただ目を見開いて驚くだけだ。

「……すごいな、彼女は何の属性だ？」

「……『サーチ探索』だ」

とりあえず、適当に返しておく。

ジグは聞いたことがないと言いながらも感心している。よかつた、信じてくれて。

「四条、他にはないか？」

『は、はい。……ですけど、この配置は？』

「配置？」

俺はそう言われて見てみる。

学校の見取り図には別にこれと言った法則性は無いように見える。何であの猫がこれを調べてほしいと思ったのかよくわからない。

「……そういや、これって一階にしかないな」

「そう言われると、そうですね」

確かに、印をつけた部分は一階だけだ。

……つか、俺は何か思い浮かびそうなんだけど？

『……す、すみません。こ、これに最初に気付いた方はだ、誰ですか？』

「誰って言うか、ソラの飼っている猫だよ」

「レオ君が調べてって」

『レオさん、ですか……………』

そういうと、四条からの声が途絶える。

そしてしばらくするとまたも声が聞こえた。

『そ、そちらに、平地さん、姉弟をお願いしました。お、お二人にそれを見せてください』

「……はい？」

俺達は変な声を上げた。

……確か、平地姉弟ってのは姉が眼鏡かけたクールビューティな女子だよな？ただ、残念なことに少しブラコンっぽいけど。何でそんな奴等を？

そんなことを考えていると、急に気温が下がってきた。

「何、だ、これ？」

「……少し寒い」

ジグと杏奈がそうつぶやいた途端、誰かが突撃してきた。……冷気とともに。

入ってきたのは、氷の狼。ただし、それに二人の人間がまたがっていた。

「で、どこでいいのかしら？四条が言ってるのは」

「すみません、驚かせちゃって」

そう言っただけで降りてきたのはソラの仲間の姉弟。  
明らかにカツコイイと表現するのが正しい女子に、礼儀正しく接して来る少年がいる。

「お前らが、平地姉弟か？」

「ええ、そうよ。ハルに見せたいものがあるらしいから飛ばしてきたわ」

そういうと、乗ってきた氷の狼を撫でる。

それから凄まじい、それこそドライアイス何てめじゃない冷気が発せられているが、当の本人には凍傷すら起こっていない。

「あ、ああ、これを見てくれて……」

そう言いながら、学園の見取り図を平地弟に見せる。  
すると、平地弟はそれを一目見ただけで怪訝な表情を浮かべる。

「何ですか、この魔法陣っぽいモノ？」

「……おい、それは本当か!？」

「は、はい!？」

「ちょっと、うちの弟に何すんのよ!？」

姉がうるさいが今はそれどころじゃない!

「四条が言ってたんだよ、配置がどうか！それにレオがこれを調べるって言ってたのを聞いた瞬間にお前達を呼んだんだよ！」

「・・・なるほど、わかりました」

そういつと、平地弟はやたらとソラを連想させる仕草で答える。

「・・・まさか、こいつあいつの悪影響を？」

「・・・そう言えば、ミタニーみたいな魔法を使うSの留学生がいたって聞いたけど？」

「あ、たぶんそれは僕です」

「こともなげにそう言う。」

「なら、こいつは二代目ソラか！？」

「すみません、僕はこれだけ見ても大まかな部分しかわかりません。カレンさんならすぐにわかるんでしょうけど・・・」

「そう言いながら点と点をつなぐ。」

「するとそこには大まかだが、魔法陣が出来上がる。」

「・・・今、魔法陣で何かすることが流行っているんでしょうか？」

「・・・俺に聞かないでくれ。」

「で、ハル。これの意味は？」

「ごめんなさい、僕じゃわからないんだ」

「まあ、しょうがないわ。何にしても解除ね、一番近いのは・・・

」

そう言つと、平地姉弟は走り去っていった。

『こゝ、これで大丈夫なはずです。春樹さんなら、ま、魔法陣の解除が可能です』

どうも、これで一安心らしい。

何にしても、よかった。早く気づくことができて。

この時、俺はそう思ったがどうも甘かったらしい。

11話・BOMB（後書き）

作 「とういうわけで、『爆弾』をお送りしました！」

冬 「で、今回はわたし達ってわけね」

春 「どうも、よろしくお願いします」

作 「もつと、楽に行こうぜ、べいべー」

冬 「・・・まあ、そういうわけで敵もずいぶんと器用なことをしてきたわね」

春 「ギャグの部分は何も言わないんだね」

冬 「うちの弟を人外呼ばわりしたあいつらのことなんて、語る必要性皆無よ」

春 「・・・」

作 「さて、姉のブラコン発言に若干引いてるところ悪いけど次回！」

冬 「べ、別にブラコンじゃないわよ!？」

春 「・・・姉さん、信ぴょう性ゼロだよ」

作 「地味に春樹君が建てたフラグを回収するぜ!」

冬 「・・・!？それだけはダメよ、話の方向がおかしくなるわ!？」

春 「・・・?」

作 「次回もよろしく!」

## 12話・DISMANTLING

side 春樹

「姉さん、確かここだっけ？」

「ええ、あつてるわ」

僕達は指示を受けた場所に来ていた。

どうも、この学園の部活のどこかが行う模擬店のようで、いろいろな飾りつけが施されている。ただ、Dクラスの人達の考えた陽動作戦的な演劇の方へ言ってるのか、教室内の人はいない。

「好都合ね。さつさと魔力を調べるわよ」

「うん」

そう言つと、僕と姉さんは神経を研ぎ澄ませていく。

姉さんは元々が数法術の使い手だから、魔法機械デバイスを通して魔力を感知することが出来る。僕は自分の『エーテル気』と言う魔法属性のおかげか、他の人よりも魔力に敏感だ。

そして僕と姉さんは同時に異質な魔力を発見した。

「・・・あれね」

「・・・うん」

僕達の目線の先には、何の変哲もない段ボール箱。

見るからにこの模擬店で使うものだ。まだ開封していないらしく、ガムテープで箱の口が止められている。



「・・・どうしよう、開けるの?」

「しようがないわよ」

そう言つと、姉さんは何のためらいもなく段ボール箱に歩み寄り、ガムテープをべりべりとはがす。そして中身を確認する。

「・・・何も、変なものはないわね」

「・・・でも、魔力は残ってるよ?」

そう言いつつ僕も姉さんの後ろから箱の中身を覗き込む。

そこには、タコにネギなどと言つた食材が詰め込まれていた。・・・見るからにタコ焼きの材料だ。

「でも、こんな所に生ものを置いておくのはおかしいんじゃないの?」

「別に問題はないわ。これを見なさい」

そう言つて姉さんは段ボール箱の内側の側面を指さし、僕に見せる。

そこには何やら複雑な文字が書かれていた。・・・いや、これは<sup>コード</sup>数法文字?

「まあ、ハルならわかるでしょ?見てわかるとおり、これは<sup>コード</sup>数法文字よ。これは数法術を使って、箱の中身の鮮度を保つ術式ね。無駄なく魔力を使うことのできる数法術ならでは技術よ」

へえと思いつつ、僕はそれを観察する。

「……………でも、この構成はおかしいわね」

「おかしいの？」

僕は一応数法術のイロハ程度は姉さんから聞いてはいるけど、使えるかどうかと聞かれればそれは無理だ。

だって、難しすぎるんですもん。それに僕が呼んだことのある本では、数法術は姉さんのような若い人の使える技術じゃないって聞いているし。

まあとにかく、僕が術式構成マトリクスがわかるとは思えない。

「ええ。……………さっきの地図、貰って来た方がよかったかも知れないわ」

「……………まあ、あの大雑把な魔法陣ならすぐに描けるけど？」

そう言いつつも僕は常に携帯しているメモ帳とペンを取り出す。そこにさっき見せられた魔法陣っぽい配置のモノを書く。その代わり、どれがどこの教室にあるのかまではわからないけど……………。

「まさか、ここで龍造先生の勉強が役に立つとは……………」

脳内に『題してフラッシュ魔法陣じゃ』と最初に言っていた龍造先生の姿が浮かび上がる。

「……………まあいいわ」

姉さんはソラ先輩からもらったと言う魔法機械デバイス、『数法珠』を取

り出して操作。すると、姉さんの周りに数字が展開され、それが整列されていく。

これが姉さんの数法術。構築された術式構成は段ボールの内側に貼り付き、上書きされて正しいモノに変換される。

「これで、完了ね」

姉さんがそう言うと、今度はピアスに連絡が来た。誰だろうと思いつつ応じてみると、奏さんからだった。

『あの、まだ魔法陣が生きているみたいです。そ、早急にお願いします！』

「え？すみません、どういうことですか？」

『は、はい？先ほど、精霊さん達が教えてくれたんですけど……？』

何故だろう、会話がかみ合っていない。

「……四条、わたし達がやったのは魔法陣の解呪じゃないわ」

『え、ええ！？じゃ、何をしたんですか！？』

とりあえず、奏さんに姉さんがしたことを教えます。

そして奏さんが言うには、姉さんが段ボールの数法術式を修正すると、他の魔法陣の魔力が若干薄れたみたいです。

「……まさか、数法術と魔法陣の混成術式？」

『そ、その可能性が高いかもしれません』

「要するに魔法陣をわざと大まかに作って、ギリギリで意味を作るように構築。そして、もっと細かい所は数法術で補助をしているってことですか？」

『た、たぶん？・・・す、すみません。師匠ならわかったのかも知れませんが』

ソラ先輩は隆介さんと一緒に時間を稼いでくれている。それはしようがない。

でも、やることはわかった。

「奏さん、ポイントを教えてください」

『は、はい』

奏さんから教えてもらった場所をメモ帳に書き込み、僕と姉さんは場所を確認する。

そして二人して頷いて、また走り出した。

side 風葉

「はあ、一時はどうなるかと思っただぜ」

「・・・全くね」

俺と杏奈は二人で愚痴る。

見つかったと思えばそれはゴミだったり、普通にただの忘れもの

だったり、俺達はそれを何故か届けたり、清掃活動するようなことをした。

まあ、別にそれはいいんだけどな。ただ問題があるとすれば……。

「……あのぉ、一応ここは関係者以外立ち入り禁止なんですけど?。」

「ご主人様、邪魔なので消えてほしいそうです」

「ちやうからな?ワイとお前にお帰り願いたいだけやからな?」

「……こちらら客なんだぞー。文句を言うなー」

「ものっそい棒読みやな!？」

……なんか、個性的すぎる二人組がここにやってきたことぐらいか。

一人はくすんだ赤い髪、大学生ぐらいの男性。こっちはごく普通の人だ。……背中にスコップを背負っていなくて……。

「お姉ちゃん!この人たちが可哀想だよ　　やから、いきなり変わんな、ドン引きやないか!？」

「「「……」」」

二重人格じゃなかったら。しかも、もう一つの人格が明らかに女の子で、更には自覚している分タイ人にしか見えない。

そして極めつけが相方の人。最早病気じゃないかと思うレベルに肌が不健康に白く、メイド服着ている女性。男の人のことを『御主

人さま』と言う割に主従関係が破綻しているとしたか言いようがない。むしろメイドの人の方が立場が上そうだ。

「つか、さっさと帰ろう。な？この文化祭は明日かららしいしな？」

「メイドの勤がここを搜索せよと申しておりますが？」

「どんな勤やねん……。つか、魔王さんとこのジャリ共がおる聞いてここに来たくせに……」

「ですから、師匠として弟子の成長は見るべきかと」

「本音は？三行でな」

「文化祭をみたいです。

プリン食べたいです。

学生気分を味わいたい、以上です。

追伸、ご主人様は帰っても結構です」

「……もうええわ」

男の人はいろいろなことに疲れてきたのか、投げやりな口調になっ  
てきていた。

俺はとりあえず、周りの人間に確認をとってみる。

「……なあ、この先輩達見たことあるか？」

「ない。もちろん噂も聞いたことない」

他にも聞いてみるが、どうもおかしい。

メイド服着てるからどっかの模擬店でメイド喫茶的なモノをやってるんだろうけど、ここまでキャラが濃けりゃ誰か一人ぐらいは知ってそうな気がする。

だが、現実問題として誰も知らない。そうなると部外者だがそれはあり得ない。準備期間中も含め、文化祭なんかの大きなイベント以外では学園内に入れないからな。

「……カザハ、わたしは恐ろしいことに気付いた」

杏奈が何故か顔を恐怖に歪めて俺にそう言う。

俺はそんな杏奈を心配しつつ聞いてみる。

「知らない、学園生。もしかて、この人達が犯人？」

「……!？」

俺にも戦慄が走った。

まさか、こいつ等は怪しまれないようにこんな恰好を？そうすればSクラスのようなコスプレ喫茶の関係者だと思われるからか？

マズい。今は本当にマズい。最悪なことに、学園内の多くの生徒は俺達のゲリラ公演を見に来ている。こんな所で魔法なんて使われたら……!？」

「……どうする？」

「……三谷君の仲間の誰かを呼ぶ？」

それが一番いいだろう。

けど、俺はソラの仲間の名前はシエルスと坂崎、四条、そして間

しか知らない。名前がわからなけりや紋章エンブレムの通話機能が使えない。そして、四条は明らかに戦闘向けの魔法使いじゃないし、残りは劇の方を頑張ってもらっている。ここで戻せば不自然に思われる。どうしよう……。そう思っていた時、視界の隅で誰かが動く。

「……どちらさまでしょうか、不審者殿？」

忍がいつの間にか相手の死角から小太刀を首筋に突きつけていた。

「……これがこの学園流の歓迎の仕方でしょうか、ご主人様？」

「ちやうわ！明らかに不審者扱いやわ！？」

「わたしは不審者ではありません。この人だけです！」

メイドさんがビシッと男の人を指さす。

だが、隙ができた！

「ナイス、忍！」

「リオちゃん、『レローネ』でいいかー!？」

「構いませんわ！皆さん、下がって！」

我らがDクラスの主戦力、リオネとレクトのバカップルが仕掛ける。

『レローネ』はこいつ等の人形の一体、四足歩行タイプの竜型の人形だ。全長五メートルほどの小型のドラゴンだが、その膂力フレスは人を遙かに上回り、口からは雷属性の吐息のような攻撃をすることが可能だ。



「とりあえず、潰れてくださる?」

リオネがそう言うと、『レローネ』がその前足を二人に向けて叩きつける。

これなら、敵はもう立っていらはしない。

「……少し、危険でしたよ?」

「忍なら避けれただろ?」

当たり前のように俺の横へ気配もなく立っていた忍をねぎらう。だが、俺達は次の光景に目を見張るしかなかった。

「……ご主人様、死んでますか?」

「生きとるわ。つか、最初に聞くのがそれかい!」

「……………ツチ」

「今『ツチ』言ったな!」

何回も言うが、『レローネ』は人間の力なんかとは比べ物にならないぐらいに強い。やろうと思えば、この学園の城壁だって崩せる破壊力だ。だが、メイドはそれを片手で止めていた。

「そんな、バカな……!」

「リオちゃん、次!」

レクトはすぐに次の人形を準備。

取り出したのは狼の形をした人形。これは『フェーン』、本来は索敵などに用いる人形だが、集団戦闘で一気に殲滅することも可能な人形だ。レクトは力じゃダメだと判断し、手数が多さに切り替えたんだろう。

「わかりましたわ！」

そう言うとりオネは人形に魔力を通し、大きくする。二メートルほどの人形が全部で六体。これがリオネの操れる人形の最大数のはず。俺もこの人形と戦ったことがあるが、あまりの速さに全く歯が立たなかった。

「行け！」

『フェーン』達はその俊敏な動きで相手を翻弄し、死角から攻撃を叩きこもうとする。

だが………。

「ご主人様、今度こそ死にましたか？」

「やから、死んでへんわ！　大丈夫だよ、お姉ちゃん。何しろ、このわたしが憑いてるんだからね！」

これならさすがに守る余裕もないはず。そう思っただけで選んだレクトの読みは当たり、メイドはさすがにこの数の人形を捌き切れなかった。メイドは体のいたるところを噛みつかれていた。ただ、男の周りの『フェーン』達は足が綺麗に切り落とされていた。その、あまりにも大きすぎる巨大な剣で。どう考えても、あれは人間が使える武器じゃない。

「お、お前、魔物の、類か!？」

「・・・なあ、ワイの人間性が否定されたんやけど?」

「ご主人様は確かに人間の皮を被った鬼畜ですね。さすがはエレオノール学園の生徒様、ご慧眼でいらっしやいます」

いや、そう言うことが聞きたかったわけじゃない。

まあ、準備ができたからよしとしよう。

「ヒアッシング・エア  
貫き穿つ風　!」

俺が単独で使えの最強の魔法。風の刃が旋回しつつ、弾丸のように相手に飛んでいく。さすがにこんなの受けりや死ぬ寸前の大怪我を負うだろうが、今の俺達に手加減なんてする余裕はない。

俺の魔法は男の所へと飛んでいく。

「ご主人様!」

「うわあ!？」

だが、メイドが男を突き飛ばし、代わりに魔法を受ける。それによつてメイドさんは派手に切り刻まれ、さらには壁に吹き飛ばされる。・・・ただ、男も壁に頭から突き刺さっていたけどな。とにかく、だ。これで敵は男一人・・・!

「ダアホ!?もつと綺麗に助けんかい!?つか、ほつといてくれたらカリンが斬ってくれたわ!？」

「何この人、女の人に守ってもらっておいで・・・本当に鬼畜？」  
杏奈がさりげなく毒を吐く。  
それに同意する声上がる。

「本当ですね。助けてあげたのですから、感謝してほしいものです」

「お前、何で!？」

おかしい。そこには何故か五体満足で、怪我ひとつないメイドがいた。あの魔法を喰らえば、どんなヤツでも無傷はあり得ない!

「どうすんだよ、爆弾魔がこんな強いなんて聞いてないぞ!？」

「・・・なあ、自分等なんか勘違いしてへん？」

「ご主人様、ついに犯罪に手を染めたのですね」

「お前はやめへんか!？むしろ爆弾魔の第一候補はお前やる!？  
同機は面白そうやったとかでな!?!」

「・・・つく、否定しきれません」

「否定せえ!？                   ねえ、どうしよう、そろそろ衝動がきちやあはははははは!？」

さつきまで比較的まともだと思っていた男の人の方が狂ったように笑い始めた。

「・・・あの、すごく怖いんですけど？」

そんなことを思っていると、男の人が明らかに人間を凌駕したスピードで俺に肉薄。急な出来事に脳の処理がおっつかない。

「いつけえ！」

『地獄にですか？』と思わず軽口を叩きそうになる。だが、刃は既に俺の首を狙って振り下ろされそうだ・・・！

「 迅雷の弾丸。

ライジング  
鳳雷弾」

「あぎゃあ!?!」

メイドがいきなり味方に攻撃をし始めた。雷の弾丸が放たれ、男の人に直撃。男の人はピクピクと痙攣している。

「・・・どういうことだ？」

「すみません、ご主人様は誰から構わず襲おうとする変態ですの。後で私がじっくりと調教しておきます」

「何、勝手な、こと言う、とる。その前に、これ回収せんか!?!」

息も絶え絶えに男の人が言う。

メイドさんはやれやれとオーバーアクションをとり、巨大な剣を回収。すると、武器が光り出し、長ネギに変貌する。

「「「・・・」」」

「……これで、パーフェクトメイドの完成です」

無意味にポーズをキメるメイドさん。

俺達は絶句するしかない。

「所で、この魔法陣は何ですか？」

そう言うと、メイドさんは俺達に学園の見取り図を突きだす。いつの間にも思ったが、意味がわからない。

「何って、貴方達が仕掛けたんじゃない？」

杏奈の言葉にクラス全員がうんうんとうなずく。

そして、メイドさんはじーっと見取り図を見る。

「……これでは不完全ですね。必要な点は……このこと、ここです。……これはまた、珍しい魔法陣をお使いのようです」

ぶつぶつと言うメイドさん。

と言うか、無視できない単語が聞こえたぞ！？

「おい、お前魔法陣がわかるのか！？」

「はい。そうですが……ちなみに、これがこの問題の正解です」

そう言いながら俺達に見取り図を見せる。

そこには、四条が探した意外の部分に赤い丸で印がつけてあった。

……っていつか、ここは！

「さっき、俺達が調べたところじゃ!？」

「……どれも、ゴミや忘れ物があったところですね」

リオネや他のヤツらに聞いても答えたことは同じ。

「……どういうことだ？」

「……と言うか、新手のオリエンテーションにしては難しすぎではないでしょうか？それに、使った魔法陣の内容は……別の魔法陣を一時停止にする。何故これにしたんでしょうか？」

メイドさんがよく意味のわからないことを言う。

俺はとりあえず敵ではなさそうなので質問をする。

「一時停止って、どういうことだ？」

「これは、要するに遅延詠唱ディレイスベルの一種です。今回は発動させたい魔法陣を、こちらにあるもので発動を抑え、かつバレないようにすると言う戦術系の魔法陣です。……この学校では、『ウオー教室間戦争』が盛んと聞いていましたが、さすがです」

こんなこともするんですねと感心するメイドさん。

だが、今の俺達にはものすごく嫌な予感しかしなかった。

「……あの、一つ聞いてもいいですか？」

「なんなりとどうぞ」

「もしも、この魔法陣を解除したらどうなります？」

「抑えていた魔法陣が即座に発動します」

「平地姉弟に連絡だ！解除を中止させろ！！」

俺がそう叫んだ途端、今度は『CALL・平地冬香』と言つ名前が表示される。俺は見覚えがない名前だが、おそらくは『平地姉』だろう。

・・・ものすごく嫌な予感がするが、出ないわけにもいかない。俺は平地姉との通信を入れる。

「・・・一応聞くんが、どうした？」

『今、全部の解除が終了したわ』

「『アウトオ！？』」

俺達は全員で叫んだ。

おそらく、敵の考えはこうだったんだ。ゴミや落し物に仕込まれた魔法陣の欠片とでも言うべきモノを、配置を崩していけば発動するように考えていたんだろう。

そして、俺達は本来もつと後で発動するはずだった魔法陣を今ここで起動させてしまったらしい。

そんなことを考えていると、足元に魔力の線ラインが引かれる。ヤバい、発動する！？

「・・・一応聞きますが、これって厄介事だったりしますか？」

メイドさんは無表情な顔で俺に聞いてくる。

俺は既に半泣きの顔でうなづくことしかできない。

メイドさんは更に何か考えこむ。そして俺にまた聞く。



「この魔法陣、発動するとまずいものですよ？規模から考えれば学園全体を覆っているようですが？」

「何でアンタはこんなに冷静なんだよ!？」

「メイドですから」

意味のわからない受け答えをされても困る!？」

俺は心の底からそう叫んだ。

「すみません、どなたか、長距離を攻撃できる方は？」

「無理ですよ!？つか、何で急にそんなことを聞くんですか!？」

俺がそう聞くと、メイドさんは今度は学園周辺の地図の一部をとんと指で示す。

「こここのポイントに何かしらのダメージを与えられれば、この魔法陣を停止させることが可能です」

「」「マジで!？」」「」

つか、さっきから思ってたけど何この人!？」

ソラよりも魔法陣の習熟度高い!？」

「でも、こんな所攻撃できるやつなんか・・・」

一人思い浮かぶ。だが、あいつに任せても大丈夫なんだろうか？

「しかも、ここにいねえし」

「・・・こんな時に、どこに行ってるの!」

口々にクラスメイト達が文句を言う。

もちろん、アスカのことだ。けどアスカがいたとしても、高い所からじゃないところは攻撃できない・・・。どうする？

そんな時、杏奈の所に通信が入る。

「アスカ!? 今どこにいるの!？」

アノヤロウ、今どこにいるんだよ。

後でシメる。・・・生きてたらな。

『杏奈、そんなことより、これって大丈夫なの? なんか学園全体を魔法陣が覆っちゃってるけど?』

「・・・」

この時、俺と杏奈は疑問を感じた。

こいつ、何で学園全体にこれが張られているってわかったんだ?

「・・・おい、アスカ。今どこだ?」

『ええ、今? あれから何の連絡もないからさあ、ずっとここで待ちぼうけだよ。まさにサビシンボーイだね』

「アスカ、俺は今、お前を超愛してる」

『・・・はい!?! 杏奈、カザ八代表

が壊れたよ!？」

「アスカ、私も愛してる」

『モテ期到来!？』

バカなことを言うアスカに現在の状況を説明。

『なるほど、この美人スナイパーさんの出番なわけだ』

「頼む、お前だけが頼りだ!」

クラスの全員が口々にアスカを応援する。

『任しときなさいって、わたしの眼はどんなものだって射抜くよ』

アスカのその一言を最後に、杏奈の紋章からは何も聞こえなくな  
った。

## 12話・DISMANTLING（後書き）

作 「とうわけでお久しぶりです。『解体』をお送りしました」  
カレン 「みなさんお久しぶりです。最強のメイドことカレンです」  
カバネ 「わけのわからへんこと言うな。死ネクロマンサー霊術師のカバネや」  
カリン 「ついでにカリンちゃんもいるのだ」  
作 「まあ、やっぱりボケは必要だよな！とうわけでこうなりました」

カバネ 「そのせいで死にかけたけどな！？」

カレン 「わたしの英雄譚はこれからも続きます」

カリン 「お姉ちゃんかつこいいー！」

作 「まあ、こんなでも魔法のレベルはかなり高い人達ですから」

カレン 「メイドですから」

カバネ 「関係ないでな？」

カリン 「わたしは魔法できないけどねー」

作 「まあ、そんなわけで次回！」

カバネ 「とうわけやねん！？さつきから適当に話しとるだけやないか！？」

カリン&カレン 「「イエー！」」

カバネ 「だれか助けて！？」

作 「次回は美人スナイパーことアスカちゃんががんばるぜ！とうわけで次回もよろしく！」

カレン 「・・・次こそ、伝説のネギを求める話ではなかったのですか？」

カバネ 「どんな話やねん！？」

### 13話・MAGICAL SNIPPING

sideアスカ

「・・・さて、と」

わたしは近くに置いたギターケースのような黒い箱から、愛用の  
スナイパーライフル  
魔法式狙撃銃を取り出す。

そしてそれを手早く組み立て、構える。

既に『サイト照準』の魔法は展開済みだ。だから、後は狙って引き金を  
引くだけ。簡単なお仕事だ。

「・・・口では、何とでも言えるけどねー」

正直、ここからの距離じゃかなり難しい。

わたしの絶対半径は測ったことはないけど、たぶんよくて六百。  
キリシケレンジ  
ちなみにこの銃の精度なら最高で千。どこぞのドラグノフ構えた女  
の子よろしく二千オーバーの距離は無理だ。

しかも、魔銃は魔力弾が拡散しやすく狙撃銃には向いていない。  
こんなの使うのは自分くらいだなんてのもわかっている。その上、  
この学園のみんなの命がこの腕にかかっている。

「・・・ものすごく、重いなあ」

でもやるしかない。こんなことできるの、この美人スナイパーの  
わたしだけだし。

わたしはグリップを握り、そこから魔力を流す。すると、銃にど  
んどん魔力がたまり、弾丸が形成されていくのがわかる。

そして、カザ八達に言われたポイントを狙い、引き金を引く。

「……………やっぱり、魔力が足りない！」

わたしの眼は途中で拡散してしまった弾丸を目に捉える事が出来た。

やっぱり、距離が少しだけ遠い。

魔法のおかげで大体の距離が今の私にはわかる。

距離はおよそ七百弱。わたしの技量では無理な位置。

「でも、諦められないんだよね！」

ならもつと魔力を込める、拡散しないように。

そして引き金を引く。

今度は届く。けど、威力が足りない。どういうわけか、狙撃銃の魔法弾は魔力を込めすぎてもダメらしい。理由はよくわからない。

「っ、まだまだ……………」

込める、撃つ。込める、撃つ……………。

何回やったんだろう、紋章から聞こえてくるみんなの声がどんどん焦っているような気がする。

幸いにも、あまりに大規模な魔法陣だからなのか発動するのに時間がかかっている。

けど、時間はもうない。

わたしは、魔力を込める。そして撃つ。

「……………つ、当たらない！」

また、魔力を込めようとする。けど、その時になって気付いた。魔力が、もうほとんどない。

わたしの魔力保有量はとても少ない。どうも、聞いてみれば三谷

君と同レベルの低さらしい。わたしが三谷君と出会った時、それは本当に驚いた。だって、わたしと同じぐらいの魔力しか持たないのに、Sクラスのガリユーク君に勝っちゃったんだよ？もう正直な話、崇めてもいいと思った。

だからわたしはがんばった。三谷君が来るまでの学園は完全な実力主義で、Dだからと、魔力が低いからと不当な扱いを受けた。

女の子のわたしじゃ、狙撃銃を完全に扱えない、力が足りないから。でも、魔法銃なら普通の銃よりも遥かに扱いやすく、女の子のわたしでも大丈夫。その代わり、とんでもない技量を要求されるけど。

でも、この属性のおかげで第一回の『クラス・ウォー教室間戦争』でみんなの役に立てたし、夏休みの時の三谷君のお願いも達成できた。

けど……………。

「やっぱり、ダメなの…………？」

この距離じゃ、できない。

しかも、時間的余裕と魔力的なことから考えてもあと一回。これじゃ、できる可能性なんて万に一つもない。

……………どうしよう。

わたしの心の中が黒いもので埋め尽くされそうになった時、声が聞こえた。

『アスカ、がんばれー！』

『アスカさん、これは貴女にしかできないことですよ！？』

あのレクト君とりオちゃんのバカップルの声が聞こえる。

何でかと思っていると、どうも紋章の通話が切れていなかったらしい。

『ホークレス殿……!』

忍君にしては珍しい、感情を表に出した声。

『美人スナイパーなんだろう、お前ならできる!!』

無茶苦茶なことを言う、我らが代表カザハの声。

『……アスカ、お願い』

そして、あの『クラス・ウォー教室間戦争』以降仲が良くなって、親友的な位置にいる頼れる副代表の杏奈。

他にも、クラスの全員が何かを言っている。

そうだった。わたしは、Dクラスの狙撃手だ。スナイパーどのクラスにもいない、魔法銃を使う……。

「そうだったなあ。……わたしは、狙撃手だ」

銃を再び握りなおし、狙いを定める。

「狙った獲物は、逃さない」

眼にかかった魔法を意識し、精度を上げる。

「……大丈夫、当たる」

耳に、みんなの声が聞こえる。

……大丈夫だ、みんながいるから。だから、当たる。

それでもダメなら……。いつそのこと、神様じゃなくて悪魔に



でも頼みますか！

みんながいて、神様にも、悪魔にも頼んだ、わたしの弾丸……  
……いや、魔弾。今のわたしに……。

「わたしに、射抜けないものはない……！」

そしてその時、不思議なことが起こった。

突然、わたしの脳裏に言葉が浮かび上がる。そしてどういいうわけか、その言葉を唱えずにはいられない。

気がつけば、わたしは言葉を紡いでいた。

「それは、一発の弾丸。」

全てを見通し、狙う。

この魔弾に射抜けぬものはなし。

ホークアイ・ショット  
魔弾の射手

正直な話、何が起こったのかよくわからない。

わかったのは、わたしが知らないはずの魔法を使ったということだけ。

この ホークアイ・ショット 魔弾の射手 を発動させたその瞬間、目の前の空間がぐにやりとゆがんだような気がしたが、自分ではよくわからない。ただ、頭の中に今しかないと言う声が聞こえた気がした。

わたしはその声任せ、最後の一発を放つ。

弾速の遅いはずの魔力弾は、わたしの予想を遥かに上回るスピードで、光の速さで宙を駆け抜ける。

そして、カザ八達の言っていたポイントに着弾し、派手なスパークが弾ける。

それと同時に学園全体を覆っていた魔法陣から光が消えうせ、どこからか歓声が聞こえる。

「・・・やった、の？」

全く現実味がない。

魔法を使ったと思えばそれは自分の知らないもので、しかも弾丸の威力やスピードが明らかに上昇している。

うっん、今はそんなことはどうでもいい。

やったの？わたし、あの距離を？

「やったの？・・・やった？やったー!？」

もう自分が何を言ってるのかよくわからなかった。

でも、そこでフラツと体が傾く。

あれ？何で、こんなにだるいんだろう？魔力の使い過ぎ？

悲鳴が聞こえる気がする。誰の？自分はもう疲れていて、指一本動かせない。こういう時にリオちゃんみたいに優しい彼氏がいたらいいのと思う。

そしてわたしは、何かにぶつかり、気を失った・・・。

### side 風葉

俺達はある後、いてもたってもいられなくなって、アスカのいる所に走っていった。

誰が先に走りだしたのか全く記憶にない。アスカは、バカで能天気なお調子者娘だけど、誰よりも努力しているのは全員知っている。紋章越しにだけど、何回も狙撃しているのがわかってる。Dクラス一の狙撃手が苦戦している。俺達にできることなんて全然ないのかもしれない。

けど・・・。。。

「ほつとけるか・・・！」

「本当に、らしくない！」

杏奈も俺と同時に走りだしたのか、並走するようについでき  
ていた。

と言うか、クラスのほとんどが駆け出している。たぶん、みんな  
気持は同じだったんだろう。

途中で何事かと俺達のことを見ているやつ等がいる。これじゃあ  
約束がペアだと思いなながらも、足は止めない。

そして、アスカのいる時計塔の近くに来る。

この学園の時計塔は学園の真ん中であり、一番高いから屋根から  
ならこの学園を見渡すことができる。アスカはその屋根に上り、『  
照準』<sup>サイト</sup>の属性で辺りを見てくれていた。まさかこんなことになる  
は思いもしなかったけどな。

そして、とんがり帽子のような屋根を眼を凝らして見る。そこに  
は銃を構えた人影が見える。更に、時たまその人影から一筋の光も  
見える。

アスカが自分の銃で目標を撃ち続けているんだろう。<sup>ターゲット</sup>

それを見た杏奈は、アスカが切り忘れている通話中の紋章<sup>エンブレム</sup>に向か  
って言う。

「アスカ、がんばって！」

それを見た俺達は口々に言います。

「がんばれ！」

「お前ならできるー！」

「お前がやらなきゃ、誰がやる!？」

声が届いているのかはわからない。

けど、俺達は杏奈に向けて声を出し続けた。そして変化が起きた。突然、魔力が膨れ上がるのを感じる。一瞬、ついに魔法陣が発動したのかと思い始めたがどうも違うみたいだ。

魔力は下からじゃなく、上から感じる。

なら、この魔力の発生源は……。

「……アス、カ？」

杏奈が驚きの表情で親友の名前を呼ぶ。

するとその声にこたえるかのようにして、一筋の流れ星のような光が学園の外に向かって流れていく。

そしてガラスが割れるような音がしたかと思うと、地面に展開されていた魔法陣がぱっと消えた。

それを見て俺達は何が起こったのかわからなかった。だが徐々に理解してくると、誰かが『おっしゃあ!』と歓声を上げ、それを合図に全員がわぁっと歓声を上げた。

「アスカ、やったよ!魔法陣が、消えた……!」

「さすが、俺達の誇るスナイパーだよ!」

俺と杏奈が口々にべた褒めする。

だが、紋章からは何も返事がない。まあ、たぶんアスカ自身も茫然自失な状態になってるんだろう。そう思った。

「……シルファリオン殿、あれを!」

俺は珍しくいきなり声を上げた忍に驚いたが、忍の焦った顔からただ事じゃないと判断して、指をさす方向を見る。

「……よく見えないが、アスカっぽい人影が見える。心なしかふらふらしているように見える。」

「アスカがどうした？……なんかふらふらしているように見えるが？」

「……二人ともよく見えるな。オレツチじゃ全然わかんねーよ」

「さすがは獵師の家系と言つべきでしょうか？」

バカップル達はよく見えならしい。

いや、この近くにいるヤツ全員が眼を凝らしているが、誰も見えていないのか？

「そんなことよりも、ホークレス殿の様子が変わす！」

忍がそう言った瞬間、アスカっぽい人影がぐらりと揺れ、体から力が抜けるのがわかる。そして、時計塔の屋根はとんがり帽子のような角錐の屋根。それが意味することは……。

「落ちる……!？」

「何で!？」

「魔力の使い過ぎか!？」

確か、アスカの魔力はかなり低いつて聞いたことがある。

俺達が来る前からも眼に魔法を使って、更には銃に魔力を込めて何発も撃ち続けていた。それに、さっきの異常な魔力の高まりから考えるにそれが妥当だ。

魔力を極限まで使ったらどうなるかは人によってさまざまだが、大抵の場合は『気絶』する。

さっきまで歓声を上げていた俺達の声は悲鳴に変わる。

魔法でどうにかしたいが、落ちている人に向かって魔法を放ち、かつ助けることのできる都合のいい魔法なんて俺達には思いつかない……!?

「そうだ、ジグはどこだ!？」

奴なら重力系の魔法で何とかできるはず!

だが、声が聞こえない。どうも、教室に置いてけぼりにされたのか……!?

本当に、これはマズい。

「こうなりや、一か八か俺の『風』で上昇気流を……」

「でも、魔力が持つの!? カザハの魔力が持たない……」

そう、そこが問題だ。

俺の魔力もそんなにない。杏奈の言うとおり、人一人を浮かび上がらせる程の風なら死ぬほど魔力が必要だ。

「けど、やらないよりましだ……!」

意識を集中する。

今回は風の操作だけだから詠唱は必要ない。と言うか、そんな暇はない。正直な話、万の風の如く(ミリオン・エア)が使えた

ら問題が全くない。けど、あの魔法は魔法陣を描かなきゃいけないし、俺だけじゃ魔力が足りない。

「風を操作できるやつは俺に合わせて上昇気流を作れ！それと落下地点に誰が行ってくれ！」

俺がそう言うと、クラスの連中が慌ててそれぞれの行動に移る。でも、ヤバいな。アスカの落下速度が落ちない……！

「アスカ……！」

もう杏奈が泣きそうな顔で祈る。

いや、ほとんどのヤツが杏奈と同じ気持ちだろう。

実際に、俺も既に祈っている。

神様がいるなら俺の願いを聞いてくれ。頼むから、あそこまで頑張ったアスカを、見捨てないでくれ！

そして、俺の耳に獣の雄叫びが聞こえた。

一瞬だけ魔獣かと思ったが、この咆哮を俺は聞いたことがある。

「あれ……！」

誰が言ったのかわからないが、自然とそいつの指し示す方向が何故かわかった。

そこを見ると、白い翼の生えた獅子がいた。大きな体に似合わない俊敏な動きとその翼で、風が乱れているにもかかわらずアスカに向かって飛翔する。

そして、器用にアスカの制服のローブの後ろ襟を啜え、俺達の発させた上昇気流から抜け出す。

白いライオンは旋回しながら高度を落とし、口にくわえたアスカをゆっくりと地面に寝かせる。

そこに杏奈が駆け寄り、自分の友人の名前を叫ぶ。

「アスカ、アスカ・・・！」

「・・・」

アスカは何も答えない。

だが、杏奈は呼び続ける。俺も近くにいき、アスカの様子を見る。

「お願い、返事して！」

「おい、返事しろよこのバカ！」

「・・・・・・お」

「アスカ？」

かすかに、声が聞こえた。

俺達は更に声をかけ続ける。

「「アスカ！」」「」

「・・・あ・・・ん」

「「「・・・」」「」

なんだか、雲行きが怪しくなってきた。

俺達は一応念のためにアスカに声をかけ続ける。

「・・・あと、五分・・・」



「「「起きろ！」」」

「はぐう！？何、何なの！？宇宙からの侵略者と仲良くなって、金の狙撃銃か銀の狙撃銃のどっちを落としたのか聞かれて、どっちも落としてないって言ったら杏奈をくれるんだよね！？」

「何、愉快的な夢見てんだ！？意味わかんねえよ！？」

俺達の大声と、杏奈の鉄拳でアスカが跳ね起きた。

俺は、俺達のこの思いを返してほしい、真剣にそう思った。だが、こんなバカなことを言うアスカに杏奈は抱きついた。

「心配かけて・・・」

「・・・うん、ゴメン。そう言えば、魔法陣はどうなったの？ていうか、ここどこ？」

「お前のおかげで解除できた。で、魔力を使いすぎたお前があとから落ちてきた」

俺は軽く状況を説明しながら時計塔の屋根をさす。

「・・・わたし、よく生きてたね」

「本当にな。飼い主に似て、いいところだけ持っていく猫がいなきや死んでたな」

俺がそう言うと、アスカは自分の近くにいる白いライオンの存在に気づく。

三谷の飼い猫、と言つか飼い獅子の『レオ』だ。

見るのは二度目だが、どうしてもあのぐうたら猫とこのライオンが俺の中でイコールで結ぶことができない。

レオにおっかなびっくりといった感じで触れる。

レオは何か用かとも言いたげな表情でアス力を見る。

「・・・えっと、ありがとうね？」

レオは一言だけ『がう』と鳴くとそっぽを向く。

どうも、このレオは自分の飼い主以外にはあまり懐かないらしい。本当に、どうやってこんなのを手懐けたのかもものすごく気になる。

「みんな、大丈夫!？」

その声に振り向くと、そこには今だ騎士の恰好をしたソラと間にお姫様の恰好をしたままのアンジェリカさん、そして坂崎さんがいた。どうも劇を早々に終わらせて、俺達の所に駆けつけてくれたみたいだった。

「・・・にしても、よく止めたな。一応話はあのカレンから聞いてたけどな」

「というか、さっきのって真言だよな？」

間の言った聞きなれない名前に俺達は首をかしげる。まあ、今はいいだろう。それよりも、ソラの言った無視できない単語の方が激しく気になる。

「ちょっと、どういうこと?わたしが真言使ったって!？」

言われて一番驚いたのは、むしろ本人のアスカだった。そのことに対して、ソラはこともなげに言う。

「だって、普通の魔法と明らかに桁違いの魔力とマナ使ってたし」

「・・・じゃあ、アスカちゃんも頭の中に呪文が浮かんできたりしたのかな？」

何気ない坂崎の一言にアスカがはつとする。

どうも、思い当たる節があるらしい。

「まあ、なにはともあれおめでとう？」

そう言うソラはレオのもとに行つて撫で始める。

まあ、まさかアスカが真言を使うとかそんなことになるとは思ひもしなかった。

とにかく、今言えることは一つある。

「俺達、やったんだよな？」

「うん。カザ八達がやってくれたね」

ソラはそう言いながら、猛獣使いみたいにレオの喉のあたりを撫でる。レオも心なしか気持ちよさそうだ。

「ありがとう、本当に助かったよ」

まさか、俺達より遙かに強いこいつらにこんな風に言われるとは思つてもみなかった。周りを見渡してみても、クラスの全員が照れくさそうにしていた。

「・・・まあ、これもお前がいたからできたことなんだけどな」  
「違う」

意外なところからの声、アンジェリカさんだった。この人は吸血鬼のくせに人間不信と言うなんかいろいろとおかしい性格で、あまり俺達とも話さない。まあ、ソラがかかわれば話は別だけどな。まあ、そんな意外な人物から否定の言葉が上がった。

「それは、ソラのカじゃない。貴方達のカ」

「まあ、そうだね。ボクは何もしてないし。しいて言うなら、無理やりにAクラスと戦わせた程度だよ」

そう言うと、ソラは気の抜けた笑みで俺達を見る。

「ゲリラ公演も、爆発騒ぎもこれで終了。これで心おきなくこの文化祭を遊べるね」

その言葉で、自然と俺達の口からおっしやあ！と言う歓声が響く。あちこちで肩をたたき合い、ハイタッチをしているやつもいる。そして・・・。。。

「お前らあ！いい加減にせんかあ！！」

お仕置きがものすごく恐ろしいと評判の、生活指導兼実技担当のゴリラ教師が登場。

「・・・ヤバい、死ぬ!？」

「総員、各自の判断で退避、そして逃げ切れ！」

「「「了解！」「」」」

もう、そこからは鮮やかだった。

さっきまでの興奮はどこへか、俺達は示し合わせたかのようなタイミングで即逃げる。そう言うわけで俺達は無断でゲリラ公演をした問題児として先生達から追われる羽目になった。

まあ、こんなバカみたいなことができるのも俺達がこの学園を守ったおかげだとも思っておこう。

13話・MAGICAL SNIPPING（後書き）

作 「というわけで『魔弾の射手』をお送りしました」

空 「・・・これは、地味にすごくない？」

作 「何が？」

空 「だって、『魔弾の射手』ってもとは童話なんかでしょ？悪魔から狙ったことに必ず当たる魔弾を七つ作る作り方を教えてもらって、最後の一発だけが悪魔の願ったところにあたるってやつだよな？」

作 「うん。それがどうかしたの？」

空 「この展開、部分的に似てるなと思ってさ。作者もやる時はやるんだね。なんかかつこいいし」

作 「・・・実は、これって偶然だったりするんだよねー」

空 「・・・え？」

作 「なんかジャプ的な展開でいいかと思って書いてたらこうなった。いや、後で魔弾の射手って調べて地味に旋律を覚えたね」

空 「・・・」

作 「こわいね、僕の才能！」

空 「・・・シンゲツ真月！」

作 「あびゃあ!？」

空 「というわけで次回、バカ騒ぎします。次回もよろしくね！」

## 14話・STUPID COMMOTION

### side空志

まあ、結果から言うとかボク等はどうか助かった。

理由としてはサリナさんが爆破予告を止めたことで、この騒ぎも隠す必要がなくなったってだけなんだけど。

サリナさんはいろいろと他の先生から文句を言われたらしいけど、だからこういうことに慣れているボク等と呼んだとかなんとかいって話を適当にごまかして、残りをカルネル先生に丸投げして逃げたみたいだった。

……何と言うかカルネル先生、強く生きてください。

「そう言うことで、今回はお咎めなしとしますと先生達からの連絡です。ただし、適度な罰を受けてもらいます。わかりましたか？」

「はい……」

バリバリのキャリアウーマンな椿さんに先生からの連絡を聞いていた。

ちなみにボク等……というか1年DクラスとSクラスの人間は何故か闘技場で正座させられていた。

……いや、理由はわかるけどね？

1年で劣等性のクラスと一緒に優等生のクラスが怒られて正座している姿はなかなかシニールだった。

というか、普通に何事かといういろいろな人達がボク等を見てくる。

「……では、体罰として残り三時間ほど正座をしてください」

「「「・・・」」」

体罰がしょぼい。

最初はそう思っていた。ただし、既に一時間ほど経っている。今回の体罰内容は下校時間まで正座をし続ける。

現代っ子なボク等は既に足がヤバいことになっていた。もう、ほんの少し体を動かすだけで足に痺れがくる。

「何で、ワイもやねん・・・」

「ご主人様、反省してください」

「お前が一番反省せなあかんやろうが!？」

「もう一枚追加です」

「もうやめてえ〜!？」

・・・隣に比べれば遥かにマシだ。

何故かここに来て、更には侵入までしているカバネさんとカレンさん。何故かカバネさんが反省という名の、江戸時代の拷問を受けていた。正座した膝の上に石でできた板を乗せるアレだ。今のことろ、ボク等はあれを心の支えにして今まで耐えてきている。あんな拷問を受けなくてよかったと。

「ではレイ先生、お願いします」

「はいはい」

そう言うと、椿さんはどこかへ早足で行こうとする。



危ないですよ、そんな早足で行ったら……。

「あふん!？」

……貴女なら絶対にこけますから。

「……死ぬ、かとお、思った」

「はい。確かにあれは少し大変でしたね」

「……」

ボク等はあの正座の拷問から帰ってきた。ここは一時的に間借りしている男子寮の一室。ボクとリュウ、そしてシュウは三人で同じ部屋をあてがわれている。

いまだに足に変な感触が残っているボクに対して、シュウはいつものような爽やかなこっぴどい青年な笑みを浮かべている。

「……全然辛そうじゃないね、リュウと違って」

「まあ、わたしは慣れていきますから」

何故かそこで遠い目をするシュウ。……そっとしておこう。

リュウと言えば、もう何もしゃべる気が起きないとも言つかのようにベッドに頭からダイブしている。

「マジ、だりい」

「リュウはまだまだだよ。ボクなんかレオがふざけて膝の上に乗ってくるんだから……」

その当のレオは既にボクが使っているベッドで丸くなっている。

……このぐうたらライオンめ。

「とりあえず、もうこんな時間ですし、体を洗いに行かないといけませんね」

時間を見れば、確かに結構遅めの時間だ。

一応、夕飯は既に済ませてある。後はお風呂に入ってベッドにダイブすればそれで今日が終了する。

「そうだね。リュウ、どうする?」

「……先に行つて来い」

一応リュウにお風呂に行くか聞いてみたけど、返答は予想通りのもの。ボクとシュウは手早く洗面器具を用意して、この寮の大浴場に向かった。

そして部屋を出れば、ちょうど隣の部屋にいるハル君とシャオ君に遭遇。

「二人とも、今から?」

「あ、はい」

「ソラさん達もですか?」

二人がそう言いながら視線をさまよわせている。

「……ああ、リュウは後でっつてね」

「そうなんですか？」

ハル君がキョトンとした表情でそう言う。

「……リュウさん、風呂が嫌いなんですか？」

何故かシャオ君がそんなことを言った。

ボクは不思議に思いながらシャオ君に聞く。

「何でそう思っの？」

「……俺達、たぶん一度もリュウさんとだけは入ったことないです」

ちなみに問学園のお風呂は、少し遠いけど寮のモノを使わせてもらっている。中はよく漫画とかで見る銭湯を小さくしたような感じ。そこで体洗って、湯船につかって適当な話をシユウ達としている。

そう言われれば、確かにリュウはあまり一緒に入った記憶がない。

「……でも、リュウは普通に綺麗好きだしな」

リュウは『めんどくせえ』とか言いつつ、自分の部屋をよくきれいにしている。それに夏でも汗をかなりかいた時は『風呂にでも行きてえ』とか言っつてたし。

「……リュウはああ見えて竜トドラゴンだからさ、実は肌に鱗があるんじゃない？それでみんなに気を使っているとか？」

とりあえずありそうなことを適当に言ってみる。

「……確かにありえそうですね」

なんかボクが行った冗談にシユウが喰いついてしまった。

そんなことを話していると大浴場に到着。ここはお金がかかっているのか、中も外もかなり豪華な造りになっている。最初はこんな所使ってもいいのが戦々恐々としていたのを思い出す。

そして中に入ると、そこには見なれた顔があちこちにいた。

大半がSとDの1年生。たぶん、みんなもボク等と同じような考えで動いていたんだろう。

そこで合流したカザ八達とまた適当なことを話して体を洗い、湯船につかっている。

「にしても、あれはねえよ」

「……正座のこと？」

あれとは具体的になんだろうと思いつつ、カザ八に聞きなおしてみる。

「違う、隣でやってた拷問のことだ」

「「「……」」」

何故かボク等の間に沈黙が舞い降りた。

そんな空気を払おうとも思ったのか、レクトが明るい声を出し

て話を変える。

「そういやさー、今日来たあのメイドさんと二重人格のイタイ男の人はミタニーの知り合いかー？」

「カレンさん、カリンさんとカバネさんですか？」

即座に反応したのがハル君。

地味にカバネさんが可哀想だと思った。まあ、事実だからしょうがないけど。

「……すみません、人数が一人多いですよ、平地弟殿？」

忍がそう指摘する。

「……あれ？カレンさんと、カリンさんにカバネさん。……ソラ先輩、それでいいんですよね？」

「ハル君、この頃君の常識の尺度がおかしくなってるんだ」

「そうです。ソラさんのせいですけど」

「シャオ、本人の目の前でそれは失礼ですよ？」

シャオ君とシュウ、二人とも失礼だった。

話してもいいのかダメなのか……。

「ワイはな、ネクロマンサー死霊術師しとんねん」

「あの、何でいるんですか？」

ナチュラルに会話に入ってきたカバネさんを見てボクは突っ込んだ。

そしてカバネさんはいかに自分がどれだけカレンさんから理不尽な仕打ちを受けているのか語りだす。

ただ、何故かそれが惚気にしか聞こえない。

「というか、カリンさんはもしかしてまだカバネさんに憑いていたりするんですか？」

「それは大丈夫や。隙あらばワイと一緒に男風呂に突撃するよくなヤツやけどな」

どこが大丈夫なのかよくわからない。

正直な話、こんな所で幽霊とはいえ異性に見られるのは無理だ。

「カリンが男湯に入れへんように死霊術使つといた」

なるほど、それなら安心だ……。

「と言うわけで、今から女湯覗きに行くわ」

と思っただらこつちもダメだった。

「……いや、もしかしてカリンさんはこんなカバネさんを止めようとして？」

「ちなみに、カリンが憑いてこようとすんのはワイと同じ理由からやでな」

ダメな三人だった。

カバネさんはげへへと小物臭がぶんぶんする笑い方で女湯らしき部分に向かって進んでいく。

「もう、何をバカなことをしているんだろうね・・・」

「おし、俺達も行くぞ」

「「「おー！」「」」

何故か小声でカザ八達が話していた。

そして、話し合いが終わったのかこそとカバネさんの後を追っていく。

ここに残ったのはレクトとハル君、そしてボクだけだった。

「一番覗きに行きそうなレクトが行かなくて、行かなさそうな忍にシユウ、シャオ君が行くとか・・・」

「オレッチ、リオちゃん一筋だからなー」

そう言いながらケラケラと笑う。

「もしかすると、リオネさんいるかもよ？」

「見たら見たで後が怖いからなー」

「僕も怖いですね・・・姉さんが」

なるほど。確かに冬香は怖そうだ。冬香なら『氷漬けの刑』とか言いながらコード氷地獄ヒキコートスを使いそうだ。そしてその後はちゃっかりお金を貰う。

と言うか、シュウはシャンちゃんがいるんだからいいじゃんと思  
う。

「ミタニーはいいのカー？今ならアンジェリカちゃん見れるかも  
だぜー？」

「……」

もしも見ると、ボクの場合はリカにボコボコニされた揚句、ラデ  
イエさんに惨殺されるビジョンが鮮明に脳内再生される。

「み、ミタニー！？大丈夫カー！？」

「そ、ソラ先輩！？ど、どうしたんですか！？」

「……うん、ボクは頼まれても、死んでもみない。……うん」

そうこうしていると、何故かいきなり魔法が炸裂し始めた。

急なことに驚いて音のした方を見ると、そこには屍を気付きつつ  
ある少年達のムサイ絵があった。

そしてどうも、女子からの反撃を受けたようだ。と言うか、いつ  
の間にかここにいる生徒がSかDの人で、しかも全員女子風呂に突  
撃しようとしていた。……この人達、本当に懲りないね。

『ご主人様、わたしと言うものがありながら……』

『待て、カレン。話せばわか……』

『ミヨルニル豪雷神ノ飛来鎚　！！』



『 ！? 』

とりあえず、カバネさんが散ったのはわかった。運よく眼が覚めたら自分の彼女のご機嫌取りを頑張ってください。そう思いながら合掌しておいた。

「ハル君、念のために結界お願い。ボクは魔術符<sup>カード</sup>ないからさ」

「わかりました」

そう言うとハル君は素早く魔法陣を展開して、結界を張る。まあこれで一安心。

「あ、ついでにお湯の温度も少し上げてよ」

「あ、はい」

「おおー。春樹君の魔法は便利だなー」

『 何でソラがないの!?!? 』

『 落ち着きなさい。だからってアンタが男湯に突撃しようとしてどじするのよ? 』

『 み、見ないで〜!?!? 』

『 へ、へへ、変質者です!?!?せ、精霊さん、助けてください!?!? 』

『 シュウとシャオは、こっちに来る出すう!?!? 』

『た、助け！？』

『シヤン、落ち着け！？』

『問答無用ですう！』

『・・・タマ、ポチ、このバカ達をお願い』

『おい、それって明らかにクマ・・・！？』

『み、見ないで下さる！？レクトにもみ、見せたことがないのですのよ！？』

「にぎやかだなー」

「そうだね」

「あの、そろそろ上がりませんか？のぼせてきました」

確かに、ハル君の言うとおり少しのぼせてきた感じがする。ボク達三人はとりあえずお風呂からあがり、風呂場を後にした。

side 隆介

「ふう、さつさと入って寝るかな」

オレは遅めの時間に風呂に入ろうと、ここの大浴場にやってきた。ここはかなり大きいからな。こういう時ぐらいゆっくりと一人で入りたいな。そんなことを思いつつ風呂場の扉を開ける。

「・・・」

「「「・・・」」」

扉を開ければ、そこには死屍累々とした男子生徒達の姿。

俺は何も言わずにすぐに閉めた。

なるほど、さっき来たスズのパニックたメールはこれか。俺は、一瞬であろうとスズの裸を見たであろうこいつ等を惨殺すべきかどうか真剣に悩んだ。

ちなみに後日、SとDの一部の男子の連中は女子にこき使われていた。

14話・STUPID COMMOTION(後書き)

作 「というわけで『バカ騒ぎ』でした」

隆 「そうか、お前の仕業だな」

作 「たまにはこういうベタな展開も必要かと？まあ、あまり面白くなかったね」

隆 「そうか、遺言はそれだけだな？」

作 「……ドウイウコトナノ？」

隆 「スズの仇！」

作 「ごばあ！？」

隆 「つーわけで次回予告だ。次回からはついに学園祭開始だ。次回も頼む」

## 15話・CULTURE FESTIVAL

side空志

まあ、昨日の懲りない男子達の自爆の翌日。

何故かりオネさんはレクトに対しての挙動がいろいろとおかしかった。

「れ、レクト。きき、昨日のことだけど・・・」

「どうしたー？誰か男子にでも見られたかー？とりあえずそいつを教えてくれ。風穴空けに行くからなー」

レクトはそう言いながらにこやかな笑みで大砲タイプの魔法銃を取り出す。

「ち、違いますわ！あ、貴方は見たのかと言うことですわ！」

「オレッチ？オレッチはリオちゃん一筋だからなー。ミタニー達と途中で帰ったぞー」

「そ、そうですか」

そこでリオネさんは残念そうな、それでいて安心したような複雑な表情を浮かべる。

とりあえず、一つだけ言いたいことがある。

「リカ、いい加減に離れて」

「・・・無理。リオネはいいなあー」

「まあ、ボク等彼女がいない人からしたらリア充爆ぜるだけだね」

あの二人の近くにいる人達も既にお腹いっぱいですって顔になっている。

そこでパンパンとカザハが手を叩いて、みんなの注目を集める。

「よし、みんな！」

「・・・何、覗き魔」

「・・・すみませんでした」

「まあ、グダグダ言ってもしょうがないわ。みんな、今日はがんばりましょう！」

「」「」おっ！」「」

自業自得だけど、若干へこんでいるカザハを置いてけぼりにして杏奈さんが気合を入れる。そしてその言葉にクラスの全員が答えると同時に校内放送が流れる。

『・・・只今より、学園祭を開始する。・・・  
・・・眠い』

『ディアちゃん！？まだ放送してるよー！？』

ぶちっ・・・。

「」「」・・・「」「」

なんか、いろいろとしまらない開始宣言と同時に学園祭が始まった。

「・・・とにかく、午前は今から一時間後。各自準備して！」

「「「はい」「」」

そして各々が準備を始めた。

そうこうしているうちにリュウも到着し、演劇のリハーサルを軽くする。気がつけば時間は既に十分を切っていて、教室の外からはがやがやと喧噪が聞こえてきた。

どうも、お客さんもそれなりに来ているらしい。

「各自、持ち場につけ！」

その言葉で慌ただしく持ち場につく。

そして、演劇が始まった。

「お疲れ。とりあえず、第一回は成功ってところか？」

演劇はまず成功だったと思う。

マイナーな属性の魔法を使った舞台演出にお客さんは驚いてくれ、やっている側としても結構嬉しくなってきただろうと思える。

ボクとリュウが魔法での戦闘を演じた時は何故かリュウの方が応援されると言う悲しい状況になったりしたけどね。

「応主役は自分なのに……。」

「……アタシがソラの魅力を知ってるからそれでいいの」

そう恥ずかしいことを言いながらリカがボクの所に来る。

「リカ、そう言う言葉は時と場合と相手を考えて言わなきゃ」

「……その上での言葉なのに」

何故かリカが不貞腐れてしまった。そんなリカを女子たちが慰めている。

とりあえずボクはカザハに向き直る。

「次はいつだったけ？」

「午前中は連続で二回だから、三十分後か？」

「そうね。その後は数人が留守番して午後まで自由時間になる」

劇は午前に二回、午後に三回の予定になっている。

そんなに長いものじゃないけど、やり続けていると自分達が楽しむ時間がなくなるからってことでこういう感じに少なめになっている。

「……っと、そうしてる間に時間だ。もういっちょやるぞ」

そう言つと、また劇が始まった。



sideリカ

今、アタシは劇をしている。

まずは出だし、セリフを言おうと口を開けた時、アタシは見たくないものを見つけてしまった。

「シルヴィエ、アンジェリカだぞ！おい、パパはここだぞ！」

「……」

何で、ここにいるの？

客席の一つ、そこにはここにいないはずのないアタシのパパとママがいた。パパはアタシに向かって手を振り、ママは明らかにパパと距離を取ろうと身をひいている。

と言うかおかしい。吸血鬼ヴァンパイアは基本的に人間こゝな人間だらけな場所に来るはずがないのに……!?

と言うか、劇の内容から考えると……大変!? ううん、大丈夫。いくらパパでも、劇と現実の区別ぐらいはつくはず。

……何でだろう、自分で言っただけで涙が出てきた。

とりあえず、次はいろいろな国の王子様達に結婚を申し込まれるけど、私には想い人がいるって断るところだ。

side空志

「リカ、どうしたの？ 顔色悪いよ？」

「大丈夫……たぶん」

ものすごく不安な言葉を返された。

でも、ここで急に劇を終わらせることもできない。ここは悪いけどリカには我慢してもらおう。

とりあえず、次はボクとリュウの見せ場。決闘のシーンだ。

既にリュウは反対側でスタンバってる。

舞台が一度暗転する。そして光がついたと同時にボクとリュウが出る。

「よくぞ、逃げなかったな」

リュウのセリフだ。

完全に口調がワルになっている。もう、完璧な悪役だ。普段より三割増しでかつこよく見えるとは某天然少女の言葉。

「私は、逃げるわけにはいかない」

「貴様のような下賤なものが騎士を名乗るなど、あつてはならぬことだ……！」

「しかし、私は姫を守る騎士でありたいのです」

「ならば……我は貴様を倒し、姫を貰い受けよう！」

「ですが、私も負けるわけにはいかないのです！」

そして、ボクとリュウが魔法と剣を交えて戦う。

次々に放たれる魔法に観客は息をのみ、じつとこの決闘を見る。

よし、いい感じだ。ボク等は激闘を演じ、徐々に勢いを、テンポを上げていく。どんどん激しくなる戦い、そしてボクとリュウは同時に舞台の両端で動きを止める。

「・・・埒が明かない。次の一撃で決める」

そう言うと、リュウは剣を構える。

ボクはリュウと同じように剣を構えて言う。

「いいでしょう。次の一撃、この私の全てをかけましょう！」

ボクがそう言った瞬間、辺りを静寂が包む。

そして、ボク等は同時に相手に向かって走り、交差する。互いに背中合わせになって立ちつくす。

「・・・つく」

そう言いながら膝をついたのはリュウ。まあ、演技なんだけど。ボクは何もしていない。そしてリュウがセリフを続ける。

「貴様、何故とどめを刺さない・・・！」

「私は騎士です。騎士とは、守るものことです。まして、同じ騎士である貴方を殺したくなかった」

「・・・そう、か。我も舐められたものだ」

そう言うと、リュウはお腹のあたりを押さえて退場。入れ替わりにリカが入ってくる。

「大丈夫でしたか!？」

「はい。姫よ、私は勝つことができました。これで、陛下も認め

てくださるでしょ……」

「認めんぞお!!」

……おかしい。さつき声が二重に聞こえた気がする。

ここはボクのセリフの途中で王様役の人が乱入するように登場。そしてたくさんの兵をさし向けて娘もろともボクを屠ろうとするシーンのはずだ。

と言うか、王様役のクラスメイトが視線をある一点で固定してぼかんとしている。

何事かとそつちを見てみると……。

「認めん、認めんぞお!!」

そう言いながら金髪に赤い目の美系な男の人が舞台に登場。

「ら、ラディエ、さん!？」

リカの父親のラディエさんだった。

ラディエさんの飛んできた方向を見れば、そこには頭をペコペコと下げているシルヴィエさんの姿が見えた。どうも、ラディエさんが例の如く暴走してしまっただけらしい。

……しょうがない。

「陛下、約束と違います!」

「何が約束だ!? 我は、認めん。愛娘を貴様のような小僧にやつてたまるか!!」

「……」

口調が古めかしいため、普通に演技しているようにしか見えない。観客を見ても、まだボク等が劇をしていると勘違いしてくれていた。たぶん、ラディエさんの次の行動パターンなら……。

「今ここで、貴様を血祭りに上げてくれる……『魔喰い』<sup>キャスト・イーター</sup>！！」

予想通り、ラディエさんは魔道宝具『魔喰い（キャスト・イーター）』を出してきた。ありとあらゆる魔法を無効化できる魔鎌<sup>スベル</sup>でも、ボクにはこれがある。こつそりと右手に『魔法妨害』<sup>ジャミング</sup>の文字を書き込む。これで下準備は完了。

「魔に属す力に命ずる。」

カよ、集いて形となせ！

真月<sup>シゲツ</sup>！！

ボクの右手のひらに魔法陣が展開され、刀を生成する。正直、劇の雰囲気には合わないけどこの親バカを止めるにはこれしかない。ついでにリカに小声でお願いをする。

「……わかった」

「……よし」

これで、既にラディエさんは王手詰みだ。<sup>チェックメイト</sup>  
ボクは言葉を重ねる。

「ならば、陛下を倒してでも私達は添い遂げます！」

「そ、そそ、添い遂げ……！？」

「あ、あう・・・うう」

ラディエさんが怒るのはわかる。けど、何でリカまで顔を真っ赤にして怒っているんだろう？

ボクは先手必勝とばかりにラディエさんに肉薄。ボクのスピードに驚愕する。けど、さすがは吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>。すぐにボクの強化されたスピードについてきて、鎌と刀でのつばぜり合いを演じる。

「っ、さすがですね」

「貴様、いつの間にそんな魔法を・・・。だが、娘はやらん！貴様はここで死ぬ、負ける！」

「いや、既に負けているのは貴方です」

ボクはリカに目配せをする。

そしてリカは小さくうなずくと、観客には聞き取れない声でぼそっと呟く。

「パパなんて、大っ嫌い」

「ごはあ！？」

娘大好きなラディエさんの弱点。それはリカに嫌われること。心<sup>クリティカル・ヒット</sup>に致命的な一撃を受けたラディエさんの力が緩む。その隙をボクは逃さない。

「術式 断月<sup>ダンゲツ</sup> ！！」

刀を振るう。すると、刀の斬撃が魔力を帯び、白銀の光が斬撃となつて飛んでいく。それをラディエさんは正面から受け、意識を刈り取られる。

・・・よし、親バカは滅した。

「姫、これで邪魔ものはいません」

「はい」

そう言つてボク等は互いに近づき、抱きしめ会つ。

「もう二度と、離しません」

「私もです」

そしてボク等の周りが徐々に暗くなっていき、ボクとリカはそれに合わせてキスをするフリをして、劇が終了した。

「もう、本当にすみません。このバカ亭主が・・・あなた、何か言つては??」

「・・・すまん」

「もっとちゃんと謝ってください」

「ぐぶう!?!?」

ラディエさんはお腹にシルヴィエさんの一撃を受け、本日二度目の気絶をした。

ここは舞台裏だ。と言うか劇が終わってすぐにシルヴィエさんを呼びに行った。そうしないとラディエさんが起きた後がものすごく大変だからね。

「・・・なあ、ソラ。聞きたいことがある」

カザハが神妙な顔でボクに尋ねる。

「何？」

「アンジェリカさんの両親ってことは・・・」

「ああ、もちろん二人とも吸血鬼ヴァンパイアだよ」

「あら？そちらの学生さんはリカのことを知っているのかしら？」

「まあ・・・」

「あらそうなの？リカ・・・じゃなくてアンジェリカ・シエルの母、シルヴィエ・シエルスです」

「じ、こちらこそ」

杏奈さんが恐る恐ると言った感じで挨拶をすると、それに続いて他のみんなも挨拶をする。

「・・・ところで、リカはどこまでいったのかしら？」



「・・・何が？」

「何がつて、ソラ君と・・・」

「わー!? きゃあー!?!」

何かを言おうとしたシルヴィエさんをリカが遮る。

それをシルヴィエさんは楽しそうに見つめ、あらあら、この子つたらと言いながらリカと話している。

「・・・何ていうか、普通だなー」

「そうですわね」

「・・・二人とも、どうしちゃったの〜?」

不可思議な反応をするレクトとリオネさんにスズが尋ねる。

「いえ、吸血鬼ですから。もっとこう、孤高の存在と言うのでし  
ようか?」

「そうそうー。その気絶している人みたいな高慢な感じをイメ  
ージしてたんだよなー」

「もう、この人のせいで吸血鬼ヴァンパイアのイメージは悪くなる一方ですね

そう言いながらラディエさんに再びドスつと不穏な音を響かせな  
がら殴る。

こんな白い髪綺麗な人が暴力的なことをするもんだからみんな

ドン引きだ。

けど、このパンチはラディエさんの目覚まし代わりになってしまったようだ。

「うう……。シルヴィエ、いい加減にアンジェリカをリカと言  
うのをやめろ」

「あら、いいじゃないですか。それに聞きました？この子ったら、初めてソラ君達に出会った時に声が小さすぎて『リカ』の部分しか聞き取れなかつたんですって」

「ふん、そんなことは知っている！流石アンジェリカ、何をしても愛らしい！しかし我が気に食わんのは、その小僧も『リカ』と呼んでおることだ！」

ビシッとかつこつけてボクを指さす。

ただ、話の内容はただの親バカな発言が百パーセント配合されている。みんなも自分の中のイメージの吸血鬼像がどんどん崩れて行ってるのがわかる。

「ソラが『リカ』って呼ばないのなら、誰にも呼ばせない。もちろんパパにも」

「む、むう……」

なんかボクもこんなバカな会話している親子が吸血だなんて本当に信じられなくなってきた。

「とにかく、パパはもうこういうことやめて！恥ずかしいの！」

「し、しかしな、お前によからぬ虫が・・・」

「ソラがいるからいいの!」

「既についておる・・・!」

なんか、ラディエさんがボクに向けて殺気を放ってくる。

そこをリカが鎌を取り出して視覚からもわかるよう、ラディエさんに対して明確な殺気を放つ。

「・・・シルヴィエさん、お願いですから止めてください」

「そうね。・・・ソラ君がリカを貰ってくれるなら解決するんじゃないかしら?」

「ママ!?!」

「シルヴィエ!?!」

何だろう、このどんどんボクが逃げられなくなっていく感じ。ボクはいつも罠にはめる側の人間のはずなのに、ボクが抜けることのできない罠の館にでも全速力で突っ走ってるみたいだ。

「シルヴィエ、おま、お前は何を言う!?!」

「あら、私はソラ君ならリカを任せられると思っているわよ?」

「認めん、認めんぞ!」

「はいはい、わかりましたから。皆さんの邪魔にならないよう、」

「この学園祭を楽しみましょうね」

そう言うとシルヴィエさんは強引にラディエさんを引っ張って学園祭の喧噪の中を進んでいった。

「・・・何ていうか、魔物にもいろいろいるんだね」

「うん。そうだね」

「確かにな。幼女好きロリコンな魔王がいるくらいだからな」

「」「」「」「」

リュウの言葉にみんなは絶句している。

まあ、魔王はほとんど変人の集まりだからしょうがない。龍造さんとライネルさんはかなりまともな部類の魔王だ。

「そう言えば、ものすごく言いたかったことがるんだよね」

「なんだ？」

カザ八達に向かってボクは言う。

「・・・こんなザル警備で大丈夫なのかな？」

「」「」「」「」

まあ、大丈夫なんだよね。

「・・・・・・・・・・・・・・・・たぶん。」



15話・CULTURE FESTIVAL（後書き）

作 「とうわけで『文化祭』をお送りしました！」

リ 「うう・・・恥ずかしい」

作 「普段から恥ずかしいことをしているのに何をいまさら（笑）」

リ 「パパは無理。生理的に受け付けない」

ラ 「ごはあ!？」

\* 「い、いきなり誰かが血を吐いたぞー!？」

作 「まあ、いい感じに天国へ旅立ちそうな吸血鬼パパは放置して次回!」

リ 「・・・もう、いい加減にしてほしい」

作 「そんなわけでいろいろな所にレッツゴーだ。懐かしいあの人も出るかもね!？」

リ 「次回もよろしくお願い」

## 16話・WALKING

side空志

まさかのラディエさん襲撃事件の後。ボク等は午後の部まで自由時間を貰った。

とりあえず、ボクとリュウ、リカ、スズは一緒に行動している。

「すごいね、あちこちで面白い魔法が使われてるね」

近くを見れば魔法を使った将棋だとか、楽器だとか、そう言うものでいっぱいだ。なんだか、あまりに斬新と言うか、新鮮すぎてきよるきよるしすぎて目を回しそうだ。

「ねえねえ、リュウ君あれ何？・・・こっちは？・・・あれは？？」

「おい、お前らはしゃぎ過ぎだ。少しは自重しろよ」

「うふふ」

リュウとリカは子供のよういきよるきよるするボク等を呆れつつも、微笑ましいとでもいたげに見てくる。

でも、しょうがないじゃん。ボクとスズに関しては魔法関係にかかわったのはほんの半年前なんだし。とにかく、そんなこんなで探索開始。

まずは近くの教室を見て回ってみようってことで、シユウ達がいるCクラスに来た。

「あ、皆さん来てくれたんですか？」

「演劇、面白かったです！」

。Cクラスの教室前には化け狐っぽい恰好をした双子の姉妹が・・・

「俺は、男です」

「わかってるよ、うん」

シャオ君からのプレッシャーがすさまじかったので、ボクはそれ以上何も考えないことにした。

「確か、お前達の所は肝試しだったか？」

「はいですう」

「俺達は客引きの最中です」

確かにこんな可愛い双子姉妹がいれば・・・。

「だから、男です」

「わかってるよ」。シャオ君は女の子の恰好でも可愛いよね」

スズの言葉でシャオ君は撃沈した。

まあ、とりあえずシャンちゃんと話すか。

「シユウは中で幽霊役？」



「はいですう。中でこんにやくを持って待機しているですう」

魔法が使えるのに脅かし方はずいぶんと普通だった。

もっと、すごい魔法で演出してるのかともったのに……。

「ところでソラさん、入ってみませんかですう！」

「!?!」

シャンちゃん言葉に一番反応したのはもちろんリカ。既にボクの服の袖を掴んでぶるぶると震えている。

「じゃありユウ君、わたし達も行こ〜！」

「……入ってもあんまり怖がりそうにないけどな」

そう言いながらリユウとスズはすたすたと中に入っていく。

「とりあえず、リカさんもソラさんも勢いで行っちゃおうですう！」

「ほほほほ、ほん、本当に、い、逝っちゃおうよお!?!」

もう、吸血鬼なはずの少女がビビっていると言つこの状況はいつもながらどうしたのかもかと思う。

まあ、リカみたいな性格の人ならお化けやしきしている人間にとっちゃ嬉しい対象以外の何物でもないしね。

「じゃ、ドーンと行くですう！」

そして、ボクとリカは無理やりにお化け屋敷の中に放り込まれた。

中は既にうす暗く、足元が辛うじて見える程度の光しかない。結構本格的に作りこまれているみたいだ。

そう感心していると、リカは今にも泣き出しそうな顔でついてきた。

「……………大丈夫？」

「無理無理無理無理……………」

以下無限ループ。いろいろとダメだった。

ここで立ち止まっていても何も意味がないから無理やり先に進む。そして一歩踏み出すと、そこで『うばあ〜』と言う何とも言い難い怨念っぽい声が聞こえた。

「いやああああああああ！？」

「落ち着いて！？死ぬ、ベアハグで死ぬ！？」

さすがにリカのベアハグ第二回目で死ぬのだけは勘弁してもらいたい。

と言うか、最後まで行けるのかな？いや、むしろ出口につく前にボクが逝きそうだ。

「あ、お帰りなさいですう」

「どうでしたか？」

やっとの思いで出口に出ると、双子が出迎えてくれた。

「……うん、リカが怖かった」

「……ごめんさない」

こんなボク等の雰囲気から全てを察したのか、双子達は生温かい目でボク等を見た。

そこでボクは近くにリュウとスズがいないことに気づく。

「リュウとスズは？」

「お二人が遅いので、先に行くと言っていました」

「ちなみに、スズさんは幽霊役の人みんなに挨拶してくれたです  
う」

「……うん、予想を裏切らないね。」

まあ、何はともあれここからはリカと二人での行動か。

「じゃ、とりあえずボクも行くよ」

「はいですう」

「よければまた来てください」

「……それだけは無いかな」

ボクは自分の命が惜しい。

side 隆介

「ねえねえ、リュウ君。リカちゃん達を置いてきてもよかったの  
く?」

「いや、むしろそのほうがいいだろ? どうせリカはソラと二人っ  
きりの方がいいだろうしな」

「そっか。それもそうだね」

そう言いながらスズは鼻歌交じりにオレの隣を歩く。  
……まあ、オレも少し嬉しいのは内緒だ。

「ねえねえ、リュウ君達のクラスはもう大丈夫なのかな?」

「ああ、下手なことをしてなけりゃな。オリジナルで何かを作る  
うとすれば、ついでに屍と一緒に作っていたが」

「あ、あはは……」

スズはオレの返答にもものすごく曖昧な笑みを向けてくる。

そして心配になってきたのか、すぐにSクラスの所に行くように  
廊下を歩きだした。

「あ、リュウさんにスズさん!」

そっやってこっちに駆け寄ってきたのは春樹だった。

春樹は所々に包帯を巻いている格好。たぶんミイラ男なんかの

つもりなんだろう。

他にも狼男っぽい恰好をしたやつから、メデューサの恰好をしたやつまでいろいろなヤツがいる。

「で、大丈夫なのか？」

「はい？何がですか？」

春樹はよくわかっていないのか、首をかしげる。

どうも、春樹は例の騒ぎのことを知らないみたいだ。するとオレは肩を誰かに叩かれる。振り返ると、そこにはシーツを被ったようなお化けの恰好をしたやつがいた。

「……誰だ？」

「俺だ、ジグだ」

「ああ、わかった。つか、そんな恰好で仕事ができんのか？」

「……」

オレがそう言うと、ジグは無言でシーツ越しに両手を上げる。

すると、いきなりさまざまな料理が宙に浮き始める。オレはその光景に驚きつつもなるほどと納得する。

「……なるほどな、重力操作系の魔法で運んでるのか」

「そうですねですよ。ですから、むしろ誰よりも働いているんですよ……」

春樹が少し興奮したように言う。

まあ、確かにこれだけ精密なコントロールができるのは素直に驚ける。

「他にも、グランさんは影から影に移動して素早く運んでいたりしますよ」

なるほど、一人ひとりが適度に自分の得意な魔法でいろいろなことをしているみたいだ。

「でも、何でリュウ君が知らないの？」

「……………オレは一応いろいろ働いてたんだけどな」

それこそ、オレは一応こいつ等のリーダーなわけで、ジジイとこの学園長との連絡パイプ役になど裏方仕事が忙しかった。

「あの、代表。ちょっといいですか？」

突然、一人の生徒がオレ達の会話に入ってきた。

ジグは何だと一言だけ言って続きを促す。

「あの、ちょっと面倒なお客様が……………」

そう言っているテーブルの一つをさす。

オレ達がそこを見ると……………。

「へい、カノジヨ。ちょっとこの私と付き合っことを前提に結婚してみない？」

「あ、あの、順番が違いますけど?」

「そんなのは些細な問題だよ!」

「・・・あの、わたしは女ですけど?」

「うん。どんとこい、わたしの胸に!」

「助けてください!変態がいます!」

「失礼な、わたしは変態じゃなくてまお」

「死ねええええええええええ!」

「ぎゃああああああああ!」

「りゅ、リュウくん!」

「お、落ち着いてください。リュウさん!」

「離せ、今オレはこいつを殺さなきゃいけない!!」

「・・・知り合いか?」

「違うないけど違う!」

「ま、待って、リュウちゃん!?わたしだよ!?舞お姉ちゃんだよ!」

そう、オレが思わず殺しかけた見た目は人間、ただしその実態は

変態魔王。七海舞だった。

「何でお前がいるんだよ!？」

「もちろん、龍造ちゃんに聞いたからに決まってるじゃん」

オレはあのクソジジイと心の中で罵る。

実は舞のヤツは、見た目こそ女子高生な感じだが、年齢的にはジジイと同じぐらいだ。そのせいか魔王の中では一番お互いのことをよく知っているらしい。

「あんのジジイ・・・」

「でも、舞さんも久しぶりですね」

「おう、鈴音ちゃんもお久し」

舞はそう言いながらスズを抱きしめ、ぐりぐりと撫でまわす。スズはどうしようといった表情で舞にされるがままになっている。とりあえず、オレはスズの手を引っ張ってこっちに持つてくる。

「とにかく、こんな所で犯罪まがいの行為に走るな」

「ぶぷー。何言っちゃてんの。そこはもつとかつこよく」オレのスズに手を出すな』とかそんな感じのこと言わなきゃ」

わざわざオレの声を真似てそう言う。

そしてセリフのせいでスズの顔が真っ赤だ。

「ひゅーひゅー。二人とも赤くなっちゃって」



「……どうも、オレも同じらしい。」

つか、いい加減精神衛生上いろいろとまずくなりそうなので舞には退場をお願いしよう。

オレは『双牙』を取り出し、一つを舞の影に突き刺す。

「魔法剣 影縫い」

「……あれ？動けない？」

「……あ、シャニアさん……」

「とっ！」

舞は器用にも注文した紅茶を使ってオレが取り出したケータイを弾き飛ばした。

「……やっぱ、魔王は伊達じゃないか。」

「ああ、お客様。魔法はお控えお願いできますか？」

ジグは冷静に舞を注意。

もっとやれ。そしたらオレがこいつを葬る。

「この店員さんが私にSMプレイをしてくれます！」

「誰がするか、このアホ！」

「だって現在進行形で縛られてるしい？」

いまどきのウザい女子高生的なノリでそう言う。

・・・中身は千年生きてるババアのくせに。

「もう、小さい頃は『将来は舞お姉ちゃんと結婚するー』って言うぐらい可愛かったのに。あ、ついでにリュウ君も範囲内だから！」

「それ以上言うと、マジで絞め殺す」

なぜか両腕を広げてカモンとでも言いたそうな舞に対し、オレは早口で詠唱を済ませ、これはマジだと伝える。

何が楽しくてここでオレの黒歴史を・・・！

「ねえねえ鈴音ちゃん。昔のかわいーリュウちゃん知りたくない？」

「あ、てめ！？」

「知りたいです！」

そう言うとスズはさっと舞の隣に座り、更にオレの剣を抜く。そして話を聞き始める。

「えつとねー。じゃ、まずはリュウちゃんが・・・」

「死ね、マジで死ね！」

「ハル君、ジグ君、リュウ君を止めて！」

スズのいつなくものすごく真剣なまなざしに、ジグと春樹は思わず従う。

つまりはオレを拘束した。

ジグは重力系の魔法でオレを地面に磔にし、ハルは地面を操作してオレの腕を足を地面に固定。しかも周りに火を生み出して影がでないようにする徹底ぶりだ。

「離せ！オレは、オレは・・・！？」

「まずねー。」じよじよ・・・」

「・・・」

もう、いろいろと話し始めた。

オレは無駄だと知りつつも体を動かし、逃げだそうとした。

side 冬香

「・・・何してんの、あいつら？」

ふと、何を思ったのかなんとなく近くの教室の中を見てみた。するとそこには、ハルとシーツのお化けに何かされているリュウと、確か舞とか言う魔王と話し込んでいるスズがいた。

「とーねえ。どーしたの？」

「ん？何でもないわ」

わたしは今、院長先生が連れてきたチビ達と一緒に学園祭を回っている。せっかくだからハルも一緒に連れて行こうと思ってきてみればこれだ。

ちなみに院長先生は自分一人だけどこかに行った。

とにかく、これは純粋なチビ達に見せるものじゃない。

「じゃ、次はどこに行こっか？」

元気に手を上げて自己主張するチビ達に微笑みつつわたしはその場を離れた。

16話・WALKING（後書き）

作 「とうわけで『散策』をお送りしました！」

舞 「やあやあ、お久しぶり！」

作 「出たな一番残念な魔王！」

舞 「一番残念なの!？」

作 「地味に魔王様は全然出てないからね」

舞 「シヨック!じゃ、もっと出そうぜべいべー」

作 「とうわけで次回！」

舞 「スルーされた!？」

作 「まだまだ散策します。次回もよろしく！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5619/>

---

DARK・MAGIC ~ 闇夜の奇術師達 ~

2011年12月20日23時54分発行